津南町文化財調査報告　第 47 輯

道　尻　手　遺　跡

DOUJITTE　SITE

本文編

2005

新 潟 県 中 魚 沼 郡

津 南 町 教 育 委 員 会

序　　文

漢字で「道尻手」と書いて「どうじって」と読む地名が、上段集落の下にあります。この一帯は古くから土器や石器が拾えることで有名でした。平成８年の圃場整備事業に伴う試掘調査で遺跡が埋蔵していることが明らかになり、水田が広がる台地を指して「道尻手遺跡」と命名しました。

道尻手遺跡は発掘調査が進むにつれて、その遺跡の包蔵力の凄さを内外に知らしめていきました。広場を囲むように環状列石が巡り、その外縁に竪穴住居が放射状に重なり配置し、さらにその外縁に形成された浅い沢地形を巧みに利用して廃棄帯を配していました。廃棄帯はゴミ捨て場です。

環状列石の下には、墓穴が掘られ、その片隅に浅鉢が逆さにして出土しました。埋葬者の顔に浅鉢が伏せてあったという説明を聞きました。竪穴住居には卵形と長方形の二種がありました。卵形の長軸は約６ｍほどで小規模な石囲い炉が作られていました。長方形住居の長軸は約 12m ほどを計りました。床の真中に細長い焼土が堆積していました。多量の土器や石器に混じり、土偶や石棒などの精神文化を探る貴重な遺物群が廃棄帯から重なり合って出土しました。

この整理作業は、平成８年晩秋から始まり平成 17 年度まで、約８年半という歳月を費やして記録報告書として公刊される運びとなりました。この記録報告書が地域文化財保護教育の一助となれば幸いであります。

最後に、事業完了を示す記録報告書の公刊は、一重に発掘調査に従事した津南シルバー人材センターの有志の献身的な作業と整理作業を進めてきた調査員と調査補助員皆様の努力の賜物であります。衷心から御礼を申し上げます。

平成 17 年３月

津南町教育委員会

教育長　根　津　　紘

例　　言

１．本報告書は、新潟県中魚沼郡津南町に所在する道尻手遺跡周辺に国営農地再編整備事業が計画されたことから事前に実施した遺跡調査の報告書である。

２．本書で報告する遺跡の所在地は、以下の通りである。

道尻手遺跡　新潟県中魚沼郡津南町大字下船渡甲 6296 番地外

３．遺跡確認試掘調査は、新潟県教育庁文化行政課から指導を頂き、津南町教育委員会が北陸農政局苗場開拓建設事業所および津南町役場農政課の協力を得て実施した。

４．遺跡発掘調査期間は、平成８年５月７日～平成８年９月６日である。

５．遺跡発掘調査の組織は、以下の通りである。

＜遺跡発掘調査＞（平成８年度）

調査主体者　津南町教育委員会　教育長　村山　繁

調査担当　　佐藤雅一（津南町教育委員会生涯学習課主任文化財専門員）

主任調査員　岡　修司（津南町教育委員会　社会教育課　臨時職員）

調 査 員　　倉石広太（國学院大学文学部史学科卒）　　堅木宜弘（國学院大学文学部史学科卒）

阿部昭典（國学院大学文学部史学科卒）　　星　宏之（國学院大学文学部史学科卒）

和田秀一（國学院大学文学部史学科卒）　　古谷雅彦（前　三鷹市遺跡発掘調査会）

山本　克（國学院大学文学部史学科卒）　　宮田千里（國学院大学文学部史学科卒）

調査補助員　冨沢由美子、南雲カネ、小林明美、星野八代江（以上、株式会社塩沢重機発掘調査支援部）

調査作業員　十日町地域シルバー人材センター津南事務所・中里事務所

事 務 局　津南町教育委員会社会教育課

課長　大平健太郎　　参事　八重沢良成

主任　藤ノ木サチ　　非常勤職員　森口好美

６．遺物の取り上げ、および遺構の航空測量はアジア航測株式会社に依頼した。

７．遺構計測写真は、計測写真工房　首藤浩通に依頼した。

８．自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

９．整理作業は、平成９年度から平成 16 年度にかけて、佐藤と協議のもと、阿部昭典・高山茂明・倉石広太・山本克が行い、株式会社みくに考古学研究所（旧塩沢重機）発掘調査支援部の阿部陽子・小林明美・高橋浩美・南雲カネ・山田和子、津南町教育委員会臨時職員の島田美恵・中沢君江の協力を得た。

10．遺物の実測は、土器・土製品は阿部陽子・高橋浩美が中心に実測しトレースを川又亜希子が行い、一部は阿部昭典が実測・トレースを行い、その他はシン技術コンサルタント・株式会社アースネット・吾妻考古学研究所・株式会社こうそく・アイシン精機・株式会社アルカ・大成エンジニアリング・リメックス・ペンタ・ラボに依頼した。石器・石製品の実測は倉石が一部実測し、その他は株式会社アルカ・有限会社アルケーリサーチ・（有）霞文化財研究所・JAWS に依頼した。

11．遺物写真の撮影は、土器および石器に関しては有限会社アルケーリサーチに依頼し、土器の集合写真および展開写真については小川忠博に依頼した。

12．執筆分担は、佐藤雅一が第Ⅰ章、第Ⅲ章第２節・第３節、第Ⅳ章第３節２項、第Ⅵ章第１・６節を執筆し、それ以外は、佐藤と協議し、倉石が第Ⅳ章第３節 3・４項、第Ⅵ章第５節を、高山が第Ⅳ章第２節９項の３、山本が第Ⅳ章第３節３項の不定形石器と第Ⅴ章、他を阿部が執筆した。付編は、中田節子が付編１、三ツ井朋子が付編２、付編３～５をパリノサーヴェイ、付編６を西田泰民が執筆した。

13. 報告書の編集作業はアルケーリサーチに依頼し、デジタルデータでの編集を行なった。

14. 試掘調査、発掘調査に関する記録および出土遺物は、津南町教育委員会が保管している。

15. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の機関・個人からご協力いただいた。

（敬称略、五十音順、機関名は順不同）

秋田かな子、秋元信夫、新井達哉、安斉正人、石井　寛、石坂圭介、石原正敏、今福利恵、植月　学、江口志麻、榎本剛治、江原　英、及川真紀、大久保学、大野淳也、小熊博史、長田友也、押山雄三、小田由美子、角張淳一、葛西　励、笠井洋祐、菅頭明日香、加藤　学、加藤元康、金子拓男、金子直行、菊地政信、喜多孝行、北村　亮、久々忠義、櫛原功二、小久保拓也、越川欣和、小島俊章、小林圭一、小林謙一、小林達雄、斎藤　準、斉藤基生、品田高志、清水克彦、菅原祥太、菅原哲太、鈴木徳雄、鈴木正博、関根慎二、大工原豊、高木公輔、高橋清文、高橋　保、高橋　毅、建石　徹、田中耕作、谷口康浩、谷藤保彦、田村浩司、塚本師也、辻本崇夫、角田　学、津村宏臣、手塚　孝、寺内隆夫、寺崎裕助、富樫秀之、長澤展生、中野　純、中村　大、中村真理、西田泰民、西野摩耶、西本豊弘、新田康則、布尾和史、野村忠司、長谷川誠、原ひろみ、平山尚言、平吹　靖、藤波啓容、細田　勝、正木洋季、増子正三、松永篤知、水沢教子、宮内信雄、宮尾　亨、宮本長二郎、森　幸彦、山口逸弘、山本暉久、山本典幸、綿田弘実
北陸農政局苗場開拓建設事業所、株式会社塩沢重機発掘調査支援部、十日町地域シルバー人材センター津南町事務所、株式会社アジア航測、有限会社アルケーリサーチ、R＆P

凡　　例

1．遺構の名称及び略号は以下のものがある。

竪穴住居跡：J・住　　炉　跡：RO・炉　　焼土跡：S　　長方形柱穴列：長　　配石遺構：H

埋設土器：埋　　フラスコ状土坑：FP　　土　坑：P　　溝状遺構：SD　　倒木痕：HT

2．遺構図の縮尺は原則として以下の通りである。

竪穴住居跡、長方形柱穴列・・・・1：60、炉跡・・・1：30、

配石遺構、埋設土器、土坑・・・・1：40、溝状遺構・・・・1：80

3．遺物実測図・拓影図の縮尺は原則として以下の通りである。

土器・・・・1：3、1：4、1：5、1：6、1：7、1：8　　土製品・・・1：2、1：3

石器・・・・2：3、1：2、1：3、1：4、1：5

石製品・・・2：3、1：2、1：3、1：5

4．遺物番号は土器・土製品・石器・石製品でそれぞれ遺跡内の通し番号を付している。

5．遺物の注記番号は、原則として以下のような配列で記している。

例1：遺跡名（DST）－大グリッド（－小グリッド）－遺物番号－層位

例2：遺跡名（DST）－遺構番号－遺物番号

6．実測図中のスクリーントーンは、以下のものを表現している。

遺構図：① ▭ …焼土　　② ▭ …炭化物

遺物図：土製品：① ▭ …破損面　　② ▭ …分割塊の表面

石　器：① ▭ …磨り　　② ▭ …敲打　　③ ■ …黒色付着

7．実測図中の表記について特記するものとして、以下のものがある。

覆土…覆土出土、および遺構内のドットデータなしの遺物。

8．遺構図内の観察表表記については以下のものがある。

土層説明：①しまり、粘性　　◎…あり　　○…ややあり　　×…なし

②地山、炭化物、焼土　　☆…多量　◎…ふつう　○…少量　　△…微量

9．図版は本文編と図版編にあり、それぞれに第1図から番号を付してある。文章中では、図版編の図は「図版第○図」と表記して区分している。

目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　道尻手遺跡の周辺環境
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 4
　第３節　周辺石材環境 …… 6
第Ⅲ章　発掘調査の概要
　第１節　遺跡の概要 …… 8
　第２節　確認調査の成果 …… 8
　第３節　発掘調査の方法と経過 …… 11
　第４節　基本土層 …… 12
　第５節　検出遺構・遺物 …… 13
第Ⅳ章　縄文時代の検出遺構・出土遺物
　第１節　土器の分類 …… 14
　第２節　検出遺構
　　１．集落構造の変遷 …… 39
　　２．竪穴住居跡・炉跡 …… 42
　　３．竪穴状遺構 …… 65
　　４．長方形柱穴列 …… 66
　　５．配石遺構 …… 68
　　６．埋設土器 …… 78
　　７．土　坑 …… 81
　　８．溝状遺構 …… 88
　　９．廃棄帯 …… 89
　第３節　出土遺物
　　１．土　器 …… 109
　　２．土製品 …… 179
　　３．石　器 …… 202
　　４．石製品 …… 247
第Ⅴ章　その他の遺物 …… 252
第Ⅵ章　まとめ
　第１節　魚沼地方における道尻手遺跡出土土器の編年学的位置付け …… 256
　第２節　集落構造について …… 273
　第３節　信濃川流域の縄文時代中・後期の住居形態について …… 282
　第４節　魚沼地域の配石墓の地域性 …… 306
　第５節　信濃川上流域における石器群の様相について …… 311
　第６節　総　括 …… 325
付　編
　１．道尻手遺跡出土底部繊維組織圧痕についての一考察 …… 347
　２．津南町道尻手遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料について …… 375
　３．自然科学分析（１） …… 380
　４．自然科学分析（２） …… 394
　５．道尻手遺跡出土土器付着物の由来について …… 400
　６．胎土への土器片混入について …… 407

挿図目次

第 1 図　堂尻遺跡から分割された遺跡群 …… 1
第 2 図　遺跡位置図 …… 2
第 3 図　津南町の河岸段丘 …… 3
第 4 図　段丘俯瞰図および遺跡の位置 …… 3
第 5 図　周辺の縄文時代中期前葉～後期中葉の遺跡 …… 5
第 6 図　津南町周辺の石材環境 …… 7
第 7 図　試掘トレンチ位置図 …… 9
第 8 図　試掘調査出土遺物 …… 10
第 9 図　グリッド配置図 …… 11
第 10 図　基本土層 …… 12
第 11 図　土器分類（1）…… 15
第 12 図　土器分類（2）…… 17
第 13 図　土器分類（3）…… 18
第 14 図　土器分類（4）…… 20
第 15 図　土器分類（5）…… 21
第 16 図　土器分類（6）…… 22
第 17 図　土器分類（7）…… 24
第 18 図　土器分類（8）…… 25
第 19 図　土器分類（9）…… 27
第 20 図　土器分類（10） …… 28
第 21 図　土器分類（11） …… 30
第 22 図　土器分類（12） …… 31
第 23 図　土器分類（13） …… 32
第 24 図　土器分類（14） …… 34
第 25 図　土器分類（15） …… 36
第 26 図　土器分類（16） …… 37
第 27 図　道尻手遺跡遺構変遷図 …… 40
第 28 図　道尻手遺跡住居跡の形態分類 …… 43
第 29 図　住居跡の計測部位および凡例 …… 44
第 30 図　道尻手遺跡炉跡の形態分類 …… 45
第 31 図　炉跡の計測部位および凡例 …… 45
第 32 図　長方形柱穴列分類図 …… 66
第 33 図　長方形柱穴列の計測部位 …… 66
第 34 図　配石遺構の形態分類 …… 69
第 35 図　配石遺構の計測部位 …… 69
第 36 図　石材別グラフ …… 76
第 37 図　長径－短径比グラフ …… 76
第 38 図　配石遺構の礫番号 …… 77
第 39 図　埋設土器の形態分類 …… 78
第 40 図　土坑形態分類 …… 84
第 41 図　廃棄帯と地形 …… 89
第 42 図　廃棄帯土層セクション図 …… 90
第 43 図　出土土器の時期別濃淡図（1）…… 91
第 44 図　出土土器の時期別濃淡図（2）…… 92
第 45 図　廃棄帯深度別土器組成グラフ（1）…… 94
第 46 図　廃棄帯深度別土器組成グラフ（2）…… 95
第 47 図　廃棄帯深度別土器組成グラフ（3）…… 96
第 48 図　主要土器接合分布図（1）…… 98
第 49 図　主要土器接合分布図（2）…… 100
第 50 図　主要土器接合分布図（3）…… 101
第 51 図　主要土器接合分布図（4）…… 102
第 52 図　主要土器接合分布図（5）…… 103
第 53 図　主要土器接合分布図（6）…… 104
第 54 図　主要土器接合分布図（7）…… 105
第 55 図　出土土製品・石器の濃淡図 …… 106
第 56 図　I7グリッドにおける深度別土器組成グラフ …… 108
第 57 図　I7グリッド接合関係図 …… 108
第 58 図　器形分類（1）…… 110
第 59 図　器形分類（2）…… 111
第 60 図　器形分類（3）…… 112
第 61 図　土器の計測部位と容量計測方法 …… 113
第 62 図　土偶形態分類図 …… 180
第 63 図　頭部分類図 …… 181
第 64 図　腕部分類図 …… 183
第 65 図　脚部分類図 …… 184
第 66 図　部位番号 …… 184
第 67 図　土偶計測部位 …… 185
第 68 図　頭部角度 …… 185
第 69 図　顔部表現分類 …… 185
第 70 図　正中線分類図 …… 186
第 71 図　臀部分類 …… 186
第 72 図　脚部接合面分類図 …… 186
第 73 図　出土土偶の時期別濃淡図 …… 187
第 74 図　後・晩期の土偶 …… 187
第 75 図　主要土偶の分布と接合関係図 …… 188
第 76 図　三角形土製品分類図 …… 191
第 77 図　計測部位 …… 192
第 78 図　孔の模式図 …… 193
第 79 図　貼付文分類図 …… 193
第 80 図　主要三角形土製品の分布図 …… 194
第 81 図　計測部位 …… 197
第 82 図　滑車形耳飾形態分類 …… 198
第 83 図　計測部位 …… 199
第 84 図　計測部位 …… 199
第 85 図　石材組成と石器組成 …… 202
第 86 図　計測部位 …… 203
第 87 図　石器分類図（1）…… 204
第 88 図　石器分類図（2）…… 205
第 89 図　石器石材 …… 207
第 90 図　石鏃分類図 …… 208
第 91 図　石鏃（1）…… 209
第 92 図　石鏃（2）…… 210
第 93 図　石鏃（3）…… 211
第 94 図　石槍 …… 212
第 95 図　石錐分類図 …… 213
第 96 図　石錐（1）…… 214
第 97 図　石錐（2）…… 215
第 98 図　石匙分類図 …… 216
第 99 図　石匙（1）…… 217
第 100 図　石匙（2）…… 218
第 101 図　ピエス・エスキーユ …… 219
第 102 図　板状石器 …… 220
第 103 図　三脚石器 …… 221
第 104 図　打製石斧（1）…… 223
第 105 図　打製石斧（2）…… 235
第 106 図　不定形石器の形態分類（1）…… 226
第 107 図　不定形石器の形態分類（2）…… 227
第 108 図　不定形石器の刃部形態による分類 …… 227
第 109 図　不定形石器形態別石材組成 …… 228
第 110 図　不定形石器の素材縁辺刃先角と
加工部位の刃先角 …… 228
第 111 図　不定形石器の石材利用 …… 229
第 112 図　不定形石器の分布 …… 229
第 113 図　磨製石斧分類図 …… 230
第 114 図　磨製石斧（1）…… 231
第 115 図　磨製石斧（2）…… 232
第 116 図　磨製石斧（3）…… 233
第 117 図　磨石類 …… 234
第 118 図　磨石類長幅分布図 …… 235
第 119 図　磨石類平面分布と数量表 …… 236

第 120 図　石錘 …… 237
第 121 図　砥石分類図 …… 238
第 122 図　砥石 …… 239
第 123 図　石皿類（1）…… 240
第 124 図　石皿類（2）…… 241
第 125 図　石製品分類図 …… 247
第 126 図　石棒分類図 …… 248
第 127 図　石棒 …… 249
第 128 図　その他の時代の石器分布 …… 255
第 129 図　道尻手遺跡の立地 …… 273
第 130 図　道尻手遺跡の集落変遷図 …… 274
第 131 図　信濃川流域の中期集落の事例 …… 277
第 132 図　集落遺跡の継続表 …… 278
第 133 図　信濃川流域の後期集落 …… 280
第 134 図　道尻手遺跡の中期住居跡 …… 282
第 135 図　縄文時代中期の住居跡（1）…… 284
第 136 図　縄文時代中期の住居跡（2）…… 286
第 137 図　長方形石組炉の集成図 …… 286
第 138 図　長野県・群馬県の事例 …… 288
第 139 図　富山県・福島県の事例 …… 289
第 140 図　道尻手遺跡の長方形住居跡 …… 291
第 141 図　主柱穴配列の長幅比グラフ …… 292
第 142 図　縄文時代中期の長方形住居跡 …… 293
第 143 図　他地域の長方形住居跡 …… 295
第 144 図　信濃川流域の複式炉 …… 297
第 145 図　魚沼地域の複式炉と住居跡の形態変遷図 …… 300
第 146 図　縄文時代後期前半期の住居跡（1）…… 302
第 147 図　縄文時代後期前半期の住居跡（2）…… 304
第 148 図　道尻手遺跡の配石墓 …… 306
第 149 図　魚沼地域の配石墓 …… 308
第 150 図　隣接地域の配石墓 …… 308
第 151 図　周辺地域の石材分布 …… 311
第 152 図　各時期の石器様相 …… 315
第 153 図　周辺遺跡の石器組成 …… 317
第 154 図　石鏃（A1 類）製作工程模式図…… 320
第 155 図　石鏃基部形態変遷図 …… 321
第 156 図　基部形態別数量グラフ …… 321
第 157 図　打製石斧類型別二次加工模式図 …… 323
第 158 図　打製石斧の時期的形態 …… 323
第 159 図　南北の土偶 …… 323

表目次

第 1 表　試掘調査出土遺物観察表 …… 8
第 2 表　検出遺構・出土遺物一覧表 …… 13
第 3 表　土器分類対比表 …… 38
第 4 表　住居跡一覧表 …… 44
第 5 表　炉跡一覧表 …… 45
第 6 表　長方形柱穴列一覧表 …… 66
第 7 表　配石遺構一覧表 …… 69
第 8 表　埋設土器一覧表 …… 78
第 9 表　フラスコ状土坑一覧 …… 81
第 10 表　土坑一覧表 …… 88
第 11 表　土器観察表（1）…… 136
第 12 表　土器観察表（2）…… 137
第 13 表　土器観察表（3）…… 138
第 14 表　土器観察表（4）…… 139
第 15 表　土器観察表（5）…… 140
第 16 表　土器観察表（6）…… 141
第 17 表　土器観察表（7）…… 142
第 18 表　土器観察表（8）…… 143
第 19 表　土器観察表（9）…… 144
第 20 表　土器観察表（10）…… 145
第 21 表　土器観察表（11）…… 146
第 22 表　土器観察表（12）…… 147
第 23 表　土器観察表（13）…… 148
第 24 表　土器観察表（14）…… 149
第 25 表　土器観察表（15）…… 150
第 26 表　土器観察表（16）…… 151
第 27 表　土器観察表（17）…… 152
第 28 表　土器観察表（18）…… 153
第 29 表　土器観察表（19）…… 154
第 30 表　土器観察表（20）…… 155
第 31 表　土器観察表（21）…… 156
第 32 表　土器観察表（22）…… 157
第 33 表　土器観察表（23）…… 158
第 34 表　土器観察表（24）…… 159
第 35 表　土器観察表（25）…… 160
第 36 表　土器観察表（26）…… 161
第 37 表　土器観察表（27）…… 162
第 38 表　土器観察表（28）…… 163
第 39 表　土器観察表（29）…… 164
第 40 表　土器観察表（30）…… 165
第 41 表　土器観察表（31）…… 166
第 42 表　土器観察表（32）…… 167
第 43 表　土器観察表（33）…… 168
第 44 表　土器観察表（34）…… 169
第 45 表　土器観察表（35）…… 170
第 46 表　土器観察表（36）…… 171
第 47 表　土器観察表（37）…… 172
第 48 表　土器観察表（38）…… 173
第 49 表　土器観察表（39）…… 174
第 50 表　土器観察表（40）…… 175
第 51 表　土器観察表（41）…… 176
第 52 表　土器観察表（42）…… 177
第 53 表　土器観察表（43）…… 178
第 54 表　土偶観察表（1）…… 189
第 55 表　土偶観察表（2）…… 190
第 56 表　三角形土製品観察表（1）…… 195
第 57 表　三角形土製品観察表（2）…… 196
第 58 表　三角壕形土製品観察表 …… 197
第 59 表　耳飾観察表 …… 199
第 60 表　土製円盤観察表（1）…… 199
第 61 表　土製円盤観察表（2）…… 200
第 62 表　土製品観察表（1）…… 201
第 63 表　土製品観察表（2）…… 202
第 64 表　ミニチュア土器観察表 …… 202
第 65 表　石器組成表 …… 202
第 66 表　石器石材組成表 …… 207
第 67 表　不定形石器形態別石材組成 …… 224
第 68 表　石器観察表（1）…… 242
第 69 表　石器観察表（2）…… 243
第 70 表　石器観察表（3）…… 244
第 71 表　石器観察表（4）…… 245
第 72 表　石器観察表（5）…… 246
第 73 表　石製品観察表 …… 251
第 74 表　編年表（1）…… 258
第 75 表　編年表（2）…… 269
第 76 表　石材選択性 …… 313
第 77 表　石器石材組成表 …… 313
第 78 表　時期別石器観察表 …… 319

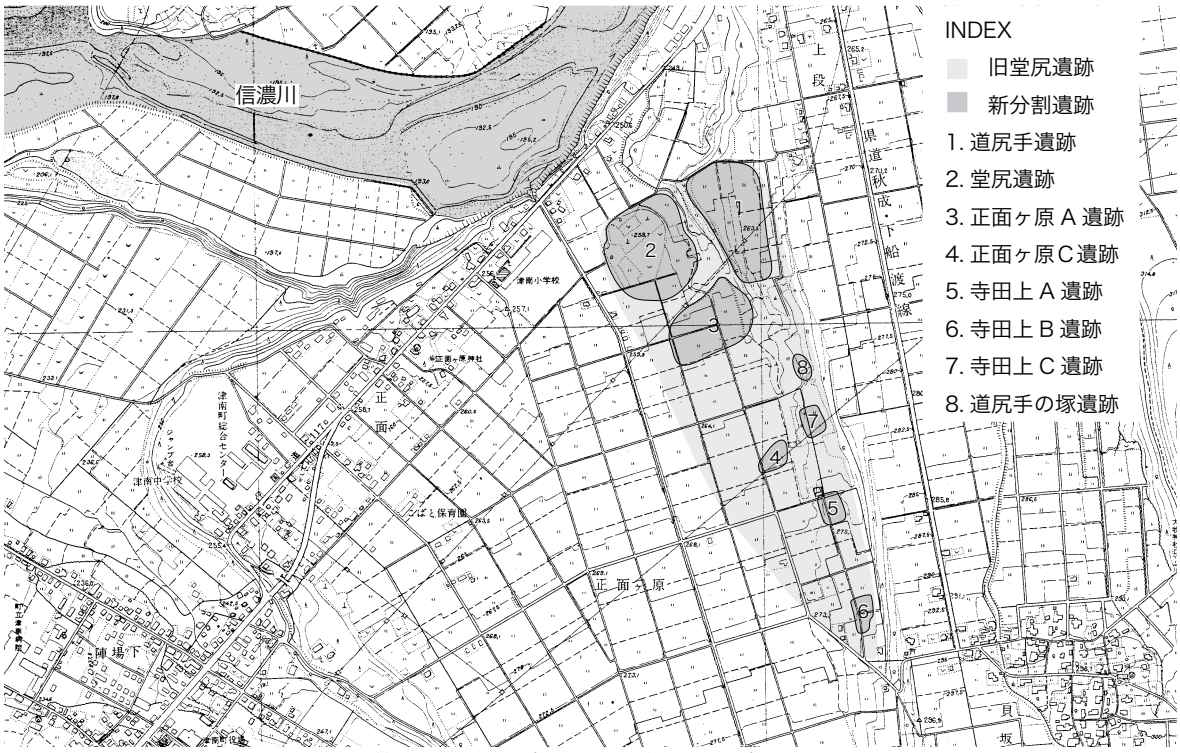
第Ⅰ章　調査に至る経緯

津南町は長野県と境を接する県境の町であり、信濃川沿岸に広がる河岸段丘（註 1）の町でもある。隣接する松之山町や松代町では急峻な斜面に棚田が多く作られている一方、津南町は広大な河岸段丘を生かした平坦な水田が並ぶ。この大きく異なる風景は、信濃川を境に地質学的要因によって生まれる地域特性の一つである。この河岸段丘が広く幾段にも分布する反面、急峻な斜面地が少ないことから農業政策的に中山間地に含めていただけない現状がある。

この特性である段丘が広大に分布することから農業用地としての利用価値が高く、その評価として昭和 48 年に国営総合農地開発事業が採択されたと理解される。昭和 48 年以降、北陸農政局苗場山麓開拓建設事業所（以下、北陸農政局と略す）が津南町に設立され、事業名を変更しながら、平成 12 年まで圃場整備事業が進められてきた（註 2)。

津南町教育委員会（以下、町教委と略す）は、昭和 49・50 年の２ヵ年に亘り、当時計画されていた開発地域（註 3）を対象に遺跡確認調査を実施した。調査は、江坂輝弥（当時：慶応大学文学部教授）を団長に、地域研究者である石沢寅二・石沢寅義・石沢藤栄・樋口久信・島田靖久の５名を調査員として調査団を編成した。調査団はその調査成果を速やかに報告書として纏め上げた（註 4)。刊行された２冊の報告書には、周知遺跡の範囲、遺物包含層の深度、検出された遺構、出土した遺物が細かく記録されている。道尻手遺跡は、当時、堂尻遺跡の範囲に含まれて認識されていたことが記録報告書から読み取れる（註 5)。堂尻遺跡の分割整理は平成６年に実施された堂尻遺跡確認調査で行われ、その成果は速やかに報告されている（註 6)。

平成８年に道尻手遺跡の一部が圃場整備事業に計画されていることから町教委は、平成７年晩秋に確認調査を実施し、遺跡の存在を確かめた。また、包含層の厚さ、重機併用発掘の基本深度を確定する基礎データを入手し、それを基に調査方法・工程・体制・予算積算を行い、計画書をまとめた。



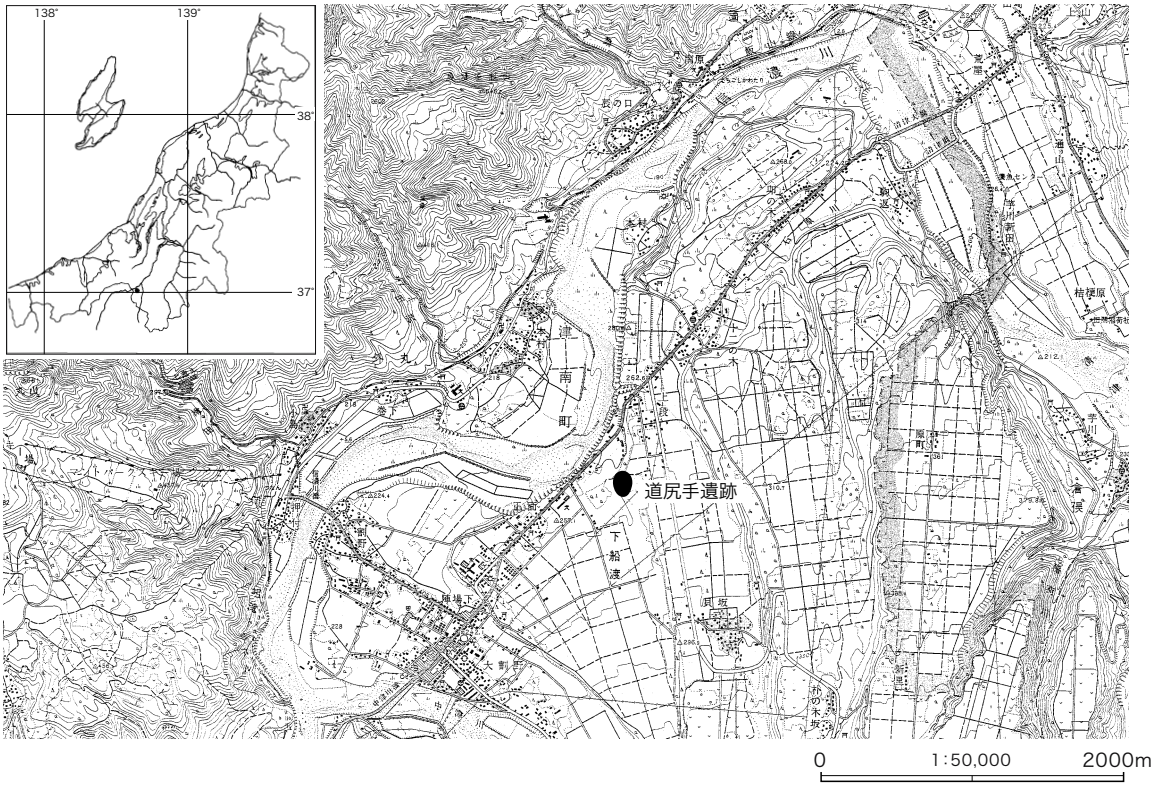
第１図　堂尻遺跡から分割された遺跡群

第Ⅱ章　道尻手遺跡の周辺環境

第１節　地理的環境

本遺跡は、中魚沼郡津南町大字下船渡甲 6296 番地外に所在する（第２図)。津南町は新潟県の最南端にあり、長野県境に位置する有数の深雪地帯の一つであり、町域は南北約 24km、東西約 11km で面積が 171.4km^2 である。また日本最長の信濃川が町の北側を南西から北東に貫き、支流である志久見川、中津川、清津川が右岸側から合流している。

この信濃川右岸には河岸段丘が発達し、特に中津川と清津川の間に河岸段丘がもっともよく発達している。これに対して信濃川左岸は扇状地形を呈し、河岸段丘の発達は顕著ではない。河岸段丘は、現在のところ８面（９面）確認されており（註７)、高位段丘から、谷上面、米原Ⅰ面、Ⅱ面、卯ノ木面、朴ノ木坂面、貝坂面、正面面の７段の更新世の段丘と、大割野Ⅰ面、Ⅱ面の２段の完新世の段丘で構成されている(第３図)。本遺跡が位置する貝坂面は更新世後期の段丘で、貝坂ローム層の堆積が認められるが、ローム層は古い高位段丘ほど厚く、新しい低位段丘ほど薄く堆積するため、堆積は１m を超えない。段丘面は緩く起伏をもち、標高は約 230 ～ 380m を測る。本遺跡は貝坂面北西端にあり、標高約 260 ～ 262 mのところに位置しており（第４図)、信濃川河床面からの比高差は約 65 mである。また現在消えてしまった小河川が幾つか存在していたことが想定される。遺跡内を横断する旧河道は 、その一つと考えられる。集落が形成された時点で水の流れは無かったという分析結果が出ていることから、廃棄帯の形成が始まるころには窪地が残っていたのみであると想定される。また遺跡の南側に湧水地が位置し、貝坂段丘下にも小河川が流れていたと考えられる。本遺跡の北側は信濃川に面しているが、急峻な段丘崖



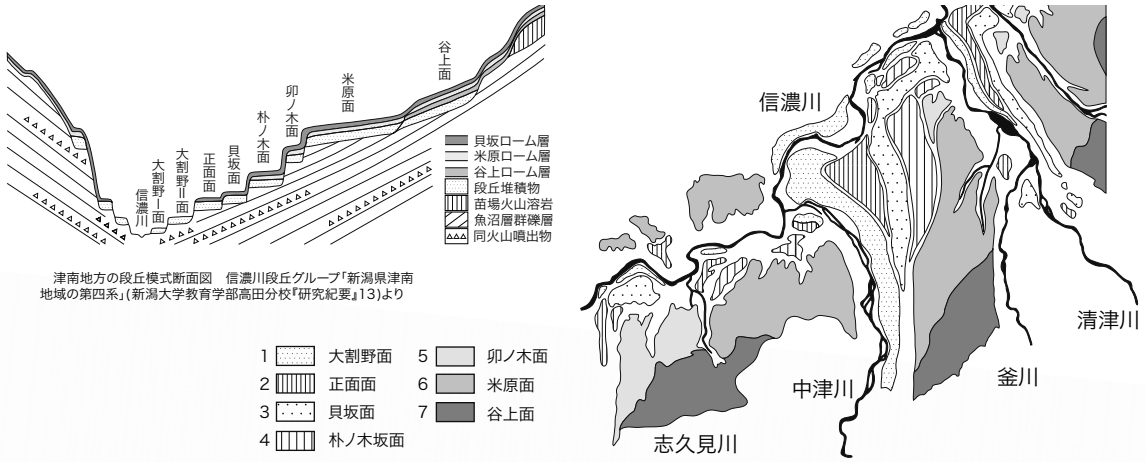
第２図　遺跡位置図

となっており、釜掘川などの小河川沿いから降りることができるが、困難である。このような段丘縁辺部に本遺跡が形成されたと考えられる。

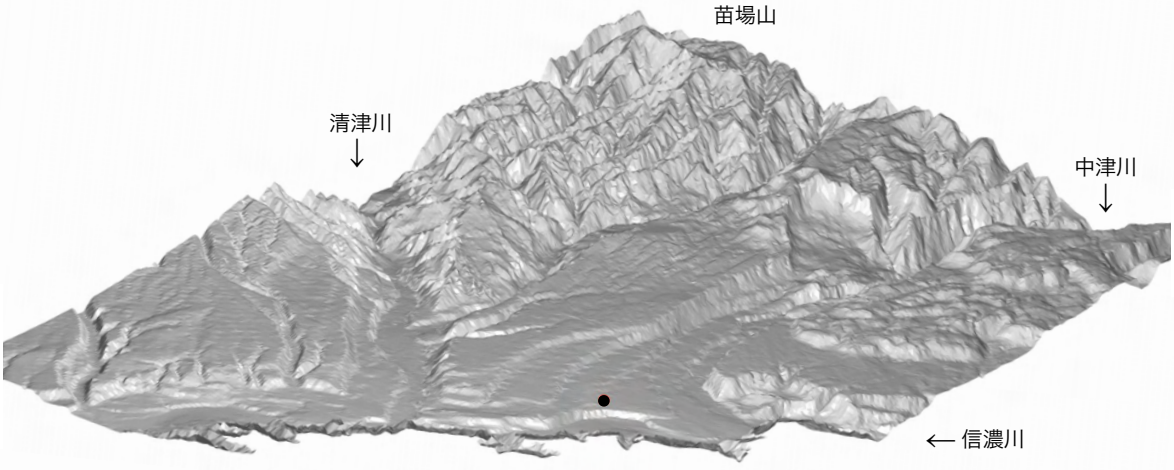
信濃川は全長 367km とされており、長野県南佐久郡の山岳部（甲武信岳）から流れ出て、千曲川が中部高地を北上し、新潟県へと流れ込み信濃川へと名前を変え、新潟平野から日本海へと注ぐ。信濃川には魚野川など幾つかの河川が合流しているが、遺跡周辺では志久見川、中津川、清津川などの河川が右岸から合流している。また魚沼丘陵を挟んで東側に魚野川が平走して川口町で合流する。

志久見川は長野県境を北流し、釜川や天代川、北野川などの支流が合流している。中津川は全長約 35km の河川であり、信州秋山郷の最奥切明に源流が求められる。中津川は北流して、大割野で信濃川と合流している。清津川は群馬県境に源流が求められ、全長約 43km の河川である。その支流には釜川などがあり、上流には摂理の発達した絶壁が聳え立つ七ツ釜がある。

遺跡周辺は四方を山に囲まれており、遺跡から眺望できる山は、苗場山・山伏山・烏帽子山などがある。東側は高位段丘や魚沼丘陵にさえぎられて、遠方の山は眺望できない。周囲の山は、南側に苗場山がそびえ立ち、標高 2145 mを測る。また信濃川左岸にあたる北部は山伏山（標高 903 m）・烏帽子山（標高 546 m）などが存在し、近景の山並みが西から北側を囲んでいる。



第３図　津南町の河岸段丘



第４図　段丘俯瞰図および遺跡の位置

第２節　歴史的環境

津南町とその周辺には、学史上著名な本ノ木遺跡や壬遺跡などを含め、旧石器時代～縄文時代にかけての遺跡が数多く確認されている。これらの遺跡の分布は、佐藤雅一・宮田千里が詳細にまとめている（註８）。周辺のほとんどの遺跡は、信濃川右岸の河岸段丘上に集中している。また本遺跡の隣接地には、北側に正面中島遺跡、南側に縄文時代中期初頭を中心とする道下遺跡、西側に縄文時代中期前葉の堂尻遺跡、縄文時代晩期を中心とする正面ケ原Ａ遺跡がある。周辺遺跡の分布について、時期ごとに概観したい。時期区分については、後述する本遺跡の時期区分を用いる。周辺遺跡一覧表は、土器のみが出土した場合が○、住居跡が検出された場合を◎で表記している（第５図）。

Ⅱ期（五領ケ台式並行期）は９遺跡で、道尻手遺跡（1）、道下遺跡（７）、城林遺跡（12）、脇ノ堤遺跡（16）、上正面しも遺跡（18）、反里遺跡（20）、胴抜原Ｂ遺跡（32）、上野遺跡（34）、干溝遺跡（53）がある。道下遺跡・城林遺跡では住居跡が検出されているが、この段階ではまだ環状集落は認められない。

Ⅲ期（大木７ｂ式並行期）は 21 遺跡で、道尻手遺跡（１）、堂尻遺跡（2）、城林遺跡（12）、午肥原遺跡（13）で住居跡が検出されている。調査面積にもよるが、ほとんどの遺跡は小規模遺跡で数軒の住居跡が検出され、ほぼⅢ期の間で終始する傾向がある。一方、この時期になると信濃川流域では五丁歩遺跡や清水上遺跡のように環状集落が形成され、道尻手遺跡でも環状集落が形成される。

Ⅳ期（大木８ａ式並行期）は 21 遺跡で、道尻手遺跡（1）、堂平遺跡（14）、森上遺跡（42）、沖ノ原遺跡（31）などで住居跡が検出されている。住居跡が検出された遺跡のほとんどは環状集落を形成しており、小規模遺跡が見られない。またこの時期は、火炎土器が隆盛する時期でもある。

Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）は 25 遺跡で、遺跡数・住居跡数が最大になる時期である。道尻手遺跡（1）、堂平遺跡（14）、下モ原Ⅱ遺跡（10）、中津川左岸の沖ノ原遺跡（31）、信濃川左岸の八反田遺跡（35）、清津川右岸の森上遺跡（42）で住居跡が検出されている。この中で環状集落を形成する遺跡は、前段階と同様に道尻手遺跡を含めて、堂平遺跡、沖ノ原遺跡が挙げられる。

Ⅵ期（沖ノ原式期）は 18 遺跡で、道尻手遺跡（1）、堂平遺跡（14）、上正面かみ遺跡（17）、中津川の左岸の高位段丘に位置する沖ノ原遺跡（31）、信濃川左岸の八反田遺跡（35）、清津川右岸の森上遺跡（42）、布場遺跡（46）で住居跡が検出されている。これらの遺跡では複式炉が検出されているが、この地域よりも西側の千曲川流域では複式炉は現在のところ確認されていない。道尻手遺跡と堂平遺跡や沖ノ原遺跡は大規模な集落遺跡であり、環状集落を形成している。沖ノ原遺跡は、「沖ノ原式土器」の標識遺跡でもあるが、中期終末～後期初頭期のものと考えられる敷石住居跡が検出されている。

後期に入ると遺跡数が減少し、Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式期～加曽利Ｂ1 式並行期）で 14 遺跡となる。この時期は、道尻手遺跡（1）、道下遺跡（7）、下モ原Ⅲ遺跡（11）、堂平遺跡（14）、八反田遺跡（35）で住居跡が検出されている。道尻手遺跡、堂平遺跡では、環状列石などの大規模配石遺構が検出されている。一方で、道下遺跡や下モ原Ⅲ遺跡は小規模遺跡で、出土遺物は希薄で、住居跡１、２軒が検出されるのみである。

以上のように、周辺遺跡に比べて、本遺跡はⅢ期～Ⅸ期（大木 7b 式並行期～加曽利Ｂ1 式並行期）にわたって長期的に占地されている。隣接地に前期末～中期初頭や晩期の集落遺跡があることからも、立地として居住に適した環境であったと考えられる。

No	遺跡名	中期					後期			No	遺跡名	中期					後期		
		II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	IX期			II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	IX期
1	道尻手遺跡	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	28	越那A遺跡		○	○		○			
2	堂尻遺跡		◎							29	釜坂遺跡			○	○	○			
3	正面中島遺跡			○	○					30	芋川原遺跡		○	○	○	○	○		
4	寺田上A遺跡			○			○			31	沖ノ原遺跡			◎		◎			
5	寺田上C遺跡									32	胴抜原B遺跡	○							
6	貝坂桐ノ木平A遺跡				○					33	諏訪前遺跡			○	○				
7	道下遺跡	◎						◎		34	上野遺跡				○				
8	居尻A遺跡				○					35	八反田遺跡		◎	○	◎	◎		◎	◎
9	堤ノ上遺跡				○					36	原林遺跡			○					
10	下モ原II遺跡				○					37	大赤沢遺跡		○						
11	下モ原III遺跡		○	○	○			◎		38	宮ノ脇遺跡			○	○	○			
12	城林遺跡	◎	◎							39	通り山遺跡	○							
13	午肥原遺跡		◎							40	会所前遺跡		○						
14	堂平遺跡			◎	◎	◎	○	○		41	寺尾遺跡		○	○	○	○			
15	堂屋敷遺跡		○							42	森上遺跡		○	○	◎	◎			
16	堤ノ脇遺跡	○								43	向原遺跡		○	○	○	○	○	○	
17	上正面かみ遺跡					◎				44	下原遺跡		○	○	○	○			
18	上正面しも遺跡	○								45	桂遺跡							○	
19	反里口遺跡		○	○	○	○	◎			46	布場遺跡				○	○	○	○	
20	反里遺跡	○	○							47	小丸山遺跡				○				
21	南原遺跡		○							48	貝野遺跡				○	○			
22	辰ノ口遺跡		○							49	天池遺跡			○					
23	笹沢遺跡							○		50	谷上遺跡				○				
24	卯ノ木平遺跡						○			51	穴沢遺跡								
25	卯ノ木山田沢遺跡		○	○			○			52	壬遺跡				○	○			
26	屋敷田遺跡			○	○					53	干溝遺跡	○				○			
27	屋敷田III遺跡									54	白羽毛遺跡		○						

第５図　周辺の縄文時代中期前葉～後期中葉の遺跡

第３節　周辺の石材環境

津南町教育委員会では、津南町とその周辺地域の信濃川とその支流において、A～T地点の20ヶ所で石材調査を行った。この成果は、これまで刊行された報告書中で詳細にまとめられている（註9）。また石材組成については、「川原の石」調査グループによる報告がある（註10）。この中で、道尻手遺跡からの出土遺物・検出遺構に関連する石材について河川ごとにまとめておきたい（第6図）。

１．信濃川（A・B・C地点）：信濃川の左岸にある外丸本村の河原（A地点）は、主体は径30～50cmほどの大形礫に加えて、径100～130cmほどの大形礫が多く見られる。形状は円礫を主体とし、石材はほとんどが粗質の安山岩である。またより下流の宮中堰堤下（C地点）では、径5～10cmほどの小形礫が主体で、径50～70cmほどの中形礫が点在している。形状は円礫が主体をなし、石材は安山岩を主体とするが、ヒン岩や頁岩などを組成する。

２．中津川（K・J地点）：信濃川の支流である中津川右岸の中津川運動公園の川原（K地点）では、径10～30cmの中形礫に加えて、径100～200cm以上の大形礫が多い。形状は円礫であり、石材は安山岩を主体として、少量の凝灰岩などが組成する。また上流の清水川原（J地点）では岩盤が露出し、径200～300cm以上の大形礫が散在し、岩盤や礫の一部が緑色に変色した変質安山岩も見られた。形状は円礫であり､石材は安山岩を主体とする。またこれよりやや下流の猿飛橋付近(I地点)には玄武岩の岩体がある。

３．志久見川（M・N・O地点）：信濃川の支流である志久見川の支流釜川右岸では、径20～30cmのものがほとんどで、径100cm以上の大形礫も点在している。形状は亜角礫や円礫があり、石材は良質のガラス質黒色安山岩を主体としている。

４．清津川（D・E・F地点）：信濃川の支流である清津川の角間（F地点）では、径30～50cmほどの中形礫が点在し、多くは径20cm以下の小形礫である。形状は円礫が主体であり、石材は花崗岩・閃緑岩が多く、安山岩･粘板岩･頁岩などが組成する。また上流域の清津峡（D地点）では頁岩の露頭がある。右岸の岸壁・河床・左岸の一部に岩体が露出している。部分的に石英閃緑ヒン岩が貫入している。

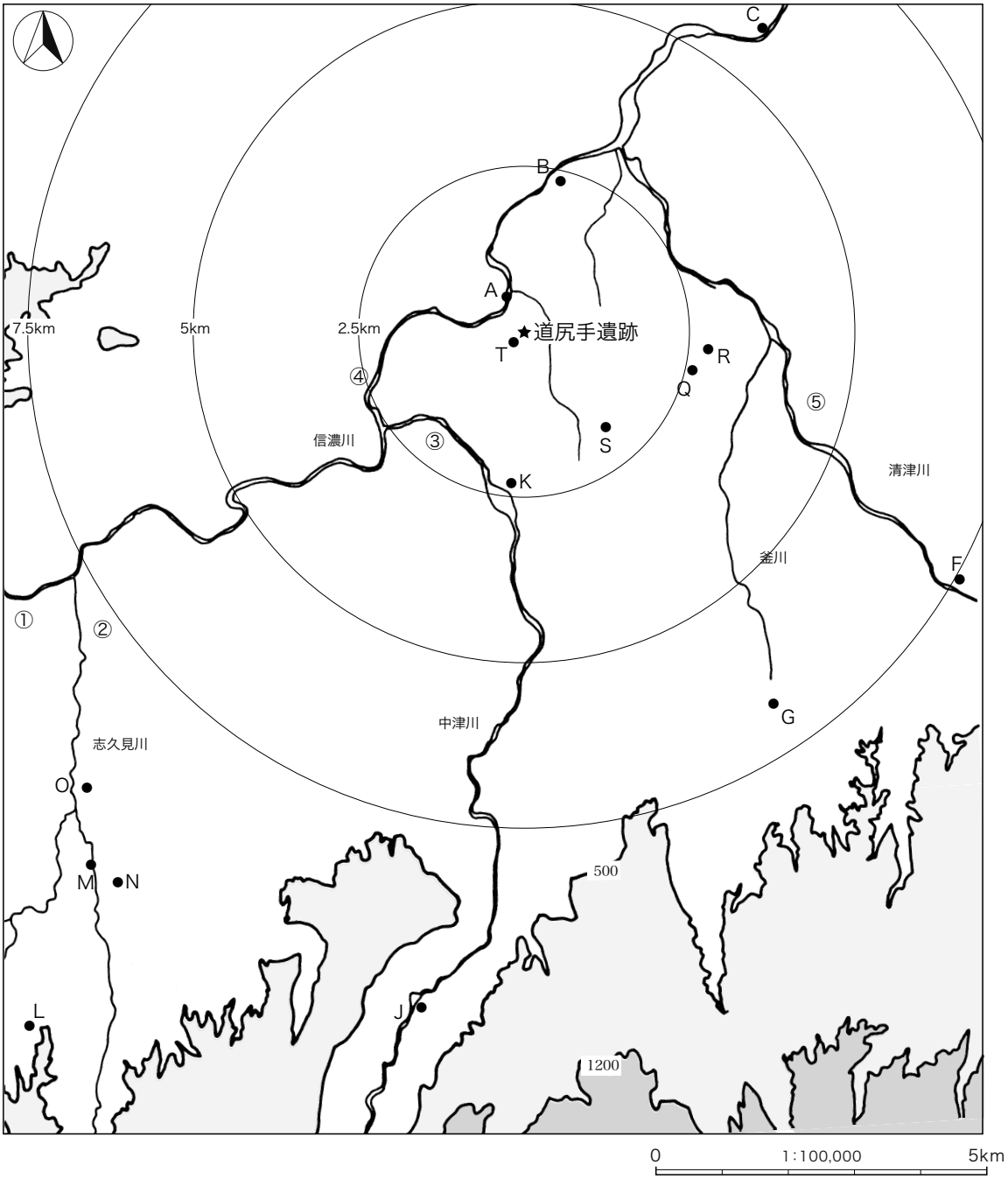
５．釜川（G地点）：清津川の支流である釜川の上流の七ツ釜（G地点）では､柱状節理の露頭が見られる。これらは粗質の安山岩である。川原には最大長100cmほどの円礫・角礫の柱状礫が見られる。

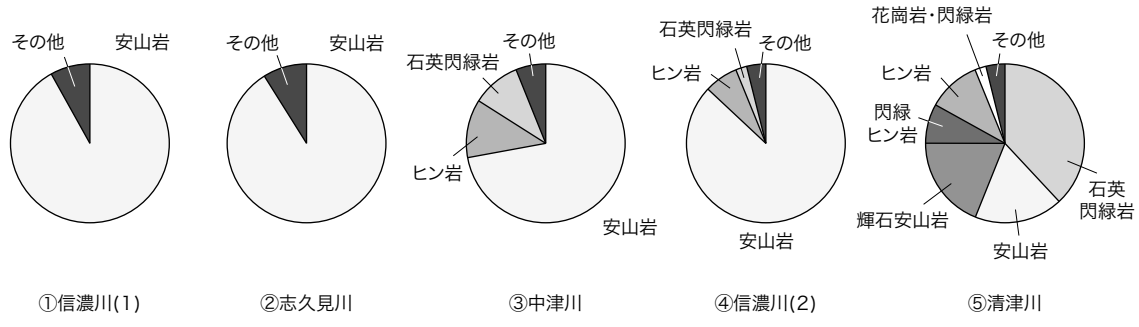
６．貝坂段丘崖（T地点）：遺跡が立地する貝坂段丘の段丘崖（T地点）では、径10～40cmほどの小･中形礫がほとんどであり、径100cm前後の大形礫が点在している。石材は安山岩がほとんどであり、これに凝灰岩なども少量組成する。

７．その他の小河川（Q・R・S地点）：稲荷川・堀之内川（Q・R地点）や石原川（S地点）などの小河川についても調査を行なった。これらは径10～40cmほどの小・中形円礫を主体とするもので粗質の安山岩であった。用水路として改変されていることもあり、詳細は不明である。

８．遠隔石材：周辺地域で採取できないもので､遺跡から出土しているものがある。例えば､黒曜石や玉髄･鉄石英などがある。これらはそれぞれ長野や五十嵐川流域が産出地であると推定される。

以上、調査を行なった幾つかの地点について概略的に述べてきたが、これらの石材が遺跡で用いられた石器や配石などに利用されていたことが想定される。遺跡周辺の段丘際などの小河川は用水路に作り替えられて消えたものもあり、今後も石材分布調査を継続していく必要があるだろう。





①信濃川(1)　②志久見川　③中津川　④信濃川(2)　⑤清津川

第６図　津南町周辺の石材環境

第Ⅲ章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概要

道尻手遺跡（どうじっていせき）は、新潟県中魚沼郡津南町大字下船渡甲 6296 番地外に所在する。遺跡は、河岸段丘の中位段丘に分類される貝坂段丘１面に立地（標高 260m ～ 263 m）する。この貝坂段丘１面の段丘礫層上位に堆積したローム層中には、広域テフラが包含されている（註 11)。

遺跡南方の段丘崖に「大清水」と呼ばれていた湧水地点がある。そこから流れる清水は､旧川道に沿って流れ、遺跡西方眼下を緩やかに蛇行し、やや広い低地帯となっている。この低地帯にはフラスコ状土坑が堂尻遺跡範囲確認調査で確認されている（註 12)。近接する信濃川は、対岸の外丸で大きく蛇行し、右岸段丘崖を浸食している。この右岸段丘崖は、貝坂段丘１面の下に広がる正面段丘面から連なる崖で、その高さは約 55m を計測する。本遺跡と信濃川との距離は、北北西方向、直線で約 275m を測る。

第２節　確認調査の成果

平成７年９月８日～９月 29 日まで実施した確認調査によって､遺跡の範囲や包含層の様子（形成時代･時期：厚さ：包含遺物の内容)、遺構の密度が詳細に把握された。遺跡の範囲は、遺物や遺構の分布から 30T ～ 42T の範囲と開発範囲以外にある西側に隣接する西側から南側の水田区域を含む範囲を「道尻手遺跡」の範囲と理解した。圃場整備事業に含まれる 30T ～ 42T の範囲すべてを記録保存対象地とした。また、隣接する西側から南側に掛けての水田区域は、良好な状態で集落跡が保存されている。

確認調査によって 34・36・38・39・41T から中期中葉から後葉の縄文土器が出土した。36・38・41T からは後期の前葉に帰属する縄文土器も出土した。さらに、33T からはミニチュア土器が、34T からは土偶が検出された。剥片に混じり、34T からは磨製石斧が、42T から凹石が出土した。

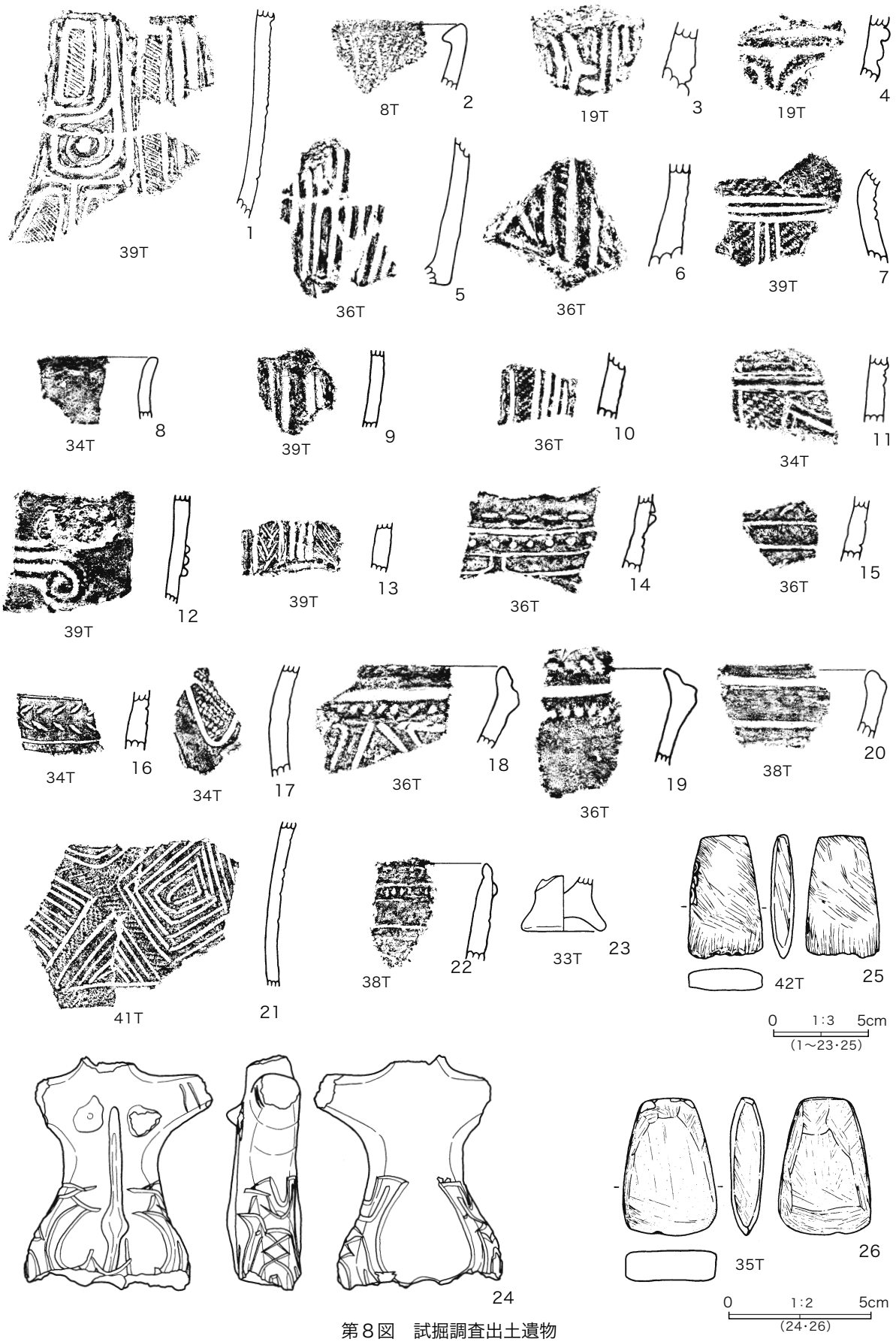
No	トレンチ	分類	部位	文様	縄文原体	胎土	色調	備考
1	39T	第Ⅱ群第2b類	胴部	パネル状文	—	砂粒	橙色	
2	8T	第Ⅱ群第2類	口縁部	—	単節RL	砂粒	明褐色	折り返し口縁。
3	19T	第Ⅱ群第3b類	胴部	隆線文	—	砂粒	にぶい黄橙色	
4	19T	第Ⅱ群第3b類	胴部	隆線文	—	小礫	橙色	
5	36T	第Ⅱ群第3b類	胴部～底部	隆線文	—	砂粒	橙色	
6	36T	第Ⅱ群第3b類	胴部	隆線文	—	砂粒	灰白色	
7	39T	第Ⅱ群第3a類	胴部	沈線文	単節RL	砂粒	灰白色	
8	34T	第Ⅱ群第4類	口縁部	無文	—	砂粒	褐色	内外面に炭化物の付着。
9	39T	第Ⅱ群第4類	胴部	基隆帯	—	砂粒	明褐色	
10	36T	第Ⅱ群第4類	胴部	—	単節RL	砂粒	褐色	
11	34T	第Ⅱ群第4類	胴部	平行沈線文	単節RL	砂粒	褐色	外面に炭化物の付着。
12	39T	第Ⅱ群第4類	胴部	渦巻文	—	砂粒	灰白色	
13	39T	第Ⅱ群第4類	胴部	矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙色	
14	36T	第Ⅱ群第5類	口縁部	鎖状隆帯､沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙色	
15	36T	第Ⅱ群第5類	胴部	横ハ字文､沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙色	
16	34T	第Ⅱ群第5類	胴部	横ハ字文､沈線文	—	砂粒	灰白色	
17	34T	第Ⅱ群第5類	胴部	磨消縄文	単節RL	砂粒	褐灰色	内外面に炭化物の付着。
18	36T	第Ⅲ群第2類	口縁部	沈線文	—	砂粒	灰黄褐色	
19	36T	第Ⅲ群第2類	口縁部	沈線文･刻み	—	砂粒	灰黄色	
20	38T	第Ⅲ群第2類	口縁部	沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐色	
21	41T	第Ⅲ群第2類	胴部	磨消縄文	単節LR	砂粒	黒褐色	
22	38T	第Ⅲ群第2類	口縁部	隆帯＋刻み	—	砂粒	灰白色	外面に炭化物の付着。

No	トレンチ	分類	部位	文様	胎土	色調	備考
23	33T	ミニチュア土器	底部	—	砂隆	にぶい黄褐色	
24	34T	土偶	胴部	—	砂隆	橙色	

No	トレンチ	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
25	42T	磨製石斧	蛇紋岩	6.45	3.8	1.2	43	
26	26T	磨製石斧	蛇紋岩	7.2	5.1	1.8	130	

第１表　試掘調査出土遺物観察表

第７図　試掘トレンチ位置図



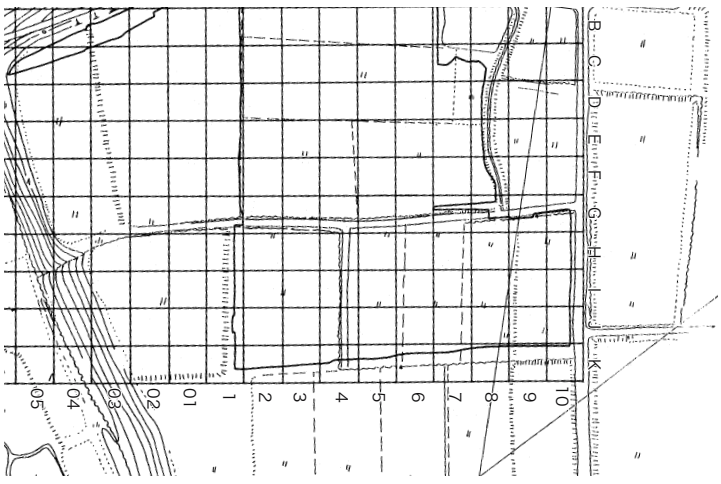
第８図　試掘調査出土遺物

第３節　発掘調査の方法と経過

発掘調査にあたり、遺跡全体に方眼を任意に設定した。任意のX軸は、調査区と境を接する水田畦の主軸に合わせた。そのX軸は､本来の北よりも東へ９度傾く方向である。X軸に直交するY軸の始まりを、北側に位置する農道付近とした｡基本方眼は10ｍ×10ｍの大グリッドとした(第９図１)｡X軸にはアルファベットを配し、Y軸には算用数字を配した。これらX軸とY軸の交差を利用して大グリッドの名称を決めた｡すなわち､第９図１は北東隅を０Ｂ－10区と呼び､北西隅の杭にグリッド名を書き込んだ｡大グリッド内は２ｍ×２ｍの小グリッドで 25 区分した（第９図２)。小グリッドは北西端を１として、１～ 25 番を付した。

発掘調査は、重機で耕土を剥ぎ取り、その下部からすべて人力による排土作業であった。その作業は、南側のG～K－１区～ 10 区（便宜的上A地区）から着手した（第９図３)。G区ラインには用水路があり、調査後半まで壊すことはできなかった。このG区ラインが作業進行の境であった。A地区の排土作業完了後、A－１区～６区・B－１区～７区・C～G－１区～８区（便宜上B地区）に取り組んだ（第９図３)。このB地区は、進行上、D～G－１区～５区を着手し、その後、D～G－６区～８区、次いでB・C－１区～４区、さらにB－７区・C－８区、A－６区の順番で進めた。包含層発掘→遺構確認→以降発掘の手順は、その進捗に合わせてA・B地区共に進められた。排土はB～F－９・10 区、H～J－８区・９区に積み上げた。後半、農道の拡張工事が予定され、急遽、調査区の拡張を行いA－１区、０A－１区・２区、A－01 区、A・B－02 区、B－03 区、A・B－04 区、C－05 区・06 区（便宜上C地区）を調査体制に組み込んだ（第９図３)。

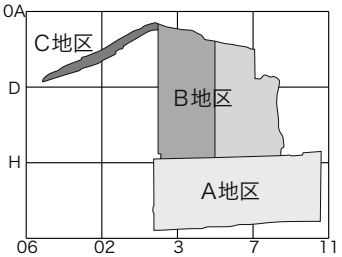
発掘調査は 1970 年代の朝駆け夕方残業の毎日であり、精神論の薫陶を受けた調査員に支えられた現場であった。すなわち、昭和の光明が遺跡を照らすことで、一応の成果を記録することができた。



1. 大グリッド

4	9	14	19	24
5	10	15	20	25

2. 小グリッド



3. 調査区区分

第９図　グリッド配置図

第４節　基本土層

本遺跡は、調査区内の西側・北側では水田の「切り盛り工法」(註 13) による削平・攪乱が顕著であるため、黒色土層の堆積は薄かった。遺跡内の基本的な土層堆積を把握するために、堆積が安定している区域にセクションベルト A（J6 － J8 グリッド)、セクションベルト B（G ５－ G ９グリッド)、セクションベルト C（C4 － B ６グリッド）の３ヶ所にセクションベルトを設定した。そのなかでも H グリッドの堆積が良好であり、計６層の堆積層が確認できたことから、セクションベルト B の土層堆積を基本土層とし、遺跡全体の土層と対応させるものとした。

また廃棄帯の堆積環境を明らかにするために、鉱物分析、土壌理化学分析・珪藻分析を、遺跡周辺の植生を推定するために花粉分析および植物珪酸体分析を行なっている（付編３参照)。

Ⅰ層：黒褐色土　粘性ややあり、しまりやや弱い。表層にリモナイトが顕著に見られる。４層に類似。

Ⅱ層：暗褐色土　粘性なし、しまり弱い。Ⅰ層に比べてやや赤色を帯びた砂質土。

Ⅲ層：黒褐色土　粘性あり、しまりやや弱い。無遺物層。

Ⅳ層：黒褐色土　粘性ややあり、しまりやや弱い。Ⅰ層に類似。

Ⅴ層：灰褐色土　粘性あり、しまりややあり。縄文時代の遺物包含層。

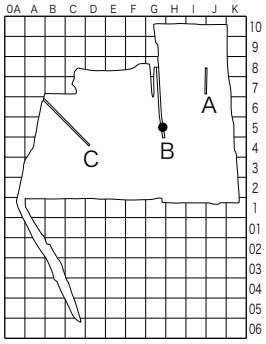
Ⅵａ層：明褐色土　粘性なし、しまり弱い。２層よりも赤化している砂質土。
堆積層は粒径１～ 2mm の黄褐色粒子を含む。遺物はより下層に多く包含されている。

Ⅵｂ層：黒灰色土　粘性あり、しまりやや弱く、内容物の違いから３層に区分している。

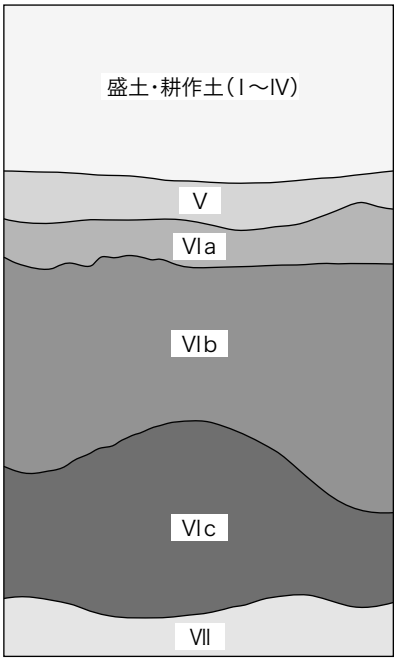
Ⅶ層：暗黄褐色土　粘性あり、しまりやや強い。遺物は上面にのみ検出される。

Ⅷ層：黄褐色土　粘性あり、しまり弱い。９層の漸移層。旧河道の立ち上がり付近に顕著に見られる点から、水の流れによって侵食されたものと考えられる。

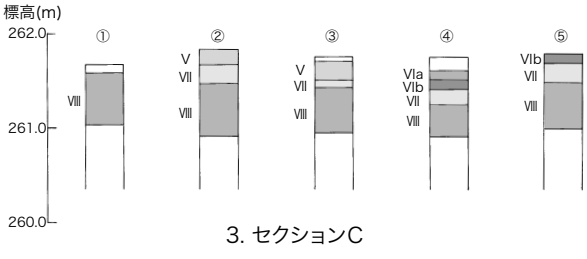
Ⅸ層：黄褐色土　粘性ややあり、しまり強い。シルトローム層。



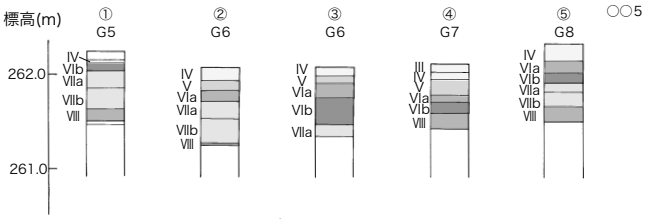
1. セクションベルト位置図



2. 基本土層(セクションB)



3. セクションC



4. セクションB

第 10 図　基本土層

第５節　検出遺構と出土遺物の概要

本遺跡の発掘調査では、縄文時代の遺構・遺物が主体的に検出された。検出遺構の種類は、住居跡が73軒（炉跡８基、焼土跡13基含む）、長方形柱穴列４基、配石遺構群５群（配石墓22基含む）、埋設土器15基、フラスコ状土坑18基、土坑約2000基、溝状遺構１条がある。またＨ～Ｋ－１～３グリッドが遺構の空白域もしくは希薄域となっていることから、「中央広場」として認識される。検出遺構のほとんどはこの周囲に半円状に分布している。その外縁には旧河道が南北に延びており、ここから多量の土器・石器などが出土している。これらを「廃棄帯」として認識した。

また出土遺物は、土器がコンテナ約1000箱分出土しており、うち完形復元できた個体は297点である。これらの帰属時期は、縄文時代前期～晩期にかけてのもので、そのほとんどは中期前葉～後期中葉の土器である。土製品は総数516点、内訳は、土偶150点、三角形土製品216点、三角壕形土製品３点、耳飾12点、ミニチュア土器38点、その他７点がある。この他、焼成粘土塊94点、土製円盤90点がある。

石器は、総数5985点が出土している。帰属時期は、出土土器からほとんどが縄文時代中期前葉～後期前葉であると考えられる。一部は、縄文時代草創期や前期のものや旧石器時代後期に帰属する可能性がある石器が少量出土しているが、これらは層位的な出土状況にないために時期不明遺物として報告している。石器の器種の内訳は、石鏃138点、石槍10点、石錐167点、石匙30点、板状石器６点、三脚石器６点、打製石斧1937点、磨製石斧230点、磨石類1069点、石皿78点である。石製品は、石棒36点、抉状耳飾２点、垂飾品３点などがある。加えて、配石構成礫約300点を分析のために回収してきている。この他、未焼成の粘土、酸化鉄、炭化材、炭化種子、動物遺存体（焼獣骨）が出土している。また土壌サンプルは、配石遺構下の土坑覆土から22ヶ所・206点、また廃棄帯中の基本土層中から２ヶ所で20点のサンプルを採取している。

これらの遺物の分布は、「廃棄帯」と呼称した区域に集中している。これらは旧河道の窪地に堆積しており、遺跡内を南北方向に約20ｍ幅で帯状に分布していた。また遺跡の範囲は西側や南側の保存区域に広がっていると考えられ、ほぼ集落範囲の半分を調査したものと考えられる。従って、少なくとも今回の発掘調査から得られた検出遺構と出土遺物は、本集落遺跡に残された活動痕跡の全てではないことは明らかである。

一方、縄文時代以外の遺構･遺物は稀薄である。遺構は、近･現代のものと思われる溜め跡がG10グリッドやＩ４グリッドから検出されている。遺物は、耕作土中から陶磁器や甕の破片、鉄片、ガラス片などが出土しているが、今回の報告ではその詳細については割愛したい。

遺　構	数　量	報告数	備　考
住居跡	73軒	73軒	炉跡8、焼土跡13含む。
長方形柱穴列	４基	４基	
配石遺構群	５ヶ所	５ヶ所	
配石墓	22基	22基	
埋設土器	15基	15基	
フラスコ状土坑	18基	18基	
土　坑	約2000基	46基	
溝状遺構	１条	１条	
廃棄帯	１ヶ所	１ヶ所	
広　場	1	1	

遺　物	数　量	報告数	備　考
土　器	約1000箱	4089点	
土製品	516点	431点	
石　器	約5985点	480点	
石製品	45点	28点	
動物遺存体	—	14点	
炭化種子	3点	3点	
炭化材	—	15点	

第２表　検出遺構・出土遺物一覧表

第Ⅳ章　縄文時代の検出遺構・出土遺物

第１節　土器の分類

１．道尻手遺跡出土土器の分類

本遺跡からは、縄文時代早期末葉～晩期までの土器が遺構および廃棄帯などの包含層中より出土している。特に縄文時代中期前葉～後期中葉の資料が数量的にまとまっている。分類に際しては、前期･中期･後期・晩期の時期によって計４群に大別し、さらに群ごとに細分を行なっている（註 14)。そのため各群内における類及び類内の細分は分類の順番全てが時期を示している訳ではない。群及び類については、それに対比される周辺遺跡の報告書における分類や型式名を記している。各分類の典型的資料は、完形土器を中心に図示している（第 11 図～第 26 図)。また、図版に掲載されている各遺物の観察表は、ここで行なった分類を記入した。

＜第Ⅰ群　早期末～前期前葉の土器群＞

第１類　羽状縄文を施すもので、土器胎土中に繊維を含有するもの（第 11 図 1）

第２類　コンパス文、爪形文などが施されるもの（第 11 図 2)

前期前葉の関山式土器（註 15）に対比される。

＜第Ⅱ群　中期の土器群＞

第１類　中期初頭（五領ケ台式並行期）に対比される土器群（第 11 図 3)

五領ケ台Ⅱ式土器（註 16）に対比される。

ａ類　半截竹管によって集合沈線文が施されるもの。半截竹管の背面で刺突を加えるものもある(第 11 図 3：1372・1373・1378・1380)。

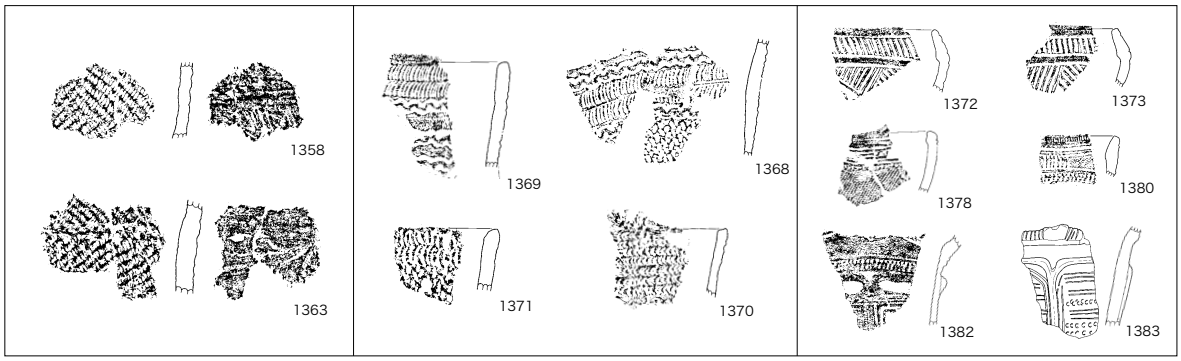
ｂ類　胴部にＹ字状懸垂文を有し、胴部に半截竹管による沈線文、刺突文、三角印刻を施すもの(第 11 図 3：1382・1383)。

第２類　中期前葉（大木７ｂ式並行期）に対比される土器群

ａ類　大木７ｂ式土器（註 17）に類似する一群である。口縁部文様帯に横位楕円区画を有するもの(第 11 図 4)。胴部は地文縄文で、横位の蛇行沈線文や弧線文、Ｙ字状懸垂文などが見られる。口縁部文様帯は無文や横位蛇行文などの文様が施され、環状突起が付される。また口縁部文様帯の口唇部もしくは下端区画には鎖状や波状の隆帯が多用される。『清水上遺跡Ⅱ』(註 18）の「東北系深鉢１～３類」、『五丁歩遺跡』（註 19）の「縄Ｘ系列」、「縄XIａ系列」、「縄XIｂ系列」、「縄XII系列」、「縄ＸIII系列」、『法正尻遺跡』（註 20）の「Ⅱ群３類」に類似する。

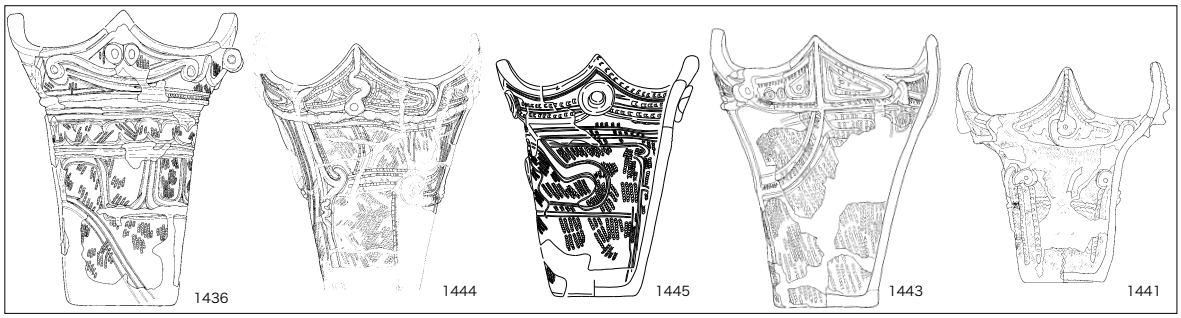
ｂ類　「新巻類型」(註 21) である。平口縁と波状口縁（山形突起）があり、体部が懸垂文構成のもの。文様は、大柄の懸垂文、眼鏡状突起、半截竹管による平行沈線文、沈線文に刺突や刻目を加えたものが施される（第 11 図 5、第 12 図 1)。『清水上遺跡Ⅱ』の「中部高地系深鉢」、『五丁歩遺跡』の「縄Ⅰ系列」、「縄VI系列」に類似している。

ｂ１：口縁部に４単位の山形突起をもつもの（第 11 図 5：1436・1444・1445・1443・1441)。



1. 第Ⅰ群第1類　　2. 第Ⅰ群第2類　　3. 第Ⅱ群第1類

4. 第Ⅱ群第2a類



5. 第Ⅱ群第2b1類

第 11 図　土器分類（1）

b２：平口縁で、入字状の突起などが付されるもの（第12図1：1454・341・1467・1473・1474・1475・1479・1490・1491・1492・1510・1526）。

b２－１　胴部文様にパネル状の区画をもつもの（第12図：1454・341・1473・1474・1475・1479・1492・1510・1526）。

b２－２　胴部は地文を施し、懸垂文のみのもの（第12図：1482・1490・1491）。

c類　口縁部に楕円区画などの文様帯を有するもので、不明なもの（第12図２：1615）。

d類　口縁部・胴部に三角形区画を有するもの（第12図3：1620）。『五丁歩遺跡』の「縄Ⅷ系列」に類似する。

e類　地文をもたず、懸垂文や環状突起、有節沈線や波状沈線文、刺突文、刻目を施すもの（第12図４：1596・1600・1592）。

f類　「斜行沈線文土器（後沖式土器）」（註22）に類似する一群。多段の横位楕円区画内に斜行沈線文を充填するもの。また耳状の貼付文、波状沈線文、逆「U」字状懸垂文などが特徴的に見られる（第12図5）。

g類　隆帯に沿ってキャタピラ文や刻目を施すもの（第13図1）。

ｇ１：勝坂式土器（註23）もしくはそれに類似する一群。隆帯に沿ってキャタピラ文・有節沈線を加えるもの（第13図1：1650・1659・1651・1656・1665）。『五丁歩遺跡』の「勝坂系列」に類似する。

ｇ２：文様区画内に細い沈線文を帯状に充填するもので、胴部下端に横位楕円区画を配するものもある（第13図1：1669・1672・1674）。『五丁歩遺跡』の「隆Ⅲａ系列」に類似する。

h類　阿玉台Ⅰ～Ⅱ式土器（註24）である。粘土帯の接合部に指頭圧痕を施すもの。文様は押引文などが施される（第13図２）。

『清水上遺跡Ⅱ』の「関東系深鉢」、『五丁歩遺跡』の「阿玉台系列」に類似する。

ｈ１：胎土中に多量の雲母を含有するもの（第13図２：1689・1702・1705・1707）。

ｈ２：胎土中に雲母を含まないもの（第13図２：1716）。

i類　新崎式土器（註25）である。口縁部文様帯に横位の半隆起線文が巡り、半截竹管により爪形文・蓮華文や格子目文が施されるもの（第13図3）。『清水上遺跡Ⅱ』の「北陸系深鉢」に類似する。

ｉ１：蓮華文端部に印刻が施されるもの（第13図3：1724・1725・1726・1730・1731）。

ｉ２：その他、爪形文が施されるもの（第13図3：1750）。

ｉ３：竹管文で沈線を施すもの（第13図3：1752・1757）。

ｉ４：沈線間に刺突文や沈線文を施すもの。

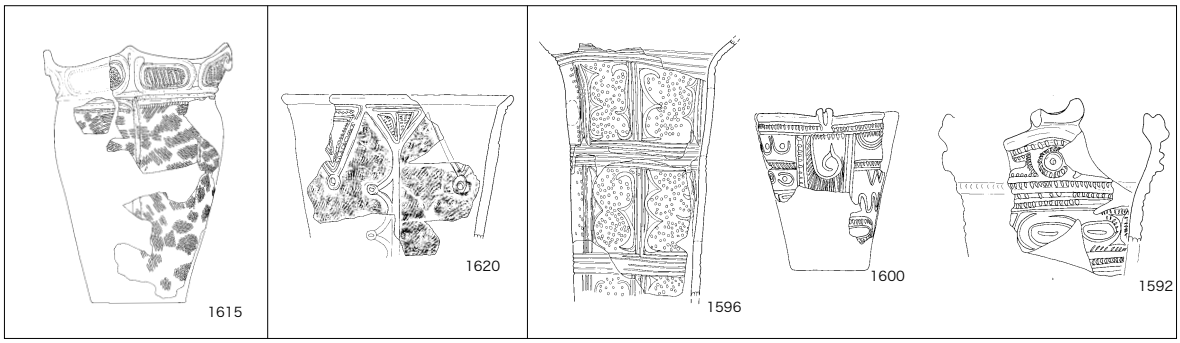
j類　地文縄文に隆帯のみのもの。

k類　地文縄文に半截竹管による平行沈線を加えるもの。

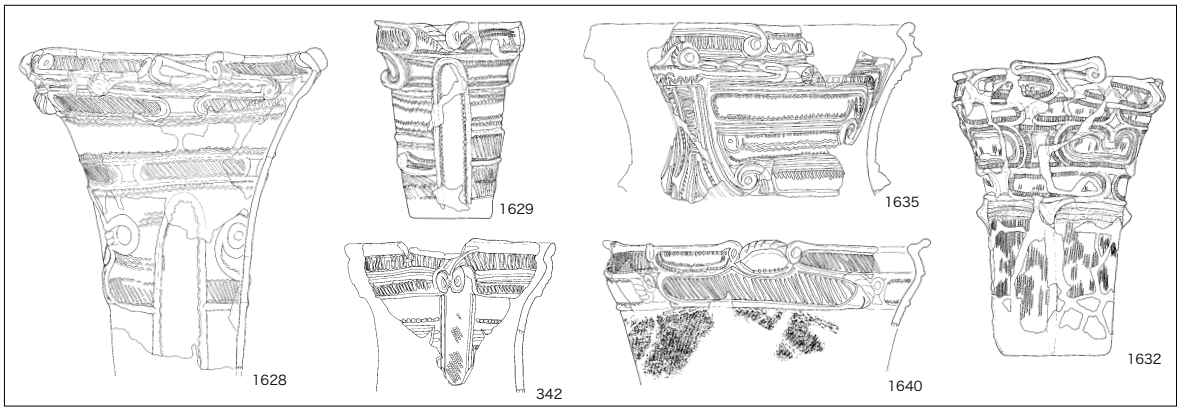
第３類　中期中葉（大木８ａ式並行期）に対比される土器群

a類　大木8a式土器（註26）である。キャリパー形を呈し、地文縄文・撚糸文に半截竹管による

1. 第Ⅱ群第2b2類

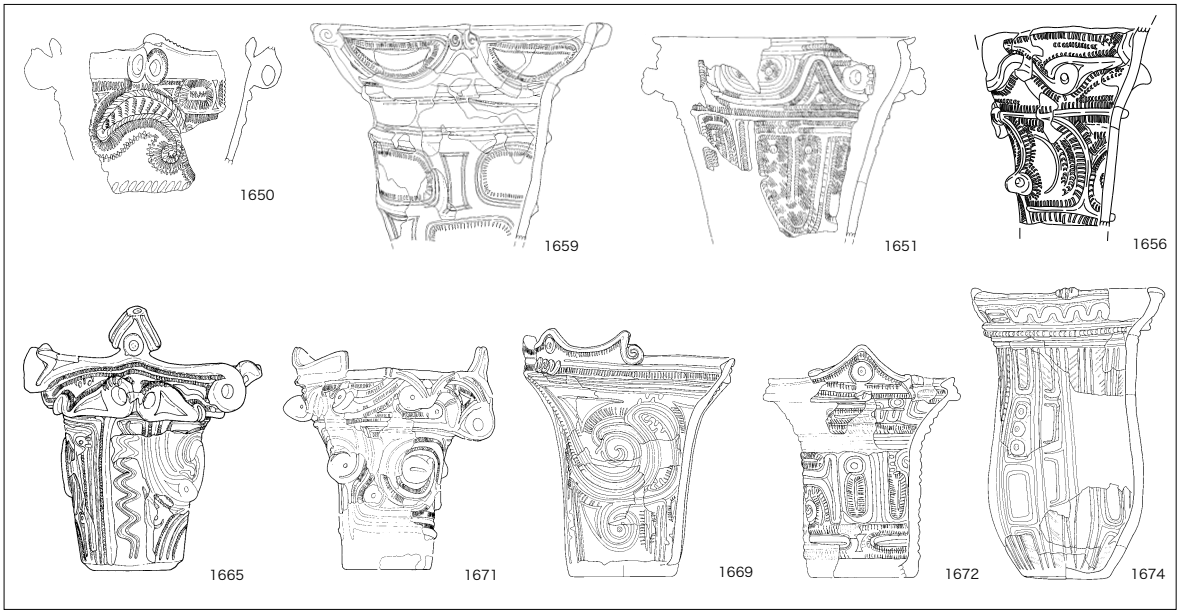


2. 第Ⅱ群第2c類　　3. 第Ⅱ群第2d類　　4. 第Ⅱ群第2e類

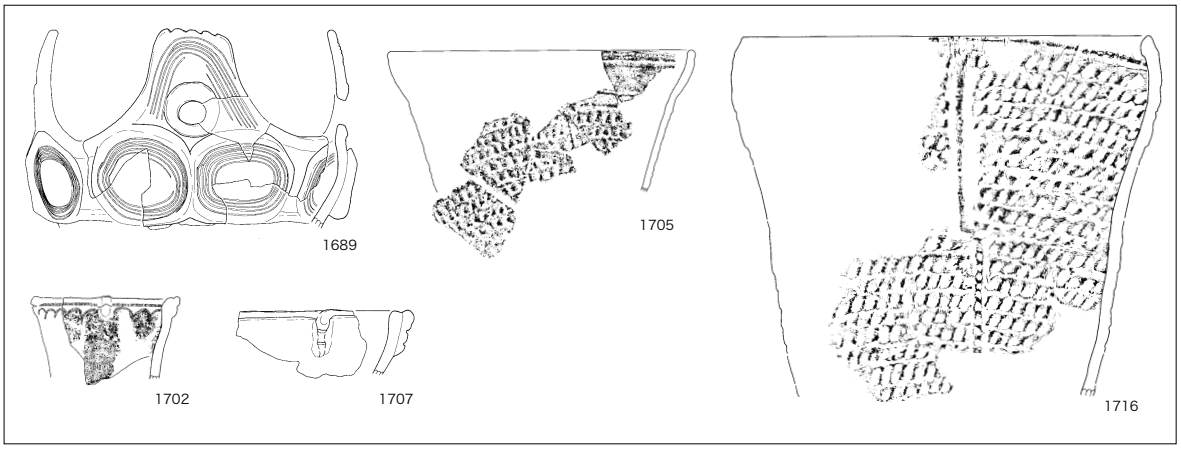


5. 第Ⅱ群第2f類

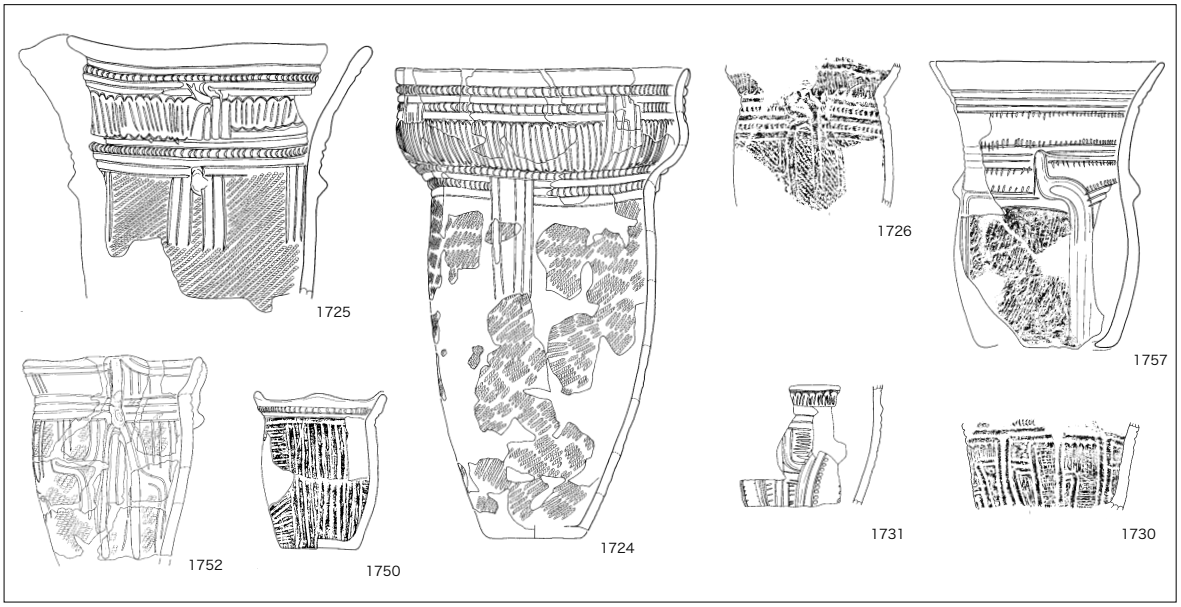
第 12 図　土器分類（2）



1. 第Ⅱ群第2g類



2. 第Ⅱ群第2h類



3. 第Ⅱ群第2i類

第 13 図　土器分類（3）

沈線文を施す（第 14 図 1・2）。a1 類がほぼ古段階、a2・a3 類が新段階と考えられる。

ａ１ 口縁部に橋状把手やＳ字状文・鶏頭冠把手・渦巻状突起などの中空突起を有するもの（第 14 図 1：1801・1802・230・1809・1795・1788・1798・1796・1787）。文様は、口縁部や胴部に、クランク文などの直線的文様や渦巻文・弧線文などが施される。横位の交互刺突文・有節沈線文・刻目状沈線文が施される。地文は縄文が主体的である。『清水上遺跡Ⅱ』の「東北系深鉢６類」に類似している。

ａ２ 口縁部・胴部に、波状文や渦巻文などの曲線的な文様が平行沈線や有節沈線で描出されるもの（第 14 図 2：1853・194・1879・1878・1899・1120・1907・1901・1903）。交互刺突文を施すものがあり、地文は縄文に加え、密接した撚糸文が多い。

ａ３ 口縁部文様帯に粘土紐で渦巻文などを施すもの。粘土紐の接合面に調整が加えられないのが特色である（第 14 図 2：177・1925）。

ｂ類 「焼町類型」（註 27）である。半隆起線文や沈線・基隆帯によって器面を装飾する。文様は渦巻文を基本とし、眼鏡状突起や環状突起・楕円区画、三叉文などが見られる（第 14 図 3、第 15 図 1・2）。『清水上遺跡Ⅱ』の「東北系深鉢６類」、『五丁歩遺跡』の「隆帯Ⅰｂ系列」、「隆帯Ⅰｃ系列」、「隆帯Ⅱａ系列」，「隆帯Ⅱｂ系列」に対比される。

ｂ１ 胴部区画を持たないもの（第 14 図 3）。口縁部に幅狭の文様帯を持つもので、その中でも４単位の橋状把手を持つものも見られる（第 14 図 3：1955・1959）。

ｂ２ 胴部区画が明確なもの（第 15 図 1）。

ｂ３ 口縁部に４単位の３段構成の把手を有し、口縁部・胴部に横Ｓ字状文を施すもの（第 15 図 2：2020・2034）。

ｂ４ 胴部下半もしくは口縁部などに地文縄文がほどこされるか無文部となるもの（第 15 図 2：2035・2042・2047・2054・2055）。

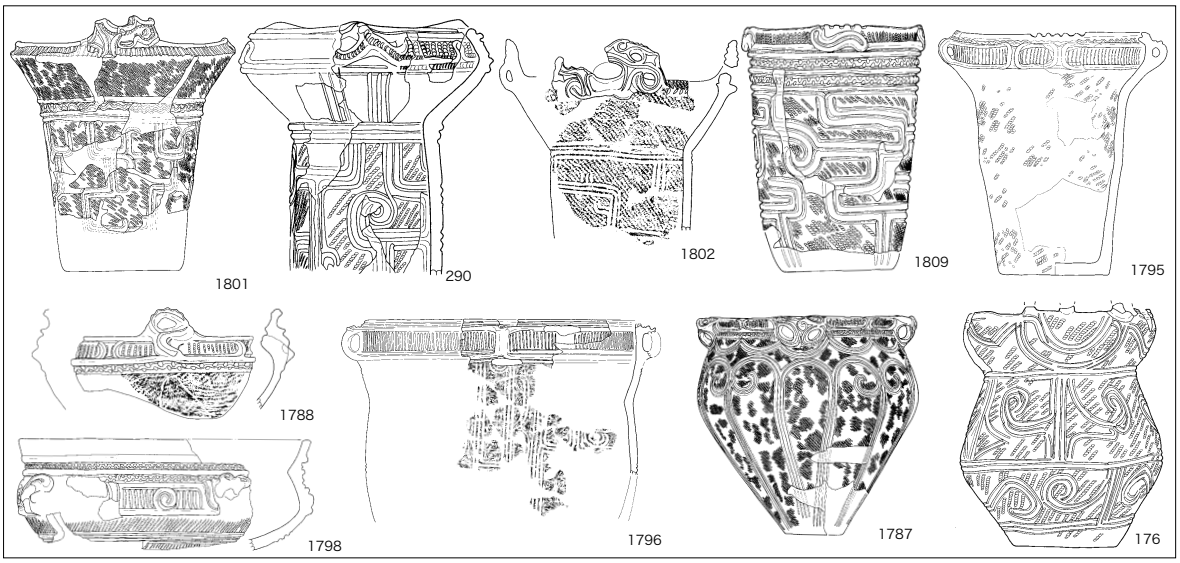
ｂ５ その他、隆帯・沈線で施文されるもの。

ｃ類 「火焔型土器」、「王冠型土器」（註 28）などである。口縁部と胴部の２帯構成で、口縁部に４単位の鶏頭冠把手などの大形把手を有し、器面は半隆起線文や基隆帯などで装飾され、ｘ字状把手や袋状突起が付されるもの（第 15 図 3、第 16 図 1・2）。『五丁歩遺跡』の「隆Ⅱａ系列」、「隆Ⅱｂ系列」に類似する。またｃ類のなかで、大木8b式期に並行するものもここに含めている。

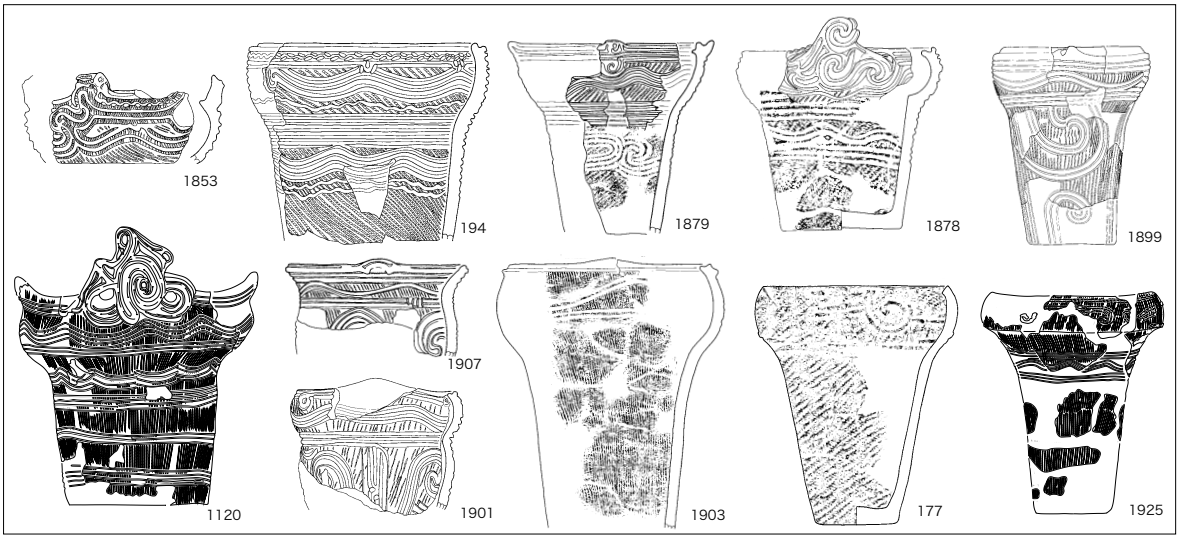
ｃ１「火焔型土器」である。口縁部に４単位の鶏頭冠把手を有し、鋸歯状突起が巡るもの（第 15 図 3：2170・2174・2172・239・2182・2178・2179・2180・2184・2185）。鉢形と深鉢形のものがある。

ｃ２「王冠型土器」である。口縁部に４単位の突起を有し、波底部に袋状突起や眼鏡状突起を有するもの（第 16 図 1：2203・2204・2205・2206・2212・2194・2207・2211・2213・2210）。鉢形と深鉢形がある。

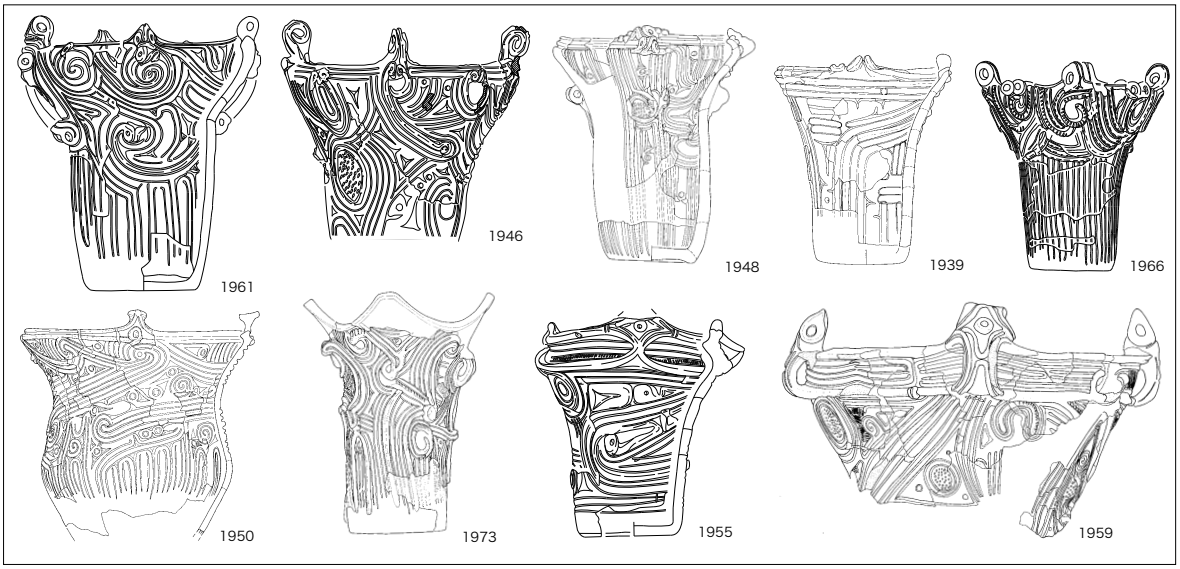
ｃ３ 口縁部に袋状突起を４単位有し、大形把手を持たないもの。口縁部文様帯は横位の半隆起線文が特徴的に見られる（第 16 図 2：2254・2249・2250・2255・2257）。



1. 第Ⅱ群第3a1類

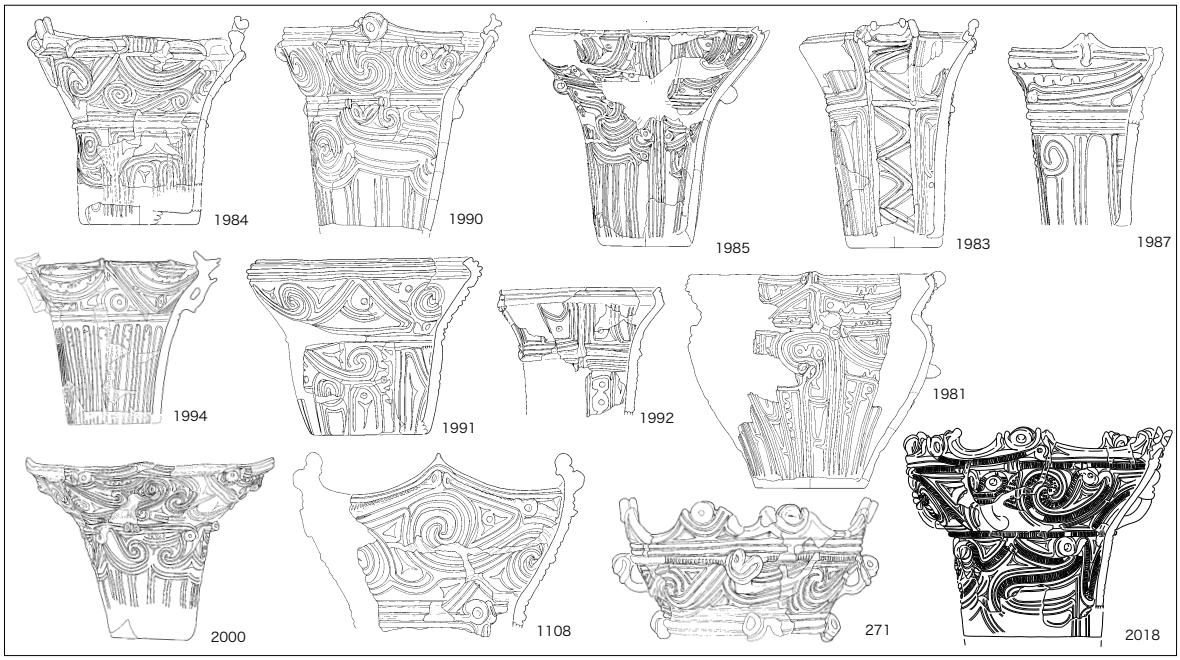


2. 第Ⅱ群第3a2類・第Ⅱ群第3a3類

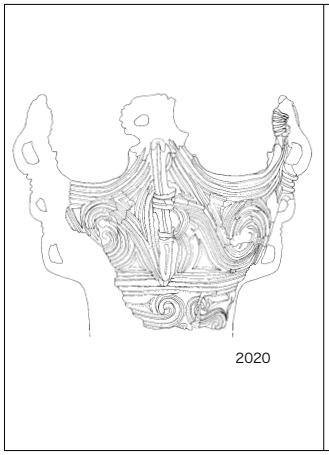


3. 第Ⅱ群第3b1類

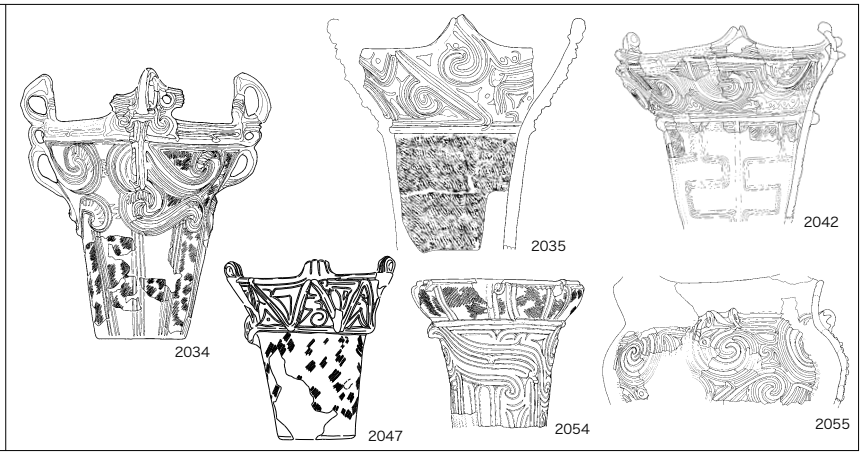
第 14 図　土器分類（4）



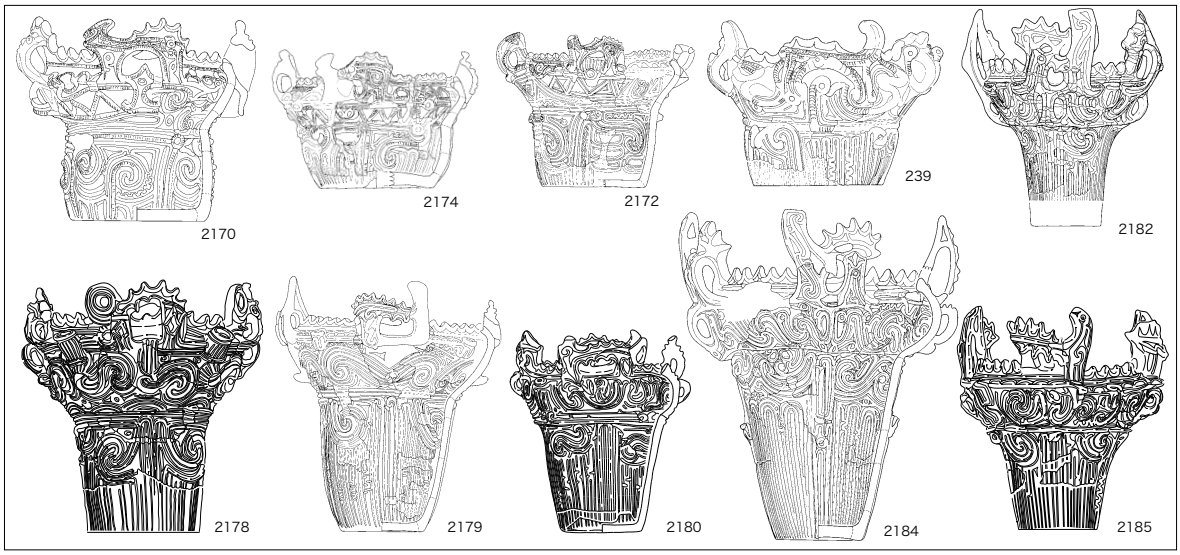
1. 第Ⅱ群第3b2類



2. 第Ⅱ群第3b3類

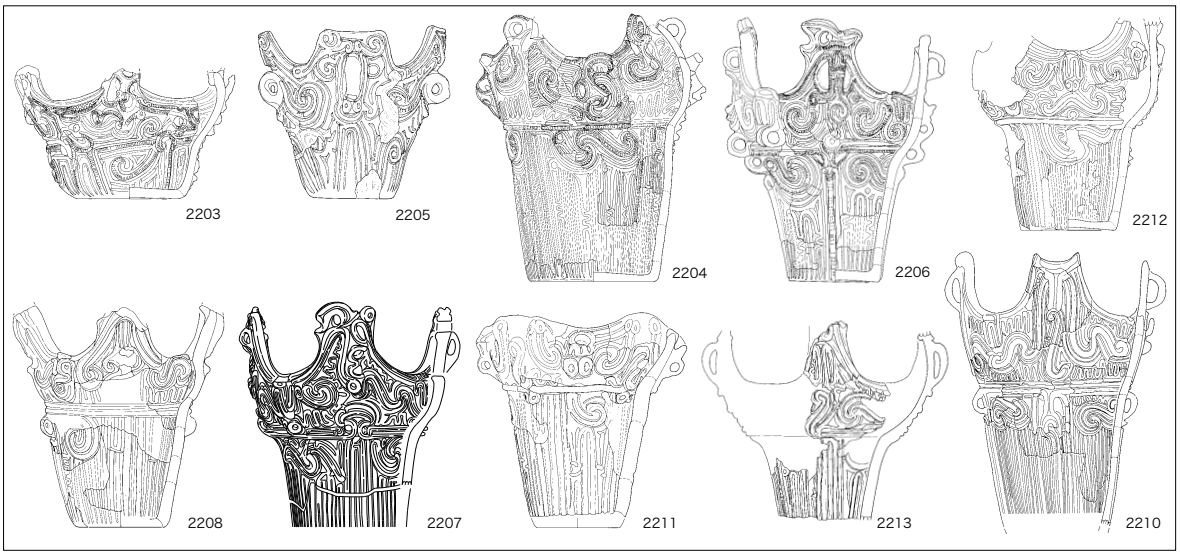


3. 第Ⅱ群第3b4類

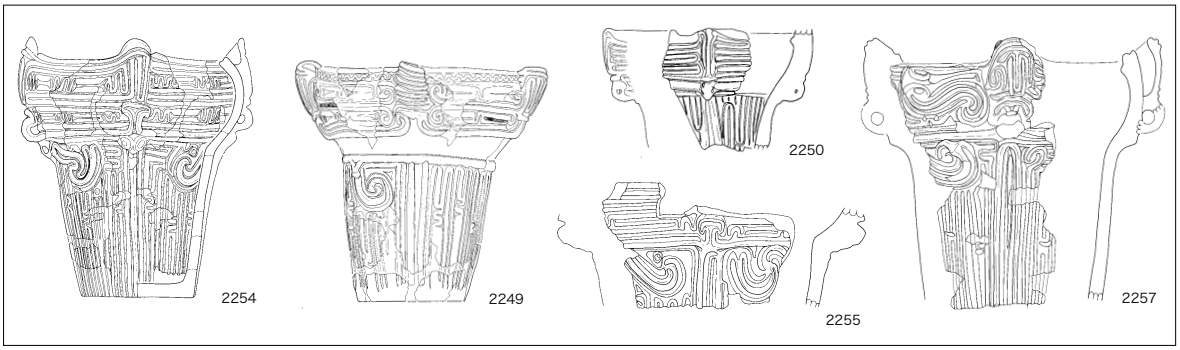


4. 第Ⅱ群第3c1類

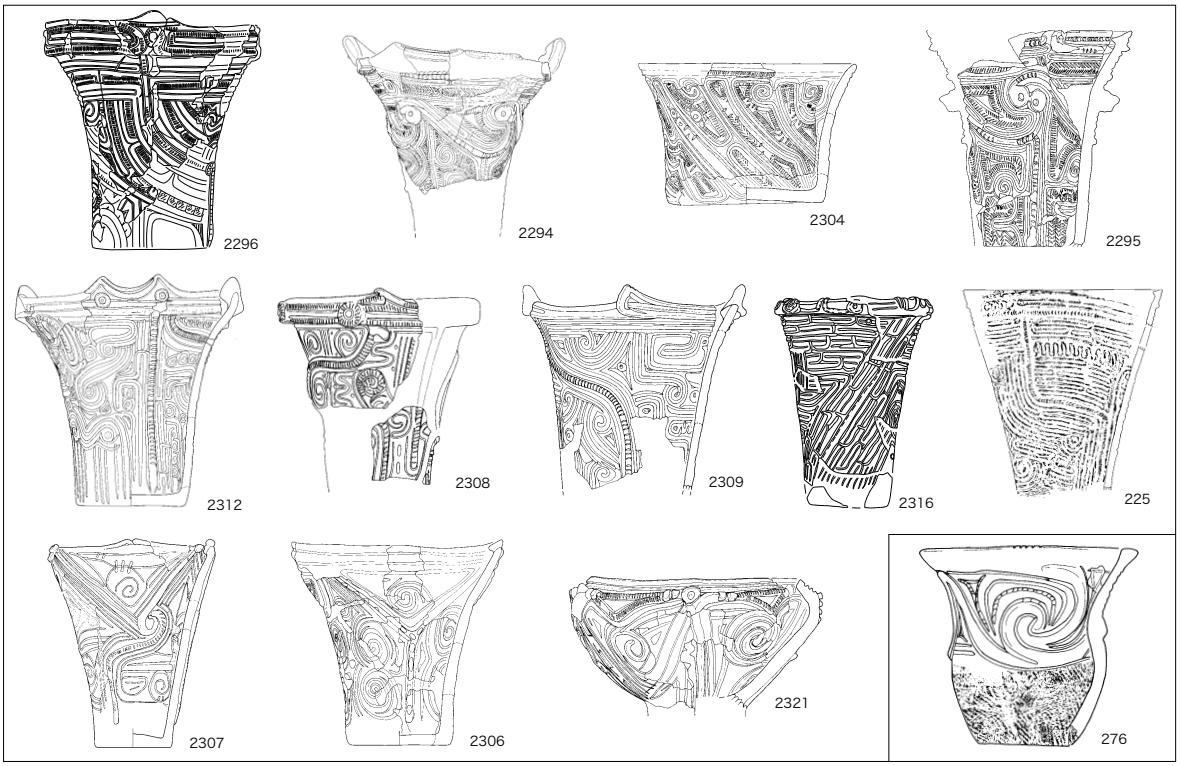
第 15 図　土器分類（5）



1. 第Ⅱ群第3c2類



2. 第Ⅱ群第3c3類



3. 第Ⅱ群第3d類　　4. 第Ⅱ群第3e類

第 16 図　土器分類（6）

d類　北陸系の天神山式土器（註29）に類似する一群。器面を隆帯や沈線で装飾し、懸垂文や胴部文様が斜めに展開しながら垂下するもの（第16図3）。

d１類：沈線区画間の空間に横線文を充填するもの（第16図3：2294・2295・2296・2304）。

d２類：刻みを持つ懸垂文が斜め方向に垂下するもの（第16図3：2312・2308・2309・2316・225・2306・2307）。

d３類：胴下半部がすぼまり底部に台を有する北陸系の台付鉢である（第16図3：2321）。

e類　勝坂3式土器に類似する。胴部が張り出し、口縁部が外反するもの。胴部下半は地文縄文で、胴部上半部から頸部にかけて渦巻文などの文様が施される（第16図4：276）。

f類　その他の隆帯を施すもの。

第４類　中期後葉（大木８ｂ式並行期）に対比される土器群

a類　東北系の大木８ｂ式土器（註30）に類似する一群。キャリパー形を呈するものなどがあり、口縁部・頸部・胴部文様帯に区分されるものが多く、頸部が無文帯になり、胴部文様に地文縄文を施す（第17図）。文様は、剣先文や渦巻文、縦位・横位の波状沈線文があり、沈線文は半截竹管の背面・腹面により施される。

ａ１類：口縁部文様帯下の頚部に区画をもたず、地文縄文のみのもので、口縁部文様帯に地文縄文を施すもの（第17図1：2333・2334・2339・2340・2341）。

ａ２類：口縁部・頸部・胴部の３帯構成を有するもの。口縁部文様帯は地文縄文で、頸部が無文帯になるもの（第17図1：2345・1132・2352・2377・2368）。胴部の沈線文は、単沈線が主体的である。

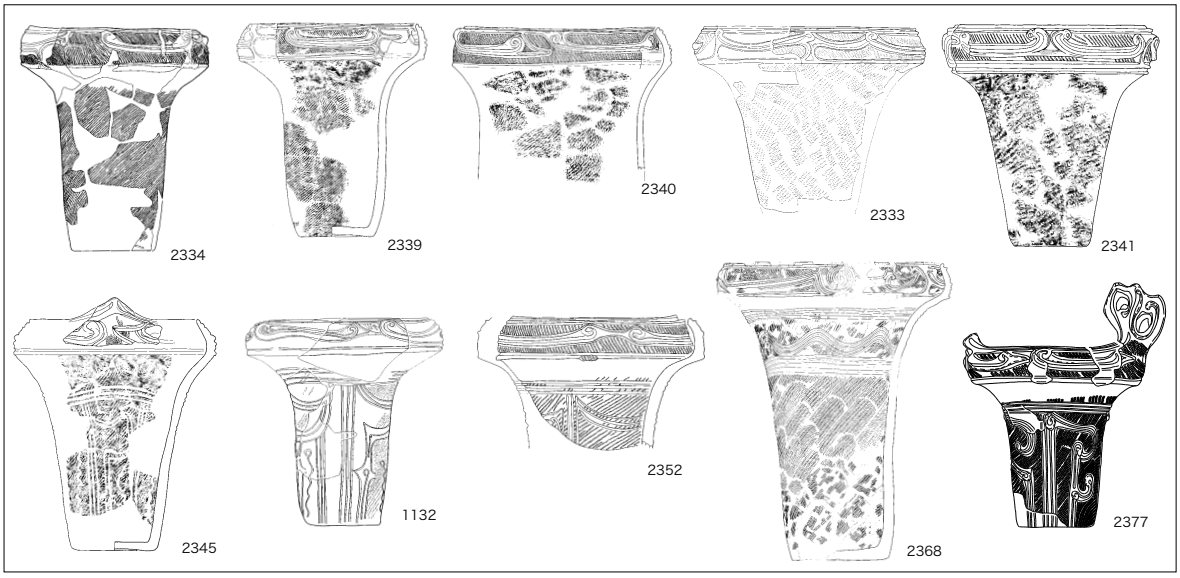
ａ３類：口縁部文様帯下の頚部に区画をもたず、胴部は地文縄文のみで、口縁部文様帯に沈線文を充填するもの（第17図2：2381・2380・2384）。

ａ４類：口縁部・頸部・胴部の３帯構成を有するもので、口縁部文様帯に矢羽根状沈線文が充填され、頸部が無文帯になるもの（第17図：2390・508・2389・503・2387・2388・2385・2386・2397・2396・2399）。胴部の沈線文は単沈線が主体的である。

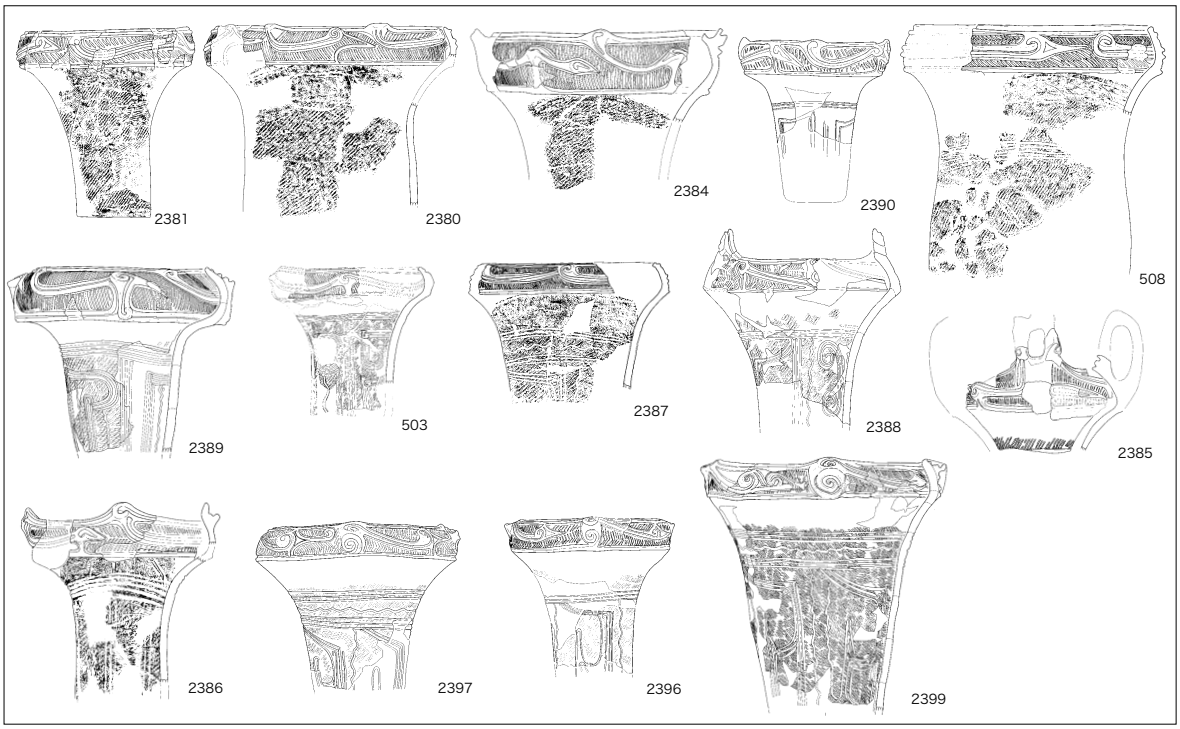
ａ５類：口縁部・頸部・胴部の３帯構成を有するもので、胴部文様が連結して入組むもの。沈線の一部がやや隆起する箇所がある。口縁部文様帯の渦巻文が稜高になり、突起状を呈するものがある。胴部の沈線文は半截竹管の腹面による平行沈線文が主体的である（第17図3：2406・2410・2413・2415・2417）。

ａ６類：口縁部が外反するもので、口縁部が肥厚し口唇部に横位渦巻文が横方向に連続するもの（第18図1：2442・2441・357・2440）と、口縁部文様帯を持たないもの（第18図1：2449・2450・2454・2455）がある。

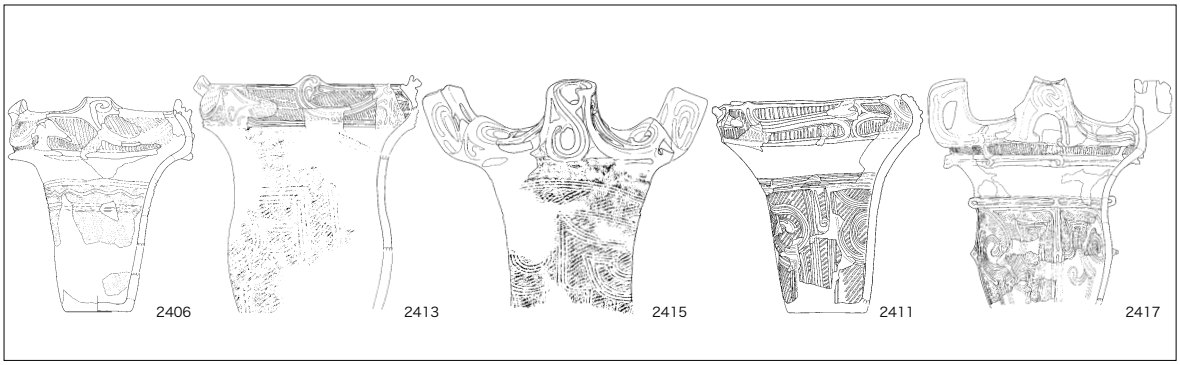
ｂ類　器形はキャリパー形のものが多く、口縁部・頸部・胴部の３帯構成を基本とし、胴部に矢羽根状沈線が充填されるもの。口縁部に大形突起を有し、文様は隆帯による立体的な装飾が主体で、腕骨文・ｘ字状把手・剣先文などがある（第18図2）。大木８ｂ式並行期でも新段階に位置づけられる。



1. 第Ⅱ群第4a1・2類

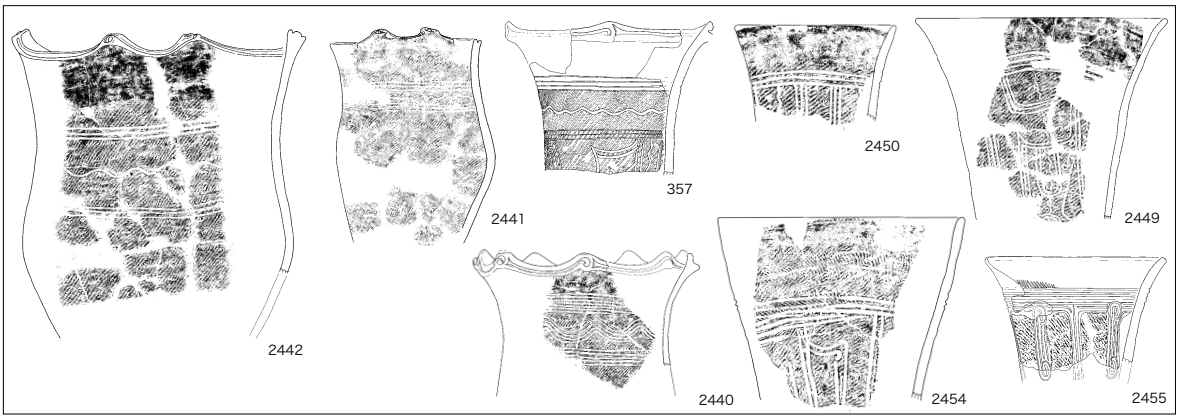


2. 第Ⅱ群第4a3・4類

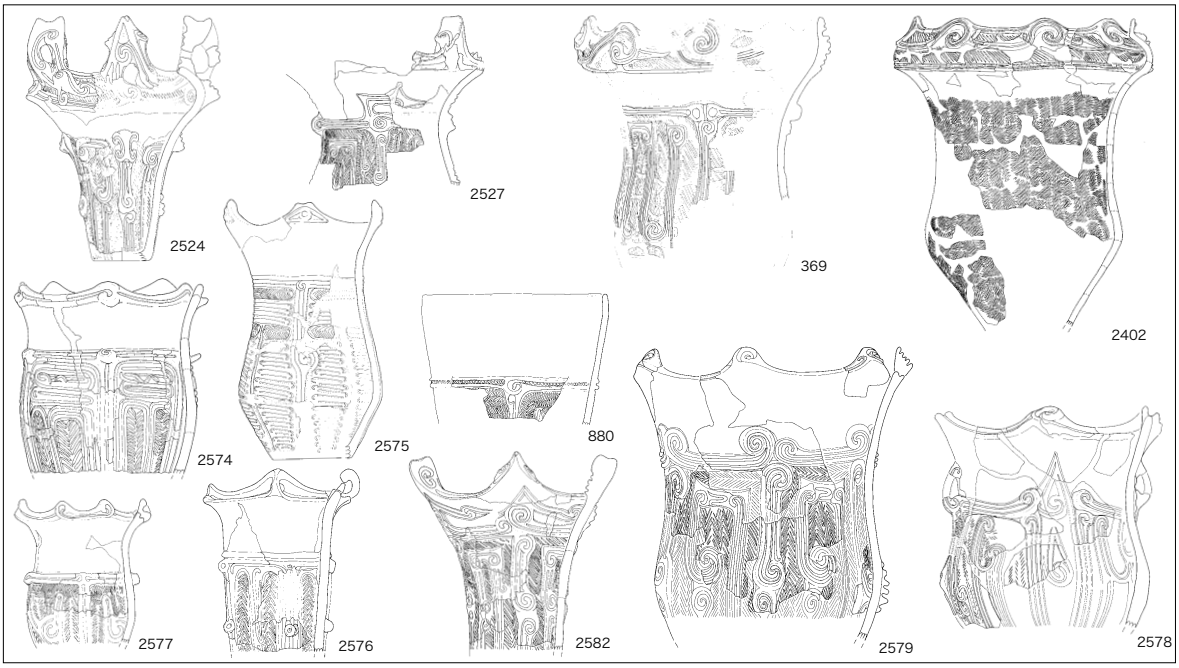


3. 第Ⅱ群第4a4類

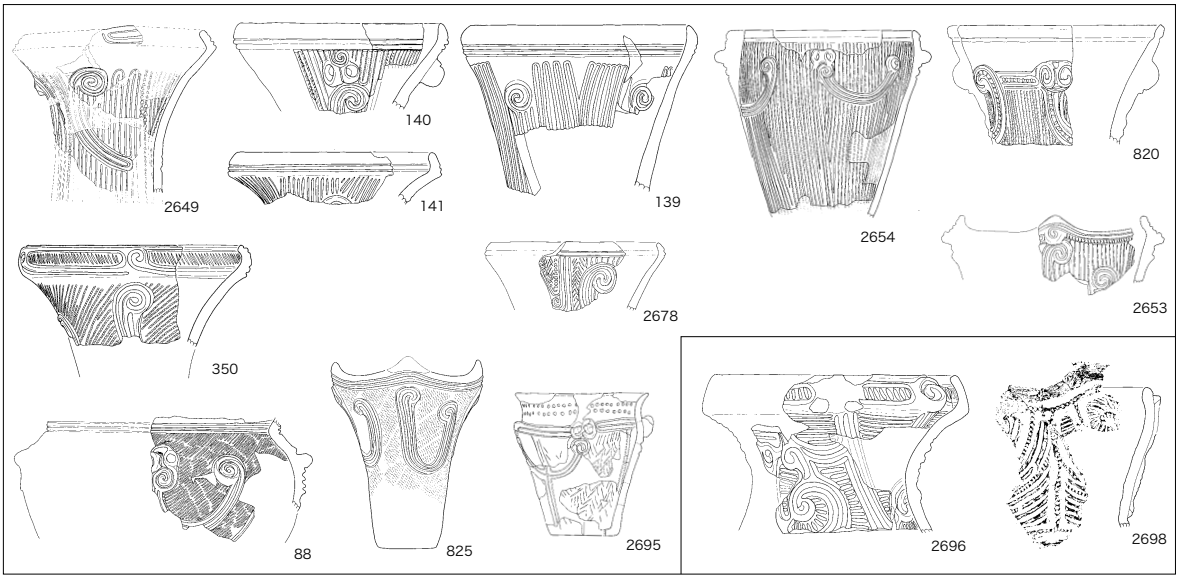
第 17 図　土器分類（7）



1. 第Ⅱ群第4a5･6類



2. 第Ⅱ群第4b類



3. 第Ⅱ群第4c･4d類

第 18 図　土器分類（8）

b 1類：キャリパー形を呈し、口縁部・頸部・胴部の3帯構成を有するもので、頸部が無文帯になるもの（第18図2：2524・2527・369）。

b 2類：口縁部が外反し、頸部が無文帯になり口縁部が肥厚して、口唇部に渦巻文が横方向に連結するもの（第18図2：2574・880・2576・2577・2582・2578・2579）や、波状口縁の波頂部に玉抱き三叉文を施すもの（第18図2：2575）。

c類　栃倉式土器（註31）である。キャリパー形を呈するものが多く、口縁部に狭い文様帯を有する。口縁部は無文帯になるものと、狭い楕円区画を有するものがある。文様は、眼鏡状突起や両端に渦巻文を有するC字状文が特徴的に見られる（第18図3）。地文は縦位の半隆起線文（第18図32649・140・141・139・2654・820・2655）、縄文（第18図3：350・88・825）や条線文、矢羽根状沈線文（第18図32678・2695）などがある。

d類　胴部の文様間に横位の沈線が充填されるもの（第18図3：2696・2698）。

e類　口縁部に渦巻文を有するもの。

第5類　中期末葉（沖ノ原式期）に対比される土器群

a類　沖ノ原式土器（註32）である。胴部に括れを持たず、ほぼ直線的に開くもので、渦巻文・沈線文が施される土器群（第19図1～5、第20図1～3）。文様が口縁部に集約され、胴部下半は地文縄文に懸垂文が付されるのみである。

a 1類：口縁部に刻目を持つ隆帯が2・3本巡り、隆帯間に4単位もしくは8単位の渦巻文を有するもの（第19図1）。渦巻文から隆線が垂下するものもある（第19図1417・2748）。

a 2類：口縁部に、隆帯による渦巻文と、沈線により楕円文や乙状文を施すもの（第19図2：400・810・1150・432・1066）。渦巻文からは懸垂文が垂下する。

a 3類：沈線文が横方向に展開するもので、沈線に刺突が加えられるものが多い。胴部の区画は明確でパネル状に区画される（第19図2：2811）。

a 4類：平口縁で、口縁部に横方向の隆帯と沈線文が施されるもの。沈線は隆帯上に断続的に施され、沈線の間が瘤状になるもの（第19図2：2823・1204・323）。

a 5類：波状口縁で、隆帯に沈線を加えるもの。沈線内には刺突を加えるものが多い（第19図3：966・2847・83・1104・401）。

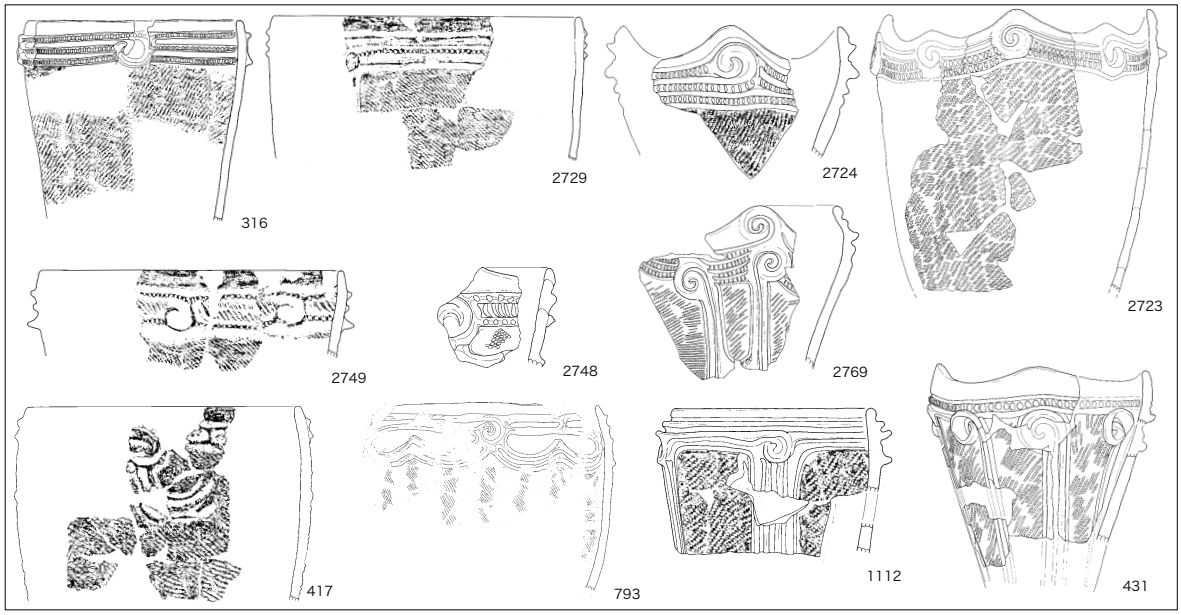
a 6類：口縁部に弧状の隆帯・沈線を施すもの（第19図4：102・1050）。

a 7類：口縁部に隆帯による渦巻文を有し、その周囲に弧線文が何重にも巡るもの（第19図4：104・105）。

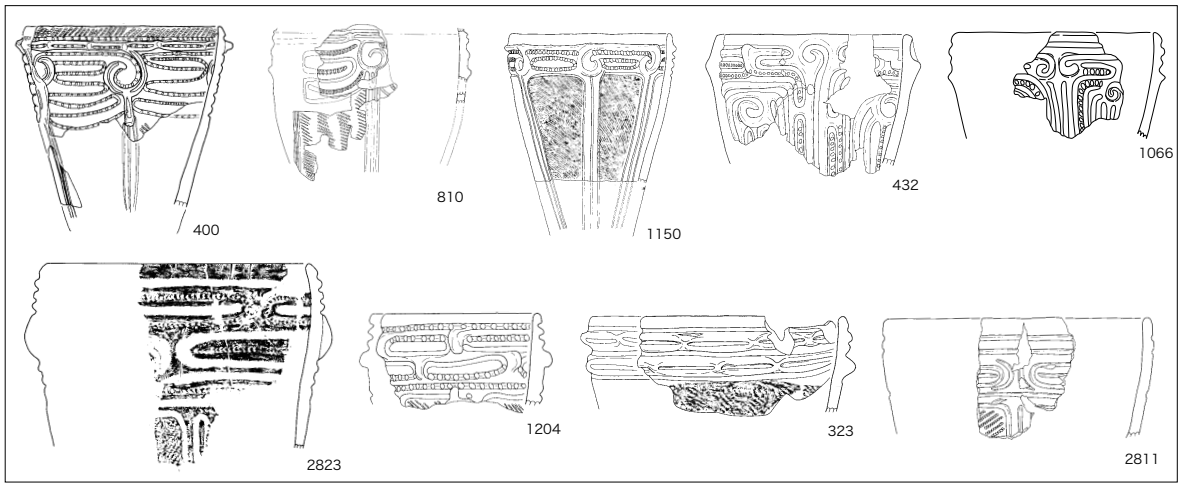
a 8類：口縁部に隆帯を有し、2単位の渦巻文と棒状貼付文が付される。口縁部の文様は胴部下半まで広く、その中は細沈線によって区画され、その間に横ハ字文が充填されるもの（第20図1）。文様帯内を区画する沈線文を持たないものも見られる。

a 9類：口縁部に隆帯区画が巡り、その下に隆帯が波状に巡り、波頂部から渦巻文が垂下する。隆帯間には横ハ字文が充填される（第20図2）。

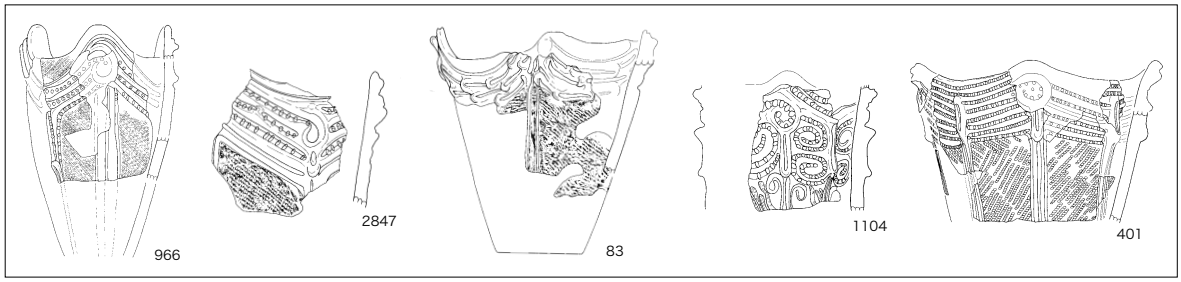
a10類：その他のもの。



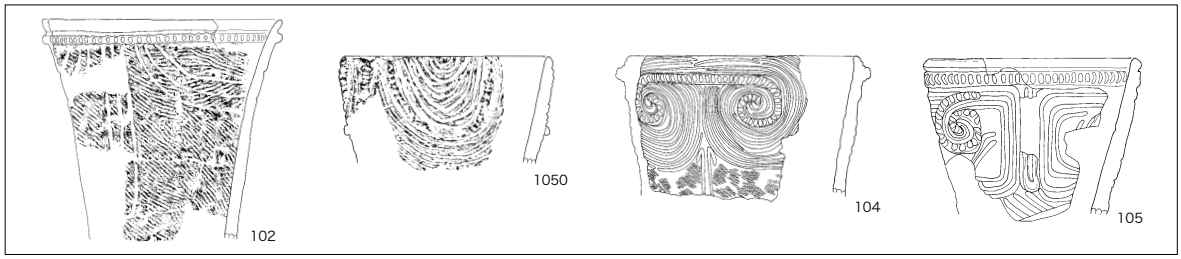
1.　第Ⅱ群第5a1類



2.　第Ⅱ群第5a2類･第Ⅱ群第5a3類･第Ⅱ群第5a4類

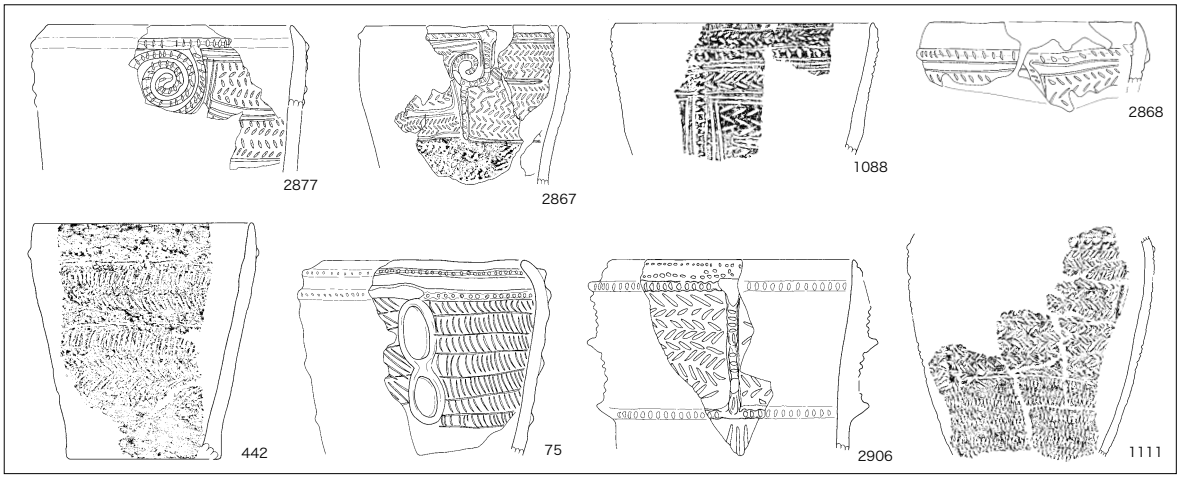


3.　第Ⅱ群第5a5類

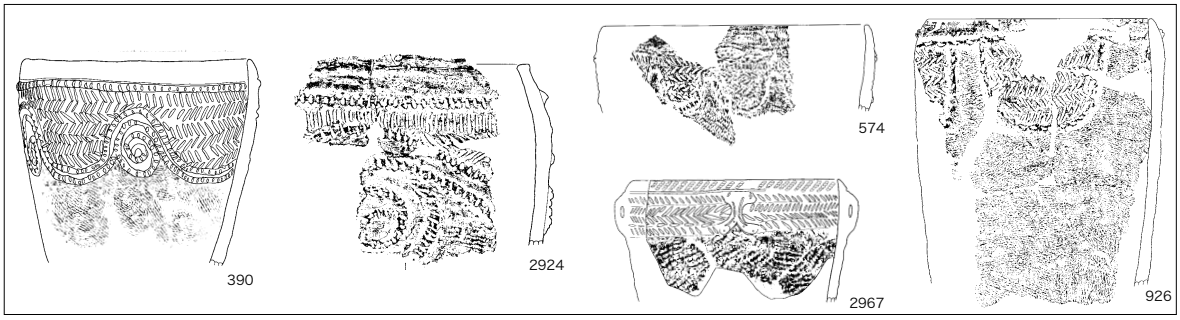


4.　第Ⅱ群第5a6類　　5.　第Ⅱ群第5a7類

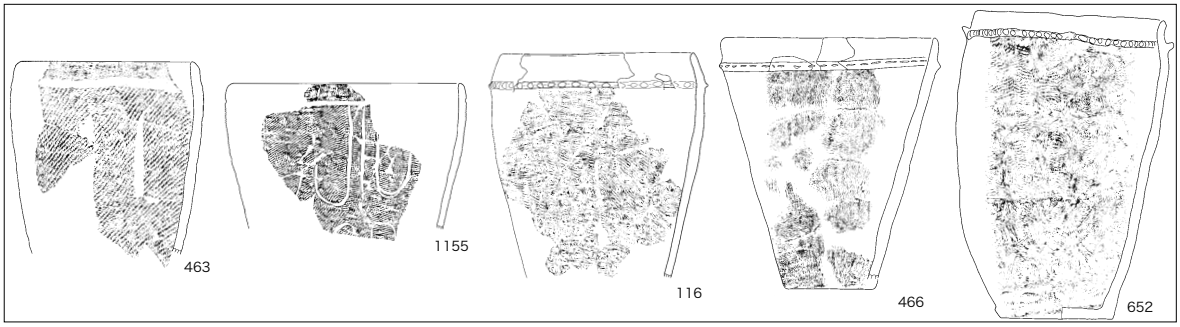
第 19 図　土器分類（9）



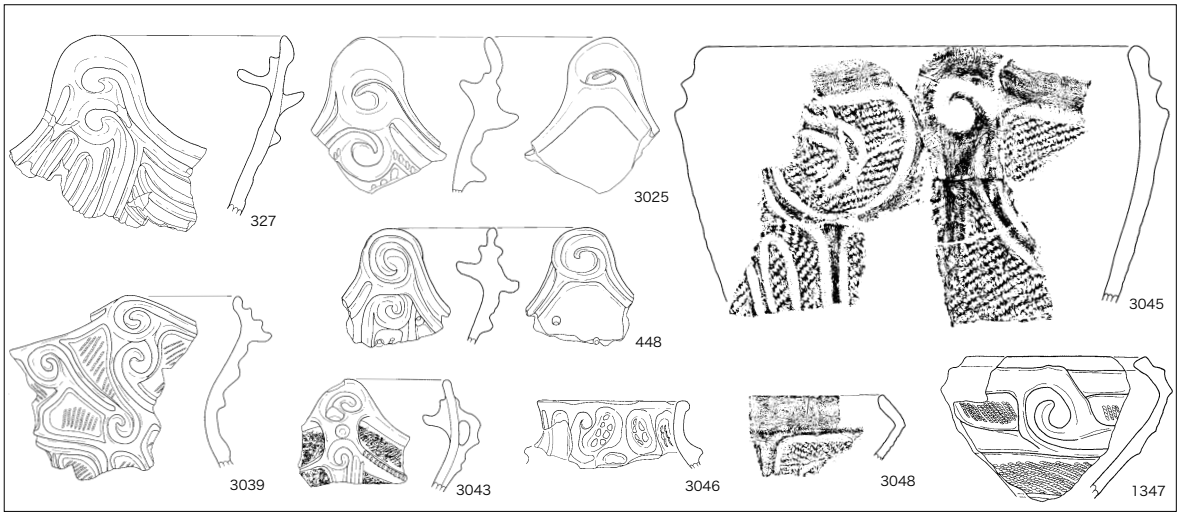
1. 第Ⅱ群第5a8類



2. 第Ⅱ群第5a9類



3. 第Ⅱ群第5b類



4. 第Ⅱ群第5c類

第 20 図　土器分類（10）

b類　胴部は地文のみで、口縁部が沈線によって区画されるもの（第20図3：463・1155)、隆帯が巡るもの（第20図3：116・466・652）がある。隆帯には刻目や押圧などが施される。

c類　大木9式，大木10式土器（註33）に類似する土器群（第20図4)。

c 1類：波状口縁で、隆帯により渦巻文を描出するもの（第20図4：327・3025・448・3045・3039・3043)。大木9式古段階に位置づけられる。

c 2類:口縁部に無文帯が巡るもの（第20図4:3048･1347)。大木10式中段階に位置づけられる。

d類　加曽利ＥⅢ式、Ⅳ式土器（註34）に対比される土器群（第21図1)。

d 1類：口縁部と胴部の2帯構成で、胴部には縦位の無文帯･縄文帯が垂下するもの（第21図1:3051・3052・3057)。

d 2類：口縁部と胴部文様帯の区画は不明瞭で、磨消縄文によって文様を施すもの（第21図1:3077･3082･187･3118･3125･3131)。口縁部に無文帯が巡り、把手が付されるものもある。

e類　胴部に縦位の区画を有し、胴部に雨垂状の刺突文を加えるもの（第21図1：3136)。

f類　曽利式土器（註35）に類似するもの（第21図1：3158・3154)。

g類　両耳壺と考えられるもの（第21図2：3144)。赤色顔料が塗布されている。

h類　微隆起線文によって文様を施すもので、瓢箪形もしくは鉢形を呈する土器である（第21図2:85・1086・799・806・398)。赤色顔料を塗布するものが多い。

第6類　有孔鍔付土器

有孔鍔付土器(註36)は平口縁で胴部がふくらむ樽形を呈し、口縁部に鍔や孔列が巡る(第21図3)。内外面に赤彩されるものが多い。大木7ｂ式～大木8ａ式並行期のものと考えられる。

第7類　粗製土器

地文のみで文様をほとんど持たない深鉢形土器で、いわゆる粗製土器である（第22図)。

a類　口唇部に環状突起を有するもの。器形は胴部がやや張り出し、口縁部が外反するものと、直線的にやや外反するものが見られる。口唇部の内側が折り返し口縁により肥厚している(第22図：3192・3193・3197・3203・3211・3204・3207)。

b類　口縁部が外反するもので、口唇部が折り返しによって肥厚するもの。

c類　胴部に木目状撚糸文を施すもの（第22図：3237・3244)。

d類　4単位の波状口縁で、口縁部がやや外反するもの。波頂部下の胴部に瘤状貼付文を持つものも見られる（第22図：3247・3251・3252)。

e類　胴部がやや外反しながら立ち上がり、口縁部が内湾するもの（第22図:3271･3275･3280)。

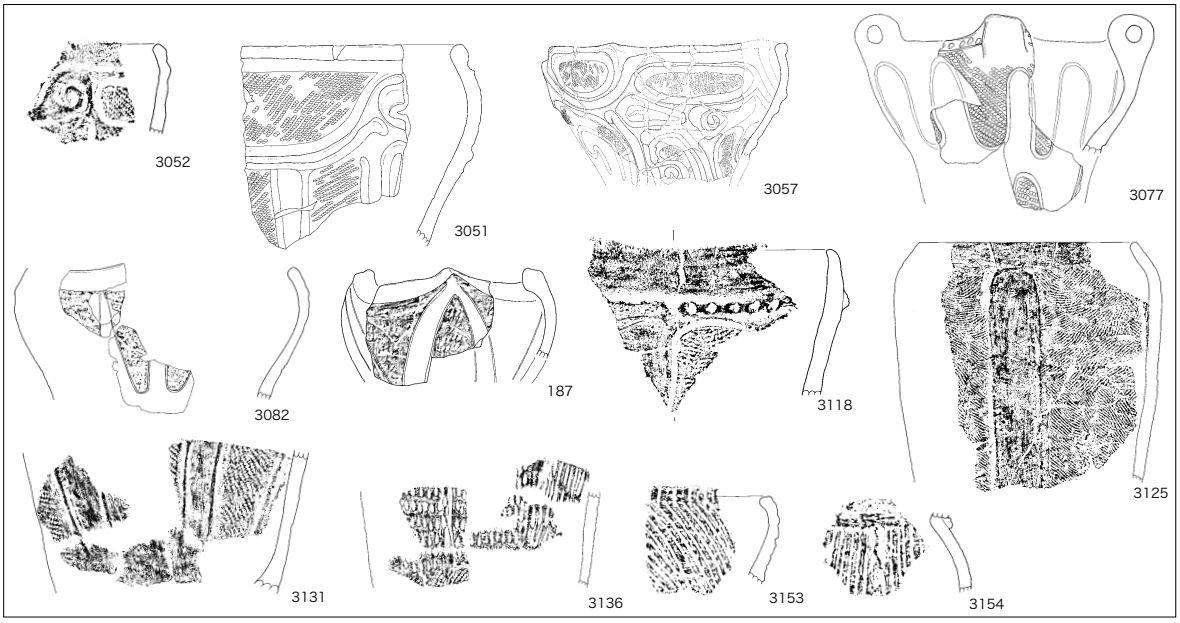
f類　口縁部がやや外反もしくは直線的に立ち上がるもの（第22図:3281･3295)。

g類　胴部が張り出し、頸部が括れて口縁部が外反するもの（第22図:3296･3300･3301･3302)。

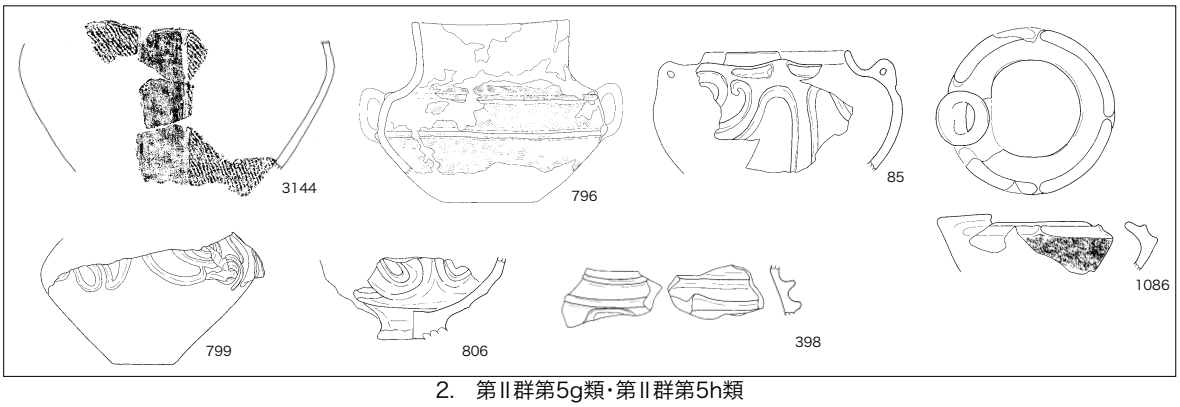
h類　キャリパー形を呈するもの（第22図：3306・3311・3312)。

i類　4単位の波状口縁で、口唇部がやや肥厚して無文部となるもの（第22図：3317・3321)。

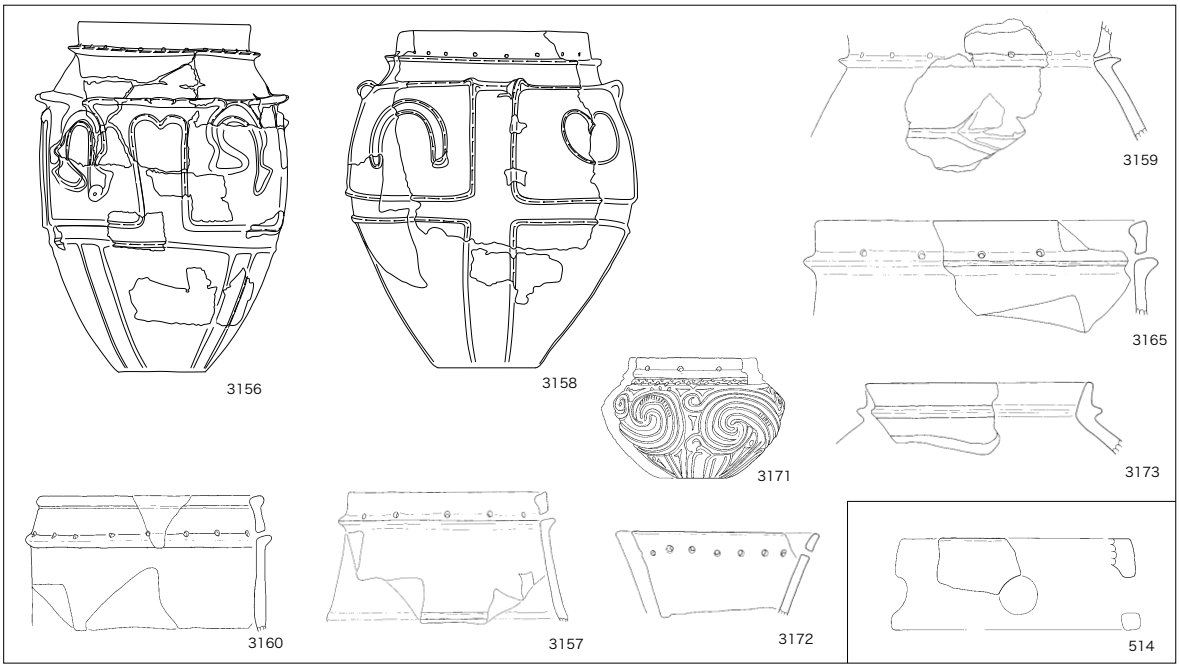
j類　その他をまとめた。



1.　第Ⅱ群第5d類･第Ⅱ群第5e類･第Ⅱ群第5f類

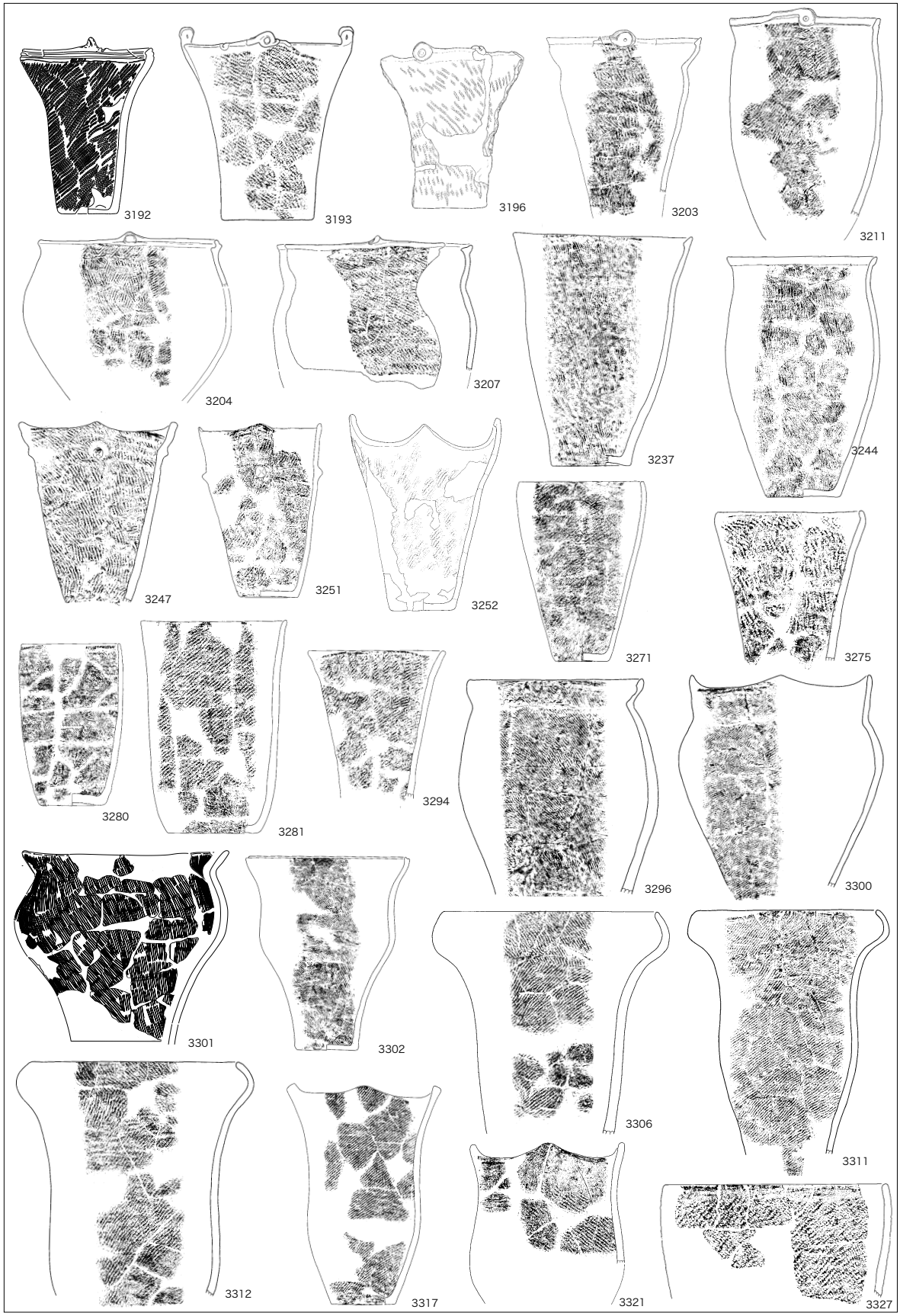


2.　第Ⅱ群第5g類･第Ⅱ群第5h類



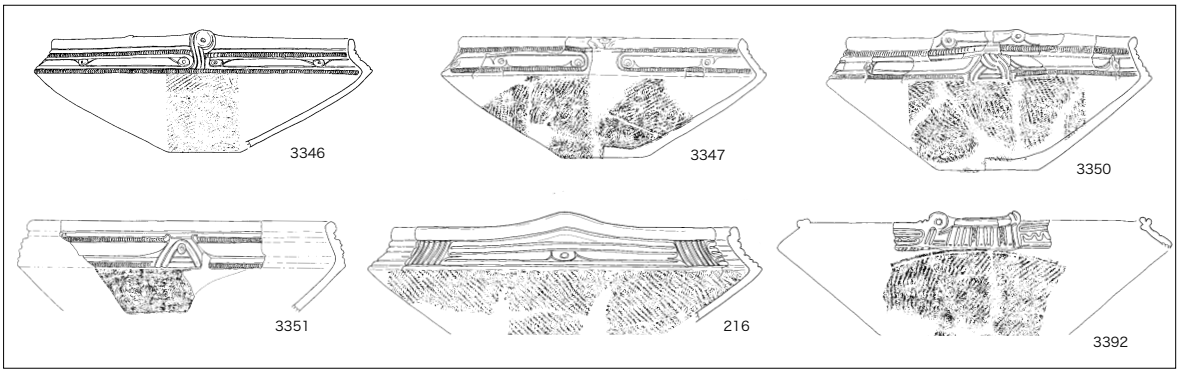
3.　第Ⅱ群第6類　　4.　第Ⅱ群第8類

第 21 図　土器分類（11）

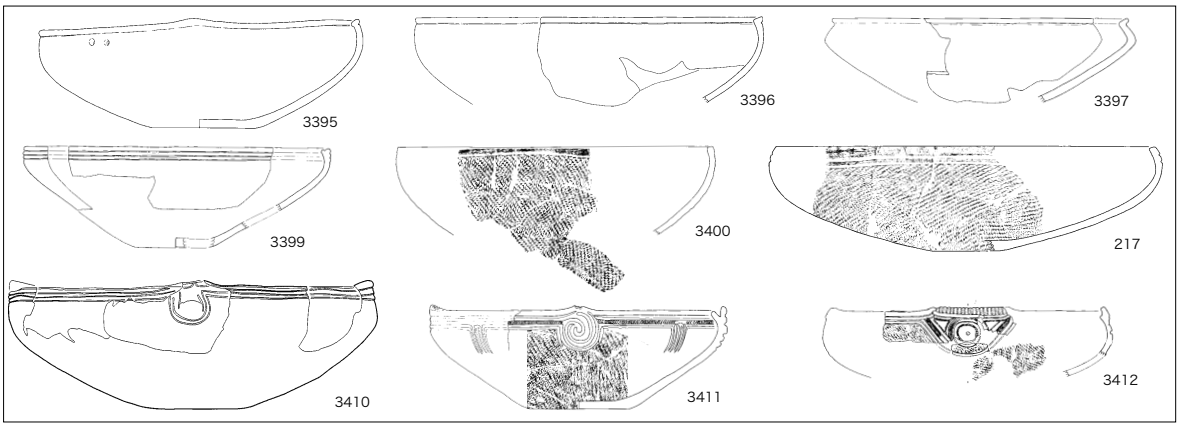


第Ⅱ群第7類

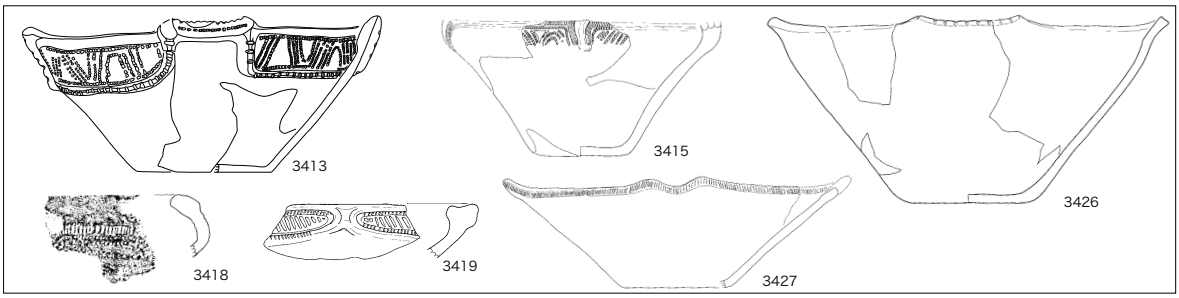
第 22 図　土器分類（12）



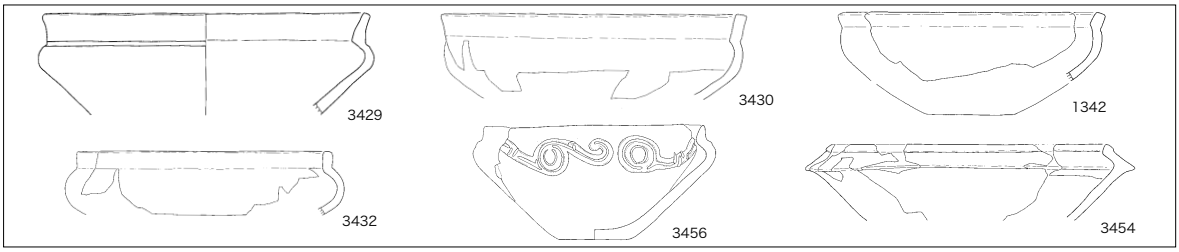
1. 第Ⅱ群第9a類



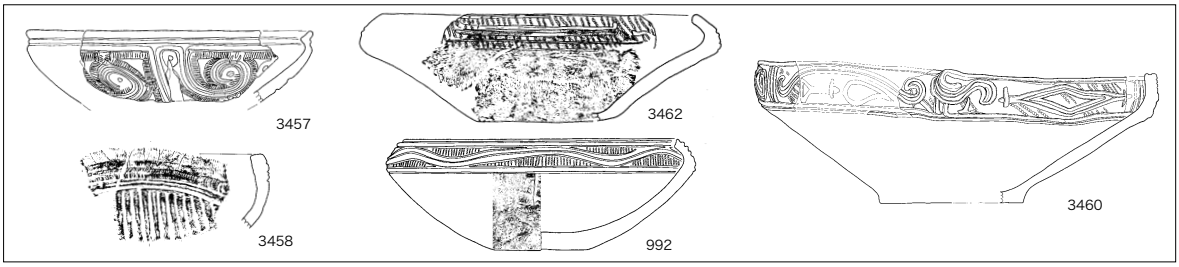
2. 第Ⅱ群第9b類



3. 第Ⅱ群第9c類



4. 第Ⅱ群第9d類



5. 第Ⅱ群第9e, 9f, 9g類

第 23 図　土器分類（13）

第８類　台形土器（第 21 図４：514）

台形土器（註 37）が２点出土しているが、無文で受け面は磨きが顕著である。

第９類　浅鉢形土器（第 23 図）

ａ類　口縁部が「く」字状に内反するもの。口縁部に文様帯を有し、胴部が地文縄文のもの（第 23 図１：3346・3347・3350・3351・216・3392)。口縁部には、爪形文や三叉文などが施される。器面全体に赤色顔料を塗布するものが多い。『清水上遺跡Ⅱ』の「北陸系浅鉢」、佐藤分類（註 38）の北陸系１類に対比される。

ｂ類　口縁部が直立気味に立ちあがるもので、口唇部に玉抱き三叉文が付され、沈線が一周するもの。胴部は無文か縄文が施される（第 23 図 2)。佐藤分類の北陸系２類に対比される。

ｂ１類：胴部に文様を持たないもの（第 23 図２：3395・3396・3397・3399・3400・217)。

ｂ２類：口縁部に渦巻文などの文様が付されるもの（第 23 図２：3410・3411・3412)。

ｃ類　口縁部が外反しながら立ち上がるもので、胎土中に雲母を含む。「冂」状突起などが付され、文様は有節沈線がある（第 23 図３：3413)。『清水上遺跡Ⅱ』の「関東系浅鉢」に類似し、佐藤分類の関東・中部系に対比される。

ｄ類　胴部が張り出し、口縁部が直立かやや外反気味に立ち上がるもの（第 23 図４：3429・3430・1342・3432・3456・3454)。胴部は無文になるものが多く、赤色顔料が塗布される。関東系の浅鉢形土器に類似している。

ｅ類　沈線区画内の空間に細い沈線文を充填するもの（第 23 図５：3457)。

ｆ類　胴部に縦位の沈線を施すもの（第 23 図５：3458)。

ｇ類　口縁部が直立か内湾するもので、口縁部に文様帯を有し、文様は隆帯や沈線で波状文やＳ字文などを施すもの（第 23 図５：3462・992・3460)。

＜第Ⅲ群　後期の土器群＞

第１類　後期初頭（三十稲場式期）に対比される土器群（第 24 図）

ａ類　三十稲場式土器（註 39）である。胴部が張り出し、口縁部にくびれをもち、外反するもので、口縁部が無文になり、４単位の橋状把手や貼付文が付される（第 24 図１～5)。

ａ１類：口縁部に縦位の貼付文を付すもの。

ａ２類：胴部全体に瘤状の貼付文を付すもの（第 24 図２：3464・952)。

ａ３類：頸部に刻目隆帯を有し、胴部に刺突文を施すもの（第 24 図３：985・384・3474・801)。

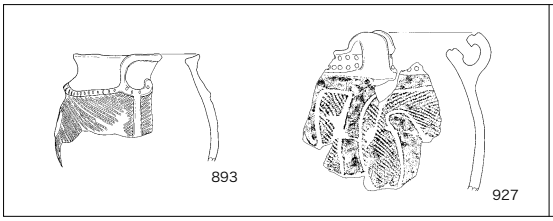
ａ４類：頸部の隆帯区画が不明瞭で、胴部に刺突文を施すもの。刺突文は、比較的細かなものが多い（第 24 図３：781・3529・1317・552・3530・3532・3533)。

ａ５類：頸部を隆帯で区画し、胴部に地文縄文を施すもの（第 24 図４：3556・3568・3560・1087)。

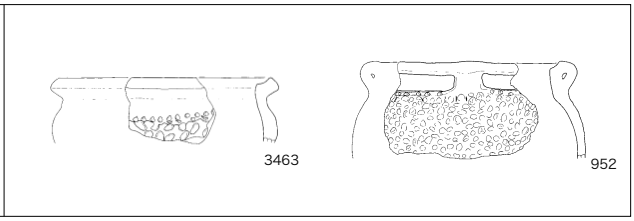
ａ６類：頸部の橋状把手下の胴部に沈線文を施すもの（第 24 図５：3546・3547・3549)。

ｂ類　称名寺Ⅰ・Ⅱ式土器（註 40）に類似する一群。文様が磨消縄文でＪ字文などを施す（第 24 図 7)。

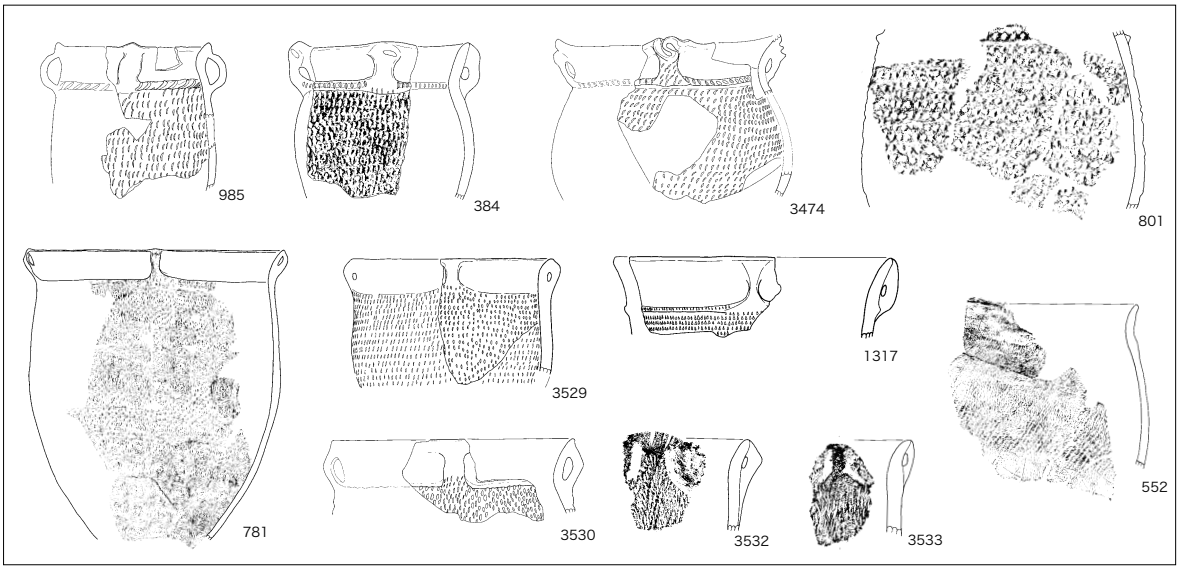
ｃ類　頸部のくびれに蛇行沈線文がめぐり、口唇部に押圧を施すもの（第 24 図6)。



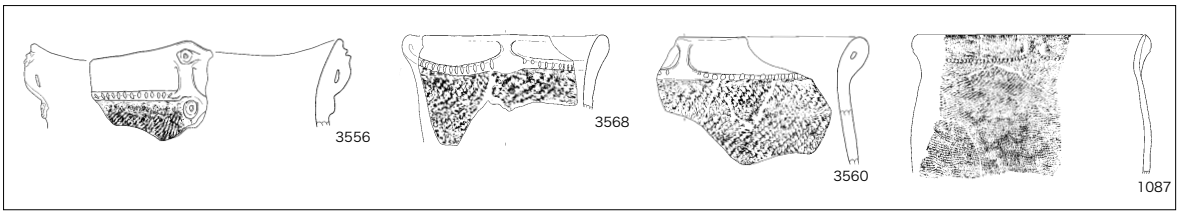
1. 第Ⅲ群第1a1類



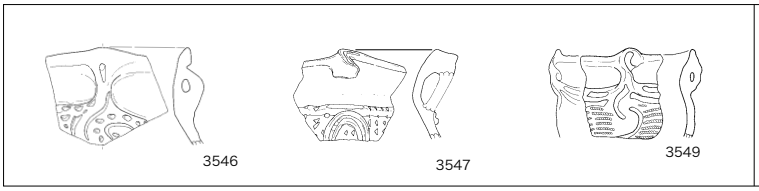
2. 第Ⅲ群第1a2類



3. 第Ⅲ群第1a3類・第Ⅲ群第1a4類

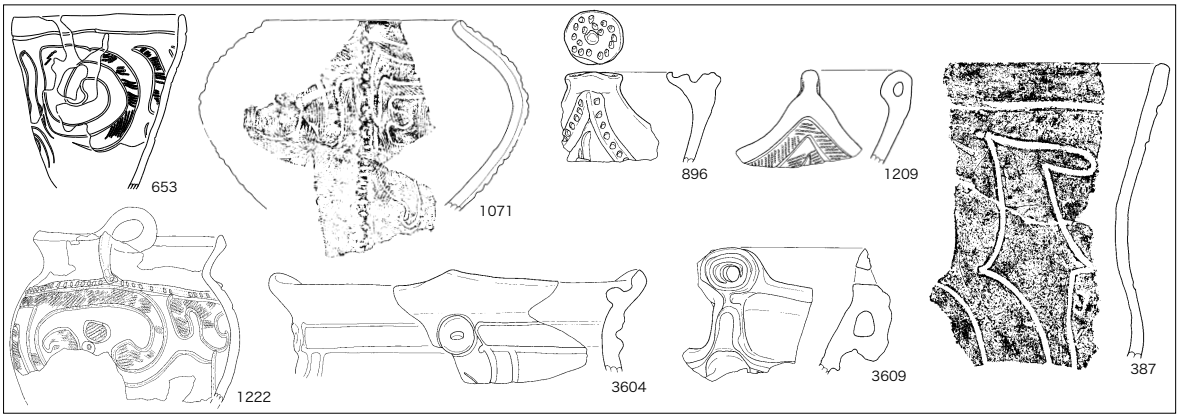


4. 第Ⅲ群第1a5類



5. 第Ⅲ群第1a6類

6. 第Ⅲ群第1c類



7. 第Ⅲ群第1b類

第 24 図　土器分類（14）

第２類　後期前葉（南三十稲場式期）に対比される土器群（第 25 図 1 ～ 3）

ａ類　南三十稲場式土器（註 41）である。口縁部に文様帯を有し、胴部に米字文などの幾何学文や条線文などの文様を施すもの（第 25 図 1）。

ａ１類：胴部文様が磨消縄文になるもので、米字状、縦位、斜位の文様がある（第 25 図 1：3617・3681・3645・596・644）。

ａ２類：胴部文様が縄文地文に多条の沈線文を施すもの。

ａ３類：地文を持たず、集合沈線文を施すもの（第 25 図 1：640・3697・3654・3655・3656・2661・975・3658・3663）。

ｂ類　南三十稲場式土器である。器形は口縁部が外反して頸部が括れ、胴部が張り出す金魚鉢形を呈するもの（第 25 図 2）。

ｂ１類：口縁部に文様帯を持ち、頸部が無文帯になるもの（第 25 図 2：3708）。

ｂ２類：口唇部に文様を有するもの（第 25 図 2：3759）。

ｂ３類：口縁部の表裏に文様帯を有するもの（第 25 図 2：3763）。

ｂ４類：口縁部の内面に文様を有するもので、頸部無文帯に懸垂文を有する（第 25 図 2：3780・3781）。

ｂ５類：口縁部に把手を有するもの（第 25 図 2：3743・3744）。

ｃ類　器形は朝顔形を呈し、口縁部内面に沈線がめぐり、文様は磨消縄文帯で三角文や渦巻文などを施し、紐線文や８字貼付文などが付されるもの（第 25 図 3）。堀之内２式に併行すると思われる。

ｃ１類：口縁部に隆帯を持たないもの（第 25 図 3：3880・1270・3875）。

ｃ２類：口縁部に１～３本の隆帯がめぐるもの（第 25 図 3：12・3953）。

第３類　後期中葉（加曽利Ｂ１式並行期）に対比される土器群（第 25 図 4）

ａ類　口縁部に連鎖沈線文・細沈線帯などが施されるもの（第 25 図 4：17・18・3965）。「石神類型」（註 42）に対比され、加曽利Ｂ１式に並行すると考えられる。

ｂ類　加曽利Ｂ１式土器（註 43）である。口縁部に帯縄文を有し、内面に数条の沈線文を施すもの（第 25 図 4：3986・19・3992）。

第４類　その他不明の深鉢、粗製土器をまとめたもの

第５類　浅鉢形土器をまとめたもの（第 26 図 1）

第６類　注口土器をまとめたもの（第 26 図 2）

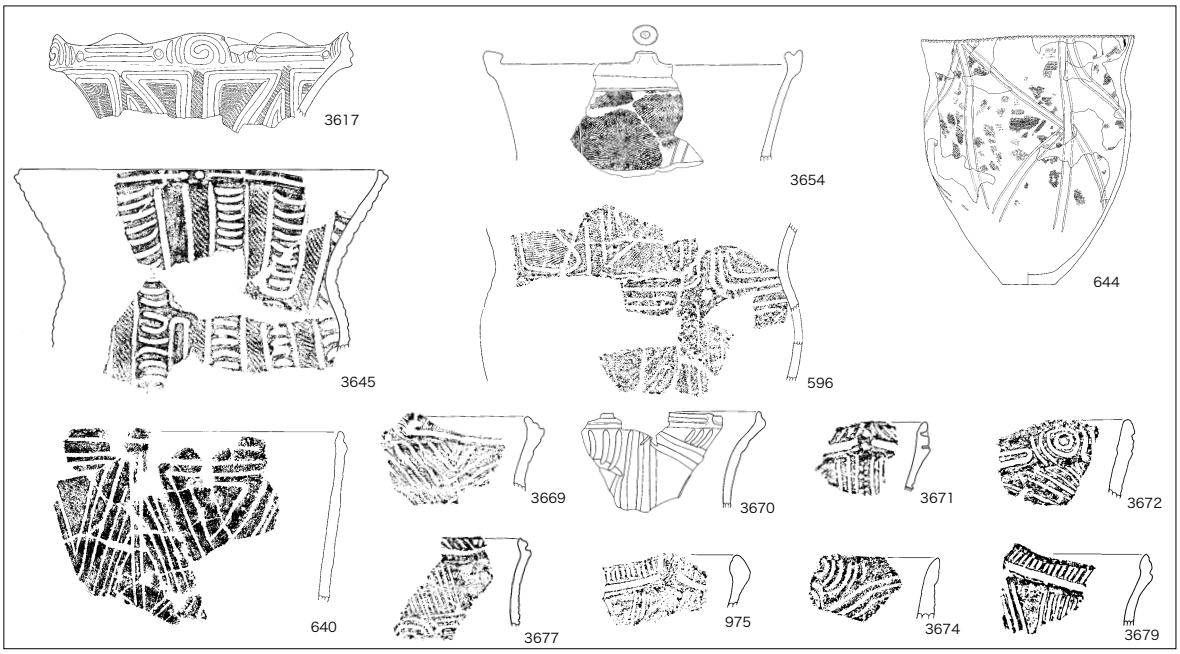
第７類　蓋状土製品をまとめたもの（第 26 図 3）

第８類　後期後葉の土器群（第 26 図 4：4079・4080）

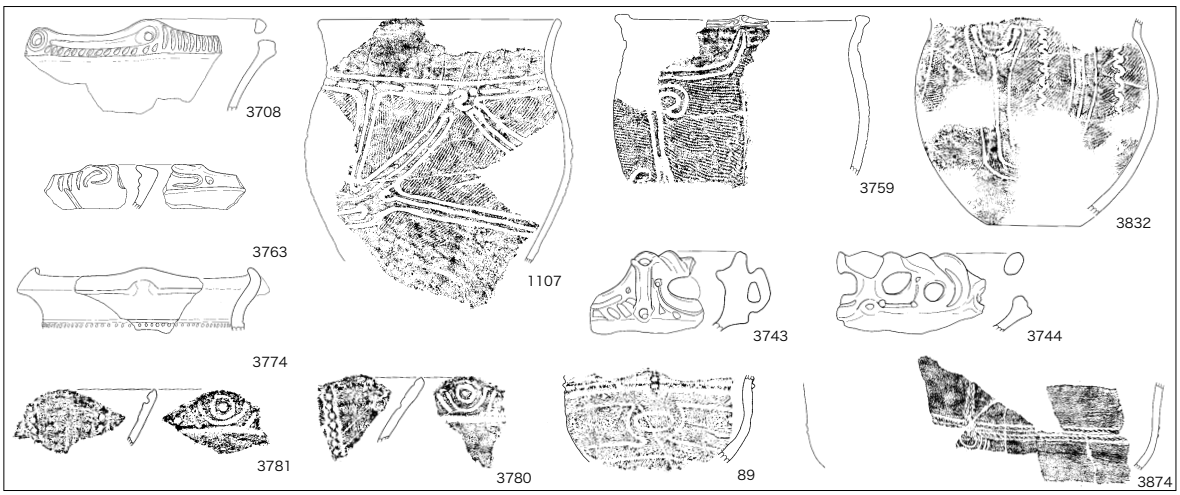
＜第Ⅳ群　晩期の土器群＞

縄文時代晩期に比定される土器群を第Ⅳ群としてまとめた（第 26 図 5）。

以上が本遺跡出土の縄文土器の分類である。

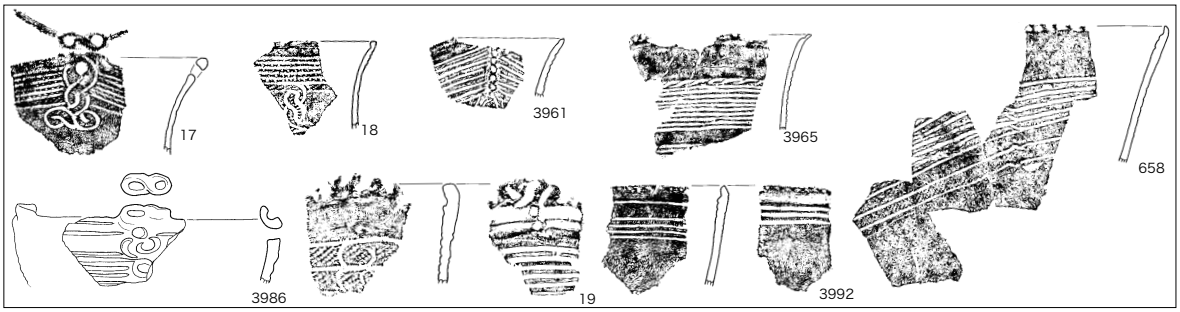


1. 第Ⅲ群第2a類



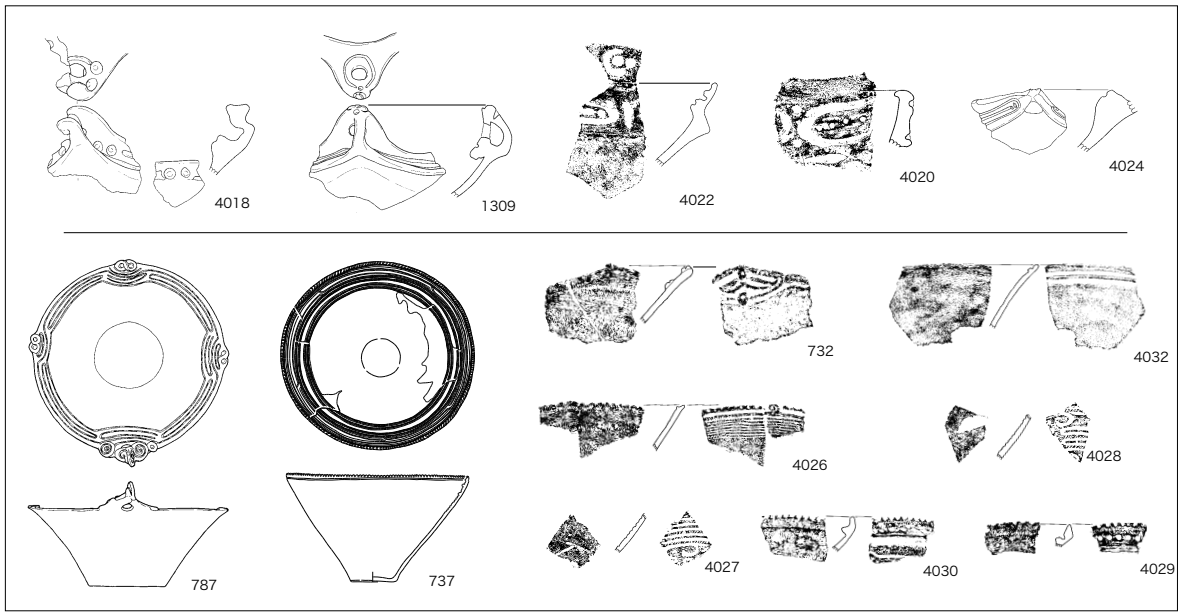
2. 第Ⅲ群第2b類

3. 第Ⅲ群第2c類

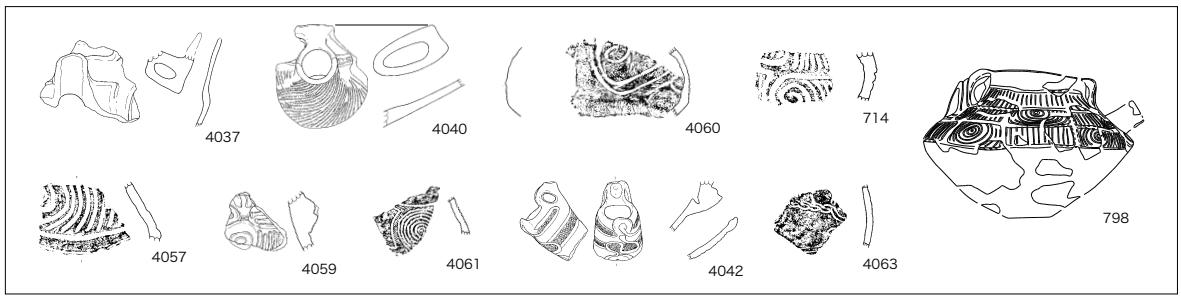


4. 第Ⅲ群第3類

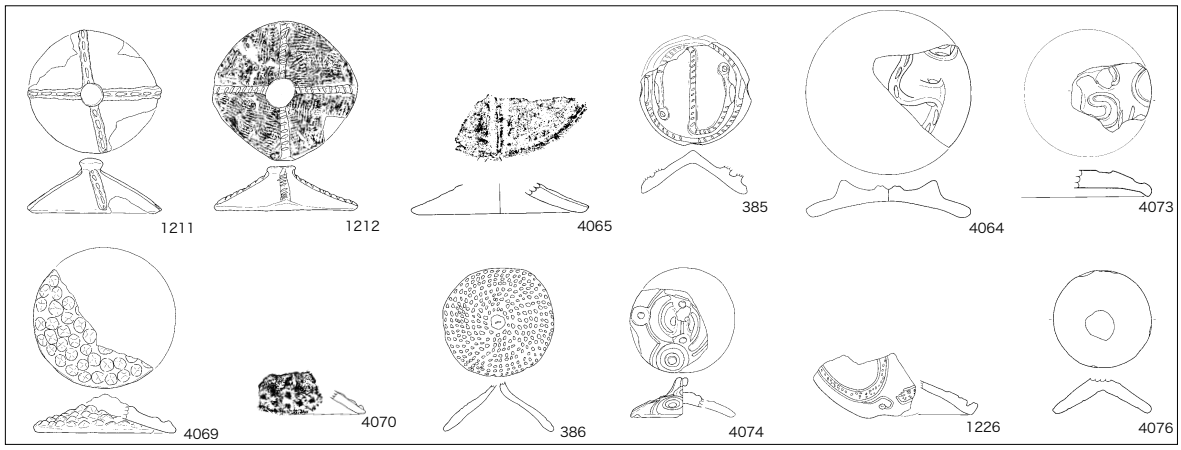
第 25 図　土器分類（15）



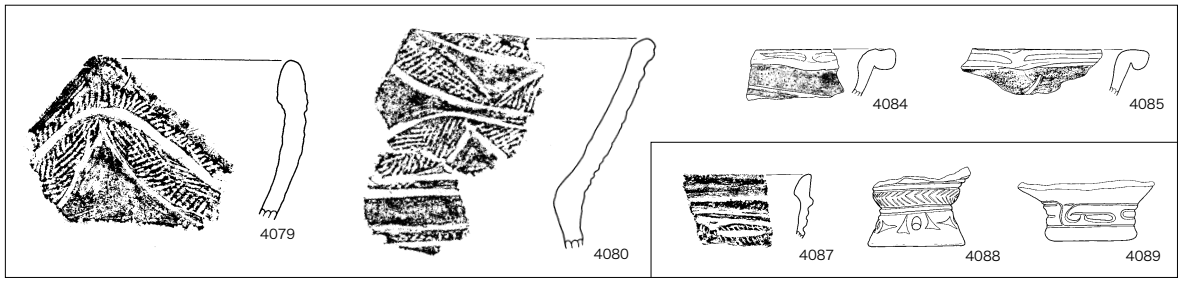
1. 第III群第5類



2. 第III群第6類



3. 第III群第7類



4. 第III群第8類　　5. 第IV群

第 26 図　土器分類（16）

２．時期対比

本遺跡出土の土器を４群に分類し、その中を幾つかの類に細分した。遺跡の時期は 11 期に分けられ、これらの群・類を対比すると次のようになる（第３表)。第Ⅰ群がⅠ期、第Ⅱ群第１類がⅡ期、第Ⅱ群第２類がⅢ期、第Ⅱ群第３類がⅣ期、第Ⅱ群第４類がⅤ期、第Ⅱ群５類がⅥ期、第Ⅲ群第１類がⅦ期、第Ⅲ群第２類がⅧ期、第Ⅲ群第３類がⅨ期、第Ⅲ群第５類がⅩ期、第Ⅳ群がⅪ期とする。Ⅰ期は縄文時代前期で、Ⅱ～Ⅵ期が縄文時代中期、Ⅶ～Ⅹ期が縄文時代後期、Ⅺ期が縄文時代晩期である。各時期の土器編年との関係と他の遺跡における時期区分との対比は次のようにまとめられる。

Ⅰ期は早期末葉～前期前葉の時期にあたり、Ⅱ期は五領ケ台Ⅱ式期に並行し、他の遺跡では津南町道下遺跡Ⅲ期（註 44)、津南町城林遺跡Ⅱ期（註 45）に対比される。

Ⅲ期は大木７ｂ式期に並行し、他の遺跡では城林遺跡Ⅲ期・Ⅳ期、塩沢町五丁歩遺跡Ⅰ期（註 46)、堀之内町清水上遺跡Ⅰ期（註 47)、十日町市笹山遺跡１期（註 48）にほぼ対比される。

Ⅳ期は大木８ａ式期に並行し、他の遺跡では五丁歩遺跡Ⅱ期、清水上遺跡Ⅱ期、笹山遺跡２期、長岡市中道遺跡Ⅰ期（註 49）にほぼ対比される。少なくとも２段階に区分される。

Ⅴ期は大木８ｂ式期に並行し、他の遺跡では津南町沖ノ原遺跡Ⅳ期（註 50)、笹山遺跡３期、中道遺跡Ⅱ期にほぼ対比される。少なくとも２段階に区分され、新段階に栃倉式が位置づけられる。

Ⅵ期は沖ノ原式期に対比され、他の遺跡では沖ノ原遺跡Ⅴ期、笹山遺跡４～６期、小千谷市城之腰遺跡Ⅴ期（註 51)、中道遺跡Ⅲ期にほぼ対比される。少なくとも２段階以上に区分される。

Ⅶ期は三十稲場式期に対比され、他の遺跡では、城之腰遺跡Ⅵ期、中道遺跡Ⅳ期、松代町向原Ⅱ遺跡Ⅳ期（註 52）にほぼ対比される。少なくとも２段階に区分される。

Ⅷ期は南三十稲場式期に対比され、他の遺跡では、城之腰遺跡Ⅶ期、中道遺跡Ⅴ期、柏崎市十三本塚北遺跡Ⅲ期・Ⅳ期（註 53)、向原Ⅱ遺跡Ⅴ期・Ⅵ期にほぼ対比される。２か３段階に区分可能である。

Ⅸ期は加曽利Ｂ１式並行期でも古い段階で、他の遺跡では、中道遺跡Ⅵ期に対比される。

Ⅹ期は後期後葉に、Ⅺ期は晩期に対比される。

本遺跡の検出遺構と出土遺物については、このⅠ期～Ⅺ期を設定して記載をおこないたい。

時　期		分　類	対　比
Ⅰ期	早期末葉～前期前葉	第Ⅰ群	
Ⅱ期	五領ケ台Ⅱ式並行期	第Ⅱ群第１類	道下Ⅲ期、城林Ⅱ期
Ⅲ期	大木７ｂ式並行期	第Ⅱ群第２類	清水上Ⅰ期、五丁歩Ⅰ期 笹山Ⅰ期、城林Ⅲ・Ⅳ期
Ⅳ期	大木８ａ式並行期	第Ⅱ群第３類	清水上Ⅱ期、五丁歩Ⅱ期 笹山２期、中道Ⅰ期
Ⅴ期	大木８ｂ式並行期	第Ⅱ群第４類、第３C類の一部	沖ノ原Ⅳ期、中道Ⅱ期 笹山３期,
Ⅵ期	沖ノ原式期	第Ⅱ群第５類	沖ノ原Ⅴ期、笹山4～6期、 城之腰Ⅴ期、中道Ⅲ期
Ⅶ期	三十稲場式期	第Ⅲ群第１類	城之腰Ⅵ期、中道Ⅳ期
Ⅷ期	南三十稲場式期	第Ⅲ群第２類	城之腰Ⅶ期、中道Ⅴ期 十三本塚北Ⅲ・Ⅳ期
Ⅸ期	加曽利Ｂ１式期	第Ⅲ群第３類	中道Ⅵ期
Ⅹ期	後期後葉	第Ⅲ群第４類	
Ⅺ期	晩期	第Ⅳ群	

第３表　土器分類対比表

第２節　検出遺構

１.集落構造の変遷

本遺跡からは、縄文時代前期の遺物が認められるが、明確な遺構は検出されていない。集落の形成時期は、中期前葉のⅢ期からである。これらの遺構の分布は、Ｈ～Ｊグリッドの西側に遺構空白地帯が存在し、その周囲に弧状に住居跡などの遺構が分布している。その外側の旧河道に遺物集中地点である廃棄帯が帯状に形成される。遺構は、より平坦面が広い調査区北側に分布するのに対して、南側の調査区は平坦面が狭く、住居跡も少ない。これら遺構の分布から、南側や西側の未調査区（保存区）に広がっていると推定される。

これらは時期的な分布に違いが見られるが、この分布が直接的に当時の集落構造を示しているとは言い難い。つまり、長期的に利用されたことによって著しく遺構が重複し、古い時期の遺構はより新しい時期の構築物によって攪乱され、その痕跡が不明瞭になっているからである。これは、新しい時期の遺構が分布する区域には古い遺構があまり検出されていないことや遺物量･分布（第 43 図･第 44 図）から考慮して、実際の集落構造を示していない可能性が想定される。このことを認識したうえで集落構造の変遷過程をまとめておきたい。

Ⅰ期（早期末～前期前葉）：この時期は土器片が数点出土しているが、遺構は確認できなかった。

Ⅱ期（五領ケ台Ⅱ式並行期）：この時期も土器片が数点出土しているが、遺構は検出されなかった。

Ⅲ期（大木７ｂ式並行期）：当該期に帰属する遺構は、住居跡が４軒（第 16B 号住居跡･第 17B 号住居跡･第 34 号住居跡・第 42 号住居跡）、焼土跡１基（第 10 号焼土跡）、フラスコ状土坑１基（16BJ－P1）、などで比較的少ない（第 27 図１）。

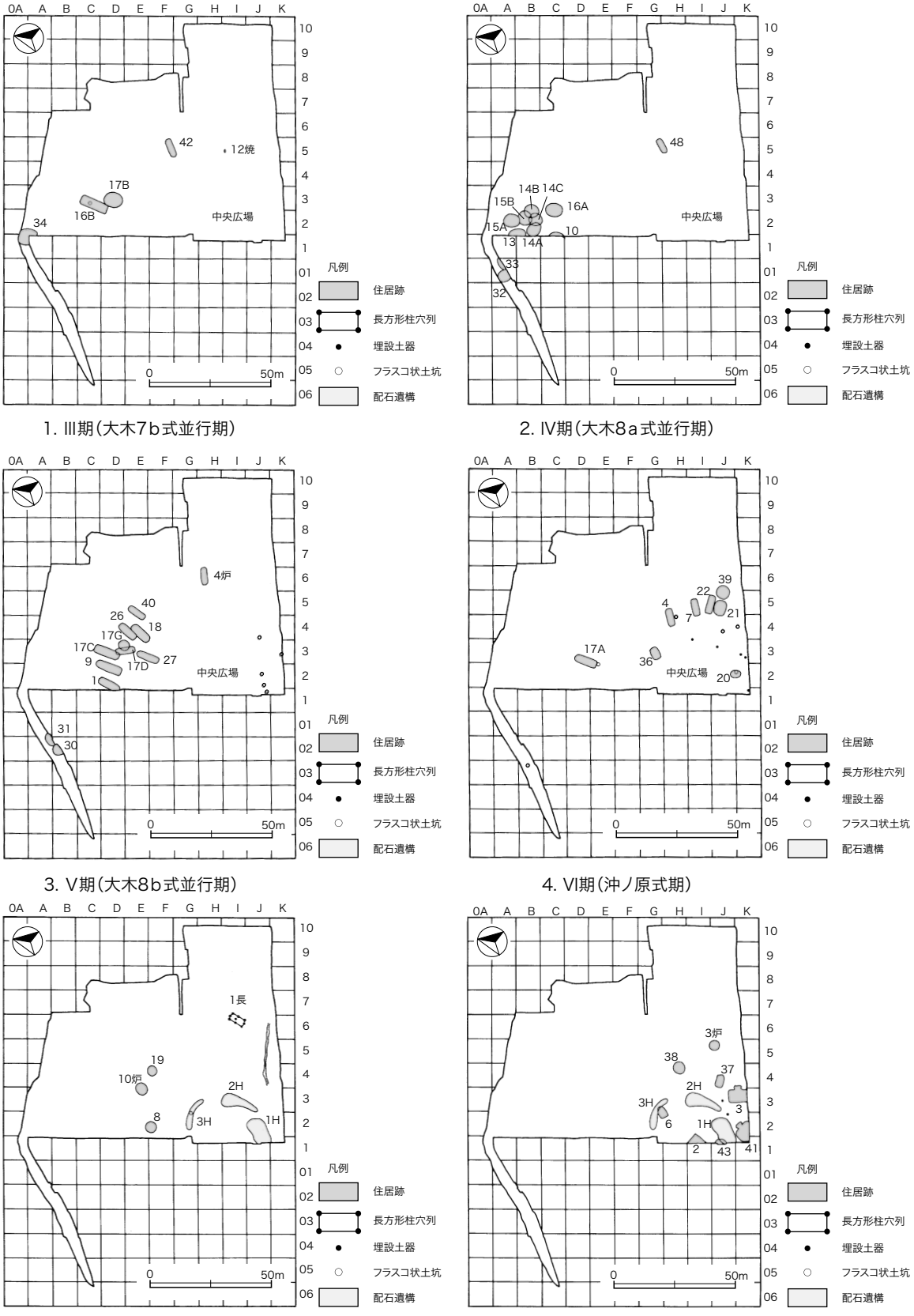
これらの遺構は疎らに分布しているが、この時期から環状集落が開始されると考えられ、同時に旧河道の窪みに廃棄帯が形成される。時期別の遺物総数と比較すると、住居跡が極めて少ない。これはⅣ期以降の住居などによって破壊されたことが要因として考えられる。また同時期の住居跡が、隣接する正面面の堂尻遺跡から検出されており、その関連性が想定される。

Ⅳ期（大木８ａ式並行期）：当該期に帰属する遺構は、住居跡 11 軒（第 10 号住居跡・第 13 号住居跡・第 14A 号住居跡・第 14B 号住居跡・第 14C 号住居跡・第 15A 号住居跡・第 15B 号住居跡・第 16A 号住居跡・第 32 号住居跡・第 33 号住居跡・第 48 号住居跡）、などがあり、フラスコ状土坑は検出されていない（第 27 図２）。

この時期は、遺構が調査区北側に偏在しており、住居跡の主軸方向に求心性は認められないが、前段階に引き続き環状集落を形成していると考えられる。次のⅤ期・Ⅵ期の住居跡が分布する場所に、全く分布が見られないのは、Ⅴ期以降の住居跡によって削平されたためである可能性も想定される。また引き続き、廃棄帯における遺物の集中が顕著に認められる。

Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）：当該期に帰属する遺構は、住居跡 11 軒（第１号住居跡・第９号住居跡・第 17C 号住居跡･第 17E 号住居跡･第 17G 号住居跡･第 18 号住居跡･第 26 号住居跡･第 27 号住居跡･第 30 号住居跡・第 31 号住居跡・第 40 号住居跡）、炉跡２基（第４号炉跡・第６号炉跡）、フラスコ状土坑５基（１Ｈ－Ｐ１・１Ｈ－Ｐ２・１Ｈ－Ｐ３・Ｊ４－Ｐ 24・Ｋ３－Ｐ 12）などがある（第 27 図３）。

この時期は、遺構が調査区北側（Ｃ～Ｅグリッド）に集中している。住居跡の主軸方向に中央広場への求心性が認められることからも、環状集落を形成していると考えられる。またフラスコ状土坑がＪ２



第 27 図　道尻手遺跡遺構変遷図

グリッドに３基まとまっているが、群在というほどではない。廃棄帯では継続的に遺物の集中が見られるが、第 40 号住居跡や第４号炉跡のように廃棄帯中に住居が構築されるようになる。

Ⅵ期（沖ノ原式期）：当該期に帰属する遺構は、住居跡８軒（第４号住居跡・第７号住居跡・第 17A 号住居跡・第 20 号住居跡・第 21 号住居跡・第 22 号住居跡・第 36 号住居跡・第 39 号住居跡）、フラスコ状土坑６基（00 － P1・E2 － P36・H4 － P201・J4 － P23・K2 － P43・K4 － P8）、埋設土器６基（I3 － P38・K1 － P8・K3 － P2・K3 － P3・第５号埋設土器・第８号埋設土器）、などである（第 27 図４）。

これらの分布はＧ～Ｋグリッドにまとまり、前段階よりも環状集落の内側に分布する傾向がある。住居跡の主軸方向は中央広場への求心性を示している。また、中央広場に近接して埋設土器が分布しているが、これらのほとんどは屋外の埋設土器ではなく、住居跡に伴っていたものであると推定される。つまり、複式炉に伴う炉体土器や床面の埋設土器などであり、住居跡が削平されたために不明瞭になってしまった可能性がある。配石遺構が中央広場の縁辺部の住居跡に近接して分布することから、これらの配石遺構の構築時期が少なくともこれ以降に構築されたものと考えられる。また出土遺物は、廃棄帯への集中はあまり見られず、遺構に伴って出土する場合が多くなる。

Ⅶ期（三十稲場式期）：当該期に帰属する遺構は、住居跡２軒（第８号住居跡・第 19 号住居跡）、炉跡１基（第 10 号炉跡）、長方形柱穴列１基（第１号長方形柱穴列）、埋設土器１基（第３号埋設土器）、フラスコ状土坑２基（G2 － P52・H4 － P75）、溝状遺構１条と減少する（第 27 図５）。

これらの遺構の分布は希薄であるが、中央広場の外側に分布している。また長方形柱穴列や溝状遺構が出現し、構成要素に変化が見られる。この他、深度の深い柱穴が群集しているが、これらの中にこの種の遺構が多数重複して存在していると想定される。また配石遺構の中で配石墓と考えられる遺構の中から三十稲場式土器の大形破片が出土していることから、この時期に配石遺構の造営が開始されると考えられる。

Ⅷ期（南三十稲場式期）～Ⅸ期（加曽利Ｂ１式並行期）：当該期に帰属すると考えられる遺構は、住居跡７軒（第２号住居跡・第３号住居跡・第６号住居跡・第 37 号住居跡・第 38 号住居跡・第 41 号住居跡・第 43 号住居跡）、炉跡２基（第３号炉跡・第 12 号焼土跡）、埋設土器１基（J2 － P4）、などである（第 27 図６）。

これらの遺構の分布は、調査区南側（Ｈ～Ｋグリッド）の範囲に集中している。住居跡は、南三十稲場式期後半～加曽利Ｂ１式並行期では中央広場の内部に分布し、居住域の進出が見られる。少なくともこの段階には、中期環状集落の構造が崩れており、集落構造に大きな変化が認められる。この他、住居跡や建物跡は明確ではないが、調査区内に無数に重複している土坑群が、これらの柱穴の一部であると推定される。また配石遺構は配石墓から構成され、これらの造営時期は、そのほとんどが南三十稲場式期後半～加曽利Ｂ１式並行期にかけて造営されたものと考えられる。

Ｘ・Ⅺ期（後期後半～晩期）：この時期は遺物が僅かに出土しているが、遺構は検出されていない。このことからⅨ期をもって集落が廃絶したと考えられる。

本遺跡の変遷を簡単にまとめると、Ⅲ期に環状集落が形成され、同時に居住域の外側にある旧河道に廃棄帯が形成される。環状集落は、住居跡の分布に時期的な変化があるものの、少なくともⅢ期からⅥ期にかけて継続していると思われる。またフラスコ状土坑の群在は見られず、墓坑のまとまりを把握することができなかった。縄文後期に入り、Ⅶ期には住居跡数は減少するが、大規模配石・長方形柱穴列・溝状遺構といった新たな要素が出現する。Ⅷ期・Ⅸ期には、大規模配石群の周囲に住居跡が分布し、集落構造に大きな変化が認められる。Ⅸ期をもって居住域としての場の利用が行なわれなくなる。

2．竪穴住居跡・炉跡

1）竪穴住居跡・炉跡・焼土跡の認定について

本遺跡からは、竪穴住居跡 52 軒、炉跡８基、焼土跡 13 基が検出された。「竪穴住居跡」は調査段階で住居跡として認識され番号が付されたものを基本として、調査後に柱穴・周溝・炉跡などから住居跡として認定したものを含めている。「炉跡」は、調査時に炉跡のみが検出され住居跡の範囲が不明なものを炉跡とした。「焼土跡」は焼土のみが検出されたもので、石組などを伴わないものを焼土跡とした。焼土は廃棄されたものではなく、その場で形成されたものであり、その焼成面から屋外炉ではなく住居内に設置されていた炉跡であると推定される。竪穴住居跡は、第１号住居跡～第 36 号住居跡、第 40 号住居跡が調査時に番号を付したもので、第 37 号住居跡～第 49 号住居跡は整理作業段階で住居跡と認定し、番号を付したものである。また第 35 号住居跡は整理の段階で、第１号長方形柱穴列に変更した。欠番は、第 12 号・第 25 号・第 29 号・第 35 号・第 47 号住居跡である。炉跡は、現場段階で第１～ 10 号まで付されたが、第３号・第４号・第７号・第 10 号炉跡以外は住居跡として認識し、欠番になった。

2）住居跡形態（第 28 図）

検出された住居跡には幾つかの形態が認められ、住居跡の平面形・柱穴配列・炉形態などからⅠ～Ⅴ類の５類に区分し、また各類を幾つかに細分した。

Ⅰ類：平面形が円形や隅丸方形･卵形を呈し、主柱は５本主柱、６本主柱、７本主柱、８本主柱、９本主柱がある。床面は主柱穴外にベッド状遺構を有する有段式構造のものが見られる。

Ⅰａ類：炉跡が地床炉のもの。

Ⅰｂ類：炉跡が小形の石組炉のもの。

Ⅰｃ類：炉跡が長方形石組炉のもの。

Ⅰｄ類：炉跡が複式炉のもの。

Ⅱ類：平面形が長方形を呈し、主柱は６本主柱や８本主柱で、この主軸中心線上の両端に小形の柱穴が付属する。主柱穴は周溝上もしくはこれに接して配列する。炉跡は主軸中心線上に列状に複数が見られる。

Ⅱａ類：炉跡が地床炉で主軸上に列状に配列するもの。床面は比較的浅い傾向がある。

Ⅱｂ類:炉跡が「二」字状の二側縁石組炉(註 54)と地床炉が列状に配列するもの。床面は比較的深いものが多い。

Ⅱｃ類：炉跡が長方形の石組炉と地床炉が列状に配列するもの。

Ⅲ類：平面形は一端が平坦になる楕円形を呈し、周溝上に柱穴がめぐる。

Ⅳ類：平面形は長方形を呈し、長辺の中心部に張り出す部分を有する。主柱は周溝上に配列する。また、不明瞭であるが、第３号住居跡では主軸中心線上に数基の柱穴が配列する。

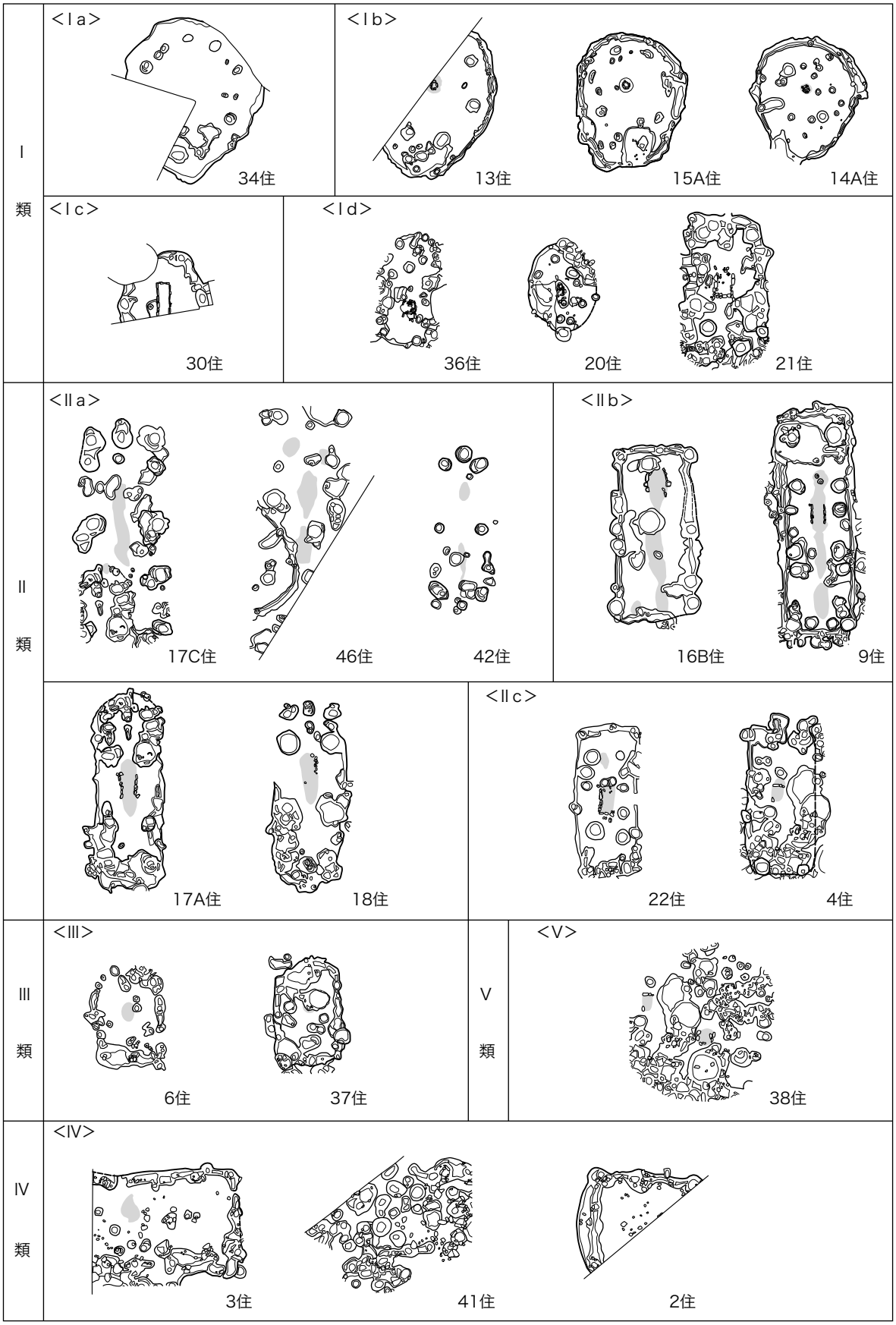
Ⅴ類：平面形が不明な住居跡。

3）規模（第 29 図 a）

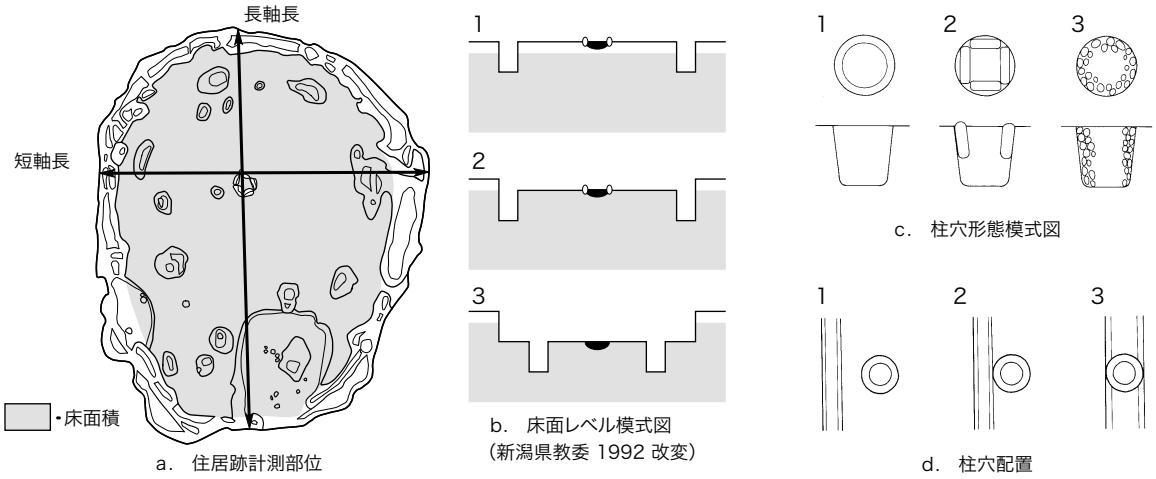
竪穴住居跡の規模は、主軸とこれに直行する軸の長さを長軸長・短軸長として計測した。また床面積の計測は、床面の範囲を周溝内の空間として、プランニングメーターを用いて計測した。

4）床　面（第 29 図 b）

床面の高さについては、地山面を基準にして便宜的に３つに区分した。



第 28 図　道尻手遺跡住居跡の形態分類



a． 住居跡計測部位

b． 床面レベル模式図
（新潟県教委 1992 改変）

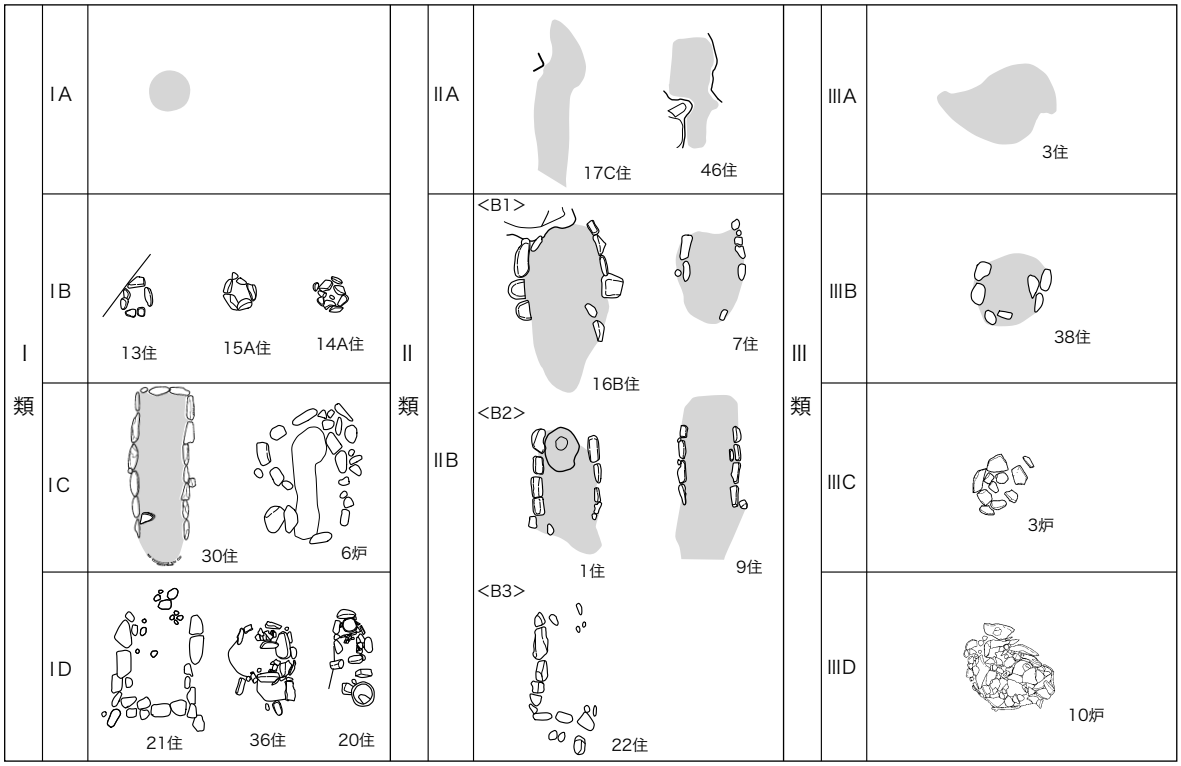
c． 柱穴形態模式図

d． 柱穴配置

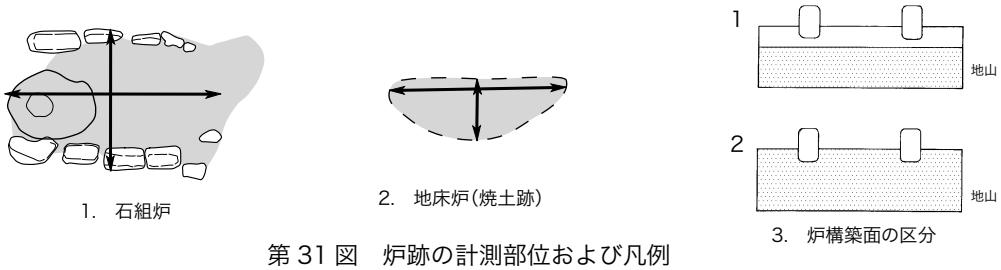
第 29 図　住居跡の計測部位および凡例

番号	グリッド	住居跡形態	時期	長軸長(m)	短軸長(m)	床面積	床面	ベッド	主軸方向	炉形態	主柱穴	柱穴形態	柱穴配置	周溝	備考
1	D2, C2	Ⅱ	Ⅴ	—	—	—	2	—	N-17°-E	ⅡB2	—	1	2	有	
2	I1, I2	Ⅳ	Ⅷ	—	—	—	3	—	不明	—	—	3	3	有	床面から炭化材が出土した。
3	J3, K3	Ⅳ	Ⅷ	6.95	6.4	—	1	—	N-76°-E	ⅢA	—	3	3	有	
4	H4, H5	Ⅱ	Ⅵ	5.7	2.88	—	2	—	N-66°-E	ⅣB	—	1	2	有	
6	H2, H3, G2, G3	Ⅲ	Ⅷ	4.86	3.6	—	2	—	N-46°-E	ⅢA	14	1・2	3	有	
7	I5	Ⅱ	Ⅵ	—	—	—	2	—	N-70°-E	ⅡB	—	1	—	不明	
8	E2, F2	Ⅴ	Ⅶ	—	—	—	1	—	不明	ⅣB	—	—	—	不明	
9A	C2, D2, D3	Ⅱ	Ⅴ	10.89	3.6	29.13㎡	3	—	N-15°-E	ⅡB2	6・8	1	2	有	
10	C1, C2	Ⅰ	Ⅳ	—	—	—	3	○	不明	—	—	1	1	無	床面に焼土層が堆積している。
11	B2	Ⅴ	不明	4.8	4.32	—	2	—	不明	—	—	—	—	無	
13	A1, A2, B1, B2	Ⅰ	Ⅳ	—	—	—	3	—	N-39°-W	ⅠB	7	1	1	有	
14A	B1, B2	Ⅰ	Ⅳ	5.76	4.92	18.18㎡	3	—	N-60°-W	ⅠB	5	1	1	有	
14B	B2	Ⅰ	Ⅳ	—	—	—	2	—	N-10°-W	ⅠA	—	1	1	不明	
14C	B2, B3	Ⅴ	不明	—	—	—	2	—	不明	ⅠA	—	1	1	不明	
15A	A2, B2	Ⅰ	Ⅳ	6.33	5.22	20.71㎡	3	—	N-5°-W	ⅠB	8	1	1	有	
15B	B2, B3	Ⅰ	Ⅳ	—	—	—	2	—	不明	—	—	—	1	有	
16A	C2, C3	Ⅰ	Ⅳ	—	—	—	2	—	不明	—	—	—	—	有	16B住を切って構築されている。
16B	C3	Ⅱ	Ⅲ	7.98	4.2	22.14㎡	2	—	N-18°-E	ⅡB1	6	1	3	有	
17A	E2, E3, D2, D3	Ⅱ	Ⅵ	9.12	3.24	—	3	—	N-12°-E	ⅡB2	8	1	1	無	
17B	D3	Ⅴ	Ⅲ	—	—	—	2	○	不明	—	—	1	1	不明	床面埋設土器。
17C	C3, D3	Ⅱ	Ⅴ	—	—	—	2	—	N-21°-E	ⅡA	8	1	—	無	
17D	D3, E3	Ⅱ	Ⅴ	—	—	—	2	—	N-19°-W	ⅡB1	6	1	—	無	
17E	D3, E3	Ⅱ	不明	—	—	—	2	—	N-11°-E	—	—	1	—	無	17D、17G住に切られている。
17G	D3, E3	Ⅰ	Ⅴ	—	—	—	1	—	不明	ⅠC	—	—	—	不明	
18	E3, E4	Ⅱ	Ⅴ	9	3.42	18.48㎡	2	—	N-33°-E	ⅡB	6・8	1	2	無	
19	E4, F4	Ⅴ	後期初	—	—	—	2	—	不明	ⅣB	—	—	—	不明	
20	K2	Ⅰ	Ⅵ	4.2	3	—	2	—	N-18°-W	ⅠD	5	1	1	無	
21	J5	Ⅰ	Ⅵ	5.7	3.9	—	2	—	N-85°-W	ⅠD	—	1	3	有	
22	J5, I5	Ⅱ	Ⅵ	7.14	2.94	—	3	—	N-82°-W	ⅡB3	6	1	3	無	
23	K5, J4	Ⅱ	不明	—	—	—	2	—	N-75°-W	ⅡB2	—	1	—	無	
24	G5, H5, G4, H4	Ⅱ	不明	—	—	—	2	—	N-64°-E	ⅡB2	—	—	—	無	
26	D3, E3	Ⅱ	Ⅴ	—	—	—	2	—	N-36°-E	ⅡA	—	1	—	無	
27	E3,F3	Ⅱ	Ⅴ	—	—	—	2	—	N-10°-E	ⅡA	10	1	3	有	
30	00区	Ⅰ	Ⅴ	—	—	—	3	△	N-28°-W	ⅠC	—	1	1	不明	掘り過ぎの可能性あり。
31	00区	Ⅰ	Ⅳ	—	—	—	3	—	不明	—	—	—	—	無	
32	00区	Ⅰ	Ⅳ	—	—	—	3	—	不明	—	—	—	—	無	
33	00区	Ⅰ	Ⅳ	—	—	—	3	—	不明	—	—	—	—	有	
34	A1	Ⅰ	Ⅲ	7.74	6.6	23.39㎡	3	△	N-34°-W	—	9	1	1	無	
36	G3	Ⅰ	Ⅵ	5.22	3	—	3	—	N-46°-E	ⅠD	—	1	—	無	
37	J4	Ⅲ	Ⅷ	—	—	9.54㎡	2	—	N-79°-W	ⅢA	—	1	3	有	
38	H4	Ⅴ	Ⅷ～Ⅸ	—	—	—	1	—	不明	ⅢB	—	—	—	不明	
39	J5	Ⅴ	Ⅵ	—	—	—	1	—	不明	ⅣB	—	—	—	不明	
40	E4, E5	Ⅱ	Ⅴ	—	—	—	1	—	N-27°-E	ⅡB2	6	1	—	不明	
41	K1, K2	Ⅳ	Ⅷ	—	—	—	2	—	—	—	—	1	3	無	
42	G5, F5	Ⅱ	Ⅲ	—	—	—	1	—	N-58°-E	ⅡA	6	1	—	不明	
43	J1	Ⅴ	Ⅷ	—	—	—	2	—	不明	ⅣB	—	—	—	無	
44	E3, D3, D4	Ⅱ	不明	—	—	—	2	—	N-14°-E	ⅡA	—	1	3	不明	
45	E2, F2	Ⅱ	不明	—	—	—	2	—	N-4°-W	ⅡA	—	1	—	不明	
46	B1, B2, C1, C2	Ⅱ	Ⅳ	—	—	—	2	—	N-38°-W	ⅡA	—	1	—	不明	
48	C2, D2	Ⅱ	不明	—	—	—	2	—	—	ⅡA	—	—	—	不明	
49	D2	Ⅱ	Ⅲ	—	—	—	2	—	N-5°-W	—	—	1	3	有	

第４表　住居跡一覧表



第 30 図　道尻手遺跡炉跡の形態分類



1. 石組炉　　2. 地床炉(焼土跡)　　3. 炉構築面の区分

第 31 図　炉跡の計測部位および凡例

番号	グリッド	形態	時期	規模		構築面	主軸方向	備考
				長軸長(cm)	短軸長(cm)			
3号炉跡	J5	ⅢC	Ⅷ	75	65	1	—	
4号炉跡	H6	ⅡB2	Ⅴ	123	96	1	N-22°-W	廃棄帯中に構築。
6号炉跡	F2	ⅠC	不明	147	117	1	N-62°-W	
10号炉跡	E3	ⅢD	Ⅶ	73	52	2	—	
11号炉跡	G5	—	不明	—	—	1	—	
12号炉跡	D3	ⅡB	不明	—	—	2	N-2°-W	9号住に切られている。
13号炉跡	E4	—	不明	57	39	2	—	
14号炉跡	E2	—	不明	—	—	2	—	
1号焼土跡	F4	ⅡA	不明	111	32	2	N-22°-E	
2号焼土跡	F4	Ⅳ	不明	90	72	2	—	
3号焼土跡	F4	ⅡA	不明	150	63	1	N-1°-W	
4号焼土跡	F5	ⅣA	不明	129	45	2	N-53°-W	
5号焼土跡	G3	ⅣA	不明	100	100	2	—	
6号焼土跡	F5	ⅣA	不明	87	36	2	N-45°-E	
7号焼土跡	F5	ⅣA	不明	40	40	2	—	
8号焼土跡	H5	ⅣA	不明	45	33	2	N-85°-E	
9号焼土跡	I5	ⅣA	Ⅲ	129	44	2	N-87°-E	
10号焼土跡	J5	ⅣA	不明	96	33	2	N-79°-E	
11号焼土跡	I4	ⅣA	不明	66	54	2	—	
12号焼土跡	J3	ⅣA	Ⅸ	48	36	2	—	
13号焼土跡	H4	ⅣA	不明	—	—	2	—	

第 5 表　炉跡一覧表

5）柱　穴（第 29 図ｃ、d）

柱穴については、主柱など認定できたものはその本数を示した。また柱穴の根固めには３タイプが見られ（第 29 図ｃ）、土が充填されるものと、小礫が雑然と柱穴内に充填されるもの、偏平礫を２～４側面に組んだものがある。柱穴と竪穴壁面・周溝との位置関係は３パターンに区分される（第 29 図ｄ）。

6）炉形態（第 30 図）

住居跡形態に対応してⅠ～Ⅲ類に区分し、各類を２～４つに細分した。

ⅠＡ類：円形の地床炉　　ⅠＢ類：小形石組炉　　ⅠＣ類：長方形石組炉　　ⅠＤ類：複式炉
ⅡＡ類：列状の地床炉　　ⅡＢ類：石組炉＋地床炉
ⅢＡ類：地床炉　　ⅢＢ類：円形石組炉　　ⅢＣ類：石組炉　　ⅢＤ類：土器敷炉
ⅣＡ類：形態不明の地床炉　　ⅣＢ類：形態不明の石組炉

7）出土遺物と時期比定

遺構出土遺物の出土状況は、土器については①炉体土器（炉埋設土器）、②床面埋設土器、③炉内土器敷、④床面直上、⑤覆土（下層・上層）、⑥床面下、柱穴内、炉掘り方内、などに区分される。その他、土製品・石器・石製品は概ね④～⑥の出土状況を示している。これらの出土状況から時期比定を行っているが、やや出土遺物によって時期の意味が異なっている。①～③、⑥は住居構築～使用時にかけて埋設されたものであり、この種の土器は廃物の転用である可能性もある。④は住居使用時～廃絶直後までの間に使用された土器が遺棄または廃棄されたものと考えられる。⑤は廃絶後の埋没過程で廃棄されたものに加えて、屋根の葺土に包含されていたものなどが想定される。

8）重複関係

他の遺構との新旧関係が明確であるものは切り合い関係を示した。また「拡張」「建替え」「反復」などの区分は可能性のあるものについて言及している。

＜住居跡各説＞

第１号住居跡（図版第２図～第４図、写真図版２）

位　置：調査区の北側のＤ１・Ｄ２グリッドに位置している。

形　態：平面形が長方形を呈する長方形住居跡で、主柱４本は確認できたが、その他は明瞭ではなかった。この４本の主柱の間に石組炉があり、石組炉内部と北側に焼土跡がある。

覆　土：遺存度は良好ではなく、約５cm ほどの覆土が確認されたのみである。

床　面：明確な硬化面はないが、炉が構築されている面が床面であると考えられる。

柱　穴：主柱穴はＰ１、Ｐ５、Ｐ９、P14 の４基認められるが、この他に２基か４基の柱穴を伴っていたものと推測される。柱穴の平面形は、円形・楕円形を呈し、周溝に接して配列している。

炉　跡：主軸方向の２側面に偏平礫を並列する石組炉と、焼土跡が列上に配列している。

時　期：Ⅳ～Ⅴ期（大木 8a ～ 8b 式並行期）の土器が出土しているが、造営時期はⅤ期と考えられる。

出土遺物：覆土の遺存状況が悪いため遺物の出土は希薄であったが、土器片（図版第 217 図１～ 11）が床面から覆土にかけて出土している。

第２号住居跡（図版第５図～第８図、写真図版２）

位　置：調査区南側の西端のＩ１・Ｉ２グリッドに位置しており、大半が未調査区に含まれる。

形　態：住居跡の一部が検出されたのみで平面形は明確ではないが、第３号住居跡と同様な形態を呈していると推測される。炉跡は確認できなかった。また竪穴壁面は掘りすぎによるものである。

覆　土：約 15 ～ 25cm の覆土が遺存しており、２層に分層できた。地山ブロック･粒子などのあり方から自然堆積層と考えられる。

床　面：床面は確認できたが、硬化面は明確ではなかった。

柱　穴:主柱穴はＰ１～Ｐ５で､周溝の中に配列している｡柱穴内には小形礫が土とともに充填されていた。

炉　跡：明確な炉跡は確認できなかったが、床面より炭化材が出土している。

時　期：出土遺物からⅧ～Ⅸ期（堀之内２式期～加曽利 B1 式並行期）に造営されたものと考えられる。

出土遺物:土器（図版第 218 図 12 ～ 31)､石器（図版第 704 図２～図版第 705 図 11）が覆土から出土している。土器は､土器片のみが出土している。石器は､打製石斧（２～７）や磨製石斧（８･９）などが出土している。

第３号住居跡（図版第９図～第 12 図、写真図版２）

位　置：Ｊ３・Ｋ３グリッドに位置している。

形　態：住居跡の南側が調査区外へ続いており、全体像は把握されていないが、平面形は長方形プランを呈している。この東側は一部で周溝が途切れて、張り出す部分が見られる。

床　面：調査時に明確な硬化面は認められなかったが、焼土層の位置から床面は黒色土層中に形成されたものと考えられる。

柱　穴：主柱穴は、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ６、Ｐ７、P10、P11、P12、P13、P14、P16、P25 で、方形プランの周溝中に柱穴が配列している。床面の南北軸に２基の柱穴（Ｐ５、P18、P21、P22）があり、住居に伴う可能性がある。柱穴覆土には小形礫が雑然と配されていた。

炉　跡：床面の南西側に偏った位置に焼土跡があり、住居に伴うものと考えられる。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期)。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 219 図 32 ～第 220 図 74)、石器（図版第 705 図 12 ～ 14）が出土している。土器は完形に近いものはなく、小破片のみであった。

第４号住居跡（図版第 13 図～第 16 図、写真図版２）

位　置：H4・H5 グリッドに位置している。

形　態:他の遺構と重複していることから平面形は不明であるが､約 5.7 m× 2.9 mの規模を有している。北側に直線状の周溝がめぐり､主軸上に石組炉と焼土跡が配列することから長方形住居跡と考えられる。

床　面：明確な硬化面は確認されなかったが、焼土跡のレベルから黒色土中にあると推定される。

柱　穴：主柱穴は幾つか検出されているが、他の遺構と重複しているため、明確な配列は不明である。

炉　跡：床面中央部に石組炉があり、主軸上東側に焼土跡がある。石組炉は炉石が抜き取られたためか、規則的な配列を示していなかった。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期)。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 221 図 75 ～第 222 図 88)、石器（図版第 706 図 15)、などが出土している。土器はほとんどが覆土中から出土している。

第６号住居跡（図版第 17 図～第 19 図、写真図版２）

位　置：Ｇ２・Ｇ３・Ｈ２・Ｈ３グリッドに位置し、第 36 号住居跡の西側に隣接している。

形　態：平面形は楕円形を呈し、周溝と柱穴がめぐっている。柱穴は周溝中に配列している。薄い焼土跡が床面中央部にある。

床　面:明確な硬化面は認められなかったが、検出状況から見て漸移層中に構築されたものと推測される。床面には燃焼によると思われる薄い赤化面が認められた。

柱　穴:柱穴はＰ１～Ｐ４、Ｐ７～Ｐ９、P11 ～ P14、P17、P18 があり、周溝中間隔を空けて配列している。主軸上の西側にあるＰ２は方形の石組を伴う。

炉　跡:床面中央部に薄く赤化したものが炉跡と考えられるが、炉の掘り込みや石組は認められなかった。

重　複：第３号配石群と重複しており、新旧関係は第 36 号住居跡（Ⅵ期）よりも第６号住居跡と第３号配石群が新しいが、両者の新旧関係については不明瞭である。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 222 図 89 ～ 101）、石器（図版第 706 図 16）が出土している。石器 16 は、床面のＰ６に立てた状態で埋設されていた。

第７号住居跡（図版第 20 図～第 23 図、写真図版２）

位　置：Ｉ５グリッドに位置している。

形　態：平面形および主柱穴の配列は明確ではないが、炉跡の形態や焼土跡が列状に配列することから長方形住居跡と考えられる。

床　面：明確な硬化面は確認されないが、焼土跡のレベルから黒色土中に形成されたと推定される。

覆　土：８層の土層が確認できた。

柱　穴：配列が不明瞭であり、主柱を特定するのは難しい。

炉　跡：石組炉と東側に焼土跡があり、列状に並んでいる。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 223 図 102 ～第 224 図 125）、石器（図版第 706 図 17 ～ 23）、などが出土している。

第８号住居跡（図版第 24 図・第 25 図、写真図版２）

位　置：Ｅ２・Ｆ２グリッドに位置している。

形　態：炉跡のみが検出されたもので、重複が激しいため平面形・柱穴配列などは不明である。

床　面：水田造成などの影響で明確な硬化面は確認できなかったが、炉跡の位置から黒色土中に形成されたものと考えられる。

柱　穴：重複や床面が黒色土中にあることから、柱穴配列は把握できなかった。

炉　跡：半分ほどが破壊されており、一部の縁石のみが検出されている。方形の石組炉と推定される。

時　期：Ⅵ～Ⅶ期（中期末葉～後期初頭）。

出土遺物：炉の周辺から、土器（図版第 225 図 126 ～ 138）、石器（図版第 707 図 24 ～ 30）が出土しているが、住居跡範囲が不明であるため、本遺構に伴う遺物であるかどうかは明確ではない。

第 9A 号住居跡（図版第 26 図～第 31 図、写真図版３）

位　置：Ｃ２・Ｄ２・Ｄ３グリッドに位置している。

形　態:平面形が長方形を呈し、約 10.89 × 3.6 ｍの規模を有している。主軸線上に石組炉や焼土跡が並び、主柱穴が平面形に沿って配列し、竪穴壁面に沿って周溝がめぐる。形態的に長方形住居跡である。

床　面：床面には炉跡が列状に残されていた。

覆　土：21 層の覆土が確認された。８層は地山土の堆積層があり、一部は人為的な埋土が含まれていることが明らかである。

重複関係：第９B 号住居跡・第 12 号炉跡・土坑→第９A 号住居跡の順に造営されたと考えられ、加えて、同一床面上での重複が認められる。

柱　穴：６本主柱（P ２、P10、P15、P16、P17、P22）と６本主柱（P １、P ３、P ８、P ９、P13、P21、P18、P26）、８本主柱（P １、P ３、P ５、P ６、P ７、P ８、P ９、P13、P21、P18）の配列が認められ、それぞれ主軸両端に小柱穴を伴っている。加えて、主軸南端の床面に２基の柱穴、南側の竪穴外に小柱穴が配列している。これらは入口施設と関連している可能性がある。

炉　跡：床面のほぼ中央部に二側縁石組炉があり、この前後の主軸上に焼土跡が配列する。

重　複：第９B 号住居跡、第 12 号炉を切り込んで本住居跡が構築されている。６本主柱から６本主柱、８本主柱へと拡張されたものと想定される。また D2 － P82 は本住居跡より古い時期のものである。

時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 226 図 139 ～第 228 図 175）、土製品（９・65・229）、石器（図版第 708・709 図 31 ～ 49・51）、石製品（50）、総計 579 点の遺物が出土している。土器 330 点が出土している。石器は 221 点出土し、石匙１点、打製石斧９点、磨製石斧２点、磨石 17 点、石皿１点、などが出土している。石製品は石棒１点が覆土中より出土している（50）。また遺構外の接合関係は、土器では 150 が覆土と D2 － P8 で接合し、157 は覆土と D5 グリットで接合し、175 は第 16B 号住居跡と覆土間で接合している。石器では、石皿（図版第 751 図 461）がＢ４グリッド間で接合している。

第 9B 号住居跡（図版第 26 図）

位　置：Ｄ２グリッドに位置している。

形　態：第９A 号住居跡に削平されており、周溝の一部が検出されたのみである。床面は、周溝の位置から漸移層～ローム層上面あたりが床面であったと考えられる。

時　期：不明（大木８ｂ式並行期以前）。　　出土遺物：なし。

第 10 号住居跡（図版第 32 図～第 35 図、写真図版３）

位　置：Ｃ１・Ｃ２グリッドに位置している。

形　態：住居跡は西側が調査区外に含まれ、一部分が調査された。床面は数 cm の段差をもつ有段式であることから卵形住居跡と推定される。

床　面：調査区内の床面からは、炉跡は確認できなかった。

覆　土：７層の土層が確認された。床面から覆土にかけて焼土が含まれ、火災住居跡の可能性がある。

柱　穴:主柱穴は１基のみ確認できたが、この形態の場合、段差に沿って主柱穴が巡ることからＰ１、Ｐ５、

Ｐ８は他の遺構の重複であると推定される。

炉　跡：調査区内の床面では確認できなかった。

時　期：Ⅳ期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物:床面から覆土にかけて、土器（図版第 229 図 176 ～ 185)、土製品（図版第 697 図 312)、石器（図版第 710 図 52 ～ 54)、などが出土している。土器は 176 が床面よりやや浮いた位置から出土している。

第 11 号住居跡（図版第 36 図・第 37 図）

位　置：Ｂ２グリッドに位置している。

形　態：硬化面が確認されたものの、竪穴の立ち上がりが不明瞭であるため、平面形や範囲などは不明である。また炉跡や柱穴配列も明瞭ではない。

床　面：漸移層に床面が構築されている。

重　複：フラスコ状土坑（11J －Ｐ１）などと重複関係にある。

時　期：不明。

出土遺物：この範囲から、土器（図版第 230 図 186 ～ 193)、などが出土している。出土土器の時期にばらつきが見られ、本遺構の時期比定可能な遺物は認められなかった。

第 13 号住居跡（図版第 38 図～第 41 図、写真図版３）

位　置：Ａ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２グリッドに位置し、西側が一部未調査区に含まれている。

形　態：全体の約半分が調査されている。床面には竪穴壁際には周溝が巡るが、南側で途切れている。床面には主柱穴が巡り、床面の中央に石組炉があり、南東部に径約２ｍほどの浅い土坑がある。形態的に卵形住居跡と考えられる。

床　面：床面は地山を掘り込んで構築されており、床面の硬化が見られる。

覆　土：調査区の壁面では３層の土層が確認できた。また南側に焼土層の堆積が認められ、焼土層の堆積状況から現位置で形成されたものではないと思われる。また土器片などを包含している。

柱　穴:主柱穴はＰ１、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ６の４基が確認できるが、６本主柱か７本主柱になると推定される。

炉　跡：小形の方形の石組炉である。炉石は被熱により赤化していた。

時　期：Ⅳ期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：床面から覆土中にかけて、土器（図版第 230 図 194 ～第 232 図 224)、土製品１点（図版第 687 図 188)、石器（図版第 710 図 55・56）などが出土している。これらは覆土中から出土しており、焼土層内からも出土が認められた。覆土出土の 224 は、第 34 号住居跡覆土の出土土器と接合している。

第 14A 号住居跡（図版第 42 図～第 45 図、写真図版３・４）

位　置：Ｂ１・Ｂ２グリッドに位置している。

形　態：平面形が卵形を呈し、規模約 5.76 × 4.92 ｍを有している。主柱は周溝から離れてめぐり、床面中央部には小形の石組炉がある。また壁面に沿って周溝が巡っており、周溝内に小柱穴が見られる。

床　面：地山層上面から約 20cm の深さに床面が構築されており、明確な床面が認められた。

覆　土：10 層の覆土が確認できた。

柱　穴：床面には 17 基の柱穴が認められるが、主柱穴はＰ１～Ｐ６であり、５本主柱か６本主柱である

と考えられる。

炉　跡：小形の石組炉で、円形を呈している。炉石は被熱により赤化している。

重　複：第14A号住居跡の床面上に、第46号住居跡P4が重複していた。第14A号住居跡が埋没した後に、第46号住居跡が構築されたと考えられる。

時　期：Ⅳ期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第233図225～235）、石器（図版第710図57～第711図65）、などが出土している。ほとんどが覆土中からの出土である。

第14B号住居跡（図版第46図・第47図）

位　置：Ｂ２グリッドに位置している。

形　態：焼土跡のみが検出されたが、周溝・柱穴が検出されていないため平面形などは不明である。

床　面：地山層上面に焼土跡が確認され、この面が床面であると考えられる。

重　複：第14A号住居跡・第14C号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明瞭である。

炉　跡：小さな窪みに焼土跡があり、炉石などは伴わなかった。

時　期：Ⅳ期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：この範囲から、土器（図版第234図234～第235図254）、石器（図版第711図66～69）、などが出土している。炉跡脇の床面上から239が出土し、また柱状礫が横位で検出された。覆土出土土器(240)が第15A号住居跡覆土から出土した土器と接合している。

第14C号住居跡（図版第46図・第47図）

位　置：Ｂ２・Ｂ３グリッドに位置している。

形　態：平面形は不明であるが、柱穴が円形に巡り、中央部に焼土跡がある。

床　面：明確な床面は確認できなかったが、焼土面がほぼ床面であったと推定される。

柱　穴：主柱穴は明確ではないが、柱穴が楕円形にめぐっている。

重　複：第15B号住居跡と重複しているが、前後関係は不明である。

時　期：明確ではないが、第14A号・第14B号住居跡より古いがほぼ同時期のⅣ期であると考えられる。

出土遺物：なし。

第15A号住居跡（図版第48図～第51図、写真図版４）

位　置：Ａ２・Ｂ２グリッドに位置している。

形　態：平面形が卵形を呈し、約6.33×5.22ｍの規模を有している。床面中央部に石組炉があり、竪穴壁面に沿って周溝が巡り、やや内側に主柱穴が配列している。

床　面：確認面から約25cm掘り下げて床面が構築されており、明確な硬化面が確認された。

柱　穴：主柱穴はＰ２、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ７～P11で、平面形に沿ってめぐっている。柱穴の平面形は、円形のものと溝状のものがある。

覆　土：６層の土層が確認され、レンズ状に堆積している。

重　複：床面南側で隅丸方形の土坑が重複している。本住居に伴う可能性も想定されるが不明である。

時　期：Ⅳ期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 236 図 255 ～図版第 241 図 289)、土製品（図版第 676 図 104・図版第 688 図 202)、石器（図版第 712 図 70 ～ 78）が出土している。土器は、完形に近いものが比較的多く出土している。

第 15B 号住居跡（図版第 52 図・第 53 図）

位　置：Ｂ２・Ｂ３グリッドに位置している。

形　態：平面形は不明であるが、周溝の一部と柱穴が円形にめぐっている。

床　面：焼土跡（炉跡）が形成された面が床面であると考えられる。

柱　穴：円形に柱穴がめぐるが、明確な主柱穴の配列は不明である。

重　複：第 14C 号住居跡と重複している。

時　期：Ⅳ期（大木８ａ式並行期）頃と推定される。

出土遺物：この範囲から土器（図版第 241 図 290 ～ 299）が出土しているが、ほとんどが西側で重複する土坑 B2 － P1、P4 から出土しているため、本住居跡に伴うものではない可能性がある。

第 16A 号住居跡（図版第 54 図～第 57 図、写真図版４）

位　置：Ｃ２・Ｃ３グリッドに位置している。

形　態：床面と周溝が確認されたが、炉跡は検出されなかった。また東側が第 16B 号住居跡と重複することから、平面形・柱穴配列などは不明である。

床　面：現状が床面であると考えられるが、明確な炉跡は検出されていない。

柱　穴：主柱穴やその配列は不明である。

重　複：第 16B 号住居跡（Ⅲ期）→第 16A 号住居跡（Ⅳ期)。

時　期：Ⅳ期（大木８ａ式並行期)。

出土遺物：この範囲から土器（図版第 242 図 300 ～第 243 図 310)、などが出土している。

第 16B 号住居跡（図版第 58 図～第 62 図、写真図版４）

位　置：Ｃ３グリッドに位置している。

形　態：平面形は、周溝が長方形に巡り、規模は約 7.98 × 4.2 ｍを呈する長方形住居跡である。床面の北側に石組部と主軸線上に焼土跡が列状に配列している。住居跡は南側に続いている可能性もあるが、第９Ａ号住居跡によって切られているため不明である。

床　面：焼土形成面が床面であると推定される。またフラスコ状土坑（16J － Ｐ１）の土層断面では 、上層の第 16 号住居跡で形成された焼土層の落ち込みが見られる。

柱　穴：主柱穴はＰ５、Ｐ４、Ｐ７、Ｐ９、P10、P11 であると考えられ、周溝上に配列している。

炉　跡：焼土跡が住居跡の主軸線上に列状に並び、北側に二側縁石組炉を有する。また焼土跡には幾つかの単位が認められる。

重　複：16BJ － Ｐ１→第 16B 号住居跡（Ⅲ期）→第 16A 号住居跡（Ⅳ期）・第９号住居跡（Ⅴ期)。

時　期：Ⅲ期（大木７ｂ式並行期)。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 244 図 311 ～ 315)、石器（図版第 713 図 79 ～ 83)、などが出土している。

第 17A 号住居跡（図版第 63 図～第 66 図、写真図版４）

位　置：Ｄ２・Ｄ３・Ｅ２・Ｅ３グリッドに位置している。

形　態：平面形は長方形を呈し、約 9.12 × 3.24 mの規模を有する長方形住居跡である。床面には周溝は全周せず、一部で確認されるのみである。床面中央部には石組炉とこれに細長い焼土が伴う。

床　面：確認面から約 20cm の深さに床面が構築されている。

柱　穴:主柱穴はＰ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ８、P11 ～ P15 の８本主柱であり、主軸線上の両端に小柱穴（P13、18）が付属する。また北側では３対の主柱が連続しており、拡張によるものと考えられる。主柱穴は、壁面よりやや内側に配列している。

重　複：第 17B 号住居跡（Ⅲ期）・第 17C 号住居跡（Ⅴ期）→第 17A 号住居跡（Ⅵ期）。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 244 図 316 ～第 245 図 340）、土製品（図版第 666 図 47）、石器（図版第 713 図 87 ～第 714 図 92）、石製品（図版第 753 図 20）、などが出土している。

第 17B 号住居跡（図版第 67 図～第 69 図、写真図版５）

位　置：Ｄ３グリッドに位置している。

形　態：他の遺構との重複によって平面形は不明瞭になっているが、床面に段差が認められ、有段式の卵形住居跡と考えられる。また床面に埋設土器を伴っている。

床　面：他の住居跡との重複が激しいため明確ではないが、有段式の床面であると考えられる。

重　複：第 17B 号住居跡（Ⅲ期）→第 17C 号住居跡（Ⅴ期）→第 17A 号住居跡（Ⅵ期）。

時　期：Ⅲ期（大木７ｂ式並行期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 246 図 341 ～第 247 図 356）、石器（図版第 714 図 93 ～ 96）、などが出土している。土器 341 は、床面下に正位で埋設されていた。

第 17C 号住居跡（図版第 70 図～第 74 図、写真図版５）

位　置：Ｃ３・Ｄ３グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりは確認できなかったが、柱穴配列は長方形に配列し、焼土跡が列状にあることから長方形住居跡であると考えられる。

床　面：明確な硬化面は確認できなかったが、焼土形成面が床面であったと推定される。

柱　穴：主柱穴は、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ８、Ｐ９、P11、P15、P21、P23 があり、６本主柱か８本主柱であると考えられる。また主軸線上の北側に小柱穴（Ｐ６、Ｐ７）を有している。

重　複：第 17B 号住居跡（Ⅲ期）→第 17C 号住居跡（Ⅴ期）→第 17A 号住居跡（Ⅵ期）。

時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 248 図 357 ～ 368）、石器（図版第 714 図 97）、などが出土している。土器 365 は埋設土器である。

第 17D 号住居跡（図版第 75 図・第 76 図）

位　置：Ｄ３・Ｅ４グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりが確認できなかったが、主柱穴の配列と石組炉の形態から長方形住居跡であると考えられる。

柱　穴：主柱穴は、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ６の４基を確認したが、Ｐ４、Ｐ５も主柱穴の可能性がある。
炉　跡：石組炉と南側の主軸船上に焼土跡がある。また焼土跡には埋設土器が伴っている。
重　複：第 17E 号住居跡（Ⅴ期）→第 17D 号住居跡（Ⅴ期)。
時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期)。
出土遺物：住居跡の範囲から、土器（図版第 249 図 369 ～ 371）が出土している。371 は焼土跡に伴う埋設土器である。

第 17E 号住居跡（図版第 77 図・第 78 図）
位　置：Ｄ３・Ｅ３グリッドに位置している。
形　態：炉跡や周溝は検出されず、柱穴のみが確認されたが、柱穴配列から長方形住居跡と考えられる。
柱　穴：主柱穴は、Ｐ１、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ６～Ｐ８の６基のみが確認されており、長方形に配列している。
重　複：第 17E 号住居跡（Ⅴ期）→第 17D 号住居跡（Ⅴ期)・第 17G 号住居跡（Ⅴ期)。
時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期)。
出土遺物：主柱穴Ｐ４から、土器（図版第 249 図 372・373）が出土している。

第 17G 号住居跡（図版第 79 図）
位　置：Ｄ３・Ｅ３グリッドに位置している。
形　態：住居跡の範囲、および柱穴配列は不明であり、炉跡のみが確認された。炉跡は土器片を敷いたもので、周囲に炉石や焼土は確認されなかった。炉形態から卵形を呈する住居跡と推測される。
炉　跡：土器片を敷いたもので、周囲に炉石が伴っていたかどうかは不明である。
重　複：第 17E 号住居跡（Ⅴ期）→第 17G 号住居跡（Ⅴ期)。
時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期)。
出土遺物：炉跡には、土器（図版第 249 図 374）が敷設されていた。

第 18 号住居跡（図版第 80 図～第 83 図、写真図版５）
位　置：Ｅ３・Ｅ４グリッドに位置している。
形　態：平面形は長方形を呈しており、約9×3.42ｍの規模を有する。主柱穴は８本主柱で、床面のほぼ中央部に石組炉がある。周溝は一部に見られる程度で全周していない。形態的に長方形住居跡である。
柱　穴：主柱穴は、Ｐ１、Ｐ３、Ｐ８～ 10、P12、P13、P16 の８基が配列し、主軸線上の両端に小柱穴（Ｐ５～Ｐ７、P14、P15）が付属する。北側の柱穴は拡張などによるものと考えられる。
炉　跡：床面中央部に石組炉があるが、炉石は片側にのみ認められ、炉石が抜き取られた可能性がある。
重　複：第 10 号炉跡に伴うと考えられる柱穴などによって西側が切られている。
時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期)。
出土遺物：床面付近から、土器（図版第 250 図 375 ～ 383)、などが出土している。土器はほとんどが小破片であり、完形に近いものは出土していない。

第 19 号住居跡（図版第 84 図～第 85 図、写真図版５）
位　置：Ｅ４・Ｆ４グリッドに位置している。
形　態：明確な床面や柱穴などは検出されず、焼土とこれに伴う偏平礫のみが確認された。

床　面：床面は確認できなかったが、焼土と偏平礫は地山をやや掘り込んだ面に構築されている。

時　期：Ⅶ期（三十稲場式期）。

出土遺物：この周辺からは、土器（図版第 250 図 384 ～ 389）、などが出土している。

第 20 号住居跡（図版第 86 図～第 89 図、写真図版５）

位　置：調査区の南西側のＫ２グリッドに位置している。

形　態：平面形は楕円形を呈し、約 4.2 × 3 mの規模を有している。しかし、重複などにより、竪穴の立ち上がりは不明瞭であり、実際の平面形は不明である。床面中央に複式炉を有する住居跡である。

床　面：明確な床面は確認されなかったが、炉跡のレベルから 2，3 層上面が床面である可能性がある。また床面の地山中に大形礫が突き出ており、住居使用時に床面に出ていた可能性がある。

柱　穴：主柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ８であると考えられ、東側はフラスコ状土坑と重複しているため、柱穴は確認できなかったが、５本主柱であると推定される。

炉　跡：土器埋設部と石組部からなる複式炉で、土器埋設部には炉体土器が伴い、石組部には土器片が内面を表にして敷かれていた。炉石は安山岩の円礫と角礫が用いられ、被熱によって赤化していた。北側に隣接して埋設土器があり、深鉢形土器が逆位で埋設され、偏平礫などの付帯物はなかった。

覆　土：３層確認されているが、覆土というよりは床面が構築された土層である可能性がある。

重　複：K2 ― P43（Ⅵ期）→第 20 号住居跡（Ⅵ期）→第 41 号住居跡（Ⅷ期）。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 251 図 390 ～ 399）、石器などが出土している。土器は 390 が倒立の埋設土器で、391 が埋設土器内部から出土している。394 は複式炉の炉内埋設土器で、395・399 は炉内に敷かれていたものである。396 ～ 398 は炉跡周辺から出土したものである。

第 21 号住居跡（図版第 90 図～第 93 図、写真図版５・６）

位　置：Ｊ５グリッドに位置している。

形　態：石組炉を中心に周溝と柱穴が巡っており、その配列から平面形は隅丸方形か５角形を呈すると推定され、規模は約 5.7 × 3.9 mである。

床　面：明確な硬化面は確認できなかったが、炉跡のレベルが床面であると推測される。

柱　穴：周溝とともに柱穴が隅丸方形に巡るが、重複などにより明確な主柱穴の配列を見出すことはできない。柱穴の平面形は円形を呈し浅い。

炉　跡：炉跡は、コ字形を呈する石組の両端にすそ石が付属するもので、形態的に複式炉の形態的特色を持つが、複式構造ではない。炉床面には土器片が出土しているが、敷かれていたものではないようである。炉床面は焼土化しており、炉の東側にも焼土跡がある。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 252 図 400 ～第 253 図 430）、石器（図版第 715 図 98 ～ 102）、などが出土している。炉内からは土器 400、401、417 が出土している。また、炉跡から床面の一部から焼獣骨片が検出された（付編４参照）。

第 22 号住居跡（図版第 94 図～第 97 図、写真図版６）

位　置：Ｉ５・Ｊ５グリッドに位置している。

形　態：平面形は長方形を呈し、約 7.14 × 2.94 mの規模を有する長方形住居跡である。床面には石組炉と焼土が列状に配列している。周溝は確認できなかった。

床　面:炉跡の焼土形成面からすると、完掘状況よりも約10cmほど高いレベルに床面があると考えられる。

覆　土：８層の覆土が確認されたが、４層上面が床面であると考えられ、２層上面が３号炉の床面であると想定される。

柱　穴：柱穴はＰ３、P12、P14、P19、などが考えられ、竪穴壁面に沿って配列している。西側や南側は重複などにより柱穴配列が不明であるが、６本主柱であると推測される。

炉　跡：石組炉と焼土跡がある。石組炉はＬ字形に炉石が遺存しているが、片側は抜き取られたものと考えられる。石組内には焼土が形成されており、その東側や西側に焼土跡が列状に並んでいる。

重　複：第 22 号住居跡（Ⅵ期）→第３号炉跡（Ⅷ期)。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期)。

出土遺物、床面から覆土にかけて、土器（図版第 254 図 431 ～第 257 図 476)、石器（図版第 715 図 103 ～ 105)、などが出土している。

第 23 号住居跡（図版第 98 図～第 100 図、写真図版６）

位　置：Ｊ４・Ｋ５グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりが明確ではなく、平面形が不明である。主柱穴配列や炉形態から長方形住居跡であると考えられる。

床　面：明確な床面は確認できなかったが、炉跡のレベルが床面の高さであると推定される。

柱　穴：Ｐ１～Ｐ４が主柱穴であると考えられ、炉跡を中心に長方形に配列している。他の遺構との重複などにより前後の柱穴配列は不明瞭である。

炉　跡：石組炉とその東側に焼土跡がある。石組炉は主軸方向の２側面に炉石が配される。炉石の一部が欠落しているが、攪乱などによって抜き取られた可能性が考えられる。

重　複：第 23 号住居跡→溝状遺構（Ⅶ期)。

時　期：出土遺物の時間幅が広いために、本遺構の時期を特定できないが、他の住居跡の分布から推定するとⅥ期（沖ノ原式期）に造営された可能性がある。

出土遺物：この範囲から土器（図版第 258 図 477 ～ 482）などが出土している。

第 24 号住居跡（図版第 101 図・第 102 図、写真図版６）

位　置：Ｇ４・Ｇ５・Ｈ４・Ｈ５グリッドに位置している。

形　態：炉跡のみが確認され、竪穴の立ち上がりは検出されなかった。周囲に柱穴が分布しているが、明確な配列を示す主柱穴は見られない。炉形態からは長方形住居跡の可能性が想定される。

炉　跡：石組炉があり、主軸方向の２側面に炉石を配するものである。

時　期：出土遺物から時期比定はできなかった。

出土遺物：この周囲から、土器（図版第 258 図 483 ～ 493)、などが出土している。

第 26 号住居跡（図版第 103 図・第 104 図、写真図版６）

位　置：Ｄ３・Ｅ３グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりや周溝は確認できなかったが、柱穴が長方形プランで配列している。その主軸線上に焼土跡が２ケ所分布する。柱穴の配列や炉跡から長方形住居跡であると考えられる。

床　面：明確な床面は確認されなかったが、焼土形成面が床面であると考えられる。

柱　穴：柱穴は、Ｐ１～Ｐ３、Ｐ６、Ｐ９、P10 ～ P13、P17 であると考えられ、長方形に配列している。

炉　跡：焼土跡が２ヶ所で確認される。北側の焼土には礫が１点見られ、炉石の一部である可能性がある。

時　期：Ⅴ期（大木 8b 式並行期）の可能性がある。

出土遺物：この範囲から、土器（図版第 259 図 494 ～ 497）、などが出土している。

第 27 号住居跡（図版第 105 図・第 106 図）

位　置：Ｅ３・Ｆ３グリッドに位置している。

形　態：かなりの遺構が重複していることから、竪穴の立ち上がりは確認されなかったが、周溝と主柱穴配列が確認できた。炉跡と柱穴配列から長方形住居跡であると考えられる。

柱　穴：柱穴は、Ｐ１～ P10 が配列し、８本主柱か 10 本主柱であると考えられる。

炉　跡：主軸線上に焼土跡があり、その他は確認されていない。

重　複：第 27 号住居跡（Ⅴ期）→第６号炉跡（不明）。ほか多数の土坑と重複している。

時　期：Ⅴ期（大木 8b 式並行期）の可能性が想定される。

出土遺物：炉跡の焼土から、土器（図版第 259 図 494・498・499）が出土している。

第 30 号住居跡（図版第 107 図～第 109 図）

位　置：拡張区である B02 グリッドに位置している。

形　態：調査区外に南側半分が含まれ、住居跡の全体像は不明である。柱穴と周溝が半円状に巡り、中央に長方形石組炉を有している。この主柱穴に沿ってめぐる溝は、掘り間違いの可能性も考えられる。形態的には有段式構造の卵形住居跡であると考えられる。

床　面：主柱穴の外側の段差は竪穴の立ち上がりではなく、ベッド状遺構である可能性がある。

覆　土：調査区壁面で、２層の覆土が確認できた。

柱　穴：主柱穴は、Ｐ１～Ｐ３の３基が確認されている。その配列から６本主柱であると推測される。また主柱は床面の段差に沿って配列している。

炉　跡：長方形を呈する石組炉で縁石が１列めぐっている。炉石には偏平円礫、破砕偏平礫、角礫が用いられている。炉床面は赤化しており、炉石も被熱により赤化していた。

時　期：Ⅴ期（大木 8b 式並行期）に造営されたと考えられる。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 259 図 500 ～第 262 図 518）、などが出土している。土器 500 は炉跡内部、505・508 は約５cm ほどの覆土を挟んで炉跡直上から出土している。

第 31 号住居跡（図版第 110 図・第 111 図）

位　置：拡張区である A02 グリッドに位置している。

形　態：住居跡は、半分ほどが未調査区内に含まれ、平面形や柱穴は不明瞭である。

床　面：壁際の地山面が床面であると考えられ、その周囲の落ち込みは木根などの攪乱もしくは掘り過ぎたものである可能性が考えられる。

時　期：Ⅴ期（大木 8b 式並行期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 262 図 509 ～第 263 図 527）が出土している。また床面上に大形の柱状礫が横たわっていた。

第 32 号住居跡（図版第 112 図、写真図版 6）

位　置：拡張区である A01 グリッドに位置している。

形　態：住居跡の南側が調査区外に含まれ、北側が段丘縁辺になっているため全体形状は不明である。また周溝や炉跡は検出されていない。

床　面：床面は認められたが、明確な硬化面は確認できなかった。

柱　穴：Ｐ１～Ｐ６の柱穴が確認されたが、配列は不明瞭である。

時　期：Ⅳ期（大木 8a 式並行期）。

出土遺物：覆土中より、土器（図版第 263 図 528 ～ 532）が少量出土している。

第 33 号住居跡（図版第 113 図、写真図版 6）

位　置：拡張区である Ａ１・A01 グリッドに位置している。

形　態：大半が調査区外に含まれているため全体像は不明である。竪穴壁際に周溝が弧状にめぐっていることから円形プランの住居跡であると推定される。この他、炉跡や柱穴は確認できなかった。

床　面：床面は確認できたが、明確な硬化面は確認できなかった。

時　期：Ⅳ期（大木 8a 式並行期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、少量の土器（図版第 263 図 533）が出土している。

第 34 号住居跡（図版第 114 図・第 115 図、写真図版 6）

位　置：調査区の北西端の Ａ１グリッドに位置している。

形　態：床面の一部調査区外に含まれ、また北側が段丘縁辺であるため竪穴の立ち上がりが確認できなかった。平面形は卵形を呈し、竪穴壁際には周溝はなく、その内側に主柱穴が巡っている。

床　面：地山上面から約５cm の深さのところに床面が構築されており、一部段差を有する部分が見られ、有段式構造を呈していた可能性がある。

炉　跡：床面中央部に窪みが見られるが、明瞭な焼土は認められなかった。

柱　穴：主柱穴は、Ｐ１、Ｐ３～Ｐ６、Ｐ８、Ｐ９であると考えられる。

時　期：Ⅲ期（大木 7b 式並行期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 264 図 534 ～ 541）が出土している。

第 36 号住居跡（図版第 116 図～第 119 図、写真図版 7）

位　置：Ｇ３グリッドに位置し、西側が列石（3H）と接している。

形　態：竪穴の立ち上がりが西側のみで確認され、南側・北側は他の遺構と重複しているため平面形は明確ではない。また床面中央部には複式炉があるが、周溝は見られず、主柱配置も明確ではない。

床　面：明確な硬化面が確認されたが、床面の立ち上がりは西側以外では確認できなかった。

覆　土：３層に区分でき、１層は埋没後の攪乱層で、２・３層は住居跡覆土である。３層は住居跡の縁辺部に堆積し、地山ブロックを多く含んでいる。

柱　穴：P15、P16、P18 などが主柱穴であると推定されるが、明確な配列は不明である。

炉　跡：炉跡の北側が埋没後に掘り込まれた土坑によって破壊されていた。炉跡は石組複式炉であり、偏平礫を箱形に組んだものである。炉内には、炉体土器は伴わず、底面に土器片が敷かれている。炉跡西側にすそ石が付属し、間に小さな窪みがあるが前庭部の掘り込みではなく掘り方の一部であると考えられる。炉石は全て安山岩であり、偏平円礫と板状角礫で組まれており、縁石は一部で二重にめぐっている。

重　複：列石遺構（３H）と重複し、本住居跡埋没後に構築されたものと考えられる。また南側が土坑によって切られており、上部に長径約１mほどの柱状円礫が検出されている。また、埋没後に土坑（G３－P105）が掘り込まれ、炉跡の北東部の炉石が抜き取られ、径約 30cm ほどの未焼成の粘土が埋められている。

時　期：Ⅴ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：床面から覆土にかけて、土器（図版第 265 図 542 ～ 556）、土製品（図版第 696 図 306）、石器（図版第 716 図 108 ～ 110）、などが出土している。土器 542 は床面直上から出土し、炉内に敷かれていた土器と接合している。三角壕形土製品（306）が覆土中から出土している。

第 37 号住居跡（図版第 120 図、写真図版７）

位　置：Ｊ４グリッドに位置している。

形　態：住居跡は、楕円形もしくは隅丸方形に周溝が巡り、周溝中に柱穴が配列する。床面中央部には掘り込みや炉石を伴わない地床炉がある。

床　面：床面は非常に硬化していた。

柱　穴:柱穴はＰ１～Ｐ６、Ｐ８、P10、P15 で、周溝中に配列している。これ以外の柱穴は不明である。

重　複：J4 － P23（Ⅵ期以降）・J4 － P24（Ⅴ期）→第 37 号住居跡（Ⅷ期）。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：この範囲から、土器（図版第 266 図 557 ～ 569）、などが出土している。

第 38 号住居跡（図版第 121 図～第 123 図、写真図版７）

位　置：Ｈ４グリッドに位置している。

形　態：石組炉のみが検出されたが、その周囲は他の遺構と激しく重複していることから平面形や柱穴配列などは不明である。

床　面：確認できなかったが、焼土形成面である黒色土中に床面が構築されていたと考えられる。

炉　跡：円形を呈する石組炉で、内部の炉床面は焼土化していた。炉石は安山岩である。

重　複：第４号住居跡や、その他多くの土坑と重複関係にある。.

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：炉跡周辺から 、土器（図版第 266 図 570 ～ 573）などが出土している。

第 39 号住居跡（図版第 124 図～第 126 図）

位　置：Ｊ５グリッドに位置している。

形　態：炉跡のみが検出され、竪穴の立ち上がりや床面、柱穴、平面形は不明である。

床　面：明確な床面は確認されなかったが、炉跡の焼土形成面や遺物分布から黒色土中に床面が構築さ

れたと考えられる。

炉　跡：石棒と偏平礫を炉石として伴う石組炉であり、炉床面は非常に焼土化していた。炉石は、いずれも安山岩であり、石棒は炉石に転用されたものと考えられる。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：炉跡の周辺からは、土器（図版第 266 図 574 ～第 267 図 584）、などが出土している。石棒（図版第 716 図 111）は炉石に用いられていたものである。

第 40 号住居跡（図版第 127 図・第 128 図）

位　置：Ｅ４・Ｅ５グリッド、廃棄帯縁辺部に接する場所に位置している。

形　態：石組炉と柱穴が検出されているが、竪穴の立ち上がりや周溝は確認できなかった。炉形態や柱穴配列から、長方形住居跡であると考えられる。

床　面：床面は検出されなかったが、炉跡の焼土形成面から黒色土中に構築されていたと考えられる。

柱　穴：Ｐ１、Ｐ４、Ｐ９、P13 が主柱穴の一部であると考えられるが、前後の柱穴配列は不明である。

炉　跡：石組炉とその主軸線上の南側に焼土跡がある。石組炉は、炉石が主軸線の２側辺に配されるが、一部炉石が抜き取られている可能性がある。炉石に用いられている石材はすべて安山岩である。

重　複：倒木痕上に構築されており、他の遺構との重複関係は確認できない。

時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：炉跡などから、土器（図版第 267 図 585 ～ 589）、石器（図版第 716 図 112）が出土している。土器 585 ～ 588 は炉跡内から出土したものである。

第 41 号住居跡（図版第 129 図）

位　置：調査区南西端のＫ２グリッドに位置している。

形　態：住居跡は、竪穴の立ち上がりや炉跡は検出されなかったが、周溝と柱穴が方形プランで巡り、北側に張出部を有している。他の遺構との重複や、一部南側が調査区外に続いているため形態は不明であるが、柱穴配列から第３号住居跡と同様な形態を呈するものと考えられる。

床　面：明確な硬化面は確認できなかったが、漸移層～黒色土にかけて構築されたものと推定される。

柱　穴：周溝中に柱穴が巡っているが、西側では配列は明確ではない。

重　複：第 20 号住居跡の西側を切っているが、他に多数の土坑と重複関係にある。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：この範囲から、土器（図版第 268 図 590 ～第 269 図 619）、などが出土している。

第 42 号住居跡（図版第 131 図）

位　置：廃棄帯に接するＦ５・Ｇ５グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がり、および周溝は検出されていないが、主柱穴や炉跡が確認されている。平面形は不明であるが、柱穴配列や焼土跡から長方形住居跡であると考えられる。

床　面：明確な床面は確認できなかったが、炉跡の焼土形成面が床面であったと考えられる。

柱　穴：主柱穴は、Ｐ１、Ｐ３、P10、P11、P13、P14 の６本主柱で、長方形に配列している。また主軸線上の両端に小柱穴（Ｐ２、P15）が付属する。

時　期：Ⅲ期（大木７ｂ式並行期）。

出土遺物：この範囲から土器（図版第 269 図 620 ～ 624）が出土している。

第 43 号住居跡（図版第 132 図、写真図版 7）

位　置：調査区の西南端のＪ１グリッドに位置している。

形　態：調査区の壁際から炉跡が検出されたが、竪穴の立ち上がりや柱穴配列は不明である。

床　面:明床面は確認できなかったが、焼土形成面から漸移層から黒色土に構築されたものと推定される。

炉　跡：焼土に伴って炉石と思われる礫が認められた。礫は被熱により赤化していた。

重　複：第 1 号配石群に接しているが、新旧関係は不明である。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：炉跡周辺から、土器（図版第 270 図 625 ～ 630）、などが出土している。

第 44 号住居跡（図版第 133 図）

位　置：Ｄ３・Ｄ４・Ｅ３グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりや、周溝は検出できなかったが、炉跡や柱穴が配列している。平面形は不明であるが、柱穴配列や焼土が列状に並ぶことから長方形住居跡であると考えられる。

床　面：明確な床面は確認できなかったが、焼土形成面が床面であると考えられる。

柱　穴：主柱穴はＰ２～Ｐ９で、主軸に沿って８基の柱穴が配列している。

炉　跡：主軸線上に４基の焼土跡が並んでいるが、炉石を伴うものはなかった。

重　複：多くの柱穴などと重複関係にあるが、新旧は不明である。

時　期：不明　　出土遺物：なし。

第 45 号住居跡（図版第 134 図）

位　置：Ｅ２・Ｆ２グリッドに位置している。

形　態:平面形は不明であるが、焼土列とそこから推定される柱穴配列から、長方形住居跡と考えられる。

床　面：明確な硬化面は確認できなかったが、焼土形成面が床面であると考えられる。

柱　穴：柱穴はＰ１～P12 の 10 基が配列すると推定される。

炉　跡：２つの焼土跡が主軸線上に配列していたが、これらの焼土に炉石を伴うものはなかった。

重　複：第 8 号住居跡など多数の柱穴や土坑と重複関係にあるが、新旧は不明である。

時　期：不明。　　出土遺物：なし。

第 46 号住居跡（図版第 135 図）

位　置：Ｂ１・Ｂ２・Ｃ１・Ｃ２グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりや周溝は確認されていないが、炉跡と柱穴が検出されている。柱穴は調査区外まで延びていると考えられ、全体像は不明であるが、焼土跡と柱穴配列から長方形住居跡と考えられる。

床　面：明確な硬化面は確認できなかったが、焼土形成面が床面であると考えられる。

柱　穴：Ｐ１、Ｐ３～５、Ｐ７、Ｐ９が主柱穴と考えられ、８本主柱であると考えられる。Ｐ４は第 14A 号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

重　複：第 14A 号住居跡や第 11 号住居跡と重複しており、第 14A 号住居よりも新しいと考えられる。

時　期：不明である。

出土遺物：この範囲から少量の土器片（図版第 270 図 631・632）が出土している。

第 48 号住居跡（図版第 136 図）

位　置：H ５グリッドに位置している。

形　態：焼土跡のみが検出されており、竪穴の立ち上がりや周溝、柱穴は検出されていない。焼土跡の特色から長方形住居跡の可能性があるが、明確ではない。

床　面：明確な床面が確認できなかったが、焼土形成面が床面であると推定される。

重　複：多数の土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱　穴:H5 － P125、H5 － P50、G5 － P31 が主柱穴の可能性があるが、その他の柱穴の配列は不明である。

炉　跡：焼土跡が２ヶ所で検出されているが、炉石などは伴っていない。

時　期：Ⅳ期（大木 8a 式並行期）。

出土遺物：主柱穴と考えられる H ５－ P50 からは、土器（図版第 270 図 633 ～ 636）が出土している。

第 49 号住居跡（図版第 137 図）

位　置：D ２グリッドに位置している。

形　態：住居跡は炉跡などが検出されていないが、柱穴と周溝の配列から長方形住居跡と推定される。

床　面：明確な硬化面は確認できなかった。

柱　穴：明確な柱穴の配列は確認できないが、周溝上に柱穴が配列している。

重　複：第１号住居跡など多数の柱穴と重複しており、第１号住居跡に切られていると考えられる。

時　期：第１号住居跡との重複関係から、本住居跡はⅢ期～Ⅳ期（大木７ｂ式～大木８ｂ式並行期）の間に造営されたものと推定される。

出土遺物：柱穴から土器（図版第 270 図 637 ～ 639）が出土している。

＜炉跡各説＞

第３号炉跡（図版第 138 図　写真図版７）

位　置：J ５グリッドに位置している。

形　態：炉跡のみ検出され、周囲には柱穴や溝が配列するが、明確な配列は確認できなかった。石組炉は円礫や板状礫を円形に配しており、一部被熱によって赤化している。

重　複：第 22 号住居跡（Ⅵ期）埋没後にその上層に構築されている。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：炉跡やその周辺から、土器（図版第 271 図 640 ～ 644）が出土している。

第４号炉跡（図版第 139 図、写真図版７）

位　置：H ６グリッドに位置している。

形　態：炉跡は廃棄帯中に構築されており、偏平円礫を２列並行に配する石組炉である。炉内には焼土が分布している。炉跡の形態から長方形住居跡に伴う炉の可能性がある。炉石は安山岩で、赤化はあまり見られないが、被熱のためか破砕しているものが多い。

時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：炉内から、土器（図版第 272 図 645 ～ 649）が出土している。645 は炉内から出土したもので、

646 ～ 649 は炉の下層より出土しており、廃棄帯にもともと堆積していたものであると考えられる。

第６号炉跡（図版第 140 図、写真図版８）

位　置：Ｆ２グリッドに位置している。

形　態：炉跡は楕円形を呈する石組炉であり、黒色土中に構築されている。炉跡は、偏平円礫を縁石として１列めぐらせている。炉石や炉床面は被熱によって赤化していた。

重　複：多数の土坑と重複しているが新旧関係は不明である。

時　期：形態的にⅤ期（大木８ｂ式並行期）の可能性がある。　　出土遺物：なし。

第 10 号炉跡（図版第 141 図、写真図版８）

位　置：Ｅ３グリッドに位置している。

形　態：炉跡は土器敷炉で、掘り込み内に土器片が敷き詰められていた。また周囲には本遺構に伴うと考えられる柱穴や周溝が巡っているが、明確なプランは把握できなかった。

重　複：周囲に巡る柱穴が第 18 号住居跡（Ⅴ期）と重複している。

時　期：Ⅶ期（後期初頭）。

出土遺物:炉内に敷かれていた土器片は、数個体の土器（図版第 273 図 650 ～第 274 図 655）が認められる。また土器片は、二次焼成を受けているものが多い。

第 11 号炉跡（図版第 142 図）

位　置：Ｇ５グリッドに位置している。

形　態：遺構は礫と埋設土器が検出されたが、詳細は不明である。

時　期：不明。　出土遺物：なし。

第 12 号炉跡（図版第 142 図）

位　置：Ｄ３グリッドに位置している。

形　態：炉跡は、第９号住居跡の東側に隣接している。地山面から炉跡の一部のみ検出されたが、焼土などは確認できなかった。形態的に長方形住居跡に伴っていた炉跡であると考えられる。

重　複：第９号住居跡（Ⅴ期）にほとんどが削平されている。

時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）以前に造営されたものと考えられる。

出土遺物：なし。

第 13 号炉跡（図版第 142 図）

位　置：Ｅ４グリッドに位置している。

形　態：炉跡は、炉石２つと焼土が検出されている。

時　期：不明。　出土遺物：なし。

第 14 号炉跡（図版第 142 図）

位　置：Ｅ２グリッドに位置している。

形　態：炉跡は、焼土に伴って礫が３つ検出されたのみである。

時　期：不明。　　出土遺物：なし。

＜焼土跡各説＞

第１号焼土跡（図版第 143 図）

位　置：Ｆ４グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、平面形が細長い焼土である。

時　期：不明。　出土遺物：なし。

第２号焼土跡（図版第 143 図）

位　置：Ｆ４グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、ローム層上面から検出された。焼土やその周辺は非常に硬化していた。

重　複：多数の土坑と重複している。

時　期：不明であるが、形態的にⅦ～Ⅸ期（後期前半期）の住居跡に伴う可能性が想定される。

出土遺物：焼土跡に伴う遺物はないが、この区域からはⅧ～Ⅸ期の土器が出土している。

第３号焼土跡（図版第 143 図）

位　置：Ｆ４グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、細長い焼土であり、形態的には長方形住居跡の炉跡に類似している。

重　複：多数の土坑と重複している。　時　期：不明。　出土遺物：なし。

第４号焼土跡（図版第 144 図）

位　置：Ｆ５グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、細長い焼土であり、長方形住居跡に伴う焼土跡である可能性がある。

重　複：多数の土坑と重複している。　時　期：不明。　出土遺物：なし。

第５号焼土跡（図版第 144 図）

位　置：Ｇ３グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、平面形が重複によって不整形を呈する径１ｍほどの焼土である。

重　複：多数の土坑と重複している。　時　期：不明。　出土遺物：なし。

第６号焼土跡（図版第 144 図）

位　置：Ｆ５グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、平面形が長楕円形を呈する焼土である。

時　期：不明。　出土遺物：なし。

第７号焼土跡（図版第 144 図）

位　置：Ｆ５グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、平面形が円形を呈する焼土跡である。

時　期：不明．出土遺物：なし。

第８号焼土跡（図版第 145 図）

位　置：Ｄ１グリッドに位置し、未調査区へと延びている。

形　態：焼土跡は、長楕円形を呈する焼土であり、長方形住居跡の炉跡である可能性がある。

重　複：多数の土坑と重複している。　時　期：不明。　出土遺物：なし。

第９号焼土跡（図版第 145 図）

位　置：Ｊ５グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、平面形が長楕円形を呈し、長方形住居跡の焼土跡に類似している。

重　複：第 22 号住居跡の（Ⅵ期）覆土上層にこの焼土跡が形成され、この上面にⅧ期の第３号炉跡が重複している。

時　期：Ⅵ期～Ⅷ期までの間に形成されたものと考えられる。　出土遺物：なし。

第 10 号焼土跡（図版第 145 図）

位　置：Ｉ５グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、平面形が長楕円形を呈する焼土である。

時　期：Ⅲ期（大木 7b 式並行期）頃と考えられるが明確ではない。

出土遺物：土器片（図版第 272 図 656）が焼土内から出土している。

第 11 号焼土跡（図版第 146 図）

位　置：Ｉ４グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、ローム層上面に形成された焼土で、焼土面とその周辺は非常に硬化していた。

重　複：I4 － P36 と重複している。

時　期：不明であるが、後期前葉期の住居に伴う炉跡に形態的に類似している。　出土遺物：なし。

第 12 号焼土跡（図版第 146 図）

位　置：Ｊ３グリッドに位置している。

形　態：焼土跡は、土坑などと重複関係にあり、その覆土上層に形成された焼土である。

重　複：多数の土坑などと重複している。

時　期：Ⅸ期（加曽利Ｂ１式並行期）。

出土遺物：焼土中から土器（図版第 275 図 658 ～ 660）が出土している。

第 13 号焼土跡（図版第 146 図）

位　置：Ｈ４グリッドに位置している。

形　態：遺構はローム層上面に形成された焼土跡であり、焼土面とその周辺が硬化していた。

重　複：Ｈ４－ P19 など多数の土坑と重複している。

時　期：不明であるが、Ⅷ～Ⅸ期の住居跡の炉跡に類似している。　出土遺物：なし。

３．竪穴状遺構

竪穴状遺構とは規模・炉跡・柱穴・周溝・床面などの形態、規模という点で竪穴住居跡の範疇に入らないもの、また土坑としては規模が大きいものをここでは竪穴状遺構とした。

竪穴状遺構（図版第 147 図）は、Ｊ３グリッドに位置しており、第３号住居跡の北側にある。径２ｍほどの円形を呈する浅い竪穴である。中央の小土坑には偏平礫が立てた状態で出土している。

出土遺物は、土器片が数点出土している（図版第 275 図 661 ～ 664）。この出土遺物からⅧ～Ⅸ期に造営されたものと考えられる。

4．長方形柱穴列

1）長方形柱穴列の認定方法について

この種の遺構は「掘立柱建物跡」などと呼称されており、港北ニュータウンにおける調査で初めてその存在が指摘されて、事例が増加している（註 55)。この種の遺構は、竪穴住居跡と異なり、柱穴同士が同一遺構であるという確証がないため配列を認定する作業はより困難である。このことから、重複があまり見られず、配列が明確なものからパターン化して、柱穴が規則正しく配列するものを結んだ。加えて、柱穴の深度・覆土・出土遺物、規模などから共通するものを検討した。しかし、本遺跡では重複が激しいことと、時期比定できる出土遺物が少なかったことや、個々の土坑覆土について堆積状況を記録していなかったため、ほとんど配列は認定できなかった。その結果、明瞭な事例は１基のみで、可能性のあるものが３基認められたのみである。その他は重複が激しいため、明瞭な配列を認識することが困難であり、その存在を保証する根拠を示し得なかった。従って 、ほとんどの柱穴に関しては、無理に配列を推定せずに土坑群として示している（図版第 153 図～第 162 図)。

2）形態分類

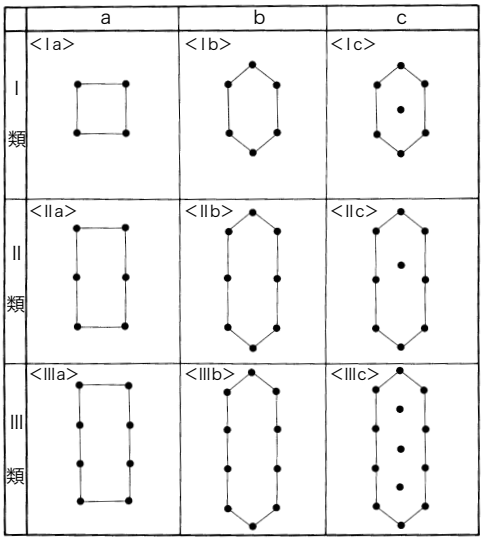
本遺跡から検出された明確な事例は少ないことから、周辺地域の遺跡の事例を含めて、柱穴配列の組み合わせをパターン化した（第 32 図)。

Ⅰ類：１辺が２本柱の形態。

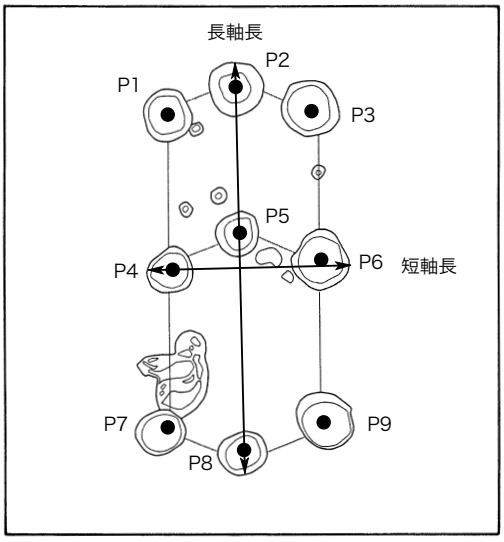
Ⅰａ類：柱穴配列が方形を呈し、４本主柱の形態。

Ⅰｂ類：柱穴配列が亀甲形を呈し、６本主柱の形態。

Ⅰｃ類：柱穴配列が亀甲形を呈し、６本主柱に加えて中心に柱穴を有する形態。



第 32 図　長方形柱穴列分類図



第 33 図　長方形柱穴列の計測部位

番号	グリッド	形態	時期	規模 長軸長(m)	規模 短軸長(m)	主軸方向	炉跡	柱穴数	周溝	備考
1	I6,I7	Ⅱc	Ⅶ	7.64	3.75	N-20°-E	無	9	無	柱穴にローム土を充填している。
2	I7	Ⅱc	不明	6.94	3.25	N-30°-E	無	10	無	
3	G4	Ⅰ	不明	4.62	4.14	N-28°-W	無	5	無	柱穴に根固め石を配している。
4	J3	Ⅱa	不明	7.2	3.18	N-50°-W	無	6	無	柱穴に根固め石を配している。

第６表　長方形柱穴列一覧表

Ⅱ類：1辺が3本柱の形態。

Ⅱa類：柱穴配列が長方形を呈し、6本主柱の形態。

Ⅱb類：柱穴配列が亀甲形を呈し、8本主柱の形態。

Ⅱc類：柱穴配列が亀甲形を呈し、9本主柱の形態。

Ⅲ類：1辺が4本柱の形態。

Ⅲa類：柱穴配列が長方形を呈し、8本主柱の形態。

Ⅲb類：柱穴配列が亀甲形を呈し、10本主柱の形態。

Ⅲc類：柱穴配列が亀甲形を呈し、13本主柱の形態。

3）計測方法

規模については、柱痕が不明であることから、便宜的に柱穴間の両端の最長部を計測した（第33図）。

＜各　説＞

第1号長方形柱穴列（図版第148図・第149図）

位　置：I6・I7グリッドに位置し、第2号長方形柱穴列の西側に隣接している。

形　態：本遺構は、廃棄帯中に位置し、廃棄帯上層から構築されたものと考えられる。柱穴はP1～P9が亀甲形に配列している。柱穴深度は、確認面から約30～70cmである。また柱穴内には地山土が堆積しており、これらは根固めとして柱穴内に充填されたものである可能性が大きい。

時　期：柱穴内の出土遺物から、Ⅶ期（後期初頭）に構築されたと推定される。

出土遺物：柱穴内から土器（図版第276図・第277図）、石器（図版第715図107）が出土している。Ⅲ～Ⅶ期の土器が出土しているが、Ⅲ～Ⅵ期の土器はもともと廃棄帯中に包含されていた土器が混入したものであると推定される。

第2号長方形柱穴列（図版第150図）

位　置：I7グリッドに位置し、第1号長方形柱穴列の東側に隣接している。

形　態：本遺構は、柱穴P1～P14が亀甲形に配列するが、やや不規則であり、別の配列をとる可能性も考えられる。柱穴深度は、確認面から約20～30cmと浅く、小形である。

時期：不明。　　出土遺物：特に無し。

第3号長方形柱穴列（図版第151図）

位　置：G4グリッドに位置している。

形　態：本遺構は、土坑群の中で関連して配列すると推定されるものを第3号長方形柱穴列とした。柱穴配列は柱穴P1～P5が5角形に配列するものである。柱穴のうちP4、P5で根固めと思われる礫が多量に認められた。柱穴深度は、確認面から約30～50cmである。

時　期：不明。　　出土遺物：特に無し。

第4号長方形柱穴列（図版第152図）

位　置：J3グリッドに位置し、第2号配石群と重複している。

形　態:本遺構は、柱穴P1～P6が長方形に配列することから、第4号長方形柱穴列とした。柱穴深度は、確認面から約35～100cmである。

時　期：不明。　　出土遺物：特に無し。

5. 配石遺構

1）配石遺構の概要

本遺跡から検出された配石遺構には幾つかのまとまりが認められた。調査時に検出された順番に1号配石群（1H）・2号配石群（2H）・3号配石群（3H）と呼称した。また、その中を小単位に区分した（例；1H－2号配石）。調査後、遺跡内の配石のまとまりに対して、第4号配石群を設定した。第1～3号配石群の構築時期は、配石周辺出土土器や配石下から出土した土器から、Ⅶ～Ⅸ期にかけて形成されたと考えられる。その中でも、配石墓出土の土器はⅧ～Ⅸ期のものが主体を占めている。

第1号・2号・3号配石群（図版第163図～第166図）：本遺跡からは、第1号配石群、第2号配石群、第3号配石群が検出され、半環状に配列している。これらは環状列石の範疇（註56）で捉えることも可能であるが、幾つかの点で環状列石の範疇から外れているため、ここでは配石遺構群として扱いたい。これら第1号配石群・第2号配石群・第3号配石群は、縄文中期に形成された環状集落の中央広場に位置している。造営時期は、Ⅵ～Ⅸ期（中期終末～後期中葉）の時期幅の中で捉えられる。配石墓から出土した土器はⅦ～Ⅸ期（後期初頭～中葉）のものが検出されていることから配石墓はこの時期に継続的に造営されたと考えられる。特に、Ⅷ期～Ⅸ期（堀之内2式～加曽利B1式並行期）は環内に住居が3軒構築され、集落構造に変化が見られる。これらの点から、配石遺構が集落構造の変化にともなって改変された可能性も考えられる。

第4号配石群（図版第190図）：A～B－3～4グリッドにおいて、礫が集中的に分布する区域が認められた。これらの下部に遺構は伴わず、組み方に規則性が認められなかった。また調査期間の制約もあり、平面図の記録に留めて、掘り進めたため詳細は不明である。

2）配石墓・配石（小単位に分かれるもの）

本遺跡では小単位の配石遺構が計30基ほど確認されている。これらは下部に土坑を持たないものと持つものがある。下部に土坑を持つものに関しては配石墓の可能があり、自然化学分析からも遺体が埋葬されていた可能性が示されている（付編3参照）。配石下の覆土は全て持ち帰り、微細な遺物を検出するために水洗い選別を行なった（註57）。配石形態には幾つかのパターンが認められ、以下のようなものが挙げられる。

A類：「端石（埋設立石）」、「縁石」、「敷石」から構成され、平面形が楕円形プランを呈する。構造的には多様性があり、縁石が墓坑壁面に立ち並ぶものや、舟形に敷石部が窪むものなどが認められる。また「端石」は柱状礫を埋設するものが特徴的に見られる。構成礫は円礫が主体となる（註58）。

B類：円形プランに「縁石」が巡るもので、やや不整形のもの。

C類：平面形が長方形を呈し、「縁石」が側面に配され、内側に「敷石」が配される。特に「敷石」は板状角礫により主体的に構成される。

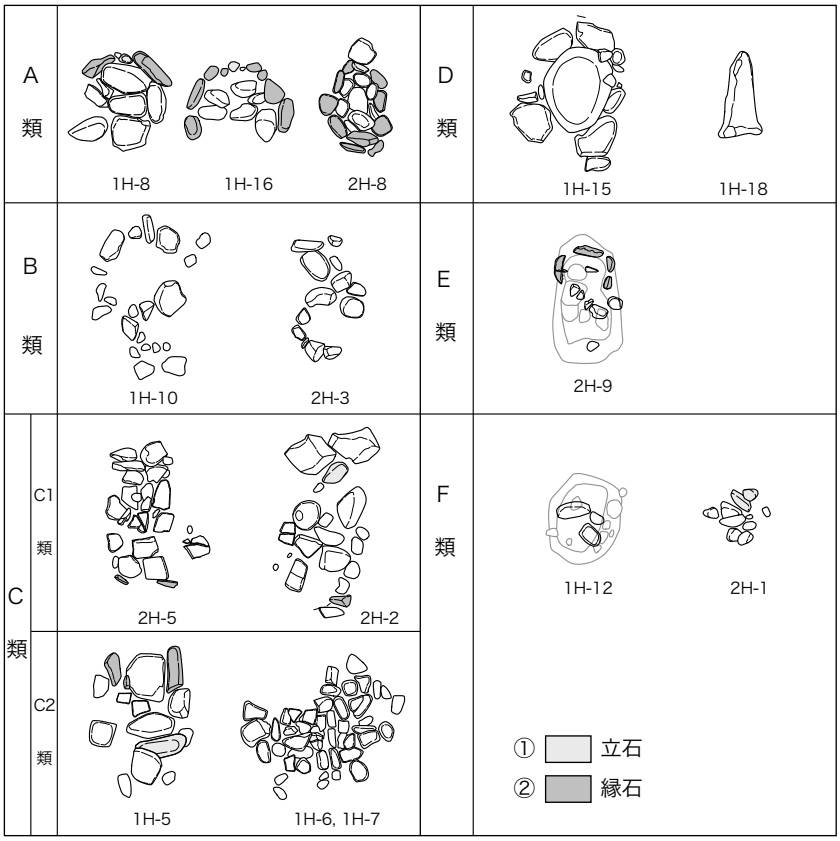
C類-1：一端に2か4個の中形礫が配される。

C類-2：その他のもの。

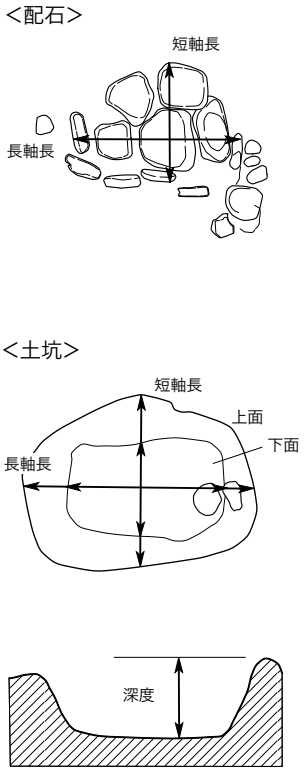
D類：1mほどの大形礫を中心として、周囲に「縁石」を持つものと持たないものがある。

E類：下部土坑の壁面に偏平礫を箱型に配するもの。

F類：その他の配石形態や小形の配石をまとめた。下部の土坑も比較的小形である。



第 34 図　配石遺構の形態分類



第 35 図　配石遺構の計測部位

番号	グリッド	形態	時期	配石規模		下部土坑						備考
				長軸長(m)	短軸長(m)	上面長軸(m)	上面短軸(m)	底面長軸(m)	底面短軸(m)	深度(m)	主軸	
1H−2	J1	F	Ⅶ〜Ⅸ期	1.98	1.16	—	—	—	—	—	—	
1H−3	J1, J2	C2	Ⅶ〜Ⅸ期	1.44	1.12	1.36	0.96	1.04	0.76	0.76	N-23°-W	
1H−4	J1	D	Ⅷ期	1.48	0.76	—	—	—	—	—	—	下部にフラスコ状土坑が重複。
1H−5	J2	C2	Ⅸ期	1.56	1.06	1.44	—	1.2	—	0.56	N-16°-W	甕被葬。
1H−6	J1	C2	Ⅶ〜Ⅸ期	1.12	0.78	1.24	0.72	1.04	0.56	0.36	N-14°-W	1H-7と接する。
1H−7	J1, J2	C2	Ⅶ〜Ⅸ期	1.48	0.82	1.6	0.88	1.2	0.64	0.44	N-15°-W	1H-6と接する。
1H−8	J1	A	Ⅶ〜Ⅸ期	1.2	1.08	1.76	0.96	1.2	0.6	0.76	N-8°-W	
1H−9	J2	F	Ⅶ〜Ⅸ期	1.24	0.8	—	—	—	—	—	—	下部にフラスコ状土坑が重複。
1H−10	J2	B	Ⅶ〜Ⅸ期	1.96	1.24	1.68	0.88	1.36	0.52	0.64	N-3°-E	
1H−11	J2	D	Ⅶ〜Ⅸ期	1	0.68	—	—	—	—	—	—	
1H−12	J2	F	Ⅶ〜Ⅸ期	0.64	0.36	0.64	0.84	0.8	0.52	0.48	N-14°-E	
1H−13	J2	D	Ⅶ〜Ⅸ期	1.92	1.58	—	—	—	—	—	—	下部にフラスコ状土坑が重複。
1H−14	J2	D	Ⅶ〜Ⅸ期	1.8	1.28	—	—	—	—	—	—	下部にフラスコ状土坑が重複。
1H−15	J2	D	Ⅸ期	1.56	1.16	2.06	1.52	1.44	1.04	0.52	N-56°-E	
1H−16	J2	A	Ⅷ期	0.94	1.24	1.6	1.36	1.08	0.72	0.44	N-4°-E	
1H−17	J2	D	Ⅶ〜Ⅸ期	0.74	0.6	1.6	1.52	1.2	1.04	0.52	N-72°-E	
1H−18	J2	D	Ⅶ〜Ⅸ期	1	0.36	1.84	1.32	1.04	0.56	0.8	N-7°-W	
2H−1	J3	F	Ⅶ〜Ⅸ期	0.66	0.6	1.12	0.72	0.68	0.52	0.84	N-59°-W	
2H−2	J3	C1	Ⅶ期	2.36	1.04	1.84	1.1	1.36	0.56	0.92	N-47°-W	甕被葬。
2H−3	J3, I3	B	Ⅸ期	1.4	0.8	1.6	0.96	1.1	0.68	0.6	N-45°-W	甕被葬。
2H−4	I3	A	Ⅷ期	1.16	0.88	1.52	0.76	1	0.56	0.68	N-81°-W	甕被葬。
2H−5	I3	C1	Ⅶ〜Ⅸ期	1.6	0.76	1.88	0.96	1.44	0.46	0.64	N-69°-W	
2H−6	I3	D	Ⅶ〜Ⅸ期	1.2	0.88	—	—	—	—	—	—	下部に掘り方。
2H−7	I3	—	Ⅶ〜Ⅸ期	0.88	0.76	—	—	—	—	—	—	近代に壊された配石の一部。
2H−8	I3	A	Ⅸ期	1.32	0.76	2.63	0.96	1.12	0.4	0.72	N-75°-W	
2H−9	I3	E	Ⅸ期	0.64	0.68	1.52	0.76	1	0.56	0.24	N-13°-W	石棺墓的配石
2H−10	J3	F	Ⅶ〜Ⅸ期	0.2	0.2	1.12	0.68	0.8	0.44	0.39	N-83°-E	
1号立石	I2	—	不明	—	—	0.48	0.46	3.2	0.26	0.36	—	立石遺構
2号立石	I3	—	不明	—	—	0.76	0.68	0.44	0.46	0.56	—	立石遺構
J5-1H	J5	—	Ⅶ〜Ⅸ期	6.8	2.8	—	—	—	—	—	—	住居跡などに伴う可能性あり。
F2-P2, P3	F2	D	不明	0.8	0.7	—	—	—	—	—	—	

第 7 表　配石遺構一覧表

＜配石遺構各説＞

1H－2号配石（図版第 167 図、写真図版８）

配　石：円礫・柱状円礫・板状礫などを馬蹄形に配されているが、規則的な配列は認められなかった。

下部遺構：配石下部にフラスコ状土坑（1H－P 3）が重複している。フラスコ状土坑覆土下層からは、Ⅴ期（大木 8b 式並行期）の土器が主体的に出土している。また覆土の土層断面からは、他の土坑の掘り込みは確認できなかった。配石の形態からも、配石下部に土坑を伴わない可能性が高い。

時　期：出土遺物からは不明であるが、Ⅶ～Ⅸ期にかけて造営されたと考えられる。

出土遺物：配石下部の土坑覆土から、土器（図版第 279 図 720 ～ 725）が出土している。

1H－3号配石（図版第 168 図、写真図版８）

配　石：板状礫・偏平礫を配するもので、縁石とその内側に偏平礫が列状に配されている。縁石の配列は不明瞭であり、一部の礫が抜き取られている可能性もある。

下部遺構：配石下部に土坑を伴っている。覆土は地山ブロックを多量に含んでいることから、人為的な埋土と判断される。このことから墓坑である可能性が高い。

時　期：出土遺物からは不明であるが、Ⅶ～Ⅸ期（後期前半期）に造営されたものと想定される。

出土遺物：土器小片などが数点出土したのみである。

1H－4号配石（図版第 169 図）

配　石：大形礫を中心に不規則に礫が配され、土坑の北端部に柱状礫が立位で埋設されていた。

下部遺構：下部には土坑が伴っており、墓坑であると考えられる。また南側ではフラスコ状土坑（1H－P 3）が重複しており、西側上層には多量の礫が包含されていた。また北側では J1 － P11（図版第 213 図）と重複している。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：下部土坑の覆土からは、土器（図版第 279 図 726 ～ 733）、などが出土している。730 は小形土器の破片であるが、覆土中層から倒立で出土している。

1H－5号配石（図版第 170 図、写真図版８）

配　石：板状礫や円礫から構成され縁石の間に板状礫が敷設されている。また南側の柱状礫は検出時に斜めに抜き取られた状態で検出されたが、下部土坑内の土層観察からこれが設置されていたと思われる土坑が確認できた。これらから柱状礫は立石として立っていたと推測される。

下部遺構：配石下部には隅丸長方形を呈する土坑が伴う。土坑覆土は、地山ブロックを多く含む人為的な埋土であり、遺物の出土状況からも墓坑である可能性が高い。

時　期：Ⅸ期（加曽利Ｂ１式並行期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 280 図 734 ～ 738）、石器が出土している。737 は完形の浅鉢形土器で、土坑北端部の底面よりやや浮いた位置から逆位で出土している。この土器は、被葬者の顔に被せられた「甕被葬」であると想定される。

1H－6号配石（図版第 171 図、写真図版９）

配　石：配石は円礫と板状礫を配し、２列の縁石の間に板状礫を敷設するものである。北側には小形の柱状礫が埋設されていた。東側に隣接する 1H － 7 号配石と配石形態が類似している。

下部遺構：配石下部には楕円形を呈する土坑を伴う。土坑覆土は３層に区分できたが、特に２層は地山粒子が多量であることから人為的な埋土であると考えられる。墓坑である可能性が高い。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：配石下部の土坑から、少量の土器（図版第 280 図 739 ～ 741）が出土している。

1H －７号配石（図版第 171 図）

配　石：配石は偏平円礫・板状角礫を配し、２列の縁石の間に板状礫を敷設するものである。西側に隣接する１H －６号配石と形態的に類似している。

下部遺構：配石下部に土坑が伴い、土坑覆土は地山ブロックを多く含でいる。人為的な埋土であると考えられることから、墓坑である可能性が高い。

時　期：Ⅶ期～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）。

出土遺物：配石下部の土坑からは、土器（図版第 280 図 742 ～第 281 図 746）が数点出土している。

1H －８号配石（図版第 172 図、写真図版９）

配　石：偏平円礫・柱状円礫などで構成され、主軸の南端には１ｍほどの柱状礫が埋設されていた。この柱状礫の両端に棒状礫がハ字状に配され、その内側に偏平礫が敷設される。

下部遺構：配石下部には平面形が隅丸方形を呈する土坑が伴う。土坑覆土は２層に区分され、地山粒子やブロックが少量含まれていることから、埋土であると考えられる。これらから墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：配石下部の土坑覆土から、土器（図版第 281 図 747 ～ 750）や石器が出土している。

1H －９号配石（図版第 173 図）

配　石：円礫と板状礫から構成される比較的小規模な配石である。板状礫の南側に円礫が立てて置かれ、その周囲にこれに伴うと思われる円礫が配されている。

下部遺構：配石下部からはフラスコ状土坑（１H －Ｐ２）が検出されているが、フラスコ状土坑はⅤ期（大木８ｂ式並行期）のもので、配石に伴うものではない。またフラスコ状土坑に重複して墓坑が掘り込まれている可能性も想定されるが、覆土土層断面からは明確に墓坑の掘り込みは確認できなかった。

時　期：出土遺物からは不明であるが、Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）と考えられる。

出土遺物：下部のフラスコ状土坑覆土から土器（図版第 281 図 751 ～ 757）、などが出土しており、Ⅴ期～Ⅵ期の土器が出土しているが、フラスコ状土坑埋没に伴う遺物であると思われる。

1H －10 号配石（図版第 174 図）

配　石：径約１ｍほどの円形に円礫・角礫が配されている。

下部遺構：配石下部には平面形が長楕円形を呈する土坑が伴い、土坑覆土には地山ブロックを多量に含んでいることから人為的な埋土であると考えられる。墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：土坑の覆土から、土器（図版第 282 図 758 ～ 760）が出土している。

1H －11 号配石（図版第 175 図）

配　石：長径１ｍを超える大形円礫が浅く大きな土坑に埋設されている。

下部遺構：配石下部には、土坑が伴っていない。

時　期：出土遺物からは不明であるが、Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）と考えられる。
出土遺物：配石下部の掘り方から、土器（図版第 282 図 761）が数点出土している。

1Ｈ－12 号配石（図版第 167 図）

配　石：３つの円礫と角礫を組んだ簡素なものである。
下部遺構：配石下部には隅丸方形を呈する小形の土坑が伴っており、墓坑の可能性が高い。
時　期：出土遺物からは不明であるが、Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）と推定される。
出土遺物：なし。

1Ｈ－13 号配石（図版第 176 図、写真図版９）

配　石：約 0.4 ～１ｍの大形・中形の亜角礫がまとまっていたものである。
下部遺構：配石下部からはフラスコ状土坑（1Ｈ－Ｐ１）が検出されている。フラスコ状土坑は、出土遺物からⅤ期（大木８ｂ式並行期）に帰属するもので、配石に伴う土坑ではないと考えられる。
時　期：出土遺物からは不明であるが、Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）に造営されたと考えられる。
出土遺物：土器（図版第 282 図 762 ～ 764）や、石鏃２点（図版第 715 図 115・117）、などが出土している。

1Ｈ－14 号配石（図版第 177 図）

配　石：長径約１ｍほどの大形偏平円礫を中心に、中形の角礫が周囲にまとまっている。
下部遺構：配石下部には明確な土坑は伴わず、南側にフラスコ状土坑（1Ｈ－Ｐ１）の上部が崩落によるものと思われる落ち込みが認められたのみである。
時　期：出土遺物からは不明であるが、Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）に造営されたと考えられる。
出土遺物：配石下部からは、土器片が少量出土している。

1Ｈ－15 号配石（図版第 178 図、写真図版９）

配　石：長径１ｍほどの大形偏平円礫を中心に、周囲に偏平円礫や角礫を円形に配している。
下部遺構：配石下部に楕円形の土坑を伴う。下部土坑の覆土は２層に区分され、２層には地山ブロックを少量含んでいることから、人為的な埋土であると判断される。これらから墓坑の可能性が高い。
時　期：Ⅸ期（加曽利 B1 式並行期）。
出土遺物：配石下部の土坑からは、土器（図版第 282 図 765 ～ 768）、石器（図版第 717 図 123）などが出土している。凹石（123）は、土坑底面からやや浮いた位置から出土している。

1Ｈ－16 号配石（図版第 179 図、写真図版９）

配　石：土坑壁面に柱状円礫や偏平円礫が馬蹄形に立て並び、土坑上面に偏平円礫が敷かれている。
下部遺構：配石下部に楕円形の土坑が伴い、墓坑と考えられる。土坑内の覆土は３層に区分されるが、１層は攪乱層である。２・３層は地山を多く含む層であり、埋土と考えられ、墓坑の可能性が高い。
時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。
出土遺物：配石下部の覆土から、土器（図版第 282 図 769・770）が数点出土している。

1Ｈ－17 号配石（図版第 180 図）

配　石：長径１ｍほどの円礫のみが、土坑の北東端に配されている。

下部遺構：配石下部には楕円形の土坑を伴っており、墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅵ期～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）に造営されたと推定される。

出土遺物：配石の脇や下部土坑から、土器（図版第 282 図 771 ～第 283 図 778)、石器（図版第 717 図 114）が出土している。114 は覆土の水洗選別によって検出されたもので、出土位置は不明である。

1Ｈ－18 号配石（図版第 181 図）

配　石：長径１ｍほどの大形亜角礫を配するもので、礫の周辺には現代の攪乱が認められる。

下部遺構：配石下部に楕円形の土坑が伴っており、墓坑の可能性が高い。

時　期：出土遺物からは不明であるが、Ⅶ期～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）に造営されたと推定される。

出土遺物:配石下の土坑内から、土器（図版第 283 図 779･780）や、石器（図版第 717 図 113）が出土している。石槍（13）は、覆土中層から出土している。

２Ｈ－１号配石（図版第 182 図、写真図版 10）

配　石：柱状円礫２つが立石状に配され、その西側に板状礫が付属する小形の配石である。

下部遺構：配石下部には楕円形を呈する小形の土坑が伴っている。土坑覆土には、地山ブロックが多く含まれていることから人為的な埋土であると考えられる。墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅶ期～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）に造営されたと推定される。

出土遺物：なし。

２Ｈ－２号配石（図版第 183 図、写真図版 10）

配　石：長方形のプランを呈し、偏平円礫や板状角礫から構成されている。東側に２つの亜角礫を配し、その脇に偏平礫を立石状に配し、西側端部に板状礫を立て並べ、その間に板状礫や偏平礫を配するものである。２Ｈ－５号配石と形態的に類似している。

下部遺構：配石下部に隅丸長方形を呈する土坑を伴っている。土坑覆土は３層に区分できたが、全体的に地山粒子・地山ブロックを多量に含んでおり、人為的な埋土と考えられる。墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅶ期（三十稲場式期）以降に造営されたと考えられる。

出土遺物：下部土坑の覆土から、土器（図版第 283 図 781・782)、などが出土している。土器 781 は、配石下部の土坑東端の底面から出土したものである。この土器片は土坑端部にあることから被葬者の顔部に被せられていたものと推定される。

２Ｈ－３号配石（図版第 183 図）

配　石：円礫と亜円礫から構成され、一部円形に配されているが、規則性は認められない。

下部遺構:配石下部に楕円形を呈する土坑を伴う。土坑覆土は、土層断面図を示していないが、地山ブロックを多く含む層があり、人為的な埋土であると考えられる。墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期)。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 284 図 783 ～ 785）が出土している。土器 783 は、土坑の北側壁面から出土しており、被葬者の顔部に被せられていた「甕被葬」であると推定される。

２Ｈ－４号配石（図版第 185 図、写真図版 10）

配　石:片側に縁石を巡らせて、内側に偏平礫を敷き並べ、西側端部に板状円礫が立石状に埋設されている。

下部遺構：配石下部に隅丸長方形を呈する土坑を伴う。土坑覆土は、全体的に地山粒子・地山ブロックを少量含んでいることからも人為的な埋土であると考えられる。墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 284 図 786 ～ 789）、石器（図版第 717 図 124）が出土している。787 は完形の浅鉢形土器で、土坑底面から逆位で出土している。これは被葬者の顔部に被せた「甕被葬」であると推定される。また覆土の水洗選別で検出されたもので位置不明であるが、石鏃（124）が出土している。

２Ｈ－５号配石（図版第 186 図、写真図版 10）

配　石：長方形の平面形を呈するものである。東側に４つの亜角礫を配し、西端部に板状礫で区画し、内部に板状礫を敷き並べるものであり、2H － 2 号配石と形態的に類似している。

下部遺構：配石下部には長楕円形を呈する土坑が伴う。土坑覆土は、３層に区分することができ、全体的に地山ブロックを含んでいることから、人為的な埋土であると考えられる。また土坑底面の一端に小さな落ち込みが見られる。墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 282 図 790）が出土している。

２Ｈ－６号配石（図版第 187 図）

配　石：径１ｍほどの大形礫が土坑内に埋設され、その周囲に柱状礫・円礫が配されている。この大形礫の上面は現代の攪乱によって破砕している。また隣接する 2H － 7 号配石は、検出時に一つの配石単位と認識していたものであったが、現代の攪乱によって穴の中に埋められたものであると推測される。根拠としては、土坑覆土が攪乱層であったことと、礫に現代の石切り痕が残っていたことが挙げられる。この礫は隣接する 2H － 6 号の大形礫が破壊された一部である可能性が想定される。

下部遺構：下部に土坑は伴わず、配石は浅い土坑に埋置されていた。

時　期：出土遺物からは不明であるが、Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式期～加曽利Ｂ１式並行期）に造営されたと考えられる。

出土遺物：なし。

２Ｈ－８号配石（図版第 188 図、写真図版 10）

配　石：円礫から構成され、楕円形の平面形を呈している。縁石を巡らせて内部に偏平礫を敷き詰めるもので、主軸の西端部には小形の立石が配され、その西側に亜角礫が配されている。縁石内部は落ち込み、舟形を呈している。内部の落ち込みは自然に落ち込んだものではなく、構築時に意図的に構築されたものである。

下部遺構：配石下部には長楕円形を呈する土坑が伴っている。土坑覆土は、地山ブロックを多量に含むことから埋土と考えられる。墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅸ期（加曽利Ｂ１式並行期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 284 図 791）が出土している。

２Ｈ－９号配石（図版第 189 図）

配　石：４つの偏平礫を土坑壁面にコ字状に配したもので、上部には明確な配石は認められない。

下部遺構：隅丸長方形を呈する小形の土坑であり、土坑覆土は、地山を多く含んでいることから埋土であると考えられる。また炭化物や焼土が含まれていないことから、炉跡ではなく墓坑の可能性が高い。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 284 図 792）が出土している。

２Ｈ－ 10 号配石（図版第 182 図）

配　石：球状の礫が１点のみ配されている。

下部遺構：配石下部にはやや小形の土坑が伴い、覆土は埋土であることから配石墓であると考えられる。

時　期：Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式期～加曽利Ｂ１式並行期）と考えられる。

出土遺物：なし。

J5 －１号配石（図版第 189 図）

配　石：礫が無造作に分布し、規則的な配列は認められない。

下部遺構：明確に伴う遺構は確認できなかった。

時　期：不明。　　出土遺物：なし。

Ｆ２－Ｐ２（図版第 187 図）

配　石：３H の列石から離れて、径約 0.8 mほどの円礫だけが検出されている。

下部遺構：下部に大形の土坑があるが、土坑の形態や深さから配石に伴うかは不明である。

時　期：不明。　　出土遺物：なし。

１号立石（図版第 186 図）

配　石：柱状礫のほぼ全体が、小形の土坑に埋設されていた。

出土遺物：なし。　　時　期：不明。

２号立石（図版第 186 図）

配　石：柱状礫はほぼ全体が、小形の土坑に埋設されていた。

出土遺物：なし。　　時　期：不明。

３）配石遺構構成礫

配石遺構の構成礫 309 点を対象として、石質、重量、大きさなどについて分析を行なった（第 38 図）。その結果、総重量は 9214.5kg を計り、平均 29.8kg、最大重量のものは 613kg に及んだ。これらの分析結果は次のようにまとめられる。

ａ．石質について：構成礫の石質に関しては、安山岩、プロピライト（変質安山岩）・花崗岩・閃緑岩・輝緑岩・ヒン岩、などが認められた（註 59）。その９割以上は安山岩が占めており、点数による割合は、安山岩 82.5%、プロピライト１%、花崗岩・閃緑岩 1.6%、輝緑岩 3.9%、ヒン岩 2.9%で、不明は約 88.1%である。重量での割合は、安山岩 91.5%、プロピライト 0.04%、花崗岩･閃緑岩 1.4%、輝緑岩 1.1%、ヒン岩 1.9%、不明４%である（第 36 図１・２）。

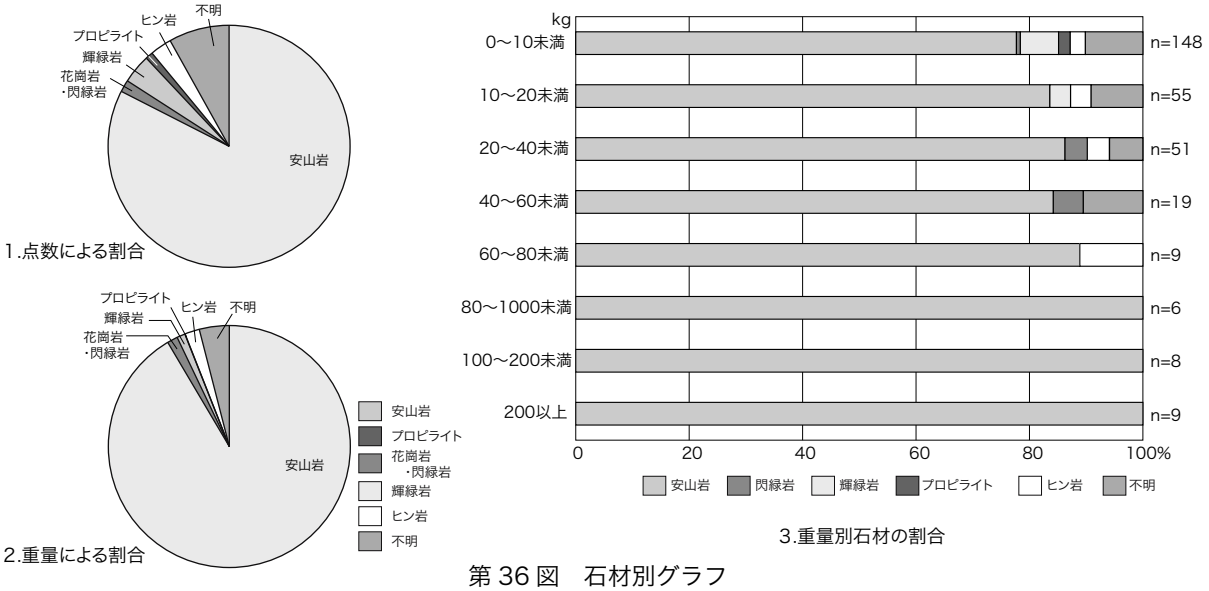
ｂ．大きさと重量：石材別の大きさは、第 36 図のような幅を示し、平均約 36 × 24.4cm で最大のものは 118 × 77cm である（第 37 図）。また石材別の重量は安山岩が平均 33kg で、閃緑岩が平均 25kg で、輝緑岩が平均 8.4kg で、プロピライトは平均 1.1kg で、ヒン岩が平均 19.5kg である。60kg を超える大形礫は、全て安山岩である（第 36 図３）。

ｃ．形状・加工痕、等：配石遺構に用いられた礫の形状は、円礫・角礫・亜角礫があり、円礫は球状、柱状を呈するものもあるが、ほとんどが偏平状を呈している。また角礫はほとんどが板状節理をもつも

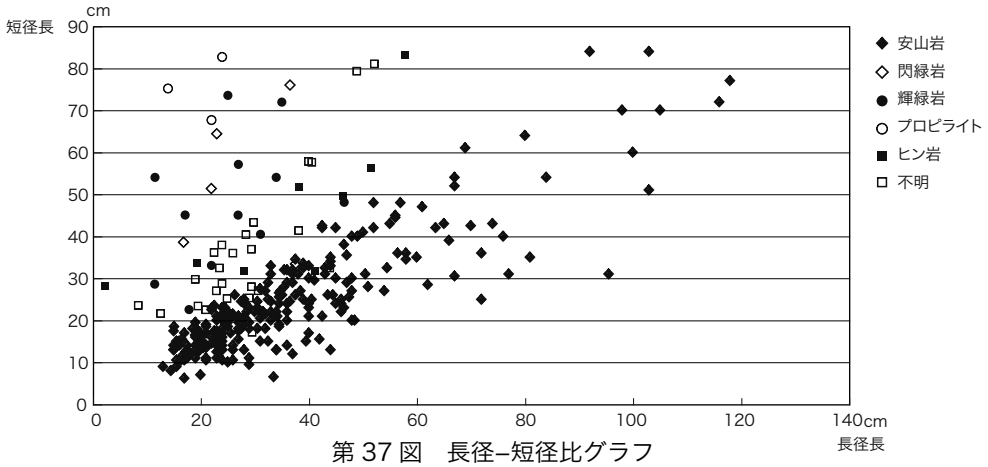
のである。加工痕を持つものは、柱状礫で立石として用いられたものに顕著な磨痕が認められた。また板状節理を有する安山岩には、被熱による赤化が見られる。この被熱痕は板状礫の加工に関わる可能性も想定される。また 2H － 6 号配石の礫２点が接合しており、構築の際に破砕した可能性がある。礫形状の加工は配石を構築する工程の一工程を示していると考えられる。

ｄ．石材採集場所：これらの石材は、遺跡周辺の河原などから搬入されたものと考えられ、遠距離から搬入された石材は確認できなかった。本遺跡周辺の石材分布調査の結果から、産出地は次のように推定することができる。まず安山岩は配石の約９割を占める石材であるが、これらは信濃川、中津川、釜川の河原や遺跡が立地する段丘崖から採集可能である。特に、100kg を超える大形礫は、信濃川・中津川の川原というよりは、貝坂段丘の段丘崖から搬入された可能性が高いと考えられる。また柱状節理を持つ安山岩は、清津川の支流である釜川で採集可能であり、柱状礫や板状礫はそこから運ばれたものと推定される。またプロピライトは熱変成を受けた安山岩で、中津川上流域で採集可能である。また花崗岩・閃緑岩や輝緑岩とヒン岩は、清津川で採集可能であり、この川原から採取されたと考えられる。これらの多くは、遺跡の 2.5km から３km 圏内から採集されて搬入された石材であると推定される。

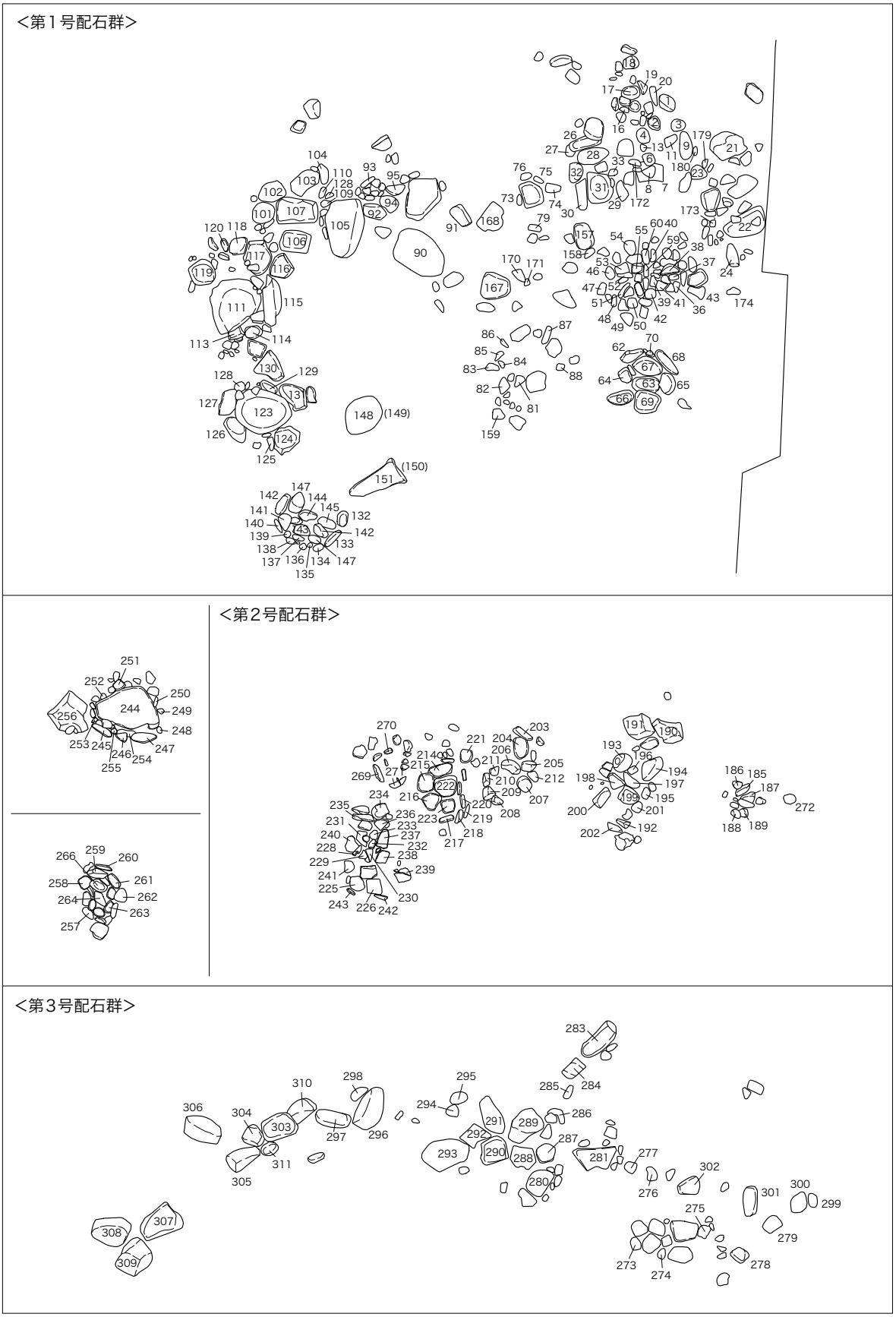
以上が配石遺構の構成礫についての分析結果である。これらが配石遺構構築作業の一側面を示していると言えるだろう。



第 36 図　石材別グラフ



第 37 図　長径–短径比グラフ



第 38 図　配石遺構の礫番号

6．埋設土器

本遺跡からは、埋設土器が 15 基検出されており（図版第 191 図～第 192 図、第８表)、ピット群の範囲に分布している。ここでは住居跡に伴うもの以外を対象とし、土坑に土器が埋設されていたものを全て埋設土器に含めており、複数の種類の遺構が含まれていると思われる。埋設土器の区分は、以下のような可能性が想定される。

（1）炉体土器の残存：ピット群の区域はとりわけ包含層の遺存度が悪かったこともあり、炉跡が壊れたものの残存部分と考えられるもの。これらは土器内部に焼土や炭化物が含まれており、底部付近を使用する場合が多い。

（2）住居跡床面に埋設されたいわゆる「埋甕」：本地域の場合、複式炉の入口部に埋設土器を伴う事例が見られる。この特色としては、上に偏平礫が蓋状に付属する点が挙げられる。底部を欠いた倒立の土器が多いようである。

（3）埋葬施設と考えられるもの：埋設状態で土坑に完全に埋められているもの。

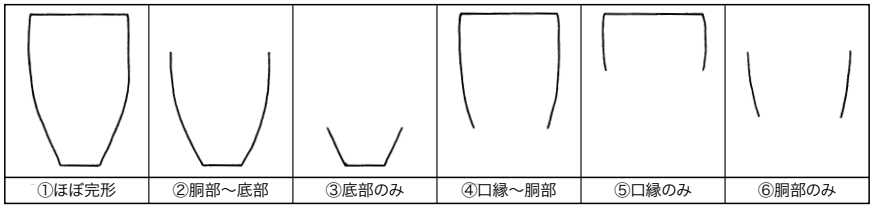
本遺跡から検出されたものは、３種類に分類することが可能である。これらの調査データは良好なものは少ないが、調査記録から検討を加えておきたい。また土器の遺存率については、第 39 図のように分類しておきたい。

＜埋設土器各説＞

I3 － P38（図版第 191 図）

形　態：本遺構は、直径約 50cm の円形の土坑に深鉢形土器が逆位で埋設されている。また土器内部や周辺からは焼土や炭化物は認められなかった。

土　器：埋設土器に用いられている土器（図版第 285 図 793）は、口径約 35cm の深鉢形土器で、倒立で埋設していた。土器は胴部以下が欠損している。



第 39 図　埋設土器の形態分類

番号	グリッド	土坑規模			覆土	時期	器種	埋設状態	遺存部位	付帯物	備考
		長軸長(m)	短軸長(m)	深度(m)							
I3-P38	I3	0.5	0.46	0.2	—	Ⅵ	深鉢	逆位	5	—	
I4-P89	I4	0.64	0.64	0.7	—	不明	深鉢	正位	2	—	
I4-P90	I4	0.68	0.5	0.4	—	不明	深鉢	正位	3	—	
K1-P14	K1	—	—	—	—	中期	両耳壺	正位	1	偏平礫	
K1-P8	K1	—	—	—	—	Ⅵ	深鉢	正位	3	偏平礫	住居跡に付帯する可能性。
J2-P4	J2	0.72	0.6	0.2	—	Ⅷ	注口土器	倒立	1	—	
J3-P50	J3	0.84	0.76	0.52	—	中期	深鉢	倒立	4	—	
K3-P3	K3	0.72	0.56	0.48	—	Ⅵ	瓢箪形土器	正位	3	柱状礫	墓の可能性あり。
K3-P2	K3	—	—	0.32	—	Ⅵ	深鉢	倒立	5	—	
3号埋設土器	—	—	—	—	—	Ⅶ	深鉢	正位	6	—	
5号埋設土器	—	—	—	—	—	Ⅵ	深鉢	正位	3	—	土器内部から土器片が出土している。
6号埋設土器	—	—	—	—	—	不明	深鉢	正位	3	—	
7号埋設土器	—	—	—	—	—	中期	深鉢	逆位	5	—	
8号埋設土器	—	—	—	—	—	Ⅵ	瓢箪形土器	正位	3	—	
10号埋設土器	—	—	—	—	—	中期	深鉢	正位	2	—	

第８表　埋設土器一覧表

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）に比定される。

I4 － P90（図版第 191 図）

形　態：本遺構は、直径約 65cm の楕円形の土坑に深鉢形土器の胴下半部が正位で埋設されていた。土器内部や周辺からは焼土や炭化物は検出されていない。I4 － P89 に隣接しており、両者は関連していると思われる。

土　器：土器（図版第 285 図 794）は、深鉢形土器で胴部から底部にかけて遺存している。

時　期：Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式期～加曽利Ｂ１式並行期）に比定される。

I4 － P89（図版第 191 図）

形　態：本遺構は、直径約 65cm ほどの浅い土坑に土器の底部付近が正位で埋設されていた。土器内部や周辺からは焼土や炭化物は検出されていない。

土　器：埋設土器に使用されている土器（図版第 285 図 795）は、深鉢形土器の底部である。

時　期：Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式期～加曽利Ｂ１式並行期）に比定される。

K1 － P14（図版第 191 図）

形　態：複数の土坑が重複しているが、この中からほぼ完形の土器が正位の状態で出土している。土器の上部には偏平円礫が付帯していた。この周辺からは焼土・炭化物は検出されていない。住居内入口部の埋設土器に形態的に類似している。

土　器：埋設土器に用いられていた土器（図版第 285 図 796）は、両耳壺である。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）に比定される。

K1 － P8（図版第 193 図）

形　態：本遺構は調査区南西端に位置しており、直径約 60cm の浅い土坑から土器の底部が正位で出土している。土器内部からは、凹石（図版第 723 図 172）が出土している。また土器内部や周囲からは焼土・炭化物は検出されていない。

土　器：埋設土器に使用されている土器(図版第285図797)は、深鉢形土器の底部であり、地文縄文のみである。

時　期：不明。

J2 － P4（図版第 193 図）

形　態：本遺構は１号配石群の東側に隣接し、直径約 70cm の浅い土坑に、注口土器が逆位で埋設されていた。この土坑覆土やその周辺から焼土・炭化物は検出されていない。

土　器：埋設土器に使用されていた土器（図版第 286 図 798）は、注口土器でほぼ完形であるが部分的に欠損していた。

時　期：Ⅷ期（南三十稲場式期）に比定される。

K3 － P3（図版第 192 図）

形　態：本遺構は、直径約 70cm の土坑に土器が正位で埋設されており、土器の上には立石状の礫が伴っていた。この土坑覆土からは焼土・炭化物は検出されていない。

土　器：埋設土器に使用されている土器（図版第 286 図 799）は、瓢箪形注口土器である。この土器は胴部下半から底部にかけて遺存している。

時　期：Ⅵ期～Ⅶ期（沖ノ原式期～三十稲場式期）に比定される。

K3 － P2（図版第 192 図）

形　態：本遺構は、約 70cm ほどの浅い土坑に深鉢形土器が逆位で埋設されていた。この土坑覆土およびその周辺からは焼土・炭化物は検出されていない。

土　器：埋設土器に使用されている土器（図版第 287 図 800）は深鉢形土器で、口縁部から胴部が遺存している。地文縄文に刻目隆帯が巡るものである。

時　期：VI期（沖ノ原式期）に比定される。

J3 － P50（図版第 192 図）

形　態：本遺構は、約 80cm の土坑から深鉢形土器が逆位で出土している。この土坑覆土やその周辺からは焼土・炭化物は検出されていない。

土　器：土器（図版第 319 図 1203）は粗製の深鉢形土器で、胴部下半から底部を欠損している。

時　期：不明。

第３号埋設土器

形　態：浅い土坑に、土器の胴部が正位で埋設されていた。その他の詳細は不明である。

土　器：土器（図版第 287 図 801）は、深鉢形土器の胴部である。

時　期：出土土器からⅦ期（三十稲場式期）に比定される。

第５号埋設土器

形　態：円形の土坑の上層に、深鉢形土器の底部が正位で埋設されていた。土器内部や周辺からは焼土・炭化物は検出されていない。

土　器:土器（図版第 287 図 802）は､深鉢形土器の底部付近である。この内部からは別個体の土器片（803）が出土している。

時　期：VI期（沖ノ原式期）に比定される。

第６号埋設土器

形　態：浅い楕円形の土坑に、深鉢形土器の底部が正位で埋設されていた。土器内部には炭化物が多量に含まれていた。炉跡内の炉体土器であった可能性がある。

土　器：土器（図版第 287 図 804）は、深鉢形土器で、底部から約 10cm ほどが遺存している。

時　期：不明。

第７号埋設土器

形　態：浅い不整楕円形の土坑に、深鉢形土器の口縁部が埋設されていた。この土器内部や周辺からは焼土や炭化物は検出されていない。

土　器：土器（図版第 287 図 805）は深鉢形土器の口縁部のみである。この周辺から瓢箪形注口土器（図版第 287 図 806）の胴部下半が出土している。

時　期：不明。

第 10 号埋設土器

形　態：土坑には、深鉢形土器の胴部から底部が正位で埋設されていた。

土　器：土器（図版第 287 図 807）は、深鉢形土器で胴部から底部までが遺存していた。

時　期：不明。

7．土　坑

本遺跡からは約 2000 基ほどの土坑が検出されている。ここで土坑とするものは、明確に住居跡に伴う柱穴を除いたものを対象としている。これらの土坑は平面形・断面形から幾つかに分類可能であり（第 40 図)、フラスコ状土坑、墓坑、建物跡の柱穴、などがある。

（1）フラスコ状土坑：上面径よりも底面径が広くなり、断面形がフラスコ状になるもの。底面中央に浅い小土坑を有するものがあり、覆土は、壁面崩落土と思われる地山がブロック状に堆積している。また完形土器が数個体出土するものや、墓坑として転用される事例もある。

（2）墓坑：典型的なものとして平面形が円形や楕円形のもので、掘り込みが浅く、覆土は地山ブロック・粒子を多く含む埋土である。墓坑の認定基準については、幾つか指摘されているが（註 60)、本遺跡では人骨が遺存していないため、認定はより困難である。

（3）陥穴状土坑：細長い土坑や、底面に小土坑を有するものなど、幾つかの形態がある（註 61)。

（4）建物跡の柱穴：平面規模は 1 m以下で、長径に比べて深度が長くなる。掘立柱建物跡や高床式建物跡の場合は比較的深いと考えられる。また柱穴覆土には柱痕が残るものもある。

（5）その他：性格不明の土坑。ゴミ穴、埋納、土の採取などが想定される。

これらは重複により遺存状態が良好ではなく、土層の記録がほとんど存在しないため、明確に区分するのは難しい。よって、「フラスコ状土坑」と「土坑」に区分して報告する。

1）フラスコ状土坑

本遺跡から検出されたフラスコ状土坑は 17 基であるが、規模や底面の小土坑の有無などの点において多様性がある。以下のように分類される（註 62)。

Ⅰ類：底面長径が 100cm 未満のもの。

Ⅰ a 類：底面中央部に小土坑がないもの。

Ⅰ b 類：底面中央部に小土坑を有するもの。

Ⅱ類：底面長径 100cm 以上のもの。

Ⅱ a 類：底面中央部に小土坑がないもの。

Ⅱ b 類：底面中央部に小土坑を有するもの。

番号	グリッド	形態	時期	上面		底面		深度(cm)	底面小土坑	備考
				長軸長(cm)	短軸長(cm)	長軸長(cm)	短軸長(cm)			
00-P1	拡張区	Ⅱa	Ⅵ	156	144	124	108	50	無	
16BJ-P1	C3	Ⅰb	Ⅲ	122	120	96	92	36	有	16B住に切られている。
11J-P1	C2	Ⅰa	不明	104	92	89	84	84	無	11住と重複。
E1-P5	E1	Ⅰb	不明	120	—	93	—	114	有	
E2-P36	E2	Ⅰa	Ⅵ	108	72	82	60	100	無	
G2-P52	G2, G3	Ⅰa	Ⅶ	85	74	92	84	70	無	周囲に小土坑、棒状礫を伴う。
H3-P39	H3	Ⅰa	不明	82	64	88	42	70	無	
H4-P75	H4	Ⅱa	Ⅶ	182	179	119	114	64	無	
H4-P201	H4	Ⅱa	Ⅵ	147	—	126	—	52	無	4号住と重複。
J4-P23	J4	Ⅰa	Ⅵ	130	99	88	81	72	無	37号住と重複。
J4-P24	J4	Ⅰa	Ⅴ	128	84	108	88	88	無	37号住と重複。
K2-P43	K2	Ⅱa	Ⅵ	100	96	104	98	120	無	20号住と重複
K3-P12	K3	Ⅰa	Ⅴ	98	—	80	—	67	無	3号住と重複。
K4-P8	K4	Ⅱa	Ⅵ	—	—	—	—	56	無	
1H-P1	J1	Ⅱb	Ⅴ	—	—	164	156	64	有	1H-2、4号と重複。
1H-P2	J2	Ⅱb	Ⅴ	168	146	164	166	100	有	1H-9号と重複。
1H-P3	J2	Ⅱb	Ⅴ	—	—	200	198	84	有	1H-13、14号と重複。

第９表　フラスコ状一覧表

＜フラスコ状土坑各説＞

00 － P1（図版第 194 図）

形　態：本遺構は、調査区北側の段丘縁辺の斜面部に位置している。大形のフラスコ状土坑であり、底面には小土坑は伴っていない。土坑覆土の堆積は不明である。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 288 図 808）、などが出土している。

16BJ － P1（図版第 194 図）

形　態：本遺構は、小形のフラスコ状土坑であり、底面の小土坑の有無は不明である。第 16B 号住居跡と重複しており、住居よりも古い時期に構築されたと考えられる。土坑覆土の土層断面では炉跡の焼土層で落ち込みが認められる。

時　期：Ⅲ期（大木 7b 式並行期）以前。　　出土遺物：なし。

11J － P1（図版第 194 図）

形　態：本遺構は、小形のフラスコ状土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明である。

時　期：Ⅴ期（大木 8b 式並行期）。

出土遺物：土坑覆土中より、土器（図版第 230 図 189・191）が出土している。

E2 － P36（図版第 195 図）

形　態：本遺構は、小形のフラスコ状土坑であり、底面中央部に小土坑を有する。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 288 図 809）、石器が出土している。

E1 － P5（図版第 195 図）

形　態：本遺構は、小形のフラスコ状土坑であり、土坑底面に小土坑を有している。土坑覆土の堆積状況は不明である。

時　期：不明。　出土遺物：なし。

G2 － P52（図版第 195 図）

形　態：本遺構は、小形のフラスコ状土坑である。土坑覆土の堆積状況はローム土混じりの明褐色土が堆積していたことから、埋土の可能性がある。周囲には、小土坑が 6 基存在しており、本遺構に伴う可能性がある。土坑上面の西側から柱状縁礫が出土している。

時　期：Ⅶ期（三十稲場式期）。

出土遺物：底面から覆土にかけて、土器（図版第 289 図 816 ～ 818）、などが出土している。土坑底面から 818 が出土している。

H3 － P39（図版第 196 図）

形　態：本遺構は、小形のフラスコ状土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明である。

時期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器、石器が出土している。

H4 － P75（図版第 196 図）

形　態：本遺構は、大形のフラスコ状土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明である。

時　期：Ⅶ期（三十稲場式期）以前。

出土遺物：覆土上層から、土器片（図版第 289 図 813 ～ 815）が出土している。

H4 － P201（図版第 196 図）

形　態：本遺構は、大形のフラスコ状土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明である。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 288 図 810 ～ 812）、石器などが出土している。810 ～ 812 は大形土器片で、覆土中から出土している。

J4 － P23（図版第 197 図）

形　態：本遺構は、小形のフラスコ状土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明である。

時　期：Ⅵ～Ⅶ期（中期末葉～後期初頭）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 289 図 819）、石器が出土している。

J4 － P24（図版第 197 図）

形　態：本遺構は、小形のフラスコ状土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明である。

時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 289 図 820・821）、土製品（図版 698 図 350）、などが出土している。

K2 － P43（図版第 198 図）

形　態：本遺構は、大形のフラスコ状土坑と考えられる。土坑は、第 20 号住居跡と重複しており、住居跡よりも古い時期のものと考えられる。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 290 図 822 ～ 824）、石器が出土している。

K3 － P12（図版第 198 図）

形　態：本遺構は、小形のフラスコ状土坑である。土坑は、第３号住居跡に隣接しており、住居跡の柱穴が切り込んでいて、出土土器の東側が陥没していた。

時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 290 図 825 ～ 832）、石器が出土している。土器 825 と 826 は完形土器で底面付近から正立して出土している。827 ～ 832 は覆土からの出土である。

K4 － P8（図版第 197 図）

形　態：本遺構は、大形のフラスコ状土坑と考えられるが、他の土坑との重複により平面形が不整形になっているため、正確な規模が不明である。

時　期：Ⅵ期（沖ノ原式期）。

出土遺物：土坑の底面から覆土にかけて、土器（図版第 291 図 833 ～ 839）、などが出土している。土器 839 は、底面より横位で出土している。

1H － P1（図版第 198 図）

形　態：本遺構は、大形のフラスコ状土坑であり、底面に小土坑を有している。1H － 13 号配石と重複しており、埋没後に配石が構築されたと考えられる。

時　期：Ⅴ期（大木 8b 式並行期）。

出土遺物：土坑底面付近より、土器（図版第 291 図 840 ～ 842）、石器などが出土している。

1H － P2（図版第 199 図）

形　態：本遺構は、大形のフラスコ状土坑であり、底面には浅い小土坑を有している。1H － 9 号配石と重複しており、埋没後に配石が構築されたと考えられる。

時　期：Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 291 図 751 ～ 757）、などが出土している。

1H － P3（図版第 199 図）

形　態：本遺構は、大形のフラスコ状土坑であり、底面に浅い小土坑を有している。1H － 2、1H － 4 号配石と重複しており、埋没後に配石が構築されたものと考えられる。

時　期：Ⅴ期（大木 8b 式並行期）。

出土遺物：土坑覆土から、土器（図版第 281 図 843 ～ 849）、などが出土している。

2）土　坑

本遺跡から検出された土坑は、平面形や断面形において多様性が認められる（第 40 図）。

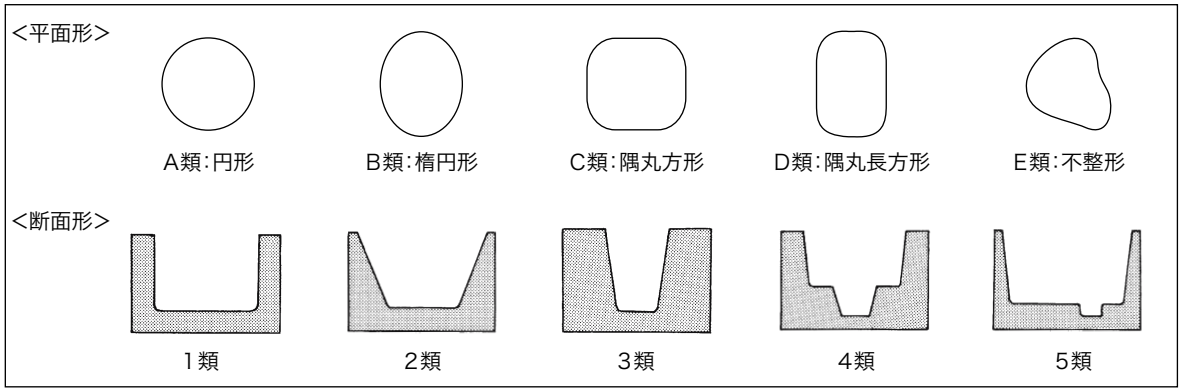
B3 － P 2（図版第 200 図）：平面形が楕円形を呈する浅い土坑で、形態的に墓坑の可能性がある。覆土の堆積状況は不明である。また出土遺物がないため、構築時期は不明である。

B3 － P 4（図版第 200 図）：平面形が楕円形を基調とする浅い土坑であり、覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性が想定される。第 14C 号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。出土遺物は土器（図版第 292 図 853）が出土しており、構築時期は出土遺物からⅢ期（大木７ｂ式並行期）に比定される。

B3 － P 6（図版第 200 図）：平面形が長楕円形を呈する土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。また出土遺物がなく、構築時期は不明である。

C2 － P13（図版第 201 図）：平面形が楕円形を呈する土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。また出土遺物がなく、構築時期は不明である。

C2 － P36（図版第 201 図）：平面形が隅丸方形を呈する土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。出土遺物がなく、構築時期は不明である。



第 40 図　土坑形態分類

D4 － P4(図版第 201 図)：平面形が楕円形を呈する小形の土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明である。出土遺物は、土器（図版第 294 図 880 ～ 882）などが出土している。構築時期はⅤ期（大木８ｂ式並行期）と考えられる。

D4 － P21（図版第 202 図）：平面形がほぼ円形を呈する土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。出土遺物がなく、構築時期は不明である。

E2 － P1（図版第 202 図）：平面形が楕円形を呈する土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明であるが、覆土上層に焼土跡が形成されている。出土遺物は、覆土から土器（図版第 295 図 883）が出土しているが、構築時期は不明である。

E2 － P5（図版第 202 図）：平面形が円形を呈するものと考えられ、底面に段差を有している。幾つかの遺構が重複していると考えられる。出土遺物は、覆土中より土器片（図版第 295 図 885 ～ 887）が出土している。構築時期はⅥ～Ⅶ期（中期終末～後期初頭）に比定される。

E2 － P23（図版第 203 図）：平面形が長楕円形を呈する土坑であり、幾つかの土坑と重複している。出土遺物は、土坑覆土から、土器（図版第 296 図 893）、などが出土している。構築時期は、Ⅶ期（三十稲場式期）に比定される。

E2 － P26（図版第 203 図）：平面形が円形を呈する土坑であり、土坑覆土の堆積は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。出土遺物がなく、構築時期は不明である。

E2 － P67（図版第 203 図）：平面形がほぼ円形を呈する浅い土坑である。土坑覆土の堆積は不明であるが、形態的に墓坑である可能性がある。出土遺物がなく、構築時期は不明である。

E3 － P42（図版第 204 図）：不整楕円形を呈する土坑であり、中央部が一段深くなっている。これは重複の可能性も考えられるが、明確ではない。出土遺物は、覆土中より大形の土器片（図版第 298 図 926 ～ 929）、などが出土している。

F2 － P1（図版第 204 図）：平面形が円形を呈する土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。出土遺物は、土器（図版第 301 図 952 ～ 954）、などが出土している。構築時期はⅦ期（三十稲場式期）と考えられる。

F2 － P86（図版第 204 図）：平面形が不整楕円形を呈する土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明である。遺物は、P86 から出土していないが、隣接する F2 － P88 から土器（図版第 300 図 966）が出土している。構築時期は不明である。

F2 － P104（図版第 205 図）：平面形が隅丸長方形を呈する土坑であり、覆土の堆積状況は不明である。出土遺物は、土器（図版第 302 図 972）が出土しているが、構築時期は不明である。

F3 － P18（図版第 205 図）：平面形が不整隅丸長方形を呈する土坑であり、土坑内覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。土坑からは遺物が出土していないため、構築時期は不明である。

F3 － P31（図版第 205 図）：平面形が不整形を呈する浅い土坑である。また土坑内覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。構築時期は不明である。

F4 － P20（図版第 206 図）：平面形が円形を呈する土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性が想定される。他の土坑に北側が重複しているため、もともとはほぼ円形を呈

していたと推定される。出土遺物は、土器（図版第304図998～第305図1004）が出土している。構築時期はⅦ～Ⅸ期（三十稲場式期～加曽利Ｂ１式並行期）と考えられる。

F4 － P28（図版第206図）：平面形がほぼ円形を呈する土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。出土遺物は、土器（図版第305図1010～1013）が出土しているが、構築時期は不明である。

F4 － P97（図版第206図）：平面形がほぼ円形を呈する土坑であるが、土坑内覆土の堆積状況は不明である。遺物が出土していないので、構築時期は不明である。

F4 － P92（図版第207図）：平面形が隅丸方形を呈する土坑であり、土坑覆土は４層からなり、地山を多く含む埋土であると考えられる。また立石状に偏平礫が配されており、墓坑である可能性が高い。遺物は出土していないため、構築時期は不明である。

F4 － P93（図版第207図）：平面形がやや不整な長楕円形を呈する浅い土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑である可能性がある。遺物が出土していないため、構築時期は不明である。

F4 － P124（図版第208図）：平面形がほぼ円形を呈するやや浅い土坑である。土坑内覆土は不明であるが、形態的に墓坑である可能性がある。出土遺物がなく、構築時期は不明である。

F5 － P2（図版第208図）：平面形がほぼ円形を呈する土坑であるが、土坑覆土の堆積状況は不明である。遺物は出土していないため、構築時期は不明である。

G2 － P12（図版第208図）：平面形が不整な楕円形を呈する土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑である可能性がある。出土遺物はなく、構築時期は不明である。

G3 － P2（図版第209図）：平面形が楕円形を呈する土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。出土遺物がないため、構築時期は不明である。

G3 － P6（図版第209図）：平面形が不整な楕円形を呈する土坑であり、第36号住居跡を切って構築されている。上面には柱状礫が横位で検出されていることから、配石遺構群に関連する可能性が想定される。土坑内からは大形礫が５点まとまって出土している。構築時期は不明であるが、Ⅶ～Ⅸ期（三十稲場式期～加曽利Ｂ１式並行期）のいずれかに構築されたと推定される。

G4 － P14（図版第209図）：平面形が楕円形を呈する土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。遺物は、土器（図版第309図1082～1084）が出土しており、構築時期はⅦ期（三十稲場式期）以降であると考えられる。

G4 － P54（図版第210図）：平面形が楕円形を呈する土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。出土遺物がないため、構築時期は不明である。

G4 － P86（図版第210図）：平面形が不整な楕円形を呈する浅い土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑である可能性が想定される。構築時期は不明である。

G4 － P111（図版第210図）：平面形がほぼ円形を呈する土坑であり、土坑覆土の堆積状況が不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。遺物は出土していないため、構築時期は不明である。

H3 － P24（図版第211図）：平面形が楕円形を呈する土坑である。土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態や位置などから墓坑の可能性がある。構築時期は不明である。

H4 － P70（図版第 211 図）：平面形が不整楕円形を呈する土坑であり、第４号住居跡の床面を切り込んで構築されている。また土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。遺物が出土していないため、構築時期は不明である。

H5 － P70（図版第 211 図）：平面形が楕円形を呈する土坑であるが、土坑覆土の堆積状況は不明である。土坑内からは、土器（図版第第 314 図 1132）が出土しており、構築時期はＶ期（大木８ｂ式並行期）に比定される。

I4 － P1（図版第 212 図）：平面形が円形を呈する土坑であり、幾つかの土坑が重複している。出土遺物は、土器（図版第第 315 図 1150）などが出土しており、構築時期はⅥ期（沖ノ原式期）に比定される。

I4 － P73（図版第 212 図）：本遺構は平面形が隅丸方形を呈し、形態的には墓坑の可能性がある。出土遺物がないため 、構築時期は不明である。

I4 － P109（図版第 212 図）:平面形がほぼ円形を呈する土坑であるが､土坑覆土の堆積状況は不明である。また幾つかの土坑が重複している。出土遺物は、覆土中より土器（図版第 316 図 1166・1167）や打製石斧（図版第 720 図 165）などが出土している。構築時期はⅦ期（三十稲場式期）に対比される。

J1 － P11（図版第 213 図）：調査区西端部にあり 1H － 4 号配石に接して位置している。平面形がほぼ円形を呈しており､土坑覆土は地山粒を多量に含む埋土であり､形態などから墓坑である可能性が高い。遺物は出土していないが、土坑西側に柱状礫が立位で埋設されていた。構築時期はⅦ期～Ⅸ期（三十稲場式～加曽利Ｂ１式並行期）にかけてと考えられる。

J2 － P6（図版第 213 図）：平面形が円形を呈する小形の土坑である。土坑内からは、土器（図版第 316 図 1206）などが出土しており、構築時期はⅦ期（三十稲場式期）に比定される。

J2 － P28（図版第 213 図）：平面形が不整な楕円形を呈し、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性がある。遺物は出土していないため、構築時期は不明である。

J4 － P96（図版第 214 図）：平面形が隅丸長方形を呈する浅い土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑の可能性が高い。出土遺物は、覆土中より土器（図版第 320 図 1222 ～ 1226）が出土しており、構築時期はⅦ期（三十稲場式期）に比定される。

J5 － P5（図版第 214 図）：平面形が隅丸長方形を呈する浅い土坑であり、土坑覆土の堆積状況は不明であるが、形態的に墓坑である可能性が高い。出土遺物は、土坑東側より土器（図版第 321 図 1227 ～ 1229）が出土している。構築時期はＶ期（大木８ｂ式並行期）に比定される。

J5 － P39（図版第 214 図）:平面形が不整形を呈する小形の土坑であるが、覆土の堆積状況は不明である。出土遺物は、出土していないため、構築時期は不明である。

K4 － P56（図版第 215 図）：平面形が円形を呈する小形の土坑である。出土遺物は、土器（図版第 324 図 1280）、などが出土しており、構築時期はⅦ期（三十稲場式期）に比定される。

K5 － P14（図版第 215 図）：平面形がほぼ円形を呈する土坑である。土坑内の覆土からは、細かな土器片（図版第 324 図 1284 ～第 325 図 1311）、や剥片などが多量に出土している。出土土器の時期はⅦ期のものが大半を占めており、形成時期はⅦ期（三十稲場式期）と考えられる。

番号	グリッド	形態	時期	上面		下面		深さ(cm)	標高(m)	出土遺物	備考
				長軸長(cm)	短軸長(cm)	長軸長(cm)	短軸長(cm)				
B3-P2	B3	B5	不明	184	128	170	111	26	260.9		墓坑の可能性。
B3-P4	B3	B1	Ⅲ	294	210	282	187	6	260.93	土器片(852･853)、剥片	墓坑の可能性。
B3-P6	B3	B1	Ⅵ	186	89	160	70	30	260.86	土器片、打斧1、剥片	墓坑の可能性。
C2-P13	C2	B1	Ⅶ	236	188	168	132	37	261.02	土器片、剥片	墓坑の可能性。
C2-P36	C2	D1	不明	196	104	172	82	9	261.27		墓坑の可能性。
D4-P4	D4	B2	Ⅴ	56	44	26	24	17	261.09	土器片(880～882)、剥片	
D4-P21	D4	A1	不明	184	166	152	136	13	261.06		墓坑の可能性。
E2-P1	E2	D1	Ⅵ	—	—	56	36	36	261.04	土器片(883)	
E2-P5	E2	E	Ⅶ	—	—	88	64	71	260.69	土器片(885～887)、剥片	
E2-P23	E2	B1	Ⅵ	—	24	—	30	27	261.15	土器片(893)	
E2-P26	E2	A1	Ⅵ	116	100	100	96	76	260.52	土器片、剥片、磨石1	
E2-P67	E2	A1	Ⅵ	116	—	88	88	56	260.72	土器片	
E3-P42	E3	D4	Ⅶ	117	74	102	49	34	261.12	土器片(926～929)、剥片、磨石1	
F2-P1	F2	A1	不明	—	—	80	64	57	260.77	土器片(952～954)	
F2-P86	F2	D1	Ⅵ	—	—	147	82	55	260.85	土器片	墓坑の可能性。
F2-P104	F2	D5	Ⅶ	146	72	96	40	42	260.98	土器片(972)、剥片	
F3-P18	F3	D1	不明	162	94	114	58	59	260.81		
F3-P31	F3	E1	不明	142	64	126	37	11	261.38		
F4-P20	F4	A2	Ⅸ	170	—	130	102	35	261.17	土器片(998～1004)、剥片	墓坑の可能性。
F4-P28	F4	A1	Ⅶ	130	116	104	100	68	260.81	土器片(1010～1013)、剥片	
F4-P92	F4	A1	不明	206	195	158	145	41	261.06		墓坑の可能性。
F4-P93	F4	C1	不明	242	120	211	82	19	261.27		墓坑の可能性。
F4-P97	F4	E1	不明	96	—	82	70	45	261.07		
F4-P124	F4	A2	Ⅵ	34	20	28	16	14	261.38	土器片	
F5-P2	F5	A1	Ⅵ	116	100	83	76	69	260.78	土器片	
G2-P12	G2	A1	不明	172	140	146	128	40	260.9		
G3-P2	G3	B2	不明	136	96	94	70	31	261.21		
G3-P6	G3	B2	不明	72	64	52	52	27	261.25	剥片	
G4-P14	G4	B2	Ⅳ	188	160	120	68	58	260.98	土器片、剥片	
G4-P54	G4	B5	不明	136	—	112	96	50	261.04		
G4-P86	G4	B2	不明	160	—	88	—	30	261.28		
G4-P111	G4	A2	不明	152	112	148	96	53	261.03		
H3-P24	H3	B2	Ⅷ	152	136	92	72	60	260.87	土器片(3014)	
H4-P70	H4	E2	不明	200	156	144	108	71	261.14		墓坑の可能性。
H5-P70	H5	B1	不明	—	—	28	24	45	261.41	土器(1132)	
I4-P1	I4	A2	後期	168	100	60	66	48	261.08	土器片(1150)、剥片、礫	
I4-P73	I4	C2	Ⅷ	160	116	128	104	16	261.36	土器片.剥片、礫	墓坑の可能性。
I4-P109	I4	B2	Ⅷ	—	—	72	60	73	261.26	土器片(1166･1167)、石器(165)	
J1-P11	J1	A1	不明	135	104	108	100	62	260.85		墓坑の可能性。
J2-P6	J2	A1	Ⅷ	54	48	30	26	34	261.02	土器片(1198)、剥片	
J2-P28	J2	E2	不明	—	—	96	80	48	261.32		墓坑の可能性。
J4-P96	J4	D4	Ⅶ	168	96	156	68	54	261.1	土器片(1222～1226)、打斧1、剥片	
J5-P5	J5	D2	Ⅴ	178	100	146	70	38	261.66	土器片(1227～1229)	墓坑の可能性。
J5-P39	J5	E2	Ⅷ	93	76	63	50	74	260.94	土器片(1233)	
K4-P56	K4	A2	不明	50	48	30	28	16	261.69	土器(1280)	K5-P32出土土器と接合。
K5-P14	K5	B1	Ⅶ	160	—	128	—	72	261.32	土器(1284～1311)、鏃2、打斧2、磨斧1	

第 10 表　土坑一覧

8．溝状遺構（図版第 216 図）

溝状遺構は、Ｊ４・Ｊ５・Ｊ６・Ｋ６グリッドに位置しており、東西方向の傾斜に沿って延びている。規模は主軸長約 30 mであり、幅約 0.6 ～ 1.1 mである。溝の深さは確認面から 0.1 ～ 0.2 mほどで浅いが、実際は黒色土中から掘り込まれており、0.5 m前後の深度があったと推定される。また溝に沿って分布する小柱穴は、溝に関連する可能性がある。溝状遺構の東端は、旧河道上と接する部分であり、これと関連している可能性が想定される。この西端は不明瞭で、Ｊ４グリッド付近で途切れており、この先は明瞭な溝跡は認められなかった。溝状遺構は傾斜などから水が流れていた可能性が想定される。

出土遺物は、Ⅲ～Ⅶ期（大木７ｂ式並行期～三十稲場式期）の土器片が出土している。溝状遺構は廃棄帯の中にあることから、Ⅲ～Ⅵ期（大木７ｂ式並行期～沖ノ原式期）の土器は、もともと包含されていた壁面から流れ込んだ可能性が高い。新しい時期の遺物は、Ⅶ期（三十稲場式期）である（図版第 327 図 1317 ～ 1321）。これらから、構築時期はⅦ期（三十稲場式期）であり、この時期に埋没したと考えられる。

9．廃棄帯

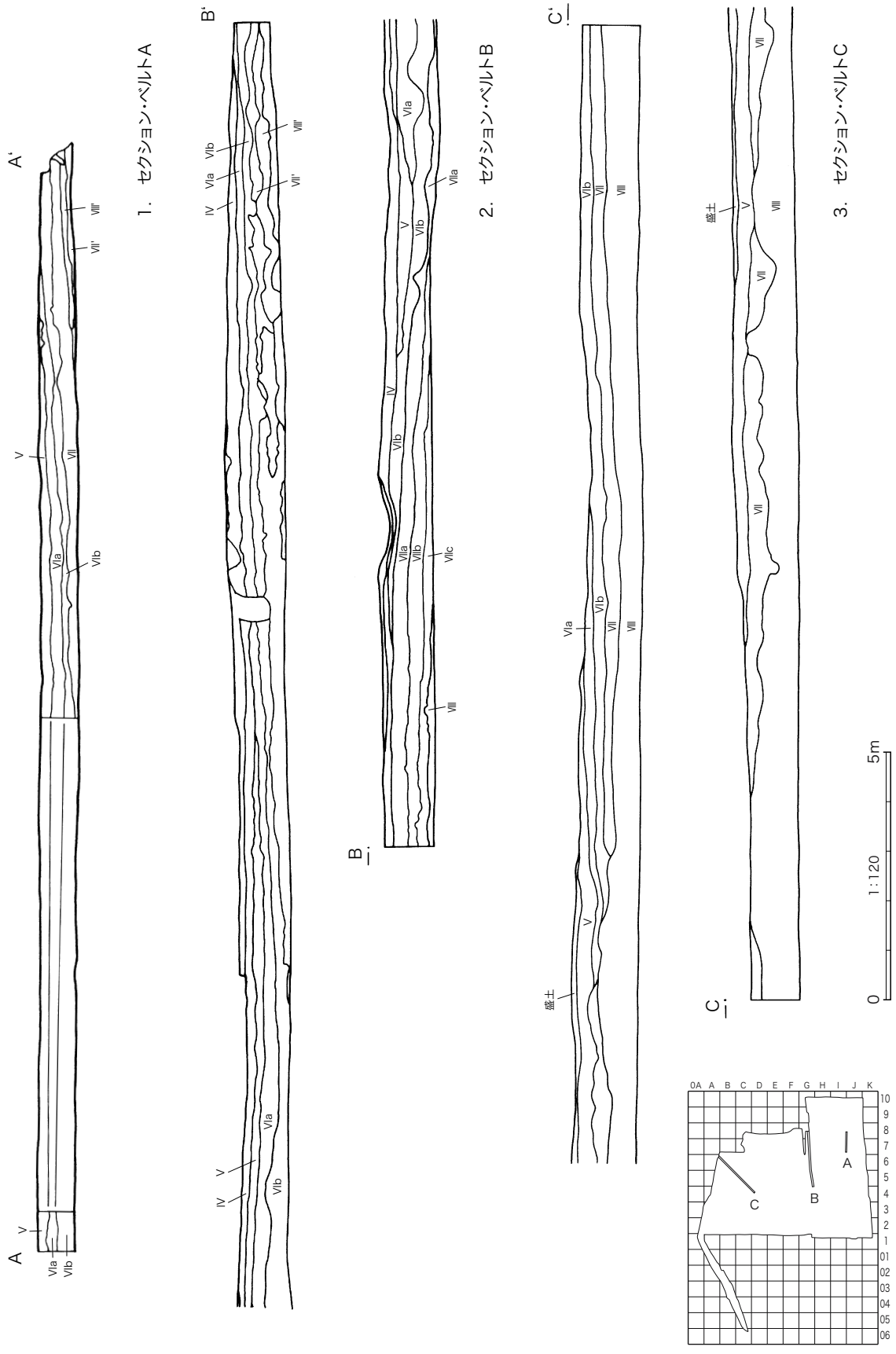
1）廃棄帯の概要

本遺跡では、調査区内を南北方向に旧河道が帯状に縦断している（第 41 図）。この旧河道の低地から土器･石器などの遺物が多量に出土している。この種の遺構は、「土器捨て場」や「土器塚」、「盛土遺構」などと呼称されている。これらは調査段階で「土器捨て場」と呼称していたが、土器･石器などの廃棄による集積体であることから、「廃棄帯」（註 63）として報告したい。

廃棄帯が形成される時期は、中期の環状集落が開始されるⅢ期からであり、弧状にめぐる居住域の外縁に形成されている。この低地からは、Ⅲ～Ⅸ期の土器（図版第 330 ～ 657 図）、土製品（図版第 658 ～ 703 図）、石器（図版第 724 ～ 751 図）、石製品（図版第 752 ～ 753 図）、などが多量に出土しており、特にⅢ～Ⅵ期までの遺物が大半を占めている。また廃棄帯中にも僅かに遺構が分布し、第 42 号住居跡（Ⅲ期）、第４号炉（Ⅴ期）、第１号長方形柱穴列（Ⅶ期）などが構築されている。

廃棄帯の土層堆積は、旧河道の方向に直行するラインでＡ～Ｂのセクションベルトを３ヶ所に設定した（第 42 図右下）。セクションベルトＡは、Ⅰ～Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵａ層・Ⅵｂ層・Ⅵｃ層・Ⅶａ層・Ⅶｂ層・Ⅷ層の計 13 層の堆積が確認された（第 42 図１）。セクションベルトＢは、Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵａ層・Ⅵｂ層・Ⅶａ層・Ⅶｂ層・Ⅷ層の計７層の堆積が確認された（第 42 図２）。セクションベルトＣは、Ⅴ層・Ⅵａ層・Ⅵｂ層・Ⅶ層・Ⅷ層の計５層の堆積が確認された（第 42 図３）。セクションベルトＡ・Ｂの区域が最も深く、セクションベルトＣの区域は浅くなっている。集落形成期の土器が微低地の底面から出土していることから、この旧河道に水が流れなくなった直後であると推測される。廃棄帯の形成期にはすでに水が流れていなかったことが自然科学分析（付編３参照）からも示されている。この河道の本流もしくは水源は不明である。

第 41 図　廃棄帯と地形



第 42 図　廃土帯土層セクション図

2）遺物出土状況

（1）出土土器の時期的変遷

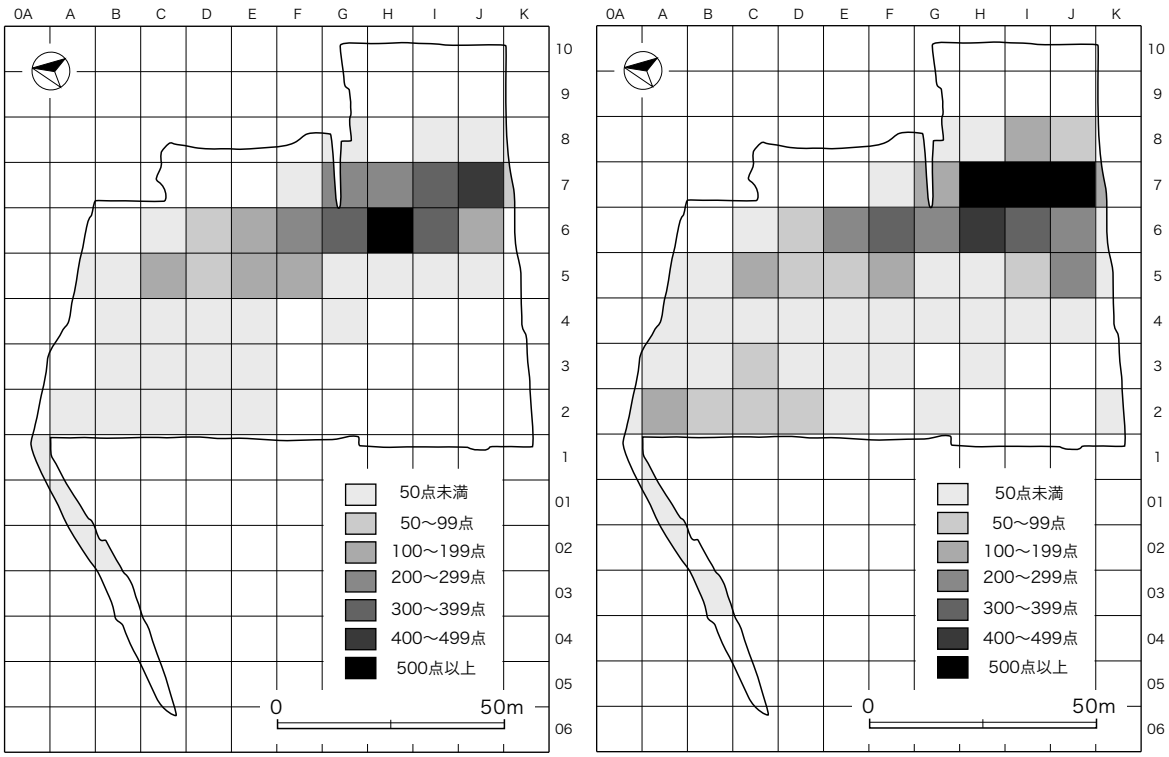
本遺跡における出土遺物の大半は廃棄帯から出土している。廃棄帯の調査は、当初、調査区南側のＧ～Ｋグリッドから調査を行い、徐々に調査区の北側へと調査を進めた。Ｇ～Ｋグリッドの廃棄帯では大半の遺物の出土位置を記録して取り上げたが、Ａ～Ｆグリッドの廃棄帯は、調査期間などの制約により、完形率の高いものや大形破片など、主要な遺物以外は小グリッド単位で取り上げざるを得なかった。

廃棄帯は、土器や石器・有機質物・土などの廃棄を基本として、その後の移動などの結果、形成されたものであると考えられる。これらの分布から、ある程度の廃棄場の変遷を認識することが可能である。Ⅰ期～Ⅱ期・Ⅹ期・XI期は遺物が極めて稀薄であるため、遺物がまとまって出土するⅢ期～IX期の遺物分布の変遷をまとめたい。

Ⅲ　期：Ｂ～Ｊグリッドの廃棄帯に遺物の分布が集中しており、特にＧ６・Ｇ７・Ｈ６・Ｈ７・Ｉ６・Ｉ７・Ｊ６・Ｊ７グリッドへの集中が認められる（第43図1）。一方、住居跡分布域での出土遺物は、稀薄な分布を示している。中央広場にあたるＦ～Ｋ－１～４グリッドでは、遺物の分布がほとんど認められない。

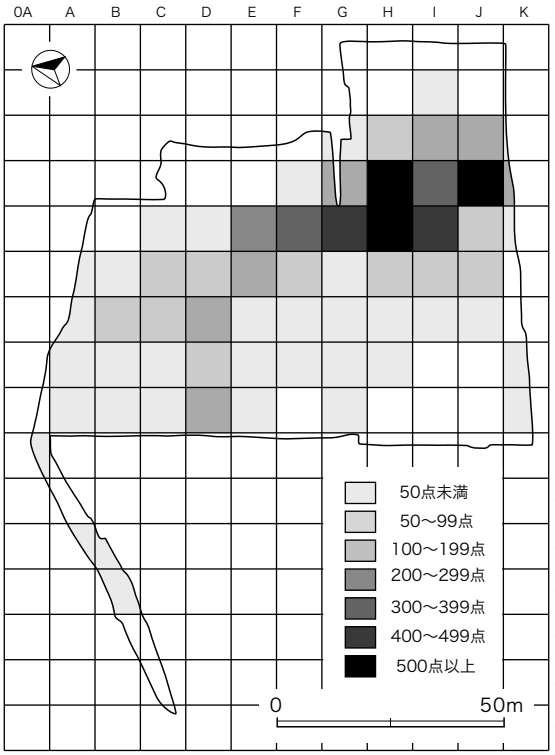
Ⅳ　期：Ｂ～Ｊグリッドの廃棄帯に遺物の集中が見られ、特にＧ６・Ｇ７・Ｈ６・Ｈ７・Ｉ６・Ｉ７・Ｊ６・Ｊ７グリッドに遺物の集中が認められる（第43図2）。この時期には、住居跡分布域においても遺物の分布がより多くなるが、中央広場にあたるＨ～Ｊ－１～３グリッドは、前段階同様に稀薄である。

Ⅴ　期：Ｅ～Ｊの6、7、8グリッドに遺物の集中が認められ、特にＧ６・Ｇ７・Ｈ６・Ｈ７・Ｉ６・Ｉ７・Ｊ６・Ｊ７グリッドに集中が認められる（第44図1）。住居跡分布域においても、疎らながら遺物の分

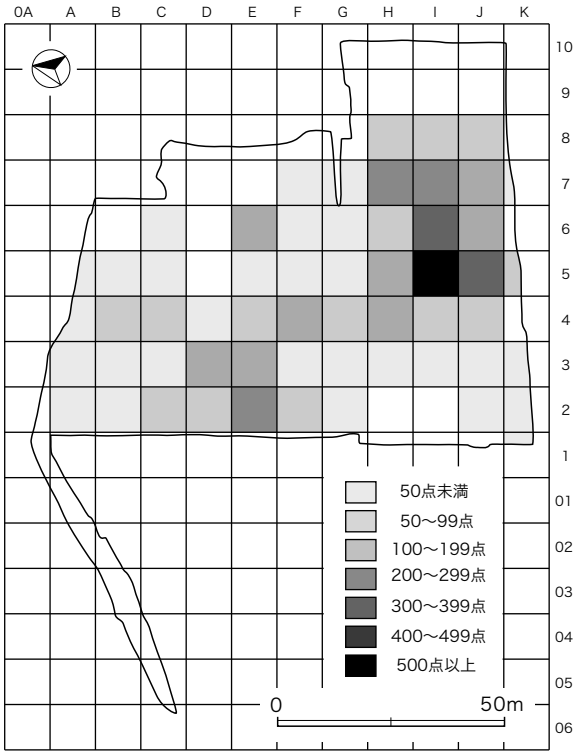


1．Ⅲ期の出土土器濃淡図（点数）　　2．Ⅳ期の出土土器濃淡図（点数）

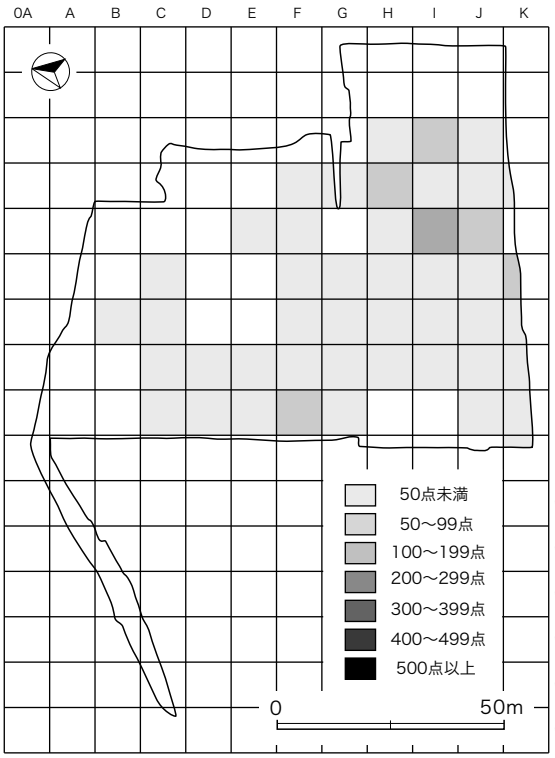
第43図　出土土器の時期別濃淡図（1）



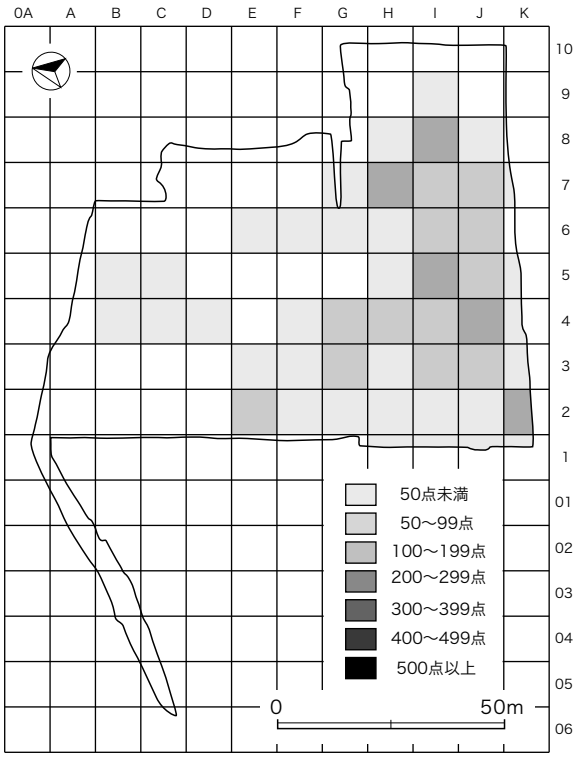
1. V期の出土土器濃淡図(点数)



2. VI期の出土土器濃淡図(点数)



3. VII期の出土土器濃淡図(点数)



4. VIII・XI期の出土土器濃淡図(点数)

第 44 図　出土土器の時期別濃淡図（2）

布が見られるが、ほとんどが住居跡覆土などからの出土遺物である。中央広場にあたるＨ～Ｊ－１～３グリッドは前段階に引き続いて遺物分布が稀薄である。

Ⅵ　期：この段階になると、遺物分布にやや変化が見られる。まず前段階までの廃棄帯とした遺物集中域はＨ６・Ｈ７・Ｉ６・Ｉ７・Ｊ６・Ｊ７グリッドに限られ、Ａ～Ｇグリッドの５・６グリッドでは遺物の集中は認められない（第44図2）。また住居跡や埋設土器など土坑での遺物分布が多くなる。中央広場にあたる遺物が稀薄なエリアは、Ｈ１・Ｈ２・Ｉ１・Ｉ２グリッドとやや狭くなる傾向がある。

Ⅶ　期：この時期は遺物量が減少する。Ｆ２・Ｈ７・Ｉ６・Ｉ７・Ｊ６・に比較的まとまって分布しているが（第44図3）、これらの多くは住居跡や土坑から出土しており、廃棄帯のような遺物集中は見られない。前段階まで中央広場にあたるＨ１・Ｈ２・Ｉ１・Ｉ２グリッドは、遺物が稀薄ではあるが、全体的に遺物分布が稀薄になるため分布の濃淡は不明瞭である。

Ⅷ・Ⅸ期：この段階は遺物分布が大きく変化する。遺物分布は、Ｅ～Ｋグリッドに限られ、特にＧ～Ｋグリッドに分布が集中している（第44図4）。しかし、中期に見られた廃棄帯のような遺物集中域は認められない。一方、Ⅲ～Ⅵ期まで明確だったＧ１・Ｇ２・Ｈ１・Ｈ２・Ｉ１・Ｉ２・Ｉ３・Ｊ１・Ｊ２グリッドにおける遺物稀薄域が認められない。この段階は、この区域に住居が構築されており、空間利用における変化として捉えられる。

（２）深度別の土器比率

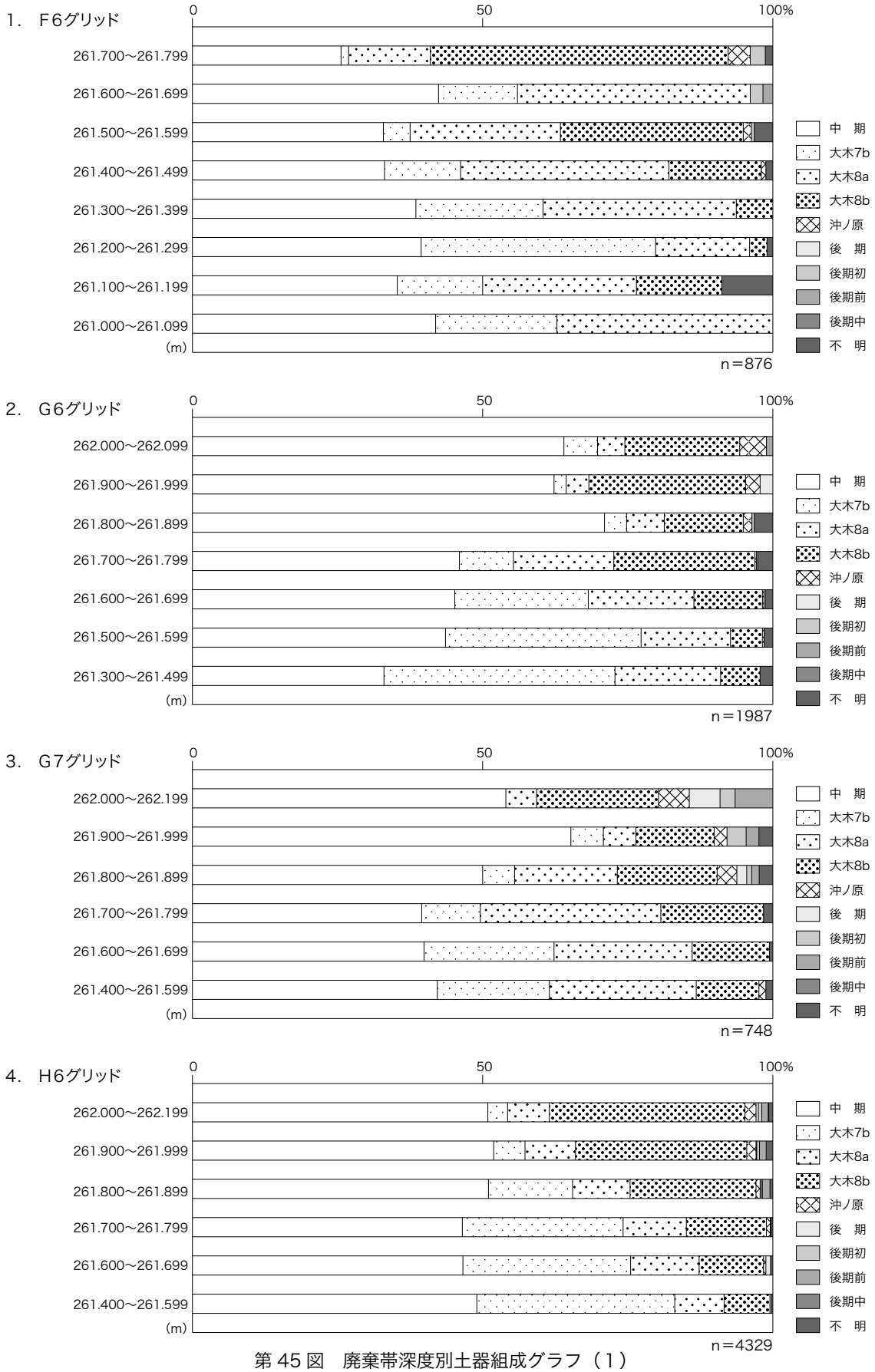
廃棄帯の中でも良好な堆積を示すグリッドを選択して、深度別の土器の割合を示す。対象とするグリッドは、Ｆ６・Ｇ６・Ｇ７・Ｈ６・Ｉ６・Ｉ８・Ｊ６・Ｊ７グリッドの８ヶ所である。各グリッドの分析は、層位ごとではなく、標高を 10cm ごとに区切って、深度別の割合を算出している。

①Ｆ６グリッド（第45図1）：このグリッドは全体的にほぼⅢ～Ⅴ期の土器が占めている。この中でⅢ期の土器は廃棄帯の底面から＋ 19.9cm、＋ 29.9cm のところにピークがあり、上層に向かって減少する傾向がある。また廃棄帯の底面から＋ 69.9cm まではⅣ期の土器が多い。Ⅴ期の土器は＋ 70 ～ 79.9cm が最も多いが、＋ 60 ～ 69.9cm は欠落しており、＋ 60cm 以下は少なくなる。Ⅵ期以降の土器は、上層に少量含まれる程度である。全体的に深度別の傾向にばらつきが認められる。

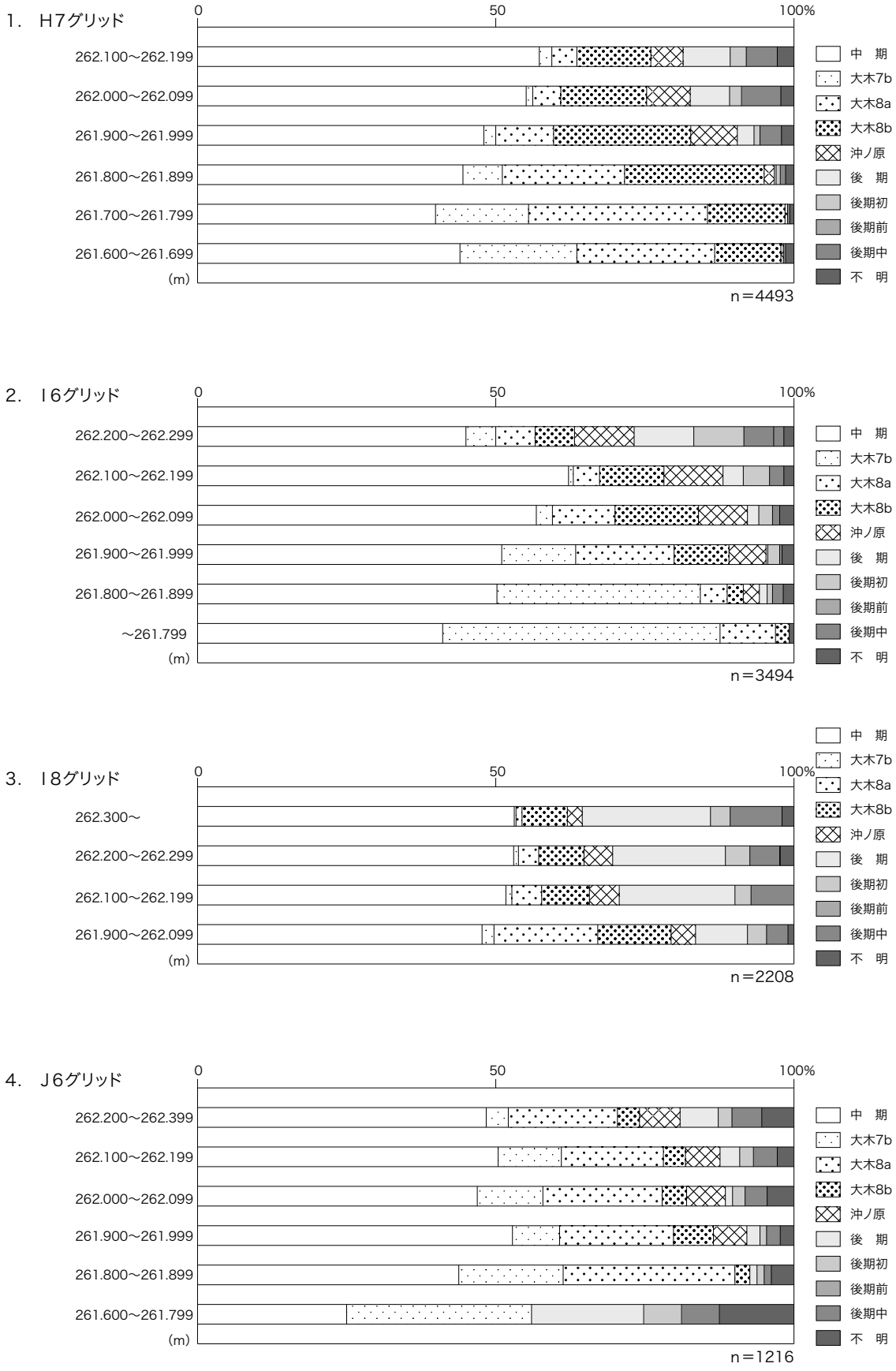
②Ｇ６グリッド（第45図2）：このグリッドはⅢ～Ⅴ期の土器がほとんどを占めている。この中で、Ⅲ期の土器は廃棄帯の底面から下層のほうに多く、上層に向かって次第に減少する傾向がある。Ⅳ期の土器は、廃棄帯の底面から＋ 39.9cm までは 15%ほど一定量認められるが、これより上層では 5%ほどになる。Ⅴ期の土器は廃棄帯の底面から＋ 50 ～ 69.9cm にピークがあり、下層ではほぼ減少傾向を示している。Ⅵ期以降の土器は上層でも 5%ほどで、下層に向かって減少傾向が認められる。

③Ｇ７グリッド（第45図3）：このグリッドは全体的にⅢ～Ⅴ期の土器が大半を占めているが、上層ではⅥ～Ⅷ期までの土器が比較的多くなっている。このなかで、Ⅲ期の土器は廃棄帯の底面から＋ 19.9cm までが多く、20%前後の割合を示している。Ⅳ期の土器は＋ 20 ～ 29.9cm にピークがあり、上層に向かって減少する。Ⅴ期の土器は底面から上層まで認められるが、最上層の21%からほぼ減少傾向を示している。Ⅵ期以降の土器は比較的多く、上層ではⅥ期 5.3%、後期 14.5%である。その下層の＋ 30 ～ 49.9cm では減少するものの、両方で 7%ほどが含まれる。

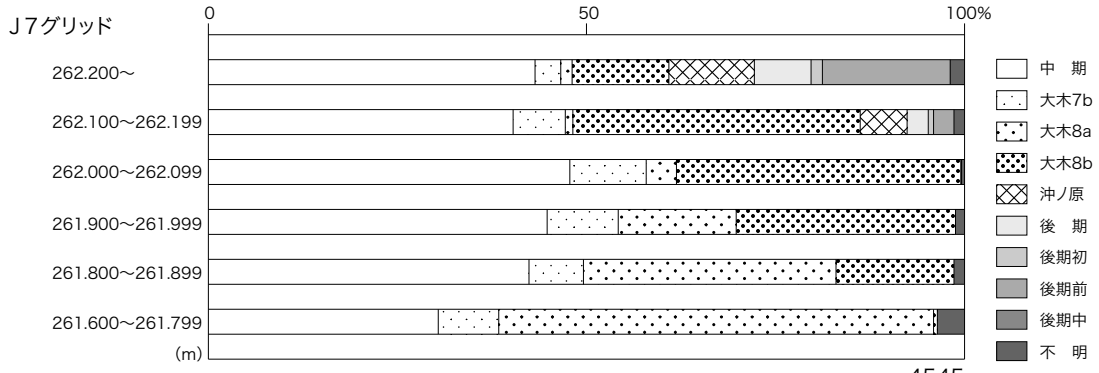
④Ｈ６グリッド（第45図4）：このグリッドはⅢ～Ⅴ期の土器がほとんどを占めている。そのなかでⅢ



第 45 図　廃棄帯深度別土器組成グラフ（1）



第 46 図　廃棄帯深度別土器組成グラフ（2）



第 47 図　廃棄帯深度別土器組成グラフ（3）

期の土器は、廃棄帯の底面から＋ 19.9cm では 34.1％と多く、上層に向かって減少傾向を示している。Ⅳ期の土器は 6 ～ 12％と廃棄帯の底面から上層にかけて一定量認められる。Ⅴ期の土器は上層で 33.7％と多く、下層に向かって減少するものの、廃棄帯の底面まで存在している。Ⅵ期以降の土器は、上層に数％見られる程度で稀薄である。このグリッドの上層に、第 4 号炉跡（Ⅴ期）があることから、上層でのⅤ期の土器の分布に影響していると考えられる。

⑤Ｈ７グリッド（第 46 図 1）：このグリッドは、全体的にⅢ～Ⅴ期の土器が占めている。Ⅲ期の土器は、底面から＋ 20cm まで 19.6％、15.6％で多く 、上層に向かって減少する。Ⅳ期の土器は＋ 10 ～ 20cm をピークに上層に向かって減少している。Ⅴ期の土器は＋ 30 ～ 50cm が約 23％と多く、上層と下層に向かって減少する傾向を示す。Ⅵ期の土器は＋ 30 ～ 60cm で約 5 ～ 8％見られ、下層にも少量ながら包含される。Ⅶ・Ⅷ期の土器は最上層で約 16％を占め、下層に向かって減少するが 、最下層にも僅かながら包含されている。

⑥Ｉ６グリッド（第 46 図 2）：このグリッドは、全体的にⅢ～Ⅵ期の土器が大半を占めているが、一方で、上層から中層にかけてⅦ～Ⅷ期の土器が比較的多く包含されている。このなかで、Ⅲ期の土器は最下層で 46.5％と約半数を占め、上層に向かって減少傾向を示している。Ⅳ・Ⅴ期の土器は全体にわたって一定量存在するが、中層に多く認められる。Ⅵ期以降は上層に多く、Ⅵ期以降の土器は上層に多く、Ⅵ期は約 10％、後期は約 10％、Ⅶ期 8.3％、Ⅷ期 5％、Ⅸ期 1.7％であり、下層に向かって減少する傾向がある。これら上層において、Ⅶ～Ⅷ期の土器が多いのは、この区域に第 1 号長方形柱穴列（Ⅶ期）があることが影響していると考えられる。

⑦Ｉ８グリッド（第 46 図 3）：このグリッドは比較的堆積が浅く、全体的に後期の土器が半数以上を占めており、他のグリッドと異なる傾向を示している。その中でⅢ期の土器は数％を占めるのみで、下層ではⅣ・Ⅴ期の土器が多いものの、上層にかけて減少する。Ⅶ～Ⅸ期の土器は上層で 33.5％を占め、下層に向かってやや減少するものの、明らかに他のグリッドに比べて割合が多い。このグリッドからは、後期の遺構は検出されていないが、このグリッドに遺構が存在していた可能性などが想定される。

⑧Ｊ６グリッド（第 46 図 4）：このグリッドは全体的にⅢ期～Ⅴ期の土器が多いものの、後期の土器が比較的多く認められる。最下層は点数が少ないが、Ⅲ期の土器が 31％を占めているが、一方で後期の土器が 30％以上包含されている。Ⅳ期の土器は最下層を除いては 17 ～ 28％と多く、Ⅴ・Ⅵ期の土器は比較的希薄である。これらの後期の土器が多いことの要因は、倒木痕や溝状遺構などの存在を挙げることできる。

⑨Ｊ７グリッド（第 47 図）：このグリッドは全体的にⅣ・Ⅴ期の土器がほとんどを占めている。その中で、Ⅲ期の土器は希薄であり、各レベルで 10%前後包含されている。Ⅳ期の土器は底面＋ 19.9cm に 57.5%と最も多く、上層に向かって減少する。Ⅴ期の土器も底面から＋ 40 ～ 59.9cm に 38%前後と多い。上層にⅥ期以降の土器が認められるが中・下層には見られない。

以上のように８グリッドを対象として、土器の深度別の割合を見てきたが、時期ごとにある程度下層から上層へと堆積しているグリッドとそうでないグリッドが見られ、その形成は多様である。

（３）出土土器の分布と接合関係

出土土器の接合作業は、時間的な制約の中で、随時行なったため、十分に接合関係を把握できたとは言えないものの、多くの接合関係を把握することができた。これらの接合関係には近距離でまとまって接合するものと距離を隔てて接合するものがある。数 10 m離れて接合する事例は稀ではなく、より注意を払わなければならない現象面である。これらの接合関係は、一つのプロセスで解釈できるものではないが、その接合関係が生じた要因としては、①一次的廃棄行為のタイミングが異なったため、②廃棄された場所で割れて、散乱したため、③廃棄後に埋没過程でその場所が掘削されて、土とともに破片が移動したため、④廃棄後に埋設土器などに転用されて、その際に不要な部分が廃棄されたため、などの要因が想定される。

特に、距離をおいた接合関係については、幾つかの可能性が想定され、一様ではない。これらの接合事例は、同一個体でも風化度合いが異なっているものや、接合面が磨耗しているなどの違いがあるものが見られる。これらは廃棄後から埋没、出土に至るまでの間の状態が異なっていたと考えられる。ここでは、個々の接合例について詳細な検討を加えることはできないが、Ⅲ期～Ⅷ期までの各時期における接合関係を概略的にまとめておきたい。

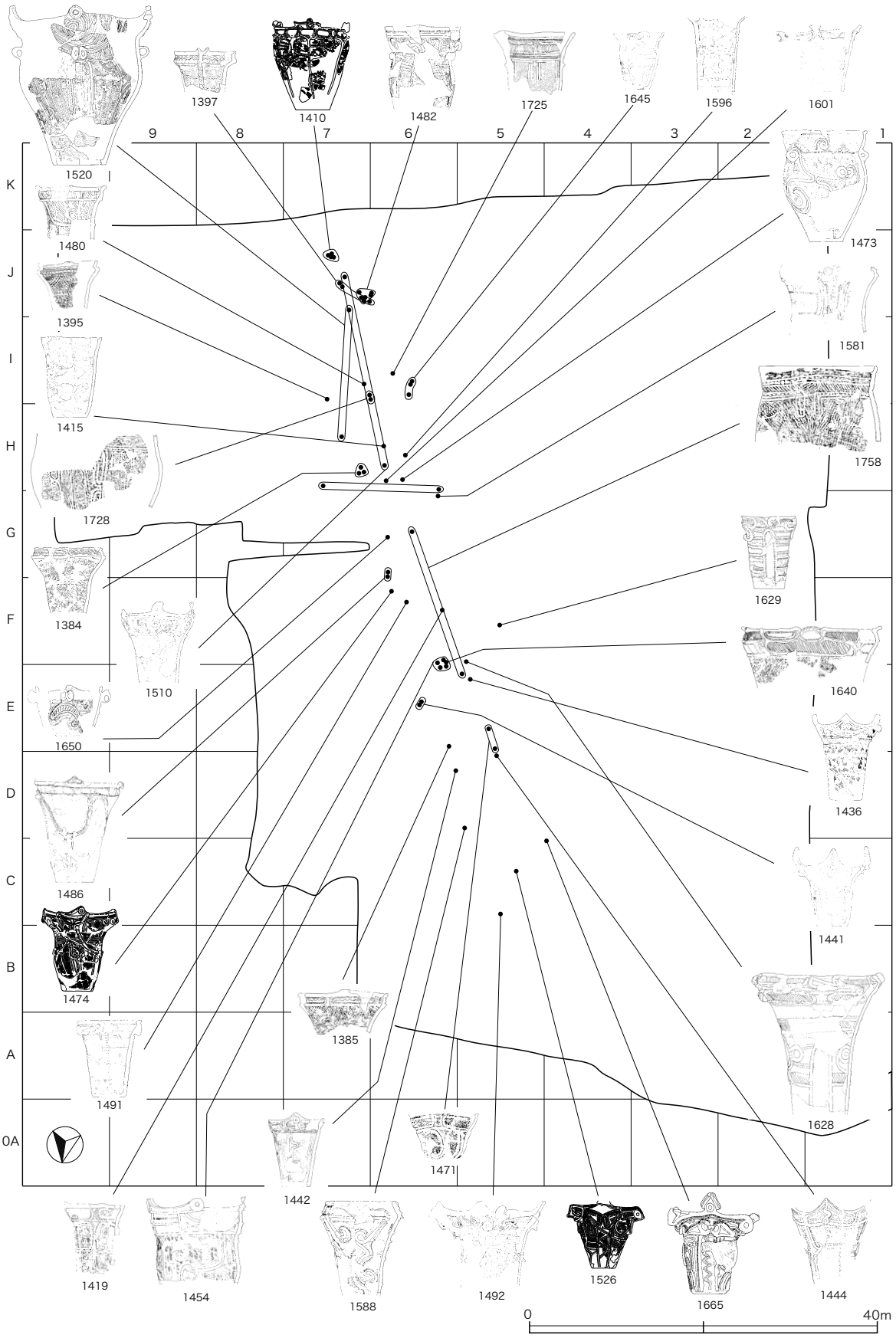
Ⅲ　期（第 48 図）：この時期の接合関係は、ほとんどが１mほどの範囲に散乱する土器片が接合したもので、距離をおいて接合したものは少ない。

1397 は廃棄帯中で約４mの距離で接合している。1758 は廃棄帯内のＥ５とＧ６グリッド間で 17 mの距離で接合している。また図化されてないもので、Ｂ３とＦ５グリッド間で 40 m以上離れて接合した例がある。加えて、Ｄ５とＤ６グリッド間で 16 mほどの距離で接合している。Ⅲ期の土器は、ほとんどが廃棄帯間での接合に限られ、遺構間の接合例は確認できなかった。全体量からすると、極めて接合例が少ないが、これは廃棄帯下層に埋没し、掘り返しなどの影響が比較的少なかったことも影響していると考えられる。

Ⅳ　期（第 49・50 図）：この時期の接合関係は、１～３mほどの狭い範囲に散乱した土器片が接合したもののほかに、数 10 m隔てて接合する例が比較的多く認められる。

廃棄帯間での接合例は、1985 や 2176 などは約３mの範囲で接合している。1902 はＪ６とＪ７グリッド間で 5.3 m離れて接合している。1811 は、Ｉ７とＪ７グリッド間で 11.5 m離れて接合している。2210 はＣ５・Ｅ５・Ｆ５・Ｆ６グリッドの廃棄帯中で約 30 m幅のなかで接合している。Ｄ６とＥ５グリッド間で 10 mほど離れて接合する事例もある。遺構出土土器との接合例は、1130 が H5 － P57 と H6 グリッド間で接合している。この時期の土器は、全体の数量からすると、遠距離での接合例が少ない。

Ⅴ　期（第 51 図）：この時期の接合関係は、前段階と同様に、１mほどの範囲に散乱した土器片の接合



第 48 図　主要土器接合分布図（1）

例が多く、この他に数10 m隔てて接合した事例も認められる。

廃棄帯間での接合例は、2515がＪ７グリッド内で4.5 mほどの範囲で接合している。2416はＪ７グリッド内で3.5 mの範囲で接合している。2336はＨ６グリッド内で接合し、約10 mほどの距離で接合している。図示していないもので、10 m前後の範囲で接合する例が５例見られた。一方、遺構出土土器との接合は、157は第９号住居跡の覆土から出土した土器片で、廃棄帯であるＤ５グリッド出土土器と接合している。これらの接合距離は約29 mである。この時期の接合関係は、５～10 mほどの距離での接合例が比較的多く見られる。

Ⅵ　期（第52図）：この時期の接合関係は、１～３mほどの範囲で接合する例も見られるが、一方で、接合関係が広範囲にわたるものが多く見られる。

廃棄帯内での接合例は、３mほどの距離で接合する例は、2793・2877・2923・3077などがある。一方、10 m以上離れて接合する例は比較的多い。2867はＪ５グリッドと廃棄帯（Ｉ７グリッド）間で接合し、約25 m離れている。また3144は廃棄帯中で約９mの範囲で接合している。3144はＤ５とＥ６グリッド間の約30 mの範囲で接合している。2945は、Ｊ５とＪ７グリッド間で10 m以上離れて接合している。遺構出土土器との接合例は、574は第39号住居跡覆土出土の土器と廃棄帯（Ｊ７グリッド）で約14 mの範囲で接合している。578はＪ４グリッドの出土土器と接合している。286と287は、第15A号住居跡覆土とＡ５グリッド間で接合し、20 m以上離れている。3136はＥ４－P11とＡ４・Ａ３グリッドの出土土器と接合している。

この時期の接合例は、前段階までと比べて離れて接合する例が多い。特に、Ｉ５・Ｊ５グリッドとＩ６・Ｉ７・Ｊ６・Ｊ７グリッドとの接合関係が見られる。これは、Ｈ５・Ｉ５・Ｊ５・Ｋ５グリッドにかけてⅥ期の住居跡がまとまって分布していることと関連していると考えられる。

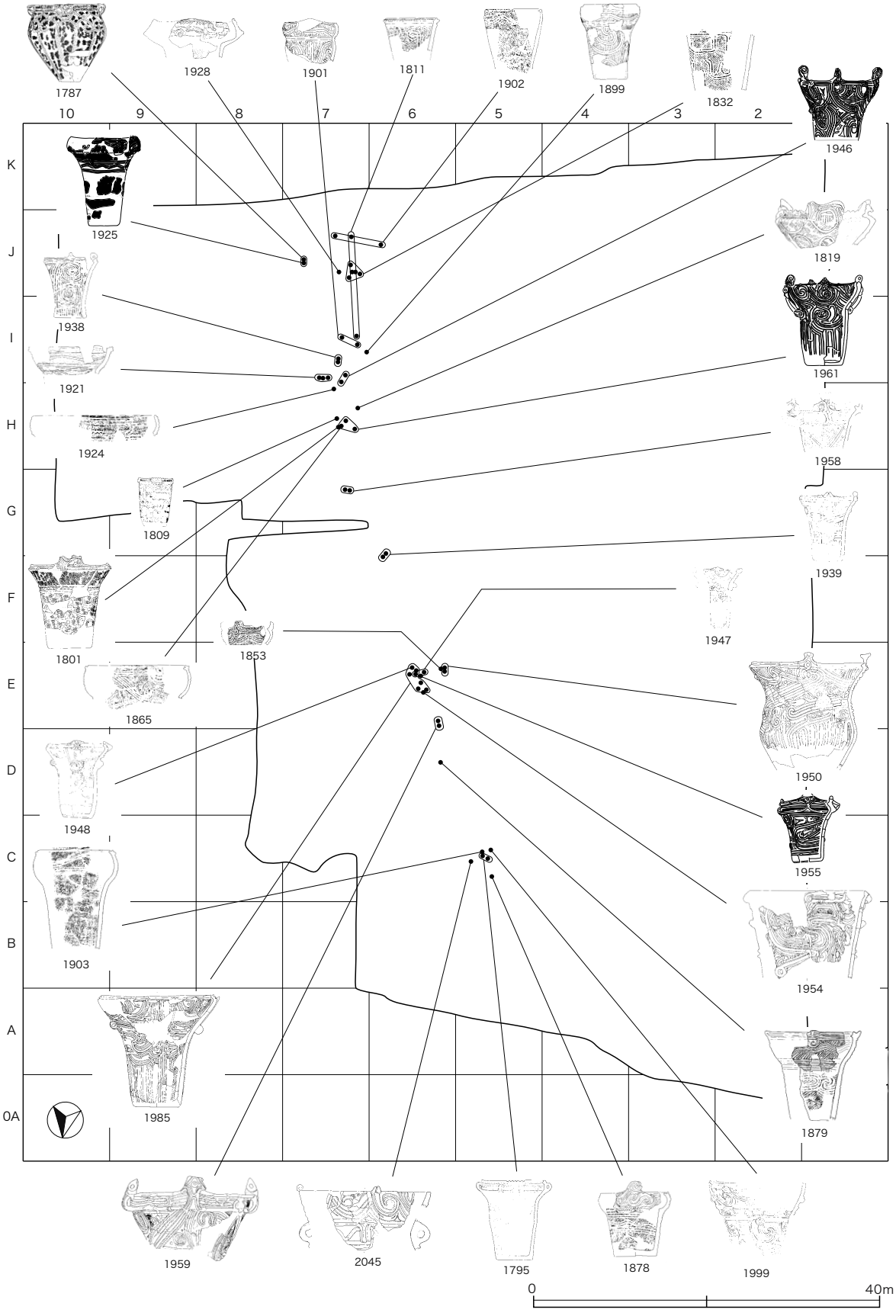
中期の浅鉢形土器・有孔鍔付土器（第53図）：浅鉢形土器や有孔鍔付土器の分布と接合関係は、１m範囲での接合のほかに広範囲での接合関係も認められた。

ａ．有孔鍔付土器:3156と3158は、完形にはならないが、廃棄帯底面からつぶれた状態で出土している。この他、3159や3161・3167・3160は、４～10 mの範囲で接合している。

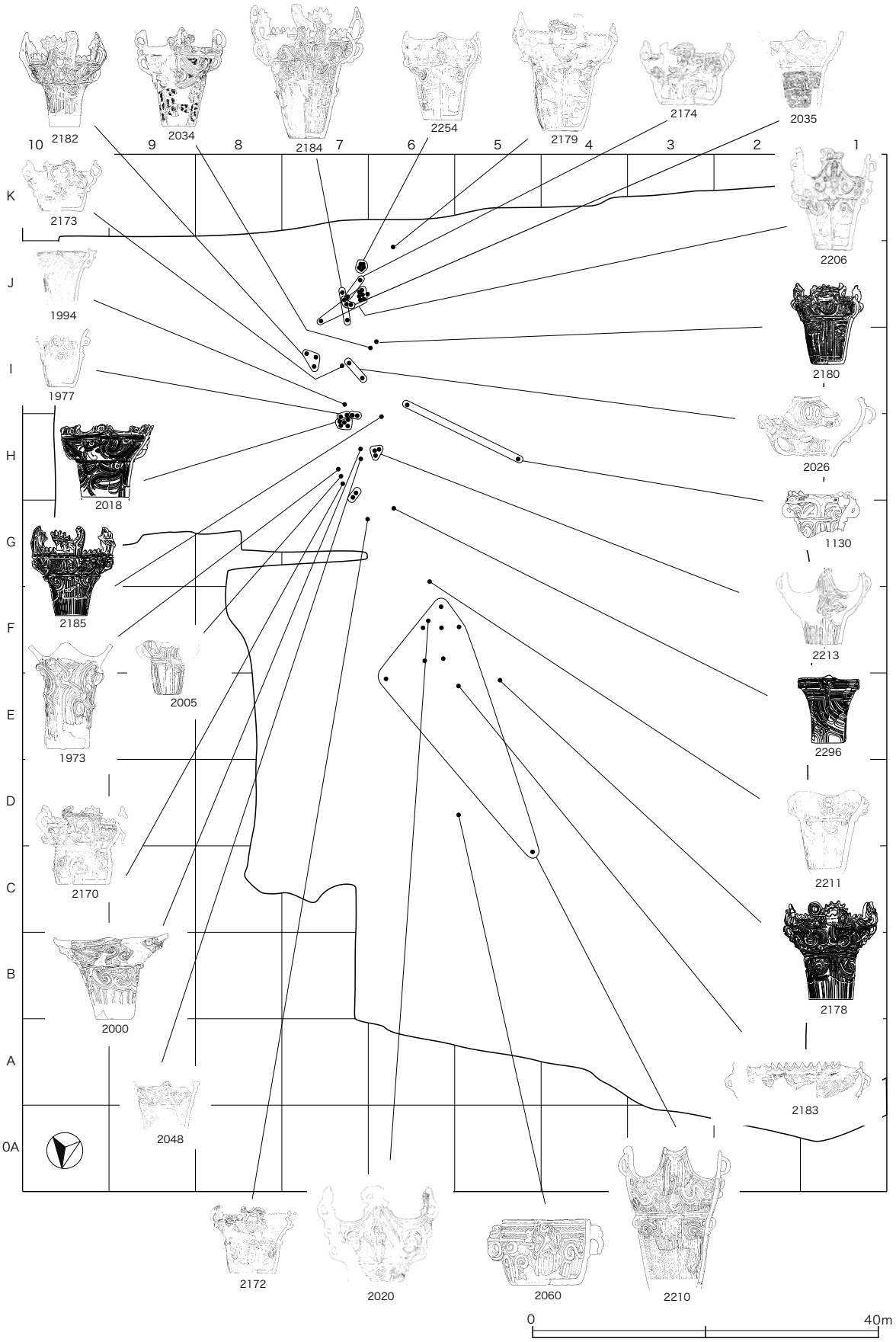
ｂ．浅鉢形土器：これらは広範囲での接合関係が認められた。５～10 mほどの範囲で接合する例は、3346・3404・3365・3432・3434・3442・3454がある。広範囲にわたる例は、3348がＥ５とＧ６グリッドで約21 mの距離で接合している。また3433はD5とF6グリッドで約18 mの距離で接合している。3454はＤ５とＥ６グリッドの中で約12 mほどの範囲で接合している。3374はＦ６とＩ７グリッド間で30 mほどの距離で接合している。3382はＥ５とＪ６グリッド間、約58 mの距離で接合している。3431はＦ５・Ｆ６・Ｉ６グリッド間で約32 m離れて接合している。3435はＩ７とＫ６グリッド間で約16 m離れて接合している。

遺構出土土器との接合例は、193が第11号住居跡出土土器と廃棄帯（Ｃ５・Ｆ６グリッド）で約34 mと約43 mほどの距離を隔てた土器片が接合している。1172は、Ｉ５－Ｐ７とＪ７グリッド間で約20 m離れて接合している。

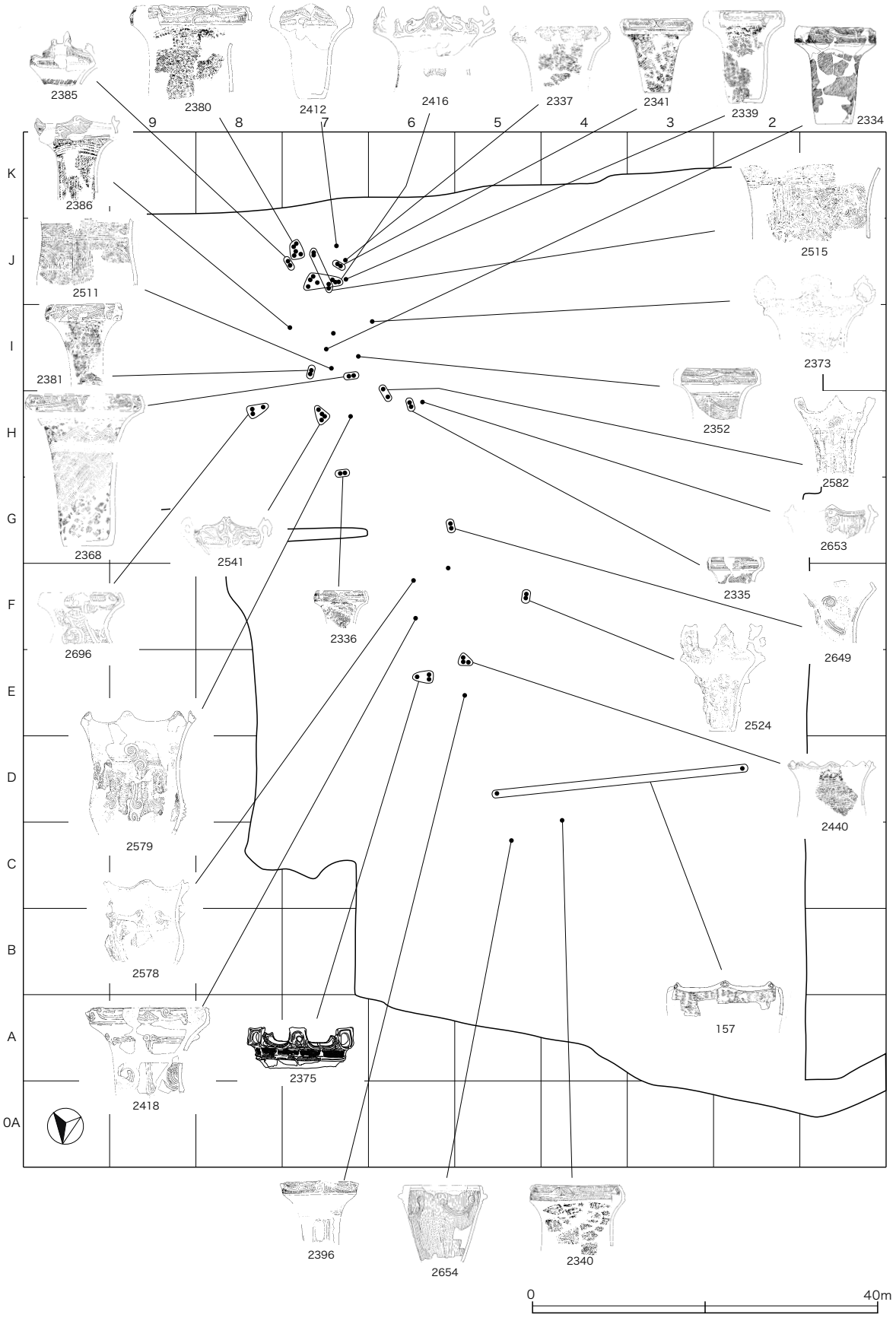
Ⅶ～Ⅸ期（第54図）：接合関係を有する土器は少ないが、これは出土遺物の全体量や接合作業の時間なども影響していると思われる。接合例のほとんどは、周囲に破片が散乱している程度である。3645はＪ



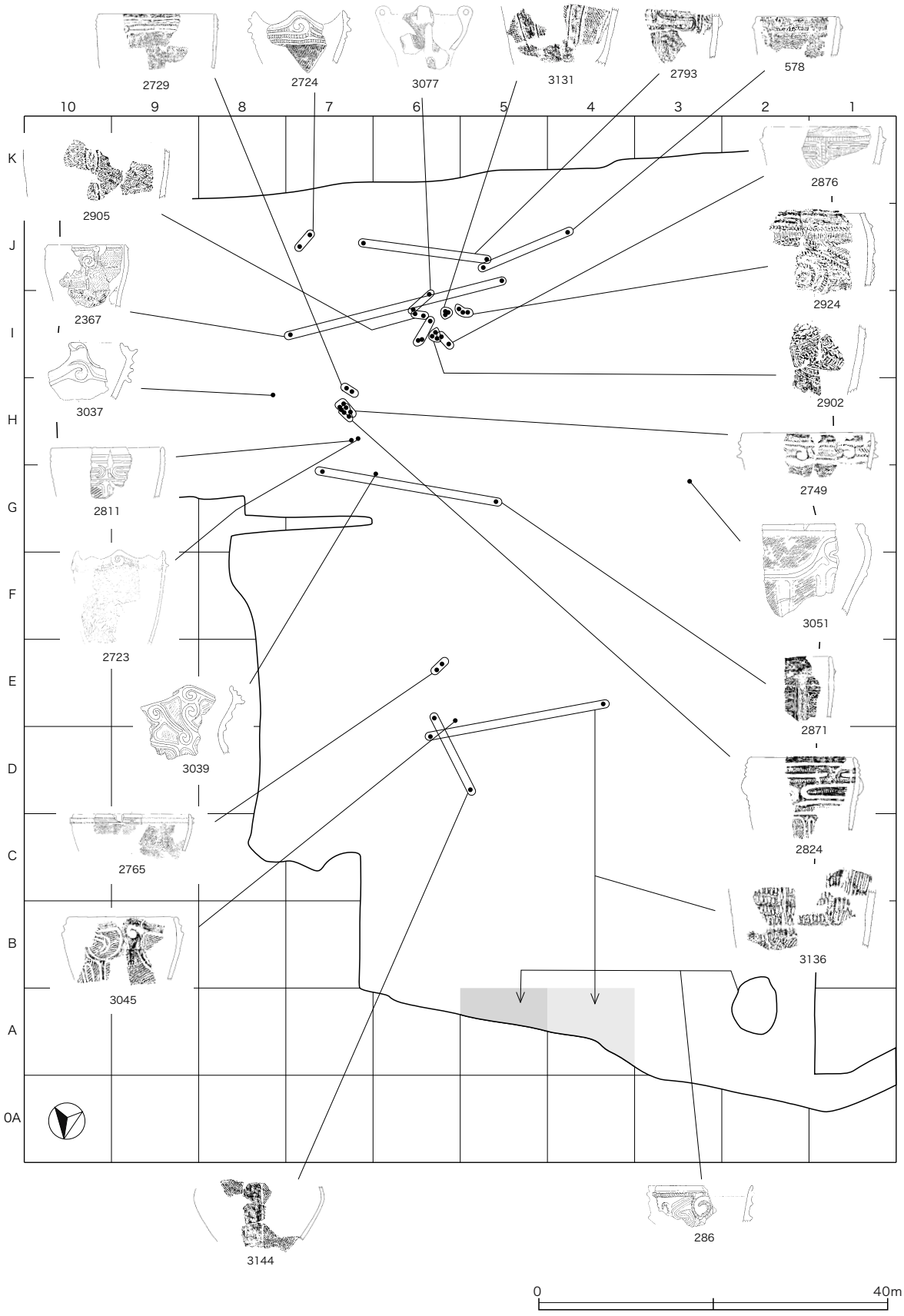
第 49 図　主要土器接合分布図（2）



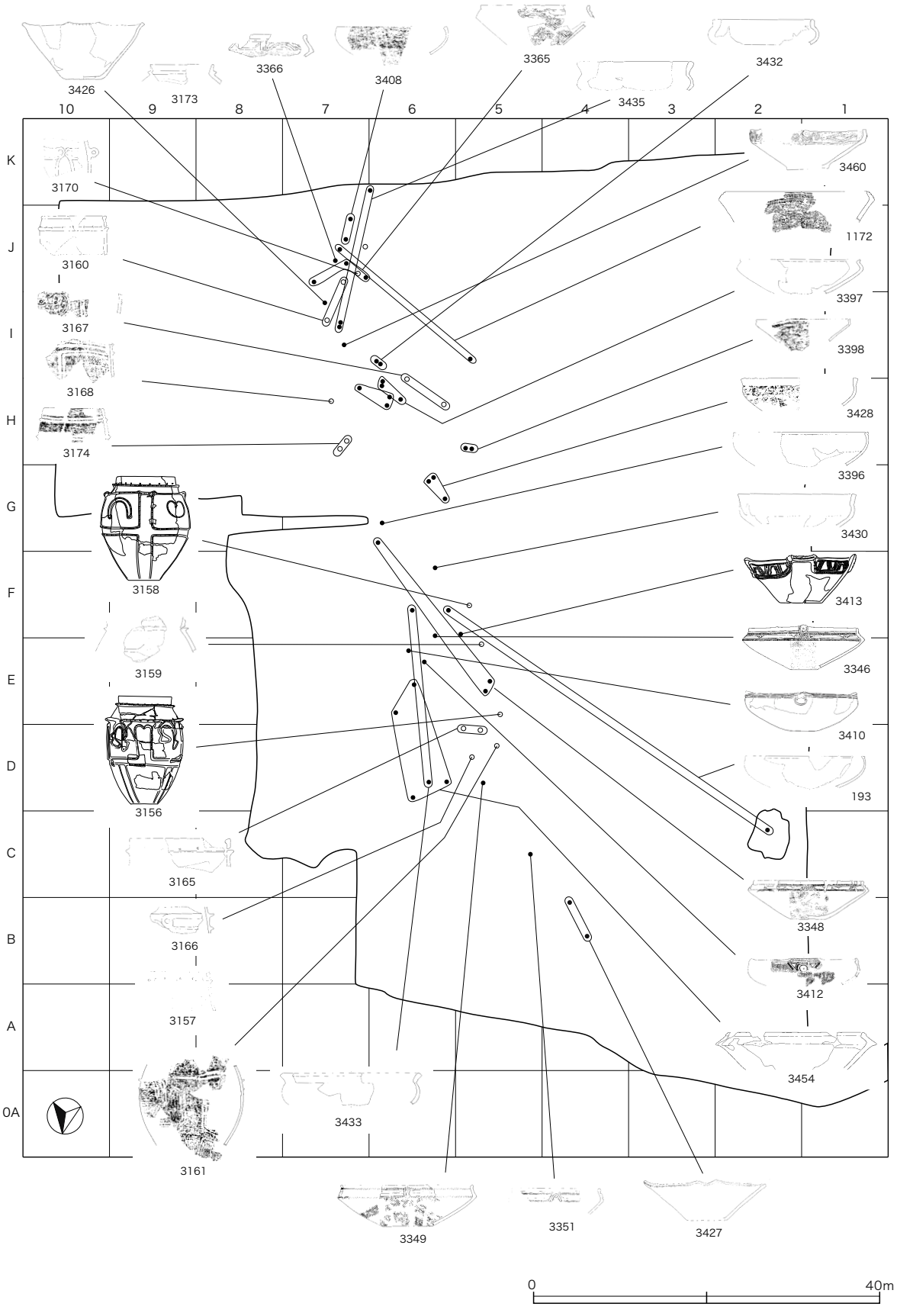
第 50 図　主要土器接合分布図（3）



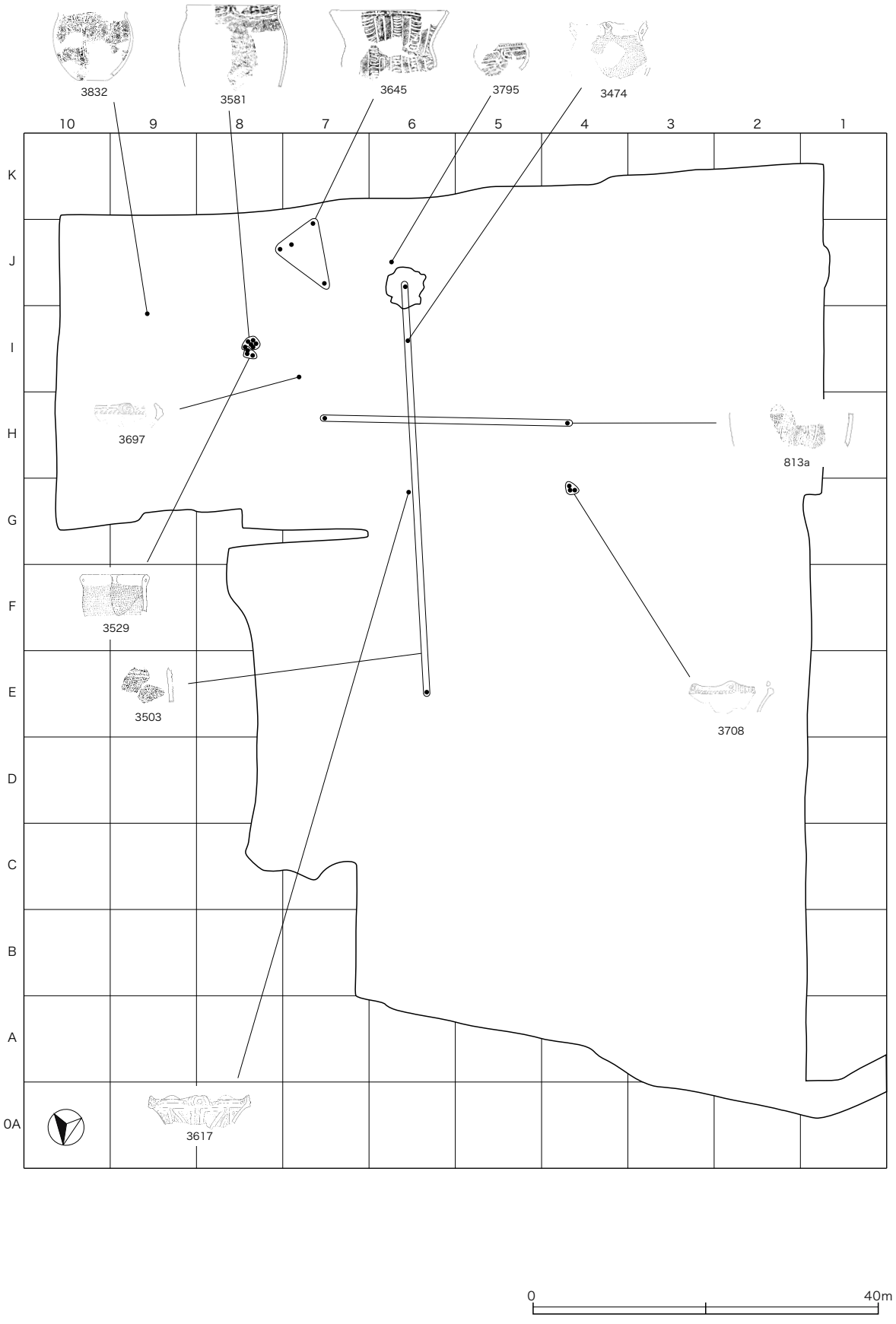
第 51 図　主要土器接合分布図（4）



第 52 図　主要土器接合分布図（5）



第 53 図　主要土器接合分布図（6）



第 54 図　主要土器接合分布図（7）

7グリッド内で約7mの範囲で接合している。3858はD6とE6グリッド間で約6m離れて接合している。

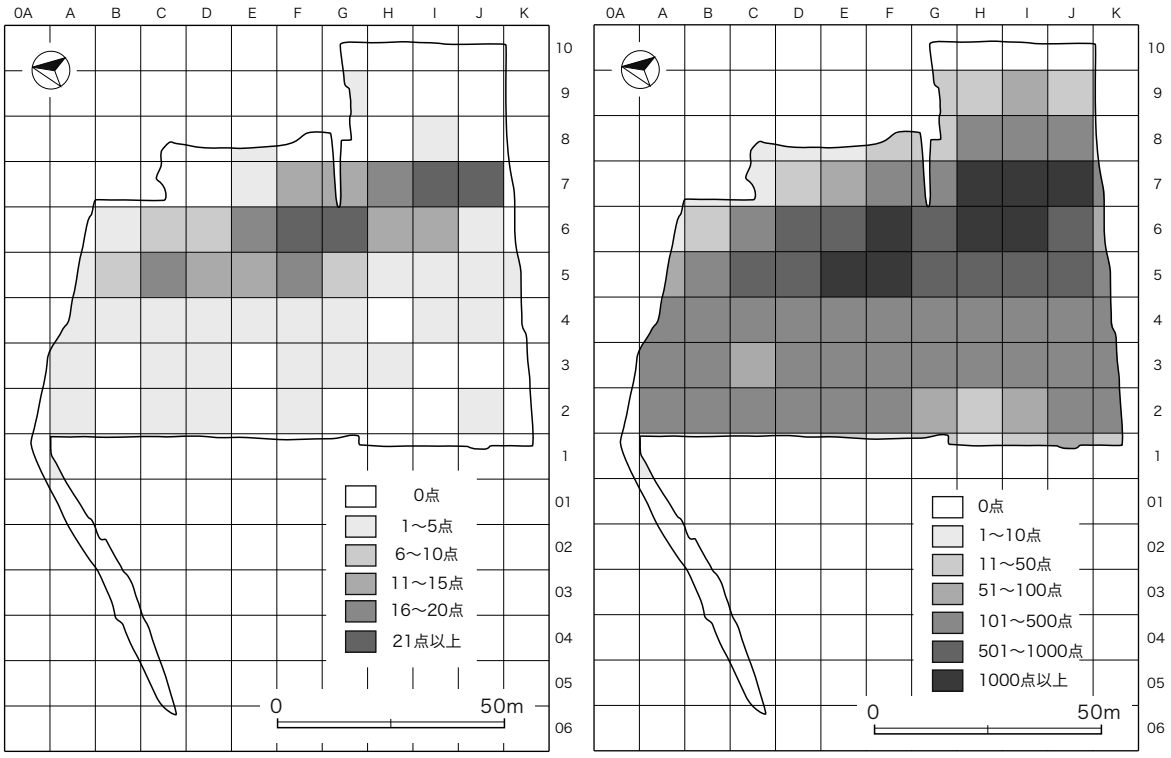
遺構出土土器との接合例は、813がH4－P75上層出土土器とH7グリッド出土土器が約28m離れて接合している。またE6－P4とJ6グリッドの倒木痕とで約45m離れて接合している。

以上、接合関係は時期的な傾向が認められた。これらは出土量や接合作業の偏りによって影響されている部分もあるが、ある程度の時期的な傾向を示していると思われる。しかし、今後、接合例のより詳細な検討から、このような接合関係の意味について理解を深めていく必要がある。

（4）土製品の出土状況（第55図1）

本遺跡から出土した土製品は516点であるが、そのほとんどが廃棄帯の範囲から出土している。その中でも、土偶や三角形土製品はそれぞれ150点、216点と大量に出土している。これらの土製品は小さいため、調査時に相当量のエラーがあったことが予想される。これらの分布は、第55図1に示した通りである。土偶は、E5・F5・F6・G6・H6・H7・I6・I7・J7グリッドに分布の集中があり、特にF6・G6・H6・I7・J7グリッドは10点以上出土している。三角形土偶は、B5・C5・C6・D5・D6・F5・F6・G6・G7・H6・H7・I6・I7・J7グリッドに分布の集中があり、特にC5・D5・E6・F6・H6・H7・I7・J7グリッドで10点以上出土している。これら土製品の9割以上は中期のものと考えられ、これらの分布は土器と同様に廃棄帯に分布の集中が認められる。一方、このなかで後期の土偶は分布傾向が異なり、第2号配石群の近辺や第3号配石群の立石の脇などから出土している。

一方、土製品の接合例は9例ある。これらは近距離で接合する例は稀であり、3・6・36・37・39・57のように10～30mほど離れた距離で接合している。これらは廃棄帯内での接合に限られ、遺構出土の遺物と接合例は認められなかった。



1．出土土製品の濃淡図（点数）　　2．出土石器の濃淡図（点数）

第55図　出土土製品・石器の濃淡図

（5）石器・石製品出土状況（第 55 図２）

本遺跡から出土した石器は、約5985点にのぼる。これら全体的な分布は、廃棄帯の範囲に集中している。石器から時期的な分布傾向を明らかにできないが、土器と同様な分布を示していると推定される。

一方、出土石器の中で、接合関係を持つものは５例ある。302 と 373 は廃棄帯内での接合であり、303・349・379 は遺構と関連する接合資料である。

3）Ｉ７グリッドの分析

（1）分析方法

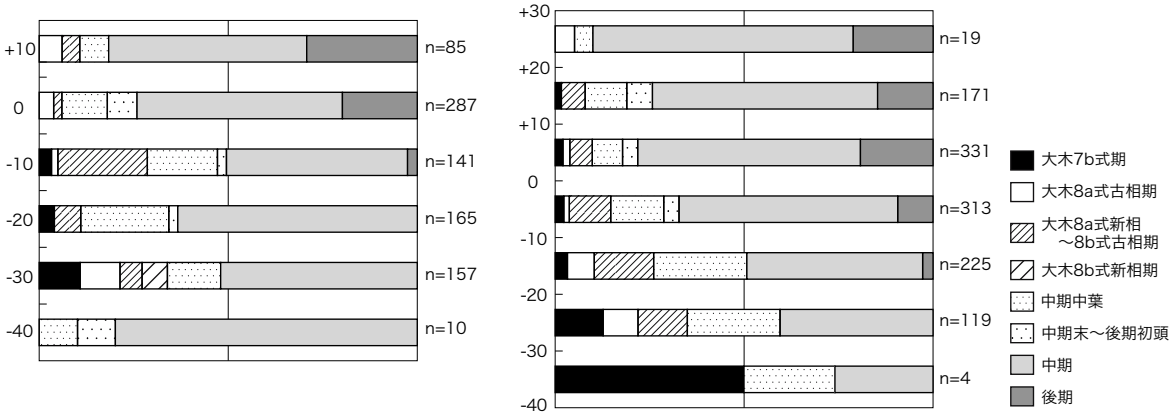
廃棄帯の中でも、出土遺物が多かったのはH～Kグリッドの範囲であり、その中でもＩ７グリッドはより細かな調査を行なった調査区であることから、Ｉ７グリッドについて細かな分析を行なった（註 64)。また本遺跡於調査は、ほとんどの遺物をトータルステーションやデータシートによって座標を記録している。よって、ここでは包含層を厚さ 10cm の機械的層位に分割し、実際の分層と合わせて , 検討を加えた。包含層はⅥａ層とⅥｂ層に分かれており、機械的層位を実際の土層に整合させるため、南壁セクション上のⅥａ層とⅥｂ層に一致する直線を引き、この直線を東西方向の傾斜の基準とした。そして、東西・南北方向の基準線を中心に厚さ 10cm の機械的層位を７層設定した。

まず、深度別に土器組成の変化を追い、有意な変化が読み取れるかどうか検討してみる。対象とするのは、中央･南壁セクションラインから北側に２m までの範囲内に含まれる土器（片）である。土器（片）の型式比定の作業においては、時期比定が困難であるものや、時期幅が相当な幅を持ってしまうものが多い。従って、時間的位置が不鮮明な土器群を可能な限り対象とするために、時間軸の目盛を粗くした。

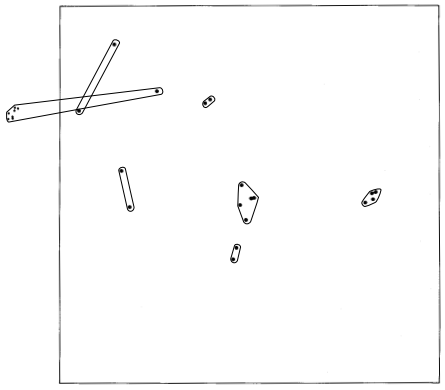
（2）分析結果

深度－ 40 ≦ z ＜－ 30 空間では遺物数が少ないが、大木７ｂ～大木８ａ式古相期の土器群が主体的であり、大木８ａ式新相～大木８ｂ式期の土器群が少量混在することが読み取れる。同様の傾向は深度－ 30 ≦ z ＜－ 20、－ 20 ≦ z ＜－ 10 の空間でも認められるが、深度が上がるにつれて、大木８ａ式新相～大木８ｂ式期の土器群の比率が高まっている。そして、深度－ 10 ≦ z ＜ 0 の空間になると両土器群の比率は数の上では逆転するが有意な差ではなく、両土器群が混在している。同様の傾向は深度 0 ≦ z ＜＋ 10 の空間でも認められるが、一方で沖ノ原式期～後期初頭期の土器群が数の上では主体的となる。同様の傾向は深度＋ 10 ≦ z ＜＋ 20 の空間でも認められる。つまり、Ⅵｂ層では中期中葉の土器群が主体的であるのに対して、Ⅵａ層では中期末葉～後期初頭期の土器群が主体的となる傾向（「傾向１」）を指摘できる。さらに、Ⅵｂ層の内部でも下部でも大木８ａ式新相期～大木８ｂ式古相期の土器群が多くなるという傾向（「傾向２」）も指摘できる。このように２つの傾向を指摘することができたが、作業が機械的ゆえに信憑性はあるとはいいきれない。従って、より実態に近い出土状況を復元し、２つの傾向を検証してみる。

層位的には、Ⅵ下層では大木７ｂ～大木８ａ式古相期の土器群と大木８ａ新～大木８ｂ式期の土器群が混在し、両者の間には有意な違いが見られないため、「傾向２」は追認できない。一方で、Ⅵａ層になると大木９式期～後期前葉の土器群が多く含まれるため、「傾向１」は追認できる。つまり、包含層中に二つの有意な時期差を指摘することはできるが、全体的には混然としている。従って、廃棄時には一昔前の土器片が埋もれることなく、顔を覗かせ、遺物の二次的移動が起こり得た状況が想定できる。

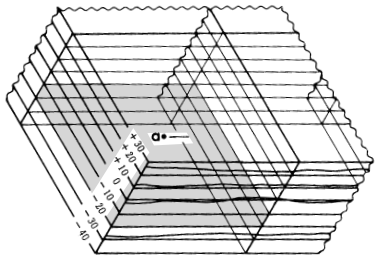


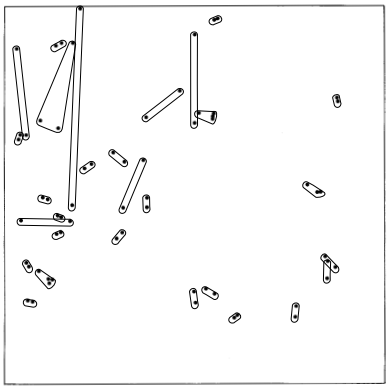
第 56 図　I 7 グリッドにおける深度別土器組成グラフ



S=1/200

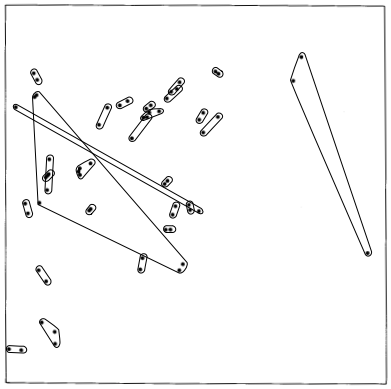
①. I7グリッド接合関係図(-30≦z<-20)





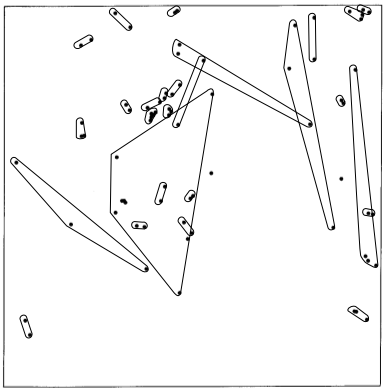
S=1/200

②. I7グリッド接合関係図(-20≦z<-10)



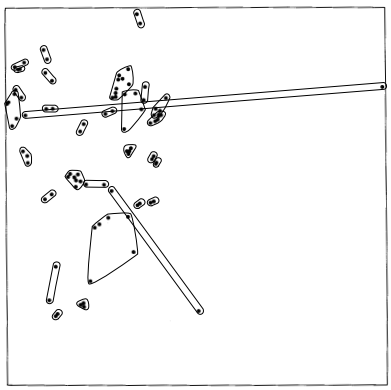
S=1/200

③. I7グリッド接合関係図(-10≦z<0)



S=1/200

④. I7グリッド接合関係図(0≦z<10)



S=1/200

⑤. I7グリッド接合関係図(10≦z<20)

第 57 図　I 7 グリッド接合図関係

第３節　出土遺物

１．土器

１）出土土器の概要

本遺跡の出土土器は、遺構出土の土器と遺構外出土のいわゆる包含層の土器に区分され、包含層出土土器については第Ⅳ章第１節での分類にそって説明する。

２）属性について

ａ．器種分類と器形分類

縄文土器の器種は、深鉢・鉢・浅鉢に大別される場合が多い（註 65)。本遺跡の出土土器については、深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・有孔鍔付土器・台付鉢・台形土器・注口土器・壺形土器・蓋形土器などの器種に分類した。また各器種には器形のバリエーションがあり、器種ごとに器形分類を行っている。

＜中期の土器群＞

（１）深鉢形土器

A類：胴部に括れを持たず、やや外反しながら立ち上がり、口縁部がやや内湾するもの（第 58 図１)。

B類：胴部がほぼ垂直に立ち上がり筒形を呈するもの（第 58 図２)。

C類：胴部がやや外反しながら直線的に立ち上がるもの（第 58 図３)。

D類：口縁部がやや外反しながら立ち上がるもの（第 58 図４～６)。

E類：胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が「く」の字状に内屈するもの（第 58 図７・８)。

F類：口縁部がキャリパー形を呈し、胴部が直線的に立ち上がるもの（第 58 図９)。

G類：胴部が直線的に立ち上がり、頸部が外反して口縁部が内屈するもの（第 58 図 10)。

H類：口縁部がキャリパー形を呈し、口縁部の湾曲が強いものと弱いものがある（第 58 図 11 ～ 13)。

Ⅰ類：胴部が直線的に立ち上がり、頸部が外反して、口縁部がキャリパー形を呈するもの（第 58 図 14・15)。

J類：胴部張り出して、口縁部が外反するもの（第 58 図 16・17)。

K類：胴部が張り出して、頸部が外反して立ち上がり、口縁部が内屈するもの（第 58 図 18)。

L類：胴部が張り出して、口縁部が「く」の字状に内屈するもの（第 58 図 19)。

M類：胴部がやや張り出して、口縁部が内湾して先端が外反するもの（第 58 図 20)。

N類：胴部が張り出して、口縁部が内湾してキャリパー形を呈するもの（第 58 図 21 ～ 23)。

O類：胴部が張り出し、頸部が外反して口縁部がキャリパー形を呈するもの（第 58 図 24)。

P類：胴部がゆるく張り出し、口縁部が内湾するもの（第 58 図 25)。

Q類：胴部が張り出して、口縁部がやや外反するもの（第 58 図 26)。

R類：胴部が張り出して、頸部が屈曲して口縁部が外反するもの（第 58 図 27)。

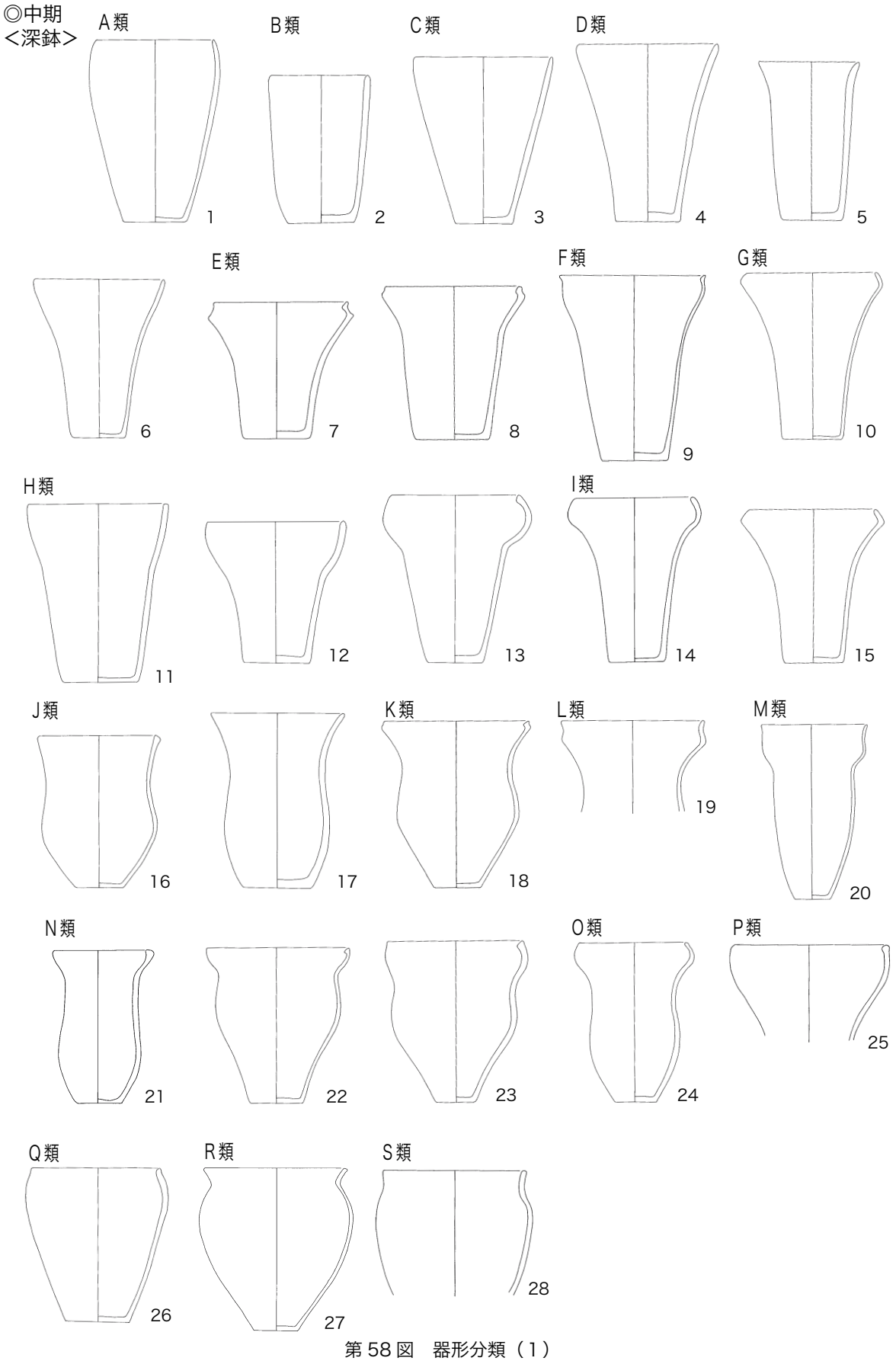
S類：胴部が張り出して、口縁部が内屈して先端が外反するもの（第 58 図 28)。

（２）有孔鍔付土器

A 類：胴部が張り出して、口縁部がすぼまりながら垂直に立ち上がるもの（第 59 図１)。

B 類：全体の形状は不明であるが、胴部がほぼ垂直に立ち上がるもの（第 59 図２)。

C 類：ソロバン玉形の鉢形を呈するもの（第 59 図３)。


◎中期
<深鉢>
A類
B類
C類
D類
E類
F類
G類
H類
I類
J類
K類
L類
M類
N類
O類
P類
Q類
R類
S類
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

第 58 図　器形分類（1）

（3）浅鉢形土器・鉢形土器

A類:口縁部が「く」の字状に屈曲して口唇部がほぼ垂直に立ち上がり、ソロバン玉形を呈するもの（第59図4）。

B類：口縁部がゆるやかに湾曲しながら立ち上がるもの（第59図5）。

C類:胴部が外反して立ち上がり、口縁部がやや内湾するもの（C1）と外反するもの（C2）がある（第59図6・7）。

D類：胴部が張り出し、頸部で屈曲してほぼ垂直に口縁部が立ち上がるもの（第59図8）。

E類：口縁部が「く」の字状に内屈して、ソロバン玉形を呈するもの（第59図9）。

F類：口縁部が「く」の字状に内屈するもの（第59図10）。

G類：口縁部がやや内屈して、ほぼ垂直に立ち上がるもの（第59図11）。

H類：胴部が外傾しながら立ち上がり、口縁部がキャリパー形を呈するもの（第59図12）。

Ⅰ類：胴部がやや張り出して、口縁部が外反するもの（第59図13）。

J類：口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもの（第59図14）。

K類：口縁部がやや外反して立ち上がるもの（第59図15）。

L類：胴部が外反しながら立ち上がり、口縁部が「く」字状に内屈するもの（第59図16・17）。

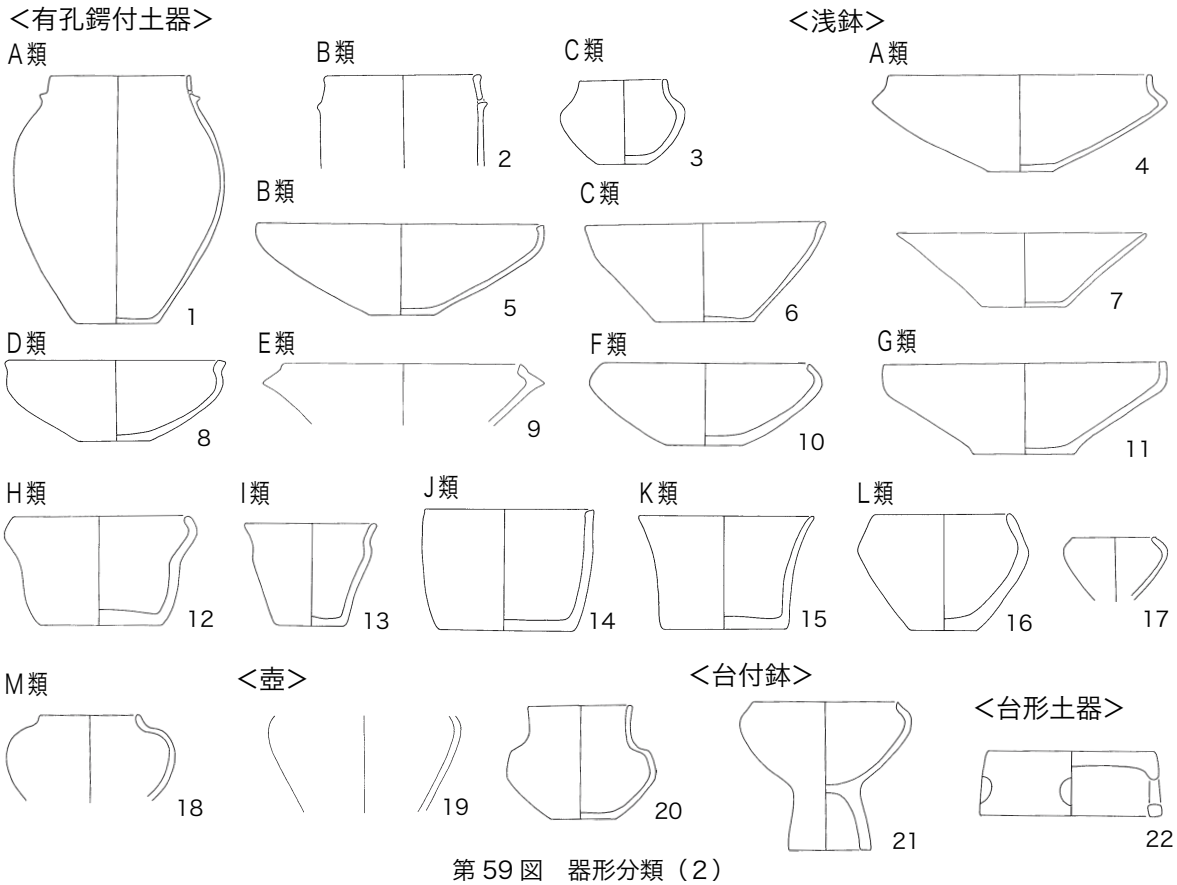
M類：胴部が張り出して、口縁部が内傾するもの（第59図18）。

（4）その他（両耳壺・台付鉢・台形土器）

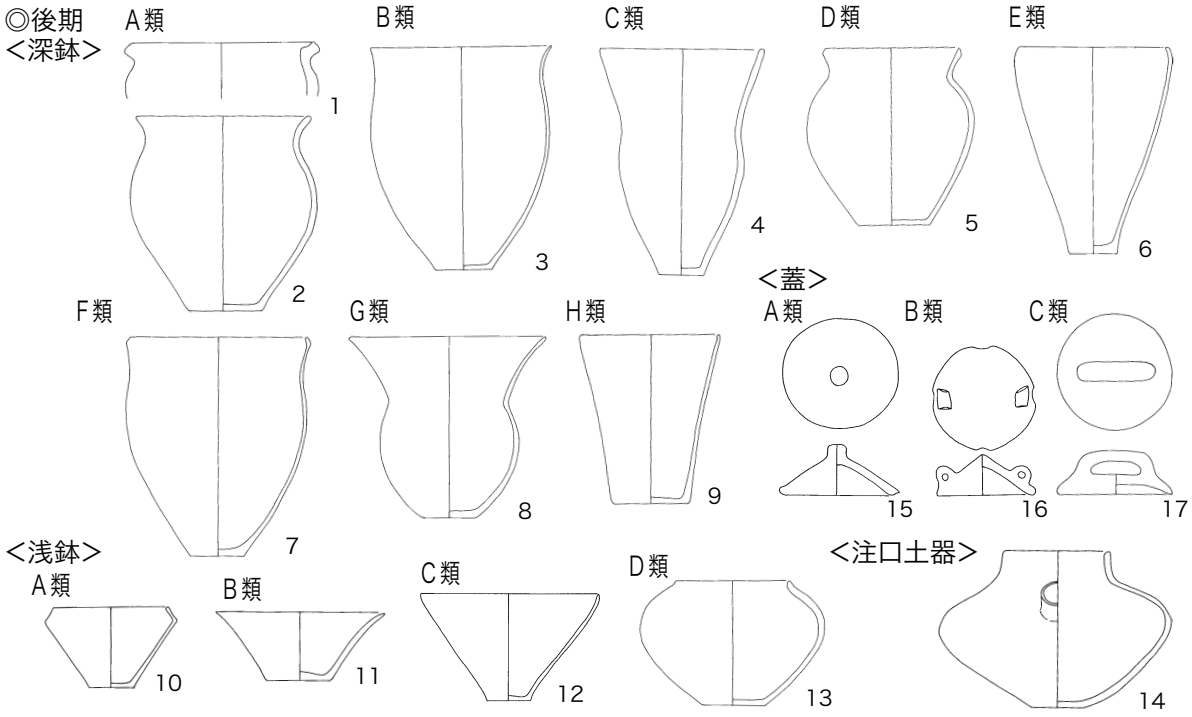
両耳壺：胴部が張り出して、頸部が屈曲して、口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもの（第59図19・20）。

台付土器：底部に台が付属するもので、深鉢形（A類）と鉢形（B類）を呈するものがある（第59図21）。

台形土器：台形を呈するもの（第59図22）。



第59図　器形分類（2）



第 60 図　器形分類（3）

＜後期の土器群＞

（1）深鉢形土器

A 類：胴部が張り出して、口縁部が屈曲して外反するもの（第 60 図 1）。

B 類：胴部が張り出して、口縁部がやや外傾するもの（第 60 図 2・3）。

C 類：胴部がやや張り出して、口縁部がやや外傾しながら立ち上がるもの（第 60 図 4）。

D 類：胴部が張り出し、頸部が屈曲して口縁部が外反するもの（第 60 図 5）。

E 類：胴部に括れをもたず、外傾しながら立ち上がり 、口縁部がやや内湾するもの（第 60 図 6）。

F 類：胴部がやや張り出して、頸部が外反して口縁部が内屈するものが多い（第 60 図 7）。

G 類：胴部が張り出して、頸部が外反するいわゆる金魚鉢形を呈するもの（第 60 図 8）。

H 類：朝顔形を呈し、口縁部が外反するもの（第 60 図 9）。

（2）鉢形土器・浅鉢形土器

A 類：胴部が外傾しながら立ち上がり、口縁部が「く」字上に内屈するもの（第 60 図 10）。

B 類：胴部が外反しながら立ち上がり、口縁部がやや外反するもの（第 60 図 11）。

C 類：胴部が外反しながら立ち上がり、やや内湾するもの（第 60 図 12）。

D 類：胴部が張り出して、口縁部が内湾するもの（第 60 図 13）。

（3）注口土器

口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、胴部がソロバン形を呈するもの（第 60 図 14）。

（4）蓋形土器

A 類：把手が頂部に一つ付属するもの（第 60 図 15）。

B 類：２つの小把手が縁辺近くに付属するもの（第 60 図 16）。

C 類：１つの大形の橋状把手が付属するもの（第 60 図 17）。

b. 時　期

出土土器の帰属時期は、第Ⅳ章第１節で表した遺跡の時期に対比し、明瞭なものは「Ⅰ期～XI期」のいずれかを記載した。明確ではないものは、「中期」・「後期」の大枠の時期、もしくは「不明」とした。

c．法　量

土器の法量については、器高・口径・底径・容量について計測し、cm 単位で記載している。計測部位は第 61 図のような部位を計測した。また器高については必要なものは２ヶ所計測を行い併記する。土器容量の計測については、土器のほとんどは図上で計測し、計測方法は第 61 図のような方法（註 66）を用いて算出した。

d．残存部位

残存部位に関しては、口縁部・頸部・胴部・底部の部位名称、または「口縁～胴部」等と記載した。

e．文様と縄文原体

文様は特徴的なものについて記載し、従来、呼称されている名称を用いた。また縄文原体は RL などの記号で表し、風化などにより不明瞭なものは「不明」と記載した。

f．胎土と色調

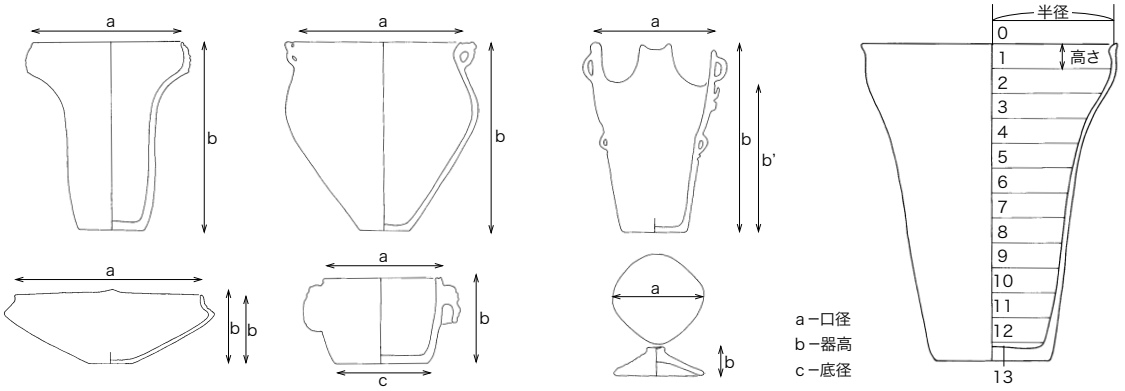
胎土については、主な含有物（石英・雲母・砂粒・小礫・白色粒子・赤褐色粒子など）を記載した。胎土の含有物には、胎土と異なる色調（白色や赤色）の粘土粒子を含むものが見られ、そのうち明らかに土器片を含むものが認められる（註 67）。また胎土中に白色粒子を多量に含み、風化のためかスカスカで脆い特徴的な胎土が見られる。胎土の色調は、炭化物の付着や風化などによって部位ごとに色調が異なっている場合があるが、実際の色調を示すと考えられる部分を観察した。また色調は、『新版標準土色帖』（小山・竹原 1970）に基づいて記載した。

g．二次焼成

主に、器面の内外面に残る炭化物（ススやコゲ状のもの）の有無について記載した。また外面に炭化物が付着しているが内面に全く炭化物が付着しないものや、内面が黒色に変色するものもあった。これらも煮沸による使用痕跡である可能性があり、注意が必要である（註 68）。

h．その他

土器内外面の赤彩（付編２参照）、黒色付着物（アスファルトなど）の付着、補修孔、土器底面の網代痕・葉脈状文などの圧痕（付編１参照）については備考欄に記載した。



第 61 図　土器の計測部位と容量計測方法

3）土器各説

本遺跡の出土土器については、全ての資料に言及することはできないが、図版に掲載している 4089 点の土器については土器観察表を作成し、主要な資料について概略的に説明したい。

1）遺構出土土器（図版第 217 図～第 329 図）

（1）竪穴住居跡・炉跡出土土器（図版第 217 図～第 275 図）

第 1 号住居跡出土土器（図版第 217 図）：Ⅴ期の土器が主体的に出土している。1 は口縁部を縄文原体の側面圧痕によって区画して無文部になる。2 は口縁部に渦巻文と沈線を施し、3 は波状文、4・5 は腕骨文に矢羽状沈線文が充填されている。7・8 は口唇部が無文になり、胴部が地文縄文のみのものである。10・11 はⅣ期の土器で、平行沈線により文様を描くものである。

第 2 号住居跡出土土器（図版第 218 図）：Ⅷ～Ⅸ期の土器が出土している。12 は 4 本の隆帯文がめぐり、3 段の環状貼付文が付され、胴部は三角形区画文が施される。17・18・20 は口縁部に沈線がめぐり、17 は口唇部に 8 字状突起が付され、その下には紐結状の文様が施される。19 は口縁部に縄文帯がめぐり、単位文が付され、口唇部に刻みが付加される。内面には沈線帯がめぐっている。21 ～ 23 は口縁部に沈線により三角文などの文様を描くものである。26 ～ 31 は無文の土器である。

第 3 号住居跡出土土器（図版第 219 図・第 220 図）：Ⅷ期の土器が主体的に出土している。32 ～ 42 は、口縁部に 1 本か 2 本の隆帯がめぐり、その下に帯状縄文が施される。43 ～ 45 は口唇部に文様帯を有するもので、横位の沈線がめぐっている。47 ～ 51 は磨消縄文で、直線的・曲線的文様が施される。56 ～ 58 は集合沈線文が施されるもので、59 ～ 62 は、口縁部の内外面に 5 ～ 7 条の弧線文が施される。63 は浅鉢形土器で、内面に断面三角形の隆帯がめぐっている。64 は注口土器の胴部破片と考えられ、沈線区画内に刺突列が充填される。66 ～ 70 は無文土器である。71 は頸部に刺突列がめぐり、72 ～ 74 は胴部に刺突を施すものである。

第 4 号住居跡出土土器（図版第 221 図～第 222 図 88）：Ⅵ期の土器が主体的に出土している。75 は口縁部に 2 本の隆帯がめぐり、隆帯下は沈線によって 7 段に区画され、区画内に縦位もしくは斜位の沈線が充填される。また隆帯から 8 字状の懸垂文が垂下している。76・78・79 は口縁部に渦巻文を有している。77 と 80 には弧線文が施され、77 には横ハ字文が充填されている。83・86・87 は隆帯上に沈線を施すもので沈線間はコブ状の突起になる。84 は弧状の磨消縄文が施され、両耳壺の胴部破片と推定される。85 は鉢形を呈する土器で、沈線によりワラビ手状文などを描き、口縁部下に横位の溝と小把手が付される。器面には赤彩が認められる。88 は胴部破片で、眼鏡状突起と両端に渦巻文を持つ文様が付される。

第 6 号住居跡出土土器（図版第 222 図 89 ～ 101）：わずかにⅧ期の土器が出土している。89 は隆帯に 8 字状貼付文が付され、胴部に玉抱状の帯状縄文が描かれる。90 ～ 93 は磨消縄文により直線的な文様が描かれ、94 は 3 条 1 組の沈線による縦位懸垂文に斜行文が付され、96 ～ 101 は無文の粗製土器である。

第 7 号住居跡出土土器（図版第 223 図・第 224 図）：Ⅵ期の土器が主体的に出土している。102・103・105・106 は口縁部に刻目隆帯を有する土器で、102 は隆帯下に懸垂文と 3 条の弧線文を施している。103・104 は渦巻文を中心に数条の沈線が同心円状にめぐっている。105 は刻目隆帯下に懸垂文を配し、その両側に渦巻文と方形の沈線区画が施されている。107 ～ 110 は横位の沈線もしくは沈線に刺突を加えるものである。111 ～ 113 は細い沈線区画内に横ハ字文を充填する土器で、隆帯の剥落面や破断面に

も焼成が及んでいた。114・115 は刻目隆帯の間に横ハ字文が施されるものである。116 ～ 118 は、口縁部に圧痕隆帯を施す一群である。119 と 120 は胴部の懸垂文である。122 は、微隆起線文により曲線的な文様を描くもので、瓢箪形注口土器の破片であると考えられ、内面に黒色の付着物が見られる。

第８号住居跡出土土器（図版第 225 図）：Ⅵ期の土器が出土している。126 は胴部に懸垂文が垂下し、127 は口縁部の隆帯間に管状の刺突を施すものである。128 は刻目隆帯による渦巻文が付され、129 は刻目隆帯に横ハ字文が施される。130・131 は隆帯がめぐるものである。133 は微隆起線により渦巻文を描き、134・135 は磨消縄文で、加曽利ＥⅣ式土器と考えられる。

第９Ａ号住居跡出土土器（図版第 226 図～第 228 図）：Ⅴ期の土器がまとまって出土している。139 ～ 147 は胴部に半隆起線文を縦位に施す一群で、口縁部に無文帯を有するもの（139 ～ 141・143・146）や、隆帯による渦巻文を有するもの（139 ～ 143・147）、眼鏡状突起を有するもの（140）がある。149 ～ 155 は、沈線区画・隆帯間に矢羽状沈線文を充填するもので、150・153 ～ 155 は腕骨文を施している。157 ～ 160 は口縁部の先端が肥厚して無文部になるもので、157 は５か６単位の波状口縁で、波頂部に玉抱三叉文が施される。162 は縦位の２条の刺突列が垂下する。163 は口縁部の先端部が内側に屈曲し無文部になる。164 ～ 167 は地文に条線文を施す一群である。これらはⅤ期のなかでも比較的新しい段階のものである。加えて、Ⅲ期～Ⅳ期の土器も出土している。168 は半隆起線文の土器で、169 は王冠型土器の突起部分である。171 は爪形文と平行沈線、172 は浅鉢形土器の口縁部で、173 は爪形文・蓮華文が施される。174 は環状貼付文を付す突起と有節沈線を施す土器で、175 は口縁部に横位の楕円区画を有し、沈線に刻目を施すものである。

第 10 号住居跡出土土器（図版第 229 図）：Ⅳ期の土器が主体的に出土している。176 は胴部と頸部を沈線で横区画し、口縁部には波状文がめぐっている。胴部は縦位の区画を施して、その中に渦巻文を配している。177 は地文縄文で、口縁部には２本の隆帯で直線文と渦巻文が施されるが、隆帯の接着面は未調整となる。179 は口縁部に文様帯を有し、無文帯になっている。180・181 は半隆起線文の土器で、182 は口縁部に２本の隆帯で文様を描き、隆帯接着部は調整が施される。183 は刻目隆帯がめぐり、横ハ字文が充填されている。

第 11 号住居跡出土土器（図版第 230 図 186 ～ 193）：出土土器はⅢ期～Ⅶ期の土器で、時期にまとまりがない。187 は口縁部に無文部がめぐり、∩字状文が垂下する。190 と 191 は同一個体と考えられ、腕骨文と矢羽状沈線文が施される。193 は無文の浅鉢形土器であるが、赤彩などは見られなかった。

第 13 号住居跡出土土器（図版第 230 図～第 232 図）：Ⅳ期の土器がまとまって出土している。194 は頸部を区画し、口縁部上端に交互刺突文、口縁部と胴部に波状文がめぐっている。195 ～ 204 は半隆起線文を施すもので、環状突起を有するものがある。204 は爪形文が垂下し、205 は沈線間に細沈線が充填される。210 は口縁部に楕円区画を持ち、胴部に半截竹管により懸垂文を施すものである。211 は楕円区画内に蛇行沈線文を施す。212 は口縁部に突起を有し、214 は隆帯による円形区画と胴部に蛇行沈線文を施す。216 ～ 221 は浅鉢形土器で、216 は口縁部に半隆起線文と玉抱三叉文、口唇部にも玉抱三叉文を施すものである。217 は胴部が地文縄文で、口縁部を半隆起線文で区画し無文部になる。218 ～ 220 は無文で、220 は口唇部に玉抱三叉文を有している。222 ～ 224 は地文のみの土器である。

第 14A 号住居跡出土土器（図版第 233 図）：Ⅳ期の土器が主体的に出土している。225 は半隆起線文の土器で、口縁部に爪形文を加える横帯区画があり、胴部には爪形文を加えた懸垂文が垂下する。226 は

横位の半隆起線文が特徴的で4単位の袋状突起が付く土器と考えられる。228・229・231は沈線間に沈線を充填するものである。227と230は沈線に刺突を加えるもので、227は地文縄文に胴部に懸垂文が垂下している。232は地文縄文に懸垂文が垂下するのみで、233は地文のみの粗製土器である。

第14B号住居跡出土土器（図版234図・第235図）：Ⅳ期の土器が主体的に出土している。234～241は基隆帯と半隆起線文を施す一群である。234は口縁部が基隆帯による渦巻文の周囲に半隆起線文がめぐり、胴部区画の下が無文になる。235は口縁部に双環状突起が付され、基隆帯と半隆起線文により曲線的な文様を施す。239は4単位の鶏頭冠把手が付属する鉢形土器であり、刻目を加える隆帯がめぐり、胴部にはワラビ手状文が垂下している。242は地文縄文にクランク文を施すものである。243は浅鉢形土器で、口唇部に刻目が施される。244・245は地文縄文のみの粗製的土器である。246は区画内に細い沈線を充填するもので、247は懸垂文に横位の蛇行沈線文が見られる。249・250・251は口縁部区画に矢羽状沈線文を描くもので、252は胴部破片で単沈線によって文様が描出される。

第15A号住居跡出土土器（図版第236図～第241図289）：Ⅳ期の土器がまとまって出土している。255～278は基隆帯と半隆起線文を施す一群である。255は胴部の渦巻文が横位に連結してめぐっている。257は三段に眼鏡状突起が付属し、258～261・263・264・267・271・275は環状突起や眼鏡状突起が付される。262は懸垂文が垂下し、沈線脇に刻みが施される。266は把手が付属し、269・270は胴部区画に橋状把手が付される。274は4単位の鶏頭冠状把手を有する鉢形土器で、隆帯に刻目が施される。胴部区画には4単位の橋状把手が付属する。275は単位の台形状の突起を有するもので、波頂部と頸部の括れに眼鏡状突起が付される。276は胴部が地文縄文で、口縁部に三角形の区画を有し、1ヶ所に渦巻文が付き、その間に横位の沈線が施されている。渦巻文に沿ってペン先状の有節沈線がめぐり、口唇部には刻目が施されている。279・280は平行沈線により懸垂文・弧線文を描くものである。281は4単位の波状口縁で、口縁部上端は平行沈線により区画されている。282は地文縄文の粗製土器である。283は4単位の波状を呈する無文の浅鉢形土器であり、波頂部がやや窪み、貫通孔を有する。波底部には突起が付されて、底部はやや上げ底状になっている。284は口縁部区画に剣先文を施し、285は口縁部区画に2本の隆帯がめぐっている。286・287は口縁部に刻目隆帯がめぐり、渦巻文が垂下する。

第15B号住居跡出土土器（図版第241図）：Ⅳ期の土器が出土している。290はキャリパー形を呈する土器で、口縁部に有節沈線を施し、胴部は平行沈線によりクランク文や渦巻文を描出する。291～294は半隆起線文を施す土器で、292は交互刺突文と楕円区画を付し、294は胴部に地文を施している。

第16A号住居跡出土土器（図版第242図～第243図310）：Ⅳ期の土器が出土している。300～303は基隆帯と半隆起線文を施すもので、300・301には眼鏡状突起が付属する。300は4単位の眼鏡状突起が付され、大形と小形の眼鏡状突起が見られる。304は平行沈線による縦位の懸垂文にワラビ手状文が付属する。305は胴部区画に4単位の眼鏡状突起が付き、胴部は地文縄文になる。306・307は口縁部に楕円区画を有するものである。308は環状突起が付く懸垂文が垂下する。309は懸垂文間に斜位の沈線が施される。310は浅鉢形土器で、無文の器面に赤彩が認められる。

第16B号住居跡出土土器（図版第243図311～315）：311は地文縄文に眼鏡状突起が付く懸垂文が垂下するものである。312は平行沈線により楕円文を描き、313はS字状の突起と圧痕隆帯が口縁部にめぐり、胴部区画に爪形文が施される。314は沈線区画内に横ハ字文を施し、315は磨消縄文により逆U字状文が描かれる。

第 17A 号住居跡出土土器（図版第 244 図・第 245 図）：Ⅵ期の土器がまとまって出土している。316 ～ 320 は口縁部に 1 ～ 3 本の刻目隆帯がめぐる一群である。316 は 4 単位の渦巻文を有し、胴部は地文のみとなる。321 は渦巻文が付され、322 は沈線間に刺突を加えるものである。323・324 は隆帯間・隆帯上に沈線を断続的に施すもので、沈線に刺突を加えるものも見られる。325・326 は沈線に刺突を加えたもので文様が描かれている。327 ～ 329 は 4 単位の波状口縁で、波頂部には渦巻文が横と縦に展開し、その間に弧線文が充填されている。これらは大木式系の土器である。331・332 は加曽利 E 式系の土器であり、磨消縄文が見られる。333 ～ 336 は口縁部を沈線で区画し、口縁部が無文になる粗製土器で、337 は口縁部が肥厚して無文になり、胴部に縦位の条線文が施されるものである。339・340 はⅧ期の土器で、340 は注口土器の破片である。

第 17B 号住居跡出土土器（図版第 246 図・第 247 図）：Ⅲ期の土器がまとまって出土している。341 は埋設土器で、環状突起が付く懸垂文が垂下し、口縁部には沈線が充填されている。胴部は平行沈線による楕円状の区画がなされ、交互刺突文や有節沈線による蛇行沈線文が描かれる。342 は口縁部に眼鏡状突起を有し、縦位の短沈線が充填される。また眼鏡状突起から懸垂文が垂下し、両側に横位の沈線帯がめぐっている。343 は口縁部にワラビ手状の懸垂文が付されている。345 は爪形文が 2 帯めぐっており、346 は雲母を多く含む浅鉢形土器で、冂状の把手を有し、楕円区画が横位にめぐっている。楕円区画内には角押文が施されている。348 ～ 350 はⅤ期の土器である。351 ～ 355 は地文縄文のみの粗製土器で、356 は無文の小形土器である。

第 17C 号住居跡出土土器（図版第 248 図）：Ⅴ期の土器が主体的に出土している。357 は口唇部に横位の渦巻文が付され、頸部が無文帯になるものである。胴部には波状文がめぐり、懸垂文などが施される。359 の口縁部には渦巻文と沈線が充填されている。360・362・363 は平行沈線により曲線的な文様を描くものである。365 は埋設土器で、口縁部を沈線で区画し無文部となるものである。366 ～ 368 は地文縄文のみである。

第 17D 号住居跡出土土器（図版第 249 図 369 ～ 371）：Ⅴ期の土器が出土している。369 は口縁部に大柄な渦巻文と沈線が施され、頸部が無文帯となり、胴部に眼鏡状突起・腕骨文などの隆帯による文様に、矢羽状沈線文が施される。370 は口縁部を沈線で区画して無文になるもので、371 は炉体土器で地文縄文のみである。

第 17E 号住居跡出土土器（図版第 249 図 372・373）：Ⅴ期の土器が出土している。372 は口縁部区画に剣先文を加えて沈線が施されるもので、373 は地文縄文に渦巻文が描かれる。

第 17G 号住居跡出土土器（図版第 249 図 374）：374 は炉跡に敷かれていたもので、口縁部に大柄な渦巻文を描き沈線が施される。頸部は無文部となり、胴部は懸垂文間に矢羽状沈線文が充填される。

第 18 号住居跡出土土器（図版第 250 図 375 ～ 383）：Ⅴ期の土器が出土しており、375 は頸部無文帯に口縁部に沈線が施されるもので、377 は平行沈線による懸垂文である。380・383 は沈線により口縁部を区画し、無文部とするものである。382 は半隆起線文により曲線的な文様を描いている。

第 19 号住居跡出土土器（図版第 250 図 384 ～ 389）：Ⅶ期の土器が出土している。384 は 4 単位の橋状把手をもち頸部に刻目隆帯がめぐり、胴部全面に花弁状の刺突を施している。385・386 は蓋形土器で、385 は円形に刻目隆帯がめぐり、その中に S 字状隆帯が付され、隆帯間に橋状把手が 2 ヶ所に付くと思われる。386 は刺突を施すもので、頂部につまみが付いていたと推定される。387・388 は沈線のみで文

様を描くもので、称名寺Ⅱ式と考えられる。

第 20 号住居跡出土土器（図版第 251 図）：Ⅵ期の土器が出土している。390 は埋設土器で、口縁部に刻目隆帯をめぐらせ、その下部に波状の隆帯が２本めぐり、その間の空間には横ハ字文が充填される。波状隆帯の波頂部には渦巻文が付され、胴部は地文のみとなる。391 は刻目隆帯下に３条の沈線文が見られる。392・393 は横ハ字文が施され、393 はやや縦方向に間延びしている。394 は炉体土器で、口縁部に刻目隆帯がめぐる地文縄文のみの土器である。395 は口縁部に刻目隆帯がめぐり、隆帯下には３、４条の細い沈線が描かれる。398 は沈線と隆帯がめぐるもので赤彩が見られ、瓢箪形注口土器の可能性がある。

第 21 号住居跡出土土器（図版第 252 図・第 253 図）：Ⅵ期の土器がまとまって出土している。400 ～ 409 は沈線文もしくは沈線に刺突を加える口縁部資料である。400 は炉内出土の土器で、口縁部に隆帯がめぐり、４単位の渦巻文とその下に棒状貼付文が垂下している。その下部に沈線による懸垂文が垂下している。隆帯上には細長い沈線が断続的に引かれて、沈線に刺突が加えられる。隆帯下には刺突を加える沈線が蛇行しながら垂下する。401 は炉内出土土器で、４単位の波状口縁であり、口縁部には刺突を加える沈線が描かれる。波頂部には渦巻文と棒状貼付文が付され、波底部には棒状貼付文のみが付され、その下部には沈線による懸垂文が垂下している。402 ～ 409 は口縁部で沈線や刺突が施される。410 ～ 413 は胴部の懸垂文で、２か３条の沈線で描かれる。414 ～ 416 は２本の刻目隆帯と渦巻文・突起が付されるものである。417 は隆帯が口縁部にめぐり、渦巻文から２本の懸垂文が右斜めに垂下する。419・420 は刻目隆帯が１本めぐる土器である。421 ～ 425 は磨消縄文を施す土器で、加曽利Ｅ式系の土器である。427 ～ 430 は地文縄文のみの土器である。

第 22 号住居跡出土土器（図版第 254 図～第 257 図）：Ⅵ期の土器がまとまって出土している。431 は波状口縁で、沈線間に刺突を加えたもので区画されて、口縁部は無文部となる。胴部にはワラビ手状の懸垂文が垂下している。432 は隆帯と沈線によって文様を描き、ワラビ手状文や冂状の区画を施す。433 ～ 438 は、２～３本の刻目隆帯がめぐり、そこに渦巻文が付される。434・437 では隆帯間に縦位の短沈線が充填される。また 435 の渦巻文から懸垂文が垂下している。439 は口縁部に１本の隆帯がめぐり、波頂部に渦巻文が付される。442 は口縁部に隆帯がめぐり、口縁部から胴部にかけて沈線と刺突が施される。443 ～ 445 は横ハ字文を充填するもので、446 は楕円区画の中に刺突が充填されている。447 は波状の沈線がめぐっている。448 は波状口縁の表裏に渦巻文が施され、449 ～ 452 は隆帯により渦巻文などが描くものであり、大木９式土器であると考えられる。453 ～ 456 は磨消懸垂文を描く土器で、457 は２本の隆帯が斜め方向に垂下し、その間が無文帯となる。これらは加曽利Ｅ式系の土器であると考えられる。458 ～ 463 は口縁部を沈線で区画して無文部とする土器で、458・459 はＪ字状文が垂下する。464 ～ 466 は口縁部に隆帯がめぐるもので、胴部は地文のみとなる。467・468 は半隆起線文の土器で、467 は台付鉢であると考えられる。469 は眼鏡状突起を有し、470・471 は隆帯間に矢羽状沈線文が充填される。472 は小形土器で、胴部に４単位の貼付文が付される。473 は縁帯文をもち、474・476 は磨消縄文により曲線文や三角文を描き、475 は刺突を施す。

第 23 号住居跡出土土器（図版第 258 図 477 ～ 482）：Ⅵ期やⅧ期の土器が出土している。477 は渦巻文を施すもので、478 は刺突を加えた沈線によって口縁部を区画する土器である。479 は口縁部に縁帯文をもち、480 ～ 482 は胴部破片で、481 は沈線により渦巻文を描くものである。

第 24 号住居跡出土土器（図版第 258 図 483 ～ 493）：出土土器には時期的なまとまりがあまり見られない。

483 は地文に条線文を施し、隆帯により渦巻文を描くものである。486 は口縁部が無文になり胴部に条線文を施す。487 は隆帯上に沈線を施し、沈線に刺突を加えるものである。489 は口縁部を２条の沈線により区画し、胴部に条線文を施すものである。490 は条線文が蛇行しながら垂下する。491 は地文縄文に渦巻文を描くもので、492・493 は半隆起線文・基隆帯が施される土器である。

第 26 号住居跡出土土器（図版第 259 図 494 ～ 497）：わずかにⅤ期の土器が出土している。494 は口縁部を沈線により区画し､胴部に条線文を施すものである。495 は口縁部に剣先文と沈線が施されるもので、496 は地文縄文に沈線を施すものである。497 は王冠型土器の突起の部分で橋状把手が付される。

第 27 号住居跡出土土器（図版第 259 図 494・498・499）：わずかにⅣ・Ⅴ期の土器が出土している。494 は第 26 号住居跡の出土土器と接合している。498 は胴部に縦位の半隆起線文を施し、両端に渦巻文を有する C 字状の隆帯文が付される。499 は波状文が描かれる。

第 30 号住居跡出土土器（図版第 259 図 500 ～第 262 図 518）：Ⅴ期の土器がまとまって出土している。500 は口唇部に刻目を施し、口縁部に無文部を残して地文縄文が施される。501 ～ 504・508 は口縁部に沈線を充填するもので、503 は頸部に無文帯をもち、胴部は縦位懸垂文とその両側に沈線が描かれる。文様は単沈線で描かれるが、端部がコブ状に盛り上がる部分がある。504 は箱形の中空把手が付く。508 は口縁部に剣先文が横位に展開し、矢羽状などの沈線が施され、胴部と頸部が沈線により区画されて胴部は地文縄文のみとなる。505 ～ 507・509 ～ 511 は胴部破片であり、506 以外は平行沈線によって文様が描かれる。514 は台形土器の破片である。515・516 は半隆起線文の土器で、515 は橋状把手とその上に眼鏡状突起が付される。517 は橋状把手と交互刺突文・有節沈線を施し、518 は圧痕隆帯がめぐり、口縁部に環状突起が付される。

第 31 号住居跡出土土器（図版第 262 図 519 ～ 263 図 527）：Ⅳ・Ⅴ期の土器が出土している。519 は平行沈線により沈線帯を施すものであり、520 ～ 524 は地文縄文に平行沈線により縦位の懸垂文や曲線的な文様を描かれる。525・526 は基隆帯と半隆起線文により渦巻文などが描かれる。527 は地文縄文の土器底部である。

第 32 号住居跡出土土器（図版第 263 図 528 ～ 532）：Ⅳ期の土器が稀薄ながら出土している。528 ～ 530 は半隆起線文により曲線的な文様を描き、橋状把手や環状突起、眼鏡状突起が付される。531 は懸垂文が付され、532 は胴部にクランク状の沈線文を描くものである。

第 33 号住居跡出土土器（図版第 263 図 533）：533 は４単位の波状口縁で、地文縄文のみの土器である。

第 34 号住居跡出土土器（図版第 264 図）：Ⅲ期の土器が稀薄ながら出土している。543 は半隆起線文が縦方向に垂下し、爪形文を施す。535 は蓮華文で、536 は半隆起線文により区画する土器である。537 ～ 539 は地文のみののものもので、543 は半隆起線文を施すもので、541 は胴部に腕骨文が付される。

第 36 号住居跡出土土器（図版第 265 図）：Ⅵ期の土器が主体的に出土している。542 は床面直上から出土したもので、口縁部に圧痕隆帯がめぐり、胴部は地文縄文のみである。544 ～ 546 は沈線に刺突を加えるものである。547 は同心円状に沈線が描かれるものである。548 は口縁部に隆帯がめぐるものである。549 は横位の把手が付属する小形土器で､内面に黒色物質（ウルシ？）が付着している（付編５参照)。550 ～ 556 はⅦ・Ⅷ期の土器で、550 は三角文を描くもので、551 は８字状突起が付属し、552 は胴部に刺突が密集して施される。553 ～ 556 は３、４条の沈線による懸垂文が垂下する。

第 37 号住居跡出土土器（図版第 266 図 557 ～ 569）：わずかにⅧ・Ⅸ期の土器が出土している。558 ～

560・562 ～ 565 は磨消縄文により直線的な文様を描くものが多い。561 は連鎖状文を施し、566・567 は沈線によって文様を施すものである。

第 38 号住居跡出土土器（図版第 266 図 570 ～ 573）：Ⅷ期の土器がまばらに出土している。570 は地文縄文に沈線が施され、572 は注口土器の胴部破片で、方形区画が入れ子状に描かれている。573 は無文土器で、内面に沈線がめぐっている。

第 39 号住居跡出土土器（図版第 266 図 574 ～第 267 図 583）：Ⅵ期の土器がまとまって出土している。574 ～ 577 は口縁部に隆帯がめぐり、その下に波状の隆帯がめぐり、隆帯間の半円状の空間に横ハ字文が充填される。578 ～ 580 は沈線区画内に横ハ字文を充填するもので、578 は口縁部に隆帯がめぐり、578・580 では懸垂文が垂下している。581・582 は口縁部に隆帯がめぐるもので、583 は逆Ｕ字状に磨消縄文を施すものである。

第 40 号住居跡出土土器（図版第 267 図 585 ～ 589）：Ⅳ・Ⅴ期の土器がまばらに出土している。585 は口縁部が沈線により区画されて無文部になるものである。586 は地文撚糸を施し、懸垂文が垂下するもので、587 は条線文が施される。588 は口唇部が無文になり、胴部が地文縄文の粗製土器である。589 は口縁部に交互刺突文がめぐる。584 は有孔鍔付土器の胴部で２本の隆帯が垂下し、内面に赤彩が見られる。

第 41 号住居跡出土土器（図版第 268 図～第 269 図 619）：Ⅷ期の土器がまとまって出土している。590 ～ 596 は口縁部に文様帯を有し、胴部に三角文や渦巻文・十字状の区画文を施す土器である。597 ～ 603 は口縁部に文様帯を有し、頸部が無文部になるもので、597・602 は口縁部から懸垂文が垂下する。605 ～ 612 は磨消縄文により曲線文などが描かれる。613 は３条の沈線と刺突列を施し、615 は沈線帯により弧線文を描くもので、注口土器の破片であると考えられる。616 ～ 619 は口縁部が無文部となり、頸部を隆帯で区画し、橋状把手もしくは貼付文が付され、618・619 は胴部に刺突を施すものである。

第 42 号住居跡出土土器（図版第 269 図 620 ～ 624）：Ⅲ・Ⅳ期の土器がわずかに出土している。620 は沈線区画にコブ状の突起が付く土器である。621 は口縁部から圧痕隆帯が垂下し、622 は格子目状の沈線に撚糸文が施されるもので、623 は口縁部に小突起を有し、平行沈線によって縦位･横位に区画するものである。

第 43 号住居跡出土土器（図版第 270 図 625 ～ 630）：わずかにⅧ期の土器が出土している。625・626 は磨消縄文により帯状縄文を施すもので、628・629 は磨消縄文により斜行文を描くものである。

第 46 号住居跡出土土器（図版第 270 図 631・632）：ほとんど出土遺物は確認できなかった。631・632 は口縁部に平行沈線により波状文を描くものである。

第 48 号住居跡出土土器（図版第 270 図 633 ～ 636）：Ⅳ期の土器などわずかに認められる。633・634 は基隆帯・半隆起線文により、渦巻文などの曲線的な文様を描くもので、633 の基隆帯には刻目が施されている。636 は地文撚糸に平行沈線による波状文が描かれる。

第 49 号住居跡出土土器（図版第 270 図 637 ～ 639）：637・638 は平行沈線や隆帯により文様を描くもので、639 は３本の隆帯が口縁部に付されるものである。

第３号炉跡出土土器（図版第 271 図）：Ⅷ期の土器が出土している。640・641 は胴部に三角文・菱形文などの沈線を描き、640 は３つの孔を有する突起が付属している。642 は口唇部に８字状突起が付属し、内面に帯状縄文がある。644 は口唇部が鋸歯状を呈し、胴部に縦位と斜位の懸垂文が垂下する。

第４号炉跡出土土器（図版第 272 図）：Ⅴ期の土器などが出土している。645 は沈線により胴部を区画し、縦位の懸垂文、蛇行沈線文が描出されるものである。646 は胴部に縦位の楕円区画によりパネル状に区

画し、区画内に円形文や横位の沈線が充填される。647 は胴部が区画されて、綾杉状の沈線や有節沈線が施される。648 は懸垂文間に蛇行沈線文が施され、649 は地文縄文のみの粗製土器である。

第 10 号炉跡出土土器（図版第 273 図～第 274 図 655）：炉内よりⅦ期の土器が出土している。650 は 2 本の鎖状隆帯が垂下し、その両側に横ハ字文が充填され、下端の沈線区画より下は無文になる。651 は鉢形土器で、弧状の刺突列がめぐっている。652 は口縁部に圧痕隆帯がめぐる土器で、隆帯に 4 単位の突起が付属する。653 は口縁部を沈線で区画し、胴部に磨消縄文を施しているが、文様が雑に描かれている。654 は地文縄文のみで、655 は地文縄文に条線文を施すものである。

第 10 号焼土跡出土土器（図版第 274 図 656）：656 は焼土内から出土している。656 は口縁部に巴状突起が付き、胴部は地文縄文に沈線を施すものであり、Ⅲ期に比定される。

第 12 号焼土跡出土土器（図版第 275 図 658 ～ 660）：Ⅸ期の土器が出土している。658 は鋸歯状口縁で、口縁部に沈線帯がめぐり、帯状縄文になる。また内面に 3 条の沈線がめぐる。660 は帯状の磨消縄文である。

竪穴状遺構出土土器（図版第 275 図 661 ～ 664）：Ⅷ・Ⅸ期の土器が出土している。661 は紐結状の文様で、662 は沈線帯による曲線的な文様が施される。663 は口縁部に同心円状の文様を施し、664 は胴部に磨消縄文により三角文などを描くものである。

（2）長方形柱穴列出土土器（図版第 276 図～第 277 図）

第 1 号長方形柱穴列の柱穴からはⅢ期～Ⅶ期の土器が出土している。分布域が廃棄帯と重なっていることから、古い時期の土器が周囲から混入した可能性がある。このなかで新しい段階の土器はⅦ期で、673・677・678・681 ～ 692・694 がある。刺突文を施すもの（673・681 ～ 684）や沈線間に列点文を施すもの（686・687）、蓋形土器（689・694）がある。その他の長方形柱穴列からはほとんど土器が出土していない。

（3）配石出土土器（図版第 278 図～第 284 図）

配石遺構周辺や配石下の土坑からは、Ⅶ期からⅨ期の土器が主体的に出土している。ほとんどが小破片である。700 ～ 719 は配石周辺から出土したもので、Ⅶ～Ⅸ期のものが主体である。

配石下の土坑からは小破片の土器以外に大形破片や完形土器が出土している。737 はほぼ完形の浅鉢形土器で 1Ｈ－５号配石下の土坑から出土している。口唇部が鋸歯状になり、内面に沈線がめぐっている。781 は大形の破片で、２Ｈ－２号配石下部の土坑から出土している。口縁部に橋状把手が付属し、胴部に刺突文が施されて胴部下端は無文部となる。783 は２Ｈ－３号配石下部の土坑から出土し、口縁部に帯状縄文がめぐり、内面に 1 条の沈線がめぐる。787 は完形の浅鉢形土器で、２Ｈ－４号配石下の土坑から出土している。口縁部には 4 ヶ所に突起が付属し、1 ヶ所にやや大柄な突起が付き、3 ヶ所には 8 字状突起が付される。また内面には沈線がめぐっている。

（4）埋設土器（図版第 285 図～第 287 図）

埋設土器に用いられた土器は、時期が明確なものはⅥ期～Ⅷ期のものである。793 は口縁部に隆帯がめぐり、渦巻文から懸垂文が垂下し、横方向に連結する。794 は胴部に条線文が施され、795 は無文である。796 は壺形を呈する土器で、胴部は地文縄文のみで、２本の隆帯がめぐり、２ヶ所に把手が付くと考えられる。797 は地文縄文のみの土器底部である。798 は注口土器で、ソロバン玉形を呈している。注口部と反対側に把手が付され、文様は胴部の上面にあり、パネル状に区画した中に縦位の短沈線や同心円状の文様が描かれている。799 は、瓢箪形を呈する土器の胴部であると考えられ、微隆起線文により文

様が描かれ、1ヶ所に横位の橋状把手が付属する。内外面には赤彩や黒色物の付着が見られる。800は口縁部に圧痕隆帯がめぐり、地文に縄文が施される。801は頸部に刻目隆帯がめぐり、刺突が胴部全面に施される。802・804は底部で、地文縄文のみの施文で、805は口縁部で地文縄文が施されるのみである。806は瓢箪形を呈する土器の胴部下半であると考えられ、外面に赤彩が見られる。807は胴部から底部にかけてのもので、地文縄文のみの土器であり、底部には網代痕が認められる。

（5）フラスコ状土坑・土坑出土土器（図版第288図～第326図）

土坑出土の土器の多くは破片資料であり、ここでは完形に近いものや、まとまって出土した資料に関して詳述したい。フラスコ状土坑は12基検出され、Ⅴ期～Ⅶ期の土器が出土している。

Ｈ４－Ｐ201ではⅥ期の土器がまとまって出土している。810は口縁部に隆帯がめぐり、隆帯上に断続的に沈線が引かれる。この隆帯から渦巻文が垂下し、その下に沈線による懸垂文が垂下している。また口縁部には刺突を加えた沈線がある。811は口縁部に圧痕隆帯がめぐり胴部は撚糸Ｌが地文に施される。812は口縁部に２列の刺突列がめぐり、胴部に撚糸が地文に施される。Ｊ３－Ｐ24からはⅤ期の土器が出土している。820は口縁部が無文になり、胴部は条線文を地文として端部に眼鏡状突起と渦巻文をもつ隆帯が垂下する。821は条線文を地文として、端部が渦巻文になる隆帯が付される。またＫ３－P12からもⅤ期の完形土器２点などが出土している（825～832)。825は４単位の波状口縁で、胴部は地文縄文が施されて両端に渦巻文を有するU字状文が付される。826は口縁部上端が沈線により区画されて無文になり、胴部は地文縄文のみである。827・828は横方向の半隆起線文で、829は縦方向の半隆起線文が施される。830は沈線区画内に矢羽状沈線文が充填される。832は２本の隆帯が口縁部にめぐっている。Ｋ４－Ｐ８からはⅥ期の土器が出土している。833は渦巻文から懸垂文が垂下し、刺突を加えた沈線が施される。834は口縁部に圧痕隆帯が付され、835～838は磨消懸垂文やU字状文が見られる。839は地文縄文の粗製土器で、口唇部が内側に窪む部分がある。

一方、土坑は約2000基ほど検出されており、土坑出土の土器はⅢ～Ⅸ期（中期前葉～後期中葉）の資料である。その中でまとまって土器が出土している土坑は、次のようなものがある。

Ｅ３－Ｐ43からはⅥ期～Ⅶ期の土器が出土している（926～929)。926は口縁部に鎖状隆帯がめぐり、そこからU字状の鎖状隆帯が垂下して半円状の区画をつくり、区画内に横ハ字文が充填される。927は口縁部区画には２列の刺突列と橋状把手が付される。胴部は磨消縄文によりＪ字状文が描かれる。また928は地文縄文に半隆起線文の土器で、929は半隆起線文を施すもので、胎土中に雲母を含んでいる。Ｆ２－Ｐ84からはⅥ期の土器が出土している（966・967)。966は４単位の波状口縁で、３本の隆帯が波状にめぐり、波頂部に渦巻文が付く。隆帯間の沈線には刺突が加えられる。胴部は懸垂文によって区画され、懸垂文の一部がコブ状に突出する。Ｆ４－Ｐ１からはⅦ期の土器が出土している（984～988)。984は磨消縄文を施す底部である。985は頸部に刻目隆帯と４単位の橋状把手が付され、胴部には刺突が施される。986は口縁部に圧痕隆帯がめぐり、胴部は地文に撚糸が施される。988は胴部に条線文が施されるものである。Ｆ４－Ｐ３からは992が出土しており、浅鉢形土器で口縁部区画には撚糸が施され、半隆起線文による波状文が横走する。Ｇ４－Ｐ155からはⅦ期の土器が出土している（1086・1989)。1086は注口土器で、口縁部が無文部になり内屈して注口部が付属する。この内外面には炭化物の付着が認められる。1087は口縁部に刻目隆帯がめぐり、頸部が無文部で胴部が地文縄文になり、そこに４単位の貼付文が付される。Ｈ４－Ｐ46からはⅧ期の土器が出土している（1107・1108)。1107は頸

部を区画し、胴部には磨消縄文により三角文を描くものである。頸部区画は沈線間に短沈線を連続して充填するものである。1108 は４単位の波状口縁で、基隆帯と半隆起線文の土器であり、波頂部・胴部区画に眼鏡状突起が付属する。Ｈ５－Ｐ 24 から出土した 1120 はキャリパー形の土器で、４単位のゆるい波状口縁に１つ中空突起が付属する。胴部は地文撚糸で、平行沈線により区画され、口縁部と頸部には波状文が付される。Ｈ５－Ｐ 70 から出土した 1132 はキャリパー形を呈する土器で、口縁部・頸部・胴部の３帯構成で、口縁部には剣先文が横方向に展開する。頸部は無文部になり、胴部は地文縄文に縦位の懸垂文と蛇行沈線文が施される。Ｉ４－Ｐ１から出土した 1150 は、口縁部に隆帯と沈線により渦巻文などを描出し、沈線には刺突が加えられる。口縁部の渦巻文から懸垂文が垂下し胴部を明確に区画する。Ｊ４－Ｐ 68 からはⅦ期を中心とする土器が出土している(1209 ～ 1212)。1209 は波状口縁の土器で、波頂部には小把手が付属し、文様は磨消縄文が施される。1210 は懸垂文が垂下し、３条の沈線により胴部を区画し、区画内に横ハ字文が充填される。1211 と 1212 は蓋形土器である。1211 は平面形がほぼ円形を呈し、器面は無文で十字状の鎖状隆帯が付き、頂部につまみが付属する。1212 は平面形が隅丸方形を呈し、器面には地文縄文が施されて十字状の刻目隆帯が付される。その隆帯が交差する頂部につまみが付属する。Ｊ４－Ｐ 70 からはⅧ期の土器が出土している（1213 ～ 1216)。1213・1214 は磨消縄文により帯状縄文などが施され、1213 は口縁部に２本の隆帯がめぐり、1215 は口縁部の表裏に同心円状の文様が施される。1216 は胴部に条線文を施す粗製土器である。Ｊ４－Ｐ 96 からはⅦ期の土器が出土している（1222 ～ 1226)。1222 は頸部に刻目隆帯がめぐり、胴部は磨消縄文に曲線的な文様が描かれる。1223 は口縁部に刻目隆帯と貼付文が付され、胴部は条線文が施される。1225 は「く」の字状に屈曲する土器で、頸部に隆帯と橋状把手が付されて、口唇部や把手には円形の刺突が施される。1226 は蓋形土器で、沈線間に列点文が充填される。Ｊ５－Ｐ５からはⅤ期の土器が出土している（1227 ～ 1229)。1227 は５か６単位の波状口縁で、波頂部には渦巻文や橋状把手が付属する。1228 は口唇部が肥厚して無文部となり、胴部は条線文を施すものである。1229 は地文に条線文を施し、３本の隆帯が付される。Ｋ５－Ｐ 14 からはⅦ期の土器が多量に出土している（1284 ～ 1311)。1284 ～ 1296 は胴部に刺突を施すもので、1284 ～ 1287 には橋状把手が付される。1297 は蓋形土器である。1298 ～ 1302・1304 は口縁部であり、1299 は刺突列が並び、1300 には把手が付属する。1302 の胴部には沈線間に列点文が充填され、1303 も同様に列点文が施される。1305 の橋状把手に８字状文が付され、胴部には磨消縄文が施される。1306 は頸部に隆帯がめぐり、胴部に磨消縄文を施す。1309 は浅鉢形土器で、口縁部に文様帯を有し、内面にＣ字状文が描かれる。

（６）溝状遺構出土土器（図版第 327 図 1317 ～ 1322）

Ⅶ期などの土器が出土している。1317 は４単位の橋状把手で胴部に刺突を加えるものである。1318 は胴部に三角状の刺突を施すものである。1319 は口縁部を２条の沈線で区画し、1320 は磨消縄文を施し、1321 は圧痕隆帯が口縁部にめぐるものである。1322 は浅鉢形土器であり、爪形文がめぐっている。

（７）倒木痕出土土器（図版第 327 図 1323 ～第 329 図）

これらは倒木によって周辺に堆積していた土器が流れ込んだものと考えられ、Ⅲ期～Ⅷ期の土器が出土している（1323 ～ 1349)。1323 は口縁部に矢羽状の沈線が施され、頸部が無文帯になる。1327 は胴部に指頭圧痕文が施されて懸垂文が垂下している。1333･1334 は懸垂文間に矢羽状沈線文が充填される。1340 ～ 1342 は浅鉢形土器である。1347 は微隆起線文による無文帯によって玉抱き文が描かれる。

2）包含層出土土器（図版第 330 図～第 657 図）

包含層出土土器のほとんどは廃棄帯から出土している。これらは第Ⅳ章第 1 節で示したように前期・中期・後期・晩期に対比して第 1 ～ 4 群に大別している。時期ごとに概略的に説明していきたい。

（1）Ⅰ期（縄文時代早期末～前期前葉）の土器群（第 330 図～第 332 図）

第Ⅰ群土器は、早期末～前期前葉の土器群である。1350 ～ 1366 は羽状縄文を施し、胎土中に繊維を含んでいる（図版第 330 図～第 331 図）。縄文条痕を施すものは早期末葉と考えられる。1368 ～ 1371 はコンパス文や爪形文を施すもので、前期前葉の関山式土器（註 69）に対比される。

（2）Ⅱ期～Ⅵ期（縄文時代中期）の土器群（図版第 332 図～第 625 図）

①Ⅱ期（五領ケ台Ⅱ式期）の土器群（図版第 332 図）

図版第 332 図 1372 ～ 1377・1379 は、竹管文による平行沈線を施す一群である。一方、1378・1380 ～ 1382 は地文に縄文を施し、刺突や刻みを多用するものである。1378 は交互刺突文を施し、1382 は内外面に三角印刻を施している。1383 は胴部にＹ字状懸垂文が垂下し、平行沈線により区画し、竹管状工具による刺突が施される。これらは中期初頭の五領ケ台Ⅱ式土器（註 70）に対比されると考えられる。

②Ⅲ期（大木７ｂ式並行期）の土器群（図版第 333 図～第 401 図）

1384 ～ 1410 は、口縁部に狭い文様帯を有するもので、横長の楕円区画になるものが多い。楕円区画には、蛇行沈線文・刺突・沈線に刺突を加えるもの、などが施される。口縁部に環状突起を有するものは、1385 ～ 1387・1393・1396・1398・1407・1410 があり、眼鏡状突起を有するものは 1403・1410 がある。一方、胴部にはＹ字状などの懸垂文や蛇行沈線文・弧線文などが見られ、1386・1390・1394・1406・1407・1408・1410・1411・1413 ～ 1415・1419 は胴部にＹ字状懸垂文が垂下する。口縁部に圧痕隆帯が付されるものは、1395・1396・1397・1398・1401 ～ 1405・1407・1411・1414 がある。これらは会津地方に見られる土器群に類似している（註 71）。これらは大木 7b 式期に並行すると考えられるが、一部は大木 8a 式期古段階並行期に下る可能性がある。

図版第 342 図～図版第 367 図は、地文縄文に大柄の懸垂文や眼鏡状突起・平行沈線・沈線に刺突を加えるものや有節沈線が多用される一群であり、「新巻類型」（註 72）に対比される。

1436 ～ 1453 は口縁部に山形突起を有する一群である。波頂部下には眼鏡状突起（1436・1440）や懸垂文（1438・1439・1441・1444・1447・1449・1450・1448・1452）、環状突起（1437・1442・1445・1446・1451）などが付される。また口縁部には有節沈線が多用されるが、1452・1453 は蓮華文が施される。胴部には地文縄文に、懸垂文構成の文様が描出される。懸垂文は、斜め方向に垂下するものや直線的に垂下するもの、渦巻文などの曲線的な文様があり、懸垂文の先端や屈曲部に眼鏡状突起や環状突起などが付される。文様は有節沈線や刺突を加える沈線が多用される。

1454 ～ 1530 は、平口縁の深鉢形土器であり、口縁部と胴部の２帯構成を持つものが多く、地文に縄文施すものである。口縁部には、環状突起（1456・1457・1460・1462）や、巴状突起（1454・1463・1474・1476・1479・1494）、巴状突起が変形したもの（1486・1490）などが付く。また口縁部の文様は、環状突起や眼鏡状突起が付属する懸垂文や隆帯がめぐるものが多く、有節沈線が多用される。胴部は地文縄文に懸垂文が垂下し、半截竹管によってパネル状に区画されるもの（1456 ～ 1458・1473 ～ 1482・1492・1511 ～ 1515・1520・1523・1526 ～ 1528・1532 ～ 1542）、地文縄文のみで懸垂文が垂下するもの（1463・

1465 ～ 1467・1470 ～ 1472・1482・1483・1485・1486・1491・1495・1497・1501)、がある。懸垂文は直線的に垂下するものや、蛇行しながら垂下する曲線的なもの、逆Ｕ字状に垂下するものがあり、懸垂文の先端や屈曲部に眼鏡状突起や環状突起が付属するものが多い。

図版第 368 図～第 373 図は、地文に縄文を施さないものである。口縁部には環状突起・眼鏡状突起・巴状突起や、２本の貼付文などが付属する。口縁部文様は、楕円区画や環状突起・眼鏡状突起や、隆帯が横方向に展開するもの、蓮華文を施すものがある。また玉抱きＵ字状文や有節沈線が多用される。胴部文様は、眼鏡状突起などが付される懸垂文構成で、舌状を呈する懸垂文も見られる（1444・1445・1448・1450 など)。また三叉文や有節沈線、刻目や刺突を多用する（1563 ～ 1565・1570・1596・1598)。胴部を縦位・横位に分割するものがある（1596 ～ 1600)。

図版第 374 図～第 376 図は、口縁部に楕円区画などの文様帯を有するものである。1602 ～ 1605 は口縁部の沈線区画内に細沈線が充填される。1615 ～ 1618 は、口縁部に楕円区画を有しており、区画内には有節沈線や刺突列が施される。1617 は斜め方向に圧痕隆帯が垂下する。

図版第 377 図は、三角形区画を施すものをまとめた。1620 は口縁部に三角形区画をもち、下部に環状突起が付くものと懸垂文が垂下するものがある。1624 は口縁部に三角形のモチーフを描き、胴部には曲線的な隆帯が付く。1626・1627 は無文に三角形様の隆帯文が付属する。

図版第 378 図～第 382 図は、多段の楕円区画と斜行沈線文・蛇行沈線文・耳状突起・逆Ｕ字状文、刺突を加える沈線などが特徴的な土器群である。これらは胴部に地文を施すもの（1632･1640 ～ 1644）と、施さないもの（1628 ～ 1631・1633 ～ 1639・1643・1645・1648）の２つがある。また 1646 ～ 1649 は一部の要素が共通しているものであり、例えば、1646 は楕円区画内に斜行沈線文を施すもので、1647 は耳状突起、1648 は横位の蛇行沈線文などの沈線文や、1649 は斜行沈線文･耳状突起の要素が認められる。これらの一群は、北信地方に分布する「斜行沈線文土器（後沖式)」(註 73）に類似性が見られる。

図版第 383 図～第 388 図は地文を持たず、比較的大柄な懸垂文・環状突起・眼鏡状突起やキャタピラ状文・有節沈線・三叉文を多用するもの、沈線区画内に横位沈線を充填するものがある。これらは五丁歩遺跡の「勝坂系列」(註 74）と類似しており、勝坂式土器の影響が想定される。これらには特徴的な胎土が見られ、白色粒子を多量に含むスカスカの軽い胎土がある。1650 は眼鏡状突起下に抽象文が描かれ、一部に赤彩が見られる。1650・1652 ～ 1656・1661・1662 はキャタピラ状文を施し、1651・1663・1664 は有節沈線を多用する。突起は環状突起、眼鏡状突起が多く見られるが、1658・1659 のように渦巻文を描く眼鏡状突起や 1660 のように放射状に沈線が描かれる環状突起がある。1669 ～ 1683 は、沈線区画内に沈線を充填するもので、胴部下端に横位楕円区画をもつものがある（1672・1673)。1684 ～ 1688 は中空突起である。1669 ～ 1671 のように口縁部に大柄な突起が付属し、1671・1675 ～ 1678 は胴部に環状突起や眼鏡状突起が付く大柄な懸垂文をもつ。1672・1674・1677・1679・1680・1682 は楕円区画の中に横位の沈線を充填する。1684 ～ 1688 は中空突起であり、これらには環状突起・眼鏡状突起が付くものや、有節沈線や刺突が加えられるものがある。1686 には赤彩が見られる。

図版第 389 図～第 391 図は、胎土中に雲母を多く含む土器群であり、文様は角押文が特徴的に見られる。口縁部には扇状の把手（1690・1691)、棒状貼付文（1701 ～ 1704・1706・1707)、楕円区画（1689・1693 ～ 1696・1700)、などが付される。1705 のように胴部に輪積みの粘土帯を残した指頭圧痕文を施すものがある。角押文は単列のものと複列のものが見られる。また図版第 392 図 1716 ～ 1723 は、輪積み痕

を残して指頭圧痕文を施しているが、胎土中に雲母を含まないものである。1716 は胴部の途中で屈曲する懸垂文が垂下している。これらは阿玉台Ⅰ～Ⅱ式土器（註 75）に類似している。

図版第 393 図～第 396 図は、半截竹管による半隆起線文や蓮華文・爪形文を施す土器群であり、これらは新崎式土器（註 76）に類似している。1724 ～ 1733 は、蓮華文の両端に陰刻が施されるものである。1724 ～ 1726 は胴部に短い懸垂文が垂下するのみであるが、1728･1730･1731･1733 は胴部が区画され、1730・1731・1733 では格子目文が充填される。1734 ～ 1750 は爪形文が 1 列か 2 列めぐるものであり、1751 ～ 1757 は半隆起線文によって区画し、懸垂文が垂下するものである。また 1758 ～ 1761 は沈線間に刺突を加えるものであり、新崎式土器とは全く異なるが、文様構成において類似性が見られる。

図版第 398 図・第 399 図 1768 ～ 1770・1772 は、地文縄文に縦位・横位の圧痕や刻目を施す隆帯をもつ土器群である。1768 は口縁部に弧状隆帯が連続しており、1769 は口唇部が鋸歯状になり、口縁部に 4 単位の橋状把手が付属する。1773 は胴部に 4 単位の Y 字状懸垂文が付され、1774 は 2 単位の懸垂文と 2 単位の J 字状の貼付文が付されている。1777 は口縁部に環状突起を有し、胴部は単沈線により縦位の懸垂文とその間に弧線文が描かれる。1779 は楕円区画の中に爪形の刺突を充填している。

図版第 401 図は、胴部に卜字状の沈線が施されるものをまとめた。1780 は口縁部に 4 単位の把手が付属し、橋状把手が下に付いている。把手には刺突を加える沈線が施される。

③Ⅳ期（大木 8 a 式並行期）の土器群（図版 402 図～第 419 図）

図版第 402 図～第 419 図は、地文に縄文もしくは撚糸文を施し、胴部にクランク文・渦巻文・波状文・弧線文などを描出する土器群である。これらは大木 8 a 式土器（註 77）に類似する一群である。

1787 ～ 1799 は口縁部文様帯を有し、楕円区画になるものもある。1802 ～ 1809 は口縁部に狭い文様帯を有し、縦位の有節沈線や交互刺突文を施すものである。またこれらには、中空把手が付属するもの（1787・1789・1791・1801 ～ 1803・1812 ～ 1822）、橋状把手が付くもの（1790・1792 ～ 1799）、横 S 字状突起が付くもの（1809）、などがある。橋状把手には小渦巻文が付されるものが多く、中空突起には、S 字状文が組み込まれているもの（1787・1809・1812）、鶏頭冠状把手に類似するもの（1801・1802・1815・1819・1821・1822）がある。これらの口縁部には、縦位の短沈線（1790・1792・1795 ～ 1798・1801）や有節沈線（1787 ～ 1789・1793・1802・1803・1805 ～ 1809）が充填される。1787 ～ 1789・1791・1795・1798・1800・1801・1804 ～ 1810 は胴部や口縁部に交互刺突文が帯状にめぐっている。胴部文様は、クランク文・渦巻文・逆 U 字状文・弧線文が見られ、隆帯や半隆起線文によって描かれる。また 1826 は口縁部に注口部が付属する。

1848 ～ 1864 は有節沈線と交互刺突文を多用する土器群である。口縁部には 4 単位の突起が付属するが、小形の突起が多い。口縁部・胴部文様には、弧線文などの曲線的な文様が見られる。一方、1865 ～ 1919 には有節沈線は見られず、平行沈線による波状文や S 字状文・渦巻文・弧線文などの曲線的な文様を施すものである。そのうち 1865 ～ 1877 は口縁部に交互刺突文をめぐらせている。地文は縄文に加えて、撚糸文が多くなる（1870・1873・1899 ～ 1919）。また 1873・1926・1927 のような渦巻状の突起が見られ、S 字状文が組み込まれるものもある。1823 ～ 1931 は口縁部に未調整の隆帯が貼り付けられ、1926・1927 のように突起に未調整隆帯が渦巻状に貼り付けられるものがある。1934 は未調整隆帯によるもので、格子目状の文様が施されている。

図版第 420 図～第 462 図は半隆起線文で装飾する土器群であり、基隆帯による渦巻文や懸垂文、眼

鏡状突起・環状突起・楕円区画・三叉文・玉抱三叉文などを施すもので、「焼町類型」（註 78）に類似する。これらの文様は、口縁部や胴部上半が渦巻文など横方向へ展開し、胴部下半は縦位に展開する。

1935 ～ 1980 は明確な胴部区画を持たないものである。これらの中で 1935 ～ 1959 は、口縁部に狭い文様帯をもつもので、口縁部の突起には環状突起や眼鏡状突起がある。1955 ～ 1959 は突起下に橋状把手が配され、1958・1959 では三角形区画が特徴的に見られる。また胴部に楕円区画を有するものは、1945・1946・1948・1949・1955・1959・1960・1972・1973 がある。楕円区画内は、刺突を充填するものや同心円文を施すものがある。胴部の懸垂文は、斜め方向に蛇行しながら垂下するものや直線的に垂下するものがあり、端部が渦を巻くものや環状突起・眼鏡状突起が付くものが多い。

1981 ～ 2019 は胴部区画を有するもので、口縁部に狭い文様帯を有している。また口縁部には環状突起・眼鏡状突起などが付属するものが多い。頸部の文様は、基隆帯による渦巻文や弧線文などの曲線的な文様が多く見られ、眼鏡状突起などが付される。胴部文様は、上部に渦巻文などの曲線的文様や横方向に展開する文様が見られるが、より下部では縦方向に文様が展開する傾向がある。2018 は口縁部に環状突起が付く鋸歯状突起がめぐり、頸部・胴部には爪形文を加えた隆帯が曲線的に展開している。また 2019 は火焔型土器に見られる鋸歯状突起が口縁部にめぐっている。

2020 ～ 2034 は口縁部に 4 単位の突起を有し、それぞれの突起は 3 段の環状把手からなる。口縁部と胴部上半には横展開の渦巻文や S 字状文が特徴的に見られる。2034 は地文縄文で、口縁部に 4 単位の突起が付属し、胴部には横 S 字状文が 2 段に配される。この S 字状文の端部には刻目が施される。

図版第 447 図～第 452 図は半隆起線文の土器であるが、胴部もしくは口縁部に地文縄文を施すものである。2035 ～ 2045・2047 ～ 2051 は 4 単位の波状口縁か平口縁に環状突起・眼鏡状突起が付属し、胴部文様は地文に縄文を施して、逆 U 字状の懸垂文やクランク文などを配するものである。2045・2046 の胴部区画は三角形区画が連続している。また 2047・2048 は口縁部に三角形区画が連続するもので、区画内に玉抱三叉文や沈線が施される。2052 ～ 2056 は、口縁部に地文縄文を施すものや無文になるものである。

2060 ～ 2064 は口縁部に交互刺突文が帯状にめぐるものである。2060 は鉢形土器で、4 単位の把手を持つもので、2064 は片口の注口部が付属する。この注口部には炭化物が付着している。

図版第 454 図～第 462 図は第Ⅱ群 3 b 類に属すると考えられる半隆起線文の土器片であり、破片資料であるため細かな分類ができないものをまとめている。2065 ～ 2107・2119・2124 は口縁部であり、基隆帯と半隆起線文により渦巻文などの曲線的文様が多く、環状突起・眼鏡状突起が付属するものがある。2108・2109・2111 は基隆帯に異なる粘土が用いられているものである。2108 ～ 2169 は胴部と底部であり、半隆起線文に懸垂文が垂下するものが多い。2119 ～ 2130 は楕円区画をもつもので、区画内には円形刺突が充填されるものや同心円文と玉抱三叉文が付されるものがある。

図版第 463 図～第 489 図は、基隆帯と半隆起線文により曲線的な文様で装飾する一群で、胴部に明確な区画を有している。これらは、火焔型土器・王冠型土器（註 79）とこれに類似する一群である。

2170 ～ 2202 は、口縁部に 4 単位の鶏頭冠状把手と鋸歯状突起がめぐる火焔型土器である。この中で隆帯に刻目を施すものは、2170 ～ 2172・2174・2175 である。鉢形を呈するもの（2170 ～ 2174）があり、口縁部下端に三角形モチーフが特徴的に見られる。胴部文様は逆 U 字状懸垂文が 4 単位垂下し、上部に渦巻文下部に縦位の半隆起線文が施される。2177 ～ 2187 は半隆起線文や基隆帯に刻目は施されず、眼鏡状突起や袋状突起、櫛形文、交互刺突文などが見られる。口縁部に櫛状文が付くもの（2176・2181 ～

2187）と弧状の刻目隆帯が付くもの（2170 ～ 2172・2174）がある。2184 は器高約 60.7cm の大形の火焔型土器であり、胴部に 4 単位の袋状突起が付される。2188 ～ 2202 は口縁部破片であり、鶏頭冠状把手や鋸歯状突起が見られる。

2203 ～ 2249 は 4 単位の大柄な突起を有する王冠型土器である。深鉢形が多いが、2203・2205・2214 のように鉢形のものも見られる。また隆帯上に刻目を施すものは 2203 ～ 2206 などである。これらの突起は、抉りを持ち左右非対称になるもの（2206・2207・2215・2210 ～ 2229・2232 ～ 2242）が多く、台形状のもの（2205）や左右対称になるもの（2209・2210・2230・2231）があり、橋状把手が付くものが多い。口縁部文様は S 字状文や渦巻文などの曲線的な文様に加えて袋状突起・眼鏡状突起が付され、交互刺突文や蛇行文が多用される。胴部文様は、逆 U 字状懸垂文が 4 単位垂下し、渦巻文と縦位の半隆起線文が施される。

また 2249 ～ 2264 は大柄な突起や把手を持たず、袋状突起などの小突起が 4 単位付属する一群であり、火焔型土器や王冠型土器とは異なる一つのまとまりが認められる。前者に比べて数量的に少ないものの、一定量が存在している。これらの特徴は、4 単位の袋状突起に加えて、口縁部に横位の直線的な半隆起線文が施される点で、2257 のみが例外的に横 S 字状文などの曲線文が描かれている。口縁部文様は、袋状突起、三叉文・交互刺突文・X 字状把手がある。胴部文様は、眼鏡状突起・渦巻文・逆 U 字状の懸垂文が施される。

2269 ～ 2293 は縦位の半隆起線文を施し、火焔型土器・王冠型土器の胴部・底部であると考えられる。逆 U 字状の懸垂文や S 字状文・渦巻文や、交互刺突文が特徴的に見られる。これらの火焔型土器のほとんどは、大木 8 a 式並行期に帰属すると考えられるが、一部は大木 8 b 式期に並行すると考えられる（註 80）。

図版第 490 図～第 494 図は天神山式土器（註 81）に類似する一群である。これらは文様が斜め方向に展開するもので、2294 ～ 2305 は、沈線間に綾杉状沈線などが充填される。胴部懸垂文は刻目が加えられ、曲線的なものが横方向に展開するものや斜め方向に垂下するものがある。胴部の沈線区画には三叉文が多用されるものもある。また 2307 ～ 2316 には、刻目を施す懸垂文が斜め方向や垂直に垂下するものや、Y 字状の懸垂文がある。胴部文様は、部分的に沈線を充填するものや、沈線により渦巻文などが描出するものがある。2315 ～ 2316 は懸垂文や文様が斜め方向に展開するものである。2318・2319 は半隆起線文により区画された空間に細い沈線を充填するものである。2320 は眼鏡状突起と綾杉状文を加える懸垂文の土器で、内面に赤彩が見られる。2321 は北陸系の台付鉢である。2323 は無文部が張り出して下端に爪形文がめぐり、内・外面に赤彩が認められる。2326 は口縁部に注口部が付く。

④Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）の土器群（図版第 497 図～第 550 図）

図版第 497 図～第 550 図は、第Ⅱ群第Ⅳ類に分類され、大木８ｂ式土器（註 82）に類似する一群である。

2323 ～ 2344 はキャリパー形を呈し、口縁部と胴部の二帯構成のもので、地文に縄文を施す一群である。口縁部は地文に２本の隆帯による剣先文・渦巻文などが付される。隆帯の接着面は沈線によって調整が加えられているが、2342 などの隆帯の接着部は調整が粗く未調整の部分が見られる。これらは頸部と胴部の区画はないが、頸部が無文部となるものも多い。2342 の突起には火焔型土器などの袋状突起に見られる W 字状の隆帯が付される。

一方、2345 ～ 2377・2379 は頸部に無文帯を有し、３帯もしくは４帯構成をとるキャリパー形の土器である。口縁部から胴部は地文縄文が施され、2345・2346 のように頸部には地文が残るものも多い。

口縁部には２本１組の隆帯が横方向に展開し、剣先文や渦巻文が付される。隆帯文は平坦なものが多いが、2363 など突起状になるものもある。2346・2348・2366・2368 のように頸部無文帯下に狭い文様帯を持つものがあり、区画内には大柄な波状文が横走する。胴部文様は、直線的な懸垂文や弧線文・剣先文・渦巻文のような曲線的な文様があり、３本１単位の単沈線によって描かれるものが多いが、2373・2376 は平行沈線によって描出されている。また 2377 では沈線の端部がコブ状に張り出している。2370 ～ 2377 は口縁部には４単位を基本とする中空突起が付属する。中空突起は箱形や山形を呈するものが多く、円形文・C 字状文・S 字状文などの曲線的な文様が組み込まれている。2379 は口縁部を渦巻文が連結して楕円区画になり、胴部区画に交互刺突文がめぐっている。

2380 ～ 2418 は、キャリパー形を呈し、口縁部文様帯に細沈線を充填し、胴部に地文縄文を施す一群である。口縁部の沈線は隆帯貼付後に充填されるものや、沈線を施した後に隆帯に沿って調整沈線が引かれるものが多い。そのなかで、2380 ～ 2384・2402 は口縁部と胴部の２帯構成で、2385 ～ 2418 は頸部無文帯を有し３帯か４帯構成をとる。口縁部文様は、２本の隆帯が区画上端から垂下して横方向に展開し、剣先文・渦巻文などが付く。渦巻部が突起状になるものが多く、2395 ～ 2401 は突起状の渦巻文が２段になるものである。また 2402 ～ 2405 は大柄な渦巻文が付される。頸部は無文帯になるが、胴部と頸部に区画を持たないもので頸部が無文部になるものや、区画を有するものでも頸部に縄文が残るものも多い。2387・2397・2398・2399・2406 は頸部無文帯下に狭い文様帯をもち、区画内に波状文がめぐる。胴部文様は、縦位の懸垂文・蛇行沈線文・渦巻文などの曲線的な文様がある。2415 ～ 2417 は口縁部に箱形の把手が付くものである。沈線は単沈線が多く、2411 ～ 2417 は半截竹管の腹面による平行沈線により文様が描かれており、2411・2417・2418 のように文様の一部が突起状になるものがある。これらの胴部文様は入り組むものが多い。2417 は胴部区画など文様の一部が隆帯によって描かれており、2418 は眼鏡状突起が付属する。2419 ～ 2429 は胴部に沈線により大柄な渦巻文を描くものであり、2421・2422 は鉢形土器で中空突起を有している。2422・2423 は刻目隆帯により区画し、2424・2429 は鎖状隆帯、2425 は交互刺突文によって区画している。

2430 ～ 2455 は口縁部が外反するものである。そのなかでも波状口縁で肥厚した口唇部に横位の渦巻文が施されるものと、平口縁で口唇部に文様を施さないものがある。前者は４単位の波状口縁を基本とするが、2438・2411・2442 は２つの波頂部が１つの単位をなしている。口縁部は無文帯になるが地文が及ぶものもある。2411・2440・2442・2452 は比較的大形のもので、胴部区画帯に蛇行沈線文が横走するものであり、胴部は地文のみとなる。2443 ～ 2448 は比較的小形の土器で、縦位懸垂文などの胴部文様が描出されている。後者は胴部に蛇行沈線文などの懸垂文を描き、2452 では剣先文状の文様が口縁部に付される。

2456 ～ 2523 は胴部・底部破片である。2456 ～ 2499 は単沈線によって文様が描かれ、2500 ～ 2523 は半截竹管による平行沈線により文様が施されている。これらの文様は連結して入り組むものがある。

図版第 529 図～第 532 図は、胴部文様に矢羽状沈線文が施される一群で、腕骨文・眼鏡状突起・X 字状把手などが特徴的に見られる。これらは大木８a 式並行期でも新段階に位置づけられる。文様は隆帯による表現が多いが、まれに平行沈線によるものがある。

2524 ～ 2530 はキャリパー形の土器であり、口縁部・頸部無文帯・胴部の３帯構成を基本とする。口縁部文様は、剣先文や渦巻文が横方向に連結し、その空間に細沈線が施される。また剣先文に付属す

る渦巻文が突起状に突出する。中空突起は山形突起などがあり、両端部が渦を巻く文様を組み合わせるものである。頸部は無文帯になるが、2526・2527・2530 では胴部から剣先文が延びている。2531 ～ 2573 は第Ⅱ群４ｂ１類の土器の口縁部であると考えられるが、明確ではない。口縁部には箱形などを呈する多様な中空突起が付属している。また口縁部文様は、隆帯が横に連結し、空間に細沈線が施される。これらの剣先文や渦巻文は突起状になる。

2574 ～ 2596 は口縁部が外反するもので、波状口縁のものと平口縁のものがある。口唇部に横位渦巻文が施されるものと、2575 のように波頂部に玉抱三叉文を施すものがある。2574 ～ 2576 は胴部の区画を沈線により描かれ、逆Ｕ字状の区画内に矢羽状沈線文を充填している。一部に渦巻文や眼鏡状突起が付属している。胴部には、2578・2583・2585・2593・2597 ～ 2600 がＸ字状把手を有し、2596 は眼鏡状突起を有している。胴部文様は、剣先文・腕骨文を隆帯により描き、その空間に矢羽状沈線文を充填している。頸部は無文帯になるが、剣先文やＸ字状把手が胴部から伸びている。

2601 ～ 2648 は胴部破片であり、渦巻文・腕骨文・懸垂文・剣先文・眼鏡状突起・Ｘ字状把手、などが付される。文様は隆帯によるもの（2597 ～ 2637）が多く、隆帯に加えて沈線区画を施すもの（2628・2638 ～ 2648）もある。2647 は大柄な渦巻文を描き、その間に矢羽状沈線文を充填している。

図版第 545 図～第 548 図 2693 は、口縁部に狭い文様帯（無文帯）を有し、文様はＣ字状文や眼鏡状突起を持つ一群であり、いわゆる栃倉式（註 83）である。地文は縦位の半隆起線文（2649 ～ 2677）が特徴的に施され、条線文（2683 ～ 2688）や縄文（2689 ～ 2693)、矢羽状沈線文（2678 ～ 2682）が施される。2649・2653・2654・2656・2659・2661 ～ 2675 は、胴部に両端に渦巻が付くＣ字状文などが付され、これらは３本の隆帯により描かれている。2654・2657 では眼鏡状突起が付属する。また半隆起線文の間にペン先状の刺突文が加えられる（2649・2655・2661・2663 ～ 2667)。2676・2677 は半隆起線文が横位に展開するものであり、2678･2680 は縦位の半隆起線文の間に矢羽状沈線文が充填されている。2695 は口縁部に２列の刺突列が並び、胴部区画に眼鏡状突起を有する。胴部文様は、縦位の懸垂文と両端に渦巻文を持つ曲線文が十字状に交差しており、器面には矢羽状沈線文が充填されている。

2694・2696 ～ 2703 は、文様間に横位もしくは斜位の沈線が充填されるものである。2696 は口縁部に文様帯を有している。2698 ～ 2700 は刻目隆帯が渦巻文などを描き､その空間に弧状文(鱗状短沈線文)が充填されている。2709 ～ 2718 は口縁部に渦巻文が施される不明な一群である。2720 ～ 2722 は破片資料であるが、隆帯が連結するもので、大木８ｂ式土器（註 84）の胴部破片であると考えられる。

⑤Ⅵ期（沖ノ原式期）の土器群（図版第 551 図～第 577 図）

図版第 551 図～第 568 図は、胴部にほとんど括れを持たない器形を呈し、刻目や圧痕を加える隆帯と渦巻文を特徴とする一群であり、沖ノ原式土器（註 85）にあたる。これらは胎土中に小礫を多量に含むものが多く、また地文は縄文と条線文があり、縄文は単節に加えて無節が特徴的に見られる。

2723 ～ 2761 は、口縁部に２～３本の刻目隆帯がめぐる一群である。そのなかで 2723 ～ 2738・2746・2747 は隆帯間が狭く無文部となる。この刻目隆帯には渦巻文が付され、2727・2729・2746・2747 では渦巻文から懸垂文が垂下している。2743 ～ 2745 は隆帯の接着部に刺突を施すもので、2743 ～ 2745 は渦巻文から髭状の懸垂文が垂下している。2748 ～ 2761 は隆帯間に斜行する沈線が充填されるものである。2748 は渦巻文下に髭状の懸垂文を有する。2762・2764 は隆帯間に刺突を加えるものである。2763 は口縁部に隆帯がめぐり、渦巻文が付される。2768 ～ 2771 は渦巻文が斜めに垂下し、下

端で連結するものである。

2772 ～ 2784 は、渦巻文と隆帯・沈線による文様を基本とするものである。口縁部上端に隆帯をめぐらせるものと、隆沈線になるものがある。沈線文は横方向に展開し、沈線に刺突を加えるものが多い。

2785 ～ 2792 は棒状の懸垂文と沈線を施され、これらの沈線は刺突を加えるものが多い。2793 ～ 2803 は胴部破片であり、渦巻文や棒状の懸垂文の両側に乙字状・コ字状などの沈線文が描かれ、沈線は刺突を加えるものが多い。

2811 ～ 2839 は、口縁部文様が横方向に展開し、渦巻文を持たないもので、これらの文様は沈線（2811 ～ 2823）や、隆沈線によって描き、沈線間がコブ状になるもの（2825 ～ 2839）がある。2840 ～ 2855 は波状口縁である。2856 ～ 2864 は、渦巻や弧状の刻目隆帯の周囲に弧線文や同心円状の沈線が何重かめぐるものである。

2867 ～ 2962 は、区画内に横ハ字文を充填する一群である。2867 ～ 2905 は口縁部に隆帯がめぐり、渦巻文や棒状の懸垂文が付され、沈線区画内に横ハ字文が充填されるものである。沈線区画は、2、3条単位の沈線によって区画され、描線は細く粗雑に引かれている。また 2868・2870 の内面には蓋受け状の張り出し部分がめぐっており、2875 は橋状把手が付される。2905 は2段の楕円区画文が懸垂し、胴部は刺突列が1列めぐり、横ハ字文が充填される。2906 は上下を刻目隆帯により区画し、区画内に横ハ字文が充填されている。2908 ～ 2922 は口縁から胴部の破片であり、口縁部の隆帯とその下に横ハ字文が付される。2923 は口縁部に隆帯がめぐり、胴部には波状の沈線が垂下し、胴下半部には地文縄文が施される。

2924 ～ 2962 は口縁部上端の隆帯区画とその下に波状に隆帯がめぐり、隆帯間に横ハ字文が充填されるものである。隆帯の波頂部に渦巻文を付すものは 2924・2926 ～ 2928 がある。また 2935・2936 は内面に蓋受け状の張出部を持つ。2963 ～ 2972 は口縁部に2本の隆帯がめぐり、これに橋状把手が付属する。隆帯などには刺突が多用されるが、2967・2968 の隆帯間には横ハ字文が充填されている。2974 ～ 2977 は楕円区画の中に刺突を充填するものである。2978・2979 は橋状把手が付き、2981 ～ 2993 は器面に刺突を施すもので、2981 などは半截竹管により2つ単位で施されている。

2994 ～ 2997 は口縁部に沈線区画により無文帯を作り出して、胴部がほぼ地文縄文のみの土器である。沈線区画には刺突を加えるものもあり、胴部には沈線による懸垂文を施すものもある。2998 ～ 3024 は刻目隆帯や圧痕隆帯・鎖状隆帯が1本めぐり、胴部が地文縄文のみの粗製的な土器群である。隆帯の圧痕は、施文具（註 86）で施すものと指頭圧痕のものがある。一部は、後期初頭まで下るものもある（註 87）。

図版第 569 図～第 570 図 3045 は波状口縁で、波頂部は隆帯により渦巻文が施されるものであり、これらは大木9式土器（註 88）と考えられる。3025・3026・3033・3036・3037 は裏面や突起の頂部にも渦巻文が付される。3039 は隆帯が入り組み連結して、小区画を作り出している。3040 は地文の上に隆帯を貼付している。3042・3043 は橋状把手が付属する。3046 は楕円状に区画された部分に刺突が充填されている。3047 ～ 3050 は磨消縄文の土器で、3047 ～ 3050 は口縁部に無文帯を有しており、3047 は口縁部に環状突起が付される。破片資料であるため明確ではないが、大木 10 式土器（註 89）と考えられる。

図版第 571 図～第 576 図は、加曽利ＥⅢ式・加曽利ＥⅣ式土器に対比される土器群である。3051 ～ 3064 は口縁部に文様区画を持ち、胴部は磨消懸垂文が垂下する。3064 は口縁部区画に沈線が充填され、3065・3075 のようにワラビ手状文が付され、3066 では蛇行沈線文が垂下する。3077 ～ 3114 は、口縁部に狭い無文帯をもつものであり、波状文やＵ字状文・逆Ｕ字状文などが磨消縄文により施される一

群である。3077 ～ 3081 は口縁部に把手をもつもので、3077・3078・3113 ～ 3116 は口縁部に刺突列がめぐっている。3096 は微隆起線文により文様が描出されている。3118 ～ 3132 は口縁部文様帯を持たない一群で、3118・3119 は口縁部に圧痕隆帯がめぐっている。胴部文様は、逆Ｕ字状文などが磨消縄文により施される。3126 ～ 3132 は微隆起線文で区画するものである。3133 ～ 3143 は胴部に雨滴状の刺突を施す一群であり、微隆起線文が垂下するものや微隆起線文による無文帯が垂下するものがあり、3136 は胴下半部に縄文が施される。

3144 は両耳壺の胴部破片と考えられ、磨消懸垂文が垂下し、器面に赤彩が見られる。3145 は不明の土器である。3146 は把手の部分であり、赤彩が見られる。3147 ～ 3151 は隆帯もしくは微隆起線文により文様が描かれており、瓢箪形注口土器の破片であると考えられる。3146 と 3147 は赤彩が見られる。3153 ～ 3155 は縦位の条線文を施すもので、曽利式土器（註 90）と考えられる。

⑥有孔鍔付土器（図版第 578 図～第 581 図）

図版第 578 図～第 581 図は口縁部に鍔や貫通孔がめぐる一群で、有孔鍔付土器（註 91）である。文様は、3156・3158 では胴部を区画して区画内に文様が描かれる。文様は逆Ｕ字状やハート形を呈するものなどがある。この他、眼鏡状突起（3170）や、環状突起（3166）、人体文の手の部分と考えられるもの（3159）が見られる。3171 は小形の鉢形土器で、鍔の下に交互刺突文がめぐり、胴部は基隆帯や半隆起線文で渦巻文などが描かれる。3172 は口縁部に円孔がめぐる不明のもので、3173・3174 は鍔がめぐるが、貫通孔が伴わないものである。これらの中で、3157・3160・3165・3168・3170・3171 は赤彩が認められる。また 3159 の内面には炭化物（コゲ）が付着しており、その他にも薄く炭化物が付着がするものがある。

⑦台付土器・台形土器（図版第 582 図）

図版第 582 図 3175 ～ 3190 は台付土器の台の部分であり、無文のものが多いが、3176 は縦位の半隆起線文を施し、3175・3185 は沈線が施される。加えて、円孔がめぐるものが多く見られる。また 3191 は「台形土器」（註 92）の一部であり、表面がよく研磨されている。台形土器は、本遺跡からは第 30 号住居跡出土の 514 を合わせて２点のみが出土している。

⑧粗製土器（図版第 583 図～第 607 図）

図版第 583 図～第 607 図は、地文のみの粗製土器である。3192 ～ 3246 は口唇部を内側に折返したり、粘土を貼り付けることにより内面が肥厚する一群である。このなかで、口縁部に環状突起や巴状突起が付属するものがある（3193 ～ 3204・3206・3207・3210・3211・3223 ～ 3226・3228・3230・3246）。3237 ～ 3246 は地文に木目状撚糸文を施す一群である。3247 ～ 3263 は波状口縁であり、その中の 3247 ～ 3251 には波頂部下の胴部にコブ状の貼付文が付される。3269 ～ 3274 は口縁部が内湾するものであり、3288 ～ 2195 は口縁部が外反する。3296 ～ 3301 は頸部が屈曲して、口縁部が外反するものである。3302 ～ 3305 は、胴部が張り出して口縁部が内湾するものである。3306 ～ 3314 はキャリパー形を呈する一群である。3317 ～ 3324 は４単位の波状口縁で口唇部が無文帯になり、一方、3325 ～ 3328 は平口縁で口唇部が無文部になる。3329 ～ 3345 は胴部から底部にかけての破片資料である。

⑨浅鉢形土器（図版第 608 図～第 625 図）

図版第 608 図～第 625 図は中期の浅鉢形土器である。3346 ～ 3394 は口縁部が「く」の字状に屈曲しソロバン玉形を呈する一群であり、口縁部に文様帯を有して、胴部が地文縄文のみのものである。口縁部文様は、口唇部が無文になり、半隆起線文・爪形文・環状突起・三叉文・玉抱三叉文などが施される。

3380 ～ 3387 のように刻みを多用するものや、3388 には蓮華文を施し、3392 には交互刺突文が施される。胎土中には雲母を比較的多く含んでいるものが多い。これらの多くは口縁部や内面に赤彩が見られる（3346・3351・3357・3361・3364・3368)。これらは北陸系の浅鉢形土器（註 93）で、時期的には大木７ｂ式並行期もしくは大木８ａ式古段階並行期に帰属すると考えられる。

3395 ～ 3409 は、なだらかに湾曲しながら立ち上がる浅鉢形土器である。口縁部が区画されるものが多く、3395のように口唇部に玉抱き三叉文が付されるものがある。これらには胴部が無文になるもの(3395 ～ 3399）と、地文に縄文を施すもの（3400 ～ 3406）がある。また 3410 ～ 3412 は口縁部を沈線により区画し、円形文もしくは渦巻文が付される。3410 は内面に赤彩が認められる。これらも北陸系の浅鉢形土器で、時期的には大木７ｂ式並行期もしくは大木８ａ式古段階並行期に帰属すると考えられる。

3413 ～ 3420 は、口縁部に文様帯を有し、角押文やキャタピラ状の文様が施されるものである。3413・3414・3420 ～ 3426 は胎土中に雲母を多く含んでいる。3413 と 3414 は同一個体の可能性があり、口縁部に冂状の把手が付属し、口縁部文様帯に角押文が施される。3415 ～ 3418 は、口縁部にキャタピラ状文・有節沈線・三叉文が施される。3419 は楕円区画の中に斜行沈線文を充填するもので、内面に赤彩が見られる。3420 は角押文を施すものである。3421・3422 は口縁部に文様帯を有し、3423 ～ 3425 は内面に有節沈線などが施される。3426 は口唇部に刻目を施すものである。

3428 ～ 3453 は胴部が張り出し、頸部で屈曲してほぼ垂直に立ち上がるもので、器面は無文でよく研磨されている。またほとんどの土器は内・外面に赤彩が認められる（3429・3430・3431・3432・3433・3435)。3454 は「く」の字状に屈曲した器形を呈しているが、前出の一群と胎土が類似しており、内外面に赤彩が見られる。3455 は赤彩が見られる。3456 は胴部の張り出す部分に横Ｓ字状の文様が付されている。3457 は沈線区画内に刻目を充填するもので、内面に赤彩が見られる。3458 は半隆起線文と爪形文を施すものである。3459 ～ 3462 は口縁部に文様帯を有し、Ｓ字状文や菱形文・剣先文などが付される。3459・3462 の口縁部文様は未調整隆帯によって文様が施されている。これらはⅣ期～Ⅴ期のものと考えられる。

（３）Ⅶ～Ⅸ期（縄文時代後期）の土器群（図版第 626 図～第 657 図）

①Ⅶ期（三十稲場式期）の土器群（図版第 626 図～第 631 図）

図版第 626 図～第 631 図は、頸部にくびれをもち口縁部が無文帯になり、そこに４単位の橋状把手や貼付文が付される一群であり、三十稲場式土器（註 94）である。

3463 は「く」の字状に口縁部が外反して蓋受け状になる。3468 ～ 3471 は口縁部に棒状の貼付文が付されるもので、口縁部があまり屈曲しない。3474 ～ 3562 は橋状把手を有する一群と考えられる。これらの橋状把手は、板状・棒状のものや先端が捻転するものがあり、Ｓ字状や渦巻状の貼付文が付くものもある。頸部区画は、刻目隆帯・鎖状隆帯がめぐるもの（3464・3468・3471 ～ 3505・3545 ～ 3571)、隆帯が貼り付けられ段差のみを持つもの（3529 ～ 3544)、刺突列をめぐらせるもの（3463）がある。胴部文様には、貼瘤（3463 ～ 3467)、刺突（3471 ～ 3547)、縄文（3548 ～ 3551、3556 ～ 3571）を施すものが見られる。刺突文には幾つかの種類があり（註 95)、①花弁状の刺突、②三角形の刺突、③円形の刺突、④細かな刺突などがある。特に、細かな刺突を施すものは、口縁部の区画が不明瞭である。またこの中で原体の回転施文の可能性が指摘されるものもある（註 96)。3572 ～ 3583 は頸部に隆帯や刺突列

などの区画を有し、胴部が地文縄文になるもので、その部分で橋状把手などが認められないものである。3584 ～ 3586 は口縁部の区画に蛇行沈線文が見られ、3584 は口唇部に押圧を加えるものであり、十日町市向原Ⅱ遺跡（註 97）などで類似資料が出土している。

3587 ～ 3616 は、称名寺Ⅱ式土器（註 98）と考えられる一群である。胴部文様は、磨消縄文（3588 ～ 3591・3593 ～ 3597・3616）や沈線のみのもの（3598・3599・3604・3611）、列点文（3590・3591・3612 ～ 3616）がある。また懸垂文（3592）や橋状把手（3587・3606・3608 ～ 3610）やＣ字状文（3601・3607・3608）、刺突列（3600・3602・3603）などがある。

②Ⅷ期（南三十稲場式期）の土器群（図版第 634 図～第 649 図）

第 634 図～第 649 図は、南三十稲場式土器（註 99）にあたる。3617 ～ 3696 は口縁部に文様帯を有する二帯構成の一群である。口縁部の文様は、波状口縁の波頂部下に渦巻文・Ｕ字状文・凹文を中心に、同心円状の文様を施すものや、3617 のように文様間に 1、２条の横位の沈線が配されるものや、斜行する沈線が連続的に施されるものかある。また 3651 ～ 3653 のように大柄な突起を有するものもある。胴部文様は、米字状文や三角形などの幾何学的な文様を施すものがあり、3617 ～ 3649 は磨消縄文を施し、3654 ～ 3680 は数条単位の集合沈線文により直線的・曲線的な懸垂文が垂下する。3645 は縦位のＵ字状の区画を施し、無文部・縄文部と区画内に弧線文を充填する部分がある。

3697 ～ 3874 は、頸部無文帯を有し、いわゆる金魚鉢形を呈する一群である。これらは口縁部に文様帯をもつもの（3697 ～ 3742・3750）と、捻転するやや大柄な把手を有するもの（3743 ～ 3747）、内外面に文様を描くもの（3762 ～ 3769）、口唇部に文様を施すもの（3755 ～ 3761）、内面にのみ文様を施すもの（3777 ～ 3781）がある。また胴部区画は、沈線によって区画されるものが多いが、胴部区画の沈線間に刺突列を加えるもの（3795 ～ 3808）が多く見られる。また胴部区画には、紐線状の隆帯がめぐるもの（3869 ～ 3874）がある。胴部文様は、渦巻文などの曲線的な文様、斜行文・蛇行沈線文（3832 ～ 3836）・８字状貼付文（3858・3859・3861 ～ 3874）、などが見られる。3739 は破損部分において、粘土帯端部に施された刻目が観察される（註 100）。3832 は先端が２又になるＪ字状の懸垂文と蛇行沈線文が垂下している。

3875 ～ 3952 は朝顔形を呈する深鉢形土器であり、堀之内２式土器と考えられる。これらは器壁厚が薄く黒色を呈するものが多い。これらの口縁部内面には１条の沈線がめぐっている。口縁部下には、隆帯を付さないもの（3875 ～ 3889）、隆帯が１～４本めぐるもの（3890 ～ 3914）がある。隆帯は鎖状のものや刻目を斜めに加えたものなどがある。口唇部に８字状突起が付されるものは 3906・3908・3909 があり、胴部に８字状の貼付文が付くものは 3875・3893・3894・3896・3898・3901・3902 ～ 3904・3906 ～ 3909 がある。胴部文様は、三角形モチーフなどの幾何学文や、帯状縄文・渦巻文などの曲線文などがある。また 3953 は刻目を施す球状の突起が付き、胴部は隆帯がめぐり沈線間にキザミが付加される。

③Ⅸ期（加曽利Ｂ１式並行期）の土器群（図版第 650 図・第 651 図）

図版第 650 図 3953 ～ 3987 は数条の沈線を帯状にめぐらせるもので、器壁厚が薄く黒色を呈するものが多い。口縁部文様は、口唇部に８字状突起が付くもの（3966・3986）、８字状の懸垂文が垂下するもの（3961・3962）、沈線帯（3953 ～ 3979・3985・3986）、連鎖状文（3965・3966・3969 ～ 3971・3974・3976・3977・3978・3980・3982 ～ 3984）が描かれるものがある。3987 は注口土器の破片である可能性がある。これらは「石神類型」（註 101）と呼称される一群で、堀之内２式か加曽利Ｂ１式に並行するか見解が分かれる。

図版 651 図 3990 ～ 3995 は加曽利Ｂ１式土器（註 102）にあたる一群である。これらの口縁部は、数

条の沈線がめぐるものや帯状縄文になるものがあり、内面にも沈線帯がめぐっている。口縁部には「の」字状文などを施すものや、3996 のように階段状に区切るものも見られる。口唇部は鋸歯状を呈するものが多く、3986 は８字状突起が付され、3988 は小突起が付され、2990・3991・3997 では内面に刺突列が施される。

④不明の深鉢形土器（図版第 652 図）

4000・4001 は無文土器で、内面に１、２条の沈線がめぐる。4002 は口唇部に刻目を施すものである。4004 は３条の沈線間に刺突列がめぐる。4005 は横位の楕円区画間から蛇行懸垂文が垂下する。4009・4011 は口縁部に斜行する沈線を加えるものである。4013・4014 は対弧文が連続して描かれ、赤彩が見られる。4015 ～ 4017 は鉢形を呈するものと考えられ、4016・4017 は口縁部に刺突列がめぐる。

⑤浅鉢形土器（図版第 653 図～第 654 図 4036）

4018 ～ 4036 は浅鉢形土器である。4018 ～ 4024 は口縁部が内屈して文様帯を有する一群である。口縁部には楕円区画や刺突列などが付される。4022 は赤彩が見られる。4025 ～ 4032 は口唇部が鋸歯状を呈し、外面が無文で内面に多条の沈線帯や刺突列がめぐっている。

⑥注口土器（図版第 654 図 4037 ～第 655 図）

4037 ～ 4063 は注口土器の一部であると考えられ、これらの内面調整は粗いものが多い。4037 は微隆起線文により文様を施し、注口部に把手が連結している。4038 ～ 4047 は注口部であり、ほとんどは無文であるが、4039・4041 の下部に円形の文様が付され、4039 の破断面に黒色付着物が見られる。4040 は頸部に２条の沈線がめぐり、沈線間に刺突列を施すもので、注口部と口縁部が把手でつながっている。4042 は注口部の先端に小把手が付き、帯状縄文などが施される。4048 ～ 4054 は注口土器の把手部分であると考えられる。4055 ～ 4063 は注口土器の胴部破片であると考えられる。4055 は磨消縄文で、4056 ～ 4059 は太めの沈線が連続するものである。4061 は円形の磨消縄文内に同心円状の沈線を施すものである。4062 は細沈線帯による文様で、4063 は連鎖状文が描かれる。

⑦蓋形土器（図版第 656 図）

図版第 656 図は蓋形土器である。平面形は円形のものが多く、隅丸方形のものも見られる。器面の文様は、鎖状隆帯がめぐるもの（4064・4065）、刺突（4067）、コブ状貼付文（4069・4070）、隆帯により文様を描くもの（4073・4074）、無文のもの（4075 ～ 4078）がある。また把手とつまみの形態には大きく３種類があり、中央部につまみが付属するもの（4074・4076）と２ヶ所に橋状把手が付くもの（4064・4072）、一つの大きな橋状把手が付くもの（4077・4078）がある。

（４）Ⅹ期・ⅩⅠ期（縄文時代後期後葉・晩期）の土器群（図版第 657 図）

図版第 657 図 4079 ～ 4081 は後期後葉の土器群であると考えられ、磨消縄文による木葉状の文様が描かれている。4082・4083 は無文で口唇部が肥厚している。4084・4085 は口唇部が隆帯が貼り付けられて肥厚し、その隆帯上に沈線が加えられ、胴部に沈線による文様が描かれる。4087 ～ 4089 は晩期の土器と考えられる。4088 は綾杉状の刻みと、玉抱三叉文が付される。4089 は沈線区画の中に横長の楕円文などが描かれる。

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
1	217	1号住居跡	V	II7i	深鉢形土器	形土器	16.8	—	—	—	5112	口～胴部	縄文原体の側面圧痕	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2	217	〃	V	II4a	深鉢形土器	K	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、細沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3	217	〃	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、波状文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
4	217	〃	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
5	217	〃	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
6	217	〃	V	II7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
7	217	〃	V	II7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	灰白	○	—	
8	217	〃	V	II7i	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
9	217	〃	—	—	深鉢形土器	—	—	15	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
10	217	〃	IV	II3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	縦位懸垂文、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
11	217	〃	IV	II3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	渦巻文、弧線文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
12	218	2号住居跡	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	22	—	—	—	—	口縁部	隆帯、8字状貼付文、三角文	縄文LR	—	黒褐	—	○	
13	218	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	—	灰黄	—	○	
14	218	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	—	黒褐	○	○	
15	218	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	小礫	にぶい黄褐	—	—	
16	218	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	鎖状隆帯	—	—	灰白	—	—	
17	218	〃	IX	III3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	8字状突起、沈線帯、結紐状文	縄文RL	—	黒褐	○	○	
18	218	〃	IX	III3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	沈線帯、結紐状文	縄文RL	—	黒褐	○	○	
19	218	〃	IX	III3	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	帯縄文、内面沈線帯、貫通孔	縄文LR	—	淡黄	—	—	
20	218	〃	IX	III3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線帯	—	砂粒	淡黄	—	—	
21	218	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、三角形区画	—	砂粒、白色粒子	黄褐	—	—	
22	218	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒、白色粒子	黄褐	—	—	
23	218	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒、白色粒子	黄褐	—	—	
24	218	〃	Ⅷ	III2a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂隆	浅黄橙	—	○	
25	218	〃	Ⅷ	III2a3	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、の字状文	—	—	淡黄	—	—	
26	218	〃	不明	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	—	灰白	—	—	
27	218	〃	不明	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	白色粒子	にぶい黄橙	—	—	
28	218	〃	不明	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	白色粒子	淡黄	—	—	
29	218	〃	不明	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	—	橙	○	—	
30	218	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、白色粒子	淡黄	—	—	
31	218	〃	不明	III4	深鉢形土器	—	—	12	—	—	—	底部	—	—	—	橙	○	—	底部に網代痕
32	219	3号住居跡	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、磨消縄文	不明	砂粒	灰白	—	—	
33	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、帯状縄文	縄文LR	砂粒	灰白	○	○	
34	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
35	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
36	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
37	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、磨消縄文	不明	砂粒	浅黄橙	—	○	
38	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、磨消縄文	—	—	灰白	—	○	
39	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、磨消縄文	縄文L	砂粒	橙	—	—	
40	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、磨消縄文	縄文LR	—	淡黄	—	—	
41	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、磨消縄文	不明	—	淡黄	—	—	
42	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、磨消縄文	不明	砂粒、白色粒子	淡黄	—	—	
43	219	〃	Ⅷ	III2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、白色粒子	褐	—	—	
44	219	〃	Ⅷ	III2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	—	浅黄	—	—	
45	219	〃	Ⅷ	III2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
46	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	縄文L	砂粒	淡黄	—	○	
47	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	—	浅黄	—	—	
48	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	不明	砂粒	淡黄	—	—	
49	219	〃	Ⅷ	III2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
50	219	〃	Ⅷ	III2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、白色粒子	橙	—	—	
51	219	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	—	浅黄橙	—	—	
52	219	〃	Ⅷ	不明	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線	—	砂粒、白色粒子	浅黄	—	—	
53	219	〃	Ⅷ	III2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	—	橙	—	—	
54	219	〃	Ⅷ	III2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	白色粒子	灰黄	—	—	
55	219	〃	Ⅷ	III2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位懸垂文、斜行文	—	—	淡黄	—	—	
56	220	〃	Ⅷ	III2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
57	220	〃	Ⅷ	III2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
58	220	〃	Ⅷ	III2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	灰白	—	—	
59	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	弧状沈線文、内面沈線帯	—	—	橙	—	—	
60	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	弧状沈線文、内面沈線帯	—	赤色粒子	橙	—	—	
61	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	弧状沈線文、内面文	—	—	橙	—	○	
62	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	弧状沈線文、内面文	—	—	橙	—	—	
63	220	〃	IX	III3b	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状の口唇	—	—	黒	○	○	
64	220	〃	Ⅷ	III6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、刺突列	—	砂粒	黄灰	—	—	
65	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	刻目隆帯	—	砂粒	淡黄	—	—	
66	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面に沈線	—	—	灰白	—	—	
67	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	浅黄	—	○	
68	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	淡黄	—	—	
69	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	淡黄	—	○	
70	220	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	淡黄	—	—	
71	220	〃	V	III1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	刺突列	縄文複節	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
72	220	〃	V	III1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突	—	小礫、砂粒	黄橙	—	—	
73	220	〃	V	III1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突	—	—	淡黄	—	—	
74	220	〃	V	III1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突	—	小礫、砂粒	淡黄	—	—	
75	221	4号住居跡	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、楕円懸垂文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
76	221	〃	VI	II5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	撚糸L	小礫	灰白	○	—	
77	221	〃	VI	II5a2	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	弧線文、刻目隆帯、横ハ字文	—	—	浅黄	—	—	
78	221	〃	VI	II5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
79	221	〃	VI	II5a8	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	—	—	にぶい黄橙	○	○	
80	221	〃	VI	II5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	弧線文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
81	221	〃	VI	II5a2	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刻目	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
82	221	〃	VI	II5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄	—	—	
83	221	〃	VI	II5a5	深鉢形土器	C	21	—	—	—	3473	口～胴部	懸垂文、コブ状突起	縄文L	小礫	にぶい黄橙	○	○	
84	221	〃	VI	II5g	鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文L	—	浅黄橙	—	○	
85	221	〃	VI	II5h	鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線、小把手	—	—	灰白	—	—	赤彩
86	222	〃	VI	II5a3	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	コブ状突起、沈線＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
87	222	〃	VI	II5a3	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	コブ状突起、沈線	縄文RL	—	にぶい黄橙	—	—	
88	222	〃	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、渦巻文	縄文RL	砂粒	淡黄	—	—	
89	222	6号住居跡	Ⅷ	III2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、磨消縄文	縄文LR	—	にぶい黄橙	—	—	
90	222	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	—	浅黄	—	—	
91	222	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
92	222	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
93	222	〃	Ⅷ	III2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	灰黄	—	—	
94	222	〃	Ⅷ	III2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位懸垂文、斜行文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
95	222	〃	Ⅷ	III2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	懸垂文	—	—	灰白	—	○	
96	222	〃	Ⅷ	III4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	

第 11 表　土器観察表（1）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
97	222	6号住居跡	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
98	222	〃	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	浅黄	—	—	
99	222	〃	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
100	222	〃	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
101	222	〃	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
102	223	7号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5a6	深鉢形土器	C	21.6	—	—	—	3818	口～胴部	刻目隆帯、弧線文、懸垂文	縄文L	小礫	にぶい黄褐	○	○	
103	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a7	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、渦巻文、同心円文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
104	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a7	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、渦巻文、同心円文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
105	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、渦巻文、沈線区画	縄文L	砂隆、小礫	浅黄橙	—	○	104と同一個体
106	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、渦巻文、懸垂文	縄文L	砂隆、小礫	浅黄橙	—	○	105と同一個体
107	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a3	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
108	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a3	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	褐灰	—	—	
109	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a3	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	コブ状突起、沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
110	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a3	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	縄文LR	砂粒	灰白	—	—	
111	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	橙	—	○	
112	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	橙	—	—	
113	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	橙	—	○	
114	223	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文L	砂粒	にぶい褐	—	—	
115	224	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂隆、小礫	にぶい黄橙	—	○	
116	224	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯	縄文L	小礫	浅い黄橙	—	○	
117	224	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、渦巻文	縄文LR	砂隆、小礫	にぶい黄橙	○	—	
118	224	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文L	砂粒	浅い黄橙	—	—	
119	224	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	灰黄褐	—	—	
120	224	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線＋刺突	縄文RL	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	—	—	
121	224	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
122	224	〃	Ⅵ	Ⅱ5h	箆形注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	—	砂粒、赤色粒子	明黄褐	—	—	内面に黒色付着物
123	224	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい褐	—	—	
124	224	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
125	224	〃	不明	不明	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	橙	○	○	
126	225	8号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、刺突列	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
127	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、管状刺突	縄文L	砂隆、小礫	灰黄	○	○	
128	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	—	砂隆、小礫	灰黄	—	—	
129	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	淡黄	—	—	
130	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	赤色粒子	淡黄	—	—	
131	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
132	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文LR	砂隆、小礫	橙	—	—	
133	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文、渦巻文	縄文LR	—	淡黄	—	—	
134	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
135	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	—	明黄褐	○	—	
136	225	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
137	225	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文R	砂隆、小礫	浅黄橙	—	—	
138	225	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	—	褐灰	—	—	
139	226	9号住居跡	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
140	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	—	浅黄橙	—	—	
141	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
142	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	褐	—	○	
143	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	灰褐	○	○	
144	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
145	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	半隆起線文、ペン先状刺突	—	砂粒、小礫	にぶい黄褐	—	—	
146	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
147	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	橙	○	—	
148	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
149	226	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、矢羽状沈線文、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
150	227	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文、剣先文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
151	227	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
152	227	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口縁部	X字状把手、沈線	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
153	227	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
154	227	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
155	227	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
156	227	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
157	227	〃	Ⅴ	Ⅱ7 i	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	玉抱三叉文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
158	227	〃	Ⅴ	Ⅱ7 i	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	—	灰白	—	—	
159	227	〃	Ⅴ	Ⅱ7 i	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
160	227	〃	Ⅴ	Ⅱ7 i	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
161	228	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
162	228	〃	Ⅴ	不明	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
163	228	〃	Ⅴ	Ⅱ7 i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
164	228	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
165	228	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
166	228	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
167	228	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
168	228	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
169	228	〃	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	突起	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
170	228	〃	Ⅴ	Ⅱ4a6	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
171	228	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文、突起、半隆起線文	縄文RL	小礫	にぶい黄褐	—	—	
172	228	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文	—	雲母、砂粒	橙	—	—	
173	228	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	連華文、爪形文、環状突起	—	砂粒	灰白	—	—	
174	228	〃	Ⅲ-Ⅳ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、有節沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
175	228	〃	Ⅲ	Ⅱ2a	深鉢形土器	E	17	9.6	19.7	18.3	1962	口～底部	楕円区画、沈線＋刺突	縄文RL	砂粒	赤褐	○	○	
176	229	10号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	N	11	6.3	—	15.3	887	口～底部	平行沈線、区画文、渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
177	229	〃	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	I	12	5.1	15.9	15.9	—	口～底部	渦巻文、未調整隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
178	229	〃	不明	不明	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	隆帯	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
179	229	〃	Ⅲ	Ⅱ3a	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口～胴部	小突起、隆帯	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
180	229	〃	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	—	浅黄橙	—	○	
181	229	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	褐	—	—	
182	229	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口縁部	隆線文	縄文RL	砂粒	淡黄	—	—	
183	229	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	淡黄	—	—	
184	229	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄	—	—	
185	229	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	小礫	にぶい黄	—	—	
186	230	11号住居跡	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
187	230	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文、逆U字状文	縄文RR	砂粒	橙	○	○	
188	230	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
189	230	〃	Ⅴ	Ⅱ7 i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
190	230	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文、剣先文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
191	230	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
192	230	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	

第 12 表　土器観察表（2）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
193	230	11号住居跡	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	深鉢形土器	B	41.6	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	灰白	—	—	
194	230	13号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	波状文、交互刺突文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	○	
195	230	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
196	230	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	白色粒子	灰黄	○	—	
197	230	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	明黄褐	—	—	
198	230	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	—	明黄褐	—	—	
199	231	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	半隆起線文	—	—	橙	○	○	
200	231	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	—	橙	—	—	
201	231	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	黄橙	—	—	
202	231	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	赤褐	—	—	
203	231	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	—	にぶい黄橙	—	—	
204	231	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、爪形文	—	砂粒	橙	○	—	
205	231	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刻目、刺突	—	—	橙	—	—	
206	231	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
207	231	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
208	231	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	—	橙	○	○	
209	231	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
210	231	〃	Ⅲ	Ⅱ2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、沈線＋刺突、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい褐	○	—	
211	231	〃	Ⅲ	Ⅱ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、蛇行沈線文	—	砂粒	褐	—	○	
212	231	〃	Ⅲ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	小突起、キザミ	縄文LR	—	にぶい褐	—	○	
213	231	〃	Ⅲ	Ⅱ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	U字状文	縄文RL	—	橙	—	—	
214	231	〃	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
215	231	〃	Ⅲ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
216	232	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	35	—	—	—	—	口～胴部	玉抱三叉文、半隆起線文	縄文RL	砂粒、雲母	橙	—	—	内面に黒色付着物
217	232	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	39	7	11	11	8630	口～底部	平行沈線	縄文LR	雲母	にぶい黄橙	—	—	
218	232	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	淡黄	—	—	
219	232	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	口唇に沈線	—	砂粒	淡黄	○	○	
220	232	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	玉抱三叉文	—	砂粒	褐	○	○	
221	232	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	—	砂粒	にぶい褐	—	—	
222	232	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文L	橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
223	232	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒、小礫	暗褐	—	—	
224	232	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	—	—	34Jと接合
225	233	14A号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3d2	深鉢形土器	D	27.2	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、爪形文、懸垂文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
226	233	〃	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	頸部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	赤褐	—	○	
227	233	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	
228	233	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、沈線間に刻目	—	砂粒、赤色粒子	赤褐	—	—	
229	233	〃	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文、円形貼付文、細沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
230	233	〃	Ⅲ	Ⅱ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、沈線＋刺突	—	—	赤褐	—	○	
231	233	〃	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円区画、充填沈線文	—	砂粒	黄褐	—	—	
232	233	〃	中期	—	深鉢形土器	D	12	5.7	12.6	12.6	500	口～底部	懸垂文	縄文RL	砂粒	褐色粒子	にぶい黄橙	○	—	
233	233	〃	Ⅳ	Ⅱ7	深鉢形土器	F	19.5	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	明赤褐	○	○	
234	234	14B号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	H	14.4	7.2	16.8	16.8	1100	口～底部	隆半隆起文、基隆帯	—	砂粒、雲母	褐	○	○	
235	234	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、8字状突起	—	砂粒	赤褐	—	○	
236	234	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
237	234	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、半隆起線文	—	砂粒	赤褐	○	—	
238	234	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	—	にぶい黄橙	○	—	292と接合
239	234	〃	Ⅳ	Ⅱ3c	鉢形土器	F	20	12.8	17.4	13.2	2640	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
240	235	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい褐色	—	—	256と接合
241	235	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	交互刺突文	—	褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
242	235	〃	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文LR	砂粒	灰黄	—	—	
243	235	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目、円形刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
244	235	〃	Ⅳ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
245	235	〃	Ⅳ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
246	235	〃	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	細沈線	—	—	にぶい黄橙	—	—	
247	235	〃	Ⅲ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行沈線文	縄文LR	—	明黄褐	—	○	
248	235	〃	Ⅲ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	—	赤褐	○	—	
249	235	〃	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	細沈線、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
250	235	〃	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄	—	—	
251	235	〃	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
252	235	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、懸垂文	縄文LR	砂粒	灰白	—	○	
253	235	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
254	235	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	灰白	—	○	
255	236	15A号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	赤褐	—	—	
256	236	〃	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	橙	○	—	
257	236	〃	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	白色粒子	橙	○	○	
258	236	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
259	236	〃	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
260	236	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
261	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、褐色粒子	赤褐	○	○	
262	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、懸垂文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
263	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
264	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
265	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
266	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
267	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
268	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
269	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	半隆起線文、把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
270	237	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	半隆起線文、突起、蛇行沈線文	—	砂粒	灰褐	—	—	
271	238	〃	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～頸部	環状突起、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
272	238	〃	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	赤褐	○	○	
273	238	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	橙	○	○	
274	238	〃	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	12.8	8.4	17	12	1136	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
275	239	〃	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	I	18	6.8	17.4	14.8	1690	口～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	—	
276	239	〃	Ⅳ	Ⅱ3e	深鉢形土器	J	13.2	6.3	14	14	870	口～底部	渦巻文、三角形区画	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
277	239	〃	Ⅳ	Ⅱ3f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、懸垂文	—	—	浅黄橙	—	—	
278	239	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	—	砂隆	にぶい黄橙	—	—	
279	239	〃	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	明赤褐	—	○	
280	239	〃	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、弧線文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
281	240	〃	Ⅳ	Ⅱ7	深鉢形土器	H	12.6	5.7	17	14	665	口～底部	半隆起線文、貼付文	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	
282	240	〃	Ⅳ	Ⅱ7g	深鉢形土器	N	26	12	34.4	34.4	9200	口～底部	—	縄文RL、L	砂粒	橙	○	○	
283	240	〃	Ⅳ	—	浅鉢形土器	C	33.4	10.4	—	—	—	口～胴部	環状貼付文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	台付
284	240	〃	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	剣先文、沈線区画	不明	砂粒	浅黄橙	—	—	
285	240	〃	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
286	240	〃	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
287	240	〃	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
288	241	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	—	縄文LR	橙色粒子	浅黄橙	—	○	

第13表　土器観察表（3）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
289	241	15A号住居跡	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	不明	砂粒	明赤褐	○	○	
290	241	15B号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	Ⅰ	—	—	—	—	—	口～胴部	クランク文、有節沈線	縄文RL	砂粒	赤褐	○	○	
291	241	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文、三叉文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
292	241	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	—	にぶい黄橙	○	—	238と接合
293	241	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい褐	—	—	
294	241	〃	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文、三叉文	縄文L	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
295	241	〃	Ⅳ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	明褐	—	—	
296	241	〃	中期	Ⅱ6	有孔鍔付土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	砂粒	橙	—	—	
297	241	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	橙色粒子	褐	—	—	
298	241	〃	Ⅳ	Ⅱ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
299	241	〃	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
300	242	16A号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	白色粒子	赤褐	○	—	
301	242	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	黄色粒子	にぶい黄褐	—	○	
302	242	〃	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	半隆起線文	—	砂粒	明褐	○	—	
303	242	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
304	242	〃	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
305	242	〃	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	隆線文、眼鏡状突起	縄文RL	砂粒、褐色粒子	にぶい褐	—	○	
306	242	〃	Ⅲ	Ⅱ2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	横位楕円区画、爪形文	縄文RL	小礫	橙	○	—	
307	242	〃	Ⅲ	Ⅱ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、縦位沈線	—	砂粒	明赤褐	—	—	
308	242	〃	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、眼鏡状突起	—	小礫	橙	○	○	
309	243	16B号住居跡	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	懸垂文、斜行文	縄文RL	砂粒	にぶい褐	○	○	
310	243	〃	Ⅲ	Ⅱ2b	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	赤褐	—	—	赤彩
311	243	〃	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒、白色粒子	赤褐	—	—	
312	243	〃	Ⅲ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	赤褐	—	○	
313	243	〃	Ⅳ	Ⅱ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	S字状突起、圧痕隆帯、爪形文	縄文LR	—	明黄褐	—	—	
314	243	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
315	243	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	
316	244	17A号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄	—	○	
317	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
318	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
319	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
320	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
321	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい橙	—	○	
322	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線間に刺突	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
323	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線文、コブ状突起	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
324	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線文、コブ状突起	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
325	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
326	244	〃	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
327	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
328	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
329	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
330	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	ワラビ手状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
331	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画	—	—	浅黄橙	—	—	
332	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文L	砂粒	浅黄橙	—	—	
333	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
334	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
335	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
336	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
337	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
338	245	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
339	245	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
340	245	〃	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
341	246	17B号住居跡	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文、縦位沈線	縄文RL	砂粒	赤褐	○	○	埋設土器
342	246	〃	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	斜行沈線文、眼鏡状突起	縄文LR	砂粒	赤褐	○	—	
343	246	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、爪形文	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
344	246	〃	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刻目	縄文RL	—	橙	○	—	
345	246	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、爪形文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	—	
346	246	〃	Ⅲ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	丁状把手、楕円区画、角押文	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
347	246	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	白色粒子	明褐	○	○	
348	247	〃	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
349	247	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
350	247	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	Ⅰ	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、細沈線	縄文RL	砂粒	明褐	○	○	
351	247	〃	中期	Ⅱ7ⅰ	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	淡黄	—	—	
352	247	〃	中期	Ⅱ7h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
353	247	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい橙	—	—	
354	247	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
355	247	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
356	247	17C号住居跡	中期	—	浅鉢形土器	C2	—	—	—	—	—	口～底部	—	—	砂粒、褐色粒子	明褐色	—	○	
357	248	〃	Ⅴ	Ⅱ4a5	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文、蛇行沈線文	縄文RL	—	にぶい黄橙	—	○	
358	248	〃	Ⅴ	Ⅱ4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位渦巻文	—	—	にぶい黄橙	—	○	
359	248	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
360	248	〃	Ⅴ	Ⅱ4a6	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	
361	248	〃	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	隆帯文、沈線区画	縄文RL	—	浅黄橙	—	○	
362	248	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、沈線区画	縄文RL	砂粒	灰白	—	—	
363	248	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	灰白	—	—	
364	248	〃	Ⅴ	不明	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
365	248	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	C	16.8	7.2	24	24	2994	口～底部	沈線区画	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	埋設土器
366	248	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
367	248	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
368	248	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	灰黄褐	—	—	
369	249	17D号住居跡	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	O	35.6	—	—	—	24700	口～胴部	剣先文、懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
370	249	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
371	249	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	黄橙	○	—	炉体土器
372	249	17E号住居跡	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	Ⅰ	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
373	249	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文RL	—	淡黄	—	○	
374	249	17G号住居跡	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	渦巻文、懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒	浅黄	—	○	炉床に敷設
375	250	18号住居跡	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
376	250	〃	Ⅴ	Ⅱ4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
377	250	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
378	250	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	—	—	明黄褐	—	—	
379	250	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	赤褐	—	—	
380	250	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒	浅黄	○	○	
381	250	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
382	250	〃	Ⅴ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	橙	—	○	
383	250	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒	浅黄	○	○	
384	250	19号住居跡	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B1	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第 14 表　土器観察表（4）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
385	250	19号住居跡	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	B	—	—	—	—	—	—	刻目隆帯、把手	—	砂粒、雲母	赤褐	—	—	
386	250	〃	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	A	—	—	—	—	—	—	刺突、つまみ	—	小礫	浅黄	○	—	
387	250	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
388	250	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	明褐	○	○	
389	250	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
390	251	20号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	30.4	—	—	—	—	口～胴部	横ハ字文、刻目隆帯、渦巻文	縄文L	小礫	浅黄橙	—	○	埋設土器
391	251	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	縄文LR	砂粒、小礫	明褐	—	○	
392	251	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒、小礫	褐灰	—	—	
393	251	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
394	251	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	21	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	炉体土器
395	251	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画	縄文LR	砂粒、小礫	橙	—	○	炉床に敷設
396	251	〃	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
397	251	〃	Ⅵ	Ⅱ5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	砂粒	淡黄	—	—	
398	251	〃	Ⅵ	Ⅱ5h	不明	—	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯文、沈線	—	—	淡黄	—	—	赤彩
399	251	〃	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文LR	小礫	明黄褐	—	—	
400	252	21号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	A	20	—	—	—	4150	口～胴部	沈線＋刺突、渦巻文	縄文LR	小礫	淡黄	○	○	炉内出土
401	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線＋刺突、渦巻文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄褐	○	—	炉内出土
402	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、コブ状突起	—	砂粒	浅黄	○	—	炉内出土
403	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄	○	—	
404	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	—	砂粒	浅黄	—	—	
405	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a3	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	—	小礫	灰白	—	—	
406	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
407	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
408	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
409	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄	—	○	
410	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	縄文LR	砂粒	浅黄	—	—	
411	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	縄文LR	砂粒	灰白	○	—	
412	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
413	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
414	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
415	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
416	252	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文L	砂粒	橙	—	—	
417	253	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	33	—	—	—	—	口～胴部	渦巻文、懸垂文	縄文L	砂粒、小礫	浅黄橙	—	○	炉内出土
418	253	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
419	253	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
420	253	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
421	253	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文、逆U字状文	縄文LR	小礫、白色粒子	灰黄褐	—	—	
422	253	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	—	明黄褐	—	—	
423	253	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	—	砂粒、小礫	にぶい黄	—	○	
424	253	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、逆U字状文	縄文LR	黄橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
425	253	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、逆U字状文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
426	253	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	—	砂粒	浅黄	—	—	
427	253	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文L	砂粒	浅黄	—	—	
428	253	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄	—	—	炉内出土
429	253	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄	—	—	
430	253	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄	—	—	
431	254	22号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	19	—	—	—	3050	口～胴部	ワラビ手状文	縄文RL	小礫	明黄褐	○	○	
432	254	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	20	—	—	—	—	口～胴部	隆沈線文、ワラビ手状文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
433	254	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	26	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	浅黄	—	○	
434	254	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	縄文RL	砂粒	浅黄	—	—	
435	254	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
436	254	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄	—	—	
437	254	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
438	254	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒	浅黄	—	—	
439	254	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
440	254	〃	Ⅵ	Ⅱ5a3	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	浅黄	—	○	
441	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文RL	砂粒	浅黄	○	○	
442	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	17	12	18.6	18.6	2400	口～底部	刻目隆帯、横ハ字文、刺突列	—	砂粒	明黄褐	○	○	
443	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
444	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	—	にぶい黄橙	—	—	
445	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
446	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円文、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
447	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	15.5	—	—	—	—	口縁部	波状文、突起	—	砂粒	浅黄	—	—	
448	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	浅黄	—	○	補修孔
449	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	—	浅黄	○	○	
450	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	—	橙	○	○	
451	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	—	にぶい黄橙	—	—	
452	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
453	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄	—	○	
454	255	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
455	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文LR	砂粒	浅黄	○	—	
456	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄	○	○	
457	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
458	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	23.5	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄	○	—	
459	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄	—	○	
460	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	蛇行沈線文、刺突列、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
461	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	—	明黄褐	—	—	
462	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒	浅黄	—	○	
463	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	16	—	—	—	—	口～胴部	沈線区画	縄文RL	砂粒	浅黄	○	○	
464	256	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	19.2	—	—	—	—	口～胴部	鎖状隆帯	縄文L	砂粒	浅黄	—	○	
465	257	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	32.4	—	—	—	32170	口～胴部	鎖状隆帯	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
466	257	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	C	39	—	—	—	—	口～底部	鎖状隆帯、条線文	—	小礫	にぶい褐	○	○	
467	257	〃	Ⅳ	Ⅱ3d3	台付鉢	—	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	—	橙	—	—	
468	257	〃	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	浅黄	—	—	
469	257	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
470	257	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
471	257	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文、沈線	—	砂粒	浅黄	—	—	
472	257	〃	—	—	深鉢形土器	—	10	—	—	—	—	口～胴部	貼付文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
473	257	〃	Ⅷ	Ⅳ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
474	257	〃	Ⅷ	—	不明	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	灰黄褐	—	—	赤彩
475	257	〃	Ⅷ	Ⅳ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	小礫	灰黄褐	○	○	
476	257	〃	Ⅷ	Ⅳ2a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	入子状三角文	—	砂粒	褐	○	—	
477	258	23号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
478	258	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
479	258	〃	Ⅷ	Ⅳ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	黒色物	にぶい黄褐	○	○	
480	258	〃	Ⅷ	Ⅳ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	○	—	

第 15 表　土器観察表（5）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
481	258	23号住居跡	Ⅷ	Ⅳ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、渦巻文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
482	258	〃	Ⅷ	Ⅳ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
483	258	24号住居跡	Ⅴ	Ⅱ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
484	258	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
485	258	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
486	258	〃	Ⅴ	Ⅱ7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
487	258	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線、沈線＋刺突	—	砂粒	灰黄	—	—	
488	258	〃	Ⅵ	Ⅱ5a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、コブ状突起	—	砂粒	黄灰	—	○	
489	258	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
490	258	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
491	258	〃	Ⅳ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒、小礫	橙	—	—	
492	258	〃	Ⅳ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
493	258	〃	Ⅳ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	—	橙	○	—	
494	259	26号住居跡	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	A	24	—	—	—	—	口～胴部	沈線区画、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
495	259	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文、沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
496	259	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	淡黄	—	—	
497	259	〃	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	突起	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒	赤褐	—	—	
498	259	27号住居跡	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、双頭渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
499	259	〃	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	波状文、沈線＋刺突	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
500	259	30号住居跡	Ⅴ	Ⅱ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	口唇部の刻目	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	炉内出土
501	259	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
502	259	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文、沈線	—	砂粒	橙	—	—	
503	260	〃	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	21.6	—	—	—	—	口～胴部	隆帯文、沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
504	260	〃	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	箱形把手、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
505	260	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
506	260	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
507	260	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
508	261	〃	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	O	34	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線、沈線区画	縄文RL	砂粒	灰黄褐	○	○	炉内出土
509	261	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
510	261	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
511	261	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
512	261	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
513	261	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	5.4	—	—	—	底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
514	261	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	台形土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	赤色粒子	明黄褐	—	○	
515	262	〃	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起、把手	—	砂粒	橙	—	—	
516	262	〃	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
517	262	〃	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、有節沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
518	262	〃	Ⅲ	Ⅱ7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、圧痕隆帯	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
519	262	31号住居跡	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	31	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	—	砂粒	明黄褐	—	—	
520	262	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
521	262	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	黄橙	—	○	
522	262	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
523	262	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文RL	砂粒	浅黄	—	○	
524	262	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	黄灰	—	—	
525	263	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、渦巻文	—	—	赤褐	—	—	
526	263	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
527	263	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	10.5	—	—	—	底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
528	263	32号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒、白色粒子	明赤褐	○	○	
529	263	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、白色粒子	橙	—	—	
530	263	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
531	263	〃	Ⅳ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	—	赤褐	—	○	
532	263	33号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文RL	白色粒子	橙	—	—	
533	263	34号住居跡	Ⅳ	Ⅱ7g	深鉢形土器	—	25	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
534	264	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文、半隆起線文	縄文RL	砂粒、褐色粒子	にぶい黄橙	○	○	
535	264	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	連華文、半隆起線文	—	—	褐灰	—	—	
536	264	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刻目	縄文RL、L	—	にぶい黄橙	—	○	
537	264	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	赤褐	—	—	
538	264	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒、雲母	にぶい赤褐	—	○	
539	264	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒、雲母	にぶい赤褐	—	○	
540	264	〃	Ⅳ	Ⅱ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
541	264	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
542	265	36号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	31	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯	縄文LR	小礫	浅黄	—	—	炉床敷設・床直
543	265	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい赤褐	—	○	
544	265	〃	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい赤褐	—	—	
545	265	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突、懸垂文	縄文L	砂粒	にぶい橙	○	—	
546	265	〃	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
547	265	〃	Ⅵ	Ⅱ5a7	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	同心円文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
548	265	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
549	265	〃	Ⅵ	Ⅱ5h	壺形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	橋位橋状把手	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	内面に黒色付着
550	265	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	灰黄褐	—	○	
551	265	〃	Ⅶ	Ⅲ1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	8字状突起	縄文LR	砂粒	明褐	—	—	
552	265	〃	Ⅶ	Ⅲ1a4	深鉢形土器	B2	—	—	—	—	—	口～胴部	刺突	—	砂粒	黄褐	○	○	
553	265	〃	Ⅷ	Ⅲ2a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文、刺突列	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
554	265	〃	Ⅷ	Ⅲ2a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
555	265	〃	Ⅷ	Ⅲ2a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
556	265	〃	Ⅷ	Ⅲ2a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
557	266	37号住居跡	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	集合沈線文	—	砂粒	灰黄	—	○	
558	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄	—	—	
559	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄	—	—	
560	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄	—	○	
561	266	〃	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	細沈線、連鎖状文	—	—	黒褐	—	—	
562	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	橙色粒子	にぶい黄褐	—	○	
563	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	—	にぶい黄	—	○	
564	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
565	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	砂粒	明黄褐	—	—	
566	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	—	にぶい黄橙	—	—	
567	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
568	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
569	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	浅黄	—	○	
570	266	38号住居跡	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
571	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒	淡黄	—	—	
572	266	〃	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	方形区画、把手	—	小礫	浅黄橙	—	—	
573	266	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	—	白	—	—	
574	266	39号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	28	—	—	—	—	口縁部	横ハ字文、鎖状隆帯	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄	—	—	
575	266	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	横ハ字文、刻目隆帯	縄文L	砂粒、小礫	浅黄	—	—	
576	267	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	横ハ字文、鎖状隆帯	縄文L	小礫	にぶい黄橙	○	○	

第 16 表　土器観察表（6）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
577	267	39号住居跡	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、刻目隆帯	撚糸L	白色・橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
578	267	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	14	—	—	—	—	口縁部	横ハ字文、刻目隆帯、懸垂文	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
579	267	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	—	浅黄橙	—	—	
580	267	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、沈線区画、懸垂文	—	—	浅黄橙	—	○	
581	267	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文L	小礫	にぶい黄橙	—	—	
582	267	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文L	小礫	にぶい黄橙	—	—	
583	267	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、逆U字状文	縄文L	—	にぶい黄橙	—	—	
584	267	40号住居跡	不明	Ⅱ6	有孔鍔付土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	砂粒	明褐	—	—	赤彩
585	267	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	—	砂粒	浅黄橙色	○	—	
586	267	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	撚糸L	砂粒	浅黄橙色	○	—	
587	267	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	浅黄橙色	—	—	
588	267	〃	中期	Ⅱ7ⅰ	深鉢形土器	A	26.8	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙色	—	○	
589	267	〃	Ⅳ	Ⅱ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文	縄文LR	赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
590	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2a1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、の字状文、三角文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
591	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2a1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、渦巻文	—	砂粒、白色粒子	にぶい黄橙	—	○	
592	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2a1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒、白色粒子	にぶい黄橙	○	○	
593	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2a1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒、白色粒子	黄橙	—	○	
594	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2a1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、渦巻文	—	砂粒、白色粒子	にぶい黄橙	—	—	
595	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2a1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、白色粒子	にぶい黄橙	—	—	
596	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2a1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、十字状文	縄文R	—	浅黄	○	—	
597	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2b1	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、鎖状懸垂文	—	砂粒	浅黄	—	—	
598	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2b1	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、内面文	—	砂粒	橙	○	—	
599	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2b3	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	—	
600	268	41号住居跡	Ⅷ	Ⅲ2b1	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
601	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2b1	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	—	
602	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2b3	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、内面文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
603	268	〃	Ⅷ	Ⅲ3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	褐灰	—	—	
604	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
605	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、渦巻文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
606	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
607	268	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、渦巻文	縄文RL	砂粒	黒褐	○	○	
608	269	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい褐	○	○	
609	269	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
610	269	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
611	269	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
612	269	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
613	269	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
614	269	〃	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒	橙	—	—	
615	269	〃	Ⅷ	Ⅲ2	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
616	269	〃	Ⅶ	Ⅲ1a5	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、貼付文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
617	269	〃	Ⅶ	Ⅲ1a5	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	縄文RL	砂粒、赤色粒子	褐	—	○	
618	269	〃	Ⅶ	Ⅲ1a4	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒、白色粒子	にぶい黄橙	—	○	
619	269	〃	Ⅶ	Ⅲ1a6	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
620	269	42号住居跡	Ⅲ	Ⅱ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	コブ状突起、平行沈線	縄文RL	褐色粒子	にぶい黄橙	—	○	
621	269	〃	Ⅲ	Ⅱ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
622	269	〃	Ⅲ	Ⅱ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、格子目文	撚糸L	褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
623	269	〃	Ⅲ	Ⅱ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	縄文RL	—	浅黄橙	—	○	
624	269	〃	Ⅳ	Ⅱ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、交互刺突文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
625	270	43号住居跡	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
626	270	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
627	270	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
628	270	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	明褐	—	○	
629	270	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	砂粒	明褐	—	○	
630	270	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒	橙色	—	○	
631	270	46号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	縄文LR	砂粒	にぶい褐	—	○	
632	270	〃	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	縄文LR	砂粒	にぶい褐	—	○	
633	270	48号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	明黄褐	—	—	
634	270	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯、渦巻文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
635	270	〃	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	有節沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
636	270	〃	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	波状文	撚糸R	砂粒	赤褐	—	○	
637	270	49号住居跡	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
638	270	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
639	270	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
640	271	3号炉跡	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口～胴部	突起、三角文、菱形文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
641	271	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
642	271	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	浅鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	8字状突起、貫通孔	—	—	赤褐	—	—	
643	271	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
644	271	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	35.5	8.5	41.8	41.8	24770	口～底部	鋸歯状口縁、懸垂文、斜行文	縄文LR	砂粒	浅黄	—	○	
645	272	4号炉跡	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
646	272	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ2g	深鉢形土器	D	15	—	—	—	950	口～胴部	楕円区画文、充填沈線文	—	白色粒子	にぶい黄橙	○	○	
647	272	〃	Ⅲ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、綾杉状沈線	—	砂粒	赤褐	○	—	
648	272	〃	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
649	272	〃	中期	Ⅱ7ⅰ	深鉢形土器	A	25.6	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
650	273	10号炉跡	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、鎖状隆帯	—	小礫	黄橙	○	○	
651	273	〃	Ⅶ	—	鉢形土器	—	—	7.5	7.2	—	—	口～底部	刺突列	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
652	273	〃	Ⅶ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	28	16.5	46	46	18100	口～底部	圧痕隆帯、コブ状突起	縄文L	小礫	浅黄橙	—	—	
653	273	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	E	16.2	—	—	—	1880	口～胴部	磨消縄文	縄文LR	小礫	橙	○	○	
654	274	〃	Ⅶ	Ⅱ7	深鉢形土器	B	16.4	14	27.6	27.6	—	口～底部	—	撚糸L	砂粒、小礫	橙	○	—	
655	274	〃	Ⅶ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	条線文	縄文L	砂粒	灰黄褐	—	○	
656	274	10号焼土跡	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口～胴部	巴状突起、沈線	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
657	274	—	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、8字状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
658	275	12号焼土跡	Ⅸ	Ⅲ3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	鋸歯状口縁、帯状縄文、沈線帯	縄文LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
659	275	〃	Ⅸ	Ⅲ3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
660	275	〃	Ⅸ	Ⅲ3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	—	にぶい黄橙	—	○	
661	275	竪穴状遺構	Ⅸ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	結紐状文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
662	275	〃	Ⅸ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	細沈線帯	—	—	黒褐	—	—	
663	275	〃	Ⅷ	Ⅲ2b1	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、同心円文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
664	275	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、三角文	縄文LR	砂粒	黄橙	—	○	
665	276	1号長方形柱穴列	Ⅳ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	橙	—	—	赤彩
666	276	〃	Ⅲ-Ⅳ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	環状突起	—	白色粒子	橙	—	—	
667	276	〃	Ⅶ-Ⅷ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい褐	—	—	
668	276	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
669	276	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	剣先文、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
670	276	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
671	276	〃	Ⅴ	Ⅱ7ⅰ	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	黄橙	—	—	
672	276	〃	後期	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	

第 17 表　土器観察表（7）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
673	276	1号長方形柱穴列	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	—	橙	—	—	
674	276	〃	Ⅶ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文L	小礫	にぶい黄橙	—	—	
675	276	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
676	276	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
677	276	〃	Ⅷ	Ⅲ2b1	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、貫通孔	—	砂粒、白色粒子	にぶい黄褐	—	○	
678	276	〃	Ⅴ	Ⅱ7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
679	276	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	—	にぶい黄褐	○	—	
680	276	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文、有節沈線	—	砂粒	赤褐	—	—	
681	277	配石域	Ⅶ	Ⅲ1a6	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刻目隆帯、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	○	
682	277	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	小礫	にぶい橙	—	○	
683	277	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
684	277	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突、刻目隆帯	—	砂粒	黄橙	—	—	
685	277	〃	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	U字状文	—	—	浅黄橙	○	○	
686	277	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、列点文	—	砂粒	橙	—	—	
687	277	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、列点文	—	砂粒	橙	—	—	
688	277	〃	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	磨消縄文、圧痕隆帯、懸垂文	縄文R	小礫	灰白	—	—	
689	277	〃	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	沈線、刺突	—	—	浅黄	—	—	
690	277	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突、刻目隆帯	—	—	にぶい黄橙	—	—	
691	277	〃	Ⅶ	Ⅲ1a5	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
692	277	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	小礫	橙	—	○	
693	277	〃	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、白色粒子	褐灰	○	○	
694	277	〃	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	沈線、刺突	—	砂粒	明褐	—	—	
695	277	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、爪形文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
696	277	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、爪形文	縄文RL	砂粒	にぶい褐	—	○	
697	277	〃	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
698	277	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
699	277	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	不明	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
700	278	配石域	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、列点文	—	砂粒、小礫	明黄褐	○	○	
701	278	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	胴部	沈線、列点文	—	砂粒	にぶい褐	○	○	
702	278	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
703	278	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
704	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
705	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	—	にぶい黄橙	—	○	
706	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	黄橙	—	—	
707	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	S字状貼付文	—	砂粒	橙	—	○	
708	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
709	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、渦巻文	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
710	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	淡黄	—	○	
711	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
712	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	明褐	—	—	
713	278	〃	Ⅶ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
714	278	〃	Ⅶ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、短沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
715	278	〃	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	褐灰	—	—	底部に網代痕
716	278	〃	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列、内面文	縄文LR	—	橙色	—	—	浅鉢形土器の可能性
717	278	〃	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	—	橙色	—	○	
718	278	〃	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	細沈線帯	—	砂粒	橙色	—	○	
719	278	〃	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
720	279	1H-2号配石	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、鎖状隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
721	279	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
722	279	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	三角形刺突	—	橙色粒子	浅黄橙	○	—	
723	279	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
724	279	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
725	279	〃	Ⅷ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
726	279	1H-4号配石	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
727	279	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、刺突列	—	砂粒	明黄褐	○	○	
728	279	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、刺突列	—	砂粒	明黄褐	—	○	
729	279	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
730	279	〃	Ⅶ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	8.4	5	8.7	8.7	243	口～底部	—	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
731	279	〃	後期	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
732	279	〃	Ⅷ	Ⅲ5	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	内面黒色
733	279	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	胴部	三角形刺突	—	小礫	橙	—	—	
734	280	1H-5号配石	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状口縁、内面文	—	—	褐灰	—	—	内面黒色
735	280	〃	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	—	灰黄褐	—	—	
736	280	〃	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	—	灰黄褐	—	—	
737	280	〃	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	33	8	19.5	19.5	7380	口～底部	鋸歯状口縁、内面文	—	—	黒褐	—	—	褒被葬
738	280	1H-6号配石	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
739	280	〃	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
740	280	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	—	浅黄	—	—	
741	280	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
742	280	1H-7号配石	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起	把手、C字状文	—	砂粒	橙	—	○
743	280	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
744	281	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
745	281	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
746	281	〃	中期	Ⅱ7e	深鉢形土器	A	23.4	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	○	
747	281	1H-8号配石	Ⅴ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
748	281	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
749	281	〃	Ⅷ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
750	281	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	剣先文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
751	281	1H-9号配石	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	灰黄	—	—	
752	281	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	小礫	暗灰黄	—	○	
753	281	〃	Ⅶ	Ⅲ1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	圧痕隆帯	縄文LR	砂粒	灰黄	—	—	
754	281	〃	Ⅴ	Ⅱ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	灰黄褐	—	○	
755	281	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	D	12.3	—	—	—	—	口縁部	剣先文、ベン先状刺突	—	砂粒	黄橙	○	—	
756	281	〃	Ⅴ	Ⅱ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
757	281	〃	Ⅴ	Ⅱ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、弧線文	—	砂粒	黄橙	—	—	
758	282	1H-10号配石	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	黄橙	—	—	
759	282	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	○	
760	282	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文L	小礫	にぶい黄橙	○	—	
761	282	1H-11号配石	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
762	282	1H-13号配石	Ⅴ	Ⅱ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
763	282	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
764	282	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒	黄灰	—	—	
765	282	1H-15号配石	Ⅸ	Ⅲ6	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	—	
766	282	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
767	282	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文LR	小礫	にぶい黄褐	○	—	
768	282	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	小礫	浅黄橙	—	—	

第 18 表　土器観察表（8）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
769	282	1H-16号配石	Ⅸ	Ⅲ3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	細沈線帯	—	—	黒褐	—	○	
770	282	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
771	282	1H-17号配石	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	黄橙	—	—	
772	282	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、懸垂文	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
773	282	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
774	282	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	○	
775	283	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	15	—	—	—	—	口～胴部	磨消縄文	縄文複節	小礫	浅黄	—	—	
776	283	〃	Ⅳ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁	半隆起線文	縄文RL	砂粒	褐	—	○	
777	283	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯	—	砂粒	浅黄	○	—	
778	283	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯	縄文L	小礫	灰白	—	—	
779	283	1H-18号配石	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
780	283	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	小礫	橙	—	—	
781	283	2H-2号配石	Ⅶ	Ⅲ1a4	深鉢形土器	B	39.6	—	—	—	38940	口～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒	橙	○	○	甕被葬
782	283	〃	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
783	284	2H-3号配石	Ⅷ-Ⅸ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	45	—	—	—	—	口縁部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄	○	○	甕被葬
784	284	〃	Ⅷ	Ⅲ5	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面文、沈線帯	—	砂粒	にぶい褐	—	—	
785	284	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸部	刻目隆帯、刺突	—	—	橙	—	○	
786	284	2H-4号配石	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
787	284	〃	Ⅷ	Ⅲ5	浅鉢形土器	B	26.2	9.8	13.8	10.2	1680	口～底部	8字状突起、貫通孔、内面文	—	砂粒	赤褐	—	○	甕被葬
788	284	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	灰黄	—	—	
789	284	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	○	
790	284	2H-5号配石	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	褐	—	○	
791	284	2H-8号配石	Ⅷ	Ⅲ3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	—	橙	—	—	底部に網代痕
792	284	2H-9号配石	Ⅷ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯	—	砂粒	褐	—	○	
793	285	I3-P3	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A		—	—	—	—	口～胴部	隆帯、渦巻文、懸垂文		砂粒、小礫	にぶい黄褐	—	—	
794	285	I4-P90	後期	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	17.4	—	—	—	胴～底部	条線文	—	小礫	橙	—	—	
795	285	I4-P89	後期	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	16.4	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
796	285	K1-P14	Ⅵ	Ⅱ5g	深鉢形土器	—	16	9.3	19	19	3780	口～底部	隆帯、把手	縄文LR	小礫	黄灰	○	○	
797	285	K1-P8	Ⅵ	Ⅱ7	両耳壺	—	—	13.2	—	—	—	底部	—	縄文R	小礫	にぶい黄橙	○	—	
798	286	J2-P4	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	12.5	6	22	21	5010	口～底部	区画文、短沈線、同心円文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
799	286	K3-P3	Ⅵ	Ⅱ5b	筆形注口土器	—	—	7	—	—	—	胴～底部	橋状把手、微隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	内外面赤彩
800	287	K3-P2	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	30	—	—	—	14300	口～胴部	圧痕隆帯	縄文L	小礫	淡黄	○	○	
801	287	3号埋設土器	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	褐	○	○	
802	287	5号埋設土器	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	15.6	—	—	—	底部	—	縄文LR	小礫	橙	○	—	
803	287	5号埋設土器	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、円形刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
804	287	6号埋設土器	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	19.6	—	—	—	底部	—	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	—	
805	287	7号埋設土器	Ⅵ	—	深鉢形土器	A	30	—	—	—	—	口縁部	—	縄文L	小礫	灰黄褐	—	○	
806	287	8号埋設土器	Ⅵ	Ⅱ5h	筆形注口土器	—	—	—	—	—	—	底部	微隆起線文	—	砂粒	黄橙	—	—	赤彩
807	287	10号埋設土器	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	10	—	—	—	胴～底部	—	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	—	
808	288	00-P1	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	34	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯	縄文L	小礫	浅黄橙	—	—	
809	288	E2-P36	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、懸垂文、沈線	縄文L	砂粒、小礫	灰白	—	○	
810	288	H4-P201	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、渦巻文、沈線＋刺突	縄文LR	小礫	にぶい黄	—	—	
811	288	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	32	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯	撚糸R	砂粒、小礫	にぶい黄	—	—	
812	288	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	22.6	—	—	—	7330	口～胴部	刺突列	撚糸R	砂粒、小礫	灰白	—	—	
813	289	H4-P75	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、J字状文	縄文LR	砂粒	浅黄	—	—	
814	289	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	小礫	浅黄橙	—	—	
815	289	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	撚糸L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
816	289	G2-P52	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	小礫	にぶい黄褐	—	—	
817	289	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
818	289	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文L	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
819	289	J4-P23	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、条線文	—	小礫	橙	—	—	
820	289	J4-P24	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	D	22	—	—	—	—	口～胴部	眼鏡状突起、条線文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
821	289	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻文、条線文	—	砂粒	浅黄	—	—	
822	290	K2-P43	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄	—	—	
823	290	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文LR	小礫	橙	○	○	
824	290	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	27	—	—	—	—	口縁部	—	—	小礫	にぶい黄褐	—	○	
825	290	K3-P12	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	D	18.6	7.2	24.8	22.4	2170	口～底部	双頭渦巻文、半隆起線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
826	290	〃	Ⅴ	Ⅱ7i	深鉢形土器	A	17.2	6.8	24	24	2826	口～底部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
827	290	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	横位の半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
828	290	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	横位の半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
829	290	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位の半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
830	290	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
831	290	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄褐	—	○	
832	290	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
833	291	K4-P8	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、沈線＋刺突、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
834	291	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
835	291	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
836	291	〃	Ⅵ	Ⅱ5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	—	砂粒	黒褐	—	—	
837	291	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	小礫	橙	—	—	
838	291	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	小礫	明黄褐	—	—	
839	291	〃	Ⅵ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	18	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	小礫	灰黄褐	○	○	
840	291	1H-P1	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
841	291	〃	Ⅴ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	
842	291	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
843	291	1H-P3	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、沈線	—	砂粒	黄褐	—	—	
844	291	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、沈線	—	砂粒	黄褐	—	—	
845	291	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	—	砂粒	明黄褐	—	—	
846	291	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
847	291	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
848	291	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴B	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
849	291	〃	Ⅶ	Ⅲ1a1	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、懸垂文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
850	292	B2-P2	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線区画	不明	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	内面赤彩
851	292	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
852	292	B3-P1	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	不明	—	にぶい褐	○	—	
853	292	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	J	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、懸垂文	縄文LR	—	橙	○	○	
854	292	C2-P1	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	灰黄	—	—	
855	292	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	曲流条線文	—	小礫	浅黄橙	—	—	
856	292	C2-P2	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
857	292	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	—	砂粒	明黄褐	—	—	
858	292	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
859	292	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
860	292	〃	Ⅴ	Ⅱ7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	淡黄	—	—	
861	292	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
862	292	C2-P17	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	微隆起線文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
863	293	C2-P21+C2-P23	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
864	293	C3-P3	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	黄橙	○	—	

第 19 表　土器観察表（9）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
865	293	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	灰黄褐	—	○	
866	293	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	山形突起	—	砂粒、雲母	黄褐	—	○	
867	293	D2-P1	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯、楕円区画	—	砂粒	橙	○	—	
868	293	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、爪形文、刺突	—	砂粒	赤褐	○	○	
869	293	〃	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
870	293	〃	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	未調整隆帯	縄文RL	—	にぶい黄橙	—	—	
871	293	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ2e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	三角形区画、刺突、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
872	293	〃	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文	—	白色粒子	にぶい黄橙	○	—	
873	293	D2-P6	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線帯	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
874	293	〃	不明	—	不明	—	—	—	—	—	—	胴部	同心円文	—	—	浅黄橙	—	—	
875	294	D2-P8	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	—	橙	—	—	
876	294	D2-P12	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、逆U字状懸垂文	—	小礫	にぶい褐	—	—	
877	294	D2-P20	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	黒褐	—	—	
878	294	D2-P33	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
879	294	D3-P2	中期	Ⅱ7e	深鉢形土器	A	23.6	10.4	34.8	34.8	7550	口～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
880	294	C4+D4+D4-P4	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	D	32	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
881	294	D4-P4	Ⅲ	Ⅱ2b1	深鉢形土器	D	15	—	—	—	—	口～胴部	山形突起、J字状文、懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
882	294	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、剣先文、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
883	295	E2-P1	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	11.6	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL、L	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
884	295	E2-P3	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	鎖状隆帯、懸垂文、横ハ字文	—	小礫	赤褐	—	○	
885	295	E2-P5	Ⅵ	Ⅱ5h	筒形注口土器	—	—	4.5	—	—	—	胴～底部	微隆起線文、横位把手	—	白色粒子	にぶい黄橙	—	○	
886	295	〃	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、コブ状突起	—	砂粒、小礫	黄橙	—	—	
887	295	〃	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、刺突	—	砂粒	淡黄	○	○	
888	295	E2-P6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、列点文	—	砂粒	淡黄	—	—	
889	295	E2-P11	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	小礫	橙	—	—	
890	295	〃	Ⅶ	—	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文L	小礫	淡黄	—	○	
891	295	E2-P15	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
892	295	E2-P20	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	黄褐	—	○	
893	296	E2-P23	Ⅶ	Ⅲ1a1	深鉢形土器	E	11.4	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、懸垂文	縄文LR	砂粒	明黄褐	○	○	
894	296	E2-P30	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突、胴部懸垂文	縄文RL	小礫	淡黄	○	○	
895	296	E2-P35	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、懸垂文	—	砂粒	淡黄	○	○	
896	296	E2-P38	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	圧痕隆帯、刺突	—	—	黄橙	—	—	
897	296	〃	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	—	橙	—	—	
898	296	E2-P39+E2-P68	Ⅶ	Ⅲ1c	深鉢形土器	B	27	—	—	—	—	口～胴部	蛇行沈線文、口唇部圧痕	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
899	296	E2-P42	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯	—	—	にぶい黄褐	—	○	
900	296	E2-P45	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
901	296	E2-P53	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	橙	○	○	
902	296	E2-P55	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	—	—	—	○	
903	296	E2-P60	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
904	296	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
905	297	E2-P70	Ⅴ	Ⅱ4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、弧線文	—	砂粒	橙	○	—	
906	297	〃	Ⅴ	Ⅱ4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
907	297	E2-P82	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文L	小礫	にぶい黄	—	—	
908	297	E2-P3	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
909	297	E3-P1	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	13.5	—	—	—	底部	—	撚糸L	小礫	浅黄橙	—	—	
910	297	E3-P2	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文LR	小礫	明黄褐	—	—	
911	297	E3-P4	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文	縄文RL	橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
912	297	〃	Ⅴ	Ⅱ4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい褐	○	○	
913	297	〃	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
914	297	E3-P6	Ⅲ	Ⅱ2	深鉢形土器	—	19.5	—	—	—	—	口縁部	巴状突起、波状文	縄文RL	—	にぶい黄橙	—	○	
915	297	E3-P7	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文L	砂粒	浅黄橙	—	—	
916	297	E3-P11	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	小礫	橙	○	○	
917	298	E3-P13	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刻目隆帯、刺突	—	小礫	浅黄橙	—	—	
918	298	〃	Ⅵ	Ⅱ5a7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、懸垂文、弧線文	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
919	298	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
920	298	E3-P14	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒、小礫	淡黄	○	—	
921	298	E3-P24	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文LR	砂粒	暗黄褐	—	○	
922	298	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
923	298	〃	Ⅶ	Ⅲ1a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	—	—	橙	—	—	
924	298	E3-P34	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	黄橙	—	—	
925	298	E3-P32+P33+P34	Ⅲ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	巴状突起、刺突列、懸垂文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
926	298	E3-P42	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	27	—	—	—	21570	口～胴部	鎖状隆帯、横ハ字文	撚糸L	橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
927	298	〃	Ⅶ	Ⅲ1a1	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、磨消縄文、刺突列	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	
928	299	〃	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文LR	—	橙	○	—	
929	299	〃	Ⅱ	Ⅱ1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒、雲母	赤褐	—	—	
930	299	E3-P43	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、懸垂文	縄文R	砂粒	明黄褐	○	○	
931	299	E3-P54	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
932	299	〃	Ⅲ	Ⅱ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
933	299	E3-P59	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	白色粒子	にぶい黄橙	—	—	
934	299	E4-P2	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、突起	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
935	299	E4-P3	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文L	小礫	にぶい黄橙	—	○	
936	299	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、逆U字状文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
937	299	E4-P4	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突	—	小礫	にぶい黄褐	—	—	
938	299	E4-P4+16	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	Y字状懸垂文、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	
939	299	E4-P7	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	灰白	○	○	
940	299	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
941	299	E4-P15	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
942	299	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
943	299	〃	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、環状突起	—	白色粒子	明黄褐	—	—	
944	300	E4-P18	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	蛇行沈線文	縄文LR	—	橙	○	—	
945	300	E4-P21	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文LR	砂粒、小礫	橙	—	—	
946	300	E4-P29	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、横ハ字文	—	小礫	にぶい褐	○	○	
947	300	〃	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文、沈線	—	—	赤褐色粒子	浅黄	—	—
948	300	E4-P30	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	D	11.9	7.2	15.5	13.8	538	口～底部	環状突起	縄文RL	砂粒	浅黄	—	—	
949	300	E5-P1	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頸部	中空突起、平行沈線	縄文RL	砂粒、雲母	橙	—	○	
950	300	〃	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文RL	砂粒、雲母	橙	—	—	
951	300	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	—	橙	—	—	
952	301	F2-P1	Ⅶ	Ⅲ1a2	深鉢形土器	A	16.5	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、瘤状貼付文	—	砂粒	橙色粒子	にぶい黄褐	○	○
953	301	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、刺突	—	小礫	にぶい黄褐	—	○	
954	301	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	15	—	—	—	底部	—	—	小礫	にぶい黄褐	○	—	
955	301	F2	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	縄文RL	砂粒	橙色粒子	にぶい黄橙	—	○
956	301	F2-P72	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	沈線帯、8字状貼付文	不明	—	橙	○	○	
957	301	F2-P78	Ⅶ	Ⅱ5h	注口土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	注口部	—	砂粒	褐色粒子	にぶい黄橙	—	—
958	301	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、鎖状隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
959	301	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	三角形刺突	—	小礫	淡黄	○	○	
960	301	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	三角形刺突	—	砂粒	淡黄	○	○	

外面赤彩

第 20 表　土器観察表（10）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
961	301	F2-P78	Ⅶ	Ⅱ5h	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、管状刺突	—	褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
962	301	〃	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画	不明	砂粒	橙	—	—	
963	301	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、列点文	—	砂粒	浅黄	—	—	
964	301	F2-P81	Ⅶ	Ⅲ1a6	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、鎖状隆帯	—	砂粒	浅黄	—	—	
965	301	〃	Ⅶ	Ⅲ1a6	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、突起	—	砂粒	褐	○	—	
966	302	F2-P84+F2-P88	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	A	13.2	5.2	23.6	20.8	1570	口～胴部	沈線＋刺突、渦巻文、懸垂文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
967	302	F2-P84	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、隆帯	—	小礫	浅黄橙	○	○	
968	302	F2-P88	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文RL	小礫	にぶい黄橙	○	○	
969	302	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、沈線	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
970	302	F2	Ⅶ	Ⅱ5h	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
971	302	F2-P102	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
972	302	F2-P104	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
973	302	F3-P1	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
974	302	F3	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	○	
975	302	F3-P90	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、集合沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
976	302	F3-P91	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起	—	礫	浅黄橙	—	—	
977	302	F3-P91+F3-P97	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	橙	○	○	
978	303	F3-P94	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5h	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口部	微隆起線文、注口部	—	砂粒	黄橙	—	—	外面赤彩
979	303	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	把手、沈線、刺突列	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
980	303	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
981	303	F3-P98	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
982	303	F3-P98	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、渦巻文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
983	303	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
984	303	F4-P1+F4-P2	後期	—	不明	—	—	5.6	—	—	—	底部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
985	303	F4-P1	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	13.8	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突、刻目隆帯	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
986	303	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	撚糸L	褐色粒子	にぶい黄橙	—	○	
987	303	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	撚糸L	褐色粒子	にぶい黄橙	—	○	
988	303	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	15	—	—	—	胴～底部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
989	304	F4-P2	Ⅴ	Ⅱ4a3	深鉢形土器	I	29.4	—	—	—	—	口～胴部	渦巻文、矢羽状沈線文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
990	304	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒	黄橙	—	—	
991	304	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	13.6	—	—	—	底部	—	縄文RL	砂粒	黄橙	—	—	
992	304	F4-P3	Ⅳ	Ⅱ9g	深鉢形土器	F	24	8	9.6	9.6	2700	口～底部	平行沈線、波状文	撚糸R	砂粒	赤褐	—	—	
993	304	F4-P11	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	小礫	にぶい黄褐	—	○	
994	304	F4-P18	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、懸垂文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	—	
995	304	〃	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
996	304	F4-P19	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	にぶい黄褐	—	—	
997	304	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	—	橙	—	—	
998	304	F4-P20	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
999	305	〃	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状口縁、沈線帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1000	305	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刻目隆帯、刺突	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
1001	305	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	縄文LR	—	にぶい黄褐	—	—	
1002	305	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突	—	砂粒	灰白	○	—	
1003	305	〃	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	刻目隆帯	—	砂粒	灰黄	—	—	
1004	305	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1005	305	F4-P21	中期	Ⅱ7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1006	305	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	—	橙	—	—	
1007	305	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	橙色粒子	にぶい黄褐	—	○	
1008	305	F4-P24	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1009	305	F4-P26	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1010	305	F4-P28	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	小礫	黄灰	—	—	
1011	305	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、沈線区画	—	砂粒	にぶい褐	—	○	
1012	305	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文LR	砂粒	にぶい褐	—	—	
1013	305	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	撚糸L	砂粒	褐	—	○	
1014	305	F4-P29	Ⅵ	Ⅱ5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	砂粒	にぶい黄橙	—	○	外面赤彩
1015	305	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
1016	305	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1017	306	F4-P30	Ⅵ	Ⅱ5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい褐	—	○	
1018	306	〃	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1019	306	F4-P35	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文RL	小礫	浅黄橙	—	○	
1020	306	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1021	306	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、懸垂文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	○	○	
1022	306	〃	Ⅴ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	橙	—	—	
1023	306	F4-P40	Ⅵ	Ⅱ5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	縄文LR	砂粒	灰白	○	—	
1024	306	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、コブ状突起	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
1025	306	F4-P51	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1026	306	F4-P60	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、鎖状隆帯	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
1027	306	F4-P62	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	横ハ字文、刻目隆帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1028	306	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	横ハ字文、刻目隆帯	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
1029	306	F4-P64	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1030	306	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文L	砂粒、白色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1031	306	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	8字状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1032	306	〃	中期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1033	306	〃	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	—	赤褐	○	○	
1034	306	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1035	306	F4-P67	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	橙	—	—	
1036	307	F4-P68	Ⅴ	Ⅱ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	剝先文、沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1037	307	〃	Ⅴ	Ⅱ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	平行沈線	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄褐	—	—	
1038	307	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1039	307	F5-P6	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突	—	砂粒	明黄褐	—	○	
1040	307	〃	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1041	307	F6-P39	Ⅲ	Ⅱ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画文	縄文RL	砂粒	橙色粒子	にぶい褐	—	○	
1042	307	G2-P5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	8字状貼付文、隆帯	—	砂粒	褐灰	○	○	
1043	307	G2-P23	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1044	307	〃	Ⅶ	Ⅲ1a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	—	橙	—	—	
1045	307	〃	Ⅶ	Ⅲ1a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1046	307	G2-P24	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1047	307	G2-P7	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文RL	小礫	黄橙	○	○	
1048	307	G2-P13	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1049	307	〃	Ⅶ	Ⅲ1a5	深鉢形土器	B	16.2	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1050	307	〃	Ⅵ	Ⅱ5a6	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、弧線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1051	307	G2-P24	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	—	浅黄橙	—	—	
1052	307	G2-P27	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯文	撚糸L	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1053	307	G3-P80	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯文	縄文LR	小礫	浅黄橙	○	○	
1054	308	G3-P82	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、沈線区画	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
1055	308	〃	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1056	308	G3-P83	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	

第 21 表　土器観察表（11）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
1057	308	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、刺突	—	小礫	橙	○	○	
1058	308	G3	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1059	308	G3-P84	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい褐	—	○	
1060	308	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯文	縄文R	砂粒、小礫	橙	—	○	
1061	308	G3-P88	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄橙	○	○	
1062	308	G3	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	小礫	灰黄褐	—	○	
1063	308	G3-P103	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文L	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
1064	308	G4-P2	Ⅷ	Ⅲ2b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1065	308	G4-P20	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、渦巻文	—	小礫	にぶい黄褐	—	—	
1066	308	G4-P23	Ⅵ	Ⅱ5a3	深鉢形土器	A	20	—	—	—	—	口縁部	隆沈線文、渦巻文	—	砂粒	橙	○	—	
1067	308	G4-P35+H4	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、細沈線文	—	小礫	橙	—	○	
1068	308	G4-P104	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1069	308	G4-P106	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	沈線区画	縄文LR	砂粒、小礫	褐	○	—	
1070	308	G4-P119	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	把手	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1071	309	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	鉢形土器	D	13	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、磨消縄文	縄文RL	橙色粒子	浅黄橙	○	○	
1072	309	G4-P120	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1073	309	G4-P129	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯、渦巻文	—	砂粒	橙	○	—	
1074	309	G4-P133	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、渦巻文	—	—	橙	○	—	
1075	309	G4-P136	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、刻目隆帯	—	小礫	黄橙	○	○	
1076	309	G4-P138	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、斜行文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1077	309	G4-P139	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1078	309	G4-P141	Ⅷ	Ⅲ2a1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、渦巻文、懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1079	309	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒	赤褐	○	—	
1080	309	G4-P145	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1081	309	G4-P149	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1082	309	G4-P153	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1083	309	〃	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	9	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1084	309	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1085	309	G4-P158	不明	—	深鉢形土器	—	—	8.7	—	—	—	胴部	J字状懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1086	310	G4-P155+G4-P159	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5h	注口土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	注口部	—	橙色粒子	にぶい黄褐	○	○	
1087	310	G4-P155	Ⅶ	Ⅲ1a5	深鉢形土器	B2	31.6	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、貼付文	縄文LR	砂粒	浅黄	—	○	
1088	310	G4-P201	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	20	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1089	310	〃	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1090	310	G4-P155	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	14.6	—	—	—	底部	—	撚糸L	小礫	浅黄橙	—	—	
1091	310	G4-P120	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	撚糸R	砂粒	橙	○	—	
1092	310	〃	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
1093	310	G5-P1	Ⅴ	Ⅱ4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
1094	310	〃	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1095	310	G5-P5	Ⅲ	Ⅰ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	縄文L	—	にぶい黄橙	—	○	
1096	310	G5-P6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
1097	310	G5-P38	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	浅黄	○	—	
1098	311	G5-P39	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	N	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線＋刺突、把手	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1099	311	G6-P12	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	赤褐	○	○	
1100	311	G6-P15	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1101	311	G7-P2	Ⅴ	Ⅱ4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1102	311	H3-P5	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1103	311	H3-P16	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突	—	砂粒	橙	○	○	
1104	311	H3-P25	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、懸垂文、沈線＋刺突	縄文R	小礫	浅黄橙	—	○	
1105	311	H4-P8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1106	311	H4-P27	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1107	311	H4-P46A	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	29	—	—	—	19410	口～胴部	磨消縄文、三角文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	
1108	311	H4-P46+H4-P47	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	H	25	—	—	—	—	口～頸部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	赤褐	—	—	
1109	311	H4-P51	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	不明	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1110	311	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	コブ状突起、貫通孔	撚糸R	橙色粒子	にぶい褐	○	○	
1111	312	H4-P49	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線区画、横ハ字文、懸垂文	撚糸	砂粒	浅黄橙	○	○	
1112	312	H4-P53	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯文、渦巻文、胴部懸垂文	縄文RL	小礫	黄橙	○	○	
1113	312	H4-P62	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、沈線区画、懸垂文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	○	
1114	312	H4-P19	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	浅黄	—	—	
1115	312	H5-P4	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刻目、懸垂文	縄文LR	小礫	淡黄	○	○	
1116	312	H5-P16	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1117	312	H5-P18	Ⅳ	ⅡⅢc1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	鶏頭冠状把手、鋸歯状突起	—	砂粒	浅黄	○	○	
1118	312	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	12	—	—	—	底部	—	縄文LR	砂粒	赤褐	—	—	
1119	312	H5-P24	中期	Ⅱ9b	浅鉢形土器	—	—	13.6	—	—	—	胴～底部	—	撚糸	砂隆	にぶい黄橙	—	—	
1120	313	〃	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	H	24	—	—	—	4120	口～胴部	中空突起、波状文、沈線区画	撚糸R	砂粒、褐色粒子	浅黄橙	—	○	
1121	313	H5-P39	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文L	橙色粒子	淡黄	—	—	
1122	313	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、沈線区画	—	小礫	灰黄	—	○	
1123	313	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	貼付文	—	砂粒	黄橙	—	—	
1124	313	H5-P44	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文L	小礫	明黄褐	—	—	
1125	313	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	小礫	明黄褐	—	—	
1126	314	H5-P49	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
1127	314	H5-P57	Ⅲ	Ⅰ2K	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	縄文RL	橙色粒子	にぶい赤褐	—	○	
1128	314	H5-P66	Ⅴ	Ⅱ4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
1129	314	H5-P55	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文、沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1130	314	H5-P57+I6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	鋸歯状突起、半隆起線文	—	砂粒	灰白	—	—	
1131	314	H5-P61	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1132	314	H5-P70	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	I	18	8	22	22	2175	口～底部	剣先文、沈線区画、懸垂文	縄文LR	縄文RL	にぶい黄橙	○	○	
1133	314	H5-P102	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、横ハ字文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1134	314	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、隆帯文	縄文LR	小礫	浅黄橙	—	—	
1135	314	〃	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文L	砂粒	灰白	○	—	
1136	314	H5-P111	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文、沈線区画	縄文RL	砂粒	にぶい橙	—	○	
1137	314	H5-P115	Ⅲ	Ⅰ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、三角陰刻	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1138	314	H5-P117	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、斜行文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
1139	314	H5-P118	Ⅳ	Ⅱ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
1140	315	H5-P123	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文L	砂粒	橙	○	○	
1141	315	I3-P5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、白色粒子	灰黄褐	○	○	
1142	315	I3-P6	Ⅵ-Ⅶ	Ⅱ5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、弧線文	—	砂粒、白色粒子	灰黄褐	—	○	
1143	315	I3-P9+I3-P11	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文LR	砂粒、白色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1144	315	I3-P11	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1145	315	〃	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	方形区画、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
1146	315	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	黒褐	○	○	
1147	315	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	明黄褐	○	○	
1148	315	I3-P17	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯文	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1149	315	I3-P23	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	半隆起線文、三叉文	—	—	明赤褐	○	—	
1150	315	I4-P1	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	18.3	—	—	—	3670	口縁部	沈線＋刺突、胴部懸垂文	縄文L	小礫	にぶい黄橙	○	○	
1151	315	I4-P8	Ⅷ	Ⅲ2b1	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	縁帯文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1152	315	I4-P27	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	横ハ字文	—	砂粒	橙	○	○	
1153	315	I4-P28	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、懸垂文、横ハ字文	—	砂粒	にぶい褐	○	○	

第 22 表　土器観察表（12）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
1154	315	I4-P37	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線	縄文LR	砂粒	明黄褐	○	○	
1155	316	I4-P29	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	口縁部区画、J字状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1156	316	I4-P33	Ⅵ	Ⅱ5h	筒形注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	—	—	橙	—	ー	内外面赤彩
1157	316	I4-P37	Ⅵ	Ⅱ5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位連結渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1158	316	I4-P46	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	隆帯	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
1159	316	I4-P52	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1160	316	I4-P58	Ⅵ	Ⅱ5a7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、弧線文	縄文L	砂粒	淡黄	○	○	
1161	316	I4-P59	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯文、条線文	—	小礫	浅黄橙	—	ー	
1162	316	I4-P85	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突	—	砂粒	黄橙	—	—	
1163	316	I4-P88	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、内面文	—	—	橙	—	○	
1164	316	I4-P85	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文、小把手	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1165	316	I4-P106	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	砂粒	淡黄	—	—	
1166	316	I4-P109	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
1167	316	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
1168	317	I4-P115	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	褐白	—	—	
1169	317	I4-P201	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
1170	317	I5-P1	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1171	317	〃	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1172	317	I5-P7+J7	Ⅲ	Ⅱ9a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文、刺突列	縄文L	砂粒、小礫	橙	—	○	
1173	317	I5-P19	Ⅵ	Ⅱ5a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1174	317	I5-P20	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	—	小礫	灰黄褐	○	—	
1175	317	I5-P22	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1176	317	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	把手	鎖状隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1177	317	I5-P25	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	橙	○	○	
1178	317	I5-P30	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1179	317	I5-P101	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1180	317	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
1181	317	〃	Ⅵ	Ⅱ5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	外面赤彩
1182	317	I5-P102	Ⅵ-Ⅶ	—	鉢形土器形	—	—	—	—	—	—	胴部	J字状文	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
1183	317	I5-P105	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、細沈線	—	砂粒	灰白	—	—	
1184	317	I5-P110	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～底部	突起、刻目隆帯	—	砂粒	明黄褐	○	○	
1185	317	I5-P104	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
1186	318	I5-P118	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋ペン先状刺突	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1187	318	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1188	318	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1189	318	I6-P5	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状突起、隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
1190	318	I7-P1	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、列点文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1191	318	I7-P2	Ⅲ	Ⅱ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	白色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1192	318	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1193	318	I7-P6	Ⅲ	Ⅱ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	指頭圧痕文	—	砂粒	褐	—	—	
1194	318	I7-P8	Ⅴ	Ⅱ7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	—	浅黄	—	—	
1195	318	I7-P12	Ⅲ	Ⅱ2K	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	—	にぶい黄橙	—	—	
1196	318	〃	Ⅲ	Ⅱ2K	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1197	318	J2-P5	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒	灰黄	—	—	
1198	318	J2-P6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	小礫	にぶい黄褐	—	○	
1199	318	J3-P28	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	鎖状隆帯、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1200	318	J3-P28	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1201	318	J3-P31	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	細沈線帯、連鎖状文	—	赤色粒子	明赤褐	—	—	
1202	318	〃	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	細沈線帯	—	赤色粒子	黒褐	—	—	
1203	319	J3-P50	中期	Ⅱ7e	深鉢形土器	A	27.8	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1204	319	J3-P63	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	C	13	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1205	319	J4-P17	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	25.4	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	淡黄	○	—	
1206	319	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	花弁状刺突	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
1207	319	J4-P45	Ⅵ	Ⅱ5a4	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、懸垂文	縄文RL	小礫	にぶい黄褐	○	○	
1208	319	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文LR	砂粒、小礫	灰黄褐	—	○	
1209	319	J4-P68	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	小把手、磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
1210	319	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	縄文L	—	にぶい黄橙	—	○	
1211	319	J4-P68+J4-P70	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	A	—	—	—	—	—	—	鎖状隆帯、つまみ	—	砂粒	橙	—	—	
1212	319	J4-P68+J4-P69	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	A	—	—	—	—	—	—	刻目隆帯、つまみ	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
1213	320	J4-P70	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1214	320	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1215	320	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、内面文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
1216	320	J4-P68+J4-P70	後期	Ⅲ4	深鉢形土器	E	32	—	—	—	—	口～胴部	条線文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
1217	320	J4-P71+J5	Ⅷ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1218	320	J4-P71	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	花弁状刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1219	320	J4-P78	Ⅷ-Ⅸ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	小突起	—	—	にぶい黄橙	—	—	
1220	320	〃	Ⅷ	Ⅲ2b4	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、内面文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1221	320	〃	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1222	320	J4-P96	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	D	16.6	—	—	—	3940	口～胴部	把手、刻目隆帯、磨消縄文	縄文LR	小礫、褐色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1223	320	〃	Ⅶ	Ⅲ4	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1224	320	〃	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
1225	320	〃	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突列	—	砂粒	灰白	—	—	
1226	320	〃	Ⅷ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	沈線、刺突	—	白色粒子	橙	—	—	
1227	321	J5-P5	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
1228	321	〃	Ⅴ	Ⅱ7i	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1229	321	〃	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1230	321	J5-P9	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1231	321	J5-P22	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1232	321	J5-P33	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	鎖状隆帯、横ハ字文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	○	○	
1233	321	J5-P39	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、内面文	—	—	にぶい黄褐	—	○	
1234	321	J5-P40	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	赤褐	○	○	
1235	321	J5-P43	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1236	321	J6-P5	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒	黄橙	—	—	
1237	321	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、貫通孔	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1238	321	J6-P66	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手、有節沈線	—	砂粒	橙	—	○	
1239	321	J7-P1	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
1240	322	K1-P3	Ⅵ	Ⅱ5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、隆帯文、懸垂文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
1241	322	K1-P6	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	浅黄	—	—	
1242	322	K1-P11	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
1243	322	K1-P12	Ⅵ	Ⅱ5a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	黄橙	○	—	
1244	322	K1-P13	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1245	322	K2-P1	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1246	322	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	—	
1247	322	〃	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
1248	322	K2-P4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1249	322	K2-P7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1250	322	K2-P9	Ⅷ	Ⅲ2b1	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画	—	砂粒	明黄褐	—	—	

第 23 表　土器観察表（13）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
1251	322	K2-P11	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
1252	322	K2-P14	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	隆帯区画	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1253	322	K2-P18	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文LR	砂粒	黒褐	—	○	
1254	322	K2-P19	Ⅷ	Ⅲ2	鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	小礫	にぶい黄褐	—	○	
1255	322	K2-P22	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	小礫	にぶい黄褐	○	○	
1256	322	K2-P25	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1257	322	K2-P26	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1258	322	K2-P29	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
1259	322	K2-P45	Ⅷ	Ⅲ2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	
1260	323	K2-P28+K2-P30	Ⅳ	Ⅱ9g	浅鉢形土器	A	32	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	縄文RL	褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1261	323	K2-P31	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、褐色粒子	褐	○	○	
1262	323	K3-P1	Ⅷ	Ⅲ2a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	淡黄	—	—	
1263	323	K3-P4	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1264	323	K3-P4+K3-P6	Ⅴ-Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	竹管状工具による刺突	—	砂粒	灰黄褐	—	○	
1265	323	K3-P6	Ⅴ	Ⅱ4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線+刺突、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1266	323	〃	Ⅴ	Ⅱ7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列、条線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
1267	323	K3-P8	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1268	323	K3-P16	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	○	○	
1269	323	K3-P23	Ⅶ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1270	323	K3-P13	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、磨消縄文、三角文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1271	323	K4-P1	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
1272	323	K4-P4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、三角文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1273	323	K4-P5	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
1274	323	K4-P7	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
1275	323	K4-P13	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1276	324	〃	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1277	324	K4-P21	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒	橙	○	—	
1278	324	K4-P27	後期	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1279	324	K4-P32	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1280	324	K4-P56+K5-P33	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	6.3	—	—	—	—	胴～底部	刺突	—	砂粒	黄褐	○	○	
1281	324	K4-P33	Ⅶ	Ⅲ1a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、橋状把手、懸垂文	撚糸R	砂粒、小礫	淡黄	—	—	
1282	324	K4-P40	Ⅲ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	赤褐	○	—	
1283	324	K5-P4	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	不明	砂粒、小礫	褐	—	○	
1284	324	K5-P14	Ⅶ	Ⅲ2a4	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、S字状文、刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1285	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a4	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1286	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1287	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	—	砂粒	黒褐	○	○	
1288	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	—	浅黄	—	—	
1289	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1290	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a4	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1291	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1292	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1293	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突、橋状把手	—	砂粒	明褐	—	—	
1294	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1295	324	〃	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1296	325	〃	Ⅶ	Ⅲ2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい褐	○	—	
1297	325	〃	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	刺突	—	灰白色粒子	にぶい黄褐	○	—	
1298	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	明黄褐	○	—	
1299	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	—	砂粒	黄褐	—	—	
1300	325	K5-P14	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	把手、C字状文	—	—	にぶい黄橙	—	—	
1301	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1302	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、列点文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1303	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、列点文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1304	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	—	砂粒	橙	—	—	
1305	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	橋状把手、磨消縄文	縄文RL	砂粒	褐	—	—	
1306	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	隆帯文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
1307	325	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	円形貼付文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1308	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1309	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、C字状文	—	小礫	にぶい黄橙	○	—	
1310	325	〃	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、円形貼付文	—	—	淡黄	—	—	
1311	325	〃	Ⅲ	Ⅱ2h	不明	—	—	—	—	—	—	口縁部	貼付文、角押文	—	砂粒、雲母	赤褐	—	—	
1312	326	K5-P48	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	小礫	淡黄	○	—	
1313	326	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	台付	磨消懸垂文	縄文RL	赤色粒子	明黄褐	○	—	台付
1314	326	〃	Ⅲ	—	深鉢形土器	—	—	11	—	—	—	底部	懸垂文	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1315	326	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	11	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫	橙	—	○	
1316	326	〃	中期	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	縄文R	小礫	にぶい黄橙	○	—	
1317	327	溝状遺構	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	14.4	—	—	—	口縁部	橋状把手、刻目隆帯、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	—	
1318	327	〃	Ⅶ	Ⅲ1a3	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	三角形刺突	—	小礫	橙	—	—	
1319	327	〃	不明	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文LR	—	橙	—	—	
1320	327	〃	Ⅶ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1321	327	〃	Ⅶ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、条線文	—	砂粒	浅黄	○	—	
1322	327	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文、玉抱三叉文	—	砂粒、雲母	にぶい黄橙	—	—	
1323	327	倒木痕	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	頸～胴部	渦巻文、矢羽状沈線文	縄文RL	砂粒	灰白	○	○	
1324	327	〃	Ⅷ	Ⅲ2a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒、小礫	灰黄	○	—	
1325	327	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1326	327	〃	Ⅴ	Ⅱ4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	沈線区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1327	327	〃	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	指頭圧痕文、懸垂文	—	砂粒、雲母	赤褐	○	—	
1328	328	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	—	橙	—	—	
1329	328	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	刺突、橋状把手	縄文LR	白色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1330	328	〃	Ⅵ	Ⅱ5a10	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、コブ状突起	—	小礫	淡黄	—	—	
1331	328	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	—	にぶい黄橙	—	—	
1332	328	〃	Ⅵ	Ⅱ5d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1333	328	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1334	328	〃	Ⅴ	Ⅱ4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1335	328	〃	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	底部	—	縄文LR	砂粒、雲母	橙	—	—	
1336	328	〃	Ⅵ	Ⅱ5a8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	淡黄	—	—	
1337	328	〃	Ⅵ	—	深鉢形土器	—	—	17.5	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	—	橙	○	—	
1338	329	〃	Ⅴ	Ⅱ4e	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、刻目隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1339	329	〃	Ⅲ	—	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	沈線+刺突	—	—	赤褐	—	○	
1340	329	〃	Ⅳ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	40	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
1341	329	〃	Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	内面赤彩
1342	329	〃	Ⅳ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	23	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1343	329	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	頸～胴部	沈線区画、刺突列	縄文RL	砂粒	橙	○	○	1349と接合
1344	329	〃	Ⅶ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、微隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1345	329	〃	Ⅵ	Ⅱ5a9	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
1346	329	〃	Ⅵ	Ⅱ5a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、沈線	—	小礫	明黄褐	—	—	
1347	329	〃	Ⅵ	Ⅱ5c	鉢形土器	L	9.3	—	—	—	360	口～胴部	玉抱文	縄文LR	—	にぶい黄橙	○	○	
1348	329	〃	Ⅵ	Ⅱ5b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、コブ状突起	撚糸R	砂粒	灰黄褐	—	○	
1349	329	〃	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、刺突列	—	砂粒	橙	○	○	1343と接合

第 24 表　土器観察表（14）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
1350	330	J4	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、繊維	にぶい黄褐	—	—	
1351	330	F4	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	不明	砂粒、繊維	明褐色	—	—	
1352	330	C2, C3	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	不明	小礫、繊維	明褐色	—	—	
1353	330	I7	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	不明	—	赤褐	—	—	
1354	330	H6	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒、繊維	にぶい黄褐	—	—	
1355	330	I8	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	小礫、繊維	赤褐	—	—	
1356	330	A3	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒、繊維	にぶい黄褐	—	—	
1357	330	I7	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒、繊維	暗灰黄	—	—	
1358	330	J6	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	羽状縄文	RL,LR	砂粒、繊維	明褐	—	—	
1359	330	B4	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	小礫、繊維	赤褐	—	—	
1360	331	B4	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	白色粒子、繊維	赤褐	—	—	
1361	331	B02	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	不明	砂粒、繊維	にぶい黄褐	—	○	
1362	331	E6	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文LR	砂粒、繊維	橙	—	—	
1363	331	K6	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	羽状縄文	RL,LR	繊維	浅黄橙	—	—	
1364	331	J2	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	羽状縄文	RL,LR	繊維	明褐	—	—	
1365	331	F6	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	羽状縄文	RL,LR	繊維	明褐	—	—	
1366	331	J5	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	羽状縄文	RL,LR	白色粒子、繊維	にぶい黄褐	—	—	
1367	331	A3	I	I1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文LR	砂粒、繊維	にぶい黄褐	—	—	
1368	332	B02	I	I2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文、コンパス文	不明	砂粒、繊維	にぶい黄橙	—	—	
1369	332	B02	I	I2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文、コンパス文	—	砂粒、繊維	にぶい黄橙	—	—	
1370	332	B02	I	I2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	—	—	にぶい黄橙	—	—	
1371	332	I6	I	I2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	不明	砂粒、繊維	橙	—	—	補修孔
1372	332	C5	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	集合沈線文	—	砂粒、雲母	明褐	—	○	
1373	332	C5	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	集合沈線文	—	砂粒、雲母	明赤褐	—	—	
1374	332	F5	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒、雲母	明赤褐	—	—	
1375	332	E5	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	集合沈線文	—	砂粒、雲母	明赤褐	—	—	
1376	332	J7	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文、爪形文	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
1377	332	C4	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	集合沈線文	—	砂粒、雲母	明赤褐	—	—	
1378	332	B3	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突、交互刺突文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	褐	○	○	
1379	332	C5	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	集合沈線文	—	砂粒、雲母	明赤褐	—	—	
1380	332	D5	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	縄文RL	砂粒、雲母	明赤褐	—	—	
1381	332	D5	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	不明	砂粒、雲母	明赤褐	—	—	
1382	332	B4	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突、三角陰刻	縄文RL	砂粒	明褐	△	○	
1383	332	E5	II	II1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、管状刺突	—	砂粒、白色粒子	明褐	○	○	
1384	333	H7	III	II2a	深鉢形土器	E	17.7	—	—	—	1930	口～胴部	楕円区画、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒、小礫	橙色	○	○	
1385	333	E6	III	II2a	深鉢形土器	E	24	—	—	—	—	口～頚部	楕円区画、蛇行沈線文	縄文RL	砂粒、小礫	明赤褐	—	—	
1386	333	J7	III	II2a	深鉢形土器	E	14	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、環状突起	縄文RL	砂粒、小礫	赤褐	○	○	
1387	333	I7,J7	III	II2a	深鉢形土器	E	18.9	9	21.6	20	2611.6	口～底部	楕円区画、弧線文、環状突起	縄文LR	砂粒	明赤褐	○	○	底部に網代痕
1388	333	H6	III	II2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、環状突起	縄文LR	—	にぶい赤褐	○	—	
1389	333	I7	III	II2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、蛇行沈線文	—	砂粒	にぶい橙	○	—	
1390	333	D5	III	II2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、Y字状懸垂文	縄文RL	砂粒	明赤褐	○	—	
1391	333	J7	III	II2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、沈線	縄文LR	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1392	333	E5	III	II2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1393	334	I7	III	II2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、沈線＋刺突	—	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1394	334	F6	III	II2a	深鉢形土器	E	14.1	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、沈線＋刺突	—	砂粒	橙	○	○	
1395	334	F6	III	II2a	深鉢形土器	E	19	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、圧痕隆帯、弧線文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1396	334	I7	III	II2a	深鉢形土器	E	15.6	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、懸垂文、圧痕隆帯	縄文LR	小礫	明赤褐	○	—	
1397	334	J7	III	II2a	深鉢形土器	E	14.6	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒、小礫	赤褐	○	○	補修孔
1398	334	F6	III	II2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、蛇行沈線文	縄文RL	砂粒、雲母	明赤褐	—	○	
1399	334	J7	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、蛇行沈線文	縄文RL	砂粒、小礫	明褐	○	—	
1400	334	B4	III	II2a	深鉢形土器	—	13.8	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	明褐	○	○	
1401	334	K7	III	II2a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	橙色粒子	浅黄橙	○	○	
1402	334	I7	III	II2a	深鉢形土器	E	17.6	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、弧線文	—	砂粒	橙	○	○	
1403	334	H6	III	II2a	深鉢形土器	E	12.8	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯、懸垂文	縄文RL	—	赤褐	○	○	
1404	334	I7	III	II2a	深鉢形土器	E	20.7	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯、眼鏡状突起	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1405	335	G6	III	II2a	深鉢形土器	E	17.7	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	明褐	○	○	
1406	335	I6	III	II2a	深鉢形土器	F	19.8	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、楕円区画	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
1407	335	G6	III	II2a	深鉢形土器	R	16.5	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、楕円区画	縄文RL	砂粒	赤褐	○	—	
1408	335	D5	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒、小礫	明褐	○	○	
1409	335	G6	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頚～胴部	蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1410	336	I7	III	II2a	深鉢形土器	Q	31.3	14.5	40	35.5	16350	口～底部	楕円区画、Y字状懸垂文	縄文LR	砂粒、雲母	橙	—	○	
1411	337	J7	III	II2a	深鉢形土器	R	47.6	—	—	—	58200	口～胴部	楕円区画、Y字状懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1412	337	G7	III	II2a	深鉢形土器	Q	18	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、懸垂文	縄文RL	橙色粒子	浅黄橙	○	○	
1413	337	G6	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	Y字状懸垂文、蛇行沈線文	縄文RL	小礫	にぶい黄橙	○	—	
1414	337	F5	III	II2a	深鉢形土器	R	—	—	—	—	—	口縁部	Y字状懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
1415	338	H6	III	II2a	深鉢形土器	B	23.4	—	32	—	6335	口～底部	Y字状懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	橙	—	○	
1416	338	H6	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	Y字状懸垂文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1417	338	I7	III	II2a	深鉢形土器	F	18.9	—	—	—	2600	口～胴部	弧線文、Y字状懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1418	338	C5	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、Y字状懸垂文	—	砂粒	にぶい褐	○	○	
1419	338	F6	III	II2a	深鉢形土器	F	15.3	—	—	—	1690	口～胴部	楕円区画、Y字状懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	○	○	
1420	339	D6	III	II2a	深鉢形土器	F	32.4	13.6	37.2	34.6	12583.8	口～底部	蛇行沈線文、懸垂文	撚糸L	砂粒、雲母	橙	—	○	
1421	339	J7	III	II2a	深鉢形土器	F	15.2	—	—	—	970	口～胴部	沈線＋刺突、貼付文	縄文RL	砂粒、雲母	橙	○	—	
1422	339	I7	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頚部	蛇行線線文	縄文RL	砂粒、小礫	橙	—	○	
1423	339	J7	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線	縄文RL	砂粒	明褐	—	○	
1424	339	J7	III	II2a	深鉢形土器	F	26	—	—	—	—	口～胴部	弧線文、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	にぶい赤褐	—	○	
1425	340	D5	III	II2a	深鉢形土器	F	12.9	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1426	340	E5	III	II2a	深鉢形土器	E	24	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
1427	340	H7	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	圧痕隆帯、蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	明赤褐	—	○	
1428	340	H6	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
1429	340	G6	III	II2a	深鉢形土器	F	25.6	10.4	26.8	26	4300	口～底部	橋状把手	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1430	340	H7	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
1431	341	I6,I7,J6	III	II2a	深鉢形土器	Q	42	—	—	—	30400	口～胴部	懸垂文、蛇行沈線文	縄文RL	雲母	明褐	—	—	
1432	341	I6	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	弧線文、蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	明褐	—	—	
1433	341	J7	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	J字状文	縄文LR	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1434	341	I7	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	蛇行沈線文	縄文RL	雲母	明褐	—	—	
1435	341	C5	III	II2a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	白色粒子	橙	—	—	
1436	342	E5	III	II2b1	深鉢形土器	F	23.4	10	30.2	26.4	3540	口～底部	眼鏡状突起、平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1437	342	I6	III	II2b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1438	342	F5	III	II2b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1439	342	F6	III	II2b1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	—	砂粒	橙	—	—	
1440	342	E6	III	II2b1	深鉢形土器	F	25	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
1441	343	E6	III	II2b1	深鉢形土器	F	23.2	10	28.8	20.8	2685.9	口～底部	懸垂文、環状突起	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1442	343	E6	III	II2b1	深鉢形土器	C	14.7	6.9	19.8	17.4	1100	口～底部	環状突起、刻目隆帯、懸垂文	縄文RL	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	○	○	
1443	343	F6	III	II2b1	深鉢形土器	F	23	9.6	28.4	24.2	4108.7	口～底部	懸垂文	撚糸L	砂粒	橙	○	—	
1444	344	E5	III	II2b1	深鉢形土器	C	28.8	—	—	—	6890	口～胴部	懸垂文、有節沈線、圧痕隆帯	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
1445	344	F6	III	II2b1	深鉢形土器	C	19.2	7.6	23.2	19.6	1590	口～底部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒、赤褐色粒子	橙	○	○	

第 25 表　土器観察表（15）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
1446	345	F5	Ⅲ	Ⅱ2b1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、有節沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1447	345	E5	Ⅲ	Ⅱ2b1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、有節沈線	—	砂粒	赤褐	○	—	
1448	345	I6	Ⅲ	Ⅱ2b1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、有節沈線	—	橙色粒子	明褐	—	—	
1449	345	I6	Ⅲ	Ⅱ2b1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、有節沈線	—	—	明褐	—	○	
1450	345	H6	Ⅲ	Ⅱ2b1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒	明褐	—	—	
1451	345	H6	Ⅲ	Ⅱ2b1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、沈線＋刺突	—	砂粒	明褐	○	—	
1452	345	E5	Ⅲ	Ⅱ2b1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、蓮華文	—	砂粒	橙	—	—	
1453	345	F6	Ⅲ	Ⅱ2b1	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、蓮華文	—	砂粒	橙	—	—	
1454	346	F5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	35.2	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文、パネル状区画	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
1455	346	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	25	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、パネル状区画	縄文LR	小礫	明褐	—	—	
1456	346	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	28	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、パネル状区画	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
1457	347	E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	E	18.3	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、パネル状区画	縄文RL	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	未貫通の補修孔
1458	347	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	23.9	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、パネル状区画	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄褐	○	—	
1459	347	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、パネル状区画	縄文LR	砂粒、橙色粒子	にぶい褐	—	—	
1460	347	H7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	18.9	—	—	—	—	口縁部	環状突起、懸垂文	縄文RL	橙色粒子	明褐	○	○	
1461	347	H7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、懸垂文	縄文RL	白色粒子	明黄褐	—	—	
1462	347	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	28.8	—	—	—	—	口縁部	環状突起、楕円区画文	縄文RL	白色粒子	褐	○	—	
1463	348	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	C	24.4	—	—	—	4460	口～胴部	環状突起、懸垂文	不明	白色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1464	348	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1465	348	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	26	12	33.9	33.9	7006.3	口～底部	楕円区画、懸垂文	縄文RL	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1466	349	J7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	26	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、平行沈線	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	○	○	
1467	349	E6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	26	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、平行沈線	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
1468	349	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	24	—	—	—	—	口縁部	沈線	縄文RL	砂粒	明褐	—	○	
1469	349	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	12.6	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文LR	砂粒、褐色粒子	橙	○	○	
1470	349	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	25.4	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文RL	橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1471	349	E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	24	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	
1472	349	B01	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	14.4	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1473	350	H6,J7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	30.4	11.2	38.8	38.8	16617.6	口～底部	眼鏡状突起、懸垂文	縄文LR	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1474	350	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	24	10	31	27.6	4960	口～底部	巴状突起、懸垂文、沈線＋刺突	縄文LR	—	明赤褐	○	○	
1475	351	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	24.6	10.4	26.4	26.4	5090	口～底部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
1476	351	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	23.4	—	—	—	—	口～胴部	巴状突起、懸垂文	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	○	
1477	352	E6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	7.5	—	—	—	頸～胴部	眼鏡状突起、懸垂文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1478	352	D4	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	15.6	7.2	18.9	18.9	1200	口～底部	環状突起、懸垂文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1479	352	J7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	17.7	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
1480	352	I7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	18.5	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文	—	褐色粒子	灰白	○	—	
1481	352	F5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	18.6	7.5	16.5	16.5	1720	口～底部	沈線＋刺突、平行沈線	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
1482	353	J7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	26.8	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1483	353	E6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	32	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	赤褐	○	—	
1484	353	E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1485	353	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文LR	砂粒	赤褐	○	—	
1486	354	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	39.5	16.3	46.5	43.5	20540	口～底部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒	褐	—	—	
1487	354	E6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	突起、刻目隆帯	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
1488	354	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、有節沈線	縄文LR	砂粒	明褐	—	—	
1489	354	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1490	355	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	24.4	—	—	—	4930	口～胴部	環状突起、懸垂文、沈線＋刺突	縄文RL	砂粒	赤褐	○	○	
1491	355	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	16.8	8.1	20.9	20.9	1545.9	口～底部	環状突起、懸垂文、沈線＋刺突	縄文RL	白色粒子	橙	○	—	
1492	356	C5,E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	39	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒、雲母	明赤褐	—	○	
1493	356	I6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1494	356	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	17	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒、褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1495	357	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	21	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文	縄文L	砂粒	橙	—	○	
1496	357	F5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、懸垂文	—	砂粒、白色粒子	にぶい黄褐	—	—	
1497	357	E6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	18.6	—	—	—	—	口～胴部	眼鏡状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1498	357	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、懸垂文	—	砂粒	明褐	—	—	
1499	357	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1500	357	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	13.2	7.2	14.1	14.1	890	口～底部	有節沈線	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
1501	357	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	環状突起、懸垂文	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	
1502	358	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	17.3	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒、雲母	明赤褐	—	—	
1503	358	C5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒	赤褐	—	—	
1504	358	B4	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
1505	358	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	21.6	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、環状突起	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	○	○	
1506	358	I7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	L	35.6	—	—	—	—	口～胴部	コイル状突起、懸垂文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
1507	359	G5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	32.8	—	—	—	—	口～胴部	爪形文、懸垂文	不明	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1508	359	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	25	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯、爪形文	不明	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1509	359	I6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	爪形文	縄文LR	小礫、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1510	359	H6,J7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	19.2	8.8	27.2	23.6	2530	口～胴部	環状突起、懸垂文、充填沈線文	縄文RL	砂粒	灰白	○	○	
1511	360	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、パネル状区画	縄文L	砂粒	赤褐	—	○	
1512	360	E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、パネル状区画	縄文RL	砂粒	橙色	—	—	
1513	360	E6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文、パネル状区画	—	砂粒	橙色	○	—	
1514	360	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、パネル状区画	縄文RL	小礫、橙色粒子	浅黄橙	○	—	
1515	360	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、パネル状区画	縄文RL	小礫、橙色粒子	赤褐	○	—	
1516	360	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、有節沈線	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1517	360	H5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1518	360	E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1519	360	J7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	有節沈線	—	砂粒、雲母	褐	—	○	
1520	361	H7,J7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	46	18	56.4	51	51232.8	口～底部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒	明赤褐	—	○	
1521	362	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	43.2	—	—	—	33270	口～底部	パネル状区画	縄文RL	砂粒	赤褐	—	○	
1522	362	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、パネル状区画	縄文LR	褐色粒子	浅黄橙	○	—	
1523	362	I7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、パネル状区画	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1524	363	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	F	17.3	6	16.5	16.5	1100	口～底部	平行沈線	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
1525	363	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	24	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文LR	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1526	363	C5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	C	28	8	23.6	21.4	3250	口～底部	注口部、把手、懸垂文、刺突	縄文LR	砂粒	橙	○	—	内面に溝
1527	364	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	C	14	7.5	13.5	13.5	790	口～底部	パネル状区画	縄文RL	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
1528	364	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	C	16.8	8.4	13.7	13.7	2950	口～底部	パネル状区画	撚糸R	砂粒	橙	○	○	
1529	364	C4,C5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	C	11.4	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文	縄文RL	橙色粒子	灰白	—	—	
1530	364	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	N	19.2	8.2	26.6	24.6	3680	口～胴部	巴状突起、懸垂文	縄文LR	砂粒	明赤褐	○	○	
1531	364	E6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	12.8	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1532	365	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	パネル状区画	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
1533	365	E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、懸垂文	縄文LR	橙色粒子	明黄褐	—	○	
1534	365	B4	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	パネル状区画	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
1535	365	D6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文、パネル状区画	縄文RL	白色粒子	赤褐	—	—	
1536	365	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、パネル状区画	縄文RL	砂粒、小礫	赤褐	○	○	
1537	365	H6,I6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、パネル状区画	縄文L	—	浅黄橙	○	—	
1538	365	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	パネル状区画	縄文RL	砂粒、小礫	赤褐	○	—	
1539	365	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～底部	パネル状区画	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1540	366	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	パネル状区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1541	366	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第 26 表　土器観察表（16）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
1542	366	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、パネル状区画	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
1543	366	F5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	橙色粒子	浅黄橙	—	—	
1544	366	I7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文LR	橙色粒子	橙	○	○	
1545	366	I7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
1546	366	E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、眼鏡状突起	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1547	366	I6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文、平行沈線	縄文RL	橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1548	366	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文RL	橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1549	366	E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文RL	橙色粒子	浅黄橙	—	○	
1550	367	H6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	底部に筵状圧痕
1551	367	D5,E5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線＋刺突	縄文RL	砂粒、雲母	にぶい赤褐	—	○	
1552	367	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、刺突	縄RL、撚L	砂粒、橙色粒子	橙	○	○	
1553	367	D5	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	橙	○	—	
1554	367	J7	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、平行沈線	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1555	367	F6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1556	367	G6	Ⅲ	Ⅱ2b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1557	368	E5	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、平行沈線	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1558	368	D5	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線、沈線＋刺突	—	橙色粒子	浅黄橙	—	—	
1559	368	D5	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	—	浅黄橙	—	—	
1560	368	J7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、懸垂文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
1561	368	F6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄褐	○	○	
1562	368	F6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	F	23.2	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文、平行沈線	—	砂粒	橙	○	○	
1563	369	I6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、刺突列	—	橙色粒子	にぶい橙	—	○	
1564	369	D5	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	C	15.8	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突	—	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1565	369	J7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文、眼鏡状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
1566	369	D4	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	C	13.5	7.2	11.9	11.9	620	口～底部	懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1567	369	I6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	連華文、懸垂文	—	砂粒	赤褐	○	—	
1568	369	I7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	連華文、懸垂文	—	砂粒	赤褐	○	—	
1569	369	H7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1570	369	E6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	C	—	6	—	12.2	550	胴～底部	懸垂文、刺突、環状突起	—	砂粒、小礫	赤褐	○	—	
1571	369	G6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、有節沈線	—	砂粒	赤褐	○	—	
1572	369	F6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、平行沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1573	369	J7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、環状突起	—	砂粒	赤褐	○	○	
1574	370	I7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	F	21.2	—	—	—	—	口～胴部	巴状突起、沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
1575	370	F6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、有節沈線	—	砂粒	橙	○	—	
1576	370	H6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	明褐	—	—	
1577	370	K7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	C	12	—	—	—	—	口～胴部	突起、沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
1578	370	D5	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	C	12.6	—	—	—	850	口～胴部	環状突起、沈線＋刺突	—	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1579	370	I7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、隆帯	—	砂粒	橙	○	○	
1580	370	F6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	J字状突起、有節沈線	—	砂粒	橙	○	—	
1581	371	G6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	○	
1582	371	J6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、有節沈線	—	砂粒	明赤褐	—	—	
1583	371	H6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、蛇行沈線文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1584	371	I7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、刺突	縄文LR	砂粒、雲母	にぶい褐	—	—	
1585	371	G6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒、雲母	にぶい橙	○	—	
1586	371	D6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、懸垂文	—	砂粒	橙	○	—	
1587	371	E6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
1588	371	D5	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	G	19.2	—	—	—	4810	口～胴部	懸垂文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
1589	372	F6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	16.8	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、爪形文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1590	372	I6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、沈線＋刺突	—	褐色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1591	372	E6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	C	13.8	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、キザミ	—	—	橙	○	○	
1592	372	E5,E6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	F	18	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、キザミ	—	砂粒	赤褐	○	—	
1593	372	D6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、沈線＋刺突	—	—	橙	○	—	
1594	372	H7,I6,I7	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突文、玉抱三叉文	—	赤色粒子	橙	○	—	
1595	372	F5	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
1596	373	H6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画、刺突文、三叉文	—	砂粒、石英	明赤褐	○	○	
1597	373	G6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	C	9.6	6.6	13.8	12.6	450	口～底部	環状突起、懸垂文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1598	373	G6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	懸垂文、沈線＋刺突	—	橙色粒子	灰黄褐	—	○	
1599	373	H6	Ⅲ	Ⅱ2c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、刺突	—	—	にぶい黄橙	—	—	
1600	373	I7	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	C	11.1	—	—	—	—	口～胴部	突起、沈線	—	白色粒子	赤褐	○	○	
1601	374	G6, H6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	C	30.8	—	—	—	—	口～胴部	沈線＋刺突	撚糸L	砂粒、雲母	にぶい黄橙	○	○	
1602	374	0A1	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	細沈線文、沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
1603	374	I6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	細沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
1604	374	G6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	細沈線文	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
1605	374	I7	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、隆帯	縄文複節	砂粒	橙	—	—	
1606	374	H6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、有節沈線	縄文RL	褐色粒子	橙	○	—	
1607	374	J6,J7	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	—	30	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、刺突	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1608	375	G6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	N	30	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、圧痕隆帯	縄文RL	砂粒	明赤褐	—	—	
1609	375	H7	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	F	20	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文	縄文LR	砂粒	明褐	○	○	
1610	375	F6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	F	18	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、有節沈線	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1611	375	G7	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	F	18.3	—	—	—	—	口～胴部	隆帯区画、沈線	縄文RL	砂粒	赤褐	—	—	
1612	375	D6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画	縄文RL	橙色粒子	褐	○	—	
1613	375	G6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線＋刺突、懸垂文	縄文LR	砂粒	褐	○	—	
1614	375	F6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、平行沈線	縄文RL	橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1615	376	F6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	N	33	—	—	—	19100	口～胴部	環状突起、楕円区画、有節沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1616	376	F5, F6	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	N	33.5	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、楕円区画、有節沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1617	376	E5	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	Q	37	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、有節沈線	縄文LR	白色粒子	赤褐	—	○	
1618	376	—	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	R	13.8	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、沈線＋刺突	縄文RL	—	橙	○	○	
1619	376	J7	Ⅲ	Ⅱ2d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刺突	縄文RL	—	橙	○	—	
1620	377	K6	Ⅲ	Ⅱ2e	深鉢形土器	C	27	—	—	—	—	口～胴部	三角形区画、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
1621	377	I7	Ⅲ	Ⅱ2e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	三角形区画、刺突	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
1622	377	I7	Ⅲ	Ⅱ2e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	三角形区画、刻目隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1623	377	D5	Ⅲ	Ⅱ2e	深鉢形土器	C	21	—	—	—	—	口縁部	三角形区画	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
1624	377	I7	Ⅲ	Ⅱ2e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	三角形区画、渦巻文	縄文LR	砂粒	にぶい褐	—	—	
1625	377	F6	Ⅲ	Ⅱ2e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、平行沈線	—	砂粒	赤褐	○	—	
1626	377	I7	Ⅲ	Ⅱ2e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1627	377	F5	Ⅲ	Ⅱ2e	深鉢形土器	—	—	15.3	—	—	—	底部	隆帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部に網代痕
1628	378	F5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	G	33	13.4	42	41	12360	口～胴部	環状突起、楕円区画、斜行沈線文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1629	379	F5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	15	8	20.6	20.6	1397	口～底部	環状突起、楕円区画、斜行沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1630	379	H6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、斜行沈線文	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
1631	379	E5,F5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、斜行沈線文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1632	379	F6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	26	12.8	38	35.6	8595	口～底部	楕円区画、懸垂文、有節沈線	撚糸L	砂粒	浅黄橙	○	○	
1633	380	E5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、斜行沈線文	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
1634	380	F5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、斜行沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1635	380	D5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	39.2	—	—	—	—	口～胴部	斜行沈線文、懸垂文	—	橙色粒子	明黄褐	—	○	
1636	380	I6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、斜行沈線文	縄文RL	白色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1637	380	H6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、有節沈線	—	橙色粒子	橙	○	—	

第 27 表　土器観察表（17）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
1638	380	F5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行沈線文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1639	380	F5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、蛇行沈線文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1640	381	E6,F6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	39.6	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、斜行沈線文	縄文RL	砂粒	明赤褐	—	○	
1641	381	F6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	24.8	—	—	—	7120	口～胴部	楕円区画、斜行沈線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1642	381	D6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	37	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、蛇行沈線文	縄文RL	白色粒子	褐	—	○	
1643	381	G6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、耳状突起	—	砂粒	にぶい褐	—	—	
1644	381	E5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、斜行沈線文	縄文LR	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1645	382	I6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	N	18	8	19.6	19	1904.5	口～底部	懸垂文、斜行沈線文	—	白色粒子	赤褐	○	—	
1646	382	F6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	C	18.6	9.6	23	22.5	2230	口～胴部	楕円文、斜行沈線文	縄文RL	—	浅黄橙	—	—	
1647	382	I6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	耳状突起、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1648	382	F5	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	N	14.7	5	—	17.3	870	口～底部	玉抱U字状文、蛇行沈線文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1649	382	G6	Ⅲ	Ⅱ2f	深鉢形土器	C	34.6	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、斜行沈線文	縄文RL	砂粒、褐色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1650	383	G6,H6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	14	—	—	—	—	口～胴部	眼鏡状突起、抽象文	—	砂粒	橙	○	○	赤彩
1651	383	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	F	24	—	—	—	—	口～胴部	眼鏡状突起、有節沈線	縄文LR	砂粒	にぶい褐	—	○	
1652	383	I7	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、有節沈線	—	砂粒	赤褐	—	—	
1653	383	I7	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、キャタピラ状文	—	砂粒	赤褐	—	—	
1654	383	I7	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、キャタピラ状文	—	砂粒	赤褐	—	—	
1655	383	E5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	キャタピラ状文	—	砂粒	橙	—	—	
1656	383	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、キャタピラ状文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
1657	384	H6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、沈線＋刺突	—	砂粒	赤褐	—	—	
1658	384	D5	Ⅲ	Ⅱ2g	不明	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、有節沈線	—	砂粒、小礫	赤褐	—	—	
1659	384	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	F	26	—	—	—	—	口～胴部	眼鏡状突起、楕円区画	—	—	明赤褐	○	—	
1660	384	G6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	赤褐	—	—	
1661	384	J7	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	キャタピラ状文	—	砂粒	橙	—	—	
1662	384	D5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	キャタピラ状文	—	砂粒	橙	—	—	
1663	384	I7	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	懸垂文、有節沈線	—	砂粒、白色粒子	赤褐	—	—	
1664	384	D4	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	把手、懸垂文、有節沈線	—	砂粒、白色粒子	赤褐	—	—	
1665	385	C4	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	F	19	7.5	27.4	21.2	2095	口～底部	突起、懸垂文、有節沈線	—	—	赤褐	—	—	
1666	385	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線＋刻目、玉抱三叉文	—	砂粒	橙	—	—	
1667	385	H6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	11.7	—	—	—	胴～底部	沈線＋刻目	—	砂粒	褐	○	—	
1668	385	F5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線＋刻目	—	砂粒	褐	—	—	
1669	386	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	F	26	9.3	29	26	4765	口～底部	懸垂文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1670	386	G6,H6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	25	—	—	—	—	口縁部	環状突起、楕円区画	—	砂粒	褐	○	—	
1671	386	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	F	25	11.5	30.5	27	4755	口～底部	眼鏡状突起、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1672	387	F5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	E	16	9.2	20.8	17.8	1220	口～底部	環状突起、楕円区画	—	砂粒	橙	○	—	
1673	387	F5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	10	—	—	—	胴～底部	楕円区画、充填沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1674	387	H6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	N	15	6.6	22.2	21.6	1618.5	口～底部	縦位楕円区画、斜行沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1675	387	E5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、充填沈線文	—	砂粒、白色粒子	赤褐	—	○	
1676	387	E5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、充填沈線文	—	砂粒、白色粒子	赤褐	—	—	
1677	387	H6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	7.2	—	—	—	胴～底部	懸垂文、充填沈線	—	砂粒、白色粒子	明赤褐	○	—	
1678	387	E5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	N	14.4	6	—	15.2	1230	口～底部	懸垂文、充填沈線	—	白色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1679	388	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	10.5	—	—	—	胴～底部	懸垂文、充填沈線	—	砂粒、白色粒子	赤褐	—	—	
1680	388	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	F	16.8	7.8	17.1	17.1	1110	口～底部	半隆起線文、充填沈線	—	砂粒	赤褐	○	○	
1681	388	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、充填沈線	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
1682	388	F5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	11.4	—	—	—	底部	半隆起線文、充填沈線	—	砂粒	橙	○	—	
1683	388	G6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	12.6	—	—	—	底部	半隆起線文、充填沈線	—	砂粒	橙	—	—	
1684	388	F5	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	有節沈線、隆帯	—	砂粒	にぶい褐	—	—	
1685	388	G6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	眼鏡状突起、環状突起	—	砂粒	赤褐	—	—	
1686	388	G6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	眼鏡状突起、有節沈線	—	砂粒	にぶい褐	—	○	赤彩
1687	388	F6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	刺突文、有節沈線	—	砂粒	赤褐	—	—	
1688	388	I6	Ⅲ	Ⅱ2g	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	有節沈線	—	砂粒	橙	—	—	
1689	389	D5, D6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	24.3	—	—	—	—	口縁部	楕円区画	—	砂粒、雲母	赤褐	○	—	
1690	389	J6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	扁状把手、角押文	—	砂粒、雲母	橙	○	—	
1691	389	H6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	扁状把手、角押文	—	砂粒、雲母	褐	—	○	
1692	389	I6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、角押文	—	砂粒、雲母	明褐	—	○	
1693	390	I6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	角押文、蛇行沈線文	—	砂粒、雲母	橙	—	○	
1694	390	G6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、刻目隆帯	—	砂粒、雲母	明褐	—	—	
1695	390	D4	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	角押文、有節沈線	—	砂粒、小礫	明褐	—	—	
1696	390	E6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	角押文、隆帯	—	砂粒、雲母	褐	—	—	
1697	390	F5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	角押文	—	砂粒、雲母	褐	—	—	
1698	390	E5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	角押文	—	砂粒、雲母	褐	○	—	
1699	390	H5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	角押文	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
1700	390	I6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	角押文	—	砂粒、雲母	褐	—	○	
1701	390	H6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	角押文	—	砂粒、雲母	明褐	—	—	
1702	390	G6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	C	11.3	—	—	—	—	口～胴部	角押文	—	砂粒、雲母	赤褐	○	—	
1703	390	F5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	角押文	—	砂粒、雲母	褐	—	—	
1704	390	C5,E5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起	—	砂粒、雲母	赤褐	○	—	
1705	390	J6,J7	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	32	—	—	—	—	口～胴部	指頭圧痕文、懸垂文	—	砂粒、雲母	赤褐	—	○	
1706	390	F5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
1707	390	H6,I6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起	—	砂粒、雲母	赤褐	—	—	
1708	391	—	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	角押文、隆帯	—	砂粒	にぶい赤褐	—	—	
1709	391	J6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	角押文、隆帯	—	砂粒、雲母	橙	○	—	
1710	391	F5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、隆帯	—	砂粒、雲母	橙	○	—	
1711	391	F6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	角押文、隆帯	—	砂粒、雲母	褐	—	—	
1712	391	D5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文、懸垂文	—	砂粒、雲母	橙	○	—	
1713	391	—	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、蛇行沈線文	—	砂粒、雲母	明褐	—	—	
1714	391	F5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、隆帯	—	砂粒	橙	○	—	
1715	391	I6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	砂粒、雲母	橙	○	—	
1716	392	E6,F5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	F	47.6	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、指頭圧痕文	—	赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1717	392	D5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	指頭圧痕文、隆帯	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1718	392	J7	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	指頭圧痕文	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
1719	392	I6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	指頭圧痕文	—	砂粒	黒褐	○	—	
1720	392	I6	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	指頭圧痕文	—	砂粒	赤褐	○	—	
1721	392	F5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	指頭圧痕文	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
1722	392	E5	Ⅲ	Ⅱ2h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	指頭圧痕文	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
1723	392	I6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	指頭圧痕文	—	砂粒	黒褐	○	—	
1724	393	G6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	M	30	9.6	48.8	48.8	16934.3	口～底部	爪形文、蓮華文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
1725	393	I6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	D	24	—	—	—	—	口～胴部	爪形文、蓮華文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
1726	393	G6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文、蓮華文	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
1727	394	H7	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	蓮華文、懸垂文	縄文RL	砂粒、橙色粒子	橙	—	○	
1728	394	I6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	蓮華文、懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1729	394	I6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	50	—	—	—	—	口縁部	蓮華文、爪形文	—	—	灰白	○	—	
1730	394	I6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文、格子目文	—	橙色粒子	浅黄橙	—	—	
1731	394	—	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	蓮華文、懸垂文	—	砂粒	橙	○	—	
1732	394	I6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	格子目文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1733	394	H6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	

第 28 表　土器観察表（18）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
1734	395	I6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文、刻目隆帯	縄文LR	—	明褐	—	○	
1735	395	H6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文、平行沈線	縄文RL	小礫	橙	—	—	
1736	395	J7	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1737	395	E5	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい褐	○	○	
1738	395	I6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	—	—	にぶい黄橙	—	—	
1739	395	E5	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	縄文LR	砂粒、橙色粒子	橙	—	—	
1740	395	J7	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	—	砂粒	橙	—	—	
1741	395	D5	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
1742	395	E5	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	—	—	橙	—	—	
1743	395	D5	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文	—	砂粒	橙	—	—	
1744	395	B02	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1745	395	F2	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1746	395	G6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文、蓮華文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
1747	395	H6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文、懸垂文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
1748	396	F5	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文	縄文RL	砂粒、褐色粒子	橙	—	—	
1749	396	H6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文、沈線	—	橙色粒子	浅黄橙	—	—	
1750	396	G6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	R	10	6	12.2	11.3	420	口～底部	爪形文、平行沈線	—	砂粒	橙	—	○	
1751	396	I6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	22	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	—	砂粒、雲母	にぶい黄橙	—	○	
1752	396	G6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	R	13.8	—	—	—	—	口～底部	懸垂文、平行沈線	—	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	○	○	
1753	396	I7	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	○	○	
1754	396	E5	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	橙色粒子	にぶい褐	—	○	
1755	396	I7	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線、懸垂文	不明	—	にぶい黄橙	○	—	
1756	396	J7	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	撚糸L	橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1757	396	F5	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	J	17.7	10	22.5	22.5	2320	口～底部	懸垂文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1758	397	E5	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	25.2	—	—	—	—	口～胴部	沈線、刺突	縄文RL	赤色粒子	浅黄橙	—	○	補修孔
1759	397	J7	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	13.2	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、沈線	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	○	○	
1760	397	F6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文RL	橙色粒子	浅黄橙	—	○	
1761	397	F6	Ⅲ	Ⅱ2i	深鉢形土器	C	32.5	11.5	45	45	16150	口～底部	竹管状刺突文、J字状懸垂文	縄文RL	橙色粒子	浅黄橙	—	○	
1762	398	E5,E6	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	A	17	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1763	398	H7,I7	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	—	24.6	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯、環状突起	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1764	398	F6	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1765	398	G7	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	—	37.2	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文L	赤色粒子	褐	—	—	
1766	398	H7	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	—	—	13.2	—	—	—	胴～底部	圧痕隆帯	縄文LR	橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	底部に網代痕
1767	398	G6,G7	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	—	—	17.6	—	—	—	胴～底部	圧痕隆帯	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
1768	399	D6	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	—	42	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、弧線文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
1769	399	D5	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	R	17	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯、橋状把手	縄文RL	砂粒	明赤褐	—	○	
1770	399	F6	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	圧痕隆帯、平行沈線	撚糸L	橙色粒子	浅黄橙	—	○	
1771	399	D6	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	C	12	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、刺突列	縄文L	—	赤褐	○	—	
1772	399	I6	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	R	12.6	6.5	15	13.7	700	口～底部	圧痕隆帯、平行沈線	—	赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1773	399	H6	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	C	33.6	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、有節沈線	縄文RL	橙色粒子	明赤褐	○	○	
1774	400	F5	Ⅲ	Ⅱ2j	深鉢形土器	D	22	8.6	27.6	27.6	4055	胴～底部	懸垂文、刺突	縄文RL	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	○	○	
1775	400	I6,J7	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	—	19.6	—	—	—	—	口～胴部	平行沈線	—	砂粒	橙	—	—	
1776	400	H6,H7	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	F	22.2	10.8	26.4	24.4	4079	口～底部	環状突起、平行沈線	縄文RL	赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1777	400	F6	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	—	—	7.5	—	—	—	胴～底部	平行沈線	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	○	—	
1778	400	G6	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	C	11.7	7.2	13.5	12	580	口～底部	隆帯文、平行沈線	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
1779	400	I7	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	—	32	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	縄文L	砂粒	赤褐	—	—	
1780	401	H6	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	R	12.3	5.6	15	13.2	890	口～底部	突起、沈線＋刺突、懸垂文	縄文LR	砂粒、雲母	橙	—	—	
1781	401	E5	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	R	17.8	—	—	—	—	口～胴部	沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1782	401	G5	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	平行沈線	縄文LR	褐色粒子	橙	—	○	
1783	401	H7	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文RL	橙色粒子	橙	○	○	
1784	401	E5	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文LR	橙色粒子	橙	○	—	
1785	401	H7	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1786	401	E5	Ⅲ	Ⅱ2k	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1787	402	J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	R	22.8	—	28.4	—	21140	口～底部	中空把手、有節沈線	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1788	403	—	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	18.6	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1789	403	F6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1790	403	C5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、有節沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1791	403	J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	縄文LR	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1792	403	I7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	23.4	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、楕円区画	縄文RL	砂粒、小礫	橙	—	—	
1793	403	E5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、有節沈線	—	砂粒	橙	—	—	
1794	403	G6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1795	403	C5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	F	22.8	12.4	28.2	27.6	3950	口～底部	橋状把手、交互刺突文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
1796	404	H7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	N	33.6	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、縦位短沈線	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
1797	404	I7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、縦位短沈線	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
1798	404	H7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	30	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、渦巻文	縄文LR	砂粒、小礫	明褐	○	—	
1799	404	D6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、縦位短沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1800	404	J6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手、交互刺突文	撚糸L	砂粒	浅黄橙	—	—	
1801	405	H7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	E	27.2	15	33	29	7060	口～底部	交互刺突文、クランク文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1802	406	D5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	E	21	—	—	—	—	口～胴部	中空突起、クランク文	縄文LR	砂粒	明赤褐	○	○	
1803	406	E5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、有節沈線	縄文LR	砂粒	明赤褐	○	○	
1804	406	G6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	E	11.7	—	—	—	—	口～胴部	交互刺突文、平行沈線	撚糸L	赤色粒子	浅黄橙	○	○	
1805	406	J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
1806	406	G7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
1807	406	E5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	縄文RL	白色粒子	橙	○	○	
1808	406	H7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1809	406	H7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	B	12	7.2	16.8	16.2	920	口～底部	S字状突起、交互刺突文、クランク文	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
1810	406	D5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文、注口部	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1811	406	I7,J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	C	13	—	—	—	—	口～胴部	刻目、平行沈線	縄文L	砂粒	橙	—	—	
1812	407	I7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	中空突起	縄文LR	砂粒	明赤褐	○	○	
1813	407	J6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、有節沈線	縄文LR	砂粒	明赤褐	○	—	
1814	407	J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、刻目	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
1815	407	H7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、刺突文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
1816	407	C5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、有節沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1817	407	C5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1818	407	J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
1819	408	H7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	22	—	—	—	—	口縁部	中空突起、弧線文、鋸歯状突起	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
1820	408	I7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
1821	408	D6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、平行沈線	—	砂粒	橙	—	—	
1822	408	F6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
1823	408	F6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、交互刺突文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1824	408	F6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	12	—	—	—	—	口～胴部	クランク文	縄文RL	砂粒	明赤褐	○	—	
1825	408	H7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、懸垂文	縄文RL	小礫	浅黄橙	—	○	
1826	408	D5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	注口部、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1827	409	C5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	○	
1828	409	C5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文、平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1829	409	A02	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文、平行沈線	—	砂粒	褐	—	—	

第 29 表　土器観察表（19）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
1830	409	J6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文、平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1831	409	F6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
1832	409	J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	○	—	
1833	409	I7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
1834	409	C5	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1835	409	C3	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
1836	409	J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
1837	410	D6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	
1838	410	G7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1839	410	H6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1840	410	I6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文	縄文RL	砂粒	黄橙	—	—	
1841	410	J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
1842	410	J7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文複節	砂粒	灰黄	○	—	
1843	410	I7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	5.7	—	—	—	胴部	交互刺突文、ワラビ手状文	縄文LR	赤色粒子	浅黄橙	—	—	
1844	410	I6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文、ワラビ手状文	縄文LR	赤色粒子	浅黄橙	—	○	
1845	410	E6	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	撚糸L	砂粒	浅黄橙	○	—	
1846	410	H7	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	20	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
1847	410	A01	Ⅳ	Ⅱ3a1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	撚糸L	砂粒	浅黄橙	—	○	
1848	411	J6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	41.7	—	—	—	—	口～頚部	交互刺突文、有節沈線	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1849	411	H7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	I	25.6	—	—	—	—	口～頚部	中空突起、有節沈線、孤線文	撚糸L	砂粒	橙	—	—	
1850	411	D6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、突起	撚糸R	砂粒	浅黄橙	—	○	
1851	411	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1852	411	E6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	33.6	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	—	砂粒	赤褐	—	—	
1853	412	E6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	10.8	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
1854	412	—	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、交互刺突文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1855	412	F6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	18.3	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、波状文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
1856	412	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線	—	砂粒	橙	—	—	
1857	412	F6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1858	412	F5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	有節沈線、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1859	412	I6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	有節沈線、波状文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
1860	412	A5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	有節沈線、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
1861	412	H8	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、有節沈線	撚糸R	砂粒	浅黄橙	—	—	
1862	412	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	撚糸L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1863	412	I6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	有節沈線、爪形文、圧痕隆帯	撚糸L	砂粒	浅黄橙	—	—	
1864	412	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	有節沈線、爪形文、圧痕隆帯	撚糸L	砂粒	浅黄橙	—	—	
1865	413	H7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	27	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、有節沈線、渦巻文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1866	413	H7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、平行沈線	縄文LR	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1867	413	H6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、渦巻文	—	砂粒	橙	○	○	
1868	413	H6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文、交互刺突文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
1869	413	G7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文、交互刺突文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
1870	413	H7,G6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	孤線文、交互刺突文	撚糸R	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
1871	413	H7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	孤線文、交互刺突文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1872	413	H7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	孤線文、交互刺突文、有節沈線	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1873	413	I6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、渦巻状突起	撚糸L	赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1874	413	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文	縄文RL	—	浅黄橙	—	○	
1875	413	G6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1876	413	F6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1877	413	G6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1878	414	C5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	H	15	9.2	16.5	13.8	990	口～底部	突起、横S字状文、波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1879	414	D6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	H	18.6	—	—	—	2300	口～胴部	小突起、波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1880	414	D5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	小突起、波状文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1881	414	D6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、波状文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1882	414	C5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1883	414	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1884	414	H6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	S字状突起、渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1885	414	F6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	S字状突起、渦巻文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
1886	414	D6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	11.3	—	—	—	—	口縁部	孤線文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
1887	415	F6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	縄文RL	砂粒	明赤褐	—	○	
1888	415	J7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
1889	415	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	孤線文、平行沈線	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
1890	415	A5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1891	415	I6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
1892	415	G7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	24.6	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、孤線文	縄文RL	砂粒	明褐	○	—	
1893	415	E5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
1894	415	F6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
1895	415	E5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
1896	415	E5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1897	415	G6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	O	13.5	—	—	—	—	口～胴部	平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1898	415	J7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頚部	波状文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
1899	416	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	H	14.7	9	21	21	1610	口～底部	波状文、渦巻文	撚糸R	砂粒	灰白	○	○	
1900	416	H6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	H	16.5	—	—	—	—	口～胴部	渦巻文	撚糸L	砂粒	橙	○	○	
1901	416	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	N	12.3	—	—	—	—	口～胴部	波縄文、眼鏡状突起	撚糸L	砂粒、小礫	にぶい黄褐	○	○	
1902	416	J6,J7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	A	14.7	—	—	—	—	口～胴部	波状文	撚糸L	砂粒	橙	—	—	
1903	416	C5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	I	21	—	—	—	5460	口～胴部	波状文	撚糸R	砂粒	浅黄橙	○	○	
1904	417	I7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1905	417	C5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	撚糸	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1906	417	J7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状文	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1907	417	F6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	R	12.6	—	—	—	—	口縁部	波状文、渦巻文	撚糸R	砂粒	橙	○	—	
1908	417	H7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	R	11	—	—	—	—	口縁部	突起、平行沈線、交互刺突文	撚糸R	砂粒	浅黄橙	○	—	
1909	417	H7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	R	11	—	—	—	—	口縁部	突起、未調整隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
1910	417	G6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	撚糸L	砂粒	橙	○	—	
1911	417	—	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	R	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線、突起	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1912	417	D6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、平行沈線、刻目隆帯	撚糸R	砂粒	浅黄橙	—	—	
1913	417	D6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	波状文	撚糸L	砂粒	浅黄橙	—	—	
1914	417	F5	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	撚糸L	砂粒	橙	—	—	
1915	417	K7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	撚糸L	砂粒	浅黄橙	○	○	
1916	417	I6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1917	417	J7	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、波状文	撚糸R	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1918	417	E6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、渦巻文	撚糸R	砂粒	橙	○	○	
1919	417	H6	Ⅳ	Ⅱ3a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	撚糸L	砂粒	橙	○	—	
1920	418	E5	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	H	17.1	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1921	418	I7	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	H	22.8	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯、波状文	縄文RL	砂粒	明赤褐	○	—	
1922	418	F6	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	18	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1923	418	A01	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	撚糸L	砂粒	橙	○	—	
1924	418	H7	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	33.6	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	縄文RL	砂粒	赤褐	○	—	
1925	418	J7	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	I	18	7.8	23.7	23.7	2370	口～底部	未調整隆帯、波状文	撚糸R	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	

第 30 表　土器観察表（20）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
1926	418	G6	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状突起	撚糸L	砂粒	浅黄橙	—	—	
1927	418	I7	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状突起	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
1928	419	J7	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	I	21.6	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯、波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1929	419	J7	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	撚糸L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1930	419	H5	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	撚糸L	砂粒	橙	—	○	
1931	419	F6	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1932	419	0	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1933	419	D6	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	未調整隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1934	419	G7	Ⅳ	Ⅱ3a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	未調整隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1935	420	F6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	14.4	8	17.1	17.1	1184.6	口～底部	半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
1936	420	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	14.8	6.8	19.2	17.6	980	口～底部	半隆起線文、環状突起	—	橙色粒子	にぶい橙	—	—	
1937	420	F6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	17.6	10	21	18.8	2270	口～底部	半隆起線文、突起	—	砂粒、白色粒子	赤褐	○	—	
1938	420	I7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	14	8.4	17.3	—	860	口～底部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	○	
1939	420	G6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	13.5	8	17.7	15.9	1031	口～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	赤色粒子	灰白	—	○	
1940	421	G6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	25.2	11.2	28	26	2890	口～底部	半隆起線文、環状突起	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1941	421	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	13.5	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
1942	421	G6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、隆帯＋刻目	—	砂粒	赤褐	—	○	
1943	421	H6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	22.8	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1944	421	I6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	23	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯、交互刺突文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1945	422	G6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	36.4	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、環状突起、懸垂文	—	砂粒	にぶい褐	—	○	
1946	422	I7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	28.2	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1947	422	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	16	8.8	22.4	21.2	1390	口～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、白色粒子	橙	—	○	
1948	423	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	15	7.8	21.9	20.4	1393.2	口～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	—	—	
1949	423	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	18.5	—	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、楕円区画	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
1950	423	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	N	40.4	—	—	—	26340	口～胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
1951	424	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	12	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1952	424	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	34	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
1953	424	D6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	—	
1954	424	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	C	33.6	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、懸垂文、環状突起	—	砂粒	橙	○	○	
1955	425	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	E	15.6	9.2	—	20.8	1738	口～底部	半隆起線文、橋状把手	—	白色粒子	明黄褐	○	○	
1956	425	E5	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒	赤褐	○	—	
1957	425	H6	Ⅳ	Ⅱ3b1	鉢形土器	—	30	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、橋状把手	—	小礫、石英、雲母	にぶい黄橙	—	○	
1958	426	G7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	D	28	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒、橙色粒子	橙	○	○	
1959	426	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	C	41	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1960	427	G7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	H	27.2	12.4	34.4	31.6	7752.6	口～底部	半隆起線文、環状突起	—	橙色粒子	浅黄橙	○	○	
1961	427	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	H	24.8	12.4	32	28.8	5420	口～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	細砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1962	427	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	14.5	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	明黄褐	○	○	
1963	428	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	45.6	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、白色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1964	428	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	38	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、雲母	にぶい赤褐	○	○	
1965	428	C4	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1966	428	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	D	18	9.2	24.4	21.6	2221	口～底部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	橙	—	—	
1967	428	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	C	19.5	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1968	429	D6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	B	18	11	20.6	—	2313.8	口～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄褐	○	○	
1969	429	I7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	C	9.5	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	—	—	
1970	429	J7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	H	17.7	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	○	
1971	429	J7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	H	31.4	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	赤褐	○	—	
1972	430	I6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、楕円区画	—	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	—	—	
1973	430	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	D	—	14.8	—	33.2	6210	口～底部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
1974	430	E6	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	17	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
1975	430	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	8	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1976	431	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	7.2	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	—	○	
1977	431	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	8.8	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	赤褐	○	○	
1978	431	H7	Ⅳ	Ⅱ3b1	鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1979	431	G7	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄褐	—	○	
1980	431	C5	Ⅳ	Ⅱ3b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	橙	△	—	
1981	432	J7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	N	33.8	15	30.2	29.6	15580	胴～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄褐	—	○	
1982	432	I7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	22.6	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1983	432	F6,G7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	D	14.4	8.1	21	19.5	1210.6	胴～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	—	橙	—	○	
1984	432	J7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	18	10.5	19.3	17.1	1680.5	胴～底部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	赤褐	○	○	
1985	433	E5,E6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	40.6	16	40	40	17664.2	口～底部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	明黄褐	○	○	
1986	433	I5	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	41	—	—	—	—	口～頚部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	褐	—	—	
1987	433	G6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	15.4	8	21	19.6	1315	口～底部	半隆起線文、突起	—	砂粒	橙	ー	—	
1988	433	I7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	36.8	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、小礫	明赤褐	○	—	
1989	434	F6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	41	—	—	—	—	口～頚部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1990	434	H7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	22	—	—	—	3770	口～胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、雲母	赤褐	○	—	
1991	434	E6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	19.5	10.5	15.9	15.9	2153	口～底部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1992	435	H6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	12.3	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	小礫、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1993	435	I6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	小礫、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1994	435	I7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	19.2	10.6	20.4	18.8	2583	口～底部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1995	435	F6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	18.6	9.5	18.5	18.3	1970	口～底部	半隆起線文、刻目隆帯	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
1996	437	E6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	灰黄	—	○	
1997	437	G7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	H	29	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、渦巻文	—	白色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1998	437	G1	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい橙	—	—	
1999	437	C5	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	33	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	—	—	
2000	438	H7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	48	14.5	33.8	33	24900	口～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、石英	橙	—	—	
2001	438	C5	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	赤褐	—	—	
2002	439	H7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	28.4	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	赤褐	○	○	
2003	439	I7,J7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	28.4	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、刻目懸垂文	—	砂粒	橙	—	○	
2004	439	E6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、突起	—	砂粒	明赤褐	○	○	
2005	439	H7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	5.7	14.1	—	—	口～底部	半隆起線文	—	砂粒、雲母	明赤褐	○	—	
2006	439	H7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	明赤褐	—	○	
2007	439	H7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、雲母	赤褐	○	—	
2008	439	C5	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2009	439	F5	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	—	
2010	439	I6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、爪形文	—	砂粒	灰褐	—	—	
2011	440	D6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、橙色粒子	灰白	—	—	
2012	440	D6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頚部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	明赤褐	○	○	
2013	440	H7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頚部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2014	440	G6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	○	
2015	440	H7,I7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頚部	半隆起線文、三角形区画	—	砂粒	橙	—	○	
2016	440	H7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	—	
2017	440	D6	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	D	25	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2018	441	H7	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	H	30.8	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、半隆起線文、爪形文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2019	441	C5	Ⅳ	Ⅱ3b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、鋸歯状突起	—	砂粒	橙	—	○	
2020	442	F6	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	H	36	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2021	442	F6	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、把手	—	砂粒	灰白	—	—	

第 31 表　土器観察表（21）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2022	443	F6,G6	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	H	31	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2023	443	H6,I7	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2024	443	F6	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、把手	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2025	443	C5	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2026	444	I7	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	H	38.4	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、把手	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2027	445	I7	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2028	445	I7	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
2029	445	J7	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、把手	—	砂粒	灰白	—	—	
2030	445	F6	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2031	445	B5	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
2032	445	H6	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
2033	445	I7	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2034	446	I6	Ⅳ	Ⅱ3b3	深鉢形土器	H	26	11	35.2	28.4	5880	口～底部	半隆起線文、把手、横S字状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2035	447	J7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	H	29.6	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2036	447	H7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	H	26	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	縄文LR	砂粒、小礫	明赤褐	○	○	
2037	447	I7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	H	26.7	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	—	—	
2038	447	H7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	H	26	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	縄文RL	砂粒	明赤褐	○	○	
2039	447	G6	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	H	16.5	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	○	
2040	448	G6	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	H	26	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、渦巻文	—	細砂粒	明赤褐	—	—	
2041	448	G6	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	縄文RL	砂粒	明赤褐	—	—	
2042	448	K7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	E	35.2	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	縄文LR	砂粒	赤褐	—	○	
2043	448	D5	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	赤褐	—	○	
2044	449	I7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
2045	449	C5	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	36	—	—	—	—	口～胴部	三角形区画、眼鏡状突起	縄文L	砂粒、赤色粒子	橙	—	○	
2046	449	E6	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	半隆起線文、三角形区画	—	—	橙	—	○	
2047	450	G7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	H	19.2	8.8	21.5	19.6	1714	口～底部	半隆起線文、三角形区画	縄文LR	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	○	○	
2048	450	H7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	C	22	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、三角形区画	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
2049	450	H7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	縄文LR	砂粒、小礫	明黄褐	○	○	
2050	450	E5	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	F	25	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、楕円区画	縄文LR	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2051	450	H6	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	E	27	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	縄文LR	砂粒、小礫	橙	○	○	
2052	451	I7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	J	25.6	—	—	—		口～胴部	半隆起線文、環状突起	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2053	451	J7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	29	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、環状突起	縄文RL	白色粒子	橙	—	○	
2054	451	I7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	F	14.7	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2055	452	J7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	J	27	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2056	452	D5	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	J	18	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2057	452	H7	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	28	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2058	452	I6,J6	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	—	19.5	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、三叉文	縄文RL	橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2059	452	D6	Ⅳ	Ⅱ3b4	深鉢形土器	N	30	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2060	453	D5	Ⅳ	Ⅱ3b5	鉢形土器	J	18.5	14	13.7	13.7	2657	口～底部	半隆起線文、交互刺突文、把手	—	明黄褐、赤色粒子	浅黄橙	—	—	
2061	453	—	Ⅳ	Ⅱ3b5	深鉢形土器	—	22	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	橙	○	—	
2062	453	H6,H7	Ⅳ	Ⅱ3b5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、交互刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
2063	453	C5	Ⅳ	Ⅱ3b5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	橙	○	—	
2064	453	H6	Ⅳ	Ⅱ3b5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、注口部	—	—	にぶい褐	○	○	
2065	454	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい褐	—	—	
2066	454	H6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2067	454	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
2068	454	C5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	赤色粒子	橙	—	○	
2069	454	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
2070	454	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
2071	454	I6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	—	—	
2072	454	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2073	454	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	—	橙	○	○	
2074	454	F5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2075	454	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒	明赤褐	○	—	
2076	454	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
2077	455	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2078	455	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2079	455	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2080	455	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	橙	—	—	
2081	455	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	—	—	
2082	455	C5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2083	455	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
2084	455	D6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2085	455	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	黄橙	○	—	
2086	455	G6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2087	455	E6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	40	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい橙	○	—	
2088	455	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	—	
2089	455	H6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	突起	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2090	456	J6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2091	456	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2092	456	G6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2093	456	G7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	赤褐	○	○	
2094	456	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鋸歯状突起	—	砂粒	明赤褐	○	○	
2095	456	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、爪形文、玉抱三叉文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
2096	456	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2097	456	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	橙	○	—	
2098	456	E5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	16	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	橙	○	—	
2099	456	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	—	
2100	457	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2101	457	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
2102	457	K7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2103	457	C2	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	○	
2104	457	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、小礫	にぶい黄褐	○	○	
2105	457	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2106	457	H6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	—	明黄褐	○	—	
2107	457	G6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	20	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、圧痕隆帯	—	赤色粒子	浅黄橙	○	—	
2108	457	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	赤褐	○	—	
2109	457	C5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	—	砂粒	赤褐	○	—	
2110	457	I6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、隆帯	—	砂粒	赤褐	—	—	
2111	457	H6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2112	457	A01	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刻目隆帯	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2113	457	E6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2114	457	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2115	457	G6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2116	457	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
2117	458	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、小礫	明褐	—	—	

第 32 表　土器観察表（22）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2118	458	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、環状突起、刺突	—	砂粒	橙	—	—	
2119	458	E6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画	—	—	橙	○	—	
2120	458	D5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画	—	砂粒、小礫	明黄褐	○	—	
2121	458	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2122	458	K7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画	—	赤色粒子	にぶい橙	—	—	
2123	458	C5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2124	458	C5,D5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、楕円区画	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2125	458	E6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2126	458	E6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画	—	—	黄橙	○	—	
2127	458	G6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2128	458	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2129	458	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、懸垂文	—	砂粒	橙	○	—	
2130	458	J7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、懸垂文	—	砂粒	橙	○	—	
2131	459	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
2132	459	I6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒、小礫	褐	○	○	
2133	459	C2	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	小礫	明褐	—	○	
2134	459	I6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	淡黄	○	—	
2135	459	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2136	459	J7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2137	459	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2138	459	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	橙	○	—	
2139	459	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	—	橙	—	—	
2140	459	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯、三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2141	459	A4	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2142	459	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	橙	○	—	
2143	459	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
2144	459	G7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫	赤褐	○	—	
2145	460	G7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	赤褐	○	○	
2146	460	G6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	橙	○	—	
2147	460	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	12	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2148	460	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	8	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
2149	460	G6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	10.5	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	—	にぶい黄橙	—	—	底部網代痕
2150	460	E6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	11	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	—	底部網代痕
2151	460	D5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	5.7	—	—	—	胴～底部	半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	○	—	底部網代痕
2152	460	E6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	11.7	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、小礫	橙	—	—	底部網代痕
2153	460	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	4.5	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2154	461	H6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	11	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2155	461	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	9.3	—	—	—	胴～底部	半隆起線文	—	—	にぶい黄橙	—	—	
2156	461	I6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	9.3	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい橙	○	—	底部網代痕
2157	461	D6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	14	—	—	—	胴～底部	半隆起線文	—	赤色粒子	橙	○	—	底部網代痕
2158	461	C5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	19	—	—	—	胴～底部	半隆起線文	—	赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	底部網代痕
2159	461	E6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	11.5	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2160	461	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	7.5	—	—	—	胴～底部	半隆起線文	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
2161	461	C5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	11	—	—	—	胴～底部	半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	底部網代痕
2162	462	G7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2163	462	G6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
2164	462	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
2165	462	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2166	462	D5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	6.3	—	—	—	胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
2167	462	H6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	—	
2168	462	E5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
2169	462	G6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2170	463	H7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	18	13.8	21.3	16.5	2494.5	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠把手	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
2171	463	H7	Ⅳ	Ⅱ3c1	鉢形土器	H	12	7.2	—	8.4	420	口～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、雲母	橙	—	○	
2172	464	G6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	24	15.6	24	20	5245.5	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	橙	○	—	
2173	464	I7	Ⅳ	Ⅱ3c1	鉢形土器	H	20	14	18	13.6	3158.6	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	赤褐	○	—	
2174	465	H7	Ⅳ	Ⅱ3c1	鉢形土器	H	17.4	13.4	16.5	12.3	2228.35	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	粗砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2175	465	E5	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	20	10.5	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2176	466	J7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	21	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2177	466	F6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	22.4	9.6	—	28.6	5645.1	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	橙	—	—	
2178	467	E5	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	28	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2179	468	J6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	33	13.2	43	34	12494.9	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	粗砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2180	469	I6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	19.2	11	29.4	24.4	3435	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2181	469	I7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	20	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2182	470	I7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	23.2	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
2183	470	F6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	57.5	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鋸歯状突起	—	砂粒、小礫	にぶい黄褐	—	—	
2184	471	J6,J7,K7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	33	15.5	53.2	48	24683.7	口～底部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
2185	472	H6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	21	10	35	25.5	4230	口～胴部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2186	472	J7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	20	9	—	23.5	—	口縁部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
2187	473	I7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	22.5	—	—	—	3770	口～胴部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2188	473	I6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	橙	○	—	
2189	473	B02	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	赤褐	—	—	
2190	473	F5	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2191	473	I7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	橙	○	○	
2192	474	E5	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、有節沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2193	474	A4	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鋸歯状突起	—	砂粒	赤褐	—	—	
2194	474	I7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鋸歯状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2195	474	G6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鋸歯状突起	—	砂粒	明褐	○	—	
2196	474	F5	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鋸歯状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2197	474	B02	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	赤褐	—	○	
2198	474	F6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鋸歯状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2199	474	F6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2200	474	F6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	明赤褐	○	—	
2201	474	G6	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2202	474	I7	Ⅳ	Ⅱ3c1	深鉢形土器	H	21	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2203	475	A1	Ⅳ	Ⅱ3c2	鉢形土器	H	22.4	12.4	—	11.6	2463.7	口～底部	半隆起線文、把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2204	475	B5	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	—	17.2	—	31.2	10128.9	口～底部	半隆起線文	—	細砂粒	浅黄橙	—	○	
2205	475	I7	Ⅳ	Ⅱ3c2	鉢形土器	I	20	9.6	20.2	16.4	2056	口～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	粗砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2206	476	J7	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	26	12.2	36.8	26.4	4738.3	口～底部	半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	底部網代痕
2207	477	I7	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	24.4	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	—	○	
2208	477	C5	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	21.5	9	21	18	1810.2	口～底部	半隆起線文、基隆帯、眼鏡状突起	—	砂粒	灰白	—	—	
2209	477	C5	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	20	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2210	478	C5,E6,F5	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	41	21	66.5	51.5	29840	口～胴部	半隆起線文	—	—	浅黄橙	—	—	
2211	479	G6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	—	8.4	—	20.4	2046	口～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
2212	479	D6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	—	12	—	22.8	4280	口～底部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	赤褐	—	○	
2213	479	H6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	H	30	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第 33 表　土器観察表（23）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2214	479	A01	Ⅳ	Ⅱ3c2	鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2215	479	H6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、キザミ	—	砂粒	明褐	—	—	
2216	479	C5	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刻目隆帯	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2217	480	H6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2218	480	B5	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
2219	480	D6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2220	480	D6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刻目隆帯	—	砂粒	にぶい赤褐	—	—	
2221	480	I6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2222	480	J7	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2223	480	D6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	明褐	—	—	
2224	481	I7	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、橋状把手	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
2225	481	F6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、X字状破手	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2226	481	D6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、眼鏡状突起	—	明褐色粒子	浅黄橙	—	—	
2227	481	J7	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2228	481	J6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、交互刺突文	—	砂粒	橙	○	—	
2229	481	J6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2230	481	I7	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、橋状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2231	481	I6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、橋状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2232	482	H7	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2233	482	F6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2234	482	D6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
2235	482	F5	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	—	にぶい黄橙	○	—	
2236	482	F6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、突起	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2237	482	D6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2238	482	F6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2239	482	F6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
2240	483	F6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、赤色粒子	にぶい橙	—	—	
2241	483	J7	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	橙	—	—	
2242	483	I6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2243	483	F6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	2245と接合
2244	483	F5	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2245	483	F6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	橙色粒子	にぶい橙	—	○	2243と接合
2246	483	F5	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	橙色粒子	灰白	○	—	
2247	483	F6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2248	483	H6	Ⅳ	Ⅱ3c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2249	484	—	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	21	10.8	24.8	24	3910	口～底部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒、小礫	にぶい橙	○	○	
2250	484	F5	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	16.8	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、突起	—	砂粒	橙	○	—	
2251	484	H7	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2252	484	I6	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	橙	○	—	
2253	484	H6	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2254	485	J7	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	21	13	31.6	28.4	6668.5	口～底部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	○	底部に網代痕
2255	485	A01	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	黄橙	○	—	
2256	485	D5	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2257	486	J6	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	H	22	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	橙	—	—	
2258	486	B4	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、X字状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2259	486	I7	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	明赤褐	—	—	
2260	486	I7	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2261	486	H7	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2262	486	E6	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
2263	486	C5	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2264	486	B5	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2265	486	B4	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2266	486	F6	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2267	486	I6	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2268	486	F5	Ⅳ	Ⅱ3c3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒、赤色粒子	明黄褐	○	—	
2269	487	J7	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2270	487	F5	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	赤褐	○	—	
2271	487	I6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2272	487	I6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯、S字状文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2273	487	F6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2274	487	F6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
2275	487	E6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	○	—	
2276	487	F6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2277	487	I7	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2278	487	D6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	9	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2279	487	I6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2280	487	C3	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
2281	487	C3	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
2282	488	F5	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	16.6	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2283	488	F6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	7.5	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2284	488	F6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	6	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、懸垂文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2285	488	A02	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	12.4	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2286	488	I6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	10	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、S字状文	—	砂粒、小礫	橙	—	—	底部に網代痕
2287	489	E6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	13.8	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2288	489	I7	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、小礫	明黄褐	○	—	
2289	489	J7	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
2290	489	C5	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	14.3	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2291	489	I6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	17	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2292	489	F5	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	10	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2293	489	E6	Ⅳ	Ⅱ3c	深鉢形土器	—	—	13.8	—	—	—	胴～底部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	浅黄橙	○	—	底部に網代痕
2294	490	F5,F6,G6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	23	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
2295	490	H6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	17.7	9	20.4	20.4	1580	口～底部	半隆起線文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
2296	490	G6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	E	20.8	11.2	24.4	22.8	3134	口～底部	半隆起線文	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	○	
2297	491	I7	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	17.7	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、刻目隆帯	—	砂粒	橙	○	—	
2298	491	H6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	16.2	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	橙	○	—	
2299	491	E6,F6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刻目隆帯	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2300	491	F6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刻目隆帯	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
2301	491	E5	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刻目隆帯	—	橙色粒子	橙	○	—	
2302	491	F6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、懸垂文	—	砂粒、小礫	赤褐	○	○	
2303	491	I7	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2304	491	E6,F6	Ⅳ	Ⅱ3d	鉢形土器	K	18.9	13.5	12.6	12.6	1935.7	口～底部	半隆起線文、区画内充填沈線	—	砂粒	橙	—	—	
2305	492	D5	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	25.2	11.6	24.4	22.8	4500	口～底部	半隆起線文、区画内充填沈線	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2306	492	H6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	20.8	10	20.8	20.4	2592.2	口～底部	半隆起線文、区画内充填沈線	—	白色粒子、小礫	橙	○	—	
2307	492	G6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	15.6	7.6	21.2	20.4	1489	口～底部	懸垂文、渦巻文、三叉文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2308	493	I6,I7	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	15.6	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文、渦巻文	—	—	赤褐	—	○	
2309	493	G6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	15.8	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第 34 表　土器観察表（24）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2310	493	D5	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	—	9.8	—	—	—	胴～底部	懸垂文、渦巻文	—	砂粒	橙	—	—	
2311	493	H6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	19	8.4	20	18.8	1812.1	口～底部	突起、半隆起線文、懸垂文	縄文LR	白色粒子、小礫	赤褐	○	—	
2312	494	J7	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	21.6	10.8	23.6	21.2	3480.8	口～底部	半隆起線文、懸垂文	—	砂粒	黄橙	○	○	底部に網代痕
2313	494	H7	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	29.2	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫	明赤褐	○	○	
2314	494	G6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	13.2	6.4	16	15.4	997	口～底部	懸垂文、平行沈線	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2315	494	J7	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	18.5	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、懸垂文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
2316	495	H6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	D	14	7.6	20.8	20.8	1245	口～底部	半隆起線文、懸垂文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2317	495	G6,H6	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	B	11.7	—	—	—	—	口～胴部	沈線	—	砂粒	明赤褐	○	○	
2318	495	A02	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2319	495	C5	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、細沈線	—	砂粒	橙	○	—	
2320	495	J7	Ⅳ	Ⅱ3d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	明黄褐	○	○	内面赤彩
2321	495	J7	Ⅳ	Ⅱ3d	台付鉢	—	16.8	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2322	495	D6	Ⅳ	Ⅱ3e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2323	495	J7	Ⅳ	Ⅱ3e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形文	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
2324	496	D5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	D	14.3	—	—	—	—	口～胴部	平行沈線、懸垂文	—	赤色粒子、小礫	橙	—	—	
2325	496	H6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文LR	砂粒	赤褐	—	—	
2326	496	K7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、注口部	—	砂粒	赤褐	○	○	
2327	496	D5	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、刺突	—	砂粒	赤褐	○	—	
2328	496	H7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、懸垂文	—	砂粒	橙	○	—	
2329	496	F6	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	橙色粒子	灰白	○	—	
2330	496	J7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	—	にぶい褐	○	—	
2331	496	I7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	14.7	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい橙	○	—	
2332	496	J7	Ⅳ	Ⅱ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2333	497	I7	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	43.6	—	—	—	—	口～底部	剣先文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2334	497	I7	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	26	12.8	34.6	34.6	7995	口～底部	剣先文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
2335	497	H6	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	13.8	—	—	—	—	口～胴部	隆帯文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2336	497	H6	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	12.5	—	—	—	—	口～胴部	剣先文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2337	498	J7	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	33	—	—	—	—	口～胴部	剣先文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2338	498	J7	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	18	—	—	—	—	口～胴部	隆帯文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2339	498	D4	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	25.2	11.2	32.8	32.8	5700	口～底部	剣先文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2340	498	I7	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	30	—	—	—	—	口～胴部	剣先文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2341	498	J7	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	16.8	6.6	19.8	19.8	1700	口～底部	剣先文	縄文RL	砂粒	明褐	○	○	
2342	499	J7	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	25	—	—	—	—	口縁部	小突起、隆帯	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
2343	499	C1	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文	縄文RL	砂粒	明赤褐	○	○	
2344	499	F6	Ⅴ	Ⅱ4a1	深鉢形土器	I	33.6	—	—	—	—	口縁部	剣先文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2345	499	I7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	I	19.6	9.6	30	27.6	4260	口～底部	剣先文、沈線区画、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2346	499	F6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	頸～胴部	沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2347	499	H6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文、沈線区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2348	499	E6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口～頚部	刺突文、沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2349	500	H7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	O	25	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線区画	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2350	500	H5	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯文、沈線区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2351	500	I7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2352	500	H7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	21	—	—	—	—	口～胴部	隆帯文、沈線区画、懸垂文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	—	
2353	500	I7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2354	500	F5	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2355	500	E5	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	20	—	—	—	—	口縁部	剣先文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2356	500	I7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2357	500	C4	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	14	—	—	—	—	口縁部	剣先文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2358	500	I7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
2359	501	I7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文、渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
2360	501	G6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2361	501	F6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2362	501	H6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2363	501	E6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文、突起	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2364	501	J7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	20	—	—	—	—	口縁部	隆帯文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2365	501	H6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	40	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、剣先文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2366	501	F6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線区画、波状文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2367	501	H6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2368	502	I7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	I	36.8	16	50.6	50.6	18390	口～底部	渦巻文、剣先文、波状文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2369	503	G6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、隆帯、波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2370	503	H6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2371	503	E6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	31	—	—	—	—	口縁部	中空突起、隆帯文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	
2372	503	E5	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、隆帯文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2373	503	I6	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	I	42	—	—	—	—	口～胴部	中空突起、隆帯文、剣先文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2374	503	H7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、未調整隆帯	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2375	504	I7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—		—	—	—	—	口縁部	中空突起	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2376	504	J7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—		—	—	—	—	口～胴部	中空突起、平行沈線	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2377	505	I7	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	I	16.4	8.4	28.8	21.2	2010	口～底部	中空突起、剣先文、懸垂文	縄文RL	—	にぶい黄橙	○	○	
2378	505	A5	Ⅴ	Ⅱ4a2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2379	505	E6	Ⅴ	Ⅱ4	深鉢形土器	—	20	—	—	—	—	口～頚部	交互刺突文、渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2380	506	J7	Ⅴ	Ⅱ4a3	深鉢形土器	I	30	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2381	506	I7	Ⅴ	Ⅱ4a3	深鉢形土器	I	24.8	11.2	28.8	28.8	4670	口～底部	剣先文、沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2382	506	D5	Ⅴ	Ⅱ4a3	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	剣先文、沈線	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2383	506	F6	Ⅴ	Ⅱ4a3	深鉢形土器	—	30	—	—	—	—	口～頚部	隆帯、沈線	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2384	507	I7	Ⅴ	Ⅱ4a3	深鉢形土器	I	29.5	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線、中空突起	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2385	507	J7	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	22	—	—	—	—	口～頚部	剣先文、沈線	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2386	507	I7	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	20.3	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2387	507	G6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	27	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、沈線、波状文、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
2388	507	F6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	22	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、沈線、波状文、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2389	508	J7	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	17	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2390	508	J7	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	14	—	—	—	—	口～頚部	剣先文、沈線、懸垂文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
2391	509	F6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	23	—	—	—	—	口～頚部	隆帯、沈線	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2392	509	E5	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	剣先文、沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2393	509	F6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	渦巻文、沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2394	509	H6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	20	—	—	—	—	口～頚部	中空突起	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2395	510	I6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線	—	砂粒	橙	○	—	
2396	510	E5	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	22	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線、懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2397	510	B1	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	26	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線、波状文、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2398	510	G6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口～胴部	渦巻文、沈線、波状文、懸垂文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	橙	—	○	
2399	511	H6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	I	28.4	14	38.4	37.6	11700	口～胴部	剣先文、沈線、波状文、懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2400	511	F6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文、沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2401	511	F5	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文、沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2402	512	B1	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	O	38.4	—	57	—	41400	口～胴部	渦巻文、沈線	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2403	512	H6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	25.6	—	—	—	—	口～頚部	渦巻文、剣先文、沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2404	512	G6	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線	—	砂粒	橙	—	—	
2405	512	F5	Ⅴ	Ⅱ4a4	深鉢形土器	—	25	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	○	

第 35 表　土器観察表（25）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2406	513	J7	V	II4a4	深鉢形土器	I	19.8	8.1	27	25.2	3803.6	口～底部	剣先文、沈線、波状文	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
2407	513	I5	V	II4a4	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2408	513	I6	V	II4a4	深鉢形土器	I	19.5	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2409	513	F6	V	II4a4	深鉢形土器	I	23	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
2410	513	G6	V	II4a4	深鉢形土器	—	27	—	—	—	—	口～胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
2411	514	J7	V	II4a4	深鉢形土器	I	17.4	7.8	22.2	22.2	2335	口～底部	剣先文、沈線、渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2412	514	J7	V	II4a4	深鉢形土器	I	19.2	6	—	23.4	2580	口～底部	剣先文、沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2413	514	I7	V	II4a4	深鉢形土器	O	25.6	—	—	—	—	口～頚部	剣先文、沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2414	514	F5,F6	V	II4a4	深鉢形土器	—	25.6	—	—	—	—	口～胴部	中空突起、沈線、沈線区画	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
2415	515	H6	V	II4a4	深鉢形土器	D	22	—	—	—	—	口～胴部	中空突起、平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
2416	515	J7	V	II4a4	深鉢形土器	O	28	—	—	—	—	口～胴部	中空突起、平行沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2417	516	J7	V	II4a4	深鉢形土器	O	29	—	—	—	—	口～胴部	中空突起、沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙			
2418	516	F6	V	II4a4	深鉢形土器	I	32	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、眼鏡状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2419	517	I7	V	II4a	深鉢形土器	O	10.2	—	—	—	675	口～胴部	充填沈線文、渦巻文	撚糸L	砂粒	浅黄橙	—	—	
2420	517	H6	V	II4a	深鉢形土器	O	—	6.6	—	—	—	口～胴部	突起、渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい橙	○	○	
2421	517	I7	V	II4a	鉢形土器	L	10	—	—	—	—	口～底部	中空突起、渦巻文	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2422	517	J7	V	II4a	鉢形土器	L	14.4	7.2	16.2	12.8	1410	口～底部	中空突起、渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	○	○	
2423	517	I6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
2424	517	K7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	鎖状隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2425	517	I7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文、渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
2426	517	H6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
2427	517	D5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2428	517	—	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	—	
2429	517	H7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	鎖状隆帯、平行沈線	縄文RL	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	○	○	
2430	518	J7	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2431	518	F6	V	II4a5	深鉢形土器	—	16	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文	縄文LR	砂粒	明黄褐	○	○	
2432	518	F6	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2433	518	G6	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2434	518	F6	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2435	518	F6	V	II4a5	深鉢形土器	C	20	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文	縄文LR	砂粒	灰黄	○	○	
2436	519	I7	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	○	
2437	519	E6	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2438	519	J7	V	II4a5	深鉢形土器	—	34	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文、沈線区画	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2439	519	E5	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2440	519	E5	V	II4a5	深鉢形土器	J	36	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文、沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2441	519	B1	V	II4a5	深鉢形土器	J	216	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文、沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
2442	520	B1	V	II4a5	深鉢形土器	J	35.6	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文、沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2443	520	I6	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2444	520	F7	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線、玉抱三叉文	縄文RL	砂粒	赤褐	—	—	
2445	520	H6	V	II4a5	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文、平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2446	520	H6	V	II4a5	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文、平行沈線	縄文RL	砂粒、小礫	橙	○	—	
2447	520	J7	V	II4a5	深鉢形土器	D	13.5	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい褐	○	○	
2448	520	K7	V	II4a5	深鉢形土器	D	14.4	—	—	—	—	口～胴部	横位渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄橙	—	○	
2449	521	F6	V	II4a6	深鉢形土器	D	26.1	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2450	521	H6	V	II4a6	深鉢形土器	D	16.7	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2451	521	F6	V	II4a6	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
2452	521	C4	V	II4a6	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	剣先文、沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
2453	521	G6	V	II4a6	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2454	521	G6	V	II4a6	深鉢形土器	D	25.5	—	—	—	—	口～胴部	沈線区画、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2455	521	C4	V	II4a6	深鉢形土器	D	18.6	—	—	—	—	口～胴部	沈線区画、平行沈線、懸垂文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
2456	522	E5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2457	522	H7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	沈線区画、波状文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
2458	522	H5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2459	522	J7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2460	522	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	沈線区画、波状文	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
2461	522	J6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、懸垂文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
2462	522	J7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2463	522	H6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	沈線区画、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2464	522	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、懸垂文、弧線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2465	522	G6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2466	523	D5	V	II4a	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	頸～胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2467	523	C4	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行沈線文、平行沈線	撚糸L	砂粒	明黄褐	—	—	
2468	523	C4	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2469	523	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2470	523	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2471	523	F5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2472	523	J7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2473	523	F5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2474	523	G6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2475	523	J7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2476	523	H6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2477	524	D6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文RL	砂粒	黄橙	—	—	
2478	524	G6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2479	524	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
2480	524	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	沈線区画、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
2481	524	E5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	灰白	○	○	
2482	524	E6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
2483	524	H7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
2484	524	E6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
2485	524	I7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	—	
2486	525	H7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2487	525	F5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2488	525	E6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2489	525	I6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
2490	525	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2491	525	E5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	9.6	—	—	—	胴～底部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2492	525	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	10.2	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
2493	525	J7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	7.8	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2494	525	J7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	8.1	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2495	526	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2496	526	G6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	10	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
2497	526	I6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	14.8	—	—	—	胴～底部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2498	526	H6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	12.8	—	—	—	胴～底部	懸垂文、蛇行懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
2499	526	J7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	12.3	—	—	—	胴～底部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2500	527	D4	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	平行沈線	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	—	
2501	527	I6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	

第 36 表　土器観察表（26）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2502	527	H6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
2503	527	E6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2504	527	H6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2505	527	H6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2506	527	E6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	沈線区画、波状文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2507	527	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2508	527	G6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文、剣先文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2509	527	E6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2510	527	F6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2511	528	I7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	平行沈線、渦巻文、波状文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	○	○	
2512	528	F5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	平行沈線、渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2513	528	D5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	平行沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2514	528	E5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文RL	砂粒、赤色粒子	明黄褐	○	○	
2515	529	J7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	平行沈線、渦巻文、眼鏡状突起	縄文RL	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	—	—	
2516	529	E5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、眼鏡状突起	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2517	529	E5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、眼鏡状突起	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2518	529	D5	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、渦巻文、眼鏡状突起	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2519	530	D4	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、剣先文、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	黄橙	○	○	
2520	530	I6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、懸垂文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2521	530	H6	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、剣先文	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
2522	530	I7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
2523	530	I7	V	II4a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
2524	531	F5	V	II4b1	深鉢形土器	I	14.8	7.2	31.2	24	2775	口～底部	中空突起、矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2525	531	F5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	中空突起、矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2526	531	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	16	—	—	—	—	口～頚部	剣先文、充填沈線文	—	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	○	—	
2527	531	D5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	腕骨文、剣先文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2528	531	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	中空突起、矢羽状沈線文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
2529	531	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頚部	隆帯	—	砂粒	明黄褐	—	○	
2530	531	B4	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頚部	剣先文、X字状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2531	532	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—		—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2532	530	D4	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2533	532	D4	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2534	532	H7	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2535	532	G6	V	II4b1	深鉢形土器	—	46	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2536	533	E5,F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	39	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2537	533	E5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2538	533	J7	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2539	533	E5,F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2540	533	H6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線、剣先文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
2541	533	H7	V	II4b1	深鉢形土器	—		—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	○	
2542	533	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2543	534	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒	橙	—	—	
2544	534	I7	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2545	534	D5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2546	534	H5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2547	534	E5,F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	24	—	—	—	—	口～頚部	中空突起、沈線	—	砂粒	橙	○	○	
2548	534	D4	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	沈線、剣先文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2549	534	D5	V	II4b1	深鉢形土器	—	20	—	—	—	—	口～頚部	沈線、剣先文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2550	534	I7	V	II4b1	深鉢形土器	—	26	—	—	—	—	口～頚部	隆帯文、沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2551	535	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒	橙	—	○	
2552	535	A01	V	II4b1	深鉢形土器	—	21.6	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2553	535	F5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2554	535	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	18.3	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2555	535	H6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、隆帯	—	砂粒	にぶい橙	○	○	
2556	535	H7	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2557	535	C5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2558	535	J5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、渦巻文	—	砂粒、小礫	橙	—	○	
2559	535	H7	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、隆帯	—	砂粒	明黄褐	○	○	
2560	535	I7	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、隆帯	—	砂粒	橙	○	○	
2561	535	H6	V	II4b1	深鉢形土器	—	20	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒	灰白	○	○	
2562	535	E5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2563	535	G6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線、隆帯	—	砂粒	にぶい橙	—	○	
2564	536	D5	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2565	536	H7	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、隆帯、突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2566	536	D4	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2567	536	A02	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2568	536	C4	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、剣先文	—	砂粒	橙	○	○	
2569	536	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、渦巻状突起	—	砂粒	明黄褐	○	○	
2570	536	J7	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、把手	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2571	536	H6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	C字状突起	—	砂粒	明黄褐	○	○	
2572	536	I7	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2573	536	F6	V	II4b1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起	—	砂粒	橙	○	—	
2574	537	J7	V	II4b2	深鉢形土器	J	19	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、渦巻文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2575	537	D5	V	II4b2	深鉢形土器	J	18.2	9.6	33.4	30.2	4220	口～胴部	矢羽状沈線文、玉抱三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2576	537	E5	V	II4b2	深鉢形土器	D	14	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、眼鏡状突起	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
2577	538	J7	V	II4b2	深鉢形土器	J	12.3	6	18	16.4	905	口～胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	橙	○	—	
2578	538	F6	V	II4b2	深鉢形土器	J	20	10	28	25	5025	口～胴部	矢羽状沈線文、剣先文、懸垂文	—	砂粒	橙	○	○	
2579	538	H7	V	II4b2	深鉢形土器	J	38	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2580	539	D5	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	黄橙	—	—	
2581	539	F6	V	II4b2	深鉢形土器	D	20	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2582	539	I6	V	II4b2	深鉢形土器	D	21.5	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2583	539	C4	V	II4b2	深鉢形土器	—	16	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、X字状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2584	539	B4	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
2585	539	F6	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	X字状突起、剣先文、渦巻文	—	砂粒	橙	○	○	
2586	539	G6	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	矢羽状沈線文、横位渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2587	539	D5	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	剣先文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2588	540	C4	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい橙	—	—	
2589	540	C4	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	剣先文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2590	540	F6	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2591	540	J7	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	矢羽状沈線文、剣先文	—	砂粒	橙	○	—	
2592	540	I7	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	渦巻文、懸垂文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2593	540	I7	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～頚部	X字状突起、渦巻文	—	砂粒	灰白	—	—	
2594	540	B5	V	II4b2	深鉢形土器	—	18	—	—	—	—	口～頚部	剣先文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2595	540	G6	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2596	540	E5	V	II4b2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、眼鏡状突起	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
2597	540	C4	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頚～胴部	矢羽状沈線文、X字状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	

第 37 表　土器観察表（27）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2598	540	D5	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、X字状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2599	540	—	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、X字状突起	—	砂粒	橙	—	○	
2600	540	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、X字状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2601	541	A01	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	矢羽状沈線文、剣先文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2602	541	G6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2603	541	C4	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、剣先文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2604	541	G6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	橙	○	○	
2605	541	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2606	541	G6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2607	541	H6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2608	541	F5	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2609	541	B02	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、眼鏡状突起	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2610	541	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2611	541	D5	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸～胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2612	542	B4	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2613	542	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
2614	542	C4	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2615	542	C4	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2616	542	G6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	橙	—	○	
2617	542	H6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	橙	—	—	
2618	542	A1	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2619	542	E5	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2620	542	D5	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2621	542	H6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2622	542	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2623	542	I7	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	橙	—	○	
2624	543	D2	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	橙	—	—	
2625	543	H7	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2626	543	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2627	543	D5	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	橙	○	○	
2628	543	J7	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2629	543	E4	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2630	543	G6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2631	543	C3	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2632	543	B4	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2633	543	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2634	543	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2635	543	E6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	8	—	—	—	胴～底部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2636	543	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2637	543	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	矢羽状沈線文、腕骨文	—	砂粒	橙	○	○	
2638	544	G6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
2639	544	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
2640	544	G6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、剣先文、懸垂文	—	砂粒、小礫	灰白	○	○	
2641	544	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2642	544	G6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2643	544	F6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、懸垂文、剣先文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2644	544	D4	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、懸垂文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2645	544	E5	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴～底部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	にぶい橙	○	—	
2646	544	K7	V	II4b	深鉢形土器	—	—	9.6	—	—	—	胴～底部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	橙	○	○	
2647	544	G6	V	II4b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文、懸垂文、渦巻文	—	砂粒	淡黄	○	—	
2648	544	J7	V	II4b	深鉢形土器	—	—	7.5	—	—	—	胴～底部	矢羽状沈線文、懸垂文	—	砂粒	橙	—	—	
2649	545	G6	V	II4c	深鉢形土器	I	18	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2650	545	I8	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2651	545	F6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい褐	○	—	
2652	545	I7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
2653	545	H6	V	II4c	深鉢形土器	A	21	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、双頭渦巻文	—	砂粒、小礫	灰白	○	○	
2654	545	C5	V	II4c	深鉢形土器	A	28	10	33.5	3.5	11530	口～胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	—	○	
2655	545	G6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2656	545	H7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、双頭渦巻文	—	砂粒	橙	—	—	
2657	546	C5	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2658	546	H6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2659	546	F6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2660	546	I7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2661	546	H6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい橙	—	○	
2662	546	I7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	橙	—	—	
2663	546	H6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2664	546	H5	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、隆帯文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2665	546	E5	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2666	546	F6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、腕骨文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2667	546	I7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
2668	546	F6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2669	546	F6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	橙	○	—	
2670	546	H6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2671	546	G7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2672	546	H6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2673	546	G6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2674	546	D5	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
2675	546	I7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
2676	547	I7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、渦巻文	—	砂粒	にぶい褐	○	—	
2677	547	G6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2678	547	B3	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2679	547	G6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、矢羽状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2680	547	D5	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
2681	547	B02	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫	にぶい褐	○	○	
2682	547	J7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	矢羽状沈線文、双頭渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2683	547	H6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2684	547	I6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2685	547	I7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、条線文	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
2686	547	F5	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2687	547	D5	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、条線文	—	砂粒	橙	—	—	
2688	547	D5	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2689	548	J7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	双頭渦巻文、条線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2690	548	I7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2691	548	G8	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	撚糸R	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2692	548	I7	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2693	548	I6	V	II4c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	撚糸R	砂粒	黄橙	○	—	

第 38 表　土器観察表（28）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2694	548	H7	V	II4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	○	—	
2695	548	E5	V	II4d	深鉢形土器	J	13.2	6.6	14.6	14.6	924	口～底部	眼鏡状突起、矢羽状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2696	548	H8	V	II4d	深鉢形土器	O	21	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、弧線文	—	砂粒	にぶい橙	○	—	
2697	548	G6	V	II4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、弧線文	—	砂粒	橙	○	○	
2698	549	G5,H5	V	II4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、弧線文	—	砂粒	橙	○	○	
2699	549	H6	V	II4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、弧線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2700	549	B3	V	II4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、弧線文	—	砂粒	橙	○	—	
2701	549	H6	V	II4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、弧線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2702	549	B4	V	II4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、弧線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2703	549	H6	V	II4d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、弧線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2704	549	H6	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刺突	—	砂粒	橙	—	○	
2705	549	I7	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、細沈線	—	砂粒	灰白	○	—	
2706	549	H6	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突	—	砂粒	橙色	—	○	
2707	549	G6	V	II4	深鉢形土器	—	21	—	—	—	—	口縁部	平行沈線、刺突	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2708	549	H6	V	II4	深鉢形土器	—	21	—	—	—	—	口縁部	平行沈線	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2709	549	D5	V	II4	深鉢形土器	—	31	—	—	—	—	口縁部	双頭渦巻文、鋤先文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2710	549	E6	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	灰白	—	—	
2711	550	D2	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2712	550	G6	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2713	550	E6	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2714	550	H6	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2715	550	H7	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2716	550	I7	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2717	550	G5	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、刺突	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2718	550	I5	V	II4	深鉢形土器	—	29.4	—	—	—	—	口～胴部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2719	550	G5	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2720	550	H6,H7	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2721	550	H7	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
2722	550	G6	V	II4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2723	551	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	30.8	—	—	—	22450	口～胴部	刻目隆帯、渦巻文	不明	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	—	—	
2724	551	J7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2725	551	E4	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2726	551	H8	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
2727	551	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
2728	551	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
2729	551	H8	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	黄橙	—	—	
2730	551	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒	にぶい橙	○	—	
2731	552	H4	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒	褐灰	—	—	
2732	552	H6	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2733	552	A4	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒、白色粒子	橙	—	—	
2734	552	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2735	552	I7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2736	552	H8	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
2737	552	I7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2738	552	I7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2739	552	I5	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2740	552	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、渦巻文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2741	552	H8	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、渦巻文	—	小礫	にぶい黄橙	○	—	
2742	552	H5	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、刺突	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2743	552	A3	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、懸垂文、刺突	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2744	552	A3	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、懸垂文、刺突	縄文L	砂粒	灰白	—	—	
2745	552	A3	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、懸垂文、刺突	縄文LR	砂粒	淡黄	—	—	
2746	552	D3	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、懸垂文、渦巻文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
2747	552	I6	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、懸垂文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2748	553	H4	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2749	553	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒、小礫	橙	—	—	
2750	553	A3	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2751	553	J3	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2752	553	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒、小礫	橙	—	—	
2753	553	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2754	553	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒	橙	—	—	
2755	553	J5	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文LR	砂粒	淡黄	○	○	
2756	553	K5	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
2757	553	C6	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2758	553	E2	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	縄文LR	砂粒、小礫	灰黄褐	○	○	
2759	553	H7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2760	553	G5	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2761	553	I7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	—	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
2762	554	H4	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、渦巻文、刺突	縄文LR	砂粒、小礫	明黄褐	○	—	
2763	554	H8,I8	VI	II5a1	深鉢形土器	S	26.8	—	—	—	13100	口縁部	隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2764	554	H4	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、渦巻文、刺突	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2765	554	E6	VI	II5a1	深鉢形土器	A	42	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2766	554	C4	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2767	554	E5	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
2768	554	J7	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2769	554	D5	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2770	554	F6	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2771	554	F6	VI	II5a1	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	補修孔
2772	555	I6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2773	555	J5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2774	555	G4	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、渦巻文	—	砂粒、小礫	灰白	—	—	
2775	555	I6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2776	555	G4	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄	○	○	
2777	555	I6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	—	砂粒	灰白	—	—	
2778	555	H6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2779	555	I6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2780	555	C3	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2781	555	H7	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
2782	555	G5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2783	555	K4	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2784	555	I5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2785	555	A3	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2786	555	E6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
2787	555	I5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	灰白	—	○	
2788	555	I5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、突起	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2789	555	H4	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、突起	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	

第 39 表　土器観察表（29）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2790	555	E2	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、懸垂文、沈線	—	砂粒、小礫	灰白	—	—	
2791	555	I5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、懸垂文、沈線	—	砂粒、小礫	灰白	—	—	
2792	555	D3	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、懸垂文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2793	556	I6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
2794	556	I6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2795	556	A4	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
2796	556	I6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2797	556	E6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2798	556	—	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
2799	556	H5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
2800	556	F4	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2801	556	F7	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
2802	556	J6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2803	556	C5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2804	556	H5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
2805	556	J6	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、渦巻文	縄文L	灰黄色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2806	556	K9	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、渦巻文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2807	556	J4	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	小礫	黄橙	—	—	
2808	556	C5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線＋刺突	—	小礫	浅黄橙	○	○	
2809	556	E3	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒、小礫	灰白	○	○	
2810	556	G5	VI	II5a2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文L	砂粒	橙	—	—	
2811	557	H7	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	灰白	—	—	
2812	557	—	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、短沈線、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2813	557	G8	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2814	557	H7	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2815	557	H8	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2816	557	G8	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2817	557	F6	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒、小礫	明黄褐	○	—	
2818	557	H7	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2819	557	I7	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2820	557	J7	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突	—	砂粒、小礫	明褐	○	○	
2821	557	I7	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2822	557	H7	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2823	557	H7	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2824	557	J8	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
2825	557	H5	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、コブ状突起	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
2826	557	K9	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、コブ状突起	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2827	558	G7	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、コブ状突起	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄橙	—	○	
2828	558	H5	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、コブ状突起	縄文L	砂粒、小礫	橙	—	○	
2829	558	F6	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、コブ状突起	—	小礫	浅黄橙	—	—	
2830	558	D3	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、コブ状突起	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
2831	558	D3	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、コブ状突起	—	小礫	浅黄橙	○	○	
2832	558	A4	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文RL	小礫	にぶい黄橙	○	○	
2833	558	E6	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2834	558	F6	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2835	558	A3	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2836	558	A3	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
2837	558	I6	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文L	小礫	にぶい黄橙	○	○	
2838	558	I6	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文L	砂粒、小礫	灰黄褐	○	○	
2839	558	I5	VI	II5a4	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
2840	558	A3	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突、渦巻文、懸垂文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2841	558	A3	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突、渦巻文、懸垂文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2842	558	H4	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2843	558	B3	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	—	小礫	明黄褐	—	—	
2844	558	D6	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
2845	558	H5	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2846	558	—	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2847	558	H5	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、コブ状突起	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
2848	559	G3	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	縄文L	小礫	にぶい黄褐	○	○	
2849	559	I6	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2850	559	C4	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、沈線	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	○	
2851	559	I6	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線＋刺突	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
2852	559	B3	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線＋刺突	縄文L	砂粒	浅黄橙	—	—	
2853	559	H5	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文LR	砂粒、小礫	灰白	—	—	
2854	559	I5	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、懸垂文	—	小礫	にぶい黄橙	○	—	
2855	559	I6	VI	II5a5	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線＋刺突、懸垂文	縄文LR	砂粒、小礫	橙	—	○	
2856	559	I5	VI	II5a6	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、弧線文	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2857	559	E2	VI	II5a6	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、弧線文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄褐	○	○	
2858	559	—	VI	II5a6	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2859	559	J4	VI	II5a7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	双頭渦巻文、弧線文	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2860	559	A3	VI	II5a7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、弧線文	—	小礫	淡黄	—	—	
2861	559	A02	VI	II5a7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい黄褐	○	○	
2862	559	H7	VI	II5a7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、弧線文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2863	559	I4	VI	II5a7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、弧線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
2864	559	D3	VI	II5a7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	弧線文	—	小礫	淡黄	—	—	
2865	559	E5	VI	II5a7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文LR	小礫	浅黄橙	—	—	
2866	559	F6	VI	II5a7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2867	560	I7,J5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2868	560	J5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	蓋受状隆帯
2869	560	E6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2870	560	H5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	蓋受状隆帯
2871	560	G6,G7	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2872	560	A4	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	褐灰	○	○	
2873	560	C3	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	小礫	橙	—	○	
2874	560	J5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	橙	—	—	
2875	560	G7	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2876	560	I6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2877	560	I5,I6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	縄文L	灰黄色粒子	橙	—	○	
2878	560	E6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	灰白	○	○	
2879	560	H7	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	橙	—	○	
2880	560	H5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2881	560	F6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	明黄褐	○	○	
2882	560	I5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	縄文LR	小礫	にぶい黄橙	○	○	
2883	561	I6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、刺突	—	砂粒、小礫	灰黄褐	—	○	
2884	561	A4	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	橙	—	○	
2885	561	F6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	—	

第 40 表　土器観察表（30）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
2886	561	E4	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
2887	561	E1	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
2888	561	H6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2889	561	B3	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	褐灰	○	○	
2890	561	J7	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
2891	561	J4	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2892	561	F5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
2893	561	J8	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
2894	561	H5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2895	561	H5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	褐灰	○	○	
2896	561	F2	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2897	561	I5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2898	561	H4	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
2899	561	A01	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	明黄褐	○	—	
2900	561	I5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2901	561	F4	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、懸垂文	縄文LR	小礫	浅黄橙	○	○	
2902	561	I6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文、鎖状隆帯	—	小礫、赤色粒子	明黄褐	—	○	
2903	562	F6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	褐灰	—	○	
2904	562	I5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、沈線区画、横ハ字文	—	小礫	にぶい黄橙	—	○	
2905	562	I6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文、懸垂文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
2906	562	I6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、横ハ字文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2907	562	I5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文、懸垂文	縄文L	砂粒、小礫	橙	○	—	
2908	562	F6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	○	
2909	562	I6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	突起、横ハ字文、刺突列	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2910	562	J4	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2911	562	F6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2912	562	H7	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2913	562	G6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2914	562	D6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	横ハ字文	—	砂粒	橙	○	—	
2915	562	I5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2916	562	I5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2917	562	I6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒	橙	—	—	
2918	562	E5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2919	562	I7	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文、横ハ字文	—	砂粒	淡黄	○	—	
2920	562	G4	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒	橙	—	—	
2921	562	I5	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
2922	562	I6	VI	II5a8	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒	橙	—	—	
2923	563	I8,J7	VI	II5a8	深鉢形土器	A	22	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2924	563	I5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2925	563	F6	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR,L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2926	563	I5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2927	563	I5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	灰黄褐	—	—	
2928	563	I5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
2929	563	0A1	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
2930	563	A02	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	無節R	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2931	563	I6	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、横ハ字文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
2932	563	C5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、横ハ字文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2933	563	—	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2934	563	J6	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2935	563	I6	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	—	
2936	563	B4	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、横ハ字文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	蓋受状隆帯
2937	564	J8	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、横ハ字文、条線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2938	564	E6	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	○	
2939	564	D6	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	浅黄橙	—	—	
2940	564	D4	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
2941	564	G3	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	橙	—	—	
2942	564	I5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	灰白	—	—	
2943	564	H7	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	橙	—	○	
2944	564	I5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	灰白	—	—	
2945	564	J5,J7	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	鎖状隆帯、横ハ字文、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2946	564	H4	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄褐	○	○	
2947	564	H5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄褐	—	○	
2948	564	I5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
2949	564	F6	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文、条線文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2950	564	C2	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
2951	564	H5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2952	564	A1	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2953	564	H5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	鎖状隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	淡黄	○	—	
2954	564	F5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2955	565	I5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	灰白	—	○	
2956	565	A4	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2957	565	H4	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2958	565	G6	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	鎖状隆帯、横ハ字文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2959	565	E5	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2960	565	A4	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	橙	○	—	
2961	565	F4	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2962	565	D3	VI	II5a9	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横ハ字文	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
2963	565	I5	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2964	565	I6	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、橋状把手	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
2965	565	J7	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2966	565	I6	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突列	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2967	565	—	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、橋状把手、横ハ字文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2968	565	—	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突列、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2969	565	J6	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、橋状把手	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2970	565	I4	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、橋状把手	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2971	565	I4	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	橙	○	○	
2972	565	G5	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、橋状把手、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2973	565	I5	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、コブ状突起	縄文L	砂粒	橙	○	○	
2974	565	I5	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、楕円文、刺突	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
2975	565	I5	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	鎖状隆帯、楕円文、刺突	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2976	565	G7	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	楕円文、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2977	565	D6	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	楕円文、刺突	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
2978	566	E3	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突列	—	砂粒	橙	○	○	
2979	566	H4	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、円形突起、沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2980	566	E2	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、沈線、刺突	—	小礫	浅黄橙	○	○	
2981	566	I8	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	

第 41 表　土器観察表（31）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
2982	566	I7	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	橙	—	—	
2983	566	I6	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2984	566	H5	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒、小礫	明黄褐	○	—	
2985	566	E5	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2986	566	I5	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2987	566	E6	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	橙	—	—	
2988	566	I7	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2989	566	C5	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2990	566	E6	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2991	566	I7	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2992	566	I7	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2993	566	I7	VI	II5a10	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	—	砂粒	橙	○	—	
2994	566	E5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄橙	○	○	
2995	566	I6	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2996	566	E6	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2997	566	H7	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
2998	567	H5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	—	浅黄橙	—	—	
2999	567	H5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	—	にぶい黄橙	—	—	
3000	567	I5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	小礫	明黄褐	○	—	
3001	567	I5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3002	567	I6	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
3003	567	J5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	砂粒、小礫	灰白	—	—	
3004	567	H5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3005	567	I5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	—	にぶい黄橙	—	○	
3006	567	E2	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	補修孔
3007	567	G4	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3008	567	D2	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	○	○	
3009	567	I5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3010	567	E5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
3011	567	I5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3012	568	A1	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯	—	小礫	浅黄橙	—	—	
3013	568	I5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	小礫	浅黄橙	—	—	
3014	568	H3	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文L	小礫	明黄褐	—	—	
3015	568	I5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文L	砂粒	橙	—	—	
3016	568	H4	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3017	568	H5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	縄文LR	砂粒、小礫	褐	—	○	
3018	568	D5	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	圧痕隆帯	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	○	—	
3019	568	E7,H8	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3020	568	I6	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄褐	—	—	
3021	568	D2	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3022	568	H4	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	小礫	灰白	—	—	
3023	568	I6	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	橙色粒子	浅黄橙	—	—	
3024	568	A1	VI	II5b	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
3025	569	H7	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3026	569	B5	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3027	569	E6	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
3028	569	A3	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3029	569	H7	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3030	569	J8	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
3031	569	H7	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒、小礫	橙	○	—	
3032	569	A01	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3033	569	H7	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3034	569	—	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3035	569	H7	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
3036	569	I7	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	小礫	黄橙	—	—	
3037	569	H8	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3038	569	G6	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3039	570	G6	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
3040	570	E5	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3041	570	G4	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、懸垂文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
3042	570	E6	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、橋状把手	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
3043	570	G7	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、橋状把手、刻目隆帯	縄文RL	砂粒	淡黄	○	○	
3044	570	A02	VI	II5c1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	縄文RL	砂粒	淡黄	○	○	
3045	570	E6	VI	II5c1	深鉢形土器	A1	29.4	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
3046	570	H7	VI	II5c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3047	570	I7	VI	II5c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、貫通孔	縄文LR	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
3048	570	D2	VI	II5c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	微隆起線文	縄文LR	砂粒	褐灰	—	—	
3049	570	H5	VI	II5c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
3050	570	A4	VI	II5c2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	注口部、微隆起線文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3051	571	G3	VI	II5d1	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
3052	571	E6	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、磨消懸垂文	縄文複節	砂粒	浅黄	○	○	
3053	571	J8	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3054	571	E6	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3055	571	A3	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画	縄文RL	砂粒	灰黄	—	—	
3056	571	A3	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3057	571	I5	VI	II5d1	深鉢形土器	P	30	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、ワラビ手状文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
3058	572	H5	VI	II5d1	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画	縄文RL	砂粒	灰黄褐	—	—	
3059	572	I6	VI	II5d1	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、楕円区画	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3060	572	H8	VI	II5d1	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3061	572	I8	VI	II5d1	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3062	572	C2	VI	II5d1	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3063	572	I6	VI	II5d1	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3064	572	J6,J7	VI	II5d1	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3065	572	J8	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文、ワラビ手状文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3066	572	B4	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3067	572	F6	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄橙	—	○	
3068	572	D3	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文L	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
3069	572	I5	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3070	572	A3,A5	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3071	572	G3	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3072	572	E6	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3073	572	D3	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	灰白	○	—	
3074	572	D3	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3075	572	F6	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文、ワラビ手状文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3076	572	D3	VI	II5d1	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3077	573	I6	VI	II5d2	深鉢形土器	P	15.6	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、磨消縄文、刺突列	縄文LR	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	

第 42 表　土器観察表（32）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
3078	573	J5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、磨消縄文、刺突列	縄文LR	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3079	573	H5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
3080	573	H5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	縄文L	—	にぶい橙	—	—	
3081	573	A5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3082	573	C2	VI	II5d2	深鉢形土器	P	21	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	不明	砂粒、小礫	橙	○	○	
3083	573	J6	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3084	573	I5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	明赤褐	○	○	
3085	573	I5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	明赤褐	○	○	
3086	573	E5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
3087	573	B5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	淡黄	—	—	
3088	573	J7	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
3089	573	I5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3090	573	A4	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	○	
3091	573	I5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3092	573	D6	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	撚糸R	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
3093	573	00	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
3094	573	D3	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3095	573	B5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
3096	573	—	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	縄文LR	砂粒	明黄褐	○	○	
3097	574	B3	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、逆U字状文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3098	574	I5	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	—	橙	○	—	
3099	574	J7	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、小礫	橙	—	—	
3100	574	D3	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、逆U字状文	縄文RL	赤色粒子	にぶい橙	—	—	
3101	574	A3	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3102	574	D3	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	赤色粒子	橙	—	—	
3103	574	G6	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい橙	—	—	
3104	574	D3	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3105	574	A3	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	褐	—	○	
3106	574	I5	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、逆U字状文	縄文LR	小礫	淡黄	○	—	
3107	574	D3	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3108	574	E2	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、小礫	灰黄褐	—	—	
3109	574	J4	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文L	—	淡黄	—	—	
3110	574	K4	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、小礫	淡黄	—	○	
3111	574	A4	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
3112	574	J4	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
3113	574	D4	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文、刺突列	縄文LR	赤色粒子	橙	—	—	
3114	574	G5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文、刺突列	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3115	574	J5	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文、刺突列	—	砂粒	赤褐	○	○	
3116	574	E6	VI	II5d2	深鉢形土器	P	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突列	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
3117	574	H5	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、小礫	灰黄褐	—	○	
3118	575	H5	VI	II5d2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、磨消懸垂文	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3119	575	H5	VI	II5d2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、磨消懸垂文	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3120	575	H5	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3121	575	H5	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3122	575	E6	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	微隆起線文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
3123	575	B3	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3124	575	D2	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	斜行沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
3125	575	E2	VI	II5d2	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	微隆起線文、懸垂文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
3126	575	E2	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	微隆起線文、懸垂文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
3127	575	I6	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、微隆起線文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3128	575	I7	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	微隆起線文	縄文LR	砂粒	褐	○	○	
3129	575	E5	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	縄文LR	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
3130	576	I5	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文、懸垂文	縄文LR	小礫、赤色粒子	明黄褐	—	—	
3131	576	I6	VI	II5d2	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文、懸垂文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
3132	576	E6	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文、懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3133	576	D6	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、刺突	—	砂粒	明黄褐	○	—	
3134	576	E7	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3135	576	D3	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒、赤色粒子	明黄褐	—	—	
3136	576	A3,A4,E4	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突、沈線	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
3137	576	G6	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突、懸垂文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
3138	576	J5	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3139	576	F7	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、懸垂文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3140	576	H7	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3141	577	B3	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3142	577	E6	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3143	577	B2	VI	II5e	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3144	577	D5,E6	VI	II5g	両耳壺	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消懸垂文	縄文RL	砂粒	明赤褐	○	○	内外面赤彩
3145	577	F5	VI	II5h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	褐灰	—	—	
3146	577	J4	VI	II5h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	把手	把手	—	—	にぶい黄橙	—	—	内外面赤彩
3147	577	H5	VI	II5h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	内外面赤彩
3148	577	I6	VI	II5h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	微隆起線文	—	砂粒、赤色粒子	明黄褐	—	—	外面赤彩
3149	577	H5	VI	II5h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
3150	577	I5	VI	II5h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	—	砂粒、赤色粒子	明赤褐	—	—	
3151	577	H5	VI	II5h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	—	砂粒	灰白	—	—	内外面赤彩
3152	577	E6	VI	II5h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3153	577	D6	VI	II5h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3154	577	D5,E6	VI	II5f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文、懸垂文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3155	577	I7	VI	II5f	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文、刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3156	578	E5	III-IV	II6	有孔鍔付土器	A	23	12	47.5	47.5	25800	口～胴部	鍔、貫通孔、隆帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	内面赤彩
3157	578	D5	III-IV	II6	有孔鍔付土器	A	15.5	—	—	—	—	口縁部	鍔、貫通孔、突起	—	砂粒	明黄褐	—	○	外面赤彩
3158	579	F5	III-IV	II6	有孔鍔付土器	A	25	13.5	46	46	29520	口～胴部	鍔、貫通孔、隆帯文	—	砂粒、石英	にぶい黄橙	—	—	
3159	579	D5,E5	III-IV	II6	有孔鍔付土器	A	—	—	—	—	—	胴部	鍔、貫通孔、隆帯文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
3160	579	I7,J7	III-IV	II6	有孔鍔付土器	B	17.3	—	—	—	—	口縁部	鍔、貫通孔	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
3161	580	D5,E5	III-IV	II6	有孔鍔付土器	A	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3162	578	D6	III-IV	II6	有孔鍔付土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	鍔、貫通孔	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3163	580	F5	III-IV	II6	有孔鍔付土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	鍔、貫通孔	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3164	580	I7	III-IV	II6	有孔鍔付土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	鍔、貫通孔	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3165	580	D5	III-IV	II6	有孔鍔付土器	—	26	—	—	—	—	口縁部	鍔、貫通孔	—	砂粒	橙	—	—	外面赤彩
3166	580	D5	III-IV	II6	有孔鍔付土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文	—	—	橙	○	○	
3167	580	H6	III-IV	II6	有孔鍔付土器	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、貼付文	—	橙色粒子	灰白	—	—	内面赤彩
3168	581	H6,H7	III-IV	II6	有孔鍔付土器	A	—	—	—	—	—	胴部	隆帯	—	砂粒	明赤褐	—	—	内面赤彩
3169	581	B5	III-IV	II6	有孔鍔付土器	A	—	—	—	—	—	胴部	隆帯	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3170	581	J7	III-IV	II6	有孔鍔付土器	A	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、懸垂文	—	砂粒	橙	—	○	外面赤彩
3171	581	D6	III-IV	II6	有孔鍔付土器	C	9.3	5.4	9	9	524	口～底部	鍔、貫通孔、交互刺突文、渦巻文	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
3172	581	H6	III-IV	II6	有孔鍔付土器	—	15.5	—	—	—	—	口縁部	貫通孔	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	外面赤彩
3173	581	J7	III-IV	II6	有孔鍔付土器	A	17.5	—	—	—	—	口縁部	鍔	—	砂粒、赤色粒子	明赤褐	—	—	

第 43 表　土器観察表（33）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
3174	581	H7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ6	有孔鍔付土器	A	16	—	—	—	—	口縁部	鍔、隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
3175	582	I5	中期	—	台付鉢	—	—	9.3	—	—	—	底部	沈線	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
3176	582	D5	Ⅳ	—	台付鉢	—	—	6.3	—	—	—	底部	隆帯、沈線	—	砂粒、小礫	橙	—	—	底部に網代痕
3177	582	E6	中期	—	台付鉢	—	—	9.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3178	582	F6	中期	—	台付鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
3179	582	G6	中期	—	台付鉢	—	—	11	—	—	—	底部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3180	582	F6	中期	—	台付鉢	—	—	9.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3181	582	C5	中期	—	台付鉢	—	—	9	—	—	—	底部	沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3182	582	K7	中期	—	台付鉢	—	—	10.5	—	—	—	底部	—	—	砂粒	橙	—	—	
3183	582	H7	中期	—	台付鉢	—	—	7.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3184	582	E5	中期	—	台付鉢	—	—	11.4	—	—	—	底部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3185	582	H6	中期	—	台付鉢	—	—	8.7	—	—	—	底部	沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3186	582	I6	中期	—	台付鉢	—	—	12.5	—	—	—	底部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3187	582	H6	中期	—	台付鉢	—	—	13.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒	橙	—	—	
3188	582	H6	中期	—	台付鉢	—	—	21.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
3189	582	J7	中期	—	台付鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	橙	○	—	
3190	582	I6	中期	—	台付鉢	—	—	5.4	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3191	582	H6	中期	Ⅱ8	台形土器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3192	583	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	F	18	8	24.8	23.2	1736	口～底部	環状突起	縄文LR	砂粒、赤色粒子	黄橙	○	○	
3193	583	E6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	F	22	12	25.4	23.2	3430	口～底部	環状突起	縄文LR	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	○	—	
3194	583	F6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	C	12	6.6	14.5	13.5	547	口～底部	巴状突起	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
3195	583	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	C	18.8	8.8	24.6	22.4	2230	口～底部	巴状突起	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	底部に網代痕
3196	583	I7	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	C	18	9.2	22.4	20.4	1760	口～底部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	底部に葉脈状文
3197	584	D5	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	Q	30	—	—	—	—	口～胴部	突起	縄文RL	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	○	
3198	584	E6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	縄文RL	砂粒、橙色粒子	橙	—	○	
3199	584	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	縄文RL	砂粒、橙色粒子	橙	—	○	
3200	584	I7	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	D	12	6.3	15.3	13.5	480	口～底部	円形突起	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3201	584	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3202	584	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	—	14.9	—	—	—	—	口～胴部	貼付文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3203	584	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	N	35.5	13.5	47.5	45.5	19360	口～胴部	環状突起	縄文RL	砂粒、白色粒子	浅黄橙	—	—	
3204	585	C5	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	Q	35.5	—	—	—	—	口～胴部	環状突起	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
3205	585	E6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	N	31	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
3206	585	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	—	35.5	—	—	—	—	口～胴部	突起	縄文RL	砂粒、赤色粒子	橙	—	○	
3207	585	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	N	32.5	—	—	—	—	口～胴部	環状突起	縄文RL	砂粒、小礫	明赤褐	○	○	
3208	585	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	N	37.5	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒、赤色粒子	明黄褐	○	○	
3209	585	E5	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	—	30.5	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	橙	○	○	補修孔
3210	585	J7	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	—	44	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒、橙色粒子	橙	—	—	
3211	586	D5	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	Q	28.5	11.5	50	48	21020	口～胴部	巴状突起	結節RL	砂粒、白色粒子	浅黄橙	—	—	補修孔
3212	586	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	N	41	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	
3213	586	D4	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	N	39	—	—	—	—	口～胴部	環状突起	縄文L	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	—	—	
3214	586	C5	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	F	19.2	10.4	24.8	24.8	2680	口～底部	—	縄文RL	砂粒	橙	○	—	底部に網代痕
3215	586	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	F	19	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒、小礫	明赤褐	○	○	
3216	587	E5	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	Q	16.8	9.2	26.8	26.8	3740	口～底部	—	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	底部に網代痕
3217	587	G6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒、白色粒子	橙	○	○	
3218	587	C5	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	C	23.5	10.3	35	35	8026	口～底部	—	縄文RL	砂粒、橙色粒子	褐	—	○	
3219	587	F5	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	C	19.5	10	25	25	3394	口～底部	—	縄文L	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3220	587	F6	Ⅲ	Ⅱ7a	深鉢形土器	C	13	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文L	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	○	○	
3221	587	F6	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3222	588	F5	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起	縄文RL	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3223	588	H6	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3224	588	E5	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、懸垂文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3225	588	D5	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	巴状突起	撚糸L	砂粒	橙	—	—	
3226	588	D5	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、三叉文	縄文LR	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	○	—	
3227	588	F5	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文LR	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	○	—	
3228	588	I7	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起	縄文L	砂粒	橙	○	○	
3229	588	H6	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3230	588	E6	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	巴状突起	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
3231	589	G6	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	D	27.5	13	32.5	32.5	6180	口～底部	—	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	底部に網代痕
3232	589	I7	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	E	24	10.8	29.2	29.2	5740	口～底部	—	縄文LR	砂粒、橙色粒子	褐	—	○	底部に網代痕
3233	589	H6	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	C	17.1	7.7	17.4	17.4	1510	口～底部	口唇部に圧痕文	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	底部に網代痕
3234	589	I7	Ⅲ	Ⅱ7b	深鉢形土器	D	20	10.4	22.4	21.8	2470	口～底部	—	撚糸R	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
3235	589	H6	Ⅲ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	34	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
3236	589	H6	Ⅲ	Ⅱ7	深鉢形土器	N	18	—	—	—	—	口～胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒、白色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3237	590	F6	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	N	34.5	15	45.5	45.5	19720	口～底部	木目状撚糸文	撚糸R	砂粒	浅黄橙	—	—	底部に網代痕
3238	590	G6	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	Q	30	14	41	41	20225	口～底部	木目状撚糸文	撚糸L	砂粒	明赤褐	○	○	底部に網代痕
3239	590	G6	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	—	35	—	—	—	—	口縁部	木目状撚糸文	撚糸R	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3240	590	I7	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	木目状撚糸文	撚糸L	砂粒、小礫	明黄褐	—	○	
3241	590	G6	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	木目状撚糸文	撚糸R	砂粒	浅黄橙	—	—	
3242	590	G6	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	木目状撚糸文	撚糸R	砂粒	浅黄橙	—	○	
3243	590	E6	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	木目状撚糸文	撚糸L	赤色粒子	浅黄橙	○	—	
3244	591	G6	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	J	29.3	14	47	47	20400	口～底部	木目状撚糸文	撚糸R	砂粒	橙	—	○	網代痕、補修孔
3245	591	G7,H6	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	蛇行沈線文	撚糸R	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3246	591	H6	Ⅲ	Ⅱ7c	深鉢形土器	N	—	9	—	—	—	口～底部	木目状撚糸文、環状突起	撚糸R	砂粒	橙	—	—	底部に網代痕
3247	592	H6	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	C	21.3	—	—	—	—	口～胴部	コブ状突起	縄文RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3248	592	H6	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	コブ状突起	縄文LR	砂粒、橙色粒子	橙	○	—	
3249	592	F5	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	コブ状突起	縄文LR	砂粒	褐灰	○	○	
3250	592	I7	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	コブ状突起	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3251	592	H6	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	C	21.2	10.5	31.6	30.4	6057	口～底部	コブ状突起	縄文RL	砂粒、橙色粒子	明赤褐	○	○	
3252	592	H6	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	F	19.2	8.1	26.3	21.8	2718.4	口～底部	—	縄文RL	砂粒	灰黄	○	○	
3253	593	F5	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	C	15.6	8.7	19	17.4	1465	口～底部	—	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
3254	593	E5	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	C	12.9	5.7	13.5	12.3	607	口～底部	—	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
3255	593	H6	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	C	9.9	5.4	9.6	9	260	口～底部	—	縄文RL	砂粒	橙	○	—	
3256	593	F6	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文L	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
3257	593	F6	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	—	18.8	8.4	19.8	19.8		口縁部	—	縄文L	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
3258	593	D5	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	F	24	11.2	26.4	24.8	3805	口～底部	—	縄文RL	砂粒	明赤褐	○	○	
3259	593	F6	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	C	23.2	12	25.6	23.6	4400	口～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3260	594	F6	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	D	13.6	8	21.4	20	1260	口～底部	—	縄文RL	砂粒、橙色粒子	明褐	○	○	
3261	594	C4	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	○	補修孔
3262	594	I7	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3263	594	D5	Ⅲ	Ⅱ7d	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文L	砂粒	褐	○	○	
3264	594	I6	Ⅲ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
3265	594	E6	Ⅲ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3266	594	H6	Ⅲ	Ⅱ7	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3267	594	H7	Ⅲ	Ⅱ7	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	褐	○	○	
3268	594	E6	Ⅲ	Ⅱ7	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	○	
3269	595	H6	Ⅲ	Ⅱ7e	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文L	砂粒	橙	—	○	

第 44 表　土器観察表（34）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	口高	容量	残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物 内	炭化物 外	備考
3270	595	E5	中期	II7e	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3271	595	H6	中期	II7e	深鉢形土器	A	28.5	12.3	42.3	42.3	15990	口～底部	—	—	砂粒､橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
3272	595	G7	中期	II7e	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒､小礫	にぶい黄橙	—	○	
3273	595	F6	中期	II7e	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒､小礫	浅黄橙	—	○	
3274	595	F6	中期	II7e	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒､小礫	橙	○	○	
3275	596	D5	中期	II7e	深鉢形土器	C	19.5	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	黄橙	○	○	
3276	596	J6	中期	II7f	深鉢形土器	C	12.3	6.5	14.1	14.1	830	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
3277	596	G6	中期	II7f	深鉢形土器	C	11.4	7.2	11.4	11.4	610	口～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部に網代痕
3278	596	H6	中期	II7f	深鉢形土器	C	26.4	11.6	31.8	31.8	8220	口～底部	—	縄文RL	砂粒､白色粒子	橙	○	○	底部に網代痕
3279	596	D5	中期	II7f	深鉢形土器	C	8.7	5	13	13	440	口～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3280	596	F5	中期	II7f	深鉢形土器	B	17.2	11.2	29.6	29.6	4790	口～底部	—	縄文L	砂粒､橙色粒子	浅黄橙	○	○	
3281	597	I7	中期	II7f	深鉢形土器	B	25.6	16	38	38	11620	口～底部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
3282	597	G6	中期	II7f	深鉢形土器	C	21.6	10.4	22.8	22.8	3710	口～底部	—	縄文RL	砂粒､橙色粒子	灰白	○	—	
3283	597	I6	中期	II7f	深鉢形土器	C	15.6	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3284	597	E5	中期	II7f	深鉢形土器	C	13.2	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3285	597	I6	中期	II7f	深鉢形土器	C	15.6	7.8	18.6	18.6	1320	口～底部	—	縄文RL	砂粒､小礫	橙	—	—	底部に網代痕
3286	597	C5	中期	II7f	深鉢形土器	D	16.5	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒､橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
3287	597	H7	中期	II7f	深鉢形土器	C	18	9.4	21.6	21.6	2780	口～底部	—	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3288	598	G6	中期	II7f	深鉢形土器	C	33	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3289	598	I7	中期	II7f	深鉢形土器	C	24.6	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3290	598	D5	中期	II7f	深鉢形土器	C	22.6	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
3291	598	B4	中期	II7f	深鉢形土器	C	10.8	5.6	11.9	11.9	384	口～底部	—	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	—	
3292	598	G6	中期	II7f	深鉢形土器	C	13.8	7.6	17	17	850	口～底部	—	縄文RL	砂粒	明褐	—	—	底部に網代痕
3293	598	F5	中期	II7f	深鉢形土器	C	11.4	7.2	16.6	16.6	880	口～底部	—	縄文LR	砂粒､小礫	にぶい黄橙	○	○	底部に網代痕
3294	598	H6	中期	II7f	深鉢形土器	C	19	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3295	598	E5	中期	II7f	深鉢形土器	C	27.5	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒､小礫	浅黄橙	○	○	
3296	599	E6	IV	II7g	深鉢形土器	R	29	—	—	—	—	口～底部	—	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
3297	599	I6	IV	II7g	深鉢形土器	R	29.3	12	36	36	11110	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	赤褐	—	○	
3298	599	I6	IV	II7g	深鉢形土器	F	16	—	—	—	—	口～底部	—	縄文RL	砂粒､橙色粒子	橙	○	○	
3299	599	H6	IV	II7g	深鉢形土器	H	12.3	5.7	15	15	583	口～胴部	—	縄文RL	砂粒､小礫	浅黄橙	○	○	
3300	599	I7	IV	II7g	深鉢形土器	R	29.5	12.5	40.5	39	19070	口～底部	—	縄文LR	砂粒､雲母	橙	—	○	
3301	600	D5	IV	II7g	深鉢形土器	R	35	17	36	36	20150	口～胴部	—	撚糸L	砂粒	橙	○	○	
3302	600	F5	IV	II7h	深鉢形土器	N	36.5	14	45.8	45.8	21950	口～底部	—	縄文LR	砂粒､赤色粒子	橙	—	—	
3303	600	H7	IV	II7h	深鉢形土器	—	30	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	—	浅黄橙	—	○	
3304	600	C5	IV	II7h	深鉢形土器	—	29	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3305	600	F6	IV	II7h	深鉢形土器	N	34.5	12.5	43	43	20300	口～胴部	—	縄文LR	砂粒､赤色粒子	橙	—	—	
3306	601	K7	IV	II7h	深鉢形土器	I	27.8	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	淡黄	—	○	
3307	601	G7	IV	II7h	深鉢形土器	I	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3308	601	I7	IV	II7h	深鉢形土器	O	35.8	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3309	601	I7	IV	II7h	深鉢形土器	I	23.6	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	黄橙	—	—	
3310	601	G7	IV	II7h	深鉢形土器	—	40	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3311	602	H6	IV	II7h	深鉢形土器	O	30	12.5	44.5	44.5	15035	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3312	602	F6	IV	II7h	深鉢形土器	O	34.5	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
3313	602	H6	IV	II7h	深鉢形土器	O	32	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
3314	602	G7	IV	II7h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	橙	○	○	
3315	602	G7	IV	II7h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	撚糸L	砂粒､小礫	にぶい黄橙	—	—	
3316	602	G7	IV	II7h	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～底部	—	撚糸L	砂粒､小礫	にぶい黄橙	—	—	
3317	603	J7	V	II7i	深鉢形土器	J	25	11	40	37.3	8570	口～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3318	603	E5	V	II7i	深鉢形土器	J	29	13	47	40	13100	口～胴部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
3319	603	C4	V	II7i	深鉢形土器	J	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒､小礫	浅黄橙	—	○	
3320	603	I7	V	II7i	深鉢形土器	R	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文LR	砂粒､雲母	橙	—	○	
3321	603	F6	V	II7i	深鉢形土器	J	25.8	—	—	—	—	口縁部	—	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
3322	604	J7	V	II7i	深鉢形土器	C	26.5	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	浅黄	—	—	
3323	604	D5	V	II7i	深鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3324	604	A02	V	II7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3325	604	E5	V	II7i	深鉢形土器	A	36	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3326	604	G6	V	II7i	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3327	604	H6	V	II7i	深鉢形土器	A	30	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒､赤色粒子	浅黄橙	○	○	
3328	604	E5	V	II7i	深鉢形土器	A	27	—	—	—	—	口縁部	—	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
3329	605	G7	中期	II7	深鉢形土器	—	—	13.6	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部に網代痕
3330	605	F6	中期	II7	深鉢形土器	—	—	10.8	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	赤色粒子	浅黄橙	○	○	
3331	605	G6	中期	II7	深鉢形土器	—	—	8	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3332	605	G6	中期	II7	深鉢形土器	—	—	9	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部に網代痕
3333	605	C5	中期	II7	深鉢形土器	—	—	8.3	—	—	—	胴～底部	—	縄文L	砂粒	橙	○	○	底部に網代痕
3334	605	H7	中期	II7	深鉢形土器	—	—	9.5	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒､小礫	にぶい黄橙	○	○	
3335	606	J7	中期	II7	深鉢形土器	—	—	15	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
3336	606	A02	中期	II7	深鉢形土器	—	—	13	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3337	606	G6	中期	II7	深鉢形土器	—	—	9.5	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
3338	606	F6	中期	II7	深鉢形土器	—	—	15	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	橙色粒子	浅黄橙	○	—	底部に網代痕
3339	606	H6	中期	II7	深鉢形土器	—	—	15	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	浅黄橙	○	—	底部に網代痕
3340	606	I7	中期	II7	深鉢形土器	—	—	13.5	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部に網代痕
3341	607	C5	中期	II7	深鉢形土器	—	—	12	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部に網代痕
3342	607	—	中期	II7	深鉢形土器	—	—	9.6	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
3343	607	G7	中期	II7	深鉢形土器	—	—	13.6	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
3344	607	F5	中期	II7	深鉢形土器	—	—	9	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	底部に網代痕
3345	607	G6	中期	II7	深鉢形土器	—	—	13.2	—	—	—	胴～底部	—	縄文RL	砂粒､橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	底部に網代痕
3346	608	E6,F6	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	37.6	9	15.5	14.5	10360	口～胴部	環状突起､爪形文､三叉文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3347	608	J7	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	33	10	14.2	14.2	7665	口～底部	環状突起､爪形文､三叉文	縄文LR	砂粒､雲母	橙	—	—	
3348	608	E5,G6	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	38	12	13.6	13.6	9182	口～底部	環状突起､爪形文､三叉文	縄文RL	砂粒､雲母	橙	—	—	底部に網代痕
3349	609	D5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	46	14	15.6	15.6	15650	口～胴部	半隆起線文､刻目	縄文L	砂粒､雲母	橙	—	—	
3350	609	D5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	34	12	16.4	15.6	9660	口～底部	環状突起､爪形文､三叉文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3351	609	C5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	31.2	—	—	—	—	口～胴部	爪形文､半隆起線文､三叉文	—	砂粒､雲母	橙	—	—	内外面赤彩
3352	609	D5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文､三叉文	—	砂粒､雲母	橙	—	—	
3353	609	D5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	43	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文､三叉文	縄文RL	砂粒､雲母	橙	—	—	
3354	610	C5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	爪形文､半隆起線文	縄文RL	砂粒､雲母､石英	橙	—	—	
3355	610	D5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文､三叉文	—	砂粒､雲母	黄橙	—	—	
3356	610	E6	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文	縄文RL	砂粒､雲母	橙	—	—	
3357	610	F5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文､三叉文	—	砂粒､雲母	橙	—	—	内外面赤彩
3358	610	H6	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文	—	砂粒､雲母	浅黄橙	—	—	
3359	610	C5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文､三叉文	—	砂粒､雲母	にぶい黄橙	—	—	
3360	610	B02	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3361	610	F6	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文	—	砂粒､雲母	橙	—	—	内外面赤彩
3362	610	I6	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文	—	石英､赤色粒子	にぶい黄褐	—	—	
3363	610	B5,C5	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	爪形文､半隆起線文､三叉文	—	砂粒､雲母	橙	—	—	
3364	610	J6	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	爪形文	縄文RL	砂粒､雲母	橙	—	—	内面赤彩
3365	611	J7	III-IV	II9a	浅鉢形土器	A	29.5	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文､三叉文､貼付文	縄文RL	砂粒､小礫､雲母	橙	—	—	

第 45 表　土器観察表（35）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
3366	611	J7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文、貼付文	縄文RL	砂粒、小礫、雲母	橙	—	—	
3367	611	E6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒、小礫、雲母	橙	—	—	
3368	611	I6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起、三叉文	—	砂粒、雲母、石英	橙	—	—	内外面赤彩
3369	611	J7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	環状貼付文、半隆起線文	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
3370	611	C5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	42	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、懸垂文	不明	砂粒、石英	浅黄橙	—	—	内外面赤彩
3371	611	F5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	47.6	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文、貼付文	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
3372	611	I7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	40	—	—	—	—	口縁部	三角腋刻、半隆起線文	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
3373	612	H6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	40	—	—	—	—	口縁部	三角腋刻、半隆起線文	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
3374	612	F6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
3375	612	J7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	縄文LR	砂粒	橙	○	—	内外面赤彩
3376	612	G6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	三叉文、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
3377	612	E5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	三叉文、半隆起線文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	内面赤彩
3378	612	J7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒、雲母	橙	—	—	内面赤彩
3379	612	G6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	12	—	—	—	胴部	—	縄文RL	砂粒、雲母、石英	橙	—	—	
3380	613	I6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	56.4	—	—	—	—	口縁部	三角腋刻、半隆起線文、刺突	—	砂粒	灰白	—	—	内面赤彩
3381	613	H6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口～胴部	三角腋刻、半隆起線文、刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3382	613	E5,J6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	補修孔
3383	613	F6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刺突	—	砂粒	灰黄	○	○	
3384	613	H6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	40.4	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、半隆起線文、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3385	613	H7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3386	613	E5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刺突	—	砂粒、雲母、石英	明赤褐	—	○	
3387	613	D5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刺突	—	砂粒、雲母、石英	明赤褐	—	—	
3388	613	J6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	蓮華文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3389	614	I7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	35	—	—	—	—	口縁部	沈線、貼付文、刺突	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
3390	614	H6,H7,I7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	32	—	—	—	—	口縁部	沈線、貼付文、刺突	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
3391	614	I7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	28	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文	縄文LR	砂粒	明黄褐	○	○	
3392	614	H7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	27.5	—	—	—	—	口～胴部	環状突起、交互刺突文	縄文LR	砂粒、石英	橙	○	○	
3393	614	I7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	玉抱三叉文、半隆起線文	縄文LR	砂粒、石英	橙	—	○	
3394	614	F6,G6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9a	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	玉抱三叉文、半隆起線文	—	雲母、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
3395	615	G6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	42.8	14	15.2	14	13716	口～底部	玉抱三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	補修孔
3396	615	F6,G6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	46.8	16	15	15	17120	口～胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3397	615	H6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	39.6	8	13	13	8915	口～胴部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	内面赤彩
3398	615	H5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	未貫通の補修孔
3399	616	F6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	41	10	13.6	13.6	9226	口～底部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3400	616	K6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒、雲母	にぶい黄橙	—	○	
3401	616	E5,E6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒、雲母	橙	—	—	
3402	616	E6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒、雲母、石英	橙	—	—	
3403	617	E6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	砂粒、雲母、石英	にぶい黄橙	—	—	
3404	617	G6,H7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	—	縄文RL	—	明黄褐	—	—	内面赤彩
3405	617	I7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	三叉文	縄文LR	砂粒、石英	にぶい黄橙	—	—	
3406	617	C5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	—	撚糸L	砂粒	橙	—	—	
3407	617	F6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒、橙色粒子	橙	○	—	
3408	617	J7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒、雲母、石英	橙	—	—	
3409	617	G6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	38	10	12.4	12.4	7445	口～胴部	—	—	砂粒、雲母、石英	にぶい黄橙	○	—	内面赤彩
3410	618	E6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	玉抱三叉文	—	砂粒	灰白	—	—	内面赤彩
3411	618	C5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	40	13.2	14.2	13.2	8700	口～底部	渦巻文、爪形文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
3412	618	E6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9b	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	玉抱三叉文、半隆起線文、キザミ	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3413	619	F5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	36.8	14	16.4	14.4	6077	口～底部	门状把手、角押文	—	砂粒、雲母、石英	赤褐	○	—	
3414	619	F5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口～胴部	门状把手、角押文	—	砂粒、雲母、石英	赤褐	○	—	
3415	619	E5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～底部	突起、有節沈線、キャタピラ状文	—	砂粒	赤褐	○	—	
3416	619	I6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、三角腋刻	—	砂粒	赤褐	—	○	
3417	619	E5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、三角腋刻	—	砂粒	赤褐	—	○	
3418	619	H7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線	—	砂粒、小礫	赤褐	○	○	内外面赤彩
3419	619	F5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、斜行沈線文	—	砂粒、白色粒子	橙	—	—	内面赤彩
3420	619	H6,I6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	—	32.4	—	—	—	—	口縁部	角押文、突起	—	砂粒	明赤褐	—	—	
3421	620	B5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、刻目隆帯	—	砂粒、雲母、石英	橙	—	—	
3422	620	G6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、刻目隆帯	—	砂粒、雲母、石英	橙	—	—	
3423	620	F5	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
3424	620	B4	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線、刺突	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
3425	620	H6	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線	—	砂粒、小礫	橙	—	—	
3426	620	I7,J7	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	39.2	12.4	19.2	17.6	8800	口～底部	キザミ	—	砂粒、雲母	明褐	—	—	
3427	620	B4	Ⅲ-Ⅳ	Ⅱ9c	浅鉢形土器	C	36	10.8	11.6	10.4	3780	口～底部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	
3428	621	G6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	39	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	
3429	621	H7	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	41.2	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
3430	621	F6,F7,G6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	41	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	内外面赤彩
3431	621	F5,F6,I6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	46.4	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
3432	622	H6,I6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	34	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	外面赤彩
3433	622	D5,D6,F6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	37.6	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	外面赤彩
3434	622	H6,I7	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	39	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
3435	622	I7,K6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	30	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	明黄褐	—	—	内外面赤彩
3436	623	I7	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	31	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
3437	623	H7	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
3438	623	G6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	30.8	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	内外面赤彩
3439	623	H7	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	内外面赤彩
3440	623	C5	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	22	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	外面赤彩
3441	623	G6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	外面赤彩
3442	623	G6,H7	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	37.6	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
3443	623	E6,F4	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	
3444	623	H6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	内面赤彩
3445	624	I7	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	
3446	624	E6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	赤褐	—	—	外面赤彩
3447	624	I6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	内外面赤彩
3448	624	E6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫	にぶい褐	—	—	外面赤彩
3449	624	F6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	赤褐	—	—	内面赤彩
3450	624	C5,G6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	橙	—	—	内外面赤彩
3451	624	E6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	橙	—	—	
3452	624	G6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	内外面赤彩
3453	624	A01	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明黄褐	—	—	内外面赤彩
3454	624	D6,E6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	E	38.5	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	明黄褐	—	—	外面赤彩
3455	624	G6	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口～底部	—	—	砂粒、赤色粒子	明黄褐	—	—	内外面赤彩
3456	624	I7	Ⅳ-Ⅴ	Ⅱ9d	浅鉢形土器	D	27.2	8.8	14.6	14.6	4785	口～底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3457	625	H6	Ⅳ	Ⅱ9e	浅鉢形土器	B	24.8	—	—	—	—	口～胴部	渦巻文、三叉文、充填沈線文	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	内面赤彩
3458	625	D5	Ⅳ	Ⅱ9f	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	半隆起線文、爪形文	—	砂粒	赤褐	○	—	
3459	625	H7	Ⅴ	Ⅱ9g	浅鉢形土器	G	36	—	—	—	—	口～胴部	未調整隆帯	縄文RL	砂粒、赤色粒子	明褐	—	—	
3460	625	I7	Ⅴ	Ⅱ9g	浅鉢形土器	G	40	14.4	14	14	7820	口～胴部	横S字状文、菱形文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
3461	625	H6	Ⅴ	Ⅱ9g	浅鉢形土器	G	31.5	—	—	—	—	口～胴部	隆帯文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	○	

第 46 表　土器観察表（36）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
3462	625	F6	Ⅳ	Ⅱ9g	浅鉢形土器	F	23.7	10	8.1	8.1	2300	口～底部	隆帯文	縄文RL	砂粒	灰白	—	—	
3463	626	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	A	19	—	—	—	—	口縁部	刺突列、コブ状貼付文	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
3464	626	F6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、コブ状貼付文	—	—	浅黄橙	—	—	
3465	626	F3	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	コブ状貼付文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3466	626	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	コブ状貼付文	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
3467	626	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	コブ状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3468	626	G5	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒、小礫	明黄褐	—	○	
3469	626	D2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	小礫	浅黄橙	—	○	
3470	626	G5	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	—	砂粒、小礫	灰白	—	—	
3471	626	G3	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突、円形貼付文	—	砂粒、小礫	にぶい黄褐	○	○	
3472	626	G2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	鎖状隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3473	626	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、刺突	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
3474	626	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	26.8	14	30	29	11490	口～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	○	
3475	626	F7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突、鎖状隆帯	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3476	626	F2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3477	626	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3478	626	H3	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3479	626	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3480	626	F2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3481	626	F3	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	鎖状隆帯、刺突	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
3482	627	K3	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刻目隆帯、刺突	—	小礫	明黄褐	○	○	
3483	627	J6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3484	627	H4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	鎖状隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3485	627	F6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刻目隆帯、刺突	—	小礫	浅黄橙	○	○	
3486	627	F3	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刻目隆帯、刺突	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
3487	627	C6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3488	627	F6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3489	627	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3490	627	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突、鎖状隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3491	627	D3	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刻目隆帯、刺突	—	砂粒、小礫	橙	—	○	
3492	627	I8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	褐	○	○	
3493	627	J9	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	橙	—	—	
3494	627	G3	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
3495	627	H6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3496	627	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刻目隆帯、刺突	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3497	627	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	鎖状隆帯、刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3498	627	F6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	橙	—	—	
3499	627	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	○	
3500	627	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	鎖状隆帯、刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3501	627	F2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒、小礫	浅黄橙	○	○	
3502	627	G4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	圧痕隆帯、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	○	
3503	627	E6,J6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刻目隆帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3504	628	J6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刻目隆帯、刺突	—	小礫、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3505	628	J6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刻目隆帯、刺突	—	小礫、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3506	628	D4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
3507	628	E6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刺突	—	砂粒、白色粒子	淡黄	—	○	
3508	628	K5	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3509	628	F6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
3510	628	F3	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	9.8	—	—	—	胴～底部	刺突	—	—	浅黄	○	—	
3511	628	G4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	橙色粒子	明黄褐	—	—	
3512	628	G4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
3513	628	D6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	橙	○	—	
3514	628	H5	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3515	628	C5	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3516	628	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
3517	628	K4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	橙	—	—	
3518	628	E6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3519	628	F2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突、貼付文	—	砂粒	橙	○	—	
3520	628	E4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3521	628	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	小礫	にぶい黄褐	○	○	
3522	628	J1	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	—	橙	○	○	
3523	628	A4,B4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	小礫	橙	○	○	
3524	628	I7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	橙	—	—	
3525	629	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突、刺突列	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	○	
3526	629	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突、刺突列	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
3527	629	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突、刺突列	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
3528	629	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	胴部	刺突、刺突列	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3529	629	I8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	17	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3530	629	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	21.5	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3531	629	D6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3532	629	B6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3533	629	J6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3534	629	I7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3535	629	I7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	褐	○	○	
3536	629	E6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3537	629	G2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3538	629	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
3539	629	J9	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3540	629	E6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	刺突	—	—	橙	—	—	
3541	629	J8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	橋状把手、刺突	—	砂粒、雲母	浅黄橙	○	—	
3542	629	K6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3543	629	G2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刺突	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
3544	629	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3545	630	F2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、沈線、鎖状隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3546	630	J6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、沈線、鎖状隆帯	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3547	630	17J	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突、刻目隆帯	—	砂粒、小礫	橙	—	○	
3548	630	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、鎖状隆帯	—	砂粒	明黄褐	○	—	
3549	630	D4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	8.7	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、鎖状隆帯、沈線	縄文LR	—	にぶい黄橙	○	○	
3550	630	G4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、沈線	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	—	
3551	630	J6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、沈線	縄文LR	砂粒	黒褐	○	○	
3552	630	H8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	鎖状隆帯、貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3553	630	I7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手	—	砂粒	黒褐	○	○	
3554	630	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、沈線	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
3555	630	C4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、沈線	—	砂粒	橙	—	—	
3556	630	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	26.7	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刻目隆帯	縄文L	砂粒	黄橙	—	—	
3557	630	D6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刻目隆帯	縄文LR	砂粒	灰白	—	—	

第 47 表　土器観察表（37）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
3558	630	K7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、鎖状隆帯	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3559	630	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刻目隆帯	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3560	630	F2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刻目隆帯	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
3561	630	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刻目隆帯	縄文LR	砂粒、小礫	橙	—	—	
3562	630	K7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刻目隆帯	縄文L	砂粒	橙	—	—	
3563	630	H8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、刻目隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
3564	631	I8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	橋状把手、刺突列	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
3565	631	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯	縄文LR	砂粒	褐灰	—	○	
3566	631	J6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	貼付文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3567	631	I8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	貼付文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3568	631	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、貼付文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3569	631	J8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	貼付文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3570	631	J8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	貼付文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3571	631	I6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯、貼付文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3572	631	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3573	631	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	鎖状隆帯	縄文RL	砂粒	褐	○	○	
3574	631	I7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3575	631	H7	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刺突列	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3576	631	F2	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	鎖状隆帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3577	631	J6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	刺突列	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3578	631	I8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	隆帯	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3579	631	H6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刺突列	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3580	631	J9	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸～胴部	刺突列	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3581	632	I8	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	31.4	—	—	—	—	口～胴部	鎖状隆帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3582	632	C4	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸部	刺突	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3583	632	E6	Ⅶ	Ⅲ1a	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	頸部	刻目隆帯、刺突	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3584	632	E2	Ⅶ	Ⅲ1c	深鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口～胴部	蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3585	632	E6	Ⅶ	Ⅲ1c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	蛇行沈線文	縄文L	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
3586	632	I8	Ⅶ	Ⅲ1c	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	頸部	蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3587	632	G5	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、橋状把手	縄文LR	砂粒	明黄褐	○	—	
3588	632	D6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	縄文帯	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3589	632	C4	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文L	砂粒	橙	—	—	
3590	632	J4	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文、列点文	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3591	632	G5	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文、列点文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3592	632	E6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	垂下隆帯、環状突起	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3593	632	G5	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、J字状文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
3594	632	I4	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、鋸状文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3595	632	J4	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3596	632	J6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
3597	633	G5	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、鋸状文	縄文RL	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
3598	633	I7	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3599	633	J6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面に橋状把手、沈線	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3600	633	H4	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突列	—	砂粒	明黄褐	—	○	
3601	633	E2	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、橋状把手	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3602	633	E2	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3603	633	I6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列、環状突起	—	砂粒、小礫	橙	—	○	
3604	633	J6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	D	24.5	—	—	—	—	口縁部	環状貼付文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
3605	633	J7	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	C字状貼付文、刺突	—	砂粒	橙	—	—	
3606	633	H6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、隆帯	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3607	633	I8	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、C字状突起	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
3608	633	F6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状把手	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3609	633	C4	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、橋状把手	—	砂粒	褐	○	○	
3610	633	C4	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、橋状把手	—	砂粒	明赤褐	○	○	
3611	633	I8,J8	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	—	砂粒	明褐	○	○	
3612	633	I6	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線、列点文	—	砂粒	橙	—	—	
3613	633	B4	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	列点文	—	砂粒、小礫	灰白	—	—	
3614	633	H7	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	列点文	—	砂粒	にぶい褐	—	—	
3615	633	B3	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	列点文	—	砂粒	橙	—	—	
3616	633	I7	Ⅶ	Ⅲ1b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	列点文	縄文LR	砂粒	灰白	○	—	
3617	634	G6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	26.7	—	—	—	—	口～胴部	縁帯文、三角文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3618	634	J7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、懸垂文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3619	634	F4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	縄文LR	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
3620	634	H5	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3621	634	J5	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3622	634	I6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	不明	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3623	634	H7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
3624	634	J6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3625	634	I8	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	不明	砂粒	灰黄褐	—	○	
3626	634	I7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3627	634	D6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
3628	634	I8	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒、赤色粒子	明黄褐	—	—	
3629	634	H7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3630	634	J6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	○	○	
3631	634	I7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、三角文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3632	634	H6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3633	634	I7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	黄橙	—	—	
3634	634	C5	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3635	634	J4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文L	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
3636	634	E6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
3637	634	I7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	不明	砂粒	浅黄橙	—	—	
3638	635	F4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3639	635	K2	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3640	635	I7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、三角文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3641	635	J9	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3642	635	A01	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3643	635	I4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3644	635	I4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	○	
3645	635	J7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	31	—	—	—	—	口～胴部	縁帯文、H字状文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3646	635	J6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	縄文RL	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
3647	635	A01	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	○	
3648	635	B4,C4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	橙	—	—	
3649	635	J7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3650	635	C6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	
3651	635	J2	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、突起	—	砂粒、橙色粒子	橙	—	○	
3652	635	C3	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3653	635	G3	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	突起、沈線	—	砂粒、石英	にぶい黄橙	—	—	

第 48 表　土器観察表（38）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
3654	636	J4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3655	636	K7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3656	636	F6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3657	636	J4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	—	にぶい橙	—	—	
3658	636	K4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3659	636	—	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、集合沈線文	—	小礫	浅黄橙	○	○	
3660	636	J4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3661	636	G3	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、集合沈線文	—	小礫	橙	○	○	
3662	636	J4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、集合沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
3663	636	J7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
3664	636	J5	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3665	636	I3	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3666	636	K2	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口～胴部	刺突列、集合沈線文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3667	636	I4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3668	636	J4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3669	636	H3	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	縄文LR	小礫	橙	○	—	
3670	636	I8	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	—	
3671	636	I4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	○	
3672	636	K7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3673	636	J7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
3674	636	I2	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3675	636	K4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3676	636	G3	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3677	636	K3	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3678	636	F4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3679	636	J7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	○	
3680	636	G7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3681	637	F7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	39	—	—	—	—	口～胴部	突起、磨消縄文	縄文LR	砂粒	褐	—	○	
3682	637	J3	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
3683	637	J6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	—	
3684	637	H7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
3685	637	K7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	明赤褐	—	—	
3686	637	J6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3687	637	G7	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
3688	637	K4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3689	637	D6	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3690	637	J3	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	明赤褐	○	○	
3691	637	J1	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、三角文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3692	637	G4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、三角文	縄文LR	砂粒、小礫	橙	○	○	
3693	637	A5,B4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	砂粒	橙	—	—	
3694	637	K4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	集合沈線文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	○	
3695	637	I4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3696	637	G4	Ⅷ	Ⅲ2a	深鉢形土器	F	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3697	638	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3698	638	J5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	灰黄褐	—	○	
3699	638	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3700	638	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3701	638	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3702	638	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3703	638	D6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	—	
3704	638	G3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3705	638	G4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい褐	○	○	
3706	638	E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3707	638	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3708	638	G4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄褐	○	○	
3709	638	J7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3710	638	K5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	○	
3711	638	I4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3712	638	J7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3713	638	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	—	
3714	638	J5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	灰黄	—	○	
3715	638	I8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	○	—	
3716	638	F1	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	—	
3717	638	F2	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
3718	638	K4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3719	639	J6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	38	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
3720	639	I8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3721	639	G6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3722	639	G8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3723	639	I6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄褐	○	○	
3724	639	K2	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3725	639	D7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	○	
3726	639	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3727	639	G4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	○	
3728	639	I8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3729	639	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	○	
3730	639	F5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	縄文LR	—	浅黄橙	○	○	
3731	639	I8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3732	639	G2	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい褐	○	○	
3733	639	H5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい褐	○	○	
3734	639	G3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3735	639	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3736	639	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
3737	639	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	○	—	
3738	639	G6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3739	639	G3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	—	にぶい黄橙	—	—	粘土帯に刻目
3740	640	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、沈線	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3741	640	I6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3742	640	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3743	640	D6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、橋状把手	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
3744	640	E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、把手	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	○	
3745	640	J7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	—	○	
3746	640	I8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3747	640	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
3748	640	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、突起、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3749	640	E2	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	突起、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	

第 49 表　土器観察表（39）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
3750	640	J3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、懸垂文	—	砂粒	淡黄	—	—	
3751	640	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3752	640	J8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、懸垂文	—	砂粒	橙	—	—	
3753	640	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3754	640	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3755	640	E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	C字状突起、懸垂文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3756	640	G7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3757	640	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	円形貼付文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3758	640	H6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、沈線	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
3759	640	F3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	23	—	—	—	—	口～胴部	渦巻文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3760	641	I8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	橙	○	○	
3761	641	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3762	641	I5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、内面文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
3763	641	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、懸垂文、内面文	—	砂粒	橙	—	○	
3764	641	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、内面文	—	砂粒	橙	—	—	
3765	641	K4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	縁帯文、内面文	—	砂粒	にぶい橙	—	○	
3766	641	D7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	砂粒	橙	—	—	
3767	641	J6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3768	641	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	捻転状突起	—	砂粒	橙	—	—	
3769	641	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	砂粒	褐灰	○	○	
3770	641	D6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	—	砂粒	橙	○	—	
3771	641	J6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3772	641	E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3773	641	I8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	縄文LR	砂粒	明褐	○	○	
3774	641	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	17	—	—	—	—	口縁部	刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3775	641	G8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文RL	砂粒、小礫	明赤褐	—	○	
3776	641	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3777	642	I6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	砂粒	橙	○	—	
3778	642	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	砂粒	灰白	—	—	
3779	642	H6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3780	642	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、内面文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3781	642	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文、内面文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
3782	642	J7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	口縁部	懸垂文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
3783	642	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	頸部	懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3784	642	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	頸部	懸垂文	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3785	642	K4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	頸部	隆帯文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3786	642	I4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	頸部	沈線、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	○	
3787	642	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	頸部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	○	
3788	642	G3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	頸部	沈線	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3789	642	J8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	頸部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3790	642	J2	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	頸部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3791	642	G4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3792	642	F3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
3793	642	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3794	642	J7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	
3795	643	J5,J6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	枠状文、刺突列	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
3796	643	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突列	縄文LR	砂粒	明褐	○	—	
3797	643	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、刺突列	縄文RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3798	643	F6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、刺突列	縄文RL	砂粒	明黄褐	○	○	
3799	643	E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、刺突列	不明	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3800	643	K6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、刺突列	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3801	643	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突列	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3802	643	J7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突列	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3803	643	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突列	縄文RL	砂粒	明黄褐	—	○	
3804	643	E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突列	縄文LR	砂粒、小礫	明黄褐	—	○	
3805	643	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突列	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3806	643	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3807	643	H6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	刺突列	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3808	643	G2	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	刺突列	縄文LR	砂粒	明黄褐	○	○	
3809	643	H7,I8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文LR	砂粒	褐	○	○	
3810	643	G8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
3811	643	G6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
3812	643	J6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3813	643	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3814	643	I6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒、小礫	明褐	○	○	
3815	643	J6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	不明	砂粒、小礫	明黄褐	—	—	
3816	644	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3817	644	J7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3818	644	I6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
3819	644	G7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3820	644	G6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、小礫	橙	○	○	
3821	644	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	斜行文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3822	644	J5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	斜行文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
3823	644	E2	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	斜行文	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
3824	644	H6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	斜行文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3825	644	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3826	644	H4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3827	644	C5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	○	
3828	644	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3829	644	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
3830	644	I6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、斜行文、刺突	縄文LR	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
3831	644	H8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	円形貼付文、懸垂文	縄文RL	砂粒	褐	○	—	
3832	644	I9	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、懸垂文、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒、雲母	明黄褐	○	○	
3833	644	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	明褐	○	○	
3834	644	G2	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3835	644	G7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文	縄文L	砂粒、赤色粒子	明黄褐	—	—	
3836	644	H6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文	縄文L	砂粒、小礫	橙	—	○	
3837	645	F3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
3838	645	I6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	同心円文、蛇行沈線文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	○	
3839	645	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文L	砂粒	褐	○	—	
3840	645	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	蕨手状文	不明	砂粒	橙	○	—	
3841	645	H4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
3842	645	F4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	砂粒	褐灰	—	○	
3843	645	F4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3844	645	H4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文RL	砂粒	橙	—	○	
3845	645	E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	

第 50 表　土器観察表（40）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
3846	645	G4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
3847	645	I6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	○	○	
3848	645	J3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	黄橙	—	○	
3849	645	E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3850	645	J3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
3851	645	H3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3852	645	G3	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3853	645	I6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3854	645	J1	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	—	砂粒、小礫	にぶい褐	○	○	
3855	646	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	沈線、刺突	縄文LR	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3856	646	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	
3857	646	F6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	斜行文、隆帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3858	646	D6,E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	円形貼付文、渦巻文	—	砂粒	橙	—	○	
3859	646	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯、刺突、8字状貼付文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
3860	646	I8	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	刺突	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3861	646	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	○	—	
3862	646	K7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文、突起	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3863	646	—	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3864	646	B4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
3865	646	G6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3866	646	I7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、隆帯、斜行文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3867	646	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、隆帯、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3868	646	E6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、隆帯、磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3869	646	I2	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3870	646	H5	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3871	646	H6	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、隆帯、帯状縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
3872	646	—	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、隆帯、磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3873	646	H7	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	8字状貼付文、隆帯、懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3874	646	J4	Ⅷ	Ⅲ2b	深鉢形土器	G	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文、懸垂文、弧線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3875	647	K2	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、三角文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3876	647	F6	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	三角文、円形文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3877	647	I7	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	三角文	縄文LR	砂粒	灰白	—	—	
3878	647	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	三角文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3879	647	I8	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	赤褐	○	○	
3880	647	G4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯、斜行文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
3881	647	K7	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯、磨消縄文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
3882	647	I7	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	突起、磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	
3883	647	I7	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3884	647	I3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3885	647	J3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文、内面文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3886	647	I7	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線	—	砂粒	灰白	—	—	
3887	647	K2	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	褐	○	○	
3888	647	—	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状突起、内面文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3889	647	—	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	淡黄	—	○	
3890	647	H3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	鎖状隆帯、帯状縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	○	
3891	647	G2	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	刻目隆帯	縄文L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3892	647	J6	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、磨消縄文、突起	不明	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3893	647	I7	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、隆帯、磨消縄文	縄文RL	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
3894	647	I7	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、隆帯、磨消縄文	不明	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3895	647	F2	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、帯状縄文	不明	砂粒、小礫	にぶい黄褐	○	○	
3896	647	B3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、隆帯、枠状文	縄文LR	砂粒	明黄褐	○	○	
3897	647	H3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯	縄文LR	砂粒	褐	○	○	
3898	647	J6	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3899	648	K4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、帯状縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3900	648	I9	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、帯状縄文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3901	648	K4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
3902	648	J3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3903	648	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3904	648	J7	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3905	648	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	隆帯、帯状縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3906	648	—	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状突起、隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
3907	648	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状貼付文、隆帯、磨消縄文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
3908	648	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状突起、隆帯	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3909	648	F5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	突起、8字状突起、隆帯	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3910	648	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、磨消縄文	不明	砂粒	灰黄褐	—	○	
3911	648	H6	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、帯状縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3912	648	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、帯状縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3913	648	H3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	隆帯、円形文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
3914	648	K4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3915	648	J3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3916	648	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	玉抱文	縄文LR	砂粒	褐灰	—	○	
3917	648	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	玉抱文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3918	648	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	玉抱文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3919	648	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文、帯状縄文	不明	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3920	648	I2	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	縄文RL	砂粒	灰黄褐	—	—	
3921	648	F6	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	円形文	縄文LR	砂粒、小礫	浅黄橙	—	○	
3922	648	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3923	648	H3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3924	648	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3925	648	G3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	三角文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3926	648	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3927	648	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文L	小礫	にぶい黄橙	—	○	
3928	648	H3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3929	649	K2	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	三角文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3930	649	G3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	三角文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
3931	649	B4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3932	649	J3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	枠状文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3933	649	B4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	三角文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3934	649	G3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3935	649	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3936	649	H3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	斜行文	縄文LR	砂粒、小礫	褐	○	○	
3937	649	H3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	斜行文	縄文RL	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
3938	649	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	斜行文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
3939	649	I2	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文、斜行文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
3940	649	H6	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3941	649	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	三角文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	○	○	

第 51 表　土器観察表（41）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
3942	649	I7	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい橙	—	—	
3943	649	G5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3944	649	G2	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3945	649	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3946	649	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3947	649	J3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	枠状文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3948	649	B2	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
3949	649	J3	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	褐	○	○	
3950	649	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3951	649	J5	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	円形文、帯状縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3952	649	J4	Ⅷ	Ⅲ2c	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
3953	650	I3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	突起、斜行沈線文、内面文	—	砂粒	褐	○	○	
3954	650	G3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒	褐	○	○	
3955	650	J4	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒	褐	○	○	
3956	650	H6	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
3957	650	I7	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒	灰黄褐	—	○	
3958	650	J5	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯、連鎖状文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3959	650	I6	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3960	650	J5	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3961	650	J5	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯、鎖状懸垂文	—	砂粒	橙	—	—	
3962	650	J5	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	突起、沈線帯、鎖状懸垂文	—	砂粒	橙	—	—	
3963	650	J4	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3964	650	J4	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒、小礫	灰黄褐	○	○	
3965	650	I3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯、連鎖状文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
3966	650	J4	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状突起、沈線帯、連鎖状文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3967	650	K4	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口縁部	沈線帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3968	650	F3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3969	650	I6	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3970	650	I3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	橙	—	—	
3971	650	I3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯、連鎖状文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
3972	650	J4	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3973	650	J4	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
3974	650	J3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯、連鎖状文	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3975	650	J2	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	突起、沈線帯	—	砂粒	黒褐	○	○	
3976	650	J3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯、連鎖状文	—	砂粒、赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	注口土器片
3977	650	J4	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3978	650	J4	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3979	650	I6	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3980	651	I5	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	縄文LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
3981	651	I3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻文	—	砂粒	橙	—	—	
3982	651	H6	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	灰黄褐	—	○	
3983	651	H3	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯、連鎖状文	—	砂粒	灰黄褐	—	○	
3984	651	I5	Ⅸ	Ⅲ3a	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3985	651	H3	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯、単位文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3986	651	J7	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	8字状突起、沈線帯	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3987	651	I8	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯、刺突	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	注口土器片
3988	651	H7,H8	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	突起、刻目隆帯、沈線	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3989	651	J6	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	円形文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3990	651	H2	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯、刺突列	縄文RL	砂粒	褐灰	—	—	
3991	651	I2	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯、刺突列	—	砂粒	褐灰	—	○	
3992	651	I9	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線帯	—	砂粒	明赤褐	—	○	
3993	651	G10	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文、沈線帯	縄文LR	砂粒	橙	—	○	
3994	651	K4	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文、沈線帯	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3995	651	H3	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	内面沈線帯	—	砂粒	褐	—	—	
3996	651	J2	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文	不明	砂粒	褐	○	○	
3997	651	I8	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文	不明	砂粒	黒褐	—	—	
3998	651	—	Ⅸ	Ⅲ3b	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	帯状縄文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
3999	652	I6	不明	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	条線文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	
4000	652	G3	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
4001	652	J4	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	内面文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
4002	652	I9	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	口唇部に刻目	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
4003	652	I9	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	5.7	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	底部に網代痕
4004	652	J4	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	H	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線、刺突列	—	砂粒	黒褐	○	○	
4005	652	H7	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	楕円区画、円形貼付文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
4006	652	I8	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	E	—	—	—	—	—	口～胴部	沈線	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4007	652	J6	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4008	652	B4	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4009	652	J4	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	綾杉状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
4010	652	I3	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	S字状文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
4011	652	G6	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	綾杉状沈線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
4012	652	H3	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4013	652	H4	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	対弧文	—	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
4014	652	H4	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	胴部	対弧文	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	—	—	外面赤彩
4015	652	H7	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	橙	—	—	内面赤彩
4016	652	I6	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突列	—	砂粒、小礫	にぶい黄橙	○	—	
4017	652	D6	Ⅷ	Ⅲ4	深鉢形土器	D	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突列	—	砂粒	明黄褐	—	—	
4018	653	I7	Ⅶ	Ⅲ5	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	突起、刺突列、C字状文	—	砂粒	褐	—	—	
4019	653	F4	Ⅶ	Ⅲ5	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線、刺突列	—	砂粒	灰白	○	—	
4020	653	G2	Ⅷ	Ⅲ5	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、刺突列	—	砂粒	明褐	—	○	
4021	653	I6	Ⅷ	Ⅲ5	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	円形文、楕円区画	—	砂粒	橙	—	—	
4022	653	I8	Ⅷ	Ⅲ5	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、刺突、C字状文	—	砂粒	赤褐	—	○	外面赤彩
4023	653	H7	Ⅷ	Ⅲ5	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	沈線	—	砂粒	褐	—	—	
4024	653	H6	Ⅷ	Ⅲ5	浅鉢形土器	A	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画、刺突	—	砂粒	明黄褐	—	○	
4025	653	J5	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	内面文、刺突列、鋸歯状口縁	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
4026	653	I2,I3	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	内面沈線帯、鋸歯状口縁	—	砂粒	橙	—	○	
4027	653	H7	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	内面沈線帯	縄文RL	砂粒	橙	—	—	
4028	653	H8	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	内面沈線帯	—	砂粒	にぶい褐	—	—	
4029	653	I9	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	—	砂粒	明赤褐	○	—	
4030	654	I9	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列、鋸歯状口縁	—	砂粒	黒褐	○	○	
4031	654	I9	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	C	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4032	654	—	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	B	—	—	—	—	—	口縁部	内面文	—	砂粒	褐	—	—	
4033	654	B3	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	黒褐	—	—	底部に網代痕
4034	654	H8	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	褐灰	—	○	底部に網代痕
4035	654	F1	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4036	654	H7	Ⅸ	Ⅲ5	浅鉢形土器	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	橙	—	—	底部に網代痕
4037	654	I3	Ⅶ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口部	微隆起線文、橋状把手、注口	—	砂粒	浅黄橙	—	—	

第 52 表　土器観察表（42）

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	法量(cm)					残存部位	文様	縄文原体	胎土	色調	炭化物		備考
							口径	底径	器高	口高	容量						内	外	
4038	654	G3	後期	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	—	—	砂粒	赤褐	—	—	
4039	654	J5	後期	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	環状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	黒色付着物
4040	654	E6	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	沈線区画、刺突列	縄文RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
4041	654	J1	後期	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	環状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4042	655	F5	Ⅸ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	把手、帯状縄文	縄文LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
4043	655	E6	後期	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
4044	655	E6	後期	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	外面赤彩
4045	655	I7	後期	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4046	655	F6	後期	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4047	655	E3	後期	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	注口土器部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4048	655	E3	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	把手	沈線	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
4049	655	J5	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	把手	沈線	—	砂粒	橙	—	—	
4050	655	I3	Ⅸ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	把手	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4051	655	I3	Ⅸ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	把手	環状突起、S字状文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4052	655	I5	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	把手	三角文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4053	655	J4	不明	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	把手	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
4054	655	H7	不明	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	把手	—	—	砂粒	橙	—	—	
4055	655	D5	後期	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	縄文LR	砂粒、赤色粒子	にぶい黄褐	—	—	
4056	655	H6	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文、刺突列	—	砂粒	橙	—	—	
4057	655	C5	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
4058	655	I6	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4059	655	G3	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	突起、沈線	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4060	655	I4	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4061	655	J5	Ⅷ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	同心円文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
4062	655	J3	Ⅸ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線帯	—	砂粒	褐灰	—	—	
4063	655	J4	Ⅸ	Ⅲ6	注口土器	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	褐灰	○	—	
4064	656	E2	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	B	15	—	—	—	—	—	鎖状隆帯、把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
4065	656	F3	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	16	—	—	—	—	—	鎖状隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
4066	656	J6	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	鎖状隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
4067	656	F3	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	爪形文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4068	656	E6	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	刻目隆帯		砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4069	656	E2	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	13	—	—	—	—	—	コブ状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4070	656	I6	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	コブ状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
4071	656	D3	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	沈線、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
4072	656	B4	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	—	—	—	—	—	—	把手、沈線、刺突	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4073	656	—	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	11.5	—	—	—	—	—	沈線	—	砂粒	橙	—	—	
4074	656	K7	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	A	9	—	—	—	—	—	把手、円形文	—	砂粒	橙	○	—	
4075	656	F6	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	—	9	—	—	—	—	—	突起	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
4076	656	F2	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	A	9	—	—	—	—	—	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
4077	656	—	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	C	7.2	—	—	—	—	—	把手	—	砂粒	褐灰	○	—	
4078	656	I5	Ⅶ	Ⅲ7	蓋形土器	C	6.2	—	—	—	—	—	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
4079	657	E7	X	Ⅲ8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文、木葉状文	縄文LR	砂粒	明黄褐	—	—	
4080	657	F4	X	Ⅲ8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口～胴部	磨消縄文、木葉状文	縄文LR	砂粒	橙	—	—	
4081	657	C4	X	Ⅲ8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文	縄文LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4082	657	H3	X	Ⅲ8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	褐	—	—	
4083	657	H3	X	Ⅲ8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	褐	—	—	
4084	657	H3	X	Ⅲ8	深鉢形土器	—	—	8	—	—	—	口縁部	突起、沈線	—	砂粒	褐	—	—	
4085	657	H3	X	Ⅲ8	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、沈線	—	砂粒	褐	—	—	
4086	657	C5	X	Ⅲ8	—	—	—	6.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒	褐	—	—	底部に網代痕
4087	657	D5	XI	Ⅳ	深鉢形土器	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
4088	657	J7	XI	Ⅳ	台付鉢	—	—	5	—	—	—	底部	玉抱三叉文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4089	657	J6	XI	Ⅳ	台付鉢	—	—	5	—	—	—	底部	沈線文	—	砂粒	褐灰	—	—	底部に網代痕

第 53 表　土器観察表（43）

２．土製品

土偶を検討するに当たり私見をまとめた経緯がある（註 103)。私見では、新潟県に分布する縄文時代中期の土偶が、限定された二形態の土偶で構成されるという考え方（註 104）に異論を呈し、多様な形態の土偶によって群が構成されているとした。また、学史において土偶からの変容が指摘（註 105）されてきた三角形土製品を第二の土偶と捉え、土偶二極構造を提示した。そして、三角形土製品を土偶と認定することから名称を「三角形土偶」へと変更した。この三角形土製品を三角形土偶として論を展開することに対する批評を、多くの方々から頂いた。その批評を踏まえ、「舌が乾かぬうちに」と言われるが、持論を再考するものである。

すなわち、学史を重んじて三角形土製品の呼称を堅持する中で、土偶と三角形土製品の関係を解釈することとしたい。土偶は破損率が高い遺物である。その破損が意図的なものか、あるいは製作技術に関連するのか、については不明である。また、分割塊製作技術の存在を踏まえ、破損行為を円滑に進めるために工夫された技術であるという破損行為肯定論がある（註 106)。

筆者は、あくまでも「土偶を破損する」という通常の役割があったと考える（註 107)。よって、分割塊製作技術と破損行為は関連するものであると推考する（註 108)。その結果、土偶は、分割塊の接合面で破損する事例が多く、破損率が高いと判断される。

一方、三角形土製品は、意図的に破損行為が行われていなかったとは言い難いが、土偶に比べれば破損率は低い。また、三角形土製品は抽象化された「三角の形」に固執する。この固執する背景にこそ、土偶と分別された三角形土製品の社会的意味があったと再考するものである。

土偶と三角形土製品は、共にヒトガタ（あるいは人化した精霊）を具現化した遺物である。破損率が高くて、より具象的な土偶と、破損率の低く、より抽象的な三角形土製品をパラレルな関係に置いて、その相対的なあり方を「土偶相」として理解するものである。

また、土偶相の一員に組み込まないが、三角壕形土製品、各種土製品、土製耳飾、板状土製品などを含めて以下で扱う。

ａ．土偶（図版第 658 図～第 682 図）

このたび調査した道尻手遺跡からは土偶が 150 点、三角形土製品が 216 点出土した。まず土偶について概観する（第 62 図)。

１．分類

A類）脚部を明確に持つ。脚部の存在から立像（3）を基本とするが､自立できない資料（1）も存在する。特徴は、皿状頭部からつながる逆三角の顔を持つ（3)。顔の輪郭は隆起線でハート形に表現されるものを基本とし、変容形態が観察できる。身体は胸部と腰部が強調されバイオリン形（2）に類似する。腕はやや上に広げ、バンザイ状を呈する。手先は尖頭状（4）や拇指状（3）を呈する資料や、指を表現する資料（25）がある。腕には横線区画が施される事例（3・25・26）がある。乳房は粘土粒で表現されるが、沈線で囲うようなブラ文（註 109）はない。腹部は隆起線で表現した正中線が下垂する。正中線は下垂し、臍部分で膨らみ凹部表現して陰部まで伸びる（5)。臍部分の正中線には変容が認められる。凹部を持たずに、やや左腹部に広がる資料（3)、凹部が変容してＪ字状を呈し、陰部まで正中線が伸びない資料（10)、変容した凹

部のＪ字が反転した資料（2・4・7）などが散見される。腹部から臀部に掛けて、表裏に文様が連結して展開する。臀部には明確な反りあがる隆起部はない。しかし、臀部には沈線描出による逆ハートのモチーフがある。典型的な逆ハート形（註110）はなく、逆隅丸三角を呈する資料（1・2・10）、逆隅丸三角が崩れた資料（7）がある。また、一筆書きでなく結節する逆隅丸三角のモチーフもある（4・5）。背中は無文を基とする。A類の破損部接合観察からブロック接合による製作手法が採用されている。

B類）　本類は脚部を保有しない非立像系の板状土偶と推測される。顔面頭部の接合がないことから不明であるが、皿状頭部を有する顔面部が付くと推測される。B類の特徴は、腕部がバンザイ状でなく、ほぼ水平になる。そして腕部は厚く、横断面が略方形を呈する。手先は方形を呈する。左右の腕部中央に縦孔を穿つ。腕部

第62図　土偶形態分類図

の手先が滑車状になる事例が含まれる（33）。正中線は隆起線で表現されると思われる（33）。腹部ならびに臍部の詳細は不明であるが、文様が施されている（36・37）。横帯状の区画文がある可能性がある（36）。乳房は粘土粒で表現され､腕部から伸びる沈線がブラ文に類似して巡る事例がある(36･37)。胸部から腕部、そして背中へと文様が連結して巡る（33・36）。胸部から腕部へ、そして背中へ展開する文様の有無があることから、B類をB類A（33・36）、B類B（37）に細分する。

C類）本類は脚部の接合がない。しかしながら、身体部の厚みから推測して非立像系に含まれる板状土偶と思われる。C類の分類要素のほとんどが､B類と同じである。厚い腕部に縦孔が空かないことが分類基準である。

D類）本類は連結脚部を持つ一群である（51）。顔面頭部や身体部の接合がないことから不明な部分が多い。よって、正中線表現、背中施文の有無、臀部形態などで細分されることが予想される。

E類）本類はA～D類に比べて、腹部の膨らみが強く、臀部の隆起が明確である。正中線は沈線で描かれ、臍部は円形刺突を施す。また、正中線は陰部まで伸びない。陰部は円形刺突がやや深く施される。臀部には粘土紐を貼り付け、隆起させているが、反りはほとんどない。臀部に表現される逆ハート形文は、やや崩れかかっているが抉りがわかる。脚部はしっかりある立像系である。胸部や腕部、そして顔面頭部の接合がないことから不明である。その諸属性が明確になれば細分される可能性がある。

F類）本類は脚部を持たない板状土偶である。正中線は基本的に隆起線によって表現される。隆起線の下端部がやや膨らみ、腹部の臍を表現していると推測する。臍から陰部までは二本の沈線で描かれている。胸部、腕部、顔面頭部は不明である。臀部は平坦であるが、逆隅丸三角が変容し、下方に末広がりする八の字状に沈線が引かれている。

G類）本類は全体像が不明であるが、文様表出技法をメルクマールとして抽出した。半截工具の背面を刺し引きする幅狭い角押文が採用されている（41）。

H類）本類はA～G類に分類できない形態不明な土偶である。腕部の翼状形態がB・C類に類似する。腕部の裏面や背中には施文はない（42）。

I類）本類は首なし土偶に分類される資料である。土偶と三角形土製品を結ぶ掛け橋的遺物である〔56⇒（54・55）⇒151〕。56の厚い胸部から腕部の形態は、B・C類の両翼状の形態に類似する。

以上のように、9形態に分類した。これらは以前に発表した分類（註111）に照合するならば、以下の通りである。A類＝1群2C類、B類＝1群2E類、C類＝1群2E類、D類＝1群2B類、E類＝1群2H類、F類＝1群2E類、G類＝1群2J類、H類＝1群2E類に類似、I類＝1群2M類である。このたびの分類では、1群2E類がB・C・F・H類に細分されている。このように、土偶は群を構成するが、今後の検討で時間軸での再整理が必要である。

次に、分類基準の少ない顔面頭部と腕部、そして脚部の部位資料を概観したい。

確認された19点すべてが、皿状頭部（註112）を呈する。この皿状頭部を分類する。

1類：皿状を呈する（66）。

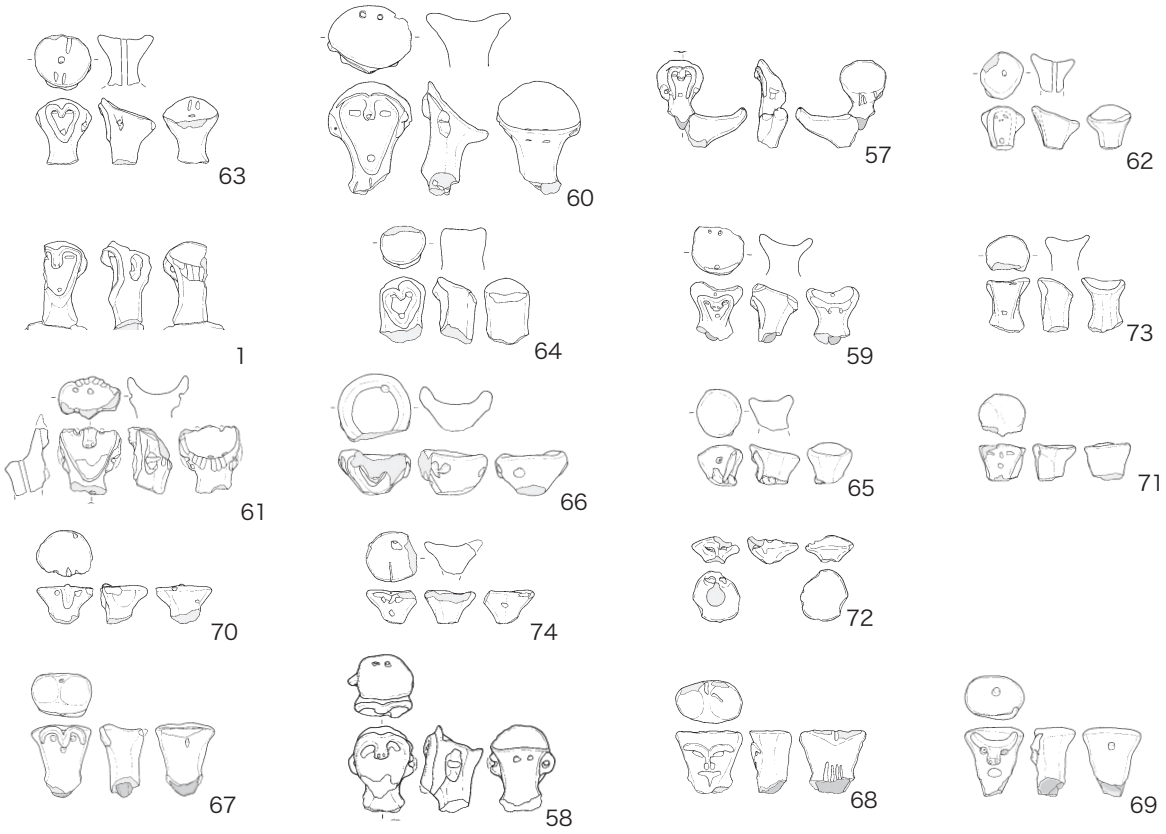
2類：皿状を呈し、前頭部から後頭部に掛けて傾斜する（63・60・62・59・73・61・65）。

3類：皿状を呈し、ほぼ平坦（72）。

4類：皿状を呈さずに、前頭部から後頭部に掛けて傾斜する（1・58・64）。

5類：皿状を呈さずに、前頭部から後頭部に掛けて急傾斜する（57）。

6類：皿状を呈さずに、ほぼ平坦（71・70・72・67・68・69）に分類できる。



第 63 図　頭部分類図

また、頭部に孔が穿かれる事例がある。

A．頭部中心に縦位に穿つ事例（2類：63・62)。

B．後頭部から背面頚椎に斜位に孔が穿かれる事例（6類：67・69)。

C．後頭部から背面頚椎に斜位に二孔穿つ事例（1類：66、2類：60・59・61・4類：58)。

次に、顔面の表現を観察する。顔面は基本的に逆三角形を呈する。例外として、資料 58 は楕円形を呈する。粘土紐を貼付して眉と鼻筋を表現するものが多い。

イ．鼻筋＋眉＋顎の一連の輪郭を表現する（2類：63、4類：64)

ロ．鼻筋＋眉から下垂する表現（2類：62・59・73、5類：57)

ハ．鼻筋＋眉を表現（2類：60・1、4類：58、6類：67・68・69)

眉の表現は、垂れ眉を基本とするが、69 は吊り眉である。

ニ．鼻筋のみを表現（6類：70・71)

ホ．眉のみを表現（6類：74)

ヘ．不明（1類：66、2類：61・65、6類：72)

以上、である。

頭部形態は①1類から3類、②4類と5類、③6類の三つのグループに再分類できる。この①から③のまとまりと頭部穿孔や顔面表現が重複しながらも偏在性がある。

頭部穿孔は、①（A ＋ C)・②（C)・③（B）である。

顔面表現は、①（イ＋ロ＋ハ)・②（イ＋ロ＋ハ)・③（ハ＋ニ＋ホ）である。

この傾向をどう理解するかである。基本的に時間変遷の中で、漸移的に変化した様子として理解するならば①＋②⇒③への変化が推定される。その変化の中で継承される要素と変化する要素、新しく組み込まれる要素がある。

腕の部位資料は 11 点ある。すべて手を上にあげて、バンザイ状を呈する腕である。腕の手先形状と腕への沈線施文で分類することが可能である。

1．手先が扁平で指表現がある。横線が施される（75）。

2．手先が尖頭状を呈し、横線が施される（81）。

3．手先が尖頭状を呈し、腕に並行して縦の集合線が施される（83）。

4．手先が尖頭状を呈し、施文が確認できない（77）。

5．手先が拇指状を呈し、横線が施される（3）。

以上である。

第 64 図　腕部分類図

1から5の表現は、1類土偶の表現バリェーションの中で理解できるものである。但し、1とした手先の指表現を行う資料については、資料増加をまって検討したい。

脚部の資料は 37 点ある。すべての観察から脚部の大半は、ソケット式積み上げ手法に伴い、はめ込み用の凸部を持つ。文様の有無と種別で、分けることが可能である。

1．集合沈線による放射縦線を施す資料（90・88・87）

2．隆起線による放射縦線を施す資料（119）

3．沈線による横線を 3 条程度巡らす資料（92・104）

4．沈線による表裏側面に展開する意匠文を施す資料（105・107・111・112）

5．無文の脚部（117・124）

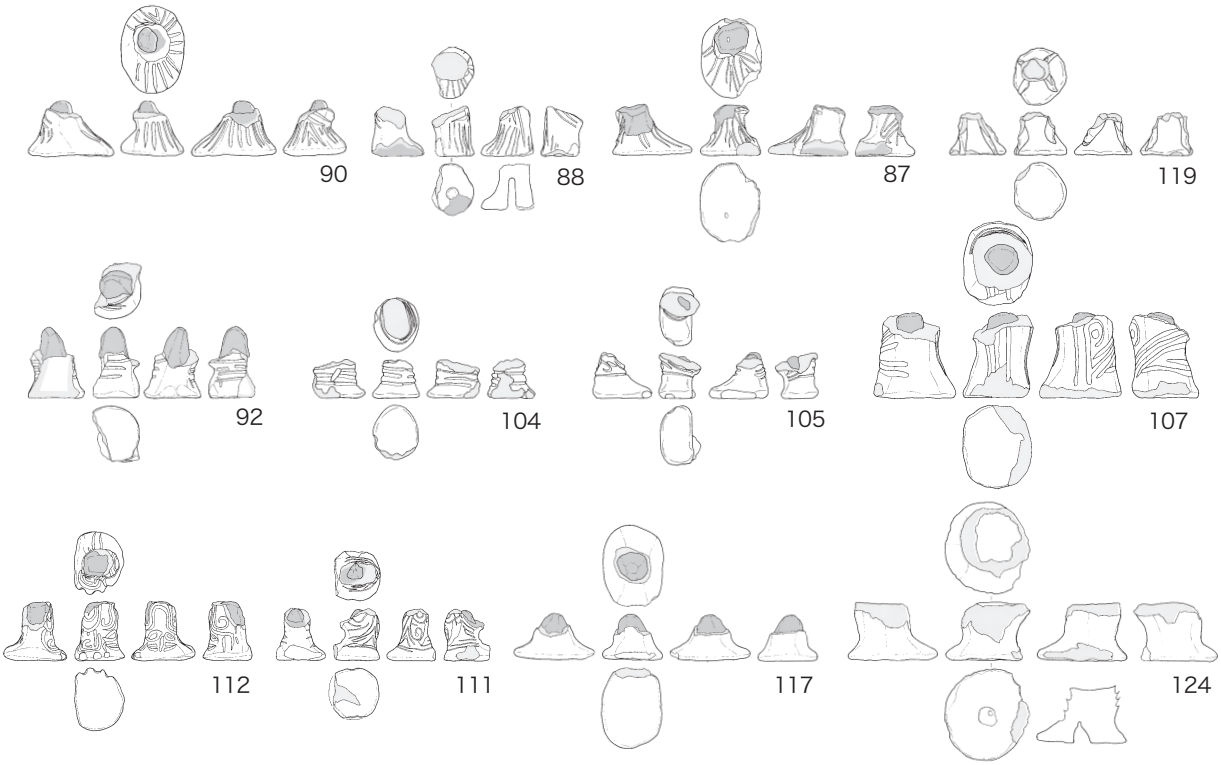
以上である。

凸部を持つ脚部の長さは1から5まで平均的に類似するが、資料 107 は約2倍に長さがある注目される。また、脚の裏は平坦であるが、一部に孔を穿つ資料が散見される（註 113）。

孔が穿かれている資料は 88・87 と 124 である。88 と 87 は共に1に分類される資料である。88 は径 8mm：深さ 20mm を計測する。87 は径 3mm で貫通している。124 は中空土偶の脚部（台付き土器？）として扱った。孔の径は 14mm：深さ 14mm を測る。

1類土偶との比較では、脚部1・3・5が附随する可能性が高い。脚部2・4は異なる系統の土偶脚部である可能性が考えられる。

以上のように、土偶は全体像の把握が難しく、破損片からまとまりを追求することから、土器研究のような明確な分類基準を用意することが難しいが、現段階の認識として9形態の土偶を分類した。以下に、観察属性の基準を記述する。



第 65 図　脚部分類図

2．部位

破損部位を番号で表示（第 66 図）し、接合関係が確認された資料は○＋○として記録した。部位番号は、顔面頭部（100）、体部＋腕部（200）、腰部＋脚部（300）とした。

顔面頭部は、顔面部（右：101．左：102．左右：105）、後頭部（右：103．左 104．左右：106）とした。

体部と腕部の接合面、体部の正中線上の縦位接合面で分割されている事例が多いことから、体部（210）とし、右体部（211）、右体部上位（213）、右体部下位（214）とした。左体部（212）、左体部上位（215）、左体部下位（216）とした。左右体部上位（217）、左右体部下位（218）とした。

右腕部全体（230）、右腕先端部（231）、右腕肘から肩部（232）とした。左腕部全体を（220）、左腕先端部（221）、左腕肘から肩部（222）とした。

腰部から脚部全体を（300）とし、右脚部（301）、左脚部（302）とした。足の甲は脚部の一部に含めた。

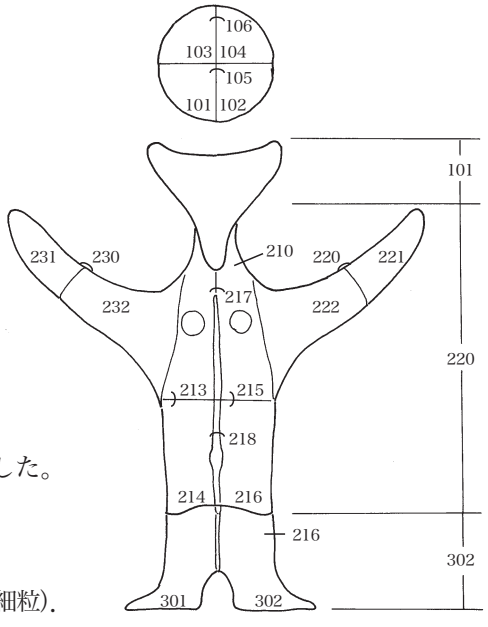
3．色調

1：赤褐色（＋＋）．2：赤褐色（＋）．3：灰白色（＋）．
4：灰白色（＋＋）．5：灰色．6：黒灰色

4．胎土

胎土の判別は難しく、含有されている特徴的な鉱物で分類した。

0：通常．1：花崗岩片．2：細かな角閃石粒．3：褐色粒子．
4：淡茶褐色粒子．5：黒色粒子．6：金雲母（少ない）．
7：鉱物がほとんどない．8：土器砕片．9：こげ茶色粒子（細粒）．
10：リモナイト



第 66 図　部位番号

5. 計測属性

幅、長さ、厚さは第 67 図のとおりに計測した。

長さは、基本的に身体長である。胴部あるいは脚部なども身体軸を長さとした。腕部は腕の主軸を長さとした。足に関しては、足裏の長軸を長さとした。

幅は、身体長に直交する軸を幅とした。胴部や脚部も同様である。腕部の幅は、正面の腕主軸に直交する軸を幅とした。足裏の短軸を幅とした。顔面頭部の幅は顔面主軸に直交する最大値を幅とした。

厚さは、顔面頭部、体部、胴部、腰部、脚部、腕部の幅に直行する軸を厚さとした。

6. 施文技術

沈　線　　0：なし．11：1 本．12：2本

隆起線　　0：なし．21：調整隆起線．22：未調整隆起線

背竹管　　0：なし．31：角押文

刺　突　　0：なし．1：あり．2：孔がある

貼　付　　0：なし．1：あり

7. 顔面表現

第 69 図のとおりに分類した。

1 ～ 9 は隆起線で、眉、鼻、顔の輪郭を表現する。10・11 は沈線で眉を表現する。11 は不明を表す。

8. 耳の有無

0：なし．1：あり．2：耳に孔を穿つ

9. 頭部の角度

0：計測できず．数値は計測角度

計測部位は第 68 図参照。

10. 頭部の孔有無

0：なし．孔の数を数値で示す

11. 頭部の粘土紐貼付

0：なし．本数を数値で示す

12. 赤色塗布の有無

0：なし．1：あり

13. 腕部形状 1

0：なし．1：水平．2：やや水平．

3：バンザイ．4：下げ

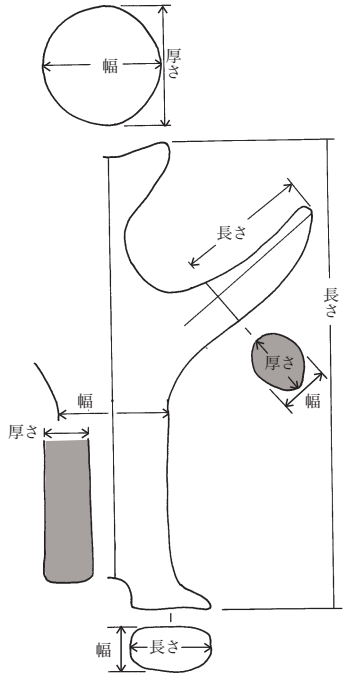
14. 腕部形状 2

0：なし．1：翼状．2：棒状．

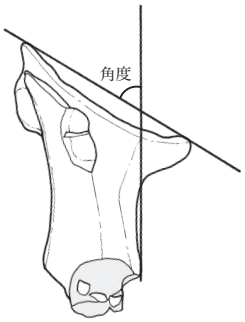
3：略方形．4：略棒状（稜付き）

15. 腕部区画の有無

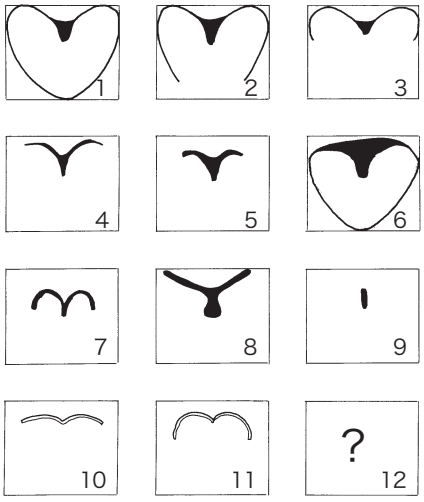
0：なし．1：1 本．2：2本．3：3本．4：不明



第 67 図　土偶計測部位



第 68 図　頭部角度



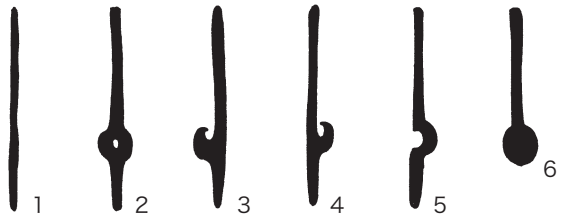
第 69 図　顔部表現分類図

16. 腕端部滑車状の有無

0：なし．1：あり．2：不明

17. 胸部の乳房

0：なし　計測数値の記入。(径)：(高さ)　10：不明



第 70 図　正中線分類図

18. 胸部のブラ文

乳房の下部を囲むように施される沈描線をブラ文と呼称する。

0：なし．1：あり．10：不明

19. 正中線

身体主軸に描画される下垂線を正中線と呼称する。正中線は、隆起線で表現する凸群と沈線や刻み目などで表現する凹群がある。

0：なし．1：隆起線．2：隆起線＋両脇沈線．3：一本沈線．4：平行沈線．4：平行沈線　10：不明

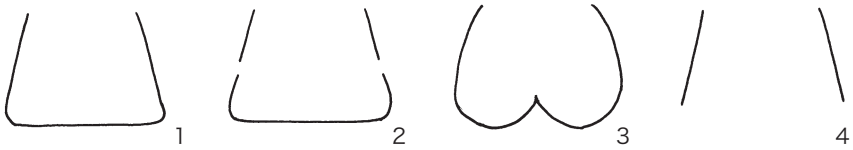
20. 隆起線正中線の分類

第 70 図の通りである。

10：不明

21. 臀部の逆ハート文

0：なし　10：不明．



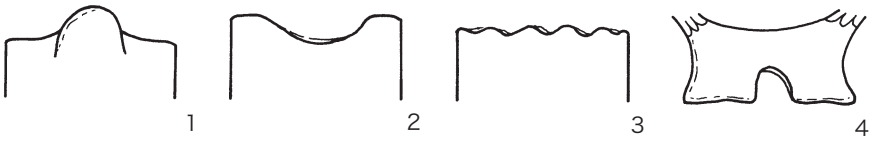
第 71 図　臀部分類図

第 71 図の通りに分類した。

22. 脚部の高さ

0：なし

数値は計測値



第 72 図　脚部接合面分類図

23. 足裏の大きさ

0：なし　(最大長)：(最大幅) の計測値を記入

24. 足裏の孔

0：なし　ある場合は計測値の記入 (長径)：(短径)　A：緩くへこむ (凹部)

25. 脚部接合面

第 72 図の通りに分類した。

26. 腕部の孔有無

0：なし．1：縦孔あり．2：横孔あり．10：不明

27. 脚部の有無

0：なし．1：自立する脚部あり．2：非自立の脚部あり．3：連結脚部．

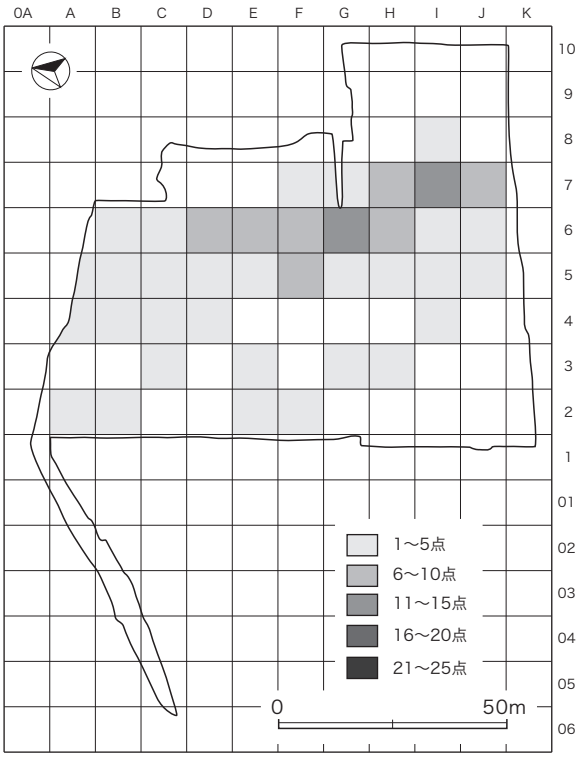
4：連結脚部の膝部分に横孔が開く．10：不明

28. 出土状況

出土した土偶の大グリット別濃淡図を第 73 図に示した。その出土は、全体の約 85%を占める 116 点が大グリット 5～7 列に偏在する。この範囲は概ね廃棄帯が形成された位置にあたる。さらに、大グリットにおいて 5 点以上の出土グリットを観察すれば、D6・E6・F5・F6・G6・H6・H7・I7・J7 区の 9 グリッ

トが抽出できる。その中でもＦ区からは 15 点、I7 区からは 12 点が出土している。近接する居住域と空間的位置関係を観察する。F6 区はⅢ期に位置付けされる第 42 号住居跡の後方に位置する。Ｉ７区に一番近接している住居跡は、Ⅳ期に帰属する第 46 号住居跡である。しかしながら、約 20m 離れている。

その主要土偶の出土地点あるいは出土グリットを表示したのが第 75 図である。中期土偶は、前述の如くに廃棄帯からの出土であり、明確な偏在性を指摘することはできない。但し、複数地点出土の部位資料が接合する資料が６点ある。その接合資料は、Ｅ・Ｆ－５・６区とＩ・Ｊ－６・７区の２箇所に分布の核をもつ。その位置は、必然的に出土土器量の多いグリット範囲に含まれる。また、出土した 74.7%が廃棄帯から出土し、遺構覆土出土の土偶は 6.7%：10 点にすぎない。



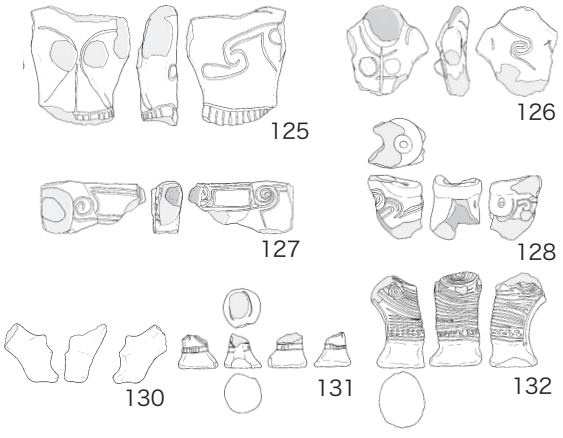
第 73 図　出土土偶の時期別濃淡図（点数）

明確に後期以降に帰属すると推定される土偶は７点ある（第 74 図）。分布図に示した３点は、廃棄帯が分布しないＦ・Ｈ－３区からの出土である。この空間的位置は後期前葉に構築された配石遺構の隣接地に当たる。F3 区は３号配石遺構の北側にあたり、Ｈ３区は２号･3 号配石遺構の分節部位に位置する。他に、128 はＩ３－ 13 区－ 26 ＋ 28 の接合資料で、その位置は２号配石の範囲である。

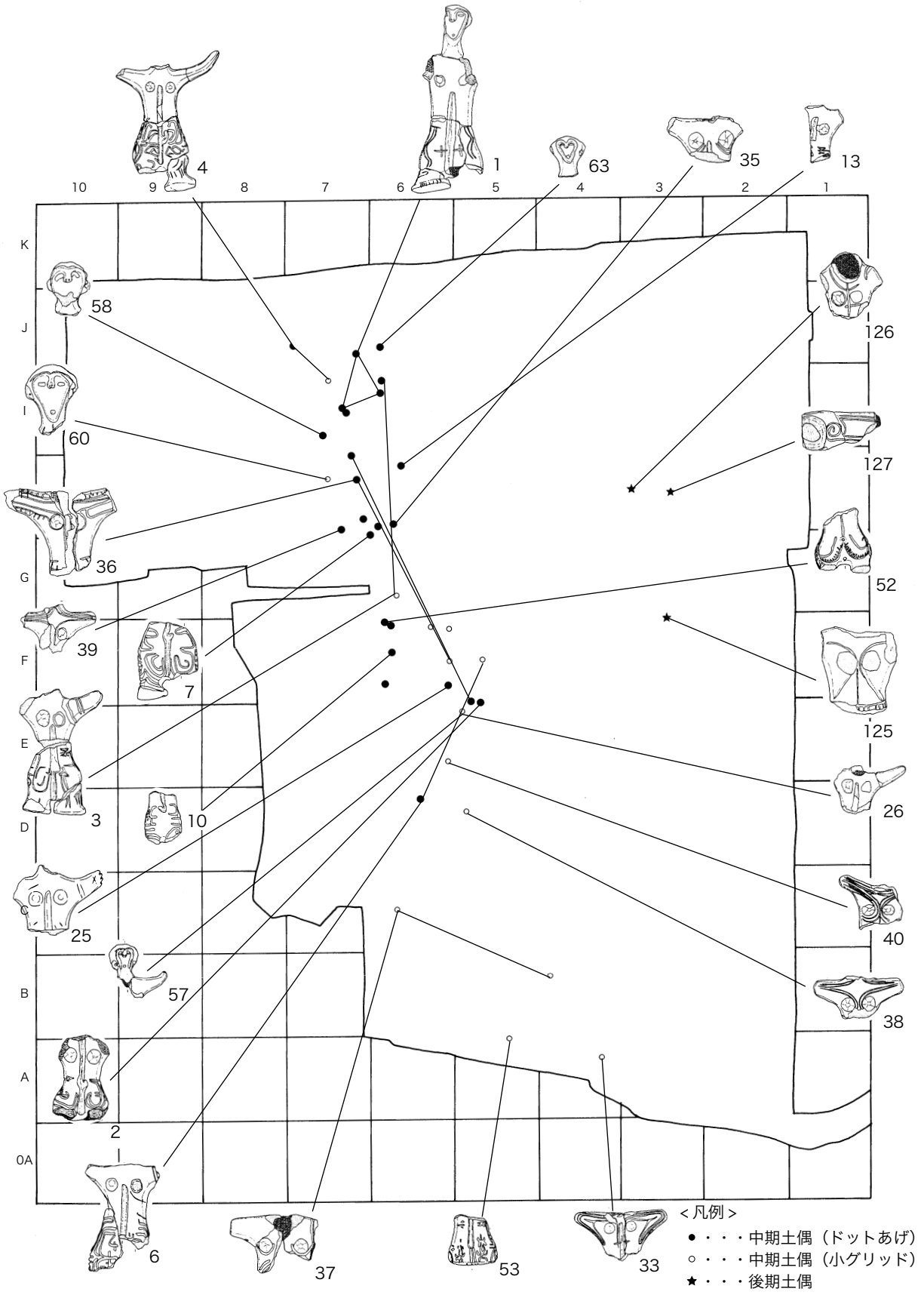
以下の資料は廃棄帯からの出土である。131 は G6 －６区のⅤ層である。７はハート型土偶の左脚部である。出土地点は H6 － 1215 のⅥ層である。

130 は特徴的な左腕部の資料である。肩部に鍔状の張り出しを持ち、肘部と推測できる箇所に稜をもつ。このような形態の腕部は、遠く岩手県千代森（5）、九年橋（第５次）遺跡の遮光器土偶に、その片鱗が認められ、茨城県上高井神明遺跡のみみずく土偶に類似形態を見ることができる。その類似から晩期前葉に帰属すると考える。胎土には、中期中葉の赤焼き土器を粉々にして混入していると思われる貴重な資料である。その出土地点はH6－11区のⅥ層である。

中期土偶が出土した廃棄帯の中でも、H6 区は９点の出土があり、３番目に出土が多いグリットである。このグリットから時期を越えた遮光器土偶やみみずく土偶が出土した現象を偶然と見なすのか、あるいは儀礼に伴う意図的な廃棄占地なのか、類例の増加を待って、検討したい。



第 74 図　後・晩期の土偶



第 75 図　主要土偶の分布と接合関係図

No	図版	注記番号	層位	分類	部位	色調	胎土	大きさ			施文技術	顔面表現	耳の有無	頭部の角度	頭部の孔有無	頭部の粘土紐貼付	赤色塗布の有無	腕部形状1	腕部形状2	腕部区画の有無	腕端部滑車状の有無	胸部の乳房	胸部のプラ文	正中線	隆起正中線の分類	臀部の逆ハート文	脚部の高さ	足裏の大きさ	足裏の孔	脚部接合面	腕部の孔有無	脚部の有無	備考
								幅	高	厚																							
1	658	I7-19G+J7-4881+I6-2820+I7-4525	—	A	102:104:212:301	4	3	7.1	20.1	5.4	11,12:0:0:1:1	1	2	66	0	0	0	0	0	0	0	10:2	0	1	1	1	24	52:39	0	2	10	2	接合資料
2	658	E5-45	—	A	217	3	1	5.7	8.9	2.7	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15:8	0	1	4	1	0	0	0	0	10	10	
3	659	G6−17G+I6−2984+I6-25G+J7-2G	—	A	217:220:221:302	5	1	8.6	13.1	3.5	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	3	2	2	0	17:7	0	1	2	1	14	35:32	0	3	0	1	接合資料
4	659	J7-23G+I7-15G+J7-2648+J7-22G	—	A	217:218:222:231:301	2	0	14.4	10.9	3.6	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	10:5	0	1	4	2	20	38:30	0	3	0	1	接合資料
5	660	D6-135	IV	A	217:218:302	3	0	5.5	9.6	3.35	12:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10:5	0	1	5	1	20	33:27	0	10	10	1	
6	660	D6-145+F5-18G		A	217:214:232	3	1	7.85	11.2	3.4	12:21:0:1:1	0	0	0	0	0	0	2	1	4	2	12:9	1	1	10	10	0	0	0	0	10	10	
7	661	H6-4146	—	A	221	3	0	6.3	8.2	3.37	12:21:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	1	20	38:32	0	1	10	2	
8	661	E6-6G	—	A	218	1	0	5.6	5.3	2	11,12:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	0	10	10	
9	661	9Jフクド	—	A	218	2	0	5.4	3.8	1.4	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1	1	0	0	0	0	10	10	
10	662	F6-376	—	A	218	2	0	3.7	5.6	2	11:21:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	0	0	0	0	10	10	
11	662	J7-9G	V	A	218	3	0	3.6	3.8	1.7	11:21:0:1:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	10	10	
12	662	E6-1G	—	A	218	5	0	4.9	5.8	1.8	11:21:0:1:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	10	10	
13	662	H7-3415	—	A	212	4	0	3.9	6.1	1.9	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11:7	0	1	10	10	0	0	0	0	10	10	
14	662	F6-9G	—	A	218	4	0	3.7	3.8	1.7	11:21:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	4	0	0	0	0	10	10	
15	662	G6-20G	VI	A	218	3	1	3.4	3	1.4	11:21:0:1:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6	10	0	0	0	0	10	10	
16	662	11J	—	A	218+300	3	0	3.6	3.35	2.8	11:22:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	10	3	15:15	0	10	10	2	
17	662	G7-15G	VI	A	218	2	0	5.05	5.2	1.95	11,12:21:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	10	0	0	0	0	10	10	
18	662	E2-2	V	A	214	2	5	5.3	3	2	11:21:0:1:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	10	1	0	0	0	0	10	10	
19	663	F6-2G	—	A	214	3	1	3.9	7.4	2.1	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
20	663	DST	—	A	218	3	0	4.8	4.05	2.15	11:0:0:1:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
21	663	I7-15G	—	A	217:218	1	0	3.6	4.8	1.2	12:0:0:1:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	10	0	0	0	0	10	10	
22	663	F6-6G	V	A	217:218:222	3	0	4.8	6.8	1.5	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
23	663	D5-14G	—	A	214	3	0	2.65	4.7	1.5	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
24	663	A2	I	A	217	2	0	6.4	4.7	2	0:21:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	1	10	10	0	0	0	0	10	10	
25	663	F6-170	V	A	217:200	3	0	6.7	8.9	2.6	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	3	3	2	0	14:8	1	10	10	10	0	0	0	0	0	10	
26	664	E5-25G+F6-10G	—	A	217:200	3	0	7.2	5.5	2.5	12:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	13:7	0	1	10	10	0	0	0	0	0	10	接合資料
27	664	B2	—	A	217	2	3	5.9	5.4	2.5	0:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13:5	0	1	10	10	0	0	0	0	10	10	
28	664	I7-9G	—	A	213	3	0	4.3	5	2.5	0:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16:7	0	1	10	10	0	0	0	0	10	10	
29	664	I7-7G	VI	A	217	4	1	3.5	4	2.2	0:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8:8	0	1	10	10	0	0	0	0	10	10	
30	664	F6-9G	V	A	211	3	0	3.1	5.8	3.1	0:0:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10:7	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
31	664	D6-1G	—	A	218	4	4	3.9	5.5	1.9	11:21:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	10	0	0	0	0	10	10	
32	664	E5-15G	—	A	211	3	0	3.35	3.7	1.8	0:0:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11:4	0	10	10	10	0	0	0	0	10	10	
33	665	A4-9G	VI	A	21:220:230	1	0	14.5	7.8	3	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	16:9	0	1	10	10	0	0	0	0	1	10	接合資料
34	665	H6-996	VI	A	217	4	1	5.2	5.1	2.4	11,12:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	10	0	0	0	0	10	10	
35	665	H6-696	—	A	217:232	3	1	7.85	4.8	2.7	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	16:7	1	1	10	10	0	0	0	0	10	10	
36	666	H7-4633+F6-5G	—	A	210:222:232	1	0	11.5	9.2	3.25	12:21:0:1:1	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	14:5	0	1	10	10	0	0	0	0	1	10	
37	666	B4-24G+C6-18G	—	A	217:230	2	0	9.1	6.05	3.4	11:0:0:0:1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	15:8	1	0	0	10	0	0	0	0	1	10	接合資料
38	666	D5-24G	—	A	217:220:230	4	1	9.3	4.4	2.7	11:0:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	14:9	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
39	667	H7-4299+F6-3G	—	A	217:200:232	1	0	11.8	7.6	3.5	11,12:0:0:0:1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	17:6	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
40	667	E5-2G	VI	A	217:230	4	0	5.7	6.8	2.2	12:0:0:0:1	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	12:4	1	3	10	10	0	0	0	0	0	10	
41	667	J5-1-22-23J-RO2	—	G	222	1	0	6.3	5.3	5.25	11:0:31:0:0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
42	668	F6-511	VIc	H	222	4	1	6.3	7.4	3.35	12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
43	668	C5-15G	VI	A	213	4	5	3.1	3.1	1.8	12:0:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16:4	1	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
44	668	I6-6G	—	A	217	2	1	5.6	4.4	2	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11:2	0	2	10	10	0	0	0	0	0	10	
45	668	H7-6G	VI	A	217	3	0	4.7	4.05	1.8	11:0:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10:4	0	4	10	10	0	0	0	0	0	10	
46	668	H5-25G	—	A	212	4	0	2	5.55	2.45	12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
47	668	17AJ	—	A	217	3	0	4.2	3.6	2.1	11:0:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13:7	0	3	0	10	0	0	0	0	0	10	
48	669	F6-19G	V	A	212:222	3	0	5	4.5	1.7	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
49	669	J6-23G	VI	A	216	2	0	5.1	2.4	1.9	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
50	669	C5-6G	VI	A	211:233	3	0	4	7.7	2.5	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	接合資料
51	669	H5-17G	—	D	300	3	8	3.1	3	1.8	11:0:0:0:0:	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9	17:16	0	10	10	3	
52	669	F6-142	VI	E	218	2	6	5.8	6.8	3.5	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	3	0	0	0	0	10	10	
53	669	A5-10G	—	B	218	3	0	5	5.2	1.5	11,12:21:0:1:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	4	0	0	0	0	10	0	
54	669	I5-19G	I	I	一部欠損	4	0	4.3	4.4	1.5	11:0:0:2:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
55	669	H7-2191	VI	I	一部欠損	2	0	4.6	4.7	2	0:21:0:1:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
56	669	E6-15G	V	I	一部欠損	4	1	3.8	5.9	1.8	0:0:0:1:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10:5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	
57	670	E5-205+H7-2381	VI	—	100:200	2	0	6	5.6	2.1	11:21:0:1:1	2	2	38	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	接合資料
58	670	I7-5094	—	—	100	3	1	4.2	5.6	4.1	11:21:0:1:1	3	2	70	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
59	670	G7-1G	—	—	100	3	1	3.4	3.9	3	0:21:0:1;1	2	0	60	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
60	670	H7-14G	—	—	100	4	0	5.5	7.4	4.4	11:21:0:1:1	6	2	120	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
61	671	C6-8	—	—	105	2	1	4	4.4	2.8	11:21:0:1:1	1	2	0	8	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	目が穴
62	671	I7-8G	VI	—	100	4	1	2.8	2.9	3	0:21:0:1:0	10	0	49	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	貫通孔
63	671	J6-1463	VI	—	100	1	0	3.6	4.25	3.7	11:21:0:1:1	1	1	52	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	貫通孔
64	671	G6-14G	—	—	100	4	0	3.9	2.9	2.1	0:21:0:1:1	6	0	110	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
65	671	9Jフクド	—	—	100	4	0	2.9	2.75	3.2	0:22:0:1:0	10	0	62	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
66	671	I7-741	VI	—	101:103:104	2	1	4.9	3	4.4	0:21:0:1:1	1	1	68	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	

第 54 表　土偶観察表（1）

No	図版	注記番号	層位	分類	部位	色調	胎土	大きさ			施文技術	顔面表現	耳の有無	頭部の角度	頭部の孔有無	頭部の粘土紐貼付	赤色塗布の有無	腕部形状1	腕部形状2	腕部区画の有無	腕部隆帯状の有無	胸部の乳房	胸部のプラ文	正中線	隆起正中線の分類	臀部の逆ハート文	脚部の高さ	足裏の大きさ	足裏の孔	脚部接合面	腕部の孔有無	脚部の有無	備考
								幅	高	厚																						
67	672	F5-23G	—	—	100	3	0	3.8	4.8	2.9	0:21:0:1:1	3	0	72	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
68	672	F6-8G	VI	—	100	5	0	4.1	4.4	2.8	11:12:0:1:0	5	0	80	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
69	672	F6-124	—	—	100	2	1	3.7	4.5	2.95	0:21:0:1:1	8	2	90	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
70	672	D6-5G	—	—	100	3	3	3.65	2.5	3	0:21:0:1:0	9	0	82	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
71	672	H5-13G	—	—	100	4	0	3	2.4	2.7	0:0:0:1:0	3	0	77	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
72	672	F7-8G	—	—	100	3	0	4.3	4.1	2.7	0:0:0:1:0	7	0	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
73	672	F5-11G	—	—	105	2	0	2.8	3.6	2.2	0:21:0:1:1	6	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
74	672	B2-1	—	—	100	1	4	3.3	2.2	3.3	11:0:0:1:0	10	0	63	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10	
75	673	H6-1547	VI	—	203	3	0	2.8	2.85	1.15	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	3	1	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
76	673	J7-3191	VI	—	218+212+200	3	0	3.3	1.8	1.4	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
77	673	F5-21G	V	—	200	3	0	1.8	3.9	1.6	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
78	673	B2	—	—	200	3	0	1.85	2.9	3.8	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
79	673	G5-5-2	—	—	200	2	0	3.3	2.8	2	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
80	673	G6-935	VI	—	230	3	0	3.1	5.7	2.4	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
81	673	C5-25G	VI	—	200	4	0	2.1	3.3	2	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	2	2	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
82	673	I7-8G	VI	—	230	2	0	3.7	2.8	1.45	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	3	1	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
83	673	DST	—	—	230	5	0	4.6	2.2	1.7	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
84	673	00-7G	V	—	230	1	0	5.5	3.65	2.3	11:0:0:0:;0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
85	673	I7-19G	VI	A	230	4	3	3.8	5.1	1.5	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	3	3	2	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
86	673	1H-P3-3	—	A	211;232	4	0	5.2	3.15	2	12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	2	1	2	4	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
87	674	J7-1G	—	A	301	4	0	3.9	3.3	5.1	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	33	52:40	3:2	3	10	1	
88	674	F6-10G	—	A	302	4	0	2.7	3.35	3.4	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	24	33:24	6:6	10	10	1	
89	674	F5-24G	V	A	302	1	0	2.3	2.5	1.5	0:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	19	16:25	13:14	1	10	1	
90	674	H9-2921	VI	A	301	4	1	4.1	3.5	5.5	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	29	56:42	0	1	10	1	
91	675	J7-4G	VI	A	301	5	0	4.3	3.6	5.1	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	33	53:43	0	1	10	1	
92	675	F5-11G	V	A	302	3	2	3	4.6	3.7	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	23	37:26	0	1	10	1	
93	675	F7-5G	VI	A	302	4	1	3.05	2.8	3.65	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	28	37:32	0	1	10	1	
94	675	I7-M8	VI	A	301	6	0	3.5	3.25	4.4	11:0:0:0:0;	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	22	44:33	0	1	10	1	
95	675	H6-1911	V	A	302	3	0	2.6	3	2.45	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	29	24:27	0	2	10	1	
96	675	C1-22G	V	A	302	2	0	2.55	2.65	3.5	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	23	26:24	0	1	10	1	
97	675	G6-2077	VI	A	301	4	0	3.7	2.7	4.5	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	14	46:38	0	1	10	1	
98	676	G7-10	V	A	301	2	0	1.8	2.4	1.7	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	18	32:26	0	10	10	1	
99	676	B5-19G	VI	A	302	3	0	2.1	1.85	2.85	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	18	27:22	0	10	10	1	
100	676	E3-10G	V	A	302	2	0	3.2	2	4.4	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	17	44:30	0	10	10	1	
101	676	E5-18G	V	A	302	3	7	2.95	2.05	3.2	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	16	33:29	0	1	10	1	
102	676	B6-7G	VI	A	302	4	0	2.6	1.8	3.55	11:0:0:00	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	33:25	0	1	10	1	
103	676	I5-7J-P5	—	A	302	3	0	1.8	3.1	1.6	11,12:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	18	37:32	0	10	10	1	
104	676	15J	—	A	301	3	0	3.35	3.8	1.55	12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	25	32:28	0	0	10	1	
105	676	I8-1076	V	A	301	3	0	2.7	3	3.9	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	27	37:21	0	1	10	1	
106	677	G6-2100	—	A	301	0	4	3.5	2.9	4.5	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	21	44:35	0	1	10	1	
107	677	C6-15G	VI	A	302	1	0	5.1	3.9	3.6	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	46	54:47	0	1	10	1	
108	677	E3-P43	—	A	302	1	0	4.5	5	4.6	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	39	46:44	0	1	10	1	
109	678	B4-9G	VI	A	301	1	0	4.8	3.4	6.5	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	29	64:50	0	1	10	1	
110	678	F6	—	A	301	4	0	3.9	3.2	4.1	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	25	44:38	0	1	10	1	
111	678	I7-14G	VI	A	302	3	0	3	3.4	3.1	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	23	32:28	0	1	10	1	
112	678	G5-20-12		A	302	3	0	3.9	2.3	2	11,12:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	39	41:32	0	1	10	1	
113	679	F5-15G	V	A	218;302	4	0	4	3.8	2.6	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	11	21:19	0	10	10	1	
114	679	J4-P70	—	A	302	3	0	3.1	2	1.8	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	33	26:18	0	3	10	1	
115	679	C4-21G	V	A	302	2	0	3.45	2.9	3.45	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	25	34:35	0	10	10	1	
116	679	H6-22G	VI	A	302	4	0	2.7	1.8	3.5	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	16	35:26	0	10	10	1	
117	679	G6-7G	VI	A	302	4	1	3.85	2.9	5.2	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	20	53:40	0	1	10	1	
118	679	J7-14G	—	A	302	4	1	1	2	1.8	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	14	30:25	0	10	10	1	
119	679	F2-49	V	A	301	4	1	2.4	1.9	1.6	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	26	37:33	A	1	10	1	
120	680	J7-15G	VI	A	302	4	0	2.8	3	3.6	11:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	23	37:28	0	1	10	1	
121	680	F7-5G	V	—	302	3	0	3	3.9	3.3	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	35	32:30	0	1	10	1	
122	680	F6-2G	VI	—	302	2	0	2.85	1.6	4.05	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	16	41:29	0	10	10	1	
123	680	G6-22G	VI	—	302	1	3	2.55	1.8	3	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	18	30:26	0	1	10	1	
124	680	C3-141	V	—	301	4	0	5.5	3.8	5.3	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	38	61:51	10:10	4	10	1	
125	681	G3-11	V	—	217;218	4	0	7.3	9.25	3.2	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	3	0	10	0	0	0	0	10	10	
126	678	H3-23G	I	—	217	2	0	6.3	7	2.7	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14;9	0	3	0	10	0	0	0	0	10	10	
127	681	H3-12-8.9	—	—	212;222	4	0	8.2	4	2.4	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	10	10	10	0	0	0	10	0	10	
128	682	I3-13-26+28	—	—	232	4	0	4.3	4	3.7	11:21:0:2:1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	10	
129	682	F6-3G	V	—	200	2	10	5.2	2.1	2	0:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
130	682	H6-11G	—	—	200	4	8	4.2	4.5	3.2	0:21:0:0:1	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	10	
131	682	G6-6G	V	—	301	4	0	2.9	2.7	3	11:0:0:0:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	24	29:28	0	10	10	1	
132	682	H6-1215	VI	—	302	3	9	7.2	3.8	2.9	11:0:0:1:0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	61	42:36	0	10	10	1	

第 55 表　土偶観察表（2）

b．三角形土製品（図版第 683 図～第 695 図）

前述の如くに、本資料群を三角形土製品と呼ぶ。出土した三角形土製品は 216 点であった。その属性記録に関しては、以下のとおりである。

1．分類（第 76 図）

1類） 肩部と胸部、基部に隆起線を貼付して画する。区画外に刺突文を施す（1）。

2類） 肩部と基部に沈線で体部区画を施す。区画内外に刺突文を施す（2）。

3類） 乳房と性器を粘土貼付で表現する。大半に刺突による充填地文が施される。基部には性器模倣刺突文が施される。貼付形状や貼付部位で細分される。

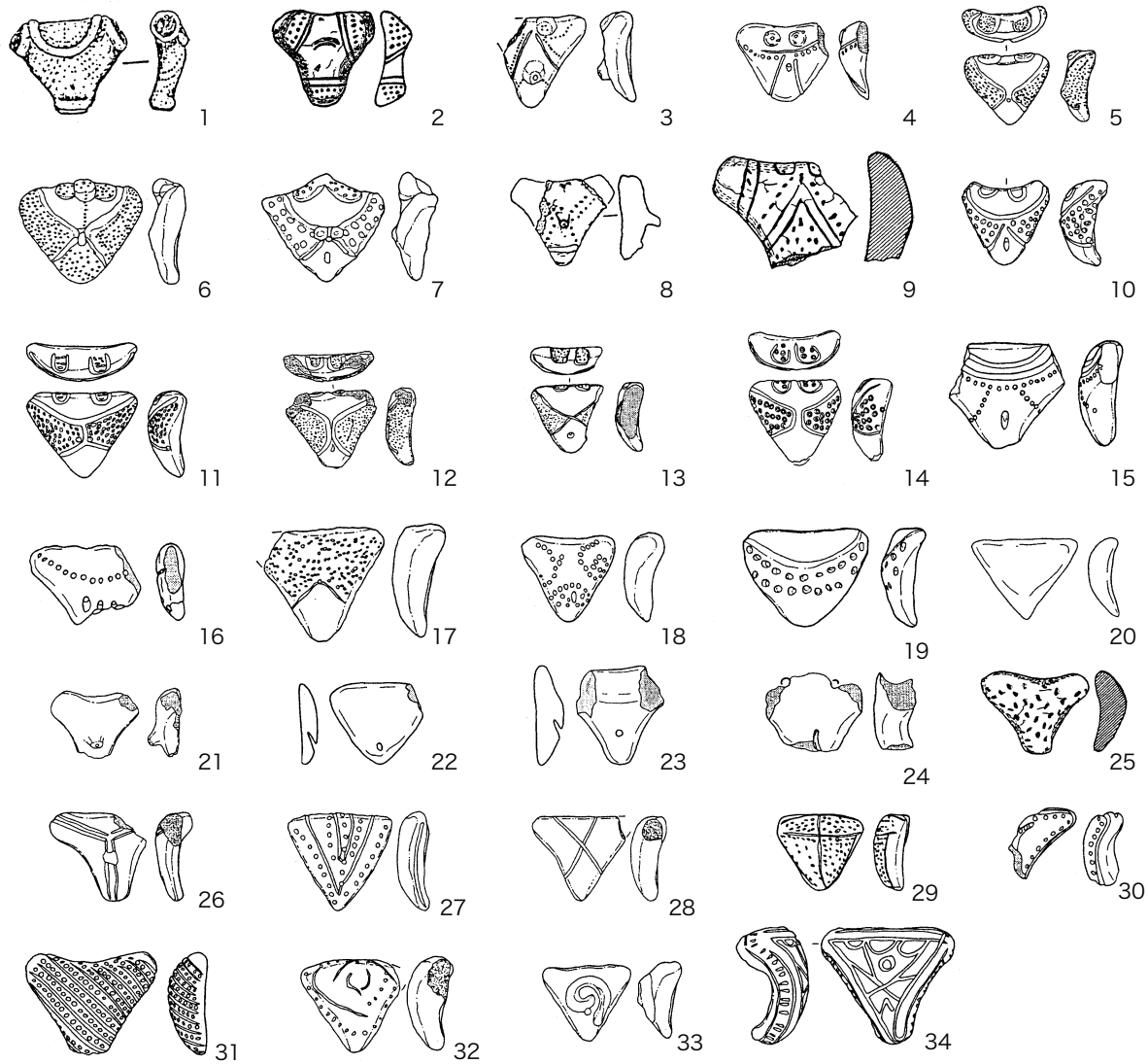
3A 類は、乳房と男性性器を貼付文で表現する（3）。

3B 類は、乳房を貼付文で表現し、基部に沈線を施し、股を表現する（4）。

3C 類は、3A・3B 類の乳房模倣貼付文は胸部に施されているが、本類は上位端部に施される（5）。

3D 類は、3C 類で上位端部に対で貼付された乳房模倣貼付文が連結し、三瘤状あるいは帯状になる（6）。

3E 類は、三瘤部分が凸化し、襷状貼付文に変化する。また、凸化によって、全体形状が菱形状化する



第 76 図　三角形土製品分類図

資料も含む（7）。

3F類は、乳房模倣貼付文は見られず、男性性器を模倣した凸状の粘土貼付による性器模倣貼付文が施される（8）。

4類）　4類は3類に類似するが、乳房の表現を沈線で行う。沈線による描線効果で細分される。

4A類は、乳房と肩部、そして基部への股表現を沈線で行う（9）。

4B類は沈線による乳房と胸部・股部への表現にはバリエーションがある（10～15）。

5類）　沈線による乳房表現が欠落し、胸部と股部を意識した区画線と刺突充填文を施す。性器を模倣したと推定される刺突文を付す。区画線にバリエーションがあることから細分できる。

5A類は、胸部と股部との連結区画が認められる（16）。

5B類は股部を意識した区画がなく、胸部区画のみである（17）。

5C類は胸部区画がなく、股部を意識した沈線文が施される（18）。

5D類は、三角の隅を刺突列でU字状に囲む（19）。

5E類は、胸部区画を行い、削りだし手法で胸部を強調する（20）。

6類）　乳房を意識した表現はない。無文構成を基本とするが形態には、いくつかのバリエーションから細分される。

6A類は三角形を基調した無文構成をとる（21）。

6B類は形態的に6A類に類似すが、男性性器を模倣した性器模倣貼付文が付く（22）。

6C類は形態的に6A類に酷似するが、性器を模倣した性器模倣刺突文を施す（23）。

6D類は、削り手法によって胸部を強調する。性器模倣刺突文を付す（24）。

7類）　全体像は不明であるが、孔を穿ち、無文構成である（25）。

8類）　体部区画がなく、乳房、性器の模倣文様を持たない。全体に刺突文を施す（26）。

9類）　本類は、1類から5類までの共通要素である基本体部区画から変容した体部区画を持ち、乳房や性器の表現が欠落する（27～30）。

10類）体部区画、乳房、そして性器の模倣文様が消失し、文様化した一群である。その文様の種別で細分した。

10A類は、三辺の側縁に沈線を施す（31）。

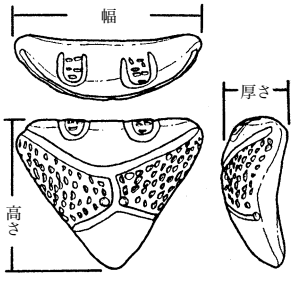
10B類は、斜沈線を全体に密接する（32）。

10C類は、渦巻文を沈線あるいは隆起線で表現する（33）。

10D類は、乳房や体部区画が合体変容した文様構成を持ち、短沈線を側縁に巡らせる（34）。

2．計測属性（第77図）

第77図に示した部位を計測し、計測数値を記録した。



第77図　計測部位

3．色　調

1：薄肌色　2：暗肌色　3：橙色　4：暗橙色　5：褐色　6：暗褐色

7：暗白灰色　8：白灰色　9：薄白橙色　10：灰黒色　11：黒灰色

4．胎　土

胎土の判別は難しく、含有されている特徴的な鉱物で分類した。

1：白粒子＋土器細片粒（少量）　2：赤褐色粒＋白色粒子＋白色粘土の縞

3：赤褐色粒＋白色粒子　4：赤褐色粒（多）＋白色粒子＋白色粘土の縞　5：白色粒子（少）

6：黒色粒子　7：白色粒子＋透明鉱物（少・キラキラ）　8：亜角礫粒（多）　9：角閃石粒（少）

10：黒色・赤褐色粒子＋白色粘土の縞　11：白色粒子（多）＋赤褐色粒子＋暗肌色粒子

12：白色粒子＋黒色粒子＋角閃石粒　13：白色粒子（微少）　14：赤褐色粒子＋黒色粒子

15：赤褐色粒子（微少）　16：白色粒子＋黒色粒子＋花崗岩片（微少）⇒土偶の胎土1に類似する。

17：赤褐色粒子　18：赤褐色粒子＋金雲母　19：白色粒子＋黒色粒子＋褐色粒子＋金雲母

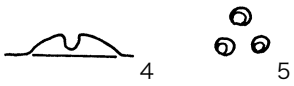
20：白色粒子＋きめの細かな粘土

5．孔の有無（第78図）

ここで示す孔は、性器模倣文と理解する部位に穿かれた孔である。

0：なし　1：1孔　2：左右の2孔　3：並列する3孔

4：凸部に1孔　5：上段1孔＋下段2孔　10：不明

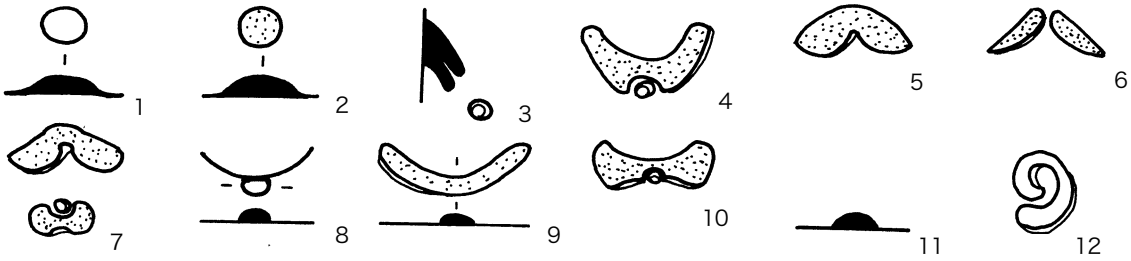


第78図　孔の模式図

6．貼付文の有無（第79図）

ここで示す貼付文は、乳房模倣表現とそれから変容した文様を含む。

0：なし　1～12：第79図を参照いただきたい。



第79図　貼付文分類図

7．出土状況（第79・80図）

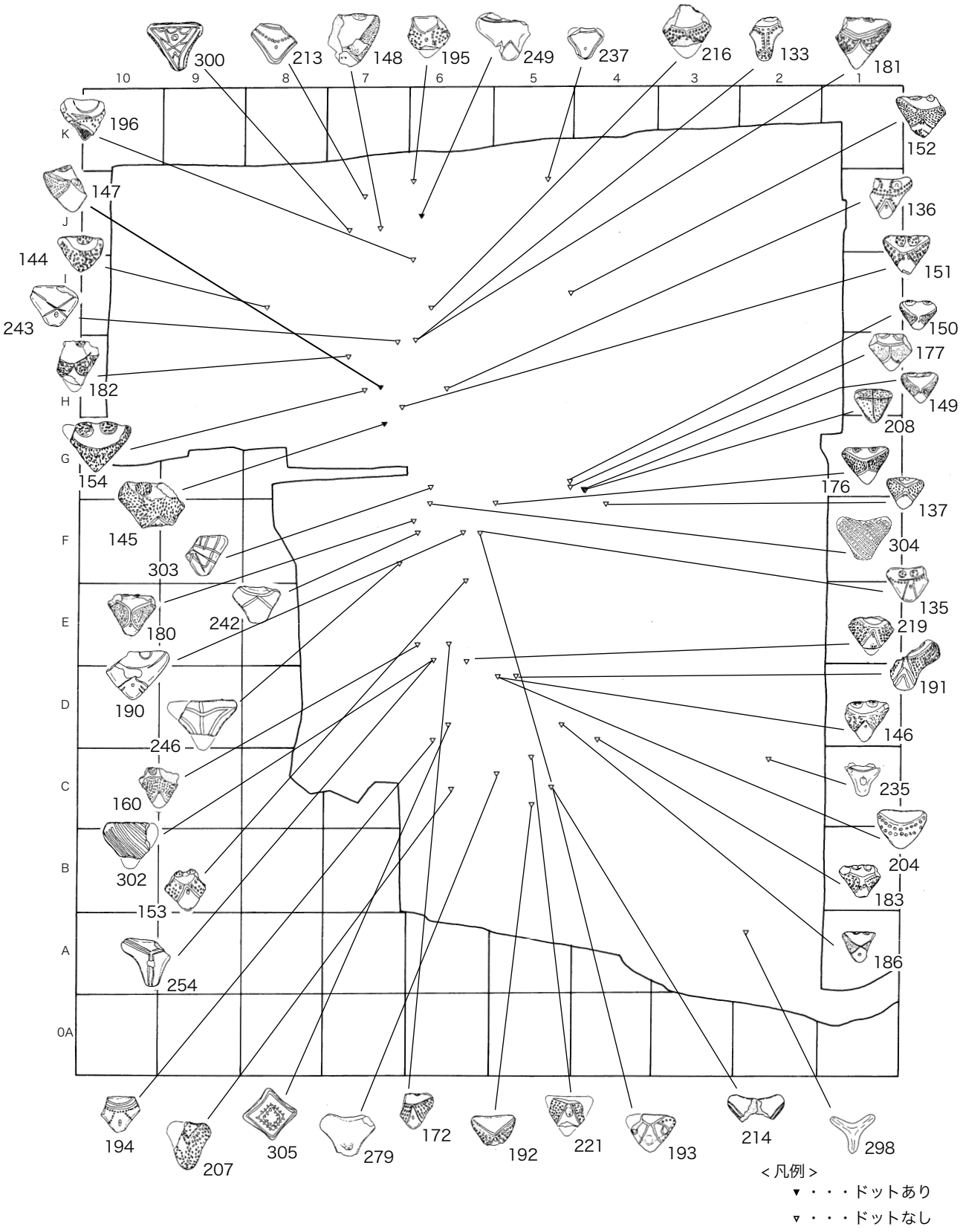
三角形土製品は総数216点の出土である。その大半が土偶と同様に廃棄帯からの出土である。廃棄帯とほぼ重複する大グリットの5・6・7列から183点が出土し、全体の約89%を占める。大グリット別で10点以上の出土は、C5区：14点、E6区：14点、F6区：24点、H6区：13点、H7区：17点、I7区：14点である。

これら多数出土グリットは、C5区を除いて、土偶の多出グリットと重複している。さらに、土偶の最多出土グリットはF6区であり、三角形土製品の最多出土グリットと同じである。また、三角形土製品並びに土偶の第2位最多出土グリットは、共にI7区である遺構からの出土を概観する。住居跡では、146：35号住居跡P2＋J7－7G、202：15号住居跡、222：11号住居跡、229：9号住居跡P2、の4例である。土坑では、137：F4－P40、141：I7－P8、150：G5－P8、152：I4－P99、177：G5－P9、208：G4－P101、235：C2－P20、263：G4－P153、の8例がある。さらに、G5－P8・P9、G4－P101は極めて近接する範囲に集中している点が注目される。

第80図には主要な三角形土製品の分布を示した。基本系である1類から4類・6類、変容系である5類、7類～10類の分布を確認したが、明瞭な偏在性を指摘することはできない。

8．出土数量比

この量比は、分類数量で構成されているが、あくまで出土した三角形土製品の数量比である。将来、編年体系が確定した場合、時期毎に作成された分類数量比は、さらに意味あるデータになる。



第 80 図　主要三角形土製品の分布図

No.	図版	注記番号	層位	グリッド	分類	大きさ			色調	胎土	孔	貼付文	備　考
						高さ	幅	厚さ					
133	683	H6-25G	Ⅵ	H6	5A	3.4	3.3	1.3	1	2	1	0	
134	683	I7-5213	Ⅶ	I7	5A	5.5	4.2	1.8	1	2	1	4	
135	683	F6-3G	Ⅴ	F6	3B	4.8	4.3	1.3	7	8	1	2	摩滅
136	683	H6-12G	Ⅵ	H6	3B	4.6	4.4	2.4	8	9	1	1	
137	683	F4-P20	—	F4	3C	3.4	3.9	1.5	5	9	2	5	
138	683	G7-4G	Ⅵ	G7	3C	5	4.5	1.9	2	9	0	1	
139	683	F6-8G	Ⅵ	F6	3C	3.6	5	2	1	6	1	1	
140	683	G6-10G	—	G6	3C	3.2	3.3	1.7	2	5	0	1	
141	683	I7-P8	—	I7	3C	2.2	3.6	1.1	1	2	1	1	
142	683	I7-9G	Ⅵ	I7	—	3.35	3.4	1.3	2	9	10	0	
143	683	I7-3G	Ⅵ	I7	3C	3.5	3.5	1.4	8	1	10	1	
144	683	H7-5G	Ⅵ	H7	3D	3.75	4.15	1.6	9	1	0	2	貼付文
145	683	G7-423	Ⅵ	G7	3C	5	6.9	2.4	4	4	1	1	磨痕
146	684	D5-25G	Ⅵ	D5	3C	4.4	4.6	2.25	3	3	1	2	
147	684	I8-17G	Ⅰ	I8	3D	5	4.2	1.55	7	3	0	8	笹山類型
148	684	J7-7G+35J-P2	—	J7	3C	5.7	5.3	1.85	8	3	2	2	接合資料
149	684	G4-P101	—	G4	3C	3.3	3.85	1.6	5	6	1	2	
150	684	G5-P8	—	G5	3C	3.1	3.75	1.5	3	9	1	2	
151	684	H7-1G	Ⅵ	H7	3B	3.1	4.9	1.7	1	1	0	2	
152	684	I4-P99	—	I4	3C	4.6	5.15	1.9	9	3	2	1	
153	684	E6-16G	Ⅵ	E6	3C	3.45	4.25	1.6	8	3	0	2	
154	684	H7-12G	Ⅵ	H7	3B	5.4	6.35	2.5	3	2	3	2	指頭圧痕
155	684	D5-9G	Ⅴ	D5	3C	2.95	3.1	1.4	2	6	0	2	
156	684	P24	—	—	3C	4.8	7.5	1.6	1	3	2	2	指頭圧痕
157	685	C5-23G	—	C5	4B	3.4	3.25	1.75	3	3	10	2	
158	685	D5-6G	Ⅵ	D5	3C	3.65	2.9	1.1	8	5	1	2	
159	685	I7-16G	Ⅵ	I7	3C	3.55	3.5	2.3	9	3	10	1	
160	685	E6-10G	Ⅴ	E6	3C	4.35	4.1	1.7	1	3	1	2	
161	685	J7-20G	Ⅵ	J7	3C	3.5	3.4	1.6	9	3	1	2	
162	685	DST	—	—	3C	2.45	2.8	0.9	8	3	1	2	
163	685	D4-22G	Ⅴ	D4	3C	3.2	4.3	1.7	3	8	1	2	
164	685	B5-9G	Ⅵ	B5	3C	3.84	4.7	1.95	3	3	1	2	
165	685	F5-7	Ⅴ	F5	3C	3.5	3.8	1.4	4	1	1	2	
166	685	A3	—	A3	3C	3.55	2.55	1.55	9	3	1	2	
167	685	I6-22G	—	I6	3C	2.9	2.85	1.2	7	9	1	2	
168	685	H6-6G	Ⅵ	H6	3C	2	2.6	1.1	1	3	10	2	
169	685	E6-25G	Ⅵ	E6	3C	3.1	3.95	1.75	8	2	10	2	
170	685	F6-5G	Ⅴ	F6	5E	3	5.15	1.5	8	3	10	9	
171	686	I7-14G	Ⅵ	I7	3	3	3.5	1.8	7	1	10	10	
172	686	C5-24G	Ⅵ	C5	4B	3.8	3.6	1.5	3	3	1	0	
173	686	F6-25G	—	F6	4B	3.15	3	1.6	3	2	1	0	
174	686	H6-2657	Ⅵ	H6	4B	3	4	1.4	8	2	10	0	
175	686	J5-5G	Ⅵ	J5	4B	4	3.8	2.1	4	1	1	0	
176	686	F5-25G	Ⅵ	F5	4B	4	4.9	1.1	3	5	2	0	
177	686	G5-P9	—	G5	4B	3.9	4.4	1.2	9	5	0	0	摩滅
178	686	G7-5G	Ⅵ	G7	4B	3.4	4.1	1.65	9	3	0	0	摩滅
179	686	H6-21G	—	H6	4B	4.25	4.5	1.9	7	1	1	0	
180	686	G6-16G	—	G6	4B	4.5	5	1.75	6	9	1	0	
181	687	H6-25G	Ⅵ	H6	4B	4.6	3.5	1.6	8	3	0	0	
182	687	H7-4181	Ⅵ	H7	4B	4.85	4.45	2.05	8	8	0	0	
183	687	D4-16G	—	D4	4B	3.5	4.2	1.7	8	3	2	0	
184	687	HT-10	—	H6･I6	4B	4	4.2	1.6	6	7	0	0	
185	687	H7-9G	Ⅵ	H7	4B	4.15	4.1	1.6	3	3	0	0	裏面火ほげ跡
186	687	D5-2G	Ⅵ	D5	4B	3.35	3.4	1.4	3	2	1	0	
187	687	J7-5G	—	J7	4B	1.7	2.6	1	8	3	10	0	
188	687	13J-12	—	A2	4B	3.6	3.5	1.6	3	6	10	0	
189	687	F6-14G	Ⅵ	F6	4B	3.7	4.5	1.3	8	3	3	0	
190	687	F7-2G	Ⅵ	F7	4B	5.2	9.9	2.2	4	1	1	0	
191	688	D5-20G	Ⅵ	D5	5E	5.2	5.5	1.8	8	10	2	10	
192	688	C5-12G	Ⅵ	C5	5E	3.2	4.6	1.9	9	3	1	0	
193	688	C5-8G	—	C5	5E	4	4.6	1.5	10	9	0	0	
194	688	E6-12G	—	E6	5E	3.8	4.1	1.6	2	2	1	0	
195	688	J7-25G	—	J7	5E	3.6	4.4	1.85	3	1	1	0	
196	688	I6-25G	Ⅵ	I6	5E	4.5	4.75	1.4	1	2	0	0	
197	688	C5-11G	Ⅴ	C5	5E	3.7	4.2	2	2	3	10	10	
198	688	B6-23G	Ⅵ	B6	5E	2.7	3.3	1.2	1	2	1	0	
199	688	F6-25G	Ⅴ	F6	5E	4.05	6.05	1.85	3	4	10	0	
200	688	C5-12G	Ⅵ	C5	5E	4.35	4.1	1.7	8	11	1	0	
201	688	C5-14G	Ⅵ	C5	5E	3.8	3.9	1.6	9	4	10	0	
202	688	15J	—	A2	5E	2.5	3	3.5	9	10	10	0	
203	688	C5-18G	Ⅵ	C5	5E	3.4	3.5	1.9	9	4	10	0	
204	688	D5-25G	Ⅵ	D5	5E	4.1	5.1	1.4	9	3	0	0	
205	689	E6-23G	Ⅵ	E6	5B	3	4	1.7	8	9	3	0	
206	689	C5-20G	Ⅵ	C5	5B	2.9	2.95	1.6	7	5	0	0	
207	689	D5-16G	Ⅵ	D5	9	5	3.7	2.2	3	6	0	0	
208	689	G4-P101	—	G4	9	3.6	3.9	1.6	10	9	0	0	
209	689	D6-7G	Ⅵ	D6	10A	3.85	3.4	1.9	10	11	0	0	
210	689	I7-3G	—	I7	9	4.3	3.2	1.2	10	10	10	10	
211	689	E5-5G	Ⅴ	E5	10A	3.1	3.1	1.4	8	6	10	10	
212	689	I7-3G	Ⅵ	I7	—	3.8	5.9	1.2	8	11	0	0	
213	689	J7-14G	Ⅴ	J7	5B	4.2	4.9	1.3	1	11	1	0	
214	689	C5-8G+F6-3G	—	C5	10A	2.7	6	1.3	2	6	10	10	
215	689	F6-4G	Ⅴ	F6	—	3.15	3.65	1.4	1	11	1	10	
216	689	I6-17G	Ⅵ	I6	4B	4.55	5.1	2.05	7	12	1	0	
217	689	F6-3G	—	F6	3D	5	4.7	1.8	7	12	1	0	
218	689	F5-23G	Ⅴ	F5	—	3.35	3.05	1.65	8	13	1	11	
219	689	E6-6G	Ⅵ	E6	—	3.45	4.75	1.3	1	3	5	0	

第 57 表　三角形土製品観察表（1）

No.	図版	注記番号	層位	グリッド	分類	大きさ			色調	胎土	孔	貼付文	備　考
						高さ	幅	厚さ					
220	690	G6-1279	Ⅵ	G6	—	4.5	3.9	1.4	8	13	10	10	
221	690	C5-15G	Ⅵ	C5	6B	3	3.7	1.9	3	4	4	3	
222	690	11J	—	C2	—	2.6	2.65	1.25	3	11	1	0	
223	690	I6-21G	Ⅵ	I6	—	3.55	3.9	1.5	2	13	1	10	
224	690	E6-15G	Ⅴ	E6	—	3.2	4.2	1.3	3	11	1	10	
225	690	H6-22G	Ⅵ	H6	4B	2.7	2.3	1.3	7	1	10	10	
226	690	J7-8G	Ⅵ	J7	5B	2.6	3.6	1.4	8	12	3	10	
227	690	G7-4G	—	G7	4B	2.3	2.9	1.1	8	13	10	10	
228	690	I7-3G	Ⅵ	I7	—	3.25	2.3	1.5	7	8	1	10	
229	690	9J-P2	—	D2	—	2.9	2.9	1.1	2	12	1	10	
230	690	F6-24G	Ⅴ	F6	—	2.6	3.65	1.75	2	12	1	10	
231	690	F5-13G	Ⅴ	F5	—	3	2.9	1	8	11	1	10	
232	690	B5-10G	Ⅵ	B5	—	4	3.3	1.5	1	11	1	10	
233	690	I7-4G	Ⅵ	I7	—	4.7	3.45	1.45	1	11	1	10	
234	691	A2	Ⅰ	A2	3C	4.6	4.3	1.8	8	13	0	1	
235	691	C2-P20	—	C2	3C	3.5	3.55	1.4	1	8	1	0	
236	691	H7-13G	Ⅵ	H7	3C	3.3	2.5	1.6	1	13	10	10	
237	691	J5-10G	—	J5	10A	3.3	3.6	1.1	1	6	1	0	
238	691	G6-25G	Ⅵ	G6	10A	3.9	4	1.3	8	8	1	0	
239	691	F6-16G	Ⅵ	F6	10A	4.7	4.2	1.6	7	8	0	0	
240	691	F6-11G	Ⅵ	F6	5A	2.4	3.3	1.4	3	1	10	10	
241	691	F5-27	Ⅴ	F5	5A	3.1	4.15	1.6	1	8	0	0	
242	691	F6-24G	Ⅳ	F6	5E	4	5	1.5	8	6	0	0	
243	691	H7-18G	Ⅵ	H7	9	4.4	4.95	1.7	8	8	1	0	
244	691	H7-7G	Ⅵ	H7	9	3	4.1	1.4	2	8	1	0	
245	691	B5-8G	Ⅵ	B5	—	3.85	3.2	1.6	3	2	1	10	
246	691	F6-8G	Ⅵ	F6	9	3.8	6.2	1.6	3	1	10	0	
247	692	C6-8G	Ⅵ	C6	5E	3.5	4.2	1.65	8	8	0	0	
248	692	D6-2G	Ⅵ	D6	5E	4.15	3.9	1.7	1	9	1	0	
249	692	J6-214	Ⅵ	J6	5A	5.2	5.6	2.05	8	8	1	0	
250	692	H7-12G	Ⅵ	H7	5A	3.4	3.7	1.7	8	6	10	10	
251	692	E6-5G	Ⅵ	E6	5A	3.6	4.4	1.4	8	8	10	10	
252	692	G6-936	Ⅵ	G6	5A	6	4.5	1.5	2	8	0	0	
253	692	E6-20G	Ⅵ	E6	5A	4.2	3.4	1.5	1	2	1	0	
254	692	E6-13G	Ⅵ	E6	5A	5	5.3	2	2	8	0	0	
255	692	I7-4789	Ⅵ	I7	5A	3.6	3.4	1.5	1	8	10	10	
256	692	E6-16G	—	E6	5A	4.2	4.2	1.4	3	1	10	10	
257	692	J7-15G	Ⅵ	J7	10A	4.4	4.8	2	1	7	0	0	
258	692	H7-23G	Ⅵ	H7	10A	3.4	3.6	1.4	1	13	3	0	
259	693	J7-5123	Ⅵ	J7	6A	4.4	5	1.3	8	13	0	0	
260	693	C4-21G	Ⅵ	C4	6A	4.5	4.85	2.25	3	13	0	0	
261	693	G4-24G	—	G4	6A	4	5	1.4	4	13	0	0	
262	693	H7-5G	Ⅵ	H7	6A	3.9	4.8	1.5	1	1	0	0	粗製手づくね
263	693	G4-P117	—	G4	6A	2.5	3.8	1.1	3	2	0	0	
264	693	I6-10G	—	I6	6A	4.2	4.4	1.4	8	13	0	0	
265	693	G5-19G	—	G5	6A	4	4.9	1.2	1	8	0	0	
266	693	E5-11G		E5	6A	3.6	3.4	1.4	3	1	0	0	
267	693	H7-5G	Ⅵ	H7	6A	2.2	2.7	1.2	3	3	0	0	
268	693	F3-24G	Ⅴ	F3	6A	3.5	3.4	1.6	8	14	0	0	
269	693	D5-2G	Ⅵ	D5	6A	2.7	3.3	1.4	1	11	0	0	
270	693	H6-25G	—	H6	6A	3.3	3.3	1.3	10	11	0	0	
271	693	DST	—	—	6A	2.7	4.6	1.95	6	6	0	0	
272	693	H6-18G	—	H6	6A	3.5	2.95	1.35	8	12	0	0	
273	693	E5-71	Ⅵ	E5	6C	3.4	3.8	0.9	1	8	0	0	
274	693	J7-3G	Ⅵ	J7	6C	3.6	4	1.4	1	4	1	10	
275	693	C6-12	Ⅵ	C6	6C	2.9	4.7	1.35	2	11	1	10	
276	693	F6-16G	Ⅵ	F6	6A	4.8	4.4	1.6	7	11	0	0	
277	693	F6-14G	Ⅵ	F6	6A	4.5	3.7	1.65	10	11	0	0	アクシデンタルな半円の傷
278	694	F5-19G	Ⅴ	F5	6A	3.9	3.1	1.3	1	9	0	0	
279	694	C6-13G	Ⅴ	C6	6B	4.5	5.8	2.2	1	5	4	3	
280	694	I7-12G	Ⅵ	I7	6A	3.8	3.9	1.5	1	6	1	3	
281	694	I6-3165	Ⅵ	I6	6A	4.5	4.3	1.5	8	12	0	0	
282	694	E5-18G	Ⅴ	E5	6A	4.45	3	1.25	9	11	0	0	
283	694	J6-12G	Ⅵ	J5	6A	4.3	2.6	1.3	8	5	0	10	
284	694	G7-24G	—	G7	6A	3.9	3.1	1.3	2	13	0	10	
285	694	H7-3857	Ⅵ	H7	6A	4.3	3.5	1.8	10	13	0	10	
286	694	E5-11G	Ⅵ	E6	6A	2.5	3.3	1.4	1	8	10	10	
287	694	F6-12G	Ⅴ	F6	6A	3.75	4	1.1	8	13	0	10	
288	694	E7-4G	Ⅵ	E7	6C	3.75	3	1.2	1	13	1	10	
289	694	F6-13G	Ⅵ	F6	6C	3.35	4.1	1.3	8	5	1	0	
290	694	I7-14G	Ⅵ	I7	6C	4.3	3.4	1.75	8	11	3	10	
291	694	D5-21G	Ⅴ	D5	6C	4.9	3.5	1.1	1	6	3	10	内部に穴
292	694	I6-2346	Ⅵ	I6	6C	5.2	4.7	1.65	2	7	0	0	
293	695	D6-17G	Ⅵ	D6	6D	4.1	3.65	1.4	1	2	1	0	
294	695	F6-7G	Ⅴ	F6	6A	3.7	2.35	1.25	1	1	0	0	
295	695	C5-20G	Ⅵ	C5	6A	2.2	3.7	1.4	1	1	0	0	
296	695	J7-15G	—	J7	6A	3.8	3.5	1.95	3	8	0	0	
297	695	G6-17G	—	G6	7	4.7	5.3	2.4	1	12	1	0	
298	695	A2-24G	Ⅰ	A2	6A	4	4.7	2	8	6	0	0	
299	695	F6-9G	Ⅴ	F5	7	3.95	4.45	1.45	10	12	2	0	
300	695	J7-17G	—	J7	10D	5.15	5.85	3.2	8	8	0	0	湾曲が強い
301	695	F6-4G	Ⅴ	F6	10D	3.4	4.2	1.7	4	4	1	0	
302	695	E6-22G	—	E6	10D	3.9	4.8	1.9	7	12	0	0	
303	695	G7-2G	—	G7	10D	4.2	4.5	1.4	1	1	0	0	
304	695	F6-20G	Ⅴ	F6	10D	4.6	5.7	1.7	3	14	0	0	全面に円形刺突
305	695	D6-12G	Ⅵ	D6	—	5.5	5.7	1.8	2	1	0	0	菱形の土版

第 58 表　三角形土製品観察表（2）

c．三角壕形土製品（図版第 696 図～第 697 図 308）

横断面が三角形になる柱状の土製品である。稀に全面が無文の資料もあるが、通常二側面と両端面に文様を施す。文様が施されない一側面は、僅かに楕円状にくぼむものが多い。端面から長軸方向に貫通する孔を穿つものを基本とする。両端から穿いた孔が行違った資料や非穿孔資料も僅かに存在する。

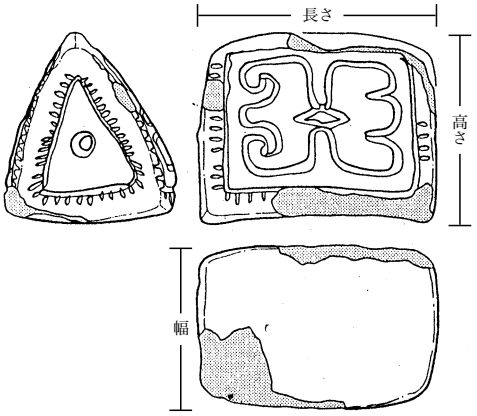
1．計測属性

第 81 図に示した通りに、長さ、幅、厚さを計測して cm で記録した。

2．文様

文様は意匠文が描かれているが、その施す主施文手法を記録した。

306 は方形区画を施し、その外縁に刻目文を巡らす。区画内は菱形を中心に E 字状文様を左右に配するが、三叉文の簡略化した描線で描く部分と入り組んだ渦巻き表現した部分から構成される。片面は長方形に二重区画した中に十字を刻んでいる。二重区画に内外縁には刻目文が巡る。両端部は二等三角形の区画文を施す。片端部のみ、区画文外縁に刻目文を巡らす。底面は僅かにくぼむ。



第 81 図　計測部位

307 は二重沈線で方形区画を施した区画内に意匠文を描いている。区画内のほぼ中央に一本描きによる十文字モチーフを描く（上下の縦線部位は二重区画線と接合する）ことで、区画内の左右端部にコの字状（正位・半転位）の空間が生まれる。左側および右側上位に限り、十字の鍵の手部位をさらに二重沈線になるような意図で沈線を一本加えている。また、一方の面も二重区画線で囲まれている。区画内を下垂する平行沈線で左右に分割する。左右に分割された空間内に渦巻文を充填している。渦巻文は左右共々、上部渦巻文と下部渦巻文に分かれる。上部渦巻文は二重区画線と連結して下垂する。下部渦巻文は二重区画線に接して蕨手状に立ち上がる。また、渦巻文の渦は、時計回りと非時計回りがある。左側区画内の上部が時計回りで、下部が非時計回りを示す。右側区画は左側区画と異なり、上部が非時計回りで、下部が時計回りである。底面は指頭と推定される圧痕調整が観察できる。左右端部は二重沈線によって二等辺三角形文（一部、隅丸）が描かれ、ほぼ中央部に貫通孔が穿かれている。

308 は全面に文様を施さない。但し、二側面のほぼ面中心部に浅い窪みが観察できる。焼成後に意図的に傷けられたと推測される。片端面の一部に浅い沈線が斜辺に平行して引かれているが、意図的に消されたと推定される。底面に特徴がある。長方形でなく、長方形の四辺を僅かに内側に押し込んだような形を呈した窪みがある。両端部から孔が穿かれるが、全体を貫通しない。その底面と孔の切り合いを観察するならば底面整形後に穿孔されている。

No.	図版	注記番号	グリッド	層位	大きさ			文様	貫通孔	色調	胎土	備考
					長さ	高さ	幅					
306	第 696 図	36J-1	G 3	覆土	6.2	5	4.4	沈線＋刻目文	○	2	11	底面に穿孔痕２つあり。
307	第 696 図	H6-4412- VI	H 6	VI	8	5.2	5.2	沈線	○	1	11	底面にヘラ整形痕あり。
308	第 697 図	D5-7- VI	D 5	VI	7.6	5.4	5.8	無文	○	3	8	指紋が遺存している。

第 59 表　三角壕形土製品観察表

d．滑車形耳飾（図版第 700 図 355 ～ 367）

滑車形耳飾は、藤森栄一によって地域文化の要素として評価された（註 114)。藤森によれば、新潟県の縄文時代中期の馬高期に発生した滑車形耳飾の意義は重要であるという。

ここでは、東北南部・関東における縄文時代中期後半の耳飾を考察した上野修一に分類大系（註 115)を基本として、第 82 図のように分類した。上野は耳たぶに装着した際に正面を向く面の径（長径 1）と裏面となる径（長径 2）を重視した。また、厚みと径との比に注目した。

1．形態分類

1）全体形状

A 類：表面の径が、厚みの約 2 倍ないしはそれ以上で、全体に扁平な形状を呈する。

B 類：表面の径が、厚みにほぼ等しく、全体に臼状を呈する。

C 類：厚みが、表面の径に比べて約 1.5 倍程度あるいは、それ以上で、形状的に管状を呈する。

D 類:表面の径が、厚みにほぼ等しいが、それに対して裏面の径が半分程度である。形状的にラッパ状を呈する。

E 類：表面と裏面の径、そして厚みがほぼ等しくて、装着部が大きく括れる形状を呈する。

F類:表面が傾斜することで外径と内径がある。表面の径といった場合は内径である。表面と裏面の径はほぼ等しい。

2）断面形状

Ⅰ類：穿孔が直線的になされており、孔に比べて比べて環部が厚いもの。

Ⅱ類：穿孔が大きく、環部分が薄く整形されている。周縁端部が外側に突出するもの。

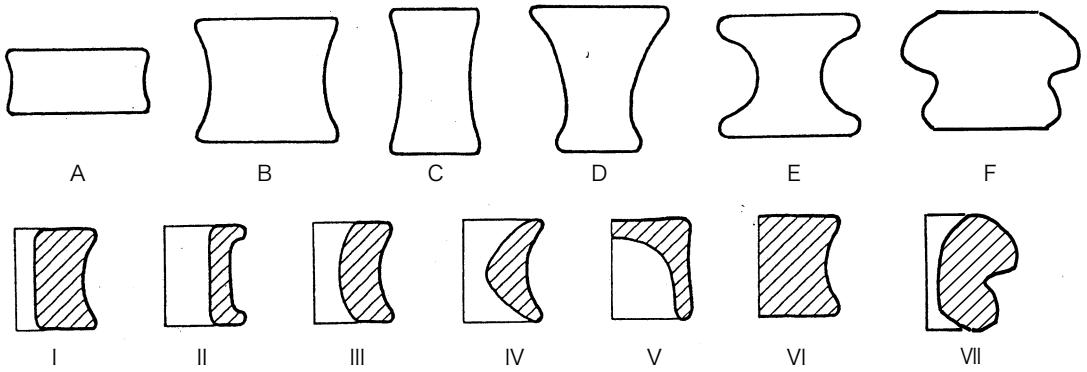
Ⅲ類：穿孔部の形状が、装着部外面の反りに合わせて整形されているもの。

Ⅳ類：Ⅲ類に比べると周縁部が薄く整形され、断面形状が三角を呈する。

Ⅴ類：貫通する穿孔はない。裏面からの円柱状の抉りが生じた資料。

Ⅵ類：貫通する穿孔はない。円柱状を呈する。

Ⅶ類：貫通孔は細い。環部分に幅を持ち、上下端部が反りを持つ。



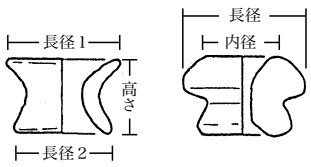
第 82 図　滑車形耳飾分類図

2．文様の有無

0：なし　1：弧線　2：刺突　3：渦巻　4：同心円　5：円圏

3．計測属性

第 83 図に示すように、表裏面の長径と装着部になる厚さを cm で表記した。



第 83 図　計測部位

No	図版	注記番号	グリッド	層位	残存率	形態	大きさ			色調	胎土	備考
							長径	短径	高さ			
355	第 700 図	K5-6G	K5	—	3／4	E Ⅵ	3	—	2	4	1	367に類似
357	第 700 図	H7-4575	H7	Ⅵクロ	ほぼ完形	A Ⅵ	—	—	1.8	3	3	赤彩
358	第 700 図	E8-12G	E8	Ⅴ	1／4	A Ⅳ	5.25	5.2	2.1	5	12	両縁に円形刺突列あり
359	第 700 図	G5-9G	G5	Ⅴ	1／4	B Ⅲ	3.6	—	2.5	2	8	
360	第 700 図	B5-14G	B5	Ⅴ	完形	B Ⅳ	3	3	2	3	11	赤彩
361	第 700 図	H6-2620	H6	Ⅵクロ	ほぼ完形	B Ⅲ	2	2.4	2	3	7	焼町系土器の胎土に類似
362	第 700 図	D5-1G	D5	Ⅴ	ほぼ完形	B Ⅱ	2.1	2.1	1.5			赤彩
363	第 700 図	F5-110	F5	Ⅵ	ほぼ完形	B Ⅰ	3.2	3.2	1.7	11	12	
364	第 700 図	I5-13-228	I5	—	ほぼ完形	B Ⅰ	2.8	2.95	1.6	1	1	
365	第 700 図	H6-22G	H6	Ⅵ	ほぼ完形	C Ⅰ	1.8	1.7	1.85	7	12	
366	第 700 図	17J-65	D3	—	完形	F Ⅶ	3.3	3.3	2.1	2	19	
367	第 700 図	J4-21G	J4	—	ほぼ完形	E Ⅳ	2.65	2.7	2.1	4	12	

第 60 表　耳飾観察表

e．土製円盤（図版第 701 図～第 703 図）

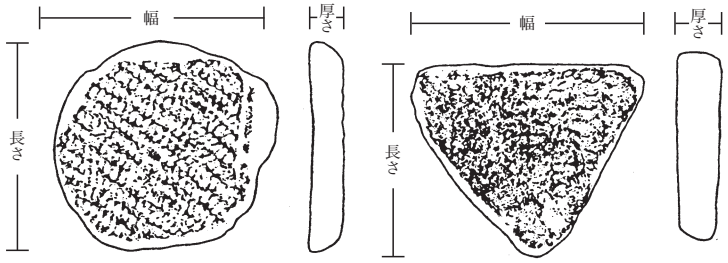
土製円盤（註 116）は、土器片を加工して円盤状の形態に整形した遺物である。土製円盤と総称する一群は、その基本形態が名称の如くに円盤状を呈するが、一部には同じ整形技術によって三角状を呈するものを含む。したがって、形態分類上、

1 類：円形状、

2 類：三角形状、

3 類：不整三角形状

として扱う。



第 84 図　計測部位

1．計測属性

計測は第 84 図で示した通り、

1 類は長軸を長さとし、それに直行する軸長を幅とした。2・3 類は短い辺を幅として、その辺とほぼ直角に交わる角との距離を長さとした。1～3 類の厚さは、素材厚の最大値を記録した。計測数値は cm である。

No	図版	注記番号	グリッド	大きさ			形態	色調	文様	時期	磨痕	備考
				長さ	幅	厚さ						
371	第 701 図	E5-14G- Ⅴ	E5	5	5	0.8	円形	褐色	沈線＋縄文	Ⅷ	—	充填縄文
372	第 701 図	E6-19- Ⅵ	E6	4.4	4	1	円形	淡褐色	玉抱き三叉文	Ⅴ	—	三叉貼付文＋縄文
373	第 701 図	B4-21G- Ⅵ	B4	4.4	4.1	1.2	円形	白褐色	縄文	—	○	
374	第 701 図	B4-4G	B4	5	4.6	0.8	円形	褐色	沈線＋縄文	Ⅷ	—	
375	第 701 図	E2-378	E2	5.2	5	1	円形	淡褐色	縄文	—	—	
376	第 701 図	F5-10G- Ⅴ	F5	6	5.5	0.9	円形	淡黒色	竹管文＋縄文	Ⅲ	○	赤彩
377	第 701 図	H7-2G- Ⅵ	H7	4.5	4.4	1	円形	肌色	縄文	—	—	
378	第 701 図	G7-15G	G7	4.4	4	1	円形	白灰色	縄文	—	—	
379	第 701 図	E5-22G- Ⅵ	E5	5	4.7	1.2	円形	明肌色	縄文	—	—	
380	第 701 図	G6-8G- Ⅵ	G6	5	4.4	1.2	円形	白褐色	縄文	—	—	
381	第 701 図	E6-14G- Ⅵ	E6	4.2	4.2	0.8	円形	白灰色	縄文	—	○	
382	第 701 図	G6-14G- Ⅵ	G6	5	4.6	1.2	円形	白灰色	縄文	—	—	
383	第 701 図	F6-42- Ⅴ	F6	5.8	5.4	1.4	円形	白灰色	撚糸文	—	—	
384	第 701 図	E6-10G- Ⅵ	E6	4.8	4.8	1	円形	茶褐色	無文	—	—	
385	第 701 図	E5-15G- Ⅴ	E5	3.1	4.2	1	円形	肌色	無文	—	○	
386	第 701 図	E2-HT1	E2	4.2	4	1	円形	淡褐色	撚糸文	—	—	
387	第 701 図	H6-21G- Ⅵ	H6	4.1	4.1	1	円形	淡褐色	無文	—	—	
388	第 701 図	E2-3G	E2	5.2	5.1	1.7	円形	白褐色	縄文	Ⅵ	○	
389	第 701 図	C5-8G- Ⅵ	C5	4.4	4	0.8	円形	灰黒色	無文	—	—	
390	第 701 図	E5-2G- Ⅴ	E5	5.4	5.2	0.8	円形	褐色	刺突文	Ⅶ	—	三十稲場式土器
391	第 702 図	D6-11G- Ⅵ黒	D6	5.2	5	1.4	円形	淡白褐色	無文	—	—	
392	第 702 図	F5-23G- Ⅴ	F5	5.2	4.8	1	円形	明褐色	無文	Ⅷ	—	
393	第 702 図	G5-14G- Ⅵ	G5	4.4	4.2	0.8	円形	灰黒色	無文	—	—	
394	第 702 図	F6-16G	F6	4	3.8	0.9	円形	淡褐色	無文	—	○	
395	第 702 図	G2-13G	G2	4.9	4.6	1	円形	暗灰黒色	無文	—	—	
396	第 702 図	F6-8G- Ⅴ	F6	3.7	3.6	0.9	円形	橙色	無文	—	—	
397	第 702 図	H7-17G	H7	3.5	3.4	1	円形	淡褐色	無文	—	—	

第 61 表　土製円盤観察表（1）

No	図版	注記番号	グリッド	大きさ			形態	色調	文様	時期	磨痕	備考
				長さ	幅	厚さ						
398	第 702 図	G5-17G- VI	G5	1.9	2.7	2.6	円形	淡橙色	沈線＋縄文	—	○	
399	第 702 図	H6-24G- VI	H6	3.2	2.6	0.9	円形	暗灰黒色	無文	—	○	
400	第 702 図	G5-7G	G5	3.5	3.2	1.2	円形	褐色	縄文	—	○	
401	第 702 図	E5-19- VI	E5	4.7	4.2	1	円形	明褐色	無文	—	—	
402	第 702 図	G4-20-40	G4	4.5	4.1	1	円形	淡橙色	無文	—	○	
403	第 702 図	I7-25G- VI	I7	3.9	3.4	1.4	円形	暗灰橙色	縄文	—	—	
404	第 702 図	H7-3G- VI	H7	4.5	4	0.9	円形	橙色	剣先文＋縄文	V	—	沈線
405	第 702 図	J6-16G- VI	J6	4.1	3.3	0.8	円形	白橙色	盲孔文＋沈線	Ⅷ	○	
406	第 702 図	J6-2G	J6	3.6	3.5	0.9	円形	白灰色	撚糸文	—	—	
407	第 702 図	H5-1G	H5	3.6	3.4	0.9	円形	灰黒色	撚糸文	VI	—	無節
408	第 702 図	DST	—	4.6	4.2	0.8	円形	淡黒色	刺突文	Ⅶ	○	三十稲場式土器
409	第 702 図	I8-11G	I8	3.6	3.6	1	円形	淡橙色	刺突文	Ⅶ	—	三十稲場式土器
410	第 702 図	H4-23G	H4	5	4.8	1	円形	明淡褐色	刺突文	Ⅶ	—	三十稲場式土器
411	第 702 図	J9-15G	J8	3.8	3.8	0.6	円形	橙色	沈線＋縄文	Ⅷ	—	
412	第 703 図	G6-1410- VI	G6	6.1	5	1.1	三角形	暗橙色	縄文	Ⅲ	○	浅鉢破片
413	第 703 図	G6-1811- VI黒	G6	5.2	4.2	0.6	三角形	白灰色	縄文	—	—	
414	第 703 図	F6-1G- V	F6	4	3	1	三角形	橙色	無文	—	—	
415	第 703 図	G7-15G- VI	G7	5.2	4.2	1	不整三角形	淡橙色	無文	—	—	浅鉢破片
416	第 703 図	H6-16G- VI	H6	4.2	3.6	0.6	三角形	白橙色	沈線＋三叉文	Ⅳ	○	
417	第 703 図	H6-22G- VI	H6	4.4	3.8	1	三角形	明褐色	無文	—	○	
418	第 703 図	C6-19G- VI	C6	5.2	4.8	0.9	三角形	白灰色	無文	—	○	網代底部片
419	第 703 図	DST	—	3.8	3.8	0.7	三角形	白橙色	無文	Ⅲ	○	浅鉢破片
420	第 703 図	H6-8G- VI	H6	3.7	3	0.8	三角形	白橙色	沈線文	—	○	鋸歯状モチーフ
421	第 703 図	I5-22G- VI	I5	5.2	4.1	0.6	三角形	暗褐色	無文	—	—	
422	第 703 図	D5-13G- VI	D5	4.4	3.5	1	三角形	橙色	無文	—	—	
423	第 703 図	F6-6G- VI	F6	7.4	5.6	0.7	三角形	白灰色	無文	Ⅲ	○	浅鉢破片
424	第 703 図	I7-3G- VI	I7	5	4	1	三角形	白灰色	無文	—	○	
425	第 703 図	I7-4G- VI	I7	3.9	2.5	0.8	三角形	白橙色	無文	—	○	
426	第 703 図	17JC-5	C3・D3	4	3.2	1	三角形	白灰色	縄文	—	○	無節
427	第 703 図	H2-21-9-6J	H2	4.5	3.6	0.8	円形	淡褐色	無文	—	○	
428	第 703 図	A5-5G- V	A5	6	5	0.9	三角形	白灰色	縄文	—	○	
429	第 703 図	K2-6-9	K2	4.2	3.4	0.7	三角形	灰黒色	縄文	—	—	
430	第 703 図	35J-P2	I7	3.6	2.6	0.8	三角形	白灰色	無文	—	○	
431	第 703 図	H7-4090- VI	H7	6.2	3.9	1.2	不整三角形	淡橙色	隆起帯＋竹管文	—	○	斜行構成文様

第 62 表　土製円盤観察表（2）

f．その他の土製品（図版第 697 図 309 ～第 699 図、第 700 図 368 ～ 370）

ここで扱う土製品は、土偶・三角形土製品・三角壝形土製品・滑車形耳飾・土製円盤に含めることのできなかった資料群である。また、数量が稀薄であることから一括して扱った。形態から名称を付けるならば、板状土製品・棒状土製品・石棒状土製品・ミニチュア土器などが含まれている。

1．法量

ミニチュア土器は、口径･高さ･底径を計測し、それ以外は、長さ･幅･厚さの最大値を計測して記録した。表記は cm である。

2．色調

色調は、三角形土製品の色調基準に従った。詳細は、P192 を参照願う。

3．胎土

胎土は、三角形土製品の胎土基準に従った。詳細は、P192 を参照願う。

4．文様

文様属性は、ミニチュア土器に限った記録である。矢羽根状沈線文・渦巻文・沈線文・懸垂文・隆起線文などの概略的な文様表記に留めている。

No	図版	注記番号	グリッド	層位	形態	大きさ			色調	胎土	備考
						長さ	幅	厚さ			
309	第 697 図	G7-14G- I	G7	I	板状	6	4.4	1.2	1	13	
310	第 697 図	E2-50- V	E2	V	棒状	8.8	4	3.2	6	11	
311	第 697 図	K5-23G	K5	—	石棒状	6.8	2.7	2.9	8	12	一部欠損
312	第 697 図	10J	D1，D2	—	Y 字状	3	2.4	1.1	1	5	赤彩
368	第 700 図	J4-P24	J4	—	短冊状	6.8	3.2	1.4	3	11	象嵌孔あり。
369	第 700 図	I7-18G- VI	I7	VI	—	5	3.3	2.2	3	8	貫通孔．欠損品．
370	第 700 図	H7-14G- VI	H7	VI	—	3.8	3.2	2	1	5	赤彩

第 63 表　土製品観察表

No	図版	注記番号	グリッド	層位	法　量			文様	色調	胎土	備考
					口径	高さ	底径				
313	第 698 図	F6-22G- V	F6	V	—	—	—	アヤスギ文	8	8	口縁に孔を有する
314	第 698 図	G6-1342 ＋ H5-P121	G6、H5	VI	5	—	—	渦巻貼付文＋縄文	8	8	口縁に孔列を有する
315	第 698 図	G6-2099- VI	G6	VI	—	—	—	下垂蕨手文＋条線	1	8	口縁部無文帯
316	第 698 図	C4-6G- V	C4	V	4.4	—	—	斜行充填文	4	8	口縁部無文帯
317	第 698 図	J6-23G- VI	J6	VI	4	—	—	横位展開の沈線文	7	12	口縁直下に横線区画
318	第 698 図	F6-10G- VI	F6	VI	—	—	3	連弧文状のモチーフ	1	16	半截工具二条
319	第 698 図	G7-434- VI	G7	VI	—	—	3	竹管文の区画文	2	17	破損面が摩滅著しい
320	第 698 図	G6-11	G6	—	4.2	2.8	3.4	沈線．文様？	8	8	
321	第 698 図	E6-225- VI	E6	VI	5	6.1	3	下垂平行線文	8	18	内面に黒色付着物あり
322	第 698 図	J8-833- Ⅶ	J8	Ⅶ	5	9.3	6	下垂平行線文	8	1	口縁貼付明瞭
323	第 698 図	G6-11G- V	G6	V	3.8	—	—	無文	1	1	
324	第 698 図	E4-P7	E4	—	—	—	4.8	無文	10	1	
325	第 698 図	J7-16G- VI	J7	VI	8.6	3.5	5	無文	1	16	把手付き舟形土器
326	第 698 図	D3-P5	D3	—	—	—	2.8	無文	5	12	
327	第 698 図	E6-4G- V	E6	V	6	4.1	2.2	無文	9	8	
328	第 698 図	I7-3025- VI	I7	VI	—	—	4	無文	10	12	
329	第 698 図	E5-23G- V	E5	V	—	—	—	無文	4	12	
330	第 699 図	F6-4G- V	F6	V	—	—	—	横 S 字貼付文	2	1	貼付文＋竹管文
331	第 699 図	G4-23G	G4	—	8	5.5	5.6	沈線による連弧状文	7	16	内面に黒色付着物あり
332	第 699 図	E2-4G- V	E2	V	5	—	—	平行線文	1	8	
333	第 699 図	J5-10-SD1	J5	—	2.8	2.8	1	無文	10	5	異形土器
334	第 699 図	G4-P120	G4	—	3.6	3.5	2.2	無文	7	1	ほぼ完形
335	第 699 図	H6-3663- VI	H6	VI	4.2	5.4	2.8	沈線によるクランク文	7	7	
336	第 699 図	E3-121-P25	E3	—	5.2	2.8	3.8	無文	1	7	
337	第 699 図	C5-23G- VI	C5	VI	—	—	2	無文	8	6	
338	第 699 図	J7-1018- VI	J7	VI	—	—	3.2	無文	8	8	内面二次焼成？
339	第 699 図	E5-23G- V	E5	V	6.6	—	—	無文	8	16	指頭圧痕あり
340	第 699 図	A5-3- V	A5	V	—	—	5.1	無文	8	16	指頭圧痕あり
341	第 699 図	F6-18G- V	F6	V	—	—	3.8	無文	10	8	
342	第 699 図	H7-3G- V	H7	V	—	—	2.8	無文	9	8	口縁波状
343	第 699 図	G6-20G- VI	G6	VI	—	—	1.6	無文	8	7	
344	第 699 図	D5-6G- V	D5	V	—	—	3.6	無文	10	8	
345	第 699 図	E6-8G- V	E6	V	—	—	5.6	無文	9	1	
346	第 699 図	D5-153- VI	D5	VI	—	—	2.8	無文	4	8	底面研磨
347	第 699 図	DST	—	—	—	—	4	下垂平行線文	4	8	台付土器．四孔あり
348	第 700 図	F6-8G- VI	F6	VI	—	—	3.8	無文	5	12	粘土積上げ痕
349	第 700 図	F7-6G-HT	F7	VI	—	—	—	無文	1	1	キャベツ状重ね整形．丸底
350	第 700 図	D2-1G- V	D2	V	3.2	3	—	無文	10	12	完形
351	第 700 図	H7-10G	H7	—	4	—	—	無文	3	16	口縁に黒色付着物あり
352	第 700 図	E5-17G- V	E5	V	—	—	2.2	無文	4	8	指頭圧痕あり
353	第 700 図	C2-149- V	C2	V	—	—	3.6	無文	8	8	台付き土器
354	第 700 図	H3-1-2- V	H3	V	—	—	3.6	無文	7	14	台付き土器
356	第 700 図	C5-18G- VI	C5	VI	—	—	2.2	無文	6	5	

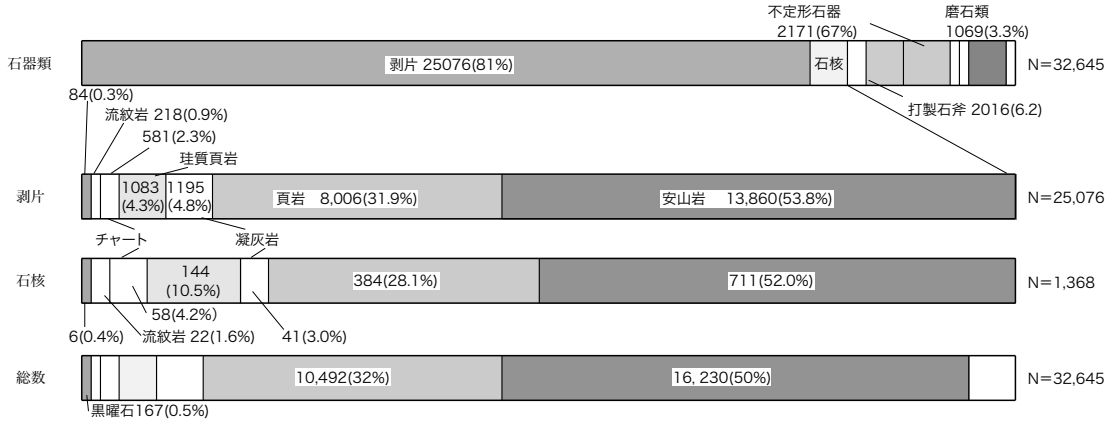
第 64 表　ミニチュア土器観察表

3．石 器

A．石器の概要（第 85 図）

本項では縄文時代中期前葉から後期中葉に構築された遺構、および包含層から出土した遺物の中で、縄文時代の所産と考えられる石器および剥片類についての報告を行ない、石製品と時期不明なものについては項を改め後述する。またその他の時期に帰属する石器については別項で扱う。前項まで見てきたように、本遺跡の出土土器は縄文時代早期末から晩期までの時期が認められるが、集落形成時期となる縄文時代中期前葉～後期中葉の遺物が大半を占める。したがって、出土石器の大半も集落形成時期に帰属するものと推測される。また包含層の出土層位からは時期細別することは不可能であった。そのため、ここでは出土石器を縄文時代中期前葉から後期中葉までの大枠の時間幅で捉え、当該期石器群の様相についてまとめる。なお、石器の時期細別については帰属時期の特定できる遺構出土の石器から検討を行ない、石器各説において記述するものとしたい。

本遺跡からは 32,645 点の石器・剥片類が出土しており、そのうち 5,985 点が道具としての狭義の石器となる。石器組成中、大きな割合を占めるのは打製石斧（1,937 点）と磨石類（1,069 点）であり、2 器種で全体の 51％を占める。他に石錐（167 点）、石鏃（138 点）、磨製石斧（230 点）なども比較的数量の多い器種といえる。一方、三脚石器（6 点）、板状石器（6 点）、石錘（5 点）が極めて少ない出土数であり、縄文時代中期から後期における魚沼地域での石器組成の特徴を示すものと考えられる（第 85 図）。石器石材では安山岩と頁岩の使用頻度の高さが特徴的であり、逆に周辺地域での採取の困難なチャートはで全体の 19%（639 点）、黒曜石は全体の 1 ％に満たない 167 点のみ出土している。



1．出土石材組成

	剥片石器									礫核石器					合計
	定形剥片石器								不定形石器						
	石鏃	石槍	石錐	石匙	ピエス・エスキーユ	板状石器	三脚石器	打製石斧		磨製石斧	磨石類	石錘	砥石	石皿類	
完形/略完形	128	6	113	23	111	6	3	697	2171	39	893	5	12	21	4228
欠損品	6	1	32	6	0	0	3	423	0	49	176	0	5	23	724
破片	4	3	22	1	0	0	0	817	0	142	0	0	10	34	1033
合計	138	10	167	30	111	6	6	1937	2171	230	1069	5	27	78	5985

2．石器組成表

第 85 図　石材組成と石器組成

B.　石器の分類（第 87 図・第 88 図）

分類は県内遺跡との比較を考慮し、一部の器種を除き新潟県埋蔵文化財調査事業団の分類および記載内容（註 117）に倣って行なった。ここでは石器の分類内容に入る前に、機能的側面を分類軸として設定された縄文石器の分類に対し石器群総体の枠で整理した後、実際の器種分類および記載内容について説明することにしたい。

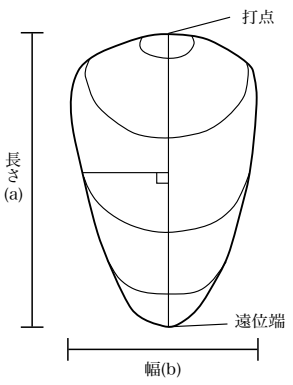
まず、出土石器群は剥片・石核を含めた広義の石器である「石器類」と、道具として使用された狭義の石器である「石器」の二者に区別される。また、原石、素材、未使用品としての「自然礫（または搬入礫）」という枠が用意される。ここでは「石器」を素材と調整加工のあり方から剥片石器と礫核石器に二分し、さらに剥片石器は定形剥片石器と不定形剥片石器の二者に分離しておきたい。ここで付け加えなければならないことは、当該期石器群は形態への志向性が高く、素材形状に拘束されなくても共通した調整加工を行使するため、剥片石器は「剥片を素材とする石器」以外に「（成形を目的とした）剥片剥離作業により作出された礫核石器（の一部）」が含まれる。また礫核石器は「（選択された）自然礫の一部に加工が加えられた礫石器」と「（選択された）自然礫や石核または転用石器の表面に使用痕跡が認められる礫石器」、「（研磨成形に必要な荒成形を目的とした）剥離痕および敲打が認められる敲打石器」、「研磨調整がなされた磨製石器」を含めており、二次加工によって形状を大きく改変しない石器と研磨成形を目的とした剥離・敲打によって形状を大きく改変する二者が存在する。

縄文石器の場合、技術系での分類を進めた場合、他器種間での結びつきの強いものが存在するため、実際の器種（形式）分類とは大きな齟齬をきたすことになる。このため、本項での石器総体での分類軸は、前記した定形剥片石器、不定形剥片石器、礫核石器と、小形・中形・大形程度の大きさによる枠を設ける程度に留め、器種ごとの各説において触れるものとする。

実際の分類作業については、取上げたすべての石製遺物の中から、定形石器を抽出の後、不定形石器および剥片、石核の分類を行なったため、判断の困難な定形石器の一部を不定形石器としている可能性がある。また、原石、素材、搬入礫を含む自然礫については取上げの精度の問題等により数量には含めず、必要な情報のみ各説中に記載を行なっている。

その他石器の記載内容および器種の分類基準について以下に示す通りである。

素　材　剥片石器は主要剥離面の打点から遠位端の長さ（a）に対し、これに直交する最大幅（b）が大きいものを横長剥片、小さいものを縦長剥片とした。また、器体の両面に自然面を残すものについては礫素材とした（第 86 図）。



第 86 図　計測部位

剥　片　素材剥片の大きさは、おおよそ次のような目安で分けた。

大型剥片…10cm 以上のもの。　　中型剥片…10cm 未満のもの。

小型剥片…３～６cm 程度のもの。

二次加工　二次加工の剥離の大きさは、おおよそ次のような目安で分けた。

大型の剥離…１cm 以上のもの。　　中型の剥離…６cm 程度のもの。

小型の剥離…２～３mm 程度のもの。　　細かな剥離…１mm 程度のもの。

a）石鏃　両側縁を連続する小形の平坦剥離によって成形され、両側縁の辺が先端部で交差することによって尖頭部が作出された石器のうち鏃形を呈する扁平な小形剥片石器を石鏃とした。矢柄の装着あるいは逆刺しの機能を備えた基部を持つ（註 118）。平面形および側面形が左右対称になっているものを完成品とし、成形が不十分で平面形および側面形が非対称的な形状を示すものを未成品とした。

b）石槍　両側縁を連続する小形の平坦剥離によって成形し､両側縁の辺が先端部で交差することによって尖頭部が作出された石器のうち鏃形を呈する扁平な中形の剥片石器を石槍とした。

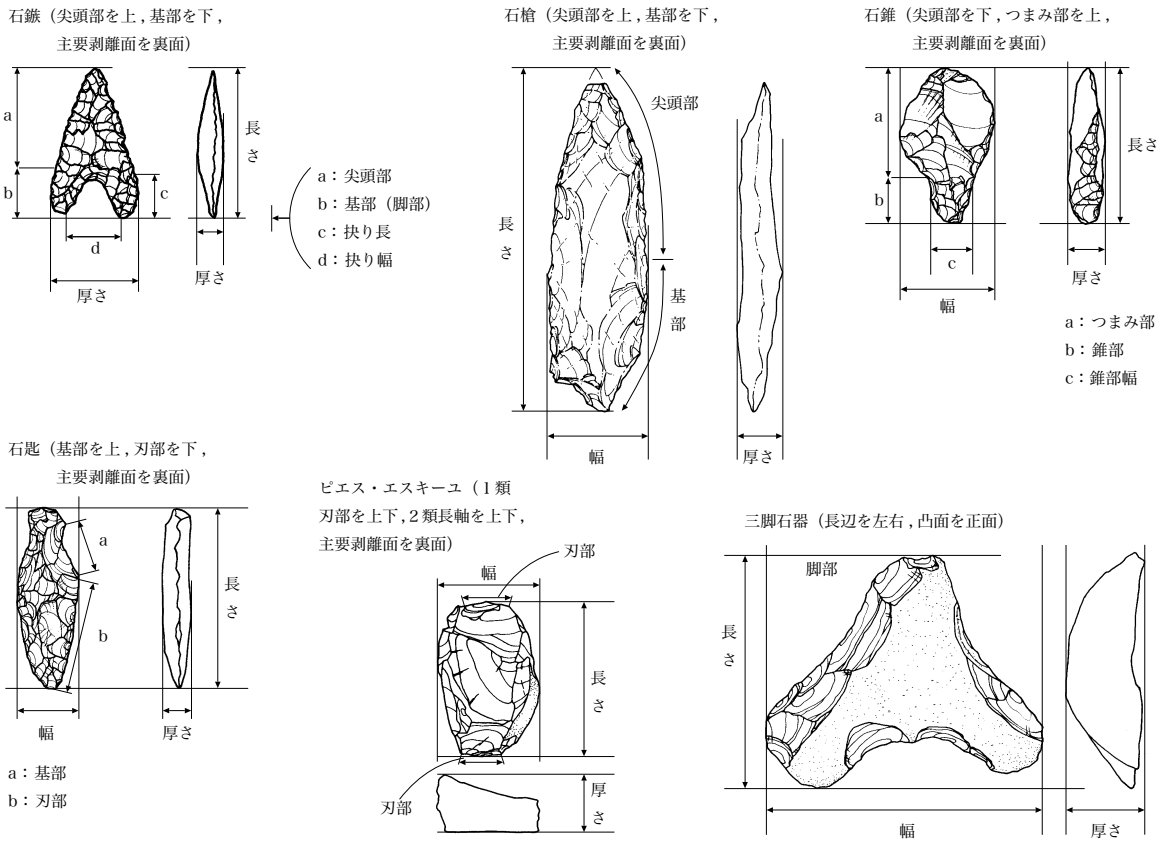
c）石錐　本器種は機能的な側面を重視した器種（註 119）であるため、ここでは、尖頭状の端部を機能部とする石器のうち、石鏃と石槍およびそれらの未成品以外の小形・中形の剥片石器を石錐とした。二次加工は機能部の断面形が三角ないし四角形となるように作出し、平面形は棒状またはＶ字状を呈する。

d）石匙　周縁調整または両側縁からのノッチによって作出されたつまみ状の突起を一端に持ち、刃部と判断される縁辺を有する剥片石器を石匙とした。したがって定義上「異形石器」も本類に含めた。

e）ピエス・エスキーユ　両極剥離技術によって作出された２極１対（または４極２対）の鋭い刃部を有し、小形で四角形の石器をさす（註 120）。

f）板状石器　扁平な自然礫または板状の剥片を素材とし、裏面からの急角度剥離を周縁に施し、楕円または三角形状に成形された片面加工の中形剥片石器を板状石器とした。

g）三脚石器　裏面からの急角度剥離と側縁からの平坦剥離によって、平面形が内湾する三角または抉入三角形状に成形された両面加工の中形剥片石器を三脚石器とした。



第 87 図　石器分類図（１）

h）打製石斧　扁平礫または大形剥片を素材として、表裏面もしくは側面からの直接加撃による大形、中形の剥離によって斧形に成形された中形から大形の剥片石器を指す。本類は使用痕観察によって片側側縁のみの加工であっても石器として機能している事が知られているため、側縁加工が左右非対称となるものについても完成品として分類した。

i）不定形石器　上記、定形剥片石器 a）～ h）の以外の剥片石器を便宜的に分類した。

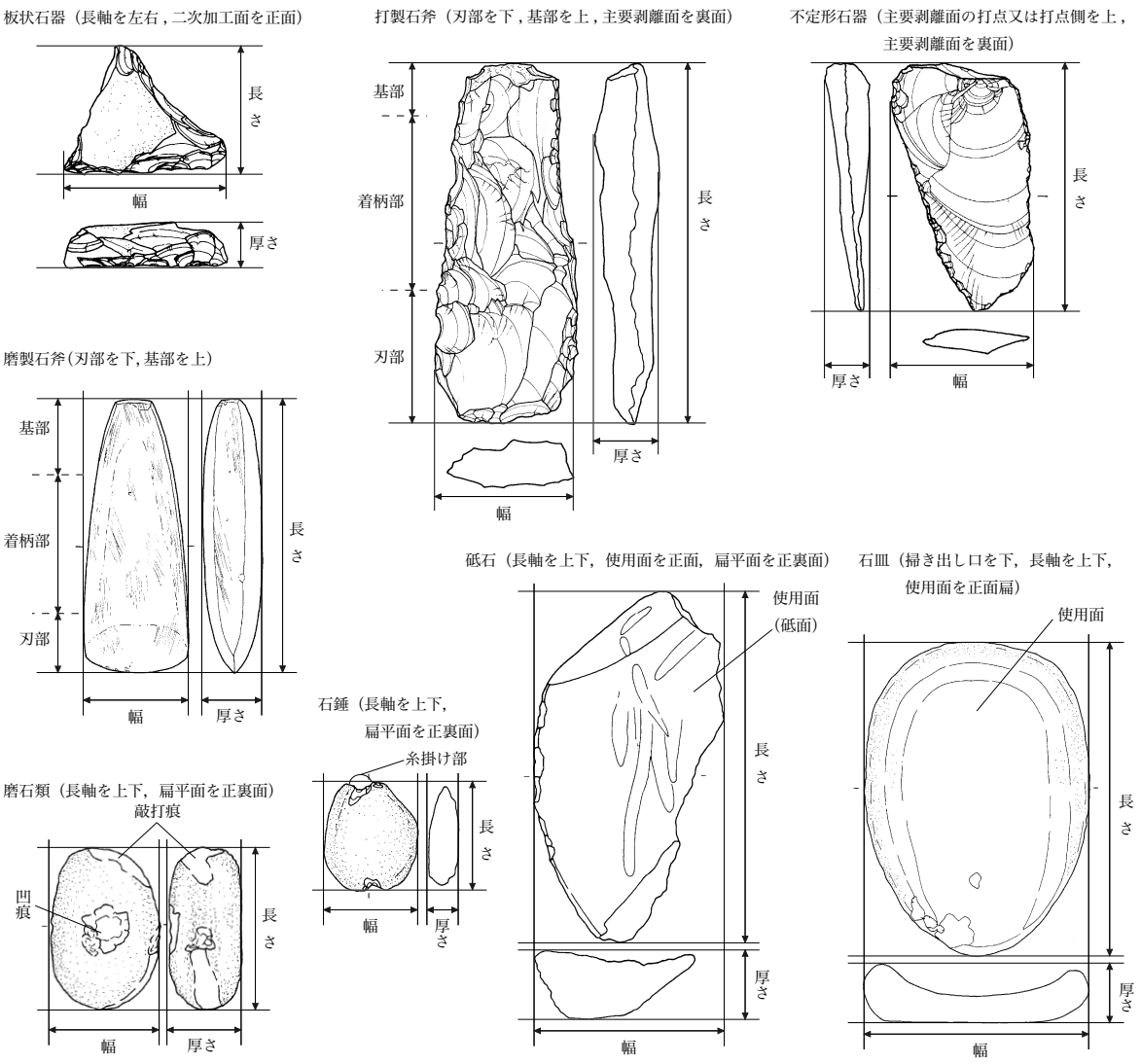
j）磨製石斧　研磨によって斧形に成形された小形から中形の礫核石器を指す。

k）磨石類　磨痕、敲打痕、凹痕を有する小形・中形の礫核石器を指す。従って、自然礫素材の礫石器の他、石核素材の「多面体を呈する敲石」も本類に含めた。

l）砥石　礫表面に溝状・帯状・平面状などの砥面と考えられる研磨痕が認められる石器を砥石とした。

m）石錘　円礫両端に２個１対（4 個 2 対）の糸掛けと考えられる抉りまたは擦切溝を有する石器を指す。

n）石皿　大形礫の平坦面に磨痕や敲打痕など粉砕行為によって生じたと考えられる痕跡がある石器を指す。なお石皿を作出しているものの中で長軸長 20cm に満たない小型のものは石製品に含めている。



第 88 図　石器分類図（2）

C. 石器石材

石材分類　これまで津南町教育委員会では遺跡から出土する石器石材の石材産地特定のため、周辺地域において綿密な石材分布確認調査（註 121）を行なってきており、本報告でも同一地域内での石材対比を目的としてほぼ同様な基準で分類した石材名を使用している。ここでは遺跡周辺地域において採取が可能な石材を「在地石材」、それ以外を「非在地石材」とした。また「在地石材」については、現生狩猟採集民の行動モデルから日常活動に伴う食料調達に当てられる移動距離範囲（４時間 -10km 程度の距離）で採取できる石材と１泊２日程度の移動距離範囲で採取される石材に区分し、前者を「在地石材１」とし、後者を「在地石材２」とした（註 122）。また前記石材分類は本遺跡時期に多い礫石器や、搬入石材の存在によって一部石材名称を変更して使用している点がある。また同一名称の石材についても採取地域および出土地域によってその性質が異なる点などを考慮する必要があるため、在地、非在地石材に分類したそれぞれの主要な石器石材の肉眼観察上での特徴を記載しておくこととした。

【在地石材１】…珪質頁岩、頁岩、凝灰岩、砂岩、緑色岩、チャート、黒色安山岩、粗粒安山岩、玄武岩、アプライト、デイサイト、ドレライト、斑レイ岩、閃緑岩、などが挙げられる。

頁岩　珪酸分の濃集度が低い頁岩を指す。風化した表面の色調は①暗赤茶褐色、②黄褐色～黄白色、③灰白～青灰色、④青黒色を呈し、石質としては硬質なもの（①）、凝灰岩質なもの（②,③）、泥質なもの（④）などが見られる。④には片理の発達によって粘板岩化したものもあるが、頁岩として分類する。

凝灰岩　風化表面の色調は黄白色～灰白色、内部は暗灰色を呈する。表面に激しい風化が見られるものが多く、稜線が摩滅するものも含まれる。

緑色岩類　緑色を呈する凝灰岩を総称し、中粒凝灰岩、火山礫凝灰岩などを本類とした。なお、珪化した緑色凝灰岩は珪質頁岩に含めた。

砂岩　風化した表面の色調は黄白色から黄褐色、内部は　色を定する。粗粒（基質が粒径 0.5 ～ 1.0mm 程度のもの）、中粒（基質が粒径 0.2 ～ 0.5mm 程度のもの）のものが確認されている。

黒色安山岩　黒色緻密なガラス質安山岩を指し、無斑晶質ガラス質安山岩と斑晶質ガラス質安山岩が認められるが、前者の方が数量的には多い。

粗粒安山岩　表面が灰白色～白色を呈するものの他、少数だがやや赤みを帯びたものが含まれる。内面は灰色～黒色を呈し、多孔質なものと中粒のものを含む。

【在地石材２】…主に破間川上流域の守門岳山麓から産出する石材群を指す。

チャート　硬質緻密な珪質岩で灰色、赤褐色、緑灰色、青灰色を呈する。珪質頁岩と区別が困難なものも存在する。津南地域でも採取可能だが、採取地と量ともに限定られているためここに含めた。

流紋岩　風化した表面は白色、青灰色、内面は白～灰色を呈する。石英の斑晶が認められるものが多い。

玉髄　白色～半透明を呈する石英質の岩石。

鉄石英　赤色、黄色を呈する不透明玉髄を総称する。

【非在地石材】

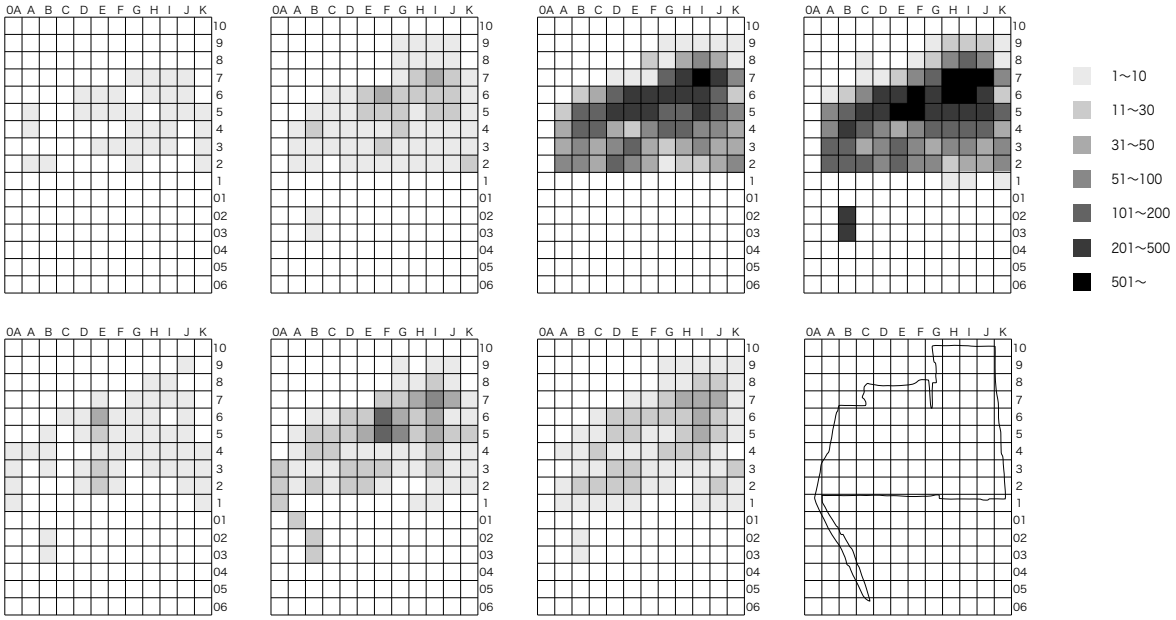
黒曜石　半透明な黒色を呈する天然ガラスを指す。分析から信州産黒曜石が多く搬入されている。

珪質頁岩　珪酸分の濃集度が高い頁岩で、表面の色調は暗褐色、明赤灰色～赤灰色、黒色、内面は黒色を呈する。新発田や山形などで採取されたものと類似しており、ここでは非在地石材とした。

蛇紋岩類　乳白色～緑灰色～緑青色を呈する変成岩の総称で、岩石学的な名称とは厳密には異なる。

	剥片石器									礫核石器					合計
	定形剥片石器								不定形石器						
	石鏃	石槍	石錐	石匙	ピエス・エスキーユ	板状石器	三脚石器	打製石斧		磨製石斧	磨石類	石錘	砥石	石皿類	
黒曜石	11	0	3	2	5	0	0	0	5	0	0	0	0	0	26
流紋岩	6	0	0	1	2	0	0	1	8	2	0	0	0	0	20
鉄石英	4	0	1	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	9
チャート	23	0	3	0	4	0	0	0	7	4	2	0	0	0	43
珪質頁岩	21	0	21	2	13	0	0	15	98	0	6	0	0	0	176
頁岩	30	7	55	13	28	1	0	926	1022	0	19	1	0	0	2102
凝灰岩	3	2	12	2	10	1	2	246	157	0	4	0	0	0	439
黒色安山岩	39	1	76	8	47	2	3	596	868	0	19	0	0	0	1659
緑色凝灰岩	0	0	0	0	0	0	0	2	6	27	16	0	0	0	51
蛇紋岩類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	128	1	0	0	0	129
輝緑岩	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	3	0	0	0	8
斑レイ岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31	48	0	5	3	87
閃緑岩	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	39	0	0	2	45
砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	3	11	3	29
粗粒安山岩	0	0	0	0	1	1	1	147	0	0	854	1	11	61	1077
玄武岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	0	0	9	31
その他	1	0	1	0	0	1	0	0	0	34	23	0	0	0	60
合計	138	10	167	30	111	6	6	1937	2171	230	1069	5	27	78	5985

1．石器石材組成表



2．石材別出土平面分布図

第 89 図　石器石材

D. 石器各説

a）石 鏃（図版第 706 ～ 708 図・第 710 図・第 712 図・第 713 図・第 715 図・第 717 図・第 719 図～第 725 図）

分類（第 90 図） 完成品、未成品併せ 230 点が出土しており、そのうち完成品としたものは 138 点である。完成品の内訳は D 類（有茎鏃）5 点に対し、A 類（凹基石鏃）102 点、B 類（平基無茎石鏃）が 19 点を数え無茎石鏃が全体の 88% と極めて高い比率を占める（註 123）。形態分類は完成品を対象として基部形状と先端部側縁形状による分類を行ない、さらに基部形状については脚部抉りの深幅比が 1 ：1.3 を境として抉りの深いものと浅いものに細分した。また脚部の調整剥離についても類型化をおこない、上記分類との比較によって本遺跡で出土点数の多い凹基無茎石鏃の形態と基部加工の関連について触れたい。

【完成品】

A 1 類：凹基無茎、 脚部抉りの深いもの。

A 1 a 類：尖頭部側縁が直線的なもの。　　A 1 b 類：尖頭部側縁が緩く内湾するもの。

A 1 c 類：先頭部から基部にかけての側縁が鋭く内湾するもの（「鍬形鏃」）。

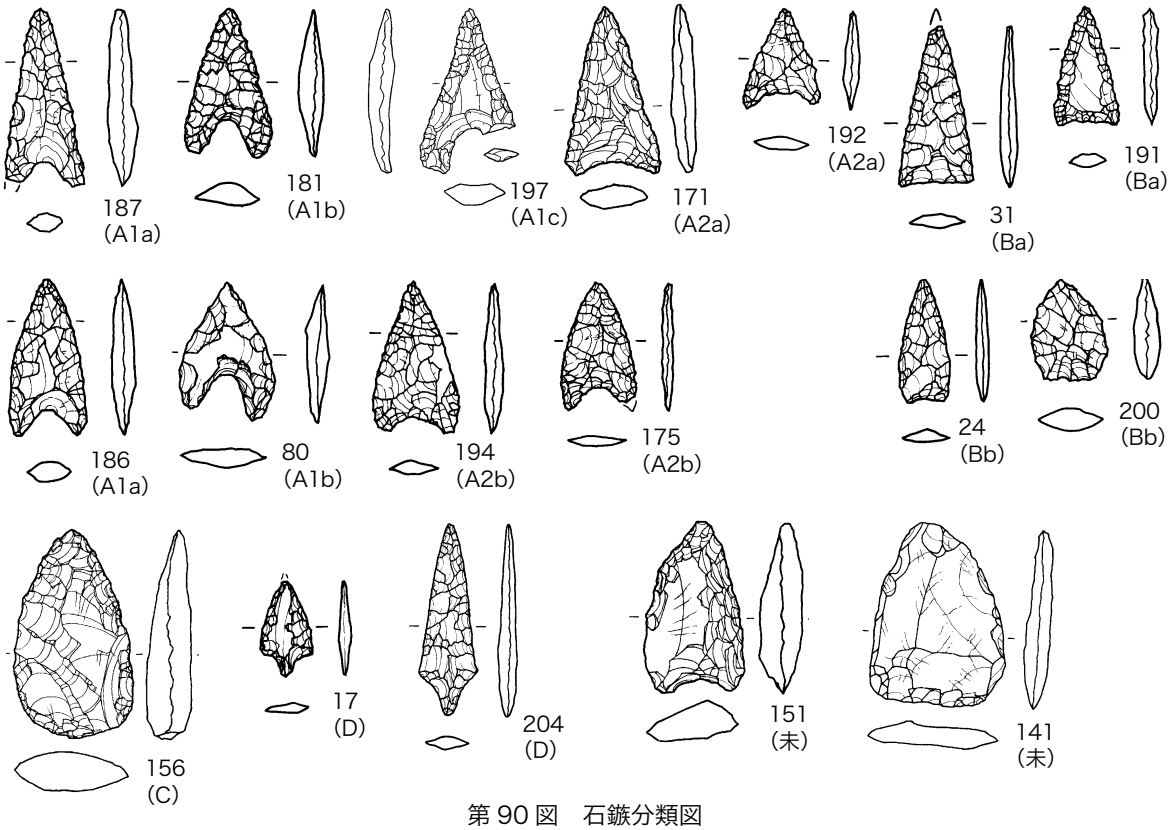
A 2 類：凹基無茎、 脚部抉りの浅いもの。

A 2 a 類：尖頭部側縁が直線的となるもの。　　A 2 b 類：尖頭部側縁が緩く内湾するもの。

B 類：平基無茎。

B a 類：尖頭部側縁が直線的となるもの。　　B b 類：尖頭部側縁が緩く内湾するもの。

C 類：基部が円形となるもの（円基鏃）。　　D 類：茎部を有するもの（有茎鏃）。



第 90 図　石鏃分類図

【未成品】

平面形および側面形が左右対称になっているものを完成品とし、成形が不十分で平面形および側面形が非対称的な形状を示すものを未成品とした。

調整加工（第 91 図 1） 側縁加工では以下の２類に細分される。

①類：：周縁のみ調整加工を施すもの。　②類：表裏両面に対し全面に調整加工が施されているもの。

使用石材（第 91 図 2） 出土数では黒色安山岩、頁岩、チャート、珪質頁岩、黒曜石の順に多く、特に周辺地域での採取が可能な黒色安山岩と頁岩を素材とした石鏃は未成品含め 125 点が検出された。類型別に使用石材の傾向を見ると黒曜石では A1 類、黒色安山岩・c 珪質頁岩・鉄石英では A2 類での利用頻度が高い。A1 類では在地系石材の使用が低い傾向にあり、脚部に深い抉りを作出するのに不向きと考えた結果と見ることが出来よう。

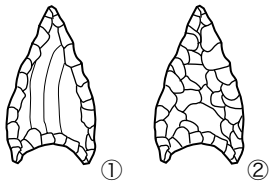
欠損状況（第 91 図 3・4） 138 点のうち 61 点に欠損が認められた。欠損状況は次の 6 類に細別される。

a：先端部欠損　b：衝撃剥離によるもの　c：先端部・脚部欠損

d：脚部欠損　e：先端部破片　f：茎部欠損

d の欠損例が最も多く、脚部の長い A1 類での欠損率が高い。先端部での欠損資料 33 点のうち、使用時の欠損と考えられる b の欠損例が 4 点のみ確認された。埋没過程での欠損が多いことが予想される。

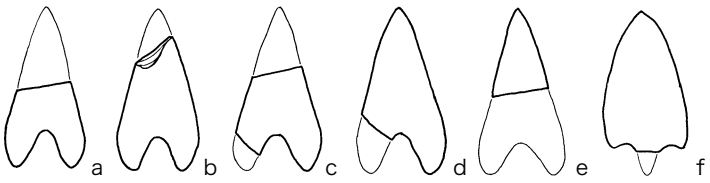
付着物（第 91 図 5） 膠着材と考えられる黒色付着物の認められる資料が 4 点確認される。分類別では



1．側縁部加工模式図

	A1 a	A1b	A 1c	A2a	A2b	Ba	Bb	C	D	不明	計	未成品	総計
黒曜石	4	3		2	1				1		11	9	20
流紋岩	2			1	1	1		1			6	2	8
鉄石英				1	2	1					4	2	6
チャート	7	1		7	6	1	1				23	7	30
珪質頁岩		1		4	9	3		1	1	2	21	13	34
頁岩	5	2	1	4	7	3	3	2	2	1	30	31	61
凝灰岩	1				1					1	3	4	7
黒色安山岩	4	2		17	5	6		1	1	3	39	25	64
その他	1										1	1	2
計	24	9	1	36	32	15	4	5	5	7	138	94	232

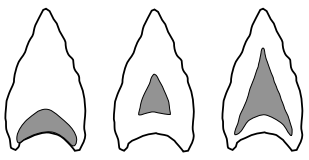
2．石器石材組成表



3．残存状況模式図

	A1a	A1b	A1c	A2a	A2b	Ba	B b	C	D	不明	計
0．(完形 / 略完形)	12	4		21	18	11	4	5	2		77
a．(先端部欠損)	2	1		4	5	4			1	2	19
b．(衝撃剥離によるもの)	1	0		1	2	0					4
c．(脚部欠損)	9	4	1	7	4					1	26
d．(先端 / 脚部欠損)		0		3	3					4	10
e．(先端部破片)											0
f．(茎部欠損)									2		2
計	24	9	1	36	32	15	4	5	5	7	138

4．残存部位数量表



5．黒色付着物模式図

第 91 図　石鏃（1）

A2 類と B 類のみであったが、明確な完成品（既装着品）を示す例として重要である。また、付着状況では城之腰遺跡に類例が多かった基部の根元まで付着するものは少ない。こうした膠着物の付着状況の差異は根挟みなど固着法の違いを示している可能性がある。

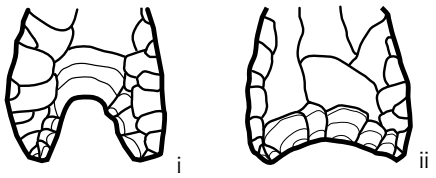
抉りの作出（第 92 図 1・2） 無茎石鏃（A類）の基部加工と脚部の抉りについてみる。基部加工の観察を行なった結果、以下の 2 類に細分される。A1 類と A2 類では基部加工のあり方に差異が確認された。

i 類：急角度の剥離を両面から施すことによって抉り部を作り出した後、基部に調整を施すもの。

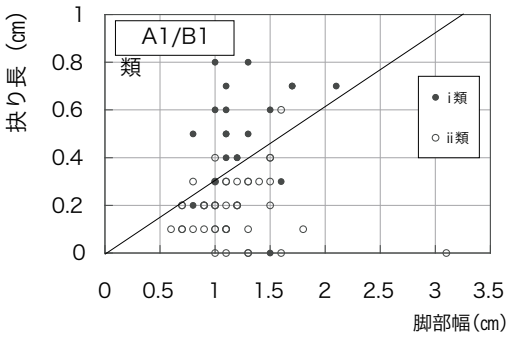
ii 類：縁部からの平坦な細部調整剥離を両面に対し連続的に施すことによって基部整形するもの。

第 92 図 2 には A1、A2、B 類の完形・略完形石鏃の脚部幅と抉り長の比率を分布図に示す。A1 類と A2 類の分類基準とした抉り長：脚部幅が 1 ：1.3 を境に、加工が異なっていることが図から理解される。

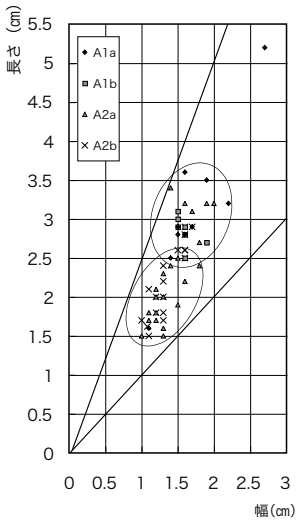
大きさ（第 92 図 3・4） 測定可能な 68 点の長幅分布について類型ごとに図示する。出土石鏃は長さ 1.4 ～ 3.6cm、幅 0.9 ～ 2.2cm にピークを持っており、最小のもので 1.4cm、最長のもので 5.2cm を測る。長さ 3.5cm 超の石鏃は数量のピークから外れる上、矢尻として実際に機能したかも疑問だが、合計で 5 点出土している。矢としての機能性を考慮するならば、未成品や非実用品のようなものとして残された遺物であることも推定される。次にA類の長幅比分布図を見よう（第 92 図 3）。同図からは視覚的に 2 つの纏まりを捉えることが可能である。一つはA 1 a・A1b を中心とする長さ 2.5 ～ 3.5 ㎝付近の集合（グループ 1）であり、二つ目は A2b を主体とする長さ 1.5 ～ 2.5 ㎝付近の集合（グループ 2）である。特に後者については幅が 1.0 ～ 1.6cm の狭い範囲に纏まっていることから、かなり規格性の高い類型であったことが予想される。2つのグループに識別される要因は脚部の長短によるものと考えたが、脚部の短い A2a 類がグループ 1 に一定数量含まれており、脚部を除いた尖頭部の長さの分布を見たとしても同様の差異が現れることは必至といえるだろう。グループ 1 と 2 とした分布の差異が脚部形状と関連性があることから、ここでは結果的に大きさの異なる分布が現れたとするよりも、目的とする行為に特化した大きさのものを製作した結果現れたという可能性の方を支持しておきたい。



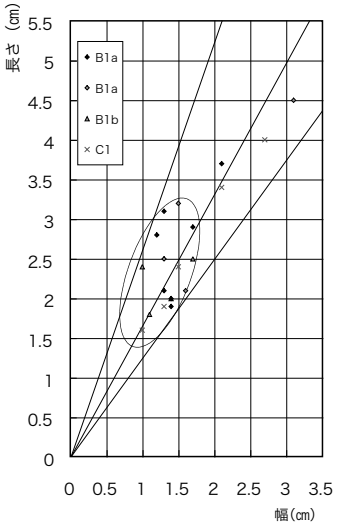
1．脚部加工模式図



2．脚部抉り比分布図



3．長幅分布図（A類）

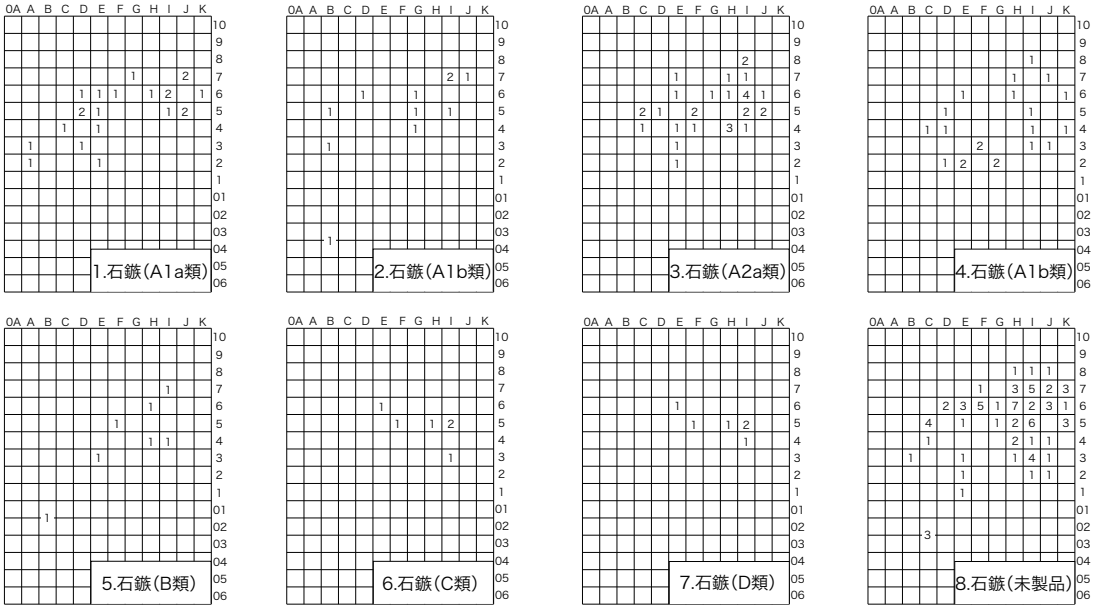


4．長幅分布図（BC類）

第 92 図　石鏃（2）

出土分布（第 93 図 1） 遺構等での特殊な出土状況を示す事例はなく、石鏃は住居跡出土 19 点、土坑出土 17 点、配石出土 9 点、包含層 174 点、出土地点不明 11 点が出土した。類型別の出土分布では廃棄帯を中心に分布する A1a、A1b、Ba 類と集落のやや内側に分布する A2b、C、D 類で若干の分布の差異が見られる。後者にⅦ・Ⅷ期の遺物遺構が分布する傾向が高いことからすると、時期的な場の違いが平面分布にあられている可能性も考えられよう。

時期（第 93 図 2） 伴出する土器によって時期が特定された遺構から出土した石鏃は 29 点である。破片資料 1 点を除く 28 点が細別可能な資料となる。完形・略完形資料 18 点のうち 12 点が後期に所属する遺構から出土している。その中で A2b 類が 6 点と半数を占めており、出土時期の傾向としてやや纏まった様相を見せる。全体の類型ごとの分布を見ると A2a、A2b が数量的に多くⅤ～Ⅷ期までの遺構に集中し、さらに A2b は後期前葉～中葉に多い傾向が見られる。表で見る限りでは A2a 類はⅥ期、A2b 類はⅧ期にピークが見られるのに対し、包含層での出土点数が多い A1 類がⅤ～Ⅷ期の遺構中において出土が確認されたのは 1 点のみであった。比較する遺物数が少量のため明言はできないが、本遺跡で数量的に纏まっている A1 類と A2 類の対照的な遺構出土状況から、本遺跡の遺構出土石鏃は中期中葉に A1 類、中期末～後期中葉に A2 類といった図式が設定される可能性が考えられる。



1．石鏃出土分布図

	A1a	A1b	A1c	A2a	A2b	Ba	B b	C	D	未成品	不明	計	出土遺構
Ⅳ（大木 8a）	1	2					1					4	第 13・15・16 号住居跡
Ⅴ（大木 8b）				1		1		1				3	第 9 号住居跡
Ⅵ（沖ノ原）				4					1	2		7	第 7・17a・21 号住居跡、J5-P1、H4-P9
Ⅵ - Ⅶ（中末 - 後初）				1	1					1		3	第 22 号住居跡
Ⅶ（三十稲場）						1						1	K5-P14
Ⅷ（南三十稲場）				1	1					1	1	4	第 6 号住居跡、K2-P2
Ⅶ - Ⅷ（後期）	1			1	5	1						8	第 1・2 号配石遺構
計	2	2	0	8	7	3	1	1	1	4	1	30	

2．石鏃時期別数量表

第 93 図　石鏃（3）

b）石 槍（図版第 717 図・第 725 図）

分類（第 94 図） 石槍としたものは総数 13 点が出土しており、平面形態から 2 種類に分類される。

1 類：幅狭の木葉状を呈するもの。　　2 類：基部が幅広の舌状に成形されるもの。

二次加工　中型の浅い剥離によって石器の周縁にのみ二次加工が認められるものと中型の深い剥離によって石器ほぼ全面に二次加工が認められるものが認められる。

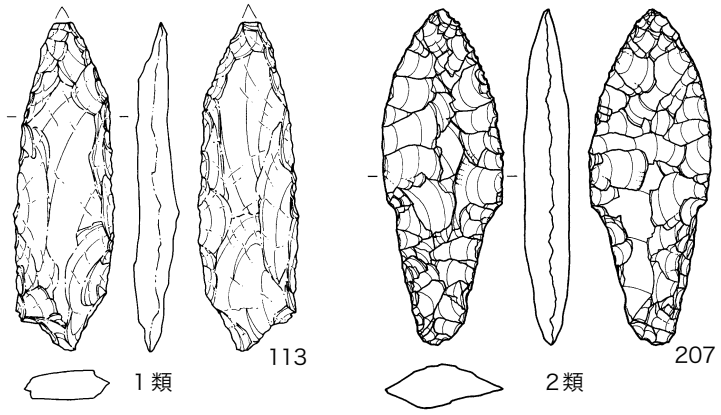
使用石材（第 94 図 2） 刺突という同様な機能を持つ石器であっても石鏃とは異なり、すべて在地石材 1 によって占められる。頁岩や凝灰岩など比較的緻密な石質のものが主に用いられる。

素材　主要剥離面の観察から、素材形状の明らかなものは 6 点確認された。横長剥片を素材とするものが 5 点、縦長剥片を素材とするものが 1 点認められている。

欠損状況（第 94 図 3） 出土総数 13 点のうち完形資料が 6 点を占めており、残存率はそれほど高い器種ではない。また先端部欠損としたものは先端部裏面からの衝撃による欠損が見られる資料があり、使用によって破損したことを示すものも存在する。

大きさ（第 94 図 4・5） 長幅分布では長さ 5 ～ 10cm、幅 1.5 ～ 4 cm の中に 1・2 類とも分布し、両者の間に分布上での差異は認められない。一方、重量比では 1 類の中で上下差が大きく、類型としての幅が認められる。

分布と時期（第 94 図 6） 遺構出土のものは配石遺構から出土した 1 点（113）のみで、その他のものはすべて包含層からの出土である。平面分布は廃棄帯および集落のやや内側に分布が認められる。



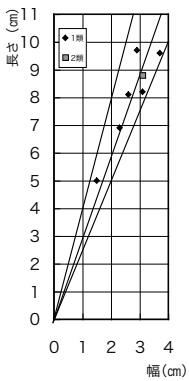
1．石槍分類図

	1類	2類	計
頁岩	6	1	7
凝灰岩	2		2
黒色安山岩	1		1
計	9	1	10

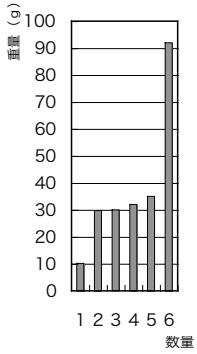
2．石材組成表

	1類	2類	計
完形	5	1	6
先端部欠損	1		1
基部破片	3		3
計	9	1	10

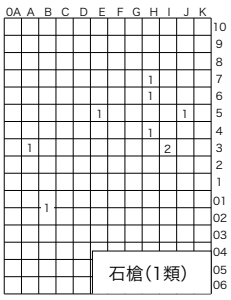
3．部位別数量表

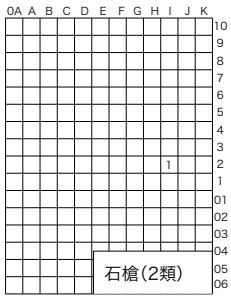


4．長幅比分布図



5．重量分布図





6．石槍出土平面分布図

第 94 図　石槍

c）石 錐（図版第 708 図・第 722 図・第 725 図・第 726 図）

分類（第 95 図） 石錐と分類したものは総数 167 点出土し、機能部の作出方法から 4 つに分類される。類型ごとの内訳は A 類が 65 点、B 類が 68 点、C 類が 13 点、D 類が 21 点となる。A 類および D 類については従来の石錐とは機能部の大きさや二次加工のあり方という点において明らかに異なるため本来は別に器種を設定し報告するべき類型ではある。しかしながら、両類型の使用痕跡の観察から回転穿孔や刺突、溝切りといった機能が想定されるものであり、道具としての共通性から本分類では石全体として報告する。また、機能部の二次加工についてもわずかながら共通する部分を見出すことができると考えたため、機能部の二次加工のあり方を比較検討する意味でもこれら各類型をまとめて報告することとした。

A類：中・大型剥離による二次加工によって錐部が作出されるもの。

[五丁歩遺跡の不定形石器 D 類（註 124）に対応する]

A 1 類：片面からの急角度の二次加工によって成形されるもの。

A 2 類：片面あるいは両面からの浅角度の剥離によって成形されるもの。

B類：器体の一部にのみ小型・中型剥離による二次加工を施し、錐部を作出するもの。

B 1 類：粗雑な細部調整加工が錐部付近に集中するもの。

B 2 類：押圧剥離を錐部にのみ施すもの。

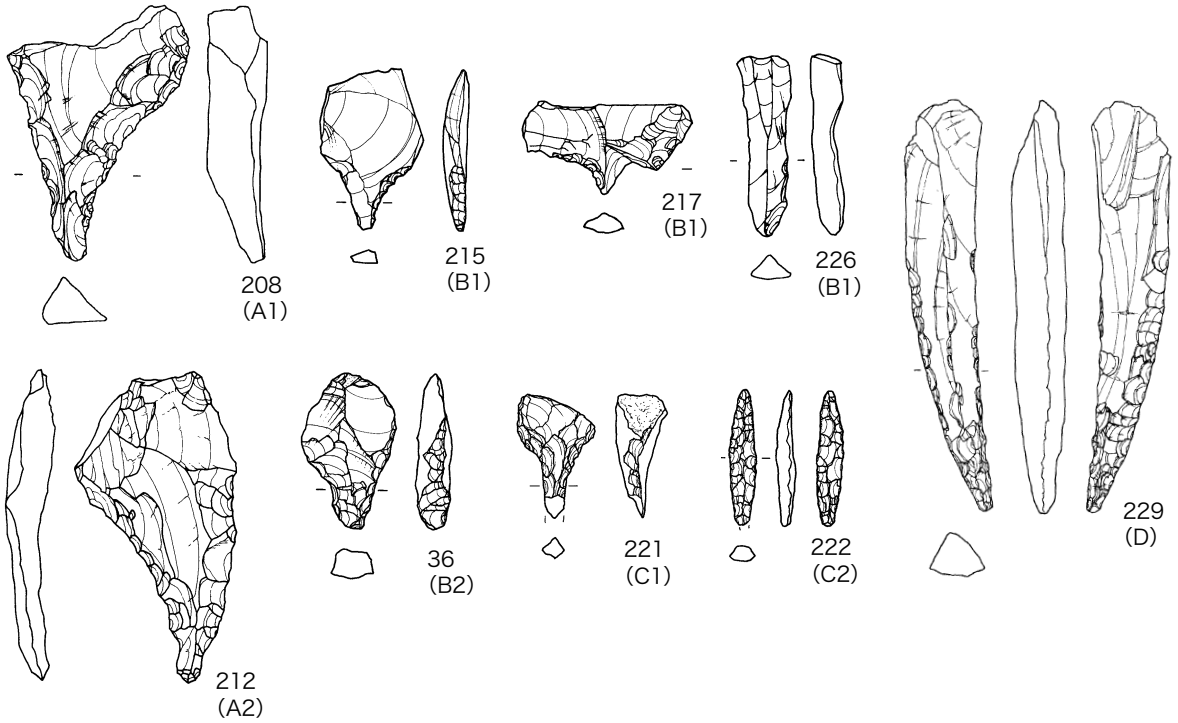
C類：押圧剥離による二次加工が器体のほぼ全面に施されるもの。

C 1 類：二次加工が錐部のみ施されるもの。

C 2 類：二次加工が全周に亘って施されるもの。

D類：角柱状の剥片を素材として両面からの二次加工により断面錐部を作り出すもの。

[清水上遺跡：不定形石器分類不明に類例がある]



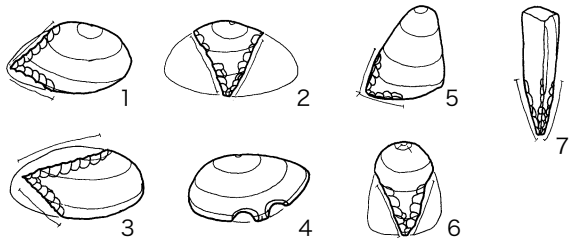
第 95 図　石錐分類図

使用石材（第 96 図 1） 各類型ともに、黒色安山岩、頁岩、凝灰岩など在地石材が大半を占めるが、頁岩の利用率が低い C 類と、黒色安山岩の利用率の高い D 類のように各類型によって石材の選択性に違いがあったことが窺える。一方、黒曜石･チャート･鉄石英は B・C 類にのみ用いられており、小型のものが多く、素材の大きさに規制された石材であったと考えられる。

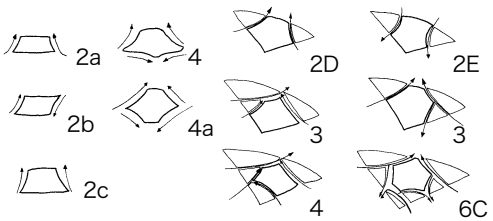
錐部加工形状（第 96 図 3 ～ 6） 類型別に錐部加工形状と素材形状の分類し、両者の関連を確認した。C・D 類の錐部加工は類型ごとに一定程度のまとまりを持つのに対し、A・B 類は非常に多様なあり方を示し素材形状に大きく規定された加工形態と考えられる。さらに A・B 類の加工形態には 2C（D 類に特徴的）や 4C（B2 類に類似する丁寧な押圧剥離）が認められる点など他の類型と共通した要素を部分的に含むことから機能部（錐部）作出という目的以外には執着しない加工形状を示すものと言える。ここでは A・B 類に見られる様々な加工形態のあり方は「石錐」という道具の機能を優先した製作の結果と判断したい（註 125)。

	A 1	A2	B1	B2	C1	C2	D	計
黒曜石			3					3
鉄石英					1			1
玉髄			1					1
チャート			1			2		3
珪質頁岩	2		14	1	1	3		21
凝灰岩	2	4	2					8
頁岩	14	17	18	6			2	57
黒色安山岩	15	14	19	6	4	2	18	78
ドレライト	1		1					2
計	34	35	59	13	6	7	20	174

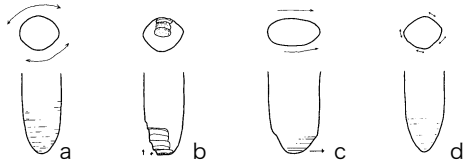
1．石錐石材組成表



3．石錐素材分類模式図



5．石錐加工形状分類模式図



7．石錐使用痕模式図

	A1	A2	B1	B2	C1	C2	D	計
完形･略完形	18	20	48	9	3	4	9	111
摘み部欠損	3	1	2	2	2		3	13
錐部欠損	7	3	5	2	1	2	3	23
摘み部破片						1	1	2
錐部破片	4	11	4				2	21
未成品	2						2	4
計	34	35	59	13	6	7	20	174

2．部位別出土数量表

		A 1	A2	B1	B2	C1	C2	D	計
1	横長剥片	8	8	24	4	1			45
2				3	1			1	5
3		8	8	8	1	1		2	28
4		2							2
その他		5	6	5					16
5	縦長剥片	2	1		2				5
6		3	2	3	1				9
その他			2	5	3				10
7(三角柱素材)				3	−			16	19
石核素材				1	−				1
不明		6	8	7	1	4	7	1	34
計		34	35	59	13	6	7	20	174

4．石錐素材形状数量表

	A 1	A2	B1	B2	C1	C2	D	計
2a	16	3	15	2			1	37
2b	2	4	6	3				15
2C	5	2	4	1			8	20
2D			1					1
2E			2					2
3	1	2	3	2				8
4	1	19	8	2	2	6		38
4a	8	4	3	2	3	1		21
4c			1		1		7	9
B3								0
6c							3	3
不明	1	1	16	1			1	20
計	34	35	59	13	6	7	20	174

6．石錐加工形状数量表

	A1	A2	B1	B2	C1	C2	D	計
a	1	3	3				1	8
b	1	3	3				1	8
c		1						1
d		3						3
計	2	10	6	0	0	0	2	17

8．石錐使用痕数量表

第 96 図　石錐（1）

使用痕（第 96 図２・３） 使用痕は 15 点に確認された。いずれも先端部分に認められるものである。

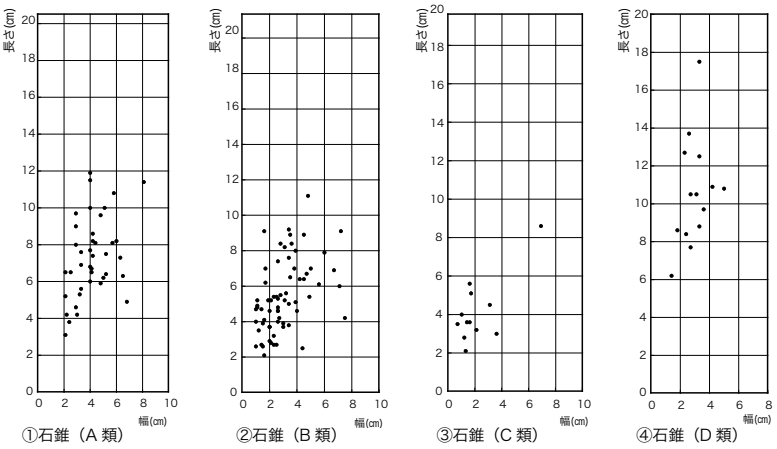
A：摩滅した状態のもの。　　C：横方向に擦痕が認められるもの。

B：階段状剥離または衝撃剥離が認められるもの。　　D：微細な剥離が認められるもの。

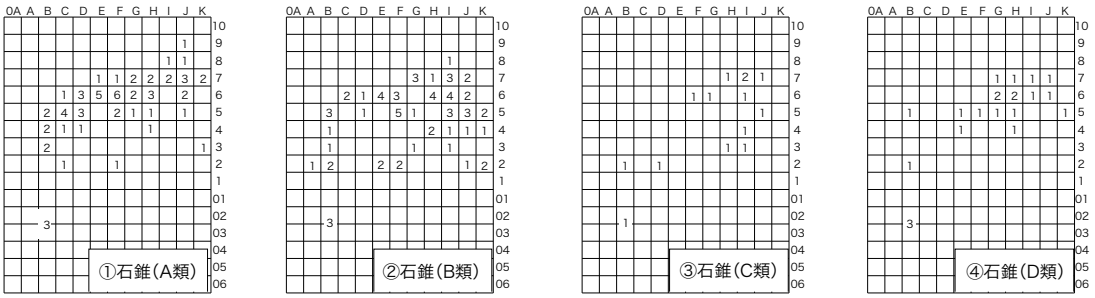
第 95 図８に見られるようにD類以外の各類型に痕跡が確認された。Cの痕跡は溝切り等の機能が考えられるが、これまでの石錐の定義（＝回転穿孔に用いられた道具）(註 126) を見直すものとして重要である。

大きさ（第 97 図１） 長幅比では長さ２～６cm、幅１～５cm の小形のものと、長さ６～ 12cm、幅２～８cm の中形のものに纏まっており、A 類は中形を中心とし、B 類は小形と中形、C 類では小形のみ分布する。D類については分類上、形状が棒状を示すものが多いため、他の３類形に比べ長軸方向に分布が大きく広がっているが、大きさとしては概ね中形を中心とした範囲に分布を示しているといえよう。

分布と時期（第 97 図２・３） 本器種の出土は包含層で 157 点、住居跡８点、土坑６点となり、遺構からの出土は非常に少ない。さらに時期が特定される遺構からの出土は 13 点と本類の帰属時期を特定するには困難だが、Ⅳ期に３点の出土が見られる B1 類やⅥ期で２点の出土が確認された B2 類、Ⅷ期でC２類とD類が各１点ずつの出土などは概ね該期の様相を示すものと考えられる。出土分布では各類型とも廃棄帯付近で集中するが、B・C 類は、特に配石遺構付近への広がりが認められる。



1．石錐長幅分布図



2．石錐平面出土分布図

	A1 類	A2 類	B1 類	B2 類	C1 類	C2 類	D 類	計	出土遺構
Ⅳ（大木 8a）			3				1	4	第 13・14・14b・15 号住居跡
Ⅴ（大木 8b）					1			1	第９号住居跡
Ⅵ（沖ノ原）			1	2				3	第 21 号住居跡、E2-P26、I4-P24
Ⅶ（三十稲場）								0	
Ⅷ（南三十稲場）								0	
Ⅶ - Ⅷ（後期）			1	1				2	第６号住居跡・第１号配石
計		1	5	3	1	0	1	10	

3．石錐時期別出土数量表

第 97 図　石錐（２）

d）石匙（図版第 710 図・第 713 図・第 723 図・第 727 図～第 728 図）

分類（第 98 図） 30 点出土しており、二次加工の違いから 3 細分される。さらに平面形状では摘みを上に置いた場合に器形が縦形となるものと横形になるものの従来の 2 分類に加え、刃部が鉤状となるものを併せた 3 つに細分した。類型ごとの内訳は A 類 5 点、B 類 9 点、C 類 16 点が出土している。

A類：片面のほぼ全面に細部調整を施すもの。

A 1 類：縦形のもの。

A 2 類：横形のもの。

A 3 類：刃部が鉤状に屈曲するもの（異形石器）。

B類：周縁のみ細部調整加工を施すもの。

B 1 類：縦形のもの。

B 2 類：横形のもの。

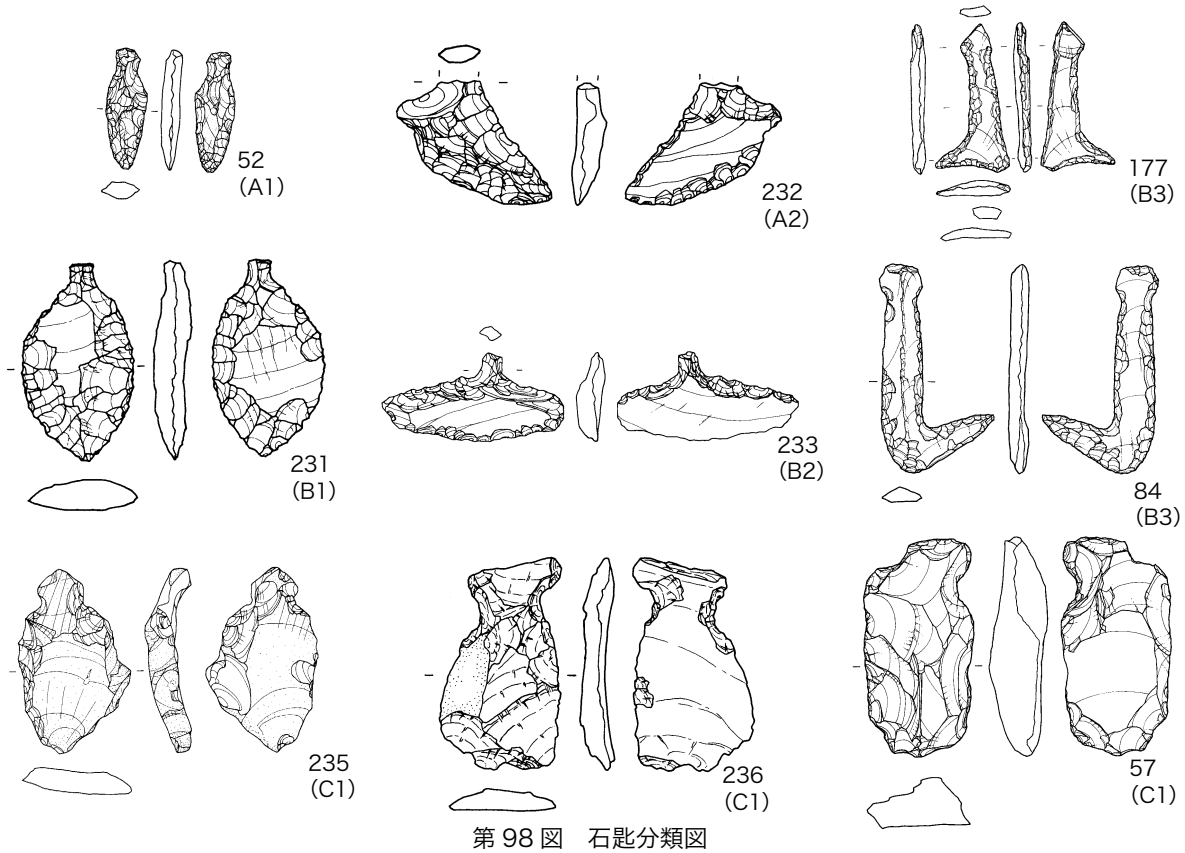
B 3 類：刃部が鉤状に屈曲するもの（異形石器）。

C類：粗雑な加工のみのもの。

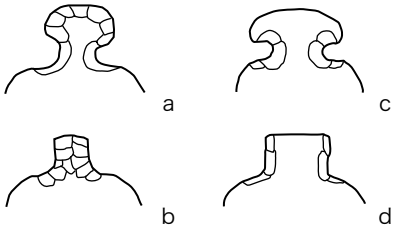
C 1 類：縦形のもの。

C 2 類：横形のもの。

摘み形状（第 98 図 1 ・ 2） A 類及び B 類の一部に認められる「全面に入念な調整を施すことによって成形されるもの」（a 類・b 類）と B 類の一部と C 類に見られる「両側縁からノッチを入れることによって摘み部を作出するもの」（c 類・d 類）に大別される。 こうした製作上の差異以外に機能上の違いを表すものと推察される摘みの形状差を 5 類に細別した。



第 98 図　石匙分類図



1．摘み形状分類模式図

		A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	A類	C類	計
摘み形状	a	1				2	1	1			1	6
	b			1	1	2						4
	c						1	3	2			6
	d				1	1		2	2			6
	その他							2	1		2	5
	不明		2							1		3
計		1	2	1	2	5	2	8	5	1	3	30

2．摘み文分類数量表

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	A類	C類	計
黒曜石	1						1				2
流紋岩		1									1
鉄石英			1							1	2
珪質頁岩		1		1							2
凝灰岩					1	1					2
頁岩				1	2	1	4	3	1	1	13
黒色安山岩					2		3	2		1	8
その他											0
合計	1	2	1	2	5	2	8	5	1	3	30

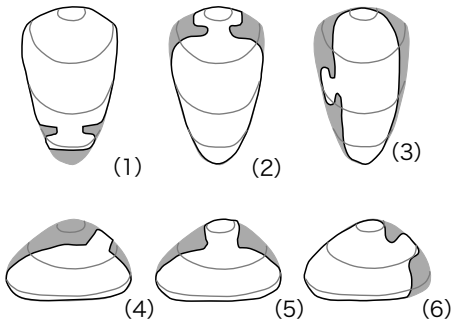
3．類型別石材組成表

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	A類	C類	計
完形	1		1	1	4	2	7	4		1	21
略完形				1				1			2
摘み部欠損		2					1				3
刃部欠損					1					2	3
刃部破片									1		1
合計	1	2	1	2	5	2	8	5	1	3	30

4．部位別数量表

		A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	A類	C類	計
縦長剥片	1				1		1	4			3	9
	2							1	2			3
	3											0
	不明	1					1					2
横長剥片	4					1						1
	5		1			3			1			5
	6				1	1		3	2			7
	不明											0
不明			1	1						1		3
計		1	2	1	2	5	2	8	5	1	3	30

5．素材分類数量表



6. 素材分類模式図

第 99 図　石匙（1）

使用石材（第 99 図3） 使用される石材の傾向として、石匙の類型間において差異が認められた。A 類には黒曜石、珪質頁岩などの非在地石材が用いられるのに対し、B・C 類には黒色安山岩、頁岩、凝灰岩の利用率が極めて高い。こうした内容から察すると両者の間には石材選択性の差異があったことが考えられる。なお、C 類としたものに黒曜石製と鉄石英製のものが含まれているが、前者（235）は小型有抉頭磨石器（註 127)、に近似するもの、後者は異形石器の破片である可能性があるものである。従って、C 類はこうした特殊な遺物にのみ非在地系の石材を用いているものといえる。

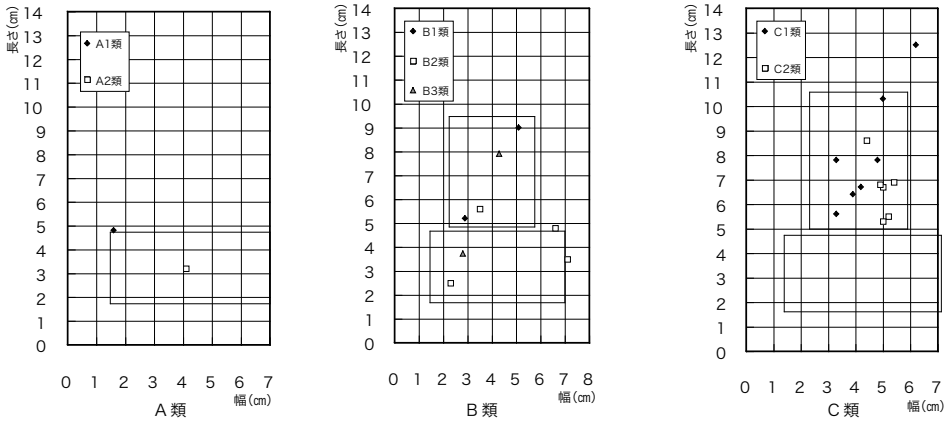
欠損状況（第 99 図4） 完形が 21 点と多く、全体として欠損品や破片の数量は少ない。これは欠損品や破片資料の場合、石匙と特定することが困難な器種であることが要因の一つとして挙げられる。従って A 類に欠損資料の割合が高いのも B・C 類に比べ、調整加工が全面に及んでいるなど非常に丁寧な調整が認められることから器種を特定する材料が多く欠損資料を抽出しやすかったためと推察される。

素材（第 99 図5・6） 打面位置および摘み部と刃部の位置関係に着目し、第 98 図6 に図示するような素材に対して分類を行なった。A 類は少数のため不明な部分が多いが B・C 類に関して以下のように纏められる。B 類は摘み部が打点側に着く傾向が強く、特に B2 類と横長剥片 B 素材との関連性が強い。一方 C 類は摘み部を打面側から離れた位置に付く素材 1 や素材 6 との強い相関関係が認められる。特に打面側を刃部として素材末端に摘みを作出する特徴的なまとまりも見ることができる。こうした素材選

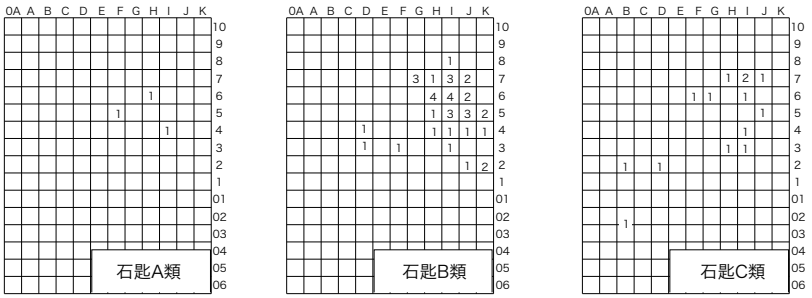
択の違いは摘みの作出に際し、周縁調整によって凸状の摘みを作出していくものと、側縁からのノッチを入れることによって摘みを作出する２種類の作出方法の違いに起因するものと捉えることができよう。

大きさ（第 100 図１） 長幅比で大きさを比較した場合、幅 1.5 ～７cm、長さ 1.5 ～５cm の範囲と、幅 2.5 ～６cm、長さ５～ 10.5cm の範囲にほぼ収まる２つの纏まりを見ることができる。前者は A 類と B 類の一部に、後者は B 類の一部と C 類に分布し、前述した石材の選択性の違いから、こうした分布のズレは素材形状の大きさに起因するものと考えられる。特に後者とした大形の纏まりは粗雑な二次加工によって成形された C 類を中心として分布しており、「大形粗製石匙」（註 128）と関連して捉えていくべきものと考える。

分布と時期（第 100 図２・３） 出土分布では住居跡出土が４点、土坑出土３点、包含層出土 22 点、出土地不明が１点となる。住居跡出土の割合は極めて低く、時期が特定できる遺構からの出土は５点のみである。14 号住居跡から２点出土したのを含め 、中期中葉段階の遺構から３点が検出されている。破片資料である I4 － P84 出土資料を除く他の２点を含め、すべて中期段階の遺構から出土している。



1．石匙長幅分布図



2．石匙出土分布図

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	計	出土遺構
Ⅲ（大木 7b）									0	
Ⅳ（大木 8a）	1						2		3	第 10・14a 号住居跡
Ⅴ（大木 8b）									0	
Ⅵ（沖ノ原）						1			1	
Ⅲ - Ⅵ（中期）									0	第 17 号住居跡
Ⅶ（三十稲場）									0	
計	1	0	0	0	0	1	2	0	4	

3．石匙時期別遺構出土数量表

第 100 図　石匙（2）

e）ピエス・エスキーユ（図版第 713 図・第 728 図）

分類（第 101 図 1） 111 点出土しており、刃部の位置によって 2 つに分類される。各類型の内訳は 1 類が 71 点、2 類が 32 点となり、1 類は 2 類のおよそ 2 倍の出土数量を数える。

1 類：2 極 1 対の両極剥離痕を持つもの。

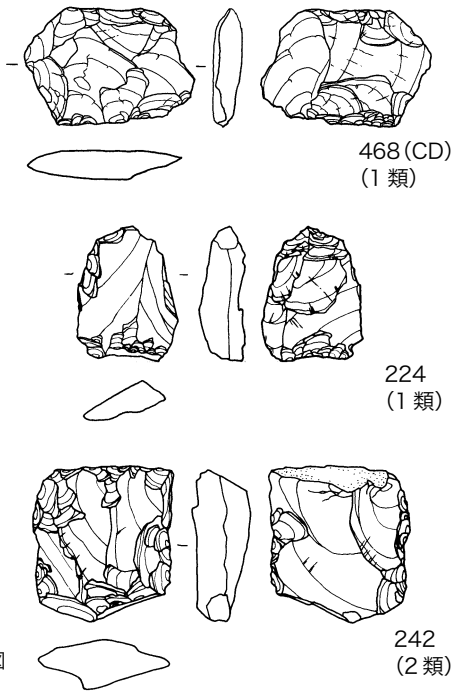
2 類：4 極 2 対の両極剥離痕を持つもの。

使用石材（第 101 図 2） 黒曜石やチャート、鉄石英など非在地石材、在地石材も含め、使用される石材の種類が多い器種である。その一方で黒色安山岩と頁岩の使用比率が高く、両石材で全体の 2/3 を占めている。両石材を類型別に見ると、2 類では頁岩の占める割合が低率となる。2 類での使用頻度の高い石材が黒色安山岩や珪質頁岩などの硬質な石材である点を考えるならば、頁岩などの剥離の進行が易い石材はその特性によって、打面転移を含む過度の加撃を伴う使用には用いられなかったものと判断されよう。

大きさ（第 101 図 3） 1 類の大きさは長さ 2 ～ 6.5cm、幅 1.5 ～ 6 cm に分布が集中するのに対し、2 類の分布は幅 2 ～ 5.5cm に収縮しており、長幅差が少なくなる傾向が認められる。

分布（第 101 図 4） 出土位置の内訳は、住居跡出土が 3 点、土坑出土が 9 点、配石遺構出土が 1 点、包含層出土が 98 点となっている。出土分布では 1・2 類ともに廃棄帯中心に分布が認められるが、1 類の分布の一部に B3･B4、E2･E3 などの住居跡群との分布の重なりが見られる。

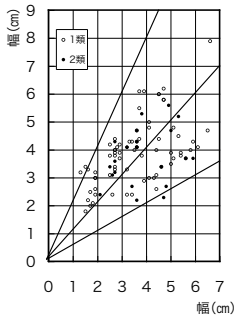
時期（第 101 図 5） 出土時期の特定された遺構から出土したものは 10 点を数える。そのうち 8 点が縄文時代後期段階のものである。



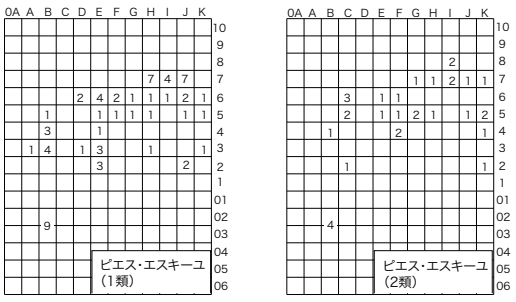
1．ピエス・エスキーユ分類図

石材名	1 類	2 類	不明	計
黒曜石	4	1		5
流紋岩	1	1		2
鉄石英	1			1
チャート	4			4
珪質頁岩	8	5		13
頁岩	20	5	3	28
凝灰岩	5	3	2	10
黒色安山岩	27	17	3	47
粗粒安山岩	1			1
計	71	32	8	111

2．ピエス・エスキーユ類型別石材組成表



3．ピエス・エスキーユ長幅分布図



4．ピエス・エスキーユ出土平面分布図

	1 類	2 類	不明	計	出土遺構
Ⅲ（大木 7b）	1			1	E3-P32
Ⅳ（大木 8a）				0	—
Ⅴ（大木 8b）				0	—
Ⅵ（沖ノ原）			1	1	第 17A 号住居跡
Ⅶ（三十稲場）	2	2		4	H3-P12・K5-P14
Ⅷ（南三十稲場）	3			3	第 3 号住居跡・J2-P1
Ⅶ - Ⅷ（後期）	1			1	第 1 号配石遺構
計	6	2	1	10	

5．時期別遺構出土数量表

第 101 図　ピエス・エスキーユ

ｆ）板状石器（図版第 728 図）

完形のみ６点が出土しているが、当該期の集落遺跡としては極端に少ない出土量といえる。

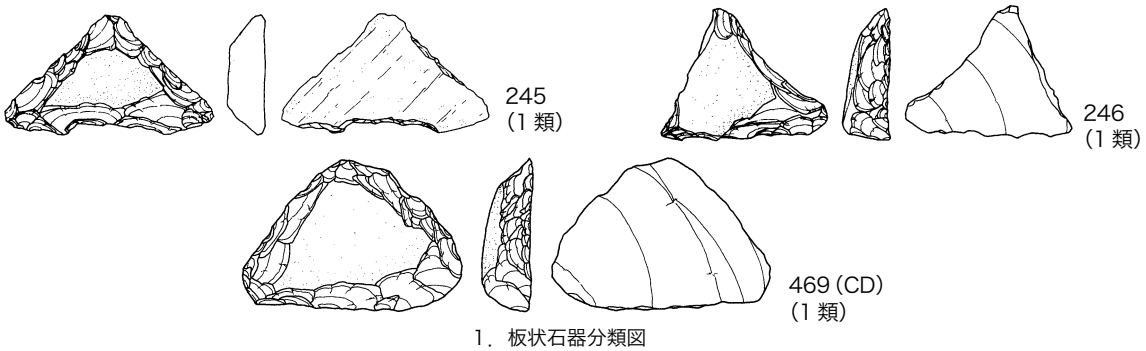
分類（第 102 図１） 本遺跡では平面形状で「三角形」を呈するもの（１類）のみが確認される（これは新潟県埋蔵文化財調査事業団が行なった平面形状の分類によるＣ類に対比される）。

使用石材（第 102 図３） 石材としては黒色安山岩、（泥質）頁岩、凝灰岩などの在地石材が主に使用されており、清水上遺跡や五丁歩遺跡において板状石器の素材として多用されている泥板岩（註 129）を使用したものは１点確認されたのみである。泥板岩は本遺跡から自然礫の状態のものが少数ながら出土しており、遺跡周辺には分布する石材ではないことから、素材として搬入された可能性が考えられる。したがって板状石器の素材となる石材には泥板岩などの節理の発達した石材を用いた搬入石材と、代用石材としての在地系石材の二者に区別して捉える必要があろう。

素材　剥片素材のものが５点、板状礫素材のものは泥板岩製の１点のみに認められる。剥片素材のうち表面に自然面を残すものが３点含まれており、その３点すべてが「脚部に打面側が位置するもの」(246) に識別される。こうした素材のあり方は、黒色安山岩、頁岩、凝灰岩の在地系石材に認められており、在地石材１における板状石器の特徴的な素材のあり方を示すものである可能性が高い。

大きさ（第 102 図２・３） 長さ４～５cm、幅 4.5 ～６cm と長さ６～７cm、幅７～８cm の範囲に纏まるものの、４cm 以下の小形のものは見られなかった。

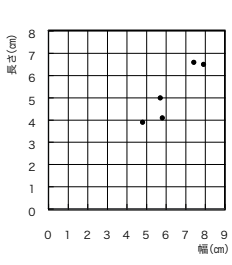
時期と分布（第 102 図５） 遺構からの出土は確認されなかった。分布は６・７グリッドラインに集中しており、すべて廃棄帯の上層からの出土である。



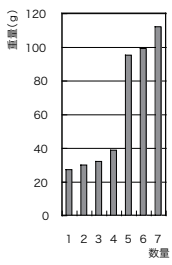
1．板状石器分類図

	黒色安山岩	頁岩	粗粒安山岩	凝灰岩	泥板岩	計
完形	2	1	1	1	1	6
欠損	0	0	0	0	0	0
計	2	1	1	1	1	6

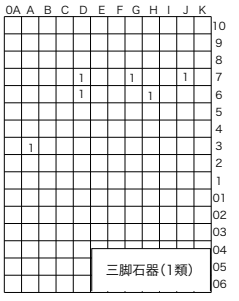
2．板状石器石材組成表



3．板状石器長幅分布図



4．板状石器重量分布図



5．板状石器出土平面分布図

第 102 図　板状石器

g）三脚石器（図版第 728 図）

完形品、欠損品含め、6点出土した。板状石器と同様非常に少ない出土数といえる。

分類（第 103 図 1） 平面形状が「脚部を結ぶ辺が内湾する三角形を呈するもの」（1類）のみ認められている。

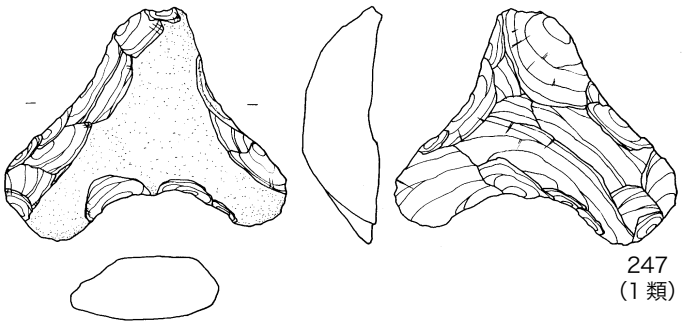
使用石材（第 103 図 2） 在地系石材とした黒色安山岩、頁岩、粗粒安山岩が用いられており、そのうち黒色安山岩を素材とするものが3点と半数を占めている。

欠損状況（第 103 図 2） 完形品が3点認められる。略完形のもの1点を含め、脚部欠損が3点と低い残存率を占める。欠損のあり方として、脚部表面または裏面からの衝撃によって折れた例（2点)、脚部先端に衝撃剥離が認められるものが（1点）認められる。

素材 裏面は二次加工が施されているため主要剥離面の観察は困難だが、石器表面の観察から素材の形状に関してある程度までは把握が可能と考えられる。表面に礫面を有するものが2点、主剥離面を有するものが3点確認された。板状石器が礫面の平坦な部分を器面に残すのに対し、三脚石器には礫面または剥離面のカーブなど、緩やかに屈曲した部分を石器表面に残すものが多く認められる。このことから反りを持った側面観が三脚石器の素材として志向されていたことが窺える。

大きさ（第 103 図 3・4） 完形品が3点と少量であるため、大きさは長幅分布図に加え、残存率の高い長辺幅の分布図を用意し、本器種の大きさの比較資料とした。器幅の分布から4～6.5cm が概ね一つの纏まりと判断される。

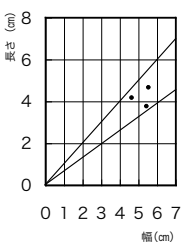
時期と分布（第 103 図 5） 板状石器同様、遺構出土からの出土は認められず、すべて包含層からの出土である。出土が廃棄帯に集中する傾向が見られる（註 130)。



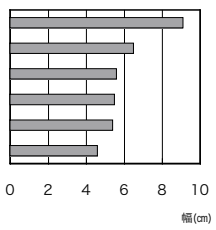
1. 三脚石器分類図

	黒色安山岩	頁岩	粗粒安山岩	泥板岩	凝灰岩	計
完形	1	0	1	0	1	3
略完形	1	0	0	0	0	1
脚部欠損	1	0	0	0	1	3
計	3	0	1	0	2	7

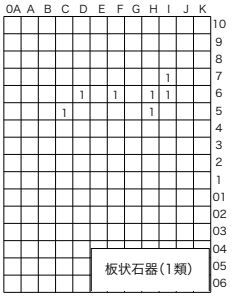
2. 三脚石器石材数量表



3. 三脚石器長幅分布図



4. 三脚石器重量分布図



5. 三脚石器出土平面分布図

第 103 図　三脚石器

h）打製石斧（図版第 729 図～第 733 図）

破片･欠損資料含め 1,937 点出土し、そのうち完形資料は 721 点を数える。2 個体 4 点が接合しているが、接合作業は十分に行なっていないため、実際の個体数としては完形、欠損資料を併せた 1,099 点程度と推察される。類型別では A1・2 類（直刃片刃打製石斧）（註 131）の 547 点、B1 類（関東地方に多出する両面加工の「打製石斧」）の 780 点に数量が多く、縄文時代中期における当該地域の打製石斧の様相を示すものと考えられる。他に分類として抽出できなかったものに打製石斧の素材や未成品に位置付けられそうな資料が多数検出されており、遺跡内において製作された可能性が高い（註 132）。

分類（第 104 図 1） 片面加工（A類）と両面加工（B類）のものに二大別し、さらに成形・調整加工による細別を試みた。また、縄文時代後期に見られるC類（「分銅型」）（註 133）やD類（篦状石器に近似するもの）が確認されており、形状や二次加工から区別される。抉りを有するものの中で両側縁に対し特に入念な敲打調整が認められるものをC類、刃部に薄形細部調整が連続するものをD類とした。

A類：片面からの急角度の剥離によって側縁加工を行なうもの。裏面の二次加工は基本的には施されないが、バルブの除去など裏面に部分的な二次加工のあるものも含む。基部横断面形が台形または、半円形状に成形される。

A 1 類：厚手の剥片を素材とし、大型で深い剥離によって側縁加工が施されるもの。

A 2 類：薄手の剥片を素材とし、浅い剥離または階段状剥離によって側縁部加工が施されるもの。

B類：側面方向もしくは表裏面からの両面調整によって成形されるもの。表裏面と側縁部に対する二次加工によって細分される。

B 1 類：両面に浅角度の剥離が施されるもののうち、側縁部を調整加工によって成形されるもの。五丁歩遺跡の D2 類や関東地方で多出する打製石斧に近似するものである（註 134）。

B 2 類：長さに対し比較的厚手の剥片を素材として、片面または両面の一方の側縁に対し急角度の大型剥離によって成形されるもの。基部横断面形は菱形あるいは略三角形状を呈するものが多い。五丁歩遺跡の C 類に近似するものである（註 135）。

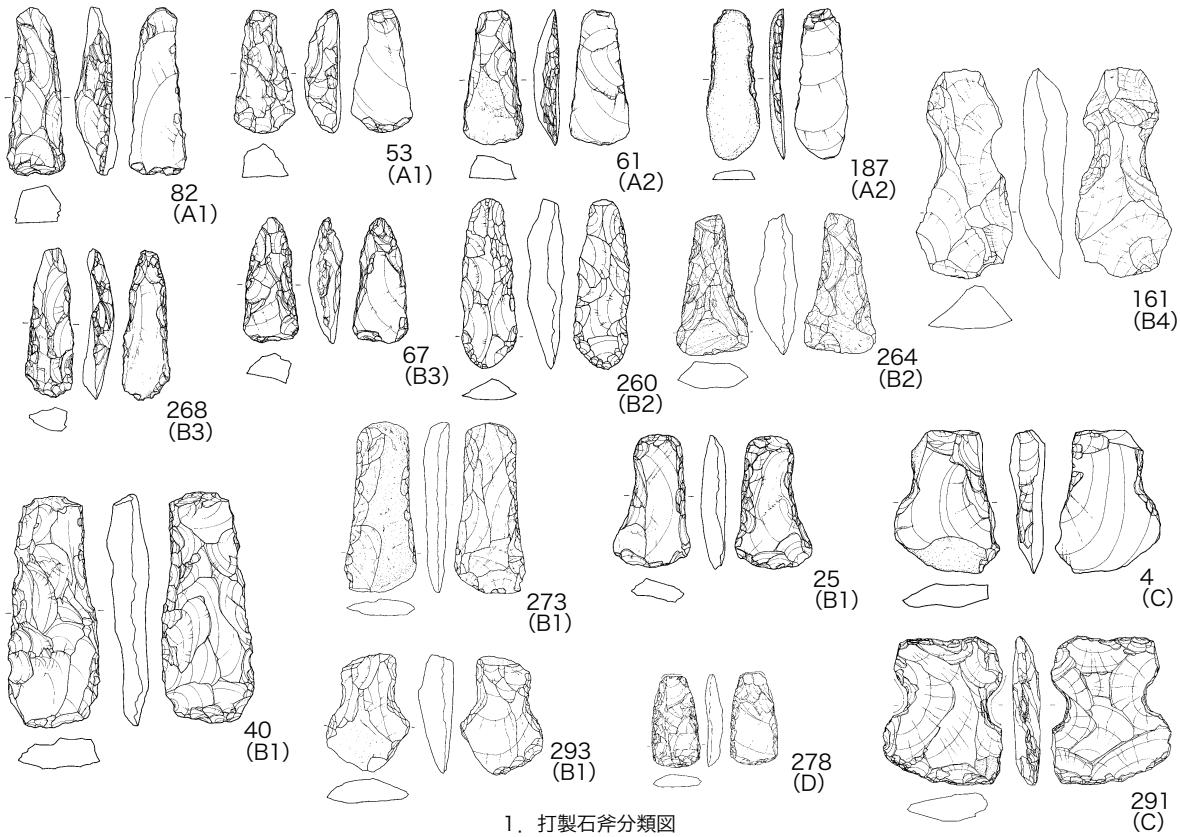
B 3 類：厚手の剥片を素材として両面からの急角度の剥離によって成形されるもの。断面形が歪三角形、歪菱形などの形状を呈する。急角度の剥離による成形が基本になるが、浅角度の剥離を一部伴うものもある。五丁歩遺跡の D1 類に近似するものである。

B 4 類：両面からの浅角度の剥離が施されるもののうち、側縁部に調整を施さないもの。

C類：分銅型打製石斧。

D類：篦状石器に近似するもの。

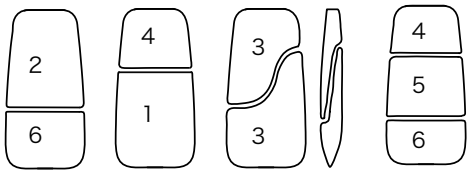
使用石材（第 104 図 2） 黒色安山岩と頁岩が極めて高い使用率を示しており、粗粒安山岩と凝灰岩がそれに次ぐ使用頻度となる。その他、珪質頁岩、流紋岩やホルンフェルス、閃緑岩、斑レイ岩なども少量ながら使用されているが、選択されている石材からは必ずしも鋭い刃部を必要とする石器ではないことが理解される。したがって、黒色安山岩と頁岩が多用されるのもおそらくはその機能性よりも製作と入手の利便性によるものが大きいことが考えられる。類型別に石材使用内訳をみると、A1・B3 類での使用率が高い黒色安山岩に対し、A2・B1・B2 類では頁岩がそれを上回る状況を呈している。このことは各類型に求められる二次加工または素材の作出に石材の性質が大きく関わっていることが予想される。



1．打製石斧分類図

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	C	D	不明	計
黒色安山岩	90	119		161	147	24	13	3	2		559
頁岩	43	223		445	190	13	12	10	1		937
凝灰岩	5	26		98	94	8	3				234
粗粒安山岩	14	23		67	40	2	1				147
珪質頁岩	1	0		3	8				2		12
緑色岩				1		1					2
その他	2	1		5	4			2			14
計	155	392		780	483	48	29	12	5		1902

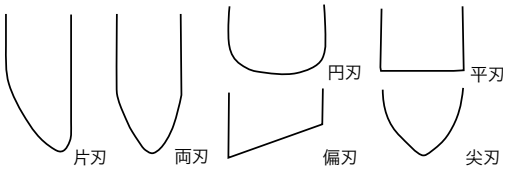
2．石材組成表



3．欠損部位分類模式図

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	C	D	不明	計
1（完形）	91	201		231	158	17	12	7	4		721
2（基部欠損）	14	22		41	15	3	3				98
3（刃部欠損）	20	66		107	73	6	5	2	1		280
4（-　　）	2	7		7	8		1	1			26
5（基部破片）	19	48		175	131	10	3	3			389
6（着柄部破片）	2	23		85	39	7	2				158
7（刃部破片）	4	22		129	53	4	3	2			217
不明		3		5	6	1					15
計	152	392		780	483	48	29	15	5		1902

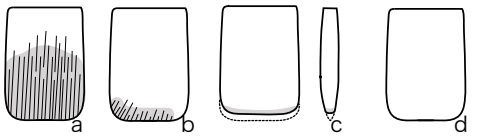
4．部位別出土数量表



5．刃部形態分類模式図

		A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	C	D	不明	計
断面	片刃	77	161	4	47	59	7	5	3	1	9	373
	両刃	18	60		205	104	11	12	1	2	8	421
平面	円刃	26	103	2	144	93	7	12	4	0	13	404
	直刃	21	51	1	68	37	1	4		3	2	188
	偏刃	6	21	1	15	16	3					62
	尖刃	2	7		6	6	2					23
計		150	403	8	485	315	31	33	8	6	32	1471

6．刃部形態別数量表



7．使用痕分類模式図

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	C	D	不明	計
使用痕 a	9	38		55	16	1	1	1		4	125
使用痕 b	1	3		16	6		2				28
使用痕 c	8	15		8	8	1				4	44
使用痕 d				4							4
計	18	56	0	83	30	2	3	1	0	8	201

8．類型別使用痕数量表

	頁岩	黒色安山岩	凝灰岩	粗粒安山岩	流紋岩	計
使用痕 a	105	6	11	2	1	125
使用痕 b	22	2	2	2		28
使用痕 c	33	7	2	2		44
使用痕 d	4					4
計	164	15	15	6	1	201

9．石材使用痕数量表

第 104 図　打製石斧（1）

欠損状況（第 104 図３・４） 基部破片（322 点）、刃部欠損（194 点）、刃部破片（191 点）の順に多く、基部破片の数量が多いのは装着されて使用されたことを示すものといえる。また基部破片の数量に対し、基部欠損資料が 98 点と少量の出土であるのは基部欠損後に再生利用されたためと考えられる。基部破片の数量は類型別でも同様な傾向が見られるが、とりわけＢ１類の欠損率の高いことが目立つ。器厚の薄さが一因とすることもできるが、器厚の比較的薄いＡ２類の欠損率と比較した場合、素材の耐久性以外に要因があった可能性が考えられる。

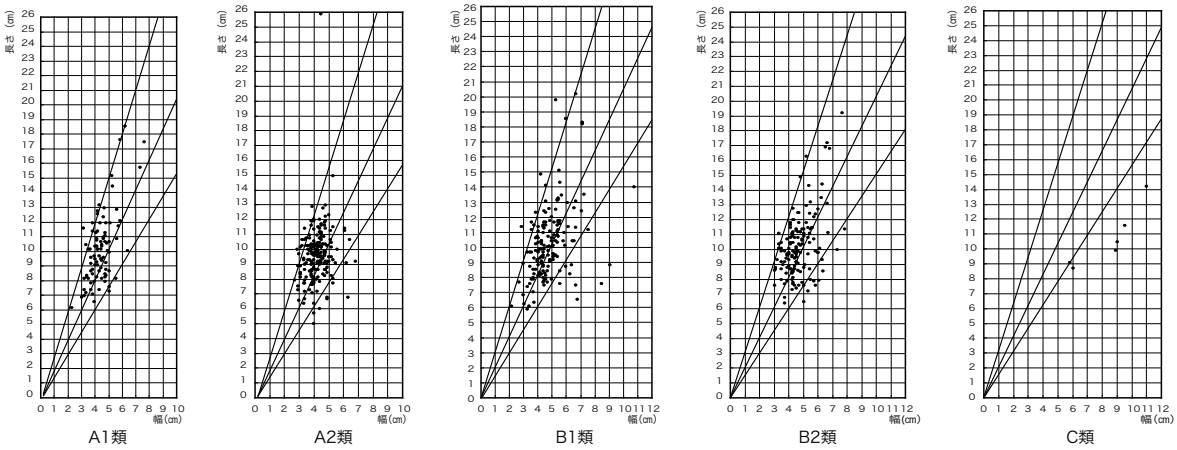
刃部形状（第 104 図５・６） 平面形状と縦断面形状から分類される。類型別に数量の多いもので比較すると、A1 類では片刃円刃（20 点）、片刃直刃（17 点）が多く、A2 類では片刃円刃（81 点）、B1 類では両刃円刃（112 点）、B2 類では両刃円刃（59 点）と片刃円刃（32 点）となる。A類:片刃と B1 類:両刃、が極めて対称的な刃部形状を有するものものといえるが、これは B1 類が平坦剥離による両面加工を全面に施すことで成形されるのに対し、A類は急角度による片面加工を全面に施すことによって成形するため、両者の刃部形状での差異は製作方法が異なることによる影響が高いと考えられる。

使用痕（第 104 図７・８・９） 着柄部や刃部に観察される線状痕や光沢、稜上の潰れなどで、機能部位との関係から使用に伴う痕跡と考えられる。使用痕ａは一般に土掘の際に見られる痕跡（註 136）と考えられ、ほぼすべての類型に見られる本器種に特徴的な使用痕跡である。また使用痕ｂも前述ａと同様な線状痕類型別の残存状況を示していることから、使用痕の累積度合の差など目的自体それほど異なるものではないと考えられる。一方、対象物との衝撃によって生じると考えられる使用痕ｃの類型別の残存状況は前記ａ・ｂに比して明らかに異なった数量比を示しており、A1・A2・B2・C類に比較的高い数値を示す。ｄ（基部・着柄部に光沢を有するもの）は B1 類のみ認められた。次に石材別に使用痕の顕在化数を見ると、頁岩は確認例の 82%を占める。他に、凝灰岩と粗粒安山岩は使用痕跡 21 点と少数だが出土点数の割合から顕在化する比率が高い。逆に黒色安山岩は割合から使用痕跡が顕在化しにくい石材といえる。顕在化しやすい石材であっても全数量の１割程度であることから、本石器には使用痕に表われない様々な使用方法があったことが推察される。

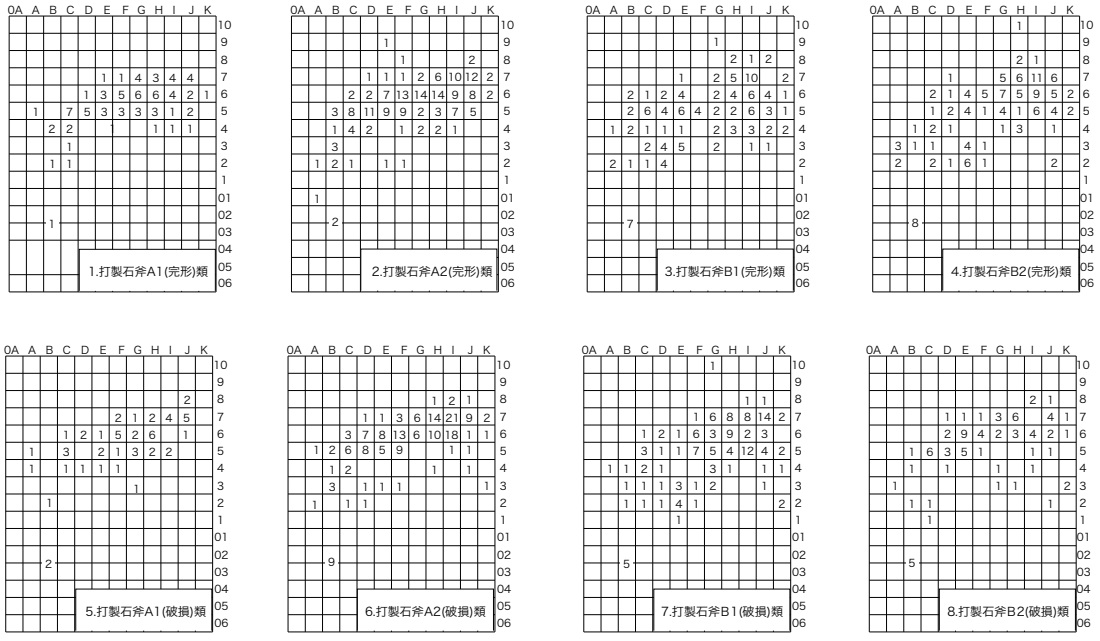
大きさ（第 105 図１） 出土資料のうち完形資料 721 点を対象とする。A・B 類型では概ね長さ６～ 14 cm、３～６cm に集中するが、細別毎に見ると以下述べるように、分布の広がりに少しずつではあるが差異が見られる。A2 類に比して A1 類の長軸方向での分布の広がりが認められる点、さらに A1 類よりも B1 類および B2 類の分布が短軸方向に分布が広がっている点が挙げられる。こうした長幅比率上の差異を生じさせる要因として、素材となる剥片の違いや、刃部幅の広い形態への志向性によって短軸方向への分布の広がりがあったこと考えられる。

分布・時期（第 105 図２・３） 出土分布の内訳は住居跡 76 点、土坑 127 点、配石遺構 14 点、包含層 1,685 点となる。類型ごとの平面分布では A1 類がほぼ廃棄帯に沿った分布を示すのに比べ、A2 類、B2 類、B1 類の順に集落内部に分布が広がる傾向が窺える。時期の特定される遺構から出土した資料 109 点について類型ごと時期別の表に纏めた。同表を見る限りでは遺物のピークはⅣ期（大木 8a 並行）、Ⅵ期（沖ノ原式）、Ⅷ期（後期前葉段階）の３時期に認められる。類型ごとの数量比では、B1 類がⅣ期で８点（32%）、Ⅵ期で 12 点（60%）、Ⅷ期 12 点（50%）とⅥ期以降高い数量比を示すのに対し、A 類はⅣ期で８点（32%）、

VI期３点（15%）、Ⅷ期５点（20%）、またB4類はⅣ期で２点（8%）、VI期・Ⅷ期０点と数量比が下がる傾向が見られることからⅤ～VI期以降、本類の様相に変化があったことが予想される。



1. 打製石斧長幅比分布図



2. 打製石斧出土平面分布図

	A1	A2	B1	B2	B3	B4	C	不明	計	出土遺構
Ⅲ（大木7b）	1	1	1					1	4	第16 B・17 B号住居跡、E3-P51
Ⅳ（大木8a）	3	5	8	4	3	2			25	第10・13・14・14B号住居跡、D2-P9、E3-P22、E3-P51、F4-P5、I4-P74
Ⅴ（大木8b）		2	8	3	1				14	第9・17C号住居、
VI（沖ノ原）	1	2	12	4				1	20	第7・17A・21号住居跡、B3-P6、E1-P2、E3-P3、E4-P29、F5-P7、H4-P25、H5-P16、K5-P48
Ⅶ（三十稲場）	1	1	6						8	E2-P22、I4-P85、J4-P96、K5-P14
Ⅷ（南三十稲場）	2	3	12	1			6		24	第3号住居跡、I4-P9、I4-P84・P86、J3-P7・P40、K2-P24、K4-P5
Ⅶ-Ⅷ（後期）			7	6	1				14	第1号配石遺構、J4-P102、K3-P4
計	8	14	54	18	5	2	6	2	109	

3. 時期別出土数量表

第105図　打製石斧（2）

ｉ）不定形石器（図版第 734 図～第 743 図）

本遺跡において当該器種に分類される石器は 2,171 点（95,776.7g）である。これは、石器全体の 35.8% にあたり、これまで報告されてきた縄文時代遺跡の石器組成のあり方と同様に他器種と比べ非常に多い傾向を示している。いわゆる不定形石器は、二次加工あるいは微細剥離痕が認められる剥片の内、定形石器に含まれないものを抽出したもので、多様な石器形態･加工部位（刃部）を持つ一群である（註 137)。本遺跡についても同様で、基本的には県内でこれまで報告されてきたあり方と同様の立場からこれを扱うこととする（註 138)。また、「従来不定形石器と呼ばれる一群の中に、かなり定形的な石器として抽出される場合があり、…（略)」といった指摘（註 139）にあるように、これまでなされてきた主に「刃部形態」による分類に加え、石器そのものの形態による分類を付け加えることとした。

形態分類　不定形石器は、以下の基準によって形態分類した（第 106･107 図)。また、主に加工のあり方（刃部形態）による分類は、新潟県教育委員会による分類にならい対比ができるようにした（註 140）（第 108 図)。

① 素材剥片形状による分類 … 形態記号の先頭に付した。

Ⅰ．縦長剥片（長さ：幅＝ 1.5：1 以上)、あるいは折損などによって全体形状が読み取れないながらもこれに準ずると推測されるもの

Ⅱ．剥片・横長剥片（長さ：幅＝ 1.5：1 未満)、あるいは折損などによって全体形状が読み取れないながらもこれに準ずると推測されるもの

② 加工部位による分類 … 形態記号で①の次に付した。

ａ．素材剥片の末端部あるいは末端辺に二次加工または微細剥離痕が認められるもの

ｂ．素材剥片の打面部あるいはその周囲に二次加工または微細剥離痕が認められるもの

ｃ．素材剥片の左右両側縁に二次加工または微細剥離痕が認められるもの

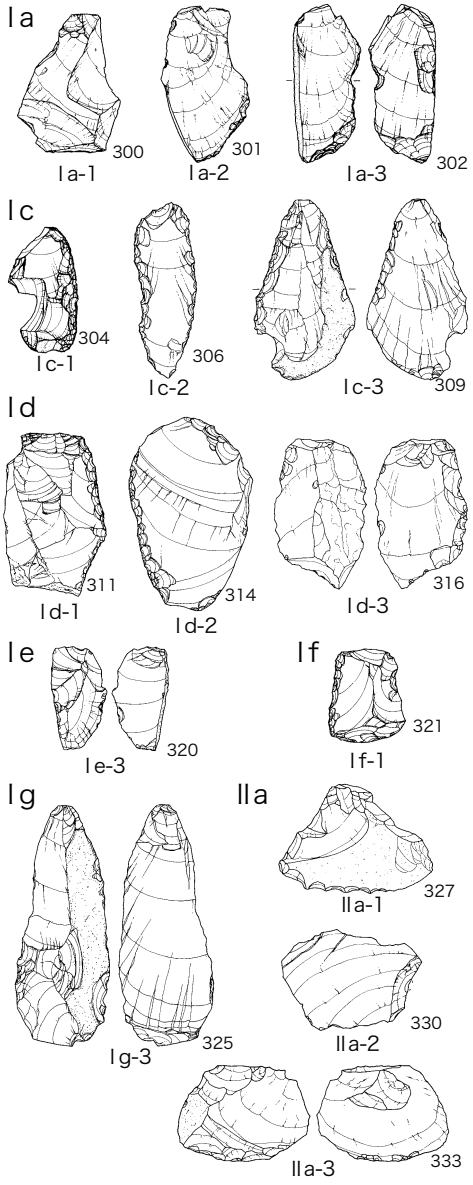
ｄ．素材剥片の左右の片側縁に二次加工または微細剥離痕が認められるもの

ｅ．素材剥片の打面部および末端部に二次加工または微細剥離痕が認められるもの

ｆ．素材剥片の左右両側縁および末端部に二次加工または微細剥離痕が認められる、あるいは両側縁の加工が末端部で交差するもの（連続的な加工を端部で交差させる「石錐」を除く）

ｇ．素材剥片の左右両側縁および打面部に二次加工または微細剥離痕が認められるもの

ｈ．素材剥片の打面部あるいは末端部と左右の片側縁に二



第 106 図　不定形石器の形態分類（１）

次加工または微細剥離痕が認められるもの

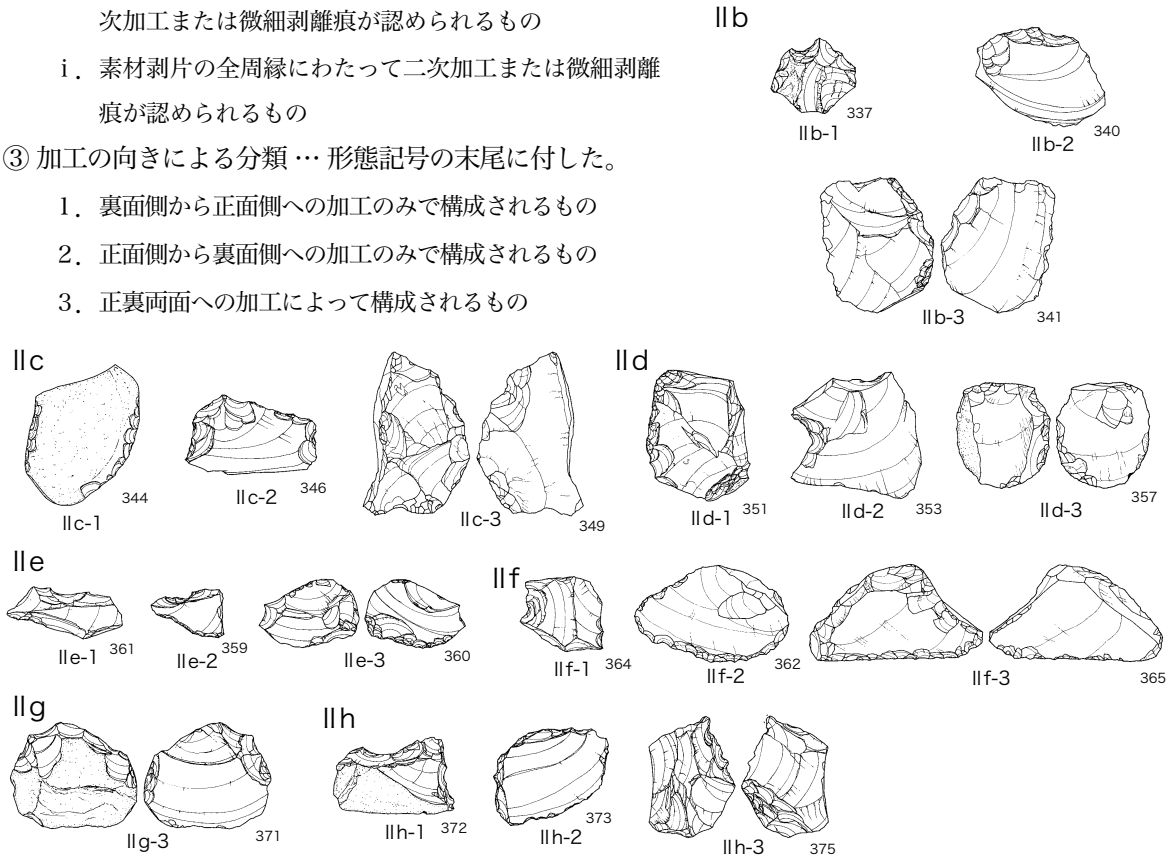
ⅰ．素材剥片の全周縁にわたって二次加工または微細剥離痕が認められるもの

③ 加工の向きによる分類 … 形態記号の末尾に付した。

1．裏面側から正面側への加工のみで構成されるもの

2．正面側から裏面側への加工のみで構成されるもの

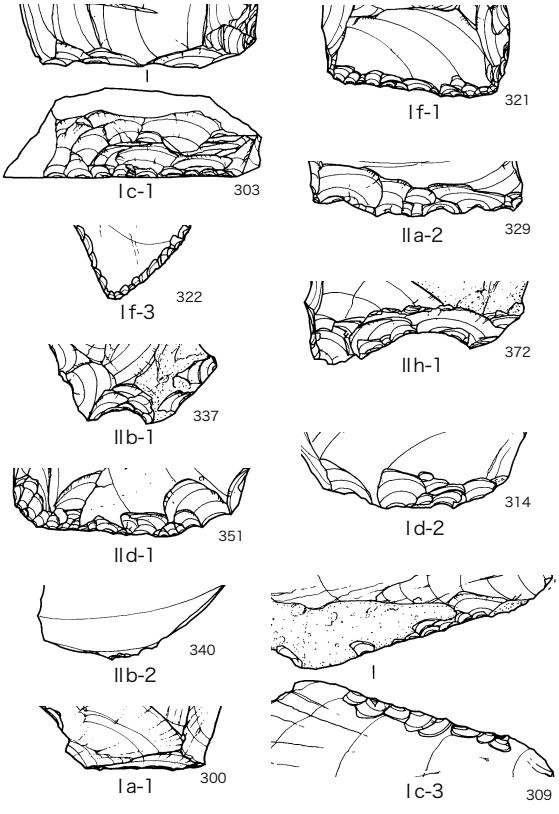
3．正裏両面への加工によって構成されるもの



第 107 図　不定形石器の形態分類（2）

分類	刃部形状			刃部ライン	素材	二次加工部位	細分類
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離			——	縦長	側縁と端部	A1類
					横長	片側縁と底縁	A2類
B類	スクレイパー 小型・急角度・連続剥離			外彎状	縦長	片側縁と端部	B1類
					横長	底　縁	B2類
C類	鋸歯縁石器 大型・中型・急角度・鋸歯状剥離			直線状	縦長・厚手	片側縁	C1類
					横長・厚手	底　縁	
				内彎状	縦長・厚手	片側縁	C2類
					横長・厚手	底　縁	
				外彎状	縦長・厚手	片側縁	C3類
					横長・厚手	底　縁	
	スクレイパーと鋸歯縁石器の複合形				厚手	——	C4類
D類	鋭利な尖端部をもつ石器	大型・急角度剥離		直線状	厚手	片側縁 （一方の側縁は古い剥離面や切断面等を利用する）	D1類
				内彎状	厚手		
		大型・浅角度剥離		直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	D2類
						両側縁	
				内彎状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	
						両側縁	
		小型剥離		直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ） 両側縁	D3類
				内彎状			
				直線状	薄手	両側縁	石錐
				内彎状			
E類	抉入石器（ノッチ）	大ノッチ	大型・中型・急角度剥離	内彎状	縦長・厚手	側　縁	E1類
					横長・厚手	底　縁	
			大型・中型・浅角度剥離		縦長	側　縁	
					横長	底　縁	
		小ノッチ	中型・急角度剥離	内彎状	縦長	側　縁	E2類
					横長	側縁・底縁	
			小型剥離		縦長	側　縁	
					横長	側縁・底縁	
F類	中型・小型・急角度・不連続剥離			——	縦長	側縁	F1類
				端部に丸味	縦長	側縁と端部	F2類
				——	横長	底　縁	F3類
						側　縁	
						底縁と側縁	
G類	大型・中型・浅角度剥離			直線状	縦長	側　縁	G 類
					横長	底　縁	
				外彎状	縦長	側　縁	
					横長	底　縁	
H類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕） 小型・浅角度剥離			外彎状	背面は自然面 横長	底　縁	H 類
I類	端部に小型・連続剥離			——	縦長・薄手	端　部	I 類
					横長・薄手		
J類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕）			端部に丸味	縦長	側　縁	J 類
					横長	側縁・底縁	
K類	両面加工（調整）石器 （刃部平面形は波状、側面観はジグザグ状）			外彎状	薄手		K 類

＊ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したものが多い。

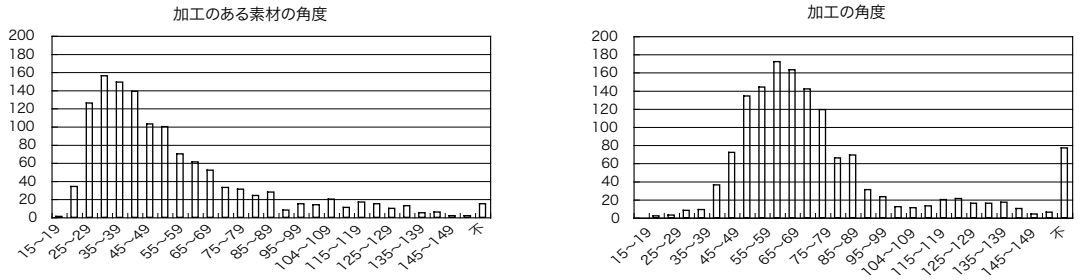


第 108 図　不定形石器の刃部形態による分類

各形態の特徴　まず、素材形状としてはⅠ類 334 点（15.4%）に対しⅡ類 1,609 点（74.1%）、分類不可 228 点（10.5%）という結果が得られた。長幅比 1.5：1 未満の剥片・横長剥片類（不定形剥片）が圧倒的に利用される傾向がおおまかに捉えられるが、これをもって単に石器として適用する際の指向性を示しているとはいい難い。すなわち、石核形態からシステム化された縦長剥片剥離技術を見出しがたい状況の中では、素材剥片剥離技術そのもののあり方に大きく依存された結果であると言い換えられよう。加工部位とその方向に関しては、d 類が最も多く 501 点（Ⅰ d1=47 点，Ⅰ d2=31 点，Ⅰ d3=71 点，Ⅱ d1=63 点，Ⅱ d2=65 点，Ⅱ d3=224 点）、次いで f 類 394 点（Ⅰ f1=3 点，Ⅰ f2=0 点，Ⅰ f3=25 点，Ⅱ f1=28 点，Ⅱ f2=19 点，Ⅱ f3=319 点）、a 類 339 点（Ⅰ a1=4 点，Ⅰ a2=3 点，Ⅰ a3=5 点，Ⅱ a1=132 点，Ⅱ a2=74 点，Ⅱ a3=121 点）となる。基本的には打面部を除く側縁部や末端部に二次加工あるいは微細剥離痕が認められるものが多いといえる。これらの二次加工あるいは微細剥離痕の認められる縁辺は、推測される刃先角がおおまかに 40 ～ 44°付近をピークとする傾向を示している。これに対し、二次加工あるいは微細剥離痕の刃先角は、55 ～ 69°付近をピークとする傾向を示している。刃部形態別には A・B 類が 70-89°、C 類が 70 ～ 79°、E 類が 60 ～ 79°、G・I・K 類が 60-69°、F・H 類が 50-69°にそれぞれピークを示す傾向が認められ、大きくは A・B ≧ C ≧ E ≧ G・I・K ≧ F・H の数式が見出せる。すなわち、微細な剥離を持つものほど刃先角が小さい値を示し、小型･中型の連続する剥離ほど大きい値を示していることになる。素材縁辺部刃先角との関係を考慮すると、① 刃先角 40°強の縁辺部を使用する→ ② 使用痕･微細剥離痕の形成→ ③ 刃部再生（小型剥離／ 55 ～ 69°）→ ④ 使用痕･微細剥離痕の形成→ ⑤ 刃部再生（中型剥離／ 70 ～ 89°）の推移を推測できる。つまり、不定形石器の石器形態のばらつきは、素材剥片の保有する縁辺の角度に規定され、適当な形状の剥片と適当な縁辺部を選択している結果に過ぎず、刃部形態のばらつきは上の①～⑤のどの段階で廃棄されたものであるのかに大きく左右されると考えることができる（註 141）。

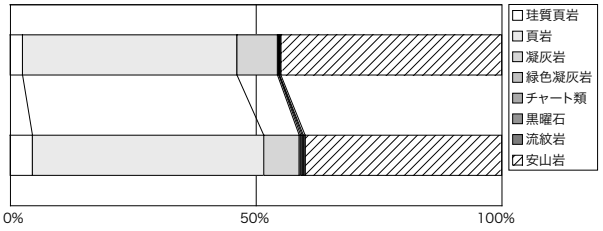
			珪質頁岩	頁岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	チャート他	黒曜石	流紋岩	安山岩	Total
Ⅰ	a	1	1	1	0	0	0	0	0	2	4
Ⅰ	a	2	0	0	0	0	0	0	0	3	3
Ⅰ	a	3	1	2	0	0	0	0	0	2	5
Ⅰ	b	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰ	b	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰ	b	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰ	c	1	1	14	4	0	0	0	0	11	30
Ⅰ	c	2	1	8	0	0	0	0	0	6	15
Ⅰ	c	3	3	46	8	0	0	0	0	26	83
Ⅰ	d	1	2	17	2	1	0	0	0	25	47
Ⅰ	d	2	1	13	1	0	0	0	0	16	31
Ⅰ	d	3	5	23	7	0	0	0	0	36	71
Ⅰ	e	1	0	2	0	0	0	0	0	0	2
Ⅰ	e	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰ	e	3	0	2	0	0	0	0	0	0	2
Ⅰ	f	1	1	0	1	0	0	0	0	1	3
Ⅰ	f	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰ	f	3	0	10	5	0	0	1	0	9	25
Ⅰ	g	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
Ⅰ	g	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰ	g	3	0	3	0	0	0	0	0	2	5
Ⅰ	h	1	0	0	1	0	0	0	0	1	2
Ⅰ	h	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰ	h	3	0	3	0	0	0	0	0	2	5
Ⅰ	i	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰ	i	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰ	i	3	0	1	0	0	0	0	0	1	2
Ⅱ	a	1	6	55	4	1	0	0	1	65	132
Ⅱ	a	2	4	30	8	0	0	0	0	32	74
Ⅱ	a	3	9	46	12	0	0	0	1	53	121
Ⅱ	b	1	0	7	0	0	0	0	0	5	12
Ⅱ	b	2	1	2	0	0	0	0	0	1	4
Ⅱ	b	3	0	3	0	0	0	0	0	3	6
Ⅱ	c	1	0	11	1	0	0	0	0	8	20
Ⅱ	c	2	1	8	0	0	0	0	0	4	13
Ⅱ	c	3	3	35	9	1	0	0	0	38	86
Ⅱ	d	1	3	26	6	0	0	0	1	27	63
Ⅱ	d	2	3	32	3	1	1	0	0	25	65
Ⅱ	d	3	21	101	8	2	3	1	0	88	224
Ⅱ	e	1	1	4	1	0	0	0	0	7	13
Ⅱ	e	2	0	4	0	0	0	0	0	3	7
Ⅱ	e	3	1	16	3	0	0	0	0	13	33
Ⅱ	f	1	4	12	1	0	0	0	0	11	28
Ⅱ	f	2	0	10	2	0	0	0	0	7	19
Ⅱ	f	3	5	177	17	0	2	1	2	115	319
Ⅱ	g	1	0	1	0	0	0	0	0	1	2
Ⅱ	g	2	0	6	1	0	0	0	0	0	7
Ⅱ	g	3	1	12	1	0	0	1	0	18	33
Ⅱ	h	1	1	29	9	0	0	0	0	22	61
Ⅱ	h	2	0	6	0	0	0	0	0	1	7
Ⅱ	h	3	1	74	15	0	0	0	0	66	156
Ⅱ	i	1	1	1	3	0	0	1	0	3	9
Ⅱ	i	2	0	6	0	0	0	0	0	0	6
Ⅱ	i	3	3	59	9	0	0	0	1	41	113
不明			13	104	15	0	1	0	2	67	202
Total			98	1022	157	6	7	5	8	868	2171

第 109 図　不定形石器形態別石材組成



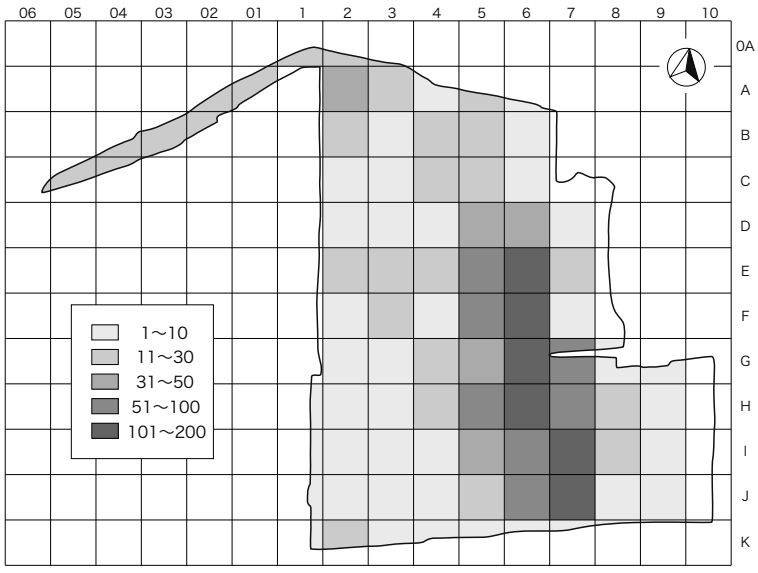
第 110 図　不定形石器の素材縁辺刃先角と加工部位の刃先角

使用石材　当該器種に用いられている石材は、大まかに頁岩系石材が 1,022 点（41,806.0g）と最も多く、これに次いで安山岩系石材 868 点（43,035.4g）、凝灰岩系石材 163 点（8,127.6g）、珪質頁岩 98 点（2,395.9g）、流紋岩系石材 8 点（271.8g）、チャート類 7 点（105.3g）、黒曜石 5 点（34.7g）の内訳となる。基本的には、本地域においてより豊富に存在する石材ほど数量・重量の上で圧倒し、より希少な石材ほど漸減していく傾向が認められる。頁岩は清津川中流域、安山岩は志久見川中上流域、凝灰岩中津川に主体的に組成する石器石材として知られる。1 点あたりの重量では、頁岩は約 40.9g/ 点、安山岩は 49.6g/ 点、凝灰岩は 49.9g/ 点となり、全使用石材のうちで最も大きな値を示す部類となる。これに対し、信濃川とその支流において希少な存在のチャートと組成が皆無な黒曜石は、それぞれ 15.0g/ 点・6.9g/ 点と非常に小さな値となる。チャートは信濃川本流の河川礫として組成する石材ではあるが、現実的にほとんどが直径 2~3cm 以下の小型礫であり、石器石材としては適当でない。黒曜石は、剥片の産地推定の結果が星ヶ塔・和田峠〔小深沢 / アゼリア〕となっており、信州との結びつきの強い遠隔地系石材であるといえる。これらの中間的な様相を示す珪質頁岩と流紋岩は、それぞれ 24.4g/ 点・34.0g/ 点となる。珪質頁岩は、津南町による継続的石材調査（註 142）において清津川支流の釜川上流部に注ぐ芝倉沢から凝灰岩の中に含まれる路頭が発見されている。また、流紋岩系石材は、湯沢町七谷切の秋葉山に流紋岩、中里村清津峡の頁岩露頭に隣接してデイサイトが認められる。いずれも地域において主体的な石器石材とはいい難いものである。このことから点数・重量的に、主体的在地系石材＞非主体的在地系石材＞希少石材＞遠隔地系石材となることが保証される。



第 111 図　不定形石器の石材利用

分布状況　全体的に「廃棄帯」からの出土が圧倒的に多い。遺構分布域に関しても分布は認められるが、ほとんどがドット処理されていないものであり、遺構覆土上層に廃棄されたものであると考えられる。この意味で、ほとんどのものが石器のライフヒストリーの中で最終形態を示しているとすることができる。形態・刃部形態による分布の偏在性は認められなかった。また、石材別に見た場合、点数の多い頁岩・安山岩は調査区全域から出土してはいるが、やはり特に点数的に集中するのは「廃棄帯」の E6 から I6 グリッドである。これ以外のグリッドに関しては、上に述べたとおり、ほとんどがドット処理されていないものである。そのほかの石材に関しては、点数的に少ないため保証はできないが、基本的に主体となる石材 2 種と同様、「廃棄帯」からの出土事例が多く、分布についての偏在性を指摘することはできない（第 112 図）。



第 112 図　不定形石器の分布

ｊ）磨製石斧（図版第 705 図・第 709 図・第 712 図・第 718 図～第 721 図・第 744 図～第 746 図）

完形･破片･砕片を合わせて 230 点が出土した。そのうち 222 点が「定角式」磨製石斧(註 143)(以下「定角式」とする）であり、出土磨製石斧の大多数を占める。本遺跡からは磨製石斧の未成品と見られる遺物の出土は認められず、また使用石材として最も数量の多い蛇紋岩製の剥片は 1 点のみの出土であったことから本器種が遺跡内で製作された可能性は極めて低いものと考えられる。

分類（第 113 図 1） 分類は「定角式」をＡ類とし、それ以外（８点）をＢ類とした。本類は柄に装着して使用される器種と考えられるため、装着部位とされる基部の形状は石斧柄のソケットの形状と密接な繋がりが予想される。従って、基部の成形を入念に行なうＡ類については基部の横断面形状について細分を行なった。これに関しては「小形定角式磨製石斧」として区別される 5cm 以下（註 144）のものについても、大・中形磨製石斧と形態的な類似性を持つものが多いことから同様な細分を試みることとした。また、Ｂ類は少数ながら研磨成形のあり方によって３つに細分され、「定角式」とは製作技術的にも形態的にも関連性の強いものが認められる（註 145)。

Ａ類：「定角式」磨製石斧としたもの。断面形状から３細分される。

Ａ１類：表裏面と側面の４辺が比較的平坦に仕上げられることによって、横断面形が長方形となるもの。

Ａ２類：表裏面と側辺の境に緩いカーブが作り出されることによって、断面形が隅丸長方形となるもの。

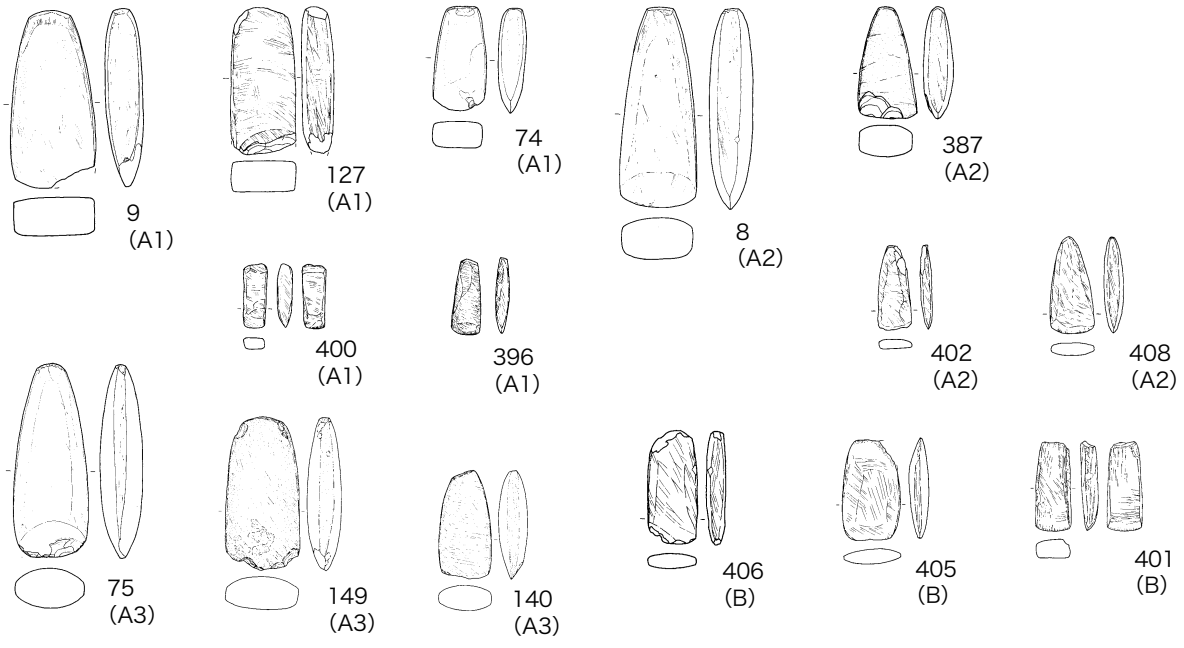
Ａ３類：断面形が角丸長方形となるもの。

Ｂ類：定形式以外の磨製石斧を使宜的に分類した。

Ｂ１類：擦切痕が認められるもの。

Ｂ２類：小形扁平礫を素材として研磨成形されたもの。

Ｂ３類」敲打と研磨によって成形される。Ａ３類と近似するが側面の側辺が形成されない点で異なる。



第 113 図　磨製石斧分類図

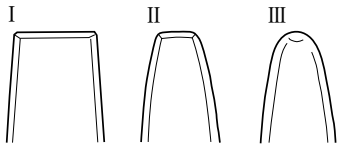
使用石材（第 114 図 1） 磨製石斧の使用石材には非在地石材の蛇紋岩類が最も多く、次いで緑色凝灰岩、斑レイ岩などの在地石材が一定数認められる。他にチャートやアプライトなどが少数ながら使用される。石材別に各類型の使用頻度をみると、蛇紋岩類は全類型に使用される中で特に A1 類と小形磨製石斧に使用頻度が高い。一方、在地石材は A3 類に多く A2 類にも半数程度が占められる。このことから小形磨製石斧以外の使用石材は断面形状において曲線と直線を基調とする両者では選択石材が異なっていたものと推察される。なお、ここで在地石材としたものが円礫や破砕礫の状態で多数出土したが、同様の石材が石皿類･磨石類･砥石にも用いられる点や出土資料中に未成品の存在が認められない点から、これらが磨製石斧の製作に伴う遺物である蓋然性は低い。むしろ在地石材を素材とした A2・A3 類は蛇紋岩製磨製石斧の補完的な存在として本遺跡外の周辺地域において製作されたと考えておきたい。

基部形態（第 114 図 2・3） 平面形状によって 3 類に分類した。全体形状では概ね Ⅰ 類が短冊形、Ⅱ・Ⅲ類が撥形に相当する。断面形状との対比では A1 類と Ⅰ・Ⅱ類、A2 類と Ⅱ類、A3 類と Ⅲ類との間に一定程度の相関性が見られるものの、過度の研磨成形を行なうことによってかかるコストを考慮した場合、基部形状と断面形状両者の共通性はそれほど強固な結びつきとは言い難い。使用石材や素材形状の差異の他、石斧柄のソケット形状に合わせて成形した結果など様々な要素により基部形態の変化が生じたことが考えられる。

使用痕（第 114 図 4） 着柄状況から推察し、刃部と基部に認められる光沢･線状痕を使用痕とした。木材加工の痕跡とされるＡ・Ｂ類が多く、Ｃ類は転用後の使用痕あるいは刃部再生の際に研磨した痕跡の可能性も考えられる。また着柄に関する痕跡（D 類）は小形、大形に確認され、基部をソケット状のものに装着して使用したことが伺える。一方、小型磨製石斧の基部に黒色付着物が観察される資料（396）が 1 点、また双刃のものが数例確認されていることから基部を柄に固定した装着や刃部が反転するような装着方法の存在が推察される。

	(大 - 中形) 磨製石斧						(小形) 磨製石斧						合計
	A1	A2	A3	B	不明	計	A1	A2	A3	B	不明	計	
蛇紋岩	21 (6)	29 (6)	1	4	30	97	7	17	1	4	2	31	128
チャート	1	0	(1)	0	0	2	0	1	1	0	0	2	4
斑レイ岩	0	9 (1)	6	0	1	17	0	0	0	0	0	0	17
輝石安山岩	0	8 (2)	2	0	1	13	0	1	0	0	0	1	14
輝緑岩	0	1	3	0	0	4	0	0	0	0	0	0	4
緑色岩類	1	11	5 (1)	3	4	25	0	1	0	1	0	2	27
片岩	0	4	2	1	1	8	0	0	2	0	0	2	10
流紋岩	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	2
不明	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	2	3
その他	2	9	5 (1)	0	4	21	0	0	0	0	0	0	21
計	26 (6)	72 (9)	24 (3)	8	41	189	8	22	4	5	2	41	230

1. 磨製石斧石材組成表



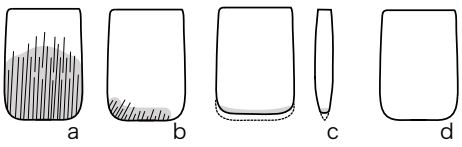
基部幅：刃部幅が 1：1.2 を境に刃部が
狭いものをⅠ類、広いものをⅡ・Ⅲ類とした。

2. 基部形態模式図

	(大 - 中形) 磨製石斧						(小形) 磨製石斧						合計
	A1	A2	A3	B	不明	計	A1	A2	A3	B	不明	計	
Ⅰ	6 (1)	9 (1)	1	2		20	3	6 (1)	1	2		13	33
Ⅱ	11 (6)	28 (4)	2 (2)	1		54	3	8				11	65
Ⅲ		5 (1)	7			13	1	3	3	1		8	21
不明	3 (5)	24 (9)	13 (2)	5	41	102	1	4		2	2	9	111
計	32	81	27	8	41	189	8	22	4	5	2	41	230

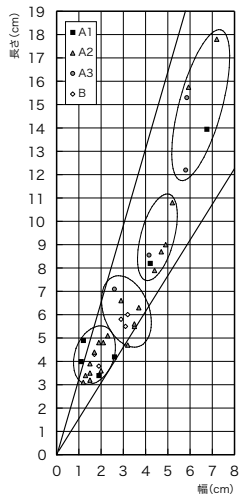
※（ ）内数字は破損等によって類型の特定が困難なものの点数

3. 基部形態別数量表

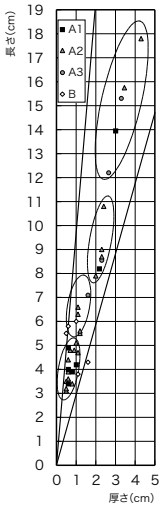


4. 使用痕模式図

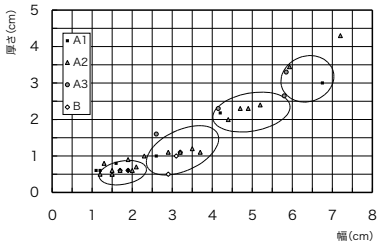
第 114 図　磨製石斧（1）



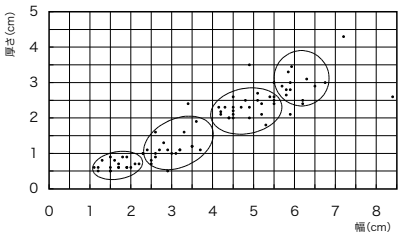
1．長幅分布図



2．長厚分布図



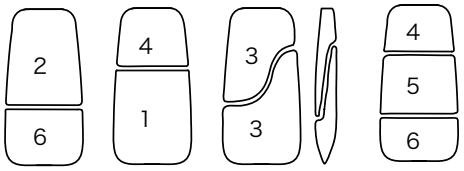
3．（完形使用）幅厚分布図



4．（欠損）幅厚分布図

	（大・中形）磨製石斧						（小形）磨製石斧						合計
	A1	A2	A3	B	不明	計	A1	A2	A3	B	不明	計	
0（完形）	1	9	1	2		13	4	9	1	3		17	30
0（略完形）	1	3	2			6	1	2				3	9
1（基部欠損）	3	3	5	1	1	13	1	2	1	1		5	18
2（刃部欠損）	5	16	1 (1)			23	2	1	1	1		5	28
3（-）	3					3							3
4（基部破片）	4	16	5	1	1	27		7	1			8	35
5（着柄部破片）	1	3	3 (1)			8							8
6（刃部破片）	6 (5)	18 (9)	6	3	20	67		1			1	2	69
砕片	2 (1)	4	1 (1)	1	18	28							28
不明					1	1					1	1	2
計	32	81	27	8	41	189	8	22	4	5	2	41	230

5．残存部位数量表



※図中の番号は、左表の残存部位数量表の番号と対応する。

6．磨製石斧欠損状況模式図

第 115 図　磨製石斧（2）

転用　他の器種に転用された例として、打製石斧（1点）、敲石（2点）が挙げられる。また欠損した磨製石斧の基部側の切断面に敲打痕を残し、楔様に使用されたと想定されるものも2点確認されている。

大きさ（第 115 図 1 ～ 4）　長幅比の復元可能な完形・略完形品 58 点を対象として、長幅比と長厚比、幅厚比について大きさの比較を行なった。その結果、長幅比では小形：長さ 3 ～ 5cm・幅 1 ～ 2.5cm、中小形：長さ 5 ～ 7cm・幅 2 ～ 4cm、中形：長さ 7.5 ～ 10cm・幅 4 ～ 5cm、大形：10 ～ 15cm・幅 5 ～ 7cm、超大型：長さ 15cm 以上・幅 5.5 ～ 8cm に分布のピークが認められた。従来言われるように、目的に応じた様々な大きさの磨製石斧を使い分けた結果を反映しているものといえよう。一方、幅厚比分布では厚さ 2 cm・幅 4 cm の前後で大きく分布が二分する様子が見て取れる。幅厚比分布は欠損資料についても分布を見ることが可能だが、完形・略完形資料と同様な分布傾向を示している。両者の分布は特に厚さにおいて大きく離れていることから、着柄方法の差異を示している可能性が高い。

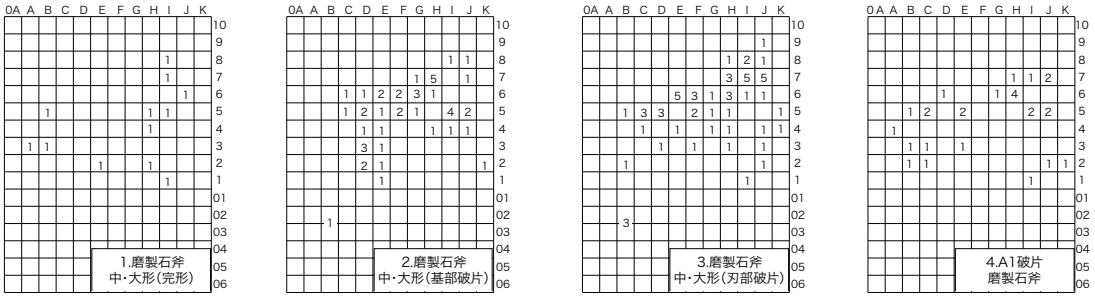
欠損状況（第 115 図 5・6）　幅厚比分布における完形・略完形資料と欠損資料との比較によって明らかなように欠損資料に多いのは中形および大形の資料であり、小形および中小形の資料での欠損例は極めて少ない。従って以下述べる内容はほぼ中・大形資料における欠損状況についてということになる。出土資料において残存部位で多いのは刃部破片（67 点）、基部破片（27 点）、刃部欠損（23 点）、完形品（13

点)、基部欠損品（13 点）の順となるが、完形品としたうちの３点は接合資料であり、基部での破損が２例、刃部での破損が１例確認される。接合資料を含め数量を纏めると、刃部での破損を示す資料が 91 点、基部での破損が 42 点存在することになる。刃部での破損を示す例が極めて多く、中･大形資料の実に半数を占めている計算になる。なお、刃部や基部での破片資料数に比して欠損資料の少ないが、これは刃部再生行為の結果を示している可能性がある。一方、刃部や基部破片資料はその大きさから転用が困難なものと考えられ、その出土位置は使用場所付近を示すものと推察される。出土資料中に刃部破片の数量が多いことは磨製石斧が集落内において使用されたことの傍証ともいえる。

成形技術　「定角式」は全面に研磨調整が施されているため、研磨以前の二次加工を判別することは困難だが、肉眼観察によって敲打成形の痕跡と判別できたものが A2 類に２点確認された。

出土状況（第 116 図１）　出土数 233 点のうち出土地点の内訳は住居跡 16 点、土坑 19 点、配石遺構２点、包含層 196 点となり、包含層、特に廃棄帯での出土が多い。部位ごとの分布では刃部や基部などの破片資料が廃棄帯に集中するのに対し、完形・略完形資料は廃棄帯での分布が比較的希薄である。こうした完形･略完形資料と破片資料の分布の差異は、廃棄する場所を意識的に変えていた結果と推測される。なお、接合関係が認められた６点３個体はいずれも隣接したグリッド間での接合であり、離れた距離での接合は認められなかった。

時期（第 116 図２）　時期の特定される遺構からの出土は 26 点が確認された。うち 11 点は類型を特定できないため類型と時期が分かるのは 15 点と数量が少ない。Ⅳ期（大木 8a 並行）以降ほぼ全時期に亘って定角式磨製石斧の出土が見られるが、類型ごとの出土傾向については時期的な偏在は認められない。



１．磨製石斧出土平面分布図

類型	(中 - 大形) 磨製石斧															(小形) 磨製石斧						計	出土遺構
	A1			A2				A3				B3	不	砕	A1			A2				
時期	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明		明	片	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ		
Ⅲ（大木 7b）		(1)																			1	17B 号住居跡
Ⅳ（大木 8b）	1	1							1					2							5	第 10・14・15・16B 号住居跡
Ⅴ（大木 8b）							1										1				2	第 9 号住居跡
Ⅵ（沖ノ原）				1							1			3	1	1					7	第 4・17A・20・22 号住居跡、E4-P29
Ⅲ - Ⅵ（中期）						1															1	E3-P55
Ⅶ（三十稲場）							1			1			1								3	E1-P3､E2-P70、K5-P14
Ⅷ（南三十稲場）		1			2									1							4	第 2 号住居跡、I4-P57・P83
Ⅶ - Ⅷ（後期）							1					1						1			3	第 1 号配石遺構、J3-P14、K4-P47
計	1	3	0	1	2	1	3	0	1	2	1	1	1	6	1	1	1	1	0	0	26	

２．磨製石斧時期別出土数量表

第 116 図　磨製石斧（３）

ｋ）磨石類（図版第 705 図・第 706 図・第 709 図・第 714 図～第 717 図・第 721 図・第 723 図・第 747 図・第 748 図）

本器種の分類は新潟県埋蔵文化財調査事業団の分類基準に倣って行った。石器表面に確認される使用痕跡を磨痕（ａ類）、凹痕（ｂ類）、敲痕（ｃ類）の３種類に設定し、これらの痕跡のいずれかが認められる中形の礫核石器を磨石類とした。1,069 点出土しており、完形品は 840 点確認される。使用痕跡の内容について以下に示す。

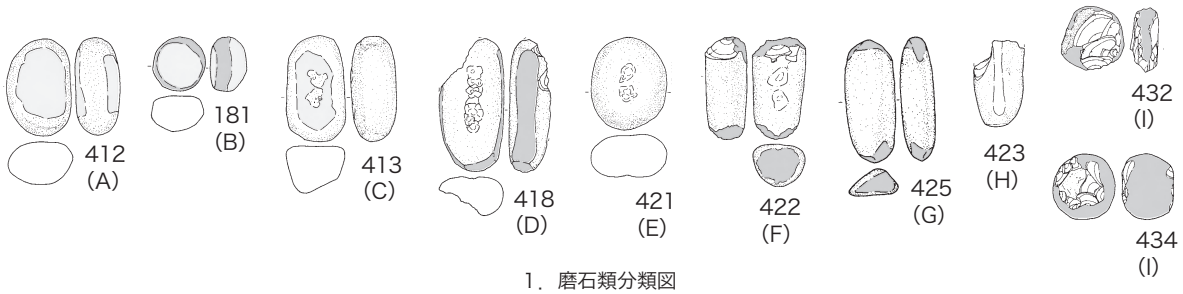
ａ類（磨痕）　：表裏面または側面に一定程度の広がりを持った磨耗面が認められるもので、使用面は「滑らかな」ものから「ざらついた」ものまで確認され、ざらついたものは敲打行為との併用によって生じた結果と考えられる。

ｂ類（凹痕）　：表裏面に残された敲打状の痕跡である。明瞭に凹痕を呈するもの、浅い凹痕のもの、痘痕状に表面が荒れているものが認められる。また、凹痕が狭い範囲にあるものから、広い範囲にあるものまでがあるが、表裏面のほぼ中央を中心とした位置にあるものが多い。

ｃ類（敲打痕）：側面や端部に残された敲打状の痕跡である。本類の痕跡は表面が凹凸状に荒れているものが一般的だが、面的に残る痕跡も確認される。

分類（第 117 図１・２）　細別分類は使用痕跡の組み合わせによって行ない、石核や自然礫の稜上を機能面とする「多面体を呈する敲石」（註 146）や「三角稜磨石」（註 147）は素材および機能面の用い方という点において明らかに他と異なっており、細別では区別して扱った。

類型ごとの出土数ではＥ類･Ｆ類･Ｇ類･Ｄ類の順に数量が多く、凹痕も含め敲打作業の結果を示す類型が上位を占めている。逆に磨痕を有するＡ類･Ｃ類の出土数量は極めて低く、遺跡内で行なわれた作業の一端を示しているもの可能性が考えられる。



1．磨石類分類図

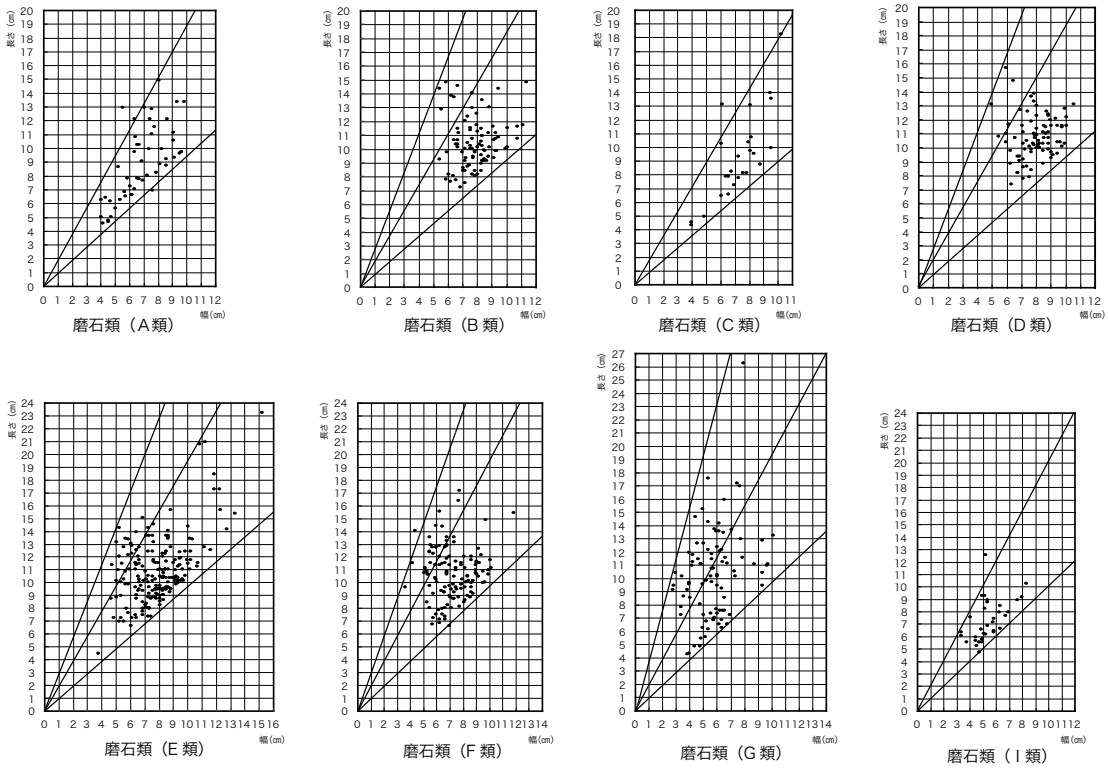
	使用痕跡	素材
A類	a類（磨痕）のみのもの	—
B類	a類（磨痕）+c類（敲打痕）	—
C類	a類（磨痕）+b類（凹痕）	—
D類	a類（磨痕）+b類（凹痕）＋c類（敲打痕）	—
E類	b類（凹痕）のみのもの	—
F類	b類（凹痕）+c類（敲打痕）	—
G類	c類（敲打痕）のもの	—
H類	a類（磨痕）	亜円礫の側縁稜部分を使用部位とするもの
I類	c類（敲打痕）のもの	石核または亜角礫の稜部分を使用部位とするもの

2．磨石類分類表

	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類	I類	不明	計
チャート							2				2
珪質頁岩									6		6
頁岩					1	2	5		11		19
凝灰岩						2			2		4
黒色安山岩									19		19
砂岩				1		2	9				12
緑色岩					3	4	5		4		16
斑レイ岩			3	8	4	12	15	3	3		48
輝緑岩						2	1				3
閃緑岩	1	2	1	2	7	11	14	1			39
玄武岩	1	4	1	3	9	4					22
粗粒安山岩	66	119	33	112	278	138	92	9	2	5	854
不明				2	5	6	7		5		25
計	68	125	38	128	306	179	143	13	14	5	1069

3．類型別石材組成表

第 117 図　磨石類（１）



第 118 図　磨石類長幅分布図

使用石材（第 117 図 3）　石器の使用石材は粗粒安山岩が 821 点と本石器の大半を占めており、他に閃緑岩や斑レイ岩、頁岩など硬質な石材も少量ながら含まれる。粗粒安山岩は遺跡周辺で最も手近に採取される石材であることから石材組成は遺跡周辺の石材環境を反映したものと推察される。類型別ではⅠ類の使用石材が他の類型と大きな差異を示しており、黒色安山岩や珪質頁岩、頁岩などが多く選択される点で剥片石器の使用石材にむしろ近い。それ以外の類型での傾向として、粗粒安山岩が大半を示すA・B・C・D 類と粗粒安山岩に加え閃緑岩や斑レイ岩など硬質な石材の割合が比較的高いF・G・H類の二者に大別される。前者が磨り行為を主体とするのに対し、後者は敲打行為を主体とする類型であることから目的とする行為の違いによって、僅かながら石材の選択性に差異があったものと推察される。

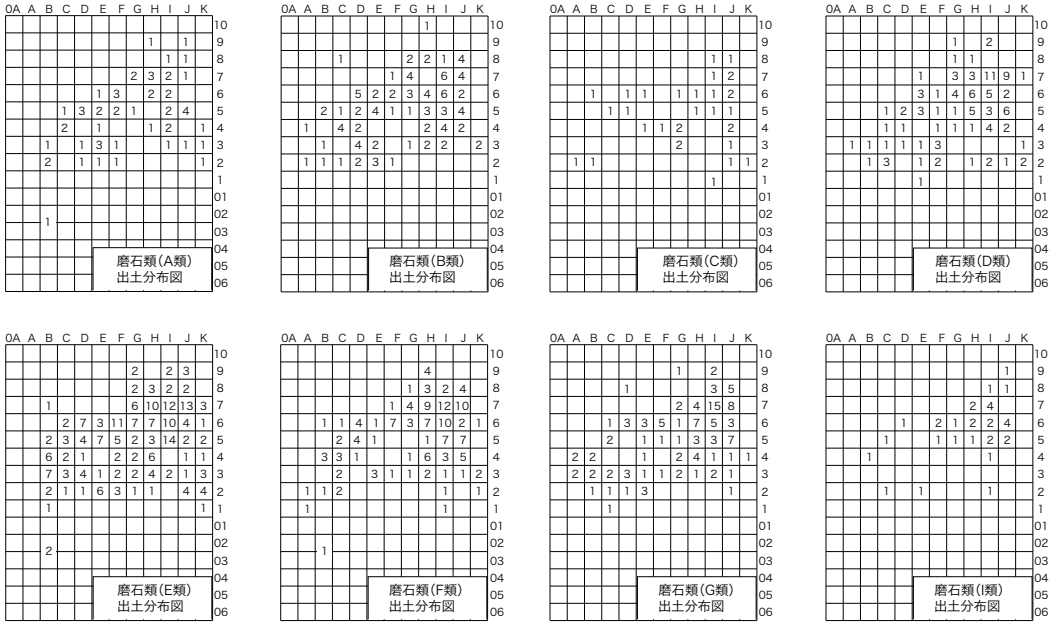
大きさ（第 118 図）　本類は全体として長さ 6 ～ 17cm、幅 4 ～ 11cm に分布の集中が認められる。これは概ね手のひらに収まる大きさから両手で持てる程度の大きさに相当し、特にB・D・E・F 類はこうした範囲に分布が集中する。一方、Ⅰ類は長さ 4 ～ 8 cm に分布が集中しており、敲打成形作業など細かな作業に適した大きさを示すと考えられる。B・G 類にも同様の大きさの資料が分布しており、同じような意味を持つものであることが予想される。類型別に長幅比の分布について見ると、A・C・D・E・Ⅰ類が長幅比 1:1 付近での集中が見られるのに対し、B・F・G類は長幅比 1 ： 1 ～ 3 ： 1 の範囲に分布する傾向が見られる。このことは後者が短軸長に対し長軸が長くなる傾向を示し、B（敲打＋磨）、F（敲打＋凹）、G（敲打のみ）類の順に高くなることから、敲打具の素材礫に棒状礫が志向されたものと考えられる。敲打具であるⅠ類とは素材の選択性、使用による形状変化の方向が大きく異なる。

素材　楕円形から長楕円形など様々な形状を呈する自然礫以外の素材として、石核素材や割礫素材のもの（21 点）が少量ながら含まれる。分類で示したように石核素材としたものはⅠ類のみ確認されている。

一方、割礫を素材としたものはE類18点、B類1点、C類2点となり、凹痕を有するものに多い傾向がある。こうした傾向はE類が磨りや敲打といった礫形状を改変する行為が少ないことが、本来の形状が残りやすいことの一因と考えられる。従って可能性として他の類型についても同様な素材を使用したことが考えられる。また、こうした素材の中には石皿の破片と考えられるものも存在する。破損した石皿の接合例が少ない要因の一つには磨石類への再利用があったことが推察される。

分布(第118図1） 出土分布の内訳は住居跡107点、土坑79点、配石遺構26点、包含層出土804点である。全体の分布傾向としては住居跡付近から廃棄帯にかけて遺跡全域に分布し、本器種が住居内で使用廃棄された道具であることの一側面を示しているといえよう。遺構からの出土遺物では住居跡からの出土が多く、特に第9号住居跡から19点、第14号住居跡と第21号住居跡からそれぞれ10点の出土が確認されるように1基の遺構に纏まっている例が散見される。

時期（第118図2） 伴出する土器によって時期が特定できる遺構からは152点の磨石類の出土が確認された。Ⅲ（大木7b式並行）期以降すべての時期にわたり検出されており、Ⅵ（沖ノ原式）期およびⅦ－Ⅷ（後期）に出土点数のピークが見られる。概ねⅥ期以降の出土数量が高くなる傾向が見られる。



1．磨石類出土平面分布図

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	不明	計	出土遺構
Ⅲ（大木7ｂ）	1	1			2	2					6	第17b・34号住居跡
Ⅳ（大木8a）	1	2	2	4	7	3	5	2	1		27	第10・14・15・16号住居跡、E3-P22、I4-P74
Ⅴ（大木8ｂ）	1	4	1	4	6	4	4				24	第9・17C・18・30・40号住居跡
Ⅵ（沖ノ原）	5	2	1	4	7	5	6			2	32	第4・17A・20・21・22号住居跡、H4-P10・P22・P45、K5-P33
Ⅲ - Ⅵ（中期）		2									2	C2-P2、D2-P10
Ⅶ（三十稲場）					2	6	2	1		3	14	第8号住居跡、H4-P29、I4-P27
Ⅷ（南三十稲場）	2	2	1	4	5	5	1			2	22	第2・3・6号住居跡、I4-P8・P9・P38・P76
Ⅶ - Ⅷ（後期）	4	3	1	4	10	6	5			1	34	第1・2号配石遺構、E2-P4、I4-P96、J3-P58、J4-P66
計	14	16	6	20	39	31	23	4	1	8	162	

2．磨石類時期別出土数量表

第119図　磨石類（3）

Ⅰ）石 錘（図版第 749 図 367 ～ 371）

５点出土しており、すべて長軸の両端に１対２極の糸欠け部を有するものである。

分類（第 120 図１） 糸欠け部の作出方法によって２つに分類される。

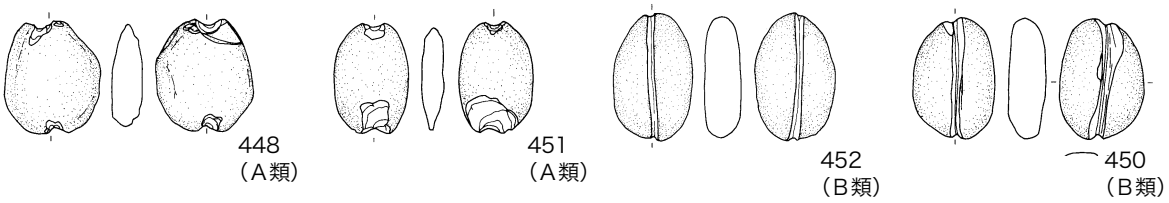
A類：打ち欠きによって作り出しているもの。

B類：擦切りによって両面に溝を作り出すもの。

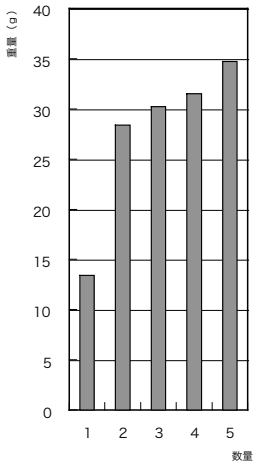
使用石材 すべて小形扁平円礫を素材としており、粗粒安山岩や頁岩など在地石材１によって占められる。類型別には A 類に粗粒安山岩、B 類に頁岩が用いられる傾向が認められ、石質によって加工方法が使い分け分けられた可能性が考えられる。

大きさ（第 120 図２・３） 長幅比では長さ 3.8 ～ 5 cm、幅 2.3 ～ 4 cm、重量では 13 ～ 35g に分布する。全体の出土数量としては限られたものであるものの、大きさとして非常に纏まっており、城之腰遺跡での大きさの分類（註 148）では極小型のものに対応する。なお、長幅比４：３を境に分布に差異が見られ、長楕円形をより強くする３点のうち B 類２点すべて含まれる。異なる石材に起因するものと考えられる。

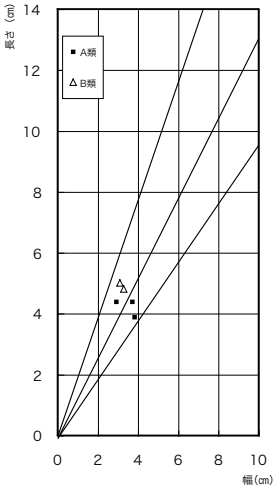
分布と時期（第 120 図４） 遺構出土のものは無く、すべて包含層からの出土である。分布からは特に傾向は見られないが、図示した 369（B 類）は縄文時代後期の第３号住居跡周辺から検出されているもので、住居に伴う遺物の可能性がある。魚沼地域では一般に B 類は縄文時代後期に帰属するもの（註 149）とされているため、当該時期の遺物である蓋然性が高い。仮に住居内にあったものでは無かったとしても、住居跡付近に残されていた遺物である可能性が高いものと判断される。



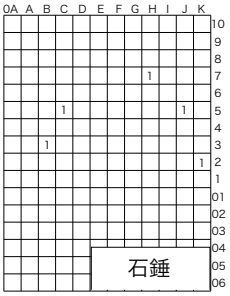
1．石錘分類図



2．重量分布図



3．石錘長幅分布図



4．石錘出土平面分布図

第 120 図　石 錘

m）砥石（図版第 50 図・第 716 図・第 718 図・第 720 図・第 749 図）

研磨成形作業の痕跡と考えられる砥面を有するものを砥石とし、石皿類とは使用面の曲面に形状や使用による光沢面が狭い範囲で局所的に見られる点で区別される。破片や細片での出土が多く、22 点出土しているが、完形または略完形としたものは６点のみである。また、破損した石棒や石皿を転用したと考えられるものが数多く散見されるほか、ほぼ完形の石皿類や石棒の側面や裏面に使用面が確認されるものも見られ、他器種から砥石への転用という扱いで本類に分類した。転用と考えられるものは石棒２点、石皿の７点であり、砥石という道具の機能分化が未発達な状況を示すものといえる。

分類（第 121 図）　分類については作業痕の種類とその組み合わせによって行なった。

１類：溝状の砥面のみを有するもの。　　２類：面状の砥面のみを有するもの。

３類：溝状と面状の砥面をもつもの 。　　４類：帯状・面状の砥面と側縁に敲痕または擦痕を有するもの。

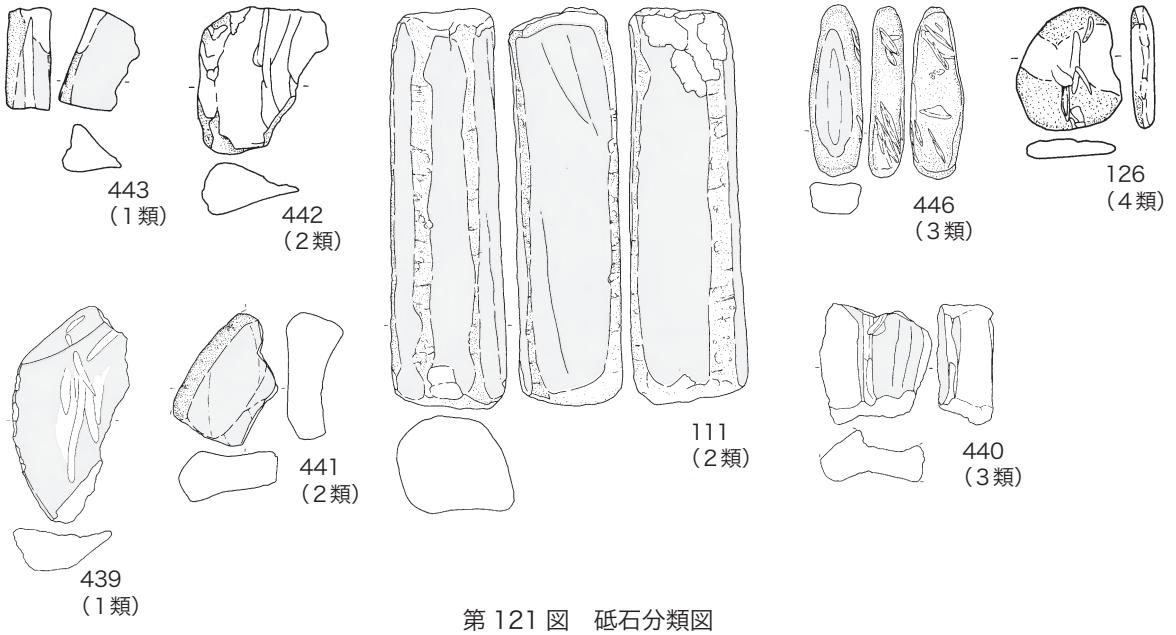
使用痕　上記分類したもののうち、使用面形状からは、以下の４つに分類される。

（１）溝状の砥面。　　（２）幅２～４㎝の帯状の砥面。

（３）平坦な砥面。　　（４）側縁に敲打または磨跡が見られるもの。

（１）は概ね、長さ４～６cm、幅１～３mm を測り、骨角器など細長いものを研いだ痕跡と推察される。（２）は非常に長軸幅の長い砥面であり、曲面や刃先痕などが確認されるものがあることから、磨製石斧など刃先研磨に用いられたものと考えられる。石棒の側面などに多く認められる。（３）は（２）の一部などである可能性があるもの。または平坦な使用面の狭い範囲に使用面が見られるもの。（４）は小形の砥石の側面に認められることが多いもので使用断面がＶ字状となるものも見られる。

使用石材（第 122 図２）　砥石に用いられる石材には砂岩と斑レイ岩が多く、他に粗粒安山岩が少数見られる。本器種に見られる石材はきめの細かい石材は少数である。石材名が同じであっても他の器種で用いられるものに比べ粗い粒子を含むものが多く、様相を異にするものを使用している。特に砂岩製のものは石英粒子などを含み、非常に粒子の粗いものが多い。



第 121 図　砥石分類図

大きさ（第 122 図３・４） 完形・略完形資料 16 点にの長幅比および重量分布から本器種の大きさを確認したい。長幅分布では長さ５～ 20cm、幅４～ 12cm、重量では 50 ～ 1100g に分布し、器種内における大きさの幅は非常に広いものといえる。長幅比率では概ね２：１のラインで分布が分かれており、石棒の転用といった長大な砥石が分布を異にしている。また重量比では 100g 未満の小形のもの、100 ～ 500g の小形～中形のもの、500 ～ 700g の大形のものといった３つ程度を分布の差異と認めることができる。使用時の状況を想定するならば小形のものを「手持ち砥」、大形のものを「置き砥」、小形～中形のものを中間的なものと当てはめられるだろう。さらに数量が多い中間形としたものについては重量の変化が漸移的なことから、使用の度合いによって徐々に小形化していく様を示唆している。なお、1000g 以上のものは石棒の転用品であり、重量が突出していることから器種内において極めて特異な位置付けであったことが窺える。

分布（第 122 図） 遺構出土のものは非常に少量である。土坑出土のものが３点あった他、石棒の転用品が住居跡から２点出土している他はすべて包含層出土である。使用痕別に分布を見ると、１・３類（溝状の砥面を有するもの）が集落の北側に分布するのに対し、２・４類（帯状・面状の砥面を有するもの）は集落のやや南側に偏り、廃棄帯を中心とした範囲に分布する傾向が見られる。使用状況の差異によって廃棄過程が異なっていたことが予想される。

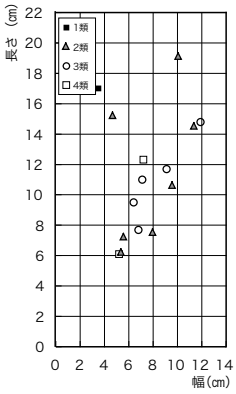
時期　遺構出土資料はすべて時期不明の遺構からであったため、出土状況から時期判別を行なうことは不可能である。転用されたと考えられる石棒や石皿類といった他器種の存在によって、縄文時代中期末以降に砥石が存在したことが予想される程度のこと以外は不明である。

	１類	２類	３類	４類	計
砂岩		8	3		11
安山岩	1		4	1	6
斑レイ岩			3	1	4
その他			1		1
計	1	8	11	2	22

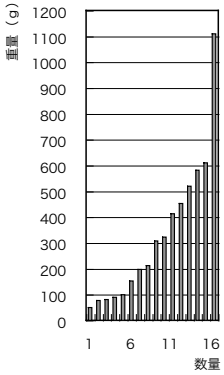
１．類型別石材数量表

	１類	２類	３類	４類	計
完形	1	7	6	2	16
破片		1	5		6
計	1	8	11	2	22

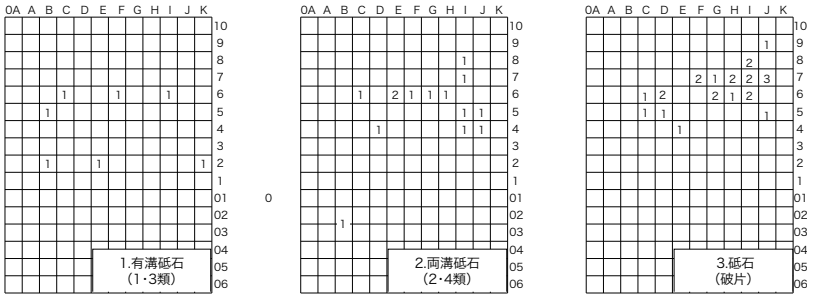
２．類型別残在部位数量表



３．長幅分布図



４．砥石重量分布図



５．砥石出土平面分布図

第 122 図　砥石

ｎ）石皿類（図版第 709 図・第 711 図・第 712 図・第 714 図・第 716 図・第 717 図・第 718 図・第 721 図・第 723 図・第 750 図・第 751 図）

完形または全体形状が判るものは 21 点のみ確認され、破片や欠損資料を含め 78 点と多い。それ以外にも器種認定できない磨面を有する破片や砕片など本類の一部と推察される資料が多数確認されている。こうした破損資料が多い遺存状況のあり方から、本類が炉石や磨石類等への転用を含めた特異な廃棄行為を伴ったライフサイクルを有していた可能性が考えられる（註 150）。

また、本類は製作面において、皿部（または側縁）を荒割と敲打によって成形するもの（A・B 類）と選択された自然礫をそのまま使用していくもの（C 類）の二者が存在し、両者は器種認定の際の認定基準も異なっている。特に後者は、十分な接合作業を行なっていないこともあり、使用面から外れた部分は石皿と認識できないことから本来の数量を正確には反映していないものと判断される。

分類（第 123 図） 成形加工の手数によって以下のような 3 分類される。彫刻・脚が作出されているものは A 類にのみ確認され、成形加工の分類に組み合わせて類型化を行なった。

A類　全体を整形しているもの。

A 1 類：縁がなだらかに立ち上がるもの。

A 2 類：縁が直線的に立ち上がるもの。

B類：自然礫を利用し、皿部（使用面）を作出するもの。

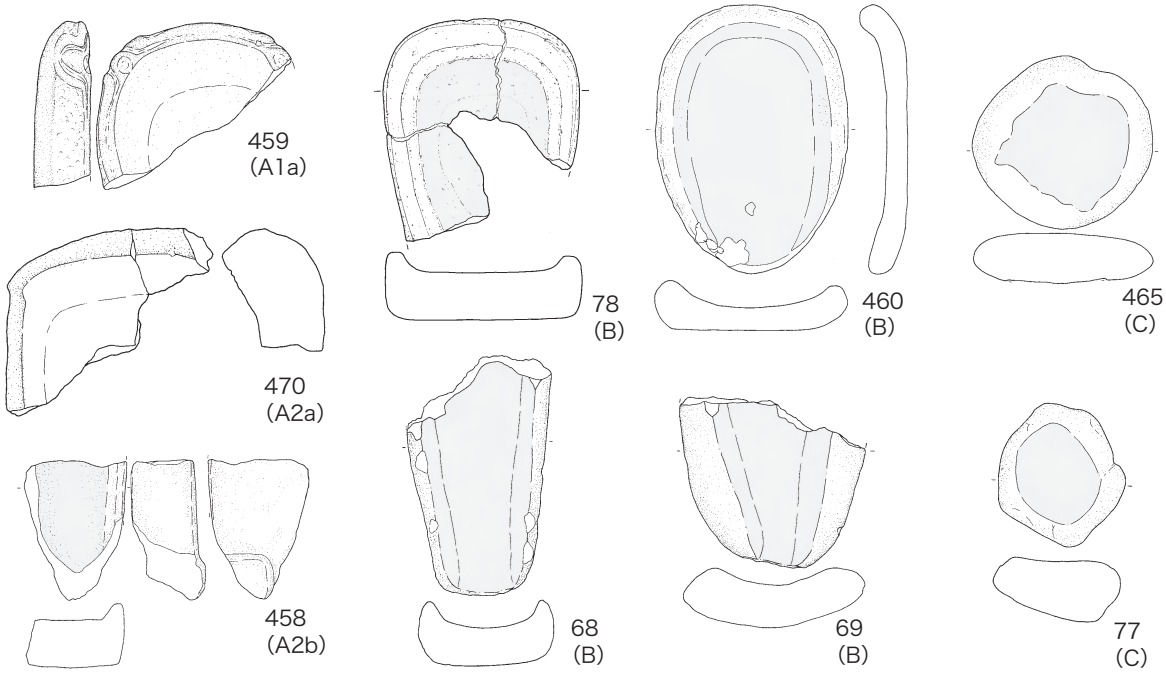
C類：自然礫をそのまま利用し、加工を施さないもの。

a 類：彫刻が施されたもの。

b 類：脚を持つもの。

c 類：彫刻・脚を持たないもの。

横断面･使用面　本器種の使用面は（縁を有するものを含む）皿状の窪み面（縁を持たないものを含む）、板状の平坦面を機能面とするものが認められる。前者は A・B 類の正面に、後者は C 類の表裏面および A・B 類の裏面に観察され、凹痕が多数穿孔される「多孔石」面を有するものが B 類に 1 例確認された。表裏両面を使用目的によって区別していた道具と考えられる。



第 123 図　石皿類（1）

石材（第 124 図 1） 磨石類と同様に粗粒安山岩が極めて高い使用率を示すほか、少数の斑レイ岩や閃緑岩などによって構成される。類型別では成形加工の認められる A・B 類に粗粒安山岩がなど軟質、多孔質な石材が多用されるのに対し、自然礫をそのまま利用する C 類には上記石材の他、閃緑岩や斑レイ岩などやや硬質な石材が一定数量使用されている。このことから本石器は加工の容易性をについても石材選択に反映されたものと推察される。

製作　A・B 類の製作は磨製石斧や石棒など磨製石器の一部と同様、敲打成形と研磨調整による製作工程が想定される。そのため敲打成形過程の痕跡を示す未成品が確認されないことから、遺跡内での製作については極めて否定的と考える。A・B 類は成品段階で搬入された可能性が高く、一方、遺跡周辺で得られる円礫をほぼそのまま使用するC類は磨石類同様、遺跡内に直接原礫を搬入し使用していたものと推察される。ただし、A・B 類含め、本器種の使用石材の大半は在地石材の中で最も容易に採取可能な粗粒安山岩を使用している点から、一部は遺跡周辺で製作された可能性も残る。なお、出土資料の中には自然礫の表面が剥落し皿状を呈する資料が複数確認されており、今後の調査事例の蓄積によって石皿の製作工程が明らかになれば、こうした資料が未成品となる可能性も考えられよう。

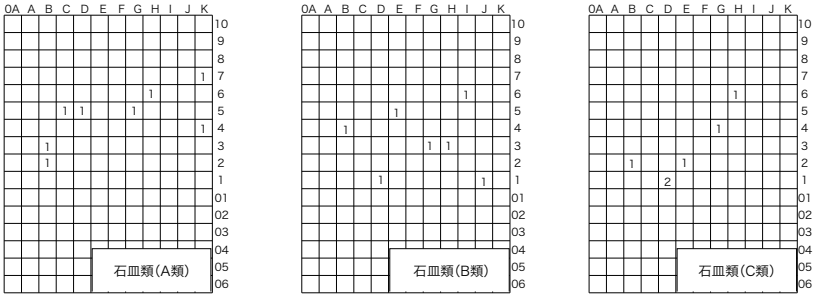
分布と時期（第 124 図 3・4） ここでは本器種に破片資料が多い点を考慮し、形状の判断できる資料のみ対象とする。出土位置の内訳は包含層で 41 点、住居跡 7 点、土坑 8 点、配石 1 点となり、住居跡出土のものが比較的多い。また、平面分布でも、居住域と考えられる集落内部に分布する傾向が見られ、剥片石器よりも磨石類の分布のあり方に近い。出土時期ではⅣ（大木 8a 式並行）期以降に出土数が多くなる傾向が認められる。

	A1a	A1b	A1c	A2a	A2b	A2c	B	C	計
粗粒安山岩	1		12				8	40	61
玄武岩			2	1	1	3	1	1	9
斑レイ岩								3	3
閃緑岩								2	2
砂岩			1		1		1		3
計	1	0	15	1	2	3	10	46	78

1．類型別石材数量表

	A1a	A1b	A1c	A2a	A2b	A2c	B	C	計
完形・略完形			2				1	18	21
欠損品			6	1		1	5	10	23
破片	1		7		2	2	4	18	34
計	1	0	15	1	2	3	10	46	78

2．類型別残存部位数量表



3．石皿類出土平面分布図

	A1	A2	B	C	計	出土遺構
Ⅲ（大木 7b 式）					0	—
Ⅳ（大木 8a 式）	1	1	1	1	4	第 14B・15 号住居跡、K5-P5
Ⅴ（大木 8b 式）			1		1	第 9 号住居跡
Ⅵ（沖ノ原式）			1	2	3	第 17A 号住居跡
Ⅶ（三十稲場式）					0	—
Ⅶ-Ⅷ（後期）			2		2	第 1 号配石遺構、H3-P27
計	1	1	5	3	10	

4．石皿類時期別出土数量表

第 124 図　石皿類（2）

遺構出土石器

No.	出土位置	器種名	細別	石材名	部位	素材	計測数値				備考
							長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	1J-16-P4	不定形石器	IIa-3	頁岩	完形	剥片	6.8	4.7	1.8	54.4	
2	I1-23-10-2J	打製石斧	B1	頁岩	刃部欠損(2)	横長剥片	(9.8)	4.7	2.0	98.1	
3	2J-ｻﾌﾞﾄﾚﾝﾁ	打製石斧	C	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	10.5	9.0	2.4	194.2	
4	I2-2-3-2J	打製石斧	C	頁岩	刃部欠損(2)	横長剥片	(11.3)	8.0	2.7	223.7	
5	I1-23-10-2J	打製石斧	C	頁岩	完形(0)	横長剥片	8.7	7.8	2.1	134.9	未成品?
6	I1-23-20-2J	打製石斧	C	凝灰岩	刃部欠損(2)	横長剥片	(8.7)	7.8	3.0	174.1	
7	2J-南北ｻﾌﾞﾄﾚﾝﾁ	打製石斧	C	頁岩	完形(0)	横長剥片	8.6	6.4	1.4	63.3	使用痕c/e
8	I1-18-1-2J	磨製石斧	A2-II	斑レイ岩	完形(0)	不明	15.8	5.9	3.5	465.3	
9	I1-22-28-2J	磨製石斧	A1-II	蛇紋岩類	刃部略欠損(0)	不明	14.0	6.8	3.0	398.1	刃部使用痕
10	I1-22-21-2J	磨石類	E	粗粒安山岩	完形	礫素材	10.3	5.5	3.5	324.2	
11	I1-10-2-2J	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	9.3	7.0	2.3	160.6	
12	K3-16-70-3J	磨石類	B	粗粒安山岩	完形	礫素材	8.2	8.0	6.7	624.8	
13	K3-11-3J	磨石類	E	粗粒安山岩	完形	礫素材	14.3	5.2	4.6	502.1	
14	J3-25-25-3J	不定形石器	IId-3	頁岩	欠損	横長剥片	5.2	5.9	1.2	31.1	
15	H4-18-28-4J	磨製石斧	A2-II	蛇紋岩類	刃部略欠損(0)	不明	4.8	2.1	0.7	12.1	
16	6J-4	磨石類	D	粗粒安山岩	1/2	礫素材	(11.5)	9.0	6.4	761.1	
17	I5-13-380-7J	石鏃	D	頁岩	完形(0)	横長剥片	1.8	1.0	0.3	0.3	
18	I5-7J-P2	石鏃	B	黒色安山岩	完形(0)	不明	5.8	1.2	0.4	2.8	
19	I5-13-363-7J	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	13.2	6.3	2.7	172.5	刃部使用痕a
20	I5-17-201-7J	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	11.4	5.1	2.1	127.3	左側縁が調整途中
21	I5-7J-P13	磨石類	A	粗粒安山岩	完形	礫素材	10.0	8.2	6.3	731.1	
22	I5-7J-P2	不定形石器	IIa-3	頁岩	完形	剥片	7.9	4.9	2.3	50.2	
23	I5-8-127-7J	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	7.3	5.5	1.9	65.4	
24	8J-7	石鏃	Bb	頁岩	完形(0)	不明	2.4	1.0	0.3	0.6	
25	8J-4	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	10.5	6.2	2.0	108.5	使用痕a
26	8J-21	打製石斧	B4	頁岩	完形(0)	横長剥片	12.8	6.0	2.4	131.1	
27	8J-5	打製石斧	B1	凝灰岩	刃部欠損(2)	横長剥片	15.0	4.5	1.7	106.1	
28	8J-63	打製石斧	B1	頁岩	刃部欠損(2)	横長剥片	15.8	6.8	1.7	138.2	
29	8J-24	打製石斧	A2	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	9.6	6.5	3.3	276.6	
30	8J-80	ﾐﾆﾁｭｱ石皿	－	粗粒安山岩	完形	不明	18.6	10.5	8.1	1615.5	
31	9J-68	石鏃	Ba	頁岩	先端略欠損(0)	不明	3.2	1.5	0.4	1.3	
32	9J-66	石鏃	A2a	黒色安山岩	先端欠損(a)	不明	(2.5)	1.7	0.3	1.7	
33	9J	石鏃	C	頁岩	完形(0)	不明	5.2	2.9	1.0	12.9	
34	9J	打製石斧	B2	黒色安山岩	完形(0)	不明	11.1	5.4	2.4	15.7	左側縁調整途中
35	9J-107	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	12.0	5.4	18.0	108.7	
36	9J	石錐	C1	黒色安山岩	完形	不明	3.9	2.2	0.9	8.2	
37	9J-11	打製石斧	不明	頁岩	刃部欠損(2)	横長剥片	(13.2)	5.8	3.1	245.5	
38	9J-74	打製石斧	B1	粗粒安山岩	完形(0)	横長剥片	13.4	5.6	2.3	160.3	
39	9J-56	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	10.5	5.1	1.5	80.8	
40	9J-234	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	18.3	7.4	3.3	391.5	
41	9J-245	打製石斧	B2	粗粒安山岩	完形(0)	横長剥片	16.3	5.2	3.6	261.0	刃部使用痕b
42	9J	磨製石斧	A1-III	蛇紋岩類	完形(0)	不明	4.1	2.4	0.8	23.2	
43	9J	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	6.8	6.4	2.8	86.4	
44	9J-67	磨製石斧	A2-一	蛇紋岩類	基部欠損(1)	不明	(9.3)	5.9	2.1	224.9	刃部使用痕
45	9J	軽石製石製品	－	軽石	完形	不明	4.6	3.6	1.8	7.9	
46	9J-128	磨石類	B	粗粒安山岩	完形	礫素材	9.3	8.5	5.2	565.4	
47	9J-248	磨石類	D	粗粒安山岩	完形	礫素材	10.4	7.8	5.2	614.2	
48	9J-112	磨石類	E	緑色凝灰岩	完形	礫素材	11.1	8.0	5.7	673.6	
49	9J	磨石類	D	粗粒安山岩	欠損	礫素材	(8.8)	6.3	4.5	446.6	
50	9J-111	砥石	2	粗粒安山岩		石棒の転用	(25.5)	11.5	8.5	4900.0	
51	9J-39	石皿類	B	粗粒安山岩	1/5	礫素材	(12.5)	(9.4)	6.0	981.0	
52	10J-26	石匙	A1	黒曜石	完形	不明	4.8	1.6	0.8	5.8	
53	10J-27	打製石斧	A1	黒色安山岩	完形(0)	縦長剥片	9.8	4.8	2.9	129.6	
55	13J-37	石鏃	Bb	頁岩	完形(0)	不明	2.5	1.7	0.8	3.2	
54	10J-16	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	剥片	6.4	5.2	2.0	65.6	
56	13J-35	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	8.2	6.3	1.7	68.7	
57	14J-69	石匙	C1	凝灰岩	完形	縦長剥片(1)	8.6	4.4	2.2	84.2	
58	14J	石匙	C1	黒色安山岩	摘部欠損	横長剥片(C)	6.4	2.8	0.6	12.1	
59	14J	打製石斧	B1	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	9.8	4.7	1.7	98.6	刃部使用痕a
60	14J-43	打製石斧	A2	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	9.6	5.7	2.2	102.5	
61	14J	打製石斧	A2	頁岩	完形(0)	横長剥片	10.5	3.2	2.1	105.8	使用痕a
62	14J	打製石斧	B4	粗粒安山岩	完形(0)	横長剥片	10.5	4.1	2.3	72.9	
63	14J-67	打製石斧	B1	黒色安山岩	基部欠損(1)	横長剥片	(8.8)	4.5	1.9	65.3	
64	14J-41	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	9.3	13.1	2.7	181.3	
65	14AJ-9	不定形石器	IIf-3	凝灰岩	完形	横長剥片	6.2	5.4	2.1	61.4	
66	14BJ-42	打製石斧	B3	頁岩	完形(0)	横長剥片	12.3	4.4	3.6	175.7	
67	14BJ-15	打製石斧	B3	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	9.8	4.4	2.7	101.5	
68	14BJ-41	石皿類	A1	粗粒安山岩	2/3	礫素材	(31.5)	(19.5)	8.7	6200.0	
69	14BJ-93	石皿類	B	粗粒安山岩	1/2	礫素材	(22.6)	24.5	7.9	4990.0	
70	15J	石鏃	A1b	チャート	先端欠損(a)	不明	(3.6)	1.7	0.5	3.2	
71	15J-100	打製石斧	A2	頁岩	完形(0)	横長剥片	10.1	4.8	2.1	101.6	右側縁に刃部?横刃形石器の可能性有り
72	15J-204	打製石斧	B2	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	(3)	横長剥片	12.2	5.1	2.9	167.4	
73	15J-292	磨石類	I	頁岩	完形	石核素材	13.5	6.5	4.7	362.0	
74	15J	磨製石斧	A1-II	蛇紋岩類	完形(0)	不明	8.3	4.1	2.2	134.1	基部に着柄痕と見られる磨耗痕
75	15J-255	磨製石斧	A3II	斑レイ岩	完形(0)	不明	15.3	5.9	3.3	420.0	
76	15J-71	不定形石器	IIf-3	珪質頁岩	完形	横長剥片	5.2	4.2	1.1	22.8	
77	15J-295	石皿類	C	粗粒安山岩	完形	礫素材	18.8	16.5	7.4	3680.0	
78	15J-211+293+294	石皿類	A2	玄武岩?	1/2	不明	(27.9)	25.3	8.8	6010.0	
79	16J-58	石鏃	A1a	黒曜石	脚部欠損(C)	不明	2.5	(1.2)	0.3	0.6	
80	16J-63	石鏃	A1b	頁岩	完形(0)	横長剥片	2.7	1.9	0.5	1.9	
81	16J-55	不定形石器	IId-3	黒色安山岩	完形	横長剥片	6.7	5.2	1.5	54.5	
82	16BJ-119	打製石斧	A1	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	13.3	4.7	3.4	167.6	使用痕c
83	16J	打製石斧	B3	黒色安山岩	完形(0)	不明	6.8	3.8	2.5	63.2	
84	17J-64	石匙	B3	頁岩	完形	縦長剥片(1)	8.0	4.5	0.8	12.7	異形石器
85	17J-3	不定形石器	IIa-3	凝灰岩	完形	横長剥片	5.3	10.9	1.7	82.1	
86	17J-45	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	不明	8.8	4.7	1.3	53.0	
87	17AJ-49	石鏃	A2b	流紋岩	脚部欠損(C)	横長剥片	2.6	1.6	0.4	0.9	
88	17AJ	石鏃未成品	A2a	黒色安山岩	先端部欠損	不明	(3.6)	2.8	1.0	2.7	
89	17AJ	ﾋ ｴｽ・ｴｽｷｭ	不明	凝灰岩	完形	横長剥片	2.6	1.8	0.5	11.4	
90	17AJ-90	磨石類	E	粗粒安山岩	完形	礫素材	10.1	7.2	4.5	494.6	
91	17AJ-4	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	11.3	5.0	1.7	86.6	
92	17AJ-80	石皿類	C	粗粒安山岩	1/2	礫素材	15.6	(11.4)	5.9	184.0	
93	17BJ-39	打製石斧	A2	頁岩	完形(0)	縦長剥片	11.8	4.3	1.1	58.5	
94	17BJ-32	磨石類	F	粗粒安山岩	完形	礫素材	8.5	8.0	6.6	48.0	
95	17BJ-30	不定形石器	IIf-3	珪質頁岩	完形	横長剥片	5.2	4.8	1.4	23.4	
96	17BJ-9	不定形石器	IIc-3	珪質頁岩	欠損	横長剥片	(4.1)	3.7	1.3	17.6	
97	17CJ-6	不定形石器	Ia-3	頁岩	完形	縦長剥片	5.7	3.3	1.0	14.8	
98	J5-4-21J-P11	石鏃	A2a	珪質頁岩	脚部欠損(C)	不明	1.9	(1.3)	0.3	0.2	被熱によるポットリットが生じる
99	J5-3-53-21J	打製石斧	A2	凝灰岩	完形(0)	縦長剥片	8.6	4.5	1.8	73.5	
100	J5-8-204-21J-ｶｸ1	打製石斧	A2	凝灰岩	刃部欠損(2)	不明	10.1	4.7	2.6	123.8	裏面は剥落により主要剥離面は欠出
101	J5-2-31-21	磨石類	D	粗粒安山岩	完形	礫素材	9.7	9.4	5.5	676.6	
102	J5-14-25-21J-P12	磨石類	C	斑レイ岩	完形	礫素材	7.3	6.9	4.1	317.0	
103	22J-478	石鏃	A2a	黒色安山岩	脚部欠損(C)	不明	2.9	2.0	0.6	2.5	
104	22J-243	打製石斧	B1	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	11.4	4.3	2.6	101.7	
105	22J-217	不定形石器	IIc-3	黒色安山岩	完形	横長剥片	5.0	7.0	1.5	54.0	
106	30J-11	磨石類	F	粗粒安山岩	完形	礫素材	14.9	9.7	5.6	1160.3	
107	35J-P8	打製石斧	A1	頁岩	完形(0)	横長剥片	7.2	3.9	2.1	57.9	第1号長方形柱穴列/使用痕a
108	36J-P9	打製石斧	B2	頁岩	刃部欠損(2)	横長剥片	(9.7)	4.7	2.5	137.3	

第 65 表　石器観察表（1）

No.	出土位置	器種名	細別	石材名	部位	素材	計測数値				備考
							長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
109	36J-24	不定形石器	IIc-3	頁岩	完形	横長剥片	5.0	5.6	1.6	45.1	
110	36J-603	石皿類	B	粗粒安山岩	1/4	礫素材	(15.8)	(13.9)	6.9	2135.0	
111	J5-23-39J	砥石	2	粗粒安山岩	完形	石棒の転用	44.8	12.8	1.2	9500.0	
112	40J-6-ﾎﾟ	磨石類	D	粗粒安山岩	完形	礫素材	12.0	7.6	5.2	722.1	
113	1H-18-2	石槍	1	頁岩	完形	横長剥片	8.1	2.6	1.2	30.0	
114	1H-17-23	石鏃未成品	-	黒色安山岩	完形	礫素材	4.4	2.8	1.3	14.7	
115	1H-13-22	石鏃	A2b	鉄石英	完形(0)	不明	2.6	1.5	0.6	1.8	
116	K2-2-10-1H	石鏃	A2a	チャート	完形(0)	不明	1.6	1.1	0.3	0.1	
117	1H-13-21	石鏃	A2b	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	2.6	1.6	0.5	1.5	
118	J2-18-2-1H	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	11.6	6.9	1.9	26.6	
119	J2-14-4-1H	打製石斧	B1	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	13.7	7.5	2.5	227.0	刃部使用痕a
120	J2-18-1-1H	打製石斧	B1	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	10.5	5.3	2.2	125.4	
121	J2-3-7-1H	打製石斧	B2	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	7.9	6.1	2.0	63.0	
122	J1-25-1H	石皿類	B	粗粒安山岩	1/2	礫素材	(14.9)	19.8	11.5	4230.0	
123	1H-15-20	磨石類	E	閃緑岩	完形	礫素材	12.4	9.4	5.8	900.0	
124	2H-4-17	石鏃	A2b	頁岩	完形(0)	不明	1.6	1.1	0.4	0.4	
125	B2-5-P2	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	7.3	10.0	3.4	206.3	
126	B2-P4	砥石	4	砂岩	完形	礫素材	6.2	5.4	1.1	49.4	溝状砥面は幅3mm、長さ20～25mmを測る。
127	D2-61-P2	磨製石斧	A1 I	蛇紋岩類	刃部欠損(2)	不明	11.4	5.1	2.5	300.3	
128	D1-9-P1	石皿類	B	粗粒安山岩	1/4	礫素材	(18.0)	(13.2)	6.6	1925.0	
129	D1-7-P1＋ D1-8-P1	石皿類	C	粗粒安山岩	2/3	礫素材	25.2	(19.8)	12.6	6590.0	
130	E2-P70	磨製石斧	A3Ⅲ	緑色凝灰岩	基部欠損(1)	不明	8.8	5.5	2.4	195.0	基部に敲打痕が観察される楔様の石器
131	E2-P7	不定形石器	IId-2	頁岩	完形	剥片	7.2	5.4	1.7	54.1	
132	E2-P70	不定形石器	IIe-2	頁岩	完形	横長剥片	7.0	18.3	1.4	131.9	
133	E3-140-P3	打製石斧	B1	不明	完形(0)	縦長剥片	9.2	5.0	2.0	96.6	
134	E3-122-P26	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	20.1	6.9	3.8	497.0	刃部使用痕a
135	E3-131-P38	打製石斧	B3	頁岩	完形(0)	横長剥片	14.6	4.5	2.3	140.0	
136	F2-P98	磨製石斧	A1-	蛇紋岩類	基部欠損(1)	不明	5.0	2.6	1.1	25.9	
137	F3-P83	不定形石器	III-3	頁岩	完形	横長剥片	4.3	6.5	1.2	30.5	
138	E4-P38	不定形石器	Ic-3	珪質頁岩	完形	縦長剥片	8.5	4.4	1.5	38.5	
139	F4-P116	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	7.1	5.7	2.1	77.7	
140	F4-P55	磨製石斧	A3Ⅲ	輝緑岩	略完形(0)	不明	8.6	4.2	2.3	134.4	線状痕
141	F4-P66	石鏃未成品	III-3	凝灰岩	完形	横長剥片	3.9	5.2	0.8	17.3	石鏃未成品と考えられる
142	G4-P146	打製石斧	B2	頁岩	完形(0)	縦長剥片	12.0	4.4	1.9	100.0	使用痕
143	G4-P20	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	15.3	5.7	2.3	275.0	
144	G4-P120	打製石斧	A2	頁岩	完形(0)	横長剥片	25.8	4.8	2.6	200.0	
145	G5-P4	打製石斧	B2	頁岩	完形(0)	横長剥片	14.3	5.4	2.0	145.0	
146	G5-P5	打製石斧	B2	凝灰岩	完形(0)	縦長剥片	11.2	6.7	2.2	136.0	
147	H4-P46	磨製石斧	A1Ⅱ	蛇紋岩類	略完形(0)	不明	3.4	1.9	0.6	6.6	刃部には使用による砕けが観察される
148	G4-P101	砥石	3	粗粒安山岩	1/2	石皿の転用	(3.2)	13.5	4.5	455.0	赤色顔料?
149	G5-P150	磨製石斧	A3 I	アプライト	略完形(0)	不明	12.2	5.8	2.7	285.0	刃部には使用による砕けが観察される
150	G4-P131	石鏃	A1b	黒色安山岩	脚部欠損(C)	不明	3.8	(1.8)	0.4	2.6	
151	G5-P149	石鏃未成品	A2a	黒色安山岩		横長剥片	3.4	(1.9)	0.8	4.8	
152	H3-P27	石皿類	B	玄武岩?	1/4	礫素材	(13.4)	(10.2)	5.2	892.0	
153	H4-P23	ﾐﾆｭｱ石皿	－	玄武岩	完形	不明	7.4	5.2	2.8	112.0	
154	H5-P124	磨石類	D	粗粒安山岩	完形	礫素材	13.2	4.9	4.5	629.0	
155	H4-P9	不定形石器	IIa-1	頁岩	完形	横長剥片	3.4	9.6	1.1	37.6	
156	H5-P60	石鏃	C	頁岩	完形(0)	縦長剥片	5.8	3.0	1.1	18.5	未成品の可能性もある
157	H4-P25	打製石斧	B2	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	10.4	4.5	2.1	119.0	刃部使用痕a
158	H5-P16	打製石斧	A1	頁岩	完形(0)	縦長剥片	10.7	3.8	2.8	142.0	刃部使用痕a
159	H5-P72	打製石斧	A2	頁岩	完形(0)	横長剥片	11.6	5.4	2.7	161.0	
160	H3-22-P9	石製装身具	垂飾	ヒスイ	一部欠損	礫素材	2.3	(2.0)	2.0	10.5	
161	I4-P74	打製石斧	B4	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	17.1	7.4	4.0	434.0	
162	I4-P16	打製石斧	C	頁岩	完形(0)	不明	9.1	5.8	2.3	119.0	刃部使用痕c
163	I4-P24	石錐	B	黒色安山岩	完形	縦長剥片	5.2	1.1	0.8	87.0	
164	I4-P109	打製石斧	A1	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	9.4	4.4	2.6	119.0	
165	I4-P109	打製石斧	B1	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	18.5	6.2	2.1	288.0	
166	I5-20-103-P6	打製石斧	B1	頁岩	刃部欠損(2)	横長剥片	27.4	10.2	3.4	812.0	
167	I4-P83-A-B	磨製石斧	A2	アプライト	刃部略欠損(0)	不明	7.9	4.4	2.0	122.0	
168	I5-6-98-P5	磨製石斧	A3	蛇紋岩類	完形(0)	不明	7.1	2.6	1.6	62.0	刃部使用痕
169	I5-P2	石鏃	Ba	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	2.5	1.3	0.4	1.4	
170	I5-P22	石鏃	A2b	珪質頁岩	先端欠損(a)	不明	(2.1)	1.5	0.3	1.2	
171	I5-P20	石鏃	A2a	黒色安山岩	完形(0)	不明	3.1	1.7	0.4	2.9	
172	K1-23-13G	磨石類	E	粗粒安山岩	完形	礫素材	10.3	7.7	4.3	450.0	
173	K4-P5	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	12.8	5.0	2.1	135.0	刃部使用痕b
174	J4-P51	石棒類	B1	粗粒安山岩	胴部破片	不明	(26.3)	15.5	11.0	3010.0	
175	J5-5-25-P1	石鏃	A2a	黒曜石	脚部欠損(C)	不明	2.5	1.5	0.3	0.8	
176	K4-P22	石鏃未成品	-	黒色安山岩	完形	剥片	4.5	2.9	0.7	10.6	
177	K5-P47	石匙	B3	凝灰岩	完形	縦長剥片(1)	3.7	2.8	0.6	5.8	
178	K4-P55	石皿類	A1b	不明	脚部破片	不明	(12.7)	(11.2)	9.0	980.0	
179	K5-P5	砥石	2	粗粒安山岩	完形	礫素材	13.3	11.2	4.8	1020.0	
180	K4-P3	石棒類	A1	粗粒安山岩	頭部破片	礫素材	(21.6)	8.5	8.6	2217.0	

包含層出土石器

No.	出土位置	器種名	細別	石材名	部位	素材	計測数値				備考
							長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
181	F6-366-VI下	石鏃	A1a	黒曜石	完形(0)	不明	2.9	1.7	0.5	2.2	
182	I7-4545	石鏃	A1b	黒曜石	脚部欠損(C)	不明	(2.4)	2.6	0.4	1.5	
183	F4-24G	石鏃	A1a	チャート	脚部欠損(C)	不明	3.0	1.4	0.6	2.1	
184	E6-121-V	石鏃	A1a	凝灰岩	完形(0)	不明	2.9	1.5	0.5	2.2	
185	H6-118-VI	石鏃	A1a	流紋岩	完形(0)	不明	2.5	1.4	0.6	1.4	
186	G6-1635-VI	石鏃	A2a	チャート	完形(0)	不明	3.1	1.5	0.6	2.2	
187	I6-3533-VI	石鏃	A1a	チャート	略完形(0)	横長剥片	3.6	1.6	0.6	2.8	脚部欠け
188	F5-37-V	石鏃	A1a	頁岩	略完形(0)	不明	3.5	1.9	0.5	3.1	脚部欠け
189	E2-9G-V	石鏃	A2a	頁岩	完形(0)	不明	3.4	1.4	0.3	2.3	黒色付着物
190	I8-1819-V	石鏃	A1a	頁岩	完形(0)	不明	1.7	1.2	0.3	1.2	
191	C5-16G-V	石鏃	A2a	頁岩	完形(0)	横長剥片	2.3	1.3	0.3	1.1	
192	I8-2000-V	石鏃	A2a	頁岩	完形(0)	不明	1.9	1.5	0.3	0.6	
193	E6-10G-VI	石鏃	A2b	珪質頁岩	完形(0)	不明	2.6	1.6	0.5	1.6	
194	D2-121-V	石鏃	A2b	珪質頁岩	完形(0)	不明	2.9	1.7	0.4	1.8	

第 66 表　石器観察表（2）

No.	出土位置	器種名	細別	石材名	部位	素材	計測数値				備考
							長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
195	E4-103-V	石鏃	A2a	チャート	略完形(0)	不明	1.8	1.2	0.4	0.7	脚部欠け
196	G2-19-8-6J	石鏃	A2b	黒色安山岩	先端略欠損(b)	不明	(2.0)	1.3	0.3	0.7	先端部欠け
197	B2	石鏃	A1c	頁岩	脚部欠損(C)	横長剥片	3.2	(1.9)	0.5	1.9	
198	G6-2101-VI	石鏃	A2a	黒色安山岩	略完形(0)	不明	3.2	2.0	0.6	3.3	脚部欠け
199	H6-1162-VI	石鏃	Ba	黒色安山岩	略完形(0)	不明	2.1	1.6	0.4	1.3	先端部欠け
200	I5-5-3	石鏃	Bb	頁岩	完形(0)	不明	2.0	1.4	0.6	0.8	
201	E6-104-V	石鏃	Ba	頁岩	完形(0)	不明	4.5	3.1	1.0	11.2	
202	H4-24G-I	石鏃	C1	珪質頁岩	完形(0)	横長剥片	3.4	2.1	0.5	5.2	
203	I7-10G-VI	石鏃	C1	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	4.0	2.7	0.9	12.8	
204	J7-17	石槍	1	頁岩	完形	不明	5.0	1.5	0.5	2.8	
205	H6-1546-V	石鏃未成品	III-3	頁岩	完形	横長剥片	5.7	4.3	1.4	12.9	
206	H6-ﾎﾟ4-33	石槍	1	頁岩	基部欠損	縦長剥片	8.3	3.0	0.9	30.0	旧石器時代遺物の可能性アリ
207	I2-5-2	石槍	2	頁岩	完形	不明	8.8	3.1	1.2	29.8	
208	H7-6G-VI	石錐	A1	頁岩	完形	横長剥片	7.5	5.2	1.8	43.5	
209	E6-9-VI	石錐	A1	頁岩	完形	横長剥片(A)	6.3	6.5	1.8	61.0	
210	I5-10G-I	石錐	A1	頁岩	完形	横長剥片	6.8	4.0	1.0	29.5	
211	G7-5-VI	石錐	A2	黒色安山岩	完形	横長剥片	4.9	6.8	0.9	22.0	
212	I7-5064-VI	石錐	A2	頁岩	完形	横長剥片(A)	8.2	4.2	1.3	29.3	
213	J8-402-V	石錐	A2	頁岩	完形	縦長剥片(B)	6.2	5.0	1.3	22.7	
214	F5-11G-VI	石錐	B	黒色安山岩	完形	不明	4.6	4.0	1.3	21.0	
215	D5-93-VI	石錐	B	黒色安山岩	完形	横長剥片(D)	4.2	2.7	0.6	8.0	
216	F6-704-VI	石錐	B	頁岩	完形	剥片	4.6	2.6	0.9	6.0	
217	K2-12G-I	石錐	B	珪質頁岩	完形	不明	2.5	4.4	1.0	6.0	
218	C6-9G-V	石錐	B	頁岩	先端部欠損	縦長剥片	5.3	2.6	0.6	7.1	
219	00-5G-V	石錐	B	黒色安山岩	完形	横長剥片	5.2	3.1	1.3	11.8	
220	I7-4349-VI	石錐	C1	珪質頁岩	完形	不明	3.6	1.4	0.4	1.5	
221	F6-11G	石錐	C1	鉄石英	先端部欠損	不明	(3.2)	2.1	1.3	6.5	
222	G6-584	石錐	C2	珪質頁岩	完形	不明	3.5	0.7	0.5	1.2	
223	00-3G-V	石錐	B	黒色安山岩	完形	横長剥片	7.0	1.7	1.4	13.0	
224	I8-4-VI	石錐	B	頁岩	完形	剥片	3.2	2.3	1.2	3.0	
225	E6-10G-VI	石錐	B	珪質頁岩	完形	剥片	4.8	1.1	0.6	2.0	
226	H6-20G	石錐	B	輝石安山岩	完形	縦長剥片	4.7	1.4	0.9	4.0	
227	H7-5G-VI	石錐	D	黒色安山岩	完形	三角柱状	10.5	2.7	1.8	38.0	
228	C6-3G-VI	石錐	A1	頁岩	完形	縦長剥片	11.0	3.3	1.5	52.0	
229	G5-23G-V	石錐	D	黒色安山岩	完形	三角柱状	12.7	2.3	1.8	42.9	
230	I7-6G-VI	石匙	B2	凝灰岩	完形	横長剥片(C)	5.6	3.5	0.7	7.6	
231	H8-591-VI	石匙	B1	珪質頁岩	完形	縦長剥片(1)	5.2	2.9	1.0	10.4	
232	H6-11G-VI	石匙	A2	珪質頁岩	摘部欠損	横長剥片(B)	(2.9)	4.3	0.8	6.8	
233	H4-25G-I	石匙	B2	黒色安山岩	完形	横長剥片(A)	3.5	7.1	1.0	20.5	
234	F3-11-V	石匙	B1	頁岩	略完形	横長剥片(C)	9.0	5.1	1.1	38.5	
235	F6-10G-VI	石匙	C1	黒曜石	完形	縦長剥片(1)	6.4	3.9	1.6	21.8	
236	DST	石匙	C1	黒色安山岩	完形	縦長剥片(1)	5.6	3.3	0.9	14.5	
237	I7-5046-VI	石匙	C1	頁岩	完形	縦長剥片(1)	10.3	5.0	2.2	59.5	
238	F6-16G-VI	石匙	C1	頁岩	完形	縦長剥片(2)	7.8	3.3	1.8	30.2	
239	H6-8G-VI	石匙	C2	黒色安山岩	完形	縦長剥片(2)	5.5	5.2	1.5	32.0	
240	F7-5G-VI	石匙	C2	頁岩	完形	縦長剥片(2)	6.7	5.0	1.7	42.0	
241	E5-6G-V	石匙	A3	鉄石英	完形	不明	3.7	3.4	1.0	6.2	異形石器
242	G7-10G	ﾋﾞｴｽ・ｴｽｷｰﾕ	2	頁岩	完形	縦長剥片	4.1	3.6	1.5	21.0	折損した縦長剥片を素材とする
243	J4-25	ﾋﾞｴｽ・ｴｽｷｰﾕ	1	黒色安山岩	完形	横長剥片	4.0	2.7	1.3	19.4	折損した横長剥片の側縁部分を素材とする
244	F5-15G	ﾋﾞｴｽ・ｴｽｷｰﾕ	1	黒色安山岩	完形	剥片	3.5	2.6	1.1	17.2	
245	D6-3G-VI	板状石器	1	泥板岩	完形	板状礫	3.9	6.8	1.2	38.7	
246	I6-795-VI	板状石器	1	凝灰岩	完形	横長剥片?	4.4	5.3	1.4	29.8	
247	D7-8G-VI	三脚石器	1	粗粒安山岩	脚欠損	不明	7.6	9.1	2.5	122.0	
248	D5-106-VI	打製石斧	A1	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	12.5	5.9	2.9	228.6	未成品?
249	00-34-V	打製石斧	A1	黒色安山岩	完形(0)	縦長剥片	11.7	4.1	2.6	114.8	
250	J8-832-Ⅶチャ	打製石斧	A2	黒色安山岩	完形(0)	縦長剥片	10.2	3.3	2.1	96.5	
251	C5-25G-VI	打製石斧	A1	凝灰岩	完形(0)	縦長剥片	11.8	3.8	2.7	119.0	
252	D5-85-VI	打製石斧	A1	頁岩	完形(0)	横長剥片	10.8	4.5	3.2	120.3	裏面右側縁に新しい浅角度剥離→リダクション?
253	H6-4193-VIｸﾛ	打製石斧	A2	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	10.5	3.9	0.9	72.7	
254	H6-3052-VI	打製石斧	A2	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	11.8	5.1	2.5	141.8	
255	H6-4384-VIｸﾛ	打製石斧	A2	頁岩	完形(0)	縦長剥片	12.7	5.3	2.8	179.2	
256	C5-50-VIｸﾛ	打製石斧	A2	頁岩	完形(0)	横長剥片	11.4	4.9	3.0	147.3	
257	F5-11-V	打製石斧	A2	黒色安山岩	完形(0)	縦長剥片	10.4	5.0	1.9	116.0	
258	E2-12	打製石斧	B2	凝灰岩	完形(0)	縦長剥片	12.5	5.4	2.4	132.0	
259	D5-51-V	打製石斧	A2	凝灰岩	完形(0)	縦長剥片	8.3	4.2	1.5	53.4	刃部使用痕a
260	I7-11G-VI	打製石斧	B2	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	8.9	3.0	1.9	48.2	
261	I7-4723-VI	打製石斧	B2	頁岩	完形(0)	縦長剥片	10.9	4.2	2.5	103.8	刃部使用痕a
262	E3-16-V	打製石斧	B2	凝灰岩	完形(0)	不明	14.4	5.1	2.7	212.0	未成品?
263	E3-107-V	打製石斧	B2	黒色安山岩	完形(0)	縦長剥片	11.6	5.1	3.0	156.3	
264	00-1G-V	打製石斧	B2	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	11.1	5.6	3.3	160.2	
265	D5-25-V	打製石斧	B2	頁岩	完形(0)	不明	9.6	5.0	2.3	109.9	
266	D6-3G-V	打製石斧	B2	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	10.6	4.5	2.5	98.9	
267	I5-5-65	打製石斧	B2	黒色安山岩	完形(0)	縦長剥片	14.9	4.8	2.8	200.1	
268	F6-53-V	打製石斧	B3	頁岩	完形(0)	横長剥片	11.7	3.6	2.3	82.7	刃部使用痕a
269	F6-58-V	打製石斧	B3	凝灰岩	完形(0)	不明	17.1	4.2	3.8	203.7	
270	I5-13-342	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	19.2	7.7	2.4	330.1	
271	A4-20G	打製石斧	B1	黒色安山岩	完形(0)	横長剥片	13.7	5.9	2.6	187.8	
272	H6-1672-VI	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	11.7	3.1	1.3	62.5	
273	E5-4G-V	打製石斧	B1	緑色凝灰岩	完形(0)	横長剥片	13.4	5.6	1.9	157.3	
274	B4-17G-V	打製石斧	B1	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	11.8	5.6	1.9	157.3	
275	G4-9-7	打製石斧	B1	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	14.5	5.8	1.6	130.1	
276	D4-146-V	打製石斧	B1	黒色安山岩	完形(0)	礫素材	11.7	6.4	2.1	198.7	
277	I5-9-174	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	12.7	4.7	2.0	140.1	刃部使用痕a
278	00-2G-V	打製石斧	D	珪質頁岩	完形(0)	縦長剥片	7.0	3.3	0.9	35.3	
279	I5-17-187	打製石斧	B1	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	10.4	4.9	1.4	76.2	刃部使用痕b
280	00-4G-V	打製石斧	B2	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	11.9	5.8	2.6	149.7	
281	I7-4557-VI	打製石斧	B2	頁岩	完形(0)	横長剥片	12.2	5.7	3.0	169.5	刃部使用痕b
282	00-4G-V	打製石斧	B1	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	10.8	5.2	1.7	119.4	
283	I5-14-194	打製石斧	B1	凝灰岩	完形(0)	横長剥片	10.3	4.7	1.9	97.1	
284	H5-2-78	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	10.7	5.6	2.4	108.8	刃部使用痕a
285	D6-27-V	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	11.2	5.6	2.0	117.6	
286	F5-23-V	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	縦長剥片	12.0	5.7	2.1	120.0	刃部使用痕a
287	F6-516-VI下	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	縦長剥片	8.4	3.9	1.4	42.3	
288	E6-101-V	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	13.3	6.9	2.6	264.4	
289	F5-15G-V	打製石斧	－	頁岩	完形(0)	礫素材	9.2	4.5	1.3	90.0	刃部磨製
290	I5-8-64	打製石斧	B1	頁岩	基部欠損(1)	横長剥片	10.1	5.2	1.4	99.8	刃部磨製
291	J4-5-1	打製石斧	C	頁岩	完形(0)	横長剥片	11.6	9.5	2.2	272.8	
292	K3-21-V	打製石斧	C	頁岩	完形(0)	横長剥片	9.9	8.9	2.0	162.4	刃部使用痕b
293	F2-124-V	打製石斧	B1	頁岩	完形(0)	縦長剥片	9.3	(6.3)	2.8	135.1	
294	E6-22G-VI	打製石斧	B1	黒色安山岩	刃部欠損(2)	横長剥片	9.1	(6.4)	1.8	80.4	
295	J4-97	打製石斧	B1	黒色安山岩	完形(0)	縦長剥片	8.7	6.5	2.1	83.7	

第 67 表　石器観察表（3）

No.	出土位置	器種名	細別	石材名	部位	素材	計測数値				備考
							長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
296	C3-47-V	打製石斧	A2+B1	頁岩	完形(0)	横長剥片	10.8	6.6	2.6	169.3	未成品
297	I7-3289-VIｸﾛ	打製石斧	C	頁岩	刃部破片(6)	横長剥片	(9.2)	9.2	2.2	168.6	切り合いの新旧関係から刃部使用痕の後に側縁部調整が施されている。
298	I7-4400-VI	打製石斧	B1	凝灰岩	基部欠損(1)	礫素材	10.8	6.3	4.1	293.1	楔様の石器として転用?
299	G6-107-VI	不定形石器	Ia-1	黒色安山岩	完形	縦長剥片	6.4	4.7	1.3	40.3	
300	G5-4-53	不定形石器	Ia-1	黒色安山岩	完形	縦長剥片	72.4	40.1	1.2	42.3	
301	H5-2G	不定形石器	Ia-2	黒色安山岩	完形	縦長剥片	8.0	4.2	1.2	45.7	
302	A2	不定形石器	Ia-3	黒色安山岩	完形	縦長剥片	8.1	3.4	1.3	38.4	
303	A6-10G	不定形石器	Ic-1	黒色安山岩	完形	縦長剥片	6.7	4.1	2.3	82.1	
304	F5-23-VI	不定形石器	Ic-1	頁岩	完形	縦長剥片	6.5	3.6	1.2	14.2	
305	F6-8-VI	不定形石器	Ic-2	黒色安山岩	完形	縦長剥片	9.6	4.9	2.3	74.0	
306	G6-25G	不定形石器	Ic-2	頁岩	完形	縦長剥片	9.2	3.1	1.5	35.1	
307	I5-3-97	不定形石器	Ic-3	凝灰岩	完形	縦長剥片	11.2	3.9	2.0	99.7	
308	E5-19G-VI	不定形石器	Ic-3	頁岩	完形	縦長剥片	9.8	6.2	2.3	105.0	
309	I6-3491-VI	不定形石器	Ic-3	黒色安山岩	完形	縦長剥片	9.5	5.1	1.5	59.9	
310	H6-4216-VI	不定形石器	Ic-3	黒色安山岩	完形	縦長剥片	7.6	4.6	2.1	52.1	
311	F5-17G-V	不定形石器	Id-1	頁岩	完形	縦長剥片	8.4	5.2	3.1	106.6	
312	E4-7G-V	不定形石器	Id-1	黒色安山岩	完形	縦長剥片	7.8	3.5	1.8	41.5	
313	H6-3021-VI	不定形石器	Id-1	頁岩	完形	縦長剥片	5.2	3.3	1.5	39.5	
314	HT-14	不定形石器	Id-2	頁岩	完形	縦長剥片	10.0	6.1	2.1	130.5	
315	H6-2639-VI	不定形石器	Id-2	頁岩	完形	縦長剥片	10.7	5.8	3.4	129.4	
316	F6-13G-V	不定形石器	Id-2	頁岩	完形	縦長剥片	8.1	4.8	2.3	65.2	
317	C5-24G-V	不定形石器	Id-3	頁岩	完形	縦長剥片	5.1	3.2	1.1	17.1	
318	H6-2194-VI	不定形石器	Id-3	頁岩	完形	縦長剥片	8.8	4.7	3.5	105.1	
319	H6-3241-VI	不定形石器	Id-3	頁岩	完形	縦長剥片	4.8	3.2	1.1	11.2	
320	G4-2G-V	不定形石器	Ie-3	頁岩	完形	縦長剥片	5.4	2.9	1.0	15.3	
321	I7-14G	不定形石器	If-1	珪質頁岩	完形	縦長剥片	4.9	3.8	1.4	29.4	
322	C6-3G-VI	不定形石器	If-3	頁岩	完形	縦長剥片	5.8	3.5	1.3	19.2	
323	J3-P18	不定形石器	If-3	黒色安山岩	完形	縦長剥片	7.9	4.5	1.9	80.5	
324	J7-7G-VI	不定形石器	Ig-3	黒色安山岩	完形	縦長剥片	12.7	5.0	3.3	180.1	
325	I9-5-10	不定形石器	Ig-3	頁岩	完形	縦長剥片	15.6	4.1	2.5	138.8	
326	J6-16G-V	不定形石器	Ii-3	流紋岩	完形	縦長剥片	6.9	4.9	1.2	43.6	
327	H6-1682-V	不定形石器	IIa-1	凝灰岩	完形	横長剥片	5.6	7.9	2.9	52.5	
328	D3-368-V	不定形石器	IIa-1	凝灰岩	完形	横長剥片	5.9	9.8	2.0	74.6	
329	J6-21G	不定形石器	IIa-2	頁岩	完形	横長剥片	2.8	5.8	1.8	28.6	
330	H6-13G	不定形石器	IIa-2	黒色安山岩	完形	横長剥片	5.2	7.4	1.7	49.9	
331	H6-1942-VI	不定形石器	IIa-2	頁岩	完形	横長剥片	5.7	6.8	2.4	97.3	
332	G7	不定形石器	IIa-3	頁岩	完形	横長剥片	5.7	5.9	1.6	46.5	
333	H6-3300-VI	不定形石器	IIa-3	黒色安山岩	完形	横長剥片	5.0	6.8	1.2	39.5	
334	F5-12G-V	不定形石器	IIa-3	黒色安山岩	完形	横長剥片	4.6	7.3	1.5	54.1	
335	C4-21G-V	不定形石器	IIb-1	頁岩	完形	横長剥片	6.2	7.8	2.4	89.1	
336	E2-21-V	不定形石器	IIb-1	黒色安山岩	完形	横長剥片	4.0	6.2	1.2	24.1	
337	H5-11G-I	不定形石器	IIb-1	頁岩	完形	横長剥片	3.8	4.5	1.7	23.3	
338	J6-524-VI	不定形石器	IIb-2	珪質頁岩	完形	横長剥片	4.0	5.3	1.1	20.1	
339	I8-13	不定形石器	IIb-2	黒色安山岩	完形	横長剥片	4.8	5.7	1.2	31.7	
340	I8-197-V	不定形石器	IIb-2	頁岩	完形	横長剥片	4.7	7.3	1.2	30.6	
341	J7-4299-VIｸﾛ	不定形石器	IIb-3	黒色安山岩	完形	横長剥片	6.0	7.3	1.2	49.4	
342	J7-11G-VI	不定形石器	IIb-3	頁岩	完形	横長剥片	3.4	4.2	0.8	14.2	
343	J7-2498-VIｸﾛ	不定形石器	IIc-1	黒色安山岩	完形	横長剥片	6.0	8.9	2.9	68.0	
344	F6-18G-V	不定形石器	IIc-1	黒色安山岩	完形	横長剥片	7.5	6.3	1.9	62.8	
345	F6-12G-V	不定形石器	IIc-1	頁岩	完形	横長剥片	5.6	6.5	1.4	44.5	
346	F5-24G-V	不定形石器	IIc-2	凝灰岩	完形	横長剥片	4.0	6.7	2.1	60.7	
347	F6-1G	不定形石器	IIc-2	頁岩	完形	横長剥片	7.2	4.8	2.4	57.1	
348	E6-19	不定形石器	IIc-2	黒色安山岩	完形	横長剥片	6.4	6.1	1.6	66.6	
349	F6-291-V	不定形石器	IIc-3	頁岩	完形	横長剥片	8.4	7.0	1.7	83.8	
350	F6-14G	不定形石器	IIc-3	珪質頁岩	完形	横長剥片	4.5	7.3	2.3	70.3	
351	I6-4092-VIｸﾛ	不定形石器	IId-1	頁岩	完形	横長剥片	6.5	5.6	1.7	53.1	
352	G6-472-VI	不定形石器	IId-1	黒色安山岩	完形	横長剥片	7.6	7.0	1.3	53.6	
353	E6-8G-V	不定形石器	IId-2	頁岩	完形	横長剥片	7.2	7.0	1.6	61.8	
354	F6-9G-V	不定形石器	IId-2	頁岩	完形	横長剥片	5.7	5.6	2.5	50.8	
355	H6-1723-VI	不定形石器	IId-2	頁岩	完形	横長剥片	7.4	6.4	2.0	46.2	
356	H5-21-9	不定形石器	IId-3	珪質頁岩	完形	横長剥片	4.0	7.0	1.8	31.5	
357	00-18-V	不定形石器	IId-3	頁岩	完形	横長剥片	5.6	4.9	1.6	41.8	
358	B5-9G-VI	不定形石器	IId-3	頁岩	完形	横長剥片	6.3	6.4	2.7	77.4	
359	F6-10G-V	不定形石器	IIe-3	頁岩	完形	横長剥片	3.7	3.4	1.4	10.3	
360	I7-19G-VI	不定形石器	IIe-3	頁岩	完形	横長剥片	3.4	5.2	1.5	22.1	
361	F6-2G-V	不定形石器	IIe-1	黒色安山岩	完形	横長剥片	2.4	6.1	1.3	18.1	
362	K7-160-VI	不定形石器	IIf-2	頁岩	完形	横長剥片	4.9	7.9	1.6	48.3	
363	D6-20G-VI	不定形石器	IIf-1	頁岩	完形	横長剥片	5.1	8.1	1.5	46.4	
364	G6-541-VI	不定形石器	IIf-1	黒色安山岩	完形	横長剥片	4.0	4.4	1.6	30.2	
365	F6-617-VIｸﾛ	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	5.0	9.0	2.2	87.3	
366	F6-457-VI	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	5.9	9.2	2.1	87.9	
367	F6-4G-V	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	5.2	5.6	1.5	36.0	
368	D6-9G-VI	不定形石器	IIf-3	黒色安山岩	完形	横長剥片	5.3	9.8	1.4	64.5	
369	F6-25G-VI	不定形石器	IIf-3	頁岩	完形	横長剥片	6.1	5.3	1.6	49.9	
370	G7-1G-V	不定形石器	IIg-3	頁岩	完形	横長剥片	6.5	4.9	1.6	49.3	
371	D5-16-VI	不定形石器	IIg-3	黒色安山岩	完形	横長剥片	5.5	6.6	2.2	87.5	
372	I7-4805-VI	不定形石器	IIh-1	頁岩	完形	横長剥片	4.0	6.3	2.3	45.4	
373	J6-1427-VIｸﾛ	不定形石器	IIh-2	頁岩	完形	横長剥片	4.6	6.8	2.2	55.3	
374	I5-1-169	不定形石器	IIh-3	頁岩	完形	横長剥片	4.6	6.3	1.4	33.3	
375	F7-9G	不定形石器	IIh-3	黒色安山岩	完形	横長剥片	5.0	5.8	2.5	64.8	
376	H7-1G	不定形石器	IIi-2	頁岩	完形	横長剥片	4.1	5.6	1.8	36.6	
377	F6-603-VI	不定形石器	IIi-3	頁岩	完形	横長剥片	5.9	6.6	2.3	64.2	
378	I7-4084-VI	不定形石器	IIi-3	頁岩	完形	横長剥片	5.5	8.3	1.3	81.1	
379	C5-6G-V	不定形石器	IIi-3	頁岩	完形	横長剥片	1.9	4.4	1.5	5.5	
380	E2-7	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	17.8	7.2	4.3	784.8	刃部使用痕
381	B5-25G-I+B5-20G-VI	磨製石斧	A2	斑レイ岩	完形(0)	不明	18.0	5.5	3.2	505.5	
382	H4-16-7	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	刃部欠損(2)	不明	16.1	9.2	4.1	957.1	
383	E6-316+C5-1b	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	10.8	5.2	2.4	252.0	刃部使用痕
384	I6-3589+J6-24-SD1	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	18.2	6.8	3.2	695.3	刃部使用痕
385	F6-250-VI	磨製石斧	A2	アプライト	刃部欠損(2)	不明	12.2	5.9	3.0	330.0	
386	K2-8-10	磨製石斧	A1	チャート	刃部欠損(2)	不明	8.9	4.5	2.2	155.8	
387	I8-629-V	磨製石斧	A2	斑レイ岩	完形(0)	不明	8.7	4.7	2.3	136.4	
388	I7-3307-VIｸﾛ	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	5.5	3.5	1.2	32.8	
389	I5-17G	磨製石斧	A2	不明	完形(0)	不明	5.6	3.5	1.2	38.5	
390	G7-50-VI	磨製石斧	A2	緑色凝灰岩	刃部欠損(2)	不明	10.9	4.9	3.5	261.2	
391	D5-128-VIｸﾛ	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	刃部欠損(2)	不明	15.8	5.8	2.8	459.2	

第 68 表　石器観察表（4）

No.	出土位置	器種名	細別	石材名	部位	素材	計測数値				備考
							長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
392	J5-12-20	磨製石斧	A3?	緑色凝灰岩	刃部欠損(2)	不明	12.2	5.7	2.9	345.5	敲打成形
393	92-9/4　D2	磨製石斧	A3	蛇紋岩類	刃部欠損(2)	不明	15.9	5.2	2.1	230.9	敲打成形痕
394	B3-15G-V	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	刃部欠損(2)	不明	7.5	3.4	2.4	107.0	
395	C5-4G-V	磨製石斧	A2?	蛇紋岩類	刃部破片(6)	不明	6.0	4.7	1.7	70.5	斜刃
396	C2-153-V	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	3.9	1.5	0.6	6.3	小型磨斧/基部に黒色付着物
397	E5-126-VI	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	基部欠損(1)	不明	4.1	2.4	1.1	19.3	小型磨斧
398	00-5G-V	磨製石斧	A1	蛇紋岩類	完形(0)	不明	3.9	1.6	0.8	8.5	小型磨斧
399	I7-4397-VI	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	3.1	1.2	0.5	3.4	小型磨斧/双刃
400	E2-HT1	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	3.4	1.3	0.8	5.7	小型磨斧
401	C4-22G	磨製石斧	B	蛇紋岩類	基部欠損(1)	不明	4.6	1.8	0.9	13.3	小型磨斧/擦切り痕が認められる
402	I6-829-VI	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	4.4	1.7	0.6	6.9	小型磨斧
403	G6-23G-VI	磨製石斧	A1	蛇紋岩類	完形(0)	不明	4.9	1.2	0.6	6.5	小型磨斧
404	D3-223-V	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	刃部欠損(2)	不明	6.5	2.8	1.3	35.6	刃部使用痕　平坦
405	H4-21-18	磨製石斧	B	蛇紋岩類	完形(0)	扁平礫素材	5.5	3.1	1.0	24.0	双刃
406	B3-15-1	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	6.6	2.9	1.1	39.7	
407	H5-21G	磨製石斧	B	蛇紋岩類	完形(0)	扁平礫素材	6.0	3.2	1.1	29.0	双刃
408	K1-21-12	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	5.1	2.3	1.0	16.9	小型磨斧/刃部使用痕
409	H4-24-3	磨製石斧	A2	チャート	基部欠損(1)	不明	3.4	2.5	0.8	12.4	小型磨斧
410	E6-10	磨製石斧	B	蛇紋岩類	完形(0)	扁平礫素材	3.8	1.9	0.6	6.1	小型磨斧
411	H5-9G-I	磨製石斧	A2	蛇紋岩類	完形(0)	不明	3.6	2.0	0.6	6.7	小型磨斧
412	1H-I	磨石類	A	粗粒安山岩	完形	礫素材	10.3	6.6	4.6	470.0	
413	H6-3276-VI	磨石類	B	粗粒安山岩	完形	礫素材	11.2	6.2	4.7	485.0	
414	D5-342	磨石類	A	粗粒安山岩	完形	礫素材	6.3	5.3	3.9	186.5	
415	J5-21-81	磨石類	F	粗粒安山岩	完形	礫素材	9.7	6.6	4.3	365.0	
416	I6-2506	磨石類	D	粗粒安山岩	完形	礫素材	10.5	9.1	5.1	705.0	
417	G6-17G-VIｸﾛ	磨石類	C	粗粒安山岩	完形	礫素材	5.6	5.4	3.8	162.2	
418	G6-1794-VIｸﾛ	磨石類	F	緑色凝灰岩	略完形	礫素材	14.0	6.8	4.2	430.0	
419	D5-97-VI	磨石類	D	粗粒安山岩	略完形	礫素材	12.7	6.4	4.7	620.0	
420	J5-22-102-V	磨石類	B	粗粒安山岩	完形	礫素材	10.7	7.4	6.4	835.0	
421	I5-13-360-7J	磨石類	E	粗粒安山岩	完形	礫素材	9.8	7.8	4.7	510.0	
422	J8-12	磨石類	F	頁岩	完形	礫素材	10.7	5.4	4.2	335.0	
423	E3-45-V	磨石類	H	粗粒安山岩	1/2	礫素材	9.2	6.5	4.9	400.0	
424	H6-17-VI	磨石類	G	斑レイ岩	完形	礫素材	6.1	2.1	1.6	37.2	
425	E5-9G-VI	磨石類	G	頁岩	完形	礫素材	9.7	3.6	2.4	127.6	
426	G6-14G	磨石類	G	斑レイ岩	完形	礫素材	9.7	3.6	2.6	159.5	
427	DST	磨石類	G	斑レイ岩	完形	礫素材	11.0	5.4	3.8	338.9	
428	I6-10G-I	磨石類	G	斑レイ岩	完形	磨斧の転用	8.5	4.5	2.4	178.9	
429	G5-9G-V	磨石類	G	凝灰岩	完形	礫素材	5.0	3.6	2.4	76.5	
430	J5-12-32+J1-18G	磨石類	-	緑色凝灰岩	－	礫素材	11.4	6.5	4.0	484.6	
430A	J5-12-32	磨石類	G	緑色凝灰岩	完形	礫素材	6.4	6.0	4.0	279.2	
430B	J1-18G	磨石類	G	緑色凝灰岩	完形	礫素材	4.9	6.5	3.8	205.4	
431	D6-3G-V	磨石類	I	硬質凝灰岩	完形	石核素材	5.0	5.2	2.8	89.1	周縁に敲打痕が残るもの
432	H5-11G	磨石類	I	緑色凝灰岩	完形	石核素材	5.0	4.9	2.9	61.0	周縁に敲打痕が残るもの
433	I7-305-V	磨石類	I	頁岩	完形	石核素材	8.8	5.8	3.7	273.8	
434	I8-10G-I	磨石類	I	黒色頁岩	完形	石核素材	5.0	4.8	3.9	130.8	周縁に敲打痕が残るもの
435	DST	磨石類	I	蛇紋岩類	完形	石核素材	5.4	5.2	2.7	94.9	周縁に敲打痕が残るもの/磨斧の転用
436	I2-4-1	磨石類	I	黒色安山岩	完形	不明	6.0	6.0	5.8	307.0	全面に敲打痕が残るタイプ
437	DST	磨石類	I	珪質頁岩	完形	石核素材	12.0	4.6	4.3	250.0	全面に敲打痕が残るタイプ
438	F5-15G-V	磨石類	I	頁岩	完形	礫素材	12.5	5.2	3.2	155.2	
写真	B2-21G-I	磨石類	A	粗粒安山岩	完形	礫素材	11.6	7.7	6.1	820.0	
写真	J7-987-VI	磨石類	C	粗粒安山岩	完形	礫素材	9.8	8.0	5.8	630.0	
写真	B4-2G-VI	磨石類	E	粗粒安山岩	完形	礫素材	8.6	8.0	5.0	500.0	
写真	J6-500-VI	磨石類	H	粗粒安山岩	完形	礫素材	13.7	6.7	4.8	615.0	
写真	A2-I	磨石類	H	粗粒安山岩	完形	礫素材	15.5	7.3	4.7	835.0	
写真	I5-13-322	磨石類	不明	粗粒安山岩	1/2	礫素材	(8.3)	5.7	5.0	290.0	
写真	P33-9/4	磨石類	B	粗粒安山岩	完形	礫素材	9.8	9.1	5.7	878.0	
439	C5-17-VI	砥石	3	粗砂岩	完形	石皿の転用	19.1	10.1	4.9	609.3	
440	E2-2	砥石	3	粗砂岩	略完形	石皿の転用	10.6	9.6	4.9	452.2	
441	J7-2876-VIｸﾛ	砥石	2	砂岩	略完形	石皿の転用	11.7	9.1	4.9	412.6	
442	00-2G-V	砥石	2	斑レイ岩	完形	石皿の転用	7.7	6.8	3.4	152.2	
443	K2-13G	砥石	3	砂岩	略完形	石皿の転用	7.2	5.6	3.0	98.6	
444	J5-11G	砥石	3	細粒砂岩	略完形	石皿の転用	7.5	8.0	1.9	76.7	
445	F6-268-VI下	砥石	1	粗粒安山岩	完形	礫素材	17.0	3.5	2.9	212.0	
446	D6-141-VIｸﾛ	砥石	3	砂岩	完形	礫素材	15.2	4.7	3.0	197.6	
447	H3-20-10	砥石	2	粗粒安山岩	完形	礫素材	14.8	11.9	5.1	1110.0	
448	C5-7G-V	石錘	A	砂岩	完形	礫素材	4.4	3.7	1.2	28.4	
449	B3-17G-V	石錘	A	粗粒安山岩	完形	礫素材	3.9	3.8	0.9	31.5	
450	K2-1-9	石錘	A	凝灰岩	完形	礫素材	4.8	3.3	1.5	30.2	
451	J5-13G	石錘	B	不明	完形	礫素材	4.4	2.9	0.9	13.4	
452	H7-11G-VI	石錘	B	不明	完形	礫素材	5.0	3.1	1.4	34.7	
453	G5-32-V	石皿類	A1	粗粒安山岩	完形	不明	31.6	18.5	9.0	6100.0	
454	C5-4G-V+C6-5G-VI+D5-145-V	石皿類	A1	砂岩	略完形	不明	25.2	18.9	6.8	3125.0	
455	K7	石皿類	A1	粗粒安山岩	1/2	不明	(13.5)	22.7	9.2	3057.0	
456	DST-表採-VI	石皿類	A1	粗粒安山岩	1/2	不明	(16.7)	19.9	9.5	3450.0	
457	DST	石皿類	A1	粗粒安山岩	2/3	不明	(22.5)	19.8	9.0	3960.0	
458	H6-3525-VI	石皿類	A2	玄武岩	1/4	不明	(18.5)	(13.2)	9.6	1870.0	
459	G6-2089-VIｸﾛ	石皿類	A1a	玄武岩	1/5	不明	(21.8)	(24.5)	8.1	3324.0	石材には「にぶい赤褐色」の玄武岩を素材としており、他の礫石器とは明らかに異なる石質である。
460	H6-1237	石皿類	C	粗粒安山岩	完形	礫素材	35.8	25.0	6.2	6500.0	
461	B4-9-VI+9J-251	石皿類	B	粗粒安山岩	1/2	礫素材	19.0	24.9	11.5	6000.0	
462	E5	石皿類	B	砂岩	1/2	礫素材	17.4	22.5	6.6	2850.0	
463	J5-17-56-V+J5-2H-2	石皿類	B	粗粒安山岩	1/2	礫素材	16.0	17.7	5.3	1710.0	
464	DST	石皿類	C	粗粒安山岩	完形	礫素材	29.0	24.4	8.9	10100.0	
465	D1-10	石皿類	C	粗粒安山岩	完形	礫素材	22.8	23.4	6.6	5100.0	
466	I6-1487-VI	石錐	A	頁岩	完形	縦長剥片	7.2	3.2	1.5	29.5	CD-ROM
467	I7-3259-VIクロ	石錐	B	黒色安山岩	完形	縦長剥片	6.9	1.7	1.6	11.2	CD-ROM
468	J3-23	ﾋﾞｴｽ・ｴｽｷｰﾕ	1	黒色安山岩	完形	横長剥片	3.9	4.4	6.5	9.7	CD-ROM
469	F6-14G-V	板状石器	1	頁岩	完形	横長剥片	4.1	5.8	1.3	32.0	CD-ROM
470	F5-153-VIｸﾛ	石皿類	A1a	粗粒安山岩	1/4	不明	(14.5)	(21.3)	(8.4)	2861.0	CD-ROM

第 69 表　石器観察表（5）

４．　石製品

Ａ．石製品の概要

ここでは呪術具や装身具など利器的目的以外に用いられたと考えられるものの中で、特に研磨調整を施すものを石製品として分類した。本遺跡からは石棒・三角壇形石製品・ミニチュア石皿・軽石製石製品・石製装身具が検出されている。石製品としたものは非在地系石材を利用するものが多く、器種内における石材の種類も限られたものが多い。このことは石製品が限定された地域で製作されたことを示唆するものと言える。また使用された石材にはヒスイのように原石自体に希少価値を持つものと、緑泥片岩や滑石、白色凝灰岩のように製作の利便性を高めるために選択されたと考えられる石材に分離され、本遺跡出土資料では前者は原石段階で、後者は製品段階で搬入されたものと推察される。

以下に分類の基準および計測部位、部位名称について示す（第 125 図）。

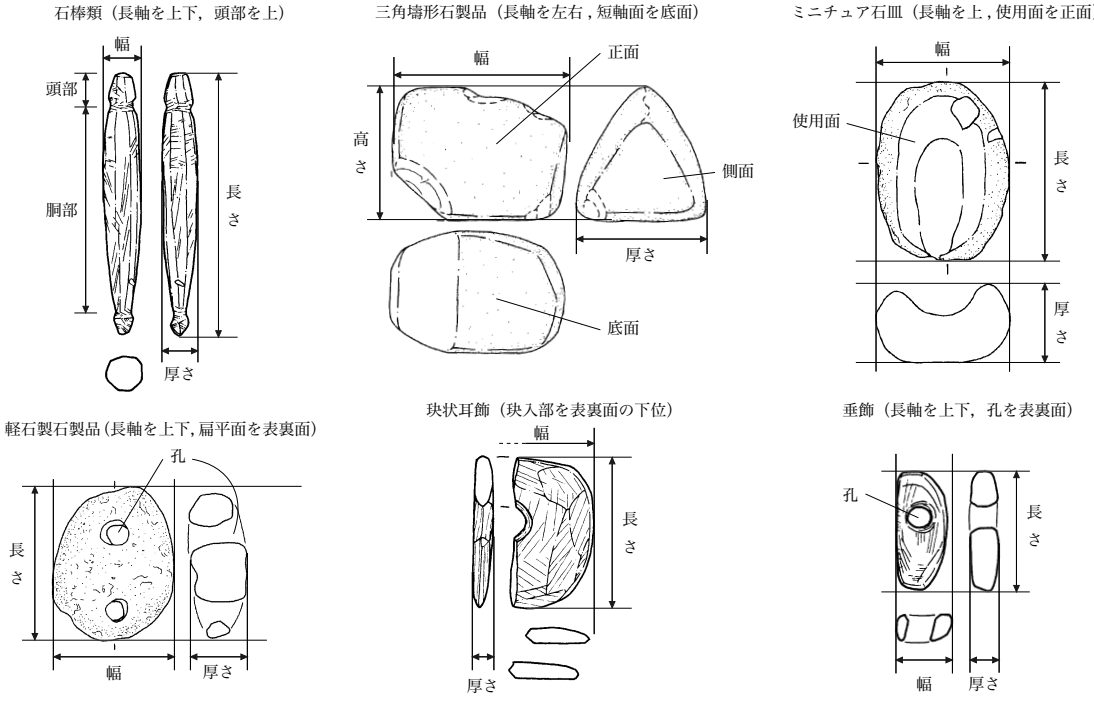
ａ）石棒類　いわゆる石棒・石剣・細形石棒（註 151）といった棒状の磨製石製品と定義される石棒類（註 162）以外にも、本遺跡からは敲打成形のみあるいは部分的な研磨調整のみで棒状に加工したものが出土している。こうした一群を石棒に属するものと考え、ここでは石棒類として扱った。

ｂ）三角壇形石製品　研磨調整によって三角柱状に整形された石製品を指す。

ｃ）ミニチュア石皿　使用面積の大きさから磨石類の磨り面とは対応しない小形のものを石皿類とは区別し本類とした。長軸長が 20cm、短軸長 12cm に満たない程度の小形の石皿形石製品を指す。

ｄ）軽石製石製品　軽石を素材とした有孔の石製品を指す。石製装身具（玉類）とは孔の大きさや石材の選択性が大きく異なっている点で区別されるものと判断される。

ｅ）石製装身具　玦状耳飾、垂飾とその未成品としたものが認められる。なお、玦状耳飾の計測部位は堀江武司の分類（註 153）に基づき設定した。



第 125 図　石製品分類図

Ｂ．石製品各説

ａ）石棒類（図版第 709 図・第 716 図・第 723 図・第 752・第 753 図）

石製品の中では最も出土点数が多く、36 点が検出された。砥石に転用された資料も含め 17 点を図化している。接合関係は確認されなかったが、図版第 752 図２・５・６の３点は石質や形状から同質個体と考えられる。被熱を受けた痕跡があり、破損の要因と推察される。

製作技術の上では、局所的な敲打成形や弱い研磨調整を施したもの（A類）と敲打と研磨による入念な成形によって製作されるもの（B類）に大別される。破損品が多いため不確定だが概ねA類が無頭石棒、B類が有頭石棒に対応する。A類が 21 点、B類が 15 点という内訳となり、B類には B2 類（石剣）、B3 類（細形石棒）が１点ずつ出土している。本器種は形状分類の他に大きさ（または規格が重要な単位と考えられるため、形状と規格の双方向から記述を行なう。

分類（第 126 図）

A 類：局所的な敲打成形や弱い研磨調整を施したもの。

A1 類：稜に対し敲打加工によって成形を施したもの。

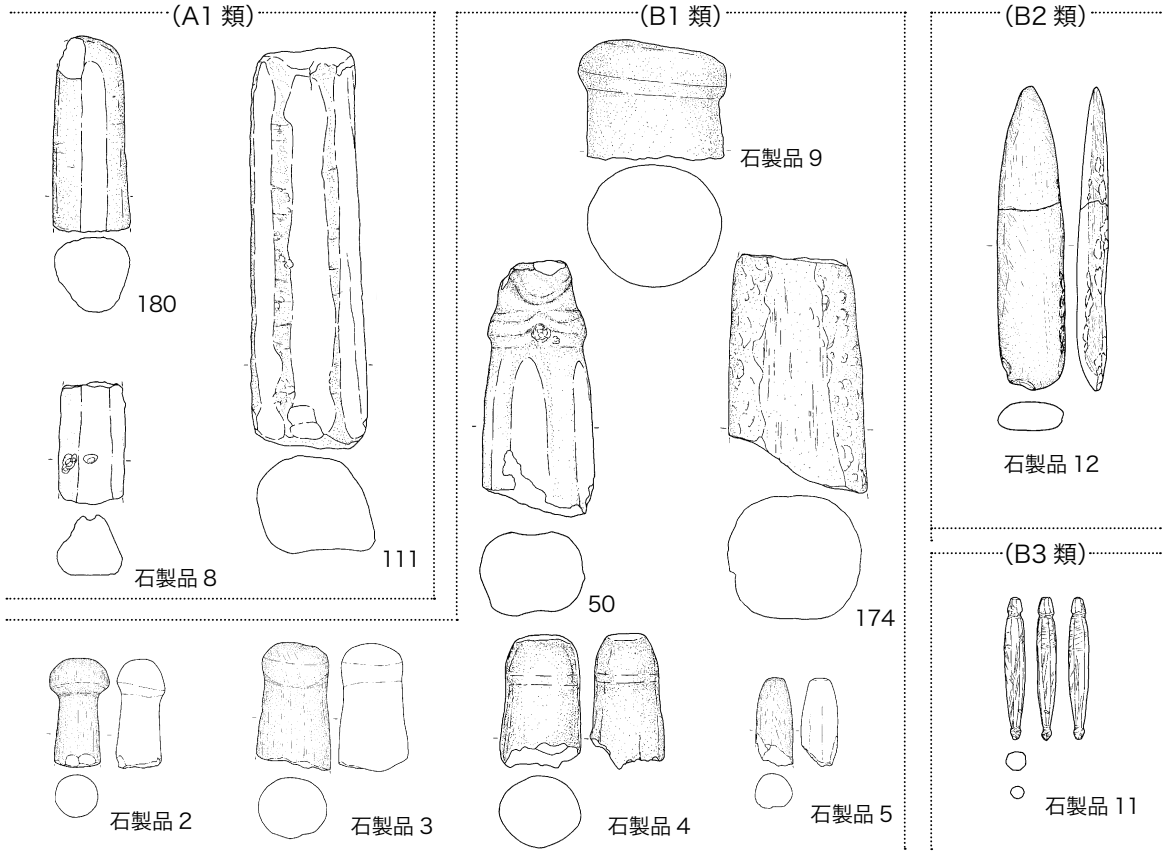
A2 類：弱い研磨が側面に認められるもの。

B 類：全面に敲打成形と研磨調整を施したもの。

B1 類：胴部断面が円柱状をなすもの（石棒）。

B2 類：胴部断面が扁平な楕円形をなすもの（石剣）。

B3 類：細かな彫刻を施した小形の石棒（細形石棒）。



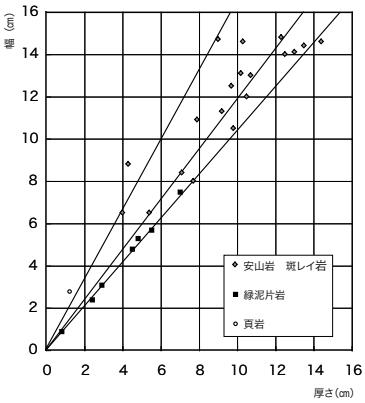
第 126 図　石棒分類図

大きさ（第 127 図 1） 本遺跡出土資料は完形品の数量が少数であるため、ここでは胴部の最大幅と最大厚の測定値から比較を行なう。胴部の大きさから概ね、大形：幅 10 ～ 16cm、厚さ 8 ～ 14cm と中形：幅 4 ～ 9 cm、厚さ 4 ～ 8 cm、小形：幅 2 ～ 4 cm、厚さ 2 ～ 4 cm、細形：幅 1 ～ 2 cm、厚さ 1 ～ 2 cm での分離が可能と言えそうである。類型別では A1 類が大形～中形、B 類が大形～小形に認められる。A 類は幅厚の比率は 1.5：1 ～ 2：1 となり、全面を成形する B1 類に比べ横断面が楕円または多角形を呈するものが多い。

石材（第 127 図 2） 石材では緑泥片岩と安山岩、斑レイ岩が用いられている。安山岩としたものの中で柱状節理が発達したものが含まれており、A 類および B1 類に多用される。また、緑泥片岩製としたものはすべて白色の斑点を有する三波川変成帯起源と考えられるものであり、同石材の原石や製作残滓と考えられる遺物の検出は確認されていないため、整品のまま搬入された可能性が高い。B1 類の中形と B3 類に限定された使用が認められており、同石材の流通時期を反映している可能性が考えられる。

欠損状況（第 127 図 3） 完形で出土したものは 4 点であり、類型別にみると 1a 類 2 点、1b 類 0 点、2 類 1 点、3 類 1 点という内訳となる。欠損状況では頭部を残したもの（B 類）1b 類のみ完形どころか 1 点の接合事例すら確認されていない状況であった。

分布・時期（第 127 図 4） 出土位置での内訳は、包含層 22 点、住居跡 5 点、土坑 6 点、配石 3 点となる。出土時期は第 9 号住居跡（V 期）から B1 類の出土があり、V（大木 8b 式並行）期以降、中期末～後期にかけて使用されたものと考えられる。



1. 石棒類幅厚分布図

	A1	B1	B2	B3	計
粗粒安山岩	11	3			14
玄武岩	1	1			2
閃緑岩	1				1
緑泥片岩		9		1	10
頁岩			1		1
不明	8				8
計	21	13	1	1	36

2. 石棒類石材組成表

	A1	B1	B2	B3	計
完形	2		1	1	4
先端部破片	2	9			11
胴部破片	2	4			6
不明	15				15
計	21	13	1	1	36

3. 石棒類残存部位数量表

4. 石棒類出土平面分布図

第 127 図　石棒

b）三角壕形石製品（図版第 753 図 13）

1 点のみ出土図化した。石材は白色凝灰岩を用いており、正面右肩と左底面側が欠損する。表面は風化が著しく整形痕は観察できないものの、全面を研磨整形によって無文に仕上げられたものと推察される。形状から三角壕形土製品との関連が窺える器種であり、廃棄帯からの出土であるため、出土位置からの時期を特定することは困難だが、三角壕形土製品との関連として見るならば縄文時代中期の所産であろう。

ｃ）ミニチュア石皿（図版第 707 図 30・第 721 図 153・第 753 図 14 ～ 16）

８点出土しており、うち５点を図化した。全面を成形し脚部を有するもの（30）が１点確認されているが、他は皿部のみ加工されたものである。磨石類の転用と考えられる裏面に凹痕を有するもの（15）が確認されている他、大きさや石質など磨石類との共通点が多い器種であることが指摘される。

ｄ）軽石製石製品（図版第 709 図 45）

３点の出土が確認されているが、うち１点のみ図化した。擦痕は観察されないが全面を研磨成形した後、穿孔したものと考えられる。45 に図示した孔が二つあるものの他、孔が一つのものと穿孔途中と考えられるものが確認されている。大きさは長さ 45 ～ 49cm、幅 2.6 ～ 4.2cm に分布し、重量は５～８g に分布する。遺構出土資料は、第９号住居跡から検出された１点のみで、出土土器からⅤ期（大木 8b 式並行期）の所産と考えられる。

ｅ）石製装身具（図版第 721 図 160・第 753 図 17 ～ 22）

玦状耳飾２点（18・19）と垂飾３点（160・17・20）、未成品２点（21・22）が検出され、すべて図化した。なお、玦状耳飾のうち１点は欠損後の端部に施された粗い研磨成形痕から、何らかの装身具に再生する過程もしくはパステル形石製品に転用した資料とも考えられる。

玦状耳飾　18 は端部に施された研磨成形痕以前に全面に施された丁寧な研磨調整痕と内湾する形状から玦状耳飾の欠損資料と判断した。石材は滑石製であり、切目率は不明だが、厚さ率 71% を示す。断面がややつぶれた円形を呈し、孔部径が大きなものと推察される。19 は左半分を欠失するものである。切目率は 47.6%、厚さ率は 25% を示し、切目部分がやや長く、断面が薄手の玦状耳飾である。

２点とも包含層からの出土であるため、出土位置からの時期決定は困難だが、堀江の分類（註 154）に当てはめて遺物の所属時期について触れておきたい。上記分類によると、18 はＡ類のものに近似する資料であることから縄文時代早期～前期の時間幅に、19 はＣ類とＤ類の中間的な部分に相当することから縄文時代前期末～中期前葉の時間幅に帰属する可能性が高い。本遺跡の主体となる時期の中での初期、ないし集落形成よりも若干以前に残された遺物と考えられる。

垂飾　穿孔の過程から完成品と未成品があるが、研磨調整のあり方から、１．研磨調整によって全面が成形されているもの（17）と２．側縁の切断面と鋭い縁辺を研磨調整したもの（20・22）、３．自然礫の表面を研磨しただけのもの（図版第 721 図 160・第 753 図 21）に大別できる。使用石材では 17 が滑石製、20・21・160 がヒスイ製、22 が磨製石斧の刃部破片資料（斑レイ岩製）であることを考えた場合、２と３の方法は硬質な石材を素材とした場合に選択される加工方法であったものと推察される。

出土資料から２種類の穿孔具を想定しうる未成品が確認されている。21 は管状の工具による穿孔途中に原石自体が半割したもので孔径は９mm を測る。22 は棒状の工具によって深さ２mm で穿孔が中断されたものである。また、成品においても孔径での比較から管状工具を使用したと考えられるのが 20 と 160 であり、二点とも厚さの８割程まで管状工具によって穿孔したと推察され、裏面からの細い穿孔は弾けによる破損防止のためと考えられる。穿孔途中のものを含め、すべてヒスイ製である。

No.	出土位置	器種名	細別	石材名	部位	素材	計測数値				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
50	9J-111	石棒類	B1	粗粒安山岩	頭部破片	不明	(25.5)	11.5	8.5	4900.0	砥面が観察される
111	J5-23-39J	石棒類	A1	粗粒安山岩	完形	柱状礫	44.8	12.8	1.2	9500.0	砥面が観察される
174	J4-P51	石棒類	B1	粗粒安山岩	胴部破片	不明	(26.3)	15.5	11.0	3000.0	
180	K4-P3	石棒類	A1	斑レイ岩	頭部破片	礫素材	(21.6)	8.5	8.6	2217.0	
1	I7-3213-VIｸﾛ	石棒類	B1	点紋緑泥片岩	頭部破片	不明	(16.3)	6.0	5.8	819.0	
2	I6-3G	石棒類	B1	点紋緑泥片岩	頭部破片	不明	(7.2)	3.9	3.1	113.0	5.6と同個体?
3	B4-1-V	石棒類	B1	粗粒安山岩	頭部破片	不明	(8.3)	4.8	4.5	350.0	
4	G8-4G-VI	石棒類	B1	点紋緑泥片岩	頭部破片	不明	(8.9)	5.3	4.8	362.0	
5	G4-24-8	石棒類	B1	点紋緑泥片岩	破片	不明	(5.8)	2.4	2.4	48.0	2.6と同個体?
6	K3-1-7	石棒類	B1	点紋緑泥片岩	胴部破片	不明	(6.5)	2.6	-	67.0	2.5と同個体?
7	G5-20G	石棒類	B1	点紋緑泥片岩	胴部破片	不明	(9.4)	5.2	-	158.0	
8	I5-24-115	石棒類	B1	点紋緑泥片岩	胴部破片	柱状礫	(13.5)	7.5	7.0	1110.0	
9	J1-22G	石棒類	B1	粗粒安山岩	頭部破片	不明	(13.5)	16.1	14.0	5480.0	
10	I6-3929-VI	石棒類	B1	玄武岩	完形	不明	(9.9)	14.7	9.0	1057.0	下面に磨面アリ、浮子か?
11	H4-20-1	石棒類	B3	点紋緑泥片岩	完形	不明	6.3	0.8	0.8	4.8	
12	J7-2189+3385	石棒類	B2	頁岩	完形	不明	6.4	8.2	6.1	164.7	
	A6-1-V	石棒類	B1	粗粒安山岩	頭部破片	不明	(23.2)	13.3	11.7	6080.0	
13	I7-2831-VI	三角壕形石製品		白色凝灰岩	一部欠損	不明	7.0	9.0	2.5	201.3	
30	8J-80	ﾐﾆﾁｭｱ石皿		粗粒安山岩	完形	礫素材	18.6	10.5	8.1	1615.5	
153	H4-P23	ﾐﾆﾁｭｱ石皿		玄武岩	完形	礫素材	7.4	5.2	2.8	112.0	
14	E2-23	ﾐﾆﾁｭｱ石皿		粗粒安山岩	1/2	礫素材	13.0	8.6	5.5	165.0	
15	DST	ﾐﾆﾁｭｱ石皿		粗粒安山岩	完形	礫素材	8.0	5.7	3.1	748.0	裏面に凹痕
16	H3-2-6	ﾐﾆﾁｭｱ石皿		粗粒安山岩	完形	礫素材	2.3	1.0	0.5	192.0	
45	9J	軽石製石製品		軽石	完形	不明	4.6	3.6	1.8	7.9	
160	H3-22-P9	石製装身具		ヒスイ	一部欠損	礫素材	(2.3)	(2.0)	2.0	10.5	
17	E2-10	石製装身具		滑石	完形	不明	2.5	1.0	0.6	2.4	
18	E2-9	石製装身具		滑石	完形	不明	4.0	2.1	1.1	7.0	玦状耳飾/パステル形石製品に転用?
19	I7-4340-VI	石製装身具		不明	1/2	不明	4.7	2.7	3.2	20.3	玦状耳飾
20	D3-5	石製装身具		ヒスイ	完形	礫素材	4.2	2.7	3.2	48.8	
21	J3-5	石製装身具		ヒスイ	–	礫素材	(4.5)	3.0	1.4	33.7	未成品
22	E3-11-V	石製装身具		斑レイ岩	–	磨斧の転用	13.4	2.9	1.3	76.1	未成品

第 70 表　石製品観察表

第Ⅴ章　その他の遺物

旧石器時代～縄文時代草創期に帰属すると考えられる石器（図版第754～第756図）

ここでは、これまで報告してきた縄文時代早期末葉～晩期以外に属すると考えられる石器を一括して報告する。これらは、石器分類時に抽出されたものであるが、莫大な量の石器に対しての分類作業であったため、サンプリングエラーがないとはいえない。潜在的にはさらに多くの石器がここに帰属する可能性が考えられる（註155）。

ここに含まれる石器は41点（543.55g）である。器種別には、尖頭器7点・127.31g（17.1%・23.4%）、ナイフ形石器1点・2.44g（2.4%・0.4%）、彫刻刀形石器3点・28.05g（7.3%・5.2%）、掻器3点・46.34g（7.3%・8.5%）、削器2点・80.54g（4.9%・14.8%）、斧形石器1点・14.38g（2.4%・2.6%）、二次加工または微細剥離痕のある石刃・剥片21点・224.81g（51.2%・41.4%）、石刃・剥片3点・19.67g（7.3%・3.6%）の内訳となる（註156）。組成する尖頭器・ナイフ形石器・彫刻刀形石器・掻器など定形器種の形態から見ると、いくつかの時期の石器が混在していると考えられる。また使用石材別には、珪質頁岩15点・204.65g（36.6%・37.7%）、頁岩4点・44.63g（9.8%・8.2%）、凝灰質頁岩3点・42.86g（7.3%・7.9%）、凝灰岩1点・14.39g（2.4%・2.6%）、玉髄3点・27.44g（7.3%・5.0%）、チャート4点・73.29g（9.8%・13.5%）、黒曜石4点・27.60g（9.8%・5.1%）、流紋岩1点・10.15g（2.4%・1.9%）、安山岩類6点・98.54g（14.6%・18.1%）の内訳となる（註157）。使用される石材は、在地系石材の主体をなす頁岩・安山岩・凝灰岩が他を圧倒するほど組成しないという点において、総体として縄文時代のあり方とはやや異なるように見受けられる。しかしながら、特に縄文時代の小型剥片石器類に関しては同様にこれら以外の石材を多用する傾向も認められるため、石材をもって時期判別することは難しいといえる（註158）。

〔石器各説〕

尖頭器・石槍（図版第754図1～4）　左右両側縁の加工が端部で交差することにより、鋭い先端部を作り出したあるいは推測される石器をここに分類した。加工は主に平坦剥離によるものが多く、形状は木葉形・柳葉形の槍先形を呈する（註159）。7点のうち4点を図化した。1は、浅黄色の風化面を呈する凝灰質頁岩を素材とする。加工は両面にわたり、素材面は残していない（両面加工尖頭器）（註160）。両面を平坦剥離によって加工した後に、裏面から正面への主に小さな加工によって全体的に周縁を整形している。また、下半は正面へ向かって折損する。2は、主に褐色の風化面を呈する（部分的に黄褐色を呈する）珪質頁岩製を素材とする。主に裏面への連続する小さな加工と正面の一部への小さな加工により、木葉形に成形されている（部分加工尖頭器）。先端は正面へ向かって折損するが、加工のあり方から先端で加工が交差すると考え尖頭器とした。3は、淡灰色の風化面を呈する凝灰質頁岩を素材とする。正裏面ともに平坦な剥離で加工した後に、裏面から正面への主に小さな加工によって特に右側縁を整形している（両面加工尖頭器）。下半は正面へ向かって折損する。正面には部分的に原面が残され、全体形状・断面形状ともに整っていないため、未製品の段階で折損・廃棄されたものであると考えられる。4は、全体に暗褐色の縞状のモヤがかかった半透明の黒曜石を素材とする。正面への比較的小さな加工によって先端部を作り出している。側縁に対しては微細剥離が認められるが、形状を整形するような加工は認められな

い（部分加工尖頭器）。下半は正面に向かって折損する。

これらの尖頭器は、近隣の道下遺跡（註 161）で認められる両面・半両面・部分・周縁加工の木葉形・柳葉形尖頭器に類似するものであると考えられる。１の尖頭器は全体形状が不明なため、決定することはできないが、本ノ木遺跡（註 162）などに特徴的な草創期の非常に細身の尖頭器である可能性も指摘できる（註 163）。図化した以外にも大型石槍が認められ、旧石器時代後期末～縄文時代草創期の石器が混在していることが示唆される。

ナイフ形石器（図版第 754 図５） 石刃あるいは縦長剥片を素材として、縁辺の一部を残して歯潰し状の加工が施されて整形された石器をここに分類した。５は、無斑晶ガラス質安山岩を素材とする。素材剥片の打面部を先端に設定し、打面部を除去するように左側縁全てと右側縁下半を加工している（Ⅳａ類）（註 164）。

ナイフ形石器は１点のみ抽出されただけであり、位置づけが難しい。しかしながら、尖頭器石器群においてもナイフ形石器に類するものが伴うとの指摘（註 165）もあり、こうした脈絡の中で検討が必要である。

彫刻刀形石器（図版第 754 図６・７） 石刃や剥片を素材として、素材の縁辺部に沿ってこれを取り込むような加工（樋状剥離）を持つ石器をここに分類した。３点のうち２点を図化した。６は、風化面が灰白色を呈する珪質頁岩を素材とする。素材末端右側縁に正面への急角度加工によって彫刻刀打面を準備し、左肩に向かって彫刻刀面を作り出している（Ⅳ類）。彫刻刀面は、長さ 21.74mm・幅 4.36mm・裏面との角度 74.5 ～ 93.5°を計測し、先端は稜上方向へ加工することで彫刻刀面の厚さを減じている（フラットグレーバー状剥離）（註 166）。７は、灰色のモヤがかかった半透明の黒曜石を素材とする。基部に設定された折損面を除くほぼ全周縁にわたり、比較的小さな急角度の加工を施し、右側縁末端の加工を打面として左肩方向へ彫刻刀面を作り出している（Ⅳ類）。彫刻刀面は、長さ 13.72mm・幅 6.59mm・裏面との角度 42°を計測する。この面に微細剥離痕が認められるが、不規則に相互に切り合う性格で、使用による刃こぼれであると考えられる。

彫刻刀形石器は、７の彫刻刀面と裏面のなす角度が緩斜であることを除けば、いずれも先行加工と彫刻刀面作出の点において、大きく荒屋型彫刻刀形石器の範疇に収まるものであると見ることができる。周辺遺跡において、正面中島遺跡の細石刃石器群に荒屋型彫刻刀形石器の出土例があり、関係性が注目される。

掻器（図版第 755 図８～ 10） 石刃または剥片の端部に連続する急角度加工によって主に弧状の刃部を作り出した石器をここに分類した。８は、灰色のモヤがかかった半透明の黒曜石を素材とする。素材となる石刃の末端を刃部に設定し、やや急角度の加工（約 47°）で弧状の刃部を作り出している。刃部の一部は正面方向に明確な擦痕が認められ、頻繁に使用された石器であることが推測できる。右側縁は、相互に不規則に切り合う中型の剥離痕（約 43°）によってほぼ覆われ、その裏面には非連続の微細剥離痕が認められる。左側縁は加工が認められないが、正裏面ともに非連続の微細剥離痕が認められる（51 ～ 75°）。つまり、末端の刃部だけでなく、左右両側縁にわたってマルチに用いられた石器であるといえる。９は、灰色の風化面を呈する珪質頁岩を素材とする。分厚な石刃の末端に連続する急角度の加工（63 ～ 75°）で弧状の刃部を作り出している。左右両側縁には、刃部とは異なるやはり不規則で相互に切り合う剥離痕と微細剥離痕によってほぼ覆われている（67 ～ 90°・54 ～ 86°）。基部は裏面側への折れによっ

て欠損する。10 は、風化面が白色を呈する珪質頁岩を素材とする。末端分厚となる石刃の末端部に連続する急角度の加工（58 ～ 65°）で弧状の刃部を作り出している。比較的急角度の左右両側縁（47 ～ 58°・59°）は、加工が認められないものの、非連続の微細剥離痕が顕著に認められる。いずれも急角度な側縁部は、使用による痕跡が認められる。

掻器は、近隣の正面中島遺跡（註 167）の大型石槍石器群･細石刃石器群いずれも伴っている。前者は、主に不定形剥片を素材し、後者は主に石刃ないし縦長剥片が素材となっている。本遺跡で確認された掻器がいずれも石刃を素材とすることを考慮すれば、正面中島遺跡細石刃石器群との関係が指摘できる。

削器（図版第 756 図 11・12） 石刃または剥片の側縁部に連続する加工によって、器体の長さの 1/2 以上にわたって主に直線的な刃部を作り出した石器をここに分類した。11 は、黄褐色を呈し襞状の石英脈の貫入が認められるチャートを素材とする。素材左右側縁に連続する急角度の加工（71°・62 ～ 74°）によって直線的な刃部を作り出している。右側縁の一部は鋸歯状を呈する。下半は裏面への折れによって欠損する。12 は、暗褐色の風化面を呈する珪質頁岩を素材とする。甲高の分厚な縦長剥片の左側縁は、相互に切り合う広く大きな剥離痕と小さな剥離痕（いずれも押圧剥離と考えられる）によって覆われ、大きな弧状の刃部を作り出している（58 ～ 86°）。右側縁は、花崗岩質の表皮が部分的に残り断続的となるが、やはり同様の剥離痕によって覆われ、直線状の刃部を作り出している（65 ～ 84°）。断面形状は三角形から略半円形を呈し、船底形石器と見ることもできるが、器種の煩雑化を抑えるためここでは敢えてここに分類した。

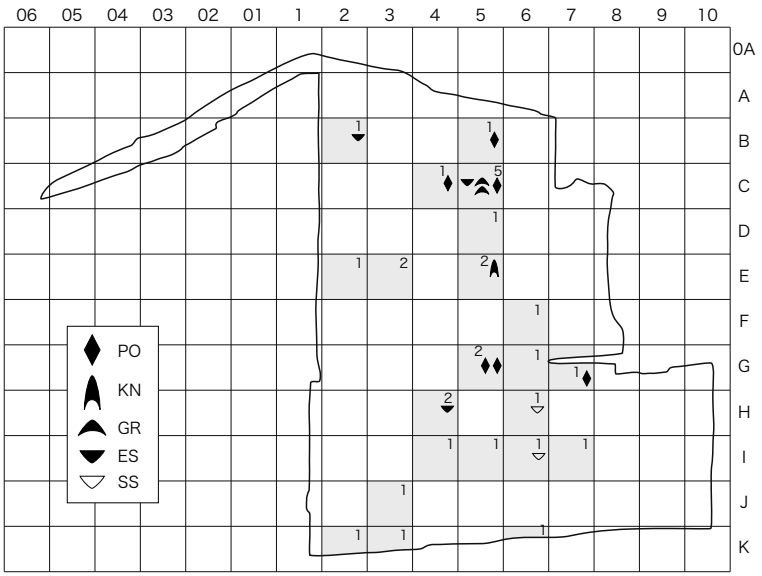
削器は、前述の正面中島遺跡細石刃石器群に顕著に認められる器種である。形態そのものは大きく異なるながら、良質な石材を使用しているという側面からここことの関係性を指摘できようか。

微細剥離痕のある石刃（図版第 756 図 13 ～ 15） 石刃の側縁部や末端部に使用による刃こぼれと考えられる微細剥離痕や擦痕･使用痕光沢等が認められるものをここに分類した。13 は、灰色の風化面を呈する頁岩を用い、左側をズリ状の原面、右側を右方向からの広い剥離面で構成される石刃を素材とする。特に、右側縁正面に不規則な小剥離が顕著に認められ、裏面は小剥離の稜が摩滅するほど顕著な使用痕光沢が認められる（縁辺角 40°前後）。14 は、濃灰色の風化面を呈する珪質頁岩を用い、末端に稜形成痕が認められる石刃を素材とする。特に右側縁に不規則で非連続な微細剥離痕が顕著に認められる（縁辺角 42°前後）。15 は、褐色の風化面を呈する珪質頁岩を用いた石刃を素材とする。特に左側縁正面に不規則で非連続な微細剥離痕、裏面に不規則に相互で切り合うやや連続性を持った平坦な剥離が認められる（縁辺角 45°前後）。いずれも両側縁ともに使用痕跡が認められるが、素材縁辺刃先角 40 ～ 45°の縁辺が主に用いられる傾向がある。

〔石器の分布〕

ここに分類された石器は、調査区全域に散在する傾向を示す（第 128 図）。偏在性を強いてあげるならば、B ～ E5・C4 と F ～ I6・G5・I5・G7・I7 グリッドのいわゆる「廃棄帯」に多く出土しているといえよう。また、点数は少ないながら E2 ～ 3・H ～ I4・J ～ K3・K2 などの「ピット群」エリアや B2 の「住居跡」エリアにも散在する状況が見出せる。これらの出土層位は縄文時代と同様のⅤ～Ⅵ層となっており、縄文時代より古い遺物群とするならば（註 168）原位置を保っていないことになる。資料の中には、住居

跡やピットの覆土で取りあげられたものも認められることから、縄文時代の遺構構築時に小規模な旧石器時代･縄文時代草創期の活動痕跡を破壊し、掘りあげた土と一緒に廃棄されたあるいは二次的な利用を行った上で廃棄された結果であることが推測される。いずれにしても出土状況からこれらをまとまりとしてとらえることはできない。



第 128 図　その他の時代の石器分布

第Ⅵ章　まとめ

第１節　魚沼地方における道尻手遺跡出土土器の編年学的位置付け

Ａ．はじめに

道尻手遺跡における人間集団の活動は、縄文時代早期末から晩期前葉までの長い時間に亘り断続的あるいは継続的に行われた。出土土器から大枠の時間幅を捉えて、その活動を「期」として認識した。その活動期は、第Ⅰ期から第XI期に大別される。

ここでは、第Ⅱ期である中期前葉から第IX期の後期中葉までを取り上げ、その基準となった土器群の様相と信濃川上・中流域の土器編年に関して検討することとする。

Ｂ．土器編年研究の歩みと方法

中越地方の縄文時代土器編年に関する研究には二つの流れがある。第一の流れは、型式設定を行い整備する研究である。寺村光晴は、栃倉遺跡の報文中で栃倉Ⅰ式・Ⅱ式を設定し、大木式との並行関係にも言及している（註 169)。その際、「馬高・塔ケ崎両遺跡は正式な発掘によって得られた遺物ではなく、且つ型式名を附するには土器量及び組み合わせが十分とはいえないようである」と指摘したうえで、「馬高期」・「栃倉期」（註 170）を発展的に解消することを提起している。しかし寺村による型式設定の研究は継承されることなく、「馬高式深鉢」（註 171）が実態を伴わないまま、型式が一人歩きする事態となる（註 172)。その一方で、編年表の「期」で示される各段階を代表遺跡名で埋めて、型式学的検討を行うに留め、型式設定を保留する研究が主流になった。この研究は寺村光晴による６期区分の編年表(註 173)をもとに、９期区分（註 174)、10 期区分（註 175）と細分化が進行した。そして、発掘の大規模化に伴い住居跡覆土一括資料が蓄積され、一遺跡内部では更なる細分が進行している（註 176)。

筆者等は、縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会の成果（註 177）を踏まえつつ、彼等の細分化の進行に対して疑問を投げかけ、時間的独立性・型式学的独立性が十分保障されうる「一般共有化できる考古時間」（註 178）を念頭に置き、空間的な広がりを吟味して時期区分作業を進めた。

このたびの作業を進めるにあたり、新潟県における中期前葉から中葉、特に大木 7b ～ 8a 式並行期の土器群の多様性に躊躇した。この時期は、北関東の阿玉台式・新巻類型・中部高地の勝坂式、さらには信濃川上流の千曲川水系などに分布する後沖式・焼町類型など、多様な型式土器や類型土器が認識される時期である。また、当該期の集落遺跡である魚沼市清水上遺跡や塩沢町五丁歩遺跡の土器様相も複雑である。清水上遺跡第１次調査では、Ⅰ－②期～Ⅱ期③期までに６系統＋ 11 器形（３細分）が存在する（註 179)。第２次調査では、北陸系深鉢 10、北陸系浅鉢 11、越後系深鉢 17、東北系深鉢 17、東北系浅鉢２、中部高地系深鉢 13、関東系深鉢８、関東系浅鉢１、系統不明深鉢８、系統不明浅鉢２、以上 89 の土器分類が存在する（註 180)。五丁歩遺跡では、隆帯系列９、縄文系列 19、関東系列２、北陸系列１、以上 31 の土器群が認識された（註 181)。

新潟県南部において中期前葉から中葉に掛けての時期は、土器型式の併存による器形構成の補完や折衷が頻繁に行なわれ、土器様相の多様性が特徴として指摘できる。このような現状をそのまま反映し、研究者間の分類基準の違いで、多様な分類が存在しているのが現状である。よって、このたびの分類は、

最大公約数的な分類に徹することにより、「一般共有化できる考古時間」に近づける努力をした。

整理作業にあたっては、信濃川中・上流域を対象範囲として、既存資料の検討結果から指標資料を抽出して、時期設定の要とした。なぜならば、本遺跡などの集落遺跡では、集落形成段階において、掘り返し、埋め戻しの行為が頻繁に行われた結果、住居跡覆土であっても攪乱を受け、一括性を保っていない資料が多い（註 182）ことから、基本となる編年軸を、遺跡内部に求めず、広域的な視点で検討を行い、整備する方法を取った。そして、富樫雅彦等の問題提起（註 183）を踏まえ、まず編年の時間的独立性・型式学的独立性が保証されうる考古時間のレベルに細分を留めた。これが、再三述べている基本的な「一般共有化できる考古時間」である。しかしながら、一括資料に恵まれたならば、資料検証を試みて、更なる細分の可能性を検討する手順をとった。

C．出土土器の編年学的位置

時間軸の設定に関しては、百家争鳴による型式土器や類型土器の並行関係への認識がある。そのことから第 71 表に暫定編年表を示し、その認識に立脚して、分類土器の整理を行った。また、阿玉台Ⅰａ式の並行関係に城林遺跡４号住居跡覆土資料（註 184）を置き、勝坂Ⅳ式との並行資料として原遺跡 004T－ P4 覆土資料（註 185）を指標とした。さらに、大木 8b 式古段階として森上遺跡１号住居跡覆土資料（註 186）を、大木９式古段階に沖ノ原遺跡１号住居資料（註 187）を並べた。これらの資料群を定点として、その諸特徴を把握して、型式学的な検討と行い、資料群の新旧を判断した。検討は、在地土器と非在地土器に分類し、区画文や意匠文の文様表出技法の検討や、文様構成と単位性、胎土と焼成などの属性を判断した。

＜前期末葉から中期前葉の土器様相＞

ここでは、第Ⅱ期に伴う土器群を考えるにあたり前段階に当たる前期末葉から中期初頭の土器群変遷を眺め、第Ⅱ期・第Ⅲ期に伴う土器群を検討する。

【前期末葉】

指標資料は、道下遺跡第１号住居跡覆土資料（以下、道下１号住と略す）である（註 188）。十三菩提式、朝日下層式に並行する。県内では、巻町重稲葉遺跡Ⅱ群土器が並行関係にある。

中期と前期の大別に関しては、不確定の部分がある。現段階では、結節浮線文や結節沈線文を主文様要素と考える。そして、集合沈文に箆切沈線が施され、文様空白部を削り取る手法が採用される段階である。

【中期初頭】

指標資料は、道下遺跡第３号住居跡覆土資料・魚沼市清水上遺跡中期初頭②期資料（以下、道下３号住・清水上初②期と略す）である（註 189）。時間幅は五領ケ台Ⅰａ式・Ⅰｂ式の時間幅に対比される。現段階での細分は、不確定である。見附市山崎Ａ遺跡下層土器群１や巻町豊原遺跡Ⅴ群１・２期が並行関係にある。北陸地方では新保式Ⅰ・Ⅱ段階の時間幅が与えられる。

口縁部が「く」の字状に屈曲したり、口縁端部が外へ屈曲する深鉢形土器が出現する。集合沈線が多用されるが、前期末葉の集合沈線に比べると太い。

前半段階には、口唇部への撚糸圧痕文や刻み目が特徴である。器面への縄文原体線状圧痕文が認めら

東　北	関　東		中部高地		北　陸	新　潟		標式資料	道尻手	道尻手遺跡の分類
大木７ａ	五領ケ台Ⅰ式 五領ケ台Ⅱａ式 五領ケ台Ⅱｂ式 五領ケ台Ⅱｃ式		踊場式		新保Ⅱ式 新保Ⅲ式 新保Ⅳ式	剣野Ｅ式		山崎Ａ下層－１ 豊原Ⅴ群１・２期		
								岩原Ⅴ群１類Ａ・Ｅ 山崎Ａ下層－２	Ⅱ期	第Ⅱ群第１類
大木７ｂ	阿玉台Ⅰａ式 阿玉台Ⅰｂ式 阿玉台Ⅱ式	勝坂Ⅰ式 勝坂Ⅱ式 勝坂Ⅲ式	狢沢式	後沖式古	新崎Ⅰ式	（＋）		城林４住	Ⅲ期	第Ⅱ群第2a類、第Ⅱ群第2b類、 第Ⅱ群第2c類、第Ⅱ群第2d類、 第Ⅱ群第2e類、第Ⅱ群第2f類、 第Ⅱ群第2g類、第Ⅱ群第2h類、 第Ⅱ群第2i類
			新道式	後沖式中～新				（＋）		
				新巻	新崎Ⅱ式	千石原式	小坂式	（＋）		
			藤内Ⅰ式	焼町古	新崎Ⅲ式			（＋）		
大木８ａ	阿玉台Ⅲ式 阿玉台Ⅳ式	勝坂Ⅳ式 勝坂Ⅴ式	藤内Ⅱ式			馬高式		（＋）	Ⅳａ期	第Ⅱ群第3a1類、第Ⅱ群3b類、 第Ⅱ群第3c類、第Ⅱ群3d類、 第Ⅱ群第3e類
								（＋）		
			井戸尻式	焼町新	新崎Ⅳ式			清水上３・16・23住 五丁歩７Ｂ・９Ｂ住		
								原004Ｔ－Ｐ４ 沖ノ原112住		
	中峠 諸類型 加曽利Ｅ１式		曽利Ⅰ式		上山田・ 天神山式			（＋）	Ⅳｂ期	第Ⅱ群第3a2類、第Ⅱ群3a3類、 第Ⅱ群第3c類
								（＋）		
								（＋）		
大木８ｂ	加曽利ＥⅡ式		曽利Ⅱ式					森上１住	Ⅴａ期	第Ⅱ群第4a1～3、第Ⅱ群4a5・6類、 第Ⅱ群第3c類
						栃倉式		万條寺林４住	Ⅴｂ期	第Ⅱ群第4a4類、第Ⅱ群第4b類、 第Ⅱ群第4c類、第Ⅱ群第4d類
								原11住		
大木９	加曽利ＥⅢ式		曽利Ⅲ式 曽利Ⅳ式		串田新式	沖ノ原式		沖ノ原１住 堂平Ｋ８-FP31	Ⅵ期	第Ⅱ群第5a類、第Ⅱ群第5b類、 第Ⅱ群第5c類、第Ⅱ群第5d類、 第Ⅱ群第5e類、第Ⅱ群第5f類、 第Ⅱ群第5g類、第Ⅱ群第5h類
								堂平13住-FP１		
								堂平32住埋甕		
大木10	加曽利ＥⅣ式		曽利Ⅴ式					（＋）		
								（＋）		

第71表　縄文中期編年対比表（暫定）

れる。胴部文様はほとんどなく、縦位の羽状縄文・斜縄文・木目状撚糸文が地文として施される。後半段階になると縄文＋縦位平行線文が卓越する。縦位平行線文の施文間隔は広いのが特徴である。この段階に、地域型式である剣野Ｅ式が設定されている。

【中期前葉１】

図示しないが指標資料は、道下遺跡４・７・８号住居跡覆土資料（以下、道下４・７・８号住と略す）と城林３・５号住居跡覆土資料（以下、城林３・５号住と略す）である（註 190)。時間幅は五領ケ台Ⅱ式に対比され、北陸では新保式Ⅲ･Ⅳ段階に当たる。県内では、湯沢町岩原遺跡Ⅴ群１類Ａ･Ｅ、豊原Ⅵ群、山崎Ａ遺跡下層土器群２などが対比され、資料数が増大する傾向がある。

半截工具による集合沈線に沿って刺突文を施す一群、沈線文や隆帯上に細かい刻みを施し、交互刺突文や連続刺突文（棒状工具）を多用する一群、口縁部に短沈線文（棒状工具）や縄文を施し、口縁部文様帯に三叉文を施す一群、半截工具を多用する北陸系の一群（軌軸文・縦位短沈線文・沈線一方向からの刻み・上下沈線からの交互の刻み・集合沈線文・爪形文・半隆起線文・縄文＋半隆起線文など)、半截工具の腹面を浅く押し付けて引く平行沈線文を多用する一群などによって、土器群が構成されている。

横位無文帯が成立する。半隆起線の多条化により、後半段階になると、横位無文帯の幅が狭くなる傾向が指摘される。また、後半段階では爪形文が再登場して隆盛する。前段階で認められた縄文＋縦位平行線文の施文間隔が狭くなり、本段階で消失する。軌軸文が出現し、三角印刻技法による蓮華文が卓越する。Ｂ字状文の萌芽が認められる。口縁部突起の下降化現象が認められる。

本遺跡では、第Ⅱ群第１類と第Ⅱ群第 2a 類（1417・1424）が該当する。

【中期前葉２】

指標資料は、城林遺跡４号住居跡覆土資料である。補充資料に城林２・８号住居跡覆土資料（以下、城林２・８号住と略す）と曲谷Ｅ遺跡３号住居跡覆土資料（以下、曲谷Ｅ３号住と略す）がある。時間幅として、阿玉台Ⅰａ式に対比される。県内では岩原遺跡Ⅴ群１類Ｆ・Ｂが並行関係にある。

新潟県の信濃川下流域では、当該期になると在地北陸系土器が主体を占めるが、信濃川上流域では３割程度の構成比である。在地北陸系土器の特徴は、半截工具の腹面を器面に当て引きして、深いカマボコ状の半隆起線文を生むことである。半隆起線文は前段階の多条化から二～三本一帯に変化している。また、半隆起線による区画文は小形化する傾向が認められ、逆「U」字状や逆「L」字状の小区画内に蓮華文や縦位平行線文を充填する。蓮華文は、半截工具の刺突と同一工具による浅い縦位平行で構成される「刻印蓮華文」である。刻印蓮華文は、当該期で成立した文様と理解する。

北関東系土器群のうちで、本地域に色濃く入り込んでいる土器は、阿玉台Ⅰ式系の土器である。影響として確認できる文様施文手法は、隆起線文に沿って角押文や、竹管状工具の背面による引き刺し運動で生じる有節沈線文を斜位や鋸歯状に施す事例がある。また、襞状の指頭痕がある。

ここでは大木 7b 式並行期を新旧に区分し、阿玉台Ⅰａ式・Ⅰｂ式の時間幅を古段階とし、阿玉台Ⅱ式の時間幅を新段階とした。

大木 7b 式並行期の古段階には、第Ⅱ群第 2a・2c・ 2f・2d 類と 2g（1659・1656)・2h（1702・1705・1707・1716)・2i（1724・1725・1726・1731・1750・1752・1757）類の一部が対比される。2i 類は、刻印

蓮華文や頸部無文帯の消失から新崎Ⅱ式（註 191）に対比され、1751 はやや古い傾向がある。

大木 7b 式並行期の新段階には、第Ⅱ群第 2b・2e 類と 2g（1650・1651・1665・1669・1671・1672・1674）・2h（1682）・2i（1730）類の一部が対比される。2g 類に含まれている 1651・1665・1671 は、諸特徴から 2b 類である新巻類型に関連する一群と考える。2i 類の 1730 は、胴部の文様が入り組み、パネル化が観察できることから新崎Ⅲ式（註 192）に対比されると考えた。

第Ⅱ群 6 類は、有孔鍔付土器（3156･3157･3158･3159･3160･3165）や鍔付土器（3173）、有孔土器（3172）は、大木 7b 式並行期新段階に位置付けられると想定している。特に、3156 や 3158 は、廃棄帯の最下層から潰れた状態で出土したことから当該期であろうと考える。

第Ⅱ群 9 類は、浅鉢形土器である。筆者のひとりである佐藤が、以前に浅鉢形土器について触れたことがある。多系統の浅鉢形土器の存在を明らかにしたが、それらの帰属時期に関しては明快な回答が出せていないのが現状である（註 193）。現状では出土状況と単位文様、そして文様表出技法から判断することしかない。9a・9b・9c・9d 類は、大木 7b 式土器並行期に比定される。しかしながら、9a 類の破片資料は、大木 8a 式並行期古段階に対比される資料群と共伴する事例が多いことから、今後慎重に検討することとしたい。

当該期には、長岡市から蒲原地方に掛けて地方型式である「千石原式」が分布する（註 194）。特に千石原式は北陸地方の新埼Ⅱ式との並行関係で議論されている型式である。山地帯である魚沼地方には、北陸系の土器が少ない様相があり、それらを指して「小坂式」と称した経緯がある（註 195）。今後、千石原式土器や小坂式土器の型式構造を把握し、再提唱することが必要であろう。

【中期中葉 1】

指標資料として、塩沢町原遺跡の 004T － P4 覆土資料（註 196）を取り上げる。これら一群の同時性問題が存在するが、ここでは一括性の高い考古時間を示していると判断した。また、これら一群は、中峠式類似の深鉢形土器と勝坂Ⅳ式に対比される資料を含むことから大木 8a 式並行期中段階の定点とした。この段階に、火焔型式土器と焼町類型土器が共伴する。

大木 8a 式並行期の時間幅で、原遺跡 004T-P4 覆土資料を定点とした場合、定点資料群よりも、新しい資料群を古段階とし、新しい様相のある一群を新段階として把握した。

第Ⅱ群 3a 1 類は、東北南部に分布する大木 8a 式土器と関連する在地の大木系土器である。その諸特徴から 1788・1795・1809・1787 を古段階に、290・1796・1801・1802 を新段階に配置し、176・1998 を新段階に整理した。すなわち、古段階は阿玉台Ⅲ式に並行関係を求めた。口縁部に「横 S 字」を基調とした突起が貼付される。そして、口唇部直下の文様帯には、前段階から継承される有節沈線による縦位短線の充填が特徴である。中段階は阿玉台Ⅳ式に並行し、中峠式（註 197）や三原田式（註 198）に並行する段階と理解したい。深鉢形土器は、直線的な胴部と大きく開きながら内湾する口縁部を特徴とする（290）。突起が横方向に大型化して 4 単位で貼付され、橋状化・空洞化が始まる。口縁部文様帯にある楕円区画内の充填は、有節沈線の縦位短線から平行線による縦位短線（1796）に漸移的に変化する。口縁部文様帯の区画には、交互刺突による連続コの字文や隆線を多用した横線文と波状文の組み合わせも散見される。胴部は、半截工具を深く刺し引くことで生じるカマボコ状の平行線を 3 本 1 組でクラン

ク文とその先端部が渦を巻く基本モチーフを描く。1802 は、半截工具の背を器面に当てて、クランク文を描いている。この手法は在地の大木系土器にない特徴と理解し、西会津地方との関連を探る必要がある。新段階は加曽利 E1 式土器に並行する段階で、時間幅が広い。176・1798 を、この段階に整理した。福島県では、口縁部文様の表出技法が、当該期で沈線主体→隆沈線（両側未調整）→隆沈線＋両側沈線へと変化するという（註 199)。これらの変化を射程に入れて、第Ⅱ群 3a ２類・3a ３類を含めて、今後検討する必要がある。

第Ⅱ群 3a ２類は、中段階（1853)・新段階（192・1120・1878・1879・1899・1901・1903・1907）に整理した。1853 は有節沈線による主モチーフを描くことから、一段階古く考えた。ほかは、すべて半截工具によって区画文や波状文を描いている。1878 は、その文様表出技法において、半截工具の背で沈線を引く特徴があり、ほかの資料と区別される。この資料は 3a1 類の 1802 と共に、非在地の大木式土器と理解したい。また、1120・1899・1901・1903・1907 は、縦転がしの撚糸文を地文にする特徴がある。そして、1899 は口縁部に無文帯を配する特徴も注目される。

第Ⅱ群 3a ３類は、数量的に少なく、将来的には第４類 4a １・4a ２・4a ３・4a ４と共に系統的な変遷を探る必要がある。177 は LR 斜縄文を地文とし、貼付した薄い隆起線が剥げ落ちている。1925 は縦回転した撚糸文を地文とし、口縁部文様帯に意匠文を隆起線で表現している。しかし、薄く、未調整の隆起線は剥げ落ちている。本地域の既存資料を概観すると、このような薄い未調整隆起線を貼付する資料が散見でき、魚沼市古長沢遺跡 12・13・27・28 号土坑覆土資料にまとまりが確認される（註 200)。

第Ⅱ群 3b １類は、細部を観察するならば、口縁部区画を持つ一群（1946・1948・1939・1950・1955・1959）と口縁部区画を持たない資料（1961・1937）がある。また、1961 と 1966 を比較した場合、胴部の下垂文の幅に狭広の違いがある。さらに、1955 は胴部に下端横位区画がある。1973 は大きく外そりする山形口縁を呈し、内面に施文を持つ。このような差異を指摘することができる。

第Ⅱ群 3b ２類は､胴部区画を持つ一群である。これらは､やや異なりながら口縁部区画を持つ。平縁で、やや幅広い区画（1987・1990・1991)、幅狭い区画（1981・1985・1987・1992・1994）がある。山形突起を持つ 1108 や 2000 も幅狭い区画帯である。271 や 2018 は､区画帯の上に全周する連結突起が配される。2018 も 1990 と同様に無文部を配し、３C １類の 2172 にも同様な無文部を認めることができる。

第Ⅱ群３b ３類の 2020 は、3b ２類の 1108 に類似する。本資料は、山形突起の頂上部から縦位区画するが、1108 は山形突起下に渦巻文を配し、連結して全周する。2020 の胴部には縦位区画はなく、横 S 字文が配される。2034 は、器形の湾曲が弱いことから、胴部区画を持たずに、頸部文様と胴部上半部の文様が接する特徴がある。胴部上半部の文様が、横 S 字文ということが重要である。基本的に 3b ２類に近似する。

第Ⅱ群 3b ４類は、多様な土器の集まりと言える。2042 は在地の大木式土器と在地土器との折衷土器である。口縁部文様ならびに頸部文様は、3b ２類そのものである。胴部が４単位の縦割り構成を持ち、その内部に渦巻文が付さず、クランク文を配置した資料である。2035・2047 は、文様帯構成は類似する。しかし、2035 は山形突起から下垂する渦巻文を４単位に配し、その空間を三角指向で分割して、その分割内部に玉抱き三叉文を充填する特徴がある。一方、2047 は隆起線による三角パネル文を配し、そ

の空間を三角印刻文が退化した篦文による三角文や円文などで充填される特徴がある。2047 の頸部文様帯の三角パネル文は、勝坂Ⅱ式（藤内期）との関連が予想される。2055 は山形突起を持ち、幅広い無文部を配し、球胴を呈する深鉢形土器である。胴部区画を持ち、山形突起頂上下およびその中間に J 字状の渦巻文を 6 単位配する。胴部上半は J 字状渦巻文を描き、下半に斜め連結する渦巻文を配していると推察される。直接的に関連を追及できないが、平縁で口縁部無文帯を配する土器は勝坂Ⅲ･Ⅳ式（藤内期･井戸尻期）に存在する（註 201)。2054 は、北陸系のキャリパー形深鉢である。新保Ⅱ式に認められる頸部文様帯の縄文＋縦位平行線（間隔が広い）の蘇り現象が認められ、胴部は上山田式の横斜め構図である。この資料は 3b ２類の 1990 に類似した胴部構成である。

これら第Ⅱ群 3b １～４類は、互いに互換性と類似性を持ちながら存在する一群である。細部の検討から時間的な整理が行うことが可能であると推測できるが、現段階では細分することは時期早々と判断し、大木 8a 式並行期に対比させることにした。

次に、第Ⅱ群第 3C １類の火焔型土器と 3C ２類＋ 3C Ⅲ類の王冠型土器について触れたい。まず、これら一群は、いままで二つの形式として認識されてきた経緯がある（註 202)。このたび、類例の増加を踏まえて、形式と口縁部文様帯の文様構成から検討して、１～３類に分類した。すなわち、3C Ⅰ類＝火焔形式→火焔型土器、3C Ⅱ類＝王冠１形式→王冠型土器１、3C ３類＝王冠２形式→王冠型土器２の３つの形式に分類されると理解した。

火焔型式土器（第Ⅱ群第 3C １類）は、小林達雄・金子拓男・寺崎裕助・小田由美子（註 203）などが論述してきたまとまりである。また、王冠型土器１と王冠型土器２は、暗黙の了解の中で王冠型土器として認識されてきたものである（註 204)。

ここでは、王冠型土器２について説明する。王冠型式土器２は、第 16 図２で示した資料群である。その典型資料は 2249・2250・2254・2255 である。類例は、長岡市岩野原遺跡（註 205)・魚沼市清水上遺跡（註 206)・十日町市笹山遺跡（註 207）にある。王冠型式土器２は、基本的に内湾する平縁土器と理解し、第二文様帯に貼付された袋状突起が、口縁端部よりややせりあがる特徴がある。

また、火焔型土器は第一文様帯の上に鶏頭冠状把手や鋸歯状突起が貼付され、王冠型土器１は基本的に第二文様帯の上に大形の山形突起（王冠部位）が付され、袋状突起も第二文様帯に貼付される。中には、王冠型式土器２と同様に袋状突起が口縁部よりもせりあがる資料（2206）も散見できる。

王冠型土器２は、平縁であり、口縁部文様が横線指向の文様構成である。2254 や 2249 を観察するならば、上下二段構成を取り、やや幅広の横長区画内に半截工具による鋸歯文や篦工具による緩味な三角印刻文（2249・2254)、あるいは工字状文（2250・2255）（註 208）が施される。2257 は典型外と考え、王冠型土器１と王冠型土器２との折衷土器と理解する。また、口縁部文様帯の二段構成は、糸魚川市長者ケ原遺跡の火焔型土器（註 209）に観察される。また、2249 で認められる頸部の無文帯について、今後検討したい（註 210)。

これら火焔型土器や王冠型土器１・２の変遷は、現段階では大木 8a 式並行期（3C １類：239・2170・2172・2174・2178・2179・2180　3C ２類：2203・2204・2205・2208・2211・2212　3C Ⅲ類：2249・2250・2254・2255・2257）と大木 8b 式並行期（3C １類：2182・2184・2185　3C ２類：2206・2207・2210・2213）

に区分される。しかしながら、寺崎裕助はこれら一群を取り扱い、6細分（註211）されている。今後、在地の大木系土器や北陸系土器、非在地系土器との共伴関係から、寺崎編年を検証し、支援できる状態になると確信している。しかし、現状では、伴出関係と文様構成の理解をもって説明するということになれば、非力であり二細分しかできない。

第Ⅱ群3d類は、北陸系の天神山式に対比される資料群である。細かく観察すれば、刻みあるいは爪形を施した隆起線で胴部を縦位に区画せず、h状に配置する特徴がある（225・2294・2295・2296・2308･2309･2317)。一方､刻み隆起線を使用せず､半截工具で斜め指向の文様構成を施す一群もある（2304･2316)。共に口縁部には幅狭い文様帯を配する。また、2294・2295・2296・2304は、区画内に細かな横線文（キザミ）を充填する特徴がある。2306と2307は、h状下垂隆起線の変容形態と理解されるY字状下垂隆起線で胴部を分割する特徴がある。空間処理には篦工具による渦巻文などが施される。3d1・3d 2類は、隆起線の両脇を半截工具で併走する特徴がある。2321は北陸系の台付鉢である。口縁端部に幅狭い横帯を配し、胴部を縦位区画する。縦位区画と連結する渦巻文は、隆起線で施される。それ以外の空間の大半は、無文処理あるいは部分的に、篦工具による緩い三角印刻文が施されている。3d類に含めているが、3d 1・3d 2類と比較した場合、基本的な文様構成が違うと言えよう。これら第Ⅱ群3d類は、その細分根拠が明確でない現状では、意図的に細分せずに大木8a式並行期に位置付け、将来の資料増加を待って細分したい。

第Ⅱ群3e類は､類例が乏しい資料である｡器形的には在地の大木系土器に類似する形式はある｡しかし､文様の特徴は、肥高する無文口縁部帯と幅広い低い隆起線文である。低い隆起線文は入り組み状の渦巻モチーフを描き、4単位で全周する。上下交互に生まれる空間には、篦工具による三叉文などが描かれ、部分的に篦の先端で突き刺し移動する三角押文が施される。これらの特徴が勝坂Ⅲ式に対比されることから大木8a式並行期古段階に位置付けられる。

第Ⅱ群6類の有孔鍔付土器である3171は、ほかの有孔鍔付土器と文様構成と器形が大きく異なる。文様は交互刺付による連続コの字文（鋸歯状文）と三角形印刻文、キザミを施す渦巻文であることから大木8a式古段階～中段階に位置付けられる。類例は佐渡市長者ケ平遺跡（註212）にある。

第Ⅱ群9e類に分類された浅鉢形土器3457は、その文様構成や単位文様から判断して、大木8a式土器古段階に対比され、9g類とした3460は大木8a式並行期新段階の可能性がある。

【中期中葉２】

当該時期は、大木8b式並行期である。注目される火炎土器様式（註213）A群は、前述したとおりに、大木8a式並行期から8b式古段階までに変遷する一群と理解している。

大木8b式並行期を考察する場合、十日町市森上遺跡1号住居跡覆土資料（以下、森上1号住居と略す）が指標である。次いで、塩沢町万條寺林遺跡4号住居跡覆土資料（以下、万條寺林4号住居と略す）と同町原遺跡11号住居跡覆土資料（以下、原11号住居と略す）との関係である。このたびの作業では、後述する沖ノ原遺跡1号住居跡覆土資料（以下、沖ノ原1号住居と略す）と森上1号住居との時間的狭間に､少なくとも万條寺林4号住居と原11号住居が納まり､各土器群の様相から万條寺林4号住居が古く、原11号住居を新しく考えた。

すなわち、森上1号住居を古段階の指標資料とし、中段階に万條寺林4号住居を配した。この中段階に火焔型土器や王冠型土器1・2が存在するかについては、不詳である。しかしながら、万條寺林4号住居に火焔型土器や王冠型土器1・2は、含まれていない。今後、当該時期の資料増加を経て、検証する必要がある。寺崎裕助によれば、万條寺林4号住居の段階を認め、魚沼地方にはすでに火焔型土器群は姿を消している可能性があるが、長岡市周辺には残存しているという（註214)。新段階に位置付けされる原11号住居は、深鉢形土器の口縁部文様帯の幅を観察すると、万條寺林4号住居より幅狭い傾向が顕著であると共に、関東地方の連弧文との関係を示唆する資料が含まれる。また、覆土上部に火焔型土器の破片資料が含まれているが、このたび縄文時代の攪乱によって二次堆積と判断し、共伴資料から除外した。

第Ⅱ群第4類aは、キャリパー形を呈する深鉢形土器の一群である。これらを、区画の有無、地文の種類、口縁部文様帯地文の種類などから、1～6類に細別した。これらも、どこに視点を据えて分類することが時間変遷を理解できるのかに関わる問題である。筆者の一人である佐藤は、以前、頸部文様帯の成立をメルクマールに、加曽利E2式並行期に対比する試みを行った（註215)。しかし、埼玉県水窪遺跡周辺における加曽利E式土器の研究によれば、「頸部に無文帯を持つ土器がほとんどだが、無文帯の有無が細分の基準とならないことは論を待たない」と言わしめた経緯がある（註216)。また、近年の研究によれば、加曽利E式土器の文様要素は「撚糸地文のみ、または撚糸・縄文地文＋隆起帯の懸垂→縄文地文＋沈線による懸垂→縄文地文＋沈線懸垂＋沈線間の地文磨消、という3段階に区分することが可能」であるという（註217)。さらに、水沢教子による大木8b式並行期の越後の様相がまとめられた。それによれば、東北地方では、口縁部への細沈線充填が大木8b式段階から少数存在するが、むしろⅡ段階になってからかなり多くなる傾向があるという（註218)。

加曽利E1・E2式と大木8a・8b式との連動変遷を気にする必要性があることから、あえて、頸部無文帯を基準とした区分を行わず、口縁部文様の変化に着眼することにした。そして、手順として、頸部文様帯の有無、施文手法などから変化を探りたい。

ここで扱う第Ⅱ群4a類は、火焔型土器群と同様に大木8a式から8b式にかけて変遷する土器群である。指標資料である森上1号住居を大木8b式並行期古段階に配置する。これら一群は、①頸部無文帯の第Ⅱ群4a類が存在する、②箱状把手が一単位性で存在する、③口縁部、胴部の文様に渦巻文が低調である、④口縁部には細沈線充填が認められる、⑤胴部は半截工具の内皮を器面に当てて引く、断面カマボコ状を呈する半隆起線で区画文や区画内文様が描かれる、特徴が観察できる。

2368の重渦巻文であり、やや異質である。全体を概観して、①渦巻文が第Ⅱ群第3a 3類（177）と比較した場合に小形化の傾向がある、②すべての口縁部主モチーフは隆沈線で描かれる、③対向する渦巻文を包む隆起線（剣先状）が連結する（2352)、④左渦巻で始まり、右先端部で剣先状のモチーフ（508・2340・2377)、⑤左渦巻で始まり、波状に一山盛り上がり、右先端部で剣先状モチーフ（2381)、以上の③～⑤は口縁部文様帯を横走指向で4単位や6単位・8単位で構成される。この横走指向の基本モチーフに口縁部文様帯下端と連結する懸垂が付される資料がある。その場合の基本形は④⑤のモチーフであり、その剣先部位あるいは中間の渦巻文から懸垂する（2333・2334・2339・2380・2384・2385・2386・2388・2389・2390・2396・2397・2399・2406・2413・2411・2417）ものである。他に、つなぎ文状モチー

フから懸垂する 503、対向渦巻文から懸垂する 2341 もある。

以上のように、口縁部文様帯の主文様は横走指向であるということは上下二段風の充填文域が生まれることである。そこに懸垂が付されるということは、横位の充填施文域が分割される意味を持つ。

また、基本モチーフである⑤「渦巻文＋剣先モチーフ」の渦巻の貼付部位が口縁端部に近づくことにより、小突起化の萌芽（2384）・（2396・2397・2399）・小突起化（2406・2413）が始まるようにも思える。

次に、胴部に観察を移せば、横帯波状文の有無、胴部渦巻文の突起化が注目される。また、胴部施文手法の大半は、半截工具の内皮による半隆起線手法であるが、2368 と 2399 は、半截工具の背面使用による浅い沈線手法である。さらに、胴部に微小な突起を持つ 2417 は、隆起線の両脇に沈線を沿わす隆沈手法である。

以上のように、口縁部文様帯の文様変化と、胴部文様の施文手法の差異や微小突起の有無が存在する。そして、大半が直線的な胴部からキャリパー状に広がる口縁部を特徴とするが、508・2380・2413・2417 は胴部中央部が膨らむ特徴があり、少なくとも二形態の器形が認識できる。

これらが、文様や器形の多様性なのか、時間変遷に伴う変化なのかが焦点であろう。

指標資料である森上 1 号住居から判断するならば、大木 8b 式並行期古段階には二形態の器形が存在していた。原 11 号住居では、基本的に第Ⅱ群 4a 類は存在せず、その系統的に変化したと推測される破片資料がある。また、万條寺林 4 号住居でも、明確には第Ⅱ群 4a 類は共伴していない。

したがって、このたび我々が用意した変遷枠では、大木 8a 式並行期古段階に第Ⅱ群第 4a 1～4 類が多様性として存在していると判断される。しかしながら、将来的な検討として、①口縁部文様帯幅の狭小化とパネル化の現象を把握する必要性があることから、口縁文様帯の懸垂文の有無とパネル化の問題を検討したい。②大木 8b 式並行期中段階の万條寺林 4 号住居資料に見られる渦巻文の突起化を重視するならば、胴部渦巻文の微小の脹らみ化（2413→2377・2417）の変化は、古段階内の新しい傾向と理解したい。

第 4a 6 類は、その基本が第 4a5 類の口縁部文様帯が消失した深鉢形土器と理解する。器形も胴部が直線的な 2449・2450・2454・2455 と胴部の中央部が膨らむ 357・2440・2441・2442 の二形態が認められる。文様表出は半截工具を使用し、内皮を当ててカマボコ状の半隆起線手法を採用した 2440・2450・2455 と背面を引くことによる沈線手法を選択した 357・2441・2442・2449・2454 の二種がある。共に地文は縄文である。胴部上半に横帯区画を施し、波状文を施す共通性が 357・2440・2441・2442 にある。これら一群の口縁端部も山形突起が巡る共通性がある。357 は 2449・2454 と共に、胴部を縦区画して、意匠文を充填し、4a 5 類と同様である。2455 の胴部区画の多重横線文の下端に入り組んで下垂する対向渦巻文は重要である。

器形が第 4a 5 類に類似する指摘をしたが、同様に第 4b・4c 類にも類似する。2442 などは 4b 類の 2574 に、2449 は 4b 類の 2582 に、2454 は 4b 類の 880 に、2455 は 4c 類の 820 に類似し、器形の互換性があると言える。このように、4a 6 類を挟んで、4a 5 類と 4b・4c 類との器形から見た親和性や系統性を理解することができる。

ここで、第 4a 6 類の時期的な位置は、基本的に大木 8b 式古段階に整理される。しかし、2455 の縦位に配された対向渦巻文は、半截工具の内皮によるもので注目される。新しい要素として、大木 8b 式中

段階に位置付けておきたい。

第Ⅱ群 9g 類に分類した浅鉢形土器のうち、992・3462 は、文様の諸特徴から大木 8b 式土器並行期古段階に対比されるものである。

ここまで区分してきた第Ⅱ群 3a 類から 4a 類および 9g 類の一部を含む一群は、少なからず火焔型土器群と共伴する土器群である。その時期幅は大木 8a 式並行期古段階から 8b 式並行期古段階であり、現状では 4 段階に細分される。これら一群は、再吟味は必要であるが「馬高式土器」の範疇と理解される。

【中期後葉 1】

当該期の指標資料は、万條寺林遺跡の 4 号住居と原 11 号住居である。魚沼地方では、火焔型土器が消失し、対向渦巻文を多用し、充填文にアヤスギ文（註 219）や密接縦位線文を中心に、稀に縄文や撚糸文を使用する新しい土器群が短時間であるが盛行する。

大木 8b 式並行期古段階の器形や剣先文、文様構成を継承する大きな特徴がある。しかし、その文様表出には隆沈手法が積極的に採用され、新しい文様要素として対向渦巻文が進化した腕骨文が主流になる。空間処理の大半が、アヤスギ文による充填手法で行われた。

第Ⅱ群第 4b 類の基本は、口縁部文様帯＋頸部無文帯＋胴部文様帯である。この三帯構成は、第Ⅱ群 4a 1・4a 2・4a 3・4a 4 類の基本構成である。また、口縁文様帯が消失した資料（2574 など）は、前述した通りに第Ⅱ群第 4a 6 類と同様な構成である。

2402 の編年学的位置は、古段階から中段階の過渡期と理解する。口縁部文様帯の上位横連結する剣先文と上位のパネル文の生成が重要である。また、頸部が無文帯であることも注目される。この資料を基準にした場合、368 が検討される。口縁部文様帯の類似＋頸部無文帯＋胴部縄文地文である。その縄文地文の上に隆起線による渦巻文貼付と半隆起線 3 本による連結モチーフ施されている。このように地文施文→主文様の粘土貼付の製作手法を、充填手法が採用された中段階でどう理解するかである。それは、2579 との対比で答えを出すことになる。この資料は口縁部文様帯が消失したというよりも、口端部に収斂し、頸部無文帯＋（腕骨文＋アヤスギ文充填手法）である。また、充填空間は沈線で枠取りが行われ、パネル化しているところに着目する必要がある。したがって、2402・369→2579 の変化を想定したい。よって、2402・369 を中段階で整理するならば、より古い要素を残した資料として理解することになる。

2425 と 2527（万條寺林 4 号住居に類似の器形がある）、2579 は、基本セットとして理解される。また、368 との比較では、頸部無文帯への貼付文の進出が指摘できる。この点は、以前、佐藤が大木 8b 式並行期における新しい傾向と指摘している（註 220）。その場合に、880・2574・2575・2576・2577 を古い要素とするのかについては再考する必要がある。現行の編年時間枠で理解するならばバリエーションとして理解するべきであろう。

2574 は重要な資料である。4 単位に分割された胴部を上位と下位の施文域に分けている点である。このような構成は、火焔型土器群の胴部施文の基本構成である。そこで選択される文様には違いがあるが、空間構成に類似性が認められることは、系統変化を探る重要な要素であると理解している。これに類似する胴部空間構成は、長岡市馬高遺跡出土の馬高五期に対比される深鉢形土器がある（註 221）。別な視点で 2574 を観察すると、胴部下位が細長いパネル文が採用されている。類似する胴部パネル文は、

2576 である。また、2576 はパネル化していないが、細長い区画内に半截工具の内皮によって密接する横蛇行文を埋め込んでいる。共に異質な胴部構成と胴部文様の採用である。これらは、純正な一群からは除外し、折衷土器として理解したい。

次に、第Ⅱ群第 4C 類である。器形には、口縁部が内湾する 2649、口縁部が狭く、やや内折する 2654、口縁がやや内折して、波状口縁を呈する 825、口縁が外反する 820、球胴を呈する（口縁形態不明）88、5 形態が確認される。これら一群の特徴は、胴部に隆沈手法による対向する渦巻文が連結せずに、縦位指向、横位指向、斜位指向に貼付される。それ以外の部位には、①半截工具の内皮を当てて密接する縦位線文を充填する資料（2654 など）、②同様な工具で同じ手法でＵターン（逆Ｕ字状）して充填する資料（139）、③アヤスギ文を組み合わせる資料（2674）、④基本的には①であるが、凹部に三角状の刺突列を施す資料（820 など）、⑤縄文を施す資料（825 など）、多様な充填文様が施される。その基本が①と②であり、口縁部を無文帯を配することも重要な決まりである（139・140・141・820・825・2654）。折衷資料が 350 と考えられる。口縁部文様は第Ⅱ群第 4a 類の系譜上の新しい段階で理解されるべきものであり、口縁部の狭小化と細長い楕円パネル化が注目される。2695 も典型資料から除外すべき、折衷土器であろう。胴部上部が膨らみ、口縁部が外反する鉢形土器であり新しい器形である。口縁部に施された二列の円形刺突文と崩れたアヤスギ文は、新しい要素と理解でき、その編年的位置に関しては不明である。

以上、第Ⅱ群第 4b 類および 4c 類（2695 除く）の編年的位置は、大木 8b 式並行期中段階～新段階の時間幅が与えられる。その細分に関しては、今後類例を整理して考察する段階であり、現段階では細分を行わず、栃倉式並行期と考えたい。この時期設定に関しては議論が再燃されると思われるが、近年の十日町市笹山遺跡（註 222）、長岡市中道遺跡（註 223）、そして当遺跡の９号住居跡覆土資料など、安定的な分布状態が知られてきた。原典である栃倉遺跡の栃倉Ⅱ式土器を基礎として、考察する所存である。

第Ⅱ群第 4d 類は、非在地系の曽利式土器の範疇で理解したい資料である。渦巻文の突出や、胴部のパネル化などから、大木 8b 式中段階～新段階に対比されると推定している。

第Ⅱ群第８類である台形土器である 514 は、その存在が珍しく近傍で報告された類例はない。他地域の出土状況から判断して、大木 8b 式並行期の範疇で、ひとまず整理しておきたい。

【中期末葉】

当該期は、大木９式土器あるいは加曽利 E3 式の時間幅～大木 10 式土器あるいは加曽利 E4 式土器の並行期が該当する。しかし、後期の始まりや、その境界に分布する土器群の把握と共伴関係、さらには土器群の構造理解が十二分に行われていないのが実情である。

ここでは、大木９式並行期とおおよそ大木 10 式並行期の時間幅を設定したい。

当地域では、当該期に沖ノ原式土器が設定されている。その沖ノ原式土器は、沖ノ原類型、万條寺林類型、道尻手類型、堂平類型、つつじ原類型、反里口類型などの類型群で構成されている。各類型は互いに系統性と互換性があると考え、その縦軸と横軸の基本的な整理がなされた状況にある。2003 年の縄文セミナー「中期後半の再検討」を定点にした場合、大木９式並行期に沖ノ原１式が位置し、大木 10 式並行期を沖ノ原２式と考えた経緯がある（註 224）。

現段階では、再度、類型群の把握と構造を認識する必要性を痛感している。特に、反里口類型の再考

と牛蛭類型など非在地系土器の把握と共伴関係の追求が急務である。その沖ノ原式土器の分布域は、魚沼地域に限られていると考えている。信濃川に下流に位置する長岡市を中心とした旧古志郡域には、多賀屋敷遺跡（註 225）や上並松遺跡（註 226)、中道遺跡（註 227）などから、串田新式や上並松 E 類、瘤付土器など、未整理の土器群が安定的に分布していることから、別の型式土器が関連しながら分布していると考えている。

まず、大木 9 式並行期の指標資料は、沖ノ原遺跡 1 号住居跡覆土資料（以下、沖ノ原 1 号住居と略す)・堂平遺跡 K8 － FP38 覆土資料（以下、堂平 K8 － FP38 と略す）を古段階にし、堂平遺跡 13 号住居跡 FP 1 号覆土資料（以下、堂平 13 住 FP1 と略す）を中段階に整理し、新段階に堂平遺跡 32 号住居跡埋設土器を配した。

大木 10 式並行期における指標資料の設定は難しく、（＋）の措置を講じた。しかし、今後、南魚沼市宮下原遺跡の 5 号住居跡覆土資料の再検討を経て、指標資料として認知される必要がある（註 228)。

第Ⅱ群 5a 1 類は横渦巻文の系列（316・417・793・1112・2723・2724・2729・2748・2749）と縦渦巻文の系列（431・2769）の整理が今後必要である。また、基本となる横渦巻文のモチーフの系統的変化の追及が急務である。

第Ⅱ群 5a 2・5a 3・5a 4・5a 5 類は、その共伴関係が定かでなく、今後、細分根拠を明確にして、提示する必要がある。ただし、400 などの乙状文が、1150 や 1204 などの楕円文に変化する可能性があるが検証されていない。5a 6 類に関しては、特に 104 や 1050 の集合沈線化の現象を理解するためには、広範囲に視点をおいて検討する必要性がある。

第Ⅱ群 5a 8・5a 9 類は、反里口類型とした一群である。類型設定当時は、充填文様である横ハの字文に視点の中心があった。この視点の置き方は間違いであり、今後は隆起線による区画文や意匠文に注意を払い、沖ノ原類型や万條寺林類型などとの構造的な関係を探る必要性を痛感している。また、第Ⅱ群第 5b 類とも関連して、器形の口縁部形態に注意を払いたい。特に、内傾、内湾する形態である。例えば、(2867・2868・2877）→（75)、(465・1155）→（116・652）などの変化である。

第Ⅱ群 5C 類は、大木 9 式土器に対比される（327・448・3025・3039・3043・3045・3046）がある。一方、大木 10 式土器に対比される資料が 1347 と 3048 である。

第Ⅱ群 5d・5e・5f 類は非在地土器と考えている。3051・3052・3057 は加曽利 E Ⅲ式土器、187・3077・3082・3118・3125・3131 は加曽利 E Ⅳ式の範疇で理解したい。3136 は中部高地周辺に分布する加曽利 E Ⅳ式土器と想定している。3153・3154 は曽利式と考えた。

第Ⅱ群 5g 類の 3144 である両耳壺、5h 類の瓢箪形注口土器である 398・799・806 は、大木 10 式並行期に位置付けたい。また、5g 類に含めた 786 の両耳壺は、肩部に貼付した橋状把手（両耳）から延びる上下 2 本の隆起線が太い。当該期というよりも、称名寺式の範疇で理解することができる可能性がある。よって、本資料の時期比定は保留としたい。

【後期】

現段階の縄文土器研究を鑑み、我々が理解している中期末から後期に関連する編年観を第 72 表に示した。中期末の項でも示したとおり、今までに大木 9 式土器並行期に沖ノ原 1 式を配置し、大木 10 式土

器並行期に沖ノ原２式を位置付ける提案がなされている（註 229)。しかしながら、大木 10 式土器並行期の実態解明が進んでおらず、積極的な議論の展開が必要である。

現段階では、沖ノ原１式土器と三十稲場式土器との間を埋める土器群の探求が始められている。少なくとも、沖ノ原類型の加飾隆起線渦巻文土器群と城之腰遺跡の隆帯文土器群との系統性の追求と段階的変遷を把握するためには、城之腰編年（註 230）や多賀屋敷編年（註 231）をたたき台として議論を重ねる必要があろう。そのためにも、近年好資料が出土した長岡市中道遺跡からの論考に期待が寄せられるところである（註 232)。

我々は、編年を整備するために、後期の始まりを称名寺Ⅰ式土器並行期と考える（註 233)。したがって、現在、称名寺Ⅰ式並行期に対比される土器群と三十稲場式土器との明らかな共伴関係が確認されないことから、後期初頭期を（＋）として理解し、三十稲場式土器は小千谷市城之腰遺跡 R24 － P30 覆土資料を指標資料と考え、称名寺Ⅱ式並行期に配置するが、当然称名寺Ⅰ式土器並行期の一部に三十稲場式土器は存在していると推考している。

三十稲場式土器と南三十稲場式土器との編年関係の議論は、古くから活発に繰り返されてきたが、ようやく共通認識として、三十稲場式→南三十稲場式の変遷が定着をみたと言える。南三十稲場式土器は、堀之内１式～２式にかけて並行する土器である。その時間幅における細別作業が、近年、品田高志（註 234)・国島　聡（註 235)・金子裕子（註 236)・金内　元（註 237）によって行われている。ここでは、南三十稲場式を古段階・新段階・最新段階の３段階区分案が議論され、最新段階とした細線文化する段階が阿賀野川以北だけでなく、柏崎市や十日町市など、少なくとも阿賀野川以南地域にも広がりが確認され、段階として共通認識が形成されつつある。けれども、南三十稲場式土器古段階と三十稲場式土器新段階の区分が不明瞭のままである。そして、南三十稲場式土器最新段階とした３段階を編年学上、時間として認めるとして、この３段階が南三十稲場式土器、すなわち堀之内２式並行期の範疇で理解するか、あ

<table>
<tr><th>東　北</th><th>関　東</th><th>北　陸</th><th>新　潟</th><th>標式資料</th><th>道尻手</th><th>道尻手遺跡の分類</th></tr>
<tr><td rowspan="2">綱取Ⅰ式古</td><td>称名寺Ⅰ式古</td><td rowspan="2">前田式</td><td rowspan="2">（＋）</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="3">Ⅶ期</td><td rowspan="2">第Ⅲ群第 1a1 類</td></tr>
<tr><td>称名寺Ⅰ式新</td></tr>
<tr><td>綱取Ⅰ式新</td><td>称名寺Ⅱ式</td><td>高波式</td><td>三十稲場式</td><td>城之腰 R24-P30</td><td>第Ⅲ群第 1a3 類、第 1a4 類、第 1a5 類、第 1a6 類、第Ⅲ群第 1b 類、第 1c 類</td></tr>
<tr><td>綱取Ⅱ式古</td><td>堀之内１式古
堀之内１式新</td><td rowspan="2">気屋Ⅰ式</td><td>南三十稲場式古</td><td>向原 C1-P1</td><td>Ⅷａ期</td><td>第Ⅲ群第 2a 類の一部、第Ⅲ群第 2b1 類</td></tr>
<tr><td>綱取Ⅱ式新</td><td>堀之内２式古</td><td rowspan="2">南三十稲場式新</td><td>原 17 号住</td><td>Ⅷｂ期</td><td>第Ⅲ群第 2a 類の一部、第Ⅲ群第 2b2 ～ 4 類、第Ⅲ群第２ｃ類</td></tr>
<tr><td>宮戸Ⅱａ式</td><td>堀之内２式</td><td>気屋Ⅱ式</td><td></td><td>Ⅸ期</td><td>第Ⅲ群第３類</td></tr>
<tr><td rowspan="2">宮戸Ⅱｂ式</td><td>加曽利 B1 式</td><td>（＋）</td><td>（＋）</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>加曽利 B2 式</td><td>酒見Ⅰ式</td><td rowspan="2">三仏生式</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>加曽利 B3 式</td><td>酒見Ⅱ式</td><td>刈羽大平Ⅳ群</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>新地１式</td><td>曽谷式</td><td rowspan="2">井口Ⅱ式
井口Ⅲ式</td><td>（＋）</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>新地２式</td><td>安行Ⅰ式</td><td rowspan="2">（＋）</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>新地３式</td><td>安行Ⅱ式</td><td>八日市新保Ⅰ式
八日市新保Ⅱ式</td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

第 72 表　縄文後期編年対比表（暫定）

るいは加曽利 B1 式土器の範疇で捉えるかという、新たなる議論が始まった段階である。

我々は、たたき台として南三十稲場式土器の時間幅を、堀之内２式並行期と考えると共に、金子等が指摘する３段階区分を組み込むことが可能と判断した。

加曽利 B 式並行期に関しては、品田高志（註 238）・国島聡（註 239）・渡邊裕之（註 240）によって、三仏生式土器の位置付けが議論されてきた経緯がある。現段階では、三仏生式設定の原典資料から、それらは加曽利 B2 式～ B3 式土器に並行するものであるとの共通見解である。したがって、加曽利 B1 式土器並行期は（＋）とし、加曽利 B2 式～ B3 式並行期に三仏生式土器を配置することになる。

なお、（＋）とした考古時間に関しては、さらなる未知なる土器群の探求と既存土器群の検討を進めることから、道が開けるのであろう。

【三十稲場式土器】

第Ⅲ群第Ⅰ類土器の大半は、称名寺Ⅱ式土器並行期に位置付けられる三十稲場式土器を構成する土器群の範疇と理解する。しかしながら、1a 1 類（893・927）や 1a 2 類（952・3464）は、その器形や文様などから（＋）とした後期初頭に位置付けされる資料の可能性が高い。1a 3 類とした 384・3474 などは、典型的な三十稲場式の刺突文鉢形土器である。1a 4 類とした頸部区画が不明瞭で、胴部の刺突文（註 241）が比較的に細かい特徴がある 552・781・1317・3529・3530・3532・3533 や、1a5 類とした 1087・3560・3568 は、類例の少ない資料（註 242）であり、典型的な三十稲場式土器とは異なる。これら一群の特徴である器形の胴長化や橋状把手の形骸化などから、1a 3 類を三十稲場式土器古段階に位置付け、1a 4 類や 1a 5 類は、その新段階に位置付けしたい。しかしながら、1a 6 類とした沈線文と刺突文で構成される 3546・3547・3549 と 1a 4 類＋ 1a 5 類との時間的関係については、不明である。

第Ⅲ群 1c 類は、北陸地方に分布する気屋式土器であり、三十稲場式土器に並行するものである。

第Ⅲ群 1d 類は、称名寺式土器あるいは称名寺式に関連する資料である。653 は称名寺Ⅰ式に対比され、1071・896・1209・1222・3604・3609・387 は称名寺Ⅱ式に比定される。

第Ⅲ群第７類は、蓋形土器である。蓋形土器の研究は、三十稲場式土器の基本的な研究として田中耕作が進めている（註 243）。これらは、三十稲場式の刺突文鉢形土器の頚部区画文の表出技法や文様構成と文様を大きく関連すると考えられている。さらに、蓋の形態を組み込み、編年される可能性がある。現段階で、基本的に三十稲場式土器の並行期に位置付けされるものであろう。その中でも、1226・4074 は新段階に組み込まれる資料と推測する。4070 は、第Ⅲ群第 1a 2 類に伴う蓋形土器であると考えることから、現状では三十稲場式土器から除外して、後期初頭（＋）あるいは中期末まで遡る可能性がある。第Ⅲ群第５類の 1309・4018 は、称名寺式に対比される浅鉢形土器である。また、第Ⅲ群第６類は注口土器である。4037 は称名寺式で理解したい。

現段階において、三十稲場式土器は称名寺Ⅱ式並行期に対比しているが、事実、本遺跡から称名寺Ⅰ式土器に対比される資料が存在する事実から、その時間幅で整理される土器群が存在することを意味している。このことは重要である。したがって、現在、称名寺Ⅱ式並行期に整理した三十稲場式土器の一部や、第Ⅲ群第 1a 1 類・1a 2 類などを組み込み、再編成して（＋）を解消して、近い将来型式を提唱できるのであろう。

【南三十稲場式土器】

南三十稲場式土器と堀之内式土器との関係については、田中耕作が堀之内２式に並行する部分が確実にあると指摘（註 244）すれば､国島聡は南三十稲場式を堀之内２式期まで残らない土器群と理解する（註 245)。阿部芳郎は、南三十稲場式の詳細な分析から、その成立を堀之内 1C 式ならびに綱取 2b 式・宮戸Ⅰｂ式など広域にわたる型式群の類型化現象によるものだと予測した（註 246)。

ここでは凡そ、堀之内１式に古段階が並行し、新段階および最新段階は堀之内２式の範疇で理解する。品田高志は南三十稲場式土器の新段階を堀之内１式末段階～２式に並行させている（註 247)。

第Ⅲ群 2a 類および 2b 類は、南三十稲場式土器である。644・3661 が新段階に対比されると予測している。ほかは古段階に位置付けられる。また、本遺跡には最新段階は確認できない。

第Ⅲ群５類とした浅鉢形土器のうち、732・787 は堀之内２式土器に対比される。また、4020・4022・4024 は堀之内式１土器と推定される。

第Ⅲ群６類は注口土器である。798・814・4057・4059・4060 は南三十稲場式の注口土器である。4040 については、当該期と推定しているが、南三十稲場式の範疇に組み込まれないと判断した。

【南三十稲場式土器と三仏生式土器を結ぶ（＋）の段階】

南三十稲場式土器は安定的に時間軸と空間軸を保っている土器群であり、その下限を堀之内２式土器の範疇に納まると理解している。また、地域型式土器である三仏生式土器の上限を加曽利 B2 式土器並行期と考えている。よって、全国的に広がりを見せると考えられている加曽利Ｂ式土器のうち、B1 式並行期が新潟県内において明確になっておらず、（＋）として取り扱った。

第Ⅲ群第Ⅲ類は、単体資料として判断するならば加曽利 B1 式土器の範疇で理解したい 19・658・3986･3992 や連鎖沈線で結紐状意匠文を描く石神類型（註 248）と判断される 17･18･3961･3965 がある。また、第Ⅲ群第５類に分類した 732・737・4026・4027・4028・4029・4030・4032 は、加曽利 B1 式土器の範疇で理解できる浅鉢形土器である。同様に、第Ⅲ群第６類の注口土器にも、4042 の加曽利 B1 式土器、4061・4063 の石神類型土器が含まれている。

Ｄ．おわりに

このたび道尻手遺跡出土土器のうち、第Ⅱ群土器～第Ⅳ群土器の編年学的位置の検討を行った。現段階の編年観を整理した上で、編年表として明示し、各土器群の時間的位置関係を示した。この作業を進める中で、周辺地域の型式土器との並行関係を組み上げるのに難儀した。というよりも、示した編年表における阿玉台式と勝坂式との問題、北陸地方の型式土器との並行関係については、未消化のまま、その検討課題を棚上げしての提示である。未消化と言へども、編年観を明確に表示することが、本地域の縄文土器研究を一歩前進させる原動力になると確信している。この編年観を積極的に批判することから、次の一歩が踏み出されるのであろう。

よく一括資料がないと聞くが、少なからずここに示した指標資料がようやく俎上にあがった。今後はその時期の補足資料の増加を待ち、量的保証を図る作業と指標資料間の時間の狭間を埋める探求が必要である。

大木 8a 式並行期の多様な土器様相への理解と、その編年作業に取り組む方法論的整備が課題である。そのような実情に中で、火焔型土器の３形態認識と２段階区分の追認を行った。この問題に関して、多くの議論が寄せられることに期待する。

大木 8b 式並行期では、３段階に区分した上で、火焔型土器群は古段階に、その下限があることを表記した。また、中段階～新段階には、腕骨文を取り込み、充填地文手法を採用する新たなる隆起線文土器群が現れることを指摘した。その土器群は、過去に「栃倉Ⅱ式」と呼称された一群を含むことから、今後、再検討作業を経て「栃倉式」の復権への序奏を奏でることになる。

また、昭和 12（1937）年に斉藤秀平（註 249）によって「塔ケ埼式土器」と呼ばれた一群の中に、第Ⅱ群第 4a １・4a ２・4a ３・4a ４類が含まれている。この一群の中で確認された胴部に展開する小渦巻文の部分が膨らみ、瘤化（突出化）する資料が散見され、このたび注意を喚起し、大木 8b 式古段階の中にあっても新しい傾向と理解する考えを提示した。

大木９式並行期は、沖ノ原式の安定的分布が見られる一方、長岡周辺との土器様相の違いが明確にあり、その異なる一群への注意を喚起した。

大木 10 式並行期は、後期初頭あるいは、後期の始まり論を含めて課題が山積していた。この時期は時間軸の整備と魚沼地方と長岡地方との空間的まとまりを考慮した土器群への接近と組み立てが必要であろう。

後期前葉～中葉には、三十稲場式→南三十稲場式→（＋）→三仏生式への認識が共通理解として広まり、今後、細部調整と東北地方日本海沿岸との地域間交流を射程に入れ、土器群への構造理解を進める必要がある。

以上、道尻手遺跡出土土器から発信した課題を、今後の魚沼地方の縄文土器研究のたたき台の糧にしていただければ幸いである。今後の議論に期待し、おわりとする。

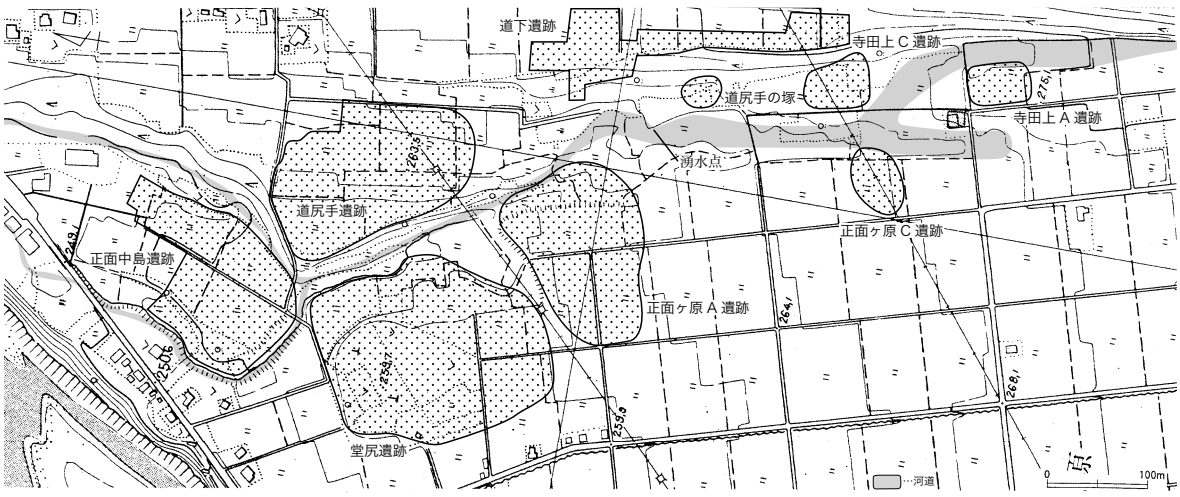
第２節　集落構造について

１．道尻手遺跡の立地と集落構造

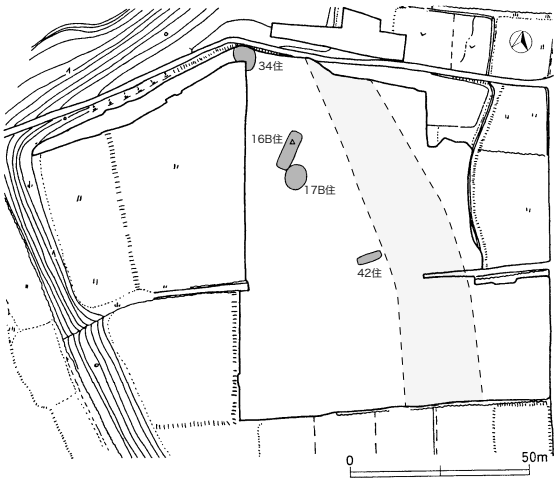
本遺跡は貝坂段丘の縁辺に立地しているが、この周りには縄文時代の遺跡が幾つか隣接している（第129図）。南側には前期末～中期初頭の集落遺跡である道下遺跡があり（註250）、西側に中期前葉の堂尻遺跡（註251）、南西側には縄文時代晩期の大規模集落である正面ケ原Ａ遺跡（註252）がある。本遺跡は中期前葉～後期中葉にわたって大規模な集落が形成されており、途中に短期的な断絶があったとしても、他の遺跡に比べて長期間にわたって占地されている。このことから、この区域は居住に適していた場所であったと推定される。このような拠点的集落が形成される条件としては、占地のための広い空間、水（小河川や湧水）、動植物資源の有無、石材・粘土などの資源の有無、周辺地域へのアクセス、などの諸条件が挙げられる。本遺跡の場合、南側にある湧水点がその一つの要素として考えられる。沖ノ原遺跡も自然湧水の脇に環状集落が形成されており（註253）、重要な要素であることは明らかである。

このような場所に立地する道尻手遺跡の検出遺構の分布は第130図のように変遷する（註254）。しかし、これらの集落変遷は、編年の時間幅の問題を別にしても、当時の集落形態を正確に反映するものではない。その要因として幾つか挙げられる。一つは調査範囲の問題であり、集落の半分ほどの区域を調査したにすぎず、未調査区の状況が不明であること。二つめは遺跡の遺存状態の問題であり、昭和30年代の水田造成による削平や石の抜き取りなどの破壊が見られる。加えて、縄文時代の長期にわたる占地のため、竪穴住居の構築などの諸活動によって攪乱や削平が繰り返されている。これらの要因によって住居跡などの遺構が不明瞭になった可能性が想定される。これは調査区内で検出された多数の柱穴状の土坑が存在することからも明らかである。このような前提をもとに本遺跡の集落変遷を検討する。

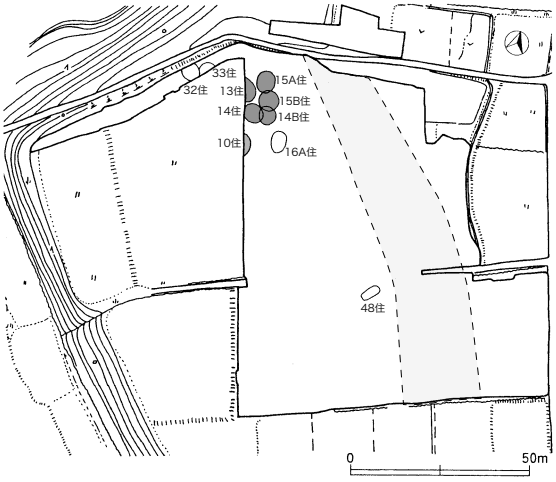
本格的に環状集落が形成されるのは、Ⅲ期（大木７ｂ式並行期）からである。これは五丁歩遺跡（註255）や清水上遺跡（註256）の開始時期とほぼ同時期である。住居跡は４軒、フラスコ状土坑１基が検出されている。集落の造営と同時に、旧川道の窪地に土器・石器やおそらく有機物などの廃棄によって廃棄場が形成される。この旧河道は堆積土の自然科学分析から、この段階にはすでに水の流れはなかったという分析結果が出ている（註257）。この時期の住居形態は、円形の住居（17B住・34住）と長方形



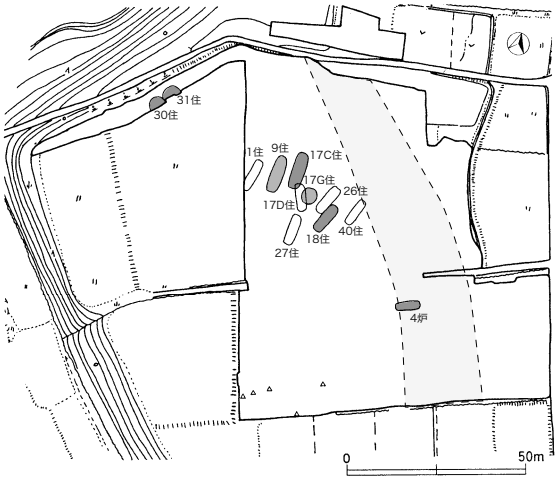
第129図　道尻手遺跡の立地



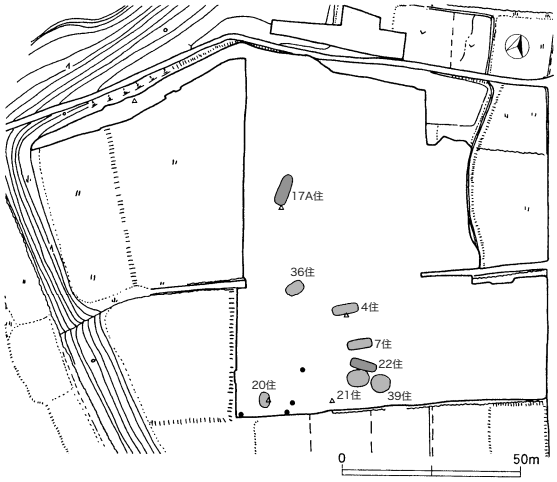
1. Ⅲ期（大木７ｂ式並行期）



2. Ⅳ期（大木８ａ式並行期）

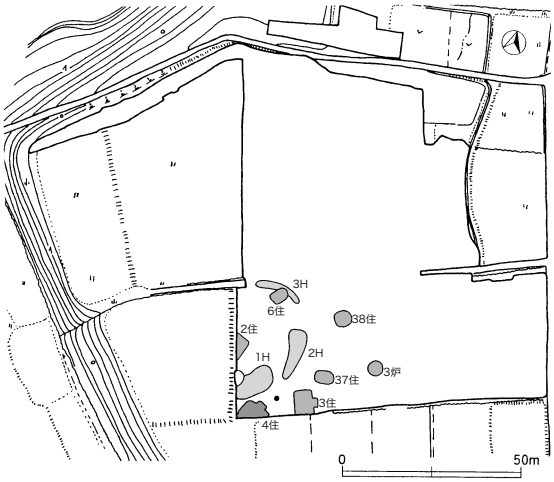


3. Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）



4. Ⅵ期（沖ノ原式期）

5. Ⅶ期（三十稲場式期）



6. Ⅶ・Ⅸ期（南三十稲場式～加曽利 B1 式並行期）

住居跡
長方形柱穴列
埋設土器
フラスコ状土坑
配石遺構
廃棄帯

＜凡例＞
… 古段階
… 新段階

第 130 図　道尻手遺跡の集落変遷図

住居（16B 住・42 住）が認められ、両住居形態が並存して集落が構成されていたと考えられる。これらは調査区の北側に分布しており、住居跡の主軸方向には中央広場と想定される区域への求心性が見られる。この時期は出土遺物量に比べて検出遺構が少ない。また西方約 300 mの段丘が１段下がる正面面には堂尻遺跡があり、当該期の住居跡が３軒確認されている。これらは道尻手遺跡における集落の一部を構成していた可能性がある。これは集落の範囲の問題と関連し、幾つかの集落遺跡で小谷や小河川を挟んで集落が展開する事例があり、集落の範囲を考える上で重要である。

Ⅳ期(大木８ａ式並行期)は前段階に引き続いて環状集落が営まれている。この時期は住居跡が 11 軒(10 住・13 住・14A ～ C・15A・B 住・16A 住・32 住・33 住・48 住）検出され、調査区の北側に分布がまとまっている。これらの多くが卵形住居跡であり、48 号住居跡のみが長方形住居跡である。これらの主軸方向はおおよそ南北軸にまとまるが、中央広場に求心性を示しているとは言えない。この時期のフラスコ状土坑や墓坑も明確ではない。出土土器はこの時期が最も多いが、検出された遺構は比較的少ない。これらの住居跡のほとんどは大木８ａ式並行期でも古段階に属し、新段階の事例は 10 号住居跡のみである。また周辺からは一段低い正面面の正面中島遺跡の谷沿いから土器が出土し、堂尻遺跡の 11 トレンチから当該期のフラスコ状土坑１基が検出されており、本集落が一段低い段丘面（正面面）まで及んでいたことが明らかである。

Ⅴ期（大木８ｂ式並行期）も継続的に環状集落が造営されている。住居跡は 13 軒検出され、円形の住居跡は４軒（17G 住・30 住・31 住・６炉)、長方形住居跡は９軒（１住・９住・17C 住・17D 住・18 住・26 住・27 住・40 住・４炉）である。住居跡は、Ⅲ・Ⅳ期に比べてより内側に分布する傾向があり、主軸方向は中央広場に求心性を示している。しかし、第 17D 号住居跡のように異なった方向を向くものもある。この時期も廃棄帯への廃棄行為は継続されるが、第４号炉のようにこれらの範囲内に住居が構築されるようになる。このことから廃棄帯が廃棄場所といった限定された空間では、なくなり始めた可能性がある。この他にフラスコ状土坑が５基確認され、比較的調査区の南側にまとまる傾向がある。墓坑と推定されるものは K5 － P5 などがある。この時期は周辺遺跡を含めて遺跡数と住居跡数が最大になる時期である（註 258)。

Ⅵ期（沖ノ原式期）は、８軒の住居跡が検出され、複式炉を有する住居（20 住・21 住・36 住）と長方形住居（４住・７住・17A 住・22 住）がある。これらはＨ５・Ｉ５・Ｊ５・Ｋ５グリッドにまとまり、17A 号住居跡のみがやや離れた場所に位置している。これらはⅤ期に比べて環状集落のより内側に分布するようになり、中央広場も径約 30 m前後と推定される。住居跡の主軸方向は、前段階までと同様に中央広場への求心性を示している。また埋設土器のうち４基が中央広場の周囲に分布している。これらの一部は住居に伴っていた埋甕である可能性が高いが、埋設土器 K3 － Ｐ３は柱状礫を伴うことから埋葬施設であると考えられる。この他、フラスコ状土坑が６基検出されているが、集落内でのまとまりはなく散在している。墓坑の可能性があるものは２基のみである。遺物の出土状況から廃棄帯への廃棄行為がほとんどなかったことを示している。これ以後、環状配置の集落構造は不明瞭になる。

Ⅶ期（三十稲場式期）は、３軒（８住･19 住･10 炉）の住居跡が見られるが、竪穴の掘り込みが浅いため、住居形態や主軸方向は不明である。この時期になると、長方形柱穴列１棟、溝状遺構１条、配石遺構といった新たな要素が集落を構成するようになる。しかし、これらの配石遺構の構築時期は、出土遺物からⅦ期と断定することはできないが、中期末葉の中央広場の縁辺に沿って配列することから、中期終末から

後期初頭に造営が開始された可能性がある。長方形柱穴列は、第1号長方形柱穴列以外は配列が不明なものが多い。溝状遺構は廃棄帯があった範囲から始まり、西側に延びている。この方向は地形の傾斜方向に沿っていることから、水路的な遺構であったと推定される。

Ⅷ期（後期前葉）は、8軒（2住・3住・6住・37住・38住・41住・43住・3炉）の住居跡が検出されている。これらの遺構の分布は調査区南側に偏り、北側は遺構の空白地になる。南三十稲場式期新段階の住居は、中期集落の中央広場にあたる場所に構築されるようになり、集落構造に大きな転換が認められる。配石遺構の周辺には帯状に柱穴が重複しながら密集している。これらの構築時期は不明であるが、後期前半期のものと考えられる。これらは配列が不明なものがほとんどであるが、確認面からの深度が約0.5m～1m前後と大形で、根固め礫が伴う場合が多いことから、多くは長方形柱穴列に伴う柱穴であると考えられる。配石遺構群（1号・2号・3号配石群）は、長径約30mほどの半円状にめぐっている。1号配石群は、14基の配石墓と4基の配石から構成される。2号配石群は8基の配石墓と1基の配石から構成され、帯状に配列している。3号配石群は、立石4基と立石状の礫などが弧状に並ぶ列石であり、配石墓は伴わない。配石墓の多くは、南三十稲場式新段階～加曽利B1式並行期に造営されたものである。これらの配石遺構群については「環状列石」の範疇で捉えてきた（註259）。しかし、南三十稲場式期新段階の住居（2住・6住・43住）が環内部に侵出することから、少なくともこの段階の配石遺構は環状列石の定義には当てはまらない。ただし､Ⅵ期(沖ノ原式期)の環状集落の中央広場に沿って配石が環状に分布することから、中期終末もしくは後期初頭に環状列石が構築されて、次第に配石墓が作られる過程で改変された可能性もありえる。

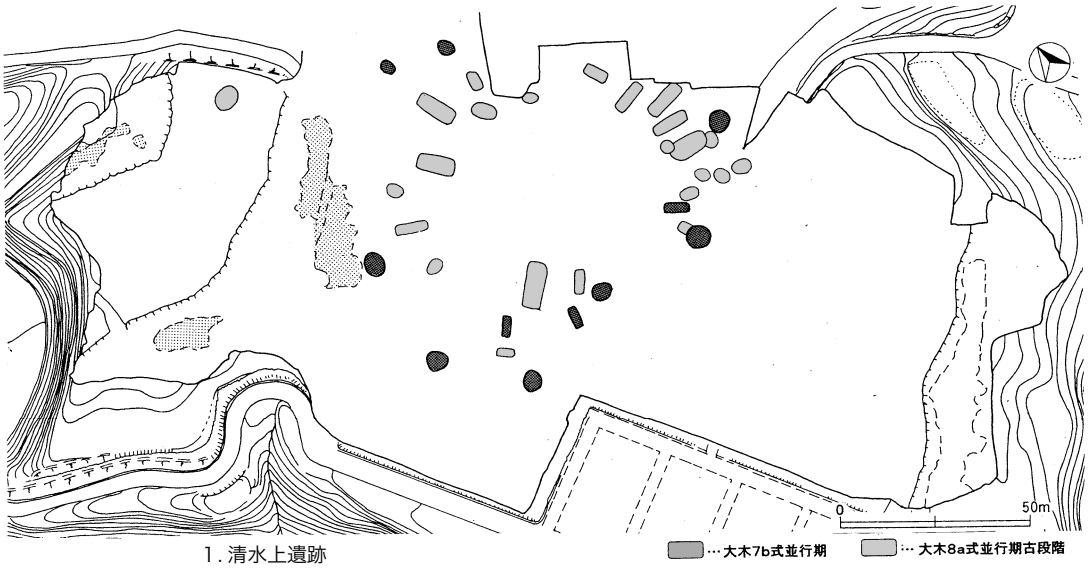
本遺跡における集落構造には、時期的な変化と特色が認められた。しかし、これらは冒頭で述べたような要因によって、多少なりとも改変されていると推定される。従って、他の遺跡と比較を行うことで、当地域における集落構造の時期的な特色を明確にしたい。

2．周辺遺跡との比較

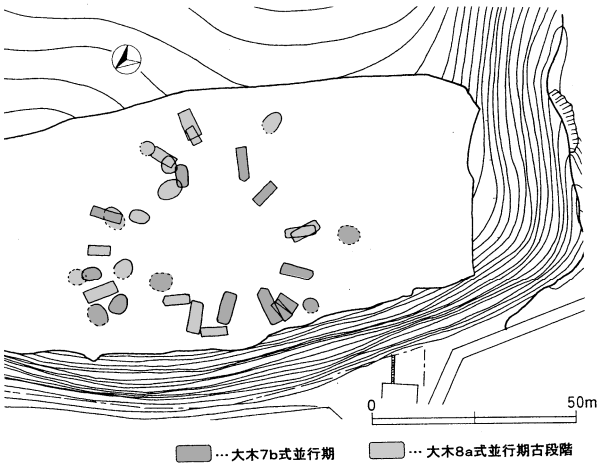
1）縄文時代中期の集落構造

周辺遺跡における縄文中期集落は、拠点的な環状集落と小規模集落が認められる。明確な環状集落の事例は、津南町沖ノ原遺跡、堂平遺跡（註260）、十日町市笹山遺跡（註261）、塩沢町五丁歩遺跡、原遺跡（註262）、魚沼市清水上遺跡、原・居平遺跡（註263）、小千谷市城之腰遺跡（註264）、長岡市馬高遺跡（註265）、岩野原遺跡（註266）、中道遺跡（註267）がある。

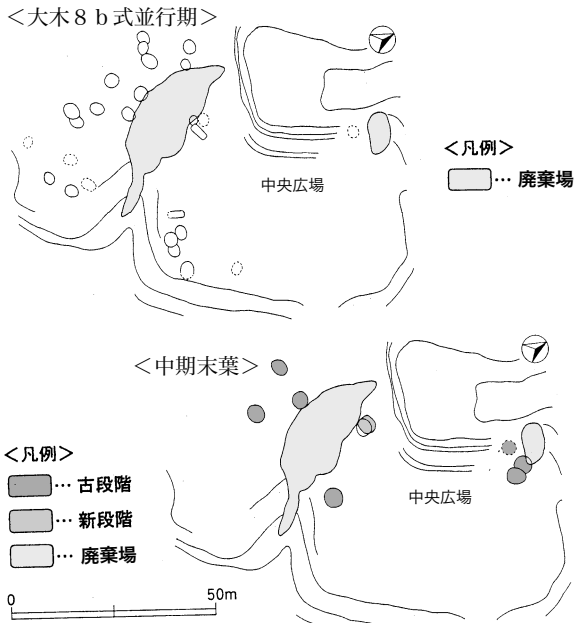
これらの中期環状集落は、大木7b式並行期から形成される場合が多い。清水上遺跡（第131図1）や五丁歩遺跡（第131図2）、馬高遺跡などが代表的な事例である。これらは中央広場を中心に、円形の住居や長方形住居が並存して集落を構成するのが特徴である。特に長方形住居跡の主軸方向には中央広場への求心性が見られるが、円形の住居跡には求心性は認められない。フラスコ状土坑は、清水上遺跡で83基、五丁歩遺跡は47基が検出されており、集落間での格差が認められる。大規模な廃棄場は、五丁歩遺跡では確認されてないが、清水上遺跡では集落西側で確認される。また環状集落の内側にある中央広場に配石を伴う事例がある。例えば、五丁歩遺跡では中央広場に環状に礫が雑然と並んでおり、清水上遺跡では中央広場の縁辺部から「く」字状の配石が検出されている。墓坑は、五丁歩遺跡では中央広場に群在しているが、清水上遺跡では住居分布域に散在しており、明確な墓域の形成は認められない。



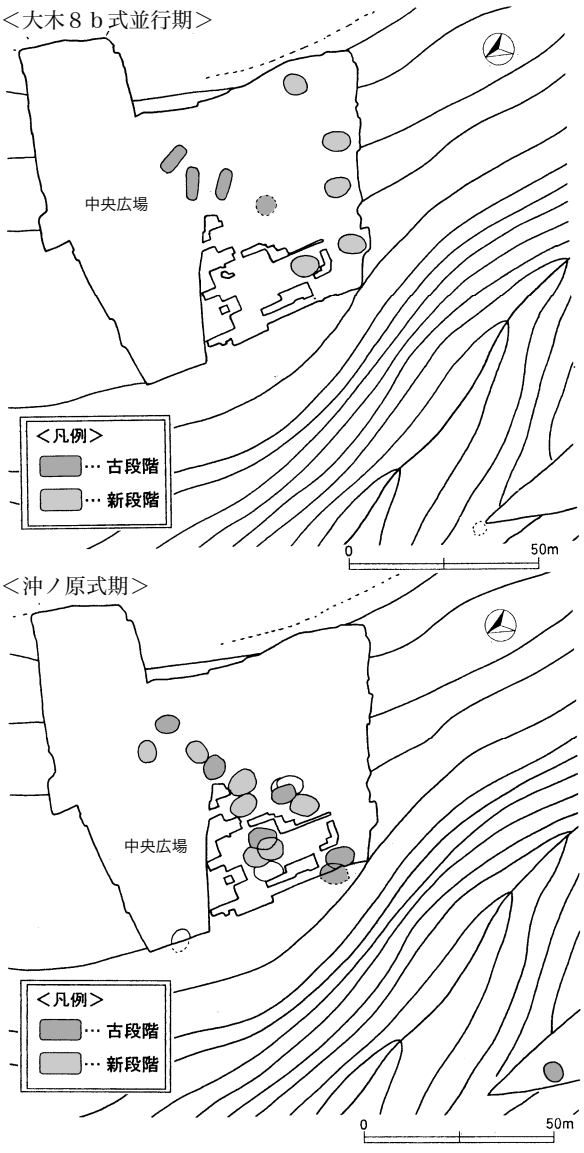
1. 清水上遺跡



2. 五丁歩遺跡



3. 岩野原遺跡（中期集落）



4. 原遺跡（中期集落）

第 131 図　信濃川流域の中期集落の事例

この両集落は大木 8a 式並行期の古段階をもってほぼ廃絶する。

一方で、大木８ａ式並行期新段階に環状集落が新たに形成される事例が多く、これらのほとんどは中期終末まで継続する。例えば、沖ノ原遺跡、堂平遺跡、笹山遺跡、原遺跡（第 131 図４）、岩野原遺跡（第 131 図３）、原・居平遺跡がある。これらの集落構造の特色は、中央広場を中心に卵形住居と長方形住居が並存して環状集落を構成する。住居跡の主軸方向は、長方形住居跡の場合は中央広場への求心性が強いが、卵形住居跡の場合は集落によって多様である。例えば、堂平遺跡や中道遺跡、岩野原遺跡では主軸方向が求心性を示しているが、原遺跡などでは求心性があるものとないものが認められる。また墓域は中央広場に形成される場合と居住域に散在して墓域が不明瞭なものがある。例外的な事例として、城之腰遺跡は中期末葉に集落が形成されて、３群の墓域を中心に集落が形成される。城之腰遺跡の報告者は集落Ａ⇒集落Ｃ⇒集落Ｂへと変遷すると想定している（註 268）が、この解釈には幾つかの問題がある。ここでは詳述しないが、基本的に中期末葉の集落と後期初頭〜前葉の集落を分けて考える必要があるだろう。次にフラスコ状土坑は集落によって検出数が大きく異なり、なかでも堂平遺跡・中道遺跡・岩野原遺跡では中央広場の周囲に群集している。この時期の特色の一つとして大規模な廃棄場が認められる。この大規模な廃棄場は、道尻手遺跡に加えて岩野原遺跡がある。中道遺跡でも廃棄域に相当する遺物集中域が集落の外縁部に存在することが指摘されている（註 269）。しかし、道尻手遺跡や岩野原遺跡では、大木８ｂ式並行期まで存在した廃棄場が、これ以降小規模化するか不明瞭になり、中期末葉の集落では大規模な廃棄場が形成されない傾向がある。

このように中期の環状集落には、中央広場・住居分布域・廃棄場に加えて墓坑・フラスコ状土坑が群集もしくは散在し、ある程度の空間区分の存在が窺われる。このような集落構造について、小熊博史は中道遺跡の分析から、「重帯構造」と「分節構造」の存在を指摘し（註 270）、石坂圭介は魚沼地域の集落を分析するなかで「分節」や「重帯」など概念を用いている（註 271）。このような「重帯構造」や「分節構造」は、谷口康浩が南関東の集落遺跡について指摘したものである（註 272）。今後、集落の空間分割について検討する必要があるが、それほど単純なあり方をしていないようにも思われる。つまり、集落構造を把握する場合に集落の範囲というものが問題になる。信濃川流域の環状集落を見てくると、複

No	遺跡	河川	時期 II	III	IVa	IVb	Va	Vb	VIa	VIb	VII	VIII	IX
1	八反田	信濃川											
2	沖ノ原	信濃川											
3	反里口	信濃川											
4	上正面かみ	信濃川											
5	堂　尻	信濃川											
6	道尻手	信濃川											
7	道　下	信濃川											
8	下モ原II	信濃川											
9	下モ原III	信濃川											
10	城　林	信濃川											
11	午肥原	信濃川											
12	堂　平	信濃川											
13	芋川原	信濃川											
14	森　上	信濃川											
15	布　場	信濃川											
16	小　坂	信濃川											
17	野　首	信濃川											
18	笹　山	信濃川											
19	川治上原B	信濃川											
20	栗ノ木田	信濃川											
21	つつじ原B	信濃川											

No	遺跡	河川	時期 II	III	IVa	IVb	Va	Vb	VIa	VIb	VII	VIII	IX
22	幅　上	信濃川											
23	徳右エ門山	信濃川											
24	中　道	信濃川											
25	城之腰	信濃川											
26	大　平	信濃川											
27	岩野原（中期）	信濃川											
28	岩野原（後期）	信濃川											
29	中　道	信濃川											
30	千石原	信濃川											
31	川久保	魚野川											
32	五丁歩	魚野川											
33	原	魚野川											
34	万條寺林	魚野川											
35	宮下原	魚野川											
36	水　上	魚野川											
37	柳古新田下原A	魚野川											
38	大清水	魚野川											
39	清水上	魚野川											
40	原・居平	魚野川											
41	正安寺	魚野川											
42	古長沢	魚野川											

<凡例>
土器
住居少
住居多

第 132 図　集落遺跡の継続表

数の段丘面にわたるものや谷や廃棄場などを挟んで集落が広がる事例が見られる。例えば、道尻手遺跡と堂尻遺跡は同時期の住居が段丘を違えて300ｍ離れた位置にある。また原遺跡の沖ノ原式期の集落は、谷を挟んで五丁歩遺跡の調査区内まで広がりを見せている（註273)。清水上遺跡では、環状集落と廃棄場を挟んで大木８ａ式並行期古段階の住居が存在し、同様に岩野原遺跡では大木８ｂ式並行期の環状集落が廃棄場をはさんで展開している。このように住居は谷を挟んだ隣接地などに分布することも多く、これに水場などの日常生活の場を組み込んだ場合に集落範囲は重要な問題である。

２）縄文中期集落の継続性と断絶

これらの環状集落の多くは大木７ｂ式並行期に形成されて、大木８ａ式並行期古段階に廃絶する場合が多い。一方で、大木８ａ式並行期新段階から開始されて中期終末で廃絶する場合も多い（第132図)。大木８ａ式並行期新段階に一つの画期があると見ることができる。このような集落の廃絶は、何らかの要因で集落が放棄されて、新たな場所に集落が形成された結果であると考えられる。このような放棄を伴う移動を考古資料から示すことは難しい。例えば、五丁歩遺跡と原遺跡は谷を挟んで隣接した環状集落であり、前者は大木８ａ式並行期古段階で廃絶し、後者は大木８ａ式並行期新段階から集落が形成されている。このことから前者から後者へと移動した可能性が想定される（註274)。同様な事例として、岩野原遺跡では中期集落に隣接して後期集落が形成され（註275)、福島県法正尻遺跡では中期前半期と後半期の環状集落が約60ｍ離れて存在している（註276)。これらは土器編年において、ある程度の連続性は認められるが、集落の廃絶と開始という現象面を解明するためには、ある一定範囲の地域もしくは遺跡群のなかで評価していく必要があるだろう。道尻手遺跡の占地期間は周辺遺跡に比べて、長期間にわたっている。このように長期間の占地を可能にした背景には、立地条件が良好であったことが考えられる。

３）縄文時代後期前半期の集落構造

縄文後期前半期の集落遺跡は、大規模な拠点的集落と住居が１、２軒のみの小規模集落がある。拠点的集落としては、津南町堂平遺跡、十日町市栗ノ木田遺跡（註277)、野首遺跡（註278)、塩沢町原遺跡、万條寺林遺跡（註279)、南魚沼市柳古新田下原Ａ遺跡（註280)、小千谷市城之腰遺跡、などがある。

この時期の集落遺跡では、柄鏡形住居や敷石住居などの住居形態が出現する。これらは竪穴が明確ではないために平面形や柱穴配列など不明なものが多いことから、集落構造は明らかではないのが現状である。例えば、原遺跡は中央広場を中心に環状集落が形成されているとされるが（註281)、中期の環状集落と重複していることから後期前葉の集落構造は明確ではない（第133図１)。また城之腰遺跡は、３つの環状集落が集落Ａ⇒集落Ｂ⇒集落Ｃと変遷すると考えられている（註282)。しかし、城之腰遺跡の場合も中期末葉の集落と重複しており、後期前半期の遺構分布からは明確な集落構造は読みとれない（第133図３)。

一方、この時期の集落には長方形柱穴列が構成要素として顕在化する。新潟県内の長方形柱穴列は、縄文後期初頭に出現し、後期前葉になると事例が増加すると考えられる。特に城之腰遺跡では、検出された長方形柱穴列89基のうち、ほとんどが後期初頭から前葉にかけて造営されたものとされている。この他に原遺跡では、後期前葉の長方形柱穴列が環状にめぐるようである。

また、この時期の集落は大規模な配石遺構を伴う場合が多い。配石遺構の種類は、環状列石や列石遺構、配石墓などがある。環状列石の事例は堂平遺跡があるが、整理途上にあるため明確な造営時期や集落構造は明らかではない（註283)。野首遺跡は概要報告のみであるが、列石遺構に伴って配石遺構がまとまっ

第 133 図　信濃川流域の後期集落の事例

ている。これらの大規模配石遺構の多くは配石墓を伴っており、配石墓がある程度のまとまりをもって墓域を形成している。野首遺跡の配石遺構は下部遺構を持たないものが多く（註 284）、単純に配石墓群とは捉えられないようである。このように配石遺構の全てが埋葬施設というわけではなく、明らかに配石下部に墓坑を伴わない配石遺構が存在している。後期前葉の集落における配石遺構のあり方は多様であり、城之腰遺跡のように大規模な配石遺構をほとんど伴わない事例も存在している。

一方、いわゆる「盛土遺構」に類似する事例がある。例えば、城之腰遺跡では廃棄場に地山（黄色土）が堆積している。報告者はこの黄色土の堆積について、「村つくり→定着生活→集落の放棄」のサイクルのなかの「村つくりの土木工事による排土」であると解釈している（註 285）。この他の事例は未報告であるが、中里村中島遺跡でも後期前葉期の盛土遺構が検出されている（註 286）。これらは大規模な土地造成が行なわれたことを示す痕跡であると考えられる。近年、千葉県などの南関東地方で、事例が増加している盛土遺構（註 287）との直接的な関連性は不明であるが、大規模な地山の掘削を伴う土地造成という点で、共通した特色であると考えられる。

この他に溝状遺構は、道尻手遺跡の事例以外では見られない。このような溝状遺構は水の利用と関わるものと考えられ、縄文時代後・晩期に水場遺構が増加することと関連している可能性がある。このように後期初頭から前葉期は集落構造がいまひとつ不明ではあるが、集落を構成する要素は一変するようである。

4）縄文後期の継続性と立地

信濃川流域における後期前半期の大規模な集落は、道尻手遺跡や原遺跡、城之腰遺跡などの集落遺跡は、中期末葉から継続的に占地されている。これに加えて、三十稲場式期もしくは南三十稲場式期に、新たに造営される拠点的集落が多い。例えば、栗ノ木田遺跡や柳古新田下原Ａ遺跡がある。また中期末葉から継続しているように見える集落も、遺構組成や集落構造に連続性が認められないことから、中期末葉から後期初頭の間で一時的に断絶している可能性も否定できない。いずれにしても、この時期に集落構造の変化があることは明らかである。また、これらの拠点的集落の多くは、南三十稲場式期もしくは加曽利Ｂ1 式並行期に廃絶する。

これらの立地は、縄文中期が基本的に台地上や河岸段丘上に拠点的集落が形成されるのと同様に、後期も台地上に形成される傾向がある。従来の研究では、縄文後期になると遺跡立地が低地化するとされている。しかし、この時期の集落立地は、単純に低地もしく河川氾濫原などへの占地傾向を示すものではない。この時期の集落の放棄と新たな集落の造営の背景については、今後解明していく必要がある。

3．まとめ

道尻手遺跡と信濃川流域の縄文中期から後期前半期の集落について検討を加えた。道尻手遺跡の集落構造の特色は周辺遺跡と多くの点で共通性が見られた。これらをまとめると以下のような特色があげられる。

＜縄文時代中期前葉～末葉の集落＞

（1）　住居形態は、長方形住居と円形の住居（卵形住居）が並存して集落を構成している。
（2）　住居跡の主軸方向、特に長方形住居跡には中央広場への求心性が見られる。
（3）　中央広場は、墓坑群が分布するものと遺構空白域となるものがあり、出土遺物は稀薄である。
（4）　フラスコ状土坑は、散在する場合と中央広場の周辺に群在する場合がある。
（5）　大規模な廃棄場が集落の周囲の斜面地や窪地などに形成される場合が多い。
（6）　これらの環状集落の継続時期は、大木７ｂ式並行期に開始されて、大木８ａ式並行期古段階で廃絶する場合が多い。また大木８ａ式並行期新段階に新たに環状集落が開始される事例が多く、これは中期末葉まで継続する傾向がある。

＜縄文時代後期初頭～中葉の集落＞

（1）　住居形態は、敷石住居に加えて柄鏡形住居の系統にある竪穴住居が存在している。
（2）　長方形柱穴列が集落の構成要素として顕在化する。
（3）　大規模配石遺構が増加し、集落によって多様であるが、環状列石や列石遺構、配石墓などがある。
（4）　集落の立地は河岸段丘などの台地上に形成される場合が多く、中期末葉から継続的に集落が形成される場合と、後期に新たに形成される事例がある。
（5）　廃棄場などで、土地造成に伴う地山土の堆積が認められる。

このように縄文時代中期前葉から後期前半期の集落の様相が認められる。今回示した特色は比較的大雑把な特色であり、今後はより細かな時間軸をもとに詳細な検討が必要になるだろう。

第３節　信濃川流域の縄文時代中・後期の住居形態について

本遺跡から検出された住居跡は 52 軒（炉跡･焼土跡を含めて 73 軒）である。これらはⅢ期～Ⅸ期（縄文時代中期前葉～後期中葉）に帰属するが、住居形態は多様である。これらの住居形態を、円形プランの住居跡と長方形住居跡、複式炉、後期前半期の住居跡に分けて、それぞれの地域的特色をまとめたい。

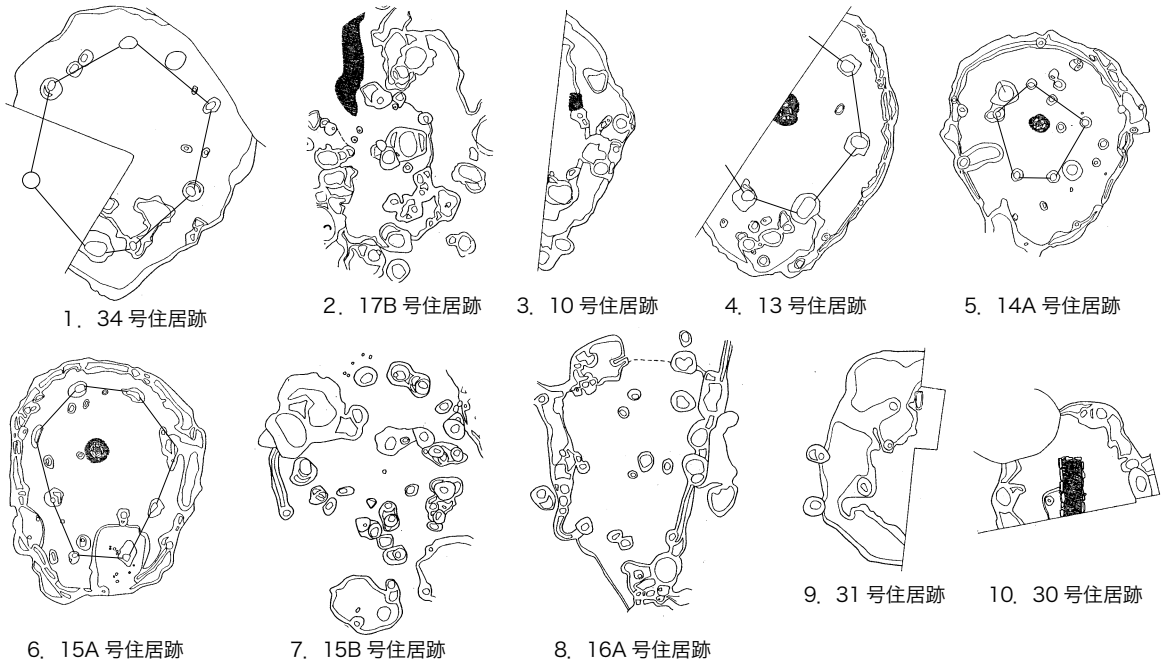
１．円形プランの住居跡

１）道尻手遺跡の事例

本遺跡から検出されている円形プランの住居跡は、第 10 号住居跡･第 13 号住居跡･第 14A 号住居跡･第 15A 号住居跡･16A 号住居跡･第 17B 号住居跡･第 30 号住居跡･第 34 号住居跡などがある（第 134 図）。

これらの住居跡はⅢ期～Ⅴ期に帰属し、平面形は卵形や楕円形・円形を呈している。主柱は６本主柱・７本主柱などがあり、これらの主柱は竪穴の平面形に沿って内側に配列している。柱穴の平面形は円形が多いが、第 15A 号住居跡のように半円状の細長いものがある。これは半截材が主柱に用いられていた可能性が想定され、小千谷市大平遺跡（註 288）１号住居跡など、他の遺跡でも類例が見られる。

床面にはベッド状遺構を有する事例があり、第 10 号住居跡（3）・第 17B 号住居跡（2）の２例に加えて、第 30 号住居跡（10）・第 34 号住居跡（1）も一部に段差が認められる。この床面における段差は主柱穴に沿ってめぐり、段差は数 cm ～ 10cm 程度の比高差を有している。このベッド状遺構の機能は不明であるが、この種の住居の内部構造を考える上で重要な要素であると考えられる。入口部は主軸方向の先細る部分であると考えられ、この部分には小柱穴や浅い土坑が見られる。これらは入口に関連する遺構であると考えられ、前者は入口上屋を支える柱や階段状遺構などの痕跡と考えられる。後者は４・６・７のように浅い土坑があるが、明確に伴うものとは言えない。周溝はたいていの住居跡に認められ、竪穴の立ち上がりに沿ってめぐる事例が多い。これらの周溝中には小柱穴状のものが伴う。



第 134 図　道尻手遺跡の中期住居跡

炉跡は、地床炉・円形石組炉・長方形石組炉が伴う。地床炉はやや床面が窪んでいるのみである。円形石組炉は長径約 30cm ほどの小形であり、床面をやや掘り込んで炉石を方形もしくは円形に配している。この円形石組炉は今のところ新潟県内では類例が見られない。長方形石組炉は長軸長約 1 m～ 1.5 mほどの大形の石組炉で、平面形は長方形を呈するものと、長楕円形を呈するものがある。また第 17G 号住居跡の炉跡は土器片を敷き詰めたものであり、縁石は抜き取られたためか伴わなかった。この他の付属施設としては、第 14B 号住居跡や第 31 号住居跡の床面から柱状礫が横位で出土している。これらが立石として立てられていたものとは言えないが、住居に伴っていたと考えられる。

これらの道尻手遺跡から検出された円形の住居跡は、信濃川流域の周辺遺跡において類似例が認められる。信濃川流域の縄文時代中期の住居形態はこれまで何度か検討が加えられている（註 289)。これらの成果を踏まえて、次に信濃川流域の地域的特色を明らかにしたい。

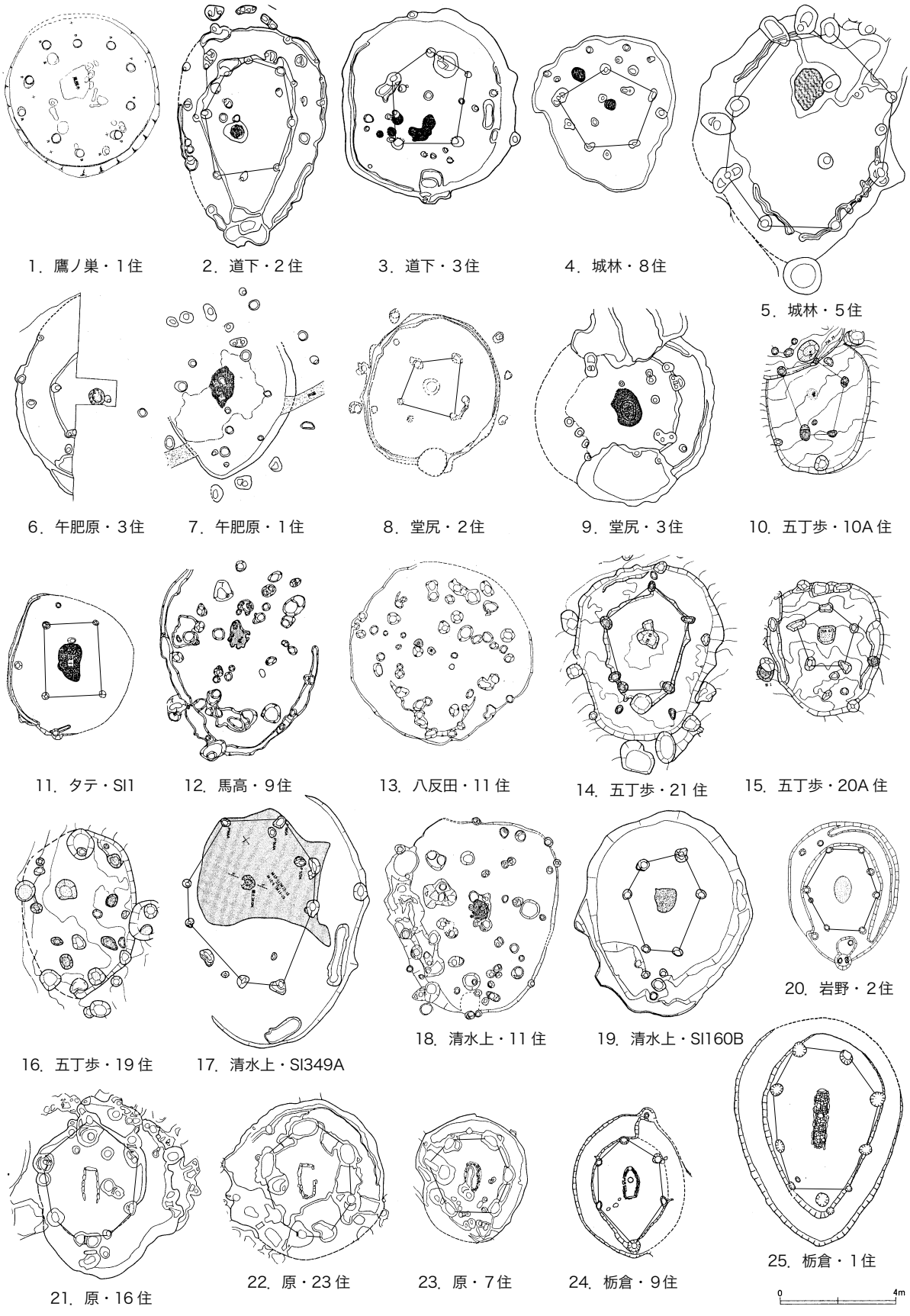
2）信濃川流域の事例

信濃川流域では、縄文時代中期に広く普及する円形プランの住居跡は縄文時代前期後葉まで遡る。前期後葉は、十日町市赤羽根遺跡（註 290）や鷹ノ巣遺跡（註 291）の事例がある（第 135 図 1)。また縄文時代前期末葉から中期初頭の事例は、津南町道下遺跡（註 292）では卵形や円形の住居形態が見られる（第 135 図 2・3)。この段階ですでにベッド状遺構が認められる。

大木 7 b 式並行期の事例は、津南町城林遺跡（註 293)、午肥原遺跡（註 294)、堂尻遺跡（註 295)、八反田遺跡（註 296)、塩沢町五丁歩遺跡（註 297)、魚沼市清水上遺跡（註 298）などがある（第 135 図 4～ 12）が、明確な事例は少ない。特に五丁歩遺跡や清水上遺跡では多くの円形プランの住居跡が検出されているが、平面形が不整形で柱穴配列に規則性が見られない事例が多い。明確な事例は 6 ～ 8 のように平面形が円形や楕円形を呈し、主柱は 4 本主柱・5 本主柱・6 本主柱がある。6・9 のように床面にベッド状遺構を有する明確な事例がある。またこれらの住居跡の入口部には浅い土坑などが見られ、住居に伴う可能性がある。この時期の炉跡はほぼ全て地床炉であり、主体部のほぼ中心部に設置されている。

大木 8 a 式並行期の事例は、五丁歩遺跡や清水上遺跡からまとまって検出されているが、明確な事例は少ない（第 135 図 14 ～ 20)。これらの住居跡は前段階と同様な特色があるが、平面形が卵形を呈する事例が多くなる。床面にはベッド状遺構を有する事例が見られるが、段差を持たないものが多い。主柱は 5 本主柱や 6 本主柱などが見られる。これに伴う炉跡は地床炉が主体的であり、道尻手遺跡から検出された小形石組炉の存在は例外的である。分布域から見ると千曲川流域からの影響関係が想定される。ここに図示した事例は大木 8 a 式並行期でも古段階に帰属し、新段階の明確な事例は極めて稀である。大木 8 a 式並行期新段階の事例は、原遺跡 16 号住居跡（20）や堂平遺跡 11 号住居跡があり、ともにベッド状遺構を伴う卵形住居跡（註 299）であり、方形の石組炉を伴っている（註 300)。

大木 8 b 式並行期の事例は、津南町八反田遺跡、堂平遺跡、十日町市森上遺跡（註 301)、笹山遺跡（註 302)、湯沢町川久保遺跡（註 303)、塩沢町原遺跡（註 304)、万條寺林遺跡（註 305)、南魚沼市宮下原遺跡（註 306)、魚沼市原・居平遺跡（註 307)、正安寺遺跡（註 308)、小千谷市大平遺跡、徳右衛門山遺跡（註 309)、長岡市岩野原遺跡（註 310)、中道遺跡（註 311)、などがあり（第 135 図 20 ～ 25、第 136 図 1 ～ 6・10 ～ 12)、急激に事例が増加する。この時期の特色は平面形が卵形を呈し、床面にベッド状遺構を持つものが多くなる。主柱は 5 本主柱・6 本主柱・7 本主柱・8 本主柱などがあり、主柱は竪穴の平面



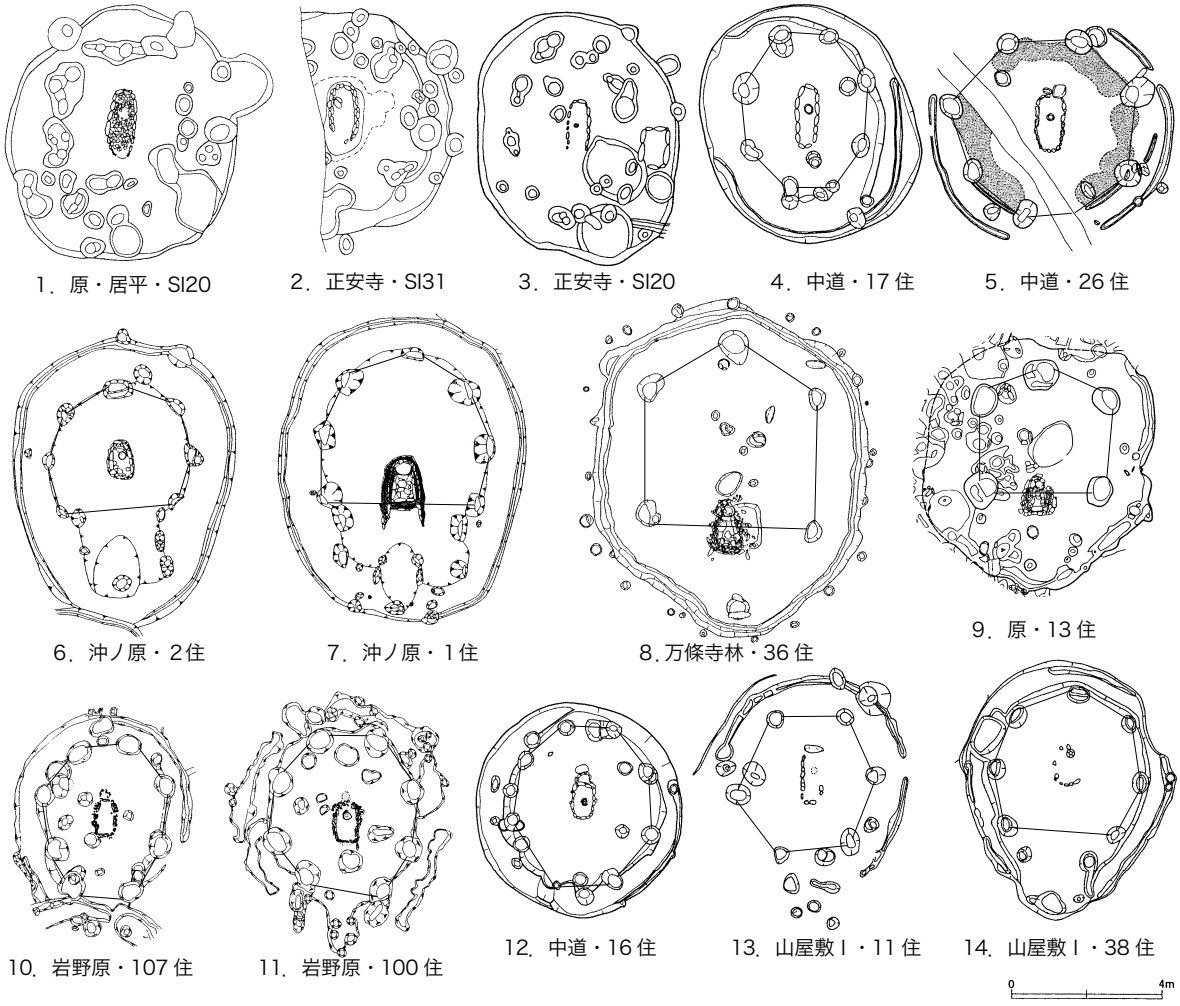
第 135 図　縄文時代中期の住居跡（1）

形に沿って内側に配列している。柱穴は比較的大形のものが見られ、柱穴内にはローム土などが充填されるものがある。例えば、八反田遺跡 10 号住居跡は柱穴内に厚さ数 cm の黄色粘土が充填されている。同様に寿久保遺跡２号住居跡では黄褐色粘土が充填されている（註 312)。これとともに大平遺跡１号住居跡のように主柱穴の脇に大形礫が配される事例がある。これらは柱の補強的なものと考えられる。この時期になると入口部に小柱穴が配列する事例が見られ、主体部と入口部とに明確に区分される傾向がある。これについて着目した佐藤雅一は、堂平遺跡１号住居跡のような入口部の小柱穴を有する事例について柄鏡形住居との関連を指摘している（註 313)。筆者も卵形住居と柄鏡形敷石住居との関連を想定したことがある（註 314)。しかし、柄鏡形住居というよりはむしろ、中期の住居形態における空間分割と入口施設（入口の上屋もしくは階段状の施設など）の顕在化と関連すると考えられる。

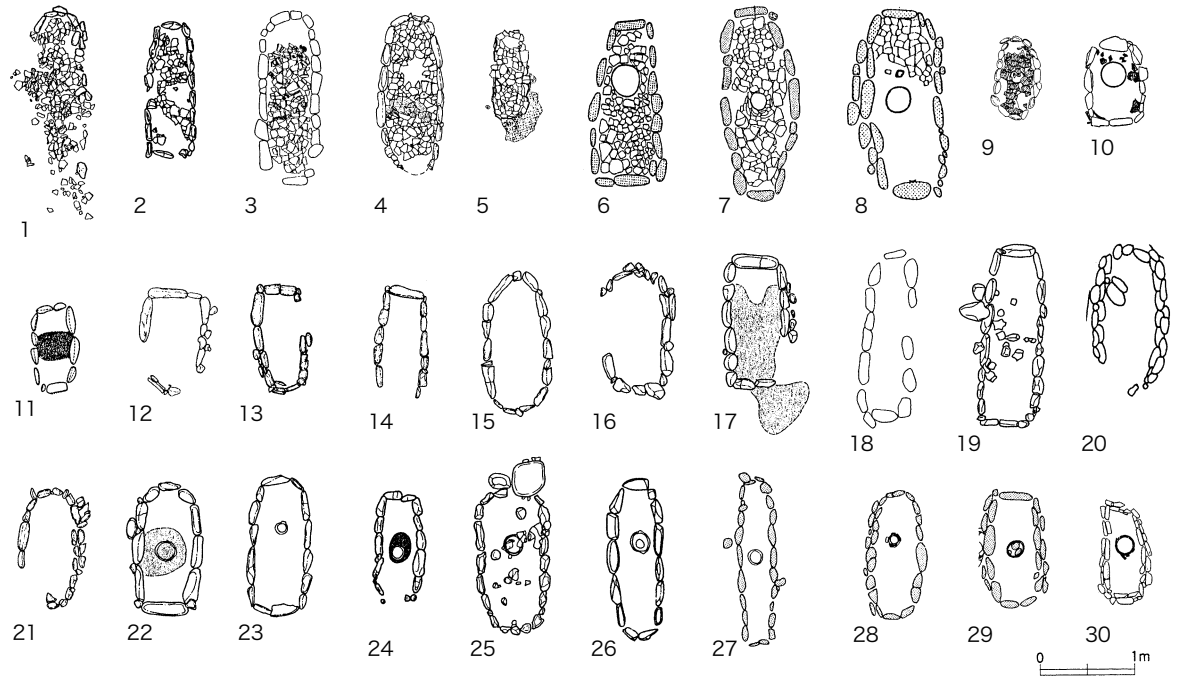
この時期の特徴的な石組炉には、長方形石組炉がある。これらは平面形が舟形や長方形などを呈し、規模が１m～２m前後の極めて大形の炉跡である（第 137 図)。この種の石組炉は大木８ｂ式並行期に広域的に普及するが､堂平遺跡 30 号住居跡の事例のように大木８ａ式新段階に出現することが確認される。また大木８ｂ式新段階に対比される栃倉式期には、祖形的な複式炉が出現する。これらの長方形石組炉の出現はそれ以前の小形石組炉や地床炉からすると画期的な現象である。長方形の石組炉は形態的に多様であり、規模も１mに満たないものから２mを超えるものまである。形態的には縁石がめぐるのみのもの（A 類：11 ～ 21)、中央部分に炉体土器を埋設するもの（B 類：22 ～ 30)、土器片を炉床面に敷き詰めるもの（C 類：１～５)、土器片を敷き詰めて中央部に炉体土器を埋設するもの（D 類：６～ 10）がある。縁石は１列めぐるものが一般的であるが、20・21・29・30 のように縁石が２重にめぐるものが見られる。この縁石が２重にめぐる石組炉は比較的新しい段階のものと考えられる。この種の炉について着目した寺村光晴は、この種の炉が馬高式土器の分布と一致することから積雪との関連や立地から河川における漁労活動との関連を指摘している（註 315)。万條寺林遺跡の報告者は、炉床に敷かれた土器の上に焼土がかぶらないことから、「炉址＝住居廃絶にあたっての何らかの呪術的意味」もつものであると評価している（註 316)。しかし、現在ではこれらの土器片は使用時に炉床面に敷かれていたと考えられており、次段階に派生する複式炉との関係で、このような大形の石組炉の出現が評価されるべきであろう。

沖ノ原式期の事例は、津南町沖ノ原遺跡、堂平遺跡、十日町市笹山遺跡、塩沢町原遺跡、長岡市岩野原遺跡、中道遺跡などがある（第 136 図７～９)。沖ノ原式期の古段階の住居形態は７のような卵形住居であり、床面にベッド状遺構を有するものが多く見られる。これに伴う炉は複式炉である。複式炉の出現とともに、住居形態は次第にベッド状遺構を持つ事例がなくなり、新段階には卵形住居は消滅するか、８・９のような平面形が五角形や亀甲形を呈する住居形態へと変化すると考えられる。

信濃川流域の中期の住居形態について時期的な変遷を概観してきた。信濃川流域以外の県内では、阿賀野市ツベタ遺跡（註 317)、横峰Ｂ遺跡（註 318)、朝日村前田遺跡（註 319)、上越市山屋敷Ｉ遺跡（註 320)、などで類似資料が見られる（第 136 図 13・14)。例えば、山屋敷Ｉ遺跡 38 号住居跡はベッド状遺構を有する卵形住居跡で、ベッド状遺構に沿って主柱がめぐっており、信濃川流域の事例と類似性が認められる。このように信濃川流域やその周辺でも住居形態に類似性が見られ，少なくとも大木８ｂ式並行期には長方形石組炉とともに卵形住居が広域的に普及するようである。



第 136 図　縄文時代中期の住居跡（2）



第 137 図　長方形石組炉の集成図

3）周辺地域の類似資料（第 11 図・第 12 図）

本遺跡が位置する魚沼地域は信濃川の上流域にあり、南側に北関東地域、南西側に信州地域、東側に東北地方南部と隣接している。これら隣接地域ではそれぞれ地域性を有しているものの、信濃川流域の住居形態との類似性が認められる。隣接する各地域の住居形態について比較したい。

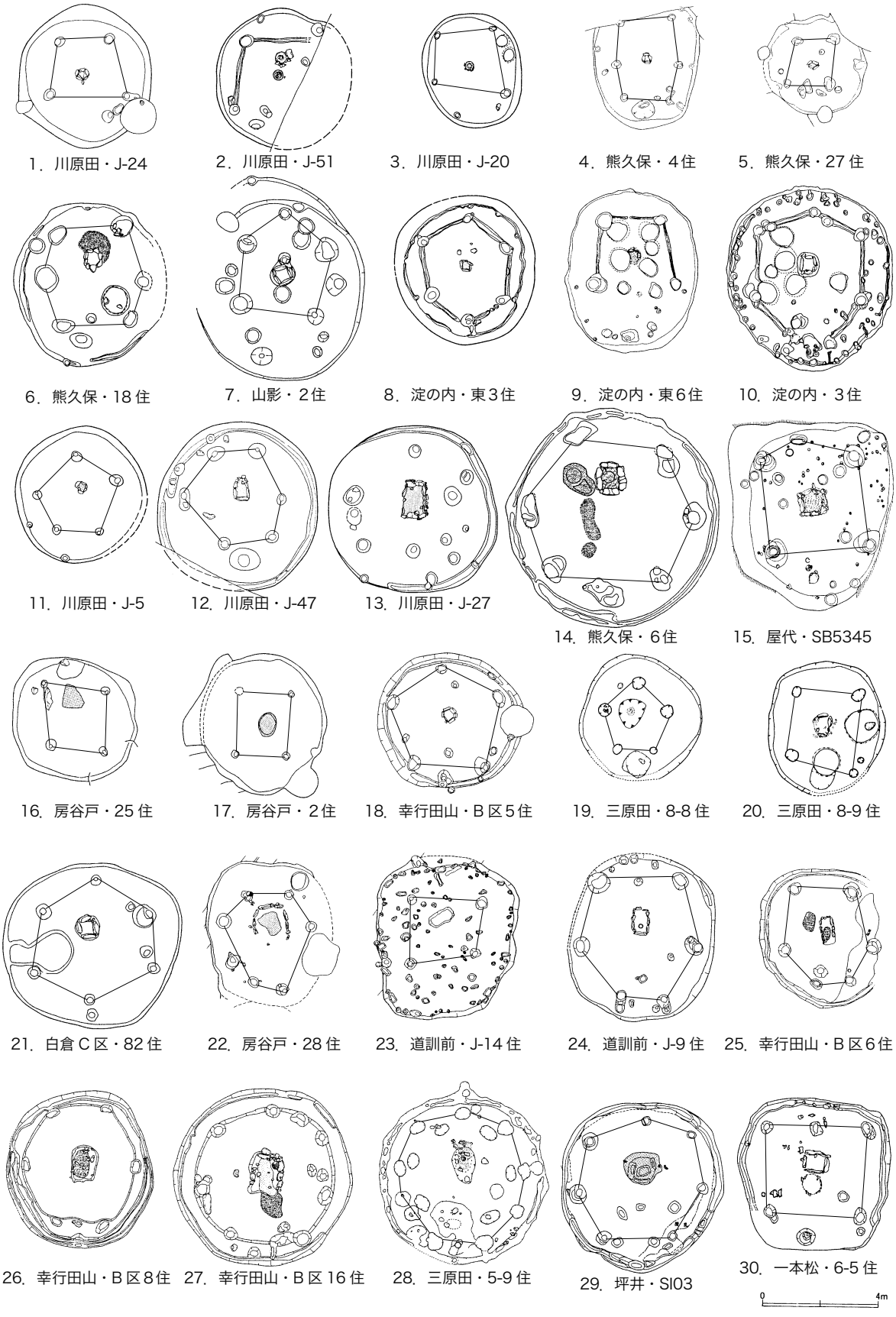
信州地域（第 138 図 1 ～ 15）：この地域については千曲川流域の事例を中心に概観する。この地域の住居形態については宮本長二郎がまとめており、中期は平面形が「円形または主柱本数に対応した多角形・楕円形」で、主柱配列は「無主柱および主柱４～８本」、炉跡は「地床炉・石囲炉・埋甕炉・石囲埋甕炉の４形式」があると特色をまとめている（註 321）。

この地域の住居跡は、宮本が指摘するように平面形は円形もしくは楕円形を呈するものが多く、主柱は４本主柱・５本主柱・６本主柱・７本主柱などがある。中期前葉の事例は、川原田遺跡 J-24・J-51・J-20（註 73）、熊久保遺跡４号住居跡・27 号住居跡（註 323）、などがある（1 ～ 5）。これらの平面形は円形や楕円形を呈し、主柱は４本主柱や６本主柱がある。２は主柱穴の間に直線的な溝が延びている。炉跡は石組炉と埋甕炉がある。中期中葉の事例は熊久保遺跡 18 号住居跡や山影遺跡２号住居跡（註 324）、川原田遺跡 J-15、J-5、J-47、淀の内遺跡３号住居跡（註 325）、などがある（6 ～ 12）。これらの平面形は円形もしくは楕円形を呈し、主柱は５本主柱と６本主柱が多い。これに伴う炉跡は小形の石組炉や埋甕炉が主体的である。これらの小形の石組炉は道尻手遺跡の円形石組炉と形態的に類似しているが、規模の上でやや違いがある。これらの住居跡には主柱穴に沿って溝がめぐるものが特徴的に見られる。例えば、川原田遺跡 J-51・J-15 や淀の内遺跡３号住居跡では溝が主柱間を直線的に繋ぐようにめぐっている（8 ～ 10）。この溝は、「間仕切り状の溝」などと呼称されており、この溝を挟んで床面に段差を有するものがある。このような溝を有する事例は、中期前葉～中葉にかけて認められる。

一方、中期後葉になると住居形態は平面形が円形や五角形や隅丸方形を呈し、大形の方形石組炉を持つものが見られる。13 は川原田遺跡 J-27 で、長方形の石組炉を有している。14 は熊久保遺跡６号住居跡で、円形の平面形に６本主柱のものである。15 は屋代遺跡 SB5345（註 326）で、平面形が五角形を呈し主柱は５本主柱である。この時期の炉は大形の方形石組炉である。この時期の住居には入口部に埋甕を設置するものや奥壁部に石段などを伴う事例が見られる。この時期の住居形態は、前段階までと比べて形態的に変化し、信濃川流域とは大きく異なるようになる。

北関東地域（第 11 図 16 ～ 30）：群馬県でも比較的新潟寄りに位置する遺跡を対象とする。これらの地域の住居形態は、赤山容造が三原田遺跡の中期前半期～後期初頭の事例について形態分類をおこなっている（註 327）。赤山は住居型式を A ～ H 類に分類し、その中で A 類は４本主柱円形で新道式期や焼町土器を伴い、B 類は六本主柱卵形で加曽利ＥⅠ式期としている。

中期前葉の事例は、房谷戸遺跡２号・25 号住居跡（註 328）があり、平面形は円形や楕円形を基調として、主柱が４本主柱の住居形態である（16・17・20）。これらに伴う炉跡は地床炉である。中期中葉の事例は、三原田遺跡８- ９住（註 329）や白倉遺跡 C 区 82 号住居跡（註 330）、幸行田山遺跡 B 区５号住居跡（註 331）は平面形が円形や楕円形を呈し、主柱が４本主柱と５本主柱である。この時期の炉跡は方形の小形石組炉がある。次に中期後葉の事例は、道訓前遺跡 J-9 住（註 332）、幸行田山遺跡 B 区６号・８号・16 号住居跡（25 ～ 27）は平面形が楕円形もしくは卵形を呈し、主柱が４本主柱もしくは６本主柱の住居形

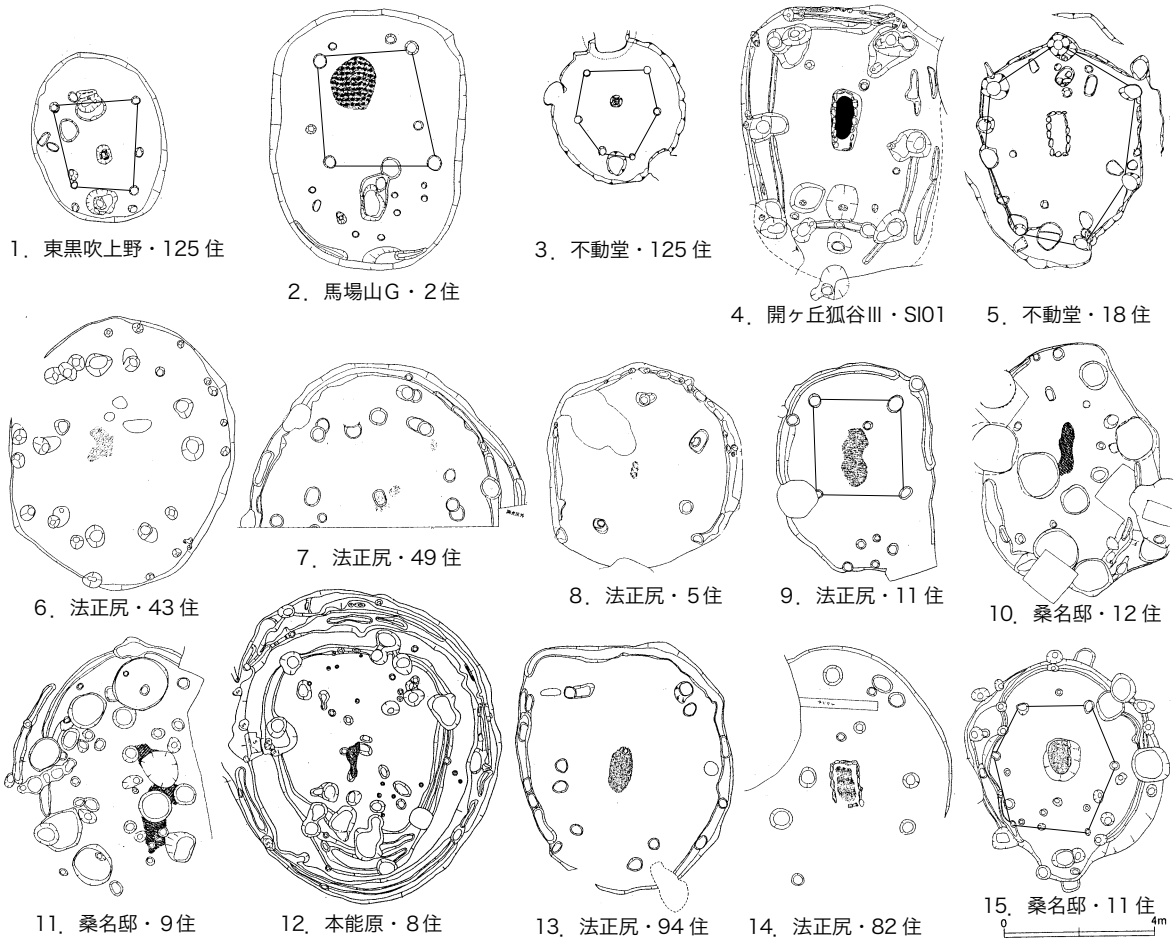


第138図　長野県・群馬県の事例

態である。これらの炉跡は長方形石組炉で、内部に炉体土器を設置するものが多い。これらの長方形石組炉は、炉体土器が片側（入口側）に偏るものがある。これらは新潟県内の事例と形態的に共通している。これらの床面は段差を持たないものが多いが、25・26では床面にベッド状遺構が認められる。このベッド状の床構造は主柱配列に沿って外側にめぐっており、新潟県の事例と類似している。これらは出土土器から、大木８ｂ式並行期の住居形態と考えられる。これらに伴う炉跡は大形の長方形石組炉である。これ以降の加曽利ＥⅢ式期には、28～30のような円形や隅丸方形の竪穴住居へと変化する。

その他の地域（第139図）：その他の隣接地域として富山県や福島県の事例を挙げる。まず富山県の事例は、不動堂遺跡（註333）や馬場山Ｇ遺跡（註334）、開ケ丘狐谷Ⅲ遺跡（註335）などがある（第139図1～5・10）。1～3は中期前葉～中葉の事例で、平面形が円形や楕円形を呈するものが多い。炉跡は地床炉や小形の石組炉が見られる。４・５は中期後葉の事例で、平面形が隅丸長方形や卵形を呈するものである。これに伴う炉跡は長方形石組炉である。４は隅丸長方形を呈し、主柱間に直線的な溝がめぐっており、長野県との影響関係が想定される。５は卵形を呈する７本主柱であり、床面にはベッド状遺構を有している。４・５はともに長方形の石組炉を有している。これらの住居の入口空間には、特徴的に浅い土坑を有する事例が見られる（註336）。

次に福島県の事例は、法正尻遺跡（註337）、桑名邸遺跡（註338）、本能原遺跡（註339）、などがある（第



第139図　富山県・福島県の事例

139 図6～15)。大木７ｂ式期と大木８ａ式期の住居形態は平面形が楕円形を呈し、主柱が４本主柱や６本主柱などである（6～8)。これに伴う炉跡は地床炉が多い。次に大木８ｂ式並行期の住居形態は前段階と同様に平面形が楕円形を呈し、主柱がめぐるが主柱数や配列は不明瞭である（9・11～15)。これらに伴う炉跡は地床炉と長方形の石組炉があるが、長方形石組炉は大木８ａ式並行期新段階に出現するとされている。

４）地域間の比較から

隣接地域の住居形態はそれぞれ地域性があるものの、信濃川流域との類似性も認められた。これらの地域に共通して、住居形態は平面形が円形や楕円形を呈し、その平面形に沿った内側に主柱がめぐるものが主体的である。隣接地域との影響関係を見ると、千曲川流域の住居形態とは、大木７ｂ式や大木８ａ式並行期まで共通性が見られるが、大木８ｂ式並行期以降は影響関係が少なくなると考えられる。北関東の場合は、大木７ｂ式や大木８ａ式並行期までは、影響関係は明確ではないが、大木８ｂ式並行期ごろに類似性が強まるようである。この時期は、卵形住居に類似する住居形態が広域的に分布するようになる。しかし、これらの住居形態は少なくとも加曽利ＥⅢ式期には大きく変化し、信濃川流域と信州地域や北関東地域とは類似性が弱まる。これらの変化は、信濃川流域と東北地方における複式炉の出現と、中部地方や関東地方における柄鏡形住居と敷石住居の出現といった動態と関連している。当該地域を見ても、縄文時代中期の中でも地域間の影響関係は時期的に変化が認められる。今後、これらの住居形態における地域性と地域間の影響関係をより詳細に整理していく必要があるだろう。

住居形態の比較から内部構造において共通点が認められた。信濃川流域の卵形住居にはベッド状遺構を有する事例が多く、これらは長野県や富山県で見られる主柱穴間にめぐる溝と関連していると考えられる。つまり、これらの溝はベッド状遺構と同様な機能を果たしていた施設の痕跡であると考えられる。この種の溝を有する事例の分布は、甲信地域に加えて関東西南部でも確認される（註 340)。これらの溝から主柱に沿って板材がめぐっていた可能性が想定される。このような遺構については、竪穴の壁や住居内部の間仕切りによる空間分割（註 341)、寝台・収納スペースとしての棚など（註 342）が指摘されている。しかし、壁であるとした場合に、事例によっては床面積が極端に狭くなるものがあり、竪穴の壁とは考え難い。可能性としては棚状施設またはベッド状やベンチ状の施設がめぐっていたことも考えられる。しかし、現状ではこれを肯定するだけの考古学的データに乏しい。このような住居の内部構造を明らかにしていくことで、地域間の関係性をより明確にできると思われる。

５）まとめ

信濃川流域における中期の住居形態は、円形・楕円形・卵形・隅丸方形の平面形に主柱を配するものが主体的であり、その中でも卵形住居跡が特徴的である。平面形が円形や楕円形を呈する住居跡は、中期の住居形態として東日本に広く認められ、信濃川流域の住居形態もその一種であると考えられる。信濃川流域では、卵形住居は前期後葉に出現するが、安定して見られるのは大木８ｂ式並行期である。中期前半期は平面形が不整形を呈するものや主柱配列が不規則なものが多く、これらは調査時に竪穴が明確でなかったために住居形態が認識されなかった可能性があり、検討の余地がある。また信濃川流域と周辺地域の住居形態の比較において、地域間で影響関係を有し、その度合いも時期的に変化することが認識される。このような住居形態における地域間の影響関係を明確にしていく必要がある。

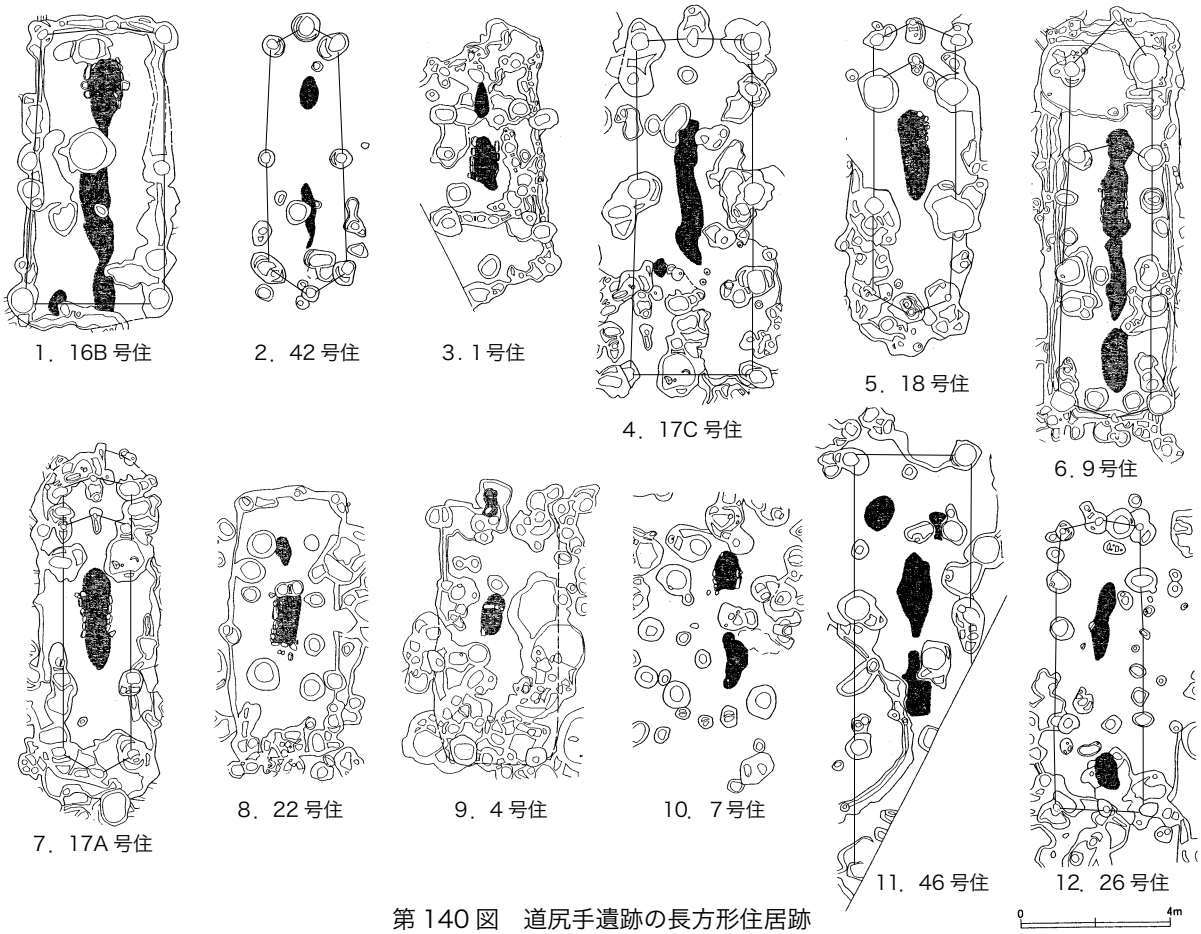
2．信濃川流域の長方形住居跡

1）道尻手遺跡の長方形住居跡

本遺跡では長方形住居跡（註 343）が 23 軒検出されている。これらは縄文時代中期前葉～末葉（Ⅲ期～Ⅵ期）に帰属し、中期に限定される住居形態である。これらの長方形住居跡は、平面形が長方形を基調として周溝が竪穴に沿って長方形にめぐっている(第 140 図)。竪穴の深さは浅いものと深いものがあり、傾向として中期前半期は浅く、中期後半期が深いものが多い。主柱は６本主柱と８本主柱であり、２本１対で配列している。この主軸線上の両端部には小柱穴が付属している。主柱穴は周溝中にあるものと、周溝より内側に配列するものがある。柱穴の平面形は円形を呈するものが多い。この種の住居の入口は主軸方向の一端にあると推定されるが、明確な入口施設の痕跡は認められない。第９号住居跡の南側の床面上には２基の柱穴があり、竪穴外には 10 基ほどの小柱穴が配列しており、この住居に伴う入口施設の可能性がある。

炉跡は地床炉や石組炉が見られ、これらの焼土跡は幾つかの単位で列状に並ぶものが一つの特色である。石組炉を持つ事例は１軒につき１基のみで、住居跡の一端に偏在することから奥壁よりに配置されていたと考えられる。石組炉には幾つかの形態があり、コ字状や二字状・(　) 字状を呈し、主軸の両端が開放するものが多い。後者については「二側縁石組炉」と呼称したい。

また長方形住居跡には建替えや拡張などと考えられる柱穴の配列が見られる。第９号住居跡には主柱



第 140 図　道尻手遺跡の長方形住居跡

配列の異なるものが重複している。第 17C 号住居跡・第 18 号住居跡・第 17A 号住居跡では、主軸端部に２～４単位の連続的な柱穴配列が認められる。本遺跡では長方形住居跡にこのような事例が特徴的に認められたが、これらを「建替」や「拡張」・「反復」などに厳密に区分することは難しい。これらの長方形住居跡について信濃川流域の類例を含めて特色をまとめておきたい。

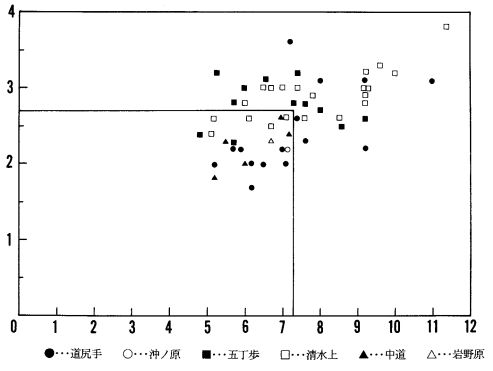
２）周辺遺跡の事例

信濃川流域の明確な長方形住居跡は、津南町沖ノ原遺跡１号長方形家屋が最初の検出事例である。その後、塩沢町五丁歩遺跡や魚沼市清水上遺跡などで長方形住居を主体として構成する環状集落が調査され、この種の住居の特色が明らかにされてきた。この他に津南町堂平遺跡、午肥原遺跡、下モ原Ⅱ遺跡（註 344)、幅上遺跡（註 345)、万條寺林遺跡、原遺跡、魚沼市原・居平遺跡、正安寺遺跡、長岡市岩野原遺跡、中道遺跡、馬高遺跡、などから検出されている。これらの住居形態は大木７ｂ式並行期から認められる。これらの特色を時期ごとにまとめていきたい。

大木７ｂ式並行期の事例は比較的多く、五丁歩遺跡や清水上遺跡からまとまって検出されている（第 142 図１～５)。しかし、これらの多くは竪穴が明確ではないために、柱穴のみのものや周溝が一部に残るものがほとんどである。これらの平面形は長方形を呈し、主柱は６本主柱もしくは８本主柱で、主軸線上両端に小柱穴を伴う。炉跡は主軸上の床面に列状に並んでおり、幾つかの単位が認められる。炉跡の形態は、地床炉とともに主軸方向の両端が開く二側縁石組炉を伴うものが多い。石組炉の分布域は、魚野川下流域にある清水上遺跡では地床炉のみであるが、魚野川上流域の五丁歩遺跡や信濃川上流域の道尻手遺跡では石組炉が普及している。また五丁歩遺跡 38A 号住居跡（３）や清水上遺跡３号住居跡（８）では、一端の壁際に列石が配される。

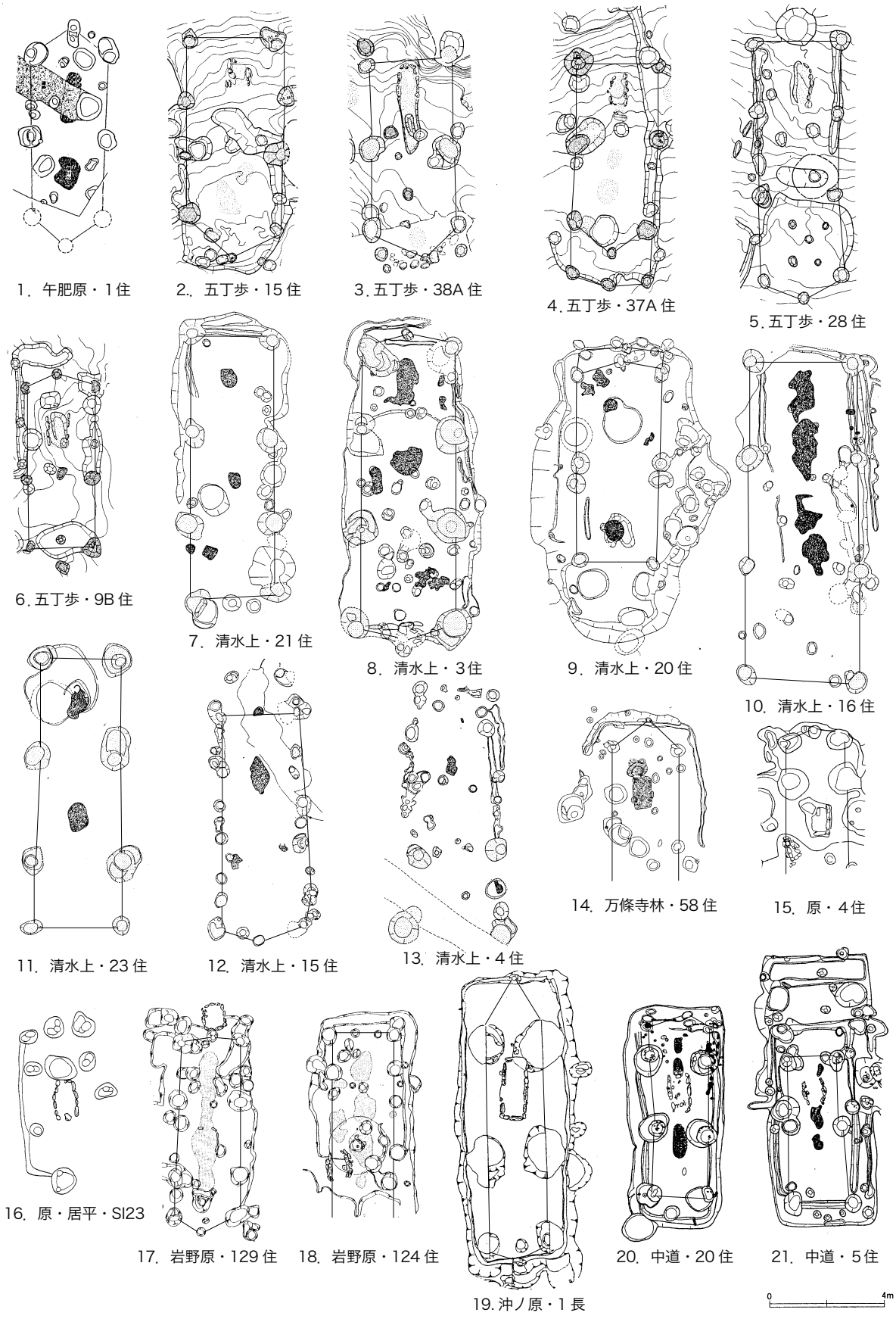
大木８ａ式並行期も事例が比較的多く見られ、五丁歩遺跡や清水上遺跡でまとまって検出されている (第 142 図６～ 10)。この時期の長方形住居跡は前段階と同様な特色がある。主柱は６本主柱と８本主柱があり、周溝と重なるか接する位置に配列している。この時期も竪穴の掘り込みは浅く、立ち上がりが確認できないものがほとんどである。炉跡に関しても、清水上遺跡では石組炉はまだ普及していないようである。しかし、ここで対象としたものは、大木８ａ式並行期の古段階の事例であり、新段階の事例がほとんどないため、次の段階へどのようにつながるかは明らかではない。

大木８ｂ式並行期の事例は、万條寺林遺跡 58 号住居跡、原遺跡４号住居跡、原・居平遺跡 SI23、岩野原遺跡 129 号住居跡・124 号住居跡、などがある（第 142 図 14 ～ 18)。この時期は事例が減少する。この時期の長方形住居跡は、基本的な形態は前段階までと同様な特色を有しているが、この時期になると信濃川の下流域まで石組炉が普及する。石組炉は二側縁石組炉やコ字状の石組炉が見られる。竪穴の掘り込みは、前段階までと比べて深くなる傾向がある。主柱は６本主柱が多くなり、比較的小形のものが目立つ。この傾向は主柱間の長幅比からも認められる（第 141 図)。



第 141 図　主柱穴配列の長幅比グラフ

沖ノ原式期の明確な事例は、沖ノ原遺跡１号長方形建物跡や中道遺跡５号住居跡・20 号住居跡、などがあるが、



第 142 図　縄文時代中期の長方形住居跡

事例が少ない（第142図19～21）。この時期の特色は、竪穴の掘り込みが比較的深い傾向があり、主柱は6本主柱などの小形のものが多くなる。

これらの特色をまとめると、平面形が長方形を呈し、主柱配列は6本主柱か8本主柱で、2本1対で長方形状に配列する。この主軸線上の両端には小柱を伴う。柱穴は周溝上もしくは周溝に接して配列する。規模は長軸長約8m～10mで幅が約3m前後である。炉跡は地床炉と石組炉があり、焼土跡は主軸上に列をなして配列し、幾つかの単位が認められる。入口部は不明であるが、主軸の一端にあると推定される。

これ以降は長方形住居跡の事例は見られなくなり、この段階で消滅すると考えられる。このことから、この種の長方形住居は信濃川流域においては縄文時代中期に限定された住居形態であると言える。

3）長方形住居跡の系譜

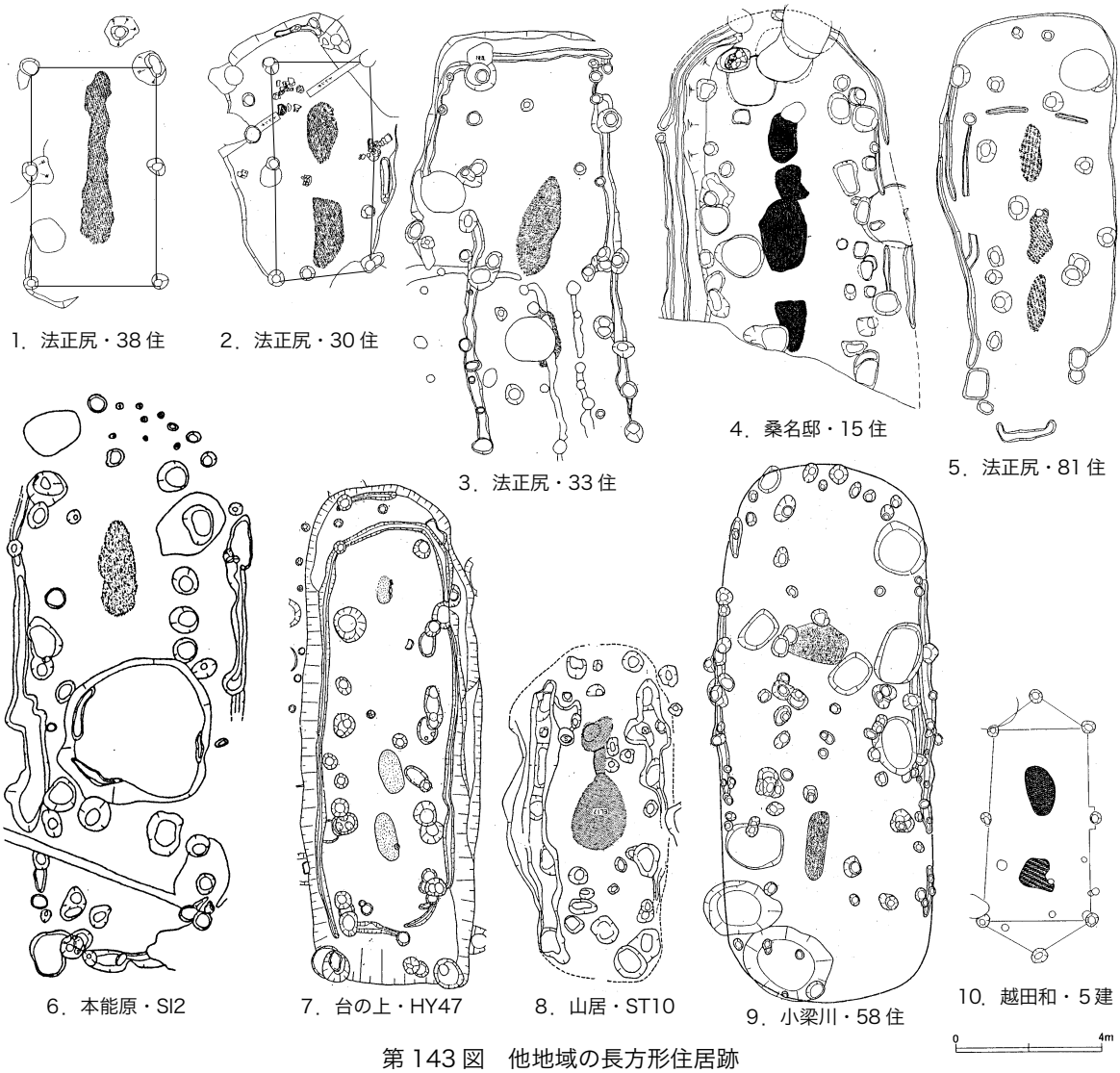
信濃川流域において長方形住居が出現する時期は、大木7b式並行期であり、ちょうど中期環状集落が形成される時期にあたる。しかし、当地域で長方形住居が出現する過程は明らかではない。これらの長方形住居について、小熊博史は在地で発達した形態であると指摘している（註346）。在地から派生する可能性としては、縄文前期末～中期初頭に見られる長楕円形の住居形態が新潟県内で認められる。例えば、中郷村和泉A遺跡（註347）や北野遺跡（註348）があり、これらは長楕円形の平面形を呈し、周囲に周堤がめぐる事例が多い。これらの住居から縄文中期の長方形住居が派生した可能性もあるが、平面形や炉跡などは大きく異なり、縄文中期の長方形住居への変化を追うことは難しい。

一方、縄文時代前期にはすでに東北地方に長方形大形住居が存在しており、この段階ではまだ新潟県内には事例がない。これらの東北地方の長方形大形住居が普及して在地化した可能性が考えられる。これらの住居は規模という点で明らかな違いが見られるが、複数の炉を列状に配列する点や柱穴配列などが共通していることからも、これらの系譜上にあると考えられる。

縄文中期の長方形住居跡は山形県や福島県でも認められ、信濃川流域の事例と同様に環状集落を形成している。例えば、山形県西海淵遺跡（註349）や西ノ前遺跡（註350）、台ノ上遺跡（註351）、福島県法正尻遺跡、本能原遺跡、などで長方形住居跡が検出されている（第143図）。これらの長方形住居跡は、平面形が長方形もしくは隅が丸くなるものがある。これらの規模は長軸長が7m～15mと多様であり、本能原遺跡SI 2や小梁川遺跡58号住居跡のように長軸長が15m前後と比較的大形のものも見られる。主柱配列は明確なものは少ないが、周溝に接するものや周溝の内側に配列する。炉跡は幾つかの単位の焼土跡が列状に配列している。これらの地域では石組炉がほとんど伴わないが、7の台の上遺跡HY47は石組炉を伴い、帰属時期は大木8b式期と考えられる。このように住居形態や集落形態が東北地方中部・南部と類似しており、東北地方との影響関係は否定できない。やはり、縄文中期前葉に東北地方からの影響のもとで、この種の住居形態が採用されたものと考えるのが妥当ではないだろうか。

4）まとめ

信濃川流域の長方形住居は大木7b式並行期に出現して、減少しながらも沖ノ原式期まで存続すると考えられる。これらの長方形住居は、集落内で卵形住居などの円形住居と並存しており、両者には機能や用途の違いが存在していたと想定される。この種の長方形大形住居の機能・用途については諸説あり、「雪国の共同作業所」（註352）、「共同行事の一環の施設」（註353）、「共食の場」（註354）、「複合居住家屋」



第 143 図　他地域の長方形住居跡

(註 355)、といった解釈がある。

本地域の長方形住居の規模は 10 m以内であることから、一概に長軸長が 15 m～ 30 m規模の長方形大形住居と同一視することはできない。また集落の半数近くの割合を占めていることから、他の住居と異なる特殊なものではなく、より一般的な建物であったと考えられる。これらの最大の特色は焼土跡が列状に配列する点であり、これ以外の住居形態では認められない特色である。また円形の住居に比べて、形態的変化が少ないことも特色の一つと言える。出土遺物では、土器や石器に特殊なものは見られないが、炭化種子などが多量に出土する事例がある。例えば、沖ノ原遺跡第 1 号長方形住居跡の例は、覆土からの出土であるがクッキー状炭化物（約 50 点）、炭化クリ（約 1 kg）が出土している（註 356）。また中道遺跡 51 号住居跡の床面からは「トチの実遺構」と呼称されるものが検出されている。これについて報告者は網籠に入れて棚の上に乾燥保存していたものと考えている（註 357）。このような貯蔵は長方形住居に特有なものとは言えないが、出土事例からも住居の機能を検討することが必要である。当該地域の縄文時代中期の集落研究においても、長方形住居の機能が重要な要素となる。今後とも、この長方形住居について検討が必要である。

3．魚沼地域の複式炉

1）道尻手遺跡の複式炉

本遺跡で複式炉を有する住居跡は3軒ある。第20号住居跡の炉跡は複式炉であるが、小形で簡素なものである。土器埋設部と石組部からなり、前庭部は伴っていない。土器埋設部には炉体土器を伴い、石組部の底面には土器片が敷かれていた。また炉跡の北側には埋設土器が設置されている。第21号住居跡の炉跡は、コ字状の石組の両端にハ字状に棒状礫が付属し、複式炉の要素を有しているものの、複式炉の範疇では捉えられない。廃絶後に石組内部に巡っていた縁石が抜かれた可能性もあるが、調査時には確認できなかった。第36号住居跡の炉跡は、偏平礫を箱形に組んだ石組複式炉であり、石組部が偏平礫により2つに区切られている。石組部の炉床面には土器片が敷設される。石組部の両端にはすそ石状の礫が付属しているが、前庭部は伴わなかった。以上、明確な複式炉としては2例のみであるが、本遺跡がある魚沼地域における複式炉の地域性を明確にしておきたい。

2）魚沼地域の複式炉の特色

魚沼地域で複式炉が検出された遺跡は、津南町沖ノ原遺跡、八反田遺跡、上正面かみ遺跡（註358)、堂平遺跡、十日町市布場遺跡（註359)、中島遺跡（註360)、つつじ原B遺跡（註361)、笹山遺跡、野首遺跡、小坂遺跡（註362)、湯沢町川久保遺跡、塩沢町原遺跡、万條寺林遺跡、南魚沼市宮下原遺跡（註363)、水上遺跡（註364)、魚沼市原・居平遺跡、清水上遺跡、正安寺遺跡、古長沢遺跡（註365)、月岡遺跡（註366)、小千谷市大平遺跡、城之腰遺跡、がある。

これらの複式炉は東北地方のものとは異なり、地域的な特色を有している。これらの特色は、前庭部を持たないものが主体を占める点であり、特に複式炉の組み方に特色がある。この複式炉の組み方は、縁石に偏平礫を縦長に並べて、その内側に小円礫や偏平円礫（半割したもの）を充填する手法である。これに対して、東北地方南部の複式炉は偏平礫の広い面を表にして配するという点で大きな違いがある。当地域の複式炉は形態的に多様であり、2類に分類することができる。

A類：長方形の石組炉に小形の石組部が付属するもの（第144図1～5)。

B類：長方形の平面形を呈し、内部が土器埋設部・石組部に区分されるもの（第144図6～11)。

C類：土器埋設部・石組部はB類に類似し、前庭部を持つもの（第144図12～16)。

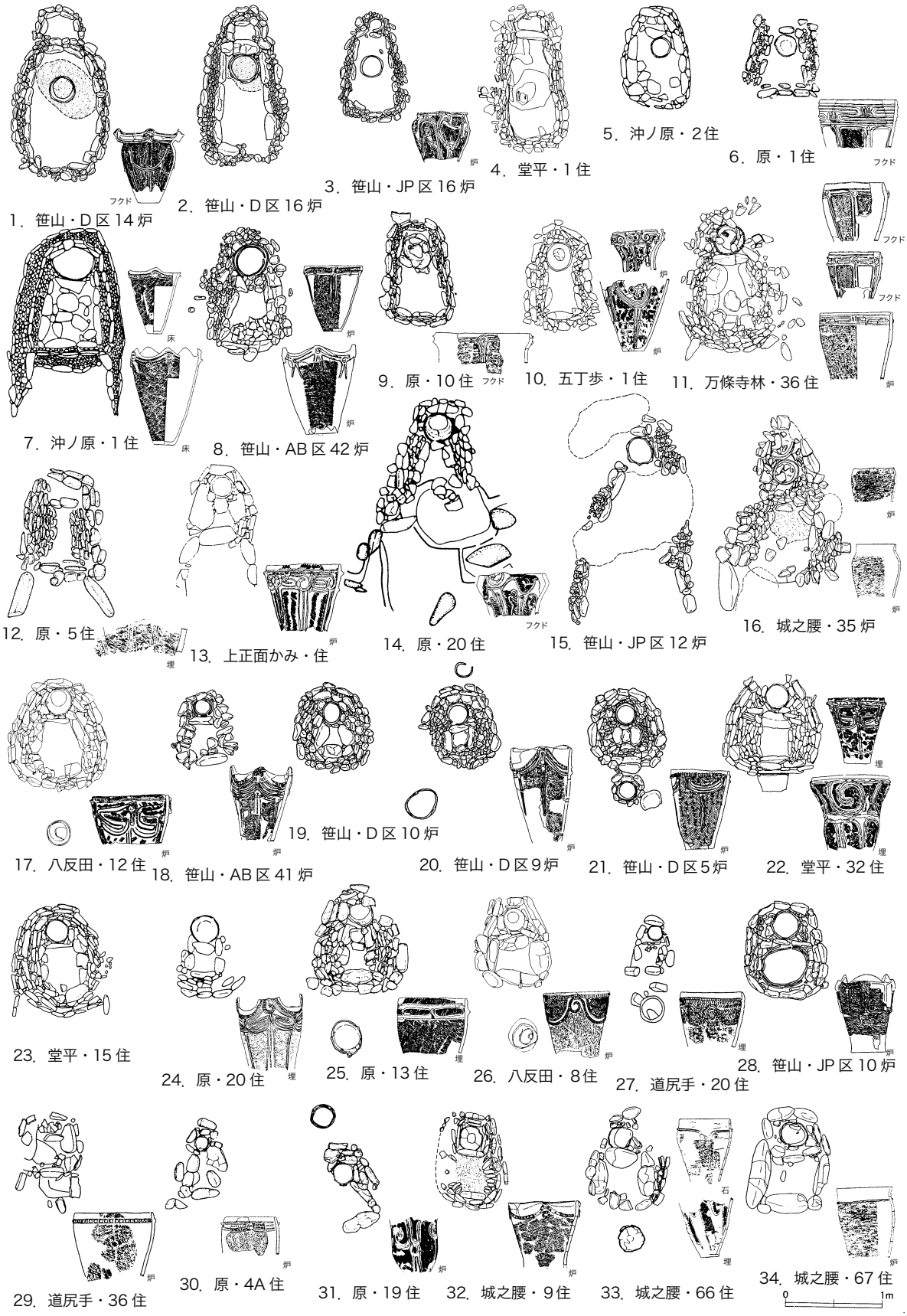
D類：土器埋設部と石組部からなり、平面形がダルマ形を呈し、石組部の断面形がすり鉢形のもの（第144図17～22)。

E類：土器埋設部と石組部からなり、偏平礫を箱形に組んだ簡素なもの（第144図26～27・34)。

F類：複式構造を呈するが炉体土器を伴わない、石組複式炉である（第144図29)。

G類：その他。

まず、A類の複式炉は1～5のような事例がある。1は笹山遺跡D区14号炉であるが、長楕円形の石組部に円形の小形石組が付属する。縁石には小形円礫が充填される。2は笹山遺跡D区16号炉で、石組炉内が偏平礫によって区切られて、石組部の端部に炉体土器が埋設されている。石組部などには小礫が充填されている。3は笹山遺跡JP区16号炉であり、石組部の先端を区切り、先端と中央に炉体土器が埋設されている。4は堂平遺跡1号住居跡の炉で、長方形の石組内の先端を偏平礫で区切るものである。縁石の内側には偏平礫が充填されている。石組部には炉体土器が伴わず、中央部に落ち込みが見



第 144 図　信濃川流域の複式炉

られる。5は沖ノ原遺跡2号住居跡の炉で、楕円形の石組炉の先端部が偏平礫によって区切られているように見え、この石組部には炉体土器が埋設されている。縁石は偏平円礫や板状礫によって2から3重にめぐっている。これらは、先端の小形石組に炉体土器が伴うものと伴わないものがある。また石組炉の中央部に炉体土器が伴うものが多い。また伴って出土する土器は栃倉式期のものが見られる。

B類の複式炉は6～11のような事例がある。6は原遺跡1号住居跡の炉で、一部壊れているが石組は縁石の内側に小礫が充填されている。7は沖ノ原遺跡1号住居跡の炉で、平面形が逆U字形を呈している。この複式炉は土器埋設部と石組部からなり、石組部の両端に裾石が付属する。石組部底面には偏平礫が敷かれて、偏平礫を縦長に立て並べた縁石の内側には、小礫が充填されている。8は笹山遺跡AB区42号炉で、土器埋設部と石組部に区切られて壁面には小礫が配されている。報告者によると、底面は「棒状礫が台形状に組まれ」、「土器片が敷かれている」(註367)。9は原遺跡10号住居跡の炉で、平面形が隅丸長方形を呈し、土器埋設部と石組部からなるが、その境は明確ではない。縁石には偏平礫を横長にめぐられて、その内側に偏平礫や小礫が配されている。石組部底面には礫は敷設されていない。10は五丁歩遺跡1号住居跡の炉で、やや先端が尖る隅丸長方形を呈している。報文によると、縁石は「外側は長さ20cm前後の細長い礫で囲み」、底面は「20～30cm大の石を横長に立てた状態で」組まれ、「底面には石が敷かれ」ず、「その間には小さな角礫が充填」されている(註368)。11は万條寺林遺跡36号住居跡の炉で、土器埋設部と石組部からなり、端部に小形の裾石が付属し、卵形の平面形を呈している。報文によると、この組石は「石積は大形の石材を基底に置き、上半は小礫を横積みしている。北側にはハ字状に横長の石材を据えている」。この複式炉は、他の例に比べて丸みを持ち、どちらかというとD類に近い形態をしている。

C類の複式炉は12～16のような事例があり、これらは前庭部を有する形態である。12は原遺跡5号住居跡の炉で、長方形の平面形の端部に2つの棒状の礫がハ字状に付属する。炉内部は偏平礫で区切られているが、炉体土器は伴わない。底面には礫が敷かれないが、縁石内側に壁面には偏平礫が横長に配されている。13は上正面かみ遺跡の炉で、片側が一部壊れているが、土器埋設部・石組部・前庭部からなり、平面形が逆U字形を呈する。報告書の実測図と写真がやや異なるが、縁石は内側と外側に偏平礫をめぐらせて、その狭い間に僅かに小礫を配する程度のものと思われる。14は原遺跡20B号住居の炉で、土器埋設部・石組部・前庭部から構成され、平面形がA字形を呈している。石組底面には礫を敷かず、縁石をめぐらせて内側にはやや大形の礫を配し、その間に偏平礫を横積状に配している。15は笹山遺跡JP区12号炉であり、土器埋設部と石組部・前庭部からなる。平面形がA字形を呈するが、土坑によって一部分が破壊されていることから、不明瞭な部分が多い。報文によると、「大型扁平礫を二重に巡らし、その間に小型礫を敷き詰め」ている(註369)。16は城之腰遺跡35号住居跡であり、土器埋設部・石組部・前庭部から構成され、平面形が土器埋設部と石組部で括れるダルマ形を呈する。石組部底面には礫が敷かれず、縁石の内側に比較的小形の円礫を石積状に配している。土器埋設部には、炉体土器が2基付属し、当該地域では例外的である。当地域の複式炉は前庭部をもたないものが主体的であり、この種の前庭部を有する複式炉は比較的事例が少ない。これらは時期的に限定される可能性があり、東北地方との対比から、少なくとも大木9式新段階以降に帰属すると考えられる。

D類の複式炉は17～25・32のような事例がある。これらは平面形がずんぐりした卵形またはダルマ形を呈するものである。この形態には入口方向に埋設土器を伴う事例が多く見られる。17は八反田遺跡

12 号住居跡の炉で、土器埋設部と石組部からなる。この特色は報文では「奥壁や燃焼部の基礎、および埋設土器との仕切り等には、長さ 30 ～ 40cm、巾 20cm 前後の中型礫を用い、他に 10 ～ 20cm 前後の礫数 10 個を用いて構築している」とされている（註 370)。石組部壁面に使用されている礫には、偏平なものでも破砕したものが多く見られる。18 は笹山遺跡 AB 区 41 号炉であり、土器埋設部と石組部からなる。石組は縁石の内側に「礫を放射状に充填」されており（註 371)、石組部の壁面は他のものと異なり、円礫を縦長に用いて放射状に配している。これらの組み方は、城之腰遺跡 9 号炉・19 号炉（32・33）に見られる組み方に類似している。19 は笹山遺跡 D 区 10 号炉であり、土器埋設部と石組部から構成され、平面形がずんぐりたダルマ形を呈する。これらは「扁平礫を周囲に巡らし、内側には扁平礫の側面と割石の割面を上にして敷き詰め、その隙間を小型円礫で充填」する（註 372)。20 は笹山遺跡D区 9 号炉であり、平面形はダルマ形を呈している。組み方は、同様に縁石の内側に小礫が充填されている。21 は笹山遺跡D区 5 号炉であり、土器埋設部と石組部からなり、円形に近いダルマ形を呈している。組み方は、同様に縁石の内側には割石と小礫を充填し，石組部底面にも偏平礫が敷設される。また炉に隣接して埋設土器が付属し、土器の周りに縁石が 1 周し、蓋状の偏平礫が伴っている。22 は堂平遺跡 32 号住居跡の炉で、土器埋設部と石組部からなり、平面形がダルマ形を呈する。組み方は、石組部壁面には偏平円礫などの割石を積み石状に配している。炉跡の石組部底面に礫は敷かれず、土器埋設部とは偏平礫によって区画されている。この南側には板状礫が配されている。23 は堂平遺跡 15 号住居跡の炉で、土器埋設部と石組部からなり、平面形が楕円形を呈し、裾石が付属する。組み方は、石組部底面には礫を配さず、比較的大形の礫を壁に巡らせて、縁石との間には偏平礫を横長に積み石状に配している。24 は原遺跡 20C 号住居跡の炉で、かなりの部分が破損しているが、縁石の内側に偏平礫を横長に配している。石組部の形状などからD類と判断した。25 は原遺跡 13 号住居跡の炉で、土器埋設部・石組部からなり、平面形はダルマ形を呈する。この組み方は、石組部底面には礫を配さず、壁面の下部にやや大形の礫を配し、縁石との間にやや小形の円礫や偏平礫を充填している。これらは円形もしくは卵形・ダルマ形を呈している。組み方は共通しており、縁石の内側に小円礫や偏平礫を横長に配しており、割れている偏平礫を使用しているものも多く見られる。また石組部底面の面積は狭く、壁面の断面はすり鉢状を呈している。これらには入口側やまれに逆側に埋設土器が付属するものが多く、A～C類には見られない特色である。

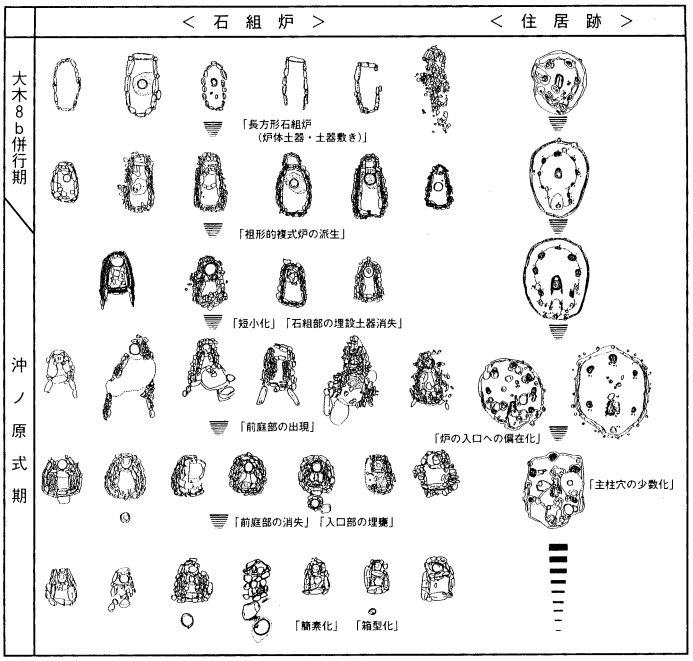
次に、E 類の複式炉は 26・27・29 の事例がある。26 は八反田遺跡 8 号住居跡の炉で、土器埋設部と石組部からなり、やや角張った卵形を呈する。石組部は偏平礫で方形に囲んだ簡素なもので、底面には礫を配さない。24 は道尻手遺跡 20 号住居跡の炉で、土器埋設部と石組部からなる小形の複式炉である。縁石がめぐり、石組部底面に土器片が敷かれるものである。また 34 は城之腰遺跡 67 号炉で、土器埋設部と石組部からなる。これは箱型に偏平礫を組んだものであり、城之腰遺跡では多く見られる。これらＥ類としたものは、偏平礫を箱形に組んだものであり、A～D類とは構築に用いる石材の数量が大きく異なる。また、炉の入口側に埋設土器を伴うものが見られ、D類と共通する特色である。これまでの研究では、複式炉の終末は小形化と簡素化の傾向があるとされており、形態的にはこれらは終末に位置付けられると思われる。

その他G類としたもので、28 は笹山遺跡 JP 区 10 号炉で、２つの炉体土器からなり変異した複式炉である。この複式炉の縁石には偏平礫が充填されている。29・30 は破損が激しく形態が不明瞭なものであるが、元はD類かＥ類の形態を呈していたと推定される。前述したように、城之腰遺跡は魚沼地域の

なかでも北側の縁辺部にあり、やや魚沼地域のなかでも形態的に異なっている。32・33は城之腰遺跡9号・19号住居跡の炉で、土器埋設部と石組部から構成され、ダルマ形の平面形を呈する。これらの石組部は放射状に、偏平礫が縦長に配されており、魚沼地域とは異なる地域性の一つと言えるだろう。

3）複式炉の変遷

これらの分類は同時に存在するものではなく、時間的変遷があると考えられる。従来、当地域の複式炉は増子正三・田辺早苗によって3段階に区分されてきている（註373）。



第145図　魚沼地域の複式炉と住居跡の形態変遷図

これらを踏まえて、検討を加えてきた結果、A類（1段階）⇒B類（2段階）⇒C類・B類の一部（3段階）⇒D類（4段階）⇒E類（5段階）と変遷すると考えられる。時期的には、祖形的複式炉（A類）が栃倉式期に出現し、沖ノ原式期に複式炉が普及する。これらは5段階の変遷を経て消滅すると考えられる（註374）。複式炉の最終形態はE類のような簡素な形態であり、沖ノ原式土器のなかで横ハ字文が充填される段階であると考えられる。これらの複式炉の形態は住居形態とも相関性が見られる（第145図）。複式炉の出現期の住居形態は卵形住居跡であり、主体部の中央部に炉跡が位置している。次段階には前庭部を有する複式炉が出現し、住居形態も入口寄りに炉跡が位置するようになる。その次段階には複式炉の前庭部が消えて、平面形が五角形の住居形態へと変化する。またこの時期に住居入口もしくは前庭部に相当する空間や、炉の奥壁側に埋設土器が設置される事例が増加する。これらの埋設土器には蓋状の偏平礫が付帯しており、中部地方などとの影響関係が想定される（註375）。

4）複式炉の地域性

魚沼地域における複式炉の形態的特色は、出現当初より前庭部を伴わないものが主体を占めることに加えて、特に複式炉の組み方に特徴がある。従来の研究では、福島県で見られる複式炉が典型的な形態とされて「上原型」（註376）が提唱され、のちにそのなかで「塩沢型」、「原瀬型」の区分が提唱された（註377）が、現在のところ「上原型」の名称が一般的に用いられている。この他に浜通り地方の事例については「上田郷型」が提唱されている（註378）。また東北地方北部の形態である「前庭部付石組炉」について「沢部型」の名称が提唱されている（註379）。これは「上原型」との形態的な対比のなかで設定されたものである。このようなタイプの設定は重要ではあるが、地域的形態も時期によって変化することや同時期でも形態的な多様性があるため、十分な検討が必要である。魚沼地域に分布する複式炉は、阿賀野川以北や会津地域の複式炉とは異なり、地域性が強い一つのタイプとして捉えることが可能である。従って、本地域の複式炉（特にA～D類）については、沖ノ原遺跡が最初に発掘調査によって検出された事例であり、典型的形態であることから、「沖ノ原型」複式炉の名称を提唱したい（註380）。

４．縄文時代後期前半期の住居形態

１）道尻手遺跡の事例

本遺跡からはⅦ期～Ⅸ期（三十稲場式期～加曽利 B1 式並行期）の住居跡が 11 軒検出されているが、平面形が明確な事例は少ない。これらの住居形態の特色を概略的にまとめたい。

Ａ類は楕円形もしくは釣鐘形を呈する小形の住居形態で、第６号住居跡や第 37 号住居跡がある。第６号住居跡は周溝に沿って柱穴が配列して、東側では周溝は不明確になるが柱穴が配列している。床面中央部には薄い焼土が認められる。また床面西側の土坑には立石状の柱状礫が埋設され、その西側の柱穴にのみ根固状の礫が方形に組まれていた。一方、Ｂ類は長方形を呈するやや大形の住居形態で、その１辺に張出部を有している。この住居形態の例は第３号住居跡・第 41 号住居跡とおそらく第２号住居跡が該当すると考えられる。Ｃ類は炉跡のみが検出され、掘り込みが浅いため平面形や柱穴配列が不明なものをまとめたものである。

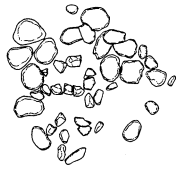
これら住居跡に伴う炉跡は、方形または円形の石組炉（８住・38 住)、土器敷炉（10 炉)、地床炉（３住・６住・37 住)、などがある。信濃川流域における当該期の住居形態は明確な事例が少ないため、ほとんど言及されることはなかった。ここでは信濃川流域の地域的特色を検討したい。

２）信濃川流域の事例

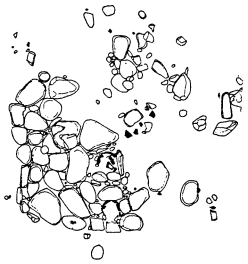
縄文時代後期初頭～中葉（三十稲場式期～三仏生式期）の住居跡は、津南町道尻手遺跡、八反田遺跡、下モ原Ⅲ遺跡（註 381)、道下遺跡、十日町市栗ノ木田遺跡（註 382)、野首遺跡、塩沢町原遺跡、万條寺林遺跡、南魚沼市宮下原遺跡、小千谷市城之腰遺跡、長岡市岩野原遺跡、中道遺跡で検出されている。しかし、これらの事例は平面形や柱穴配列が明確なものは極めて少ない。

敷石住居跡（第 146 図１～８）：沖ノ原遺跡敷石住居跡、原遺跡第１号配石・第４号配石（39 住)・第 12 号配石、宮下原遺跡第１号・第２号住居跡、野首遺跡、岩野原遺跡 34 号住居跡がある。これらの敷石住居跡は、床面の範囲や平面形は不明なものが多く、平面形が分かるものは３・６・７が隅丸方形を呈している。これらの敷石住居跡は、柄部を伴う明確な事例がないことから柄鏡形ではないと言える。しかし、これらの敷石住居は敷石の範囲は極めて狭く、これのみで住居が完結していたとは考えにくい。これらの敷石住居跡は柄部が視覚的に認識できないが、これらの敷石住居に柄部に相当する空間が付属していた可能性は否定できない。

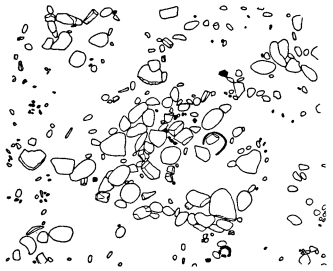
炉跡は方形石組炉が多く、１は炉体土器が方形石組炉の外に付属していることから複式炉の系統として捉えられる。３は石組内部に炉体土器を設置しており、竪穴住居跡に伴う方形石組炉と共通している。この他､未報告の事例ではあるが､湯沢町川久保遺跡では敷石を伴う複式炉付住居跡が検出されている（註 383)。これらから、当地域では中期終末に敷石住居が普及し始め、複式炉をもつ竪穴住居と並存していたと想定される。一方で、原遺跡４号配石（39 住）のような特殊な敷石住居跡がある（第 146 図５)。この敷石住居跡は中心部に敷石を伴わず、周囲に帯状の敷石が施されている。片側（谷側）の敷石が遺存していないので、全体形状は不明である。この配石下部には柱穴が認められ、重複して環状にめぐっている。この敷石住居跡の類例は、周辺遺跡では確認されておらず、朝日村アチヤ平遺跡 SI156（註 384）が類例としてあげられる。この敷石が住居の内部か外部に敷設されたものかが問題である。山本暉久は「「周堤礫を有する柄鏡形敷石住居」に近いありかたを示している」と指摘している（註 385)。敷石に伴



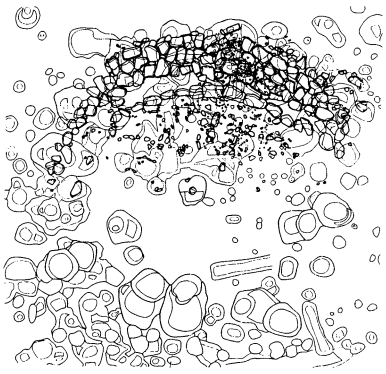
1．野首・AK-12 グリッド　2．野首・敷石遺構



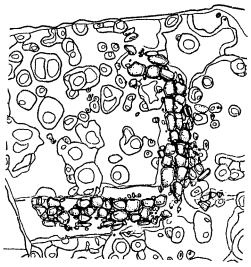
3．宮下原・1住



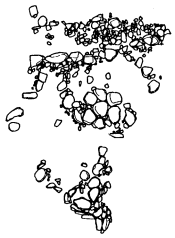
4．宮下原・2住



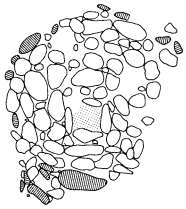
5．原・4号配石（39 住）



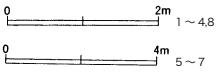
6．原・12 号配石

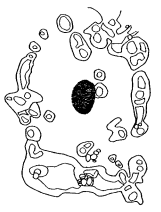


7．原・1・2・3 号配石

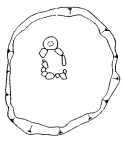


8．岩野原・34 住

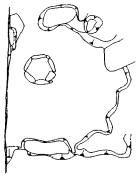




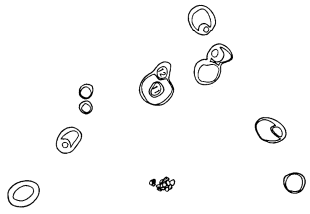
9．道尻手・6住　10．道尻手・37 住



11．八反田・2住

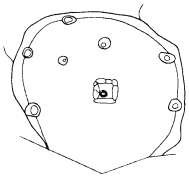


12．八反田・4住

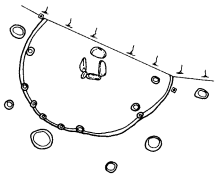


13．道下・1号集石

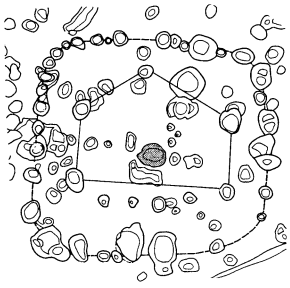
14．下モ原Ⅲ・4住



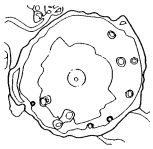
15．正安寺・35 住



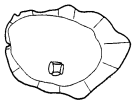
16．野首・9住



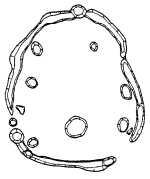
17．原・38 住



18．原・17 住

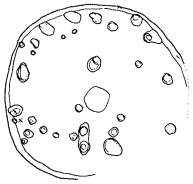


19．十二木・P3

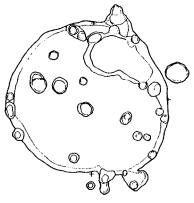


20．万條寺林・13 住

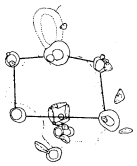
21．万條寺林・47 住



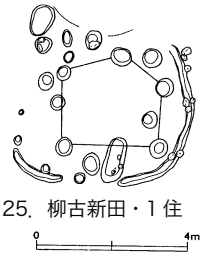
22．大清水・SI02



23．大清水・SI01



24．柳古新田・6住



25．柳古新田・1住

第 146 図　縄文時代後期前半期の住居跡（1）

う柱穴の配列などから、これらの敷石が屋内の床面に敷かれた可能性もある。

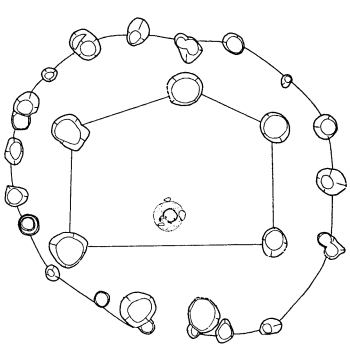
竪穴住居跡（第 146 図 9 ～ 25、第 147 図）：竪穴住居跡は竪穴の掘り込みが浅いために平面形や柱穴配列などが不明瞭な事例が多い。これらは調査後の整理作業で認識されたものも多く、その配列の妥当性に疑問がある例も少なくない。かろうじて周溝などで平面形が判別できるものは、平面形が円形や楕円形を呈するものが多く、ほかに長方形を呈する住居形態がある。これらの竪穴住居跡は周溝や壁柱穴のみがめぐるものと、柱穴などが全くないもの、主柱と壁柱穴がめぐるものがある。

9・10 の道尻手遺跡の事例は南三十稲場式期の住居跡であり、楕円形状に周溝がめぐる。周溝中に柱穴がめぐっているが、主柱は伴わない。11・12 は八反田遺跡の事例で、加曽利 B1 式並行期の住居跡とされている。これらは平面形が円形を呈し、中央に石組炉を有している。これらには主柱や壁柱穴は伴わない。14 は下モ原Ⅲ遺跡の南三十稲場式期の住居跡で、炉跡が複式構造になる珍しい事例である。15 は正安寺遺跡 35 号住居跡で、南三十稲場式期にあたる。これは平面形が円形を呈し、中央に方形石組炉を有し、壁際に壁柱穴がめぐる。16 は野首遺跡 9 号住居跡で、後期前半期の住居跡と推定される。これは平面形が円形を呈し、周囲に壁柱穴状の小柱穴がめぐっている。17・18 は原遺跡の事例であり、17 は方形に壁柱穴がめぐり一端にやや大きめの柱穴が対で存在する。内側には 4 本か 5 本の主柱が認められる。18 は平面形が円形を呈し中心部に炉跡を有している。この壁際には小柱穴がめぐっている。19 は十二木遺跡の事例で報告書では土坑として報告されている（註 386）。しかし、方形の石組を伴うことからこの時期の住居跡の可能性がある。20・21 は万條寺林遺跡の事例で、円形や楕円形に周溝がめぐっている。その内側には柱穴が幾つか見られるが配列は不明である。22・23 は大清水遺跡の三仏式期の事例である。これらは平面形が円形を呈し、ほぼ中心部に地床炉をもつ。22 は竪穴内に小柱穴が対になって見られる。24・25 は柳古新田下原 A 遺跡の事例で南三十稲場式期のものである。24 は 5 本主柱に方形の石組炉をもつものである。25 は一部に周溝が残存し、内側に主柱らしき柱穴が見られるが配列は不明である。

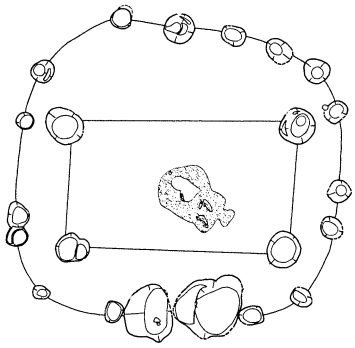
第 147 図 1 ～ 3 は城之腰遺跡の事例で、南三十稲場式期のものと考えられる（註 387）。1 ・ 2 は円形もしくは隅丸方形に壁柱穴がめぐり、その一部に対になる土坑を伴っている。また内側には 4 本と 5 本の主柱を伴い、ほぼ中心近くに炉跡を有している。これらは主柱を持たない住居形態と時期的な違いがないというわけではないようである。これらは比較的大形の住居が多く、大形のものと小形のもので形態が分かれていた可能性もある。4 と 5 は中道遺跡の事例で、4 は円形の竪穴壁際に石列がめぐっている。5 は平面形が楕円形を呈し、やや入口よりに炉跡を有している。2 対の溝が見られる。6 ～ 8 は岩野原遺跡の事例で加曽利 B 式並行期の住居跡である。これらは平面形が円形や楕円形を呈し、ほぼ床面の中央部に炉跡を持つ。主柱穴は見られないが、周溝と壁柱穴のようなものがめぐっている。

この他、信濃川流域以外の事例は、柏崎市小丸山遺跡（註 388）、十三本塚北遺跡（註 389）、十日町市向原Ⅱ遺跡（註 390）、新潟市平遺跡（註 391）、などがある。これらの多くは、柱穴や炉跡のみの検出で、平面形や柱穴配列は不明である。小丸山遺跡 SI-1 は後期中葉の住居跡であり、円形に周溝と壁柱穴がめぐり、周溝中には 16 基の壁柱穴を伴っている。この中央部に地床炉を有する。16 は平遺跡の事例で、南三十稲場式期の住居跡である。平面形は円形を呈し、周囲に壁柱穴がめぐっている。これらは明瞭な事例が少ないが、信濃川流域の住居形態と共通していると考えられる。

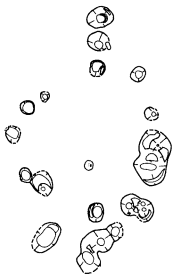
一方、道尻手遺跡から検出された長方形を呈する住居形態は、張出部が付属することから柄鏡形住居



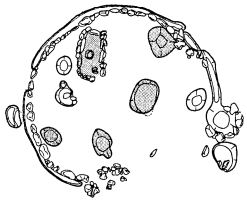
1．城之腰・11 住



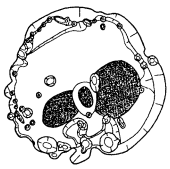
2．城之腰・12 住



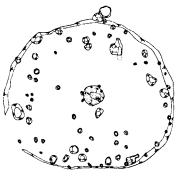
3．城之腰・86 住



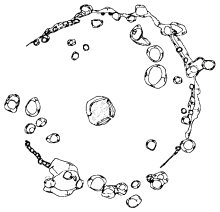
4．中道・31 住



5．中道・37 住

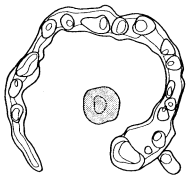


6．岩野原・9住

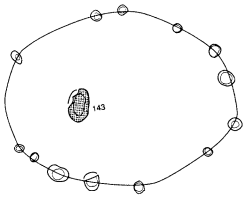


7．岩野原・2住

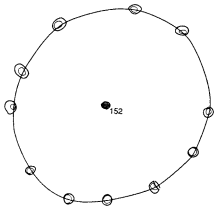
8．岩野原・13 住



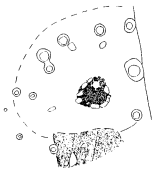
9．小丸山・SI-1



10．十三本塚北・3住

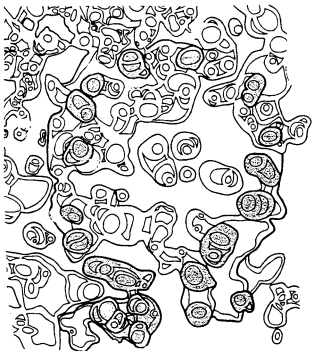


11．十三本塚北・4住

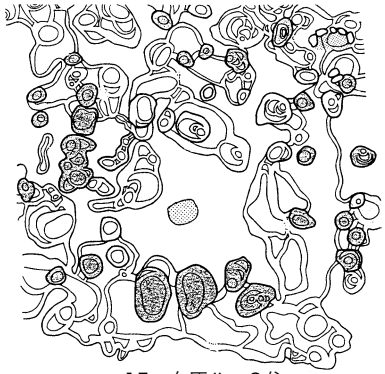


12．ツベタ・204 住

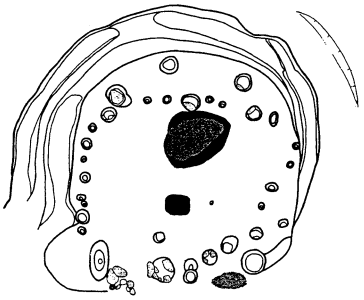
13．ニタ子沢 C・8住



14．向原 II・4住

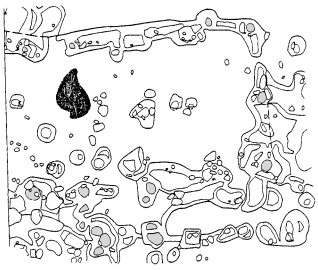


15．向原 II・8住



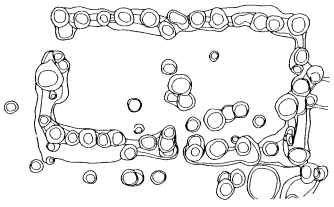
16. 平・1住

0 4m



17．道尻手・3住

18．道尻手・41 住



19．小丸・4号掘建柱建物跡

0 4m

第 147 図　縄文時代後期前半期の住居跡（2）

の系譜にあるものと考えられる。周辺遺跡から類例は見られないが、類例を敢えて挙げるとすれば、神奈川県港北ニュータウン遺跡群の小丸遺跡４号掘立柱建物跡（註 392）がある（第 147 図 19)。これは掘立柱建物跡として報告されているものであり、また地理的に隔たりがあることから直接的関係があるとは言いがたい。今後、この種の類例の増加をまって検討する必要がある。

３）縄文時代後期の住居形態の特色

本地域の縄文時代後期初頭～中葉の住居形態を時期ごとに整理すると、次のようにまとめられる。三十稲場式期の事例は、ほとんど平面形などの住居形態が明確な事例はない。これは竪穴の掘り込みが浅いためか、平地式であるためであると考えられる。炉跡は方形石組炉などがある。南三十稲場式期の事例は、竪穴住居が主体を占めていると考えられる。敷石住居は原遺跡で６軒ほど確認されるが、他の遺跡では１遺跡１，２軒のみであり、それほど普及していたとは考えられない。一方、竪穴住居は明確な事例が少ないが、平面形が円形もしくは楕円形を呈する住居形態であり、主柱をもつものと壁柱のみのものがある。入口には対をなす溝や小柱穴を伴うものが多く見られる。これに加えて、道尻手遺跡２号・３号・41 号住居跡のような長方形を呈する住居も数例ながら存在している。これも柄鏡形住居の一形態であると考えられるが、周辺遺跡には類例がなく、どの程度普遍的に存在していた住居形態かは不明である。これらに伴う炉跡は地床炉や円形・方形の石組炉、などがある。三仏生式期の事例は、ほとんどが竪穴住居であり、敷石住居は姿を消すと考えられる。竪穴住居の平面形は円形や楕円形を呈するものである。炉跡は地床炉と円形の石組炉がある。

当地域の後期の住居形態について､品田高志は主柱穴を有する住居形態を「城之腰類型」と呼称し､「中期末葉から新たな住居形式が展開し、後期前葉から一部中葉頃までは系譜がたどれる」（註 393）ことを指摘している。しかし、後期初頭～前葉の住居跡のなかで、主柱を有する事例は、原遺跡 38 号住居跡や城之腰遺跡 11 号住居跡・12 号住居跡のように比較的大形の住居であり、他の同時期の住居跡には主柱を持つ事例はほとんど認められない。このことから、この時期の住居形態は主柱を有するものが一般的であったとは言い難い。信濃川流域の住居形態はもともと在地のものではなく、後期初頭を前後して関東地方もしくは中部地方からの影響によって、信濃川流域にもたらされた住居形態であると考えられる（註 394)。ただし、柄鏡形住居がそのまま普及したのではなく、中期末葉の在地的な住居形態に敷石住居や柄鏡形住居が融合して、後期の住居形態が生成された可能性がある。

一方で、本地域の敷石住居跡は明確な張出部を伴う事例は認められない。このことから、柄鏡形住居ではなかったと結論づけることもできるが、この敷石の範囲のみで住居が完結していたとすれば、径約２ｍ～４ｍ前後と極めて小形の住居となる。規模を考慮した場合、これらには入口空間や柄部に相当する空間などを伴っていた可能性が考えられる。また当地域の敷石住居跡は、原遺跡でまとまって検出されているが、他の遺跡では敷石住居跡は稀な存在である。従って、当地域では敷石住居があまり普及しなかったと考えられる。

４）小　結

信濃川流域における後期前半期の住居形態は、平面形や柱穴配列などが明瞭ではない事例が多く、地域的特色を示すのに十分な資料が不足している。今後の資料の増加とともに随時検討を行なう必要があり、これは発掘調査の検出段階での認識によって大きく左右されることもあり、今後に残された課題は多い。

第４節　魚沼地域の配石墓の地域性

１．道尻手遺跡の配石墓

本遺跡からは配石墓（註 395）が 22 基検出されている（第 148 図）。これらの配石墓は出土土器から後期前葉を中心に構築されたものと推定される。配石の形態はＡ～Ｆ類の６類に分類される。これらが同時期のバリエーションであるのか時期差なのかについて、各形態の配石墓の特色をまとめておきたい。

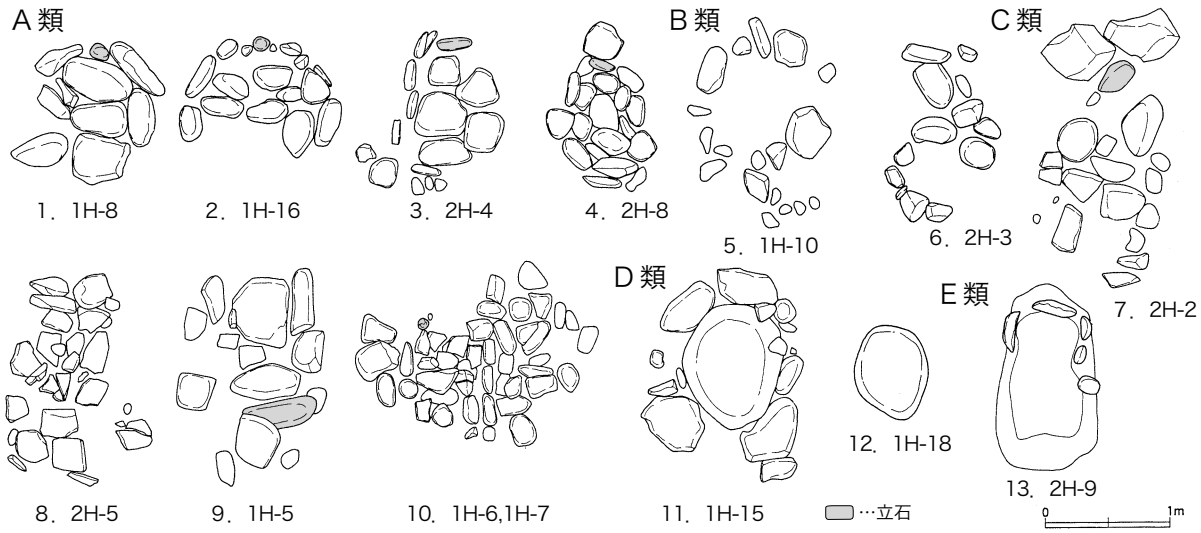
１）形態的特色

Ａ類は平面形が１ｍ前後の楕円形を基本として、円礫を主体として構築されるものである（第 148 図１～４）。上部構造の特徴は、縁石を部分的にめぐらせて、その内側に偏平円礫を敷きつめるものである。特に主軸の一端に柱状円礫を埋設するのが特徴的である。この柱状礫のほとんどは土中に埋められている。１Ｈ－８号配石墓は約 1m の柱状礫を南端部に埋設し、１Ｈ－ 16 号配石墓では約 30cm ほどの柱状礫に加えて、縁石全てが偏平礫を縦長に配し、Ｕ字状に並んでいる。２Ｈ－４号配石墓は、約 50cm ほどの板状円礫が西端部に埋設されている。これらの柱状礫は、自然石をそのまま配したものではなく加工が施されている。

Ｂ類は平面形がやや不整形な円形に縁石がめぐるものである（第 148 図５・６）。この種の配石墓は１Ｈ－ 10 号配石墓や２Ｈ－３号配石墓がある。

Ｃ類は平面形が長方形を基調として縁石が側面に配されて、その内側に敷石が配されるもの（第 148 図７～ 10）。敷石には板状角礫が主体的に用いられている。これらの板状礫は赤化したものが見られ、板状摂理をもつ安山岩を加熱して板状に分割した可能性も想定される。２Ｈ－２号と２Ｈ－５号配石墓（Ｃ１類）は形態的に極めて類似している。１Ｈ－５号配石墓の南端部に１ｍほどの柱状礫が斜めに倒れた状態で検出された。土坑覆土にも抜き取り痕が確認されることから、地上に立てられていたと考えられる。１Ｈ－６号配石墓は 20cm ほどの立石が埋設されていた。これら１Ｈ－５号・６号・７号配石墓（C2 類）は、やや類似性に乏しい。

Ｄ類は長径約１ｍほどの大形礫を中心に置くものである（第 148 図 11・12）。これらは 100 ～ 600kg



第 148 図　道尻手遺跡の配石墓

ほどの大形礫が用いられるのが特徴である。1H－15号配石墓は大形礫の周囲に角礫をめぐらし、1H－17・18号配石墓は大形礫1点のみが配されていた。1H－11号配石は大形礫を埋設しているのみで、下部に墓坑らしき空間は認められなかった。

E類は土坑内の壁面に偏平礫を箱形に配するものである（第148図13)。2H－9号配石墓はコ字形に礫を配しており、石棺墓に類似するが、かなり小形で部分的な配石である。形態的に石組炉にも類似するが、分布や覆土の堆積状況、隅丸長方形の土坑から埋葬施設と考えられる。

F類はその他の配石や小形の配石である。下部の土坑も比較的小形である。配石の形態は多様であり、小形のものをまとめた。2H－1号配石は2本の立石が端部に立てるものである。

2）時期的変遷

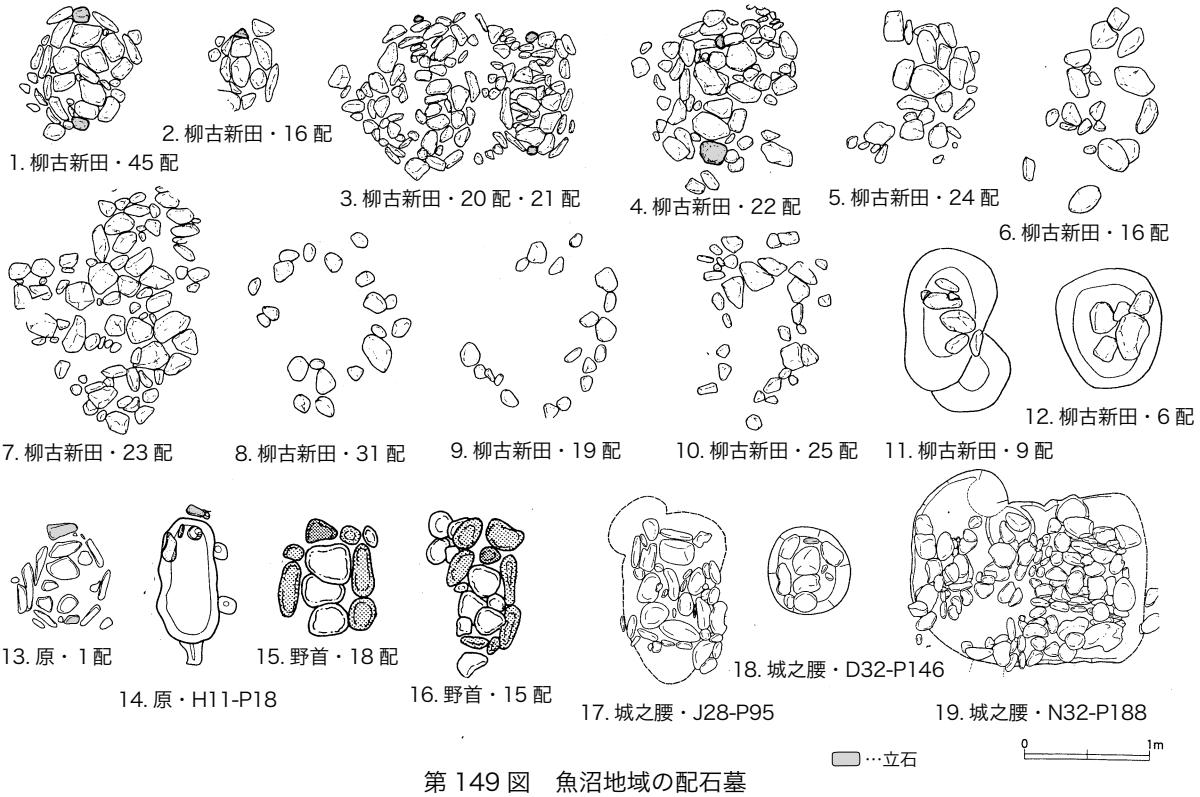
土坑内出土土器から構築時期を推定すると（註396)、各形態の構築時期は次のように推定される。A類は、2H－4号配石墓の底面から南三十稲場式期新段階の完形の浅鉢が出土しており、1H－8号配石墓からは南三十稲場式期の土器小片が出土している。2H－8号配石墓からは加曽利B1式並行期の土器小片が出土している。このことから、A類は南三十稲場式期から加曽利B1式並行期まで造営された形態であると考えられる。B類は、1H－10号配石墓と2H－3号配石墓から南三十稲場式期～加曽利B1式並行期の土器片が出土しており、南三十稲場式期後半～加曽利B1式並行期の間に造営された形態であると考えられる。C類は、三十稲場式期から加曽利B1式並行期まで継続し、その中でもC1類は、2H－2号配石墓から三十稲場式期の大形土器片が出土しており、2H－5号配石墓からは南三十稲場式期の土器小片が出土している。よって、C1類は三十稲場式期から南三十稲場式期新段階にかけて造営されたと考えられる。C2類は、1H－5号配石墓から加曽利B1式並行期の完形の浅鉢が出土しており、この時期に造営されたものと考えられる。D類は、1H－15号配石から加曽利B1式並行期の土器小片が出土し、1H－6号配石墓からは、南三十稲場式期新段階の土器小片が出土している。このことからD類は南三十稲場式期新段階から加曽利B1式並行期にかけて造営された形態であると考えられる。E類は南三十稲場式期新段階以降に造営された形態である。F類はほとんど出土遺物がないことから時期は不明であるが、これらの配石墓が造営された時期と考えられる。

出土土器から形態的変遷を検討したが、出土土器の多くは小片のみで、これらは配石墓の構築時期を示すものではなく、その上限を示しているに過ぎない。従って、基本的には完形土器が出土している事例を中心に時期を検討していくべきであり、周辺遺跡との比較検討が必要である。

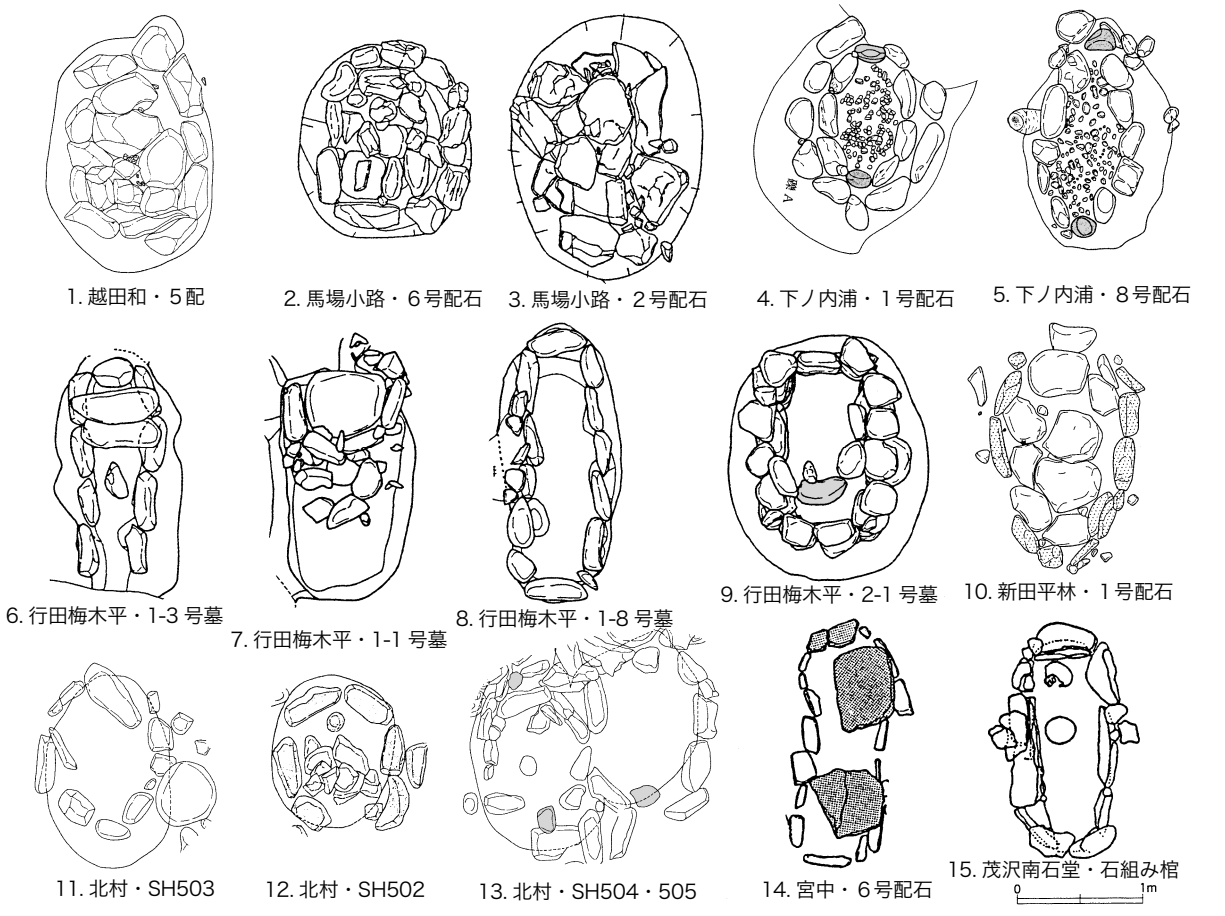
2．周辺遺跡の事例

周辺遺跡で縄文時代後期前半期の配石墓が検出されている遺跡は、十日町市栗ノ木田遺跡（註397)、野首遺跡（註398)、塩沢町原遺跡（註399)、南魚沼市柳古新田下原A遺跡（註400)、小千谷市城之腰遺跡（註401)、がある（第149図)。

柳古新田下原A遺跡からは、後期前葉の南三十稲場式期を中心とする配石墓が27基検出されている（1～12)。報文中ではA～D類に分類されており、その中でAⅠ類（3～5）は「横立させた偏平な石材ないしは細長い石材を周囲にめぐらせ、内側に平石を敷く。両極（もしくは片側のみ）に小立石を有するものをAⅠ類、小立石を欠くものをAⅡ類」としている（註402)。これらに伴う立石は長さ約20～30cm程度で、その半分以上が埋設されている。



第 149 図　魚沼地域の配石墓



第 150 図　隣接地域の配石墓

原遺跡から検出された配石墓の事例は少ないが、幾つかの形態が見られる（註 403)。 1 は 1 号配石遺構の下から検出された配石墓である。これは報告書に実測図がなかったため、写真から図を起こしたものである。 1 号配石墓は楕円形に縁石がめぐり、その内側に偏平礫が配されて、主軸上の両端に 1 mほどの柱状礫が埋設されている。構築時期は出土遺物がないため不明であるが、上部には敷石住居跡が重複して構築されていることから、この住居跡の時期（後期前葉）以前であると考えられる。

栗ノ木田遺跡からは 35 基の配石墓が検出されているが、未報告であるため詳細は不明な部分が多い。市史の記述と写真によると道尻手 A 類に類似した配石墓が見られ、良好な資料であるため図示できないのは残念である。これらの配石墓はⅠａ類・Ⅰｂ類・Ⅱ類に分類されている。これらの特色は縁石の内側に偏平礫が配されており、立石が端部や中心に配されるものであり、細部に多様性がある。そのなかで第 21 号配石墓は、配石の北端と南端に立石が埋設されており、より共通性が認められる。

野首遺跡の配石遺構は本報告が未刊のため詳細は不明であるが、後期前葉の南三十稲場式期を中心とする配石遺構と考えられる。これらの配石は A 〜 D 類に分けられており、その中の A 類は「偏平礫もしくは棒状礫を楕円形または方形にめぐらし、その内側に偏平礫が敷き詰められるものである。長軸上の一端には立石が伴う」（註 404）ものである（15・16)。しかし、このなかで配石下部に土坑を伴うものは第 18・23・24 号配石遺構のみで、16 の配石を含めて下部に土坑を伴わないものが多い。

城之腰遺跡からは 7 基の配石墓が検出されており、「配石土坑」として配石 A と配石 B に分類されている（註 405）17 は「方形の敷石状配石」と呼称されて、方形に配された縁石の内側に偏平円礫が配されている。18 は小形配石で、縁石の内側に偏平円礫などを配している。また主軸の一端に長さ約 20cm ほどの小形の立石を配する。19 は長径 2.1 m× 1.5 mの「敷石状配石」で下部に土坑がある。報告者は「2 基の配石と考えることも可能である」と指摘するように 2 基か 3 基の墓坑が重複していると考えられる。他は、円形や楕円形に円礫がめぐるものであるが、明瞭な配列は把握できない。

このように周辺遺跡の配石墓は南三十稲場式期を中心に造営されたものである。これらは遺跡間で形態的な差異があるものの、道尻手 A 類と類似する配石墓が魚沼地域に分布している。この配石端部には特徴的に柱状礫が埋設されるが、長さや配置などが遺跡によって異なる。その他の C 類・D 類の配石墓は他の遺跡では類似形態がなく、その点で道尻手遺跡の配石墓は形態的に多様性があると言えるだろう。

3．隣接地域の事例

縄文後期になると東日本では配石墓が急増し特に中部高地や南西関東、東北地方南部、東北地方北部において配石墓が顕著に認められる。ここでは隣接地域の配石墓と形態的に比較したい。

福島県の後期前半期の事例は、馬場小路遺跡（註 406)、西方前遺跡（註 407)、越田和遺跡（註 408)、などから配石墓が検出されている（第 150 図 1 〜 3)。これらの配石墓は時期的には後期前葉で、 1 ・ 2 は平面形が長方形を基調として縁石をめぐらせて、その内側に礫を配するものがある。 3 は楕円形の範囲に礫を配するものである。 1 ・ 2 のような形態の配石墓は阿武隈川流域に特徴的に認められる。

一方、宮城県の後期前半期の事例は、下ノ内浦遺跡（註 409）があり、9 基の配石墓が検出されている。配石墓は、径 2 mほどの楕円形に縁石を 1 列か 2 列めぐらせて、その内部に小礫を充填している（4・5)。主軸の両端には立石が配されている。時期的には後期前葉ごろと推定される。

群馬県の後期前半期の事例は、行田梅木平遺跡（註 410)、新田平林遺跡（註 411)、などがある（第

150 図 6 ～ 10）が、管見に触れた資料は少なかった。まず行田梅木平遺跡からは、称名寺Ⅱ式期～堀之内式期の墓群が 3 ヶ所検出されている。これらの配石墓はほとんどが石棺墓である（6 ～ 9）。これらの下部遺構の配石は、長方形の土坑壁面に偏平礫を全周させるものと、主軸両端にのみ偏平礫を配するものがあり、上部には蓋状の偏平礫を配するものと立石状の礫を配するものがある。7 の事例は上部にのみ配石を施すもので、大形の偏平礫を中心に縁石がめぐっている。新田平林遺跡の配石は堀之内 1 式期であるが、1 号配石（10）は径約 160 × 90cm の楕円形に縁石を巡らせて、内側に偏平礫を配するものである。しかし、この配石は下部に土坑を伴わず、配石上面が被熱により赤化していることから配石墓ではないと考えられる。これらの地域的特色は事例が少ないものの、石棺墓が主体的であり、上部配石のみの配石墓はほとんどない。

長野県の後期前半期の事例は、長野県北村遺跡（註 412）、宮中遺跡（註 413）、茂沢南石堂遺跡（註 414）、岩下遺跡（註 415）、などがある（第 150 図 11 ～ 15）。北村遺跡からは後期前葉（堀之内式期）の配石墓とともに埋葬人骨が多数検出されている。これらは上部構造のみの配石墓で、配石の形態は 1 ～ 3 群に分類されおり、円形や楕円形に縁石が巡るものや、雑然と配されているものなどがあり（11 ～ 13）、縁石の内側に立石や丸石を配するものがある。一方で、この地域では石棺墓が認められる。宮中遺跡の石棺墓は後期前半期と推定され、14 のように長方形に板状の礫を土坑壁面にめぐらせて、上部に蓋状の石を配するものと配さないものがある。茂沢南石堂遺跡からは加曽利Ｂ 1 式期の石棺墓が検出され、16 の石棺墓は土坑壁面に板状礫を配して、この配石に沿って上部に偏平礫が配される。このように北村遺跡では上部構造のみの配石墓が主体であるが、この地域では石棺墓が主体的に分布している。石棺墓は形態的に多様であり､長方形の墓坑壁面に偏平礫を配し､上部に蓋状の偏平礫を配するものとそうでないものがある。

4．配石墓の地域性

道尻手遺跡とその周辺の魚沼地域の配石墓は、遺跡ごとにやや相違があるものの共通した特色が見られる。特に道尻手 A 類は魚沼地域に広域的に分布していることから地域性の強い配石墓と考えられる。

以前、この種の配石墓について、柳古新田下原 A 遺跡で最初に検出されたことから、「下原 A 型」と呼称したことがある（註 416）。これらの配石墓の分布範囲は魚沼地域に限られるが、配石墓は遺跡ごとに多様性があり、本地域の配石墓がすべてこの形態を呈するわけではない。集落規模と比較して検出される配石墓の数が少ないことや、1 つの集落において配石墓と土坑墓が並存いるなどのあり方は、後期前半期の墓制の特色を反映している可能性がある。

一方､県外の隣接地域でも配石墓の事例が確認されるが､魚沼地域と類似する事例は認められなかった。また大雑把には東北地方南部から北部にかけて上部構造のみの配石墓が分布しており、一方で群馬県や長野県の配石墓は、北村遺跡などの数例を除いては石棺墓であり、基本的な形態が異なっている。このように巨視的に見ると、道尻手遺跡を含めた魚沼地域は東北地方の配石墓に、より近い形態であると考えられる。一方で、東北地方北部に局地的に石棺墓群が分布している。これらは後期初頭～前葉の所産とされており、中部高地や関東地方に見られる石棺墓との影響関係が指摘されている。実際に両地域の間には石棺墓の事例はなく、両地域間の影響関係についてはまだ検討の余地がある。信濃川流域の配石墓は南三十稲場式期～加曽利Ｂ 1 式並行期にかけて造営されたもので、後期になって配石墓が増加することが明らかであるが､今後はこれらの配石墓の出現過程と地域間の影響関係について明らかにする必要があるだろう。

第５節　信濃川上流域における石器群の様相について

１．はじめに

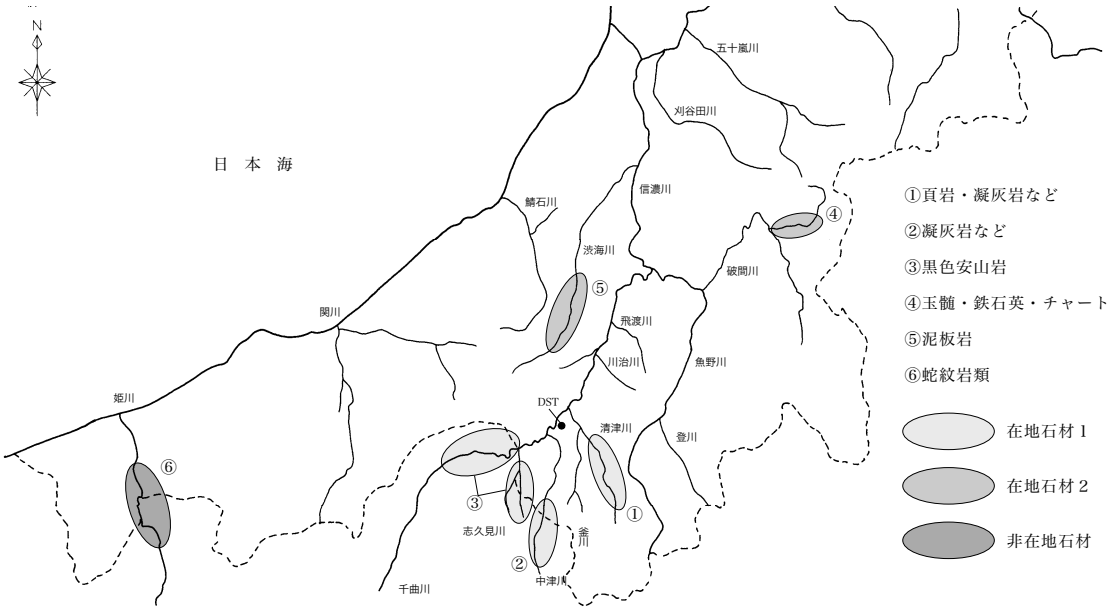
石器組成は「当時の生活および生業を理解する上で、有効な手段と成り得る」（註 417）ものとして位置付け、本報告の石器記載では石器組成（註 418）を構成する石器器種（註 419）の様相を把握することを主眼としてきた。そのため石器器種の枠を超えた検討を必要とする使用石材や、二次加工を共通する横軸での石器系列（註 420）については触れることができなかった。また、石器組成をより有効に活用するためには、集落内での時間単位と対比可能な状態であることが望ましく、縄文時代中期～後期という大枠での時間軸でまとめた本遺跡石器群の様相を、さらに細かな時間幅に細分する作業が不可欠と考える。

ここでは、報文では扱わなかった出土した石器全体のまとめをおこなった上で、①本遺跡の遺構出土石器から時期別の石器の様相、②遺構出土石器から時期細別された周辺地域での石器の様相の２点から周辺地域と本遺跡から出土した石器群とを比較し、当該地域における時期ごとの石器群の様相について確認をおこなう。なお、出土石器を比較する地域については、共通する地理的環境に立地する遺跡との対比をおこなう必要性から信濃川流域の山間地域（以下、信濃川上流域と呼称する）を対象域としたい。

２．石材環境（第 151 図）

本遺跡周辺の石材環境については前述しているため重複する箇所もあるが、ここでは本遺跡の比較対象地域である信濃川上流地域に関係することについて、簡潔にまとめておきたい。

津南町周辺の地質は新生界の主に中新統以降の火山岩類と火山砕屑物からなり、さらにその基盤となる魚沼層群の礫層中には輝緑岩や閃緑岩などの転石を含むことから、遺跡周辺の信濃川河床では火山岩や深成岩などが採取可能である。また信濃川支流の清津川で中新統に属す頁岩を含有する地層が分布し、さらに信濃川の上流の志久見川では黒色安山岩を採取可能な露頭が確認されている。本遺跡から出土する石器の使用石材の大半は上記河川で採取可能な石材で占められている（在地石材１）。



第 151 図　周辺地域の石材分布図

一方、魚野川・破間川を結ぶ南北のライン上に位置する新発田―小出線と呼ばれる断層の東側では、変成岩・中生代堆積岩類・斑レイ岩・花崗岩などの堅硬な岩石が複雑に分布する越後山脈が存在する。特に中古生層に属する足尾帯には石器素材として良質なチャートのほか鉄石英や流紋岩、玉髄が分布する。本遺跡からおよそ 40km 離れた破間川流域にこの足尾帯が分布し、同河川流域から本遺跡に供給されたことが推察される（在地石材２）。また、在地石材２としたものはほかに、信濃川支流の渋海川で産出が推測される泥板岩があげられる。信濃川中流域では板状石器の素材に多用される石材として知られ、本遺跡からも板状石器の素材および原石での出土が少数ながら確認されている。

信濃川流域での河床礫の様相は、魚野川との合流点からさらに下流に位置する朝日橋（小千谷市）付近までは拳大程度の河床礫がみられるが、長岡より下流域では礫河床から泥河床に推移することによって石材環境の極めて乏しい地域となる。したがって、石材環境の面からみても、長岡付近の山間地域までが本遺跡と同様な地理的環境と位置づけられる。

３．石材選択（第 76・77 表）

以下、使用石材と選択石器との関連性についてまとめてみたい。

在地石材１　剥片石器への選択性が高い石材では頁岩・黒色安山岩・凝灰岩があげられる。特に打製石斧など中－大形の剥片石器の素材となる石材の 85％と大半を占める。また、礫石器素材への選択性の高い石材では粗粒安山岩・斑レイ岩・閃緑岩・緑色凝灰岩などが主要な石材として選択される。

在地石材２　　剥片石器への選択性が高い石材では鉄石英、流紋岩、チャート、泥板岩があげられる。出土資料中に原石が確認されることから素材段階での搬入が考えられる。板状石器の素材と考えられる泥板岩と石鏃など小形の剥片石器に使用される石材に区別できる。ただし泥板岩は使用目的とされる板状石器の出土資料が１点と極めて少数であるため、他の目的に使用された可能性も考えられる。一方、礫核石器では多面体を呈する敲石に鉄石英製のものが３点と極少数ながら認められる。

非在地石材　剥片石器への選択性が高い石材では黒曜石、珪質頁岩があげられる。二者とも石材全体に占める割合は少ない（0.5％）が、石鏃の使用石材の割合では 24％と一定数量の利用と、原石や石核、素材の状態で出土例がある。礫核石器への選択性が高い石材では蛇紋岩、緑泥片岩などがあげられる。蛇紋岩は姫川水系、緑泥片岩は秩父の三波川変成帯起源のものと推察される。蛇紋岩は磨製石斧のみ、緑泥片岩は石棒のみに認められており、完成品以外の資料が極少数であることから、完成品段階での搬入が予想される。

本遺跡における石器石材の選択性は、剥片石器では在地石材・非在地石材含め、原石、石核、素材、成品が揃っており、遺跡内での製作を意図した素材自体の搬入形態であったことが明らかである。一方、非在地石材を素材とした礫核石器は原石や素材段階での出土例は、ヒスイ製垂飾の未成品と蛇紋岩の分割礫の各１点のみと極少数に限られていることから、完成品段階または半成品段階での搬入が考えられる。こうした剥片石器と礫核石器との搬入形態の差異は、大形の素材を集落内に搬入した際にかかる運搬コストの高さに由来するものと推察される。したがって、素材から粗割と敲打成形によって一定程度に成形が進行したものが集落内に搬入されたものと考えられる。

また、周辺地域での採取が見込める在地石材１については打製石斧などの大形の石器に占める割合が高く、周辺地域では得られない非在地石材や在地石材２では、石鏃などの小形の剥片石器に占める割

合が高い。このこともまた、搬入された礫核石器と同様に搬入の際にかかる運搬コストとの関係が考えられる。ただし、不定形石器の項で述べたように、小形剥片石器に使用される石材の希少性に起因する可能性についても考えておく必要があろう。希少性が高く小形素材しか得られない石材という点では、チャートや珪質頁岩をここでは周辺地域では採取が困難な石材（在地石材 2）としたが、新たな採取可能な場所が見つかることも考えられる。したがって在地石材 1 についても、小形の剥片素材にのみ使用される石材の存在する可能性を残しておきたい。

これまでみてきたように、本遺跡出土の石器器種と石材選択には一定の相関関係が認められる。これらは石器製作とも密接に関連するものと考えられるものであり、第 76 表のように整理される。

A群	器　種	石鏃、石錐、石匙、ピエス・エスキーユ、不定形石器
	主要石材	在地石材 1…頁岩、黒色安山岩、凝灰岩 在地石材 2…チャート、流紋岩、鉄石英 非在地石材…黒曜石、珪質頁岩
鋭利な縁辺を有する剥片または剥片状の素材を利用するもので、ガラス質や珪質な石材についても積極的に用いられる。比較的小形の剥片石器の素材に用いられた一群と位置づけられる。		
B群	器　種	石槍、三脚石器、板状石器、打製石斧、不定形石器
	主要石材	在地石材 1…頁岩、黒色安山岩、凝灰岩、緑色凝灰岩 粗粒安山岩 在地石材 2…泥板岩
硬質～軟質様々な石質の剥片および剥片状の素材を利用するもので、鋭利な刃部をもたない。比較的中形～大形の剥片石器の素材に用いられた一群と位置づけられる。		
C群	器　種	磨製石斧
	主要石材	在地石材 1…緑色凝灰岩、斑レイ岩 非在地石材…蛇紋岩
敲打と研磨によって成形される製作上の特徴を持つものである。そのため、剥離性の高い石材は選択されず、刃部の衝撃耐えられような折れにくく、重量のある石材が利用される。		
D群	器　種	石皿、石棒
	主要石材	在地石材 1…粗粒安山岩、緑色凝灰岩 非在地石材…緑泥片岩
C 類同様に敲打と研磨によって成形される製作上の特徴を持つものである。C 類に比べ軟質な石材が選択される傾向があるのは、機能上の折れにくさよりも成形にかかる労力を省いた選材と考えられる。		
E群	器　種	磨石類、石錘、砥石、石皿
	主要石材	在地石材 1…粗粒安山岩、緑色凝灰岩、斑レイ岩、閃緑岩 在地石材 2…鉄石英 非在地石材…蛇紋岩
自然礫または転用石器に使用痕が認められるもの、または簡単な加工を加えただけのものである。このため、加工に際しては石材の性質に左右されることがなく、むしろ使用目的によって硬質～軟質の石材選択がなされたものと考えられるものである。		

第 76 表　石材選択性

		剥片石器										礫核石器					石製品						合計
		定形剥片石器									不定形石器	磨製石斧	磨石類	石錘	砥石	石皿類	石棒類	三角壔形石製品	軽石製石製品	ミニチュア石皿	垂飾		
		石鏃	石槍	石錐	石匙	ピエス・エスキーユ	板状石器	三脚石器	打製石斧														
在地石材1	頁岩	30	7	55	13	28	1	0	926	1022	0	19	1	0	0	1	0	0	0	0	2102		
	凝灰岩	3	2	12	2	10	1	2	246	157	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	439		
	黒色安山岩	39	1	76	8	47	2	3	596	868	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	1659		
	緑色凝灰岩	0	0	0	0	0	0	0	2	6	27	16	0	0	0	0	0	0	0	0	51		
	輝緑岩	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	8		
	斑レイ岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31	48	0	5	3	0	0	0	0	1	87		
	閃緑岩	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	39	0	0	2	0	0	0	0	0	45		
	砂　岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	3	11	3	0	0	0	0	0	29		
	粗粒安山岩	0	0	0	0	1	1	1	147	0	0	854	1	11	61	14	0	0	4	0	1077		
	玄武岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	0	0	9	2	0	0	1	0	31		
在地石材2	流紋岩	6	0	0	1	2	0	0	1	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20		
	鉄石英	4	0	1	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	9		
	チャート	23	0	3	0	4	0	0	0	7	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	43		
非在地石材	黒曜石	11	0	3	2	5	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26		
	珪質頁岩	21	0	21	2	13	0	0	15	98	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	176		
	蛇紋岩類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	128	1	0	0	0	0	0	0	0	0	129		
	ヒスイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3		
	緑泥片岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0			
	軽石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3		
	白色凝灰岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		
その他		1	0	1	0	0	1	0	0	0	34	23	0	0	0	8	0	0	0	1	60		
合　計		33	10	167	30	18	6	6	2016	2171	162	30	5	27	0	36	1	3	5	4	4681		

第 77 表　石器石材組成表

４．各期の石器様相（第 152 図）

本遺跡の遺構で、比較的、時期的まとまりの高いと判断される遺構から出土した石器の抽出をおこない、本遺跡出土石器について、石器組成と器種の時期的様相という視点からまとめておきたい。

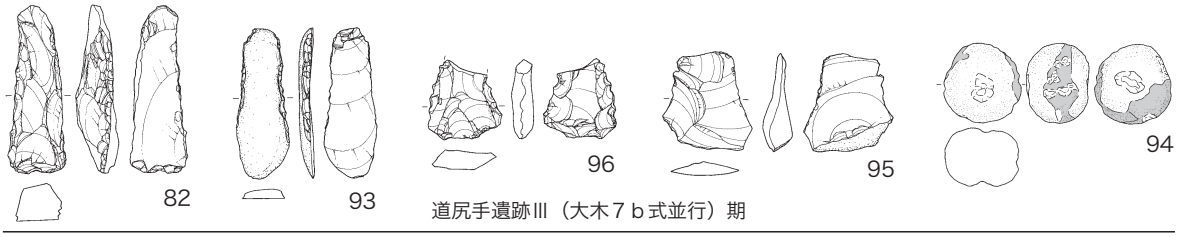
Ⅲ期（大木 7b 式並行期）　Ⅲ期の遺構は 16b 号住居跡などがあげられる。打製石斧や磨石類、不定形石器が出土するが、遺構数、資料数ともに少数であるため当該期での石器器種の様相を反映しているとは言い難い。なお、隣接する堂尻遺跡で検出された同時期の遺構からの出土石器についても打製石斧と不定形石器のみで構成されている。堂尻遺跡は道尻手遺跡の一部であった可能性がある遺跡で、両遺跡の出土石器が非常に限られた器種によって構成されている石器様相は、地域相と考えるよりも集落遺跡の初期段階の石器組成内容を示す可能性があろう。

Ⅳ期（大木８ａ式並行期）　Ⅳ期では 14A・15A 号住居跡など時期的にまとまった出土資料がみられる。伴出する土器の細別型式から大木 8a 式並行期の新段階のものと考えられる。Ⅳ期は前時期に比して出土数量も多く、器種の内容にも多様性が認められる。石鏃や石錐、石匙、打製石斧といった剥片石器のほか、磨製石斧や磨石類、石皿などが出土している。石器組成としては打製石斧と磨石類の二器種が全体の 52%（75 点）と高い割合を占めており、そうした点ではⅢ期の組成内容の延長上にあるものと考えられる。また、器種ごとにみた場合、石鏃では A1 類（基部の抉りを深く作出する無茎鏃）がやや目立つ傾向にあり、打製石斧では A 類（片面加工によって成形された打製石斧）が 25 点中 8 点と高い比率を占める。打製石斧 A 類は魚沼地域に特徴的な形態であり、本遺跡ではⅢ～Ⅳ期にかけて数量が多い。

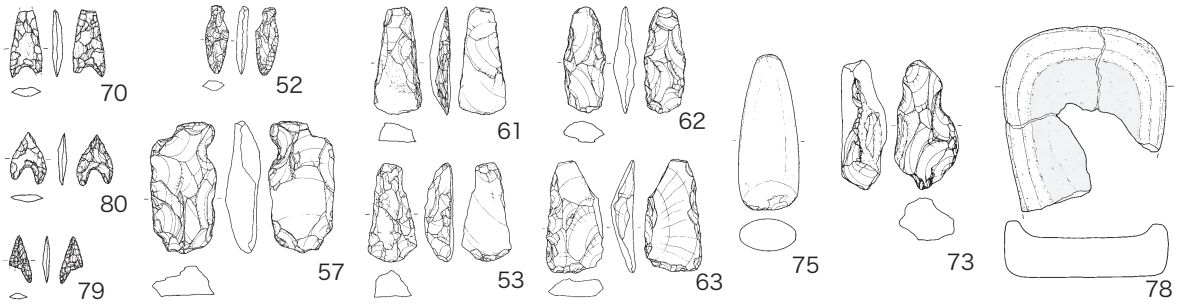
Ⅴ期（大木 8b 式並行期）　Ⅴ期では大木 8b 式並行期の新段階に位置付けられる第 9 号住居跡で良好な資料が出土し、Ⅳ期に続いて数量、器種の内容ともに豊富な様相を示す。石器組成についても基本的にはⅣ期とそれほど大きな変化はないが、新たな器種として石棒（1 点）、軽石製石製品（1 点）などの石製品が前時期の石器組成に加わる点に注意したい(註 422)。また、器種ごとにみた場合、石鏃では A2 類(基部の抉りを浅く作出する無茎鏃）や B 類（平基無茎鏃）が出土する点で前時期とは異なった様相を示す。また、打製石斧も A 類 (片面加工) から B1 類 (両面加工) の数量が増加傾向を示している。このことから、石鏃と打製石斧の二器種に形態上もしくは製作上の変化があったことが考えられる。なお、石鏃について田中靖は石鏃の基部形状の変化が中期後半以降にあると指摘している（註 423)。Ⅴ期の新段階以降にこうした動向があったことが予測される。

Ⅵ期（沖ノ原式期）　Ⅵ期は遺構出土資料が最も多い時期であり、第 17A・21・22 号住居跡など遺構数の上でも比較的検出数の多い時期といえる。しかしながら、Ⅳ - Ⅴ期の様相と比較すると、一軒の住居跡から出土する石器の種類が少ない特徴があり、図示した資料はⅥ期の遺構出土資料を広範な遺構から集めたものとなっている。石器組成としては前時期までの様相とそれほど大きな変化は認められないが、当該期は魚沼地域の標高の低い地域においては打製石斧の数量が著しく減少する。一方、標高の高い地域では打製石斧の数量に大きな減少がみられない時期（註 424）とされ、本遺跡などは魚沼地域の中でも標高の高い地域相を示すといえる。なお、Ⅵ期に帰属する B1 類の打製石斧については側縁に潰れが観察される資料が多く、前時期の側縁調整とは異なる二次加工の特徴をもつ。打製石斧の出土数量の多い地域的な様相と側縁加工のあり方の関連性かどうかは今後の課題となろう（註 425)。

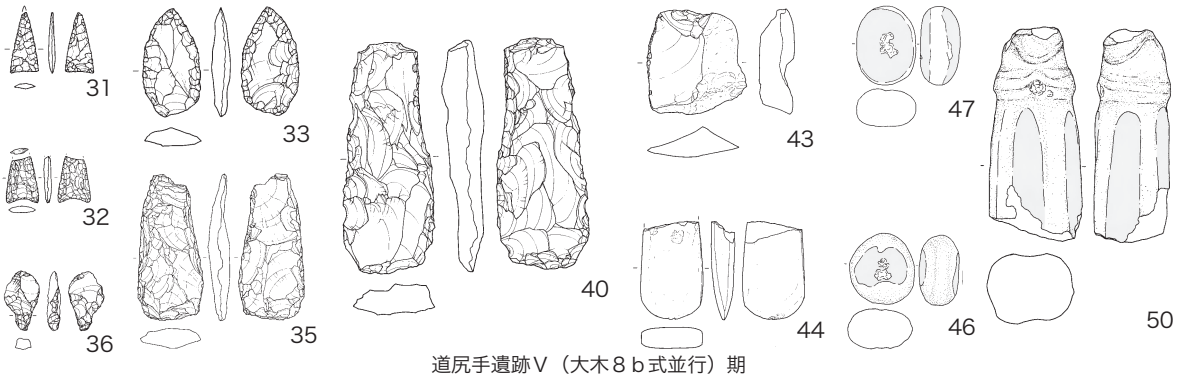
Ⅶ期（三十稲場式期）　Ⅶ期については住居跡の掘り込みが浅く、良好な出土資料がほとんどみられない。



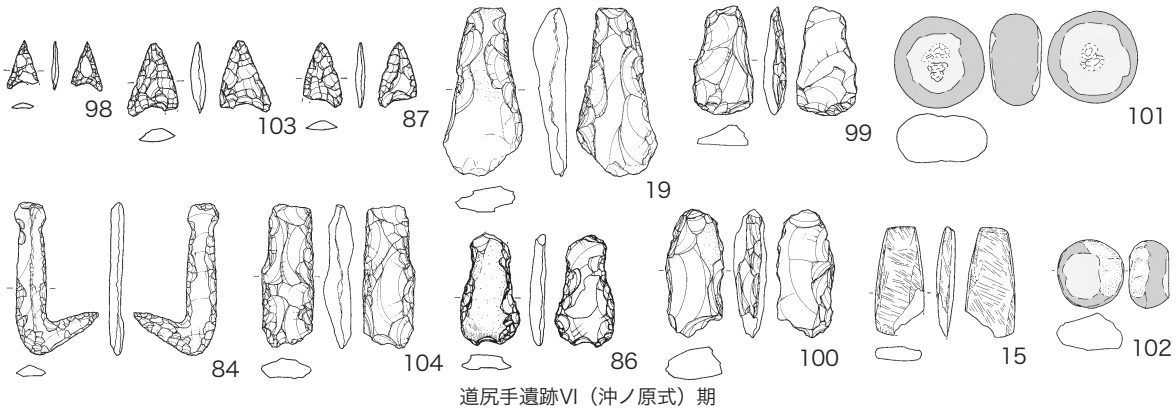
道尻手遺跡Ⅲ（大木７ｂ式並行）期



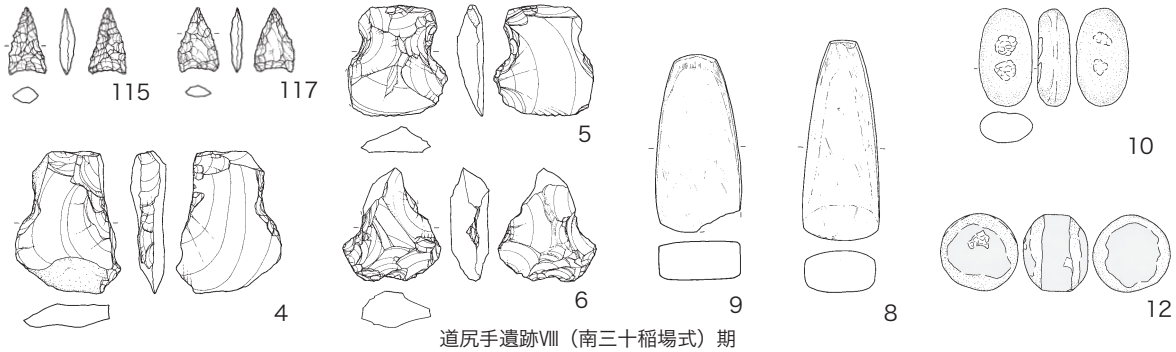
道尻手遺跡Ⅳ（大木８ａ式並行）期



道尻手遺跡Ⅴ（大木８ｂ式並行）期



道尻手遺跡Ⅵ（沖ノ原式）期



道尻手遺跡Ⅷ（南三十稲場式）期

第 152 図　各時期の石器様相

Ⅷ期（南三十稲場式期） Ⅷ期は配石遺構や土坑からの出土石器も多い。第２号住居跡ではＣ類打製石斧（分銅形打製石斧）が５点出土する良好な遺構が確認されている。石器組成では、打製石斧と磨石類の占める割合はⅥ期とほとんど変化がない状況を示している。Ⅵ期までの石器器種に新たな器種が加わることはないが、器種ごとにみると打製石斧の中でＣ類の占める割合が25％を占めている。小薬一夫・小島正裕の指摘では打製石斧の用途に差異が生じた可能性も考えられる（註426）。また、磨石類の中では円柱状を呈するものが第３号住居跡で１点出土し、Ⅵ期までにはみられない形態的な特徴を示している。なお、石鏃ではA2類が多い傾向を示し、Ⅵ期と変化がなかったと推測される。

これまでみてきた本遺跡石器群の様相について、石器組成と器種ごとの変遷についてまとめる。

1　本遺跡での石器組成については、打製石斧と磨石類が優位な石器組成はⅣ～Ⅷ期までほとんど変化なく継続すると考えられる。

2　凹基無茎石鏃については、脚部形状からⅢ - Ⅳ期ではA1（抉りの深いもの）、Ⅴ期以降ではA2類（抉りの浅いもの）のものが特徴的な形態を示す可能性が考えられる。

3　打製石斧については側縁加工において、Ⅲ～Ⅳ期にＡ類（片面加工）Ⅴ期以降にB1･B2類（両面加工）が特徴的な形態を示す可能性が考えられる。

②、③の形態上の変化については後で詳述するため、次に周辺遺跡における石器様相との比較から本遺跡石器組成について確認をおこなう。また本遺跡からの出土が極めて少数であった三脚石器や板状石器、砥石、石錘などの個別器種の周辺地域での分布状況についてみていきたい。

５．周辺遺跡との比較（第153図・第78表）

本遺跡の遺構出土石器から各時期の様相をみてきたが、ここでは周辺遺跡の遺構出土資料から抽出された石器組成と、これを構成する個別器種の双方から、当該地域における各期の石器の様相について概観し、本遺跡出土石器との比較検討をおこなう。前述したように、比較資料は本遺跡と同様な地理的環境に立地する遺跡から出土した石器での対比を目的とするため、中越地域の山間部に立地する遺跡を対象とした。出土資料が時期的にまとまると判断した遺構出土石器を対象資料として数量比率を統計的に処理することによって、より細かな時期での相対的な石器組成と器種構成の復元を試みた（註427）。なお、セトルメントを考える上では、規模の異なる遺跡間での比較をおこなうべきであるが、良好な遺跡が少ないため積極的な比較検討には至らなかった。ここでは周辺遺跡における大・小規模の集落遺跡を含めた石器組成の対比をおこなう。

（１）石器組成（第153図）

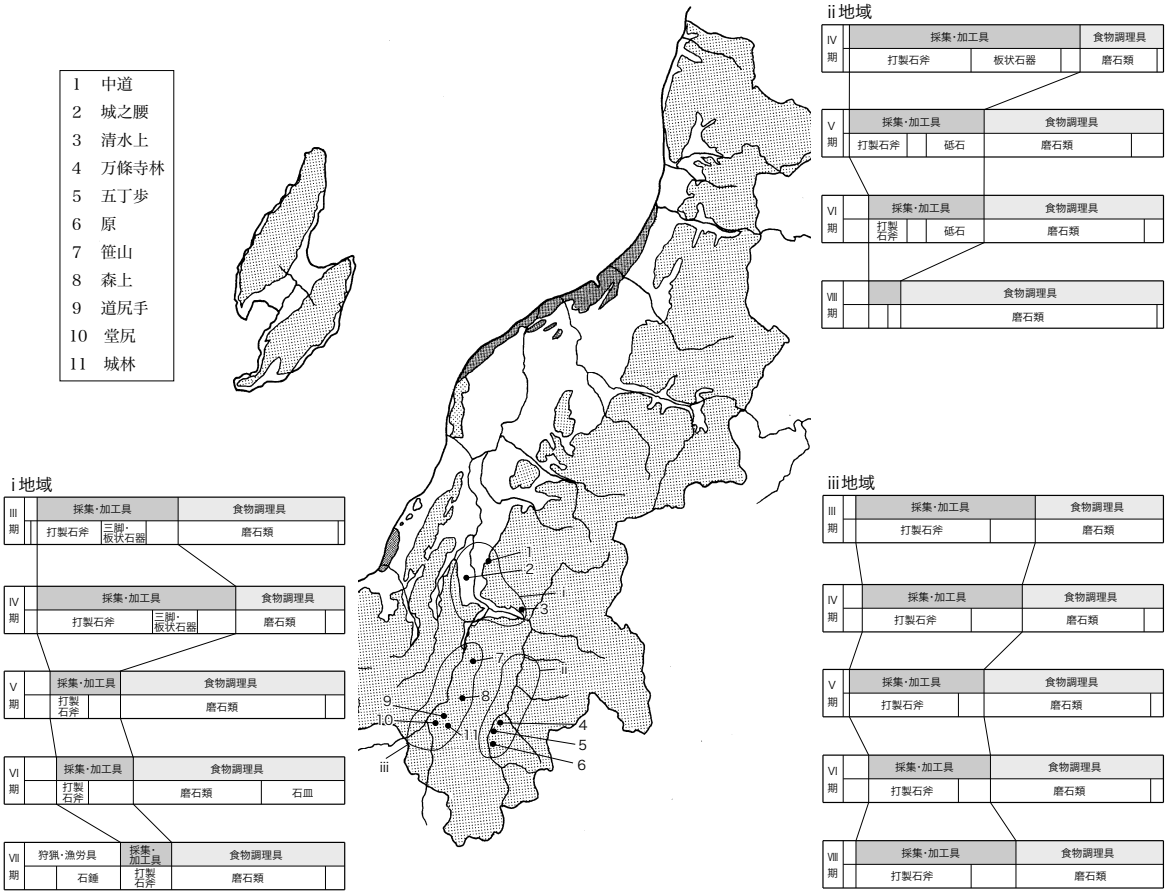
対象とした遺跡は、長岡市中道遺跡、小千谷市城之腰遺跡、魚沼市清水上遺跡、塩沢町万條寺林遺跡、五丁歩遺跡、原遺跡、十日町市笹山遺跡、森上遺跡、津南町堂尻遺跡、城林遺跡、下モ原Ⅰ遺跡の11遺跡である。ここでは対象地域とした信濃川上流域をⅰ地域（信濃川中流域から魚野川の合流付近に至る地域）、ⅱ地域（魚野川上流域）、ⅲ地域（魚野川合流付近から上流の信濃川上流部）にわけ、各時期の石器組成（註428）を各小地域単位で概観する。

Ⅲ―Ⅳ（大木7b-8ａ式並行）期はⅰ地域（清水上遺跡）、ⅱ地域（五丁歩遺跡）、ⅲ地域（道尻手遺跡）の各地域において、採集・加工具（打製石斧・板状石器・三脚石器・磨製石斧・石錐）と調理具（磨石類・

石皿）で組成の 90%以上と大半を占めており、こうした石器組成は中越地域の山間部全域に展開していたことを示している。

Ⅴ―Ⅵ期（大木 8b 式並行 - 沖ノ原式）以降は、信濃川中流域から魚野川上流域にかけて採集・加工具の割合に変化がみられる。ⅰ地域（城之腰遺跡、中道遺跡）ではⅣ期に比べ採集・加工具の割合が半分程度に減少し、ⅱ地域（万條寺林遺跡、原遺跡）でもⅤ期以降に採集・加工具の占める割合が除々に減少する傾向が認められる。一方、ⅲ地域（笹山遺跡、森上遺跡、道尻手遺跡）では、Ⅲ―Ⅳ期までの様相と比較して採集・加工具の占める割合はやや減少する傾向はあるものの、Ⅴ期からⅦ期に至るまでそれほど極端な変化をみせない点で、ⅰ・ⅱ地域とは石器組成のあり方に差異が認められる。

ここまでみてきた時期・地域ごとの石器組成は、鈴木俊成が指摘した内容とほぼ同様の結果となった。すなわち、Ⅴ―Ⅵ期（大木 8b 式並行―沖ノ原式）以降の「打製石斧の減少は魚野川および信濃川流域の状況をみる限り、標高の低い丘陵部において早い展開を示し、山間部では後期段階まで打製石斧を多量に保持する傾向がある」(註 429)。しかしながら、石器組成からみた地域性は器種レベルで比較した場合、いくつか再考が必要な点がある。すなわち、菅沼亘が指摘するように、「道具の構成比では共通性がみられるが、各道具内での組み合わせを見ると、遺跡ごとに違いが見られる」(註 430) 点や、藤巻正信らが指摘するように「石錘や板状石器の遺跡ごとの偏在」は遺跡の場の機能と結び付く可能性があると予想される (註 431)。こうした点を踏まえ、細別時期ごとの石器組成内における各器種の組み合わせについてまとめておきたい。



第 153 図　周辺遺跡の石器組成

（2）石器組成内での器種構成

狩猟・漁労具　従来からいわれているように、石器組成全体に占める狩猟具の割合は時期を問わず非常に少数であり、そのことが信濃川上流地域における特徴といえる。その中で、石鏃はVI期（沖ノ原式）以降、ⅰ・ⅱ・ⅲ地域において石器組成の中で少数である点では変化はないものの、全体に占める数量比では増加する傾向がみられる。こうした石鏃の増加は、V期（大木 8b 式並行）以降に打製石斧が減少するⅰⅱ地域だけでなくⅲ地域にも及ぶことから、信濃川上流域を含めた広い範囲に波及していたことが予想される。一方、石錘はVI―Ⅶ（沖ノ原式―三十稲場式）期以降、ⅰ・ⅱ地域の城之腰遺跡や原遺跡にみられるように、出土数の増加傾向が認められる。これは打製石斧の減少に対して時期および分布の上でもほぼ一致することから、一連の動きの中で捉えるべき組成変化の可能性も考えられる（註 432）。なお、石錘はⅢ（大木 7b 式並行）期のⅰ地域では、魚沼市清水上遺跡・月岡遺跡に確実に伴うもので、ほかに地域は異なるが、五十嵐川流域の曲谷Ｅ遺跡、さらにⅣ期では栃尾市栃倉遺跡や長岡市馬高遺跡などでも出土が認められる。このことから、縄文時代中期中葉以前では、ⅱ・ⅲ地域よりも日本海側に近い信濃川中 - 下流域を中心とした地域に分布していたことが窺える。VI期以降の石錘については、信濃川中流～魚野川上流域において多出することが伺え、VI期以降に出土が確認されている切目石錘とは何らかの関連があったものと推測される。

採集加工具　信濃川上流地域では極めて高い比率を示す。しかしながら打製石斧の減少する比率によって、V期以降に著しく低下するⅰ・ⅱ地域と、V期以降も変化が少ないⅲ地域に細別される。こうした地域差について、打製石斧以外の器種との関係性についてまとめたい。

板状石器と三脚石器はⅰ・ⅱ地域ではⅢ期以降に認められる器種であり、板状石器は魚沼市布場平遺跡第 1 号住居跡（1 点）や五丁歩遺跡 7c 号住居跡（33 点）で、三脚石器は清水上遺跡 SK65A・SK455A（1 点）での出土が認められる。遺跡により多少の差異があるが、概ね縄文時代中期前葉から後期前葉まで存続すると考えられる。一方、ⅲ地域の状況は、笹山遺跡、森上遺跡、城林遺跡、道尻手遺跡ともに遺構に伴う事例は皆無であり、また包含層からの出土も極めて少ない。このことから、三脚石器と板状石器の分布は地域的な差によって出土数量に差異があらわれたと推察される。なお、両器種のⅰ・ⅱ地域での時期的な数量比からは、Ⅲ・Ⅳ期で全体に占める割合が 3 ～ 34%を示し、V期以降では 1 ～ 2%程度と出土数量が減少する傾向が認められる。遺跡によって出土数量に差があることから遺跡の性格に出土数が左右される器種と考えられるが、V期以降の出土数の減少は打製石斧と同様の傾向を示すといえよう。石錐と磨製石斧の組成に占める割合は全般的に極めて低く、数量比の上で大きな差異が現れるほどの出土点数をもった事例は少ない。磨製石斧は、Ⅲ期ではⅰ地域（曲谷Ｅ遺跡第 4 号住居跡）から定角式磨製石斧、ⅲ地域（道下遺跡第 6 号住居跡）から基部横断面形が扁平な楕円形を呈する磨製石斧が出土する。このことから、数量が少ないことを除けば、Ⅲ期には形態が出揃っていたものと考えられる。なお、小形品や大形品についても、同時期に存在したことが予想されるが、出土事例からの判断はできなかった（註 433）。また、砥石は遺構に伴う事例が少ない点から明らかではないが、五丁歩遺跡や原遺跡では出土量が多くかなり特殊である。しかし、分布として地域的なまとまりが認められないことから遺跡の性格の差異、あるいは調査時の器種認定の差異を示していることが推察される。

食物調理具　本地域では各時期にわたり安定した出土数を示す組合わせである。皿状に成形された石皿は当該地域の縄文時代前期では例がなく、成形 - 彫刻（線刻）された石皿が五丁歩遺跡や城林遺跡でⅢ期、清水上遺跡でⅣ期に遺構出土例があることから成形石皿と彫刻石皿がⅢ期前後に出現期があったことが予想される（註 434)。一方、板状石皿は城之腰遺跡で特化した出土数をみせるなど、遺跡によって出土傾向に差異があるものと考えられ、渡辺（1985）の指摘するように、石皿の形態差は機能差を示す可能性が高い（註 435)。

地域	遺跡名	道編 尻 手年	狩猟・漁労具			採取・加工具						調理具			合計
			石鏃	尖頭器	石錘	打製石斧	石錐	板状石器	三脚石器	磨製石斧	砥石	磨石類	石皿	石匙	
i地域	清水上遺跡	Ⅲ(大木7b並行)期	2	2	0	29	1	13	5	2	11	74	4	0	143
			1.4%	1.4%	0.0%	20.3%	0.7%	9.1%	3.5%	1.4%	7.7%	51.7%	2.8%	0.0%	
	清水上遺跡	Ⅳ(大木8a並行)期	9	1	0	90	9	15	14	8	1	75	14	1	237
			3.8%	0.4%	0.0%	38.0%	3.8%	6.3%	5.9%	3.4%	0.4%	31.6%	5.9%	0.4%	
	中道遺跡	Ⅴ(大木8b並行)期	3		2	9		1			3	44	2	1	65
			4.6%	0.0%	3.1%	13.8%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	4.6%	67.7%	3.1%	1.5%	
	城之腰遺跡	Ⅵ(沖ノ原式)期	2		0	6	1	0	0	8		24	20		61
			3.3%	0.0%	0.0%	9.8%	1.6%	0.0%	0.0%	13.1%	0.0%	39.3%	32.8%	0.0%	
	中道遺跡	Ⅵ(沖ノ原式)期		1	4	2						7			14
			0.0%	7.1%	28.6%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	
	城之腰遺跡	Ⅶ(三十稲場式)期	2		4					1		4	0	1	12
			16.7%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	8.3%	0.0%	33.3%	0.0%	8.3%	
	中道遺跡	Ⅶ(三十稲場式)期						1					1	1	3
			0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	33.3%	
	城之腰遺跡	Ⅷ(南三十稲場式)期	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	7
			28.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	71.4%	0.0%	0.0%	
	中道遺跡	Ⅷ(南三十稲場式)期	2	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0	6
			33.3%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	16.7%	0.0%	
ii地域	五丁歩遺跡	Ⅲ(大木7b並行)期	2	0	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	6
			33.3%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	
	五丁歩遺跡	Ⅳ(大木8a並行)期	1	0	1	47	9	68	0	1	17	50	4	0	198
			0.5%	0.0%	0.5%	23.7%	4.5%	34.3%	0.0%	0.5%	8.6%	25.3%	2.0%	0.0%	
	原遺跡	Ⅳ(大木8a並行)期	0	0	0	1	0	0	1	1	0	2	1	0	6
			0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	16.7%	16.7%	0.0%	33.3%	16.7%	0.0%	
	万條寺林遺跡	Ⅴ(大木8b並行)期	0	0	1	9	0	1	0	1	2	21	4	0	39
			0.0%	0.0%	2.6%	23.1%	0.0%	2.6%	0.0%	2.6%	5.1%	53.8%	10.3%	0.0%	
	原遺跡	Ⅴ(大木8b並行)期	7	0	1	60	3	4	3	9	75	150	42	0	354
			2.0%	0.0%	0.3%	17.0%	0.8%	1.1%	0.8%	2.5%	21.2%	42.4%	11.9%	0.0%	
	万條寺林遺跡	Ⅵ(沖ノ原式)期	6			1				1	1	52	1	3	62
			9.7%	0.0%	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	1.6%	1.6%	83.9%	1.6%	4.8%	
	原遺跡	Ⅵ(沖ノ原式)期	42		26	150	3	17	11	30	194	467	110	1	1050
			4.0%	0.0%	2.5%	14.3%	0.3%	1.6%	1.1%	2.9%	18.5%	44.5%	10.5%	0.1%	
	万條寺林遺跡	Ⅷ(南三十稲場式)期	2	0	2	3	0	0	0	1	2	50	1	0	61
			3.3%	0.0%	3.3%	4.9%	0.0%	0.0%	0.0%	1.6%	3.3%	82.0%	1.6%	0.0%	
iii地域	城林遺跡	Ⅲ(大木7b並行)期	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	3
			0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	
	堂尻遺跡	Ⅲ(大木7b並行)期	1	0	0	7	0	0	0	0	0	3	0	0	11
			9.1%	0.0%	0.0%	63.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	27.3%	0.0%	0.0%	
	道尻手遺跡	Ⅲ(大木7b並行)期	0	0	0	4	0	0	0	1	0	6	0	1	12
			0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	8.3%	0.0%	50.0%	0.0%	8.3%	
	道尻手遺跡	Ⅳ(大木8a並行)期	4	0	0	25	4	0	0	3	0	27	4	3	70
			5.7%	0.0%	0.0%	35.7%	5.7%	0.0%	0.0%	4.3%	0.0%	38.6%	5.7%	4.3%	
	笹山遺跡	Ⅴ(大木8b並行)期	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2	1	0	5
			0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%	40.0%	20.0%	0.0%	
	森上遺跡	Ⅴ(大木8b並行)期	0	0	0	43	3	0	0	3	0	52	4	0	105
			0.0%	0.0%	0.0%	41.0%	2.9%	0.0%	0.0%	2.9%	0.0%	49.5%	3.8%	0.0%	
	道尻手遺跡	Ⅴ(大木8b並行)期	3	0	0	14	1	0	0	2	1	24	1	0	46
			6.5%	0.0%	0.0%	30.4%	2.2%	0.0%	0.0%	4.3%	2.2%	52.2%	2.2%	0.0%	
	道尻手遺跡	Ⅵ(沖ノ原式)期	5	0	0	22	3	0	0	3	0	43	3	0	79
			6.3%	0.0%	0.0%	27.8%	3.8%	0.0%	0.0%	3.8%	0.0%	54.4%	3.8%	0.0%	
	笹山遺跡	Ⅵ(沖ノ原式)期	2	0	0	5	0	0	1	0	0	4	1	0	13
			15.4%	0.0%	0.0%	38.5%	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	30.8%	7.7%	0.0%	
	道尻手遺跡	Ⅷ(南三十稲場式)期	1	0	0	8	0	0	0	2	0	15	0	0	26
			3.8%	0.0%	0.0%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	57.7%	0.0%	0.0%	

第 78 表　細別時期別石器組成表

6．石鏃について

縄文時代中期から後期における石鏃の形態については、田中靖が信濃川中流域を対象とした遺跡出土資料の集成から、時期的な画期がある点が指摘されている（註 436）。以下に概要をまとめる。

① 縄文時代中期前葉から後葉の石鏃は、基部に深い抉り込みが施された凹基無茎石鏃が主体であり、中でも側縁がゆるやかな弧状をなすものが特徴的な形状である。

② 縄文時代後期初頭から前葉の石鏃は、平基無柄の中でも側縁が直線状となるものや緩く内湾するものが量産され、前段階と同様の形態のものも含め形態が多様化する傾向にある。

報文中ではこうした結果を踏まえ、脚部の抉りの深さを基部分類の基準として、帰属時期の特定された遺構出土の石鏃を数量比の上で検討をおこなった。対象資料数が 23 点と極めて少数であったものの、田中の指摘と同様の内容の結果があらわれた。ここでは信濃川上流地域での遺跡出土資料との比較から、当該地域における本遺跡から出土した石鏃の時間的な位置づけを検討するものとしたい。

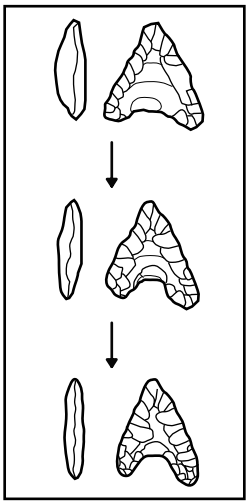
（1）資料比較（第 154 ～ 156 図）

今回、比較検討に用いたのは、時期が明確な遺構出土資料 62 点の資料であり、そのうち 45 点を第 155 図に示す。以下、これらの資料比較から各時期の石鏃の様相についてみていきたい。

Ⅱ期（大木 7 a 並行）の石鏃は津南町下モ原Ⅰ遺跡に出土例がある（1 ～ 4）。石器製作残滓を一括廃棄したと考えられる土坑出土資料（註 437）で、石鏃は欠損資料を含め 10 点出土した。形態が認識できる 4 点のうち A1 類（脚部を深く作出するもの）は 3 点確認された。石材は硬質頁岩と頁岩が使用している。

Ⅲ～Ⅳ期（大木 7b ～ 8a 式並行）では魚沼市清水上遺跡（9 ～ 10）、塩沢町五丁歩遺跡（6 ～ 8・12 ～ 13）、津南町道尻手遺跡（16 ～ 19）の遺構出土資料があり、集落の継続時期からみてもノイズの少ない資料と考えられる。確認された資料 20 点のうち 17 点に A1 類が認められる。A1 類は脚部の作出が表裏面からの急角度の剥離（または折断に近い加工）を加えたのちに脚部に細部調整を施すものが多く、表裏面の中央に素材面を残す資料などからもそうした加工が容易に観察される（第 154 図）。形態的には前時期と比較して側縁が内湾することにより基部幅が狭くなる傾向があり、脚部の抉りの形状も器幅が狭くなることによって深く内湾するものが多い傾向がある。石材は頁岩のほか黒曜石、チャートなどが使用される。

Ⅴ～Ⅶ期（大木 8b 式並行～三十稲場式）に帰属する資料は塩沢町万條寺林遺跡（35 ～ 37・43 ～ 45）、十日町市笹山遺跡（26・32）、道尻手遺跡 9 号住居跡（24・25）、小千谷市城之腰遺跡（38）、塩沢町原遺跡（28）に出土例がある。形態の識別可能な資料のうち A1 類は 20 点中 2 点のみ確認された。形態的には側縁が大きく内湾する幅広のもの（21 ～ 22・27 ～ 29）と、側縁と基部を直線的に整形するもの（23 ～ 24・31・35 など）がみられ、前者が比較的粗雑な剥離によって構成されるのに対し、後者は浅斜度の深い剥離によって構成される傾向がある。脚部は急角度の細部調整の連続によって浅く内湾するものが多く、意識的な抉りの作出によって脚部を成形するものは少ない。ほかにⅦ期に帰属する石鏃の基部形態には円基鏃（36）や凸基鏃（37）などの形態が少数ながら確認され、形態の多様化（田中 1991）する傾向を示すと考えられる。

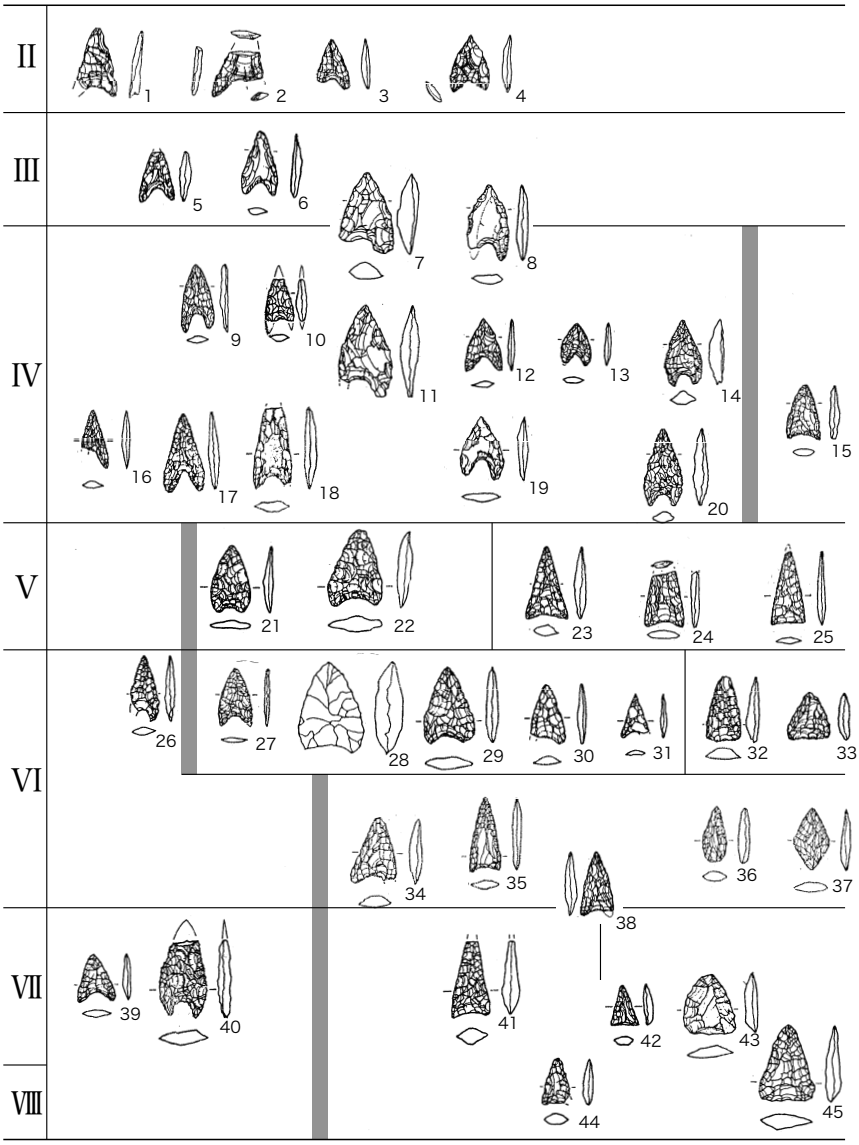


第 154 図　石鏃（A1 類）製作工程模式図

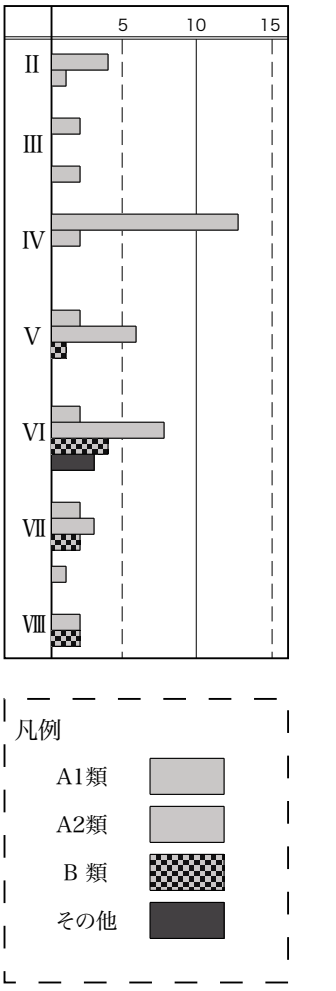
（2）小結

今回の資料比較から、A1 類（脚部の抉りを深く作出する）石鏃の数量が低下するⅤ期以降に凹基無茎石鏃の形態上の画期があったと考えられる。前述した田中が指摘する画期では、縄文時代後期初頭から前葉としており、小稿とは時間的な隔たりがあるが、これは地域的な差異というよりも比較対象資料の時間軸が遺構時期を基準とした結果、時間軸に差が生じたものと考えられる。

最後に基部の形状変化の要因について考えてみたい。まず装着方法の差異という点でみると、抉りの深度による差異と黒色付着物（アスファルトなど）の付着状況の差異が一致しないことから、装着方法に変化があったことは考えにくい（註 438）。他の要因を考えた場合、Ⅲ―Ⅳ期からⅤ―Ⅶ期の使用石材にチャートや流紋岩の占める割合が高くなる傾向があり、こうした点を考慮するならば、使用石材の変化によって脚部の深い抉りの作出が困難になるといった製作上の問題である可能性が考えられる。



第 155 図　石鏃基部形態変遷図



第 156 図　基部形態別数量グラフ

7．打製石斧について（第 157・158 図）

本遺跡の打製石斧は完形品 721 点のうち A 類(片面加工)が 292 点､B 類(両面加工)が 406 点を占める。また C 類（分銅形を呈するもの）についても 7 点と僅かながら出土が認められる。

大工原豊は、打製石斧の製作技術が打面と作業面の関係から側縁加工の加撃角度に現れるものとしている（註 439)。先学の指摘を踏まえるならば、本遺跡での打製石斧の形態的な多様性は、製作技術の違いによって形状の異なる複数の形態の打製石斧が混在した結果と推測される。したがって、新潟県内での山間地域に打製石斧の出土が多い状況を鑑み、信濃川上流地域での地域的特徴を有する時間軸と空間軸それぞれの広がりによってみられる様相についてまとめておきたい。なお当該地域での打製石斧の様相をまとめるにあたり、先の大工原の指摘する内容を踏まえ、資料比較の視点を第 157 図に図示する。

Ⅲ―Ⅳ期（大木 7b ― 8a 式並行期） 三条市曲谷 E 遺跡、魚沼市清水上遺跡、塩沢町五丁歩遺跡、津南町城林遺跡、堂尻遺跡、道尻手遺跡の資料があげられる（第 158 図)。当該地域での打製石斧のバリエーションは本時期にほぼ出揃う。以下報文の類型に沿って特徴的なものを簡単にまとめる。

A類 ： 腹面を打面とした通常剥離によって側縁を成形するもので、素材の厚さによって急角度の大形剥離が連続するものや、ステップ状を呈する剥離面が連続するものなどがみられる。

B1 類：薄手の素材に対し両面からの二次加工によって成形するもので、側縁加工は薄手の素材または背腹両面を打面として浅角度の大形剥離によって器厚を減じた後、両側縁の両面に短形の剥離を連続することによって成形するものである。

B2 類：厚手の素材に対し両面からの二次加工によって成形するもので、側縁加工は薄手の素材または背腹両面を打面として浅角度の大形剥離によって器厚を減じた後、両側縁の両面に短形の剥離を連続することによって成形するものである。

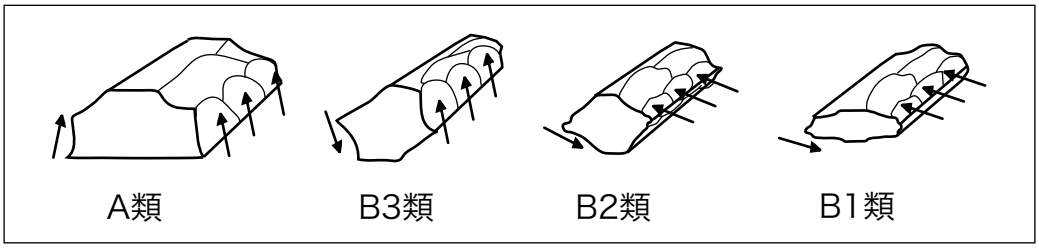
B3 類：A 類と同時期の遺構に伴う資料に、厚手の素材の背腹両面を打面として急角度からの通常剥離によって側縁を成形するもの。

A 類は下別当遺跡で「茄子型」、森上遺跡で「石篦」、五丁歩遺跡で「片刃打製石斧」など、他の打製石斧とは形態上区別して呼び分けられたもので、津南町、十日町、塩沢町など県南部に位置する ii iii 地域に主たる分布が認められる（註 440)。B3 類は打面と作業面とのなす加撃角度や剥離面形状、素材形状において A 類と共通し、製作技術という面では A 類と近い関係と考えられる。主たる分布は上記地域のほか、下田村曲谷 E や栃尾市栃倉遺跡など信濃川中流域沿岸の山間地域までの広い範囲に認められる。A 類および B3 類の打製石斧が､Ⅲ－Ⅳ期の中越地域に特徴的な打製石斧の製作を示すものといえる。一方、B1 類や B2 類はこの時期には極少数しか認められず、清水上遺跡など少数の遺跡で特徴的にみられるものである。なお、清水上遺跡出土資料中に、片岩質の石材を素材として側縁に対し垂直方向からの加撃によって側縁を作出する「垂直打撃技法」（註 441）がみられた。他の地域と素材の選択性の差異があったことが窺える。

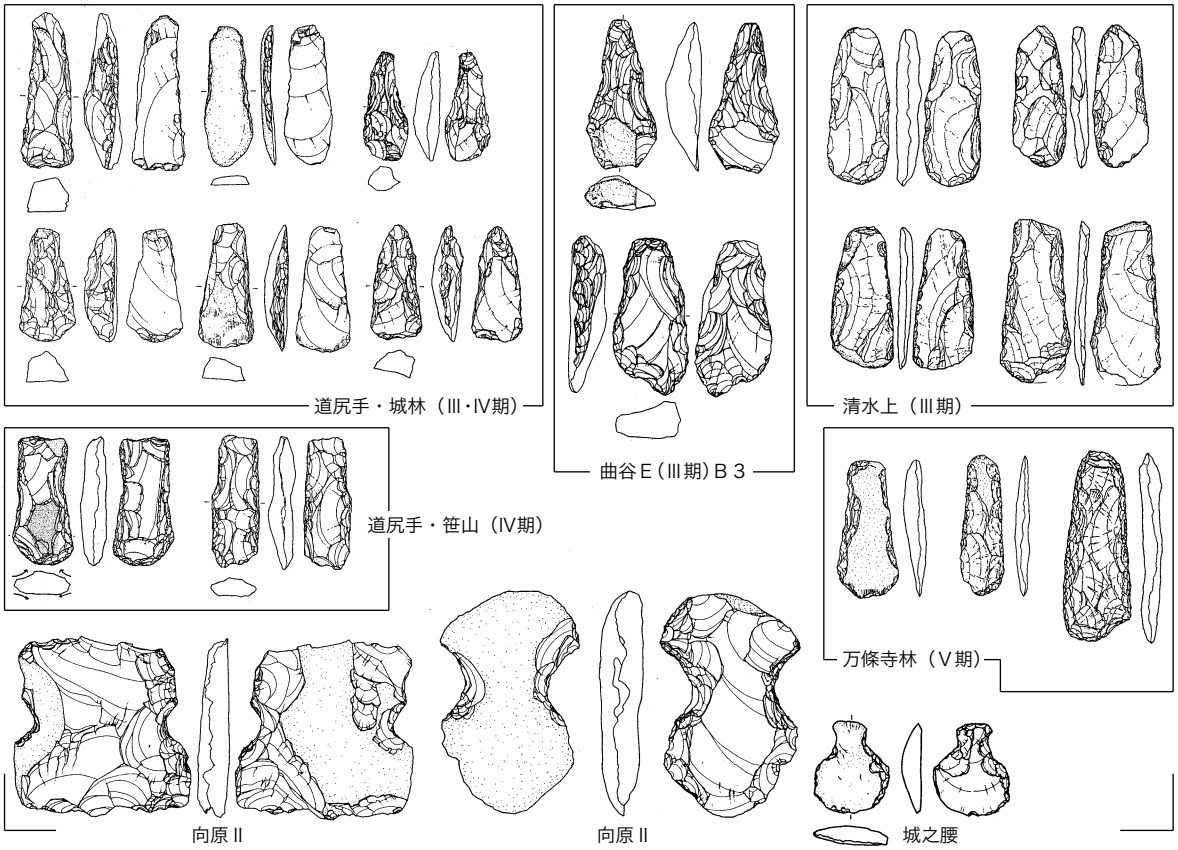
Ⅴ期（大木 8b 式並行期） 万條寺林遺跡、道尻手遺跡の資料があげられる。本時期の打製石斧は、前時期に主体的な A 類が森上遺跡第 1 号住居で 43 点中 7 点、B3 類は栃倉遺跡で主体的に残る程度で、当該地域で少数の存在となり、前時期の清水上遺跡例に類似する両面加工の打製石斧（B1・B2）が大半を占める。このことから、Ⅴ期は ii iii 地域における打製石斧の製作上の画期と捉えられる。

Ⅵ期（沖ノ原式期）　当該期の資料は原遺跡、笹山遺跡、道尻手遺跡があげられる。実測図を見る限り、前時期と同様のものが占めると判断するが、本遺跡の資料中にⅤ期までにはみられない「垂直打撃技法」によるものが観察された。また実測図でみる限り、笹山遺跡出土例にも該当すると考えられるものが確認されていることから、Ⅴ期―Ⅵ期に打製石斧製作の画期があった可能性がある。周辺遺跡での類例が確認困難なため、今後の資料の蓄積を期待したい。

分銅形打製石斧（C 類）　当該地域での出土例には塩沢町原遺跡、万條寺林遺跡、小千谷市城之腰遺跡、十日町市向原Ⅱ遺跡などがあげられる。概ねⅥ期～Ⅷ期の遺跡包含層からの出土であるため細別時期までは特定できないが、当該地域での分銅形打製石斧（C 類）の発生は、縄文時代中期末葉から後期前葉までの時間幅の中に求められる。当該地域の分銅形打製石斧は、関東でみられるような抉りが緩く内湾するものや、深い抉入部を作出する形態のほか、上端が小さく瓢箪の形状を呈する関東地方でみられないものも存在する。このことから、かなり短期間のうちに在地化したものと推測される。



第 157 図　打製石斧類型別二次加工模式図



第 158 図　打製石斧の時期的形態

8．まとめ

本遺跡が立地するiii地域（魚野川合流付近から上流の信濃川流域）は、周辺遺跡との比較から縄文時代中期から後期に至るまで打製石斧と磨石類を多量に保有する器種組成を継続した地域と位置づけられる。このことから、本遺跡における打製石斧と磨石類の突出した数量は、時期別の遺構出土石器の様相でみたように、長期にわたる同様の器種の組み合わせが長期間維持、累積した結果を示すものと推測される。

こうした様相は、信濃川上流地域の中でⅰⅱ地域との比較によって相対的な特徴として導き出された結論である。したがって、これまで述べてきた内容についてまとめ、あらためて当該地域における本遺跡の位置づけを確認しておきたい。

ⅰⅱ地域とiii地域では、Ⅴ期以降の打製石斧の保有数と石器組成に占める採集・加工具の比重の変異幅において著しい差異が認められたが、器種構成の面でも三脚石器と板状石器、石錘を一定量保有するⅰⅱ地域と、ごく少数のみ保有するiii地域の間に差異が認められる。こうした差異は、ⅰⅱ地域―三脚石器・板状石器の保有、ⅰ地域―石錘の保有という形がⅢ期段階ですでにみられ、Ⅴ期以前からⅰⅱ地域とiii地域との間に器種レベルでの地域差があったことが窺われる。こうした地域差をより積極的に解釈するならば、それぞれの地域で異なる生態環境への適応として、特化した器種構成と考えられるのではないだろうか。したがって、採集・加工具主体の石器組成がiii地域で縄文時代後期前葉までほぼ変化なく継続したことは、生態環境によって特化した打製石斧優位の器種構成が継続した結果と推測する。

ⅰⅱiii地域の様相から、信濃川上流地域での採集・加工具の組成に占める割合や形状の時期的変動は地域単位で推移する傾向が高い。これは、打製石斧が自然環境に依存する天然資源獲得に使用された道具として利用された点、在地石材を素材とする石器である点に地域的な形状的な差異を促す一因があったと予想される。また、打製石斧の減少は打製石斧と共通の素材選択と加工技術を有する板状石器や三脚石器の数量の増減にも深く関係したことが推測される。一方、石鏃は遺構出土資料の検討からⅤ期以降に基部形状に変化があったと考えられ、信濃川下流域から上流域の広い範囲に分布したことが推察される。こうした広範な地域に及ぶ器種形状の変化は先の打製石斧の様相とは異なり、自然環境に左右されない器種であったと考えられる点、素材となる石材が広範囲から供給される点に関係すると推測される。そうした意味で、石鏃と同様に広範な地域的に及ぶ器種形状の共通性を示すものに磨製石斧があげられる。本遺跡での出土資料の大半を占める蛇紋岩類を素材とする定角式磨製石斧は素材となる石材や形状の斉一性などで石鏃との類似点は多い。一方、特定地域での製作が考えられる蛇紋岩製磨製石斧があるのに対し、当該地域では斑レイ岩や緑色凝灰岩などの在地石材を用いた磨製石斧が一定数出土し、基部横断面形が長楕円形となる傾向があるなど、蛇紋岩製磨製石斧とは異なる形態的な特徴が認められる。こうした分布は信濃川上流地域が蛇紋岩製磨製石斧の分布の周縁にあるためと推測されるが、当該地域での磨製石斧の未成品の出土は少なく、製作遺跡の存在は知られていない。本遺跡より出土した多面体を呈する敲石の存在を踏まえるならば、当該地域において敲打成形と研磨成形によって製作される磨製石斧や石皿、石棒などの磨製石器の製作がおこなわれた可能性は高いと考えられる（註442）。

信濃川上流地域での石器の様相について雑駁ながら帰属時期や地域性についてまとめたが、細別時期での様相はまだ不明な点が多く、今後の良好な資料の追加に期待したい。

第６節　総　括

道尻手遺跡は、中津川と信濃川の合流点から北東約 2.5km の位置する貝坂Ⅱ面に営まれた縄文集落である。その活動は、出土した土器からおおよそ、Ⅰ期～XI期に区分された。断続的な活動や継続的な活動が累積していた。継続的な活動は、縄文時代中期の大木7b式並行期～後期の加曽利Ｂ１式並行期であった。

この時期は、C14 暦年代較正で補足すれば、約 5,300 年～ 3,400 年前（註 443）である。また、縄文時代の初源は約 16,000 年前であり、縄文時代から弥生時代への移行期は 2,750 年～ 2,400 年前であることから、縄文時代は約 13,000 年の長い時間であった（註 444）。

この長い縄文時代は、１期：土器出現期・２期：草創期・３期：早期～前期前葉・４期：前期中葉～後期前葉・５期：後期中葉～晩期の文化画期で区分される。これらの文化は等質の時間幅や等質の文化内容では、無かったと推測される。したがって、現在、時間の単位として「土器型式」を捉えて、編年作業を展開している。しかし、縄文時代１期～２期、３期～４期、５期の各時期で、その社会構造が違うと判断されることから、同じ土俵で各時期の「土器型式」を議論できるかについては、慎重な判断が今後必要であろう。

さて、道尻手遺跡の継続的な生活はⅢ期～IX期として捉えられる。この期間は約 1900 年間あり、その間に気候変化が予測され、温暖期から冷涼期に変動する時期に当たる（註 445）。

ここでは、火焔型土器を使用していた大木 8a 式並行期古段階に時間を設定して、道尻手集落で暮らしていた縄文人の活動を、調査成果をもとに探ることにしたい。

その前に、縄文時代集落論の第１人者である佐々木藤雄は、縄文集落研究史に触れる中で、祖である和島誠一の『原始集落の構成』と『横浜市史』に触れ、「中央広場を伴う定型的集落の存在と一体となった共同規制の問題、前期以降顕著となる集落規模の拡大と労働力＝人口の増大、協業や分業の一定の進展に伴う生産力の発展と定住性の高まり、住居形態・規模の変化と大形住居の性格、女性土偶や埋葬様式のあり方等」「大形石皿や火焚場をもつ共同広場、貝塚などのごみ捨て場、湧水池と飲み水、それに地形から推測される海岸への降り道や船置場」などに視点を向けた輪島集落論に対して、「交差する立体的・景観的な分析視点」をもち、「生業形態や生産用具のあり方に対する積極的な問題意識」から「生産論的視座以外のものをも含めて、より具体的かつ論理的であり、何よりも問題意識の明晰」があると評価した（註 446）。

道尻手遺跡の活動を語る場合、近接する道下遺跡や堂尻遺跡との関係を抜きにできない。それは、「遺跡」として括られた仮定の範囲から飛び出し、当時の活動を具体的にイメージして組み立てる必要がある。当時、中津川や信濃川本流に遡上した鮭や鱒を、捕獲する場合には最短で約 2.5km の距離があり、正面段丘面を横断し、大割野Ⅰ面を駆け抜けて、ようやく水辺にたどり着くのである。言い換えれば、道尻手集落は大河の辺に営まれていない集落なのである。彼らの食料リストの中で、鮭などの遡上性魚類の占める割合は不明であるが、捕獲して、加工することを想定するならば、集落までの移動距離があることから、近傍に加工施設が営まれた可能性がある。そのような活動痕跡が遺跡と認識できればいいのであるが、今のところ確認することができない。

道尻手集落に住居が建ち並ぶ以前には、近傍に道下集落があり、段丘沿いに住居が点在していた。その後、道尻手集落は、広場を意識し、その周囲に住居を建設し始めると同時に、後背地の浅沢地形を選び、廃棄物の捨て場を形成し始めるのが、大木 7b 式並行期古段階である。その形成初期に、有孔鍔付土器

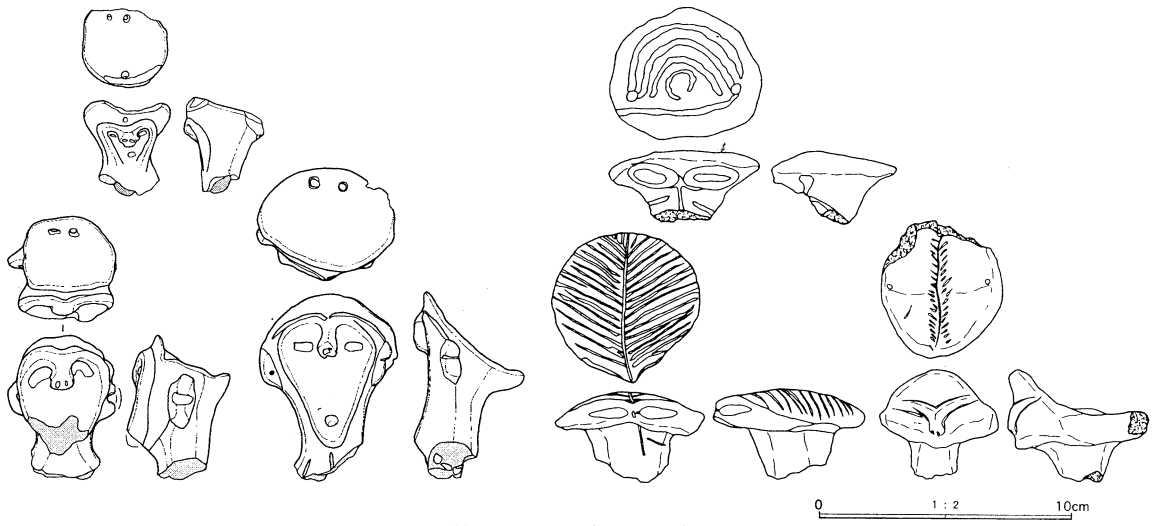
を二つ並べ、廃棄した（発掘では隣り合わせて潰れた状態であった）。その背景には、儀礼があったのであろうか。この段階の住居に石囲炉はなく、まだ地床炉であった。また、道尻手集落から見下ろせる一段下の段丘に堂尻集落があり、数軒の住居が建ち並んでいた。道尻手集落から堂尻集落へ行くには、大清水から流れ出ている小川を渡って行かなくてはならない。この堂尻集落と道尻手集落の関係（社会集団的背景・貯蔵システム的関係など）はいかなるものであったのであろうか。

火焔型土器が盛んに使用された大木 8a 式並行期古段階から道尻手集落には、長方形の住居と卵形の住居が建ち並ぶ。長方形の住居は地床炉のままであるが、卵形の住居には小形の円形石囲炉が床の中心部に作られた。周辺を眺めると、北西と南南西、そして南南東から煙が立ち上っている。北西にあるムラは、信濃川の畔にある外丸遺跡、南南西の高台には沖ノ原遺跡、そして南南東の高台には堂平遺跡がある。さらに、中津川渓谷を登り詰めると大赤沢遺跡があり、上州のムラムラとの中継機能を担っているようである。道尻手集落から堂平集落まで直線で約 4 km である。３段の段丘崖を上らないとたどり着かない。その比高差は約 220 mある。途中に下モ原Ⅱ遺跡があり、１～２軒の小規模なムラである。

道尻手集落や外丸集落は、近傍の段丘崖や山並が障壁となって遠望することは難しい。しかし、高位段丘面に形成された堂平集落や沖ノ原集落は、北西に妙高山、北北西に米山、北東には越後三山が眺望できるのである。

道尻手集落を概観すれば、二種の家が建ち並ぶが、墓はどこにあるのだろうか。長岡市岩野原遺跡のような大型のフラスコ状土坑は見当たらない。穴倉はどうしたのであろうか。

また、数多くの土偶が作られる。出土する土偶は破損しており、大半がごみ捨て場（廃棄帯）から出土した。多くの土器片や破損した石器などと共に出土する。その土偶を形態で分類すると９種の土偶が存在したことがわかった。土器の多様性と同様である。土偶の一番の特徴は、頭部が平坦であることである。同じ、火焔型土器を保有する集落が、遠く村上市にある。三面川の支流である門前川右岸の低位段丘面に営まれた高平遺跡である（註 447)。ここからも多量な土偶が出土しており、その構成に違いがある（註 448)。頭部を平坦に作る類似性があるものの、基本的な違いがある（第 159 図)。この違いは、集落が営まれる地理的な位置が背景にあり、地域文化と深く関連していると言える。ただし、保有する



第 158 図　南北の土偶

火焔型土器には大きな違いが認められない（註 449）のは、なぜなのであろうか。

また、少量であるが土製耳飾が出土した。それらの作られた時期を確定することは難しいが、周辺地域の研究を踏まえれば、火焔型土器を保有していた時期にも、確実に土製耳飾は製作され、装着されていた。研究史を紐解けば、日本で本格的な土製耳飾が研究されたのは長岡市馬高遺跡であった（註 450）。その後、縄文農耕論の提唱者である藤森栄一は、「土製耳飾が中期の地域性を顕著に反映する資料」であることを評価し、「縄文時代中期における、越後地方の画期的な文化様相を証明する論拠の一つとして、滑車形耳飾の出現意義」を熱弁したのであった（註 451）。周辺地域出土の土製耳飾を概観すれば、土偶と同様にいくつかの類型に分類され、それらの構成に違いを見出すことができる。このような基礎的な作業を進めることが、近い将来、火焔型土器文化の論を展開する足がかりになる。

出土した土器は多様である。それは器形や文様という側面だけでなく、大きさも多様であるという機能論的側面を強調したい。大・中・小・最小に分類できる土器の機能と用途は、そこで営まれていた生活に直結する問題なのであろう。

石器は、打製石斧と石皿・磨石のセットが多量に出土している。その打製石斧の製作技術には変化があり、中期末前後に側面調整技術として垂直打撃技法（註 452）が導入されたようである。また、打製石斧の形態は、撥型と短冊型を基本としていたが、分銅型が後期前葉前後に入り込む状況が資料操作から判明した。今後、検討資料を増加させて、量的保証の中で、再論する重要な課題である。

また、板状石器や三脚石器の少なさが、本集落の特徴である。隣接する十日町市城倉遺跡や塩沢町原遺跡では三脚石器が、長岡市岩野原遺跡では板状石器が多量に出土する。これらは地域的特徴でなく、その遺跡の性格と立地環境に大きく左右されるのであろうか。

道尻手遺跡と堂平遺跡が約 4 km、堂平遺跡と沖ノ原遺跡は 3.5km、沖ノ原遺跡と道尻手遺跡は約 3.5km である。道尻手遺跡と堂平遺跡は、信濃川と清津川・中津川に挟まれた台地に位置する。この台地には、火焔型土器が使用された時期に、下モ原Ⅱ遺跡・午肥原遺跡、芋川原遺跡が分布する。この位置を線で結び、中心点を仮定し、最大距離で円を描くと約 12.5km^2 の面積に、拠点集落 3 ヶ所と小規模集落 2 ヶ所が集中している。

関東地方における拠点集落の分布を調べた谷口康浩によれば、「拠点集落間が 4 km 未満のケースが稀れ」であり「2 つの拠点集落が、3km 以内の至近距離で隣接している場合」「双子集落と呼ぶ」という（註 453）。道尻手遺跡などは、この至近距離分布のケースである。

ここに示した拠点集落 3 ヶ所、小規模集落 2 ヶ所は、少なくとも大木 8a 式並行期古段階に営まれていた。人口は算出する根拠がないが、それなりの人口が安定した定住生活を営みながら、その人口の多さに匹敵する文化力が、土偶や石棒などから推察できる高度な精神文化を形成したと推測される。

この火焔型土器が使用された大木 8a 式並行期に営まれた道尻手遺跡群は、12.5km^2 の狭い区域に近接分布する特徴がある。その周囲には、標高 180m の河川敷から 2145m の苗場山山頂まで、約 120km^2 以上の生態環境がダイナミックに広がる。しかしながら、12.5km^2 の狭い範囲に近接し会う大小 5 つのムラを構成する住民を、支えた食料獲得方法と加工・貯蔵システムがどのように構成・展開していたのであろうか。この縄文文化第 4 期に位置付けられる中期中葉期の生活様式を支えた社会への接近法は、土壌水洗い選別と炭化物同定作業、そして石器使用痕研究からのアプローチなのであろう。

註　釈

註１　一般的に河岸段丘と呼ばれているが、中村一明によれば河成段丘と呼ぶのがふさわしいという。ここでは河岸段丘の用語を使用した。
中村一明　1966 「河成段丘の一つのでき方　－信濃川の例－」『第四紀研究』５

註２　苗場山麓（通称「第一地区」）は、平成６年度に完了した。昭和 50 年度には苗場山麓第二開拓建設事業が採択され、平成 11 年度に完了した。平成４年度には国営農地再編パイロット事業（平成７年度から事業名が変更され国営農地再編事業という）苗場地区が採択され、平成 15 年度に完了した。

註３　信濃川上流部の右岸段丘に当たる約 16,000ha を対象とした国営大規模総合開発パイロット事業が計画され、昭和 43 年から実施された。長野県との境にある志久見川以北から十日町市川治川以南の広大な地域である。この地域を以下の通りに、三分割した。志久見川から中津川の間を第一地区として昭和 48 年に着工した。中津川から清津川の間を第二地区と呼び、昭和 50 年に着手した。清津川から川治川の間を第三地区と呼び、計画･調査は実施されたが着工されなかった。

註４　石沢寅二ほか　1975 『苗場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書　第二地区内（１）』 津南町教育委員会
石沢寅二ほか　1976 『苗場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書　第二地区（第二次）』 津南町教育委員会

註５　前掲註４の（石沢ほか　1976）を参照願う。

註６　岡　修司・佐藤雅一　1998 『堂尻遺跡群試掘調査報告書　国営農地再編パイロット事業に伴う遺跡確認試掘調査及び発掘調査報告書　寺田上Ａ遺跡　道尻手の塚　正面ケ原Ｂ遺跡』 津南町教育委員会

註７　信濃川段丘グループ　1968 「新潟県津南地域の第四系」新潟大學教育学部高田分校『研究紀要』13

註８　佐藤雅一・宮田千里　2000 「遺跡分布から読み取れる情報」『新潟考古学談話会会報』第 22 号

註９　津南町の石材分布調査の結果は、堂尻遺跡群（津南町教育委員会　1998)、下モ原Ｉ遺跡（津南町教育委員会　2000)、などで報告されている。

註 10　川原の石調査グループ　1977 「信濃川水系の石をたずねて」『新潟の自然　第３集』新潟の自然刊行委員会

註 11　この段丘面には DKP・AT・As-K の広域テフラが堆積している。
渡辺秀男　2001 『信濃川段丘群の形成と構造運動の考察』（自費出版）

註 12　前掲､註６文献の P54 に所収。11T から３基のフラスコ状土坑が確認され､１基が半截されたほかは盛土保存されている。

註 13　水田の「切り盛り工法」は、傾斜地の高い部分を削平して低い方に盛り土して平坦面を作出する工法である。

註 14　本遺跡の土器の分類は、当初土器の整理を担当していた高山茂明の分類基準を引き継いで、阿部が再検討を加えて作成した。その後、佐藤・高山・阿部の３者で数回にわたる検討会を通して、内容を吟味した。

註 15　清藤一順　1996 「関山式土器」『日本土器事典』雄山閣

註 16　今村啓爾　1985 「五領ケ台式土器の編年」『東京大學文学部考古学研究室研究紀要』４

註 17　丹羽　茂　1971 「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』第 12 号、
丹羽　茂　1981 「大木式土器」『縄文文化の研究４　縄文土器Ⅱ』雄山閣

註 18　寺崎裕助　1996 「第Ⅶ章まとめ　１土器」『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査事業団

註 19　高橋　保　1992 「６まとめＢ土器について」『関越自動車道関係発掘調査報告　五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会

註 20　松本　茂　1991 「第３章　考察　第１節　縄文時代の遺物について　土器」『法正尻遺跡』福島県教育委員会

註 21　山口逸弘　1989 「３房谷戸遺跡における縄文時代中期前半の土器様相」『房谷戸遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団

註 22　寺内隆夫　1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター

註 23　勝坂式土器については、黒尾の３細分（黒尾　1995）を参考にした。
黒尾和久　1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（Ⅰ)」『論集　宇津木台』第１集

註 24　西村正衛　1972 「阿玉台式土器編年的研究の概要」『早稲田大学文学研究科紀要』第 18 輯

註 25　加藤三千雄　1989 「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観　中期』小学館

註 26　前掲註 17 に同じ。

註 27　前掲註 21 に同じ。

註 28　金子拓男　1996 「馬高式土器」『日本土器事典』雄山閣、小林達雄　1989 「火炎土器様式」『縄文土器大観　中期』小学館
寺崎裕助　1989 「新潟県中越地方における縄文中期後半の土器について」『新潟考古学談話会会報』第３号、
寺崎裕助　1991 「火炎土器様式について」『新潟考古学談話会会報』第８号、など。

註 29　小島俊章　1974 「北陸の縄文時代中期の編年―戦後の研究史と現状―」『大鏡』第５号

註 30　前掲註 17 と同じ。

註 31　寺村光晴　1961 「第Ⅲ章　考察」『栃倉』栃尾市教育委員会、佐藤雅一　1999 「原遺跡の研究（2）　2．魚沼地方の縄文時代中期後土器群の検討」『新潟考古』第 10 号

註 32　沖ノ原式土器の編年は、佐藤雅一により、複数の類型が設定されている。
佐藤雅一　1999 「原遺跡の研究（2）　2．魚沼地方の縄文時代中期後半土器群の検討」『新潟考古』第 10 号
佐藤雅一　2003 「沖ノ原式土器について」『縄文セミナー　中期後半期の諸様相』縄文セミナーの会

註 33　前掲註 17 と同じ。

註 34　金子直行　1996 「加曽利Ｅ式土器」『日本土器事典』雄山閣

註 35　福島邦男　1996 「曽利式土器」『日本土器事典』雄山閣

註 36　有孔鍔付土器は、当初「鍔付有孔土器」と呼称された（藤森・武藤　1963）が、後に武藤によって「有孔鍔付土器」と改称されている（武藤　1970）。
藤森栄一・武藤雄六　1963 「中期縄文土器の貯蔵形態について―鍔付有孔土器の意義―」『考古学手帖』20
武藤雄六　1970 「有孔鍔付土器の再検討―八ケ岳南麓地方の起訴資料―」『信濃』22 － 7

註 37　「台形土器」は、新潟県内では出土数が少なく、ツベタ遺跡などで出土事例が見られ、時期的にも中期後半期ごろと考えられる。名称は、「器台」や「器台形土器」、「台状土製品」などと呼称されている。この種の遺物については、山梨県考古学協会主催の「土器から探る縄文社会」（2002）において集成や検討が行なわれている。

註 38　佐藤雅一　2001 「信濃川流域の浅鉢形土器について」『新潟考古』第 12 号

註 39　田中耕作　1989 「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観 後期 晩期 続縄文』第４巻　小学館、田中耕作　1990 「三十稲場式土器研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第５号

註 40　今村啓爾　1977 「称名寺式土器の研究（上）（下）」『考古学雑誌』第 63 巻第１・２号

註 41　南三十稲場式土器の編年は、２～３細分されている。
品田高志　2001 「Ⅴ総括」『十三本塚北遺跡』柏崎市教育委員会、
品田高志　2002 「新潟県における縄文前葉期の土器群」『第 15 回　縄文セミナー　後期前半の再検討』縄文セミナーの会
金子優子　2002 「奥三面における後期前半の土器様相」『第 15 回　縄文セミナー　後期前半の再検討』縄文セミナーの会

註 42　これらの一群は、堀之内２式期か加曽利Ｂ１式期に並行するのか見解が分かれている。
秋田かな子　1997 「“石神類型” 覚え書き」『東海大学校地内遺跡調査団報告』７

註 43　三仏生式土器は、加曽利Ｂ２～Ｂ３式に並行するとされている（国島 1988）が、加曽利Ｂ１式並行期の位置づけが問題である。
国島　聡　1988 「新潟県の縄文時代後期中葉の土器について」『新潟考古学談話会会報』第１号

註 44　原ひろみ　2000 「第１節　縄文土器の分類」『道下遺跡　縄文時代編』津南町教育委員会

註 45　長沢展生　1997 「第４章まとめ１．城林遺跡出土土器の編年学的考察」『午肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』津南町教育委員会

註 46　前掲註 19 と同じ。

註 47　前掲註 18 と同じ。

註 48　石原正敏　1998 「第Ⅴ章　総括　１．縄文時代　Ａ土器」『笹山遺跡』十日町市教育委員会

註 49　小熊博史　1998 「３遺物（１）縄文土器」『中道遺跡』長岡市教育委員会

註 50　藪下　浩・江坂輝弥・渡辺　誠　1977 「第４章遺物　第１節土器」『沖ノ原遺跡』津南町教育委員会

註 51　国島　聡　1990 「第Ⅵ章総括１城之腰遺跡の縄文時代中期末～後期前葉土器の編年」『関越自動車道関係発掘調査報告書城之腰遺跡』新潟県埋蔵文化財調査事業団

註 52　長沢展生　2000 「第Ⅴ章まとめ」『向原Ⅱ遺跡』松代町教育委員会

註 53　品田高志　2001 「Ⅴ総括　１十三本塚北遺跡の土器様相と時期区分」『十三本塚北遺跡』柏崎市教育委員会

註 54　長方形住居跡にともなう石組炉は主軸に沿って、２列に縁石を並べて二字状や（　）字状になるものが多い。これら２つの側辺に縁石を配する石組炉を「二側縁石組炉」と呼称したい。

註 55　長方形柱穴列は、現在では「掘立柱建物址」とも呼称されている。
坂上克弘・石井　寛　1976 「縄文時代後期の長方形柱穴列」『調査研究集録』第１冊　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

註 56　環状列石の定義は、直径が約 30 m～ 50 mほどの規模に列石が環状もしくは半円状にめぐるものを範疇とする。長径 10 m前後のものは、環状列石とは異なる遺構であり、例えば、群馬県天神原遺跡（安中市教育委員会　1994）や東京都田端遺跡（町田市教育委員会　1969）のような遺構は、「環状積石」と呼称する。また北海道のオクシベツ川遺跡（斜里町教育委員会　1980）などは中央に炉を有することから、住居跡であると考えられる。また長野県や群馬県などで、弧状に列石の事例があるが、これらが環状列石と同様なものとは言えない。１m前後の墓坑上に配する円形配石も配石墓

であり、環状列石と呼ぶことは適切ではない。

註 57　配石下の土坑覆土については、すべて水洗い選別を行った。選別では、5mm幅のメッシュの篩を用いた。水洗選別の結果、微小な土器片や石器や炭化物などが多く検出されたが、人骨などの骨類は確認されなかった。

註 58　道尻手 A 類は、魚沼地域の後期前葉を中心とする配石墓の特徴的な形態である。この形態の配石墓は、柳古新田下原 A 遺跡が初出であることから、「下原 A 型」と呼称した（阿部　1998）。

註 59　石材の鑑定は、十日町市理科教育センターの喜多孝行氏にお願いし、それに基づいて石材の名称と分類を設定した。

註 60　墓の認定基準については、本遺跡の場合、人骨の検出はなく、土坑覆土の記録がほとんどないため、墓坑の認定は確認面からの土坑の形状から行なった。まず、柱穴やフラスコ状土坑、陥穴状土坑と考えられるものを除いたものを対象として、平面形が楕円形もしくは円形を呈する浅い土坑で、長径1m～2mの規模の土坑を墓坑の可能性が高いものと判断した。しかし、重複が激しいこともあり、明確に墓坑の可能性を指摘できるものは少なかった。加えて、胎児や幼児の墓坑は小形のものと推定され、この基準では、墓坑として認定することは困難で、ほかにも墓坑が内在していると考えられる。

註 61　新潟県内の陥穴状土坑は、田海正義が形態分類を行ない、A ～ F 類の6つに分類している（田海　1999）。
田海正義　1999 「第4節　生業　第2項　狩猟」『新潟県の考古学』高志書院

註 62　県内のフラスコ状土坑の分類は、城之腰遺跡ではフラスコ状土坑は底径 150cm 以上のものをⅠ類、150cm 未満のものをⅡ類としている（北村　1991）。五丁歩遺跡のフラスコ状土坑は底径が1m前語以下のものを小型、1m以上のものを大型と分類している(高橋　1992)。清水上遺跡では、底径が 120cm 未満のものをⅠ類、120 ～ 160cm 未満のものをⅡ類、160cm 以上のものをⅢ類としている（加藤　1996）。これに平面形や確認面からの深度、断面形といった属性が加わる。このように、フラスコ状土坑の大形・小形の区分は各遺跡の報告書において、共通した基準がない。

註 63　この種の遺物集積区域についての呼称は、「土器捨て場」、「捨て場」、「土器塚」などがある。ここからは、土器のみではなく土製品や石器、石製品や有機質物が廃棄された場所であると推測されることから、「廃棄帯」と呼称する。

註 64　Ⅰ7グリッドの出土土器の分析は、当時調査員である高山茂明が行った。

註 65　土器の形態は、「器種」と「器形」の概念で捉える。「器種」は、深鉢・鉢・浅鉢・台付鉢・有孔鍔付土器・注口土器・蓋・台形土器、などに区分した。分類基準について、例えば、甲野勇が示した長谷川言人の分類基準（甲野　1976）がある。これによると、頸と胴との接する部分の幅が、横全長の 2/3 以上のものを甕、2/3 未満のものを壺とし、また鉢形土器の縦全長の 2/3 以上のものを深鉢、半ばから 1/3 ぐらいのものを浅鉢、1/3 に満たないものを皿と呼び、台の部分が発達して、その高さが縦全長の 1/3 内外に及んでいるものを高杯と区分している。また「器形」は器種ごとに分類し、突起や波状口縁の突出部分を除いた状態の土器の形を分類した。そのなかでも、中間的な器形もあり、その境界は明確ではない。

註 66　土器容量の計測方法は、藤村東男　1981 「土器容量の測定」『考古学研究』第 28 巻第3号、黒岩隆　1987 「縄文土器の大きさ」『東京考古』5、などがある。今回は、田中耕作が用いた算出方法により、道尻手遺跡の土器容量を計測した。土器容量の計測は、実測図から算出するため、実際の容量とは多少のずれが生じることが予想される。土器はほぼ完形のもの（A ランク）に加えて、低部を欠損するものや図上で外形を復元したもの（B ランク）を対象にしている。

註 67　土器胎土中に、土器片もしくは異なる粘土を含むものが認められた。特にⅢ期やⅣ期の土器に多く見られる。これは土器片が破砕されて混和材として用いられたと考えられ、仏語で「シャモット」と呼称される。本遺跡の資料については、すでに西田泰民が報告している（西田　2004）。詳細は付編6を参照。

註 68　煮焚の痕跡は、通常、コゲやスス、土器表面の二次的な被熱による剥落や劣化などにより確認される。

註 69　前掲註 15 と同じ。

註 70　前掲註 16 と同じ。

註 71　例えば、法正尻遺跡のⅡ群3類土器（SK415 など）やⅡ群4類土器と類似性が見られる。また「スワタイプ」や「諏訪式」などと呼称される土器群との類似性も認められる。
松本　茂　1991 「第3章考察　第1節縄文時代の遺物について　土器」『法正尻』福島県文化センター

註 72　前掲註 21 と同じ。

註 73　前掲註 22 と同じ。

註 74　前掲註 19 と同じ。

註 75　前掲註 24 と同じ。

註 76　前掲註 25 と同じ。

註 77　前掲註 17 と同じ。

註 78　前掲註 21 と同じ。

註 79　前掲註 28 と同じ。

註 80　研究者により見解が異なるが、おおむね大木８ａ式期から大木８ｂ式期に並行すると考えられている。例えば、小林達雄は４段階に区分し、大木８ａ式～大木８ｂ式に並行すると考えている（小林　1989)。寺崎裕助は、３細分して中・新段階を大木８ｂ式期にあてており（寺崎　1989)、また５段階に区分して、大木８ａ式の古から大木８ｂ式の新しいところまで存在するとしている（寺崎　1991)。

註 81　前掲註 29 と同じ。

註 82　前掲註 17 と同じ。

註 83　前掲註 31 と同じ。

註 84　前掲註 17 と同じ。

註 85　前掲註 32 と同じ。

註 86　圧痕に使用されている施文具には、圧痕部分の観察から骨の先端と推定されるものがある。

註 87　城之腰遺跡の報告では､隆帯文土器として､城之腰Ｖ２期～Ⅵ期(大木10式後半期～三十稲場式期)に位置づけられている。
国島　聡　1991「第Ⅵ章総括　１城之腰遺跡の縄文時代中期末～後期前葉土器の編年」『関越自動車道関係発掘調査報告書城之腰遺跡』新潟県教育委員会

註 88　前掲註 17 と同じ。

註 89　前掲註 17 と同じ。

註 90　前掲註 35 と同じ。

註 91　当初､藤森栄一･武藤雄六により「鍔付有孔土器」として提示され（藤森･武藤　1963)､後に武藤により「有孔鍔付土器」の名称に改められて（武藤　1970)、これが一般的に使用されている。

註 92　「台形土器」については、2002 年に山梨県で開かれた『土器から探る縄文社会』でまとめられている。
室伏　徹　2002「台形土器研究の現状と課題」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会、
保坂康夫　2002「酒呑場遺跡Ｉ地区における台形土器と機能」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会、
正木季洋　2002「原町農業高校前遺跡出土台形土器について」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会

註 93　新潟県内の北陸系の浅鉢形土器を中心として、佐藤雅一がまとめている。
佐藤雅一　2001「信濃川中流域の浅鉢形土器について－縄文時代中期の浅鉢形土器の基礎的研究－」『新潟考古』第 12 号

註 94　前掲註 35 と同じ。

註 95　三十稲場式土器の胴部の文様については、耳取遺跡の報告の中で、「花弁形刺突文」などＡ～Ｄ類に分類している（関　1971)。
関　雅之　1971『耳取遺跡』見附市教育委員会

註 96　中村真理　2003「三十稲場式土器の文様施文について」『新潟考古』第 14 号

註 97　松代町教育委員会　2000『向原Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

註 98　前掲註 36 と同じ。

註 99　前掲註 38 と同じ。

註 100　小林達雄は粘土帯野接合面について、「十分な合体を期して、接合面に篦で刻目を入れて相互に粘土のくいこみをもくろむものがあり、このような手法は「関東中期後半から後期にかけて、しばしば行なわれている」と説明している（小林　1994)。
小林達雄　1994「第６章　縄文土器生態論」『縄文土器の研究』雄山閣

註 101　前掲註 39 と同じ。

註 102　前掲註 40 と同じ。

註 103　佐藤雅一　2003「新潟県における土偶研究の視点」『新潟考古』第 14 号　新潟県考古学会

註 104　駒形敏朗　1992「新潟県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 37 集　国立歴史民俗博物館
駒形敏朗・石川智紀　1992「岩野原遺跡の土偶」『長岡市立科学博物館研究報告』第 27 号　長岡市立科学博物館
駒形敏朗・石川智紀　1996「新潟県」『中部高地をとりまく中期の土偶』信毎書籍出版センター
駒形敏朗　1998「新潟県の縄文中期土偶」『土偶研究の地平２』勉誠社
石川智紀　1992「土偶形態分類に関する一視点　－新潟県縄文中期の資料を通して－」『新潟考古学談話会会報』第 10 号　新潟県考古学談話会
石川智紀　1992「信越の中期初頭の様相」『土偶研究の地平２』勉誠社

註 105　金子拓男　1983「三角形土版・三角形岩版」『縄文文化の研究９　縄文人の精神文化』雄山閣

註 106　小野正文　1984「土偶の製造法について」『甲斐路』50

註 107　阿部昭典　1998「縄文時代中期初頭の中空土偶　－津南町上野遺跡採集遺物について－」『越佐補遺些』第３号
越佐補遺些の会

阿部は、土偶のバラバラ状態に対して、土偶の主たる機能を表した破壊行為と考えずに、廃棄行為に伴う破壊であった可能性が高いと考える。

註 108　筆者は、儀礼に伴う破壊行為を想定しており、破壊行為が円滑に行われるための工夫として分割塊製作技術があると推定している。

註 109　「胸帯文」とは、胸部の下に描かれる線状のモチーフである。別称「ブラ文」ともいう。
新津　健　1984 「曽利土偶の発生と展開」『土偶研究の地平２』 勉誠社

註 110　典型的な逆ハート形の臀部とは、臀部が反り返り、沈線あるいは隆起線で臀部の外形を表現したものである。新潟県では、糸魚川市長者ケ原遺跡から出土している。

註 111　前掲、註 103 文献を参照願う。

註 112　駒形敏朗などが、カッパ形と称する頭部が平坦な一群を、新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班の研究を踏まえ、皿状頭部と呼ぶ。
新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班編　1974 「Ⅲ土製品　顔面土製品と皿状頭部形態の土偶について」『吉野屋遺跡』

註 113　土偶の足の裏の孔を穿つ事例は、稀少である。

註 114　藤森栄一　1937 「越後中期縄文文化馬高期における土製装飾具の発生」『考古学』第７巻 10 号

註 115　上野修一　1995 「東北南部における縄文時代中期後半の土製耳飾とその分布について（予察）」『研究紀要』第３号 栃木県埋蔵文化財センター

註 116　土製円盤は、土器片円盤（藤巻正信　1989 「土器片円盤について」『新潟県考古学談話会会報　第３号』）、土製円盤（新潟県教育委員会編　1990 『関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡（本文編）』）、土器片円盤（新潟県教育委員会編　1991 『関越自動車関係発掘調査報告書　城之腰遺跡（本文編）』）、土器片利用土製品（新潟県教育委員会編 1992 『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡　十二木遺跡（本文編）』、板状土製品（新潟県教育委員会編 1996 『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　清水上遺跡Ⅱ（本文編）』、 土製円盤（十日町市教育委員会編　1998 『笹山遺跡発掘調査報告書』）、円板状土製品（長岡市教育委員会編　1998 『中道遺跡』）、土器片円盤（新潟県教育委員会編　1999 『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ（本文・観察表編）』）、土器片円盤（新潟県教育委員会編　2005 『磐越自動車道関係発掘調査報告書　北野遺跡Ⅱ（上層）本文編』など、多様な呼び名が存在する。ここでは、土器片を利用した研削具（藤巻：1989）とされたものを指す、土器片の周縁に打ち欠きや研磨痕が認められる（新潟県教育委員会編：2005）ものである。しかし、機能については藤巻が指摘する研削具であるかは不明である。名称については、一般慣用語である「土製円盤」を使用する。土製円盤は、あくまで土器片を成形した円盤であるが、三角形に成形したものも分類上は含め、細分として円盤と三角盤の形態分類基準を設けた。

註 117　高橋保雄・鈴木俊成 1990「B 出土石器の分類と分析」『関越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡』新潟県教育委員会

註 118　矢柄の装着を考えた場合、実際の「根挟み」幅から類推される器厚についても完成品の条件とするべきだが、ここでは他の着柄方法の存在についても考慮して、厚さ 1cm 程度の厚手のものまでを成品とした。

註 119　1994「石錐」『縄文時代研究事典』東京堂出版によれば、石錐は「穿孔に用いられた石製の錐」と説明されており、道具として分類された器種であることが窺える。

註 120　ここでは本類をツールとして位置付け、両極剥離部分は機能部と解釈した。従って、両極剥片の中でも明らかに石核と考えられるものも本類には含まれないものとした。

註 121　分類に際しては以下の文献を参考にした。
岡　修司　1998 「第３章 第１節 D 周辺の石材環境」『堂尻遺跡群試掘調査報告書』津南町教育委員会
山本　克　2000 「4. 周辺の石材環境」『下モ原Ⅰ遺跡』津南町教育委員会

註 122　佐藤雅一　2002 「新潟県津南段丘における石器群研究の現状と展望―後期旧石器時代から縄文時代草創期に残された活動痕跡」『先史考古学論集』第 11 集による。

註 123　新潟県中越地域において平基および凹基無柄の多出する傾向があるのは城之腰遺跡など中期末～後期前葉にかけての遺跡とされている。これについては「まとめ」で触れているため参照願う。

註 124　新潟県教育委員会　1992 『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡 十二木遺跡』

註 125　これまであまり体系的にまとめられることのなかった石器であり、類例は五丁歩遺跡（新潟県教育委員会　1992）、曲谷 E 遺跡（下田村教育委員会　2001）などで散発的な出土が認められ、尖頭状石器、分類不明石器など不定形石器の枠の中で分類された石器である。

註 126　いわゆるツインケン形のドリルを指す。縄文時代の類例としては佐藤（1980）などが挙げられる。

註 127　長野県教育委員会　1980 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 諏訪市その 4-』

註 128　藤森栄一　1964 「縄文中期における石匙の形態変化について」『考古学雑誌』第 49 巻第 3 号

註 129　泥板岩：頁岩よりやや軟質であるが、層理・節理が極めて発達した石材を指す。

註 130　田辺早苗　1989 「新潟県出土の三角土版について」『新潟県考古学談話会会報』第 4 号

註 131　高橋　保　1992 「Ⅳ -6-2「片刃打製石斧」『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡 十二木遺跡』新潟県教育委員会

註 132　打製石斧については、二次加工の不十分と思われる資料でも、使用痕跡が観察されるのが多いことから、未成品の概念にまで踏み込んだ分類まではおこなうことはできなかったが、打製石斧の素材となりうる形状の剥片や分割礫・偏平礫が遺跡内から多数出土している点や、そうしたものの一部に二次加工をもつ資料が確認できることから、本遺跡での製作が予想される。

註 133　小薬一夫・小島正裕　1986 「「分銅形」打製石斧の系譜（覚書）」『東京考古』4

註 134　ここでは大工原豊の分類する「垂直打撃技法」と「交互剥離技法」による細分は行なわなかったが、「まとめ」において追記しているため、参照願う。
大工原豊　2002 「打製斧形石器の系譜」『石斧の系譜　予稿集』笠懸野 岩宿文化資料館

註 135　前掲 註釈 131 参照。

註 136　鈴木忠司　1975 「第 5 節　2．打製石斧」『桑飼下遺跡発掘調査報告書』
川口武彦　2000 「打製石斧の実験的研究―縄文時代中期における土掘り具の使用時間―」『古代文化』第 52 巻 1 号註 137
高橋保雄・鈴木俊成　1990 「第Ⅳ章 2 石器 14」不定形石器」『関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡（本文編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 55 集　新潟県教育委員会

註 138　分類作業において、可能な限りその定義に応じた定形石器・剥片・石核を抽出して、これらの枠から外れた二次加工あるいは微細剥離痕を有する剥片類をひと括りの器種として扱う。

註 139　阿部朝衛　1985 「縄文石器研究の視点と方法」『法政考古学』第 10 集　法政考古学会

註 140　不定形石器の定義的な部分においては清水上遺跡（高橋・鈴木　1990）を参考とし、主に刃部に関する分析については、城之腰遺跡（田中　1991）・五丁歩遺跡（高橋　1992）、清水上遺跡Ⅱ（鈴木　1996）を参考とし、清水上遺跡Ⅱを使用した。
田中　靖　1991 「第Ⅳ章遺物　2 縄文時代　C 石器　l 不定形石器」『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡（本文編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 29 集　新潟県教育委員会
高橋保雄　1990 「第Ⅳ章　4 遺物　B 石器類　2 石器類の分類と分析　e 不定形石器」『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡・十二木遺跡（本文編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 57 集　新潟県教育委員会
高橋保雄　1990 「第Ⅳ章　2C（2）b．不定形石器」『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　清水上遺跡Ⅱ（本文編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 72 集　新潟県教育委員会

註 141　この中で不定形石器を分析する視点として、個々の異なる石器のライフサイクルに着目する必要性をしているとともに、石器の完成形態を限定することが難しい点とそれぞれにライフヒストリーのどの位置にあたるかを決定することが難しい点を指摘している。
阿子島香　1984 「不定形石器の視点」『文化』第 47 巻第 3・4 号－秋・冬－

註 142　津南町では、町内遺跡で石器に使用された石材のうち、近隣に存在する石材について「石材同定・産状・組成率・搬入形状・搬入量」等を調査する目的で、継続的な石材現地調査を実施している。
岡　修司・山本　克・阿部昭典　1998 「第 3 章第 1 節 D．周辺の石材環境」『堂尻遺跡群試掘調査報告書　国営農地パイロット事業に伴う遺跡確認試掘調査および発掘調査報告書』津南町文化財調査報告書第 24 輯　津南町教育委員会
山本　克　2000 「第Ⅰ章第 2 節 4．周辺の石材環境」『下モ原Ⅰ遺跡－国営農地再編整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』津南町文化財調査報告書第 32 輯　津南町教育委員会
中村真理　2001 「第Ⅰ章 4．遺跡周辺の石材環境」『正面ケ原 D 遺跡－試掘調査および確認調査の記録報告書』津南町文化財調査報告書第 34 輯　津南町教育委員会

註 143　全面研磨がなされた磨製石斧で、表裏両面と両側辺および頂辺に対し研磨成形を施すことによって面と辺の堺に稜が成形される磨製石斧を指す。従って、研磨調整が全面に及ばないものや、部分的に原礫面を残すもの、擦切磨製石斧などは共通する要素を有するものではあるが本類には含めない。

註 144　山本正敏は長さ 8cm 以下のものを「小型磨製石斧」として区別しているが、ここでの分類では長身幅狭の資料が少量ながら確認されるため、山本の分類する 4 類を「小形磨製石斧」とした。
山本正敏　1991 「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」『季刊考古学』第 35 号　雄山閣出版

註 145　佐原眞　1994 『斧の文化史』東京大学出版会

註 146　阿部朝衛　1990 「多面体を呈する敲石（再論）」『帝京史学』第５号

註 147　八木光則のいう「特殊磨石」またはいわゆる「穀磨石」を指す。長亜円礫の長軸の稜を使用面とする磨石類である。
八木光則　1976 「いわゆる「特殊磨石」について - 中部地方における縄文時代早期の石器研究への問題提起」『信濃』第 28 巻　第４号

註 148　藤巻正信　1991 「第Ⅳ章２C1　o 石錘」『関越自動車道関係発掘調査発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会

註 149　なお魚沼地域では一般に B 類とした石錘は縄文時代後期に所属する遺跡からの出土傾向が高いため、本遺跡出土資料も当該時期の所産である可能性が高い。

註 150　平出一治　1978 「縄文時代の石皿について－こわれた石皿をめぐって－」『信濃』第 30 巻第４号

註 151　「細形石棒」は、角田真也が定義している。
角田真也　1998 「細形石棒の研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第 14 輯　國学院大學考古学資料館

註 152　下記の文献を参考とした。大矢昌彦　1977 「石棒の基礎的研究」『長野県考古学会誌』28
鈴木道之助　1991 『縄文時代の石器』柏書房

註 153　堀江武史　1993 「玦状耳飾の分類と製作工具に関して」『國學院大學考古学資料館紀要』第８輯

註 154　前掲註 153 と同じ。

註 155　抽出に際しては、主に形態からこれらを分類している。しかしながら、剥片･調整剥片類などの不定形な石器については、縄文時代において同様の形態をとるものの存在を否定できないため、形態をもって縄文時代の遺物から分離することは難しいと言える。

註 156　１点あたりの重量は、尖頭器 18.19 g / 点、ナイフ形石器 2.44 g / 点、彫刻刀形石器 9.35 g / 点、掻器 15.45 g ./ 点、削器 40.27 g / 点、斧形石器 14.39 g / 点、二次加工あるいは微細剥離痕のある石刃・剥片類 10.71 g / 点、石刃・剥片類 6.56 g / 点となる。

註 157　１点あたりの重量は､珪質頁岩 13.64 g / 点､頁岩 11.16 g / 点､凝灰質頁岩 14.29 g / 点､凝灰岩 14.39 g / 点､玉髄 9.15/ 点､チャート 18.32 g / 点、黒曜石 6.90/ 点、流文岩 10.15 g / 点、安山岩類 16.42 g / 点となる。縄文時代の石器においてしばしば認められた主体的在地石材＞非主体的在地系石材＞希少石材＞遠隔地石材というあり方と照合すると、黒曜石や玉髄は小さい値を示すものの、珪質頁岩は主体的在地石材である頁岩よりも大きい値をとっている。組成点数や重量を考慮すると、これらの石器群には当時の石材利用においての指向性が指摘できる可能性がある。つまり、この石器群においては、在地系石材において少量でもより良質な石材を指向している可能性がある。

註 158　ここに帰属する石器の抽出作業において、石器形態だけでなく使用石材にも着目された。しかしながら、石材によって抽出された石器の中には、剥片類や調整剥片も含まれている。１に指摘したように、これらが縄文時代石器群の中に帰属するものである可能性もあるため、この意味においてここで数量・重量に関して傾向をとらえておく程度にとどめておきたい。つまり、抽出時のエラーによって、ここに帰属する石器が縄文時代石器の中に取り残されていることと縄文時代石器がここに帰属してしまっていることの両面が考えられ、石器群としての実態を表現できているとはいい難い。

註 159　器種の分類基準に関しては、以下の文献を参考とした。
山本　克　2000 「第２章第２節 1. ｂ . 石器の分類」『下モ原Ⅰ遺跡－国営農地再編整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』津南町文化財調査報告書第 32 輯　津南町教育委員会
佐野勝宏　2002 「第Ⅲ章２．(1) a. 器種分類」『正面中島遺跡－国営農地再編パイロット事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』津南町文化財調査報告書第 37 輯　津南町教育委員会
新田康則　2002 「凡例 7.8.」『大原北遺跡群－国営農地再編整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』津南町文化財調査報告書　第 24 輯　津南町教育委員会
土橋由理子　2003 「第Ⅳ章２A 分類」『北陸自動車道安田土取場関係発掘調査報告書　円山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 121 集　新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財事業団

註 160　尖頭器の形態分類に関しては、以下の文献を参考にした。
山岡拓也　2002 「Ⅲ４．２尖頭器　尖頭器の分類」『新潟県真人原遺跡Ⅲ』東京都立大学考古学報告７　真人原遺跡発掘調査団

註 161　長沢展生・山本　克・安部英二　1997 「道下遺跡１．遺跡概要２．旧石器時代」『平成９年度　津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町文化財調査報告書第 23 集　津南町教育委員会

註 162　芹沢長介・中山淳子 1957「本ノ木遺跡調査予報」『越佐研究』第 12 号

註 163　佐藤雅一氏の指摘による。しかしながら､前掲の真人原遺跡からもこれに類する尖頭器が表面採集されている経緯もあり、決定打とすることはできないと言える。

註 164　ナイフ形石器と彫刻刀形石器の形態分類に関して、山本 2000 前掲註 154 に準ずる。
註 165　小野　昭編　1992 『新潟県小千谷市真人原遺跡Ⅰ』真人原遺跡発掘調査団
註 166　綿貫俊一・堤　隆　1987 「荒屋遺跡の細石刃文化資料」『長野県考古学会誌』54
註 167　佐藤雅一・佐野勝宏　2002 『正面中島遺跡－国営農地再編パイロット事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』津南町文化財調査報告書第 37 輯　津南町教育委員会
註 168　註 155・註 158 で述べたように、縄文石器が混在するあるいは石器の抽出ミスが存在する可能性は捨てきれない。ここではすべてが旧石器・縄文時代草創期に帰属するものであると仮定しての見方を示しておくに留める。
註 169　寺村光晴　1961 「第三章　考察　Ⅰ土器の編年的考察」『栃倉』 吉川弘文館
註 170　中村孝三郎　1956 『中越地方の古代遺跡と遺物』 第１号　長岡市立科学博物館
註 171　中村孝三郎　1956 『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市立科学博物館
註 172　寺崎裕助　1991 「火炎土器様式について」『新潟考古談話会会報』 第８号　新潟考古学談話会
　　廣野耕造　1990 「馬高式土器の再検討」『新潟史学』 第 25 号　新潟史学会
註 173　前掲、註 169 の文献。
註 174　金子拓男ほか　1974 『森上遺跡発掘調査概報』 中里村教育委員会
　　寺崎裕助　1982 「Ⅶ　総括　２．縄文中期の土器について」『羽黒遺跡』 見附市教育委員会
註 175　渡辺　誠他　1977 『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』 津南町教育委員会
　　渡辺　誠他　1984 『八反田遺跡』 津南町教育委員会
註 176　高橋　保　1990 「第Ⅳ章　遺物　１．土器」『関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡（本文編）』 新潟県教育委員会
　　寺崎裕助　1996 「第Ⅳ章　縄文時代の遺構・遺物　２．分類・その他　B．土器」『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘報告書　清水上遺跡　（本文編）』 新潟県教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
　　高橋　保　1992 「第Ⅳ章　五丁歩遺跡　４．遺物　A．土器・土製品」『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡・十二木遺跡　（本文編）』 新潟県教育委員会
註 177　黒尾和久・小林謙一・中山真治　1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平〔発表要旨・資料〕』 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会
註 178　基準となる資料の単位は、時間と空間が必要であると共に、その分類基準が一般共通認識の中で共有されなくてはならない。遺跡単位で分類しても、その分類が遺跡外に広がりを持たなければ、横軸である空間認識が欠如していることになる。
註 179　前掲、註 176 の（高橋　1990）文献。
註 180　前掲、註 176 の（寺崎　1996）文献。
註 181　前掲、註 176 の（高橋　1992）文献。
註 182　塩沢町原遺跡において、住居跡覆土出土土器を床面から５ｃｍ単位で包含している土器型式を集計し、グラフ化して検討した結果、縄文時代の攪乱による二次堆積の状況が判明している。」
　　佐藤雅一・石坂圭介・長沢展生・中野　純・新田康則　1998 『原遺跡』 塩沢町教育委員会
註 183　富樫雅彦・佐藤雅一　1985 「信濃川中流域を中心とした縄文中期土器群の様相について（上）」『三条考古学研究会機関紙』 第３号　三条考古学研究会
註 184　佐藤雅一・長沢展生　1997 「第４章　まとめ　１．城林遺跡出土土器の編年学的考察」『午肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』津南町教育委員会
註 185　前掲、註 182 の文献。
註 186　金子拓男他　1974 『森上遺跡発掘調査概報』 中里村教育委員会
註 187　前掲、註 175（渡辺　1977）文献。
註 188　原ひろみ・佐藤雅一・新田康則　2000 『道下遺跡　縄文時代編』 津南町教育委員会
註 189　前掲、註 180・188 の文献。
註 190　前掲、註 184・188 の文献。
註 191　加藤三千雄　1988 「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観３中期Ⅱ』 小学館
　　小島俊彰　1988 「上山田・天神山土器様式」『縄文土器大観３中期Ⅱ』 小学館
註 192　前掲、註 191 の文献。
註 193　佐藤雅一　2001 「信濃川中流域の浅鉢形土器について　－縄文時代中期の浅鉢形土器の基礎的研究－」『新潟考古』第 12 号　新潟県考古学会
註 194　中村孝三郎・小林達雄他　1973 『千石原遺跡』 長岡市立科学博物館

註 195　中川成夫　1961 『小坂遺跡』 十日町市教育委員会

註 196　前掲、註 182 の文献。

註 197　大村　裕・下総考古学研究会　1998 「中峠式土器の再検討」『第 11 回　縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相』 縄文セミナーの会

註 198　山下歳信　1998 「群馬県に於ける中期中・後葉の土器様相　－いわゆる「三原田式土器」の再検討」『第 11 回　縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相』 縄文セミナーの会

註 199　森　幸彦　1998 「福島県内の大木 8a 式土器について」『第 11 回　縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相』 縄文セミナーの会

註 200　梅川勝史　1995 「第一章第三節（12）　古長沢遺跡」『堀之内町史』通史編　堀之内町史編さん室

註 201　勝坂式の口縁部無文帯土器とは、器形が異なる。
谷井　彪　1988 「舟山遺跡出土土器について　－口縁部無文土器の類型と系譜－」『研究紀要』 第 10 号　埼玉県立歴史資料館
黒尾和久・小林謙一・中山真治　1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平〔発表要旨・資料〕』 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会

註 202　金子拓男　1981 「火焔土器」『縄文文化の研究』 4　縄文土器Ⅲ　雄山閣
小林達雄・小田由美子　1988 「火炎土器様式」『縄文土器大観』 3　中期　小学館
寺崎裕助　1989 「新潟県中越地方における縄文中期後半の土器について」『新潟考古学談話会会報』 第 3 号　新潟考古学談話会
寺崎裕助　1990 「火炎土器様式の出現と展開」『火炎土器様式文化圏の成立と展開』 柳津町教育委員会
寺崎裕助　1991 「火炎土器様式について」『新潟考古学談話会会報』 第 8 号　新潟考古学談話会
寺崎裕助　1996 「火炎土器の成立・展開・終焉」『火焔土器研究の新視点』 十日町市教育委員会
小田由美子　1991 「火炎土器様式ノート」『新潟考古学談話会会報』 第 7 号　新潟考古学談話会

註 203　前掲、註 202 の文献。

註 204　前掲、註 202 の（寺崎　1989）文献。寺崎裕助は火炎土器様式の A 群を、A Ⅰ型式～ A Ⅷ型式に分類した。ここで、われわれが「王冠型土器 2」とした資料群を、A Ⅵ型式と A Ⅶ型式に相当する。

註 205　駒形敏朗・寺崎裕助　1981 『岩野原遺跡』 長岡市教育委員会

註 206　前掲、註 179・180 の文献。

註 207　阿部恭平・石原正敏他　1998 『笹山遺跡』 十日町市教育委員会

註 208　柏崎市十三仏遺跡や岩野遺跡などで観察できる工字状文からの系譜的検討が可能であると推察している。
柏崎市史編さん委員会編　1987 『柏崎市資料集　考古篇 1　考古資料（図・拓本・説明）』

註 209　対向する弧線文は、1819（第 408 図）や福島県妙音寺遺跡 SK255・552 などに見ることができる単位文様である。福島県の森編年（前掲、註 199）によれば大木 8a 式古段階～中段階に対比される。長者ケ原遺跡の火焔型土器は、口縁部二段構成であるが、第一文様帯が広がったことによる第一文様帯＋第二文様帯と理解することも可能である。

註 210　湯沢町川久保遺跡出土土器のうち、越後系土器に頸部無文帯がある。
佐藤雅一　1986 『川久保遺跡』 湯沢町教育委員会

註 211　寺崎裕助　2005 「火焔土器・火焔型土器の文様パターン　－型（タイプ）の抽出とその広がりおよび編年－」『地域と文化の考古学Ⅰ』 明治大学文学部考古学研究室

註 212　小林達雄編　1981 『長者ケ平遺跡』 小木町教育委員会

註 213　前掲、註 202 の（小林・小田：1988）文献。

註 214　寺崎裕助氏からご教示いただいた。

註 215　前掲、註 183 の文献。

註 216　谷井　彪・細田　勝　1997 「水窪遺跡の研究　－加曽利 E 式土器の編年と曽利式との関係からみた地域性－」『研究紀要』第 13 号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

註 217　前掲、註 201 の（黒尾他：1995）文献。

註 218　水沢教子　1996 「大木 8b 式の変容（上）　－東北、越後、そして信濃へ－」『長野県の考古学』 長野県考古学会

註 219　前掲、註 218 の文献。水沢教子は、同様な文様を指して「矢羽状細沈線」と呼ぶ。

註 220　1998 年、第 11 回縄文セミナー「中期中葉から後葉の諸問題」で発表している。

註 221　中村孝三郎　1966 『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市立科学博物館

附図（１６）－６の土器である。

註 222　前掲、註 207 の文献。

註 223　駒形敏朗　1998 『中道遺跡』 長岡市教育委員会

註 224　佐藤雅一　2003 「沖ノ原式土器について」『第 16 回縄文セミナー　中期後半の再検討』 縄文セミナーの会

註 225　佐藤雅一・石坂圭介　1993 「縄文時代中期後葉から後期前葉土器の編年」『多賀屋敷遺跡　－第２次発掘調査報告書－』越路町教育委員会

註 226　中村孝三郎　1970 『越路原総合調査報告書　朝日百塚・並松遺跡』越路町教育委員会

註 227　前掲、註 223 の文献。

註 228　池田　亨は、自ら調査した宮下原遺跡出土土器から抽出して加曽利ＥⅢ式期に併行する型式として「宮下原式」を提唱した。ここで考える５号住居跡覆土資料を中心とした資料群は、大木 10 式土器に併行する時間幅に配置する「宮下原式土器」である。その場合、現在、提唱している沖ノ原２式との関係を整理して、型式名を考慮する必要性がでよう。
池田　亨　1996 「宮下原式土器」『日本土器事典』 雄山閣

註 229　前掲、註 224 の文献。

註 230　国島　聡　1991 「Ⅳ章　総括　１．城之腰遺跡の縄文時代中期末～後期前葉土器の編年」『関越自動車関係発掘調査報告書　城之腰遺跡（本文編）』 新潟県教育委員会

註 231　前掲、註 225 の文献。

註 232　前掲、註 223 の文献。

註 233　称名寺Ⅰ式は、平行する沈線によって閉じたモチーフを連続して描き、縄文を充填して、モチーフを浮び上がらせる特徴がある。無文部はよく研磨される。Ｏ字状、Ｊ字状、剣先状のモチーフがあり、特にＪ字状モチーフの二段縦に配置する構成が特徴である。沈線は何度もなぞられ、幅広く、かつ深いことが多い。Ⅰ式の新しい段階になると、文様の配置が崩れ、複雑に入り組むことで、空白部分が減少し、施文域が胴部全般に及ぶようになるとともに、縄文帯の下端市が開放されるものが多くなる。
西田泰民　1996 「称名寺式」『日本土器事典』 雄山閣註 234　品田高志　2001 「十三本塚北遺跡の土器様相と時代区分」『十三本塚北遺跡』 柏崎市教育委員会
品田高志　2002 「新潟県における縄文後期前葉の土器群　－柏崎市十三本塚北遺跡を中心にして－」『第 15 回縄文セミナー　後期前半の再検討』 縄文セミナーの会

註 235　国島　聡　1990 「新潟県後期初頭・前葉の土器群」『第４回縄文セミナー　縄文後期の諸問題』 縄文セミナーの会
国島　聡　1991 「城之腰遺跡の縄文時代中期末～後期前葉土器の編年」『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会

註 236　金子優子　2001 「元屋敷遺跡出土の縄文時代後期前葉土器について」『新潟考古学談話会会報』 第 23 号　新潟考古学談話会
金子優子　2002 「奥三面における後期前半の土器様相」『第 15 回縄文セミナー　後期前半の再検討』 縄文セミナーの会
金子優子　2002 「第Ⅶ章　まとめ　１．土器・土製品　Ａ編年と地域性　(1) 後期前葉の土器様相」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ　元屋敷遺跡Ⅱ（上段）　本文編』 朝日村教育委員会

註 237　金内　元　2002 「第Ⅶ章　まとめ　１．アチヤ平遺跡上段・斜面部出土土器の様相と時期区分」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ　アチヤ平遺跡上段　本文・観察表』 朝日村教育委員会

註 238　品田高志　1996 「新潟県の様相」『第９回縄文セミナー　後期中葉の諸問題』縄文セミナーの会

註 239　国島　聡　1988 「新潟県の縄文時代後期中葉の土器について　－いわゆる三仏生式の再検討」『新潟考古学談話会会報』第１号　新潟考古学談話会
国島　聡・渡邊裕之　2001 「新潟県における縄文後期後半の土器様相」『第 14 回縄文セミナー　後期後半の再検討』縄文セミナーの会

註 240　前掲、註 239（国島・渡邊　2001）共著。
渡邊裕之　1999 「新潟県安田町中道遺跡における後期後半の土器群」『北越考古学』 10　北越考古学研究会

註 241　中村真理　2003 「三十稲場式土器の文様施文について」『新潟考古』第 14 号
中村は、原体復元を通して、一部に回転手法による施文がある可能性を指摘した。

註 242　十日町市（旧中里村）中島遺跡に類例があり、現在検討がなされている。

註 243　田中耕作　1989 「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観４　後・晩期』 小学館

註 244　前掲、註 243 の文献。

註 245　前掲、註 230 の文献。
註 246　阿部芳郎　1990 「北陸北半地域における後期前葉土器型式の再検討」『信濃』第 42 巻 10 号　信濃史学会
註 247　品田高志　2001 「十三本北遺跡の土器様相と時代区分」『十三本北遺跡』 柏崎市教育委員会
註 248　前掲、註 42 の文献。
註 249　斉藤秀平　1937 「新潟懸に於ける石器時代遺蹟調査報告」『新潟懸史蹟名勝天然記念物調査報告』 第七輯　新潟懸
註 250　津南町教育委員会　2000 『道下遺跡　縄文時代編』
註 251　津南町教育委員会　1998 『堂尻遺跡群試掘調査報告書』
註 252　佐藤雅一　1997 「正面ケ原 A 遺跡」『平成 9 年　津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会、他
註 253　渡辺　誠　1977 「第 1 章第 1 節遺跡の位置･地形」『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会
註 254　遺構の時期比定は、事実記載の項目で述べたように行なった。これらのほとんどは覆土からの出土であり、
註 255　新潟県教育委員会　1992 『関越道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡　十二木遺跡』
註 256　新潟県教育委員会　1990 『関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡』、新潟県埋蔵文化財調査事業団　1996 『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書清水上遺跡Ⅱ』
註 257　付編 3 ～ 5 のパリノサーヴェイ自然科学分析結果を参照。
註 258　前掲註 8 と同じ。
註 259　阿部昭典　1998 「縄文時代の環状列石－新潟県中魚沼郡津南町道尻手遺跡・堂平遺跡を中心としてー」『新潟考古学談話会会報』第 18 号
註 260　長沢展生・星　宏之・古谷雅彦　1996 「堂平遺跡」『平成 8 年　津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会、長澤展生・古谷雅彦　1997 「堂平遺跡」『平成 9 年津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会、佐藤雅一　1999 「堂平遺跡」『平成 11 年津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会
註 261　十日町市教育委員会　1998 『笹山遺跡発掘調査報告書』
註 262　塩沢町教育委員会　1998 『原遺跡』
註 263　堀内町教育委員会　1988 『原・居平遺跡』、堀之内町教育委員会　1998 『原・居平遺跡　倉下遺跡』
註 264　新潟県教育委員会　1991 『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』
註 265　中村孝三郎　1958 『馬高 No. 1 』長岡市科学博物館、小熊博史　2003 「馬高遺跡」『新潟県の縄文集落－中期前葉から中葉を中心に－』新潟県考古学会
註 266　長岡市教育委員会　1981 『埋蔵文化財発掘調査報告書　岩野原遺跡』
註 267　長岡市教育委員会　1998 『中道遺跡』
註 268　藤巻正信　1991 「3　城之腰集落の変遷と構造」『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会
註 269　小熊博史　2002 「東山丘陵における縄文時代の集落跡」『長岡市立科学博物館研究報告』第 37 号
註 270　前掲註 269 と同じ。
註 271　石坂圭介　1999 「原遺跡の研究 2　3．魚沼地方の縄文時代中期から後期前半の集落の分析」『新潟考古』第 10 号
註 272　谷口康浩　1998 「環状集落形成論－縄文時代中期集落の分析を中心に－」『古代文化』第 50 巻第 4 号
註 273　阿部昭典　2000 「縄文集落遺跡研究の一試論」『新潟考古』第 11 号
註 274　前掲註 273 と同じ。
註 275　前掲註 266 と同じ。
註 276　福島県文化センター　1991 『法正尻』
註 277　阿部恭平・石原正敏　1996 「栗ノ木田遺跡」『十日町市史　資料編 2　考古』十日町市史編さん委員会
註 278　十日町市教育委員会　1997 『野首遺跡発掘調査報告書』
註 279　塩沢町教育委員会　1988 『万條寺林遺跡』
註 280　大和町教育委員会　1987 『柳古新田下原 A 遺跡』
註 281　石坂圭介　1998 「3．検出された遺構の概要」『原遺跡』塩沢町教育委員会
註 282　藤巻正信　1991 「3　城之腰集落の変遷と構造」『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会
註 283　前掲註 260 と同じ。
註 284　十日町市教育委員会　1997 『野首遺跡発掘調査概要報告書』
註 285　前掲註 268 と同じ。
註 286　笠井洋祐　2003 「中里村中島遺跡の調査概要報告」『新潟県考古学会第 15 回大会　研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
註 287　佐倉市教育委員会　印旛郡市教育委員会　2004 『シンポジウム『井野長割遺跡を考える』

註 288　小千谷市教育委員会　1958 『大平遺跡』
註 289　阿部昭典　1998 「縄文時代の卵形住居跡－信濃川上流域を中心として－」『新潟考古学談話会会報』第 19 号、
寺崎裕助　1999 「新潟県における縄文時代中期中葉の住居跡」『新潟県考古学談話会会報』第 21 号、
小熊博史　2003 「新潟県における縄文時代中期の住居跡」『新潟県の縄文集落』新潟県考古学会、ほか
註 290　石原正敏・菅沼亘　1996 「赤羽根遺跡」『十日町市史　資料編２　考古』十日町市史編さん委員会
註 291　中里村教育委員会　1986 『鷹之巣遺跡』
註 292　津南町教育委員会　2000 『道下遺跡　縄文時代編』
註 293　津南町教育委員会　1997 『午肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』
註 294　津南町教育委員会　1999 『大原遺跡・午肥原遺跡』
註 295　前掲註 251 と同じ。
註 296　津南町教育委員会　1984 『八反田遺跡発掘調査報告書』
註 297　前掲註 255 と同じ。
註 298　前掲註 256 と同じ。
註 299　「卵形住居跡」の名称は、栃倉遺跡を調査した寺村光晴が「新潟県栃倉遺跡における卵形住居址」と題してこの種の住居跡を検討している（寺村　1957)。また発掘調査報告書（栃尾市教育委員会　1961）において栃倉遺跡の住居跡を２形態に分類し、その一つを「卵形プラン」とした。このような寺村の一連の研究を踏まえて、「卵形住居跡」の名称を設定した（阿部　1998)。
註 300　前掲註 260 と同じ。
註 301　中里村教育委員会　1974 『森上遺跡発掘調査概報』
註 302　前掲註 261 と同じ。
註 303　湯沢町教育委員会　1988 『川久保遺跡』、湯沢町教育委員会　1987 『川久保遺跡Ⅱ　宮林Ｂ遺跡』、
湯沢町教育委員会　1989 『川久保遺跡Ⅲ』
註 304　前掲註 262 と同じ。
註 305　塩沢町教育委員会　1988 『万條寺林遺跡』
註 306　六日町教育委員会　1981 『宮下原遺跡』
註 307　堀之内町教育委員会　1988 『原・居平遺跡』、堀之内教育委員会 1998『原・居平遺跡　倉下遺跡』
註 308　堀之内町教育委員会　1996 『正安寺遺跡　春日平遺跡』、堀之内町教育委員会 1997『正安寺遺跡Ⅱ』
註 309　小千谷市教育委員会　1987 『徳右エ門山遺跡　中道遺跡　中道東遺跡』
註 310　前掲註 266 と同じ。
註 311　前掲註 267 と同じ。
註 312　十日町市教育委員会　1998 『寿久保・春山遺跡発掘調査概要報告書』
註 313　佐藤雅一　1997 「堂平遺跡１号住居跡」『新潟考古』第８号
註 314　阿部昭典　1998 「縄文時代の卵形住居跡－信濃川上流域を中心として」『新潟考古学談話会会報』第 19 号
註 315　寺村光晴　1958 「長大な石囲炉」『若木考古』第 51 号
註 316　前掲註 279 と同じ。
註 317　安田町教育委員会　1983 『ツベタ遺跡』
註 318　安田町教育委員会　1981 『横峯Ａ遺跡　横峯Ｂ遺跡』
註 319　朝日村教育委員会　1993 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ　前田遺跡（下ゾリ・下クボ遺跡道路部分)』
註 320　上越市史編さん委員会　2003 『上越市史』
註 321　宮本長二郎　1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
註 322　御代田町教育委員会　1997 『川原田遺跡』
註 323　朝日村教育委員会　2003 『熊久保遺跡第 10 次発掘調査報告書』
註 324　松本市教育委員会　1993 『松本市山影遺跡』
註 325　山形村教育委員会　1997 『淀の内遺跡』
註 326　長野県埋蔵文化財センター　2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　24』
註 327　赤山容造　1992 「Ⅲ－４　三原田遺跡における竪穴住居の年代的変遷（中期前半期～後半初頭期)」『三原田遺跡第３巻』群馬県企業局、
赤山容造　1992 「Ⅳ－４　三原田遺跡における竪穴住居の年代的変遷（中期後半期～後期初頭期)」『三原田遺跡

第３巻』群馬県企業局

註 328　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989 『房谷戸遺跡Ⅰ』

註 329　群馬県企業局　1992 『三原田遺跡』

註 330　群馬県埋蔵文化財事業団　1994 『白倉遺跡』

註 331　渋川市教育委員会　1987 『幸行田山遺跡』

註 332　北橘村教育委員会　2001 『道訓前遺跡』

註 333　朝日町　1982 『国指定史跡　不動堂遺跡』

註 334　富山県教育委員会　1987 『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編３－』

註 335　富山市教育委員会　2004 『富山市　開ケ丘狐谷Ⅲ遺跡　開ケ丘狐谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

註 336　この土坑に関しては、橋本正が前期中葉から中期前葉まであり、貯蔵穴の機能を想定している（橋本 1976)。これに類似するものが東北地方北部の中期の住居跡にも見られる。

註 337　前掲註 276 と同じ。

註 338　福島県文化センター　1990 『矢吹地区遺跡発掘調査報告６　桑名邸遺跡（２次)』

註 339　会津若松市教育委員会　2000 『本能原遺跡』

註 340　日本窯業史研究所　1992 『神奈川県海老名市杉久保遺跡Ⅰ（勝坂期)』

註 341　山本暉久　1993 「竪穴住居の形態」『季刊考古学』第 44 号

註 342　宮本長二郎　1990 「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学』第 32 号

註 343　「長方形住居跡」の名称は、清水上遺跡の報告中で、田海義正が「長方形住居跡」の名称を用いている。形態的には長方形大形住居跡に類似しているが、この種の住居跡の規模はほとんどが 10 m以内であり、「大形」と呼ぶことには疑問である。従って、ここでも「長方形住居跡」と呼称したい。

註 344　津南町教育委員会　1999 『小坂平遺跡・下モ原Ⅱ遺跡』

註 345　石原正敏・菅沼　亘　1996 「幅上遺跡」『十日町市史　資料編２　考古』十日町市史編さん委員会

註 346　小熊博史　2003 「新潟県における縄文時代中期の住居跡」『新潟県の縄文集落』新潟県考古学会

註 347　新潟県埋蔵文化財調査事業団　1999 『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　和泉Ａ遺跡』

註 348　新潟県埋蔵文化財調査事業団　2003 『磐越自動車道関係発掘調査報告書　北野遺跡Ⅰ（下層)』

註 349　阿部明彦　1992 「山形県村山市西海淵遺跡」『日本考古学年報 43』日本考古学協会

註 350　山形県埋蔵文化財センター　1994 『西ノ前遺跡』

註 351　米沢市教育委員会　1997 『台ノ上』

註 352　渡辺　誠　1977 「考察」『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会、渡辺　誠　1980 「雪国の縄文家屋」『小田原考古学会会報』９

註 353　小林達雄　1986 「２原始集落」『岩波講座　日本考古学』４

註 354　小川　望　1985 「縄文時代「大形住居」について（その１)」『東京大學文学部考古学研究室研究紀要』第４号

註 355　武藤康弘　1997 「縄文時代前・中期の長方形大型住居の研究」『住の考古学』同成社

註 356　前掲註 253 と同じ。

註 357　長岡市教育委員会　1998 『中道遺跡』

註 358　津南町教育委員会　1975 『苗場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書　第二地区内（1)』

註 359　中里村史編さん委員会　1985 「布場遺跡」『中里村史　原始・古代・中世』

註 360　笠井洋祐　2003 「中里村中島遺跡の調査概要報告」『新潟県考古学会第 15 回大会　研究発表会発表要旨』新潟県考古学会

註 361　十日町市教育委員会　1979 『つつじ原Ｂ遺跡』

註 362　十日町市教育委員会　1961 『小坂遺跡』、菅沼　亘　1996 「小坂遺跡」『十日町市史　資料編２考古』十日町市史編さん委員会

註 363　六日町教育委員会　1981 『宮下原遺跡』

註 364　大和町教育委員会　1988 『水上遺跡』、大和町教育委員会　1990 『水上遺跡』

註 365　堀之内町史編さん室　1995 『堀之内町史』資料編

註 366　前掲註 365 と同じ。

註 367　菅沼　亘　1998 「第Ⅲ章　縄文時代の遺構と遺物　１．遺構」『笹山遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会

註 368　高橋　保　1992 「３遺構」『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡　十二木遺跡』新潟県教育委員会

註 369　前掲註 367 と同じ。

註 370　斎藤基生　1984 「第 10 節　第 12 号住居址」『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会
註 371　前掲註 367 と同じ。
註 372　前掲註 367 と同じ。
註 373　増子正三　1988 「新潟県における東北系複式炉について」『北越考古学』創刊号、
田辺早苗　1988 「新潟県の複式炉－魚沼地方を中心として－」『新潟県考古学談話会会報』第 1 号
註 374　これまで、筆者は信濃川流域の複式炉の形態変遷について検討を加えてきた。
阿部昭典　1999 「複式炉の研究－複式炉の成立について－」『新潟考古学談話会会報』第 20 号、
阿部昭典　2000 「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動－複式炉を有する住居の消失と柄鏡形敷石住居の波及－」『物質文化』第 69 号、
阿部昭典　2001 「縄文時代中期末葉の集落の様相－信濃川上・中流域を中心として－」『新潟考古』第 12 号
註 375　これらの信濃川流域の埋設土器については佐藤雅一が特色がまとめられている（佐藤　2000）。これらの分布範囲は魚沼地域に限られていることから、中部高地からの影響によって出現したことが想定される。
註 376　丹羽　茂　1974 「福島県における縄文中期の住居・集落跡研究の現状と課題」『福島考古』第 15 号
註 377　目黒吉明　1976 「第 2 節　遺構」『岩淵遺跡』福島大学考古学研究会
註 378　馬目順一　1991 「上田郷 I 遺跡の調査」『広野町文化財調査報告』第一冊広野町教育委員会、
菅原祥夫　2003 「複式炉の成立過程とその意義」『福島考古』第 44 号
註 379　市川金丸ほか　1978 『三内澤部遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会、
坂上真弓　2002 「沢部型複式炉の現在」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希記念献呈論文集
註 380　当地域における複式炉は、1970 年に布場遺跡で工事の際に発見され、また森上遺跡では 1973 年の調査で 25 号住居址が検出されて、1974 年に概要報告書で報告されている。一方、沖ノ原遺跡では 1972 年の調査で 1 号住居跡が検出されて、1977 年に報告されている。沖ノ原遺跡の事例は布場遺跡の事例よりも後で発見されたものであるが、布場の場合は調査によって検出されたものではなく、復元されたもの以外に記録がない。また典型的な事例という点では沖ノ原遺跡の事例が初出であることから、「沖ノ原型」と呼称するのが妥当であると考えられる。
註 381　津南町教育委員会　2002 『下モ原Ⅲ遺跡』
註 382　前掲註 277 と同じ。
註 383　川久保遺跡の敷石住居跡は、平成 12 年度の発掘調査において検出されている。
註 384　朝日村教育委員会　2002 『奥三面関連発掘調査報告書 x Ⅲ　アチヤ平遺跡上段』
註 385　山本暉久　2000 「外延部の柄鏡形（敷石）住居」『縄文時代』第 11 号
註 386　新潟県教育委員会　1992 『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡　十二木遺跡』
註 387　新潟県教育委員会　1990 『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』
註 388　品田高志・伊藤恒彦　1987 「62　小丸山遺跡」『柏崎市史資料集　考古篇 1 』柏崎市史編さん委員会
註 389　柏崎市教育委員会　2001 『十三本塚北』
註 390　松代町教育委員会　2000 『向原Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
註 391　新津市教育委員会　1983 『平遺跡緊急発掘調査報告書』
註 392　（財）横浜市ふるさと歴史財団　1999 『小丸遺跡』
註 393　阿部昭典　2000 「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動」『物質文化』第 69 号
註 394　品田高志　1999 「越後における縄文後期住居の検討」『新潟考古学談話会会報』第 20 号
註 395　配石墓の定義は、上部配石のみのものを狭義の「配石墓」で、これに「石棺墓」、などを含めたものを講義の「配石墓」と定義する。
註 396　配石墓の時期比定は、土坑内出土土器から主に行なった。出土土器は、完形土器から大形の土器片、数 cm ほどの小片にいたるまで出土しており、調査段階での出土と覆土の水洗い選別による検出がある。これらの出土遺物のほとんどは混入したものと推定され、完形土器や大形土器片は意図的に被葬者とともに埋められたと考えられる。後者は出土土器の中で最も新しい時期の土器から時期を比定した。従って、実際よりも古い時期になる可能性がある。
註 397　十日町市博物館編　1988 『ガイドブック　十日町市の遺跡』、
阿部恭平・石原正敏　1996 「栗ノ木田遺跡」『十日町市史　資料編 2　考古』十日町市編さん委員会
註 398　十日町市教育委員会　1997 『野首遺跡発掘調査概要報告書』
註 399　塩沢町教育委員会　1998 『原遺跡』
註 400　大和町教育委員会　1987 『柳古新田下原 A 遺跡』

註 401　前掲註 387 と同じ。
註 402　荒木勇次　1987 「第Ⅳ章　遺構」『柳古新田下原 A 遺跡』大和町教育委員会
註 403　阿部昭典　1998 「原遺跡の研究　7．墓制と配石遺構」『新潟考古』第 9 号
註 404　菅沼　亘　1997 「第Ⅲ章　遺構と遺物の概要」『野首遺跡発掘調査概要報告書』
註 405　田辺早苗　1991 「A　遺構各説　d 配石土坑」『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』
註 406　福島県埋蔵文化財センター　2003 『石畑遺跡（第 1・2 次）　馬場中路遺跡（第 2 次）　馬場小路遺跡（第 2 次)』
註 407　三春町教育委員会　1993 『西方前遺跡　Ⅳ』
註 408　福島県埋蔵文化財センター　1996 『三春ダム関連遺跡発掘調査報告書 8　越田和遺跡』
註 409　仙台市教育委員会　1996 『下ノ内浦・山口遺跡』
註 410　松井田町教育委員会　1997 『行田梅木平遺跡（行田Ⅱ遺跡)』
註 411　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003 『新田西沢遺跡　新田平林遺跡』
註 412　長野県埋蔵文化財センター　1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11　北村遺跡』
註 413　高橋　桂　1982 「宮中遺跡」『長野県史　考古資料編　全一環（ニ）　主要遺跡（北・東信)』長野県史刊行会
註 414　軽井沢町教育委員会　1968 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』
註 415　長野県埋蔵文化財センター　2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19』
註 416　前掲註 403 と同じ。
註 417　鈴木俊成　1996「Ⅶまとめ　3 石器　A 石器組成の概要と清水上遺跡」『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　清水上Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
註 418　生産用具を中心に、石器を用途別に再編した石器の比率や特徴をここでは石器組成と呼ぶ。前掲 註 417 参照。
註 419　前掲 註 418 の石器の用途別の比率内での器種の内容を器種構成と呼ぶ。
註 420　大工原（1993）は、技術的特徴と製作工程の連動性から複数の「器種」をまとめるための上位概念としての「石器種別(類)」と、石器種別と強い紐帯関係を有する石材の性質によってグルーピングされる「石材種別」という二つの種別による分類方法の有効性を指摘している。
大工原豊ほか　1993 『大下原遺跡・吉田原遺跡』安中市教育委員会
註 421　田中　靖「石鏃について」1991『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会
註 422　小島（1986）によると、彫刻石棒は富山県、石川県、岐阜県に多く、縄文時代中期中葉末という限られた時間内に製作されたことが指摘されている。
小島俊彰　1986 「鍔を持つ縄文中期の大型石棒」『大鏡』第 10 号　富山考古学会
註 423　前掲 註 419 参照。
註 424　前掲 註 417 参照。
註 425　本遺跡のⅤ期以降に目立った出土傾向を示す B1 類の打製石斧は、薄手の素材を選択することで「大量生産」といった側面を持っていると考えられる。
斎藤基生　1991 「打製石斧の性格」『季刊考古学』第 35 号　雄山閣出版
註 426　前掲 註 133 参照。
註 427　桜井準也　1984「石器組成の分析と考古学的地域についてー関東地方縄文時代中期の住居址出土資料を中心にー」『史学』第 54 巻 第 1 号
註 428　石器器種の組み合わせについては前掲 註 417 を参考とした。
註 429　鈴木俊成　1999 「第 2 章 第 5 節 第 2 項　早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　高志書院
註 430　菅沼　亘　1998 「第Ⅴ章 B 石器」『笹山遺跡発掘調査報告書』新潟県十日町市教育委員会
註 431　藤巻正信・国島　聡　1991 『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会
註 432　新田康則（1998）は、Ⅴ期（大木 8b 式並行期）以降のⅱ地域において、打製石斧の出土数が相対的に減少する傾向を火焔型土器様式から大木式土器様式への移行に関連した文化的な画期があった可能性を指摘している。ここでは新田の見解を支持した上で、石錘の増加も同様の動向と考えた。
新田康則　1998 「原遺跡の研究　9. 石器組成とその組成」『新潟考古』第 9 号。
註 433　新潟県内の磨製石斧について、前山（1999）は縄文時代中期以降における質的な差異は「小形石斧の相対的な増加」が見られるのみで、「石斧サイズは縄文時代前期にすでにバラエティー」が揃っていたことを指摘している。
前山精明　1999 「第 2 章 第 5 節 第 3 項　木工技術」『新潟県考古学』新潟県考古学会編　高志書院
註 434　中森敏晴　1996 「‘定型’石皿論」『考古学雑渉』

註 435　渡辺　誠　1975 『縄文時代の植物食』雄山閣

註 436　前掲註 421 参照。

註 437　佐藤雅一・山本克 2000『下モ原 I 遺跡－国営農地再編整備事業に伴う遺跡発掘調査―』津南町教育委員会

註 438　管見によれば、県内出土の黒色付着物が認められる石鏃は、基部の抉りが深いもの（A1 類）から浅いもの（A2 類）まで存在し、また付着範囲においても両者に差異は認められない。このことから、基部形状の差異が膠着材の使用によって生じたものであったことは考えにくい。さらに、根ばさみに装着された状態で検出された資料（近藤 1984）の観察から、石鏃の基部から脚部部分は根バサミに内包されるような装着状態が復元されることから、石鏃の脚部は逆刺の機能を持つものではないことが予想される。以上の例から、ここでは石鏃基部の抉り深浅の差は装着方法や機能の差と直接的に結びつけるのは困難と考えた。

近藤　敏　1984 「矢柄の付いた石鏃について」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』埼玉県教育委員会

註 439　前掲註 134 参照。

註 440　斉藤基生　1974 『森上遺跡発掘調査概報』中里村教育委員会

註 441　前掲註 134 参照。なお、久保田（2003）は打製石斧製作実験の際、前掲「垂直加撃技法」打製石斧の製作には台石と叩き石を用いた両極加撃による側縁部加工が有効であるとしている。

久保田正寿　2003 「縄文時代の石器製作」『月刊考古学ジャーナル』№.499　ニューサイエンス社

註 442　縄文時代晩期を主体とする遺跡ではあるが、本遺跡に隣接する津南町正面ヶ原 A 遺跡では在地石材を素材とした磨製石斧の未成品が多数出土しており、磨製石斧製作遺跡の可能性が高い。

佐藤雅一　1997 「正面ヶ原 A 遺跡」『平成 9 年度 津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会

註 443　五領ケ台Ⅱ式の年代は、矢代遺跡群のデータ 7 の平均値を使用した。加曽利 B1 式の年代は鍛冶屋遺跡のデータである。

国立歴史民俗博物館編　2003 『炭素 14 年代測定と考古学』

註 444　小林謙一　2003 「年代測定－ 2002 年の学会動向－」『縄文時代』第 14 号　縄文時代研究会

「日本における土器の期限は 14,250calBP（16,200calBP）前後にさかのぼる」とした谷口康浩の理解に対して、小林は「土器発生が晩氷期にさかのぼる可能性が指摘」されるが、「暦年較正の較正曲線である INTCAL98 において 1 万年を超える時期については、年輪年代から得られていない点や、15,585calBP 以前でのウラン系列年代との C14 年代の比較が少なく較正曲線が暫定的であり、かつ海洋リザーバー効果の見積もりが単純なことなど」から、「16,000calBP を遡る年代に確定したのではない」と発言している。

註 445　安田喜憲　1980 『環境考古学事始』NHK ブックス

註 446　佐々木藤雄　1994・1996 「水野集落論と弥生時代集落論（上・下）－侵蝕される縄文時代集落論」『異貌』14・15

註 447　塩原知人　2001 『高平遺跡』 村上市教育委員会

註 448　佐藤雅一　2003 「新潟県における土偶研究の視点」『新潟考古』第 14 号　新潟県考古学会

註 449　大木系の深鉢形土器や浅鉢形土器に違いがある。

註 450　近藤勘二郎・近藤篤三郎　1935 「越後馬高遺跡と滑車形耳飾」『考古学』 第 7 巻 10 号　東京考古学会

註 451　近藤勘二郎・藤森栄一　1937 「越後中期馬高期に於ける土製装飾具の発生について」『考古学』第 8 巻 10 号　東京考古学会

註 452　大工原豊　2002 「打製石斧石器の系譜　－打製石斧の出現から終焉を追う－」 笠懸野　岩宿文化資料館岩宿フォーラム実行委員会

註 453　谷口康浩　1993 「セトルメント・システム論」『季刊　考古学』第 44 号　雄山閣

引用・参考文献

下田村教育委員会　1983『藤平遺跡発掘調査報告書』
新発田市教育委員会　2003『二タ子沢Ｃ遺跡　発掘調査報告書』
津南町教育委員会　1996『平成８年度　津南町遺跡発掘調査概要報告書』
津南町教育委員会　1997『平成９年度　津南町遺跡発掘調査概要報告書』
津南町教育委員会　1998『平成 10 年度　津南町遺跡発掘調査概要報告書』
津南町教育委員会　1999『平成 11 年度　津南町遺跡発掘調査概要報告書』
津南町教育委員会　2000『平成 12 年度　津南町遺跡発掘調査概要報告書』
津南町教育委員会　2001『町内遺跡確認試掘調査報告書』
津南町教育委員会　2002『貝坂桐ノ木平遺跡群』
津南町教育委員会　2002『大原北遺跡群』
津南町教育委員会　2003『町内遺跡確認試掘調査報告書 (2)』
新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班　1974『吉野屋遺跡』
村上市教育委員会　2001『高平遺跡』
小山正忠・竹原秀雄編　2001『新版　標準土色帖』監修　農林水産省農林水産技術会議事務局　色票監修　(財) 日本色彩研究所

付　編

付編１：道尻手遺跡出土底部繊維組織圧痕についての一考察　帝京大学山梨文化財研究所　中田節子

付編２：津南町道尻手遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料について
（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　三ツ井朋子

付編３：自然科学分析（1）　パリノ・サーヴェイ株式会社

付編４：自然科学分析（2）　パリノ・サーヴェイ株式会社

付編５：道尻手遺跡出土土器付着物の由来について　パリノ・サーヴェイ株式会社

付編６：胎土への土器片混入について　新潟県立歴史博物館　西田泰民

＜付編１＞

道尻手遺跡出土土器底部繊維組織圧痕についての一考察

帝京大学山梨文化財研究所　中田節子

はじめに

縄文時代の人々による植物素材の利用は広範囲におよんでいると思われるものの、実物の繊維遺物の出土が少なく、土器や石器に比べ調査研究が進んでいるとはいいがたい。そのなかでも底部に繊維技法のある圧痕が残存する土器は、他の繊維遺物に比較して全国的にも多く残されている。しかし、同じ遺跡から大量に出土した土器底部のすべてを観察した例はほとんど見られず、現在まで充分な検討がなされずに、重要な課題が残されてきた。

このたび機会をいただき、道尻手遺跡から出土した土器底部のすべてである計 11504 点を観察した結果、29.4% にあたる 3384 点の底部に圧痕が観察された。

調査の結果Ⅰ類組み技法、Ⅱ類捩り技法、Ⅲ類その他の技法、Ⅳ類木葉痕に分類したことにより、現代社会でも行われている基本的な繊維技法の多くが、すでに縄文中期の道尻手遺跡に存在していたことが確認された。それらの技法が、ほとんど変わることなく現在まで続けられてきたことを考えると、道尻手遺跡の時期には繊維を使用した製品製作の技法が、当時すでにほぼ完成されていたともいえるのではないだろうか。技法の種類だけでなく、密度と素材の幅の違いを数えれば、さらに多くの製品により圧痕がつけられた可能性が考えられる。それは道尻手遺跡の縄文人たちによって行われた、豊かな繊維生活の形成をあらたに認識させらるものであった。

表１はそのなかから残存状態のよい典型的な資料と、とくに当遺跡では珍しい資料の計 217 点の底部圧痕土器を選択し、詳細な調査を行った結果である。図１は底部圧痕土器の技法別分類数、図２はそれぞれの技法による時期･型式の分類数となる。

１　調査方法について

（１）技法分類方法

技法の分類は圧痕を、肉眼、ルーペ、拓本を中心に、一部はレプリカやモデリングを使用し、また繊維による実物製作なども通して、総合的に観察し判断した。圧痕が浅い、あるいは磨耗剥落が著しい資料は、肉眼やルーペより拓本の方が鮮明に確認できる場合があった。中には肉眼ではラインの一部が残存しているだけだが、拓本によりくっきりと組織が浮き上がった資料もあった。しかし往々にして拓本は剥落やひびの一部が、いかにも組織に見える場合もあるので、拓本だけでの判断は危険である。最終的には出土した実物の資料に戻り、１点ずつ時間をかけて詳細な観察を行うことが不可欠であった。

繊維組織の痕跡かどうかの判断は、残存する繊維素材に連続している部分が確認され、それが組織（パターン）をなしている可能性の見られるものを組織圧痕とした。よって判断はあくまでも現存する底部圧痕によるため、残存部がごく少量、残存状態の悪い底部圧痕は、接合できる状態の良い土器が出土したときには、別の技法に変わる可能性も含んでいる。また複合技法という場合も考えられることを述べておく。

（2）素材の方向＝AとB

縦と横あるいは経と緯という記載の方法もあるが、資料が製品として使用されたときの縦横は不明であり、また圧痕として同じような組織に観察されても、さまざまな製作方法がありその技法により縦横も変化する。よってここではA、Bとした。

「Ⅰ組み技法」は、A、Bを同時に組んでいくため、ほとんどの場合製作上ではどちらが縦でどちらが横ということはない場合が多い。例外はあるが基本的には便宜上、底部の長い方をA、短い方をBとした。Aは超す素材からBは潜る素材から組織のパターンを数えた。網代組の表記は、セットになって組まれる素材を「何本組」とし、素材の組単位を1として「超えと潜り送り」とした。斜め模様を作り出す組は芯をAとした。三方向の組は芯をA、B、斜め右上a，左上bとした。

「Ⅱ捩り技法」は、それぞれの製作技法により縦横が変わる。よってここでは便宜上、捩り素材A、芯素材をBとし、捩っている素材をAとした方向で繊維組織最大長を計測した。「Ⅲその他の技法」は技法によるが基本的には残存部の長い方をA，短い方をBとした。なお複合技法は中心に近い組織をAのａｂ、縁に近いものをBのａｂとして記してある。「Ⅳ木葉痕」は、中心になる芯をA、葉の部分の広がりをBとした。

（3）底部残存状態

底部全体の最大長と、それに直角に交わる最小の長さを0.0cmまで計測し、長・短として記録した。また、底部の中で圧痕の残存部が底部の一部分か全体かを記載した。

底部の状態は、肉眼、ルーペ、拓本で判断した結果を1から5までに分けた。1は残存状態が非常に良い圧痕、5は最悪の状態とした。ただし表に選択した資料の中に5は含まれていない。底部の残存率は、外周のわかるものから直径を割り出し、およその%を推定した。外周の残存しないものは不明とした。

（4）繊維組織最大長

底部の中で繊維等組織圧痕が連続して残存している最大長部分を0.0cmまで計測した。

（5）密度

連続して残存している組織を選択して範囲の最大をcmで計測し、その中にある素材となる繊維AとBそれぞれの数を記載した。a、bは2本以上の繊維で構成されている場合である。

（6）素材の幅

A、Bとも残存している5ヵ所以上の素材幅を単位0.00cmまで計測し、その平均値を記載した。ちなみにここでいう「幅」は現状で見えている部分の寸法で、素材の周囲を計測した太さを表すわけではない。撚りのある場合は、S撚り（右撚り）、Z撚り（左撚り）とした。

（7）時代、型式、器形

底部組織圧痕土器の時代、型式、器形に関しては、すべて佐藤雅一氏に分類していただいた。

2　底部圧痕技法の名称について

考古学に限ったことではないが、「組む」「編む」「織る」「捩る」「結ぶ」「絡める」など技法から「布」「糸」などに至るまで、明瞭な定義をかいたまま使用されている傾向がある。辞書を紐解いても解釈はあいま

いで、たとえば「組む」をひくとその意味に、「編む」や「織る」が含まれていたり、また「編む」や「織る」を見ると「組む」が含まれていたりと、どうどうめぐりをさせられる。

このように繊維技法の名称は、染織、籠類細工、竹工芸、藁細工、建築等の各分野で名前がつけられ、通常の生活の中では明確な定義なしで通用している問題なのであろう。

考古学の土器底部圧痕の技法も、「編布＝アンギン」「籠」「網」「簀」などの製品名をあらわす名称が使用されることもある。この分野を開拓された先達方が長い間かかり定着させてこられたことには敬意を表する。また考古学の世界では長く通用していることでもあり、イメージが湧きやすいという長所も持つので、このままでいいともいえなくもない。

しかし一方には、繊維技法の名称の解釈が明瞭でなくなることもある。名称が違っても実際には同じ技法だったり、名称が同じでも違う技法ということも生じ、同じ意味や知識をもつ共通の認識のもとに使用されているとは思えない場合が出てくる。また圧痕の場合は製品の名前をつけることであたかもその圧痕がもとはその用途の製品だったという認識を与えかねない。もとは何であったかを推定することは必要であるとはいうものの、道尻手遺跡出土の繊維組織圧痕土器が、もともとは籠なのか笊なのか袋なのかあるいは衣類なのか、その用途まで確定するのは難しい。あえて誤解をさけるため、今回は製品名を技法名にすることは行わないようにした。

たとえば「網代」といえば、考古学ではしばしば「組み技法」を持つ組織全般を指すこともあり、広義な意味では間違いではない。しかし場合によっては技法に関わりなく底部圧痕全般を「網代」とよんでいる場合もある。より正確な共有できる認識のもとに話を進めるため、この報告では「網代」という名称も狭義な意味に戻り使用したい。

編布についても同様にする。捩りを行う技法はさまざまあり、説として「アンギン」という言葉を使用することはさしさわりがないと思われるが、これを底部圧痕の名称とすることにより生じる混乱はさけたい。よって「捩り」という原点的な名称にした。

今回、道尻手遺跡の組織圧痕を報告するにあたって、広く他分野の学問、あるいは海外の繊維研究、また繊維を使用して製品を作っている製作者とも、共通の認識を持ちやすいよう「Ⅰ組み」「Ⅱ捩り」「Ⅲその他」「Ⅳ木葉痕」という基本的な技法名による分類を試みた。

3　道尻手遺跡出土土器底部圧痕の分析

Ⅰ類　「組み技法」

ここでいう「組む」とは、2本ないし3本以上の材料を、お互いに起こしたり押さえたりしながら、A2本、B2本を最小単位として、素材を超したり潜らせたりして、面を作っていく方法とする。

製作の始まりは、中心から端に向かって組んでいく場合と、端から組み出す場合がある。基本的には縦＝経、横＝緯の区別はない。互いに組む材料の質や種類が同じか、あるいは同程度で差がないほうが美しく仕上がる傾向がある。通常はひねったり捩ったり巻いたりするのに、あまり向いていない弾力性のある素材が使われる。道尻手遺跡では「組み技法」として　5パターン 14 種類が確認された。

（1）Ⅰ－1　平組（四つ目）

「組」の基本的なパターンは「平組」である。四つ目組ともいい、織物で言えば平織にあたる。

「A＝1超え1潜り、B＝1潜り1超え」となる。AとBの素材が、幅、密度ともに均等に組まれる形が典型的なものであろう。道尻手遺跡出土の平組の場合は、AとBの素材の幅はほぼ同じであるが、密度や素材自体に違いがあるという特徴を持つ3種類が観察された。

①　Ⅰ－1A　基本的な平組

拓本1は、磨耗と剥落が進み、さらに繊維組織の圧痕もかなり浅いためわかりにくい。詳細は観察できないため典型的な平組とはいいがたいが、ほぼ基本的な形の平組であろうと推定される。A 6.7cm、B 5.7cm の範囲に繊維圧痕が残存していた。素材の幅はABともに 0.8cm、密度は3cm 間にABとも3本と、かなり幅広く組まれているように見受けられる。素材全体に縦筋が観察される。中期の土器である。

②　Ⅰ－1B　間隔があいている平組

拓本2・写真1は、繊維組織の残存部がA 12.5cm、B 9.5cm となる。一部磨耗、剥落がみられるものの、全面に圧痕が残存し状態は良い。素材の幅はAが 0.3cm である。Bが密に組まれているため、Aの素材が見えにくいが、Bは 0.4cm と計測された。密度は 5cm 間でA 6本、B 20 本が観察される。AとAの間は平均 0.8cm あり、BとBの間はほとんど隙間がなく密に詰まっている。Bの素材はAよりやや固いものの可能性も考えられる。中期の土器である。

③Ⅰ－1C　素材が違う平組

拓本3・写真2は、繊維組織残存部A、Bともに 12.5cm で、一部磨耗しているものの、残存する底部約 98%のほぼ全面的に圧痕が残っている。素材の幅はA 0.6cm、B 0.5cm である。密度は 10cm 間にA 13 本、B 24 本が計測された。AもBも1本おきに圧痕が見えにくい状態である。磨り消した可能性もあるが、A、Bとも1本おきに硬い素材もしくは厚い素材と、柔らかい素材もしくは薄い素材という、別の材料を使用することで、硬いあるいは厚い素材の組織圧痕が、1本おきにはっきりと現れている結果とも考えられる。中期の土器である。

（2）　Ⅰ－2　網代組

「網代組」とは狭義に、「AとBの組素材がほぼ隙間なく密接に組まれ、組み目を飛びながら模様を作り出す特徴をもった技法」と定義しておく。

網代組の基本的種類を述べると、2本組2超え2潜り1送り、3本組3超え3潜り1送りなど同じパターンの繰り返しである。その応用として、模様を組み出す網代組がある。

竹工芸では四角い模様を出すものを桝目と称し、その拡大と連続の桝網代、桝目をくずして中心を組変えた四方網代、桝網代を応用し四角でなく十字型に開く開き網代、桝網代の素材の色を変えて交色に組むことで花模様の花網代ができる。立体は縦網代、横網代、縦横網代などの名がつけられている。

網代から組み方を平組に変える変化網代も出来るので、網代模様の種類は多くその用途も道具から建築まで大変に広い。道尻手遺跡では、基本的な網代以外にも桝網代と呼ばれる種類や、網代から平組に変化させた変わり網代といえる資料も出土し、AからHまで8種類が観察された。

①　Ⅰ－2A　1本組2越え2潜り1送り

今回調査したⅠ－2Aの素材の幅は、AとBがほぼ同じで一番細い素材が 0.15cm、太い素材が 0.7cm で、ほぼ 0.3cm 前後に集中していた。素材間の隙間がほとんどなく緻密に組まれている。

拓本４は、繊維組織残存部がＡ 6.1cm、Ｂ 3.6cm で良く保存されている。素材の幅はＡＢともに 0.25cm、密度は３cm 間でＡＢともに９本である。素材の隙間は 0.1cm 以下と、ほとんどなく緻密に組まれている。素材は中心がやや丸くなり縁のラインが強く出ていて、硬い繊維の可能性も考えられる。

拓本５・写真３は、繊維組織残存部がＡ５cm、Ｂ 4.5cm で多少磨耗しているが状態は良い。素材の幅はＡＢともに 0.3cm、密度は４cm 間でＡＢともに 10 本である。素材間の隙間はほとんどなく緻密に組まれている。一部の素材にたて筋状の圧痕が観察された。後期･堀之内式の土器である。

拓本６は、繊維組織残存部がＡ 12.5cm、Ｂ 7.5cm で大きいが全体の約 55％である。圧痕の残存状態はよい。素材の幅はＡＢともに 0.5cm、密度は７cm 間にＡ 15 本、Ｂ 15 本と均等に組まれている。

②Ｉ－２Ｂ　２本組２越え２潜り１送り

Ｉ－２Ｂの場合どれも素材はＡＢともに同じものを使用していると思われる。素材の幅はＩ－２Ａよりやや広く、0.4cm から 0.5cm の資料が増えている。

拓本７は、繊維組織残存部はＡ 6.3cm、Ｂ 5.5cm で状態は良い。素材の幅はＡＢともに 0.4cm、密度は５cm 間でＡが 14 本、Ｂが 10 本で繊維間は緻密に組まれている。中期の土器である。

③Ｉ－２Ｃ　３本組２越え２潜り１送り

素材の幅はＡＢとも同じで、0.3cm から 0.4cm のものが多く、密度値はＡよりＢの方向にやや隙間がある傾向が見られる。

拓本８は、土器底部の 17％が残され、圧痕の状態はやや悪い。そのうちの組織圧痕残存部はＡ 4.1cm、Ｂ 3.5cm である。素材の太さはＡＢともに 0.3cm 密度は３cm 間でＡＢともに９本を数えた。ほぼ隙間なく組まれ密度は高い。中期の土器である。

拓本９は、土器の約半分が残存しているが、中心の組織圧痕が鮮明に残らず底部の縁周辺の残りが良い。製作後に圧痕を磨り消したものか、製作時に下に敷いた繊維製品の中心がすでに凹んでいたためか、詳細は不明である。組織圧痕の残存部は、Ａ 10.3 m、Ｂ 3.8cm、素材の幅はＡＢともに 0.3cm、密度３cm 間にＡＢとも９本が計測された。中期の土器である。

④Ｉ－２Ｄ　５本越え５本潜りか

拓本 10･写真４は、全面によい状態の深い圧痕が残存しているが、組織残存部分がＡ５cm、Ｂ 1.9cm と少ないため、組織圧痕のくり返しパターンがすべてわかるわけではない。とくに送りの組織が不明であるから網代組と確定できるわけではないが、道尻手遺跡においては数少ない種類であり、網代の可能性も考えられるということでＩ－２Ｄとした。判明できる範囲では、網代組と想定されるＡが５本組、Ｂが１本組で５本越え５本潜りとして組んでいる部分が確認される。しかし模様を変化させるときなどにＡとＢの本数を変えることもあり、この組織が連続しているとは限らないので、詳細は不明である。素材の幅はＡＢともに 0.4cm で、素材の間隔はほとんどなく緻密に組まれている。中期の土器である。

⑤Ｉ－２Ｅ　模様網代

模様網代の繰り返しのワンパターンがすべて残されているわけではないが、一部組み方を転換させている部分が観察される。道尻手遺跡出土の模様網代は、そのなかの一種である網代の中心を決めて四角の模様を作り出すいわゆる桝網代の可能性が高い。

拓本 11 は、全面に圧痕が残存するが全体的に組織面が磨耗している。A 7.8cm、B 6.8cm の繊維組織圧痕が残存し、素材の幅はＡＢともに 0.4cm である。密度は 6 cm 間にＡ 14 本、Ｂ 14 本を数える。隙間なく緻密に組まれている。

拓本 12 は、全体に磨耗していて肉眼では組織の判明ができにくいが、拓本で桝網代状の組み組織が確認された。A 11cm、B 6.5cm の範囲に組織圧痕が残り、素材の幅はＡＢともに 0.3cm、密度はとくにＡの残存状態がよくないため 3cm 間にＡ 10 本？と推定され、Ｂは 11 本を数えた。

⑥Ⅰ－２Ｆ　変化網代

拓本 13・写真５は、底部全体に圧痕が残り、範囲はＡ 6.3cm、Ｂは 4.7cm の底部の約 13%にあたる。素材の幅はＡＢともに 0.3cm、密度は 4cm 間でＡ、Ｂともに 14 本を数える。３本組２超え２潜り１送りの網代の一部を、途中から１本組にして２本越え２本潜り１送りに変えている。このような技法は、模様を作り出すときだけでなく、製品の縁など端をしっかりとさせるときにも使われることがある。

⑦Ⅰ－２Ｇ　１本組２越え１潜り１送り

素材で規則的な斜めの模様を作り出す技法である。右上がりに送ると模様が右斜めに、左上がりに送ると模様が左斜めに表れる。どのような方法で製作をしたのか、どのように使用していたかで、ＡＢどちらを上がりの方向にするかは違ってくる。ここでは便宜上斜め模様を明確に表した素材をＢとする。①から⑥までの網代と比べると、ＡとＢの素材の間がややあいている特長がある。

拓本 14 は、底部圧痕が２次焼成を受けたため全面に炭化物が付着しているものの、底部の約 52%にあたるＡ 10.3cm、Ｂ 8.8cm の全面に組織痕が残存しその状態はよい。２越え１潜り１送りで右上がり（拓本左上がり）の模様を作り出している。素材の幅はＡ 0.5cm，Ｂは 0.6cm、密度は 8 cm 間でＡ 10 本、Ｂ 14 本でＡとＡの間が 0.15cm 前後の隙間が見られる。

拓本 15・写真６も２次焼成を受けているため圧痕全面に炭化物が付着しているが、A 8.6cm、B 8.3cm の底部全面に状態の良い圧痕が残存していた。２越え１潜り１送りで左上がり（拓本右上がり）の模様を作り出している。素材の幅はＡＢともに 0.4cm、密度は 8cm 間でＡ 11 本、Ｂ 20 本となり、ＡとＡの間に 0.15cm 前後の隙間が見られる。

⑧１－２Ｈ　１本２越え１潜り１送りか

斜めの模様を作り出す方法は組む技法だけとは限らず、巻く技法でも捩る技法でもできる。⑧のような細かい組織になると、圧痕だけではどのような技法で製作したのか確定しがたい。残存状態の悪い場合はとくに難しい。ひとつの判断基準は、①斜めを作るＢ素材を追っていくとラインが直線で連続しているものは組み技法の可能性がある。②巻き技法の場合のＢ素材は、上下方向へ巻かれていくので、横方向への連続性はみられない。また巻き技法の場合は通常Ａ素材をＢ素材で２本以上づつ束ねて巻いていく場合が多い。③捩り技法の場合は捩る繊維がねじれるために端が丸くなる傾向が見られる。Ⅰ－２Ｈの資料は技法としてはⅠ－２Ｇと同じだが、ほかの可能性も考える上で別に分類した。

拓本 16 は、A 4.7cm、B 5.7cm の部分に繊維組織の圧痕が残存していた。素材の幅は、ＡＢともに 0.2cm で、密度は 4cm 間にＡ 11 本、Ｂ 12 本を数える。ＡとＡの間隔は、約 0.15cm ほどあいている。

（3）Ⅰ－3　格子組

「格子」とは通常はタテ、ヨコを交わらせ、あるいはそのどちらか一方向に並べて、間をすかしたものをいう。今回は同方向に並べただけのものは組んで作るという意味の技法には該当しないので、AとBの2本の素材を使用し、AとBが直角に交わりつつ、隙間がある組み方をしている組織圧痕を格子組と分類する。出土した格子組は、素材の幅がA、Bともに同じ 0.3cm 前後のものが多くみられた。

拓本 17 は、2超え2潜りを1本おきに1送りして、両側をずらし山型の組織を作り出し、それを繰り返しながら模様にしている。圧痕残存部はA 12cm、B 8 cm で、素材の幅はA Bとも 0.3cm、密度は4 cm 間でA 9 本、B 9 本となる。

（4）Ⅰ－4A　三方組

三方組とは、斜め方向も加えた三方向に素材を組んでいくことで、六角形の空間と三角形を形作る部分が発生する組み方である。別名六つ目組、六角組、亀甲組、かご目組ともいわれる。

拓本 18・写真 7 は繊維組織圧痕のあるA 8.7cm、B 10.5cm の残存状態は良い。素材の幅はAが 0.35cm、斜めの素材は幅に多少のばらつきがあるが、左右とも平均 0.3cm である。密度は 8 cm 間でAが 13 本、斜めは左右とも 12 本を数えた。中期の土器である。

（5）Ⅰ－4B　三方組の応用

三方組に素材を挿し入れた技法で、挿し六つ目、挿し八つ目とも呼ばれる。縦だけでなく横や斜めなどさまざまな方向から挿し足していくことができる。

拓本 19・写真 8 は、組織の残存する部分がA 14.5cm、B 12cm で、一部に深い圧痕が底部全面に残されているものの、状態はあまり良くない。素材の幅はA 0.4cm、B 0.3cm で、斜めに入っている素材 a b はやや細く 0.25cm であった。密度は 3cm 間にA 5 本、B 6 本、斜めのa 5 本、b 7 本が計測された。

（6）Ⅰ－5　輪状に組んでいく技法

始めに中心を作り、その周りを輪状に組んでいく技法だとAの素材が外へ向かって開く形になる。製品の底部に使う場合が多い技法である。拓本 20 は、組み始めの中心部が欠損しているため確定はできないが、残存部の繊維組織圧痕を観察すると、芯になる素材が広がっているところからも、輪状に組まれた可能性を含んでいるものと思われるので選択しておく。

拓本 20 の組織圧痕はA 6.2cm、B 11.3cm が残存し、素材の幅はA Bともに 0.4cm となる。5cm 間の密度は、A 8 本でB13 本となった。2超え2潜り 1 本送りの組織が観察される。

Ⅱ類　捩り技法

「捩る」とは、3本以上の素材を使いながら、基本的には2本の素材で芯になる素材によじってかけていく方法である。芯素材と捩り素材は同程度のこともあるが、芯素材よりやや柔らかいものを捩り素材として使用する場合も多い。捩り方で模様を出すことも、幅を違えてバリエーションを作ることもできる。捩り組織にはさまざまな技法があり、どのような方法を使用したか、圧痕のみから同定するのは難しく、簡単には解決できない問題である。道尻手遺跡では5パターン5種類が観察された。

（1）Ⅱ－1　緻密に捩る技法

繊維の間隔を開けずに緻密に捩る方法は、拓本 21 のように細い素材を使用する場合、あるいは拓本

22 のように繊維間をつめて捩ることでも製作できる。

拓本 21･写真 9 は、底部全面に繊維組織圧痕が残存し、範囲はＡ 4.2cm、Ｂ 5.5cm でその状態は良い。ＡＢともに素材の幅は 0.1cm と細く、現状では撚りの痕跡は確認できないが、素材を長くつなげて使用する場合は、撚った可能性が考えられる。密度は 3cm 間でＡ 15 本, Ｂ 14 本、素材間はＡＢともに 0.1cm 以下で緻密である。後期･堀之内式の土器である。

拓本 22 は全体に磨耗が見られるが、Ａ 6.1cm、Ｂ 5.2cm のほぼ全面に繊維組織圧痕が残存している。素材の幅はＡ 0.2cm と推定されるが、Ｂがほとんど観察できないほどＢ 0.25cm を、つめて緻密に捩られている。密度は 5cm 間にＡ 20 本、Ｂ 9 本が計測された。中期・馬高式深鉢である。

（2）Ⅱ－2　間隔を開けて均等に捩る技法

片方の素材を何らかの道具を使用して同間隔に固定して製作されたと思われる。固定することにより等間隔の捩りが得られる。何を固定する道具に使用したのかにより、捩る方向が変わる。道具類の推定はできても、圧痕のみからそれを確定するのは難しい。

拓本 23・写真 10 は、ＡＢともに 4.2cm の全面に、状態のよい繊維組織圧痕が残存している。素材の幅はＡ 0.25cm、Ｂ 0.3cm である。密度は 4cm 間でＡ 4 本、Ｂ 6 本となる。芯素材間は、0.4cm 平均に開いている。素材は一部にＺ撚りの部分が観察される。中期の深鉢である。

拓本 24・写真 11 は、一部に剥落、磨耗がみられるものの、Ａ 5.7cm、Ｂ 9.7cm の圧痕の残存状態は良い。素材の幅はＡ 0.32cm、Ｂ 0.3cm、密度は 6cm 間にＡ 8 本、Ｂ 12 本を数える。芯素材の間隔は 0.5cm 平均に開いている。中期の土器である。

（3）Ⅱ－3　斜めに捩る技法

拓本 25・写真 12 は、Ａ 6.5cm、Ｂ 4.4cm で底部の全面に繊維組織圧痕が残存している。素材の幅はＡＢともに 0.2 ｃｍ、密度は 4cm 間でＡＢともに 5 本となる。斜め方向に捩っているように観察され、結果として網目状の菱形の空間ができている。ＡＢともに素材をＳ撚りにした部分が見られる。

（4）Ⅱ－4　芯素材を束ねて捩る技法

芯素材の間隔を開けて捩るところはⅡ－２と同様の技法だが、材料もしくは製作の過程が異なると思われる。Ⅱ－４はどれもかなり残存状態が悪いため、詳細な解明はできない。一見すると平行脈の木葉痕にも思えるが、柔らかい素材を束にして捩ることにより組織を留めているように観察できる部分があるので、一応Ⅱ－４として分類をもうけた。

拓本 26・写真 13 は、Ａ 4.7cm、Ｂ 3.2cm の全面に圧痕が残存しているが、状態はよくない。素材の幅はＡ 0.2cm、Ｂ 0.1cm で、密度は２cm 間にＡ７本、Ｂは３本に数えられる部分が観察されるが詳細は不明である。

拓本 27 は、底部全体にあたるＡ 8.6cm、Ｂ 8.5cm が残存しているが、多くが磨耗されているため、詳細は不明である。芯素材、捩り素材ともにやわらかい繊維を使用し、ゆるく捩ってあるように観察出来る部分があるが確定はできない。素材の幅はＡ 0.2cm、Ｂ 0.15cm で、密度は５cm 間にＡ 12 本、Ｂ 7 本を数える。中期の土器である。

（5）Ⅱ－5　輪状に捩る技法

円の中心部から放射状に作られた芯素材を、輪状方向に捩りながらからませていく技法であろう。

拓本 28 は、A 5.4cm、B 6.5cm の範囲に圧痕が残っている。磨耗、剥落はあるが状態はほぼ良い。素材の幅は、ＡＢともに 0.2cm、密度は５cm 間でＡ９本、B 16 本で、技法が見られる部分は、ほとんど隙間なく緻密に捩られている。

Ⅲ類　その他の技法

（1）Ⅲ－１　連珠状に表れる圧痕

連珠状になる圧痕は、①硬いもしくは厚い素材と柔らかいもしくは薄い素材、あるいは太い素材と細い素材というように、違いのあるものを合わせて組んでいく方法　②芯に素材を巻きつけた道具を使い土器底部に押しつけたり、巻いた素材をさらに組んだり丸めたりして圧痕を作り出す方法　③結ぶことで連結した面を作り製品にする方法　④圧痕をつけたあとである部分を磨り消す方法　⑤連珠状の素材を作りそれを使用して製作する方法、ほかいろいろな技法があり、繊維組織圧痕だけからでは確定をしにくい。道尻手遺跡の連珠状圧痕を持つ底部は、素材の繊維自体は同じでも、それぞれ別の技法により作られた可能性もあることを考え３種類に分類した。

①　Ⅲ－１Ａ　平行の連珠状圧痕

拓本 29 は、間を開けて平行に並んだ連珠状の圧痕が残されている。圧痕が残されていない部分は、ほとんど凹凸がなく平らである。一部にごく薄く連珠状の素材を確認できる部分があることから、素材の違う繊維を組んで作られた技法の可能性がみられるが、詳細は不明である。A 5.1cm、B 6.6cm は残存状態が良好である。素材の幅はＢが緻密につめてあるためＡが観察されにくいが、A 0.3cm、B 0.5cm が計測される。密度は５cm 間でＡ４本、B 13 本である。中期･馬高式の土器である。

②　Ⅲ－１Ｂ　斜め方向に重なる連珠状圧痕

拓本 30 は、斜めに切りあうように入る圧痕が観察される。一部磨耗があるが、A 10.2cm、B ９cm の範囲で残り、状態はほぼ良好である。斜め素材も含めすべての素材の幅は 0.4cm，密度は９cm 間に、Ａ９本、Ｂ８本、その他（斜めの部分）７本が計測された。連珠状にした素材の何本を組み合わせたものなのか、あるいは何かを切り開いたのか，詳細は不明だ。中期の土器である。

③　Ⅲ－１Ｃ　輪状に残された連珠状圧痕

拓本 31・写真 14 は、圧痕の残存部が 80％にあたるＡ 11.8cm、B 12.8cm であるが、その状態は非常に悪い。しかし、一部に円形の縁にそって輪状に残された連珠状の圧痕が確認できる。拓本によると、縁にそって連珠状にした素材を、巻きとめたような部分が観察されるが，詳細は不明である。素材の幅はＡ 0.3cm、B 0.5cm、密度は 5cm 間でＡ７本、B 11 本となっている。

（2）Ⅲ－２　結び技法

道尻手遺跡では１点のみの出土した珍しい資料でもあり、結び技法の可能性を加味して取り上げてみた。結び目の圧痕が変形しているところも考慮に入れ、素材ＡとＢにそれぞれ撚りをかけておき、それを網目状になるように結んだ技法と考えられるが、ほかの方法でも同じような圧痕を得られる可能性があるので、確定はできない。

拓本 32・写真 15 は、Ｚ撚り（拓本は反転するのでＳ撚り）をつけたＡＢの素材を交点で結んでＡとＢを動かないようにしている。A 6.2cm、B 5.8cm の残存部の残り状態はよい。素材の幅はＡＢともに 0.3cm、密度は５cm 間でＡＢともに２本と素材間隔が均等に開いた組織である。

（3）Ⅲ－3　複合技法

①　Ⅲ－3A　組み＋捩りの技法

拓本33・写真16は、組み技法と捩り技法が観察される。A 3.5cm、B 7.1cmの残存部分の圧痕は深い。外側に確認される捩り技法Bは、素材の幅a 0.3cm、b 0.4cm、密度は1.5cm間でabともに2本である。また組み技法の素材の幅はabともに0.3cmで、密度は1.5cm間にA、Bともに2本となる。中期の深鉢である。

拓本34・写真17は、A 8.6cm、B 11.2cmの圧痕残存部の状態が悪いため、詳細は不明であるが、束ねて捩って面にした幅3.5cmの組織を交互に組んであるような部分が観察される。1本の素材の幅はAのabとも0.2cm、Bのab 0.1cmで密度は3cm間にほぼAのabとも14本、Bのabとも13本を数えた。

②　Ⅲ－3B　組み＋捩りを使用し輪状にする技法

拓本35・写真18は、中心で組んだ素材を芯にして、外側に向かってそれに捩っていると思われる。底部などを作り出すときに使用されることが多い。A 14.6cm、B 11.4cmの圧痕残存中心部の残存状態は、磨耗、剥落等のため明確でないが、外側の縁にそって捩り技法が観察される。素材の幅は中心の組み技法、周辺の捩り技法ともにAB 0.2cm、密度は組み技法は不明で、捩り技法は3cm間にABともに7本である。

（4）　Ⅲ－4　縁の複合技法

①　Ⅲ－4A　組み＋巻きの技法

拓本36は、底部の中側は右上がり（拓本左上がり）に斜め模様を組み出し、詳細は不明だが別の素材でそれらを巻きこんで始末をしつつ縁を作り出していると思われる。A 4.5cm、B 7.4cmの内側繊維組織残存部の状態は良好で、素材の幅は、Aのa 0.3cm b 0.4cm、密度は1cm間にA2？本、B5本？、縁の巻き技法はBのa 0.2cm、B 0.4cm、密度は1cm間でAa 2本、b 5本となる。後期・堀之内式の土器である。

拓本37は、A 7cm、B 5.8cmの繊維組織残存部の残り状態は悪く詳細は不明であるが、組み技法で作られたものの周囲を、別の素材で巻きながら縁取っている部分が観察される。巻き技法の縁は素材の幅がBのabともに0.2cm、密度は1.5cm間にBのa 2本？、b 3本？と推定。中心の組み技法の詳細は不明であるが、素材の幅はAabともに0.3cm、B 0.2cm、密度は1.5cm間でAa25本、b 4本。中期の土器である。

②　Ⅲ－4B　三つ組みとめ技法

拓本38は、底部圧痕部分のA 6.4cm、B 2.4cmは残存状態がかなり悪く、肉眼では組織の解明がかなり難しいが，拓本にて繊維組織圧痕で土器の縁にそった三つ組みとめをした部分が観察された。この技法は製品の縁を作るのに今でもよく使用されている。素材はすべて0.2cm前後で、2cm間で3組の三つ組み組織が作られている。土器の縁とほぼ同寸で圧痕の三つ組が組まれているように観察されるが、底部の圧痕だけからは判断できないが、いずれにしても珍しい資料であろう。

（5）Ⅲ－5　縄文の底部圧痕

拓本39・写真19は、1点のみ出土した縄文圧痕の土器底部だ。A 7.2cm、B 2cmの圧痕が残存する。LR(ZS)2段の縄文を転がした圧痕で、素材の幅は0.1cm、密度は2cm間にA5本、B7本を数える。中期・馬高式の火焔土器様式の深鉢である。

Ⅳ類　木葉痕

葉脈圧痕の土器を作る実験を行ったところ、葉脈がはっきりとしている植物を使用し、かなり意識的に底部に押しつけるか、かなりの重さを底部に加えるかすることで、細部の維管束までが圧痕となった。道尻手遺跡では２パターン３種類が確認された。

（1）Ⅳ－１　広葉樹による圧痕

拓本 40 と拓本 41 は、木本広葉樹の網状脈を利用した圧痕である。

拓本 40・写真 20 は、A 7 cm、B 6.4cm の範囲で葉脈の圧痕だけが観察される。拓本 41 より葉脈の維管束が細い植物である。

拓本 41 は、葉の残存部がA 14cm、B 15.7cm と大きい。葉脈と重なり組み状になったような組織が観察されるが、圧痕に組パターンの連続性は見つけられない。繊維技法による圧痕と葉脈を重ね合わせた可能性もあるが、詳細は不明である。

（2）Ⅳ－２　平行脈を持つ植物による圧痕

平行脈を持つ植物は、草本類がその大部分をしめるが、タケ科など木本にも見られる。

拓本 42 は、A 5 cm、B 4.8cm の残存部の圧痕は、磨耗 、剥落が進み状態が悪いが、平行脈を持つ植物の葉を並べたらしき部分が確認されたのでここに分類した。

４　道尻手遺跡出土底部圧痕土器の技法における一考察

（１）道尻手遺跡出土圧痕土器全体の傾向

図１に分類した道尻手遺跡の底部に圧痕のある土器は、Ⅰ類・組み組織が 2623 点出土して、全体の 77％を占めていた。しかしほとんどの圧痕は残存状態が悪いレベル５であった。Ⅱ類・捩り技法は 516 点の出土となり、それは 15％にあたる。複合された技法や道尻手遺跡では特殊な技法にあたるⅢ類は、157 点で５％であった。Ⅳ類の木葉痕は 88 点出土して、全体の３％となる。

図２の土器の時期・型式は、Ⅰ類の組み技法は状態が悪く 、時期不明のものが約半数の 54％を占めた。中期とわかる資料が 940 点で 34％、馬高式と判別できる 87 点の７％を合わせると、中期の土器が 41％に及ぶ。後期の堀之内式の土器は 124 点で５％にあたる。数が少なくグラフには掲載できななったが、組み技法として馬高式よりやや古い時期の大木 7b 式の土器が５点、大木７ｂ式と並行する新崎式の浅鉢が１点出土していた。

Ⅱ類の捩り技法は 、中期が 305 点で 58％となり、馬高式が 67 点 11％であるから、中期全体としては 70％となる。その他に中期後半から後期にかけての時期である大木９式の土器圧痕が１点出土した。後期の堀之内式は 36 点で５％であった。特殊な資料としてⅢ類に分類した底部圧痕は 157 点で、中期が 105 点、67％となる。Ⅲ類とⅠ類Ⅱ類との違いは、馬高式が 23 点となり 15％におよぶことだ。合わせると中期全体で 82％になる。後期堀之内式は９点でⅠ類 、Ⅱ類と同じく全体の５％であった。Ⅳ類の木葉痕は 88 点出土している。中期が 75 点 85％となり馬高式に選択された２点２％を加えると 87％となる。

このなかから 217 点を選択して詳細な調査を行った。その範囲では、とくに中期の馬高式と分類された土器の中に、変化にとんだ特殊な技法で作られた圧痕が観察できる傾向がみられた。後期の堀之内式にな

ると、Ⅰ類の組み技法もⅡ類の捩り技法も、素材の幅が細くなり、密度も細かく精緻になる傾向がみられた。

どの技法も底部が大きく残存していたものの中に、中心の繊維組織圧痕が薄れている土器がいくつか見られた。とくに輪状の技法で製作されたものは製品の中心がへこみやすい傾向があり、実際にへこんでいれば圧痕がつきにくくなり、結果圧痕が薄くなってしまう場合がある。出土した土器底部圧痕も、あたかも製品の底部に合わせたかのようにへこんでいるものも観察された。付けた圧痕を磨り消す技法もあるから、磨り消した痕跡が確認できれば磨り消しだと思われるが、今回調査した範囲では、判別しにくい状態であった。

（2）土器底部繊維組織圧痕土器の先達的研究略史

底部圧痕の研究は、古くは明治 12 年モースによる「大森介墟編」にも６例が報告されている。その後、坪井正五郎氏は 53 の資料を７種類に分類した（註１）。杉山寿栄男氏は出土の実例を使い分析を試みている（註２）。このように昔から圧痕の存在は判明されていた。

底部圧痕に焦点をあてて新たな分析したのは、大脇直泰氏（註３）と鏡山猛氏（註４）による九州縄文時代の圧痕土器研究からであろう。小林行雄氏は「網代・四つ目編・笊編」と名づけて圧痕の組織を考察した（註５）。荒木ヨシ氏は 1126 個体の網代を 46 種類に分類した（註６）。ただし荒木氏の分類では道尻手遺跡で分類した三方向組、格子組も網代の個体数に含まれている。伊東信雄氏は編布の存在を報告した（註７）。その後、渡邊誠氏は民俗例と考古学の事例から「編布」等の研究の道を開いた（註８）。小笠原好彦氏は繊維圧痕も含めて出土繊維全般の考察している（註９）。

（3） 組み技法について

道尻手遺跡の土器底部繊維圧痕の技法では、組み技法が多く見られそのなかでもとくに網代組の出土が顕著である。これは全国的な傾向にも一致している。

網代組は、素材が動きやすい平組（四つ目組）より利用範囲が広く、密でない格子組や三方向組より組織がしっかりしやすい技法で、応用範囲が広いことにもよるのだろう。一般的に底部圧痕は、道尻手遺跡の中心的時期でもある中期から後期にかけて増加する。

今回調査した網代組では、２超え２潜り１送りが多く見られた。坪井正五郎氏は「２超え２潜りが最も分布が広いので遠江の蜆塚、飛騨、武蔵の大森、西ヶ原、日暮里、下総の古作、曽谷、常陸の椎塚、陸平、下野の岩井からこの類が発見された」と関東を中心に広く分布していることを示した（註 10）。小林行雄氏はこの技法を網代の基本的なものと見ている（註 11）。

しかし、その後の資料で東日本は２超え１潜り１送りが多く、２越え２潜り１送りの技法は西日本に多く分布することがわかったとされるが、小笠原氏は「２超え２潜り１送りの網代を、東海から近畿地方にかけての主体的な編み方と見ることはできても、西日本と理解するにはなお検討をまつ必要がある」と見解を述べている（註 12）。

模様組網代圧痕は後期縄文時代に入り発達を見るが、全体から見るとその数は少量である。模様網代組なかの桝網代組と思われる資料が、道尻手遺跡から出土している。沖の原遺跡の報告書にみられる同様の圧痕に、３超え３潜り１送りとした桝網代と思われる圧痕の拓本が掲載されている（註 13）。

三方向の組み技法は、目の粗いものと細かいものがあるものの、網代のように目が詰まっていない分

だけ軽くなるので、運搬具や物を乾かすための道具に使用されることも多い。

技法としてはかならず偶数の素材を使用しなければ、大きな多角形の穴と小さな三角形の部分はできないことになっている。基本的には重ねた２本の素材に３本目をいれて三角形の目を作り、４本目を２本目と平行におき、１本目を抑えながら３本目をすくって組んでいく。新しい素材を足しながらこれを繰り返す。１と５，２と４，３と６は等間隔で平行になっている。いずれにしても押さえてすくうという技法であるが、一方向の素材が他方向の素材に対してつねに上になり、残りの端はつねに下に潜るという関係でできている技法である。２本をそのままにして１本を取り除いても構成が変わらないという特徴をもつ。この技法の応用で、さらに縦や横、斜めから挿し足していく、竹工芸の分野では挿し八つ目と呼ばれているものが、圧痕の状態は悪いが道尻手遺跡からも確認された。

後期の秋田県雲穣野遺跡、青森県千歳遺跡、鹿児島県狩河遺跡などからの出土が小笠原好彦氏により、古くは杉山寿栄男氏が、武蔵狭間遺跡、大隈狩河遺跡等からの圧痕を報告している（註 14)。

「格子組」の技法は発掘報告書では網代の中に含んでいる場合があるが、今回は基本的にＡＢが直角に交差し、格子状に隙間を作り出している組み方の技法として別に分類した。ただ隙間を表すだけでなく道尻手遺跡の格子組圧痕では、それにより山型の模様を組みだしているところに、より高い技法の特長が見られる。縄文時代後期の東村山市下宅部遺跡からは圧痕ではなく、粗３超え３潜り３送りと密の３超え３潜り３送り・１本組を繰り返す繊維遺物そのものが出土した。

平組（四つ目組）を作り出す方法として、２本のＡ素材とＢ素材を平行に組み合わせていく技法以外にも、必要な数だけ固定して垂らした素材を、その端から端まで斜めに交差しながら進んだり戻ったりしながら組んでいく方法がある。その一番単純なものは三つ組だ。三つ組に組んで紐状にした実物は、前期の石川県真脇遺跡、青森県三内丸山遺跡、後期の北海道忍路土場遺跡（註 15）などから出土している。このような斜めに仕上げていく技法での製作は、垂らす素材を増やせば限りなく広くなり、この技法でも圧痕自体は平組になることを付け加えておく。この技法はボリビア、北アメリカなどの先住諸民族により行われている。とくに北アメリカ大陸の五大湖畔周辺に居住する先住民によって製作されたアサンプション･サッシュは、最も優れた例である。

以上の組み技法の中でも、三方組などは製作技法の過程が平組や網代組とは別の発想で成り立っているのであるこのことからも、道尻手遺跡の縄文人たちは同じ組み技法でも、さらに用途により技術を使い分けた製品を製作していたのであろう。とくに網代組は素材の色を変えれば、変化に富んだ文様を表現することができるし、組む素材の幅を変えれば建材からごく小さな容器までいろいろな用途に利用できる。多くの種類の網代圧痕土器が出土した道尻手遺跡から、当時の人々がすでにさまざまな網代の利用方法を知っていたことが推定される。

（４）捩り技法について

捩り技法は考古学で報告されるときには、「編布」「むしろ状圧痕」「すだれ状圧痕」などと名づけられていることが多い。考古学で捩り技法の一種が「編布」と呼ばれ始めたのは、伊東信雄氏が宮城県山王遺跡から出土した繊維を、編物と認定し織物と区別をするため、編布と名づけたことに始まる（註 16)。捩り素材が芯素材にしっかり絡み、等間隔で直線をなしていることから、伊東氏はその方法を、新潟に

残された民俗資料のアンギンと同様の道具を使用したと考えた。それは横木に目盛りを刻み、そこに経素材を巻いた目数分のコモ槌を垂らして、緯素材を入れながら経素材を交差し、捩り絡めていく方法である。

Ⅱ－２は捩りの素材を巻いたコマを垂らすことでも可能な、間隔が開いた捩り技法である。越後アンギンと同じ道具の推定もできるが、残念ながら道尻手遺跡からは道具と確定できるような資料は発見されていない。もっとも木などを使用した場合は残らない可能性が高いので道具の出土がないからといってその技法の否定はできない。なお刻みのないケタを使い、下げるコモはお互いが絡まないように工夫して、つめて捩るとかなり細かい捩り組織が得られることが実験により実証されている。

しかし、西川宏氏は編布衣服の存在があったとしても時間、労力、生産性から考えて後期以後のことであろういう説をのべているように、(註 17) 道尻手遺跡出土圧痕土器の中でもⅡ－１に見られるようなかなり密度が高いものについては、越後アンギンの捩りと同じ技法で製作されたとすると、ケタに下げる捩り素材の間隔がかぎりなく狭くなり、技術的、時間的、効率的な面などからもかなりの労力を要することが考えられる。このこともふまえてⅡ－１のような密度の資料に関しては、もっとたやすい方法で作られた可能性も今後の課題として考慮しておきたい。

撚り技法の製品は、前期の山形県押出遺跡、福井県鳥浜貝塚遺跡、後期の北海道朱円遺跡･忍路土場遺跡、晩期の青森県亀ヶ岡遺跡 、秋田県中山遺跡 、宮城県山王遺跡、福島県荒屋敷遺跡、石川県米泉遺跡などから出土している。

捩り技法の製作工程はさまざまな可能性が考えられる。等間隔で芯の素材が直線に整然と捩られる技法として越後アンギン台のような道具を使用するもの以外で、もっとも簡単な部類に属する技法としてプライスプリッティングがある。これは撚った素材の撚りを広げ隙間を作り、そこに別の素材を通していくのである。どの素材の隙間を通すかで、さまざまなバリエーションが産み出される。

Ⅱ－３は越後アンギン台のような道具を使っても可能であるが、プライスプリッティングならばさらに簡単に斜め移動ができることを付け加えておく。アンギン製作では撚りのできる素材を動かすが、この技法では撚りの間を開ける棒状のものがあれば、なおスムーズにできる。しかしとくに特別な道具はいらない。現在もインドのラジャスタン州西部ではこの技法でラクダの腹帯を製作している。

捩り技法はプレインカでも行われていたとされている。これは枠を使って芯素材を固定して、手で捩ってしっかりからめることによって、かなり細い素材の細かい捩りが作り出される。角山幸洋氏はペルー･ワカプエッタ遺跡から出土した捩り資料を、マオリ族やアマゾンのインディオが使用している枝をまるめて固定した枠に横木を渡し横木と枠に縦にまっすぐ素材を張り固定して、横方向に別素材で捩る技法ではないかと述べている (註 18)。小笠原好彦氏は、伊藤説を重視している。渡邊誠氏は越後アンギン技法との関連を重視した伊東説を継承し、さらに縄文時代の編布と越後アンギンとの関係に焦点を当てくわしい調査研究を行った (註 19)。

いずれにしても結果的には同じような捩りが圧痕で観察されても、どのような捩り技法によるものか、圧痕のみからの判断では難しい。また技法により縦に捩るか横に捩るかが違ってくるのである。

Ⅱ－４は輪状技法による底部圧痕である。繊維製品の底部を利用して圧痕をつけたのであろうか。輪状にするには①何本かの芯素材で十字に組んだ中心を作り、輪状に外へ向かって捩っていく技法（ちなみに竹工芸では菊底組といわれている）と、②中心で何本かの芯素材を巻き返して輪状のものを作り、

その芯素材に捩りながら外側へと広げていくという方法等がある。道尻手遺跡の資料では残存状態が悪いため確定はできないが①の方法で製作されたように観察される。輪状の技法については、石川県の中期から後期の東市瀬遺跡(註20)からの出土がある。また韓国製の籠を例にとりながらその技法解明を行った後期から晩期の御経塚遺跡（註21）が報告されている。

（5）その他の技法

①巻き技法の可能性

圧痕の残存状態が悪いため確定はできないが、道尻手遺跡ではⅢ－４Ａに分類した縁のある底部に、巻き技法ではないかと思われる部分が観察された。製品の最後の始末には巻き技法が便利である。巻き技法は世界各地で古くから行われている。エジプト・ファイユム遺跡の放射性炭素で調べた年代が紀元前4784年から3929年という穀倉の内側は、麦わらを巻き上げにしたものが被っていたと報告されている。またこの遺跡からは、同じ技法の籠が発見された。

縄文時代の遺跡では、是川遺跡から出土した繊維製品に巻きと思われる技法が見られる。芯素材に幅の広いテープ状の巻き素材を、一巻きしながら次に進んでいる。樹皮と思われる繊維を巻いた弓は、前期の福井県鳥浜貝塚、後期の埼玉県寿能泥炭層遺跡、晩期の秋田県戸平川遺跡、是川遺跡などから出土した。晩期の青森県亀ヶ岡遺跡からは繊維を巻いた石棒、青森県中山遺跡や北海道忍路土場遺跡からは輪状の製品、滋賀県･滋賀里遺跡からは樹皮を巻いた釣り手状製品が報告されている。

道尻手遺跡と同じく縁に巻き技法を使用した例としては、富山県桜町遺跡出土の繊維製品で幅広い素材を巻いて縁の始末をしているものが出土した。熊本県曾畑遺跡や福島県荒屋敷遺跡の繊維製品は使用した素材を束ねてそれを巻いていくことで縁を形成している。鳥取県布勢遺跡から出土した縄文時代後期に属する実物の籠の巻き素材はヒノキと同定された。胴部の捩り技法の最後の部分を束ねて重ねながら、新しい縁巻き用の素材1本を用いて、経1本に付き縁1巻きが規則的になされている（註22)。

このように実際は巻き技法を使用した製品が作られているが、巻いてある部分に段ができやすいこともあり、底部に敷いて圧痕をつけるには向いていなかったのだろうか。あるい組み技法のようにきれいに圧痕が残存しにくいという点もあるかもしれない。道尻手遺跡からは縁の技法でなく巻き技法そのものを使ったと思われる圧痕土器は、今のところ確定できなかった。

②結び技法の可能性

ここでいう「結び技法」とは、ゆわえることや離れているものをつないで結節をつくることをいう。縄文土器の文様、漁労や狩猟の道具、住居構築、装身具を身に付けるときや運搬から祭祀などまで、それぞれに応じた技法を使った縄文時代の「結び」の存在を否定することはできない。その可能性の広がりを小林達雄氏は、縄文時代の紐、糸、縄、綱について、民俗民族例を引きつつ精神性も含めて言及している（註23)。

縄文時代早期の春日町式の土器面には、左右対称に寄り合わせた結びと片結びによる文様が見られ、前期の花積ではひとえ結び、関山では止め結びや軸に一重結びを巻きつけ回転させたもの、円筒下層には本結びの技法が見られる。北海道忍路土場遺跡から片結び、富山県桜町遺跡からは本結び、福井県鳥浜貝塚遺跡からは、止め結びの縄が出土している。晩期の愛媛県船ヶ谷遺跡からは本目結びとされる網

が出土している。網目状の圧痕土器では、長崎県山ノ寺遺跡、佐賀県女山遺跡など、九州地方の弥生時代早期の遺跡に出土例が多い。

また「マクラメ」と称する「結び技法」があり、発祥の起源は古代アラビアとされ「交差して結ぶ」という意味を持つ。この技法は日本でも正倉院御物や鎧に使用されている。この結び技法によると、間隔を開けることも、斜めあるいは輪状に結び進むことも、連珠状の方向も縦長も横長も、自在に作りだすことができることを付け加えておく。

道尻手遺跡出土Ⅲ－１、Ⅲ－２に分類した底部繊維組織圧痕は、さまざまな技法で作ることが可能なため、結びによってできたとは確定できない。Ⅲ－１は芯素材と芯素材の間隔が開いていたり、斜め方向や輪状方向を持つ圧痕も観察されることからも、結び目で面を作り出す技法の可能性も含めて、今後さらに考えてみたい。Ⅲ－２と同じような圧痕は、結ばずに撚りの間に素材を通したということでも得られる。この場合は素材が動かないように交互に撚りの間に通していくので、結び目の上下の圧痕が交互に表れてくることになる。結び技法に関しては、今後さらに検討が必要である。

③複合技法について

底部の圧痕ではその製品の全体を知ることはできないが、出土した繊維製品の実物が資料を見るとわかるように底、胴部、縁など部分により、あるいは技法による模様を表現するために、いくつかの技法を組み合わせて製品としている場合がある。

道尻手遺跡ではⅢ－３、Ⅲ－４として、別の技法が組み合わさっている一部分が圧痕として残存していたものを選択した。製品の縁や取っ手、曲げる部分など、しっかりとさせたいところに、捩り技法や巻き技法を使うことがある。また、底部圧痕として繊維製品を使用する場合平らなものの可能性から、模様の一部だったとも考えられる。

輪状の技法は一般的にいくつかの技法を組み合わせて作る場合が多い。輪状の製品は先にあげた中期から後期の石川県東市瀬遺跡や前期の白座遺跡からも発掘された。

④繊維組織でない圧痕

縄文土器の底部には、繊維製品を利用したと思われるもの以外にも、木の葉、縄文、貝殻条痕文、沈線文、鯨の背骨や帆立貝の文がついたものなどが圧痕として報告されている。道尻手遺跡からは、Ⅳの木葉痕とⅢ－５の縄文の圧痕が観察された。

木の葉の葉脈を利用した圧痕が増えるのは中期になってからである。繊維の強い細かい葉脈が張り巡らされた広葉樹は、細部の葉脈があたかも繊維組織に見える場合があるから観察には注意がいる。実際に広葉樹と組技法の重複した例が、堀之内式から加曽利Ｅ式にあたる相馬郡三貫地貝塚遺跡で報告されている。今回調査した道尻手遺跡のⅣ－１には一部に一見組み技法と思われる部分も観察されたが、組織の連続性が不明であり葉脈と一体化して判定しにくい状態であった。当遺跡からは欠けている部分を推定すると約16cmにもなる大形の葉を使用した圧痕が出土した。大型の木葉としてはトチ、ホウ、カシワ、キリなどが考えられる。

道尻手遺跡から出土した縄文の底部圧痕は、中期・馬高式の火焔型式の土器であった。八王子市平町縄文前期遺跡の諸磯ｂ式土器の底部86固体には、縄文の圧痕があると報告されている（註24）。佐藤雅一氏によると、津南町教育委員会で発掘した前期の遺跡にも、縄文のついた底部圧痕が見られるとのことである。

5　素材の種類についての検討

繊維製品を製作するには通常、①樹皮、②樹皮の内皮　③靭皮　④茎　⑤蔓　⑥葉　⑦動物の毛・腱・革などを使用する。植物素材の可能性として種の同定までは、繊維に加工されさらに遺跡からの出土という状態では、現状ではなかなか難しい。一般的に木本類ではブドウ科、マメ科、バラ科、カバノキ科、クワ科、スギ科、ヒノキ科、クルミ科、ヤナギ科、モクレン科、ニレ科、ミカン科、シナノキ科等、草本類ではアサ科、イグサ科、イネ科（タケ類含む）、ガマ科、カヤツリグサ科等の中に繊維に加工できる植物が存在する。

さらに底部繊維組織圧痕だけからの推定では、素材の同定までするにはかなりの困難を要する。実験的に圧痕土器を製作してみた結果、使用する素材の硬さ柔らかさ厚み等は圧痕に影響を及ぼすとはいうものの、当然のことながら圧痕を強くつければ薄い素材でも深くなり、軽く押せば浅くなる傾向があった。また繊維にするためにはさまざまな加工工程をたどるので、その過程で素材の性質も変化する。本来硬い木本類を捩りの素材になるほど柔軟性を持つように加工することも可能である。どのような過程を経て圧痕が残されたのかわからないと、残存状態だけから素材までは判断しがたい。圧痕からの素材の同定方法はこれからの課題であろう。道尻手遺跡の素材については現状では、一部に撚りのかかった素材、縦すじのある素材が確認されている。

圧痕からではないが、布目順郎氏が各遺跡から出土した実物の繊維製品を同定したところ、鳥浜貝塚の草創期の縄を大麻、前期の縄を大麻とアカソ、押出遺跡のアンギン様資料をアカソ、後期の忍路土場遺跡の繊維資料をオヒョウ、晩期の米泉遺跡のアンギン様資料をアカソ、中山遺跡のアンギン様資料をカラムシ、荒屋敷遺跡の縄を動物性の可能性もあり検索中としている（註 25）。

名久井文明氏は、是川遺跡出土の籠の一点をヤマブドウの蔓の皮に類似しているとして、別の籠一点の資料はサクラの樹皮ではないかと推定した。名久井氏は、樹皮の採取法と加工方法を実験考古学的に検証した（註 26）。実際の繊維製品ではこのような素材が使われていたことが報告されている。

6　底部繊維組織圧痕研究の今後の課題について

今回は、道尻手遺跡の土器底部繊維組織圧痕のなかから、217 点を選択して詳細な分析を試みた。道尻手遺跡の底部圧痕に見られる繊維技法全体の問題として、同時期同種で密度も幅も同じ圧痕は、同じ物を使い回しした可能性もあるが、これを知るには全資料の詳細な分析を行う必要がある。

今後の課題として他地域の繊維資料との比較による地域性、時代性の関係、使用されている素材の同定方法の確立、圧痕をつけた理由、土器製作時の圧痕付着方法、器形の変化と底部圧痕の関係、技法による道具類の可能性ほか、比較検証をしていきたい。

縄文時代の繊維技法は、基本的には道具や機を使用せずに組む、捩る、巻く、結ぶなどの方法により人の指だけで作られたと考えられる。あるいは道具を使っても軽く持ち運べる範囲のすぐに手に入れられる簡単なものだったと推定される。それらはいつでもどこでも繊維製作作業を始められる利点がある。

今回の報告では道尻手遺跡からは繊維製品製作に用する道具の出土がないこともあり、同じような繊維組織圧痕でも製作するアプローチとしてさまざまな技法があることを考えて、その可能性も記載した。

以前から筆者は機を使用しないで繊維製品を製作するさまざまな技法を試みるために、素材の採集から加工、繊維製品製作までを、実験考古学的に行っている。今回もいろいろな技法で製作した繊維製品を作り、それを底部に押し縄文土器圧痕にして実際に焼成して縄文土器を製作してみた。それを道尻手遺跡出土の底部圧痕の検討に加えた。そこでも同じように表れる圧痕でもさまざまな技法によるアプローチがあることが判明した。これらも含み今回記載できなかったことはいずれ別の機会に報告をしたいと思っている。

考古学からの出土繊維染織の研究はそれぞれの分野のハザマにあり、広く目を配ることが必要だ。他分野の繊維や染織関連等に関しての研究の中にも、考古学から見た繊維染織について解明の手がかりがある。今後はこれらの諸分野も含め、文化人類学や民俗学、また製作を含む実験的な面からも、考古学的な観点をふまえつつ、広く技法の可能性を追求してみたい。

道尻手遺跡の土器底部圧痕調査の機会を与えてくださった津南町教育委員会の佐藤雅一氏、ご指導いただいた小林達雄先生、技法の一部をご教示いただいた渡辺誠先生に心から感謝の意を表したい。

註釈

註 1） 坪井正五郎 「日本石器時代の網代形編物」『東京人類学雑誌第４巻第 161 号』 1899
註 2） 杉山寿栄男 『日本原始繊維工芸史 原始編』再販北海道出版企画センター 1942
註 3） 大脇直泰 「押圧文時について」『古代学９－３』 1961
註 4） 鏡山猛 「原生期の編物」『九州考古学論攻』吉川弘文館 1961
註 5） 小林行雄 『続古代の技術』塙書房 1964 年
註 6） 荒木ヨシ 「縄文式時代の網代編み第３報完結」『物質文化２０号』 1970
註 7） 伊東信雄 「 縄文の布 」『文化第３０巻第１号』 1966
註 8） 渡辺 誠 「編布の研究」『日本史の黎明』六興出版 1985
註 9） 小笠原好彦「編物・布」『縄文文化の研究７』雄山閣出版 1983
註 10） １に同じ
註 11） ５に同じ
註 12） ９に同じ
註 13） 渡辺 誠 「土器底部圧痕」『沖ノ原遺跡発掘報告書』新潟県津南町教育委員会 1977
註 14 ） ２に同じ
註 15） 中田節子 「 繊維製品の分類とその内容 」『忍路土場遺跡･忍路５遺跡』北海道埋蔵文化財センター 1989
註 16） ７に同じ
註 17） 西川 宏 「織物採用の歴史的意義」『論集日本の原史』吉川弘文館 1985
註 18） 角山幸洋 「ワカプリエッタの繊維製品について」『古代学研究第 24 号』 1960
註 19） ８に同じ
註 20） 山本直人 「 金沢内縄文時代遺跡出土のカゴ底圧痕 」『北陸の考古学石川考古学研究会会誌第６号』石川考古学研究会 1986
註 21） 渡辺 誠 「編布およびカゴ底圧痕について」『野々市町御経塚遺跡発掘報告書』石川県野々市教育委員会 1983
註 22） 渡辺誠・植松なおみ 「布勢遺跡出土のカゴについて」『鳥取市布勢遺跡発掘報告書』鳥取市教育委員会 1981
註 23） 小林達雄 「紐を手繰りて縄文世界」『浜田青陵賞受賞者記念論文集Ⅰ』 2001
註 24） 荒木ヨシ 「縄文時代の網代編み」『物質文化 12 号』 1968
註 25） 布目順郎 『目で見る繊維の考古学』染織と生活社 1992
註 26） 名久井文明 『樹皮の文化史』吉川弘文館 1999

通し番号	繊維分類	註記				底部(cm)		底部残存状態		底部残存率%	繊維組織最大長(cm)		密度				素材の幅（cm）			時代	型式	器形	図版資料番号
		大グリッド	小グリッド	層位	圧痕番号	長	短	繊維残存部	状態		A	B	cm間	A(本)	B(本)	他(本)	A	B	他				
1	I−1A	A4	-	V	R17	4.7	3.1	全面	2	13	4.2	3.0	3	8	8	-	0.25	0.25	-	中期	不明	深鉢	
2	I−1A	H6	13G	VI	R853	7.8	5.4	部分	3	不明	6.7	5.7	3	3	3	-	0.8	0.8	-	中期	不明	不明	図3-1
3	I−1A	F5	120	VI	R1624	13.5	8.4	全面	3	33	10.8	8.0	5	8	13	-	0.3	0.25	-	中期	馬高	深鉢	
4	I−1A	D6	9	VIG	R278	6.2	6	部分	3	20	6.5	4.2	3	6	6	-	0.45	0.45	-	中期	不明	不明	
5	I−1B	J3	P36	-	R1700	12.5	9.5	全面	1	不明	12.5	9.5	5	6	20	-	0.3	0.4	-	中期	不明	不明	図3-2・図6-1
6	I−1C	E5	P1.3	-	R1702	12.3	12.3	全面	2	98	12.3	12.3	10	13	24	-	0.6	0.5	-	中期	不明	不明	図3-3・図6-2
7	I−2A	A4	10G	VI	R18	5.7	5.0.	全面	2	25	6.0	5.5	3	6	6	-	0.5	0.5	-	中期	不明	深鉢	
8	I−2A	C6	2	VI	R123	4.2	4	全面	3	8.5	4.0	2.8	2	5	5	-	0.3	0.3	-	中期	不明	深鉢	
9	I−2A	D4	23	VIG	R150	8.5	3.5	部分	3	25	7.2	2.4	2	6	6	-	0.25	0.25	-	中期	不明	深鉢	
10	I−2A	D5	2	VIG	R156	4	3	全面	2	8.5	3.7	2.8	2	6	6	-	0.35	0.35	-	不明	不明	深鉢	
11	I−2A	D5	-	VIG	R161	6.2	2.7	全面	2	12.5	6.2	2.7	2	5	6	-	0.4	0.4	-	不明	不明	深鉢	
12	I−2A	D6	78	VI	R295	11	10.8	部分	4	50	10.5	3.2	3	9	9	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
13	I−2A	E2	17	-	R303	7.2	4	全面	4	12.5	4.0	3.2	3	9	9	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
14	I−2A	E5	10	VG	R331	7.2	2.8	全面	1	12.5	4.0	3.0	2	4	5	-	0.35	0.35	-	中期	馬高	深鉢	
15	I−2A	E5	10	GV	R336	8	5	部分	4	33	6.7	2.0	2	6	6	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
16	I−2A	E6	14	VI	R421	5.7	2.8	全面	1	8.5	3.8	3.5	3	7	8	-	0.35	0.35	-	不明	不明	不明	
17	I−2A	E6	15G	V	R432	8	3.8	全面	3	25	8.0	3.8	3	8	8	-	0.3	0.3	-	不明	不明	深鉢	
18	I−2A	F5	16	VG	R490	4.8	2.5	全面	2	8	4.2	2.8	2	3	4	-	0.7	0.5	-	中期	馬高	不明	
19	I−2A	F5	21	VIG	R499	6	3.1	全面	2	16.5	4.2	3.1	2	6	5	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
20	I−2A	F6	8G	VI	R562	6.1	5.1	部分	4	12	5.6	3.7	2	5?	6	-	0.3	0.35	-	不明	不明	不明	
21	I−2A	F6	10G	V	R572	4.4	4.4	部分	2	14.3	4.0	3.5	3	8	8	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
22	I−2A	F6	442	VI	R628	11.3	9.5	部分	3	75	11.3	9.5	5	12?	16	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
23	I−2A	G5	13	V	R682	11.1	9.7	部分	3	78	8.5	6.8	3	8	10	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
24	I−2A	G6	4G	VI	R695	7.5	5.8	全面	2	16.5	6.7	5.8	3	10	12	-	0.25	0.25	-	不明	不明	不明	
25	I−2A	G6	1263	V	R752	4.5	3.5	全面	2	16.5	4.5	3.8	3	8	8	-	0.35	0.35	-	中期	不明	不明	
26	I−2A	H2	20G	表層	R806	7.8	3.6	全面	3	50	6.3	3.7	3	6	5	-	0.5	0.5	-	後期	堀之内	不明	
27	I−2A	H5	6	表層	R831	5.4	2.8	全面	2	11.1	3.5	2.2	2	6	6	-	0.45	0.45	-	中期	不明	不明	
28	I−2A	H5	25G	-	R838	8.3	5.8	部分	2	55	5.7	4.8	4	11	13	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
29	I−2A	H6	3G	VI	R843	4	2.5	全面	2	5	3.8	2.7	2	7	7	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
30	I−2A	H6	14G	VI	R858	3.6	2.8	全面	2	5	3.4	2.4	2	4	6	-	0.45	0.45	-	中期	不明	不明	
31	I−2A	H6	15G	VI	R863	4	3.8	全面	2	12.5	3.8	3.8	2	8	8	-	0.3	0.3	-	後期	堀之内	不明	
32	I−2A	H7	10G	VI	R953	5	3.8	全面	3	12.5	4.5	3.7	3	8	9	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
33	I−2A	H7	2635	VI	R983	5.8	5.1	全面	3	14.3	5.8	5.1	3	8	8	-	0.4	0.4	-	中期	馬高	不明	
34	I−2A	H7	4279	VI	R1005	4.6	2.5	全面	2	5	3.0	3.0	3	9	9	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
35	I−2A	I5	P23	-	R1079	4.2	4.2	全面	2	12.5	4.0	3.1	3	6	6	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
36	I−2A	I6	24G	VI	R1110	4.6	2	全面	2	12.5	2.7	1.8	2	7	6	-	0.3	0.3	-	不明	不明	深鉢	
37	I−2A	I7	15G	V	R1180	6.5	5.5	部分	1	不明	6.5	5.5	3	9	9	-	0.35	0.35	-	中期	馬高	不明	
38	I−2A	J4	17	-	R1238	5	4.5	全面	1	不明	5.0	4.5	4	10	10	-	0.3	0.3	-	後期	堀之内	不明	図3-5・図6-3
39	I−2A	J6	23	VIG	R1299	6	4.8	全面	3	12.5	5.0	5.0	3	8?	9	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
40	I−2A	J7	13G	VI	R1348	5.3	2.7	全面	3	12.5	3.8	3.2	2	7	9	-	0.2	0.2	-	後期	堀之内	深鉢	
41	I−2A	J7	4329	VIクロ	R1395	15	6.7	部分	3	48	10.5	4.7	3	7	8	-	0.25	0.25	-	中期	不明	深鉢	
42	I−2A	K3	12G	HT1表層	R1423	8	4.5	全面	2	23	6.4	5.1	4	7	8	-	0.5	0.5	-	不明	不明	不明	
43	I−2A	K6	133	VI	R1444	6.1	5.7	部分	2	20	5.4	4.2	3	9	9	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
44	I−2A	14J	-	-	R1495	6.1	3.6	全面	1	15	6.1	3.6	3	9	9	-	0.25	0.25	-	不明	不明	深鉢	図3-4
45	I−2A	註記なし	-	-	R1543	4.5	2	全面	2	8.5	4.5	2.0	2	5	5	-	0.4	0.4	-	中期	不明	深鉢	
46	I−2A	註記なし	-	-	R1558	7	3.7	全面	4	8.5	7.0	3.7	2.5	5	6	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
47	I−2A	註記なし	-	-	R1561	13	10.2	部分	2	70	13.0	10.2	2	6	6	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
48	I−2A	B3	19G	表層	R1591	6.7	6.2	全面	1	90	6.7	6.2	5	10	10	-	0.6	0.5	-	不明	不明	深鉢	
49	I−2A	D4	324	VI	R1599	6.8	5.8	全面	3	75	6.8	5.8	4	10	10	-	0.3	0.3	-	不明	不明	深鉢	
50	I−2A	G3	9.13	-	R1638	7.5	5.9	部分	3	70	5.9	5.5	5	10	11	-	0.5	0.5	-	不明	不明	深鉢	
51	I−2A	I1	17.1	-	R1674	12.5	7.5	全面	1	55	12.5	7.5	7	15	15	-	0.5	0.5	-	不明	不明	深鉢	図3-6
52	I−2A	J7	4869	VI	R1695	13	13	部分	1	85	13.0	13.0	2	7	7	-	0.3	0.3	-	不明	不明	深鉢	
53	I−2A	D6	9G	VI	LB4	6.5	5.3	部分	4	25	5.5	5.0	2.5	5	5	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
54	I−2B	B2	18G	-	R30	6.3	5.5	全面	1	不明	6.3	5.5	5	14	10	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	図3-7

表1　底部圧痕観察調査表（1）

通し番号	繊維分類	註記				底部(cm)		底部残存状態		底部残存率%	繊維組織最大長(cm)		密度				素材の幅(cm)			時代	型式	器形	図版資料番号
		大グリッド	小グリッド	層位	圧痕番号	長	短	繊維残存部	状態		A	B	cm間	A(本)	B(本)	他(本)	A	B	他				
55	I－2B	C4	19	VG	R64	7.7	3.4	全面	3	12.5	5.5	3.1	3	6	6	-	0.5	0.5	-	中期	馬高	深鉢	
56	I－2B	D5	21	VIG	R205	5.2	4.3	全面	3	不明	4.1	3.2	3	10	10	-	0.25	0.25	-	不明	不明	不明	
57	I－2B	E5	158	VI	R369	6.2	3.2	全面	3	16.5	3.4	3.1	3	9	9	-	0.35	0.35	-	中期	不明	深鉢	
58	I－2B	E6	15G	V	R431	5.2	3.8	全面	3	不明	3.7	3.5	3	7	8	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
59	I－2B	E6	20G	VI	R440	5.3	5	全面	2	不明	5.2	4.8	3	8	8	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
60	I－2B	G6	2005	VIクロ	R768	7	4.4	部分	2	14.3	6.7	2.7	2	6	4	-	0.4	0.4	-	不明	不明	深鉢	
61	I－2B	I5	11	52	R1061	5.6	4.5	部分	2	14.3	5.2	2.8	2.5	6	6	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
62	I－2B	I7	20G	VI	R1185	4.5	2.5	全面	3	12.5	4.6	2.6	2	5	6	-	0.35	0.35	-	中期	不明	不明	
63	I－2B	I7	22G	VI	R1188	4.1	1.7	全面	2	8.5	3.5	2.0	2	4	6	-	0.2	0.2	-	後期	堀之内	浅鉢	
64	I－2B	72J	33区	-	R1532	3.8	3.8	全面	1	25	3.8	3.8	3	10	10	-	0.3	0.3	-	後期	堀之内	不明	
65	I－2C	B5	9	VI	R43	5.2	4.6	部分	2	12.5	5.1	4.5	3	6	6	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
66	I－2C	C5	12	VIG	R87	7.5	6.1	部分	3	17	4.1	3.5	3	9	9	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
67	I－2C	F6	4G	V	R545	6.5	4.4	全面	4	20	6.2	4.4	3	12	12	-	0.2	0.2	-	不明	不明	不明	図3-8
68	I－2C	F6	20	V	R600	6.7	5.4	全面	2	不明	5.0	5.0	5	18	14?	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
69	I－2C	G6	7	V	R704	5	3.8	全面	2	不明	4.5	3.5	3	9	9	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
70	I－2C	G6	14	VIG	R724	6.5	1.8	全面	1	8.5	6.5	1.8	1.5	5	5	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
71	I－2C	G7	1G	VI下	R773	5.8	1.5	全面	1	9	5.5	1.5	1.5	4	5	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
72	I－2C	H6	3998	VI	R917	5.2	4.2	全面	3	不明	5.2	5.0	4	12	12	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
73	I－2C	H7	5G	-	R941	3.2	2.6	全面	3	12.5	3.0	3.0	2	5	5	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
74	I－2C	J6	16	VG	R1289	5.4	4	部分	3	不明	3.5	3.5	3	12	8	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
75	I－2C	J6	603	VI	R1309	4.5	3.5	部分	1	14.3	3.5	2.8	2.5	8	3?	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
76	I－2C	J7	3851	VIクロ	R1393	5.9	4	全面	1	不明	5.9	4.0	3	9	8	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
77	I－2C	OO	1G	V	R1464	6.6	2.2	部分	2	12.5	6.2	1.6	1.5	4	5	-	0.2	0.2	-	中期	不明	深鉢	
78	I－2C	128	7/9	-	R1480	13.5	12.8	部分	1	52	10.3	3.8	3	9	9	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
79	I－2C	9J	50+55	-	R1489	14.6	10.5	全面	3	90	14.6	10.5	4	9	9	-	0.4	0.4	-	中期	不明	深鉢	図3-9
80	I－2C	C5	12G	V	R1595	12.2	4.5	全面	2	40	12.2	4.5	4	12	12	-	0.4	0.4	-	中期	馬高	深鉢	
81	I－2D	D6	1G	VI	R234	4.8	2.2	全面	1	8.5	4.7	1.8	2	3	6	-	0.35	0.35	-	中期	不明	不明	
82	I－2D	D6	3	VG	R250	6	2.7	全面	1	9	5.0	1.9	1.5	1	4.5	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	図3-10・図6-4
83	I－2E	E4	P4	-	R323	6.8	6.5	全面	3	不明	6.8	6.0	3	11	9	-	0.2	0.2	-	不明	不明	不明	
84	I－2E	J7	4	VI	R1332	5	4.3	全面	3	不明	5.0	4.3	3	9?	10?	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
85	I－2E	J7	15G	VI	R1350	7.8	6.8	全面	2	不明	7.8	6.8	6	14	14	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	図3-11
86	I－2E	J7	4766	VIクロ	R1406	12.8	7	部分	2	不明	11.0	6.2	3	10?	11	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	図3-12
87	I－2F	14J	42	-	LB36	6.3	4.7	全面	1	13	6.3	4.7	4	14	14	-	0.3	0.3	-	不明	不明	深鉢	図3-13・図6-5
88	I－2F	F5	22	V	R504	9.8	7.3	部分	4	不明	7.0	7.0	4	12	13	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
89	I－2G	C5	8	VI	B46	7.5	6.5	全面	2	不明	7.5	6.5	5	13	8	-	0.2	0.2	-	後期	堀之内	不明	
90	I－2G	I7	11G	VI	R1174	6.2	5.5	全面	1	不明	6.2	5.5	3	8	4	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
91	I－2G	J3	6	-	R1224	10.8	8.9	全面	1	52	10.3	8.8	8	10	14	-	0.5	0.6	-	不明	不明	不明	図4-14
92	I－2G	J3	20?HT	-	R1230	7.8	3.2	全面	3	14.3	7.5	2.8	3	5	7	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
93	I－2G	J4	19	-	R1240	5.9	5.4	全面	2	不明	5.9	5.4	5	12	16	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
94	I－2G	I2	24+3	-	B527	7.4	7	全面	2	不明	7.4	7.0	7	16	11	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
95	I－2G	J4	24	-	R1249	9.1	8	部分	1	25	6.5	6.4	5	8	12	-	0.5	0.4	-	不明	不明	不明	
96	I－2G		3	-	R1257	6	4.2	全面	3	不明	5.5	3.8	3	7	5	-	0.5	0.5	-	不明	不明	不明	
97	I－2G	J7	89	V	R1360	5.6	5	全面	1	25	5.6	5.0	4	6	9	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
98	I－2G	22J	189	-	R1705	6	5	全面	1	不明	6.0	5.0	5	9	15	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
99	I－2G	J4	20	-	R1244	6.3	3.5	部分	1	不明	6.3	3.5	3	6	8	-	0.5	0.5	-	中期	不明	不明	
100	I－2G	J3	6	-	R1701	8.6	8.3	全面	1	不明	8.6	8.3	8	11	20	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	図4-15・図6-6
101	I－2G	H2	P2	-	B423	7	7	全面	2	90	6.3	6.3	3	13	8	-	0.3	0.2	-	後期	堀之内	不明	
102	I－2G	I3	12	表層G	B539	5.4	5.3	全面	2	不明	5.0		5	13	7	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
103	I－2G	J5	3	表層G	B673	5.7	4.3	部分	2	不明	2.8	4.2	2	5	4	-	0.2	0.3	-	後期	堀之内	不明	
104	I－2G	D5	20	VIG	B162	7.2	2.3	全面	3	8.5	5.7	1.8	1.5	4	2	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
105	I－2G	I3	5	表層	B530	7.6	6.1	全面	2	不明	6.1	7.6	5	6	7	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	
106	I-2H	J5	3	表層G	BR666	5.6	4.8	全面	1	不明	5.6	4.8	4	13	12	-	0.2	0.2	-	後期	堀之内	不明	
107	I-2H	J4	24	-	BR653	6	5	全面	1	不明	4.5	5.7	4	11	12	-	0.2	0.2	-	後期	堀之内	不明	図4-16
108	I-2H	I3	16	表層G	G381	8.5	7.5	全面	2	不明	8.5	6.5	6	15	15	-	0.2	0.2	-	不明	不明	不明	
109	I－3	E5	18	VIG	R347	7.2	6.5	全面	1	不明	7.2	6.5	5	6	8	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
110	I－3	E6	15G	V	R428	9.2	4.8	全面	3	14.3	8.2	4.5	3	5	4	-	0.4	0.4	-	中期	不明	不明	

表２　底部圧痕観察調査表（２）

通し番号	繊維分類	註記				底部(cm)		底部残存状態		底部残存率%	繊維組織最大長(cm)		密度				素材の幅(cm)			時代	型式	器形	図版資料番号
		大グリッド	小グリッド	層位	圧痕番号	長	短	繊維残存部	状態		A	B	cm間	A(本)	B(本)	他(本)	A	B	他				
111	Ⅰ－3	E7	5	VIG	R459	12	8	全面	1	不明	12.0	8.0	4	9	11	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	図4-17
112	Ⅰ－3	F6	36	V	R533	9	2	全面	1	16.5	8.6	1.8	1.5	4	4	-	0.4	0.4	-	中期	不明	深鉢	
113	Ⅰ－3	F6	504	VI下	R631	12.6	8	全面	2	50	11.0	8.0	5	5	17	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
114	Ⅰ－3	G6	18	VIG	R729	8	7.8	部分	3	不明	8.0	4.7	4	8	9	-	0.3	0.35	-	後期	堀之内	不明	
115	Ⅰ－3	J6	4G	-	R1278	4.8	3.5	全面	1	15	4.0	3.5	3	2	6	-	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	
116	Ⅰ－3	J7	4682	VIクロ	R1401＋1402	9	4.8	全面	1	40	9.0	5.0	4	8？	11	-	0.35	0.35	-	中期	不明	不明	
117	Ⅰ－3	24・9J	-	-	R1520	8.2	6.5	全面	1	23	8.2	6.5	4	9	10	-	0.3	0.3	-	中期	不明	深鉢	
118	Ⅰ－4A	C5	-	VI	R67	10.2	6.2	全面	1	50	8.7	6.5	5	7	6	5	0.4	-	a0.3：b0.3	不明	不明	不明	
119	Ⅰ－4A	C5	20	VI	R113	10.5	8.7	全面	1	不明	8.7	10.5	8	13	12	12	0.35	-	a0.3：b0.3	中期	不明	不明	図4-18・図6-7
120	Ⅰ－4A	D5	20	VIG	R200	10	9.4	部分	3	不明	4.2	8.7	3	4	3	3	0.35	-	a0.35:b0.35	中期	不明	不明	
121	Ⅰ－4A	E6	234	VIクロ	R457	6.2	3.8	全面	1	13	6.2	6.2	3	7	7	5	0.3	0.3	a0.3:b0.3	不明	不明	深鉢	
122	Ⅰ－4A	F5	19G	-	R493	4.5	2.2	全面	2	8.5	2.8	3.2	2	2	2	a3：b2	0.3	-	a0.3：b0.3	中期	不明	深鉢	
123	Ⅰ－4A	F6	3G	V	R534	6	6	全面	4	17	5.8	5.3	3	3	4	4	0.3	-	0.3	不明	不明	不明	
124	Ⅰ－4A	F6	682	VIクロ	R642	11.3	5.6	部分	3	50	11.3	5.6	3	4	5	-	0.4	-	a0.3:b.3	不明	不明	深鉢	
125	Ⅰ－4A	8G	6	-	R706	12	7.6	全面	3	不明	11.7	5.7	4	3	5	5	0.45	-	a0.45:b0.45	中期	不明	不明	
126	Ⅰ－4A	G6	12G	V	R719	3.5	3.5	全面	2	不明	3.3	3.3	3	3	a 3：b2	-	0.5	-	a0.4:b0.4	不明	不明	不明	
127	Ⅰ－4A	I6	2598	VI	R1130	6.9	2.1	全面	2	12.5	2.1	5.5	1	3	2	2	0.5	-	a0.5:b0.5	中期	不明	不明	
128	Ⅰ－4A	I7	22G	Ⅶ	R1189	5	2.2	全面	2	12.5	2.6	3.5	2	3	-	a 2：b 2	0.6	-	a 0.6：b 0.6	中期	馬高	深鉢	
129	Ⅰ－4A	J7	4G	-	R1331	8.5	4	全面	4	10	7.3	3.8	3	3	2	a 2：b 2	0.25	-	a 0.25：b 0.25	中期	馬高	深鉢	
130	Ⅰ－4A	K7	6G	-	R1451	4.5	3.5	全面	2	12.5	3.2	4.4	3	6	3	3	0.5	-	a0.4:b0.4	中期	不明	不明	
131	Ⅰ－4A	I5J	20	ー	R1500	7	12	全面	1	48	7.0	12.0	7	6	-	a 10：b6	0.25	-	a0.35:b0.3	中期	不明	深鉢	
132	Ⅰ－4A	H6	4482	VIクロ	R1699	15.7	15.7	全面	3	92	15.6	15.6	10	12	-	a 12：b 12	0.3	-	a0.3:b0.3	中期	不明	不明	
133	Ⅰ－4B	D5	68	V	R299	15.8	15.2	全面	3	90	14.5	12.0	3	5	6	a 5：b 7	0.4	0.3	a0.25:b0.25	不明	不明	不明	図4-19・図6-8
134	Ⅰ－4B	F6	434	VI	R627	10.3	6.8	部分	3	不明	10.3	6.8	3	6	4	a4?：B3?	0.3	0.3	a.3:b.3	中期	不明	不明	
135	Ⅰ－4B	G7	228	VI	R794	8.6	4.2	全面	3	14.3	5.5	4.0	3	3	3	a 4：b 3	0.3	0.3	a0.3：b0.3	中期	不明	不明	
136	Ⅰ－4B	J7	3270	VIクロ	R1390	7.6	4.5	全面	1	不明	7.6	4.5	4	6	4	-	0.45	0.45	a0.3:b0.3	中期	不明	不明	
137	Ⅰ－5	C1	29	V	R1592	6.2	11.3	部分	1	40	6.2	11.3	5	8	13	ー	0.4	0.4	-	不明	不明	不明	図4-20
138	Ⅱ－1	C5	20	VIG	G18	5	2.6	全面	3	14.3	2.6	5.0	2	5	5	-	0.2	0.2	-	中期	馬高	深鉢	
139	Ⅱ－1	C5	23	VI・FG	G20	6	5.5	全面	3	不明	6.0	5.5	5	11	9	-	0.2	0.2	-	中期	不明	不明	
140	Ⅱ－1	C5	44	VIクロ	G24	10.2	3.5	全面	2	25	10.2	3.5	2	4	4	-	0.3	0.2	-	中期	不明	深鉢	
141	Ⅱ－1	D6	5G	VI	G48	5	3	部分	2	不明	3.0	5.0	3	9	5	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
142	Ⅱ－1	D6	9	VIG	G49	4	3.7	全面	4	不明	3.7	2.3	2	6	3	-	0.2	0.2	-	中期	不明	不明	
143	Ⅱ－1	E5	21	VIG	G69	8	2.5	全面	2	8.5	2.5	8.0	2	8	3	-	0.3	0.25	-	中期	馬高	深鉢	
144	Ⅱ－1	E5	4	VI	G72	6	5	部分	3	不明	4.5	1.5	1	4	2.5	-	0.15	0.2	-	中期	不明	不明	
145	Ⅱ－1	E5	8G	VI	G78	6.3	3.3	全面	2	8.5	1.9	4.5	1.5	4	2	-	0.3	0.3	-	中期	馬高	深鉢	
146	Ⅱ－1	E5	14	VI	G81	6.7	3.1	部分	3	12.5	2.2	6.7	1.5	7	5	-	0.2	0.25	-	中期	馬高	深鉢	
147	Ⅱ－1	G6	1G	-	G138	9.4	4	部分	4	12.8	4.0	9.4	3	10	8	-	0.2	0.3	-	不明	不明	深鉢	
148	Ⅱ－1	G7	4G	VI	G155	3.2	1.2	全面	2	5	1.2	3.2	1	5	3	-	0.2	0.2	-	中期	不明	深鉢	
149	Ⅱ－1	G7	601	VI	G164	7.2	6.2	部分	3	12.5	5.0	5.0	5	15	9	-	0.35	0.4	-	中期	馬高	不明	
150	Ⅱ－1	H3	1	表層	G168	5.5	4.2	全面	1	不明	4.2	5.5	3	15	14	-	0.1	0.1	-	後期	堀之内	不明	図4-21・図7-9
151	Ⅱ－1	H3	18G	-	G172	3.4	2.5	全面	2	不明	2.7	2.2	2	8	6	-	0.18	0.18	-	後期	堀之内	不明	
152	Ⅱ－1	H6	3960	VIクロ	G196	4	2.3	全面	3	8.3	2.3	4.0	2	7	3	-	0.2	0.25	-	中期	馬高	深鉢	
153	Ⅱ－1	H7	1339	VI	G210	4.5	3.5	全面	1	不明	3.5	4.5	3	16	9	-	0.1	0.1	-	後期	堀之内	不明	
154	Ⅱ－1	H7	2710	VI	G212	5.2	3.5	部分	3	25	3.5	4.5	3	12	6	-	0.3	0.2	-	中期	馬高	不明	
155	Ⅱ－1	I5	3-45	-	G235	2.8	2.1	全面	1	不明	2.1	2.8	2	10	5	-	0.15	0.15	-	不明	不明	不明	
156	Ⅱ－1	I6	66	VI	G248	6.1	5.2	全面	2	20	6,1	5.2	5	20	9	-	0.2	0.25	-	中期	馬高	深鉢	図4-22
157	Ⅱ－1	I7	12G	VIクロ	G267	6	3.7	全面	3	2	4.8	1.6	1.5	4	3	-	0.3	0.3	-	中期	馬高	深鉢	
158	Ⅱ－1	I7	4353	VI	G278	8.2	3.1	部分	3	12.5	3.4	3.2	3	9	7	-	0.2	0.25	-	中期	馬高	深鉢	
159	Ⅱ－1	J3	13	-	G281	8.6	3.9	全面	1	40	3.2	7.0	3	10	9	-	0.15	0.15	-	後期	堀之内	不明	
160	Ⅱ－1	J5	1G	-	G298	3.4	3.1	全面	3	14.3	2.5	2.8	2	10	6	-	0.1	0.1	-	後期	堀之内	深鉢	
161	Ⅱ－1	J5	3	-	G301	3.3	3.2	部分	2	5?	2.2	3.3	2	7	6	-	0.1	0.1	-	後期	堀之内	深鉢	
162	Ⅱ－1	J9	7	-	G342	4.3	1.5	全面	1	20	4.3	1.5	1.5	4	3	-	0.15	0.15	-	後期	堀之内	浅擬?	
163	Ⅱ－1	P56	5/9	-	G363	8.5	8.3	部分	2	不明	8.0	5.2	5	12	8	-	0.3	0.3	-	中期	不明	不明	
164	Ⅱ－1	表採	-	-	G365	6.2	4.2	部分	4	25	4.2	3.1	3	6	3	-	0.5	0.4	-	不明	不明	深鉢	
165	Ⅱ－2	C5	13G	Ⅶ	G16	5	4.7	全面	2	不明	5.0	4.7	4	3	5	-	0.4	0.25	-	不明	不明	深鉢	
166	Ⅱ－2	C5	13G	VI	G17	5	4.7	全面	1	不明	5.0	4.7	4	3	5	-	0.4	0.25	-	中期	不明	深鉢	

表３　底部圧痕観察調査表（３）

通し番号	繊維分類	註記				底部(cm)		底部残存状態		底部残存率%	繊維組織最大長(cm)		密度				素材の幅(ｃｍ)			時代	型式	器形	図版資料番号
		大グリッド	小グリッド	層位	圧痕番号	長	短	繊維残存部	状態		A	B	ｃｍ間	A(本)	B(本)	他(本)	A	B	他				
167	Ⅱ－2	H6	12G	Ⅵ	G184	3.6	3	全面	1	12.5	3.0	3.6	3	4	6	-	0.3	0.3	-	中期	馬高	深鉢	
168	Ⅱ－2	I 7	3	Ⅵ	G263	6.2	4.2	全面	1	不明	6.2	4.2	3	4	6	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
169	Ⅱ－2	K7	2	Ⅵクロ	G350	4.1	2.7	全面	1	不明	2.7	4.1	2.5	4	5	-	0.3	0.2	-	不明	不明	不明	
170	Ⅱ－2	OO	36	V	G360	4.2	4.2	全面	1	20	4.2	4.2	4	4	6	-	0.25	0.3	-	中期	不明	不明	図4-23･図7-10
171	Ⅱ－2	F6	4	VIG	P5	8.5	8.5	全面	3	66	7.4	8.2	5	6	14	-	0.2	0.2	-	中期	馬高	不明	
172	Ⅱ－2	F6	24	VIG	P6	6.8	3.5	全面	3	不明	4.0	5.0	3	6	9	-	0.2	0.2	-	中期	馬高	不明	
173	Ⅱ－2	F6	639	Ⅵクロ	P7	16.7	15.4	全面	1	90	15.4	16.7	6.5	8	17	-	0.25	0.2	-	中期	不明	深鉢	
174	Ⅱ－2	J 7	1G	Ⅵ	P12	10	5,4	全面	3	13	5.5	6.8	4	5	8	-	0.3	0.25	-	中期	不明	浅撥	
175	Ⅱ－2	J 7	4G	Ⅵ	P13	9.7	5.7	全面	1	不明	5.7	9.7	6	8	12	-	0.32	0.3	-	中期	不明	不明	図4-24･図7-11
176	Ⅱ－3	E6	20G	Ⅵ	P4	6.5	5.5	全面	1	不明	6.5	4.4	4	5	5	-	0.2	0.2	-	不明	不明	不明	図4-25･図7-12
177	Ⅱ－3	H4	21G	Ⅵ	GR175	2.8	2.8	全面	3	不明	2.8	2.8	2	3	3	-	0.3	0.3	-	中期	馬高	深鉢	
178	Ⅱ－4	C4	21	VG	YG7	4.7	3.2	全面	2	15	4.7	3.2	2	7	3?	-	0.2	0.1	-	不明	不明	不明	図4-26･図7-13
179	Ⅱ－4	D5	8G	V	YG12	5.3	4.2	全面	3	60	5.3	4.2	3	9	7	-	0.2	0.2	-		不明	深鉢	
180	Ⅱ－4	D5	94	Ⅵ	YG14	8.5	7.5	全面	3	50	8.5	7.5	3	11	5?	-	0.2	0.2	-	不明	不明	不明	
181	Ⅱ－4	E2	P9	-	YG19	8.3	5.5	全面	4	不明	8.3	5.5	4	14	7	-	0.3	0.2	-	不明	不明	不明	
182	Ⅱ－4	F6	25	Ⅵ	YG33	5.2	2.1	全面	3	13	5.2	2.1	2	8	4	-	0.2	0.2	-	不明	不明	不明	
183	Ⅱ－4	G2	6	V	YG36	6.5	4.7	全面	3	不明	4.5	4.7	3	9?	6?	-	0.2	0.2	-	不明	不明	不明	
184	Ⅱ－4	G6	3G	Ⅵ	YG38	7.8	5.2	全面	3	45	7.8	5.2	3	11?	8?	-	0.2	0.2	-	不明	不明	不明	
185	Ⅱ－4	G6	1845	Ⅵクロ	G149	9	11	全面	4	不明	9.0	11.0	4	12?	10?	-	0.25?	0,3?	-	不明	不明	不明	
186	Ⅱ－4	J 6	1772	Ⅵ	YG62	4.4	4.2	全面	4	不明	4.4	4.2	4	11	8?	-	0.25	0.25	-	不明	不明	不明	
187	Ⅱ－4	J 6	1819	Ⅵ	YG81	8.6	8.5	全面	2	100	8.6	8.5	5	12	7	-	0.2	0.15	-	中期	不明	不明	図4-27
188	Ⅱ－5	F6	13	VIG	LBG14	11	8	部分	4	45	10.5	3.5	3	8	3.5	-	0.23	0.4	-	中期	馬高	不明	
189	Ⅱ－5	K7	517	Ⅵクロ	LBG33	6.8	6	全面	2	17	5.4	6.5	5	16	9	-	0.2	0.2	-	不明	不明	不明	図4-28
190	Ⅱ－5	K7	165D	-	LBG34	6.8	6.6	全面	2	25	5.5	5.5	5	14	9	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	
191	Ⅲ－1A	C5	14	VIFG	O10	3.4	3	全面	2	不明	3.0	3.4	3	4	8	-	0.2	0.3	-	中期	馬高	不明	
192	Ⅲ－1A	E5	13	VIG	O21	6.6	5.1	全面	1	不明	5.1	6.6	5	4	13	-	0.3	0.5	-	中期	馬高	不明	図5-29
193	Ⅲ－1B	9J	104	-	O143	11	9	全面	2	40	10.2	9.0	9	9	8	7	0.4	0.4	0.4	中期	不明	不明	図5-30
194	Ⅲ－1B	I 5J	104	-	O145	11.3	9.8	部分	2	85	8.6	10.2	5	5	14	-	0.3	0.3	-	中期	馬高	深鉢	
195	Ⅲ－1C	H7	4451	Ⅵ	O94	12.9	11.8	全面	1	80	11.8	12.9	5	7	11	-	0.3	0.5	-	不明	不明	不明	図5-31･図7-14
196	Ⅲ－2	H7	4138	Ⅵクロ	P9	6.2	5.8	全面	1	不明	6.2	5.8	5	2	2	-	0.3	0.3	-	不明	不明	不明	図5-32･図7-15
197	Ⅲ－3A	D6	19	VIG	G55	7.1	3.5	全面	1	12.5	3.5	7.1	1.5	a2 b2	a2 b2	-	a0.3 b0.3	a0.3 b0.4	-	中期	不明	深鉢	図5-33･図7-16
198	Ⅲ－3A	F6	559	Ⅵクロ	PU2	12.2	11.8	部分	4	100	11.1	10.8	2	a3 b3	a6 b?	-	a0.3 b0.2?	a0.3 b0.3	-	不明	不明	不明	
199	Ⅲ－3A	G4	P145	-	PU3	11.2	8.6	全面	3	70	8.6	11.2	3	a14? b14?	a13? b13?	-	a0.2 b0.2	a0.1 b0.1	-	不明	不明	深鉢	図5-34･図7-17
200	Ⅲ－3A	G7	516	Ⅵクロ	PU6	13.2	13	部分	4	99	7.0	7.0	1.5	a2 b4	a5 b6	-	a0.3 b0.3	a0.3 b0.3	-	不明	不明	深鉢?	
201	Ⅲ－3A	I 7	153	Ⅵ	PU9	8.2	4.3	全面	3	33	5.0	5.7	1	a2 b3	a2 b2	-	a0.3 b0.3	a0.3 b0.3	-	中期	不明	不明	
202	Ⅲ－3A	I 8	20	VIG	PU10	5.5	4.7	全面	4	不明	5.5	4.7	2	a3 b4	a6? b6?	-	a0.3 b0.2?	a0.3 b0.1 5	-	中期	不明	不明	
203	Ⅲ－3B	G7	550	Ⅵ	G163	14.6	11.4	部分	2	90	14.6	11.4	3	7	7	a7 b7	0.35?	0.35?	0.2	不明	不明	不明	図5-35･図7-18
204	Ⅲ－4A	H3	1･17･6J	-	R1703	7.4	4.5	全面	1	35	4.5	7.4	1	a2? b3?	a1.5 b2	-	a0.3 b0.4	a0.2 b0.4	-	後期	堀之内	不明	図5-36
205	Ⅲ－4A	G6	21	V	B382	8.4	6	全面	3	28	7.0	5.8	1.5	a2 b4	a2? b3?	-	a0.3 b0.3	a0.2 b0.2	-	中期	不明	不明	図5-37
206	Ⅲ－4A	H6	4181	Ⅵクロ	PU7	3.2	2.3	全面	3	8.3	3.2	2.3	1	a?3 b3	不明	-	a0.3 b0.3	a0.2? B0.3	-	中期	不明	深鉢	
207	Ⅲ－4A	I 5	13	表層G	LB24	4.8	2.7	全面	2	20	3.2	3.2	1	a3 b3	不明	-	a0 3 bo0 3	a不明 b0.3	-	不明	不明	深鉢	
208	Ⅲ－4B	H7	4197	Ⅳ	LB22	6.4	2.4	部分	4	10	6.4	2.4	2	3	5	不明	0.2	0.2	0.3	中期	馬高	深鉢	図5-38
209	Ⅲ－5	J 7	11	VIG	LB29	7.2	2	全面	1	8	7.2	2.0	2	5	7	-	0.2	-	-	中期	馬高	深鉢	図5-39･図7-19
210	Ⅳ－1	E5	18	VIG	Y8	8.6	8.6	全面	1	100	8.6	8.6								中期	不明	深鉢	
211	Ⅳ－1	H4	P23	-	Y29	5	5	全面	2	不明	5.0	5.0								不明	不明	不明	
212	Ⅳ－1	I 7	14	VIG	Y53	8.5	7.8	全面	3	不明	8.5	7.8								不明	不明	不明	
213	Ⅳ－1	J 7	4566	Ⅵクロ	Y68	7	6.4	全面	1	100	7.0	6.4								中期	不明	深鉢	図5-40･図7-20
214	Ⅳ－1	I 6J	7	-	Y70	14.2	12.3	全面	2	75	14.2	12.3								不明	不明	不明	
215	Ⅳ－1	I 6J	21	-	Y71	8.2	8.2	全面	1	100	8.2	8.2								不明	不明	深鉢	
216	Ⅳ－1	H4	19-59-4J	-	Y86	15.7	14	全面	1	95	14.0	15.7								不明	不明	深鉢	図5-41
217	Ⅳ－2	G6	2008	Ⅵ	Y27	5	4.8	全面	4	100	5.0	4.8								中期	不明	深鉢	図5-42

表４　底部圧痕観察調査表（４）

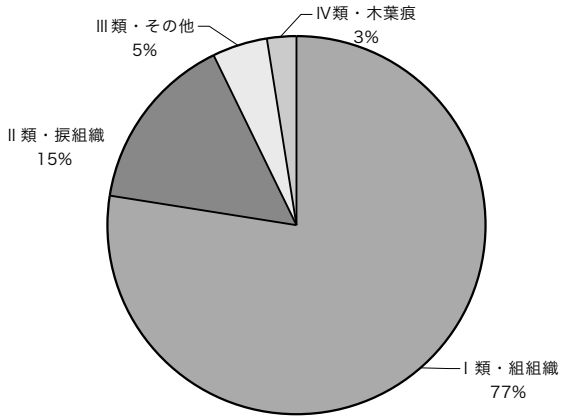


図１　底部繊維組織圧痕技法分類

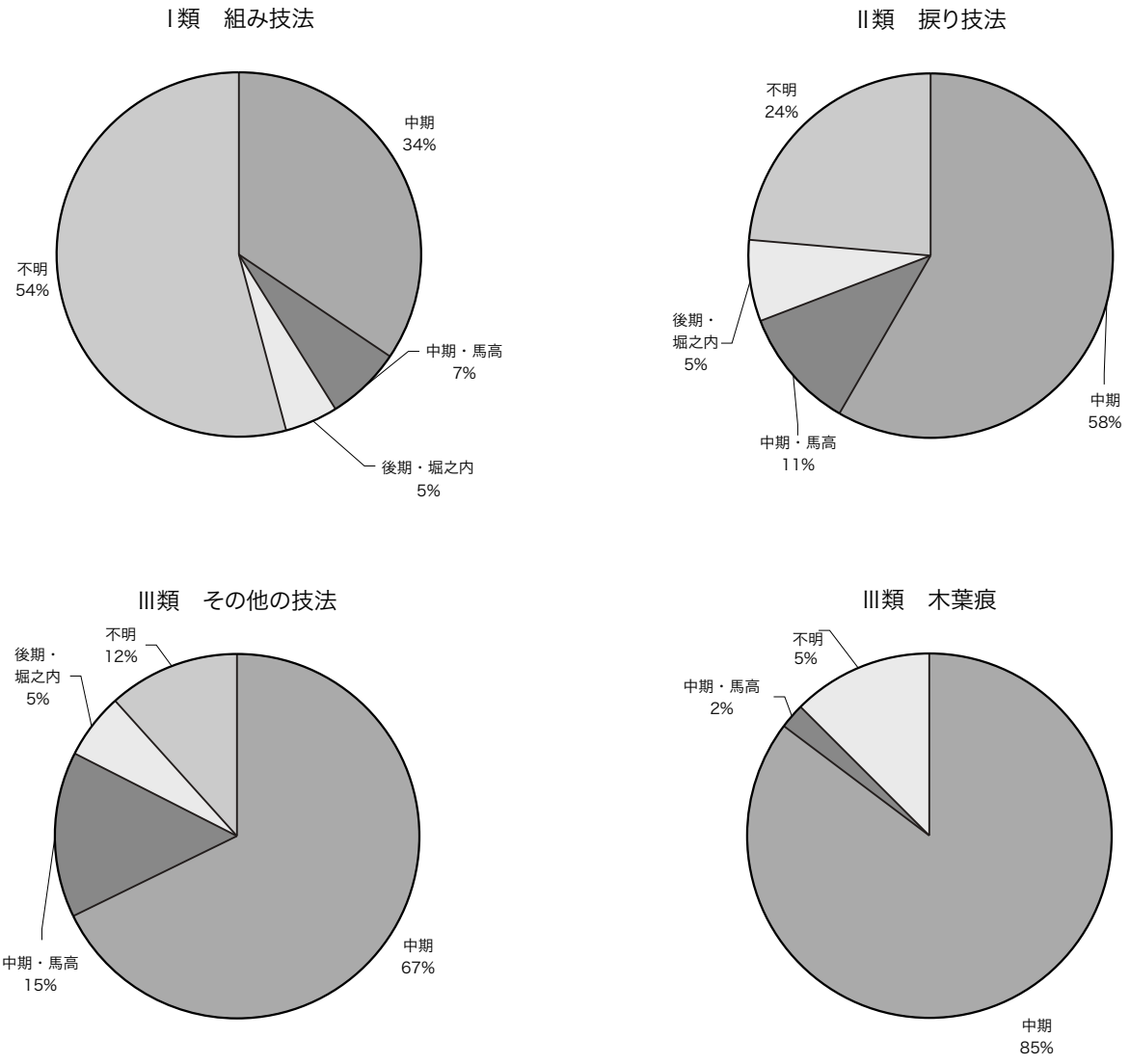


図２　底部繊維組織圧痕時期型式分類

図３　道尻手遺跡出土土器底部圧痕拓本（１）（S=1/2）

図４　道尻手遺跡出土土器底部圧痕拓本（２）（S=1/2）

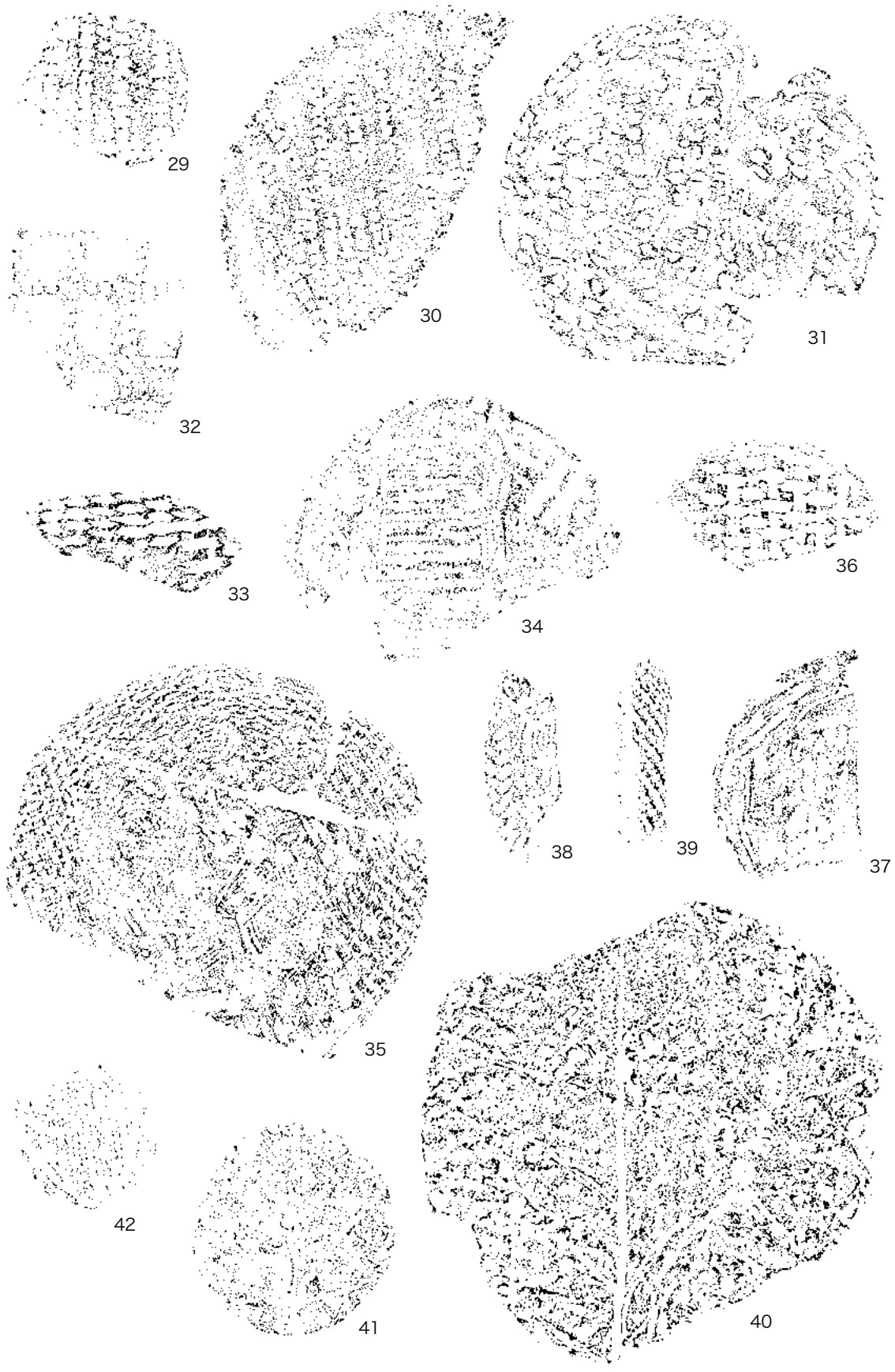


図５　道尻手遺跡出土土器底部圧痕拓本（３）（S=1/2）

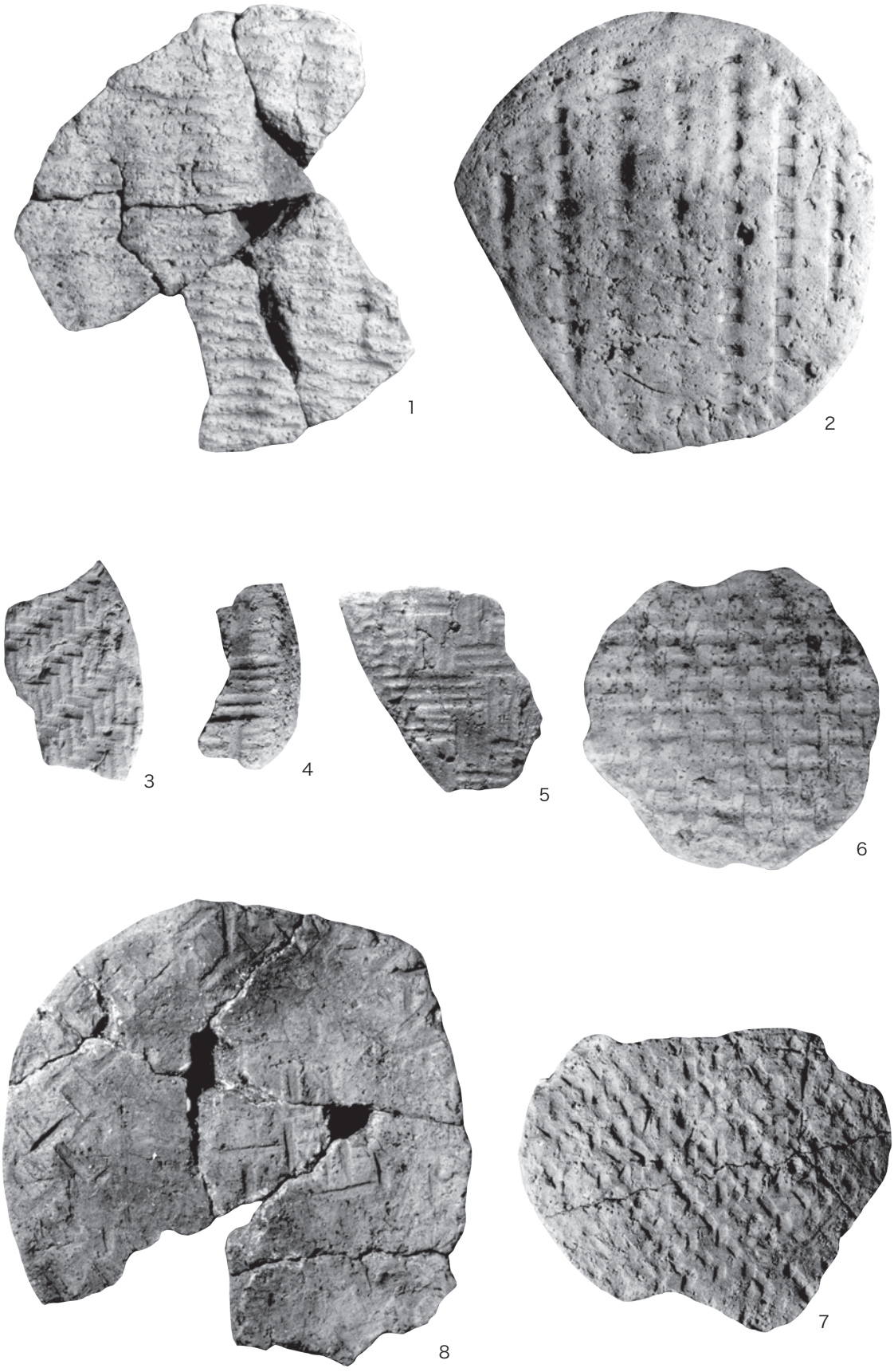


図６　道尻手遺跡出土土器底部圧痕写真（１）（S=1/2）

図７　道尻手遺跡出土土器底部圧痕写真（２）（S=1/2）

＜付編２＞

津南町道尻手遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料について

（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　三ツ井朋子

１　分析の目的

日本列島で使用されていた旧石器時代から古墳時代までの赤色顔料は、現在大きく分けて２種類あることが自然科学分析によって確認されている。一つは硫化水銀（HgS）を主成分とする「水銀朱」、もう一つは酸化第二鉄（Fe2O3）を主成分とする「ベンガラ」である。道尻手遺跡においても土器や土製品に赤色顔料の塗布が認められる。

本報告では、道尻手遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料を対象として、本遺跡において使用された赤色顔料の種類を把握するとともに、赤色顔料と塗布された遺物の時期・系統・器種等の属性を照らし合わせ、本遺跡における赤色顔料の利用状況を明らかにすることを目的とした。

２　観察および分析の方法

今回の分析対象遺物は、道尻手遺跡から出土した赤色顔料の塗布が認められる遺物 44 点（縄文時代中期の土器 39 点、土製品 1 点、耳飾 4 点）と、赤色顔料の原料ではないかと推定される自然遺物２点の合計 46 点である。試料の調整・観察・分析にあたっては、（財）フォッサマグナミュージアムの機器を借用させていただき、宮島宏氏からご指導いただいた。

試料の採取・調整　ピンセットとカッターを用いて遺物に塗布された赤色顔料を削り取った後、実体顕微鏡下で混入した土砂を取り除き、観察・分析試料とした。また、赤色顔料の原料ではないかと推測された自然遺物の試料 45・46 については、不純物の少ない部分から試料を採取し、遺物付着顔料と同様に調整した。

走査型電子顕微鏡による顔料粒子の観察　顔料粒子の形状を確認するため、カーボンテープにのせた試料にカーボン蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（SEM）による二次電子像の観察を行った。観察には日本電子社製走査型電子顕微鏡 JSM－6300 を加速電圧 15kv の条件下で使用し、800～1500 倍で観察した。

エネルギー分散型Ｘ線分析装置による存在元素の観察　試料が「水銀朱」か「ベンガラ」かを判別する鍵となる Fe（鉄）と Hg（水銀）の存在を確認するため、前述の SEM に OXFORD 社製エネルギー分散型Ｘ線分析装置 LinkQX2000 を連動させ、存在元素の確認を行った。

３　結果と考察

対象試料の SEM による顔料粒子の観察と、Ｘ線分析の結果を図８～ 22 と表５にまとめた。

道尻手遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料の分類　SEM 観察、およびＸ線分析の結果、本遺跡で使用された赤色顔料は「水銀朱」と「ベンガラ」であり、水銀朱は試料 39（耳飾）のみでそれ以外は全てベンガラであることが判明した。さらに「ベンガラ」は、粒子の形状・検出元素から３種類に分類できる。以下に本遺跡の赤色顔料の分類を示す。

水銀朱（図８・14）　塊状を呈し、検出元素に Hg（水銀）が顕著に認められるもの。

ベンガラA（図9・15～17） 直径約1μm、長さ約2～10μmのパイプ状の粒子が塊を形成、あるいは分散した状態で存在し、検出元素にFe（鉄）が認められるもの。一般にパイフ状ベンガラと呼ばれ、ベンガラの中でも鉄の含有率が高く、質が良いと考えられている。本遺跡ではパイプ状粒子が多いもの（図15）と少ないもの（図17）が認められ、中にはパイプ状粒子が塊（図16）になったものも見られた。

ベンガラB（図10・18・19） 表面に凹凸のあるブロック状を呈し、検出元素にFe（鉄）、Si（ケイ素）が顕著に認められるもの。粒子の大きさは長径約5～90μmとばらつきがあり、原料を磨り潰す程度の差によると考えられる。

ベンガラC（図11・20） ベンガラA・Bと異なり、不定形の細かい粒子が塊状を形成、あるいは分散した状態で存在し、検出元素にFe（鉄）が認められるもの。

本道跡では以上の4種類の赤色顔料が確認されたが、その存在比率は水銀朱2.3%（1点）、ベンガラA 36.4%（16点）、ベンガラB 56.8%（25点）、ベンガラC 4.5%（2点）であった。

道尻手遺跡出土自然遺物の分析結果　本遺跡では、赤色顔料の製造を直接証明する道具類（赤色顔料の付着した石皿・磨石など）は出土していないが、赤色顔料の原料を追究するため、遺跡出土の赤色を呈する礫（試料45）と褐鉄鉱に類似する礫（試料46）についても遺物に塗布された顔料と同様にSEM親察とX線分析を実施した。SEM観察では試料45・46はいずれも不定形の細かい粒子が塊状を形成、あるいは分散しており（図21・22）、ベンガラCと類似することが確認された。また、X線分析では両者とも主要検出元素にFe（鉄）を検出し（図12・13）、酸化鉄系の鉱物を含むことが確認された。資料46に類似する褐鉄鉱は、約620～800℃で30分以上加熱すると鉱物中に含まれるα－FeOOH（針鉄鉱）の構造水が離脱しα－Fe_2O_3（赤色赤鉄鉱）になるため赤色に変化し、粉砕が容易になることがわかっている［三ツ井1996］。今後、周辺の遺跡において、試料45や46のような礫が赤色顔料の原料となりうることを念頭に、これらの出土状況を注意深く観察する必要がある。

道尻手遺跡で使用された赤色顔料の原料　ここでは、本遺跡で確認された4種類の赤色顔料の原料について考えてみたい。

水銀朱の原料　赤色を呈する鉱物「辰砂」が原料であると考えられる。現在、辰砂を含む水銀鉱床の分布は、北海道から東北北部と、東海・近畿から瀬戸内・北九州にかけての一帯に産出地が限られ［堀1953］、本遺跡の周辺では確認できないため、他地域から搬入された可能性が高い。原料の入手は容易ではなかったと推測される。

ベンガラAの原料　ベンガラAに見られるパイプ状粒子は、岡田文男氏が指摘した鉄バクテリアが生成する生体鉱物の塊［岡田1997］であると考えられる。崖端の湧水部や水田、地下水・伏流水中で赤褐色をしている場所では鉄細菌が棲息し、綿屑状に浮遊したり、沈殿物を生じていることがある。これは鉄細菌が水中に溶存している鉄分を体内に蓄積して生成する生体鉱物の一種であり、縄文人がこれらを集めて加熱・粉砕し、赤色顔料に利用していたものと考えられる。中郷村籠峰遺跡では、縄文時代後・晩期の遺物包含層から生体鉱物を採集して加熱した塊、あるいは水が引いた後に酸化し固結した塊と考えられる赤色を呈したパイプ状物質の塊が見つかっている［三ツ井2000］。

ベンガラBの原料　ベンガラBの二次電子像・検出元素は、表面が風化した鉄石英の状況と類似する

が、今後精査が必要である。県内で軟化した鉄石英を赤色顔料の原料にしていると考えられる例として、旧石器時代の下田村荒沢遺跡［三ツ井 1994］、縄文時代前期の中条町二軒茶屋遺跡［三ツ井 2003］、縄文時代後期の朝日村元屋敷遺跡［三ツ井 1996］がある。

ベンガラCの原料　自然遺物の分析の結果、ベンガラCの原料は赤色を呈する礫と褐鉄鉱に類似する礫の可能性が高い。赤色の礫はそのまま粉砕し、茶色の礫は加熱して赤変・軟化させてから粉砕したものと推測される。

産地が限定される水銀朱に比べ、ベンガラは原料・製法ともに未解明の部分が多く、このことが発掘現場での原料の検出を困難にしている。今後、遺物に塗布された赤色顔料だけでなく赤色顔料の原料と推測される自然遺物についても積極的に採取･分析し、遺物に塗布された赤色顔料との比較を丹念に行っていく必要がある。

道尻手遺跡における赤色顔料の利用状況　ここでは、確認された 4 種類の赤色顔料の利用状況を見ていきたい。

水銀朱はベンガラと比較して非常に鮮やかな赤色を示す顔料であるが、先述のとおり入手が困難であったと推測される。本遺跡では、耳飾 1 点にのみ水銀朱が確認されており、土器には全てベンガラが塗布されている。耳飾では良質とされるベンガラAの利用率も高く、道尻手遺跡の人々がこれらの顔料を用途に応じて使い分けていた可能性が考えられる。中郷村籠峰遺跡の縄文時代晩期の土器や土製品でも水銀朱とベンガラの使い分けが確認できる［三ツ井 2000］。また、顔料の種類と遺物の所属時期・系統・遺物種類を照らし合わせてみると以下のような傾向が明らかとなった。①浅鉢は縄文時代中期全般にわたって他の器種に比べて赤彩される比率が高い。②赤色塗彩した浅鉢は、大木 7b 併行期では全て北陸系であるが、大木 8a 併行期以降は関東系が主流となる。③北陸系の浅鉢はベンガラBを使用する傾向が強い。

赤色顔料の調査、特に縄文時代の赤色顔料の調査はまだ緒についたばかりである。今後、分析件数を重ねていくことにより、原料・製法・用途・変遷などが徐々に明らかとなっていくであろう。

引用参考文献

岡田文男　1997 「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第 14 回大会研究発表会』

上條朝宏　2000 『資料目録 11』 東京都埋蔵文化財センター

堀　純郎　1953 『本邦の水銀鑛床』 地質調査所報告第 154 号

三ツ井朋子　1994 「荒沢遺跡出土の赤色鉄石英礫片について」『下田村文化財調査報告書第 32 号 荒沢遺跡』下田村教育委員会

三ツ井朋子　1996 「酸化鉄系赤色顔料の製法に関する復元的実験」『新潟考古学談話会会報』 第 16 号

三ツ井朋子　2000 「籠峰遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料について」『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ』遺物編　中郷村教育委員会

三ツ井朋子　2003 「二軒茶屋遺跡出土遺物に付着した赤色顔料について」『中条町埋蔵文化財調査報告書第 27 集　二軒茶屋遺跡』中条町教育委員会

謝辞

今回の分析にあたっては、津南町教育委員会の佐藤雅一･阿部昭典両氏より資料を快く提供していただくとともに、遺物に対するご教示をいただいた。記して感謝の意を表します。

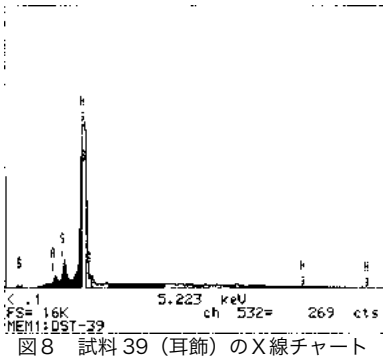


図8　試料 39（耳飾）のX線チャート

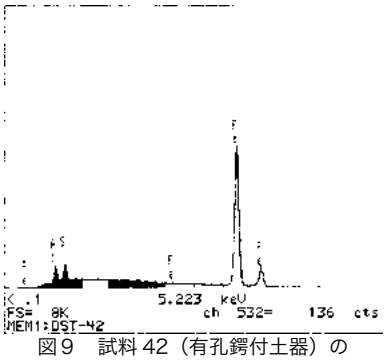


図9　試料 42（有孔鍔付土器）の X線チャート

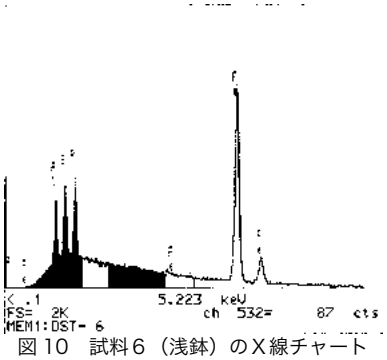


図 10　試料 6（浅鉢）のX線チャート

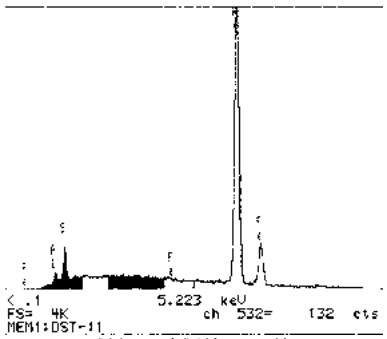


図 11　試料 11（浅鉢）のX線チャート

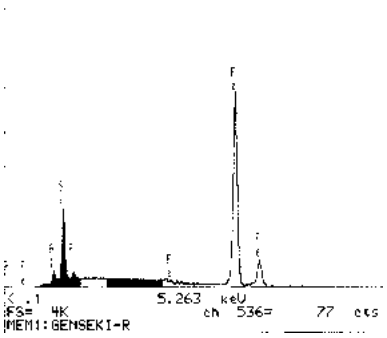


図 12 試料 45（原石：赤）のX線チャート

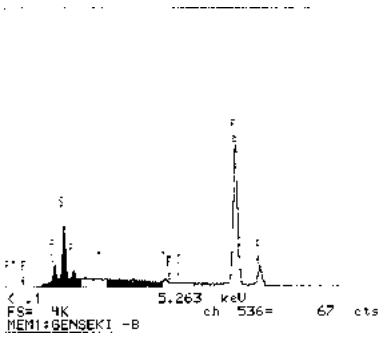


図 13　試料 46（原石：茶）のX線チャート

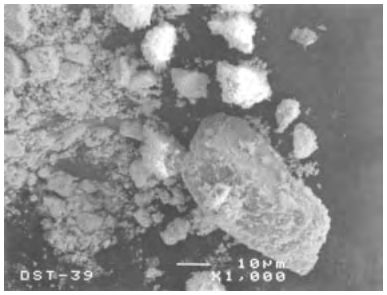


図 14　試料 39（耳飾）の二次電子線像

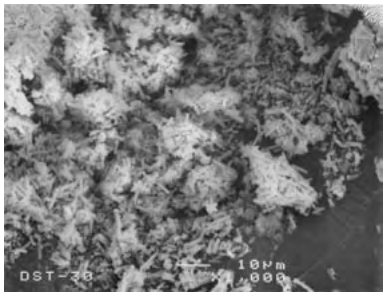


図 15　試料 30（浅鉢）の二次電子線像

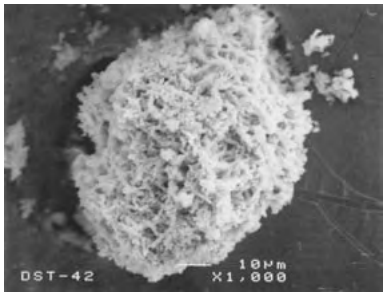


図 16　試料 42（有孔鍔付土器）の 二次電子線像

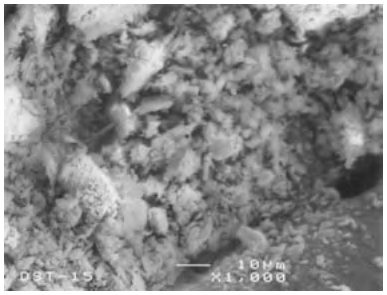


図 17　試料 15（浅鉢）の二次電子線像

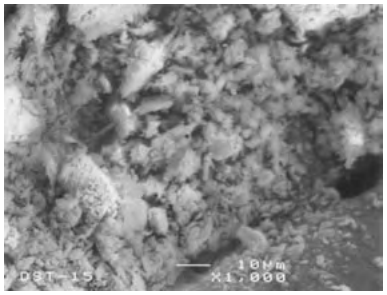


図 18　試料 6（浅鉢）の二次電子線像

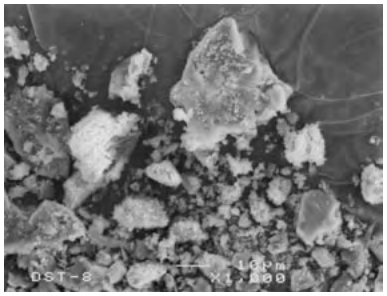


図 19　試料 8（浅鉢）の二次電子線像

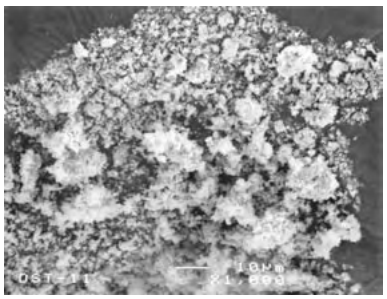


図 20　試料 11（浅鉢）の二次電子線像

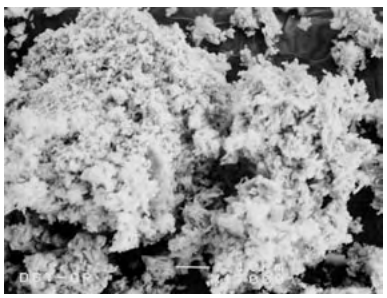


図 21　試料 45（原石：赤）の二次電子線像

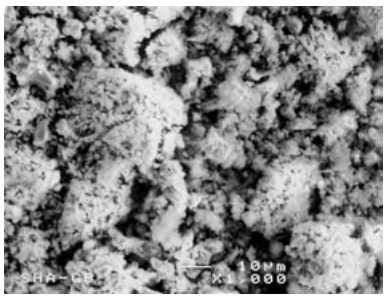


図 22　試料 46（原石：茶）の二次電子線像

試料№	報告書遺物№	遺物種類	主要検出元素	赤色顔料の種類	パイプ状粒子の量	時代・時期	時期細分	系統	出土位置		SEM写真・X線チャート
									グリッド	層位	
1	3346	浅鉢	Si、Al、Fe、S、Ca	ベンガラB			大木7b併行	北陸	F6	Ⅵ下	
2	3429	浅鉢	Al、Si、Fe、S、Ca、P	ベンガラB			大木8a-8b併行	関東	H7	Ⅵ下	
3	3170	有孔鍔付土器	Fe、Al、Si、P	ベンガラA	多		大木7b-8a併行		J7	Ⅵｸﾛ	
4	3160	有孔鍔付土器	Fe、Si、Al	ベンガラC			大木7b-8a併行		J7	Ⅵｸﾛ	
5	3454	浅鉢	Si、Al、Fe、S、P、K、Ca	ベンガラB			大木8a-8b併行		F6	Ⅴ	
6		浅鉢	Fe、P、Si、Al	ベンガラB			大木8a-8b併行	関東	F5	Ⅴ	図10・18
7	3432	浅鉢	Fe、Si、Al、P	ベンガラA	多		大木8a-8b併行	関東	I6	Ⅵ	
8	3438	浅鉢	Si、Al、Fe、P、K、Ca	ベンガラB			大木8a-8b併行	関東	G6	Ⅵ	図19
9		浅鉢	Fe、Al、Si、P、K、Ca	ベンガラB			大木8a-8b併行	関東	J7	Ⅵ	
10	3446	浅鉢	Fe、Si、Al、P、Mg	ベンガラA	少		大木8a-8b併行	関東	E6	Ⅵ	
11	3447	浅鉢	Fe、Si、A1、P	ベンガラC			大木8a-8b併行	関東	I6	Ⅵ	図11・20
12	1340	浅鉢	Fe、Si、A1	ベンガラA	多		大木8a-8b併行	関東	HT		
13		浅鉢	Fe、Si、Al、P、K	ベンガラA	少		大木8a-8b併行	関東	B6	Ⅵ	
14		浅鉢	Fe、Si、Al、P、K	ベンガラA	少		大木8a-8b併行	関東	E3		
15	3436	浅鉢	Si、Al、Fe	ベンガラA	少		大木8a-8b併行	関東	I7	Ⅵ	図17
16	3351	浅鉢	Si、Al、Fe、K	ベンガラB			大木7b併行	北陸	C5		
17		浅鉢	Si、Al、Fe、K	ベンガラA	少		大木7b併行	北陸	D5	Ⅵ	
18	3378	浅鉢	Si、Al、Fe、P、K	ベンガラB			大木7b併行	北陸	J7	Ⅵ	
19	3368	浅鉢	Si、Fe、Al、K、P	ベンガラB			大木7b併行	北陸	I6	Ⅵ	
20		浅鉢	Si、Al、Fe、P、K	ベンガラB			大木7b併行	北陸	G6	Ⅵｸﾛ	
21		浅鉢	Si、Al、Fe、P、K	ベンガラB		縄文時代	大木7b併行	北陸	J6	Ⅵ	
22	3144	両耳壷?	Fe、Al、Si、P、Ca	ベンガラB		中期	中期末葉	関東	D5	Ⅵ	
23	1156	鉢	Fe、Si、Al、P	ベンガラA	多		中期末葉	関東	I4		
24	3146	不明	Fe、Si、Al、P	ベンガラB			中期末葉	関東	J4		
25		不明	Fe、Al、Mn、Si、P	ベンガラB			大木7b-8a併行	関東	i6	Ⅵｸﾛ	
26		不明	Fe、Al、Si、P、K	ベンガラB					H4		
27		不明	Si、Al、Fe、P、K	ベンガラB					I5-7		
28		鉢	Fe、Si、Al、P	ベンガラA	多		大木7b-8a併行		H6	Ⅵ	
29		不明	Fe、Al、Si、P	ベンガラA	少				H4	表層	
30	3418	浅鉢	Fe、Si、Al、P、Ca	ベンガラA	多		大木8a併行	関東	H7	Ⅵｸﾛ	図15
31	3455	浅鉢	Fe、Si、Al、P、K	ベンガラB			大木8a-8b併行	関東	G6	Ⅵ	
32	2320	鉢	Fe、Al、Si、Mn	ベンガラB			大木8a併行	北陸	J4	Ⅵ	
33		有孔鍔付土器	Fe、Si、Al、P、K	ベンガラA	多		大木7b-8a併行		I7	Ⅵ	
34		不明	Fe、Si、Al、P	ベンガラB					C2		
35		不明	Fe、Al、Si、P、Ca,K	ベンガラB					J7	Ⅵｸﾛ	
36	357	耳飾	Fe、Al、Si、P	ベンガラA	多				H7	Ⅵｸﾛ	
37	360	耳飾	Fe、Al、Si、P、K	ベンガラB					B5	VG	
38	362	耳飾	Fe、Si、Al、P	ベンガラA	多				D5	VG	
39	312	耳飾	Hg、S、Si、Al	水銀朱					10J		図8・14
40	369	土製品	Si、A1、Fe	ベンガラB					H7	Ⅵ	
41	3166	有孔鍔付土器	Fe、Si、Al	ベンガラB			大木7b-8a併行		D5	Ⅵｸﾛ	
42	3168	有孔鍔付土器	Fe、Si、A1	ベンガラA	多		大木7b-8a併行		H7	Ⅵ	図9・16
43		有孔鍔付土器	Si、A1、Fe、K、P	ベンガラB			大木7b-8a併行		E6	Ⅵｸﾛ	
44	3157	有孔鍔付土器	Fe、Al、Si、P	ベンガラB			大木7b-8a併行		D5	VIG	
45		原石(赤色)	Fe、Si、Al、P						J5-6		図12・21
46		原石(茶色)	Fe、Si、Al、P						J7	Ⅵｸﾛ	図13・22

表５　道尻手遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料観察表

＜付編３＞

自然科学分析（１）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

道尻手遺跡は、信濃川中流部右岸に広大に発達する河成段丘群の一角に位置する。遺跡が立地する段丘は貝坂面に分類されており（早津・新井 1981）、遺跡は低位の正面面との段丘崖近くにある。今回の発掘調査により、本遺跡は縄文時代中期中葉から後期中葉に形成された住居跡が環状あるいは馬蹄形に並ぶ、大集落跡であることが判明している。集落の中には広場、配石墓群、方形柱穴列、竪穴住居跡、溝、ゴミ捨て場に使用された旧河道などが検出されている。今回の自然科学分析調査では、土器捨場に利用された旧河道の堆積環境を推定するために、鉱物分析、土壌理化学分析、珪藻分析を、本遺跡周辺の植生を推定するために花粉分析および植物珪酸体分析を行なう。また、配石下部の土坑が埋葬施設であるかを検証するために、土坑覆土のリン・カルシウム・腐植含量分析を行なう。

１．土器捨場の堆積環境変遷と古植生

（１）試料

旧河道の低地部の土器捨場中央ベルトセクションは、上位より、盛土、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵａ層、Ⅵｂ層、Ⅶ層に分層されている。Ⅳ層は黒色土層の耕作土、Ⅴ層は暗灰色土層で土器捨場覆土の最上位、Ⅵａ層は茶褐色土層、Ⅵｂ層は灰色土層でともに土器捨場の覆土、Ⅶ層は褐灰色土層で土器捨場覆土の下位の土層で、土器が検出される最下層とされている。試料は上位のⅣ層からⅦ層上部まで、厚さ５cm で連続的に１～16 が採取されている。この中から、鉱物分析、土壌理化学分析、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析に試料番号３、７、10、13、15 の５点を選択する。

（２）分析方法

１）鉱物分析

試料約 40g に水を加え超音波戦場装置により分散、250 メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径 1/16mm 以下の粒子を除去する。感想の後、篩別し、得られた粒径 1/4mm － 1/8mm の砂分をポリタングステート（比重約 2.96 に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め情報からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定不可能な粒子は、「その他」とする。

また、重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、250 粒を同定する。火山ガラスは、便宜上軽鉱物に含め、その形態によってバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

２）土壌理化学分析

今回の分析では、土壌の母材の性状に関わる粒度粗製、動植物に由来する腐植含量、腐植の性質（光学性）

を示すMI値（Melanic　Index)、火山灰土壌の粘土の性質を把握するための賛成シュウ酸塩可溶ケイ素、アルミニウムを調べる。なお、土壌の母材については、上述の鉱物分析からも検討することができる。粒径組成はピペット法（土壌標準分析・測定法委員会1986)、腐植含量はチューリン法、ＭＩ（Melanic Index）は腐植簡易分析法（本名・山本1992)、酸性シュウ酸塩可溶ケイ素、アルミニウムは0.2M酸性シュウ酸塩溶液（pH3）抽出―原子吸光光度法（International Soil Reference and Information Center, 1986）でそれぞれ行う。以下に各項目の操作工程を示す。

・試料調製

試料を風乾後、重量を測定した後、軽く粉砕して2.00mm φのふるいを通過させる（風乾細土)。風乾細土の一部を細かく粉砕し、0.5mm φのふるいを全通させる（粉砕土)。風乾細土の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。

・粒径組成（ピペット法)

風乾細土10.00gに水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機質を分解する。分解終了後、Mehra-Jackson方によって脱鉄処理を行い、遠心洗浄を２回行う。水を訳500ml加え、攪拌しながら30分行う。この液を1l沈底瓶に移し、往復振とう機で１時間振とうした後、水で1lに定容する。沈定瓶を１分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に５cmの深さから10ml採取し、蒸発乾固・乾燥・秤量する（粘土含量)。沈底瓶に残ったシルト・粘土をサイフォンを使ってすべて洗い流し、その残査を乾燥・秤量する（砂含量)。これを0.2mm φの篩でふるい分け、篩上の残留物を秤量する（粗砂含量)。これら測定値をもとに粗砂（2.0 － 0.2mm)・細砂（0.2 ～ 0.02mm)・シルト（0.02 ～ 0.002mm)・粘土（0.002mm以下）４成分の合計を100とする各成分の重量%を求める。求められた粒径組成の値から国際法によって土性区分を行う。

・腐植含量

粉砕土0.100 ～ 0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第１鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

・Meranic　Index（MI)

風乾細土約1.0gを50ml容遠心管に入れ、分注器で0.5% NaOH溶液約25mlを加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で１時間振とうする。振とう終了後、0.1%高分子凝集剤溶液１～２滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15分間の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液の約1 mlを試験管にとり、0.1% NaOH溶液20mlを分注器で加える（NaOHの濃度は約0.1%となる)。この溶液について、分光光度計により450、520nmの吸光度を測定する。450nmの吸光度が１を超える場合には、さらに0.1% NaOH溶液で希釈して測定する（測定時間は抽出後、３時間以内)。結果の表示は、MI値＝ K450 ／ K520で示す。

MI値は、腐植にとって最も特徴的な破長域における２波長の非である。本名・山本（1992）によればPgによるスロープが急峻に現れる450nmと520nmの吸光度比を用いてA型腐植酸とP型腐植酸を

明瞭に判別している。この値をMIとして腐植の質的判定指標にしている。そこではわが国の火山灰を母材とした土壌の分析結果（ほとんどが表層土の結果）からMI＝1.70を境にそれ以下はすべてA型腐植酸で、それ以上はP型腐食酸に分類されている。また、数多くの分析結果から、MIが1.7～2.0の場合はほとんどがB型腐植酸であり、P型、Rp型のほとんどは2.0以上という区分が明瞭にできるとしている。

・酸性シュウ酸遠可溶ケイ素、アルミニウム

粉砕土0.30gに0.2M酸性シュウ酸塩溶液(pH3)を30ml加え、液温25℃の暗条件で4時間振とうする。0.4%高分子凝集剤を2敵加えて激しく振とうし、3,000rpmで15分間遠心分離し、測定試料液を得る。試料液一定量を試験管に採取し、蒸留水を加え適宜希釈した後、原子吸光光度計で定量する。定量値と風乾細土分量から乾土あたりのケイ素、アルミニウム量を求める。

この塩に溶解するケイ素はアロフェン、イモゴライトなどのケイ酸アルミニウム、さらにアルミニウム―腐食複合体に由来する。三土（1985）によれば、ケイ素含量が1.00%（Si02で2.14%）を境にアロフェン質と非アロフェン質では明確に区分され、S i02≧1.00%（Si02≧2.14%）はアロフェン質、Si＜1.00%（Si02＜2.14%）は非アロフェン質としている。また、Parfitt, R. L. and Hennmi, T.（1982）によればSioの含有量はアロフェンの存在量と密接な関係があるとし、Sioに7.14を乗じてアロフェン含量を推定できるものとしている。このことから各資料におけるSioの推移はアロフェンの精製量の推移を反映したものと解釈できる。また、アルミニウム（Alo）はSioと同じアロフェン、イモゴナイトあるいはアルミニウム―腐植複合体に由来する。三土（1985）ではSio／Alo比がsio／Aio≧0.45ではアロフェン質、Sio／Aio＜0.45では非アロフェン質としている。

3）珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作成する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に、200個体異状同定・計数する。種の同定は、K,Krammer and Lange-Bertalot（1986・1988・1991a・1991b）、K,Krammer（1992）などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する対する適応能についても示す。また、環境指標についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体異状の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め、考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたって、淡水産生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai, K. &, Watanabe, T.（1995）、生活型などについてはVOS, P. & DE WOLF, H.（1993）の環境指標種を参考とする。

4）花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛、比重2.3）、フッ素水

素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に物理・化学的処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣ヲグリセリンで封入してプレパラートを作成した後、光学顕微鏡下でプレパラート前面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。なお、複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

５）植物珪酸体分析

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，１分間)、沈定法、重液分離法（ポリタングステイト、比重 2.4）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作成する。400 倍の光学顕微鏡下で前面を走査し､その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

（３）結果

１）鉱物分析

結果を表６・図 23 に示す。重鉱物組成では、いずれの試料も斜方輝石を主体とし、少量の単斜輝石および不透明鉱物、微量の角閃石を含む。また、軽鉱物組成では「その他」が比較的多いが､「その他」を除くと、いずれの試料も長石が最も多く 、少量の無色透明の軽石型火山ガラス、微量のバブル型火山ガラスを含む。この中で、軽石型火山ガラスはその特徴から浅間草津テフラ（As － YP）と同一噴火輪廻のテフラで、その降灰年代は、約 1.3 から 1.4 万年前と考えられている（町田･新井，1992)。また、バブル型火山ガラスの中には無色透明のものが多いが、褐色のものも微量に含まれる。このことにより、バブル型火山ガラスは主に鬼界 - アカホヤ火山灰（K-Ah：町田・新井，1978）に由来すると考えられる。K-Ah は九州南方の鬼界カルデラを供給源とし、降灰年代は約 6300 年前と考えられている（町田･新井，1992)。

２）土壌理化学分析

土壌理化学分析結果表を表７・図 23 に示す。

・粒径組成

分析結果では各試料ともに粗砂、細砂の含量が少なく、粘土、シルトの顔料が非常に高いことから、国際法区分において Lic（軽埴土）に区分される。なお、傾向として下層試料ほどシルト含量が減少し、粘土含量が増加することが認められる。

・腐植含量

分析結果では腐植含量は最上位の試料で最も高く、9.23%であり、最下位の試料で 2.34%と最も低く、下位試料ほど減少する傾向が認められる。

・MI（Meranic　Index）

分析結果では、いずれの試料も A 型腐植酸に区分される。ただし、腐植酸の中でも腐植含量の低い飼料番号 15 において MI が大きく腐植化度が最も低いことを除けば、下位の試料ほど MI が小さくなる傾向にある。

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
3	1	160	35	7	33	14	250	6	4	17	3	66	154	250
7	1	155	29	5	40	20	250	11	4	26	6	58	145	250
10	0	151	27	13	45	14	250	10	4	18	4	56	158	250
13	0	149	41	8	41	11	250	12	3	42	6	68	119	250
15	0	176	41	3	20	10	250	8	4	32	2	82	122	250

表6　鉱物分析結果

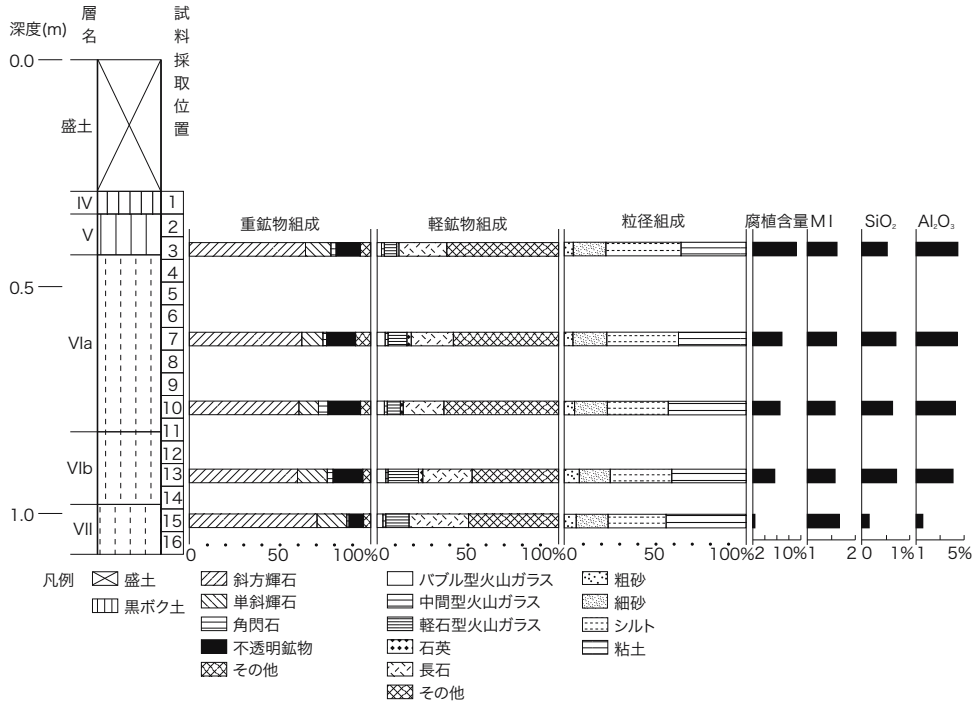


図 23　土器捨場中央セクションベルトの鉱物組成および土壌の理化学性

試料番号	土色	腐植含量 (%)	MI	酸性シュウ酸塩可溶			粒径組成				
				SiO2 (%)	Al2O3 (%)	Si/Al (mol.ratio)	粗砂 (%)	細砂 (%)	シルト (%)	粘土 (%)	土性
3	10YR2/1 黒	9.23	1.62	0.53	4.48	0.10	5.0	17.9	41.3	35.7	LiC
7	10YR3/1 黒褐	6.86	1.61	0.71	4.42	0.14	4.8	18.6	39.4	37.2	LiC
10	10YR2/2 黒褐	6.54	1.58	0.64	4.28	0.13	5.7	18.0	33.5	42.9	LiC
13	10YR3/2 黒褐	5.66	1.58	0.73	4.08	0.15	8.3	17.0	33.8	40.9	LiC
15	10YR3/4 暗褐	2.34	1.67	0.16	1.56	0.08	6.6	17.5	31.9	43.9	LiC

注．(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
(2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
LiC･･･軽埴土（粘土 25 ～ 45%、シルト 0 ～ 45%、砂 10 ～ 55%）

表7　土壌理化学分析結果

・酸性シュウ酸塩可溶ケイ素

分析結果では、いずれの試料においても Sio で 1.00%（Si02 で 2.14%）を下まわる値にあることが認められ、非アロフェン湿に区分される。

・酸性シュウ酸塩可溶アルミニウム

分析結果では、いずれの試料も Sio ／ Alo は 0.45 を下まわる値であり、酸性シュウ酸塩可溶ケイ素の

結果と同様に非アロフェン質に区分される。なお、酸性シュウ酸塩可溶アルミニウム量は下位の試料ほど減少する傾向にあり、腐植含量と同じ推移が認められる。

3）珪藻分析

結果を表8・図24に示す。珪藻化石は、試料番号3が僅かに100個体を超える程度で全般的に少ない。試料番号3の完形殻の出現率は、約40%である。また、産出分類群数は、19層47種類である。試料番号3は、陸上の好気的環境に耐性のある陸生珪藻が全体の約71%と優占することを特徴とする。なかでも分布が水域以外の陸上にほぼ限定される耐乾性の強い陸生珪藻A群（伊藤・堀内，1991）のPinnularia Borealisが21と優占し、同じくA群のHantzschia Amphioxys，Naviculamuticaなどが10%前後産出する。なお、水生珪藻としては、真流水生で中〜下流性河川指標種群の一種のMeridion Circulae var. Constrictumなどが低率ながら産出する。なお、珪藻化石の産出の少ない試料番号7〜15も陸生珪藻が多い傾向がある。

4）花粉分析

結果を表9に示す。試料番号3では、木本花粉のマツ属・スギ属、草本花粉のイネ科・カヤツリグサ科・サナエタデ節—ウナギツカミ節・ソバ属・アリノトウグサ属・ヨモギ属がわずかながら検出され、シダ類胞子が多産する。試料番号7〜15では、シダ類胞子が検出されるだけである。これら検出される花粉・胞子化石は保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、また壊れている。

5）植物珪酸体分析

結果を表10と図25に示す。各試料からは植物珪酸体がけんしゅつされるものの、保存状態の悪いものが多く、表面い多数の小孔（溶食痕）が認められる。いずれの試料も同様な産状を示し、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ属やイチゴツナギ亜科などが認められる。ただし、上位の試料でススキ属がわずかに増加する。

（4）考察

1）堆積環境変遷

これまでの当社による分析例では、本遺跡周辺の台地上に分布する黒ボク土層中の火山ガラスの量比は概ね20〜30%ほど認められることが多い。これは、ローム層最上部に付近に最濃集部のあるAs-Kと約6300年前に降灰したK-Ahが黒ボク土層に拡散しているためである。一方、完新世に低地に水成堆積した堆積物の場合、火山ガラスは本来含まれ中あったか、もしくは含まれても水のある環境下で溶失したため、ほとんど認められない場合が多い。したがって、今回の試料は台地上の黒ボク土層ほどではないが、火山ガラスが比較的多く含まれることが特徴である。

また、土壌理化学分析結果では、今回の試料は粘土含量が高く土壌化（風化）が顕著であり、粗粒のものはほとんど含まれない。粘土の性質としては非アロフェン質の結晶性粘土鉱物が主体となっているものに区分されるが、このような結果は、これまでの本遺跡周辺の台地上の黒ボク土の分析例にも認められている。

さらに、今回の珪藻分析結果では、全般的に珪藻化石の算出が少なかったが、上位の試料番号3では陸上の好気的環境に耐性のある陸棲珪藻が71%と優占することを特徴とする。現生の陸棲珪藻の分布調

種類	生態性			環境					
	塩分	pH	流水	指標種	3	7	10	13	15
Nitzschia obtusa var. scalpelliformis Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1	1	-	-	-
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	1	1	-	-	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		5	2	-	-	-
Anomoeoneis brachysira (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,T	-	1	-	-	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	1	-	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-	-	-
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
Cymbella amphioxys (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	1	-	-	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	1	2	-	-	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-	-	-
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	-	-	-	-
Eunotia exigua (Breb.)Grunow	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	1	-	-	-	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	-	-	-	-
Frustulia rhomboides var. saxonica (Rabh.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-	1	-	-
Frustulia rhomboides var. saxonica fo. capitata (A.Mayer)Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	RB	-	1	-	-	-
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	11	-	1	2	-
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	6	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	8	1	1	-	-
Navicula saxophila Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	5	1	-	-	-
Neidium affine (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		-	1	-	-	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	3	1	1	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		1	-	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	-	-	-	-
Nitzschia clausii Hantzsch	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
Nitzschia intermedia Hantzsch ex Cleve et Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	3	1	-	1	-
Nitzschia cf. perminuta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	3	1	2	-
Orthoseira roeseana (Rabh.)O' Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	23	1	-	-	-
Pinnularia braunii (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		1	-	-	-	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	3	2	-	-	-
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	2	-	-	-	-
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-	-
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	7	2	-	-	-
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	1	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	2	-	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	2	-	-	1
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind		1	-	-	-	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1	-	-	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	-	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	1	-	-
Stenopterobia delicatissima (Lewis)V.Heurck	Ogh-hob	ac-bi	l-bi	P	1	-	-	-	-
Surirella linearis W.Smith	Ogh-ind	ind	ind		-	1	-	-	-
Surirella tenera Gregory	Ogh-hob	ind	l-bi		1	-	-	-	-
海水生種合計					0	0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					7	4	0	0	0
淡水生種合計					102	27	6	5	1
珪藻化石総数					109	31	6	5	1

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
Ogh-Meh：淡水－汽水生種
Ogh-hil ：貧塩好塩性種
Ogh-ind ：貧塩不定性種
Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応
al-il　：好アルカリ性種
ind　：pH不定性種
ac-il　：好酸性種
ac-bi　：真酸性種
unk　：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
l-bi　：真止水性種
l-ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r-ph　：好流水性種
r-bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

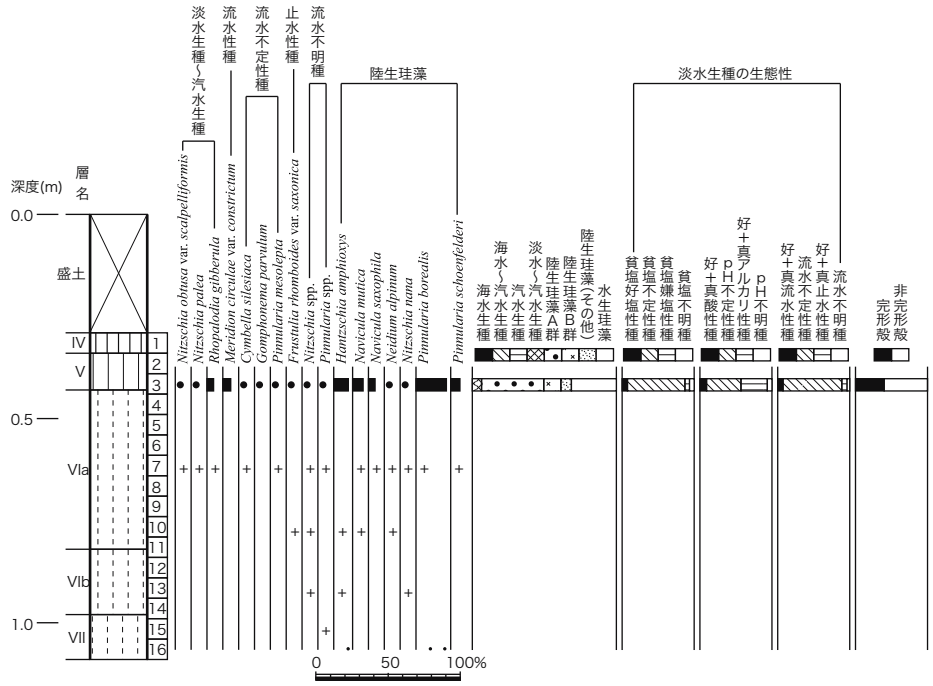
環境指標種群

K:中～下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種, P:高層湿原指標種（以上は安藤, 1990）
S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種（以上はAsai,K.&Watanabe, T.,1986）
R:陸生珪藻（RA:A群, RB:B群, RT群、伊藤・堀内, 1991）

表８　珪藻分析結果

査結果に基づけば、陸棲珪藻が全体の 70 ～ 80%以上であればその土壌は水の営力によって水成堆積したのではなく、陸上の好気的環境で徐々に堆積したことや風成堆積したことが確かめられている（伊藤・堀内, 1991）。また珪藻化石の算出の少なかった試料番号７～ 15 も陸生珪藻が多い傾向がある。

以上のことにより、本地点の堆積物は本地点周囲の台地上に分布する黒ボク土に由来し、これが流れ込みによって二次堆積したものと考えられる。したがって、今回検出された土器の中にも、黒ボク土の二次堆積に伴い流れ込んでいるものが多いと考えられる。また、堆積年代としては、K-Ah に由来する火山ガラスが認められたことにより、最下層のⅦ上部以上は約 6300 年前以降に堆積したと考えられる。このことは検出された土器の型式とも矛盾しない。



汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

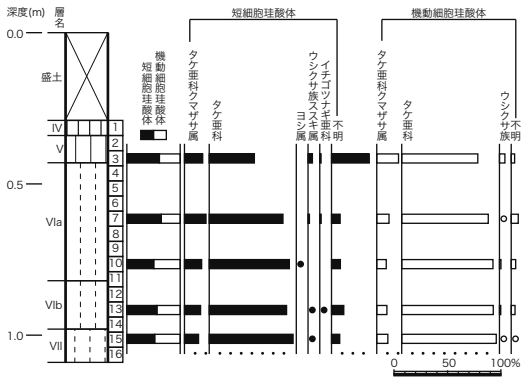
図 24　土器捨場中央セクションベルトの主要珪藻化石群集の層位分布

種　類	試料番号	3	7	10	13	15
木本花粉						
マツ属		3	-	-	-	-
スギ属		1	-	-	-	-
草本花粉						
イネ科		8	-	-	-	-
カヤツリグサ科		1	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節		2	-	-	-	-
ソバ属		3	-	-	-	-
アリノトウグサ属		1	-	-	-	-
ヨモギ属		7	-	-	-	-
タンポポ亜科		5	-	-	-	-
シダ類胞子						
シダ類胞子		325	19	9	8	2
合　計						
木本花粉		4	0	0	0	0
草本花粉		27	0	0	0	0
シダ類胞子		325	19	9	8	2
総計（不明を除く）		356	19	9	8	2

表 9　花粉分析結果

種　類	試料番号	3	7	10	13	15
イネ科葉部短細胞珪酸体						
タケ亜科クマザサ属		42	45	35	33	29
タケ亜科		104	154	163	158	173
ヨシ属		-	-	1	-	-
ウシクサ族ススキ属		10	3	-	1	1
イチゴツナギ亜科		3	3	-	1	-
不明キビ型		44	13	8	11	11
不明ヒゲシバ型		10	2	-	2	2
不明ダンチク型		33	3	10	12	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
タケ亜科クマザサ属		32	14	19	16	21
タケ亜科		112	99	183	145	178
ウシクサ族		8	1	3	2	1
不明		5	8	9	6	1
合　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体		246	223	217	218	220
イネ科葉身機動細胞珪酸体		157	122	214	169	201
総　計		403	345	431	387	421

表 10　植物珪酸体分析結果



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として
百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。

図 25　植物珪酸体の層位分布

2）古植生

Ⅶ層～Ⅵａ層では、花粉化石が検出されず、シダ類胞子が検出される程度である。一般的に花粉・胞子は、種類により分解に対する抵抗性が異なることが明らかにされており、広葉樹の花粉よりも針葉樹の花粉やシダ類胞子の方が分解しがたいとされている。今回、検出されるシダ類胞子の保存状態が悪いこと、さらに前述のように本地点には黒ボク土が流れ込んでいることを考慮すると、当時、堆積物中に取り込まれた花粉化石は好気的環境であったために、分解・消失したと考えられる。一方、土器捨場最上位のⅤ層では、花粉化石が検出されている。しかし、検出される個体数・種類数ともに少なく、さらに保存状態も悪い。本層直上が旧耕作土であることから、この花粉化石も当時の植生を反映しているものではなく、上位からの落ち込みと判断される。ところで、本地域の潜在自然植生は、ブナを中心とする植生とされている（宮脇ほか，1985)。また、加茂市の縄文時代中期とされる層準では、オニグルミ・ブナ･クリ･ホウノキ･トチノキなどの落葉広葉樹に由来する植物遺体が検出されている（パリノ･サーヴェイ株式会社，1995)。本遺跡の周辺も、ブナを中心とした落葉広葉樹林が成立していた可能性があるものの、今回の花粉化石の産状から周辺植生を検討することは不可能である。今後とも試料を蓄積した上で検討を行いたい。また、植物珪酸体分析では、本遺跡周辺の台地上には、クマザサ属を含むタケ亜科をはじめとして、ウシクサ属やイチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと思われる。さらに、土器捨場の堆積に伴ってススキ属が増加したことがうかがえる。ススキ属は開けた場所に生育する種類であることから、本遺跡周辺における何らかの植生を反映したものかも知れない。

２．配石遺構下位の土坑への遺体埋納の検証

（１）試料

対象は縄文時代後期初頭～中葉（三十稲場式～三仏生式期）の配石墓と考えられる 1H-5 号配石、1H-8 号配石、1H-9 号配石、1H-15 号配石の４基の遺構である。いずれの遺構も配石下部に土坑が検出され、覆土は自然堆積ではなく人為的に堆積したと考えられる。試料は土坑のほぼ中央の位置で覆土上部から底面まで厚さ５cm で連続的に採取されている。この中から各遺構３～６点の試料を選択し、合計 18 点の試料についてリン・カルシウム・腐植含量分析を行なう。試料はいずれも遺構周囲に分布する黒ボク土およびロームに由来すると考えられる黒褐色～褐色の砂混じりのシルトである。試料の詳細は分析結果とともに表 11 に示す。

（２）分析方法

リン酸はとくに骨に多量に含まれ、土壌中では比較的拡散・移動しにくいため、その局所的な濃集状況から遺体、骨が埋葬されたことを判断する方法として有効な手法である。ところが、土壌中のリン酸には植物質由来のものも多い。したがって、植物遺体に由来するリン酸の影響を調べるために植物質起源の腐食含量を測定し、得られた腐植含量とリン酸含量の関係から動物質起源のリン酸の富化を検討する。さらに、今回はリン酸とともに骨の主成分であるカルシウムについても分析する．リン酸は硝酸・過塩素酸分析―バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解―原子吸光光度法、腐植はチューリン法でそれぞれ行った（土壌養分測定法委員会，1981)。以下、各項目の操作工程を示す。

1）リン酸、カルシウム

試料を風乾後、軽く粉砕して 2.00mm の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料 2.00mg をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO3）約 5 ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HCLO4）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P2O5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CAO）濃度を測定する。これらの測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量とカルシウム含量を求める。

2）腐植含量

風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mm φの篩を全通させる（微粉砕試料）。微粉砕試料 0.100 ～ 0.500g を 100ml 三角フラスコに性格に秤りとり、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2N 硫酸第 1 鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土%）を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量（%）を算出する。

（3）結果

結果を表 11・図 26 に示す。腐植含量は、1.66 ～ 4.38 % の値を示し、1H-5 号配石を除いて上位の試料ほど腐植含量が高い傾向にある。リン酸含量は、3.63 ～ 11.28P2O5mg/g の値を示し、ややばらつきが認められる。1H-5 号配石を除いて上位の試料ほどリン酸含量が高い傾向がある。カルシウム含量は 1.71 ～ 1.90CaOmg/g の値を示し、ばらつきは少ない。

（4）考察

土壌中に本来含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例がある（Bowen, 1983；Bolt・Bruggenwert, 1980；川崎ほか, 1991；天野ほか, 1991）。

遺構名	試料番号	土性	土色	腐植含量 (%)	P2O5(mg/g)	CaO(mg/g)
1H－5号配石	2	CL	7.5YR4/4 褐	1.96	5.17	1.46
	4	CL	10YR3/3 暗褐	3.16	8.60	1.19
	6	CL	10YR3/3 暗褐	3.81	9.66	1.22
	8	CL	10YR3/3 暗褐	2.55	8.03	1.26
1H－8号配石	1	LiC	10YR3/3 暗褐	4.28	10.39	1.67
	5	CL	10YR3/3 暗褐	3.83	8.17	1.88
	9	CL	10YR3/4 暗褐	3.26	7.30	1.90
	11	CL	10YR3/4 暗褐	2.92	7.23	1.64
	14	LiC	10YR3/4 暗褐	2.20	7.37	1.51
1H－9号配石	1	HC	10YR3/2 黒褐	5.30	11.28	1.13
	6	LiC	10YR3/2 黒褐	3.88	9.03	1.07
	11	CL	10YR3/3 暗褐	3.56	8.71	1.25
	14	HC	10YR3/3 暗褐	3.01	7.34	1.69
	17	HC	10YR3/3 暗褐	2.63	7.06	1.27
	19	L	10YR4/4 褐	1.66	3.63	1.55
1H－15号配石	1	LiC	10YR3/3 暗褐	4.38	6.95	1.58
	3	LiC	10YR3/3 暗褐	3.48	6.90	1.38
	5	LiC	10YR3/4 暗褐	3.07	5.99	1.34

注. (1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修, 1967）による。
(2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編, 1984）の野外土性による。
L …壌土（粘土 0 ～ 15%、シルト 20 ～ 45%、砂 40 ～ 65%）
CL …埴壌土（粘土 15 ～ 25%、シルト 20 ～ 45%、砂 3 ～ 65%）
LiC …軽埴土（粘土 25 ～ 45%、シルト 0 ～ 45%、砂 10 ～ 55%）
HC …重埴土（粘土 45 ～ 100%、シルト 0 ～ 55%、砂 0 ～ 55%）

表 11　リン・カルシウム・腐食含量分析結果

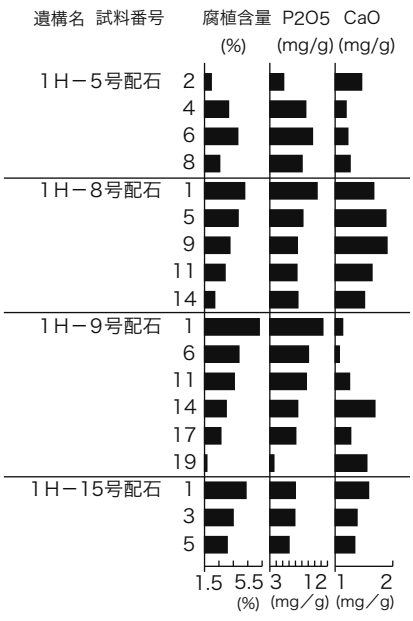


図 26　配石遺構下部の土坑のリン・カルシウム・腐植含量

これらの事例によれば、天然賦存量の上限は約3.0P2O5mg/ g（黒ボク土の平均値、川崎ほか，1991）という報告例がある。これまでの当社における墓坑などの分析調査例では、6.0P2O5mg/g前後の値を越える場合には骨片が混在していることもあり、骨によるリン酸富化であることが明らかに認められている。一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通1～50CaOmg/g（藤貫，1979）とされるが、その範囲はリン酸よりも明らかに大きい。したがって、これを著しく超える数値が得られた場合に、カルシウムの富化を指摘できる。

今回の分析結果では、いずれの試料においても天然賦存量を超える高いリン酸含量である。本遺跡の標準土層における黒ボク土層の分析を行っていないが、同じ貝坂面に立地する道下遺跡の黒色～黒褐色を呈する黒ボク土層のリン酸含量が2.0～2.8P2O5mg/gであった。これらのことから、今回の試料ではいずれもリン酸富化であったことが指摘できる。さらに、リン酸含量と腐食含量の相関関係を見ると、ほとんどの試料においてリン酸含量の高い試料ほど腐植含量が高いことがわかる。すなわち、これらの試料は食打つ起源のリン酸の影響を強く受けている可能性がある。遺構ごとに見ていくと、1H-5号配石、1H-9号配石、1H-15号配石ではリン酸含量と腐食含量はほぼ相関している。一方、1H-8号配石の試料番号11,14でリン酸含量が高いのに対して、腐植含量は比較的低い。すなわち、これらの試料には動物起源のリン酸の影響があるものと考えられ、遺体が埋納された可能性がある。

以上のように、明らかに動物起源のリン酸富化を指摘できる遺構は少ないが、全体的にリン酸含量が高かった原因として上記の植物起源のリン酸が富化された可能性があることがわかった。今後、遺跡の土坑のみならず、より空間的に遺跡全体の状況を捉えることによって再検討を行いたい。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信　1991「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」p 28～36.

安藤一男　1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42　p73　～88

Asai, K. and Watanabe, T　1995　Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into ThreeEcological Group relating to Organic water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p35－47

Bowen, H. J. M. 1983『環境無機化学―元素の循環と生物学―』浅見輝男・茅野充男訳　p297　博友社［Bowen, H.J.M.（1979）Enviromental Cemistry of Elemnts］.

Bolt, G.H.・Bruggenwert, M.G.M.(1980)『土壌の化学』岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳　309p 学会出版センター［Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M(1976)SOIL CHEMISTRY］ p235-236

土壌標準分析・測定法委員会編　1986　土壌標準分析・測定法。354P　博友社

土壌養分測定委員会編　1981　土壌養分分析法，440p　養賢堂.

藤貫　正　1979　カルシウム　地質調査所化学分析法　p57-61　地質調査所

早津賢二・新井房夫　1981　信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代　地質学雑誌　87　p791-805

本名俊正・山本定博　1992　腐植の簡易分析法　日本土壌肥料学会編「土壌構成成分解析法」p7-35　博友社

伊藤良永・堀内誠示　1991　陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌　6　p23-45

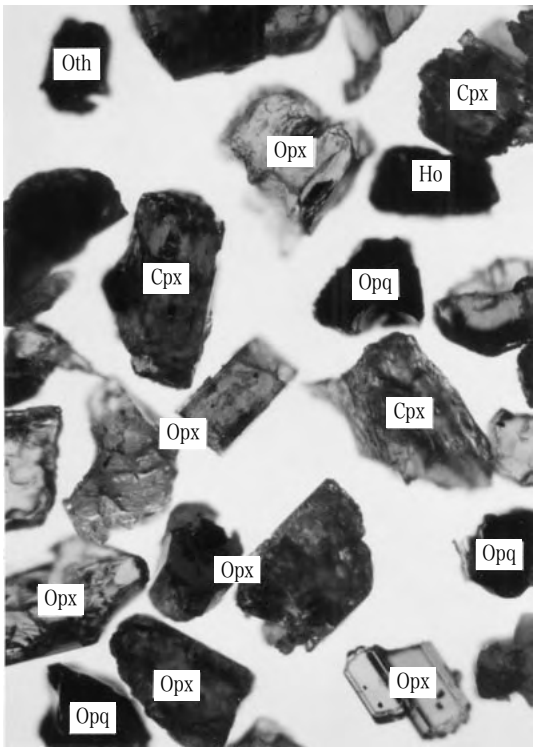
川崎　弘・吉田　澪・井上恒久　1991　九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量　農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再循環利用技術の開発』p23-64

近藤錬三・佐瀬　隆　1986　植物珪酸体分析　その特性と応用. 第四紀研究　25　p23-27

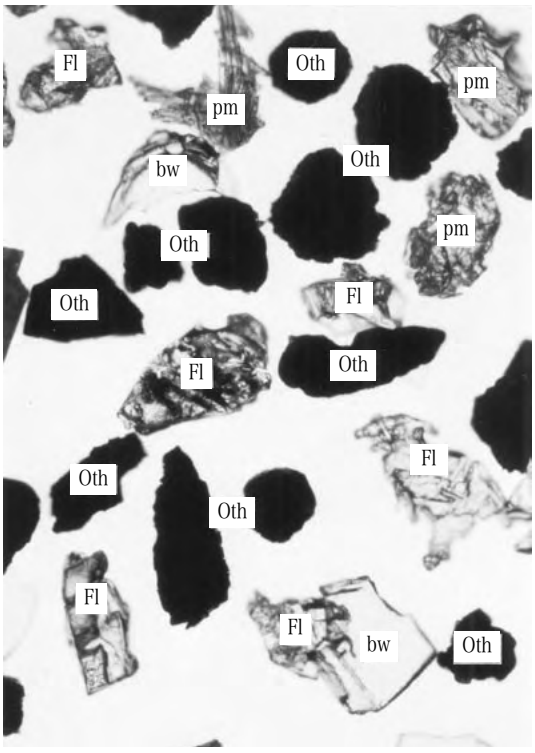
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. 1986 Bacillariophyceae, Teil 1,Naviculaceae. Band2/1 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae,

Surirellaceae. Band2/2　von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p　Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1991a) Bacillariophyceae, Teil3, Centrales, Fragilariaceae.
Band2/3　von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p　Gustav　Fischer　Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1991b)Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae,
Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lioneolatae）und Gomphonema.
Band2/4　von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p　Gustav　Fischer　Verlag.
Krammer, K.（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa.
BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p1 － 353, BERLIN・STUTTGART.
町田　洋・新井房夫　1978　南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ―アカホヤ火山灰. 第四紀研究　17　p143-163
町田　洋・新井房夫　1992　火山灰アトラス　276p　東京大学出版会
三土正則　1985　無機非晶質物の量と組成に関する分類学的指標　土肥誌　56　p189-196
宮脇　昭・藤原一絵・中村幸人・大野啓一・村上雄秀・佐々木　寧　1985　中部地方の潜在自然植生図宮脇　昭編　「日本植生誌中部」至文堂
農林省農林水産技術会議事務局監修　1967　新版標準土色帖
大羽　裕・本名俊正　1984　黒ボク土判定のための腐植の分析法　土肥誌　55　p55-61
Parfitt, R.L. and Hennmi, T. 1982　Commparison of an oxalate-extraction method for determining allophane in soil clay. Soil Sci. Plant Nutr.28　p183-190
パリノ・サーヴェイ株式会社　1995　自然科学分析―縄文時代中期の植物遺体の同定―　加茂市文化財調査報告書（5）「加茂市役所遺跡―旧加茂市役所庁舎解体撤去工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―」p14-16　加茂市教育委員会
ペドロジスト懇談会　1984　野外土性の判断　ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」p 39-40　博友社
Vos, P.C. & Wolf, H. 1993　Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in costal wetlands ; methodological aspects. Hydrobiologica, 269／270, p285-296



1．重鉱物（土器捨場　中央セクションベルト；13）

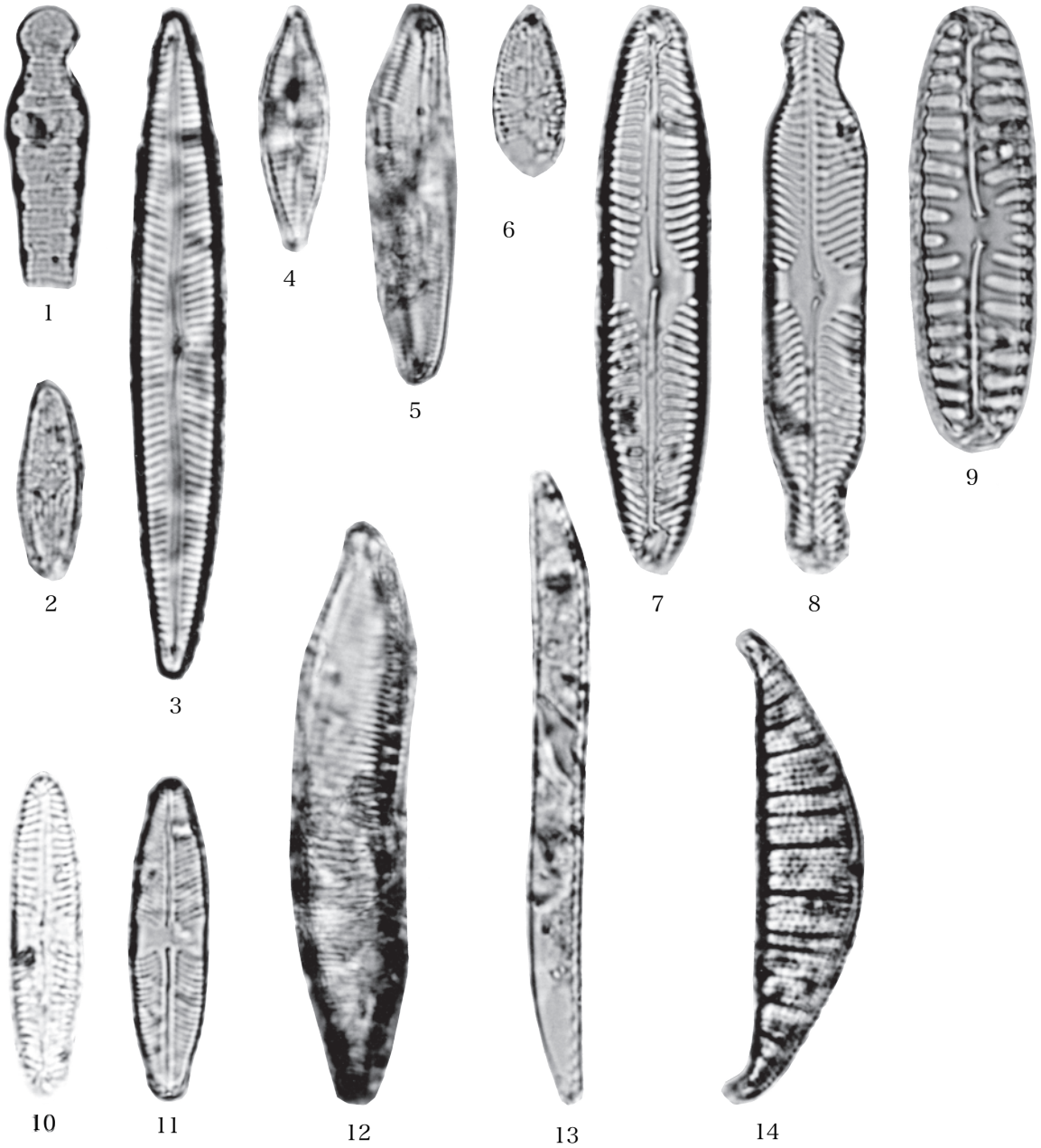


2．軽鉱物（土器捨場　中央セクションベルト；13）

Opx：斜方輝石.　Cpx：単斜輝石.　Ho：角閃石.　Opq：不透明鉱物
bw：バブル型火山ガラス.　pm：軽石型火山ガラス.　Fl：長石.　Oth：その他.

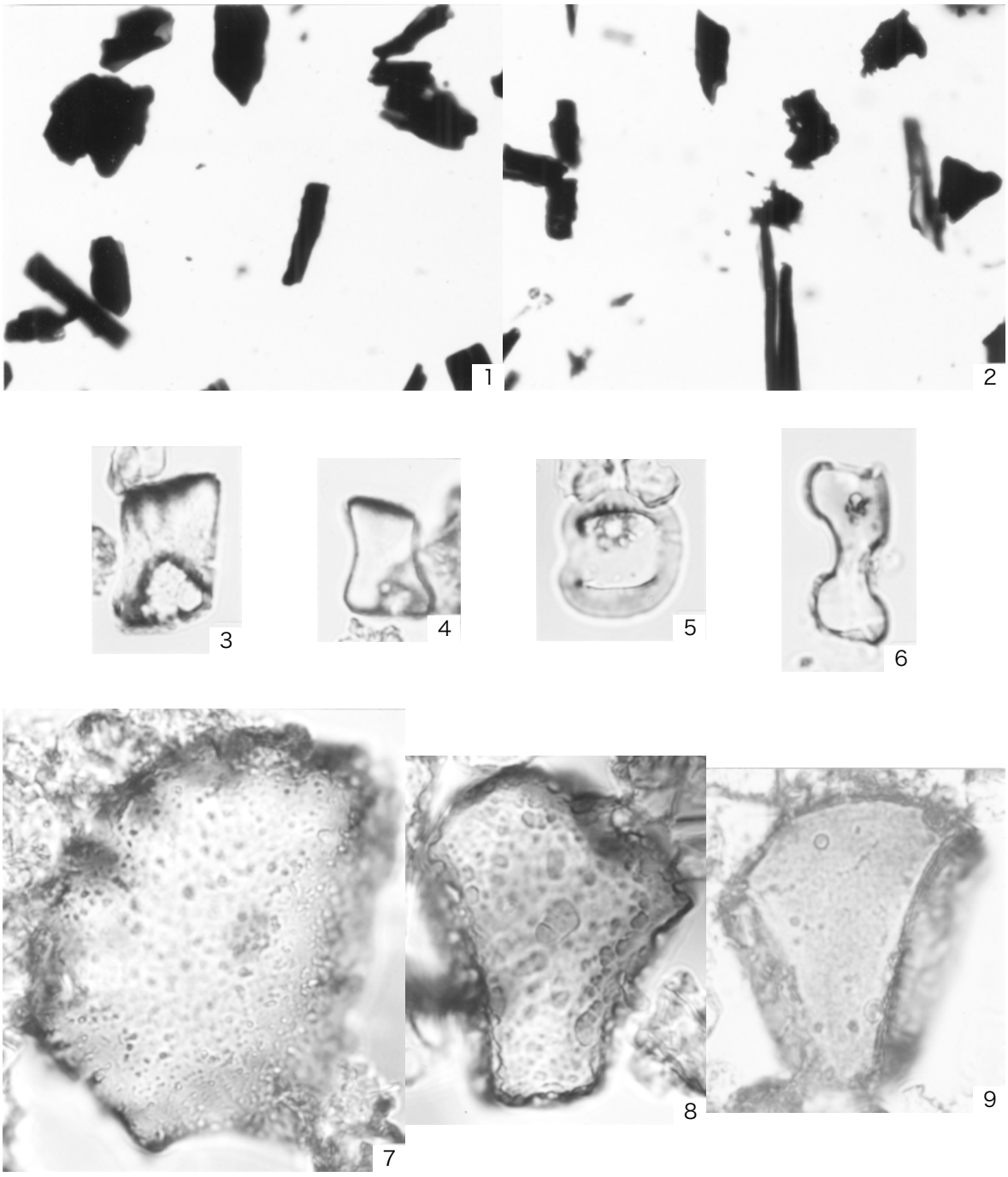
0.5mm

図 27　重鉱物・軽鉱物



1．*Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck（土器捨場　中央セクションベルト；3）
2．*Anomoeoneis brachysira* (breb.)Grunow（土器捨場　中央セクションベルト；7）
3．*Cymbella amphioxys* (Kuetz.)Grunow（土器捨場　中央セクションベルト；7）
4．*Gomphonema parvulum* Kuetzing（土器捨場　中央セクションベルト；3）
5．*Navicula mutica* Kuetzing（土器捨場　中央セクションベルト；3）
6．*Navicula mutica* Kuetzing（土器捨場　中央セクションベルト；3）
7．*Pinnularia micropstauron* (Ehr.)Cleve（土器捨場　中央セクションベルト；3）
8．*Pinnularia mesolepta* (Ehr.)W.Smith（土器捨場　中央セクションベルト；7）
9．*Pinnularia borealis* Ehrenberg（土器捨場　中央セクションベルト；3）
10．*Pinnularia schoenfelderi* Krammer（土器捨場　中央セクションベルト；3）
11．*Stauroneis obtusa* Lagerstedt（土器捨場　中央セクションベルト；3）
12．*Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow（土器捨場　中央セクションベルト；3）
13．*Nitzschia nana* Grunow（土器捨場　中央セクションベルト；3）
14．*Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller（土器捨場　中央セクションベルト；3）

図 28　珪藻化石



1．状況写真（土器捨場　中央セクションベルト；7）
2．状況写真（土器捨場　中央セクションベルト；13）
3．クマザサ属短細胞珪酸体（土器捨場　中央セクションベルト；7）
4．タケ亜科短細胞珪酸体（土器捨場　中央セクションベルト；15）
5．ヨシ属短細胞珪酸体（土器捨場　中央セクションベルト；10）
6．ススキ属短細胞珪酸体（土器捨場　中央セクションベルト；3）
7．クマザサ属短細胞珪酸体（土器捨場　中央セクションベルト；3）
8．タケ亜科機動細胞珪酸体（土器捨場　中央セクションベルト；15）
9．ウシクサ属機動細胞珪酸体（土器捨場　中央セクションベルト；3）

50μm
(1,2)

50μm
(3–9)

図 29　花粉化石プレパラート内の状況・植物珪酸体

＜付編４＞

自然科学分析（２）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

道尻手遺跡では、縄文時代中期前葉～後期中葉の集落が検出されている。この集落は、中央広場を中心に、住居が環状に巡る環状集落の形態をとり、配石墓群、方形柱穴列、竪穴住居跡、廃棄帯などの遺構が放射状に配置されている。これらの遺構からは、土器や石器のほか、炭化物、種実遺体、獣骨など、人間が利用した動植物の残滓が出土している。

今回の分析調査ではこれらの動植物遺体の同定を行い、当時の用材や動植物食糧に関する資料を得る。

１．種実遺体の種類

（１）試料

試料は、廃棄帯、包含層、配石墓から検出された試料３点である。試料の詳細は結果とともに表 12 に記した。

（２）方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定した。

（３）結果

結果を表 12 に示す。検出された種類は、オニグルミの核の破片とクリの子葉であった。以下に検出された種類の形態的特長を示す。

試料名		オニグルミ	クリ（子葉）
H6-2071-VI	土器捨場	破	-
J5-15G-I	包含層	破	破
IH-15	配石墓内覆土	破	-

表 12　種実同定結果

・オニグルミ（Juglans　Mandshurica　Maxim. Subsp. Sieboldiana（Maxim）Kitamura）
クルミ科クルミ属　：核の細片が検出された。大きさは１cm 程度と小さく、炭化している。木質で堅く、表面には荒いしわが見られる。

・クリ（Castanea　Crenata　Sieb. et　zicc.）ブナ科クリ属

炭化した子葉が検出された。大きさは 1.5cm 程度で半球状、腹面はさじ状に湾曲している。表面には、荒いしわが前面にある。

（４）考察

クリとオニグルミは、ともに子葉が生食可能である。収量も多く、長期保存も可能なことから、古くから食用として利用されてきた植物である。県内でも、多くの遺跡から出土例があり、広く利用されていたことがうかがわれる。また、クリについては、縄文時代に栽培された可能性も指摘されている。本遺跡でも栽培されていた可能性があるが、現段階では詳細が不明である。今回の種実遺体が炭化した原因については、オニグルミは核が堅く子葉を取りにくいため、被熱させることで割りやすくした可能性がある。しかし、今回のオニグルミが内側まで完全に炭化していることを考慮すると、子葉を食用にした残滓を燃料材として使用したことなどが推測される。

2．炭化材の樹種

（1）試料

試料は、住居跡、廃棄帯、土坑から出土した炭化材 15 点である。各資料の詳細は、樹種同定結果とともに表 13 に記した。

（2）方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（3）結果

樹種同定結果を表 13 に示す。H7-4413- VIは、導管を有することから広葉樹材であるが、保存状態が悪いために種類の同定には至らなかった。その他の試料は、全て落葉広葉樹で、４種類（ブナ属・クリ・ニレ属・カエデ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

遺物番号	出土地点	樹種
9J	住居覆土	クリ
9J-RO	住居炉内	クリ
16J	住居覆土	ブナ属
C5-10-V	土器捨て場	クリ
D1-P1	土坑覆土	クリ
D5-61-VI	土器捨て場	カエデ属
E3-P32	土坑覆土	ニレ属
H4-18Q	包含層	ブナ属
H7-4413-VI	土器捨て場	広葉樹
I3-P21	土器捨て場	クリ
I8-75-V	土器捨て場	カエデ属
I8-1506-V	土器捨て場	クリ
K3-P12	土坑覆土	クリ
K3-P6	土坑覆土	クリ
2H-2		ブナ属

表 13　樹種同定結果

・ブナ属（Fagus）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互に配列する。放射組織は同性、単列、１～ 15 細胞高。

・ニレ属（Ulmus）

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～６細胞幅、１～ 40 細胞高。

・カエデ属（Acer）

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および２～３個が放射方向に複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～５細胞幅、１～ 40 細胞高。細胞壁の厚さが異なる２種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

（4）考察

住居跡から出土した炭化材は、住居覆土から出土したものと、炉内から出土したものとがある。前者については、出土状況の詳細が不明であるが、これまでの事例を考慮すれば、住居構築材や燃料材などの一部が残存した可能性がある。また、後者については、炉で使用された燃料材に由来するものと考えられる。これらの炭化材には、落葉広葉樹のブナ属・クリが認められ、これらの種類が住居構築材や燃料材として利用されていたことがうかがえる。特に、９号住居跡では、覆土と炉内の炭化材がいずれもクリであり、住居構築材と燃料材の両方にクリが利用されていた可能性がある。

クリやブナ属については、町内の沖ノ原遺跡、貝坂桐ノ木平ＢおよびＣ遺跡などで出土した、住居構

築材や燃料材と考えられる炭化材にも認められており（西田，1977；実公表資料）、今回の結果とも一致する。これらのことから、本地域では、ブナ属とクリが住居構築材や燃料材としてよく利用されていたことが推定される。一方、廃棄帯と土坑から出土した炭化材は、出土状況などを考慮すれば、燃料材などに由来すると考えられる。これらの炭化材は、ほとんどがクリであり、他にカエデ属が２点認められた。住居跡の結果と比較すると、ブナ属を欠き、カエデ属が混じる点で違いがある。このような違いは、燃料材の中でも住居内で使用する場合と、他の目的に使用する場合（例えば集石や土器焼成等）とで、燃料材の種類構成が異なっていた可能性を示唆する。しかし、貝坂桐ノ木平ＢおよびＣ遺跡の集石から出土した燃料材と考えられる炭化材では、遺構によって種類構成が異なっており、ブナ属が混じる結果が確認されている。そのため、現時点では燃料材の用材については詳細が不明である。

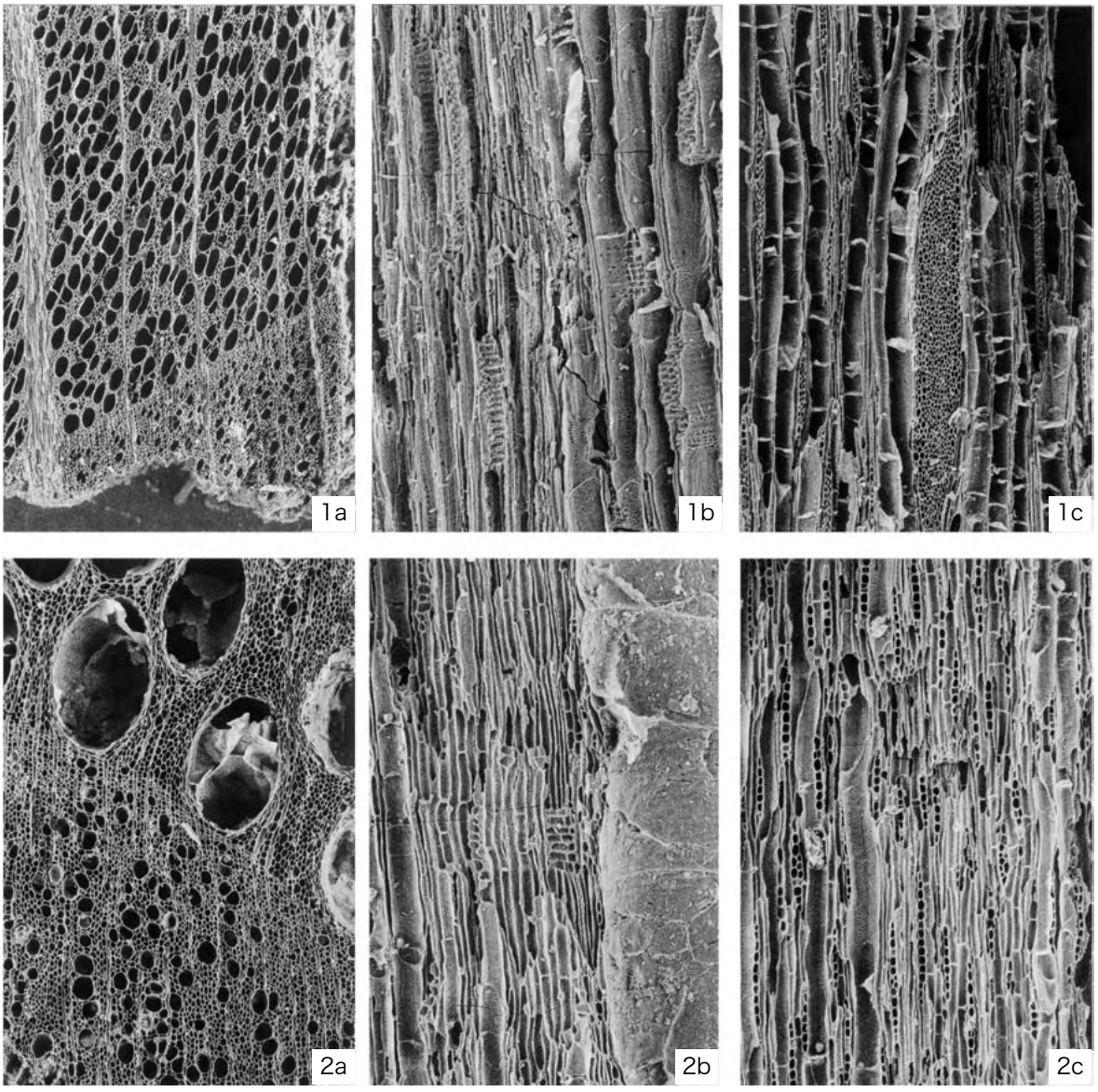
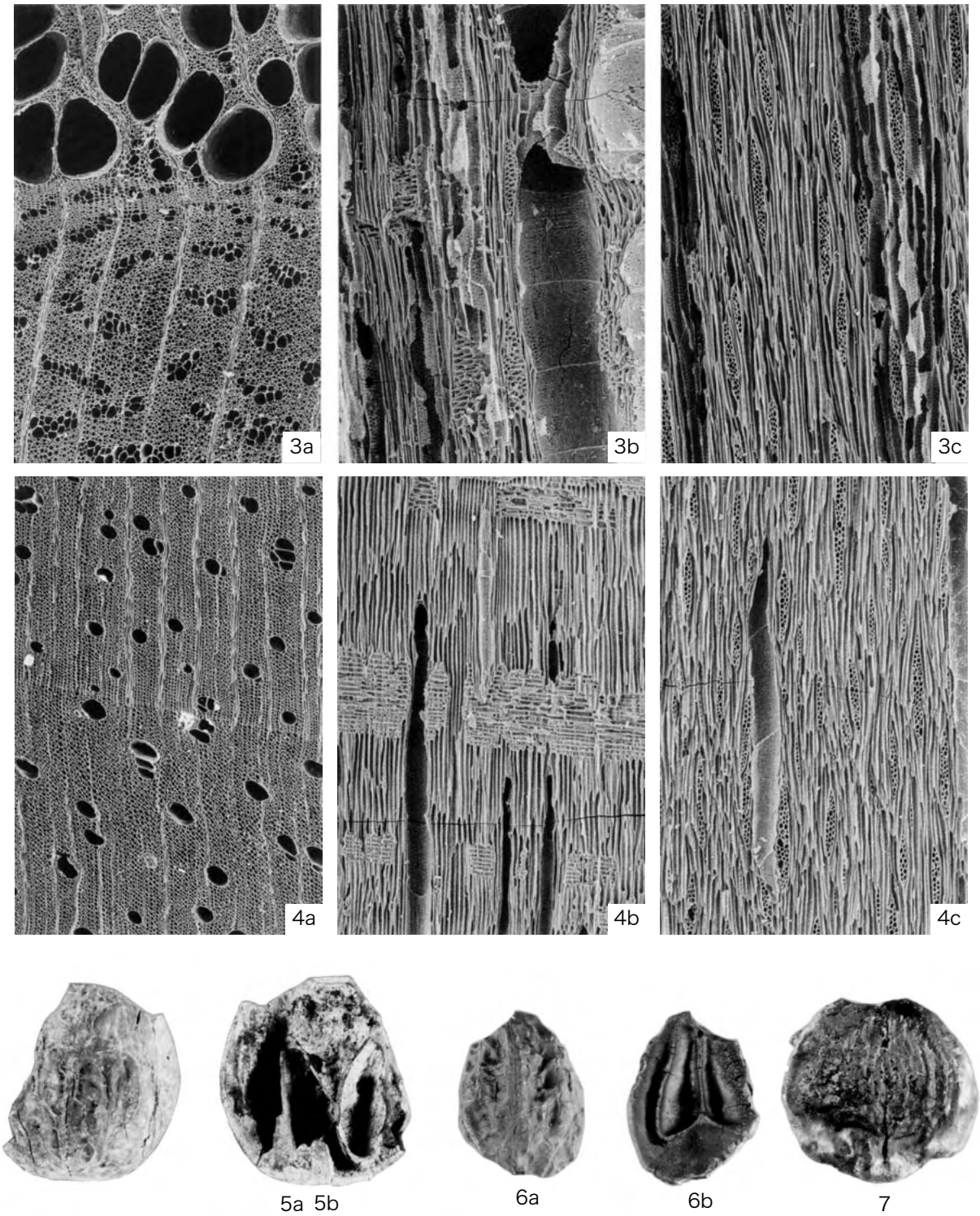


図 30　炭化材（１）



1．ブナ属（16J）
2．クリ（I8-1506- V）
3．ニレ属（E3-P2）
4．カエデ属（I8-75- V）
　a：木口，b：柾目，c：板目
5．オニグルミ(H6-2071- VI)
6．オニグルミ（IH-15）
7．クリ（J5-15G- I）

200μm：a
200μm：b,c
7mm (5,6)
3mm (7)

図31　炭化材（2）・種実遺体

3．動物遺存体の種類

（1）試料

試料は、縄文時代の廃棄帯や土坑覆土、配石遺構付近、住居内の炉などから検出された動物遺存体である。現地でサンプリングされ、遺構ごとに遺物番号が付けられている。

（2）方法

表面に付着した土壌を、筆により除去する。肉眼およびルーペ下で観察し、標本との比較により種と部位の同定を行なう。なお、種の同定できない動物を大きさで分類するに当たり、便宜上の基準を設ける。文・表中では、大型獣がゾウ類や大型のシカ類程度、中大型獣がウシ、ウマ、シカ、イノシシ、ヒト程度、中型獣がオオカミ／イヌ、キツネ、カワウソ、ノウサギ程度の動物を指すものとする。また、骨の各部名称は、加藤（1983）に基づく。

（3）結果

試料は、中大型獣の骨である。種の同定ができたのは、ウシ目(Order　Artiodactyla)イノシシ科(Family Suidae）イノシシ（Sus　Scrofa）一種である。試料は全て火を受けて白色を呈し、破片化する。骨試料の検出状況を、表 14 に示す。以下、試料ごとに概要を記す。

D5 － 29- VI：土器捨場から検出された骨片である。中大型獣の骨であるが、種・部位は不明である。

E2-P13：土坑覆土から検出された骨片である。中大型獣の骨であるが、種・部位は不明である。

G4-P138：土坑覆土から検出された骨片である。中大型獣の骨であるが、種・部位は不明である。

I3-13G：配石付近から検出された骨片である。中大型獣の骨であるが、種・部位は不明である。

I4-P2：土坑覆土から検出された骨片である。中大型獣の骨である。形状から、中手骨あるいは中足骨の遠位端の可能性もあるが、特定できない。

I4-P27：土坑覆土から検出された骨片である。中大型獣の骨であるが、種・部位は不明である。

I4-P37：土坑覆土から検出された骨片である。中大型獣の四肢骨破片である。

I4-P108：土坑覆土から検出された骨片である。イノシシの中手骨あるいは中足骨の遠位端破片と、基節骨の遠位部が検出されている。また、中大型獣の部位不明骨片が検出されている。

I4-P109：土坑覆土から検出された骨片である。中大型獣の骨であるが、種・部位は不明である。

I5-7G：７号住居跡覆土から検出された骨片である。中大型獣の骨であるが、種・部位は不明である。

J3-P11：土坑覆土から検出された骨片である。中大型獣の骨であるが、種・部位は不明である。

J5-21J-RO1：21 号住居跡の炉内から検出された骨片である。中大獣の骨であり、種・部位は不明だが四肢骨などが含まれる。

J5-8-198-21RO：21 号住居跡の炉内から検出された骨片である。イノシシの中手骨あるいは中足骨の遠位端破片と、完全な第Ⅲ／Ⅳ中節骨、指骨の近位部が各１点検出されている。中手骨あるいは中足骨の遠位端が骨体と未癒合であることから、若齢個体と推定される。この他、中大獣の部位不明骨片が検出されている。

K3-P6：土坑覆土から検出された骨片である。中大型獣の骨である。形状から、イノシシの第Ⅱ中手骨骨体の可能性があるが、被熱のため反っていると考えられ、本来の形状が推定できないため、種部位不明とした。もしイノシシの第Ⅱ中手骨であれば、遠位端と骨体が未癒合であるため、若齢個体のものである。

遺物番号	出土地点	分類群	部位	部分	被熱	破片数	重量 (g)	備考
D5-129- VI	土器捨て場	中大型獣	不明	破片	有		0.8	
E2-P13	土坑覆土	中大型獣	不明	破片	有	2	1.0	
G4-P138	土坑覆土	中大型獣	不明	破片	有		1.4	
I3-13G	配石付近	中大型獣	不明	破片	有		0.3	
I4-P2	土坑覆土	中大型獣	不明	骨端片	有	1	0.4	
I4-P27	土坑覆土	中大型獣	不明	破片	有	2	1.5	
I4-P37	土坑覆土	中大型獣	四肢骨	破片	有	1	1.5	
I4-P108	土坑覆土	イノシシ	中手 / 中足骨	dis 片	有	1	0.5	
		イノシシ	基節骨 (Ⅱ / Ⅴ)	dis	有	1	0.3	
		中大型獣	不明	破片	有		0.7	
I4-P109	土坑覆土	中大型獣	不明	破片	有	1	0.4	
I5-7G	土器捨て場	中大型獣	不明	破片	有	1	1.9	
J3-P11	土坑覆土	中大型獣	不明	破片	有	1	0.3	
J5-21J-RO1	住居炉内	中大型獣	不明	破片	有		3.0	
J5-8-198-21JRO	住居炉内	イノシシ	中手 / 中足骨 (Ⅱ / Ⅴ)	dis	有	1	0.3	
		イノシシ	中節骨 (Ⅲ / Ⅳ)	完	有	1	2.1	
		イノシシ	指骨	pro	有	1	0.4	
		中大型獣	不明	破片	有		3.3	
K3-P6	土器捨て場	中大型獣	不明	破片	有	1	0.9	イノシシ第Ⅱ中手骨骨体の可能性

pro: 近位端　dis: 遠位端

表 14　動物依存体の同定結果

（4）考察

住居跡や土坑などの遺構から検出された動物遺存体は、いずれも焼けた獣骨であった。種が同定されたのはイノシシのみである。イノシシはニホンジカとともに、縄文時代における主要な狩猟獣である。貝塚など多くの遺跡で検出される遺存体の調査から、これらが食肉や骨角器素材として利用されたことが知られている。本遺跡から検出される遺存体の調査から、これらが食肉や骨角器素材として利用されていたことが知られている。本遺跡から検出されたイノシシの骨には､加工痕跡が認められないことから、骨角器製作時の残滓ではないことが指摘できる。

丹羽（1982）は、内陸部の縄文時代遺跡から出土する焼骨について、貝塚や多くの包含地では内陸部の遺跡と同程度に焼骨が含まれていることが少なくなく、内陸部の遺跡でだけ偶然的に焼骨となり残存したと言えないことから、焼骨自体が特殊な意味を持つと考えられている。津南町に比較的近い長野県戸倉町円光房遺跡において、縄文時代前期、および中期末～後期の住居址内から出土したイノシシなどの焼獣骨が検出され、配石遺構が墓址であれば死者への供物、祭祀であれば供献された供物の可能性があるとされる（薗田 1972)。これらの例から、関東地方北部や中部地方において、祭祀あるいは儀礼の一部として、住居跡や配石遺構付近で獣骨を焼く行為を含む祭祀あるいは儀礼が行なわれ、終了後に焼骨の一部を捨場や土坑に廃棄した可能性もある。このような焼獣骨の意味については、今後の事例を増やして検討する必要があろう。

引用文献

金子浩昌　1990　円光房遺跡における焼獣骨の調査 「円光房遺跡 長野県埴科郡戸倉町更級地区兼営ほ場整備事業に伴う幅田遺跡群円光房遺跡緊急発掘調査報告書」 p189-204　戸倉町教育委員会

加藤嘉太郎　1983　家畜比較解剖図説　上巻　290p.　養賢堂

西田正規　1977　樹種同定　津南町文化財調査報告書 No12 「新潟県中魚沼郡津南町 沖ノ原遺跡発掘調査報告書」 p40-41　津南町教育委員会

丹羽百合子　1982　解体・分配・調理　加藤晋平・小林達雄・藤本強編 「縄文文化の研究２　生業」 p103-121　雄山閣

薗田芳雄　1972　群馬県桐生市千網谷戸 C-ES 地点の調査（須永式土器予報）　40p.　両毛考古学会

＜付編５＞

道尻手遺跡出土土器付着物の由来について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

道尻手遺跡では、縄文時代中期前葉～後期中葉の集落が検出されている。集落は、中央広場を中心に、住居が環状に巡る環状集落の形態をとり、配石墓群、方形柱穴列、竪穴住居跡、溝、捨て場等の遺構が放射状に配置されている。これらの遺構からは、縄文土器や石器の他、炭化材、種実遺体、獣骨など、人間が使用した動植物の残渣も出土している。

今回は、出土した縄文土器の内面に認められた黒色付着物について、その由来を検討するために、実体顕微鏡による表面観察、走査型電子顕微鏡による表面および断面の拡大観察、赤外分光分析による成分分析（IR 分析）を実施する。

１. 試料

試料は、土器２点（DAT-D5-107(赤シール b),DAT-36J-5(黄シール 549)）の内側に認められる黒色付着物である。

２. 分析方法

(1) 実体顕微鏡観察

当初ﾚﾌﾟﾘｶ法にて種実遺体状の窪みを形取りし、同定することを想定したが、試料受領後室内にて精査したところ､種実遺体の圧痕はみられなかった。そこで､黒色付着物を土器に付着した状態で､表面の形状、構造、粒子の特徴等を観察することにした。

(2) 電子顕微鏡観察

土器から黒色付着物の一部について形を崩さないように採取し、試料台に導電性テープで固定する。電子顕微鏡を用いて、表面・断面の形状や構造について観察する。

(3) 赤外分光分析

a) 分析試料の調製

土器表面から採取した付着物質は、110℃ ,4 時間の機械乾燥処理を行い、付着水分をあらかじめ除去した後、メノウ乳鉢で微粉砕（200 メッシュ以下）し、分析試料とした。

b) 赤外線吸収スペクトルの測定

調製した微粉砕試料を以下の条件で測定した。

装置：島津製作所製 FTIR-8100A

測光値（Measuring mode）：%T

分解能（Resolution）：4.0cm－1

積算回数（No.of Scan）：40 回

ゲイン（Gain）：自動

ミラー速度（Detector）：2.8mm/sec
アポダイズ関数（Apodization）：Happ-genzel
測定範囲：4600 ～ 400cm－1
測定方法：KBr ミクロ錠剤法

3.結果

以下に、各土器別に観察・分析結果について記す。

(1)DAT-D5-107

土器は４片（DAT-D5-107 Ⅰ-Ⅳ）が接合されたものである。内側には、３㎝ほど離れて上下２ヶ所に帯状に黒色付着物が認められる。口縁部付近の黒色付着物は幅約 4-2 ㎝、下部の黒色付着物は幅 2.5-1.5 ㎝である。口縁部付近の黒色付着物は、表面の微細な粒子が多数認められ、また円形の窪みも認められる。厚さは計測できなかったが、電子顕微鏡用の試料採取の状況から、厚くても 1mm 以内と思われる。電子顕微鏡による観察では、粒子状の部分も窪み状の部分も表面に、とくに構造や模様などは認められない。なお、断面については、試料が脆く作成することができなかった。一方、下部の黒色付着物は薄くて遺存状態も悪く、表面構造等の確認はできなかった。

口縁部の黒色付着物の赤外線吸収スペクトル図を、図 32 に示す。赤外分光分析では、3410cm－1、1610cm－1 付近に特徴的な吸収帯が見られるほか、1380cm－1、1270cm－1、1030cm－1、780cm－1、540cm－1、470cm－1 付近に弱い吸収が認められる。なお、3410cm－1 の吸収帯は O-H 基の伸縮振動、1610cm－1 の吸収帯は C=C 伸縮振動または C=O 伸縮振動、1380cm－1、1270cm－1 の吸収帯は C-O 伸縮振動あるいは O-H 変角振動と予想される。さらに、1030cm－1 には珪酸塩に由来すると推定される吸収が認められるが、本吸収帯は付着物質に混在する土壌由来の吸収と考えられ、付着物質の特性を示す吸収ではないと考える。

(2)DAT-36J-5

土器の内側に、約 2.5 ㎝の幅で黒色付着物が認められる。DAT-D5-107 に比較して厚みがあり、電子顕微鏡用の試料採取の状況から、厚い部分では 2-3mm ある。付着物表面の凹凸は激しいが、全体的にしわ状を呈しており、DAT-D5-107 のような粒子や窪みはほとんど認められない。電子顕微鏡による観察では、表面に微細な窪みが多数認められるが、円形を呈するものはない。また、表面・断面とも構造や模様は認められない。

黒色物質の赤外線吸収スペクトル図を、図 33 に示す。赤外分光分析では、3440cm－1 付近の幅広く強い吸収帯および、2930cm－1、2860cm－1、1700cm－1、1620cm－1、1450cm－1、1030cm－1 付近に見られる吸収帯が特徴的であるほか、3830cm－1、3740cm－1、1380cm－1、1270cm－1、1200cm－1、1080cm－1 付近に弱い吸収が認められる。なお、3440cm－1 の吸収帯はO－H基の伸縮振動、2930cm－1、2860cm－1 の吸収帯はメチル基およびメチレン基のC－H伸縮振動、1700cm－1 の吸収帯は C=O 伸縮振動、1620cm－1 の吸収帯は C=C 伸縮振動または C=O 伸縮振動、1450cm－1 の吸収帯はメチル基およびメチレン基の対称変角振動、1380cm－1、1270cm－1、1200cm－1 の吸収帯は C-O 伸縮振動あるいは O-H 変角振動と予想される。さらに、1030 ～ 1080cm－1 には珪酸塩に

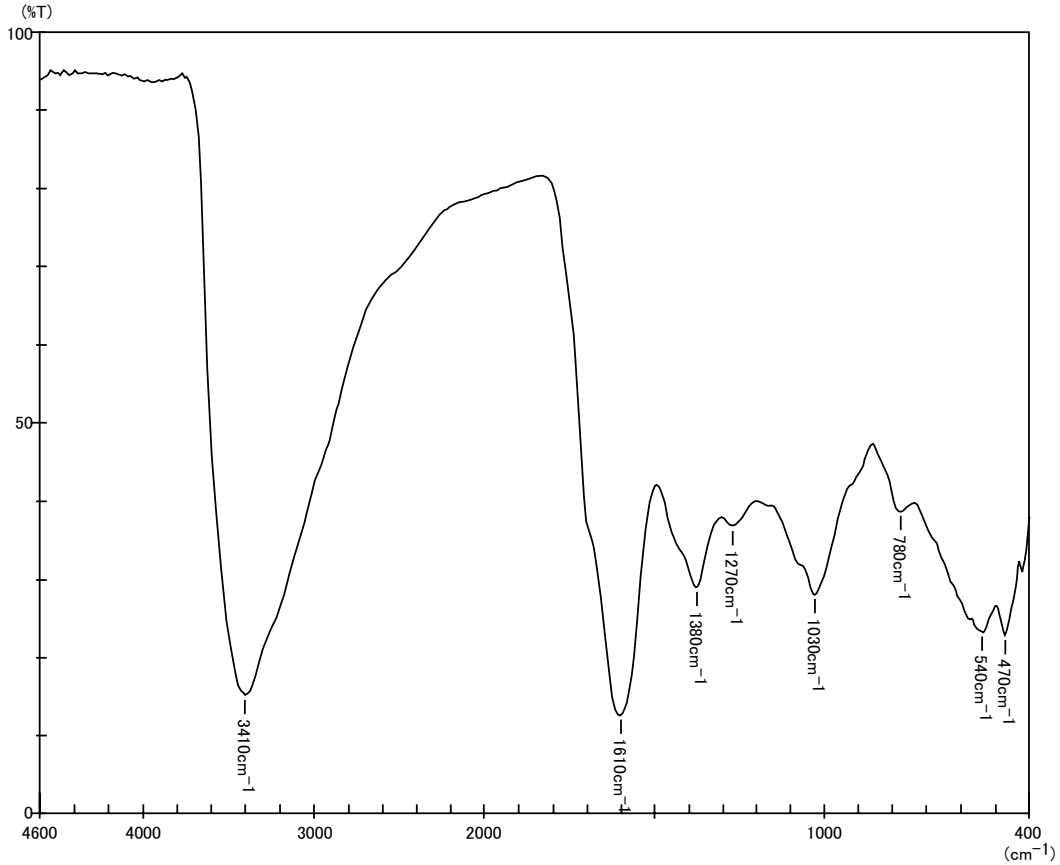


図 32　DST-D5-107 付着物の IR スペクトル

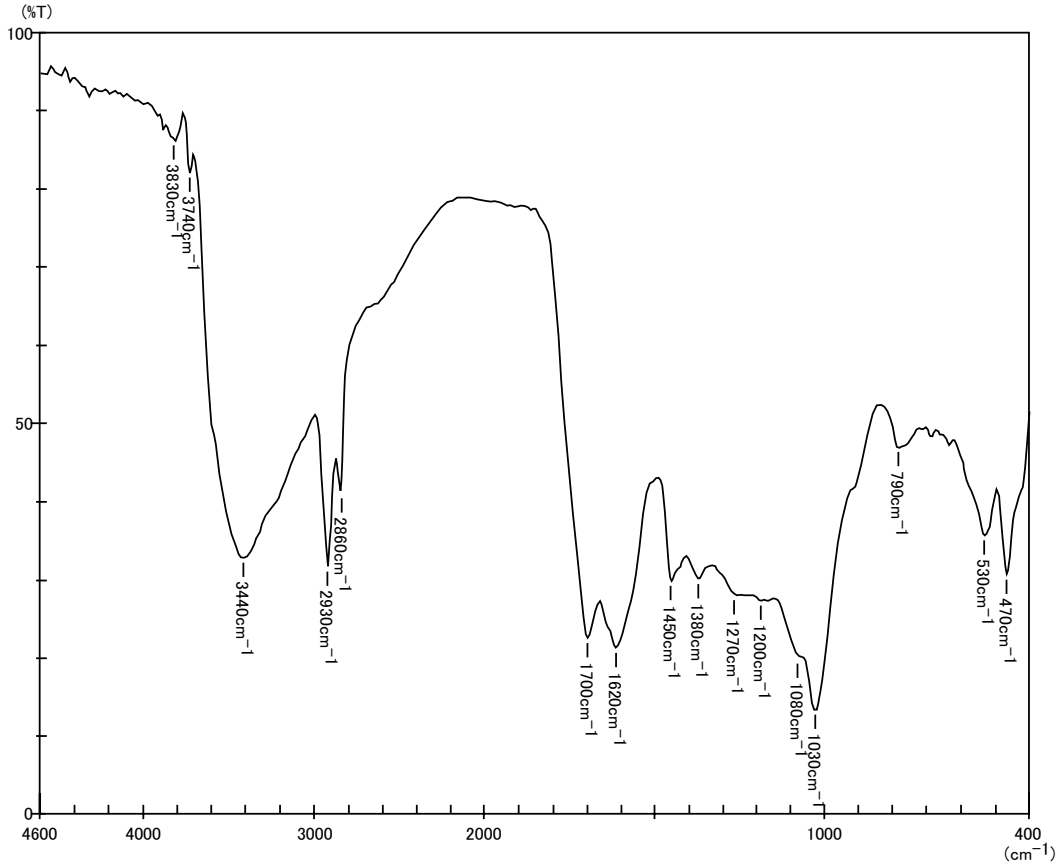


図 33　DST-36J-5 付着物の IR スペクトル

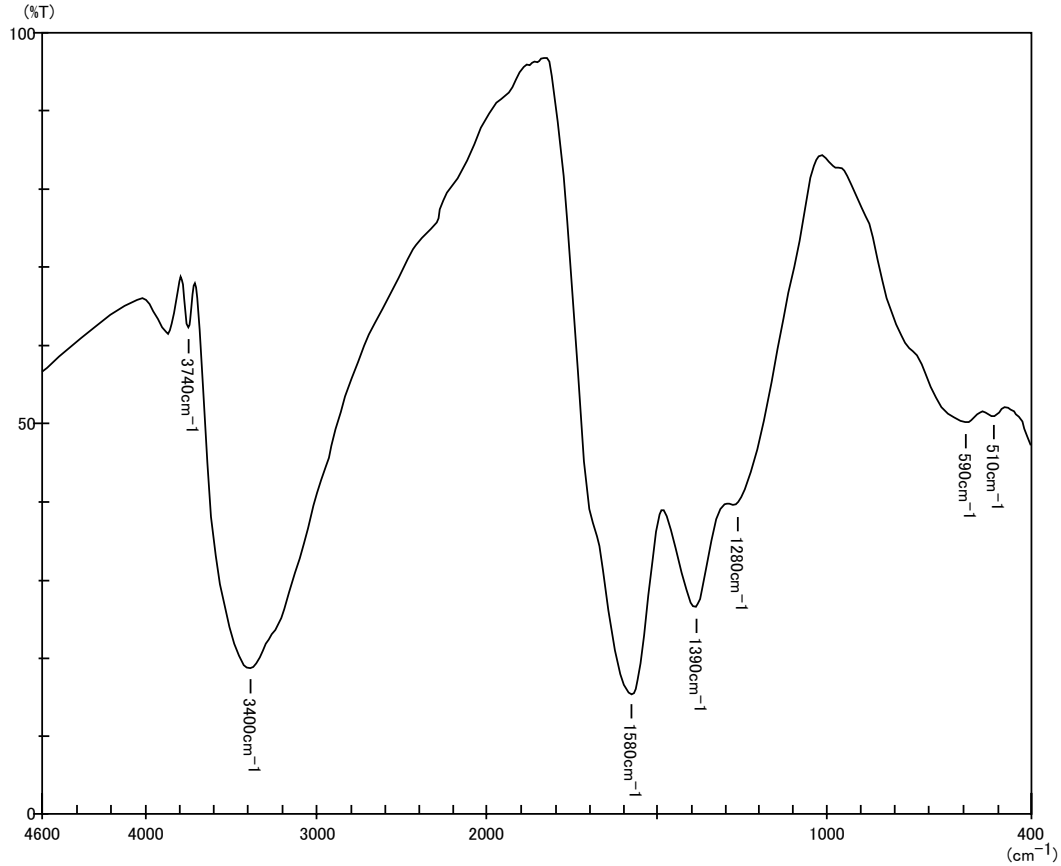


図 34　炭化材（標準品）の IR スペクトル

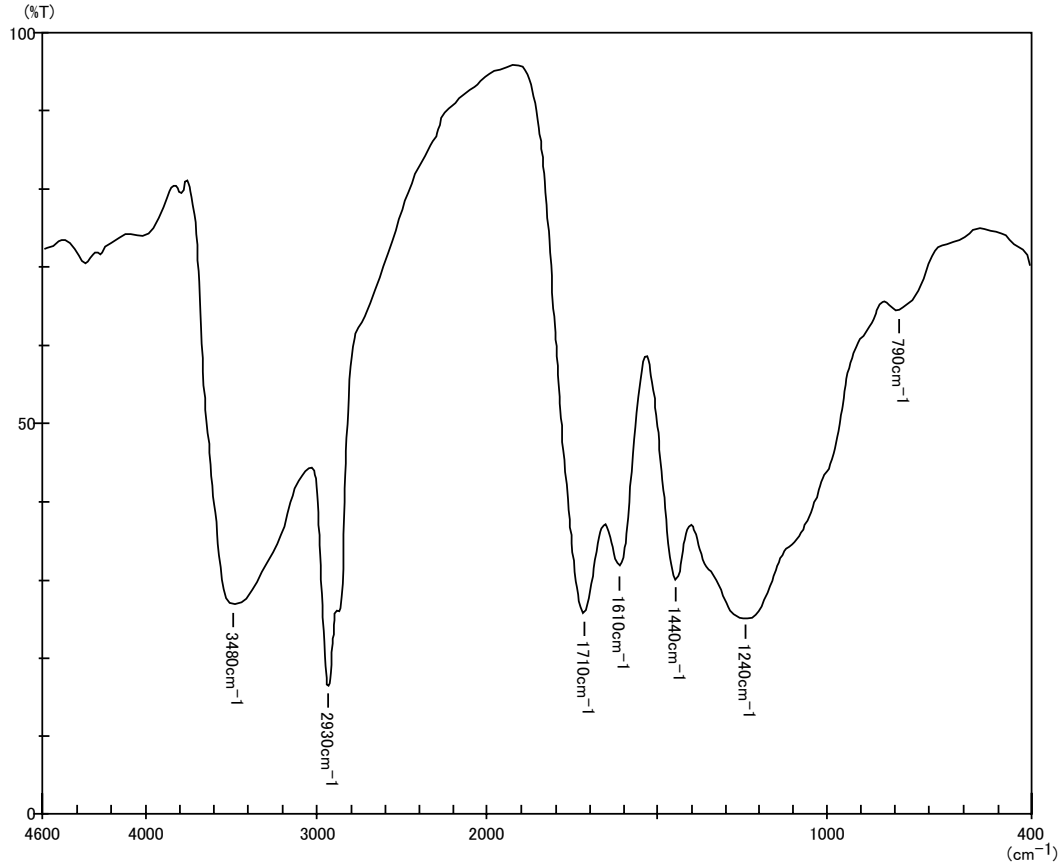


図 35　漆（標準品）の IR スペクトル

由来すると推定される吸収が認められるが、本吸収帯は付着物質に混在する土壌由来の吸収と予想され、付着物質の特性を示す吸収ではないと考える。

4. 考察

２点の土器付着黒色物質について、由来を推定するための観察・分析を実施した。その結果、２点は実体顕微鏡や電子顕微鏡による表面・断面観察で形状が異なっており、赤外分光分析による赤外吸収スペクトルのパターンも異なる。これらの結果から、２点の黒色付着物はそれぞれ由来が異なっていると考えられる。

DAT-D5-107 には微細な粒状や窪み状の部分が認められる。赤外分光分析結果では、3410cm－1、1610cm－1、1380cm－1 付近に見られる極大吸収のほかに、特徴的な吸収帯が認められていない。この結果は、当社で実測した各種有機化合物の中では、炭化材（図 34）と最も類似した赤外線吸収特性を示す。試料には木材組織が認められないことから、炭化材でないことは明らかである。したがって、炭化材以外の何らかの有機物が炭化したものと考えられる。表面観察では、構造・模様が全く認められないこと、窪み状の部分は気泡のように見えること等から、糖タンパク質やデンプンを多く含む粘性の高い液体が煮詰まって炭化した可能性もある。

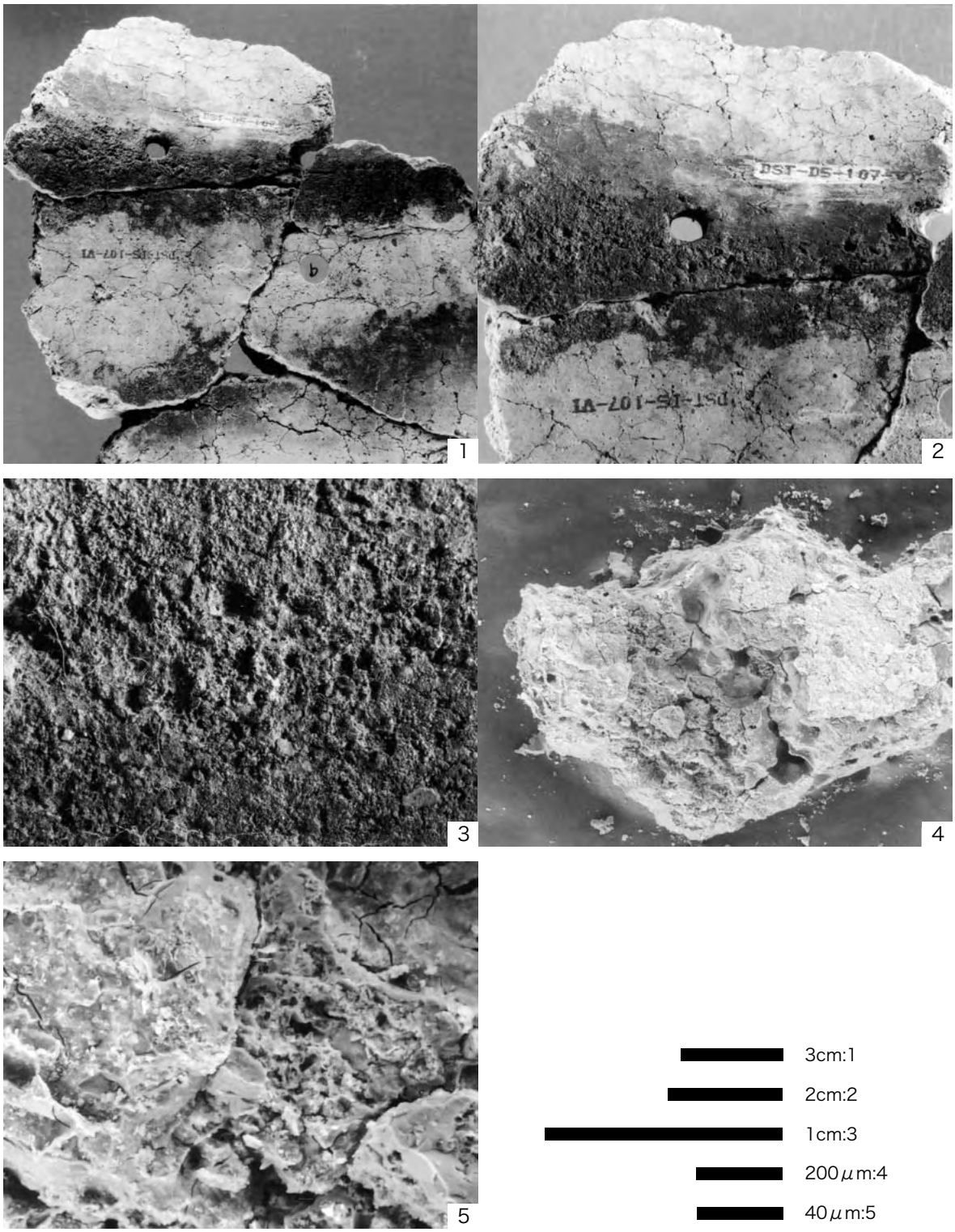
DAT-36J-5 に認められる凹凸は、全体的にしわ状を呈しており、粘性の高い液体状の物質が時間をかけて凝固した際の状況に似ている。赤外分光分析では、吸収スペクトル中に有機化合物特有の吸収帯が確認されていることから、付着物質中に何らかの有機化合物が存在することは指摘できる。ただし、付着物質として供試した試料には、埋設中に付着した土壌鉱物あるいは試料採取時に混入した土器胎土に基づく、珪酸塩に由来する吸収帯が確認されており、純粋に付着物質の性状を現す結果とは成り得ていない。このことから、付着物質の赤外線吸収特性を珪酸塩に由来する吸収が比較的弱い 1200cm－1 以上の吸収領域における特徴的な吸収帯の波数や、スペクトルパターンから評価した結果、類似した赤外線吸収特性が見られるものとして、漆（図 35）が挙げられる。漆であれば、しわ状に固化することもあり、表面観察結果とも矛盾しない。黒色付着物が漆であった場合、付着状況からは塗布したものとは考えにくく、土器内に漆が入れられていた可能性がある。

漆は中国原産とされているが、近年の調査で縄文時代の遺跡からウルシの木材が確認されており、少なくとも縄文時代前期以降の日本にウルシが生育していたことが明らかとなっている（Noshiro and Suzuki,2004）。今回の土器が漆を入れていた容器等とすれば、縄文時代におけるウルシの生育（栽培）、樹液の採取、精製、塗布（利用）の一端を示す貴重な遺物となる。しかし、今回の赤外分光分析では、黒色物質の IR パターンが漆と完全には一致しておらず、今後黒色物質の研磨薄片作成・観察等も行って評価する必要がある。

引用文献

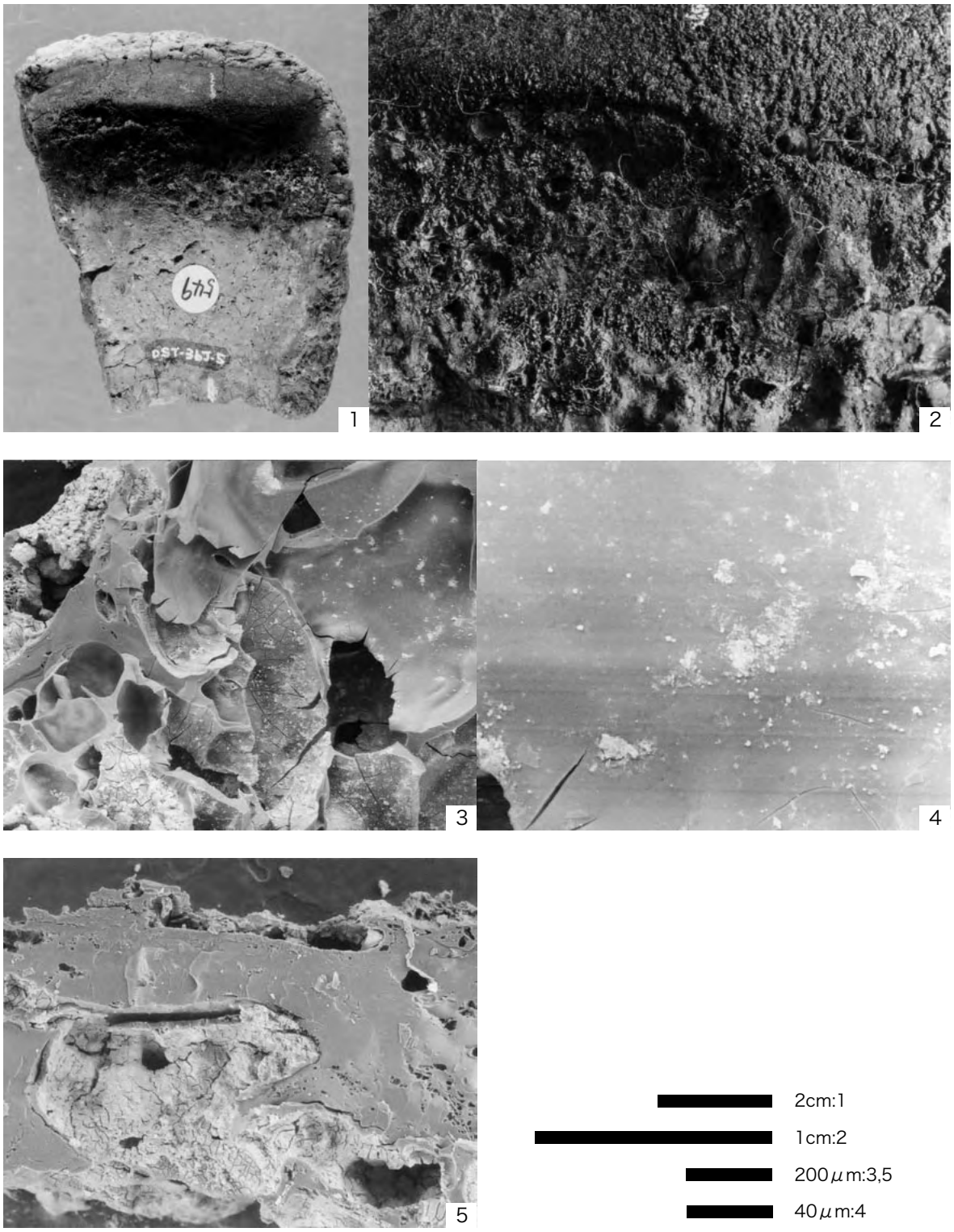
Noshiro Shuichi and Suzuki Mitsuo,2004,Rhus verniciflua Stokes grew in Japan since the Early Jomon Period. Japanese Journal of Historical Botany,12(1),3-11.

山田富貴子　1986　赤外線吸収スペクトル法　機器分析のてびき第 1 集　化学同人　1-18.



1．黒色付着物
2．黒色付着物表面の実体顕微鏡写真
3．黒色付着物表面の実体顕微鏡写真
3．黒色付着物表面の電子顕微鏡写真
4．黒色付着物表面の電子顕微鏡写真

図 36　DST-D5-107 土器付着物



1．黒色付着物
2．黒色付着物表面の実体顕微鏡写真
3．黒色付着物表面の実体顕微鏡写真
3．黒色付着物表面の電子顕微鏡写真
4．黒色付着物表面の電子顕微鏡写真

図 37　DST-36J- 5 土器付着物

＜付編６＞

胎土への土器片混入について

新潟県立歴史博物館　西田泰民

１　問題の所在

筆者は新潟県中越地域の縄文中期の土器片を観察する中で、淡色の３～５mm 程度の不定型な混和物が多いことに目を引かれた。硬度や実体顕微鏡下での観察からこれらが土器片混和材ではないかとの見通しを所属する博物館の研究会で述べたところ、佐藤雅一氏の御好意により道尻手遺跡の出土土器を観察する機会を得た。

シャモット（仏語）やグロッグ（英語）と呼ばれる破砕土器片もしくは破砕焼成粘土を利用した混和材の存在はこれまで海外においては知られており、たとえばヨーロッパ北部新石器時代や青銅器時代、ローマ帝政期フランス、タイ、マヤなど世界各地で報告がある（註１）。また東南アジアやアフリカにおける土器づくりの民族例の中でも記録されている。混和材として土器片を使う理由については、現地に適当な混和材がないため、均一な乾燥をさせるため、素地と収縮率が近いため、熱伝導率の平均化など理論的には説明されている。しかしそうした予想される効果とは逆の使用例も民族例には見られることもあって、全く実利的効用とは異なり、土器に霊力を込めるために使用すると報告されたアフリカ民族例もある。実利的効用のみでないらしいことは、どの地域でも使用期間が限られていたり、狭い地域のみで見られ拡散しない場合があることからも推測できるであろう。

縄文土器についてはこれまでこの混和材の積極的使用は一部で気づかれていたものの多くの研究者の注意するところとはならなかった（註２）。吉備型器台や埴輪、また弥生土器の一部でもそのように表現されているものがあるが、確実な根拠が示されているのは埼玉の事例のみである（註３）。また、その認識については胎土分析を行っている研究者の間でもまちまちであった。新潟県内の土器についても確証が得られていなかったため、各報告担当者によって記述が異なっていた。

２　破砕土器片と粘土質堆積岩との区別

これまで多くの事例が知られているのにも関わらず、破砕土器片と粘土質堆積岩との厳密な識別については一定の基準が得られていない実状がある。このテーマに正面から取り組んだ研究例としてはウィットブレッドとクーモディカプリオによる研究がある（註４）。ウィットブレッドはギリシア・コリントのアンフォラに見られる混和材が土器片であるのか粘土質堆積岩であるのかを確認するためにモデルを作り、土壌学的見地を加えて、境界線の見え方、密度、形状、円磨度、構成物など９つの観察ポイントを設定し破砕土器片、粘土質堆積岩、粘土粒の３種を区別しようとした。しかし結論として、粘土粒を他２者から弁別することはできても、破砕土器片と粘土質堆積岩の厳密な区別はできないと述べている。なおこの事例では石灰質の粘土が使用されているために素地に化石が含まれており、これが土器片を用いた根拠となっている。もちろん一般化できない特徴である。

クーモディカプリオらは破砕土器片や粘土質堆積岩を混入させた試験片を作成して、実際の土器片との比較を行った。その上で、両者の弁別に有効な指標として、土器片内の構成物や空隙の配置が列をな

すこと、土器片の場合には亀裂が長辺に平行に生じるのに対し、堆積岩類では多角形となること、土器片混和の場合には混和材がより均一に胎土中に分布することを挙げた。しかし、この研究で示された弁別基準も、それぞれの土器製作技法や周辺地質の特性に強く関連するものが多く、必ずしも一般化できるとはかぎらない。混和材に用いられたもともとの土器はろくろ成形によるものであるために、構成物や空隙が列をなしたり、均質な分布になっていた可能性が高い。

ジョーンズによるマヤ低地の前古典期の土器細粒混和材についての識別法も方解石や火山灰の混和材を含む土器が材料となっていることから可能になっているようである（註5）。

なお、混和材が岩石でないとしても、土器片を砕いたのか、焼成粘土塊を砕いたのかの判断はさらに困難である。

3　土器片混和材とする根拠

今回取り上げる縄文時代中期の土器についても、類似する堆積岩との比較を行い、その上で土器片であることを示す必要がある。ヨーロッパで見られるグロッグは肉眼では視認できないほど細粒であるらしく、実体顕微鏡レベルの観察は行われていないが、今回の資料ではそれが十分可能である。今回観察した土器片と見られる混和材は新潟県内の信濃川中流域を中心に縄文時代中期前半の土器に認められることの多い白色・灰色・淡褐色などの色調を示す軟質の混入物である。大きいものは一辺4～5mm程度の不整形の角張った形状を示し、爪やブラシで表面に傷がつくほど軟らかい。また、これとは異なり褐色～赤褐色で白色粒を多く含む混和材もあり、当遺跡をふくめ魚沼地域に目立つが、長岡周辺には多くない。先に述べたように、これらの混和材についてはこれまで特徴的混和材として認識されてはいたが、発掘報告書では統一された記述はなされておらず粘土粒・凝灰岩・土器状粒子などと記載されてきた。まず、マクロな観察から混和材の特徴を挙げると、

1　素地と混和材の色調・構成物が非常に似通っている
2　明色部分と暗色部分の2層になっているものがある
3　平滑面があり土器表面の調整痕に類似した擦痕や文様の一部と考えられる部分が見られることがある
4　一つの土器個体中に表面的特徴は似ているが色調は異なる混和材が含まれている場合がある

という4点がある。特に第2点は縄文土器断面の特徴そのものであり、第3点も土器片が素材となっていることを強く示唆する特徴といえる。文様のついた面があれば最も確実であるが、混和材自体が小さいためか縄文圧痕と見られる凹凸がある例は道尻手遺跡の観察土器では1点確認できたのみである。その他、調整痕の残る面が露出している破片は3点確認している。たとえば、注意深く土器片を破砕すれば、器表面の残る粒子をより多く抽出することができるであろうが、実現していない。褐色を呈する場合は石英・長石・角閃石と思われる粒子を含んでいるものがあり、白色～淡黄色の場合は鉱物粒を含むことが少ない傾向がある。新潟県長岡市周辺では東山丘陵に泥岩層があり、露頭や河原で軟質の泥岩を採取することができる。硬さは土器中に見られる混和材と同じように爪で傷がつくほどであるのでモース硬度は2以下である。実体顕微鏡の観察では細粒の石英粒が目立ち、表面が比較的粗く混和材とは外見が異なっている。

決め手になったのは長岡市内の出土土器の薄片観察である。顕微鏡下では土器片混和材と見られるものは堆積岩に一見よく似ているが、層状構造が認められる例はなかった。凝灰岩でないことは特有な火山ガラスや火山噴出物からなる構造が見られないことから明らかである。マクロ観察と同様、素地部分と類似性が高い場合が多い。粘土の起源を示す生物化石が素地と混和材双方に含まれていれば、同一素材であることの根拠となりうるが、見いだすことはできなかった。ただし、植物珪酸体や海綿骨針が含まれているものがあり、岩石とは異なる特徴であるので、これを弁別の基準とすることができる。またクサリ礫の場合はマトリックス部分の密度が高く素地部分と明確な差をもつという特徴があり、この混和材とは明らかに異なる。

４　土器片混和材の使用と研究課題

これまで新潟県内で同種の混和材を確認できたのは津南町、川口町、十日町市、長岡市、小千谷市、柏崎市の各遺跡である。上越市でも少量ながら見られるとのことである（註６）。朝日村前田遺跡にも同種の混和材を含む土器が存在するものの、希であり、可能性があると見られた個体は大木８ｂ段階であった（註７）。中越の土器混和材の場合は形状が角張っていることが多いが前田遺跡では円磨したような形状であり全て土器片混和材であるのか疑問が残る。新発田市内では石田遺跡など火炎土器が多量に出土している遺跡があるが、実見できた範囲内では土器片と見られる混和材は見られなかった（註８）。今のところ新潟県内では中越地域に特徴的であるといえそうである。

使用される時期についてはこれまでのところ中期前半に目立つことがわかっており、その中でも新崎－大木 7b 式併行期の竹管文を多用する土器に多い傾向があり、地域によっては中葉の大木８a 期以降も使われている。新潟県下で北陸系と称される一群に多いのだが、富山以西の土器にはこのような混和材はないらしい。また、少なくとも中越地域では中期後葉大木９・10 式の土器に再び用いられることが多くなるようで在地系・磨消縄文系双方にある。そして三十稲場式が下限となるらしく、南三十稲場式以降は確認できていない。

道尻手遺跡では、この種の混和材には褐色を呈するものと淡色（淡褐色、淡黄色、灰色）を呈するものの２種がある。褐色の粒子の方が空隙が多いなど両者には色調以上に明らかな違いがある。双方共に土器片であるならば、胎土の異なる土器をそれぞれ使ったと解釈できる。しかし厳密には薄片観察を行っていないため、褐色の粒子も土器片混和材であるのかは確認できていない。土器片中の最大の混和材の大きさによって分類集計してみたところ、グラフのようになり、褐色混和材の方がお

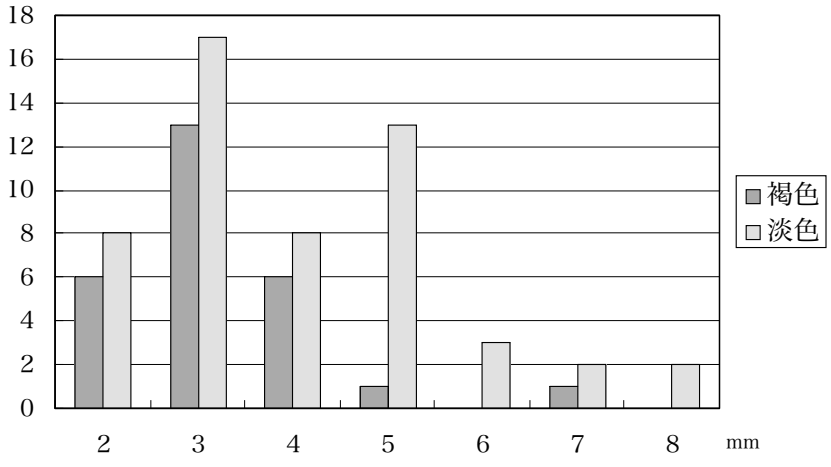


図 38

おむね小さい傾向がわかる。土器製作時に指で粘土紐を巻き上げたり接着する都合から考えるとかなり粗い混和材であるため、硬質の角張った破片では不適当である。軟質の仕上がりの土器があるからこそ、こうした混和材としての使用法があり得たとも考えられる。より堅い土器片を使用するならば、細かく粉砕してからということになるのかもしれない。肉眼で判別できる特徴的混和材であるので、これらの由来が限定できる見通しがたてば、遺跡ごとの土器の搬入状況や影響範囲を比較的簡便に明らかにすることができるであろう。土偶などその他の土製品での使用頻度も興味深い。それには同定のための基準が必要であるが、まずは複数の遺跡での実体顕微鏡レベルでの観察が必須である。さらに遺跡内あるいは周辺で見た目に近似する堆積岩が存在しないか確認しなければならない。また存在するならば偏光顕微鏡による比較観察を行い焼成実験で確認を取るという手順が必要である。

註

註1）　佐原真　1970－1974　「土器の話」『考古学研究』など

註2）　安岡路洋他　1981『東北原遺跡』大宮市遺跡調査会、高橋理他　1990『イヨマイ6遺跡における考古学的調査（2）』千歳市教育委員会、
西脇対名夫他　2003『江別市対雁2遺跡（4）』（財）北海道埋蔵文化財センターなど。

註3）　狐塚省三・奥田　尚　1985「吉備型「器台・壷」胎土中の含有物－砂礫とシャモットをめぐって－」『古代学研究』109　36-47頁、
井上　巌　1986「胎土分析」『札之辻・小井戸』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

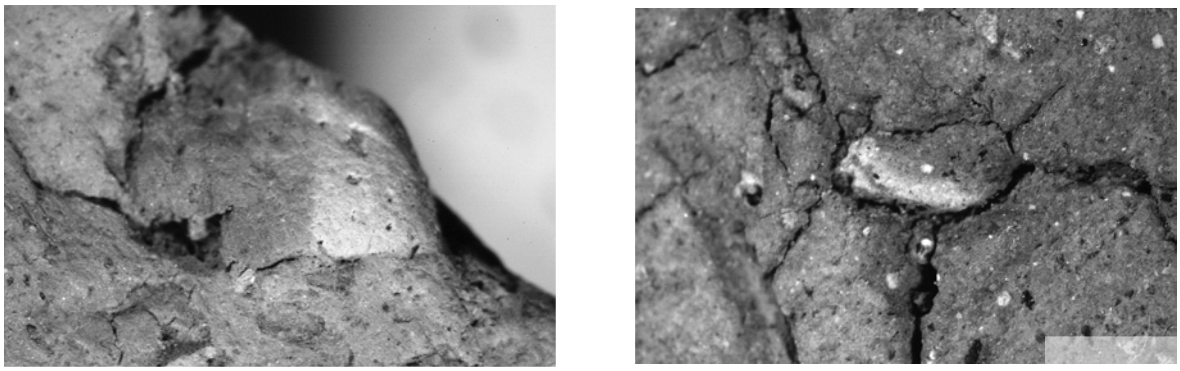
註4）　Whittbread I. K. 1986 The characterisation of argillaceous inclusions in ceramic thin sections, Archaeometry 28-1, pp.79-88、Cuomo Di Caprio N. & S.J.Vaughan 1993 An experimental study in distinguishing grog (chamotte) from argillaceous inclusions in ceramic thin sections, Archaematerials 7-1, pp.21-40

註5）　Jones L.D. 1986 Lowland Maya Pottery, BAR International series 288

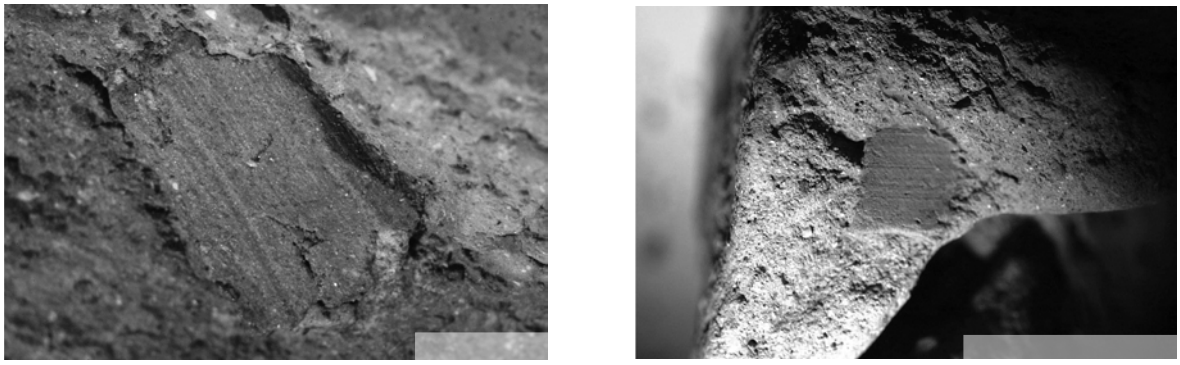
註6）　寺崎裕助氏の御教示による。

註7）　富樫秀之氏の御好意により実見。

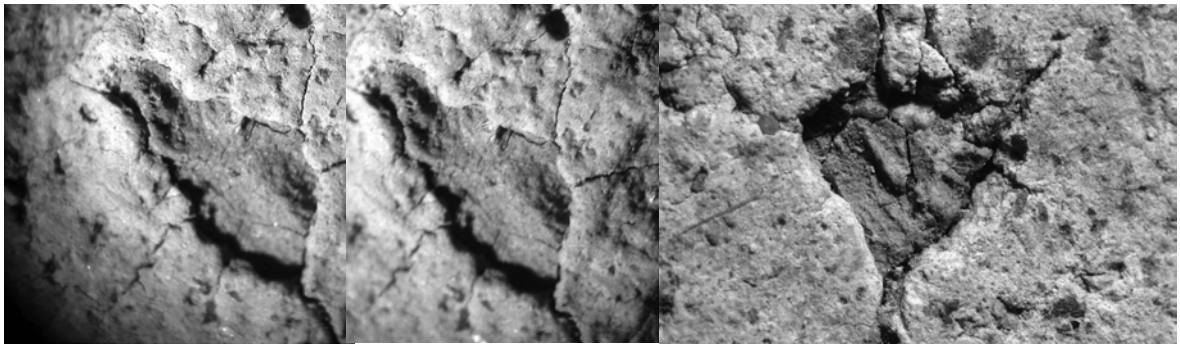
註8）　田中耕作氏の御好意により実見。



明暗2層を示す混和材



器面調整痕のわかる土器片混和材



凹凸のある土器片混和材

図 39

ふりがな	どうじっていせき
書名	道尻手遺跡
副書名	–国営農地再編整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書–
巻次	
シリーズ名	津南町文化財調査報告
シリーズ番号	第47輯
編著者名	佐藤雅一・阿部昭典・倉石広太・高山茂明・山本克
編集機関	津南町教育委員会
所在地	〒949-8201　新潟県中魚沼郡津南町大字下船渡丁2806番地3　　TEL025-765-3134
発行年月日	西暦2005年3月31日

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード 市町村遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
道尻手遺跡（どうじっていせき）	新潟県中魚沼郡（にいがたけんなかうおぬまぐん） 津南町大字下船（つなんまちおおあざしもふな） 渡甲6296番地外（とこうばんちがい）	197	38° 01′ 04″	138° 40′ 12″	19960507 ～ 19960906	8,430 ㎡	国営農地再編整備事業伴う遺跡確認試掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道尻手遺跡	集落跡	縄文時代前期 ・中期・後期	竪穴住居跡 土　坑 配石遺構	縄文土器 土製品 石器 石製品	中期前葉から 後期中葉の 良好資料

津南町文化財調査報告書第 47 輯

道尻手遺跡　本文編

–国営農地再編整備事業に伴う
遺跡発掘調査報告書–

2005 年 3 月 25 日　印刷

2005 年 3 月 30 日　発行

編　　集
津南町教育委員会

執　　筆
佐藤雅一・阿部昭典
倉石広太・高山茂明・山本　克

発　　行
津南町教育委員会

印 刷 所
有限会社アルケーリサーチ
東京都板橋区中台 1-33-1　☎03-3931-7141